

國學院大學學術情報リポジトリ

近代における墨字国語・日本語教科書と点字国語教科書のかなづかいの研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 真樹, Nakano, Maki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002402

平成 25 年 9 月
博士学位申請論文

近代における墨字国語・日本語教科書と点字国語教科書のかなづかいの研究

国学院大学大学院
文学研究科

なかの まき
中野 真樹

近代における墨字国語・日本語教科書と点字国語教科書のかなづかいの研究

目次

第1章 本研究の目的と概要	1
1. 「現代仮名遣い」は「定着」したのか	
2. 「現代仮名遣い」への批判	
3. 「現代仮名遣い」と教育	
4. 点字かなづかいと「現代仮名遣い」	
5. 本研究の目的	
第1部 近代墨字国語教科書類のかなづかい	
第2章 『尋常小学読本』のかなづかい.....	24
1. はじめに	
2. 「明治33年式棒引きかなづかい」とは	
3. 『尋常小学読本』について	
4. 『尋常小学読本』の長音表記	
5. おわりに	
第3章 石川倉次著『はなしことばのきそく』のかなづかい.....	35
1. はじめに	
2. 著者石川倉次について	
3. 『はなしことばのきそく』について	
4. 『はなしことばのきそく』のかなづかい	
5. おわりに	
第2部 清国留学生を対象とした近代日本語教育教科書類のかなづかい	
第4章 松本亀次郎著『言文対照 漢訳日本文典』のかなづかい.....	50
1. はじめに	
2. 清国留学生を対象とした日本語教育におけるかなづかい	
3. 『言文対照 漢訳日語文典』について	
4. 『言文対照 漢訳日語文典』のかなづかい	
5. おわりに	

第5章 松本亀次郎著『漢訳 日本語会話教科書』のかなづかい..... 6 2

- 1 . はじめに
- 2 . 『漢訳 日本語会話教科書』について
- 3 . 『漢訳 日本語会話教科書』のかなづかい
- 4 . おわりに

第6章 清国留学生による日本語教科書『日語新編』のかなづかい..... 6 9

- 1 . はじめに
- 2 . 『日語新編』について
- 3 . 『日語新編』のかなづかい
- 4 . おわりに

第3部 近代日本語点字資料のかなづかい

第7章 かなづかい改定論史研究における近代日本語点字かなづかいの位置づけ... 7 8

- 1 . はじめに
- 2 . 現行の日本語点字表記について
- 3 . 日本語点字の成立と展開
- 4 . おわりに

第8章 近代日本語点字教科書『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい..... 9 9

- 1 . はじめに
- 2 . 『点字 尋常小学国語読本』について
- 3 . 『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい
- 4 . おわりに

第9章 近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい

—1号から25号までを対象として—..... 1 0 9

- 1 . はじめに
- 2 . 『点字大阪毎日』について
- 3 . 『点字大阪毎日』のかなづかい
- 4 . おわりに

第10章 おわりに..... 1 2 2

- 1 . 全体のまとめ
- 2 . 助詞の「わ／は」「え／へ」「を」について

- 3．長音表記について—「棒引きかなづかい」は「消失」したのか？—
- 4．折衷的かなづかいとしての明治 33 年式棒引きかなづかい
- 5．おわりに—だれのための文字・表記研究なのか

引用文献一覧.....	1 4 0
-------------	-------

資料編

筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵『点字 尋常小学国語読本』

2 巻～ 1 2 巻 写真・墨字翻字.....	1 4 4
-------------------------	-------

謝辞.....	5 6 4
---------	-------

あとがき.....	5 6 5
-----------	-------

第 1 章 本研究の目的と概要

1. 「現代仮名遣い」は「定着」したのか

文字情報の電子化とその普及がすすむなかで、2010年12月に、「情報機器の広範な普及」を理由として「常用漢字表」のみなおしと改定¹がおこなわれ、注目された。その一方、かなづかい²については、1986年にだされた「現代仮名遣い」（昭和61年内閣告示）は、1946年にだされた「現代かなづかい」（昭和21年内閣告示）からの改定時に、「社会に定着」していると評価され、ほぼ「現代かなづかい」を踏襲する形で制定されて以来、国語施策としてかなづかい改定の動きはなく、また改定の必要性について議論されることもほとんどないといっていだろう。しかし、本当に「現代仮名遣い」は「社会に定着」しているとして、そのままにしておけるものなのだろうか。

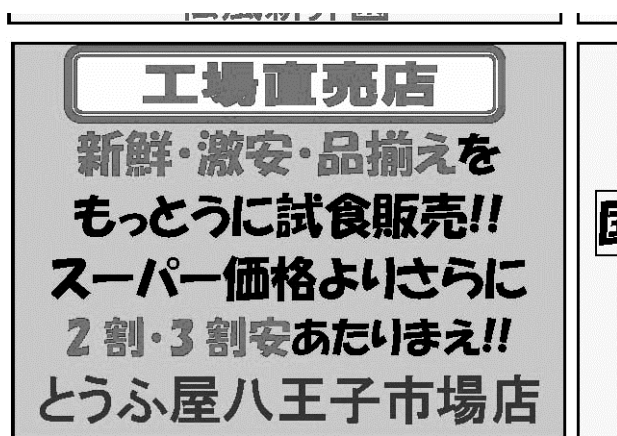


【図 1：「予定どうり開催いたします」とかかれた駅の電光掲示板】

¹ 2009年3月に文部科学大臣から「情報化時代に対応する漢字政策の在り方について」が諮問され、文化審議会国語分科会は「現行の常用漢字表が近年の情報機器の広範な普及を想定せずで作成されたものであることから、「漢字使用の目安」としては見直しが必要であることを確認した」として、2010年6月に『改定常用漢字表』を答申した。これをうけて2010年12月に文化庁『常用漢字表』（平成22年度内閣告示第2号）が公布された。

² 「かなづかい」という語は、さまざまな意味をもつ。ある一つの語の用字にかんする慣習やきまりであったり、ある時代や、ある個人の用字のありかた全体を指すこともあり、また国や機関等によって定められた規範的な用字法のきまりを指すこともある。本研究では、「現代仮名遣い」や点字かなづかいなど、ある一定の用字・表記法のきまりを、「かなづかい」とよぶ。また、ひとつの資料のなかにあられるある程度一貫した用字・表記法も「かなづかい」とした。

図1は、2010年8月10日に、東京都にある私鉄駅構内の電光掲示板を撮影したものである。「(花火大会は) 予定どうり開催いたします」とかかかれている。「現代仮名遣い」では「予定どおり」がただしく、現代墨字漢字かなまじり文の規範意識からみると、「まちがった」例である。



【図2 「新鮮・激安・品揃えをもっとうに試食販売!!」とかかれた広告チラシ】

図2は2012年の10月に配布された広告チラシの例である。「新鮮・激安・品揃えをもっとうに試食販売!!」とかかかれている。これは外来語「モットー」をひらがなで「もっとう」と表記した例である。外来語の表記の「よりどころ」となる1991年にだされた「外来語の表記」(平成3年内閣告示)によると、「長音は、原則として長音符号「ー」をもちいて書く」とされており、規範からはずれたものとなっている。これは「まっとう」などといった和語につられて、「もっとう」という和語であると解釈した例であるとかんがえられる。

また、このように「まちがって」かかれた例のほかに、あえて規範からはずれた表記をする例として図3がある。



【図3 「おにたいじする ^原げいん^因がのってないし」とかかれたマンガのセリフ】

図3は、マンガ³のなかでこどもが発したセリフとして表記されたものである。ちいさなおんなのこがまどべにこしかけて、マンガ本をよんでいる。そのマンガ本のなかの登場人物である「ももたろ」（桃太郎のことか）にたいして、おんなのこはこう評価する。「ももたろは、じぶんは おにに なにもされてないのに、おにころすから、ださいじゃん。おにたいじをする げ^原いん^因がのってないし（略）」。登場人物のおんなのこのセリフのなかでは、「げいいん」に「原因」というルビがふられている。こどもにとってはむずかしい語彙であろう字音語の表記を、セリフのなかであえて「現代仮名遣い」から逸脱し

³ 中村珍『羣青』下巻（小学館・2012）301ページより。夫に暴力をふるわれていた女性が自分に恋慕するレズビアン的女性に依頼して夫を殺害させたその後の、2人の女性の逃避行の様子をえがいた作品。

た表音的なかたちでしめすことにより、こどものあどけなさや口調のかわいらしさを演出するということの例とかがえられる⁴。このように、登場人物の特徴や性格をきわだたせるためにあえて規範的な表記から逸脱するという表現法はもともとそこに規範があるからこそ効果的なものであり、これによって規範をゆるがそうという意図はないであろう。しかしこのような表記上の工夫はマンガやライトノベルといった分野では手法のひとつとして確立されつつあり、けしてめずらしいものではなくなっている⁵。

それにくわえて、文字情報の電子化により墨字漢字かなまじり文へのアクセスの方法の多様化があげられる。文字のもつ公共的な面に着目し、文字情報へのアクセス権という観点から日本語表記についての考察をおこなっているあべ（2010）では、電子テキストの普及について、以下のようにのべられている。

電子テキストがあれば、漢字まじりの日本語の文章をパソコンで音声化したり、点字にしたり、ふりがなをふったり、ひらがなの文章にかえたりすることができる。技術の進歩によって漢字まじりの日本語をかくこと／よむことのハードルは確実にさがった。（あべ 2010:19）

このように電子テキストを操作する技術によって、点字使用者や漢字をつかわないものも、墨字漢字かなまじり文でかかれた情報を、なんらかのかたちで加工することで利用することが可能となる場合もあり、文字の利用方法のはばがひろがっているといえる。しか

⁴ 鬼退治をする「理由」ではなく「げいいん（原因）」という語を選択した点も、おんなのこの字音語へのふなれさを演出しているといえるだろう。

⁵ 「原因」を「げいいん」とするようなラディカルなところみはまだおおくはないものとおもわれるが、たとえばおさない容姿や性格をもったキャラクターの発話のなかで「こうい」を「こうゆう」「こおゆう」「こーゆー」などと表記される例はよくみられる。規範的な表記からの逸脱により、キャラクター性をきわだたせるという手法である。また、これらの表記があらわれる理由については表記論ではなく日本語音声・音韻論の観点から説明するのが妥当であろうという見解もあろう。しかし「げいいん（原因・げんいん）」にしる「こーゆー（こうい）」にしる、おさないこども特有の発音というわけではなく、成人であっても、くだけた談話の場などでは「げいいん」「こーゆー」と表記したくなるような発音をしばしば耳にするし、たとえば日本語入力支援ソフト Google IME の予測変換で、「げいいん」とうちこむとくもしかして：げんいん>という注意がでる程度には、一般的ではあるといえる。「げいいん」はすくなくないかずのおとなにとっても、「原因」の「表音的」な表記であるといえるだろう。ここで着目すべきは、そう発音するのはこどもだけではないのに、「げいいん」と「表音的」に表記する（＝規範からはずれる）ことによって発話者のおさなさ・未熟さが演出できることである。このような技法については、表記論からの解釈も必要であろう。

しながら、このように電子テキストを提供するだけでは、情報アクセス権が保障されるわけではない。あべは、つづけてこうのべる。

「漢字という障害」の問題は技術にたよるだけで、ほかに具体的な対策をとっていない。それは、漢字の問題をはじめとする日本語表記の問題について、きちんと議論されていないからではないだろうか。

現在の日本社会では情報にアクセスする権利、あるいはユニバーサルデザインという概念がすこしずつ認知されはじめている。それでは、日本語の文字のありかたをそういう視点から検討すれば、どのような問題点がうかびあがるのか。(あべ 2010:20-21)

あべ(2010)では、文字のもつ公共的な面に着目し、文字情報へのアクセス権という観点から考察をおこなっている。そこで問題となるのが、日本語墨字漢字かなまじり文における漢字の問題である。よみ情報が付与されていない漢字かなまじり文は、漢字をつかわずに生活している人々の文字情報へのアクセスの障害となる場合がある。これにたいして、以下の提言がなされる。

表記をかえることはできる。ひとりひとりが、かえていけば表記はかわる。いますぐ漢字をやめようというのではない。「固有名詞の漢字には、よみをそえる」という提案である。そして、これからの日本語表記の可能性として、わかちがきの導入も選択肢のひとつだという提言である。かりに、わかちがきを導入して、さらには訓よみ漢字をへらしていけば、日本語の表記は、もっとわかりやすくなる。もちろんそれは、いまとはちがった表記になる。だがそれでも、漢字かなまじり文であるには、かわりがないのだ。(あべ 2010:33)

この提言をうけて、固有名詞の漢字によみ情報を付与すること、訓よみ漢字をへらしていくなかで、問題となるのはかなづかいのことである。たとえば「大岡越前守」によみがなをつけるとき、「おおおかえちぜんのかみ」か「おうおかえちぜんのかみ」か「おーおかえちぜんのかみ」か、いったいどれがいったい「正しい」のだろうか、それともどうかいでもかまわないのだろうか、というなやみがうまれることもあるだろう。ここで、いまま

で漢字でおおいかくされてみえにくくなっていたかなづか⁶いの問題が意識されることになる。

2. 「現代仮名遣い」への批判

「現代仮名遣い」は1986（昭和61）年7月に内閣告示第1号として公布された⁷。墨字漢字かなまじり文のかなづか⁶いの「よりどころ」をしめすものである。ただし、前書きの3に「この仮名遣いは、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。」とある。「現代仮名遣い」はその表記法を強制しようとするものではなく、あくまでも「よりどころ」であるとしている。そのため、歴史的かなづか⁶いでかかれた文章や、「現代仮名遣い」よりさらに表音的なかなづか⁶い⁸でかかれた文章も公開されている。しかしながら、学校教育で「ただしい」ものとして教えられることもあり、実際には「現代仮名遣い」は墨字漢字かなまじり文で文章をかくときの規範的なかなづか⁶いとみなされる。そこからはみだした表記で公的な文章をかいた場合、学術論文や文学作品などといった特殊なものをのぞいて、かきではかわりものであるとか知識不足であるとか非常識であるとみなされる場合がある⁹。

しかし、「現代仮名遣い」はさまざまな問題点も指摘されてもいる。

「現代仮名遣い」が複雑で習得しにくいものにしていて、すでに多く指摘

⁶ ここでいう「よみ情報」とはよみがなにかぎらないが、よみがなもひとつの有用な手段であるとかんがえる。

⁷ 「現代仮名遣い」は文部科学省のサイトから全文をよむことができる。

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/k19860701001/k19860701001.html

⁸ 本研究では、「現代仮名遣い」「歴史的かなづか⁶い」よりも表音的な特徴をおおくもつかなづか⁶いを、便宜上「表音的なかなづか⁶い」とよぶ。実際には音声をそのまま反映したかなづか⁶いなどというものは実行不可能であり、存在しない。その時代にひろくつかわれていた「規範的なかなづか⁶い」（本研究では「歴史的かなづか⁶い」をさす）と比較して表音性のたかいかなづか⁶いを、「表音的なかなづか⁶い」とよぶことにするが、「表音的なかなづか⁶い」というある一定のかなづか⁶いが存在するわけではない。

⁹ たとえば、インターネット上で活動を行なっている『こんにちわ撲滅委員会』という団体がある。この団体の活動趣旨は「「こんにちわ」表記撲滅のために戦い「こんにちは」表記を広く普及させようという趣旨のもとに設立された団体」と説明されている。「こんにちは推奨」ではなく「こんにちわ撲滅」という表現を選択することからわかるように、そこでのべられている主張は非常につよいものである。

<http://park15.wakwak.com/~o0o0o0o0/bokumetsu/index.html>

されている¹⁰。おもなものを、以下に整理する。

2. 1 歴史的かなづかいの影響

「現代仮名遣い」は「語を現代語の音韻に従って書き表す」原則（第1則）と、「表記の慣習」による特例（第2則）の2部だてになっており、この特例（第2則）が「現代仮名遣い」を複雑なものにしている。「表記の慣習」とは、いわゆる歴史的かなづかいのことをさす。「現代仮名遣い」は歴史的かなづかいをもとに表音的な表記に改良したものであるため、歴史的かなづかいの用字法が残存している。これが「表記の慣習」とよばれるものである。

「現代仮名遣い」は、前書きの8に歴史的かなづかいにかんする記述がある。

8 歴史的仮名遣いは、明治以降、「現代かなづかい」（昭和21年内閣告示第33号）の行われる以前には、社会一般の基準として行われていたものであり、今日においても、歴史的仮名遣いで書かれた文献などを読む機会が多い。歴史的仮名遣いが、我が国の歴史や文化に深いかかわりをもつものとして、尊重されるべきことは言うまでもない。また、この仮名遣いにも歴史的仮名遣いを受け継いでいるところがあり、この仮名遣いの理解を深める上で、歴史的仮名遣いを知ることは有用である。付表において、この仮名遣いと歴史的仮名遣いとの対照を示すのはそのためである。

これによると、「現代仮名遣い」を習得するためには、現在は目にする機会がすくない歴史的かなづかいの知識がもとめられることとなる。

しかし、歴史的かなづかいは近世の国学者が提唱したいわゆる契沖仮名遣いとよばれるかなづかいをもとに、近代につくられたかなづかいであり、公文書の作成や学校教育にとりいれられたとしても、それをつかいこなせる層はかぎられていた。また、「歴史的かなづかい」を「我が国の歴史や文化に深いかかわりをもつもの」とするのであれば、同様に歴史や文化にかかわりをもついわゆる「定家かなづかい」についても言及するべきであろうが、それにかんしてはいっさいふれられていない。

¹⁰文部省（1957:1-27）ですでに「現代かなづかいの問題点」がまとめられている。ここでまとめられていることは、「現代仮名遣い」についてもあてはまる。武部（1981）でも墨字漢字かなまじり文の表記についての問題点が網羅的にまとめられている。最近では、長音表記について蜂矢（2007）が問題点の整理をおこなっている。

2. 2 音声・音韻と表記のくいちがい

前節でのべたように、「現代仮名遣い」は「表記の慣習」として歴史的かなづかいにうつる表記がのこされており、表記から発音を推定しにくくなっているものがある。以下に主なものをまとめる。

2. 2. 1 助詞「を」「は」「へ」について

第2則に、以下のとおりの記述がある。

1 助詞の「を」は、「を」と書く。

例 本を読む 岩をも通す 失礼をばいたしました やむをえない いわんや...
をや よせばよいものを てにをは

2 助詞の「は」は、「は」と書く。

例 今日は日曜です 山では雪が降りました あるいは または もしくは い
ずれは さては ついては ではさようなら とはいえ 惜しむらくは 恐らく
は 願わくは これはこれは こんにちは こんばんは 悪天候もものかは

〔注意〕 次のようなものは、この例にあたらないものとする。

いまわの際 すわ一大事 雨も降るわ風も吹くわ 来るわ来るわ きれいだわ

3 助詞の「へ」は、「へ」と書く。

例 故郷へ帰る ...さんへ 母への便り 駅へは数分（「現代仮名遣い」）

助詞の「は」「へ」「を」については、共通語では[wa]、[e]、[o]となり、「語を現代語の音韻に従って書き表す」のであれば「わ」「え」「お」となるが、「表記の慣習」にしたがって「は」「へ」「を」となる。

2. 2. 2 「じ」「ず」「ぢ」「づ」の表記のあいまいさ

共通語では「じ」と「ぢ」がともに[dʒi]、「ず」と「づ」がともに[dzu]とよまれる。「現代仮名遣い」では、第2則の5で「ぢ」「づ」の用字をさだめている。

5 次のような語は、「ぢ」「づ」を用いて書く。

(1) 同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」

例 ちぢみ (縮) ちぢむ ちぢれる ちぢこまる つづみ (鼓) つづら つづく (続) つづめる (約) つづる (綴)

〔注意〕 「いちじく」「いちじるしい」は、この例にあたらぬ。

(2) 二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」

例 はなぢ (鼻血) そえぢ (添乳) もらいぢち そこぢから (底力) ひぢりめん いれぢえ (入知恵) ちゃのみぢゃわん まぢか (間近) こぢんまりちかぢか (近々) ちりぢり みかづき (三日月) たけづつ (竹筒) たづな (手綱) ともづな にいづま (新妻) けづめ ひづめ ひげづら おこづかい (小遣) あいそづかし わしづかみ こころづくし (心尽) てづくり (手作) こづつみ (小包) ことづて はこづめ (箱詰) はたらきづめ みちづれ (道連) かたづく こづく (小突) どくづく もとづく うらづける ゆきづまる ねばりづよい つねづね (常々) つくづく つれづれ

なお、次のような語については、現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として、それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則とし、「せかいぢゅう」「いなづま」のように「ぢ」「づ」を用いて書くこともできるものとする。

例 せかいぢゅう (世界中) いなづま (稲妻) かたず (固唾) きずな (絆) さかづき (杯) ときわず ほおづき みみずく うなずく おとずれる (訪) かしずく つまずく ぬかずく

ひざまずく あせみずく くんずほぐれつ さしづめ はずっぱり なかんずく うでずく くろずくめ ひとりずつ ゆうずう (融通)

〔注意〕 次のような語の中の「じ」「ず」は、漢字の音読みでもともと濁っているものであって、上記 (1)、(2) のいずれにもあたらぬ、「じ」「ず」を用いて書く。

例 じめん (地面) ぬのじ (布地)

ずが (図画) りやくず (略図) (「現代仮名遣い」)

「ぢ」「づ」があらわれる語について、「現代仮名遣い」は2とおりの法則をあげている。ひとつは「同音の連呼」とよばれるもので、「つづく」「ちぢむ」のように1語のなかで「ぢ」のかなの直後は「じ」ではなく「ぢ」となり、「つ」のかなの直後は「ず」ではなく「づ」がくるという表記の規則をである。ただし、「いちじく」「いちじるしい」などの語は例外

となる。これは歴史的かなづかひの影響をうけている。もうひとつは、「はなぢ (はな+ち)」や「てづくり (て+つくり)」のように連濁により生じた[dʒi]と[dzu]が「ぢ」「づ」と表記されるという規則を示している。しかし、「現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの」を例外としている。ここであらわれる「現代語の意識」とはだれのものであろうか。ある複合語が「二語に分解しにくい」かどうかは、語彙の知識の量に左右される面もあり、日本語をつかうすべてのものに同一の「一般に二語に分解しにくい語」という意識があるわけではない。たとえば例にあげられているなかでは、「ことづて」を「こと」と「つて」に分解するのは、現代語の知識だけではむずかしいのではないか。

また、〔注意〕にあるように、一見連濁にもみえるが実際には連濁ではないとみなされる字音語複合語がある。たとえば「布地」は「ぬの+ち」と分解することができ、その「ち」が連濁により「ぢ」となったため、「ぬのぢ」とかくというような説明も可能であろう。しかし、「現代仮名遣い」では「布地」はかながきをすると「ぬのじ」となる。これは、もともと「地」という漢字が[tʃi]と[dʒi]の2とおりの音をもっており、「布地」の「地」は連濁により生じた音ではなく、字そのものがもっていた[dʒi]という音が発音されているのであるという解釈になる。そのため、この語は第2則にはあてはまらないので、「ぬのじ」と表記される。

このように「ぢ」「づ」があらわれる語については、「同音の連呼」と「二語の複合」の2とおりをしらなければならない。その法則はある程度しめされており、類推がしやすいものであるかもしれない。しかし、それらについても「いちじく」や「ぬのじ」などといった例外の語があり、それらの語についてはひとつひとつおぼえなくてはいけないことになる。

2. 2. 3 長音表記のきまりのむずかしさ

「現代仮名遣い」のなかでもっとも錯綜しているのが長音表記である。長音表記については、第1則の5で本則がしめされる。

5 長音

(1) ア列の長音

ア列の仮名に「あ」を添える。

例 おかあさん おばあさん

(2) イ列の長音

イ列の仮名に「い」を添える。

例 にいさん おじいさん

(3) ウ列の長音

ウ列の仮名に「う」を添える。

例 おさむうございます (寒) くうき (空気) ふうふ (夫婦) うれしゅう存
じます

きゅうり ぼくじゅう (墨汁) ちゅうもん (注文)

(4) エ列の長音

エ列の仮名に「え」を添える。

例 ねえさん ええ (応答の語)

(5) オ列の長音

オ列の仮名に「う」を添える。

例 おとうさん とうだい (灯台)

わこうど (若人) おうむ かおう (買) あそぼう (遊) おはよう (早) お
うぎ (扇) ほうる (抛) とう (塔) よいでしょう はっぴょう (発表) き
ょう (今日) ちょうちょう (蝶々) (「現代仮名遣い」)

ただし、例外として第2則に以下の例がかかげられている。

6 次のような語は、オ列の仮名に「お」を添えて書く。

例 おおかみ おおせ (仰) おおやけ (公) こおり (氷・郡△) こおろぎ ほお
(頬・朴) ほおずき ほのお (炎) とお (十) いきどおる (憤) おおう (覆)
こおる (凍) しおおせる とおる (通) とどこおる (滞) もよおす (催) い
とおしい おおい (多) おおきい (大) とおい (遠) おおむね おおよそ
これらは、歴史的かなづかいでオ列の仮名に「ほ」又は「を」が続くものであって、
オ列の長音として発音されるか、オ・オ、コ・オのように発音されるかにかかわらず、
オ列の仮名に「お」を添えて書くものである。

付記

次のような語は、エ列の長音として発音されるか、エイ、ケイなどのように発音され
るかにかかわらず、エ列の仮名に「い」を添えて書く。

例 かれい せい (背) かせいで (稼) まねいて (招) 春めいて
 へい (塀) めい (銘) れい (例) えいが (映画) とけい (時計) ていねい
 (丁寧) (「現代仮名遣い」)

これらをまとめると、表 1 のとおりになる。

【表 1 「現代仮名遣い」の長音表記】

	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
第 1 則 (本則)	ア列+あ	イ列+い	ウ列+う	エ列+え	オ列+う
第 2 則 (特例)				エ列+い	オ列+お

現代語の長音表記の主なものは以下の 3 種類があげられる¹¹⁾。

- (1) 長音の母音の字をそえる (ああ、いい、うう、ええ、おお)
- (2) 長音とはことなる母音の字をそえる (おう、えい等)
- (3) 長音符をもちいる (あー、いー、うー、えー、おー)

このなかで、(2) については、表 1 の「エ列+い」と「オ列+う」があてはまる。どちらも字音かなづかいの影響をうけて固定化された表記であり、「現代仮名遣い」でいうところの第 2 則「表記の慣習」に相当する。実際に表 1 でも、本則である第 1 則が (1) とほぼ対応する。ただし、オ列に関しては本則が (2) と対応しており、(1) は第 2 則となっている。つまり、長音表記にかんしては、「現代音に則した」表記であるはずの第 1 則のオ列長音表記が、すでに例外をふくんでいる。また、付記の「エ列の長音として発音されるか、エイ、ケイなどのように発音されるかにかかわらず」という記述があるように、ある語について、長音かそうでないかということも意識にゆれがみられる。

2. 2. 4 漢字依存

以上のように、「現代仮名遣い」は「現代語の音韻に従って書き表す」としながらも、一部の語にかんしては歴史的かなづかいの知識が必要となる。しかし、実際には漢字かなま

¹¹⁾ この分類は遠藤 (2001) 参考にした。このほかに日本語史料にあらわれる長音表記法はさまざまであり、(1) ~ (3) のほかに、「アア、オウ」のように長音にあたる部分をこがきにするというような表記法もある。

じり文でかく場合には、おおくの語は漢字におおいかくされて、かなづかいの複雑さがあらわれるのは、助詞などのかながきをする一部の語にかぎられる。

たとえばオ列長音については、「おうさま」と「おおかみ」などという語のかなづかいは「おお」か「おう」かまよう場合もあるが、その場合は漢字をつかって「王様」「狼」とかいてしまえば、「現代仮名遣い」の複雑さがおおいかくされる。同様に、二語に分解しにくいかどうかの問題となる連濁の「ぢ」「づ」についても、たとえば「せかいじゅう」か「せかいぢゅう」かまよう場合でも、「世界中」と漢字で表記すれば悩むこともない。また、「布地」を「ぬのぢ」ではなく「ぬのじ」とかくその根拠は、この事例は連濁ではなく「地」という漢字に[tei]と[dʒi]という2とおりの音をもっているためであるという説明がされる¹²が、これも漢字で「地」とかいてしまえばよい。このように、「現代仮名遣い」をつかうには、漢字のたすけをうけ、「漢字かなまじり文」でかかれることが前提となっている。いいかえると、「現代仮名遣い」がこのように複雑でむずかしいものでありながらそれが意識されることがすくないのは、漢字かなまじり文を習得してしまえば、そのむずかしさがみえにくくなってしまうためである。

3. 「現代仮名遣い」と教育

「現代仮名遣い」のむずかしさに直面する機会は、漢字をつかい、漢字かなまじり文でかく場合より、かなのみで日本語をかくときにおおくなることがかんがえられる。「狼」「世界中」「布地」と漢字表記が選択できる場合とくらべて、かなでかくばあいには「狼」が「おおかみ」か「おうかみ」か、というなやみが生じる。ここでは、小学校国語教育における、「現代仮名遣い」のとりあつかいについてのべる。

小学校国語科における「現代仮名遣い」については、『学習指導要領¹³』「(4)〔伝統的な言語文化に関する事項〕 イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」に記載がある。1・2 学年で「長音、拗音、促音、発音などの表記ができ、助詞の「は」「へ」及び「を」を文の中

¹² ただし、「世界中」を「せかいじゅう」と表記することにかんしては、このような説明にあてはまらない。「中」は漢字そのものに「じゅう」という音はもっていない。「融通」についても同様に、「通」に「ずう」という音があるわけではない。これらは、連濁によるものであるにもかかわらず、「ぢ」「づ」が使われない例であるが、これにかんしては説明はない。

¹³ 「学習指導要領」は文部科学省のサイトでよむことができる。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm

で正しく使うこと。」とあり、5・6 学年で「送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと」とある。使用頻度がたかく、漢字かなまじり文においてもかながきされる助詞「は」「へ」「を」からはじまり、小学校卒業時には「現代仮名遣い」を「正しく」かくことが要求される。しかし複雑な「表記の慣習」を理解するために必要とされる歴史的かなづかいがとりあげられるのは中学校からであり、小学生にとってはそれぞれの語について、ただかなづかいを丸暗記していることになる。

このような教育における「現代仮名遣い」のむずかしさは国語教育の研究者からも指摘がある。特に長音については拗音・撥音・促音とならんで特殊音節¹⁴といわれ、その音意識および表記の特殊性については、習得の困難さが観察されている¹⁵。

また、国立国語研究所による、就学前のこどもにたいしておこなわれたよみテストの調査についての報告がある。この調査は幼稚園の5歳児クラス50名にたいしておこなわれたテストである。これによると、ひらがな46文字がよめた時点でも、文章中にあらわれる助詞の「は」「へ」や、長音等の特殊音節をよむことができず、文意がつかめていないという結果がでている¹⁶。

よみかきに困難があらわれるこどもにたいしては、音声・音韻意識と文字との関係に注目し、ひらがなでかかれたある単語の文字と50音表にある文字を対照することで、かかれた文字から音を想起するという学習がおこなわれることもあり、その有効性についての報告がされている¹⁷。また、特殊音節のよみかきに困難があらわれることはよく知られている。この場合、音声・音韻と表記がかけはなれている「現代仮名遣い」の規則はよみかきの上での障害になることが考えられる。具体的には、たとえばエ段長音の表記に長音符をつかうのか、それとも「エエ」とかくのか「エイ」とかくのか、などという恣意的なきまりは学習の負担になることがかんがえられる。実際に、ディスレクシア児に助詞の「誤読」がおおくみられるという調査結果がある¹⁸。

¹⁴ 大伴（2008）などを参照。また、国語教育における「特殊音節」とは撥音・促音・長音のほかに拗音をふくむ場合もある。これは教授法の観点からの分類であり、日本語学における「特殊拍」「特殊音節」とはことなった概念であるとかんがえられる。

¹⁵ 天野（1986）第2章4部「特殊音節についての自覚の発達と教育」において、音声・音韻意識と表記の両面から、こどもの特殊音節表記の習得の困難性がまとめられている。また、特に長音の表記についての問題点および教授法については長岡（2008）によって詳細に研究されている。

¹⁶ （国立国語研究所 1972:27）

¹⁷ （松本 2005）等

¹⁸ 葛西・関・小枝（2006:42）

国語教育では、学習者が漢字かなまじり文をかくことを目標としており、かな専用文は漢字に習熟するまでの過渡的な表記であるとかんがえられている。そのため、かなづかいの習得と並行して漢字学習がおこなわれる。漢字かな交じり文でかく場合には漢字でおおいかくすることができるかなづかいよりも、習得に膨大な時間を必要とする漢字学習が優先される。ただし、漢字未習語は「ただしく」ひらがなで表記するように求められる。また、漢字テストのよみがなをふる問題は、「現代仮名遣い」でかくことを要求される。たとえば、「先生」のよみをとわれて、「せんせい」「せんせえ」とかいたばあい、そうかいた生徒は注意をうける。漢字テストのよみ問題は、「よむことができるか」ということのほかに、「現代仮名遣い」でただしくかけるか」というものである。このように「現代仮名遣い」は、漢字かなまじり文を習得していないもので、その習得をめざすものにとっては、漢字テストや作文指導などをおしてさけることのできない規範としてせまってくる。

また、日本語を第一言語としない者への日本語教育においても、同様の問題があることがかんがえられる。さらに、慣習によりきめられている表記と実際の発音との関係が学習者をなやませている。たとえば、井上（2006）では日本語教育の観点からエ列長音の長音と発音との関係の問題点の整理をおこなっている。現代仮名遣いでみられるエ列、オ列長音の表記にくわえて外来語についても考察をおこなったうえで、外来語にかんしては、「エイ」「オウ」と表記されたときは、[e:] [o:]と発音される場合と[eɪ] [ou]と発音される場合があることを指摘しており¹⁹、またその境界例の紹介もしたうえで、以下のようにのべる。

日本人の間にも世代差、学歴差がある。公的機関で標準を定めることは、効果がある。境界線にあたる例で発音にゆれがあるが、「エー」「エイ」「オー」「オウ」で固定している語も多い。(略) 日本人・標準語の話し手には分かりきったことでも明文化する必要がある。(井上 2006:20)

和語・漢語の長音表記が複雑になっており、同じ発音でありながらさまざまな表記が考えられることが、外来語の表記にまで影響し、ある語のなかで「エイ」という表記があらわれた場合、それを[eɪ]と発音するのか[e:]と発音するのか、ということは明文化されない

¹⁹ たとえば靴の底革の「ソール」と都市の「ソウル」の例をあげた上で、「ソウル」とかいてあっても「ソール」と発音するひとがいるという（井上 2006:16）。これらの外来語の表記は、実際の発音のちがいが反映されているばあいもあるが、おなじ発音であり、表記上の慣習によるちがいのばあいもある。そしてその境界にあるものも存在する。

かぎりはわからないという現状になっており、それが日本語学習者の負担となっている。

4. 点字かなづかいと「現代仮名遣い」

4. 1 点字かなづかいと「現代仮名遣い」

墨字でつかわれる「現代仮名遣い」とならんで、日本語点字には点字かなづかいがある。日本語点字は6点点字1字がかな1字にほぼ対応する点字かなが基礎となる。その表記法は基本的には漢字をつかわず、文節わかちがきのかな専用文でかかれる。また、そのかなづかいは、墨字漢字かなまじり文の「よりどころ」である「現代仮名遣い」とはことになっており、日本点字委員会²⁰によってさだめられた独自のかなづい²¹がもちいられている²¹。本研究ではこの日本点字委員会によってさだめられた点字表記の規範的なかなづかいを点字かなづかいとよぶ。現在、点字かなづかいは「現代仮名遣い」にほぼ対応しているが、次の2点で、「現代仮名遣い」とはことになっている。

(1) 墨字では「は」「へ」となる助詞は、「わ」「え」と表記する

(2) ウ列とオ列の長音のうち、「現代仮名遣い」で「う」とかきあらわす長音部分を調音符をつかって表記する。

現行の点字かなづかいと「現代仮名遣い」は共通点もおおくあるが、たとえば墨字漢字かなまじり文「三郎は昨年来大変よく勉強をして、入学試験に備えています。」を点字のかなづかいで表記すると、「さぶろーわ さくねんらい たいへん よく べんきょーを して、 にゅーがく しけんに そなえて います。」となる。現代日本語口語文において、助詞「わ／は」「え／へ」は頻出する。また、ウ列・オ列長音表記も字音語を中心としており、出現頻度がたかくなっている。規則の面で見ると、点字かなづかいと「現代仮名遣い」はごくわずかなちがいにみえるものの、そのわずかな相違点が頻出する語に集中するため、かきだされた文は、だいぶちがうという印象をうけるだろう。

以上で確認したとおり、点字かなづかいは「現代仮名遣い」とはことなる点をもっている。それは、点字かなづかいが墨字の漢字かなまじり文よりもさきがけて表音的表記法を

²⁰ 日本点字委員会 <http://www.braille.jp/>

²¹ 日本点字委員会 (2001:11-28)

採用していたためであることがいわれている。それでは、「現代仮名遣い」の前身となる「現代かなづかい」が発表されたとき、さきだって表音的表記法をとりいれていた点字かなづかいとの統合はかんがえられなかったのだろうか。「現代仮名遣い」成立の経緯をふくめて、検討していく。

4. 2 「現代仮名遣い」と点字かなづかいとの関連性

「現代仮名遣い」が第1則（原則）と第2則（特例）の2部だてとなっており、そのために複雑なものになっていることについては、その成立に理由がある。「現代かなづかい」「現代仮名遣い」の原型ともいえるのは、1905（明治38）年にだされた文部省のかなづかい諮問案（改訂仮名遣案）にたいする、国語調査委員会答申²²である。

文部省のかなづかい諮問案は、明治33年式棒引きかなづかい²³によってかかれていた第一期国定教科書の修正を審議するさいにおかれた「教科書調査委員会」が調査・報告した、「国語仮名遣改定案」「字音仮名遣ニ関スル事項」をもとにしてつくられている。これは、明治33年式棒引きかなづかいを改良したものであり、字音語だけでなく和語も表音的かなづかいでかくこととし、小学校だけではなく中学校以上の教育にも適用しようとしたものである。助詞の「は」「へ」は「わ」「え」とあらため、助詞にかぎらず、「お」「を」はすべて「を」に統一し長音表記は用言の語尾以外は長音符を使うなど、かなり表音性がつよいかなづかいとなっている。これにたいしてだされた国語調査委員会答申は、「明治33年式棒引きかなづかい」をもとにして、和語も表音的かなづかいになおし、字音語については長音符をもちいるかわりにかなをそえるという形に変更したものである。助詞の表記は「は」「へ」「を」となっており、字音語のエ列長音には「エ列+い」があらわれるという、明治33年式棒引きかなづかいの特徴をうけついでいる。これが、1946（昭和21）年発布の「現代かなづかい」にいたるまでの仮名遣改定案の原型となり、「現代仮名遣い」にまでつながっている。

²² 詳細は文部省（1953）に詳しい。また、「現代仮名遣い」がこの国語調査委員会答申と共通点がおおいことは、永山（1977:109）に指摘がある。

²³ 長音表記に長音符を使用するという特徴をもつかなづかいは総称して「棒引きかなづかい」とよばれる。また、明治33年から8年間にわたって小学校の教科書につかわれた、主に字音語と外来語の長音表記に長音符をつかい、和語は歴史的かなづかいでかかれた折衷的な特徴をもつかなづかいのことを「棒引きかなづかい」というばあいもある。本研究ではこれらを区別するために、後者を特に「明治33年式棒引きかなづかい」とよぶこととする。「明治33年式棒引きかなづかい」については2章でくわしくのべる。

このように、「現代仮名遣い」は明治期にできあがっており、ほぼそのままの形で現在もつかわれている。

一方、現行の点字かなづかいも、長音に長音符をもちいることなどから、棒引きかなづかいの影響が考えられる。日本語点字の考案は、東京盲啞学校²⁴の関係者によっておこなわれ、1890（明治 23）年に同校教員の石川倉次案による 6 点点字案が採択された。これが現在の日本語点字の基礎となっている。当初は歴史的かなづかいによって表記されていたが、1900（明治 33）年に墨字の小学校教科書に、字音語の長音表記に長音符を使用する、いわゆる明治 33 年式棒引きかなづかいが採用された。それにともない、点字の教科書も表音的な表記法へと変化してゆく。第一期国定読本の点字教科書についても、この明治 33 年式棒引きかなづかいがつかわれた。墨字の教科書は 1908（明治 41）年に棒引きかなづかいを廃止し、第二期国定教科書は歴史的かなづかいでかかれる²⁵。一方、点字については、この棒引きかなづかいが継承される。1946（昭和 21）年に「現代かなづかい」が制定され、墨字のかなづかいが歴史的かなづかいから表音的なかなづかいへと変わるよりもさきに、点字は棒引きかなづかいによる表音的なかなづかいを実践しており、墨字とはことなる独自のかなづかいをもち、それを実践しつづけて現在にいたっている。

「現代仮名遣い」は 1986（昭和 61）年に公布された。その前身として、1946（昭和 21）年に公布された「現代かなづかい」がある²⁶。運用面からみると、「現代仮名遣い」と「現代かなづかい」はほぼかわりはない。しかし、詳細に比較すると、その理念は語をかきあらわすときの「準則」から「よりどころ」へと変更になり、規範性がゆるやかになった。また細則についても、「現代かなづかい」では助詞「は」「へ」は、「わ」「え」表記も許容とされていたのが、「現代仮名遣い」ではその許容が削除されるなどの細かい変更がある²⁷。

日本語点字は、墨字よりさきだって、独自の表音的なかなづかいを実践していたが、「現

²⁴ 現在は筑波大学附属視覚特別支援学校となっている。

²⁵ 明治 33 年式棒引きかなづかいが小学校の教科書ではわずか 8 年間しか用いられなかったことについては、文中にあらわれる長音符への抵抗感や、和語は歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかい、と語の系統によって表記法を区別しなければいけないことにたいする混乱がおき、その評判のわるさから撤廃されたと説明されることもおおいが、柿木（2007）によると、1908 年の臨時仮名調査委員会の場での森鷗外による批判の影響等も指摘されており、文字の機能上の問題というよりは、政治的な要因によるものであるとかがえられている。

²⁶ 「現代かなづかい」から「現代仮名遣い」への改定は、戦後の国語政策の見直しの一環として、国語審議会により行われた（文化庁 2005:610）。

²⁷ （文化庁 2005:631-633）

代かなづかい」と点字のかなづかいは無関係ではなく、日本点字委員会からだされた点字表記法書である『日本点字表記法（現代語編）』（1971）・『改訂日本点字表記法』（1950）では、「現代かなづかい」との対応がしめしてある。また、「現代かなづかい」の改定にあたっては、日本点字委員会が「現代かなづかい」に関する意見書²⁸（1982）および、「改定現代仮名遣い（案）」に対する日本点字委員会からの要望（1985）を国語審議会にたいして提出している²⁹。

「現代かなづかい」に関する意見書は、「現代かなづかい」の改定にあたっての、点字かなづかいの立場からの要望である。助詞「は」「へ」、よつがな、長音表記などの例をとりあげ、のこっている歴史的かなづかひの影響をなくし、より表音的な表記にちかづけていくための提言がされている。しかしながら、国語審議会が発表した「改定現代仮名遣い（案）」は、いままでの「現代かなづかい」とほとんどかわらず、日本点字委員会のもうしたてがまったくふまえられていない。また、「現代かなづかい」では助詞「は」と「へ」は「わ」「え」という表記も許容され、オ列長音の本則において「オ列+お」の表記も許容されている。これが点字かなづかひの「オ列+一」と対応しており、「オ列+う」を本則としない点字かなづかひとの整合性をたもつと解釈されているが、改定案ではその許容がなくなっているなど、点字かなづかひとの関連が希薄になっている。

それをうけて、「改定現代仮名遣い（案）」に対する日本点字委員会からの要望」がだされた。「改定現代仮名遣い（案）」にたいして、2点の要望をだしている。1点は、助詞「は」「へ」に「わ」「え」の表記の許容を存続すること、もう1点は、オ列長音の本則を「オ列+う」とすることにたいして、「オ列+お」の許容を存続することである。しかしながら、昭和61年内閣告示第1号として公布された「現代仮名遣い」において、まえがきに「7 この仮名遣いは、点字、ローマ字などを用いて国語を書き表す場合のきまりとは必ずしも対応するものではない。」という一文が追加されたのみで、日本点字委員会の要望は反映されてはいないまま、現在にいたっている。「現代かなづかい」は、歴史的かなづかひから表音的なかなづかひへの過渡的なものとして位置づけられ、さらなる改定がめざされていた。

²⁸ 木塚泰弘（きづか・やすひろ）の科学研究費補助金「中途視覚障害者の触読効率を向上させるための総合的點字学習システムの開発—点字サイズの評価法、サイズ可変點字印刷システム、学習プログラム・CAIの開発—」（研究課題番号07401007）の研究成果報告書のなかで紹介されており、ウェブ上からよむことができる。

<http://web.econ.keio.ac.jp/staff/nakanoy/article/braille/BR/index.html>

²⁹ この日本点字委員会によるもうしたてについては、雑誌『日本の点字』に抜粋して転載された。

それにたいして、「現代仮名遣い」は「社会に定着」したかなづかいとして、今後の改定について明記されてはいない。

5. 本研究の目的と概要

以上で確認したように、「現代仮名遣い」は墨字使用者が漢字かなまじり文をかくときには、ひろくもちいられている規範性をもつかなづかいではあるが、「慣習的な表記」に由来する規則の例外をおおくふくむとの批判は、もちいられはじめたときからあげられており、実際に習得の困難さが国語教育・日本語教育の分野からも指摘されている。また、図 1 のように駅の電光掲示板という公共性のたかいものなかでの「現代仮名遣い」のまちがいの例や、図 2 のように外来語が和語であるかのようになじんだ例がみられる。そしてマンガやライトノベルなどといった一部の分野に限定はされるが、それまでの規範からははずれるような表記をあえておこなうことが作品の表現手段として定着しつつあるような状況がある。明治期から独自の表記の歴史をもつ日本語点字のかなづかいとの関連も、墨字文字・表記研究の面から着目されることはすくない。

「現代仮名遣い」はかならずしも「定着」しているとはいきれない。日本語をかきあらわすための文字の表記法は多様であり、つねに変化している。そして、「定着」しているからといままであまり問題視されずつかわれてきた「現代仮名遣い」は、情報アクセス権の保障という観点から、漢字を使用するさいのよみ情報の保障³⁰の重要性が指摘されているいま、日本語表記法としての妥当性を検討しなおす必要があるのではないだろうか。

そのさい、議論と実践の蓄積がある近代かなづかい改定論・運動の史的研究は参考となる。墨字の学校教育や政府公文書が歴史的かなづかいから「現代かなづかい」「現代仮名遣い」へとうつりかわっていったその経緯については、おおくの先行研究によってあきらかとなっている。

しかしながら、かなづかい改定論史にいちづけられるものうち、まだあきらかとなつ

³⁰ 「よみ情報の保障」の具体的な実践例としては、北九州銀行と山口銀行のサイトで、一部のページで音声よみあげソフトの利用を考慮して、地名などの一部を漢字ではなくひらがなで表記している例があげられる。

北九州銀行:視覚障がいのあるかたに配慮した取り組みについて

<http://www.kitakyushubank.co.jp/portal/information/barrier-free.html>

山口銀行:視覚障がいのあるかたに配慮した取り組みについて

<http://www.yamaguchibank.co.jp/portal/information/barrier-free.html>

てはいないものがある。近代日本語教育でもちいられたかなづかいと、近代日本語点字のかなづかいである。近代日本語教育の教材にもちいられたかなづかいは、近代国語教育にさきがけて表音的なかなづかいを採用していたものもあるという指摘は、すでに先行研究によってなされている³¹。また近代点字かなづかいも、点字教科書や大正期に刊行された点字新聞『点字大阪毎日』では表音的なかなづかいがもちいられており、現行の点字かなづかいもその特徴をうけついでいるという日本語点字表記史も詳細にまとめられている³²。しかしながら、実際の資料をもちいての表記研究はまだおこなわれておらず、また、日本語文字・表記研究としてのかなづかい改定論史研究との関連についてはあきらかとはなっていない。

本研究では、第 1 部で、第一期国定国語教科書『尋常小学読本』と、かなもじ論者であり日本語点字考案者の石川倉次によるかな専用文によってかかれた口語文典『はなしことばのきそく』のかなづかいを調査した。そして第 2 部で清国留学生を対象とした日本語教育教材のうち、松本亀次郎著の会話教科書『漢訳日本語会話教科書』および日本語教育用の文法書『言文対照 漢訳日本文典』、清国留学生によってかかれた会話教科書『日語新編』のかなづかいを調査した。そして第 3 部で日本語点字かなづかい史の整理をおこなひ、近代点字国語教科書『点字 尋常小学読本』と近代点字新聞『点字大阪毎日』の最初期のかなづかいを調査した。

ここで選定した資料は、長音表記に長音符をもちいる「棒引きかなづかい」および明治 33 年式棒引きかなづかいの影響をうけているかなづかいと判断できる表音的なかなづかいでかかっている教科書類を中心としている。「現代かなづかい」「現代仮名遣い」とはことなる表音的なかなづかいの実践例を調査することで、近代仮名遣い改定論史およびその実践例の一端をあきらかにすることを、本研究の目的とする。

なお、本研究で引用した資料は、おおむね旧字体は新字体にあらためた。ただし、特別に旧字体をもちいる必要があると判断したときは、旧字体をもちいる。

【参考文献】

³¹ 安田（1997:106）が指摘するように、近代日本語教育もしくは「外地」への「国語」教育において、日本語普及を目的として表音的なかなづかいを推進する意見があげられている。

³² 金子（2007）がくわしい。

- あべ・やすし (2010) 「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」『社会言語学』 10
- 天野清 (1986) 『子どものかな文字の習得過程』 (秋山書店)
- 井上史雄 (2006) 「外来語の表記と発音の問題—エイを中心に」『明海日本語』 10・11
- 遠藤邦基 (2001) 「特殊音節 (撥音・促音・長音) の表記法—「はねる・つまる・引く」という説明が必要となったことの意味」『関西大学文学論集』 50-3
- 大伴潔・Hirayama Monica (2008) 「仮名特殊拍の書字困難への指導に関する予備的研究—音韻意識プログラムによる継時的変化」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』 59
- 柿木重宜 (2013) 「近代「国語」における「棒引き仮名遣い」の終焉—藤岡勝二に関わる文献学的アプローチを中心に」『滋賀短期大学研究紀要』 38
- 柿木重宜 (2007) 「なぜ「棒引仮名遣い」は消失したのか—藤岡勝二の言語思想の変遷を辿りながら」『季刊文学・語学』 188
- 葛西和美・関あゆみ・小枝達也 (2006) 「日本語 dyslexia 児の基本的読字障害特性に関する研究」『小児の精神と神経』 46-1
- 金子昭 (2007) 『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』 (日本点字委員会)
- 国立国語研究所 (1972) 『幼児の読み書き能力』 (東京書籍)
- 武部良明 『日本語表記法の課題』 (三省堂)
- 長岡由記 (2008) 「長音表記の音声化指導に関する一考察—エ列・オ列長音を中心に」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』 54
- 永山勇 (1977) 『仮名づかい』 (笠間書院)
- 日本点字委員会 (2001) 『日本点字表記法 2001年版』
- 日本点字委員会 (1986) 「国語審議会への要望書」『日本の点字』 13
- 日本点字委員会 (1982) 「国語審議会への意見書」『日本の点字』 10
- 蜂矢真郷 (2007) 「「現代仮名遣い」の長音表記」『国語文字史の研究』 10 (和泉書院)
- 松本敏治 (2005) 「平仮名読みに困難を示した2事例への読み指導—50音表暗唱と対連合学習を用いて」『弘前大学教育学部紀要』 94
- 文化庁 (2005) 『国語施策百年史』 (ぎょうせい)
- 文部省 (1957) 『現代かなづかいと正書法』
- 文部省 (1953) 『明治以後におけるかなづかい問題』

第 1 部 近代墨字国語教科書類のかなづかい

第2章 『尋常小学読本』のかなづかい

1. はじめに

1904（明治37）年から1909（明治42）年にわたって使用された文部省著『尋常小学読本』（イエスシ本）は、第1期国定国語教科書としてしられている。この資料の表記上の特色として、かなづかいにいわゆる「明治33年式棒引きかなづかい」が使用されていることがあげられる。この明治33年式棒引きかなづかいは今日、公文書や学校教育でおこなわれているかなづかいの「よりどころ」をしめした「現代仮名遣い」（昭和61年内閣告示）にさきだって、1901（明治34）年から1909（明治42）年の8年間、一部の語にたいして表音的なかな表記法を採用したさいのかなづかいである。

明治33年式棒引きかなづかいが実際に初等教育の教科書で使用されたのは8年間のみではあるが、「現代仮名遣い」やその前身である「現代かなづかい」（昭和21年内閣告示）にさきだって、歴史的かなづかいより平易な表音的な表記をめざし、そして実際に学校教育で採用されたかなづかいであり、「現代仮名遣い」との共通点もおおくとされる。また、近代日本語教育の教科書に用いられたかなづかいや、現代点字かなづかいとの関連もかんがえられ、近代かなづかい改定論史研究においては、重要なかなづかいであるといえる。しかしながら、実際の資料にあたってのかなづかいの詳細な研究はされてはいない。

そこで、きわめて広範囲にもちいられた第1期国定国語教科書である『尋常小学読本』に用いられたかな表記について調査することで、明治33年式棒引きかなづかいの実態をあきらかにしていくことを、本章の目的とする。

2. 明治33年式棒引きかなづかいとは

和語や字音語の長音表記に「棒（長音符「一」）」を用いるかなづかいについて、「棒引きかなづかい」とよばれることがある。しかしながら、「棒引きかなづかい」という一定のかなづかいがあるわけではなく、長音表記に長音符をもちいてかかれているという共通点のあるものでも、調査をすると、かきてや資料によって、表記がことなる場合があ

る。

そこで、本稿では、長音表記に長音符を使用するかなづかいの総称である「棒引きかなづかい」と区別して、1901（明治 34）年から 1909（明治 42）年まで尋常小学校の教科書につかわれたかなづかいを特に、「明治 33 年式棒引きかなづかい」とよぶこととする。

この「明治 33 年棒引きかなづかい」は、1900（明治 33）年の小学校令の改正および「小学校令施行規則」の発布により導入され、翌年の 1901（明治 34）年から 1909（明治 42）年まで小学校の教科書でつかわれた。具体的な規定としては、「小学校令施行規則」の第 2 号表で「従来用ヒ来レル字音仮名遣」と「新定ノ字音仮名遣」との対照表がしめされた。この第 2 号表については、永山（1977:103）で整理されている。それにもとづき、以下にその特徴をあげる。

- (1) 尋常小学校にのみ適用された。
- (2) 第 2 号表では、字音語のかなづかいの変更点のみがしめされている。
- (3) 字音語長音の長音表記に長音符「一」がもちいられる。
- (4) 拗音の表記は、「や」「ゆ」「よ」を右側下に細書する。
- (5) 「か」と「くわ」、「が」と「ぐわ」、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の区別を廃し、「か」「が」「じ」「ず」に一本化した。しかし、これらについては「従来慣用ノ例ニ依ルモ妨ナシ」と注意書きが添えられている。

このように、「明治 33 年棒引きかなづかい」は、字音語か和語かという語の系統により、表記を区別する。このかなづかいをつかいこなすには、ひとつひとつの語について、それが字音語か和語かをおぼえておく必要がある。

墨字による近代学校教育では明治 33 年式棒引きかなづかいは 8 年間もちいられたのみで、その後は 1946（昭和 21）年の「現代かなづかい」の発布にいたるまで歴史的かなづかいがつかわれつづけた。その一方、近代点字資料を調査すると、明治 33 年式棒引きかなづかいと共通点もある独特の棒引かなづかいが使用されており、その特徴は現在の日本語点字かなづかいにもうけつがれている¹。また、清国留学生を対象とした日本語教育でつかわれていた日本語教科書のいくつかも、明治 33 年式棒引きかなづかいと同様

¹ 日本語点字のかなづかいについては、本論文第 3 部でくわしくのべる。

の特徴をもつものがあり、昭和のはじめまで版をかさねている²。

この明治 33 年式棒引きかなづかいは学校教育に導入され、8 年間つかわれたのち廃止となり、その後、1905（明治 38）年に国語調査委員会によってだされた改定案は採択されず、教科書のかなづかいは歴史的かなづかいにもどる。この経緯については、柿木（2007）で分析されている。柿木は、『棒引きかなづかい』の「消失」の原因には、国語政策上の観点からみると、複雑に交錯した様々な政治的要因が胚胎し、単に文字の便宜上の問題であるという言語内的条件だけではとうてい説明できない（柿木 2007:51）」と指摘したうえで、言語学者の藤岡勝二が棒引きかなづかいかからローマ字表記へと関心をうつしていったことと、明治 33 年式棒引きかなづか이가小学校教育において廃止されたこととの関連について指摘する。「たった 8 年間しかつかわれなかった失敗したかなづかい」という評価をうけることもあるが、実際にはその廃止は当時の政治的な要因がかんがえられており、また近代日本語教育の教材や近代点字文書ではながくもちいられたかなづかいは、このように点から、「明治 33 年式棒引かなづかい」は近代かなづかい改定論史においては、重要なかなづかいであるといえる。しかしながら、その実態がどういうものであったのか、というのは完全にはあきらかとなつてはいない。その原則が記されている「小学校令施行規則」第 2 号表では、字音語のかなづかいしか記載されておらず、長音表記についてはウ列、オ列の長音の例があげられているのみであり、エ列長音についての記述はない。明治 33 年式棒引きかなづかいは、「小学校令施行規則」第 2 号表がその根拠となるが、それだけではこのかなづかいの全容はわからない。実際に資料にあたって調査をする必要があるとかんがえる。

3. 『尋常小学読本』について

前節でのべた明治 33 年式棒引きかなづかいは、第 1 期国定教科書が使用される以前の、検定教科書でももちいられていた。たとえば坪内雄蔵（逍遙）著『国語読本』（富山房・1900）などがそれにあたる。1902（明治 35）年の教科書疑獄事件をきっかけとして、1903（明治 36）年に小学校令が改正され、翌 1904（明治 37）年から国定教科書がつかわれはじめる。第 1 期国定教科書は、1909（明治 42）年までつかわれ、第 2 期国定教科書から、ふたたび歴史的かなづかいにもどる。

² 近代日本語教育教材のかなづかいについては、本論文の第 3 部でくわしくのべる。

明治 33 年式棒引きかなづかいについて調査する場合、これらの検定教科書と第 1 期
国定教科書が資料となるが、本稿では広範囲にわたってつかわれたという影響力をかん
がえ、第 1 期国定国語教科書である『尋常小学読本』を使用する。

『尋常小学読本』は、全 8 巻からなる。1・2 巻はカタカナわかちがき文でかかされてい
る。3 巻からはひらがなわかちがき文もはいるようになり、ごくわずかに漢字がつかわ
れはじめる。4 巻も同様であるが、漢字の割合がふえていく。5 巻以降はわかちがきがな
くなり、漢字カタカナ交じり文と漢字ひらがな交じり文で構成されている。

調査には、復刻版である『尋常小学読本 教育資料版』（広島図書・1952）1 巻～8 巻
を使用した。課名・語釈等をのぞいた本文中のかなづかいのなかで、長音表記に着目し
て用例を採取した。ただし、本文は総ルビではないため、漢字使用率のふえる 4 巻以降
については、ルビの付されているもののみを用例としてとりあつかう。

4. 『尋常小学読本』の長音表記

以下に、調査した用例についてまとめる。2 章でふれたように、明治 33 年式棒引きか
なづかいの根拠となるのは、「小学校令施行規則」第 2 号表であるが、これは字音語のか
なづかいについての規定となる。このため、『尋常小学読本』のかなづかいについても、
和語と字音語とではかなづかいがことなっていることがかんがえられる。そこで、和語
と字音語とのそれぞれについて分析をおこなう。以下、用例をあげる場合はすべて新字
体になおし、ルビが付されているものは漢字の後に、カッコ内に入れて示す。わかちが
きがされている場合は、それを反映する。また、用例の後に巻数とページ数をカッコ内
に入れてしめた。長音表記かどうかを判断する基準として、長音符「ー」を使用し
ているもの、および、文部大臣官房図書課編集の『仮名遣諮問ニ対スル答申書』（明治三
十八年十二月）のなかの、「新旧仮名遣対照表」のなかで長音表記とされているものを参
考にした。

本資料は明治三十八年に、国語調査委員会が提出した仮名遣改定案について、用例を
あげて詳しく説明がなされている。「新旧仮名遣対照表」の凡例には、

本表ハ国語及字音ノ長短熟語ニ就キテ新定仮名遣と旧仮名遣トヲ対照シタルモノニ
テ第一号表ハ国語ト字音語トニ區別シテ、旧仮名遣ヲ秩序的ニ配列シタルモノ、第

二号表ハスクノ如キ區別及秩序ニ拘ラズ、単ニ新定仮名遣ガ旧仮名遣ノ幾何ヲ包含セルカヲ示セルモノナリ

とあり、長音の「旧仮名遣」（歴史的かなづかい）と表音的かなづかい、そして発音が対照できる表となっている。表は第一号第二号に分かれ、第一号表はさらに甲、国語ノ部・乙字音ノ部にわかれている。それぞれの部のなかにまた、短音と長音で別の表がある。ここで、「国語ノ部」と「字音ノ部」の長音となる例をあげた表がある。

この表をもとに、長音表記に相当すると思われる歴史的かなづかい、表音的かなづかい、そして長音符をつかった長音表記を用例として採取した。ただし、「云フ」「言フ」など、同じ動詞で漢字表記にゆれがみられるものがあつたが、今回は長音表記のみを問題とするために、おなじものとしてあつた。また、長音に該当するとみえる表記であっても、「第一（ダイイチ）」などのように、二語の連続によって長音表記となるものは考察の対象からはずした。

4. 1. 和語の長音表記

和語の長音表記について、ア列からオ列の列ごとに用例をあげる。

(1) ア列

ア列の長音表記は、ア列のかなにあをそえる表記、「ア列+あ」と、ア列のかなに長音符をそえる「ア列+ー」との2とおりがみられる。長音符は、擬音語もしくは「ああ」「さあ」「まあ」といった感動詞にあらわれる。

オカアサン。 オハヤウ ゴザイマス。(2巻・1)

カー、カー、カラス、 カラス ガ ナイテイク。(1巻・56)

アー。 オチヨサン デス カ。 ヨク、 イラッシャイマシタ。(2巻・15)

さー。 なにか、おかきなさい。(4巻・55)

マー。 ミゴトナ ブドー デハ アリマセンカ。(3巻・51)

(2) イ列

イ列長音は、「イ列+ひ」「イ列+い」があらわれた。いずれの例も、歴史的かなづか

いに準ずる。

ニイサン ハ、 ビックリシテ、 トンデキマシタ。(2巻・25-26)

アチラ ニ、 サイテキル ハナ ハ チヒサウゴザイマス。(2巻・3)

また、長音表記に長音符が使われる例として、「いいえ」があった。

イーエ。 コレ ハ ワタクシ ノ ス デス。(3巻・12)

(3) ウ列

ウ列の長音表記は、「ウ列+う」「ウ列+ふ」があらわれる。どちらも歴史的かなづかいに準ずる。

タキチ ノ カキ ハ、 タイソー、 シブウゴザイマシタ。(2巻・9)

ソノ ヒ ノ ユフガタ、 カゼ ガ、 タイソー ツヨク、 フキダシマシタ。

(3巻・25)

また、動詞「言う」についても、歴史的かなづかいに準ずる。

オトウサン。アレ ハ ナン ト イフ クサ デ ゴザイマス カ。(2巻・10)

ウ列拗長音は、「イ列+う」が見られた。

ねだんは、二十円までのもので、よろしうございます。(6巻・10)

(4) エ列

エ列の長音表記は、「エ列+え」「エ列+い」「エ列+ひ」の例があった。これらも、歴史的かなづかいとの衝突はない。

コノ ニンギョー ノ キモノ ハ ネエサン ニ コシラヘテ モラッタ ノ

デス。(2巻・7)

タケノコ ト、 セイクラベ ヲ シテミマセウ。(3巻・21)

タヒ ヤ カレヒ ヤ ソノ ホカ、 イロイロナ ウヲ ガ キマス。(3巻・48)

(5) オ列

和語のオ列の長音表記は、「ア列＋う」「ア列＋ふ」「オ列＋う」「オ列＋ふ」「オ列＋ほ」、また、拗長音は、「エ列＋う」「エ列＋ふ」がみられた。これらは、歴史的かなづかいに準じる。

オトウサン。 オハヤウ ゴザイマス。(2巻・1)

ムカフ ノ ホー ニモ、 フネガ ミエテ キマス。(3巻・46)

マタ、 チカラ ガ ツヨウゴザイマス。(4巻・5)

キノフ モ、 オトトヒ モ、 フリマシタ。(3巻・15)

コチラ ニ、 サイテキル、 ハナ ハ オホキウゴザイマス。(2巻・3)

ワタクシ ガ ミセアゲマセウ。(2巻・54)

ケフ モ、 アサ カラ、 アメ ガ フツテキマス。(3巻・14)

そして歌詞の一部と、副詞「とうとう」、感動詞「おお」に長音符を使用した例がみられた。

ホー、 ホー、 ホタルコイ。(3巻・31)

トートー、 カシ ノ キ ヲ オツテ シマヒマシタ。(3巻・25)

おー。 りっぱな 富士山 (ふじさん) が できた。(4巻・10)

4. 2 字音語の長音表記

ア列・イ列字音語の長音表記については用例がないのでとりあげない。ウ列・エ列・オ列について分析する。

(1) ウ列

ウ列の字音語は、「ウ列＋ー」で統一されていた。また、ウ列拗長音は、「イ列＋ゅー」

であった。

ソコデ、 オイシャサマノ フー ヲ シテ、 カゴ ノ ソバ ニ、 イキマシ
タ。(2巻・53)

ながい はりが じゅーに と いふ 字 を さして、(3巻57)

(2) エ列

エ列の長音表記は、「エ列+い」となる。

キレイナ ミヅ ガ ナガレテ キマス。(2巻・5)

(3) オ列

オ列の長音表記は、すべて「オ列+ー」となっていた。また、オ列拗長音は、「イ列+よー」であった。

ラッパ ヲ フイテキル ノハ タロー デス。(1巻53)

コノ カハイラシイ ニンギョー ヲ ゴランナサイ。(2巻6)

4. 3 『尋常小学読本』のかなづかいの特徴

前節までで、本資料の長音表記について和語・字音語ごとに分析をした結果、やはり「小学校令施行規則」第2号表を反映して、字音語にいわゆる「棒引きかなづかい」があらわれることがわかる。そして、和語にかんしてはおおむね歴史的かなづかいに準じたかなづかいでかかれていたことがわかった。

その一方、和語にも「棒引きかなづかい」があらわれないわけではなく、ア列・イ列・オ列の擬音語・感動詞・副詞などの一部の語にかんして、長音表記に長音符がつかわれていることがわかった。これらの特徴を以下に表にまとめる。

【表1 『尋常小学読本』のかなづかい】

	和語	字音語
よつがな	歴史的かなづかいとおなじ	歴史的かなづかいとおなじ
ア列長音	「ア列＋ー」 (一部の語で「ア列＋ー」となる)	
イ列長音	歴史的かなづかいとおなじ (一部の語で「イ列＋ー」となる)	
ウ列長音	歴史的かなづかいとおなじ	ウ列＋ー
拗長音	歴史的かなづかいとおなじ	イ列＋ゆー
エ列長音	歴史的かなづかいとおなじ	エ列＋い
オ列長音	歴史的かなづかいに準ずる (一部の語で「オ列＋ー」となる)	オ列＋ー
拗長音	歴史的かなづかいとおなじ	イ列＋おー

また、助詞の表記は「は」「へ」「を」であり、よつがなにかんしては、和語も字音語も歴史的かなづかい・字音かなづかいに準じて「ぢ」「づ」があらわれた。

5. おわりに

字音語の長音表記に長音符をもちいる明治33年式棒引きかなづかいは、清国留学生を対象とした近代日本語教育や、現在も長音表記に長音符をもちいる日本語点字との関連が考えられ、近代かなづかい改定論史を研究するうえで重要なかなづかいである。しかしながら、実際にどのように運用されていたかということは、あきらかになっていなかった。

そこで、明治33年式棒引きかなづかいでかかれ、国定教科書としてひろくつかわれた『尋常小学読本』を資料として、長音表記の調査を行った。その結果、和語と字音語とでかなづかいがことなっていた。和語はほぼ歴史的かなづかいに準ずるかなづかいがつかわれていたが、ア列・イ列・オ列の感動詞や擬音語などの一部の語に棒引きかなづかいがみられた。字音語は、ウ列、オ列については長音表記に長音符がつかわれる棒引き

かなづかいであり、エ列は「エ列+い」の形であり、長音符をもちいていないことがわかった。これについては、1905（明治38）年文部省発表の「国語仮名づかい改訂案並字音仮名遣ニ関スル事項」で、小学校令施行規則第二号表にエ列長音の表エ列+一の追加が提案されている。本資料はそれ以前に作成されたもので、字音語のエ列長音は長音符を使わずに陛下（ヘイカ）などのように、「エ列+い」の形になる。これは、明治33年式棒引きかなづかいの特徴のひとつであるといえよう。

明治33年式棒引きかなづかいの規定は「小学校令施行規則」第2号表によるものではあるが、第2号表には記載のない和語の棒引きかなづかいが資料であらわれたことについては、その経緯について別途調査する必要がある。

明治33年式棒引きかなづかいは、この『尋常小学読本』からのちは、学校教育ではつかわれなくなる。和語と字音語の区別をし、和語には歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかいという二重基準による表記の複雑さが教育現場に混乱をもたらしたためという説明がされることもおおいが、その一方、近代日本語教育の一部の教科書については、この明治33年式棒引きかなづかいと非常に共通点のおおいかづかいでかかっていたものが、昭和初期にいたるまで版をかさね、つかいつづけられている。

柿木（2008）が指摘するように、明治33年式棒引きかなづかいが廃止されたのは政治的な局面もおおしくかかわっていたことがかんがえられる。また、字音語や和語の表記に「棒（長音符）」を使用することへの抵抗感もおおきかったこともうかがえる³。このような政治的・心情的な面とは別に、表記の機能性という観点から、明治33年式棒引きかなづかいはもう一度評価づけをする必要があるとかんがえる。本資料1巻から3巻までのような、漢字をつかわずに、かなのみでかかれた文章のみをみると、明治33年式

³ 明治33年式棒引きかなづかいについては心情的な抵抗感をもっていたものもすくなくないことが指摘できる。たとえば、『國學院雑誌』第11巻4号-7号（明治38年）で「文部省提出文法許容仮名遣改訂案に就いて」という特集が組まれた。このなかで、歴史的かなづかい擁護の立場をとるものからはいうまでもないが、かなづかい改定に賛成をとるものでも、長音表記の棒（一）に抵抗感をあらわしている。

仮名遣（改訂仮名遣いのこと）も私は賛成だ。（略）但し棒だけはやめてもらひたい、棒は符号で、文字ではないから、仮名の中に入れて全然調和しない。（四号・白鳥庫吉）私は学理上、教育上、政治上、文部省の改正案には賛成してをります。但し棒を用ふることは、文字の統一の上から、又實際書写の上から、ずいぶん不都合であるやうに思はれる。（六号・丸山正彦）

さていかなる文部省案賛成家でも、棒引に賛成する人は殆どないやうである。これほど人にきらはれてゐる棒を文部省が強ひて振りまはさうとされるのはどうふいふ了見であらうか（六号・高橋龍雄）

棒引きかなづかいは、歴史的かなづかいと棒引きかなづかいがいりまじった非常に複雑なものにおもえるが、漢字を習得してしまえば、実際には字音語のかなづかいは漢字にかくれることとなる。漢字かな交じり文の習得にさいして、複雑なうえに漢字をつかようになれば、ほとんどおもてにできることもなくなる字音かなづかいを暗記する手間をはぶくためのかなづかいであるとかんがえると、この複雑に見える明治33年式棒引きかなづかいにも合理性があるのではないか。

明治33年式棒引きかなづかいおよびそれと関連する棒引きかなづかいについて、どのようにうけいられ、運用されていたのか、そしてどのような利点と問題点があったのか、当時の資料にあたってさらに検討していきたい。

【参考文献】

井上敏夫（1958）「国語教科書の変遷」『国語教育科学講座 国語教材研究論』5（明治書院）

柿木重宜（2008）「国語国字問題における藤岡勝二の言語思想について—「棒引仮名遣い」から「へボン式ローマ字表記法」まで」『滋賀女子短期大学研究紀要』33

国立国語研究所（1985）『国定読本用語総覧』1巻

永山勇（1977）『仮名づかい』（笠間書院）

第3章

石川倉次著『はなしことば の きそく』の かなづかい

1. はじめに

石川倉次著『はなしことば の きそく』は、1901（明治 34）年に刊行された。当時は言文一致運動が活発であり、松下大三郎著『日本俗語文典』等、口語の文典があいついで刊行されていた。本資料もその中の一冊である¹。

本資料は歴史的かなづかいではなく独自の表音的なかなづかいでかかっている。これは、著者である石川倉次が「かな の くわい」などにかかわるかなもじ論者であることが関係しているとかんがえられる。

また、石川倉次の功績のひとつに、東京盲啞学校の教員として日本点字の成立に尽力したことがあげられる。明治 20 年頃から石川倉次が中心となって考案された 6 点点字は、その後改良を加えながら、現在も学校教育や公共サービスの場でつかわれつづけている²。

この日本点字の表記法は、助詞の「は」は「わ」、「へ」は「え」に相当する点字かなで表記することや、長音に長音符がつかわれるなど、現行の「現代仮名遣い」とはことになっており、より表音的な工夫がみられる³。これについては、点字を考案した石川倉次を中心とした東京盲啞学校の関係者が、表音的なかなづかいを推奨するかなもじ論者であったためであるということが、すでに社会言語学・点字教育史研究などの観点から多く指摘されている⁴。

以上のことから、『はなしことば の きそく』のかなづかいを調査することにより、

¹ 山本（1965:52）

² 日本点字委員会（2001）等

³ 日本点字委員会（2001）

⁴ たとえば、あべ（2010）の注 10 で「日本語点字を考案した、いしかわ・くらじ（石川倉次）がかな文字論者であったことは、よく知られている。いしかわは『はなしことば の きそく』で表音式のかながきを實踐している（いしかわ・くらじ 1901）」（あべ 2010:22）と、日本点字表記法における石川倉次の影響を指摘している。

明治期のかなづかい改定論にかかわるかなもじ論者の、表音的かなづかいをあきらかにすることができる。それにくわえ、日本点字の表記法とかなもじ論者とのかかわりについてしててがかりとなるものとかがえられる。

2. 著者石川倉次について

石川倉次は、1859（安政 6）年、今の浜松でうまれる。石川家は井上河内守の家臣であった。1868（明治元）年のお国替で藩主井上正春にしたがい、石川家も千葉県市原郡鶴舞に移住した。それが石川倉次 10 歳のときであった。

1872（明治 5）年に学制が發布され、1873（明治 6）年 6 月、15 歳で千葉県鶴舞小学校に入学し、1875（明治 8）年 2 月に 17 歳で同小学校を卒業している。同年 3 月、検定試験に合格して上埴生郡水沼小学校で読書兼算術習字課教員としてつとめはじめる。その後、さらに上級の資格をとるために 1878（明治 11）年に千葉師範学校に入学する。1879（明治 12）年に卒業し、1886（明治 19）年まで小学校の教員をつづける。この教員生活のなかで石川倉次は国語国字問題に関心をしめし、「かな の くわい」などでいりをするようになる。そこで小西信八とであい、交流をふかめていくこととなる。それから小西信八にさそわれて 1886（明治 19）年、28 歳で訓盲啞院（のちの東京盲啞学校）に就職する。

東京盲啞学校在職中に日本点字を考案したのち、石川は点字器の開発や点字かなづかいの研究などをつづける。同時に、台湾における日本語教育にもたずさわり、伊沢修二との交流もあった。以上のように、石川は、国語教育・視覚障害者教育・台湾での日本語教育など、さまざまな教育分野に関係しており、国語教育史や日本語教育史研究の分野における業績についての研究もおこなわれている⁵。

同様に、日本語学の分野からは、かなもじ論者としての石川倉次について、注目することができる。石川倉次が表音的かなづかいでかいた口語文典『はなしことば の きそく』の表記について調査することで、以前から指摘のある点字表記とかなもじ論者である石川倉次との関係を明らかにするためのてがかりとなるとかがえる。

⁵ 石川倉次の経歴にかんしては鈴木（1987）、（林 2004a）（2004b）、吉原（2005）などを参照した。また、石川倉次が明治 38 年文部省仮名遣い改定案諮問案にたいする帝国教育会の調査委員会に名をつらね、墨字のかなづかい改定論にもかかわっていたことは

3. 『はなしことば の きそく』について

3. 1 『はなしことば の きそく』について

『はなしことば の きそく』は、1901（明治 34）年 8 月に金港堂から刊行された口語文典である。本編と付録の 2 冊からなる。本編のはしがきによると、この書は石川の小学校・東京盲啞学校・台湾での日本語教育といった教育の場における教師としての経験をもとに、平易でまなびやすい口語の読み書きの手引き書としてまとめられたものであるという。本書の刊行にあたって、伊沢修二・小西信八・上田万年・那珂通世・大槻文彦などの教育者や国語学者などがめをとおし、助言をおこなっているという。特に、大槻文彦の意見は頭注として掲載されている。表記は数字にのみ漢字がつかわれており、それ以外はひらがな専用文となっている。そのため、単語わかちがきでかかれている。

本編は 8 章からなり、「だいい、こえとかなのこと」「だいい二、をんいんのこと」で文字表記・および音韻に関してのべられている。「だいい三、ことばのしなわけ」「だいい四、ことばのなりたち」「だいい五、ことばのうつりかわり」「だいい六、ことばのかりあい」「だいい七、ぶんのこと」で文法事項の解説がある。

このように、『はなしことば の きそく』は口語文典としてだけでなく、表記にかんする記述もおおくあり、明治期の表記改定論にかかわる資料としても価値のあるものである⁶。

本稿では、明治期のかなづかい改定論からみた石川倉次の表記の方針についての調査をおこなった。調査に使用した資料は、国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵の『はなしことば の きそく』（金港堂・明治 34 年刊）を利用した。

3. 2 『はなしことば の きそく』本文の記述から見たかなづかい

『はなしことば の きそく』より表記に関する記述のみられる「だいい、こえと

柿木（2013）で指摘されている。

⁶ 当時は表記の改定論がさかんに議論されていた時期である。また、明治 33 年から 8 年間、小学校での国語科教育や日本語教育の教科書で字音語の表記を表音的なかなづかいにするいわゆる「明治 33 年式棒引きかなづかい」で表記されるなど、実践的な試みも行われていた。

かな と の こと」「だい二、をんいん の こと」から、石川倉次の表記の方針について考察する。

「だい一、こえ と かな と の こと」は「(一) 五十をん」「(二) だくをん」「(三) ほんだくをん」「(四) よーをん」「(五) はねをん と つまりをん の ばしをん のしるし」「(六) 「さ」ぎょー の へんをん」「(七) 「か」ぎょー ほんだくおん」「(八) じをん (からもじ の をん) の かなづかい」の 8 節からなる。音韻の解説とそれに対応する表記についての説明がある。

「だい二、をんいん の こと」は、おもに音韻の変遷についての説明があり、歴史的かなづかいがしめされ、歴史的かなづかいと石川倉次の考える表音的かなづかいとの対応が述べられている。

上記の 2 章の記述について検討していくことで、石川倉次の表記意識を知るてがかりとする。

3. 2. 1 かなの使用について

「だい一、こえ と かな と の こと」の冒頭に五十音図が掲載されている。ア行オ列に「を」のかなをあて、「お」とルビが振られているのが特徴である。ワ行の「ゐ」「ゑ」の仮名は五十音図にはあられず、ヤ行が「やいゆえよ」ワ行が「わいうえを」となっている。

ア行の「を」については、石川は以下のように説明している。

これ まで、「あ」ぎょー に わ「オ」「お」を もちい、「わ」ぎょー に わ「ワ」「を」を もちいる こと に なって をった、 が、 われ わ どちら の ぎょー に も、「ワ」「を」を もちいる こと に したい と をも う。 その わけ わ、「オ」「お」わ これ まで、「おや・おび・おす・おくる・おどろく・おもしろい」など いう、 ことば の かしら に ばかり、 も ちいた の で ある に、「ワ」「を」わ「をか・をけ・をとこ・をんな・をる・をさむ・をがむ・かをり・いさをし・あを・うを・さを・とを」など の よー に、 ことば の かしら に も、 なか に も、 すえ に も もちい、 また、「これ を・それ を」など いう あとことば に も もちいて、 め に わ みなれ、 みゝ に わ「お」と をなじ に、 きゝなれて も をれば、 その

「お」のかわりに「を」をもちいるわ、すこしもさしつかえなく、かなづかいをたやすくしよーというにわ、「お・を」のわかちをせぬほーがよいとをもうからである。(3ページ)

このように、ア行オ列に相当する音節に関して、「お」ではなく「を」のかなで表記することの根拠として、「目に見慣れている」ことをあげる。

これは、文献学的な根拠からア行オ列を「お」とする、政府公文書や学校教育で採用されていた歴史的かなづかいとはことなる独自のものである⁷。

また、歴史的かなづかいでは一つの音に複数のかながあてられる場合がある、「い・ひ・ゐ」「え・へ・ゑ」「お・ほ・を」については、「だい二、をんいんのこと」の「(二)をんいんのうつりかわり」のなかで以下のように説明がある。

五十をんのうち、「や」ぎょーを「や・以・ゆ・江・よ」「ヤレユエヨ」とかき、「わ」ぎょーを「わ・ゐ・宇・ゑ・を」「ワ・キ・于・エ・ヲ」などとかいて、そのよみこえを、たゞしくいゝわけて、「や」ぎょーの「以・江」「レ・エ」、またわ、「わ」ぎょーの「ゐ・宇・ゑ」「キ・于・エ」と、「あ」ぎょーの「い・う・え」「イ・ウ・エ」と、わかちをたてたことがあつたかもしれぬが、いまわ、どれもいゝよくかわって、「あ」ぎょーのとをなじこえに、いゝあらわすことになり、べつにかきわけるにをよばなくなつた。(27-28ページ)

(きつけ)まえにあげたものうち「ゐ・ひ」が「い」となり、「ふ」が「う」となり、「ゑ・へ」が「え」となり、「ほ」が「を」となつたのわ、みなその「ふをん」がぬけて「ぼ-いん」ばかりとなつたのである。このよーなをんいんのうつりかわりを、「ふ-をん-ぬけ」となづけよー。(31 - 32ページ)

⁷ただし、五十音図のア行オ列に「ヲ・を」をおくのは石川独自の発想ではなく、中世から近世中期の音図にも共通するものである。音韻の変化のなかでア行のオとワ行のヲとが混同し音図でも「アイウエオ・ワキウエオ」とされる例が多くみられる。また、『悉曇秘積字記』にみられる音図のように、「オ」があらわれず、ア行・ワ行ともにオ列に「ヲ」がおかれるものも存在する。釘貫(2007:28-31)

このように、「ゐ・ゑ・お」をつかわず、「ひ・へ・ほ」をハ行専用かなとすることで、清音のかなについては一音一字に整理されている。

次に、一つの音にいくつかの表記があらわれる可能性のある長音表記⁸、そして濁音の表記において問題となるよつがな（じ・ぢ・ず・づ）について検討する。

3. 2. 2 長音表記について

かなづかい改定論の中心となる論点の一つに、長音の表記がある。本資料では、長音表記に関する記述は、「だい一、こえとかなとのこと」の「(五)はねおんとつまりをんのばしをんのしるし」に

のばしをんのしるし わ、すべて のばして いう をんのしたにをくものである。たとえば、

「ポーシ・サーベル・ビール・ろーそく・ちょーちん・こーもり・ゆーがを」

など (9 ページ)

とあり、長音の表記には長音符を使うことが述べられている。例としてしめされているものは外来語（サーベル・ビール）、字音語（ポーシ・ろーそく・ちょーちん）、和語（こーもり・ゆーがお）がそれぞれあげられている。また、特に字音語に関しては「(八) じをん（からもじのをん）のかなづかい」に詳しく説明がある。

二段組みの表を掲示し、上段に「ありきたりのかきかた」として字音かなづかいの例をあげ、下段に「これからのかきかた」として石川倉次の提唱する長音表記法をしめしている。

ア列・イ列長音についての記述はなく、ウ列長音・ウ列拗長音・エ列長音・オ列長音・オ列拗長音の表記についての記載がある。示された表記例をまとめると、ウ列音は「ウ列＋ー」、ウ列拗長音は「イ列＋ゆー」、エ列長音は「エ列＋ー」、オ列長音は「オ列＋ー」、オ列拗長音は「イ列＋よー」、となり、いずれも長音符をもちいて表記することが

⁸ 長音表記については、次の3通りのかなづかいが現れる可能性がある。(1) 長音の母音で表記する。「おかあさん」(2) 長音と違う母音を添えて表記する。「おとうさん」(3) 長音表記で表記する。「けーキ」

特徴である。

和語の長音表記については、「だい二、をんいん の こと」にの説明がある。これらは音韻の説明であると同時に表記への言及がみられる。たとえば、

二〇、いま わ 「を」の だん に「ー」を つけて、 その をん を のばして いう が、 もと わ 「う」また わ 「く」と いった もの
ほそー ござい ます わ、 ほそう ござい ます (略)

二一、いま わ「を」の だん に「ー」を つけて、 その をん を のばして いう が、 もと わ「あ」の だん に「う」また わ 「く」を つけて いっ た もの
あこー ござい ます わ、 あかう ござい ます (略)

(きつけ) 「う」を「を」と よむ つづりかた わ よくない が、「ほそく ございます」「あかく ございます」など と いう こと わ よい と をもう。
(40-41 ページ)

などのように、形容詞のウ音便によって長音となる「細う」「赤う」は、「のばして いう」とあり、長音符を使用した例がみられる。

3. 2. 3 よつがなについて

「じ・ぢ・ず・づ」の表記については、以下の通りである。

字音語に関しては「だい一、こえ と かなと の こと」「(八) じをん (か
らもじ の をん) の かなづかい」に

じ ぢ	じ
ず づ	ず

(きつけ) こゝの「ぢ・づ」わ、 もと の かきかた に よる も、 わる
く わ ない が、 これ を かきわける こと わ、 むつかしくて えき
が ない から、 をく わ 「じ・ず」の ほー を かく こと に す
る が よい と をもう。(14-15 ページ)

とあり、「ぢ・づ」はかなとして使わず、「じ・ず」に一本化する方針が示されている。

和語についても、「だい二、をんいん の こと」の「一六、もと わ「ぢ」と かいた の が いま わ 「じ」と なった もの」・「一七、もと わ「づ」と かいた の が いま わ 「ず」と なった もの」という 2 節で述べられている。ただし、

(きつけ)まえ の よー に、 いま わ たいがい「ず」と いう こと に なった が、「かなづち・こづゝみ・をゝづゝ・ひづめ・ちかづく」など わ もと 「つ」の かな が、をんびん に よって にごった もの で ある から、これら わ、「ず」と わ かかぬ ほー が よい と をもう。(38-39 ページ)

と、注意がきがあり、和語の連濁については、「ぢ・づ」の表記を残す方針であることがわかる。また、いわゆる「同音の連呼」については、

五十をん の だいの をん、「か・が・さ・た・な・ば・ま・ら・わ」から、「ぬ」と いう うちけし に つゞく の が、きまり と なって をる。(63 ページ)

のように「ゞ」によって表記される。

4. 『はなしことば の きそく』のかなづかい

2. で、石川倉次の表記の方針について確認をした。つぎに、『はなしことば の きそく』本文で実際にどのようなかなづかいがつかわれているのか、調査する。

「はじめに」でのべたように、本資料の表記の特徴として、漢字をほとんどつかわないかな専用文でかかれ、表音的なかなづかいで表記されていることがあげられる。また、2. において清音については一音一字に整理され、よつがなについても、連濁により発生した「ぢ・づ」以外は「じ・ず」に統一していく方針を確認した。長音表記は長音符を使用するが、ア列・イ列についての記述がない。

以上のことをふまえて、実際の本文から表記の用例を採取した。初出の用例を掲げるこ

とで全体を代表する用例とする。

4. 1 長音表記について

長音表記については字音語・和語それぞれの語についての説明があった。しかし、ア列・イ列の長音表記の説明を欠いている。そこで、本文から長音表記の用例を採取し、石川の記述の補足をする。

(1) ア列長音

ア列の長音表記については、字音語は用例がない。和語については、「ア列音＋ー」となる例がある。

あー あのひとわちゅーぎであるわい。

やー \、てまえもかたきのこぶんか。(138 ページ)

また、ア列拗長音の例がみられる。ア列拗長音の表記は「ア列音＋ゃー」となる。

わたしわてがみをかきました。」を

わたしゃーてがみかきました。(172 ページ)

(2) イ列長音

字音語のイ列長音として「しーか(詩歌)」があげられるが、これは慣用よみである。

さらに、「だい二、をんいんのこと」の章に「ふたつのことばがつながって、一つのじゅくごとなるとき、うえのことばのすえの「ぼいん」がのびてそのあいだにはいるものがある。(35 ページ)」として、その例に「しーか」をあげている。これは「詩歌」のことであると考えられる。

動詞や形容詞の一部には長音符をもちいず、「イ列音＋い」の形になる。また、動詞「言う」の連用形は「いゝ」となる。

なんでもひとにたやすくできないむつかしいことをやりえるの

が えらい もの だ と かんがえて、(はしがき 1-2 ページ)

これ まで、「あ」ぎょー に わ「オ」「お」を もちい、「わ」ぎょー に
わ「ヲ」「を」を もちいる こと に なって をった、 が、(2-3 ページ)

また、和語の名詞には「イ列音＋」の用例がある。

をや まー おじーさん、 よく こそ をいで くださいました。(140 ページ)

(3) ウ列長音

ウ列長音表記については、字音語は「ウ列音＋」となる。また拗長音は「イ列音＋ゆー」となる。

やぶれた きもの を きて、をかしな ふー を して たって をる。(72 ページ)

まさ を わ きゅー に め を あけて(49 ページ)

和語は動詞の一部である「くう」「くるう」「すくう」(30 ページ)が見られた。「ウ列音＋う」となる。名詞は「ゆーがお(夕顔)」(9 ページ)であり、「ウ列音＋」となる。

(4) エ列長音表記

字音語は「エ列音＋」となる。

いさわ、しゅーじ せんせい に みて いたゞいた ところ が、(はしがき 5 ページ)

和語は、助動詞に「エ列音＋」の例がある。

(へ) だいいーるい の わざことば に かぎって 「ウ」だん から「べー・まい」の 二つに つゞく。たとえば、

かくべー・かくまい・のむべー・のむまい」など (95 ページ)

(5) オ列長音について

オ列長音は用例が多くみられる。字音語は「オ列音＋」となる。また、拗長音は「イ列音＋よー」となる。

◎つかいにくい どーぐ を つかッて をる の わ、 まだ、 ひらけない く
にびと の する こと である。(はしがき 1 ページ)
わが くに の これ まで の もじ・ぶんしよー わ、 まこと に、 むつか
しくて (はしがき 1 ページ)

和語も、名詞、形容詞、副詞、助動詞に「オ列音＋」が見られる。

をとーと に いゝつけて、 いもーと を はやく をこさせる。(82 ページ)
てんのーへーか こそ、 いちばん たッとー ございます。(115 ページ)

「これ わ よい もの が できた。 はやく はん に して よ に だして
みる が よかろー」(はしがき 5 ページ)
まだ、 わが くに びと の うち に わ、 そー をもって をる ひと も
(はしがき 2 ページ)

ただし、「大」「多」のようにア行オ列の長音は一貫して「をゝ」となっている。また、「とをる(通る)」「もをす(申す)」のように動詞の一部分については、「オ列音＋を」の表記がみえる。

をゝつき、ふみひこ せんせー にも みて いたゞいた ので ある。(はしがき
6 ページ)
この ほん わ、 まえ に のべた とをり の わけ で、(はしがき 7 ページ)
いしかわ、くらじ と もをす もの である。(はしがき 10 ページ)

拗長音は「イ列音+ょー」となる。

わたし わ こんにちは の しんぶん を みた が、 あなた わ まだ (こんにちは の しんぶん を) みない で しょー。(211 ページ)

以上をみていくと、長音表記については、字音語・和語ともに長音符をもちいたものに統一をはかっていることがわかる。ただし、ウ列・オ列の動詞・形容詞の一部としてあらわれる長音は長音符を使用していない。

4. 2 長音表記以外のかなづかいについて

次に、長音表記以外のかなづかいについて調査し、2. で整理した石川の記述を補足する。本資料は、漢数字以外には漢字を使用しないかな文専用文でかかっている。外来語にカタカナ表記がみられる。また、促音の表記についても「ッ」とこがきのカタカナ字体があらわれる。それ以外の文字はひらがなで書かれている。かなの字体の使用については、2. で確認した記述どおり、「ゐ・ゑ・お」はあらわれず、「ひ・へ・ほ」はハ行専用かなとなっている。これは助詞についてもあてはまる。

つかいにくい どーぐ を つかって をる の わ、 まだ、 ひらけない くに
びと の する こと である。(1 ページ)

さる が もゝたろー に むかって、「あなた わ どこ え をいで なさい
ます か」と いえば、(48 ページ)

以上のように、原則として 1 つの仮名に 2 つのよみがあてられることはない。ただし、和語で同じ仮名が続く場合は、「ゝ」「ゞ」がつかわれ、

わざことば と すけことば と の つゞき かた (93 ページ)

のように、よつがなにかかわるものについても「つづく」ではなく「つゞく」の形が見える。

これらのかなづかいを整理すると、表 1 となる。

【表1『はなしことば の きそく』のかなづかい】

よつがな	「じ」「ず」に統一 (連濁にかぎって「ぢ」「づ」があらわれる)
助詞「は」「へ」「を」	「わ」「え」「を」
ア列長音	ア列+ー
イ列長音	イ列+ー イ列+い (活用語の一部) イ列+ゝ (「言う」の連用形などの語)
ウ列長音	ウ列+ー ウ列+う (活用語の活用語尾等)
拗長音	イ列+ゅー
エ列長音	エ列+ー
オ列長音	オ列+ー オ列+を (「通る」「申す」など一部の和語) オ列+ゝ (「多い」「大きい」などの語)
拗長音	イ列+ょー

5. おわりに

石川倉次著『はなしことば の きそく』の表記について、本文の記述と、実際に本文にあらわれる表記の考察をおこなった。

本資料は平易な口語文の習得を目的にかかれた口語文典であり、そのため表記も習得がむずかしい歴史的かなづかいをもちいず、独自に工夫された表音的な表記でかかれている。

表記の特徴は、漢数字以外の漢字をつかわず、そのかわりに単語わかちがきをする。かなは「ゐ・ゑ・を」をつかわず、「は・へ・ほ」をハ行専用のかなとした上で、一字一音に整理している。そのかなづかいも連濁以外に「じ・づ」を使わず、表音的なものになっている。また、長音表記に長音符をつかっている、いわゆる棒引きかなづかいとなっているのも特徴となっている。和語の連濁以外によつがなの区別をおこなわないこと、和語も字音語も表音的表記でかかれ、エ列長音も「エ列音+ー」となることなどから2. で分析した「明治 33 年式棒引きかなづかい」よりもさらに表音的な表記法でかかれているといえる。

【参考文献】

- あべ・やすし（2010）「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」『社会言語学』10
- 柿木重宜（2013）「近代「国語」における「棒引き仮名遣い」の終焉—藤岡勝二に関わる文献学的アプローチを中心にして」『滋賀短期大学研究紀要』38
- 釘貫亨（2007）『近世仮名遣い論の研究』（名古屋大学出版会）
- 鈴木力二（1987）『伝記叢書 13 日本点字の父 石川倉次先生伝』（大空社）
- 日本点字委員会（2001）『日本点字表記法 2001年版』（日本点字委員会）
- 林弘仁（2004a）「新資料 石川倉次の『台湾学生教授日誌』をめぐって」『久留米大学大学院比較文化研究論集』（15）
- 林弘仁（2004b）「石川倉次の国語研究」『久留米大学大学院比較文化研究論集』（16）
- 山本正秀著（1865）『近代文体発生の史的研究』（岩波書店）
- 吉原秀明（2005）「文法教育における「付帯的指導」の可能性 三土・芳賀・石川の文典に見られる教育的配慮を参考に」『奈良教育大学国文』（28）

第 2 部 清国留学生を対象とした 近代日本語教育教科書類のかなづかい

第4章

松本亀次郎著『言文対照 漢訳日本文典』の かなづかい

1. はじめに

近代日本語教育のかなづかいについて、当時各分野で注目をあつめていたかなづかい改定論との関係を中心に考察する。

かなづかい改定論の発端は、歴史的かなづかいをこどもに教える困難さから、学校教育の場で教員たちが表音的なかなづかいの研究をはじめたことにある。同時に、歴史的かなづかいは、生徒児童ばかりではなく、日本語を第一言語としない学習者にとっても困難であったことが予想される。

1895（明治28）年、日本国は日清戦争に勝利し、それにより台湾を日本の国土にくみこんだ。その後、明治政府は清国留学生を大量にうけいれることとなった。このような状況をうけ高橋(1907)では、当時の口語文法の発展にはこの清国留学生への日本語教授によるところがおおきいと指摘されている¹。

（明治）三十八九年になって、清人に口語を教へたことが盛大になつてきたと同時に、口語の研究は実際的になつてきて、標準語文典が自然にそれ／＼日語教習に困りて確率されることゝなつたのは、実に嘉すべき現象といはねばならぬ。即ち日本語を清人に伝へることの事業が、日本語の勢力拡張の上に大なる関係をもつてをると同時に、自国人の間で等閑視されてゐた実地活用の生々たる口語の法則が、実際的に研究されることになつたのである。（高橋 1907：59-60）

¹ ここでは、物集高見『言文一致』、金井保三『日本俗語文典』、松下大三郎『日本俗語文典』などの国語学者による口語法書のほかに、長谷川雄太郎『日語入門』伊沢修二『東語初階』松本亀次郎『言文対照漢訳日本文典』松下大三郎『漢訳日語階梯』難波常雄『漢和対照日語文法要述』などといった日本語教材としての文典類も紹介されている。

このように、国語国字問題は国語教育と密接にかかわっていると同時に、清国留学生および台湾や朝鮮などの地でおこなわれた日本語を第一言語としないひとびとへの日本語教育との関連についても、考察する必要がある。しかしながら、国語教育とかなづかい改定論についての考察は数多くあるものの、近代日本語教育でどのようなかなづかいがおこなわれていたのか、実際の資料をもちいたかなづかいの調査はあまりすすんでいない。

そこで、近代における清国留学生への日本語教育が、当時さかんにおこなわれていたかなづかい改定論・運動とどのようにかかわっていたのか、長音表記を調査対象にとりあげて、考察していくこととする。

2. 清国留学生を対象とした日本語教育におけるかなづかい

清国留学生への日本語教育におけるかなづかいについて、国学院大学教授高橋龍雄が梅園というペンネームをつかって、『国学院雑誌』13巻2号（1907年）の彙報に「清国留学生を教へる国語仮名遣」という題で寄稿している。

清国留学生は漢字さへ見ればその意味がわかる。（略）随つて仮名遣は漢字の振仮名として、すべて発音的に用ひられてをるのが、目下東京の各清国留学生の学校で、日本語を教へてゐる人達の大抵が一致してやつてをる事である。

このように、東京の日本語教育におけるかなづかいは「発音的」なかなづかいであったことが指摘されている。しかし、「発音的」とはいつでも、具体的にどのようなものであったのか、あきらかにはなっていない。そこで、日本語教育のなかで実際にどのような表音的かなづかいがつかわれていたのか、清国留学生を対象とした日本語教育文法書である『言文対照 漢訳日本文典』のかなづかいの調査をおこなう。

本資料は、口語と文語の両方をとりあつかう文法書であり、文語をまなぶにあたっては、字音かなづかいを含む歴史的かなづかいの知識が必要となろう。また、当時世間でひろくつかわれていた歴史的かなづかいについては、和語（特に用言）にかぎれば、活用や音便などといった文法の知識が、「正しい」表記を習得することのたすけになる。このように文法と表記法はお互いに無関係なものではなく、大きくかかわりあっている。

このような状況で、日本語を第一言語としない学習者に口語と文語の文法を同時に解説する場合、その表記法はどのようなものであるか、調査することには意味があるとかんがえられる。

当時は教育関係者などを中心にななづかい改定論が議論され、実際の学校教育など、一部の分野で棒引きかなづかいなどの表音的なかなづかいが採用されていたという時代の背景がある。その一方、実際の生活では歴史的かなづかいがひろくおこなわれており、留学生も歴史的仮名遣でかかれた文書にめをとおす機会はおおかつたものとかんがえられる。

このような観点から、本発表では、松本亀次郎の日本語学習者向けの文法書の表記について、考察していくこととする。

3. 『言文対照 漢訳日本文典』について

3. 1 松本亀次郎について

本資料の著者松本亀次郎は、1866（慶応 2）年に生まれ、小学校の国語教師、校長、師範学校教授をつとめ、1904（明治 36）年に上京し、加納治五郎が創立した日本語学校「宏文学院」で教鞭をとり、1907（明治 40）年から 4 年間の北京大学の教授をへて、1914（大正 3）年に日本語学校「東亜高等予備学校」を開校する。それより 1931（昭和 6）年に名誉教頭となるまで、日本語教育にかかわりつづけた。また、松本はおおくの日本語教材を編纂し、近代日本語教育におおきく影響をあたえた。

3. 2 『言文対照 漢訳日本文典』について

『言文対照 漢訳日本文典』は²、1904（明治 37）年に刊行された。本文は漢字カタカナ混じり文で書かれており、漢字には右ルビが付されている。この資料についてさねとう（1981）は次のようにのべている。

1903（明治 26）年 4 月、松本は佐賀師範の教諭をやめて、宏文学院の教授となった。彼は熱心に日本語の教育にあたりとおもに《言文対照・漢訳日本文典》（1904 年）を出版した。（略）広く中国でもよまれた。教え子である留学生がよろこんで愛読したことは、いうまでもなからう。この本はついに 40 版をかさねたので

² 書誌情報については、詳細な解題である増田（2001）を参照した。

ある。(さねとう 1981:343)

このように、本資料は清国留学生にひろくしられた文法書であり、松本亀次郎の代表作の一つである。

今回の調査は、国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵『言文対照 漢訳日本文典』(第3版)を調査資料とした。図表をのぞく本文中から、かながき箇所と漢字のルビのなかで、長音の表記に相当するものを用例として採取した。

用例をあげるさい、ルビは漢字の後ろに丸括弧 () に入れてしめた。

4. 『言文対照 漢訳日本文典』のかなづかい

本資料のかなづかいについてまとめると、助詞は「は」「へ」「を」がもちいられており、よつがなは和語・字音語ともに歴史的かなづかい・字音かなづかいと同様であった。長音表記について、和語・字音語にわけて用例をしめすと、表1のとおりである。

【表 1】

	表記形	和語	字音語
ア列	ア列+あ	10	
イ列	イ列+い	24	
ウ列	イ列+ふ	33	
	ウ列+う		2
	ウ列+一		104
	ウ列+ふ	3	
拗長音	イ列+ゆー		198
	イ列+う	1	
	イ列+ゆう		1
エ列	エ列+一		1
	エ列+イ	4	516
オ列	オ列+一	4	918
	ア列+う	10	3
	ア列+ふ	16	
	ア列+ふ	3	
拗長音	イ列+よー	3	470
	イ列+よう		2
	エ列+う	6	

この表から、和語・字音語で表記形に分布があることがわかる。とくに、ウ列・オ列の字音語の長音表記には長音符がつかわれる傾向があるが、和語にかんしてはさまざまな表

記があらわれている。

そこで、実際の用例を、和語・字音語の語の系統ごとに考察していくこととする。

4. 1 和語の長音表記

和語の長音表記は、以下のとおりになる。

ア列

ア列長音は「ア列+ア」の形であられる。

アア悲（カナ）シイカナ。（「第三編 品詞詳説 感嘆詞」373p）

イ列

イ列長音は「イ列+イ」の形であられる。

寧ろ、紛々然トシテヲル方（ホ一）ガ宜（ヨロ）シイ。（「第三編 品詞詳説形容詞」157p）

このように、すべての例が形容詞の終止連体形となっている。

ウ列

ウ列長音は「イ列+フ」と「ウ列+フ」の例が表れる。「イ列+フ」は、

今日（コンニチ）学（マナ）バズトモ、来日（ライジツ）有（ア）リト言（イ）フ勿（ナカ）レ。（「第二編 文章概説」40p）

このように、動詞「言ふ」の終止連体形であられる。これは歴史的かなづかいと合致する。

「ウ列+ウ」は、「夕（ユフ）」であられる。歴史的かなづかいと合致する。

春（ハル）サレバ、山（ヤマ）モト霞（カス）ム、水無瀬川（ミナセカハ）。夕（ユ）フベ）ハ秋ト何（ナニ）思（オモ）ヒケム（「第三編 品詞詳説 助動詞」263p）

ウ列拗長音は「イ列+ウ」の形であられる。形容詞の連用形ウ音便がこれにあたる。

風ガ涼(シク/シウ)吹ク。(「第三編 品詞詳説 形容詞」128p)

エ列

エ列長音は「エ列+イ」の形であられる。

ハイヘイハ、近世(キンセイ)ノ口語(コゴ)ニ於(オイ)テ最(モットモ)、普通(フツウ)ニ用(モチ)フル諾辞(ダクジ)ナリ。(「第三編 品詞詳説 感嘆詞」383p)

オ列

オ列長音は「ア列+ウ」「ア列+フ」「オ列+フ」「オ列+ホ」「オ列+ー」など、さまざまな形であられる。

「ア列+ウ」は

推(オ)シテ御(オ)尋(タツ)ネ申(マウ)シマスガ(「第三編 品詞詳説 助詞」326p)

特別(トクベツ)ニ恩顧(オンコ)ヲ蒙(カウム)ル。(「第三編 品詞詳説 副詞」359p)

日本(ニホン)ノ東京(トーキョー)ノ麴町(ユージ/カウジマチ)ノ二丁目(ニチヨメ)(「第三編 品詞詳説 助詞」287p)

このように、「申(マウ)ス」「蒙(カウム)ル」「麴(カウジ)」の例がある。いずれも歴史的かなづかいと合致する。また、「麴町」には「ユージ」と「カウジ」の二通りのルビが併記されている。

「ア列+フ」は、「向(ムカ)フ」、「候(サフラフ)」の例である。歴史的かなづかいと合致する。

向（ムカフ）見（ミ）ズノ猪（井ノシン）武者（ムシヤ）。（「第三編 品詞詳説 助動詞」220p）

メデタク存（ゾン）ジ候（サフラフ）。（「第三編 品詞詳説 助動詞」199p）

「オ列+フ」は「昨日（キノフ）という形で表れる。歴史的かなづかいと合致する。

昨日（キノフ）カ花ノ散（チ）ルヲ惜（ヲシ）ミシ。（「第三編 品詞詳説 助詞」325p）

「オ列+ホ」は「大（オホ）イ」「多（オホ）イ」「遠（トホ）イ」「通（トホ）リ」の形であられる。歴史的かなづかいと合致する。

且（カツ）ナムハ多（オホ）ク文章（ブンシヨー）ニ用（モチ）ヒテ、（「第三編 品詞詳説 助詞」321p）

更（サラ）ニ、大（オホイ）ナル発達（ハツタツ）ヲ促（ウナガ）ス（「第三編 品詞詳説 助動詞」216p）

日（ヒ）暮（ク）レテ道（ミチ）遠（トホ）シ。（「第三編 品詞詳説 助詞」347p）
山ノ通（トホ）リナ鋼鉄艦（「第三編 品詞詳説 助動詞」280p）

「オ列+ー」は、「大（オー）イ」「申（モー）ス」「麴（コージ）」という形であられる。これは歴史的かなづかいとは合致せず、長音符を使った長音表記であるが、全体から見た数は少なく、例外的な表記であるといえる。

重盛（シゲモリ）ガ申（モー）シ状（ジョー）ヲ、具（ツブサ）ニ、聞（キコ）シ（メ）サレヨ。（「第三編 品詞詳説 副詞」367p）

「大」「申」には表記のゆれがあり、歴史的かなづかいに合致する「申（マウ）ス」（三例）「大（オホ）イニ」（一例）、長音符による長音表記は、「モース」（二例）、「大（オー）」（一例）である。

また、「申」「候」にかんしては、長音符による長音表記と、歴史的かなづかいとが併

記される例がある。

御（オン）伺（ウカガ）ヒ申シ度（タク）候（ソーロー/サブラフ）。

御（オン）伺（ウカガ）ヒ申（モウ/マウ）シタウゴザイマス。（「第三編 品詞詳説 助動詞」279p）

オ列拗長音は、助動詞「（デ）セウ」、「（デ）シヨー」、「ウ」で、「イ列+ヨー」、「エ列+ウ」の形であられる。両形が併記されている例も四例ある。

私ハ、アナタト一緒（イツシヨ）ニ、アノ人（ヒト）ヲ尋（タヅ）ネマセウ（シヨー）。
（「第三編 品詞詳説 代名詞」50p）

ドリヤ、一番（イチバン）手並（テナミ）ヲ見（ミ）セテ呉（ク）レウ（リヨー）。
（「第三編 品詞詳説 感嘆詞」375p）

以上のように、和語の長音は、原則として歴史的かなづかいにそって表記されていることがわかる。長音符を使った長音表記はオ列に七例あるが、そのうち五例が歴史的かなづかいとの併記であるの例である。歴史的かなづかいと表音的表記法の二通りの表記を示すという留学生への配慮がみられる。

4. 2 字音語の長音表記

字音語の長音表記は、ア列とイ列には用例がみられない。

エ列長音は、ほとんどが「エ列+イ」の例である。

右（ミギ）ノ例（レイ）ノノガツハ上（カミ）の名詞（メイシ）ニ因（ヨ）ツテ、
下（シモ）ニ在（ア）ル名詞（メイシ）ノ意義（イギ）ヲ定限（テイゲン）用（ヨー）
ヲ為（ナ）ス者（モノ）ナリ。（「第三編 品詞詳説 助詞」287p）

「エ列+一」の例が1例確認された。

朝廷 (チョーテ)、賢能ノ士ヲ用フ (「第三編 品詞詳説 動詞」73p)

ウ列・オ列長音も同様に、長音表記に長音符を使用する。ウ列長音表記はほとんどのものが「ウ列+ー」となる。

或 (アルヒ) ハ、汎 (ヒロ) ク、数感情 (スカンジョー) ニ通 (ツ) ジテ用 (モチ) フル者 (モノ) アリ。(「第三編 品詞詳説 感嘆詞」372p)

例外的に、「普通 (フツウ)」「数 (スウ)」と、「ウ列+ウ」となる例がある。

最 (モツトモ) 普通 (フツウ) ナル者 (モノ)、大略 (タイリヤク) 左 (サ) ノ如 (ゴト) シ。(「第三編 品詞詳説 動詞」85p)

度 (ド)、量 (リョー)、衡 (コウ)、貨幣 (カヘイ) 等 (トウ) ハ、多 (オホ) ク漢字音 (カンジオン) 数詞 (スウシ) ヲ用 (モチ) フ。(「第三編 品詞詳説 名詞」48p)

ただし、「普通 (フツウ)」が17例、「数 (スウ)」8例となっており、同一語内で、長音符による長音表記が優勢となっている。

ウ列拗長音は「イ列+ユ」となる。

十室 (ジユウシツ) ノ邑 (ユウ) ニ必 (カナラズ) 忠信 (チユウシン)、丘 (キユウ) ガ如 (ゴト) キ者 (モノ)、有 (ア) ラン。(「第三編 品詞詳説 助動詞」224p)

「イ列+ユ」となる例が1例ある。

一個年半 (イツカネンハン)、日本 (ニホン) ニ留学 (リユウガク) セリ。(「第三編品詞詳説 助詞」298p)

ただし、「留 (リユ)」となるものは7例あり、長音符を使用した長音表記が優勢である。

オ列長音は「オ列＋」となる。

名詞（メイシ）ト同様（ドーヨー）ノ効用（コーヨー）ヲ為（ナ）スコトアリ。（「第三編 品詞詳説 助詞」100p）

ただし、助動詞「様（ヨウ）ダ」に、「ア列＋ウ」となるものが3例ある。

遠イ処（トコロ）ノ帆（ホ）ハ坐（スワ）ツテ居（井）ルヤウデ、近（チカ）イ処（トコロ）ノ帆ハ歩（アル）クヤウダ。（「第三編 品詞詳説 助動詞」280p）

これは字音かなづかいと合致するが、「様（ヨー）ダ」となるものは8例あり、長音符を使用した表記が優勢となっている。

オ列拗長音は「イ列＋ヨー」となる。

長子（チヨーシ）父（チチ）ニ次子（ジシ）ノ近況（キンキヨー）ヲ問（ト）ハシメル。（「第三編 品詞詳説 助動詞」199p）

「イ列＋ヨウ」となるものに、「推量（スイリヨウ）」、「望遠鏡（ボーエンキョウ）」の2例がある。

夫（ソレ）ハ望遠鏡（ボーエンキョウ）ナリ。（「第三編 代名詞」57p）

未定（ミテイ）、願望（ガンボー）、推量（スイリヨウ）等（トー）ノ条件（ジヨーケン）ニ照応（シヨーオー）スル者ナリ。（「第三編 品詞詳説 助詞」113p）

「鏡」は他に用例がない。「量」は、「量（リヨー）」となるものが14例あり、長音符での表記が優勢となっている。

以上のように、ウ列長音とオ列長音は長音表記に長音符を使用しており、字音かなづかいと合致しない。わずかにゆれのみられるものも、「様（ヤウ）ダ」3例を除くと、字音かなづかいと一致しない表音的表記法になっている。これらを例外的な表記の不統一と考えれば、本資料で長音表記は、長音符を使用した表音的な表記法で統一をはかっているよ

うにみえる。

5. おわりに

以上のように、『言文対照 漢訳日本文典』は、明治 33 年式棒引きかなづかいとの共通性をもつかなづかいでかかれています。

明治 33 年式棒引きかなづかいと共通する特徴として、和語と字音語を区別し、和語は歴史的かなづかい、字音語は表音的表記法、というように表記法に 2 つの基準が同時に存在することである。また、四つ仮名の区別をるところ、や、ア・ウ・オ列長音表記に長音符を使いながら、字音語エ列長音が「エ列+イ」となっているという特徴も共通する。これらをまとめると以下のようなになる。

1. 和語と字音語と外来語の表記に違いがある。
2. 和語は歴史的かなづかいに準ずる
3. 字音語は原則として長音符を使用した表音的な表記法である。具体的かなづかいは以下のとおりである。

ウ列	ウ列＋ー
拗長音	イ列＋ユー
エ列	エ列＋イ
オ列	オ列＋ー
拗長音	イ列＋ヨー

このように、近代清国留学生を対象とした日本語教育教材についても、明治 33 年式棒引きかなづかいと非常に共通点のおおひかなづかいでかかれていることがわかった。和語の歴史的かなづかいは、名詞用言は音便や活用など文法の知識があれば「正しい」表記を推察することが可能であり、習得の難しさは、漢字一字ごとにかなづかいを丸暗記しなければいけない字音かなづかいほどではない。そして、文語文をまなぶときには、歴史的かなづかいは活用の理解のたすけともなる。

しかし、字音仮名かなづかいは、ルビを付さない漢字かなまじり文においては、漢字にかくれて、ルビなどをのぞくと表出することはすくない。正書法としての「正しい」かな

づかいが求められるのは和語が中心であり、字音語については、表記法よりはその字をどう発音するかが問題となる。

本資料のかなづかいは、語の系統によって表記の方針が変わるという複雑そうに見えるものではあるが、漢字知識をもち、ある程度和語と字音語の区別をすることができるだろう清国留学生にとっては、和語にかんしては文語文の習得の助けになる歴史的かなづかいをたもち、字音語ではよみをしめす表音的表記法にきりかえる方法には一定の合理性があったことはかんがえられる。

また、字音かなづかいがいっさいあられもないわけではなく、ごく一部ではあるが、表音的なかなづかいと字音かなづかいを併記するという形をしめすことにより、学習者へ字音かなづかいの紹介をしている。ここから、本資料のかなづかいは、表音的なかなづかいのところみをおこなっているとはいえ、学習者が歴史的かなづかいでかかれた漢字かなまじり文を修得するための配慮がされたかなづかいであるとかんがえられる。

【参考文献】

さねとうけいしゅう(1981)『中国留学生史談』(第一書房)

高橋龍雄(1907)「過去四十年間における国語学界の概観」『国学院雑誌』13-2

長谷川恒雄(1993)「戦前日本国内の日本語教育」『講座日本語と日本語教育15 日本語教育の歴史』(明治書院)

増田光司(2001)「『言文対照漢訳日本文典』解題 その特徴および文法を中心として」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』31

第5章 松本亀次郎著『漢訳 日本語会話教科書』の かなづかい

1. はじめに

第4章で、清国留学生を対象とした日本語文法書、松本亀次郎著『言文対照 日本語文典』のかなづかいを調査した。調査の結果、和語に歴史的かなづかい、字音語の長音表記に棒引きかなづかいという折衷的なかなづかいを採用していた。この字音語にのみ棒引きかなづかいをもちいる折衷的なかなづかいという点は、この資料が刊行された当時におこなわれていた明治33年棒引きかなづかいと共通する。それでは、明治33年棒引きかなづかいが学校教育で廃止され、歴史的かなづかいにもどった後の、日本語教育の教材類のかなづかいは、どのようなものであったのか。大正期に刊行された、松本の著書『漢訳 日本語会話教科書』のかなづかいの調査をおこなう。

2. 『漢訳 日本語会話教科書』について

『漢訳 日本語会話教科書』は、1914（大正3）年に東京神田の光栄館書店から刊行され、昭和期にはいっても版をかさねた会話型教科書である。緒言には、加納治五郎の依頼を受け宏文学院の教科書として編纂したものであるとするされている。「漢訳」とあるように二段組みで上段に日本語、下段に中国語の会話が対訳されており、日本語は松本自身がかき、三矢重松・松下大三郎らが校閲をおこなっている。1ページは9行で日本語は漢字カタカナ交じり文で表記されていて、多くの漢字に右ルビが付与されている。外来語もカタカナで表記されているが、フォントを太くして単語のきれめをわかりやすくしている。構成は「第一課教場用語（キョウジョウヨウゴ）」から「第四九課新年（シンネン）」までの253ページと、巻末に付録の「書簡文語用例」がある。

今回、国学院大学蔵本松本亀次郎著『漢訳 日本語会話教科書』（初版）を資料とし、巻末付録をのぞいた本文のかな表記、ルビから和語・字音語の長音表記にあたる用例を採取した（表1）。助詞の表記は「は」「へ」「を」となっており、よつがなにかんしては和語・字音語ともに歴史的かなづかい・字音かなづかいと同様に「じ・ぢ／ず・づ」のつ

かいわけがなされていた。

3. 『漢訳 日本語会話教科書』のかなづかい

採取した用例を、和語・字音語・にわけて整理すると表1となる。

【表1 和語と字音語の長音表記】

	表記形	和語	字音語
ア列	ア列+ア	21	
イ列	イ列+イ	121	
	イ列+ヒ	8	
ウ列	イ列+フ	24	2
	ウ列+ウ	4	35
	ウ列+フ	4	
拗長音	イ列+ウ	62	1
	イ列+ユフ		1
	イ列+ユウ		100
エ列	エ列+イ	47	135
オ列	ア列+ウ	183	6
	ア列+フ	3	
	オ列+ウ	173	415
	オ列+オ	1	
	オ列+フ	1	
	オ列+ホ	41	
	オ列+ヲ	3	
拗長音	イ列+ヤウ		5
	イ列+ヨウ		207
	エ列+ウ	161	

ここから、以下の2点がわかる。

- (1) 字音語・和語では長音を表記はほとんどがかなで表記されている。
 - (2) ウ列音・オ列音の和語と字音語の長音表記の分布がことなっている
- 実際にどのような長音表記が行われているのか、用例をとりあげて考察していくこととする。

用例は漢字の旧字体は新字体にあらため、また振りかなは漢字のあとに括弧に入れる。

3. 1 和語の長音表記について

和語は、同一語で表記のゆれはみられなかった。

ア列長音

ア列長音は和語にのみあらわれる。用例もおおくはない。「アア」「サア」「ナア」「マア」「ヤア」とすべてが感動詞の例となっており、「ア列+ア」となる。

イ列長音

「イ列+イ」となるものは、感動詞「イイエ」「イイヤ」(1)と、形容詞「イイ」、そして形容詞のイ音便となるもの「宜(ヨロ)シイ」「新(アタラ)シイ」「忙(イソガ)シイ」「苦(クル)シイ」「珍(メヅ)ラシイ」「巖(キビ)シイ」があった。「イ列+ひ」となるものは、語の一部「小(チヒ)サイ」「強(シ)ヒテ」、動詞連用形「云(イ)ヒ」であった。すべて歴史的かなづかいと合致する。

ウ列長音

「イ列+フ」は、動詞「云(イ)フ」がすべてである。「ウ列+ウ」は形容詞ウ音便「暑(アツ)ウ」「寒(サム)ウ」「悪(ワル)ウ」にみられた。「ウ列+フ」はすべて「タ(ユフ)」である。幼長音は「イ列+ウ」が形容詞ウ音便「優(ヤサ)シウ」「宜(ヨロ)シウ」「ムヅカシウ」にあらわれる。歴史的かなづかいに合致する。

エ列長音

エ列長音はすべて「エ列+イ」の形であらわれる。動詞「春めく」連用形「春(ハル)

メイテ」、名詞「姐（ネイ）サン」、感動詞「エイ」「ヘイ」、終助詞「ネイ」が見える。
「姐（ネイ）サン」は、

来客 姐（ネイ）サン、一寸（チヨツト）電話（デンワ）ヲカケテ下サイ。
婢 何方（ドチラ）ヘカケルノデゴザイマスカ。（157p）

このように、使用人に呼びかける場面で使われている。また、「エイ」は4例あるが、

甲。 コレハ九段（クダン）ノ佐藤（サトウ）デスネイ。
乙。 エイ、九段ノ佐藤デ、写（ウツ）シタノデゴザイマス。（126p）

質問に肯定の返事をする感動詞である。「ヘイ」は、四例あるが、

客。 コレデ宜（ヨロ）シイカネ。
床屋。 ヘイ、宜（ヨロ）シウゴザイマス。（37p）

このように、すべて商売人から客への返事となっている。

オ列長音

オ列長音は用例がおおく、表記形もさまざまな形であられる。ことなり語をすべてあげると、「ア列+ウ」は、名詞「神戸（カウベ）」「向（ム）カウ」「向島（ムカウジマ）」、動詞の一部「蒙（カウム）ル」「申（マウ）ス」、形容詞連用形ウ音便「有（ア）リ難（ガタ）ウ」「危（アブ）ナウ」「旨（ウマ）ウ」「早（ハヤ）ウ」、活用語未然形+推量の助動詞「行（イ）カウ」「置（オ）カウ」「聞（キ）カウ」「着（ツ）カウ」「遣（ヤ）ラウ」「無（ナ）カラウ」「ヨカラウ」「早（ハヤ）カラウ」、助動詞「たい」連用形ウ音便「頂戴（チヨウダイ）シタウゴザイマス」、副詞「サウ」、感動詞「サウ」がある。「ア列+ふ」は「仰（アフム）ク」「抛（ハフ）ル」であった。「オ列+ウ」は形容詞連用形ウ音便「遅（オソ）ウ」、副詞「ドウ」「ドウゾ」「ドウカ」「モウ」、「オ列+ふ」は「昨日（キノフ）」、「オ列+ホ」は「大（オホ）キイ」「多（オホ）イ」「通（トホ）リ（連濁でドホリ）」の3語であられ、「大久保（オホクボ）」「大森（オホモリ）」

「大島（オホシマ）」といった地名の例もある。「オ列+フ」は「十（トフ）」がある。幼長音は、「エ列+ウ」は、「～マセウ」「～デセウ」であり、「エ列+ふ」は「今日（ケフ）」である。オ列長音のかなづかいも、歴史的かなづかいと合致する。

3. 2 字音語の長音表記について

字音語については、同一語で表記のゆれがみられるものがあった。最初に、それらの語についてとりあげる。括弧内に字音かなづかいをしめた。

ウ列音

急〔キフ〕	キウ（1例・193p）	キユウ（5例）
十〔ジフ〕	ジウ（1例・202p）	ジユウ（9例）
注〔チュウ〕	チウ（1例・239p）	チュウ（5例）
留〔リウ〕	リウ（1例・212p）	リュウ（7例）

ウ列音の表記の揺れは、「イ列+ウ」と「イ列+ユウ」の対立となっていて、どの例でも「イ列+ウ」が1例ずつである。

オ列音

上〔ジャウ〕	ジャウ（2例・171・181p）	ジョウ（12例）
定〔ヂャウ〕	ジャウ（1例・222p）	ジョウ（3例）
入〔ニフ〕	ニユフ（1例・159p）	ニユウ（3例）
方〔ハウ〕	ハウ（2例・170p）	ホウ（27例）
様〔ヤウ〕	ヨー（2例・149p・180p）	ヤウ（5例・180~248p）
	ヨウ（126例）	

オ列音の字音語で表記にゆれのみられるものは、「入」以外は開合にかかわっている。開音の字に、開音表記（ア列+ウ）と合音表記（オ列+ウ）の両方の表記形があらわれるが、いずれも合音表記が優勢である。「様」には長音符「ー」の用例もみられる。これは「サヨーデゴザイマス。」（149p）「サヨーデス」（170p）と、カタカナ表記された場合にみられる。また、「ヤウ」があらわれるのは5例中4例が助動詞「様だ」の形であられる。

番頭。（略）コレハ大島緋（オホシマガスリ）デゴザイマス、
客。洗（アラ）ツテモ 褪（サ）メル様（ヤウ）ナコトハアリマセンカ

(119p 呉服屋)

ただし、「様だ」ではない用例も1例ある。

客。日本(ニホン)ノ学生(ガクセイ)ト、全(マツタ)ク同様(ドウヤウ)
デナクテモ宜(ヨロ)シイノデスカラ、(210p)

また、「様だ」であっても「ヨウ」と表記してある例もおおくあり、「ヤウ」と「ヨウ」の表記にかきわけがあるわけではない。

客。色(イロ)ガ変(カハ)ツタリ、糊(ノリ)ガ浮(ウ)イタリスル様(ヨウ)ナ
コトハアリマセンカ。(43p 買物(カヒモノ)ノ会話(カイワ))

エ列長音では、すべて「エ列+イ」なる。(英・泳・影・軽・敬・計・声・米・定・静
・星・情・鈴・制・姓・成・清・生・西・精・勢・抵・丁・停・訂・鄭・庭・程・寧・閉
・丙・陞・名・例・礼・冷・麗)

ウ列長音では、「ウ列+ウ」の表記であらわれた(崇・数・痛・風・空・友・有・遊・
郵・猶)幼長音では「ウ列+ユウ」となる。(休・吸・牛・旧・窮・終・周・修・習・週
・拾・住・中・昼・乳・流)

オ列長音は「オ列+ウ」となる。(口・甲・公・光・好・交・功・高・皇・校・紅・効
・候・喉・構・合・向・号・相・想・忽・僧・燥・窓・頭・贈・像・臟・当・盜・等・灯
・答・東・統・陶・逗・套・藤・厚・痘・到・同・道・胴・動・腦・放・法・呆・包・報
・望・暴・抱・冒・帽・用・容・要・洋・養・曜・勞・老)

幼長音は「イ列+ヨウ」となる。(京・教・強・興・梗・郷・行・形・業・小・少・生
・正・勝・症・証・承・省・丈・商・紹・障・肖・衝・状・常・場・上・定・丁・町・朝
・長・張・腸・趙・重・頂・畳・蒸・尿・表・標・評・病・瓢・妙・明・涼・寮・亮・両
・療)

ウ列長音とオ列長音は基本的には字音かなづかいと合致しないものがおおく、ゆれのみ
られるものを誤植による不統一とすると、表音的な表記に統一をはかっていると判断でき
る。『漢訳日本語会話教科書』の字音語長音かなづかいをまとめると、以下のようになる。

ウ列 ウ列＋ウ
 拗長音 ウ列＋ユウ
エ列 エ列＋イ
オ列 オ列＋ウ
 拗長音 イ列＋ヨウ

これは、明治 33 年式棒引きかなづかいを改定して、長音表記に長音符ををつかわずにかなをもちいるとした、

4. おわりに

本資料のかなづかいは、和語と字音語とで方針にことなりがあり、和語は歴史的かなづかいで表記されている。字音語のかなづかいは、表音的でありつつ、長音符をもちいていない点で、明治 38 年文部省かなづかい諮問案（改訂仮名遣案）にたいする国語調査委員会答申¹によりだされたかなづかいと共通するものである。しかし、国語調査委員会答申は、和語と字音語の語の系統による表記の区別はない。和語と字音語の区別をしているのは、むしろ明治 33 年式棒引きかなづかいの性質と共通する。『言文対照 漢訳日本文典』が刊行当時学校教育でおこなわれていた明治 33 年式とほぼ同様のかなづかいでかかれたのにたいして、学校教育で採用されていたかなづかいが歴史的かなづかいにもどったのちの刊行である本資料では、明治 33 年式棒引きかなづかいをしたじきとしつつ、長音符での長音表記をさけ、かなで長音表記をおこなった折衷的なかなづかいを採用していたのではないかとかんがえられる。

¹ くわしくは本研究 1 章 4. 2 でのべた。

第6章

清国留学生による日本語教科書『日語新編』の かなづかい

1. はじめに

4章と5章で、松本亀次郎によってかかれた日本語教材のかなづかいについて調査した。明治33年式棒引きかなづかいが学校教育に採用されていた時期に刊行された『漢訳日本文典』は、明治33年式棒引きかなづかいとほぼ同様のかなづかいでかかれていた。そして、明治33年式棒引きかなづかいが廃止された後に刊行された『言文対照 漢訳日本語会話教科書』は、長音表記に長音符をもちいないものの、和語と字音語を区別し、和語には歴史的かなづかい、字音語に表音的なかなづかいをもちいる折衷的なかなづかいという点で、明治33年式棒引きかなづかいの影響がみられるかなづかいであった。

6章では、学習者である清国留学生自身によってかかれた日本語教科書である『日語新編』のかなづかいについて調査する。

『日語新編』は、高橋（1907）のなかで口語文法書として簡単にふれられている。

右の外、清人の著したもので、東語完璧、日語全璧、東語簡要、東語正規、日語新編、日本俗語文典（呉初孟合著）などいろ／＼あるが、要するに助詞の用法と会話篇に過ぎないので、文法の条には間違も多いから、これはすべて省くこととした。（高橋 1907：56）

2. 『日語新編』について

調査した資料は、国学院大学蔵『日語新編』である。扉に寄贈者高橋龍雄とされるされている。奥付をみると、葉良・李賡相の合書である。1903（光緒31）年に留学生会館から発行されている。全239ページで、中国語による序言・例言がある。全4編から構成されて

おり、第一編音韻之部、第二編語法の部、第三編と第四編が会話之部となっている。会話の部は全部で40課ある。二列組みで一ページが12行、上段には中国語があり、下段に日本語訳がある。漢字カタカナまじり文で書かれていて、右ルビで総ルビが付されている。

音韻・語法・語彙などの説明部分をのぞき、第三編および第四編の会話之部を資料として、そこにあらわれるかなづかいについて、長音表記を中心に調査をおこなった。

3. 『日語新編』のかなづかい

調査の結果、『日語新編』の長音表記には

- (1) 長音符「ー」をもちいたもの
- (2) 歴史的かなづかい・字音かなづかいをもちいたもの
- (3) それ以外の表記で長音表記をおこなっているもの

この三種類の長音表記の方針がみられた。これらにほとんど分布はみられず、表音的なかなづかいが前の方の課に多く、習熟するにつれて複雑な歴史的かなづかいを使用するといったような方針があるようにはみえない。唯一、助動詞「ショー／セウ」に分布があった。

①アノ人（ヒト）ハ何処（ドコ）ノ人（ヒト）デスカ

私（ワタシ）ハ知（シ）リマセン何処（ドコ）ノ人（ヒト）デセウ （76p・11）

②自重自尊（ジジュウジソン）ハ時（トキ）ニ因（ヨ）ッテ傲慢（ゴマン）ノ様（ヨー）

ニ見（ミ）エマスガ余（アマ）リソソカシイヨリモ好（ヨ）イデショー （194p・9）

このように、「ショー」と「セウ」の両形がみられる。「セウ」は初出が76ページとはやい段階から、章の終わりまでつかわれつづける。用例数も74例と優勢となっている。「ショー」は、本文中の194ページから238ページにのみあらわれ、用例数は31例であった。この分布は、長音符を使用した表音的なかなづかいが、歴史的かなづかいよりおそく出現していることになり、日本語学習者にたいする配慮のためであるとはかんがえにくい。

2. 2. 1 和語の長音表記

『日語新編』にあらわれる長音表記のなかの和語について、列ごとにまとめる。

ア列

ア列長音の和語については「ア列+ア」、「ア列+ー」の二つの形があった。「御母様（オカアサン）」と、感動詞の「アー（2例）」「サー（5例）」「ヤー（2例）」「ハハー（1例）」「マア（1例）」「マアマア（2例）」であった。

感動詞は、「マア」「マアマア」以外はすべて長音符を使用した「ア列+ー」であった。

イ列

イ列長音の用例は和語では感動詞「イーエ」（3例）に「イ列+ー」の形があらわれる。

形容詞連体・終止形「六ヶ敷（ムツカ）シイ（3例）」「疚（ヤマ）シイ（1例）」「宜（ヨロ）シイ（14例）」と、動詞連用形「聞（キ）イ」はすべて「イ列+イ」となっている。また、形容詞語幹「小（チイ）サイ（一例）」がある。歴史的かなづかいでは「チヒサイ」なるところであるが、表音的かなづかいとなっている。

表記のゆれのみられるものとして、動詞「言フ」に「イイ」（イ列+イ）と「イヒ」（イ列+ヒ）の両形がみられた。用例数は、歴史的かなづかいと一致する「イヒ」が七例とおおく、「イイ」は二例であった。また、「用フ」にはイ列+ヒ、イ列+キがある。歴史的かなづかいではワ行活用の「用キ」であるが、慣用で広く「用ヒ」がつかわれていたこともあり、「用ヒ」が5例とおおく、「用キ」は2例であった。表音的な「イ列+イ」のかたちはみられなかった。

ウ列

ウ列長音は「ウ列+ー」、「ウ列+ウ」、拗長音は「イ列+ウ」、「イ列+フ」がみられる。名詞の「夕」に「夕方（ユーガタ）」「夕日（ユフヒ）」と、「ユー」と「ユフ」の両形が一例ずつみられる。また、ハ行動詞も「吸（ス）ウ（3例）」「救（スク）フ（1例）」「拭（ヌグ）フ（1例）」「言（イ）フ（25例）」「言（ユー）（1例）」と、「ウ列+フ」、「ウ列+ウ」、「ウ列+ー」が見られる。「言フ」には「ユー」と「イフ」の両形が見られるが、「イフ」が31例とほとんどで、「ユー」は1例しかない。また、連体詞「斯如」にも表記のゆれがみられた。「如斯（コウユフ）（2例）」「如斯（コーユー）（2例）」となる。他に、形容詞終止連体形に「惜シウ（1例）」と「涼シウ（1例）」がみられた。

エ列

エ列長音は「姉（ネー）サン」1語のみである。長音符が使われている。また、「姉（ネー）サン」は和語ではあるものの、明治33年式棒引きかなづかいでかかれた第一期国定教科書でも棒引きかなづかいで表記されている。

オ列

オ列長音は、「オ列＋ー」、「オ列＋ウ」、「ア列＋フ」、「ア列＋ウ」、「オ列＋フ」、「オ列＋ホ」となっており、拗長音は「エ列＋ウ」、「エ列＋フ」の形があった。

このなかで、名詞は「今日」に、「キョー」（1例）と「ケフ」（1例）がみられた。また地名の用例もある。「神戸（コーベ）」（1例）

ハ行動詞（補助動詞）の終止・連体形「思（オモ）フ」（7例）、「遇（ア）フ」（1例）、「給・賜（タマ）フ」（3例）、「買（カ）フ」（1例）はすべて歴史的かなづかいと一致する。動詞（補助動詞）未然形＋助動詞ウは、「帰（カヘ）ラウ」（1例）、「行（ユ）カウ」（3例）「話（ハナ）サウ」（1例）となっている。

動詞（補助動詞）の一部では、「通（トホ）リ」（8例）が歴史的かなづかいと合致する例である。この語の表記のゆれはみられなかった。ただし、「蒙（コウム）リ」（1例）「設（モーケ）ル」（1例）といった、歴史的かなづかいに合致しないものもある。また、表記にゆれのみられるものとして、「申す」がある。「申（モー）ス」（11例）、「申（モウ）ス」（2例）である。長音符をもちいる「モース」が優勢である。どちらも歴史的かなづかいには合致しない。

また、形容詞・形容動詞の一部として、「多（オホ）イ」（8例）、「大（オホ）イニ」（2例）がある。これは歴史的かなづかいと一致する。形容詞終止連体形に「宜（ヨ）ウ」（4例）、「広（ヒロ）ウ」（1例）、「晩（オソ）ウ」（1例）がある。すべて「オ列＋ウ」の形となっている。

助動詞では、「サウ」（1例）と、表記のゆれの見られるものに前述した「ショー」（31例）と「セウ」（74例）、また「ダラウ」（2例）と「ダロー」（3例）がある。

副詞は、表記にゆれの見られるものが多い。「モー」（23例）と「モウ」（4例）、「如斯（コー）」と（2例）「カウ」（1例）、「何（ドー）」（17例）と「何（ドウ）」（16例）、「何卒（ドーズ）」（4例）と「何卒（ドウゾ）」（18例）、「ドーモ」（1例）と「ドウモ」（3例）」

である。どれも「オ列＋一」と、「オ列＋ウ」または「ア列＋ウ」の対立となっている。

感動詞では、「オー（十一例）」があった。

和語の長音表記にあらわれた表記について整理すると次のようになる。（下線をひいたものは歴史的かなづかいにしかあらわれない表記形）

ア列 ア列＋一、ア列＋ア

イ列 イ列＋一、イ列＋イ、イ列＋ヒ、イ列＋キ

ウ列 ウ列＋一、ウ列＋ウ、イ列＋ウ、イ列＋フ、

エ列 エ列＋一

オ列 オ列＋一、オ列＋ウ、ア列＋フ、ア列＋ウ、オ列＋フ、オ列＋ホ、エ列＋ウ、エ列＋フ

ここから、すべての列にわたって長音符「一」が使用されていることがわかる。しかし、歴史的かなづかいにしかあらわれない表記形も、ア列とエ列以外であらわれ、またその数も少なくない。歴史的かなづかいと一致しない表記は、表音的かなづかいでかかれたものがほとんどである。また、いわゆるかなづかいの「誤り」と呼べるようなものは、「用ウ」を「用フ」とハ行に活用させたものである。これは慣行でひろくおこなわれていた表記である。

このように、和語全体については、歴史的かなづかいで統一されているとはいえない。ただし、「言（イ）フ」「思（オモ）フ」「給（タマ）フ」などハ行五列活用の動詞、「通（トホ）リ」「多（オホ）イ」などの動詞や形容詞の一部、挨拶としてつかわれる「有難（アリガタ）ウ」、「今日（ケフ）」といった名詞など、よくつかわれる語が歴史的かなづかいでかかれている傾向にあるとはいえる。特に、動詞は「申ス」が「モース」が優勢である以外は、ほぼ歴史的かなづかいが使用されている。

3. 2. 2 字音語の長音表記

次に、字音語の長音表記についてみていく。ア列長音は用例がない。イ列長音は、「鼻唄（ヒーキ）」が一例あるのみであった。

エ列長音字音かなでは「父兄（フケイ）」のように、すべてが「エ列＋イ」の形であらわれた。

ウ列・オ列長音の字音語は用例数もおおく、また、「教」(字音かなづかい「ケウ」)には、「教場(キョージョー)」という長音符を使用した表記、「無宗教者(ムシュウケウシャ)」という字音かなづかいと一致する表記、「教師(キョウシ)」という長音符をもちいない表音的な表記、の3とおりがみえる。このようにウ・オ列字音語の長音表記は非常に錯綜している。

『日語新編』にあらわれるウ列・オ列長音表記については、次のようにまとめられる。

(1) 棒引きかなづかい

「教場(キョージョー)」のように長音符を使用したもの

(2) 表音的かなづかい

「教師(キョウシ)」のように長音符をもちいない表音的かなづかいで表記されたもの

(3) 字音かなづかい

「無宗教者(ムシュウケウシャ)」のように字音かなづかいで表記されたもの

(4) それ以外

「法律(ハウリツ)」の「法」の字のルビに「ハウ」とある。「法」の歴史的かなづかいは「ハフ」である。「ハウ」という表記は、歴史的かなづかいで表音的かなづかいかとも言えない。このような、かなづかいの「誤り」と言いたくなる表記をそれ以外とする。

ここで、表音的かなづかいと歴史的かなづかいが同形のものがあるのが問題となる。例えば「口」は、長音符を使って書くと「コウ」であるが、歴史的かなづかいで表音的かなづかいかでも「コウ」であり、その区別が出来ない。そこで、かなによる表記について、用例を次のように分類する。

[+-] 表音的かなづかいであって歴史的かなづかいでないもの「教師(キョウシ)」

[++] 表音的かなづかいであって歴史的かなづかいかでもあるもの「口中(コウチュウ)」

[-+] 表音的かなづかいでなくて歴史的かなづかいかであるもの「宗教(シュウケウ)」

[-] 表音的かなづかいでなくて歴史的かなづかいかでもないもの「法律(ハウリツ)」

表音的かなづかいであって歴史的かなづかいかでないもの(以下、[+-]のようにあらわす)は完全に表音的かなづかいかであって、逆に[-+]は完全に歴史的かなづかいかとなる。[+-]は歴史的かなづかいかとも表音的かなづかいかとも言える表記であり、[-]は字音かなづかいかで表記しようとした例かとおもわれる。

また、これに長音符による表記をくわえた用例数を次の表にまとめた。先の数字が述べ語数であり、()内の数字は異なり語数である。

表音的	字音	ウ列長音	オ列長音
+	-	70(27)	262(98)
+	+	57(18)	35(8)
-	+	64(11)	97(25)
-	-	0(0)	17(1)
長音符		14(6)	311(70)

【表1 『日語新編』の長音表記】

この表から、ウ列表記では、完全に表音的かなづかいである〔+-〕と完全に歴史的かなづかいである〔-+〕の、述べ語数は拮抗していることがわかる。しかし、異なり語数でみると、歴史的かなづかいで書かれている語の種類がすくない。具体的には、「十（ジフ）」という表記が28例と多く、ついで「入（ニフ）」17例、「吸（キフ）」8例、と上位3語の合計でほとんどの用例数をしめる。そして、「+」「入」などは日常でもよくめにすることが予想される文字である。それにたいして、表音的かなづかい〔+-〕ははばひろくいろいろな語でつかわれている。

オ列長音は、述べ語数では長音符による長音符による表記の例が表記の例が優勢である。つづいて表音的かなづかいの〔+-〕がおおい。歴史的かなづかい〔-+〕では、「教（ケウ）」の用例が39例と非常に多い。ウ列もオ列も、出現頻度の高いなじみのある漢字が字音かなづかいで表記されているということが共通する。

また、オ列長音にのみ見られた、字音かなづかいでも表音的かなづかいでもないもの〔--〕はすべて「法律（ハウリツ）」の例であった。

このことから、『日語新編』の字音語に関しては、エ列長音以外は棒引きかなづかいおよびかなで長音をあらわす表音的かなづかいが基本となっていて、ある特定の語にたいして歴史的かなづかいがつかわれるようである。エ列長音は一貫してエ列+イがつかわれているが、これは明治33年式棒引きかなづかいと一致する。

4. おわりに

『日語新編』の長音表記は、表音的かなづかいと、歴史的かなづかい・字音かなづかいによるもの、そしてごくわずかにみられるそのどちらともおもわれないものが混在している。また、表音かなづかいには棒引きかなづかいと長音をかなであらわすかなづかいの2種類があらわれる。これらの表記に特に分布はみられず、表音的かなづかいも歴史的かなづかいによる長音表記も、章のはじめからおわりまで出現する。学習者にたいしてさまざまなかなづかいをひとつの教材のなかでしめそうという配慮ともとれるが、表記の方針をとくに統一しなかったものともかんがえられる。このうち、エ列長音の字音語には長音符はあられず、すべて「エ列+イ」であることや、和語は歴史的かなづかいが優勢であったのにたいして、字音語によりおおく表音的かなづかいがつかわれることから、本資料のかなづかいも、明治33年式棒引きかなづかいとの関連がうかがえる。

今回調査した清国留学生を対象とした日本語教材のかなづかいはいずれも、和語と字音語を区別し、和語は歴史的かなづかいをもちい、字音語に表音的かなづかいをもちいるという点で、明治33年式棒引きかなづかいにちかいものであったといえる。

第 3 部 近代日本語点字資料のかなづかい

第7章






かなづかい改定論史研究における

近代日本語点字かなづかいの位置づけ

1. はじめに

日本語をかきあらわすための文字として、視読文字である墨字¹のほかに、触読文字である日本語点字²がある。日本語点字は、6 点点字 1 字がかな 1 字にほぼ相当する「点字かな」によってかけられる。そして、基本的には漢字を使用しないかな専用文で、文節わかちがきをもちいて日本語をかきあらわす。また、文字情報としての情報発信・受信の手段のひとつとして、私的な文書から教育、公共サービス、公文書、公的な署名、投票、各種試験等さまざまな場面でひろくもちいられており、社会的な地位を確立している³。

そして、点字には墨字のかなづかいの「よりどころ」となる「現代仮名遣い」（昭和 61 年内閣告示第 1 号）とはことなる日本語点字独自の点字かなづかいがある。

¹ 触読文字である点字にたいして、視覚をつかってよむ字を墨字（すみじ）という。また、墨字で点字を表現するさいに、「    （あいうえお）」のように凸部を黒円でしめた墨点字（すみてんじ）がある。本稿でも点字表記の再現のために、墨点字をもちいることがある。また、墨字は、おもに視覚をつかってよむ視読文字に分類されるが、代読や電子テキストのよみあげ機能をもちいての「みみでよむ」という墨字の利用法がある。

² 点字は、指先をつかってよまれることがおおいが、舌など指以外のからだの部位をつかって触読する場合もある。また、「体表点字」という電波等の信号を体表につたえるよみかたもある。また、点字でかけられたテキストをよみあげるといったかたちで、墨字とならんで点字を「みみでよむ」利用法もある。

³ とはいうものの、これらの日本語点字による書字活動は現状においても完全に墨字による書字活動と同程度の権利を保障されているわけではない。たとえば、現在教育や選挙・郵便については、日本語点字をもちいておこなわれているが、日本語点字によってかけられた遺言状の法的効力については、まだ保障されていない。このように、墨字と同等に保障されているわけではなかった点字による情報発信・提供の場が、点字使用者・関係者の運動によってひろがっていったという歴史的経緯と、現在でも墨字書字ではあたりまえのものとして保障されているものが点字書字では制限されている場面もあることは認識しておくべきであろう。これらの日本語をかきあらわすための文字である日本語点字の権利獲得の歴史といまもなおのこされた課題については、慎（2010）がくわしい。

このような点字表記の特徴については、1887（明治 20）～1890（明治 23）年ごろに日本語点字の基礎をつくりあげた石川倉次ら東京盲啞学校⁴の教員が、かな専用・かなづかい改定論を主張するかなもじ論者であったためであると説明される。また、1900（明治 33）年から小学校教科書で使用された「明治 33 年式棒引きかなづかい」の影響についても指摘されている⁵。しかしながら日本語学の文字・表記研究の観点から、実際の点字資料をつかった文字・表記の調査・研究はあまりなされておらず、これらのかなづかい改定論やその実践例が具体的にどのように日本語点字の表記に影響をあたえていたのかということとは完全にあきらかとはなっていない。

日本語点字は墨字とならんで日本語をかきあらわす文字であり、明治期に考案されて以来改良をくわえながら現在もつかわれつづけているという歴史がある。そして点字でかかれた文書もおおく保存されている。このように、独自の文字・表記文化をもつ日本語点字は、墨字とならんで日本語文字・表記の研究の対象となる。

本章では、「現代仮名遣い」とことなる特徴をもつ点字かなづかいに着目し、日本語点字の成立と展開の過程から、現行の日本語点字文字・表記について概観する。

2. 現行の日本語点字表記について

2. 1 現行の日本語点字表記と墨字表記の比較

日本語点字は、1 マスに縦 2 列、横 3 列の 6 点を 1 文字とした 6 点点字を採用している。

前述したように、点字表記は 1 字が 1 つのかなをあらわす。ただし、墨字と完全に対応するわけではなく、濁音はかなの直前に濁音符「ㇿ」を付し、「ㇿㇿ（濁音符+か）」で墨字の「が」と対応する。また拗音はかなの直前に拗音符「ㇿ」を付す。そしてたとえば

⁴ 東京盲啞学校。現在では筑波大学附属視覚特別支援学校となっている。同校の歴史については東京盲学校（1935）、および同校ホームページの沿革

（<http://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/enkaku/enkaku.html>）を参照した。

⁵ 情報アクセス権やユニバーサルデザインの視点から日本語表記についてのべたあべやすし

（2010）の注 10 で、「日本語点字を考案したいしかわ・くらじ（石川倉次）が「かな文字論者」であったことはよく知られている」という指摘がある。また、明治 33 年式棒引きかなづかいの点字かなづかいへの影響については、金子（2007：106-107）に、「1900（明 33）年に「小学校令施行規則」が改正され、小学校の教科書に「字音仮名遣い」（字音棒引きともいう）が採用された。（略）これが採用されるとすぐに点字表記にも取り入れられ、「折衷仮名遣い」（和語は歴史的仮名遣い、漢語は表音式仮名遣い）となった。」とある。

スイ	ズイ	ウイ	ウエ	ウオ					
⠠ス	⠠ズ	⠠ウ	⠠ウ	⠠ウ					
⠠イ	⠠イ	クア	クイ	クエ	クオ	グア	グイ	グエ	グオ
⠠イ	⠠イ	⠠ク	⠠ク	⠠ク	⠠ク	⠠グ	⠠グ	⠠グ	⠠グ
⠠テ	⠠デ	ツア	ツイ	ツエ	ツオ				
⠠テ	⠠デ	⠠ツ	⠠ツ	⠠ツ	⠠ツ				
⠠ト	⠠ド	ファ	フィ	フェ	フォ	ヴァ	ヴィ	ヴェ	ヴォ
⠠ト	⠠ド	⠠フ	⠠フ	⠠フ	⠠フ	⠠ヴ	⠠ヴ	⠠ヴ	⠠ヴ
⠠テ	⠠デ								
⠠テ	⠠デ								
⠠フ	⠠ヴ								
⠠フ	⠠ヴ								

※日本点字委員会（2001）表2・表3・表4・表5を整理して掲載した。

また、点字のかなづかいについても現行の墨字で行われているものとはことなる。

点字が墨字と異なる点は以下のとおりである。

（1）かな専用文でかかれる

基本的には漢字を使用せず、かな専用文でかかれる。点字による漢字表記には川上秦一の「8点漢字」や、長谷川貞夫の「6点漢字」などが提案されているが⁶、学校教育や公共サービス等の場ではかな専用文が採用されている。

（2）文節わかちがきをおこなう

日本語点字は基本的にはかな専用文かかれるため、文節わかちがき⁷をおこなう。この文節わかちがきは、基本的には学校文法の文節にもとづいており、助詞・助動詞は単独ではわかちがきされず、自立語のあとにつづく。また自立語であっても名詞については、1語

⁶ 本研究では漢点字にかんしてはとりあげない。漢点字の問題点については、あべ（2002）でまとめられている。

⁷ わかちがきにはおおきくわけて、単語ごとにわかちがきをおこなう単語わかちがきと、文節でわかちがきをおこなう文節わかちがきがある。日本語点字のわかちがきについての研究は、Unger（1984）がある。

のなかに3音節以上の意味の切れ目があるばあい、基本的にはわかちがきをする。

(3) 点字の独自のかなづかいがある

(3-1) 助詞の「は」「へ」「を」について

墨字では「は」「へ」と書く助詞について、墨字では「わ」「え」に相当する点字「ㇿ」「ㇾ」を使用する。ただし、助詞「を」に関しては、点字でもワ行の「を」に相当する「ㇿ」となる。

(3-2) 長音表記

点字の長音表記のうち、「現代仮名遣い」では「う」をそえて長音をあらわすウ列・オ列の和語・字音語にたいして、長音符をもちいる。たとえば、ウ段長音は「ㇿㇿㇿㇿㇿ（くーき・空気）」のように「ウ列音+一」となり、オ段長音は「ㇿㇿㇿㇿㇿ（おーじ・王子）」のように「オ列音+一」となる。ただし、「ㇿㇿㇿㇿㇿ（おおかみ・狼）」「ㇿㇿㇿㇿㇿ（こおり・氷）」「ㇿㇿㇿㇿㇿ（とおり・通り）」などのように「現代仮名遣い」では長音の表記が「オ列のかな+オ」となる語は、日本語点字も同様にオ列のかなに「ㇿ（お）」をそえる。拗長音は、「ㇿㇿㇿㇿㇿ（きゅー）」「ㇿㇿㇿㇿㇿ（きょー）」のように、「拗音符+ウ列音+一」「拗音符+オ列音+一」となる。

ア列長音はア列のかなに「あ」をそえ、イ列長音はイ列のかなに「い」をそえる。また、エ列長音は和語は「ㇿㇿㇿㇿㇿ（ねえさん）」のように「エ列音+え」、字音語では「ㇿㇿㇿㇿㇿ（えいせい・衛生）」のように「エ列音+い」であり「現代仮名遣い」と同様のかなづかいとなっている。

2. 2 日本語点字は「表音的」か

このように、日本語点字のかなづかいは「現代仮名遣い」とはことなる点もある。

このような日本語点字の特徴として「純粋な表音文字である」（堀越 1985:193）、「（引用注：点字の）かなづかいは（点字ではない、視覚文字）よりも表音的な点がある」（あべ 2010:21）、などという評価があがることがある。そのようなかんがえの根拠としては、たとえば助詞の「は」「へ」を「わ」「え」のようにかくことや、長音符を使用して「うー」「おー」と書く長音表記のやり方などによって、「現代仮名遣い」とくらべると表音性がつよいという印象からであろう。

しかし、ここまで確認したように、日本語点字のかなづかいはかならずしも表音的なか

なづかいとはいえない面がある。たとえば助詞の「を」は日本語点字でもワ行の「を」に相当する「ㇿ」がつかわれ、ア行の「ㇰ（お）」とともに、1音にたいして2字が対応する。また、エ段長音は「エ列+え」と「エ列+い」の2とおりの表記形があらわれる。オ段長音も同様に「オ列+ー」と「オ列+お」があり、また「思う」などの活用のある語の活用語尾については、「オ列+う」もあらわれる。

また、よつがなについても、連濁の「いれぢえ」「ひきづな」や、いわゆる「同音の連呼」であるところの「ちぢむ」「つづく」による「ぢ」「づ」は、点字においても「ㇿㇿ（濁音符+ち）」「ㇿㇰ（濁音符+つ）」となる。

以上のように、現行の点字かなづかいは「現代仮名遣い」よりは表音的といえる面もあるが、たとえば3章で紹介した石川倉次著「はなしことばのきそく」のような表音性のつよい資料とくらべると、長音表記などには「現代仮名遣い」と同様に歴史的かなづかいのなごりがみられる。むしろ、「現代仮名遣い」との相違点は、助詞の「は」「へ」を「わ」「え」とかくことと、ウ段オ段長音表記のうち、墨字で「う」とするところを長音符でかくことの2点のみであり、現行の点字かなづかいの特徴としては、「現代仮名遣い」との共通点をおおくもったかなづかいであるといったほうが適切であろう。

点字かなづかいの特徴についてまとめると、以下のとおりとなる。

(1) 助詞の表記は「ㇿ（わ）」「ㇰ（え）」「ㇿ（を）」となる

(2) 長音表記は以下の通りとなる。

ア列長音 「ア列のかな+ア」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（おかあさん）

イ列長音 「イ列のかな+イ」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（おにいさん）

ウ列長音 「ウ列のかな+ー」 ㇿㇿㇿㇿ（くーき・空気）

拗長音 「拗音符+ウ列+ー」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（しゅーり・修理）

エ列長音 「エ列+エ」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（おねえさん）

「エ列+イ」 ㇿㇿㇿㇿㇿ（ていねい・丁寧）

オ列長音 「オ列音+ー」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（おーさま・王様）

「オ列音+う」 ㇿㇿㇿㇿㇿ（おもう・思う） *活用語の活用語尾

「オ列音+お」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（おおかみ） ㇿㇿㇿㇿ（こおり）

*歴史的かなづかいではオ列のかなに「ほ・を」がつづくもの

拗長音 「拗音符+オ列+長音符」 ㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿ（しょーがつ・正

月)

(3) 二語の連合による連濁や、いわゆる「同音の連呼」ではよつがなの区別をおこなう。

⠠⠮⠠⠮⠠⠮⠠⠮ (はなぢ・鼻血) ⠠⠮⠠⠮⠠⠮⠠⠮ (つづく)

また、これは現代語・口語文のかなづかいであり、古文の場合、和語は歴史的かなづかいが使用される。ただし、ウ列・オ列の字音語の長音表記は、古文においても字音かなづかいを使わず、長音符をもちいる。

このように、日本語点字は、墨字とは共通点をもちながらも、独立した文字・表記システムをもっている。

3. 日本語点字の成立と展開

3. 1 日本語点字の成立

フランスでルイ・ブライユが3点2行の6点点字を完成させ、それが文字として公式に採択されたのは1854年のことである。

日本においては明治期の視覚障害者への文字教育には、たとえば墨字を浮き立たせた凸字を、触覚により読字するという方法がおこなわれていたりしたが、なかなか成果はあがらなかった。そのことに心をいためた東京盲啞学校の教員小西信八⁸が、6点点字に着目し、

⁸ 石川倉次を東京盲啞学校にまねき、点字を紹介した小西信八は、1854(嘉永7)年、長岡藩医小西善蹟の2男として生まれる。漢学や洋学を修めた後、1876(明治9)年、26歳で東京師範学校に入学し、1879(明治12)年に卒業する。その後、千葉や東京の師範学校で教員をつとめる。

1886(明治19)訓盲啞院掛専務を申付けられ、以降視覚・聴覚障害者への教育にたずさわりつづける。石川を東京盲啞学院へ教員として招いたのも小西であった。

小西の障害者教育の分野以外での業績として、前島密の『漢字御廃止之義』の紹介というものがある。これについては、山本(1865)を引用する。

『漢字御廃止之義』は、将軍に上申後久しく世に知られなかったが、明治32年に前島と同郷後進のかな文字論者小西信八が、国字改良論の最先覚としての前島の功を顕彰しようとして、〈略〉『前島密君国字国文改良建議書』の表題を付けて印刷し非売配布した小冊子によって、初めて一部の人々に知られ、更に33年4月国字改良の世論に応じて文部省が8名の国語調査委員を創設した際、その委員長を委嘱された前島が、「太陽」記者のもとで同誌5月号に寄せられた『国語調査の意見』中に掲出した、同建白書の枢要な部分の公表によって、更に一般の知るところとなった。(山本1865:92)

日本語点字を考案するようにとすすめたのは、1887（明治 20）年のことである⁹。

そして小西は同僚の石川倉次らに点字翻案の依頼をし、石川は 1890（明治 23）年にか
な 1 字を 6 点点字 1 字と対応させた日本語点字を考案した。同年 11 月、東京盲啞学校で
開催された点字選定会で、この石川案の日本語点字が採択された。そして 1899（明治
32）年に拗音がくわり、さらに 1937 年に特殊音点字表記が追加され、現在の日本語点
字の骨子ができあがった。

そのかなづかいは、はじめは歴史的かなづかいによっていたが、それは約 10 年間ほど
であり、それ以降は独自の表音的なかなづかいを採用する。

これには石川倉次・小西信八らの意向があったことが指摘されている。石川と小西は、
1884（明治 17）年、工部大学校で開催された「かな の くわい」でである。当時石川
は小学校教員であり、ある日、小西のうしろすがたを那珂通世とまちがえて「那珂先生」
と声をかけてしまった。それが石川と小西がはじめて言葉を交わした日であるという¹⁰。
このように、石川と小西はともに「かな の くわい」にでいりするかなもじ論者であり、
かなづかい改定論を肯定していた。このような背景により日本語点字のかなづかいは比較
的はやい段階から表音的なかなづかいへと移行していったことがかんがえられている。

3. 2 日本語点字表記史区分について

日本語点字の表記はかならずしも統一されていたわけではなく、時代や分野ごとによっ
てさまざまなゆれや変化がみられる。金子（2007）によると点字表記史は、おおきく時代
によって 4 期にわけられるという。

第 1 期

日本点字が成立した 23（1980）年頃から約 10 年間である。このころは歴史的かなづか
いがもちいられていたという。

第 2 期

当初は歴史的かなづかいがもちいられていた日本語点字であるが、点字教科書等に歴史

⁹ 1879 年にはすでに、文部省発行の『教育雑誌』89 号で目賀田種太郎によってブライユ
考案の 6 点点字が紹介されているが、この時点では学校教育で採用されるにはいたらなか
った。

的かなづかいをもちいるか表音的かなづかいをもちいるかというかなづかいの方針については、点字関係者の間でも意見がわかれ、議論がおこなわれた。そのなかで、点字でかかれた国定教科書『小学校国語読本』（1903（明治 36）年）は字音語に棒引きかなづかいが採用された。また、1907（明治 40）年におこなわれた第 1 回全国盲啞教育大会で、「盲生に国語を教ふるにはすべて発音通りにして文部省許容の長音符を用ふ事」が決議された¹¹。1920（大正 9）年に帝国盲教育会が発足し、1922（大正 11）年に「帝国盲教育会点字図書出版部点字書方^{かきかた}」が発表され、同年 10 月に改訂案がだされている。これがはじめての日本語点字表記法といえるものであり、かなづかいについては以下のようにのべられている。

- 一、国語は正しき国語仮名遣ひを用ひ、漢字音及び外国語は拗音及び棒引を用ふ。
- 二、クワとカとを区別す。 例 ^{クワジ} 火事。 ^{かじ} 家事。
- 三、ア行とワ行とは書き分ける。 例 ^{スキ} 水。
- 四、タ行とサ行の濁音は書き分ける。 例 ^{ヂシン} 地震。 ^{ジシン} 自身。

ここで規定されている日本語点字かなづかいは、和語は歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかいをもちいる、「明治 33 年式棒引きかなづかい」と共通するものであったことがわかる¹²。この第 2 期は、約 20 年ほどつづく。

第 3 期

墨字による小学校教育は歴史的かなづかいにもどるが、点字のかなづかいに関する議論はつづき、日本語点字は独自の表音的かなづかいへと変化していく。1922（大正 12）年に創刊された新聞『点字大阪毎日』が字音語・和語ともに表音的かなづかいを採用し、これが表音的かなづかいの普及に大きな影響をあたえているといわれている。これが第 3 期であり、約 30 年間つづく。

¹⁰ 鈴木力二（1987）を参照。

¹¹ 金子（2007:12）

¹²明治 33 年式棒引きかなづかいの点字かなづかいへの影響については、金子（2007：106-107）に、「1900（明 33）年に「小学校令施行規則」が改正され、小学校の教科書に「字音仮名遣い」（字音棒引きともいう）が採用された。（略）これが採用されるとすぐに点字表記にも取り入れられ、「折衷仮名遣い」（和語は歴史的仮名遣い、漢語は表音式仮名遣い）となった。」とある。

1927（昭和 2）年に、文部省が点字教科書編さんのため盲学校教科用図書調査委員会をもうけ、翌 1928（昭和 3）年に盲学校教科書編纂委員会をもうけた¹³。同年、文部省より「点字書キ方ニ関スル法則」が発表され、そのなかで「点字は発音するとおりに書く」とした。この文部省著作、大阪毎日新聞社発行の点字教科書はイ列長音やエ列の字音語の長音表記にも「ちーさい（小さい）」「てーねー（丁寧）」のように長音符がもちいられることや、よつがなの区別をおこなわないこと、動詞「言う」を「ゆー」と表記するなど、現行の点字かなづかいより表音性のつよいものであったことが観察されている¹⁴。

また、各地の盲学校や点字関係者も、かなづかいに関する研究をおこなっており、1935（昭和 10）年に東京盲学校が『日本訓盲点字』を作成した。これは点字の表記法についてしるされたもので、かなづかいについては、「点字書方要項」に以下のようにしるされている。

二、仮名遣ひについて

- (1) 仮名遣を表す必要のある場合の外総て発音通りに書く。
- (2) 発音は東京を中心とする標準発音に従ふものとする。
- (3) テニヲハのヲは普通の発音はオなれども、例外としてヲを用ふ。

（金子 2007：資料 21）

また、1940（昭和 15）年に、近畿盲教育研究会¹⁵が、点字表記の再検討を目的として、『点字規則』をまとめた。ここにあげられているかなづかいに関する記述を抜粋する。なお、例は省略できる場合は適宜省略する。

第 5 表記法（仮名遣い）

1. 点字はすべて発音どおりに書く。ただし、古文、国文法、その他歴史仮名遣いを必要とする場合は、歴史的仮名遣いによって書く。

¹³ 委員は全国の盲学校校長ら 6 名や、『点字大阪毎日』の大野加久二など点字関係者 11 名によって構成されている。

¹⁴ 金子（2007:187-190）

¹⁵ この研究会は小林卯三郎、鳥居篤治郎、大野加久二といった近畿地域の点字関係者によって構成されていた。そしてこの表記法の研究をおこなうため、点字委員会を設置し、研究がすすめられた。しかし、戦争の激化により研究は中断し、この表記法は採用されなかったという。（金子 2007:204-205）。

2. 発音は、標準語の発音に従って書く。
3. 第1種点字（引用注:記号や特殊音点字などをのぞいた点字かな）のなかで、「ヂ ズ チャ チュ ジョ キ エ ヲ」に相当する文字は「ジ ズ ジャ ジュ ジョ イ エ オ」の点字で書く。

（例）クジラ（鯨） ジシン（地震） ミズ（水）...

4. てにおはの おは、「ヲ」を用う。
- （例）カオヲ アロー（顔を 洗う） ウオヲ トル（魚を取る） サオヲ カケル（竿を かける）.....

5. 連濁による「ヂ ズ チャ チュ ジョ」は、そのまま書いてもよい。

（例）ハナヂ（鼻血） コツツミ（小包） ミカヅキ（三日月）.....

9. 長音は、すべて長音符を用いて書く。

（例）トーキョー（東京） オーサカ（大阪） コーベ（神戸）...

10. イ列、エ列の音が長音になった場合は、長音符の代わりに「イ」を用いて書いたほうがよい。

イイダ（飯田） シイタケ（椎茸） 詩歌（シイカ）...

エイセイ（衛生） ケイサン（計算） セイト（生徒）...

ただし、ニーサン（兄さん） ネーサン（姉さん） オジーサン（おじいさん）などは、長音符を用いて書いたほうがよい。

11. 2字の字音が一緒になって、イ列、エ列の長音になった場合は、長音符を用いなくて必ず「イ」を用いて書く。

（例）キイト（生糸） キイノクニ（紀伊国） チイキ（地域）...

12. 用言の活用する部分が、イ列、エ列の長音となった場合は、長音符を用いなくて、必ず「イ」を用いて書く。

（例）イイテ（言いて） キイテ（聞いて） シイテ（強いて）...

13. ア列、ウ列、オ列の音が長音になった場合は、長音符を用いて書く。

（例）オカーサン（お母さん） オーバーサン（おばあさん） アー（ああ） ヤー（やあ） ワーワー（わあわあ） クーキ（空気） スージ（数字） フーリン（風鈴） ツーズ（通ず） ユーダチ（夕立ち） オーオカ（大岡） コーシ（孔子） ソージ（掃除） トーヤマ（遠山） ホーキ（箒） モージン（盲人）

（オカアサン オバアサン アア マア ナアニ クウキ スウジ オトオト オ

トオサン などとは 書かぬ)

1 4. 用言の^マカ^マツ一部が、ウ列、オ列の音の長音になった場合は、長音符を用いて書く。

(例) クー (食う) ユー (言う) オモー (思う) タモー (賜う) ...

1 5. 音響、またはこれに類する長音は、長音符を用いて書く。

(例) カーカー ブーブー キューキュー...

(金子 2007 : 資料 19)

この『点字規則』のかなづかいにかんする記述は、詳細な具体例をあげており、現行の点字かなづかいとの比較が可能である。これらをくらべると、現行の点字かなづかいでは長音符をもちいずにななをつかつかきあらかされる長音表記、ア列・イ列の長音表記や「オ」をそえて表記する「大阪」などの語にも長音符をもちいていることから『点字規則』のかなづかいは現行の点字かなづかいよりも表音性のたかいかなづかいかであるといえる¹⁶。しかし、さきに紹介した大阪点字毎日社が刊行した点字教科書のかなづかいはことなり、エ列字音語長音表記や活用語の活用語尾には長音符を使用しない。このように、第 3 期に発行された資料のなかでも、刊行時期や発行機関によって、かなづかいはことなっている。

第 4 期

1946 (昭和 21) 年に、「現代かなづかい」が発表された。また、国定教科書が廃止され、1949 (昭和 24) 年から検定教科書の使用がはじまる。それにともない、日本語点字表記の不統一が問題となり、全国的な統一と体系化がめざされた。1955 (昭和 30) 年に京都府立盲学校を中心とした点字関係者によって日本点字研究会が発足し、全国の盲学校がこれに加入した。そして 1959 (昭和 34) 年に、『点字文法』が出版される¹⁷。

『点字文法』のなかのかなづかいに関する記述を抜粋する。

¹⁶ 同じく第 3 期の点字表記法書として、1942 (昭和 17 年) に日本盲人図書館より刊行された『点訳の栞』がある。ここにかかっているかなづかいは、近畿盲教育研究会『点字規則』のかなづかいとほぼ同様の内容となっている。また、戦後 1951 年 (昭和 26 年) に、『点字規則』の改訂版がだされている。これは、第 4 期への移行期間の資料と位置づけることができるだろう。

¹⁷ 金子 (2007:221-223)

第1章 書き現し方

概要

1. 点字は現代語音に基いて書くのを原則とし、歴史的仮名使いを必要とする場合は、歴史的仮名使いを用いて書く。

2. 従って「ぢ、づ、ぢゃ、ぢゅ、ぢょ、ゐ、ゑ、を」に相当する文字は、それぞれ「じ、ず、じゃ、じゅ、じょ、い、え、お」を用いて書く。(但し3、4参照)

連濁

3. 連濁による「ぢ、づ、ぢゃ、ぢょ」は、そのまま書いても良い。

【例】 はなぢ ::::: こづつみ :::::
 みかづき ::::: しおづけ :::::

助詞 を、は、へ

4. 助詞の「を」は「を」 :: を用いる。但し助詞の「は」及び「へ」は、それぞれ「わ」及び「え」を用いる。

【例】 本を読む ::::: :::::
 魚をつる ::::: ::::: 尾を振る ::::: :::::
 私は ::::: 川へ :::::

長音

6. 長音は長音符 〃 を用いて書く

【例】 と一きよ (東京) ::::: :::::
 お一さか (大阪) ::::: :::::
 おか一さん (お母さん) ::::: :::::
 おば一さん ::::: ::::: こ一つ一 (交通) ::::: :::::
 あ一そ一か ::::: ::::: う一ん ::::: :::::

7. 「い」列「え」列の音が長音になった場合は、長音符の代わりに「い」を用いて書く。

【例】 いいえ ::::: しいたけ (椎茸) ::::: :::::
 しいか (詩歌) ::::: ちいさい (小さい) ::::: :::::
 にいさん (兄さん) ::::: おじいさん ::::: ::::: :::::
 とけい (時計) ::::: えいせい (衛生) ::::: :::::
 けいさん (計算) ::::: せいと (生徒) ::::: :::::

が、その概要で「現代語音に基づいて書く」というように表記のおおきな方針が変更された点にある。これは、墨字のかなづかいが「現代かなづかい」を採用しその「まえがき」に「このかなづかいは、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである」とかかかれていることに関連する¹⁸。

第3期の点字表記法である『点字規則』と比較すると、『点字規則』では長音符をもちいていた活用語の活用語尾の長音表記について、長音符ではなくかなをもちいるようになっている。この『点字文法』の改訂版として1968（昭和43）年に『点字文法（点字国語表記法）』が出版された。この改訂版で外来語の表記および特殊音の表記にかんする事項が追加された。また、連濁による「ぢ」「づ」の表記については、『点字文法』では「そのまま書いてもよい」と許容の姿勢であったものが、改訂版では連濁による「ぢ」「づ」の使用を本則とした。

盲学校の関係者を中心として組織されていた日本点字研究会は、日本語点字表記の統一のため、1966（昭和41）年に点字出版所や点字図書館関係者などもふくんだ新しい組織、日本点字委員会へと発展した。日本点字委員会は1971（昭和46年）に『日本点字表記法（現代語編）』を出版した。ここで、「現代かなづかい」への言及があらわれる。また、実際のかなづかいも「現代仮名遣い」との共通点がふえていく。

たとえば、長音表記のうち、長音符があらわれるのはウ列・オ列にかぎられ、『点字文法』およびその改訂版では長音符をもちいるとされていたア列和語「おかーさん」などは、ここから「おかあさん」のようにア列のかなに「あ」をそえる形が本則になり、これまで本則であった長音符による長音表記は許容事項となる。になる。また、オ列の長音のうち、「大阪」のように、オ列のかなに「お」をそえる語にかんしては、「オ列の長音のうち歴史的かなづかいで『ほ』と書かれていたものについて、現代かなづかいどおりに「お」を用いて書いてもよい。』（金子2007:資料24）とあり、現行の点字かなづかいとの共通点がおおくなっている。

また、1980（昭和55）年に『改訂日本点字表記法』が刊行される。このなかの「第1節 現代語のかなづかい」のなかで「現代語をかな（主としてひらがな）で書き表す場合、1946年に国語審議会が示した『現代かなづかい』と、1956年にそれをうらづけた『正書法について』に基づいている。（金子2007:資料25）」として、点字のかなづかいと墨字のよりどころとなっている「現代かなづかい」との関連についてのべている。また、かな

¹⁸（金子2007:222）

づかいについては『日本点字表記法（現代語編）』では許容のあつかいであったオ列の和語の長音に変更があり、もとは歴史的かなづかいでは「ほ・を」とかきあらわした「おおかみ」「こおり」などの語は、長音符ではなくオ列のかなに「お」をそえる表記が本則となった。

1990年には、日本の点字制定100周年記念として、『日本点字表記法 1990年版』が刊行された。ここではおもにわかちがきにかんする改訂がおこなわれたが、かなづかいにかんしてはア列とオ列の和語の長音表記に長音符をもちいるという許容事項が削除された。そして2001年に『日本点字表記法 2001年版』が刊行される。これが現行の点字表記法書となる。この改訂もわかちがきに関するものが中心であるが、「6章 古文の書き表し方」「第7章 漢文の書き表し方」が追加された¹⁹。

このように、点字は墨字とくらべてはやい時期から継続して歴史的かなづかいではなく、より表音的なかなづかいが採用されていたことがしられている。また、点字のかなづかいは時代によって変化していることも確認されている。具体的には、助詞の表記が「わ」「え」「を」となる点は、第3期の初期から現代にいたるまで一貫している。しかし、よつがなと長音表記については第3期から第4期にかけて変更がみられる。そこで、第3期の『点字規則』、第4期の『点字文法』『点字文法 点字国語表記法』『日本点字表記法』『日本点字表記法 1990年版』『日本点字表記法 2001年版』から、擬音語・擬声語をのぞいた和語・字音語のかなづかいについて、一覧表にまとめた。（表1）。

¹⁹ 古文と漢文のかなづかいは、和語は歴史的かなづかい、字音語は長音表記に長音符をもちいる棒引きかなづかいでかかれる。

【表1 点字表記法書の比較】

	よつがな	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
点字規則(1940)	「じ」「ず」に統一。 「許容」連濁の「ぢ」「づ」	ア列十一 おかーさん	イ列十一 にーさん イ列十一 いだけ きいて(聞いて)	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) ゆー(言う)	エ列十一 えいせい(衛生) エ列十一 ねーさん	オ列十一 おーさか(大阪) こーし(孔子) よー(読もう) おもー(思う)
点字文法(1959)	「じ」「ず」に統一。 「許容」連濁の「ぢ」「づ」	ア列十一 おかーさん	イ列十一 いだけ いんえ きいて(聞いて) にんさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う) うーん	エ列十一 えいせい(衛生) エ列十一 ねーさん	オ列十一 おーさか(大阪) とーきよー(東京) あぶのーごさい(あまの) よー(読もう) おもー(思う)
点字文法 点字国語表記法(1968)	「じ」「ず」に統一。 ただし連濁は「ぢ」「づ」があらわれる。	ア列十一 おかーさん まー	イ列十一 いんえ きいて(聞いて) うれい おにんさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う)	エ列十一 えいせい(衛生) エ列十一 ねーさん	オ列十一 おとーさん おーさか(大阪) とーきよー(東京) よー(読もう) おもー(思う)
日本点字表記法(1971)	「じ」「ず」に統一。 ただし連濁は「ぢ」「づ」があらわれる。	ア列十一 おかあさん まあ 「許容」ア列十一 おかーさん まー	イ列十一 ひんぎ いんえ きいて(聞いて) にんさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う)	エ列十一 せんせい(先生) エ列十一 おねえさん ええ 「許容」エ列十一 おねーさん	オ列十一 とーきよー(東京) よー(読もう) おもー(思う) おおい(多い) 「許容」オ列十一 おお(嬢) おおい(多い)
改訂日本点字表記法(1980)	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の連呼」には「ぢ」「づ」があらわれる。	ア列十一 おかあさん まあ 「許容」ア列十一 おかーさん まー	イ列十一 おいさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う)	エ列十一 せんせい(先生) エ列十一 おねえさん ええ	オ列十一 とーきよー(東京) よー(読もう) おもー(思う) おおい(多い) ※「おーきい(大きい)」などの「オ列十一」も許容
日本点字表記法 1990年版	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の連呼」には「ぢ」「づ」があらわれる。	ア列十一 おかあさん まあ	イ列十一 おいさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う)	エ列十一 せんせい(先生) エ列十一 おねえさん ええ	オ列十一 ちーさー(玉嬢) よー(読もう) おもー(思う) おおい(多い) ほお(嬢)
日本点字表記法 2001年版	「じ」「ず」に統一。ただし連濁といわゆる「同音の連呼」には「ぢ」「づ」があらわれる。	ア列十一 おかあさん まあ	イ列十一 おいさん	ウ列十一 くーき(空気) くー(食う) いー(言う)	エ列十一 せんせい(先生) エ列十一 おねえさん ええ	オ列十一 ちーさー(玉嬢) よー(読もう) おもー(思う) おおい(多い) ほお(嬢)

よつがなについては「じ」「ず」にほぼ統一されていったものの、連濁の「ぢ」「づ」が許容されており、1971年の『日本点字表記法』からは、本則として連濁には「ぢ」「づ」があらわれる。また、1980年の『改訂日本点字表記法』からはいわゆる「同音の連呼」にかんする記述もみえ、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」と同様となる。

長音表記も変化があり、『点字規則』ではア列からオ列までのすべての列で長音符を使用する例が本則としてあげられている。ところが、『点字文法』でイ列の長音表記に長音符がつかわれなくなり、さらに『日本点字文法』ではア列とエ列の長音符が許容となり、本則からはずれる。『日本点字表記法 1990年版』からはア列とエ列の長音符の使用の許容もなくなり、長音符による長音表記はウ列とオ列にかぎられるようになる。

また、ウ列とオ列についても、『点字規則』では活用語の活用語尾にも長音符がつかわれていたのにたいして、『点字文法』からは活用語の活用語尾については長音表記ではなく「う」をそえる表記になる。また、オ列にかんしては『日本点字表記法』から「オ列+お」という形が許容としてあらわれる。これらは、「おおい（多い）」「とおい（遠い）」「こおり（氷）」などといった「現代かなづかい」「現代仮名遣い」でもオ列のかなに「お」をそえる長音表記となる語である。そしてこの許容は『改訂日本点字表記法』から本則となり、それまで本則であった長音符による長音表記が許容事項となる。その後、『日本点字表記法』では長音符による長音表記が許容からもはずれる。これにより日本語点字の長音表記は、ウ列とオ列の字音語の長音に長音符をもちいる点以外は、墨字の「現代仮名遣い」と共通したかなづかいとなる。

墨字のかなづかいが歴史的かなづかいをもちいていた第3期には、点字のかなづかいは独自の表音性のたかいものであったが、1946年に「現代かなづかい」がだされてからは、点字のかなづかいは徐々に「現代かなづかい」に接近していき、その結果、表音性はひくくなっていく。このように、第4期は日本語点字の全国的な統一というところみのほかに、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との関連性を明確にするという目的があったことは、この表からもうかがえる²⁰。

4. まとめ

²⁰ 点字表記法書のなかではじめて「現代かなづかい」への言及があらわれるのは『改訂日本点字表記法』であるが、そこには「現代語の点字かなづかいは、現代国語の音節と標準との対応関係を明確にする」としるされている。（金子 2007:資料 25）

日本語点字は、6 点点字 1 字がかな 1 字にほぼ対応する、点字かな専用文による文字表記システムである。日本語点字考案されたのが明治 23 (1890) 年のことであり、改良を加えながら現在も使用されつづけており、点字使用者による文字文化をもつ²¹。

また、日本語点字は、明治のおわりから大正にかけて、すでに歴史的かなづかいではなく表音的なかなづかいが使用されており、独自の表記の歴史をもっている。点字の表記史はおおきく 4 期にわけられており、歴史的かなづかいでかかれた第 1 期をへて、和語は歴史的かなづかい、字音語は棒引きかなづかいという折衷的なかなづかいをもちいた 2 期、独自の表音性のたかいかなづかいをもちいた第 3 期、そして表音性がひくくなり、墨字の「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との共通点をおおくもつ第 4 期のかなづかいと、変化していった。

そして各期の点字表記法書資料をしらべると、つねにそのときどきの国語施策との関連がうかがえる。たとえば第 3 期に刊行された表記法書『点訳の栞』には「点字は、発音どおりにかくことが原則である。活字の場合普通に使われて来た仮名遣い法にはよらない。

(本書の仮名遣い法は、国策が示す通りの、発音式である)」とする(金子 2007:資料 20)が、第 4 期になってから刊行された『日本点字表記法(現代語編)』では 1951 (昭和 31) 年にだされた国語審議委員会「正書法について」を引用しており、冒頭には「現代語は、現代国語の音節と標準的な語意識にもとづいて書きあらわし、(略)」とかかかれている(金子 2007:資料 24)。また、点字のかなづかいについても同様に、墨字のかなづかいとの関連をかんがえる必要があるだろう。たとえば第 3 期のかなづかいは「明治 33 年式棒引きかなづかい」の影響が指摘されている。また、第 4 期の点字かなづかいは、第 3 期のかなづかいとくらべると「現代かなづかい」「現代仮名遣い」との共通点がおおくなっていくことが確認できた。

このように日本語点字は墨字とはべつの独立した歴史と文化をもつ文字・表記システムではあるが、日本語文字・表記研究および表記史研究の資料としてもちいるばあい、墨字との関係性についても考慮する必要がある²²。そこで本研究では、点字資料を近代かなづ

²¹ 日本語点字の研究するとき、ただたんに文字・表記システムとしての面だけではなく、点字使用者によって点字がどのような意味をもち、かたられ、そしてどのように運用されているかという面についても着目する必要があるとかんがえ、ここでは文字文化としての点字文化とした。文化としての点字というかんがえかたは、広瀬(2010)を参考にした。

²² 同時に、日本語文字・表記研究には当然日本語点字研究をふくめるべきでもある。

かい改定史の資料と位置づけ、表音的かなづかいの実践例としてその表記法をあきらかにしていくことを目的とする。

これまで確認したように、日本語点字のかなづかいについては、これまでなんとか表記法書がまとめられており、おおよその概要やかなづかいの変化をすることができる。しかしながら、実際の近代点字資料をもちいての表記の研究はまだおこなわれていないため、点字資料が点字表記法書をどれだけ反映しているのか、確認はされていない。また、点字表記法書に掲載されているかなづかいは一部の語にかぎられる場合もあり、表記法書ごとの変化をみようとすると、とりあげられている項目ととりあげられない項目があり、いちがいに比較することができない。点字かなづかいについてさらにくわしくするためには、実際の点字資料にあたっての調査が必要である。

次章で、点字国語教科書と点字新聞を調査対象として、近代点字日本語点字のかなづかいについて研究をおこなう。

注記

墨点字のフォントは、社会福祉法人日本ライトハウスのサイト

(<http://www.eonet.ne.jp/~tecti/index.html>) で配布されているものを使用した。

【参考文献】

あべ・やすし (2010) 「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」 『社会言語学』 10

あべ・やすし (2002) 「漢字という障害」 『社会言語学』 2

大河原欽吾 (1937) 『点字発達史』 (培風館)

柿木重宜 (2013) 「近代「国語」における「棒引き仮名遣い」の終焉—藤岡勝二に関わる文献学的アプローチを中心に」 『滋賀短期大学研究紀要』 38

金子昭 (2007) 『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』 (日本点字委員会)

木枝増一 (1932) 『仮名遣研究史』 (賛精社)

新谷嘉浩 (2006) 「小西信八の生涯」 『日本聾史学会報告書』 (4)

慎英弘 (2010) 『点字の市民権』 (生活書院)

鈴木力二 (1987) 『伝記叢書 13 日本点字の父 石川倉次先生伝』 (大空社)

東京盲学校（1935）『東京盲学校 60 年史』

日本点字委員会（2001）『日本点字表記法 2001 年版』

広瀬浩二郎（2010）『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』（生活書院）

堀越喜晴（1992）「点字における日本語表記法の問題」『応用言語学講座 4 知の情意の言語学』（明治書院）

山口芳夫（1982）『日本点字表記法概説』（ジャスト出版）

山本正秀著（1865）『近代文体発生の史的研究』（岩波書店）

Unger, J. Marshall（1984）”Japanese Braille.” *Visible Language*. 18-3

第 8 章

近代日本語点字教科書

『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい

1. はじめに

7章で日本語点字の概要とその歴史についてまとめた。日本語点字は明治期に成立し、現在までつかわれつづけている日本語文字・表記システムである。日本語点字は成立期から現在にいたるまで墨字とはことなる表記法をもち、独自に展開してきた。各時代の点字表記法書をしらべたところ、日本語点字表記法はつねにその時代の国語施策を反映して変化していったことがうかがえる。

日本語点字表記法の特徴として、現行の墨字表記法の「よりどころ」となる「現代かなづかい」とはことなるかなづかいがもちいられている点があげられる。そしてその点字かなづかいは、明治期から現在にいたるまで長音の長音表記に長音符をもちいる、棒引きかなづかいをもちいていることが、点字表記法書からあきらかとなった。それでは、実際の点字資料では、点字表記はどのように運用されていたのだろうか。点字表記法書は代表的な表記の例についての記述はあるものの、詳細なかなづかいをするためには、実際の点字資料にあたって調査をおこなう必要がある。そこで、点字表記史区分では第3期にあたる時期に刊行された点字版第3期国定国語教科書の調査をおこなうことであきらかとしていく。

2. 『点字 尋常小学国語読本』について

近代日本語点字のかなづかいについて、その詳細をするために筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵『点字 尋常小学国語読本』の調査をおこなった。日本語点字が学校教育を目的として考案されたこと、また点字かなづかいが明治33年式棒引きかなづかいとの関連が指摘されていることから、近代の点字による国語教科書が調査対象として適当で

あるとかんがえ、筑波大学附属視覚特別支援学校資料室に比較的まとまって所蔵されており、墨字版との比較が可能な本資料を選定した。本資料は全 12 巻の点字教科書で、第 3 期国定教科書『尋常小学国語読本』（ハナ・ハト読本/白表紙本）を日本語点字に翻字したものである。墨字版の『尋常小学国語読本』（以下墨字でかかれた『尋常小学読本』諸本を総称して墨字版とする）は大正 6(1917)～昭和 7(1932)年にかけて刊行され、全国で広く使用された教科書である¹。

本資料は全 12 巻で、そのうち第 1 巻が未発見であるため、第 2 巻から第 12 巻までの 11 冊が確認できた。この 11 冊はすべて、墨字版と巻次・構成がそろえられている。また、今回調査をおこなった点字資料は特に改編がくわえられることはなく、墨字版をそのまま翻字したものとなっている。ただし、墨字版にある挿絵・注は本資料では省略されている。

本資料の本文はすべて点字でかかれているが、表紙の題簽には「點字 尋常小学 國語讀本」と墨字左横書きで記されている。本文は両面印刷であり、1 ページあたり 16 行、1 行あたり 30 字程度となっている。奥付に相当するものがなく刊行年は不明であるが、すべての巻の遊び紙に「東京盲學校書之印」という蔵書印がある。東京盲学校は、東京盲啞学校が盲聾分離してできた学校であり、現在では筑波大附属視覚特別支援学校となっている。この名称が使われていたのは明治 42(1909)～昭和 25(1950)年のことである²。資料室の担当者によると、資料室の蔵書は、卒業生が自分の使っていた教科書等を寄付したものがおおいということである。このことから、この資料の刊行年代はほぼ、『尋常小学国語読本』が実際に使われていた時期とかさなるとかんがえてよいだろう。

また、墨字版国定国語教科書は修正がくりかえしおこなわれ、発行年度・発行機関によってさまざまな本文異同があるが、その使用年度は奥付の符号から確定できることが、貝(1991)であきらかになっている。本資料は墨字の国定国語教科書を翻字したものであることから本文の異同をみることで、本資料のもととなった墨字本の使用年度を推定することが可能であるとかんがえ、貝(1991:190-192)に掲載された第 3 期国定国語教科書の第 8 巻の異同の一覧表(表 B 『尋常小学国語読本』巻八 修正状況一覧)と本資料第 8 巻とを比較した。第 8 巻は、使用開始が大正 10 年であり大正 13 年版・昭和 3 年版・昭和 8 年版の文部省修正本が確認されている。この文部省修正本をうけて出版社によって出版された諸

¹ 吉田(1982)、(1983)を参照。

² 1944 (昭和 19)年に静岡県に学校疎開がおこなわれている。その際に資料の移動はおこなわれていないということである。

本があり、同時期の刊行であっても、それぞれいくらか異同がみられる。一覧表からそれらを比較した結果、本点字資料は、大正 13 年修正本との共通点が多くみられた。例えば第 9 課の表題は「ㇿㇿㇿㇿ(すみやき)」である。これは、大正 13 年修正本から「炭」から「炭焼」へ変更されている。また、昭和 3 年修正本からの修正点については、第 5 課の汽船が河口からさかのぼることができる距離が「四百五十里」から「六百里」へと変更されているが、この変更は本資料には反映されておらず、「ㇿㇿㇿㇿ ㇿ(数符 450 り)」となっている。ここから、本資料のもととなった墨字版『尋常小学国語読本』は、大正 13 年修正本の系統であることが考えられる。また、大正 13 年修正本諸本のなかでの異同をみると、大正 13 年から改定されたもののなかのうち第 21 課に収録されている和歌の第 3 句が「いはほをも」から「いはがねも」に変更になっているが、本点字資料ではこの変更点は反映されておらず、「ㇿㇿㇿㇿㇿ(いわおをも)」となっている。これは国立教育研究所所蔵日本書籍大正 13 年修正版と共通する。ここから、本点字資料は文部省修正原本ではなく出版社から出版された墨字国定国語教科書を点字に翻字したものである可能性がたかいのではないかとかんがえられる。

第 8 巻以外の各巻についても、古田(1984:379-389)の「校訂付記」をもとに墨字国定国語教科書諸本と本点字資料との異同をしらべた。その結果、第 8 巻と同様に、各巻ともに大正期に刊行されたものとの共通点が多くみられた。大正 14 年に修正本がだされている第 11 巻、大正 15 年修正本がだされている第 5 巻・第 7 巻・第 10 巻はそれぞれ初版よりは修正本と共通し、各巻とも昭和期の変更については反映されていないという結果がでた。

これにより、本点字資料全 11 冊は作られた時代におおきなゆれはなく、各巻ともにもととなった墨字国定国語教科書は、おおよそ 1924 (大正 13) 年～1928 (昭和 3 年) ごろにつくられた本であるといえるだろう。この年代は、さきにあげた点字かなづかい史の区分のなかでは、第 3 期に相当する。

本資料の成立年代を確認したところで、実際に本資料の本文の一部を紹介する。



ㇿㇿㇿㇿㇿ ㇿㇿㇿㇿㇿ ㇿㇿㇿㇿㇿ(こどもが お一ぜい おもてで) (2 巻 8 つき)

墨字版第 3 期国定国語教科書は歴史的かなづかいでかかれているが、本資料では長音表

記に長音符をもちいるいわゆる棒引きかなづかいの特徴があらわれる。また、墨字ではハ行で表記する助詞「は」が、ワ行の「わ」となっている。このように、本資料は歴史的かなづかいでかかれた墨字版とはことなる独特のかなづかいでかかれている。また、かなづかいは第 2 巻から第 12 巻まで一貫しており、かなづかいが確立されていたものとかんがえられる。

そこで、本資料の目次等をのぞいた本文中のかなづかいから、長音表記・助詞の表記・よつがなの表記についての調査をおこなった。以降用例は墨字のひらがなになおし、用例のうしろに巻と課をあげる。

3. 『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい

3. 1 助詞・よつがなの表記

本資料の本文中の点字かなは、歴史的かなづかいでかかれている墨字版第 3 期国定教科書にはあらわれるワ行の「ゐ」「ゑ」が「い」「え」に統一されている。また、合拗音「くわ」「ぐわ」もあらわれず、「か」「が」に統一されている。助詞の表記については、「は」はワ行「わ」となり、「へ」はア行の「え」となり、墨字の助詞の表記と異なる。ただし、助詞の「を」にかんしては、墨字と同様にワ行の「を」となる。

まつえを はしたる きしやわ ふーこー えの ごとき(12 巻 2 いづもたいしや)

「たいよーを にしえにしえと こーかいして」(8 巻 19 ころんぶすの たまご)
はやく かおを あらって にーさんと いっしょに おさらいを しましよー(3 巻 2 はやおき)

また、よつがなの表記は、字音語・和語ともに字音かなづかいを含む歴史的かなづかいと共通する。

ねーさん でて ごらんなさい つきが ではじめ ました(2 巻 8 つき)
よい おぢーさんわ たいそー かなしがって いぬを うづめて その うえに
ちーさな まつの きを うえました その まつの きわ ずんずん おーきく

なりました(2巻 17 はなさかぢぢー)

3. 4. 長音表記

第3章でのべたように、点字かなづかいに影響をあたえているとされる石川倉次のかなづかい、および明治33年式棒引きかなづかいは、ともに長音表記に長音符をもちいるという共通点はあるものの、その方針は完全に一致しているわけではない。これらの資料と本資料との比較のため、字音語と和語の長音表記のなかから、本資料中の例を以下にあげる。

ア列

たろーの おかーさんわ かぜを ひいて ねて います(2巻20 おくすり)

あー はづかしいことを もーしました(3巻26 はごろも)

イ列

ちーさな てを だして うまうまと いいます(2巻11 みよちゃん)

むかし むかし よい おぢーさんと わるい おぢーさんが ありました(2巻17 はなさかぢぢー)

わるい おぢーさんわ それを きいて その いぬを かりに きました(2巻17 はなさかぢぢー)

「これわ めづらしい みごと みごと」(2巻17 はなさかぢぢー)

いーえ そー 1どに のんでわ いけません(2巻20 おくすり)

やまの ふもとの しいの きわ(4巻15 しいの きと かしの み)

ウ列

「ゆーやけ こやけ あした てんきになーれ」(2巻7 ゆーやけ)

「このごろ なかまの ものが ねこに とられて こまるが なにか よい くふーわ あるまいか」(2巻12 ねずみの ちえ)

みんなの いう ことを ききおとすよーな ことわ ありません(2巻22 めとみみと くち)

うちぢゅー めが まわるほど いそがしう ございました(5巻13 かいこ)

エ列

べんけいが おーなぎなたで きりつけました(2巻4 うしわかまる)

ねーさん でて ごらんなさい(2巻8 つき)

オ列

「わたくしわ あの あかいおーきな はなが すきです」(2巻3 きくの はな)

べんけいわ とーとー こーさんして(2巻4 うしわかまる)

「きに まだ なんば とまって いましよーか」(2巻5 かんがえ もの)

「おとーさん もー いくつ ねたら おしよーがつですか」(2巻13 おしよーがつ)

あんなに とんだら ゆかいだろー(2巻23 これから)

きよーわ うちの むしぼしです たんすや つづら から きものを だして

かぜとーしの よい ところに かけて あります(3巻22 むしぼし)

おもう ぞんぶん はびこった(5巻15 しいの きと かしのみ)

和語・字音語についてもア列からオ列まですべてに、長音符を使用した長音表記がみえる。ただし、イ列・ウ列・エ列・オ列に長音符をつかわない長音表記もみられる。イ列では和語のなかで、長音とみなすこともできる語のうち、動詞「言う」「聞く」「引く」などの連用形、および形容詞「新しい」「美しい」「珍しい」の終止連体形といった活用のある語の活用語尾については、長音符がつかわれずにイ列のかなに「い」をそえるという表記となる。また、活用のない語についても、「椎(しい)」が同様の形をとる。ウ列では「言う」「食う」などの動詞の終止連体形の活用語尾には長音符がつかれず、ウ列のかなに「う」をそえる。また、ウ列拗長音のうち、「忙しう」「優しう」「嬉しう」といった形容詞連用形ウ音便形にも長音符がもちいられない。エ列は字音語で「べんけい」のように、エ列のかなに「い」をそえる形となる。オ列では、動詞の終止連体形「思う」「厭う」「問う」などの活用語尾が長音符を使用せず、オ列のかなに「う」をそえる。このように、長音表記はかならずしもすべての語に長音符がつかわれているわけではない。

4. まとめ

調査した本資料のかなづかいを、以下にまとめる。

- (1) 助詞の表記は「わ」「え」「を」を用いる。
- (2) よつがなの表記は字音かなづかいを含む歴史的かなづかいと同様である。

- (3) 長音表記には和語も字音語も長音符を使用する。ただし、活用語の活用語尾や字音語のエ列長音など長音符をもちいない語も一部ある。

本資料のかなづかいは、和語と字音語ともに、長音表記に長音符を使用することから、点字かなづかい史の区分では第3期にあたる点字の表記であることが推察される。これは、1. で推定した本資料がかかれた年代と一致する。しかし、第7章表1で確認した第3期の点字表記法書『点字規則』と比較すると、活用語の活用語尾にウ列・オ列の長音があらわれるばあい、本資料では長音符を使用しないが、『点字規則』は長音符をもちいるなど、点字表記史区分が同期のものとするものなかでも、こまかなかなづかいにはことなりがある。

本資料のかなづかいの特徴をしるために、「現代仮名遣い」、明治33年式棒引きかなづかい、石川倉次著『はなしことばのきそく』のかなづかいおよび本資料のかなづかいをそれぞれ比較したものが表1である。ただし、明治33年式棒引きかなづかいについては、歴史的かなづかいでかかれる和語の例をのぞいている。複数の表記形があらわれる場合は、本則からはずれるとされるもの、例外的な例をカッコ内にいれてしめた。

【表1 かなづかいの比較】

	現代仮名遣い	33年式棒引き	石川倉次	近代国語教科書	現行点字
助詞	「は」「へ」「を」	「は」「へ」「を」	「わ」「え」「を」	「わ」「え」「を」	「わ」「え」「を」
よつがな	「じ」「ず」 （「ぢ」「づ」）	歴史的かなづか いとおなじ	「じ」「ず」 （「ぢ」「づ」）	歴史的かなづか いとおなじ	「現代仮名遣 い」とおなじ
長音 ア列	ア列+あ	ア列+ー	ア列+ー	ア列+ー	ア列+あ
長音 イ列	イ列+い	イ列+ー （イ列+い）	イ列+ー （イ列+い） （イ列+ゝ）	イ列+ー （イ列+い）	イ列+い
長音 ウ列	ウ列+う	ウ列+ー	ウ列+ー （ウ列+う）	ウ列+ー （ウ列+う）	ウ列+ー （ウ列+う）
拗長音	イ列+ゅう	イ列+ゆー	イ列+ゆー	拗音符+ウ列+ ー （イ列+う）	拗音符+ウ列+ ー
長音 エ列	エ列+え （エ列+い）	エ列+ー （エ列+い）	エ列+ー	エ列+ー （エ列+い）	エ列+え （エ列+い）
長音 オ列	オ列+う （オ列+お）	オ列+ー	オ列+ー （オ列+を） （オ列+ゝ）	オ列+ー （オ列+う）	オ列+ー （オ列+う） （オ列+お）
拗長音	イ列+ょう	イ列+よー	イ列+よー	拗音符+オ列+ ー	拗音符+オ列+ ー

この表より、助詞の表記については、近代の点字資料となる本資料は、現行の点字かなづかいと同様のものではなかったことがうかがえる。しかしながら、よつがなの表記および長音表記については、現行の点字かなづかいとはことなるものである。特に、長音表記にかんしては、本資料のかなづかいは外来語以外でもア列からオ列まですべての列に長音符に

よる長音表記があらわれるが、現代点字かなづかいでは和語と字音語に長音符があらわれるのはウ列とオ列にかぎられ、それをのぞくと「現代仮名遣い」と同様である。また、点字かなづかいへの関連がかんがえられている石川倉次についてその著書のかなづかいをみると、本資料の点字かなづかいとは異なる部分もおおくあり、よつがなの表記やエ列字音語長音表記などに歴史的かなづかいの影響もみえる本資料とくらべると、より表音的な表記を採用していることがわかる。ただし、助詞の表記にかんしては近代や現行の点字かなづかいと共通する点もある³。

近代点字国語教科書のかなづかいの調査をした結果、現行の点字かなづかいとは助詞の表記や長音表記に長音符をもちいるなどの共通点があり、日本語点字が墨字とは独立した点字かなづかいの特徴を保持しつつけていることがうかがえる。その一方、現行の点字かなづかいと本資料のかなづかいは完全に一致するわけではない。今回調査した点字国語教科書のかなづかいは、とくに字音語の長音表記においては現行の点字かなづかいよりは明治33年式棒引きかなづかいとの共通点のほうがおおく、第7章で点字表記法書の記述から、点字表記史区分の第3期では表音性のたかいかなづかいであったものが第4期をへて現行の点字かなづかいが「現代仮名遣い」に接近したことを確認したが、実際の近代点字資料からも同様の傾向がたしかめられる。

現行の日本語点字のかなづかいは墨字の「よりどころ」である「現代仮名遣い」とはことになっており、以前から指摘のあった日本語点字考案者石川倉次のかなづかいや、明治33年式棒引きかなづかいとの共通点も確認できる。しかしながらそれらと完全に一致するものではない。さらに、今回調査をおこなった『点字 尋常小学国語読本』のなかにあらわれるかなづかいは、現行の点字かなづかいとも一致しない。現行の点字かなづかいは、長音表記に着目するならば本資料のかなづかいよりも「現代仮名遣い」と共通する点がおおいといえる。

【参考文献】

貝美代子(1991)「国定国語読本の奥付符号と使用年度」『日本近代語研究』1

金子昭(2007)『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』日本点字委員会

³ ただし、『はなしことば の きそく』では助詞の「を」にかぎらずすべての語について「お」と「を」はすべて「を」のかなに統一されており、助詞にのみ「を」があらわれる点字かなづかいとはことになっている。

東京盲学校(1935)『東京盲学校 60 年史』

日本点字委員会(2001)『日本点字表記法 2001 年版』

古田東朔(1984)『小学読本便覧』第 7 卷武蔵野書院

吉田裕久(1982)(1983)「尋常小学国語読本」の研究(1)(2)「愛媛大学教育学部紀要」28、29

第9章

近代点字新聞『点字大阪毎日』のかなづかい

—第1号から第25号までを対象として—

1. はじめに

8章で、点字版第3期国定国語教科書『点字 尋常小学国語読本』のかなづかいについて調査をおこなった。

その結果、和語にも字音語にも表音的な表記があらわれる表音性のたかいかなづかいによってかかれていたことがわかった。そのかなづかいは、長音表記に長音符をもちいる棒引きかなづかいであり、明治33年式棒引きかなづかいとの関連がうかがえるものであった。

日本語点字の展開と普及には各地の盲学校の関係者の努力によるところがおおきいが、そのほかに点字新聞である『点字大阪毎日』『点字毎日』の影響のおおきさがしられている。そこで、本章では大正期に発刊された『点字大阪毎日』を調査資料としてとりあげる。

2. 『点字大阪毎日』について

『点字大阪毎日』は、大阪毎日新聞社の新社屋落成記念事業のひとつとして1922（大正11）年5月に第1号が発刊された、週刊の日本語点字新聞である¹。東京盲啞学校の教員などをつとめた中村京太郎²を初代編集長とする。1943（昭和18）年に『点字毎日』と改題され、以来現在も発行されつづけている日本語点字新聞である。また、『点字大阪毎日』は日本語点字および日本語点字表記の普及におおきく寄与したメディアであると指摘されている。また、墨字よりもはやく創刊号からすでに歴史的かなづかいよりも表音的な独自

¹ 日本語点字新聞は、それ以前にも中村京太郎によって『あけぼの』がだされていた。（森田2011:80）

² 中村京太郎については、『道ひとすじ—昭和を生きる盲人たち』（あずさ書房・1993）に小伝がある。

のかなづかいをもちいてかかれていることがしられており、近代日本語点字の文字・表記研究の資料として重要なものであるといえる³。

そこで、筑波大学視覚特別支援学校資料室所蔵『点字大阪毎日』をもちいて、調査対象は、『点字大阪毎日』第1号（大正11年5月11日発行）から第25号（大正11年10月26日刊）までの約半年分を範囲とし、助詞「は」「へ」「を」の表記、よつがな、長音表記について用例を採取した。

3. 『点字大阪毎日』のかなづかい

今回調査をおこなった第1号から第25号までは、毎週木曜日に発行されており、全16ページの両面印刷である。おおきな表記の方針の変化のようなものはみられず、一定の傾向があったため、これをひとつのかなづかいとし、分析した。以下、用例の掲出は点字かなを墨字かなに翻字し、用例の最後に号数をカッコ内にいれてしめた。

3. 1 助詞の表記

墨字では「は」「へ」とかかれる助詞は、それぞれ「わ」「え」に相当する点字かなでかかれる。

てんじ おおさか まいにちわ いよいよほんじつ だい1ごーを はっかんします (1号)

かくしょーてんに おたちよりに なり くえの みやげを おもとめに なった (1号)

ただし、助詞「を」は「を」に相当する点字かなでかかれる。

おおさか まいにち しんぶん-しゃが てんじ しんぶんを はっこーする ことになった (1号)

³ 『点字大阪毎日』および『点字毎日』については、銭本(1975)、眞野(2002)、森田昭二(2011)といった先行文献と、毎日新聞社の『点字毎日』について紹介されているウェブページ <http://www.mainichi.co.jp/corporate/tenji.html>(アクセス日:2013年7月15日)を参照した。

3. 2 よつがな

よつがなは、和語・字音語ともに歴史的かなづかい（字音かなづかい）に準ずる。

みししっぴい-がわわ 1ねんぢゅーに みづの ほかに 4-おくとの ぶったい
を うみえ ながすと いう。(1号)

ひじょーに そーめいな づのーを もって いるので きんしんしゃに すすめ
られて じゅけんしたので ある (1号)

かじわ たばこの ひから でて ていこく ほてると ねこを たすけよーと
して でおくれた ぎりしゃの おぢーさんを やいた それで ぢしんわ てい
だいと ちゅーおー きしよーだいとで いつものよーに しんげんち あらそい
を して いる (2号)

また、外来語の表記にも「ぢ」「づ」に相当する点字かながあらわれる。

こいを ひして しづかに ほほえむ ばんぢー あでやかな あねもね しよじょ
にも にた ちゅーりっぷ (1号)

あたらしい せつが ふらんすの ばーれー さるづー ふおーの 3にんに よ
って となえられ おーべいの いがくかいを おどろかして いる。(11号)

この他、外来語に「ぢ」があらわれたのは以下のとおりである。「まっきんぶりっぢー」(1号)、「ぢふてりあ」(8号・14号)、「はーぢんぐ(人名)」(8号・10号)、「ふらぢおれっと」(9号)、「えぢんばら」(12号)、「すてーぢ」(13号)、「ぢんばりすと(人名)」(13号)、「ぢゃすたーぜ」(13号)、「ぢあすたーぜ」(14号)、「ぢてりっくす(人名)」(15号)、「きゅーぶりっぢ」(19号)、「りお で ぢやねいろ(地名)」(19号)、「えぢそん(人名)」(22号・25号)、「がんどす(地名)」(24号)、「ぢてりっく(人名)」(25号)。このうち、13号の「ぢゃすたーぜ」と14号の「ぢあすたーぜ」はどちらも酵素の名称「ジアスターゼ」であるが、号によっても表記のゆれがあることがわかる。

3. 3 長音の表記

ア列長音

ア列の長音表記は、字音語の用例はなく、和語でア列のかなに長音符をそえる「ア列＋一」の長音表記がみられた。

「や一 さきほどの と一げの ちゃみせの しゅじんでわ ないか」(5号)
どくしゃから こ一も したら あ一も したらと わざわざ てがみまで よせて くれる ことである。(9号)
「か一さんわ？」 いも一とが ききました(10号)
「あ一 あの ひとか」と うなづく ものも お一かろ一(15号)

また、外来語の長音表記にも長音符がもちいられる。

ちかごろ あった まっさ一じと いりよ一 たいそ一の しけんに(1号)

ただし、1例、「お母さん」を「おかあさん」と長音符を使わずに表記している例があった。

1 4 5になると たいていの こどもわ おかあさんより はるかに おおきい(5号)

イ列長音

イ列の長音表記は、字音語の用例はなく、和語ではイ列のかなに長音符をそえる表記「イ列＋一」がみられた。

はくはつの おぢ一さんが ききいれて くれなかったのか(6号)

また、活用語の活用語尾にイ列のかなに「い」をそえる表記がみられた。

むねの なみたつ はるのくれの いいらぬ は一とを なぐさめて くれる(1号)

びょーにんで むなぐるしいと いう ばあいも (4号)

外来語の表記はウ列のかなに長音符をそえる形となる。

とざんたいわ 2まん 7せん ふいーとに たっす (10号)

(3) ウ列長音

ウ列長音はウ列のかなに長音符をそえる表記「ウ列＋ー」が、和語・字音語・外来語で見られた。

やまざくらが ちりはじめる ゆーぐれの ことで あった (4号)

きゅー - こっかい かいふく うんどーの くーきが のーこーと なるに つれ
(6号)

るーまにあ こーていの たいかんしきわ 16にち (25号)

また、ウ列拗長音が字音語と外来語にみられるが、これは「拗音符＋ウ列のかな＋長音符」となる。これも現在の点字表記法と共通する。

ふつか きょーいく ひょーぎかいに おいて りゅーこく おおたに りっき
よー せんしゅーの しょだいがく および くまもと いせん みな しんたい
がくれいに よる ことを かけつした (1号)

ぜらにゆーむわ なつにわ ことに たくさんの はなを つけて (7号)

また、ウ列の和語のうち、活用語の活用語尾はウ列のかなに「う」をそえる形となっていた。

せんねんと たつ うちにわ せんまんの ひとの いのちを すくう ことが
できると (12号)

活用語以外では、和語「タベ」で1例、長音表記を使わずに「ウ列＋う」となる例があ

った。

ゆうべを かざる ぎょっこー (みかづき) の いちわんちょおく きえしづみ (17号)

ただし、「夕」が「ゆー」となる例は「ゆーぐれ」(4号)、「ゆーはん」(5号)、「ゆー」(18号)、「ゆーげ」(21号)、「ゆーしょく」(21号)、「ゆーひ」(22号)、「ゆーかぜ」(22号)、がそれぞれ一例ずつ、「ゆーがお」が2例(15号・18号)、「ゆーがた」が2例(7号・14号)、「ゆーやみ」が2例(7号・22号)、「ゆーべ」が3例(9号・16号・24号)の計16例となっており、ウ列のかなに長音符をそえる形が優勢となっており、長音表記をつかわない1例は、表記の不統一とかがえられる。

また、動詞「言う」の終止連体形は、「いう」であった⁴。

けっかくきんの こなを ちゅーしゃしても のんでも よいと いうので ある (1号)

(4) エ列長音

エ列の長音は和語と外来語にエ列のかなに長音符をそえる表記「エ列+ー」があらわれる。

ねーさんかぶりの はるよ かつよを ひつとーに (22号)

「かーさん ぼくも がくこーえ ゆきたいねー」 ははわ ないた (22号)

にほん こくみんに たいし つぎの めっせーじを あたえられた。(3号)

また、字音語の長音表記はエ列のかなに「い」をそえる表記「エ列+い」となる。

⁴ 金子(2007:188)で、阿佐博の談話として、以下のとおり紹介されている。「『いう』も、発音どおりに「ユー」となっている。この「ユー」の表記は『点字毎日』や日本点字図書館の表記規則にも採用され、戦後もかなり長く行なわれていたものであった。」このように、昭和期の『点字毎日』とその前身である本資料ではかなづかいにことなりがあることが推察できる。

たいざん のみ めいどーして ねずみ 1ぴきも いでず (3号)

(5) オ列長音

オ列長音は、和語・字音語・外来語でオ列のかなに長音符をそえる表記「オ列＋一」があらわれる。

どー いたしまして こちらから かんしゃ いたします (3号)

おんなわ 23 4で あっただろー (4号)

おーぎの かなめに とーざかるほど すえひろきが (5号)

ふへい ぶんしを じょきよする ことが また ひつよーの ことと おもーので
ある (3号)

まず よきの せいせきを えたと もーすべきで あります (15号)

すえーでん どいつ えすとにあ とるこ ぼーらんど うくらいなとーと つーし
よーを ひらいて (4号)

むりな よーきゅーを かす わけにわ ゆかないが (3号)

拗長音は和語「今日」と字音語・外来語にみられるがいずれも現行の点字表記と同様に「拗音符＋オ列＋一」となる。

そこで きよーわ ひとつ わがはいの みのうえばなしでも して みよーと い
う わけだ (14号)

えいこく しゅしよー ろいど じょーじ しなどが たいせんで よわりきった
おーしゅーの かいふくを はかる ために (1号)

長音に長音表記をつかわない例として、オ列のかなに「う」をそえる表記「オ列＋う」があらわれた。動詞の終止連体形の活用語尾がこれにあたる。また、「凍る」の語幹の例が1例あった。

うごきはじめたかと おもうと すがたわ こつぜんと きえて (1号)
てあらう みづの まづ こうりける (16号)

ただし、動詞「思う」の終止連体形については「おもう」と「おもー」の両形があらわれた。「おもう」は22例(1巻2例、2巻2例、10巻2例、11巻2例、14巻1例、15巻2例、16巻1例、17巻2例、19巻1例、20巻4例、21巻1例、24巻1例、25巻1例)、「おもー」は10例(3巻4例、5巻3例、6巻3例)となっている。両表記形が併存する号はなく、「おもー」は10巻以前にのみあらわれるという分布がみられる。

「凍る」については、オ列のかなに「お」をそえる形も1例あらわれる。

れいえん (つめたき けむり) こおり うづまきて (17号)

また、名詞形の「氷」の表記についても同様に「こおり」となる例が1例みられる。

ぎょーぎょーわ そーせつ (しも こおり) よりも きよく (9号)

同様に、オ列のかなに「お」をそえる形は、「多い」「大きい」「遠い」といった、歴史的かなづかいではオ列のかなに「ほ」または「を」をそえる語にあらわれた。

おおさか まいにちの ごとき だいしんぶんにして はじめて できる じぎょー
で あろー (2号)

おもやと ちゅーげんべやとわ とおく へだって いるので (2号)

ばいうどきに おおい りゆーわ しつどとの かんけいも おおいに かんがえね
ば ならぬ (7号)

むらの ちゅーおーに もんぜんの おおきい ふるい まつと うしろの おおき
な やぶと (10号)

ただし、「狼」については、長音符をもちいる例が1例ある。

しがいに つく お一かみの よ一に ころされた おんなの しがいを しとうて
(8号)

また、「多い」が「お一い」に、「多く」が「お一く」に、「おおいに」が「お一いに」、
「遠い」が「と一ざかる」となる例がそれぞれ1例ずつあった。

けっかく かんじゃも しぼ一りつも お一い (5号)

お一くの かんじゃを あつかった (7号)

わがはいわ お一いに やそきよ一の かみに かんしゃするよ (15号)

お一ぎの かなめに と一ざかるほど すえひろきが (5号)

助動詞「う」はすべて長音符で表記されるが、1例のみ、「お」となっているものがあつた。

じゆ一を うしなおと した (1号)

このように、本資料の1号から25号のかなづかいを調査したところ、一部に表記の不統一もみられるが、ほぼかなづかいの方針は一定しているとかんがえられる。かなづかいの特徴をまとめると以下のようなになる。

- (1) 助詞「は」「へ」「を」は「わ」「え」「を」となる
- (2) よつがなは字音かなづかいをふくむ歴史的かなづかいと同様である。
- (3) 長音表記は、和語・字音語にもア列からオ列まで長音符を用いた長音表記があらわれる。ただし、エ列の字音語はエ列のかなに「い」をそえる。イ列・ウ列・オ列の活用語の活用語尾はそれぞれイ列のかなに「い」をそえる、ウ列のかなに「う」をそえる、オ列のかなに「う」をそえる形となる。また、オ列の和語のうち歴史的かなづかいではオ列のかなに「ほ」「を」とかかれる語は、原則としてオ列のかなに「お」をそえる形となるなど、一部に長音符がつかわれない長音表記がある。

これらの特徴は、和語・字音語ともに長音表記に長音符をもちいるという特徴をもつこ

とから、点字表記史区分でいうところの第3期に相当するかなづかいであるとかがえられる。これは、本資料の刊行年代とも合致する。

2. 2でのべた点字資料・点字関連資料のかなづかいと比較すると、「明治33年式棒引きかなづかい」および石川倉次のかなづかいとはことなる独自のかなづかいであるが、それぞれ共通点もみいだすことができる。以下、表1から表3で「明治33年式棒引きかなづかい」、石川倉次著『はなしことばのきそく』のかなづかい、『点字 尋常小学国語読本』のかなづかい、『点字大阪毎日』のかなづかいを比較した。複数の表記形があらわれる場合は、例外的な例をカッコ内にいれてしめた。また、表2にかんして、和語のウ列拗長音は採取できなかった資料もあり、比較ができないために表では省略した。

【表1 助詞・よつがなの表記の比較】

	33年式棒引き	石川倉次	点字国語読本	点字大阪毎日
助詞	「は」「へ」「を」	「わ」「え」「を」	「わ」「え」「を」	「わ」「え」「を」
よつがな	歴史的かなづかいと同じ	「じ」「ず」 (一部「ぢ」「づ」)	歴史的かなづかいとおなじ	歴史的かなづかいとおなじ

【表 2 和語長音表記の比較】

	33年式棒引き	石川倉次	点字国語読本	点字大阪毎日
ア列	原則として歴史的かなづかいと同じ ⁵	ア列＋ー	ア列＋ー	ア列＋ー
イ列		イ列＋ー (イ列＋い) (イ列＋ゝ)	イ列＋ー (イ列＋い)	イ列＋ー (イ列＋い)
ウ列		ウ列＋ー (ウ列＋う)	ウ列＋ー (ウ列＋う)	ウ列＋ー (ウ列＋う)
エ列		エ列＋ー	エ列＋ー	エ列＋ー
オ列		オ列＋ー (オ列＋う) (オ列＋ゝ)	オ列＋ー (オ列＋う)	オ列＋ー (オ列＋う) (オ列＋お)
拗長音		イ列＋よー	拗音符＋オ列＋ー	拗音符＋オ列＋ー

【表 3 字音語長音表記の比較】

	33年式棒引き	石川倉次	点字国語読本	点字大阪毎日
ウ列	ウ列＋ー	ウ列＋ー	ウ列＋ー	ウ列＋ー
拗長音	イ列＋ゆー	イ列＋ゆー	拗音符＋ウ列＋ー	拗音符＋ウ列＋ー
エ列	エ列＋い	エ列＋ー	エ列＋い	エ列＋い
オ列	オ列＋ー	オ列＋ー	オ列＋ー	オ列＋ー
拗長音	イ列＋よー	イ列＋よー	拗音符＋オ列＋ー	拗音符＋オ列＋ー

ここから、『点字大阪毎日』のかなづかいは、点字かなづかいに影響をあたえたとされる「明治33年式棒引きかなづかい」や日本語点字考案者である石川倉次⁶の表音的かなづかいは完全に一致しないことがわかる。ただし、どの資料も長音表記に長音符をもちい

⁵ ただし、感動詞「あー」「まー」など、和語のうち一部の語の長音表記に長音符がつかわれることがある。

⁶ 石川倉次は中村京太郎に依頼されて『点字大阪毎日』第373号(1929年刊)に寄稿しているなど、『点字大阪毎日』編集者との交流もあったことは、金子(2007:178-184)にくわしい。

る「棒引きかなづかい」に分類されるという共通点がみられる。また、助詞の表記は石川倉次のかなづかいとの共通点がみられる。しかし長音表記については、字音語のエ列がエ列のかなに「い」をそえる形となる点は、石川倉次のかなづかいよりは「明治 33 年式棒引きかなづかい」と共通することがわかった。

また、ほぼ同時期に刊行されたと推定される点字国語教科書『点字 尋常小学国語読本』と比較すると、かなづかいの方針はほとんど一致する。ただし、和語のオ列長音のうち、「多い」「大きい」など、現代仮名遣いでもオ列のかなに「お」をそえる形となる語については、今回調査した『点字大阪毎日』はオ列のかなに「お」をそえて、「おおい」「おおきい」となるが、『点字 尋常小学読本』では長音符をもちいて「おーい」「おーきい」となっており、方針のことがりがある。さらに、どちらの資料も活用語の活用語尾については原則として長音表記をもちいていないが、『点字大阪毎日』では動詞「思う」の終止連体形に長音符をもちいた「おもー」の形が 11 例みられた。活用語の活用語尾についても長音符をもちいた長音表記をこころみた例とかがえられる⁷。どちらの資料も、点字表記史区分でいうと第 3 期にあたるものであるが、同じ期の資料のあいだでもかなづかいにちがいがみられることが、実際の資料から確認できた。

4. おわりに

『点字大阪毎日』は、近代の点字関係者による情報発信・受信の主要メディアのひとつであり、日本語点字資料のなかでは重要なものである。しかしながら、このような近代の点字新聞が日本語文字・表記研究の資料としてつかわれたことはなかった。

墨字による学校教育教材・政府公文書のかなづかいはおおむね歴史的かなづかいでかかれていた 1922（大正 11）年に、点字新聞『点字大阪毎日』ではすでに独自の表音的かなづかいがつかわれていたことがわかった。本資料と、日本語点字に影響をあたえたとされる「明治 33 年式棒引きかなづかい」や点字考案者石川倉次のもちいたかなづかいとの比較をおこなったところ、それぞれに共通点はみられるものの、それらとは完全に一致するものではなく、独立したなづかひが存在したといえる。また、このかなづかひは現行の

⁷ 7 章で確認したように、点字表記史区分第 3 期に刊行された点字表記法書『点字規則』では、活用語の活用語尾にも長音符がもちいられている。今回採取された用例は、このような表記のさきがけであるといえよう。

点字かなづかいとの共通点もみられ、現在もひろくつかわれている点字かなづかいの骨子が、点字表記史区分の第3期にはすでにできあがっていたといえる。

また、ほぼ同時期に刊行された点字国語教科書『点字 尋常小学国語読本』のかなづかいと比較すると、一部の語でかなづかいの方針のことが確認できた。近代点字資料の文字・表記研究は完全に統一されていたとはいえ、多分野にわたる点字資料の調査が必要となろう。

そして点字新聞『点字毎日』は現在も継続して刊行されている点字新聞である。刊行時期によっては、活用語の活用語尾の長音表記にも長音符をもちいるなど、より表音的なかなづかいを採用した時期もあったことが指摘されており、今後は、他の期間に刊行されたものにかんしてもかなづかいの調査をおこない、日本語点字表記史研究の資料としていきたい。

【参考文献】

- 金子昭（2007）『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで—』（日本点字委員会）
- 錢本三千年（1975）『点字毎日』の半世紀『新聞研究』（290）
- 眞野哲夫（2002）「視覚障害者の自立支え社会へ発信する窓に—『点字毎日』80年の歩み」『新聞経営』2002（2）
- 森田昭二（2011）「中村京太郎と点字投票運動—『点字大阪毎日』の論説と記事を通して」『Human Welfare』3（1）
- 道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち編集委員会（1993）『道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち—』（あずさ書房）

第 10 章

おわりに

1. 全体のまとめ

これまで、第 1 期国定国語教科書にみられた「明治 33 年式棒引きかなづかい」、かなもじ論者であり日本語点字考案者である石川倉次の著書『はなしことば の きそく』のかなづかい、清国留学生を対象とした日本語教材のかなづかい、近代点字国語教科書・近代点字新聞のかなづかいについて、調査をおこなった。

これらのかなづかいの共通点は、近代に刊行された歴史的かなづかいではなく表音的なかなづかいでかかれた資料のうち、長音表記に長音符「一」をもちいるいわゆる「棒引きかなづかい」でかかれているということである¹。もちろん、ここであげた資料で棒引きかなづかいを網羅できたわけではなく、国語学者やかなもじ論者ののこした著書や辞書の索引等、棒引きかなづかいがもちいられている資料はこのほかにもある。そして近代点字かなづかいの調査は、点字表記史区分第 3 期の初期にあたる資料を分析したのみであり、さらなる調査が必要である。近代日本語教科書・教材類も、今回とりあげた資料よりも表音的なものから、歴史的かなづかいでかかれているものまでさまざまである。また、歴史的かなづかいではない表音的な工夫をしたかなづかいは、棒引きかなづかいにかぎらない。たとえば、井口(2009) で、明治・大正期の新聞のかなづかいについての研究をおこなっており、いくつかの新聞において独自の表音的なかなづかいがもちいられていたことがあきらかになっている。ほかには外地での「国語」教科書のかなづかいも、そのおおくが表音的なかなづかいでかかれている²が、それは棒引きかなづかいとはかぎらない。たとえば

¹ 調査した資料のうち『漢訳日本語会話教科書』は棒引きかなづかいには分類されないが、「明治 33 年式棒引きかなづかい」との特徴もおおくもつかなづかいでかかれていた。

² 山口(1919:457-8)に「現在台湾の公教育では初学年から歴史的仮名遣を使用してゐるが、朝鮮では普通学校の四学年までは大体発音通りの仮名遣いを採り、五学年から普通の歴史的仮名遣に移ることにして、而も「ハ、ヲ、ヘ」の三助詞だけは特に最初から歴史的にすることに規定している。満州では徹底的に最初四個年は発音仮名遣により、公学校の高等科になつて歴史的仮名遣に移ることにしてゐるが(略)」とある。また、このように植民地での日本語教育の初級において表音的なかなづかいがもちいられた理由として、「国字表音の

1901(明治 34) 年から刊行がはじまった『台湾教科用書国民読本』は、「ももたろお」のように、長音符のかわりにかなをそえる長音表記でかかっている³。

このように、本研究では棒引きかなづかいの教科書類を中心に調査したが、それは限定された範囲でしかないことはいなめない。しかしながら、その「棒引きかなづかい」とされるもののなかでも実際の資料を精査すると、さまざまな差異があることがわかる。以下に、とりあげた資料のかなづかいを比較した表をあげる。ただし、近代日本語教科書・教材類については、『言文対照 漢訳日本文典』を代表例としてあげた。また、参考のために「現代仮名遣い」と現行の日本語点字かなづかいも表にいった。複数の表記形があらわれればあいは、特殊なもの、例外的なもの、許容とされるものをカッコ内にいれてしめした。また、同一の語で表記のことがあらわれ、そのうち用例数の非常にすくなかったものは、誤植などの表記の不統一と判断し、表には反映しなかった。

原則を社会的に変改しようといふよりは、教授方便上の考察に基づいたもので、国語学習の初頭に於いて歴史的仮名遣を用ゐると、其のために文字の音価を間違へさす恐れがある。」と説明している。また、このように「外地」での日本語教育に表音的かなづかいがもちいられたことにたいして、安田(2003) では以下のように分析している。

「内地」の議論において表音表記による簡易化の主張が不利だったのは、音声レベルでの統一した「日本語」が確定できず、現時点での音声を直接には反映しない歴史的仮名づかいの方が統一性をたもつには有利だったためといえるだろう。それとは反対に、なにもないところに「国語」をおしこむには、音声としても表記としても明確な基準がなければならず、それだけ「外地」からの「標準語」設定の要請は切なるものであった。

植民地の「国語」教育との関連のなかにも「国語国字問題」がおかれていたことは確認できるだろう。(安田 2003:190)

³ 『台湾教科用書国民読本』のかなづかいと「現代仮名遣い」とのちがいについては、蔡(2003:900) で以下のようにまとめられている。「①助詞「を・は・へ」を「お・わ・え」で表記する。②お列長音「う」を「お」で表記する。例えば、おとおと(弟)。③お列拗音の長音「う」を「お」で表記する。例えば、「ぎょおぎ(行儀)」。二語の連合により生じた「ち」と「づ」は「じ」と「ず」で表記する。」

【表1 助詞・よつがなの表記の比較】

	現代 仮名遣い	第1期国定 国語教科書	漢訳 日本文典	はなしこと ばのきそく	現代点字 かなづかい	点字尋常小 学読本	点字 大阪毎日
助詞	「は」「へ」 「を」	「は」「へ」 「を」	「は」「へ」 「を」	「わ」「え」 「を」	「わ」「え」 「を」	「わ」「え」 「を」	「わ」「え」 「を」
よつ がな	連濁・「同音 の連呼」で 「ぢ」・「づ」	歴史的かな づかいとお なじ	歴史的かな づかいとお なじ	連濁のみ 「ぢ」・「づ」	連濁・「同音 の連呼」で 「ぢ」・「づ」	歴史的かな づかいとお なじ	歴史的かな づかいとお なじ

表1は、助詞とよつがなの表記についての比較である。ここでわかるのは、墨字教科書類は一貫して「は」「へ」「を」となっており、点字教科書類は「わ」「え」「を」となっている点である。墨字資料のなかでは石川倉次著『はなしことばのきそく』が「わ」「え」「を」と点字資料と同一の表記となっており、以前から指摘されている、点字かなづかいへのかなもじ論者である石川倉次の影響がうかがえる⁴。

よつがなにかんしては、近代の教科書類は基本的に、歴史的かなづかいを踏襲し、「じ／ぢ」「ず／づ」を併用する。表音的かなづかいでかかれる字音語であっても、よつがなのみは字音かなづかいにしたがって「ぢ」「づ」がつかわれていることが特徴であり、これは墨字・点字ともに同様の結果となった。このなかで唯一、『はなしことばのきそく』は、連濁の表記に「ぢ」「づ」をのこすのみで、そのほかの語については「じ」「ず」に整理していた。

表2は、和語の長音表記の比較である。なお、ウ列・オ列の拗長音はすべての資料にあらわれたわけではなかったため、省略した。明治33年式棒引きかなづかいおよび、それとよく似た近代日本語教科書・教材類では和語は歴史的かなづかいでかかっている。『はなしことばのきそく』および近代日本語点字資料は和語にも棒引きかなづかいをもちいるが、すべての長音表記に長音符をもちいるわけではなく、活用語の活用語尾には長音符をもちいないという傾向がみられた。活用語の活用語尾にまで長音符をもちいるのは、本研究でとりあげた資料のなかでは点字表記史区分の第3期にあたる点字表記法書『点字規則』

⁴ ただし、3章で確認したように、『はなしことばのきそく』では資料中にア行の「お」のかながつかわれず、「を」に整理されているため、「お」と「を」を併用する日本語点字のかなづかいとはまったく同一とはいえない。

のみである⁵。

【表 2 和語長音表記の比較】

	現代 仮名遣い	第 1 期国定 国語教科書	漢訳 日本文典	はなしこと ばのきそく	現代点字 かなづかい	点字尋常 小学読本	点字 大阪毎日
ア列	ア列+あ	原則として 「歴史的か なづかい」 とおなじ ⁶	原則として 「歴史的か なづかい」 とおなじ ⁷	ア列+ー	ア列+あ	ア列+ー	ア列+ー
イ列	イ列+い			イ列+ー (イ列+い) (イ列+ゝ)	イ列+い	イ列+ー (イ列+い)	イ列+ー (イ列+い)
ウ列	ウ列+う			ウ列+ー (ウ列+う)	ウ列+ー	ウ列+ー (ウ列+う)	ウ列+ー (ウ列+う)
エ列	エ列+い (エ列+え)			エ列+ー	エ列+い (エ列+え)	エ列+ー	エ列+ー
オ列	オ列+う (オ列+お)			オ列+ー (オ列+う) (オ列+ゝ)	オ列+ー (オ列+お) (オ列+ゝ)	オ列+ー (オ列+う)	オ列+ー (オ列+う)

また、今回調査した『点字 尋常小学読本』と『点字大阪毎日』第 1 号から第 25 号までは、ともに点字表記史区分第 3 期にあたる資料であるが、和語のオ列長音の方針に差異がみられる⁸ものの、現行の点字かなづかいよりは共通点がおおい。現代点字のかなづかいでは、長音表記に長音符があらわれるのはウ列とオ列にかぎられる。和語にかんしていえば、現代点字かなづかいは近代点字資料のかなづかいよりは、墨字の「現代仮名遣い」とにているといえる。

⁵ 第 7 章表 1 参照

⁶ 感動詞「あー」「まー」「おかーさん」など、和語のうち一部の語の長音表記に長音符がつかわれることがある。

⁷ 注 3 と同様に、一部の語の長音表記に長音符がつかわれる。

⁸ 9 章 3. を参照。

【表 3 字音語長音表記の比較】

	現代仮名遣 い	第 1 期国定 国語教科書	漢訳 日本文典	はなしこと ばのきそく	現代点字 かなづかい	点字尋常小 学読本	点字 大阪毎日
ウ列	ウ列+う	ウ列+ー	ウ列+ー	ウ列+ー	ウ列+ー	ウ列+ー	ウ列+ー
拗長音	イ列+ゅう	イ列+ゅー	イ列+ゅー	イ列+ゅー	拗音符+ウ 列+ー	拗音符+ウ 列+ー	拗音符+ウ 列+ー
エ列	エ列+い	エ列+い	エ列+い	エ列+ー	エ列+い	エ列+い	エ列+い
オ列	オ列+う	オ列+ー	オ列+ー	オ列+ー	オ列+ー	オ列+ー	オ列+ー
拗長音	イ列+よう	イ列+よー	イ列+よー	イ列+よー	拗音符+オ 列+ー	拗音符+オ 列+ー	拗音符+オ 列+ー

表 3 は字音語長音表記を比較したものである。各資料ともに、ウ列・オ列にかんしては長音符をもちいているが、エ列は、『はなしことば の きそく』をのぞいては「エ列+い」となっており、ほぼ共通するかなづかいであるといえるだろう。エ列字音語の長音表記が「エ列+い」となるのは、明治 33 年式棒引きかなづかいの特徴である⁹ことから、これらの棒引きかなづかいについても、「エ列+い」となるものは、明治 33 年式棒引きかなづかいとの関連がうかがえるといえるだろう。

このように、ひとことで歴史的かなづかいにたいして、「表音的なかなづかい」とひとくくりにしてしまうことはできず、かなづかい改定論・運動はさまざまな試行をつづけながら実践されていたことがわかる。とはいっても、「棒引きかなづかい」とよばれる長音表記に長音符をもちいるかなづかいでかかれた資料には、共通する特徴的な表記があるともいえる。とくに、明治 33 年式棒引きかなづかいは、近代日本語教育教材資料および近代点字資料に影響をあたえたことが、実際の資料の調査からもあきらかとなった。ここから、いままでは墨字とは別個のものとしてかんがえられてきた点字のかなづかいにかんしても、今回調査した資料にあらわれる近代日本語点字のかなづかいは、日本語表記史の観点からは、明治 33 年式棒引きかなづかいとちかい棒引きかなづかいであるといちづけることができる¹⁰。

⁹ 2 章 5. を参照。

¹⁰ 今回の調査で近代点字資料のかなづかいが、墨字でかかれたものとの共通点がおおいということがいえたとしても、それで日本語点字の文化や歴史の独自性がゆらぐことはなく、

最後に、助詞の表記と長音表記についてさらに考察して、まとめとする。

2. 助詞の「わ／は」「え／へ」「を」について

各資料の助詞「わ／は」「え／へ」「を」を比較すると、墨字国語教科書と墨字近代日本語教科書・教材類は、一貫して「は」「へ」「を」をもちいている。墨字文献のなかでは、『はなしことばのきそく』のみが「わ」「え」「を」となっている。それにたいして、日本語点字は点字表記区分の第3期から現代にいたるまで一貫して「わ」「え」「を」となっている。長音表記は点字表記史区分の第4期に、「現代かなづかい」・「現代仮名遣い」との共通点がふえていくのにたいして、助詞についてはひきつづき「わ」「え」「を」をもちいている理由として、2点が指摘されている。ひとつは石川倉次ら点字考案者・関係者のかなづかい方針を反映した日本語点字表記の歴史および文化の独自性の保持があげられる。そしてもう1点は、音声よみあげのさいの利便性からの説明がある。点字文書を電子化したデータをパソコンやアプリなどの音声よみあげソフトで利用するとき、「現代仮名遣い」では「は」は[ha]と[wa]、「へ」は[e][he]のそれぞれ2とおりのよみの可能性があり、機械処理による自動よみあげのさいに、誤読が生じることがある。そのため1字1音に整理する必要があり、点字かなづかいでは「現代仮名遣い」では「は」「へ」となる助詞の表記は「わ」「え」とすることとしている。また、「を」にかんしては、「お」も助詞の「を」も共通語では[o]であるため、点字かなづかいでも「お」と「を」を併用しているという説明がされる。

「現代仮名遣い」の助詞「は」「へ」「を」の表記については、しばしば「そのほうがよみやすい」などという合理性の面から説明がなされる場合があるが、これにかんしては矢田(2012:102-108)で国語教科書資料を分析したうえでの考察がおこなわれている。助詞「を」については、「「お」=文頭・句読点語、平仮名間、「を」=句読点前、漢字間。漢字平仮名間、平仮名漢字間、という相補的分布に近い傾向を示している」ことから、「(引用注:「お」と「を」の)両字体の併用による機能負担は実際には少ないことが窺われる」とする。助詞「は」については「助詞 wa を「わ」によって表記した場合、助詞表記の「わ」と非助詞表記の「わ」が漢字平仮名間・平仮名間の二つの環境で大きく衝突することになる。その結

日本語点字は日本語墨字と並行してつかわれる独立した歴史をもつ日本語文字表記システムである。

果予想される読解者の労力の増加は恐らく「は」の読み分けを超えるであろう」ことから、「(引用注:助詞「は」の表記は)一定の有効性があると考えられる」とする一方、助詞「へ」にかんしては「「は」に比べて極端に出現頻度が少なく、結果としてどのような表記法が採られても実際には負担の違いは大きくないと考えられる」とする。これらをふまえて、以下のようにまとめられている。

このように見てくると、現代において多く有効であると見なされている書記要素が、実際に果たしている機能負担は、個別に見れば決して大きくない場合のあることが明らかとなってくる。それでも「有効」と意識される背景には、僅かに存する有効な場面がクローズアップされて観察されがちであるということ、殊に、文字の持つ保守性故の先入観が機能を増幅させて意識に上らせるということや、「は」と「を」「へ」との関係のように、機能負担の比較的大きな要素との類似性などが考えられる。(矢田 2012:107-108)

これらの考察は、漢字かなまじり文におけるものであり、かな専用文をもちいる日本語点字のばあいは別途調査が必要になるであろうが、文節わかちがきをもちいており、節のあたまや節のなかほどに助詞がくることはなく、ほとんどは節の後部に集中するであろうことから、助詞「わ」「え」と非助詞「わ」「え」との識別が必要な場合はある程度限定されているといえるだろう。

「日本語では、助詞が「は」「へ」「を」という表記になっており、これが文章のよみやすさにつながる」などという説明が文字マジョリティである墨字「現代仮名遣い」使用者によってされることもあるが、表記の機能面の合理性というよりは歴史的な経緯によりそうなっているという説明が妥当であり、実際に日本語点字では、助詞の表記は「わ」「え」「を」がもちいられていることへの想像力と配慮が必要であろう。助詞の表記が「は」「へ」「を」となるのは、「日本語の特徴」ではなく日本語使用者のなかでもあくまでも墨字・「現代仮名遣い」使用者の規範・文化にすぎないし、それがたとえば日本語点字の助詞表記などとくらべてとくにすぐれているというわけでもない。

3. 長音表記について—「棒引きかなづかい」は「消失」したのか?—

表1～表3で確認したように、「現代かなづかい」以前に実践された表音的なかなづかいの様相はさまざまである。また長音表記にかんしては、ひとつの資料のなかでも列ごとに長音表記の方針がことなる場合がある。本研究で調査した「棒引きかなづかい」のなかでは、エ列字音語長音表記は「エ列+い」という形になるものがおおいが、『はなしことばのきそく』と近代点字かなづかいのうち第3期から第4期のはじめにかけて刊行された点字表記法書の記述には、字音語であっても長音符をもちいた「エ列+ー」のかたちの長音表記があらわれる。また、ウ列とオ列の長音表記にかんしてはすべての資料のなかで、活用語の活用語尾が長音となる時、長音符がもちいられない傾向にあった。活用語尾に長音符があらわれるのは、点字表記史区分の第3期に刊行された表記法書のみであった。

今回調査した各資料を比較すると、明治33年式棒引きかなづかいをもちいてかかれた第1期国定教科書と、清国留学生を対象とした日本語教科書・教材類のかなづかいは、和語に歴史的かなづかい、字音語に棒引きかなづかいをもちいる点や、字音語エ列長音を「エ列+い」と表記する点で、非常に共通点がおおい。明治33年式棒引きかなづかいは学校教育においては8年間使用されたのみであるといえるかもしれないが、ほぼ同様のかなづかいによる近代日本語教科書・教材類は、昭和期まで版をかさねてつかわれつづけていた。

また、近代日本語点字のかなづかいも棒引きかなづかいがもちいられており、とくに近代点字国語教科書のかなづかいは、字音語エ列長音表記が「エ列+い」となる点やよつがなの表記において、点字考案者の石川倉次による『はなしことばのきそく』よりは明治33年式棒引きかなづかいとの共通点がおおくなっている。このように、明治33年式棒引きかなづかいは、近代日本語日本語教育および近代点字国語教育のかなづかいに影響をあたえており、これらは明治33年式棒引きかなづかいが廃止されたのちもつかわれつづけた。とくに日本語点字にかんしては現在もウ列とオ列に長音符による長音表記があらわれ棒引きかなづかいがうけつがれているといえる。

また、墨字についても、かな専用文によって日本語をかきあらわすさいに長音の表記に長音符をもちいる棒引きかなづかいがあらわれることがある。たとえば、ましこ(1997)は漢字をもちいず文節わかちがきのひらがな・かたかなまじり文で「現代仮名遣い」より表音的なかなづかいでかかれている。一部を引用すると、以下のとおりである。

「これまでの レキシ・キョーカシヨの キジュツわ イデオロギー・テキな く
みたてに なっている」。 こーいった シュチョーお テンカイする ことで、 さ

かんに ワダイづくり に うごいて いる シューダンが ある。そこで キョーユーされている レキシ・カンの ひとつお、みずから 「ジュー・シュギ シカン」と よびならわしているよーだ(略)」(ましこ 1997:278)

かどや(2012)においても、かな専用文の例として、表音的なかなづかいによる文が挿入されている。以下に引用する。

たとえば、ささいなことだが、漢字かなまじり文でかかっているものの、漢字使用をへらしている本稿程度のものですら、「よみにくい」とかんじている読者(あなた)がいるとすれば、「自分を守ってきた鎧」にしがみつき、かたくなに変化をこぼんでいる可能性がたかい。あるいわ、かりに このぶんしょーが かんぜんな「ひょーおん かな わちがき」で かかれていたら、 どーだろーか。 にほんごが だいいちげんごで、かつ ひらがなお しているひとで あるならば、 こーゆー ひょーきの にほんごお よめない・りかひできない はずわない。 あるのわ、よむこと・りかひすることお こぼむとゆー たいどだけである(よみにくさわ ほんの すこしの じっせんによって なれることで、たやすく かいしょーできる)。そうしたマジョリティの権力への執着が言語差別や非識字者差別をうみだしている。(かどや 2012:150)

ここでは、「かんぜんな「ひょーおん かな わちがき」として、長音表記に長音符をもちいる棒引きかなづかいがあらわれる。

明治 33 年式棒引きかなづかいはごく短期間で廃止されたといってもよいだろうが、このような和語や字音語の長音表記に長音符「ー」をもちいるかなづかひの総称を棒引きかなづかひとすると、棒引きかなづかひは現在でも消失してはおらず、日本語点字文や現代のかな専用文でつかいつづけられているといえる。これらのかなづかひは、文字マジョリティである墨字漢字かなまじり文・「現代仮名遣い」使用者にとっては違和感のある、変なかなづかひとかんじられる場合もあるようである。しかし、このような現在の棒引きかなづかひともいえる表記のありかたを、「つかっているひとがすくない」という理由で日本語文

字・表記研究の対象から排除するべきではない¹¹。

4. 折衷的かなづかいとしての明治 33 年式棒引きかなづかい

これまで、「棒引きかなづかい」という観点から近代の墨字国語教育・墨字日本語教育・点字国語教育の教科書・教材類を資料として調査してきた。そのなかで、明治 33 年式棒引きかなづかいが今回調査した日本語教科書・教材類や点字国語教科書にも影響をあたえていることが、実際の資料にあらわれるかなづかいや表記法の記述から指摘できた。明治 33 年式棒引きかなづかいのおおきな特徴としては、長音に長音符をもちいる点のほかに、和語は歴史的かなづかいをもちい、字音語に表音的かなづかいをもちいるという折衷的かなづかいであるという点があげられる。この特徴は、近代墨字日本語教育教科書・教材類の一部や点字表記史区分でいうところの第 1 期にあたる近代点字資料にもあらわれる特徴である。日本語教科書・教材類についてはこのかなづかいは漢字かなまじり文・歴史的かなづかいを習得するまでの過渡的かなづかいであるという位置づけであるのにたいして¹²、点字使用者はこれを正式のものとしており、のちには和語にまで棒引きかなづかいつかうようになっていった。これは、墨字が一般には漢字かなまじり文でかかれるのにたいして、点字はかな専用文であることとの関連がかんがえられる。

この折衷的かなづかいは、ある語が和語であるか字音語であるかを判断して、それによりかなづかいの方針をかえなければいけないという複雑さがあるものの、安田(1997:85-86)で指摘されるように字音語はふりがなをふるとき以外にはほとんど漢字でかかれるため、字音語の棒引きかなづかいは漢字にかくれる。そして和語については歴史的かなづかいに準ずるものであるから、漢字および漢字かなまじり文を習得したものにとっては明治 33 年式棒引きかなづかいから歴史的かなづかいへの移行はそれほど困難なもので

¹¹ 現在のかなもじ論者・かな専用論者はすべて棒引きかなづかいをもちいるわけではなく、たとえばザイダン ホウジン カナモジカイから刊行されている季刊誌『カナ ノ ヒカリ』957 ゴウ(2012 ネン アキ～ゴウ)をみたところ、かな専用文によってかかれた論文がおおく掲載されているが、棒引きかなづかいはもちいられていない。ちなみに、『カナ ノ ヒカリ』は雑誌としてかなづかいを統一しているわけではなく、寄稿者によって多少の表記のゆれがみられる。

¹² 日本語教育にかんしては本章注 1 参照。また、国語教育においても、明治 33 年式棒引きかなづかいは、尋常小学校で使用する教科書にかぎって採用されていた。

はない¹³。

一方、かな専用文をもちいる点字かなづかいについては、たとえば、同一の音であっても「洋」は「やう」、「幼」は「えう」、「葉」は「えふ」、というように漢字ごとになづかいを丸暗記しなければいけない煩雑な字音かなづかいは負担であったろうし、このような折衷的なかなづかいをもちいるとすればある語が和語であるか字音語であるかをつねに判断しなければならないため、いちはやく表音的なかなづかいが採用されて固定されていたとかんがえられる。

1. 2で指摘したように、長音表記に長音符をもちいる「棒引きかなづかい」については現在でも一部でもちいられているが、それでは明治33年式棒引きかなづかいのもう一方の特徴である和語は歴史的かなづかいでかき、字音語については表音的にかくという折衷的な性質については、日本語点字かなづかいの、古文をかきあらわすさいにうけつがれている¹⁴。さらに、現在も歴史的かなづかいをもちいる人々によって提唱される字音語表記法に、類似の主張があらわれる。最近のものでは、歴史的仮名遣いの入門書としてだされた萩野(2007)で、

契沖が例へば法華経を「ほくゑきやう」と突き止めたといつたことは(現在は字音「ほけきやう」とされますが)、これはもちろん無駄な努力などといふものではなく純粋な語学研究として評価すべきです。しかしやはりあくまで外国語音の研究であつて、言つてみればゲーテ、ゴエテ、ギョエテ、ギョオテのどれが原音に「近いか」といふ問題です。日本語固有の問題ではありません。たとひギョエテが最も原音に近いといふことが立証されたとしても、私たちがそれに従ふ必要がないごとく、「ほくゑきやう」に従ふ必要はないでせう。(萩野 2007:136)

このようにのべたうえで、字音かなづかいについては「ルビを付けるとき気にするだけで結構です。(萩野:137)」としている¹⁵。

¹³ 安田(1997:86)に「漢字を教える以上、「學校」と漢字で書くのみであつて、それに振り仮名をつけることは余りない。字音以外は従来に従うのであるから、改正前であろうと後であろうと「學校へ行かう」とかければよいのである。「ガツカウ」か「ガッコー」かで混乱するのは漢字を廃止した時のみである。」とある。

¹⁴ 7章1. 2を参照。

¹⁵ ただし、萩野(2007)は歴史的かなづかいの入門書であり、やさしくかけることを主眼にしていることからの配慮である点は注意する必要があり、ただちに字音語は表音的な

また、「現代かなづかい」を批判し、歴史的かなづかいをもちいて文筆活動をおこなっていた丸谷才一は、字音かなづかいは表音的なものを採用することを支持している。たとえば丸谷(1983:354)では字音かなづかいについて以下のようにのべている。

古人は懸命に努力して隋唐の音を写さうとしてゐるが、これはちようど、「ラジオ」ではなく「ラヂオ」と書けと言ふやうなもので(事実、昔はさう書いた)、無理な話だから、整理統合するほうがいいし、また、それで日本語の体系をゆがめることはない。ショウ、シヤウ、セフ、セウなどといふ区別は、漢字が移入された当座はともかく、その後の日本人には因襲の墨守にすぎないのである。まして現代人にとつては、どうでもいい、と言つては何だが、大和ことば(和語)の仮名づかひと同じやうに考へるのは間違ひだらう。すなはち、「昌」も「賞」も「妾」も「撰」も「小」も「昭」も、「升」や「勝」と同じくショウで差支へない。(丸谷 1983:354-355)

同様に、「現代かなづかい」を批判し、福田・金田一論争をおこした福田恆存も

「をちど」は度を越すの意ですから、「おちど(落度)」ではなく「越度」で、それなら「越」の音は古くから「エツ・エチ・ヲチ」になつてゐるので「をちど」が正しいといふことになります。ここに一つ断つておかねばならぬことがあります。私は歴史的かなづかひの主張を漢字音にまで及さぬといふ考へですし、これまでもその筋道において論旨を押し進めてきたのですから、「越度」のごとき漢語は発音どほり「おちど」と書くべきかとも思はれます。しかし、このやうにほとんど国語同様に熟してしまつた言葉は、やはり古式を守つたほうがいいといふ考へも成りたつでせう。(福田 1960:110)

このように字音かなづかいについては、「ゑ(絵)」「ほう(方)」「やう(様)」など、「ほとんど国語同様に熟してしまつた言葉」以外は「発音どおり」にかくこととしている(福田

づかいでよいと主張していると判断するべきではない。また、「蝶(てふ)」や「様(やう)」「桔梗(ききやう)」「絵(ゑ)」「柑子(かうじ)」などといった「日本語か外来語かの区別の感覚さへほとんど失はれて、ほぼ完全に日本語化した少数の漢語」については字音かなづかいをまもる必要があるとする(萩野 2007:137)。

1960:60)。

字音語と和語のかなづかいを区別するという明治33年式棒引きかなづかいの折衷的な性格は、「現代かなづかい」がだされた後に、歴史的かなづかいの使用を推奨するひとびとの字音語のあつかいと共通する点がある。これらは、字音語にふりがなを付与しないという前提のうえになりたっているものとかがえられるが、かな専用文である日本語点字の古文の表記においても、同様の方式がとられている。

たとえば古文や、歴史的かなづかいでかかれた文章にたいして、1章でのべたような漢字によみ情報を付与して情報保障をはかるばあい、字音語のよみはどのようにかかれるのが適当なのであろうか。和語は歴史的かなづかいでかき、字音語に表音的なふりがなをつける明治33年式棒引きかなづかいや日本語点字の古文をかきあらわすかなづかいとよく似た折衷的なかなづかいがあらわれることになるのであろうか。それとも、字音よみをする漢字には字音かなづかいによるふりがながつけられるべきなのであろうか。あらたに検討が必要となるだろう。

4. おわりに—だれのための文字・表記研究なのか—

近年に刊行された「日本語」「文字」とタイトルにある日本語学の概論書や専門書のなかでも、日本語点字についてはまったくふれられてないか、ごくわずかに紹介程度にしかふれられていないものもおおくある。日本語文字・表記研究とはいうものの、実際には日本語の墨字文字・表記の研究がほとんどであったといってよい¹⁶。

日本語点字に着目してこなかったため、かな専用文でかかれた文章にかんする研究はおくれ、「漢字かなまじり文でないと日本語はかけない」「漢字がないと同音異義語でこまる」「漢字がないと情報量がへる」などという幻想¹⁷にとらわれ、かな専用文を「漢字かなまじり文とくらべておとったもの」とおとしめる言説はあとをたたない。これは、かな専用文をつかいつづけてきた日本語点字の文化や歴史、そして「カナモジカイ」に属するひと

¹⁶ CiNii Books(<http://ci.nii.ac.jp/books/>)で検索をしてみたところ、おもに墨字の研究についてかかれたものであっても、表題に「墨字」としるされた日本語学文字・表記研究書は、みあたらなかった。(アクセス日は2013年9月12日)「日本の文字」というとき、それは墨字のみをさしており、日本語点字はほとんど考察の対象とされてこなかったため、かえて「点字」と対になる「墨字」という語がつかわれてこなかったということがいえる。

¹⁷ これらの漢字不可欠論はすでに山田(1991)などで反論がおこなわれている。

ど、いまま活動をつづけるかな専用論者の主張を検証もせずには排除しようとするものである。

マンガやライトノベルなどという新しい文芸分野から生まれた表記の工夫・開拓、電子情報機器の発達による文字へのアクセス方法の多様化、漢字・かなまじり文・「現代かなづかい」使用者以外の文字マイノリティの存在を考察から排除することの不当性をうったえる社会言語学研究、などのさまざまな要因から日本語文字・表記はあらためて検討が必要となっている¹⁸。そのなかで「現代仮名遣い」をはじめとする日本語表記法にかんする施策に改定のうごきがでてくることもあるかもしれない。そのとき、日本語学文字・表記研究の蓄積は参照される必要がある。

ここで、日本語文字・表記研究は「だれのための」研究分野なのであるかといかける必要がある。文字・表記研究は言語機能的な面からのほかに、それがどのようなひとにより、どのようにつかわれたか、どのような規範性を持ち、どのように社会に影響をあたえたのかという社会的・文化的・政治的な面からの考察もおこなわれている。国語国字問題にかんする研究などがそれにあたる。しかし、いままでおこなわれてきたそれらの研究は、「だれのための」研究であったか。

文字は、それをつかいこなせるひとにとっては便利で、なくてはならないものとなっているかもしれない。しかしながら、それを習得しないひとにとっては、文字による情報へのアクセスはむずかしい。また情報の発信をするさい、あたかも当然のことにように文字をもちいることを要求するのであれば、それもおおくの困難をともなう。文字を使用しないひとや限定的に文字を使用するひとへの配慮をかいたまま、社会が個人にたいして、たったひとつの規範にしたがって文字による情報のやりとりを要求するのであれば、文字をつかうひととつかわないひととの分断がおこる。このような文字の使用と不使用あるいは限定使用との分断については、すでにいくつかの論考がある。漢字および漢字かなまじり文の習得の困難さと、漢字をつかわないひとが社会的な不利益こうむる「漢字という障害」の問題を指摘し、その習得の困難さにもかかわらず漢字かなまじり文はかな専用文などと

¹⁸ 電子情報機器の発達や、文字マイノリティの「発見」により、文字使用の多様「化」が論点となっているということも可能かもしれないが、近代日本語文字・表記のありようもさまざまな差異があり、文字を使用するひとのありかたは多様であったことは本研究でしめたとおりである。文字使用のありかたは多様「化」したのではなく、もともと多様であった。「墨字・漢字かなまじり文・現代仮名遣い」を習得し、使用するのが当然である」という文字マジョリティのイデオロギーにおおいかくされ、議論されることがすくなかっただけである。

くらべて機能的にすぐれていて、当然習得するべきであるという漢字イデオロギーへの批判をしたものとして、あべ(2002)、あべ(2010)や、野村(2008)、ましこ(2002)、ましこ(2004)、ましこ(2008)、ましこ(2012)がある。また、漢字のみならずよみかき能力全般についても、これまでの日本の識字運動が「識字を前提とする社会」や「識字に価値をおくこと」を肯定することによって、日本社会のなかで非識字者として生活することでこうむる不利益について、社会の問題としてとらえ改善をこころみるかわりに、非識字者が非識字者としていきることを否定し、非識字者個人の努力で規範的文字・表記システムを習得するようにせまるという非識字者差別をふくんでいたことへの批判は、かどや・あべ(2010)がある。

文字をよむとき、触読をしたり、視読をしたり、文字を音声に変換して耳でよんだりというさまざまな方法がある。また、文字・文章をかくときは手にペンをもって書字するばあいもあるし、電子機器による文字入力方法もさまざまにある。文字をよむとき、かくときには、からだをもちいる。そして、その文字をもちいるひとのからだのありようはさまざまである。そのなかには視覚に障害があるひと、聴覚に障害があるひと、手でペンをもつことができないひと、ひだりてで字をかくひと、などといったおのおのからだのありようにあわせた文字生活をおくっているひとびとがいる。そしてこのようなからだのありようによっては、残念ながら文字生活に制限をうけ、社会的な保障が十分でない場合もある¹⁹。また、漢字かなまじり文が未習得であるひとへの配慮も、生活するうえでいきとどいてるとはいいがたく、さらに「日本人の識字率は 99%」などという根拠のない幻想が蔓延することで、文字をつかわないひとや文字の使用が限定的であるひとへの配慮の不十分さが認識しにくくなっている²⁰。

「万人にとってよみやすい文字・表記」というものは存在しない。あるひとにとっては触読文字がよみやすく、あるひとにとっては視読文字がよみやすい。漢字かなまじり文に

¹⁹ 日本語点字使用者が日本語墨字使用者とまったく同等の文字生活を保障されているわけではなく、自筆遺言書の効力などに制限があることは、7章でのべた。また、ひだりききやみぎてでペンがもてないひとなど、ひだりてで書字をするひとびとがひだりてで字をかくための適切な書字教育が保障されておらず、それどころか書写教育・国語教育や日本語教育の場で規範的な筆順やとめはねやペンのもちかたなどを強要されることにより、わざわざかきにくい字のかきかたをしいられる状況や、「ただしい筆順」指導の過度な重視によって、ひだりてで書字者の国語教師や日本語教師への就業が暗黙のうちに制限されることもある現状については、なかの(2008)、なかの(2011)でのべた。このように、現状の日本社会では文字生活はすべてのひとにひとしく保障されているわけではない。

²⁰ 「日本人の識字率は 99%」という幻想を批判し、よみかきができる当然とおもいこむ識字社会で非識字者がうける社会的な不利益を分析したものとしては角(2012)がくわしい。

なれたひとにとってはかな専用文はよみにくいとかんじることもあるだろうが、わかちがきをしたかな専用文を日常的につかっているひともある。よみやすいもしくはかきやすいフォント、文字のおおきさ・色も、よみてのからだのありようやよむ場面におおきく左右される²¹。文字情報へのアクセスのしやすさについてかんがえる場合、たったひとつの「万人にとってよみやすい文字・表記システム」をさがすのではなく、さまざまなひとのからだや心情のありかたに配慮した多様な文字情報の提供方法と発信の機会を保障することである。もちろんそこには、文字をつかわないひとびとが日本社会の中でなにも不便をかんじることなくくらししていくことへの保障もふくむ。しかしこのような配慮はひろく浸透しているとはいえない。

そして、現在のかな専用文使用者もしくは歴史的かなづかい使用者など、漢字かなまじり文や「現代仮名遣い」をもちいないという主張をするひと、日本語を漢字やかなではなくラテンローマ字などで表記しようというところみをもつひと²²の文字情報の共有や社会での共生の方法についても、考慮されていない現状があろう。そのため、からだのありかたや主義主張などの面で墨字・漢字かなまじり文・「現代仮名遣い」による文字・文章を使用する「ふつう」のひとからはずれた場合、生活するうえでなんらかの不利益をこうむることもおおい。

このような状況のなかで、晴眼者の音声日本語使用者で墨字・漢字かなまじり文・「現代仮名遣い」習得ずみの人間のみを日本語文字使用者と想定した文字・表記研究ばかりでは、研究の名のもとに、現状にある文字によるひととひととの分断をさらにふかめていくこととなるだろう。これからの文字・表記研究は、文字と接するひとびとのからだや思想・心情のありようの多様性を当然の前提としておこなわれる必要があるとかんがえる²³。それは

²¹ これに関連するものとしては、たてがきかよこがきかで文字のよみやすい／かきやすい書体は変化することは、書写教育の分野から指摘があり、史的研究もある(羽田 1997)。また、文字のよみやすさと色の関連については、色覚障害について考察した、當山(2005)による研究がある。

²² 本研究では日本語ローマ字表記についてはふれることはできなかったが、日本語ローマ字表記による教育の可能性についてはアンガー(2001)がくわしい。また、日本語ローマ字表記運動の歴史については、茅島(2012)が参考となる。

²³ また、これは日本語学文字・表記研究にのみあてはまることではない。たとえば、日本語点字の文節わかちがきは、形容詞の「ない」と助動詞の「ない」を区別する必要があるなど、文法知識が必要となる。そのさい、わかちがきの根拠となるものはいわゆる「学校文法」である。日本語文法研究の発展により、学校文法のみなおしがおこなわれるなどというときは、わかちがきをおこなわない墨字漢字かなまじり文使用者よりも直接に影響をうける日本語点字使用者への影響を考慮し、丁寧な対話が必須となるであろう。ちなみ

つまり、「日本語の文字」というとき、墨字・漢字かなまじり文や「現代かなづかい」のみをとりたて、文字使用者として「健常者」のみを想定するという姿勢をあらためることである。

そして、このような「文字・表記のユニバーサルデザイン」という観点からは、いままでは障害としての漢字およびよみ情報を付与しない漢字かなまじり文についての考察がおこなわれてきたが、それと同時に、日本語をかきあらわすさいにかなを使用するのであれば、そのかなづかいの妥当性についてもかんがえていく必要があるだろう。

【参考文献】

あべ・やすし(2002)「漢字という障害」『社会言語学』2

あべ・やすし(2010)「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」『社会言語学』10

アンガー, マーシャル(2001)『占領下日本の表記改革—忘れられたローマ字による教育実験』(三元社)

井口佳重(2009)「明治・大正期における新聞の仮名遣い改革」『日本語の研究』5-2

荻野貞樹(2007)『旧かなづかひで書く日本語』(幻冬舎)

かどやひでのり(2012)「識字／情報のユニバーサルデザインという構想—識字・言語権・障害学—」『ことばと社会』14

かどやひでのり・あべ やすし(2010)『識字の社会言語学』(生活書院)

茅島篤(2012)『日本語表記の新地平—漢字の未来・ローマ字の可能性』(くろしお出版)

蔡錦雀(2003)「国語教育即日本語教育ならず」『国立中央図書館台湾分館蔵 台湾教科用書国民読本』(久留米大学)

角知行(2012)『識字神話をよみとく—「識字率99%」の国・日本というイデオロギー』(明石書店)

當山日出夫(2005)「色覚異常者にカラー印刷の辞書はどう見えるか?—スキャナ画像デー

に、日本語学研究者によるわかちがき研究である野村(1986)が、日本点字委員会より発行されている雑誌『日本の点字』13号に掲載されている。

また、点字使用者で、これから日本語を学習しようというとき、よみ・かき技能には、学校文法準拠の日本語点字のわかちがき法の知識が必要となる。日本語教育文法によって日本語学習をする日本語学習者にたいしては、わかちがきにかかわる学校文法の説明が別途必要となろう。

- タの利用をめぐる諸問題』『情報処理学会研究報告．人文科学とコンピュータ研究会報告』
2005(105)
- なかのまき(2010)「書字教育と書写教育—書写・書道教育の社会言語学序説」『社会言語学』
10
- なかのまき(2008)「左手書字をめぐる問題」『社会言語学』8
- 野村雅昭(2008)『漢字の未来 新版』(三元社)
- 野村雅昭(1986)「複合語の構成と分ち書きの問題」『日本の点字』13
- 羽田伸子(1997)「明治期における横書き書字に関する考察(二) —新国字論における横書き
採用の主張」『書写書道教育研究』8
- 福田恆存(1960)『私の国語教室』(新潮社)
- ましこ・ひでのり(2012)「日本語漢字とリテラシー」『ことばと社会』14
- ましこ・ひでのり(2008)「日本語ナショナリズムの典型としての漢字論—近年の俗流言語論
点描(その5) —」『社会言語学』8
- ましこ・ひでのり(2004)「ことばの差別と漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』(朝倉書店)
- ましこ・ひでのり(2002)「現代日本語における差別化装置としてのかきことば—漢字表記を
中心に—」『社会言語学』2
- ましこ・ひでのり(1997)「リロンの ジッセン・レー 「ジュー・シュギ シカン」おめ
ぐる チンキ・シャカイガク」『イデオロギーとしての日本—「国語」「日本史」の知識社会
学』(三元社)
- 丸谷オ一(1983)「言葉と文字と精神と」『日本語の世界 16 国語改革を批判する』(中央公
論社)
- 安田敏朗(2003)『帝国日本の言語編制』(三元社)
- 安田敏朗(1993)『脱・「日本語」への視座 近代日本語言語史再考Ⅱ』(三元社)
- 矢田勉(2012)『国語文字・表記史の研究』(汲古書院)
- 山田尚勇(1991)「文字論の科学的検討」『学術情報センター紀要』4

引用文献一覧

- あべ・やすし (2002) 「漢字という障害」『社会言語学』2
- あべ・やすし (2010) 「日本語表記の再検討—情報アクセス権／ユニバーサルデザインの視点から」『社会言語学』10
- 天野清 (1986) 『子どものかな文字の習得過程』(秋山書店)
- アンガー, マーシャル (2001) 『占領下日本の表記改革—忘れられたローマ字による教育実験』(三元社)
- 井口佳重 (2009) 「明治・大正期における新聞の仮名遣い改革」『日本語の研究』5-2
- 井上敏夫 (1958) 「国語教科書の変遷」『国語教育科学講座 国語教材研究論』5 (明治書院)
- 井上史雄 (2006) 「外来語の表記と発音の問題—エイを中心に」『明海日本語』10・11
- 遠藤邦基 (2001) 「特殊音節(撥音・促音・長音)の表記法——「はねる・つまる・引く」という説明が必要となったことの意味」『関西大学文学論集』50-3
- 大河原欽吾 (1937) 『点字発達史』(培風館)
- 大伴潔・Hirayama Monica (2008) 「仮名特殊拍の書字困難への指導に関する予備的研究—音韻意識プログラムによる継時的変化」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』59
- 貝美代子 (1991) 「国定国語読本の奥付符号と使用年度」『日本近代語研究』1
- 柿木重宜 (2007) 「なぜ「棒引仮名遣い」は消失したのか——藤岡勝二の言語思想の変遷を辿りながら」『季刊文学・語学』188
- 柿木重宜 (2008) 「国語国字問題における藤岡勝二の言語思想について—「棒引仮名遣い」から「ヘボン式ローマ字表記法」まで」『滋賀女子短期大学研究紀要』33
- 柿木重宜 (2013) 「近代「国語」における「棒引き仮名遣い」の終焉—藤岡勝二に関わる文献学的アプローチを中心に」『滋賀短期大学研究紀要』38
- 葛西和美・関あゆみ・小枝達也 (2006) 「日本語 dyslexia 児の基本的読字障害特性に関する研究」『小児の精神と神経』46-1
- かどやひでのり (2012) 「識字／情報のユニバーサルデザインという構想—識字・言語権・障害学—」『ことばと社会』14
- かどやひでのり・あべ やすし (2010) 『識字の社会言語学』(生活書院)
- 金子昭 (2007) 『資料に見る点字表記法の変遷—慶応から平成まで』(日本点字委員会)

- 茅島篤 (2012) 『日本語表記の新地平—漢字の未来・ローマ字の可能性』(くろしお出版)
- 釘貫亨 (2007) 『近世仮名遣い論の研究』(名古屋大学出版会)
- 蔡錦雀(2003)「国語教育即日本語教育ならず」『国立中央図書館台湾分館蔵 台湾教科用書国民読本』(久留米大学)
- さねとうけいしゅう(1981)『中国留学生史談』第一書房
- 新谷嘉浩 (2006)「小西信八の生涯」『日本叢史学会報告書』(4)
- 慎英弘 (2010)『点字の市民権』(生活書院)
- 鈴木力二 (1987)『伝記叢書 13 日本点字の父 石川倉次先生伝』(大空社)
- 錢本三千年(1975)「『点字毎日』の半世紀」『新聞研究』(290)
- 国立国語研究所(1972)『幼児の読み書き能力』東京書籍
- 国立国語研究所 (1985)『国定読本用語総覧』1巻
- 角知行(2012)『識字神話をよみとく—「識字率 99%」の国・日本というイデオロギー』(明石書店)
- 高橋龍雄 (1907)「過去四十年間における国語学界の概観」『国学院雑誌』13-2
- 武部良明『日本語表記法の課題』(三省堂)
- 東京盲学校 (1935)『東京盲学校 60 年史』
- 當山日出夫 (2005)「色覚異常者にカラー印刷の辞書はどう見えるか?—スキャナ画像データの利用をめぐる諸問題」『情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告』2005(105)
- 長岡由記(2008)「長音表記の音声化指導に関する一考察—エ列・オ列長音を中心に」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』54
- なかのまき(2008)「左手書字をめぐる問題」『社会言語学』8
- なかのまき(2010)「書字教育と書写教育—書写・書道教育の社会言語学序説」『社会言語学』10
- 永山勇 (1977)『仮名づかい』(笠間書院)
- 日本点字委員会(1982)「国語審議会への意見書」『日本の点字』10
- 日本点字委員会(1986)「国語審議会への要望書」『日本の点字』13
- 日本点字委員会 (2001)『日本点字表記法 2001 年版』
- 野村雅昭(1986)「複合語の構成と分かち書きの問題」『日本の点字』13
- 野村雅昭 (2008)『漢字の未来 新版』(三元社)

- 荻野貞樹(2007)『旧かなづかひで書く日本語』(幻冬舎)
- 長谷川恒雄(1993)「戦前日本国内の日本語教育」『講座日本語と日本語教育 15 日本語教育の歴史』(明治書院)
- 蜂矢真郷(2007)「現代仮名遣い」の長音表記『国語文字史の研究』10 (和泉書院)
- 羽田伸子(1997)「明治期における横書き書字に関する考察(二)—新国字論における横書き採用の主張」『書写書道教育研究』8
- 林弘仁(2004a)「新資料 石川倉次の『台湾学生教授日誌』をめぐって」『久留米大学大学院比較文化研究論集』(15)
- 林弘仁(2004b)「石川倉次の国語研究」『久留米大学大学院比較文化研究論集』(16)
- 広瀬浩二郎(2010)『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』(生活書院)
- 福田恆存(1960)『私の国語教室』(新潮社)
- 古田東朔(1984)『小学読本便覧』第7巻(武蔵野書院)
- 文化庁(2005)『国語施策百年史』ぎょうせい
- 堀越喜晴(1992)「点字における日本語表記法の問題」『応用言語学講座 4 知の情意の言語学』(明治書院)
- 松本敏治(2005)「平仮名読みに困難を示した2事例への読み指導—50音表暗唱と対連合学習を用いて」『弘前大学教育学部紀要』94
- ましこ・ひでのり(1997)「リロンの ジッセン・レー 「ジュー・シュギ シカン」おめぐる チシキ・シャカイガク」『イデオロギーとしての日本—「国語」「日本史」の知識社会学』(三元社)
- ましこ・ひでのり(2002)「現代日本語における差別化装置としてのかきことば—漢字表記を中心に—」『社会言語学』2
- ましこ・ひでのり(2004)「ことばの差別と漢字」『朝倉漢字講座 5 漢字の未来』(朝倉書店)
- ましこ・ひでのり(2008)「日本語ナショナリズムの典型としての漢字論—近年の俗流言語論点描(その5)—」『社会言語学』8
- ましこ・ひでのり(2012)「日本語漢字とリテラシー」『ことばと社会』14
- 増田光司(2001)『言文対照漢訳日本文典』解題 その特徴および文法を中心として『東京医科歯科大学教養部研究紀要』31

- 眞野哲夫(2002)「視覚障害者の自立支え社会へ発信する窓に—『点字毎日』80年の歩み」
『新聞経営』2002(2)
- 丸谷才一(1983)「言葉と文字と精神と」『日本語の世界16 国語改革を批判する』(中央公論社)
- 道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち編集委員会(1993)『道ひとすじ—昭和を生きた盲人たち—』(あずさ書房)
- 森田昭二(2011)「中村京太郎と点字投票運動—『点字大阪毎日』の論説と記事を通して」
『Human Welfare』3(1)
- 文部省(1953)『明治以後におけるかなづかい問題』
- 文部省(1957)『現代かなづかいと正書法』
- 安田敏朗(1993)『脱・「日本語」への視座 近代日本語言語史再考Ⅱ』(三元社)
- 安田敏朗(2003)『帝国日本の言語編制』(三元社)
- 矢田勉(2012)『国語文字・表記史の研究』(汲古書院)
- 山田尚勇(1991)「文字論の科学的検討」『学術情報センター紀要』4
- 山本正秀(1865)『近代文体発生の史的研究』(岩波書店)
- 山口芳夫(1982)『日本点字表記法概説』(ジャスト出版)
- 吉田裕久(1982)(1983)「尋常小学国語読本」の研究(1)(2)「愛媛大学教育学部紀要」28、29
- 吉原秀明(2005)「文法教育における「付帯的指導」の可能性 三土・芳賀・石川の文典に見られる教育的配慮を参考に」『奈良教育大学国文』(28)
- Unger, J. Marshall (1984) "Japanese Braille." *Visible Language*. 18-3

資料編

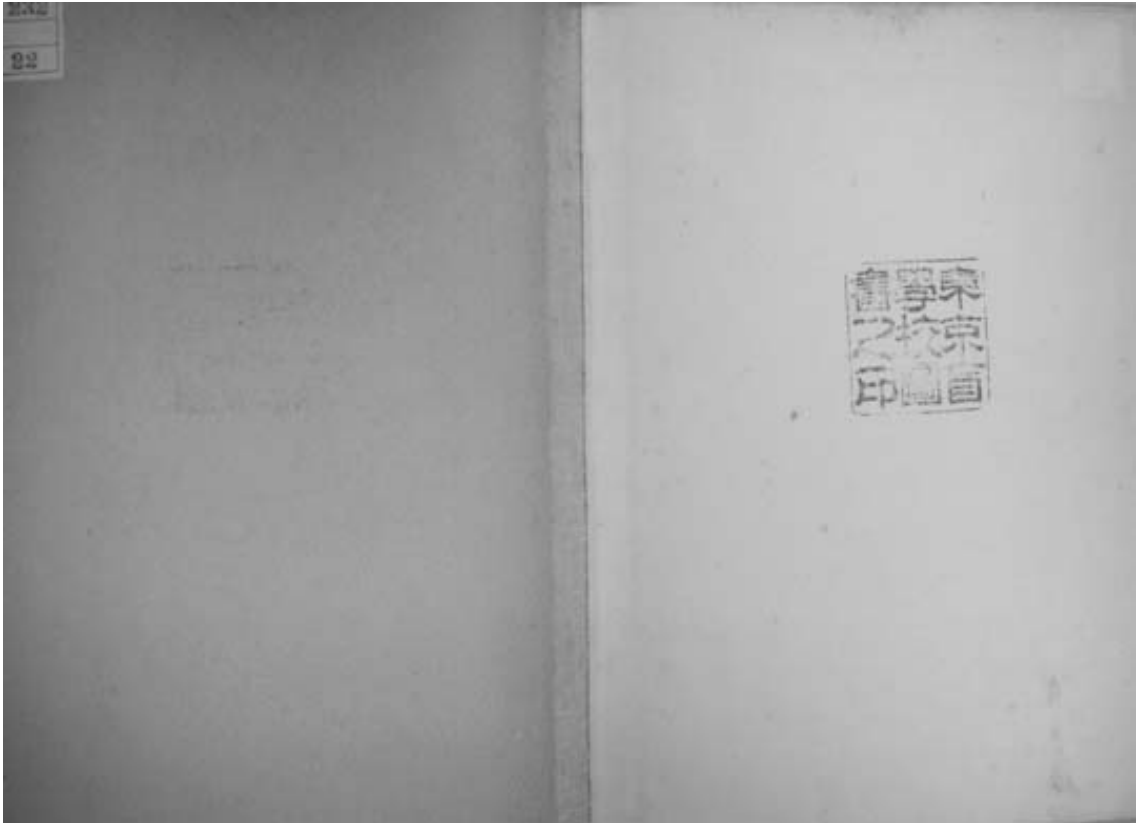
筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵

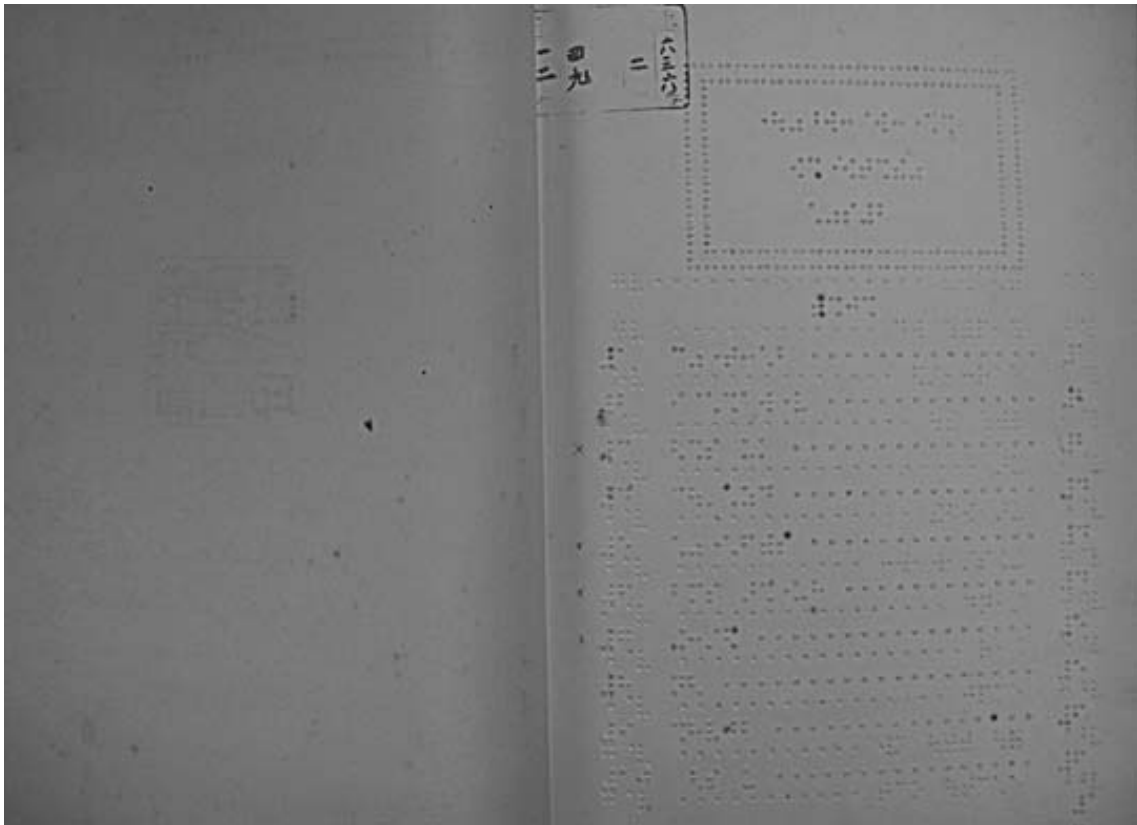
『点字 尋常小学国語読本』

2 卷 ~ 1 2 卷

写真・墨字翻字



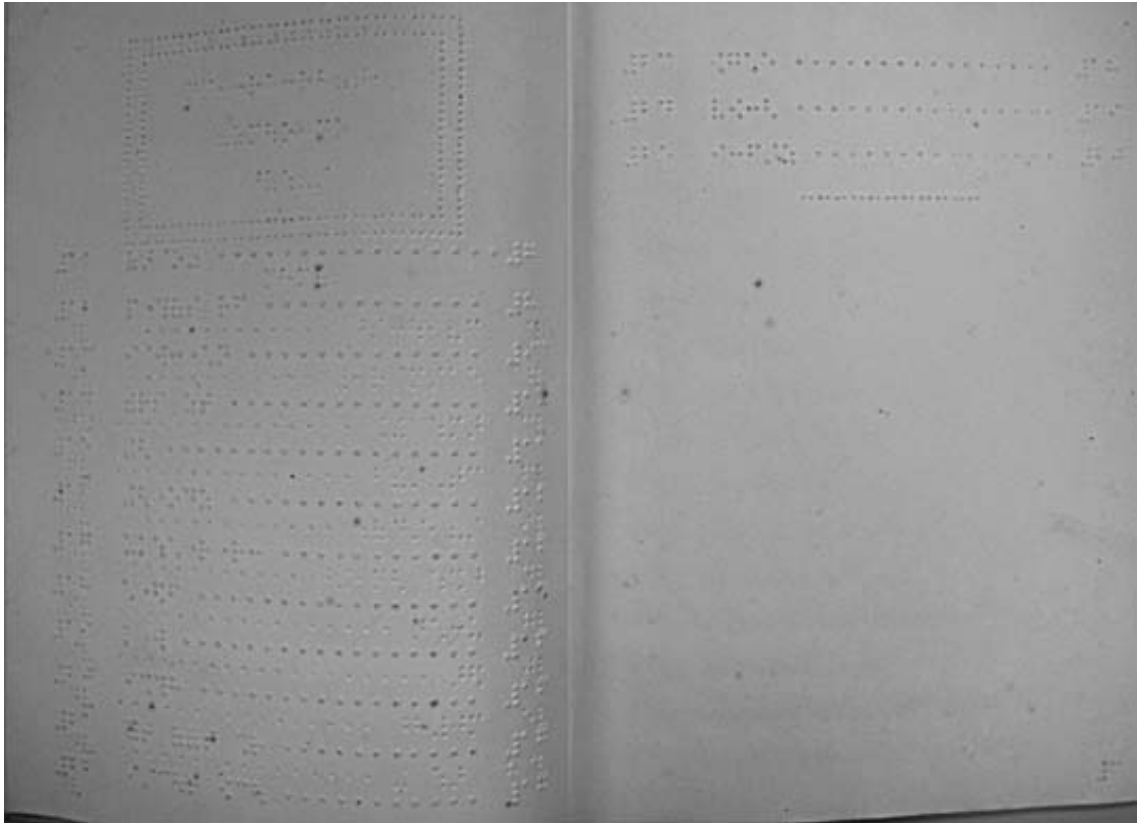




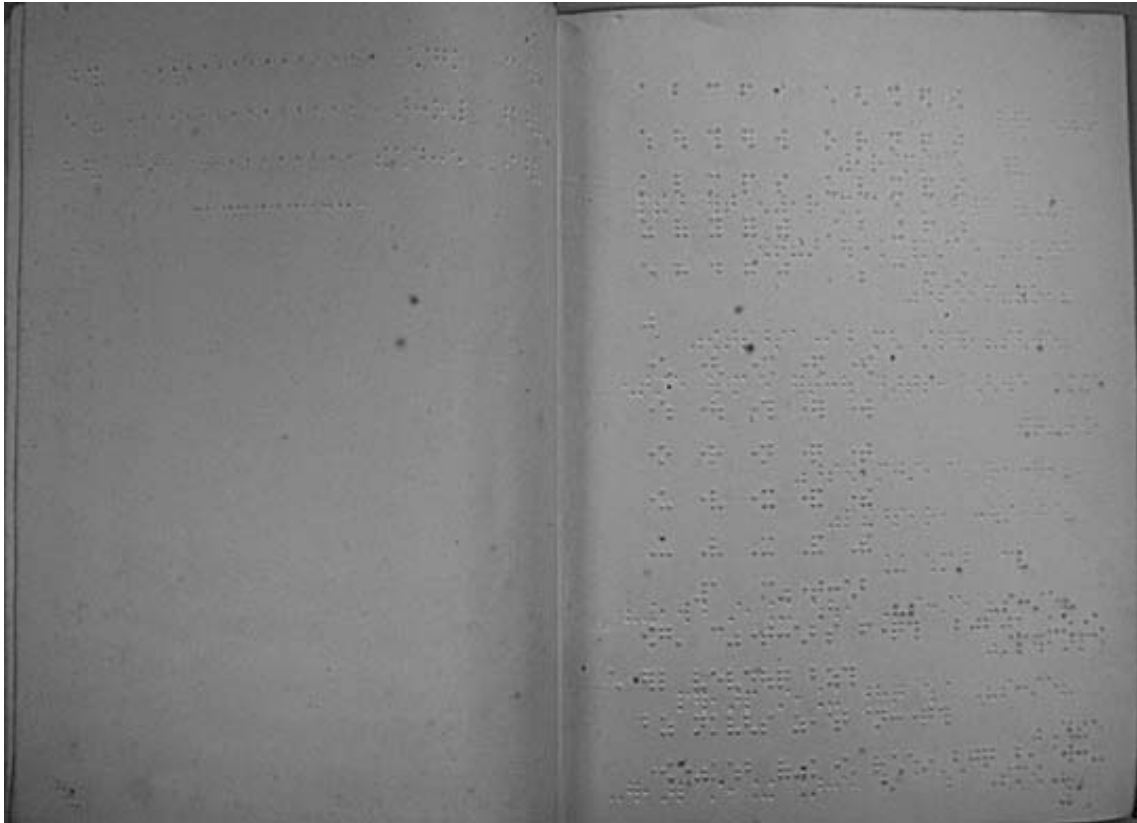
じんじょーしょーがく
こくごとくほん
かんの2

もくろく

1	うんどーかい	1
2	おきやくあそび	
3	きくの はな	2
4	うしわかまる	4
5	かんがえもの	4
6	いぬの よくばり	4
7	ゆーやけ	5
8	つき	5
9	くりひろい	6
10	きの は	6



1 1	みよちゃん	7	2 3	これから	18
1 2	ねずみの ちえ	8	2 4	ひこーき	19
1 3	おしょーがつ	9	2 5	おーえやま	20
1 4	もちの まと	10			3
1 5	ゆき	11			
1 6	ゆきだるま	12			
1 7	はなさかぢぢー	12			
1 8	かげえ	15			
1 9	なぞ	16			
2 0	おくすり	16			
2 1	めと みみと くち	17			
2 1	めと みみと くち	17			
2 2	おやうしと こうし	17			



あいうえお かきくけこ
さしすせそ たちつてと
なにぬねの はひふへほ
まみむめも やいゆえよ
らりるれろ わるうゑを
ん

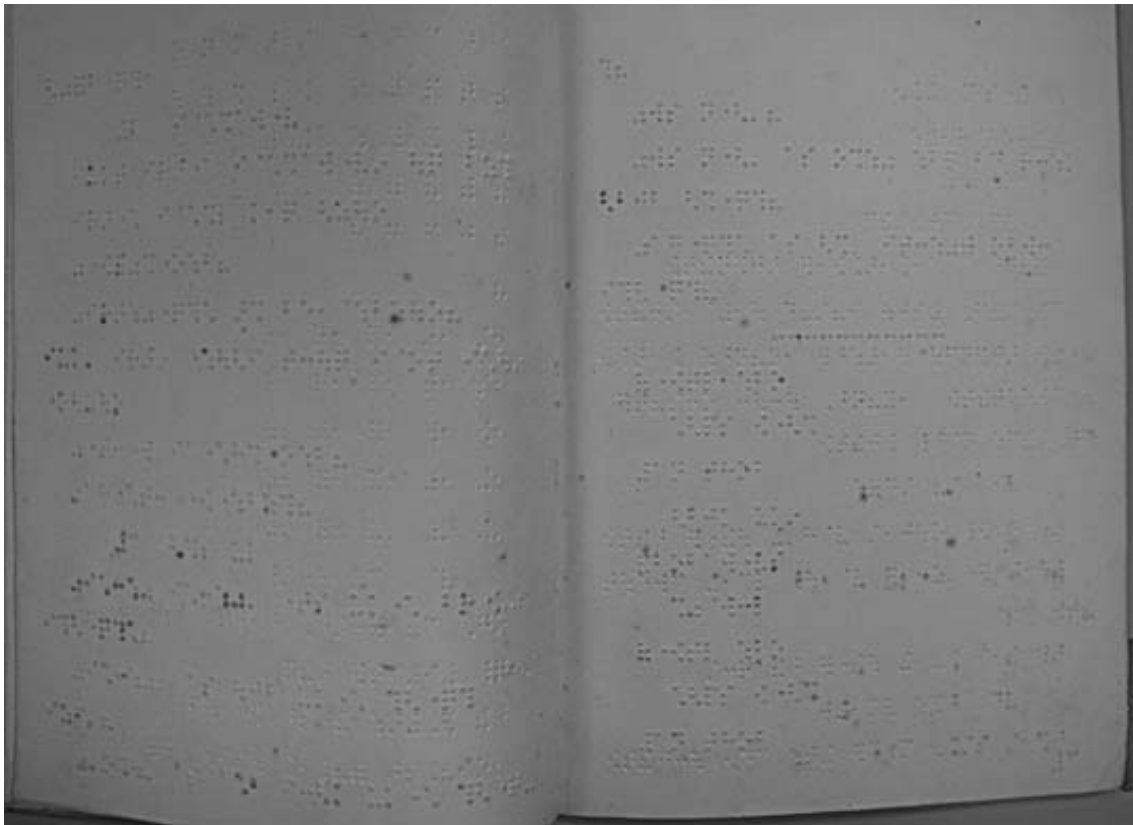
がぎぐげご
ざじずぜぞ
だぢづでど
ばびぶべぼ
ぱぴぷぺぽ

1 うんどーかい

これわ うんどーかいのえです いろいろな はたが
かぜに ひらひらして います

いま つなひきの まっさいちゅーです

ごらんなさい みんなが ちからを いれていっしょー



けんめいです

2 おきやくあそび

おはなと おちよが おきやくあそびを して います

おちよが おきやくになって きました

「ごめんください」

「おちよさんですか よく いらっしゃいました」

おはなわ おちよを おざしきに と一して おちやと おかしを
だしました

「ど一ぞ おあがりください」

「ありがと一 ございます」

3 きくの はな

「おか一さん おか一さんわ どの はなが いちばん
おすきですか」

「おか一さんわ あの しろい はなが すきです
おまえわ」

「わたくしわ あの あかいお一きな はなが すきで

す」

「その つぎわ」

「その つぎわ」

「その つぎわ あの たくさん さいて いる ち一さな
きいろい きくです」

「あれですか あの きくわ おと一さんも たいそ一
おすきです」

みごとに さいた

かきねの こぎく

1つ とりたい

きいろな はなを

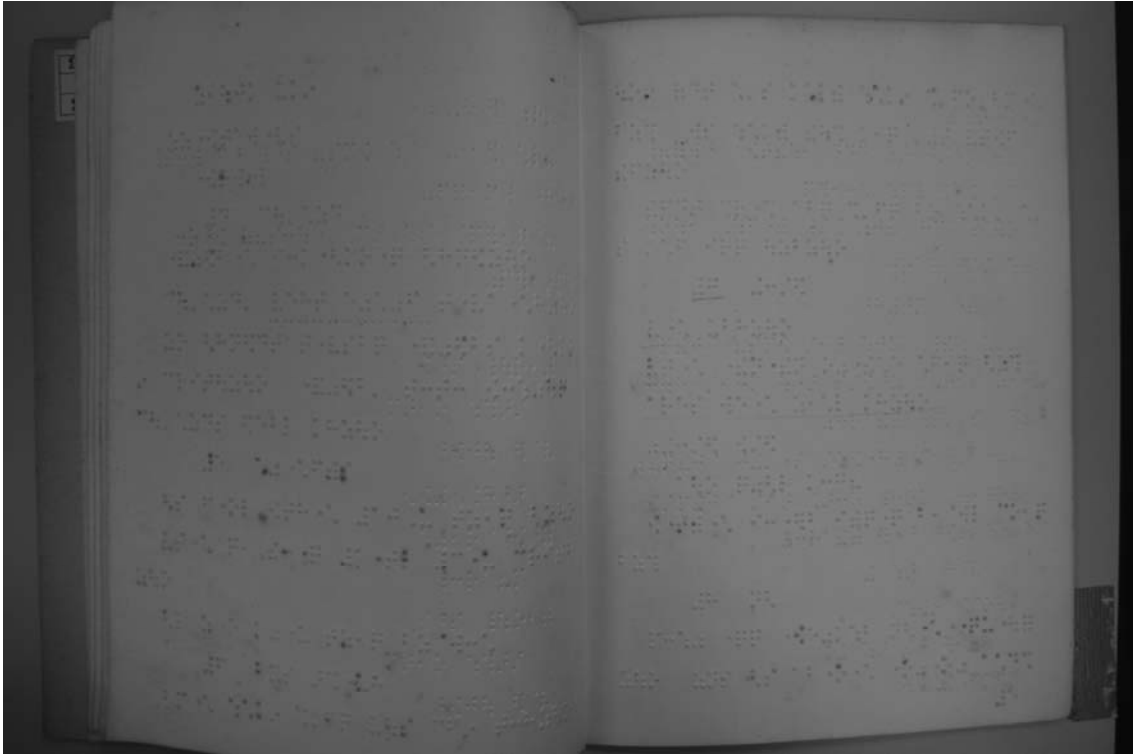
へいたいあそびの

くんしよ一に

みごとに さいた

かきねの こぎく

1つ とりたい



まっしろな はなを
ままごとあそびの

ごちそうに

4 うしわかまる

べんけいお おーなぎなたで きりつけました

うしわかまるわ ひらりとらんかゆえ とびあがりまして

また きりつけると とびのいて べんけいの なぎなた

を うちおとしました べんけいわ とーとー こーさんして

うしわかまるの けらいに なりました

5 かみがえもの

きの えだに ことりが 10ば とまって いました

ひとが てっぽーで 1どに 3ば うちおとし

ました

きに まだ なんば とまって しましよーか

6 いぬの よくばり

いぬが さかなを くわえて はしの うえを とーりました

したを みると かゆの なかにも さかなを くわえた いぬが
います その さかなも ほしく なって わんと ひとこえ
ほえました

ほえると くちが あいて くわえて いた さかなわ かゆ
の なかえ おちて しまいました

7 ゆーやけ

ひが はいりました

ひとが ぼつぼつ たんぽから かえって きます

あちらの そらが まっかになりました

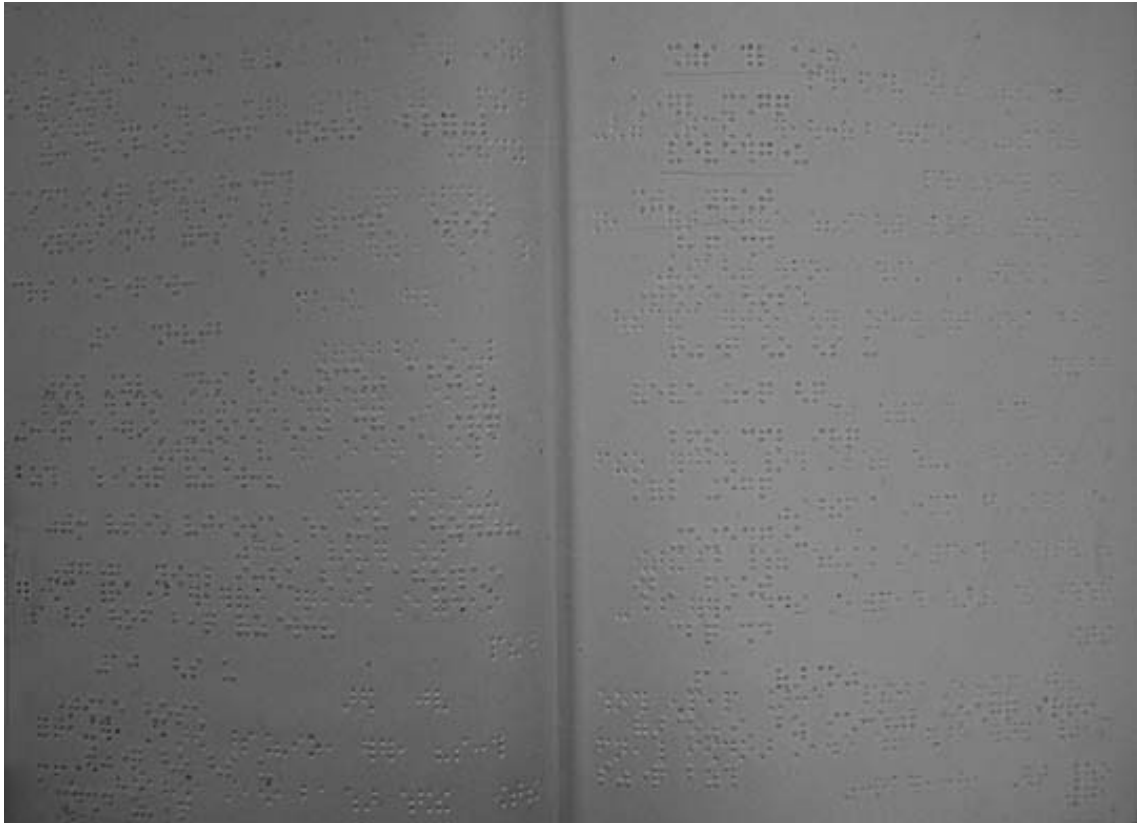
「ゆーやけ こやけ

あした てんきに なーれ」

こどもが おーせい おもてで いっしょに うたって
います

8 つき

ねーさん でて ごらんさい つきが ではじめ
ました まつの きの あいだが だんだん あかるく



なつて きます

もー すっかり きの うええ でした いちめんにあかるく なつて ひるの よーです

こちらの くらい もりの なかに みえるのわ どののうちの あかりでしょー

9 くりひろい

「この やまにわ くりの きが たくさん あります ゆーべ かぜが ふいたから きつと くりが おちて います さがして みましょー」

「もー ひとが ひろつたのか さつぱり ありません」

「それでわ むこーに おーきな きが ありますから あの きの したえ いつて みましょー」

10 きのは

どこから きたのか

とんで きた きのは

くるくる まわつて

くもの すに かかり

かぜに ふかされて

ひらひらすれば

くもわ むしかと

よつて くる

どこから きたのか

とんで きた きのは

ひらひら まつて きて

いけの うえに おちて

なみに ゆられて

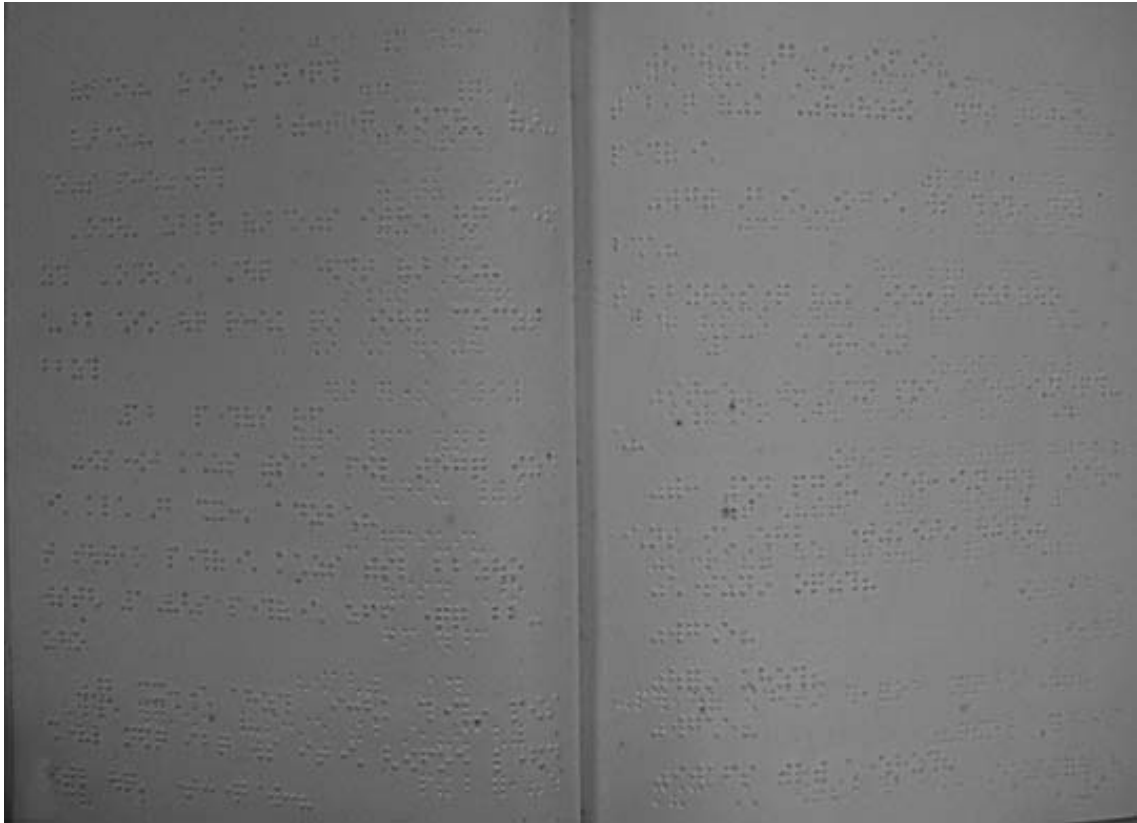
ゆらゆらすれば

こいわ えさかと

ういて くる

11 みよちゃん

みよちゃんが いま おかーさんに だかれて おちちを のんで います



みよちゃんわ まだ 1つです

みよちゃんわ わたくしの いもーとで わたくしわ みよ
ちゃんの ねーさんです

わたくしわ まいにち みよちゃんのおもりをして あげ
ます わたくしが あやして あげると みよちゃんわ
かわいい かおをして ちーさな てを だして うまうまと
いいます

12 ねずみの ちえ

「このごろ なかまの ものが ねこに とられて こまる
が なにか よい くふーわ あるまいか」
と としとった ねずみが なかまの ものに いいました
そのとき 1びきの ねずみが まええ でて いい
ました

「よい くふーが あります おーきな すずを ねこの
くびにつけて おいて その おとが きこえたら にげる
ことに してわ どーでしよー」

「なるほど よい かんがえだ」

と いった みんな かんしんしました すると としとった
ねずみが

「それも よいが だれが その すずを つけに
いくか」

と いいましたので みんな だまって しまいました

13 おしよーがつ

「おとーさん もー いくつ ねたら おしよーがつです
か」

「もー 5つ ねれば おしよーがつです おしよー
がつの おかざりには どんなことを しますか」

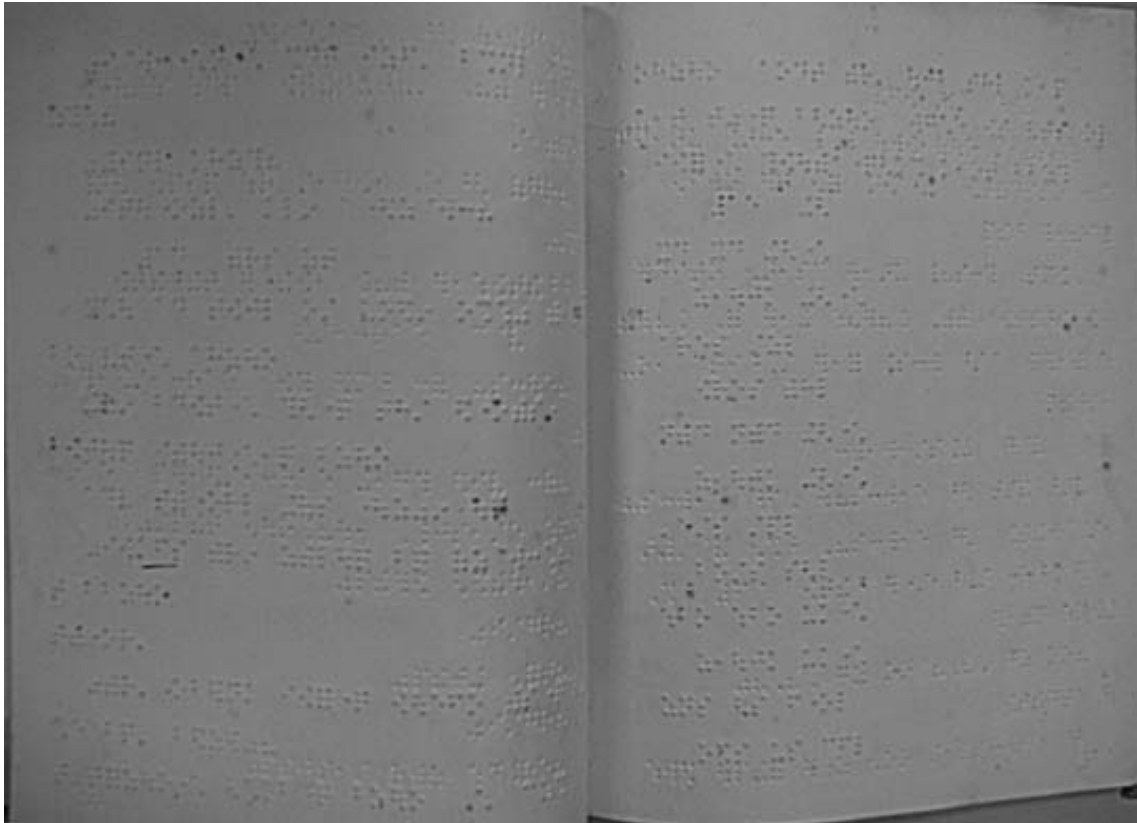
「かどまつを たてます」

「それから」

「しめを はります」

「それから」

「おそなえの もちも かざります」



「おしよーがつかくると おまえわ いくつに なり
ますか」

「9つに なります」

「おとしまにわ なにを あげましょー」

14 もちの まと

むかし ある ところに たや はたけを たくさん もって
いた ひとが ありました

ゆみを いることが すきで とりや けだものを
いころして おもしろがって いました

あるひ ともだちに ゆみの じまんを して

「おそなえの もちを まとにして いて みましょーか」
と いました

ともだちわ

「もちわ たいせつな おこめで こしらえた ものです
から いてわ いけません」

と とめました が きかぬいで いました やわ うまく

あたりました あたると もちわ しろい とりになつて

ばつと とんで いました それから この ひとの たに
わ おこめが すこしも できなく なつたと います

15 ゆき

ふる ふる ゆきが

まっしろな ゆきが

あちらの やまに

こちらの もりに

つもる つもる ゆきが

まっしろな ゆきが

わらやの やねに

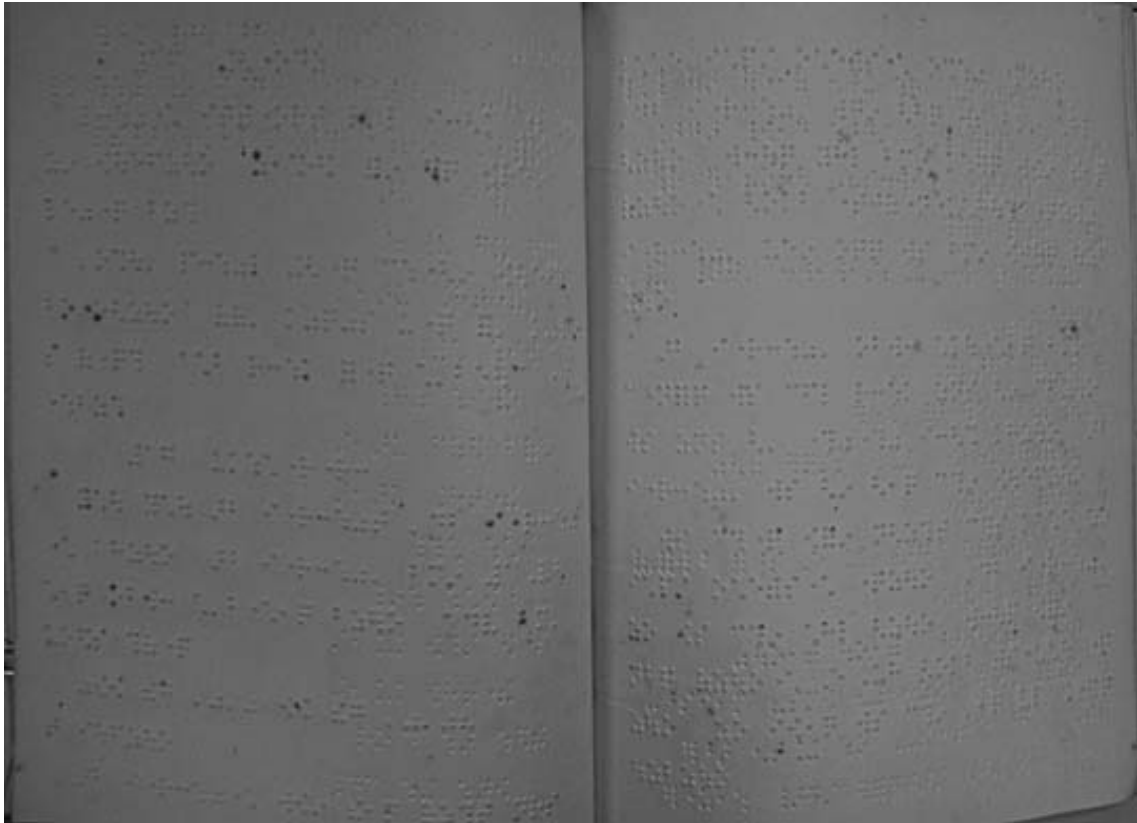
いたやの のきに

さいた さいた はなが

まっしろな はなが

まつの きの えだに

たけの はの うえに



16 ゆきだるま

にーさんが おともだちと にわに おーきな ゆきだるまを こしらえました まっくろな めをして こちらをにらんでいます

わたくしわ ねーさんに ゆきで うさぎを こしらえていただきました みみわ なんてんのはで めわ なんてんの みです あかい ちーさな めで かわいらしう ございます

17 はなさかぢぢー

むかし むかし よい おぢーさんと わるい おぢーさんが ありました よい おぢーさんわ いぬを 1びきかって たいそー かおんがって いました あるひ いぬわはたけの すみで

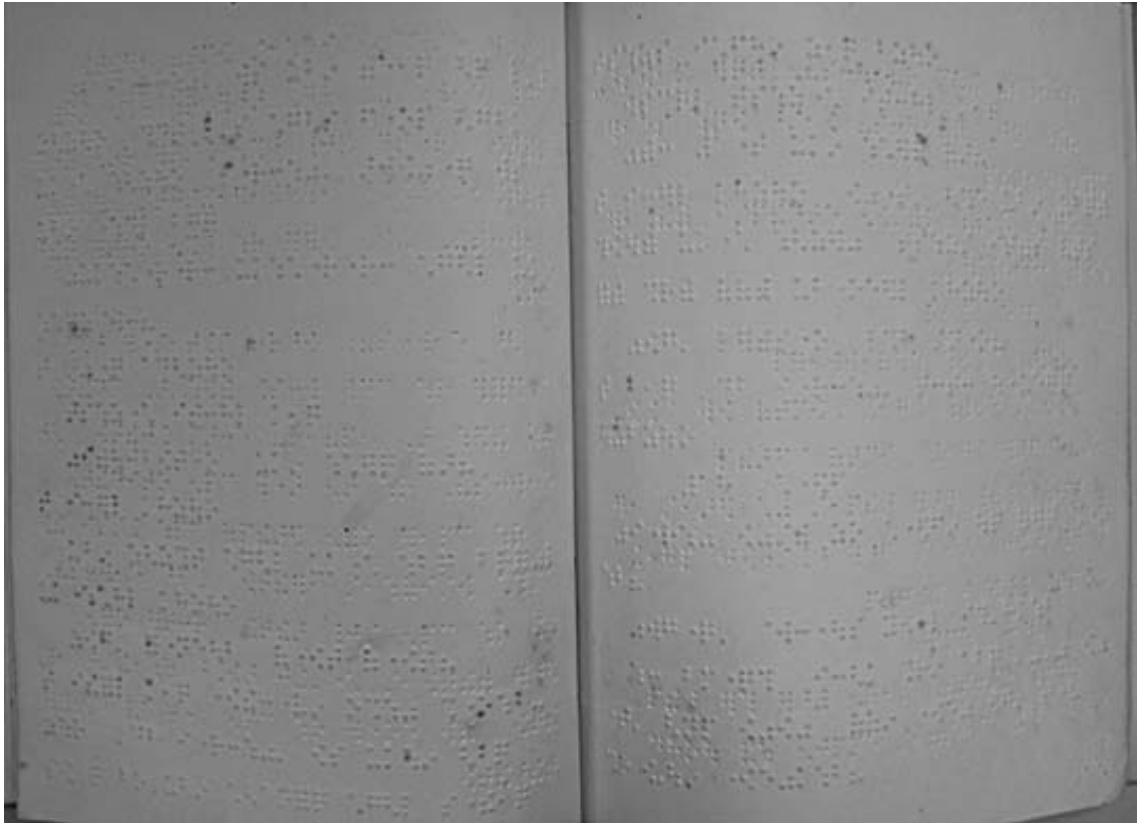
「ここ ほれ わんわん ここ ほれ わんわん」と おしえました

よい おぢーさんが そこを ほって みますと つちの

なかから おかぬや たからものが たくさん でした わるい おぢーさんわ それを きいて その いぬを かりに きました そーして むりに いぬを なかせて そこを ほって みましたが きたない どころみづばかりしか できません おぢーさんわ はらを たてて その いぬを ころして しまいました

よい おぢーさんわ たいそー かなしがって いぬを うづめて その うえに ちーさな まつの きを うえました その まつの きわ ずんずん おーきく になりました よい おぢーさんわ その きを きって うすを こしらえました

その うすで こめをつきますと うすの なかから また おかぬや たからものが でした わるい おぢーさんわ また この うすを かりに きました そーして こめをついて みましたが やっぱり きたない ものばかり でした また おこって その うすを わって ひにくべて しまいました



よい おぢーさんわ その はいを もらって きて にわに
まきました すると にわの かれきの えだに きれいな
はなが さきました おぢーさんわ よろこんで その
はいを ざるに いれて

「はなさかぢぢー はなさかぢぢー かれきに はなを
さかせましょー」

と よんで あるきました

とのさまが おとーりに なって

「おもしろいことだ はなを さかせて みよ」

と おせに なりました

はいを まきますと かれきにはなが さいて いちめん
はなざかりに なりました

「これわ めづらしい みごと みごと」

と おほめに なって ごほーびを たくさん くだ
さいました わるい おぢーさんわ この はなしを き
いて のこつて いた はいを かきあつめて かれきに のぼつて

とのさまの おかえりを まって いました

そのうちに とのさまが おとーりに なって

「もー 1ど はなを さかせて みよ」

と おせに なりました こんどわ いくら はいを まいても
すこしも はなが さきません とのさまや おとものひと
めも くちも みみも はいだらけに なりました

「これわ にせものだ にくい やつだ」

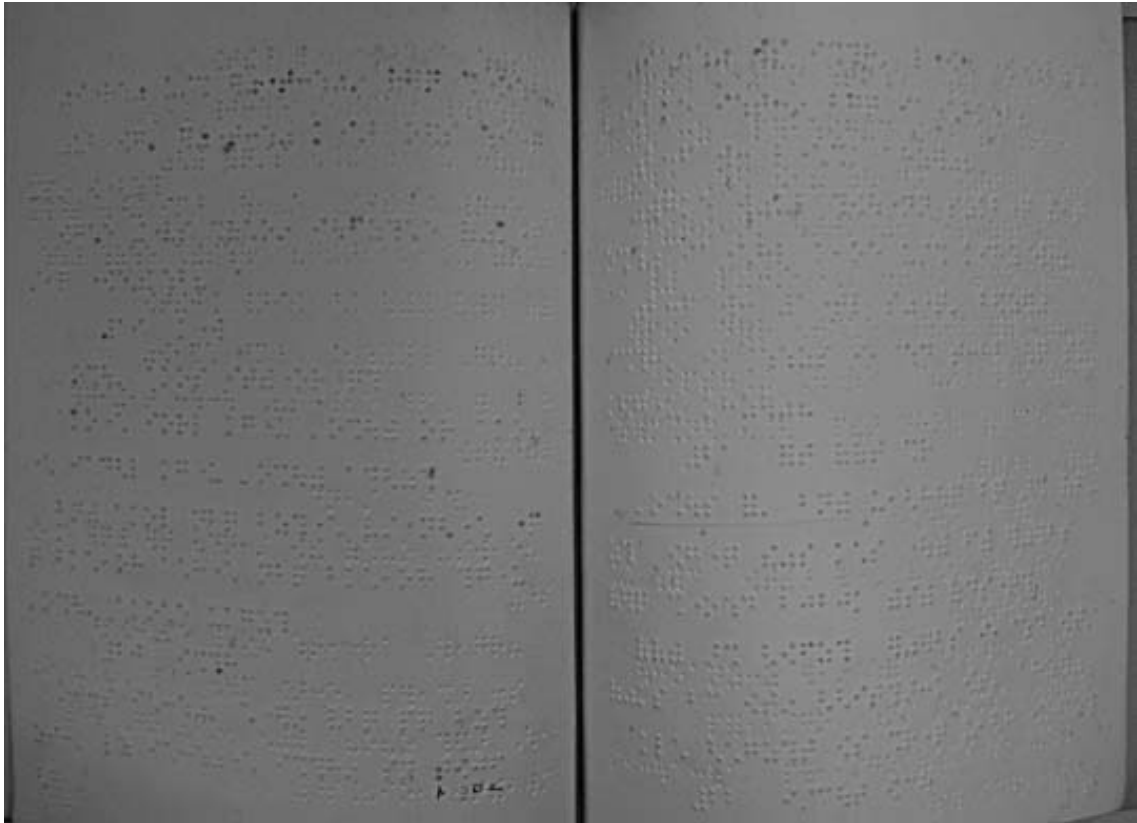
と いって わるい おぢーさんわ とーとー しばられて
しまいました

18 かげえ

「おぢさん こんやも また かげえを して みせて くだ
さい」

「それでわ しょーじの むこーに おすわりなさい

さー いぬです おきな くちを あいて わんわん こん
どわ きつね こんこん みみを ごらん これわ とび
くちばしを ごらんなさい」



「おちさん はやく せんどーさんを みせて ください」
「はい これわ せんどーさん ながい たけの さおで
ふねを こぎます
これから ゆびの くみかたを おしえますから みんなで
やって ごらんなさい」

19 なぞ

わたくしわ あなたの おともだちです
あなたが おたちに なれば わたくしも たち あなた
が おあるきに なれば わたくしも あるきます
いつも あなたについて いますが ひや つきが で
て いなかったり あかりが ついて いなかったり すれば
わたくしわ あなたからはなれます

20 おくすり

たろーの おかーさんわ かぜを ひいて ねて います
たろーわ いま おかーさんが おくすりを のむ ところえ
きて

「おかーさん その おくすりわ にごー ございますか
にがいなら おさとーを しいて おあがりなさい」

「いーえ そー にがくわ ありません」

「それなら そんなに すこしづつ のまないで もっと
たくさん おあがりになつたら はやく なおしましょー」

「いーえ そー 1どに のんでわ いけません

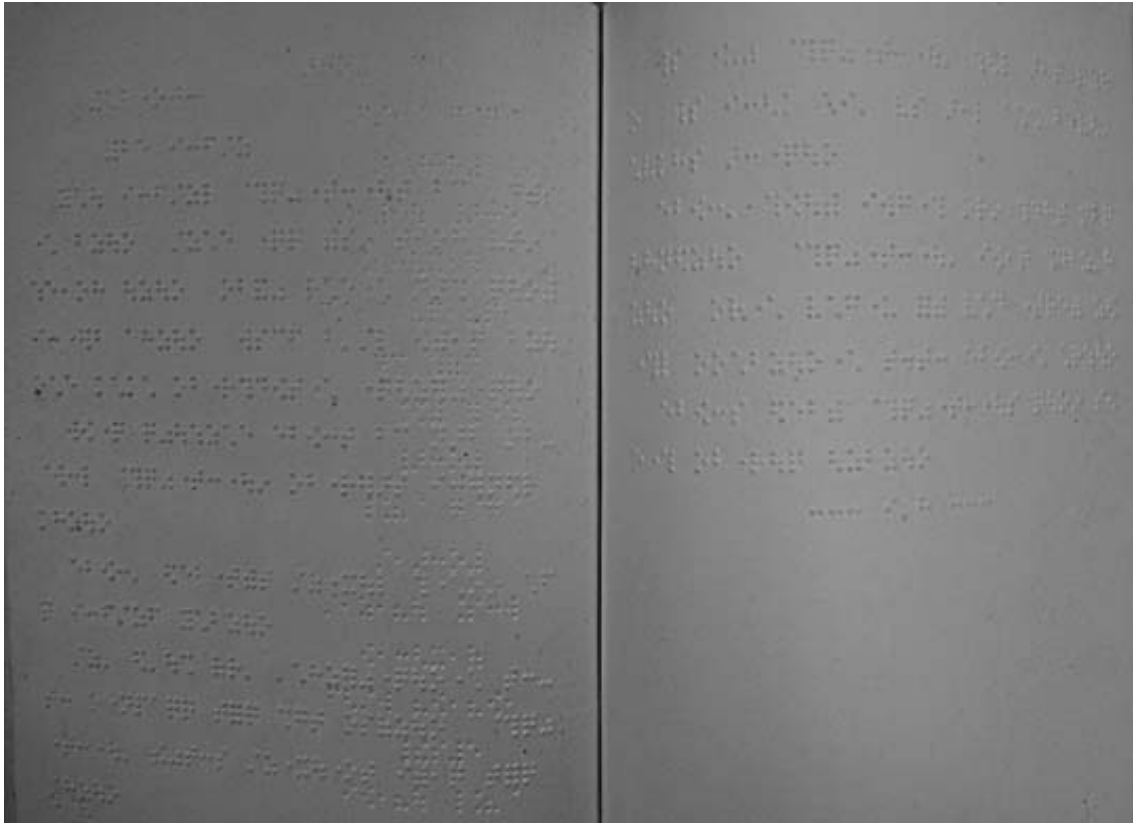
おくすりわ おいしやさまの おっしゃる とーりに して のま
なければ なりません」

21 めと みみと くち

わたくしの めわ いつも はっきりして いて よく みえ
ます これで ほんの なかの じも えも せんせいの
みせて くださる いろいろなものも みるのです

みみも よく きこえます せんせいの おっしゃる ことや
みんなの いう ことを ききおとすよーな ことわ ありませ
んにか きかれますと この くちで はっきり こたえます

22 おやうしと こうし



わたくしの うちにわ おやうしと こうしが います
こうしわ このあいだ うまれたのです もー よほど
おーきく なりました けれども まだ つのわ はえません
なんにでも すぐ びっくりして かけだします
おやうしわ こうしを たいそー かわいびります ひこ なん
べんも なめて やります おやうしを そとに だすと
こうしも ついて いきます ちよつとわ はなれますが
すぐ おやうしの ところえ きます つなを つけなくても
よそえわ いきます

23 これから

だんだん あたかかになつて きました うめの はな
が さきだしました

けさ うぐいすが うめの きで ほーほけきよと
なきました さくらが さくのわ これからです

なのはなが さくのも これからです ちよーちよーが
まうのも これからです

24 ひこーき

あれあれ あがる

ひこーきが

おーきな とびが

とぶよーだ

ずんずん あがる

くもの うえ

のつて みたな

ひこーきに

あれあれ あんなに

ひこーきが

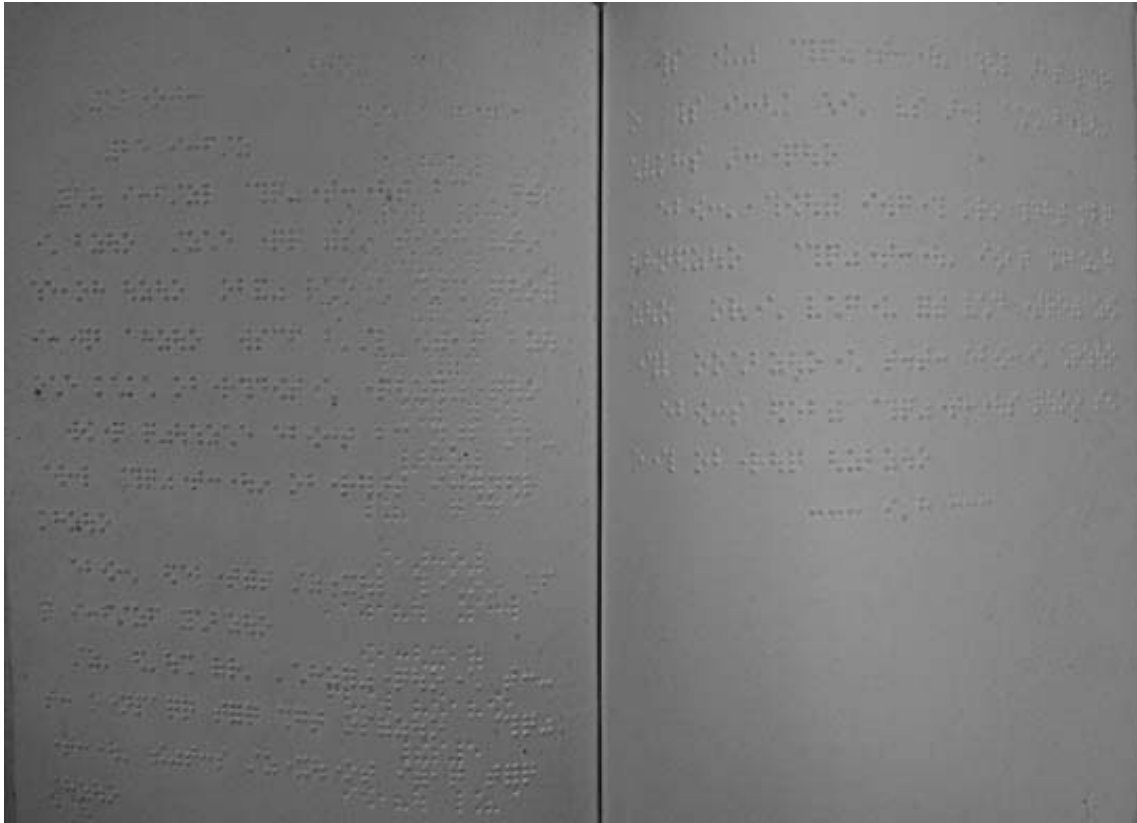
ちーさな とんぼが

とぶよーだ

だんだん ちかよる

おひさまに

あんなに とんだら



ゆかいだろー

25 おえやま

むかし おえやまに しゅてんどーじと いう わるものが いました やまから でて ものを とったり ひとを さらったり しました たいへん ちからが つよく てしたもおせい ありました そのうえ いわやに こもって いましたから なかなか たいぢすることが できませんでした

そこで てんしさまから らいこーと いう つよい たいしょーに しゅてんどーじをたいぢせよと おせつけに なりました

らいこーわ けらいどもと やまぶしに すがたを かえて おえやまえ むかいました

やまわ けわしく みちわ わかりませんでしたとーとー たづねあてて とめて くれと たのみました しゅてんどーじわ ほんとの やまぶしだと おもって とめて

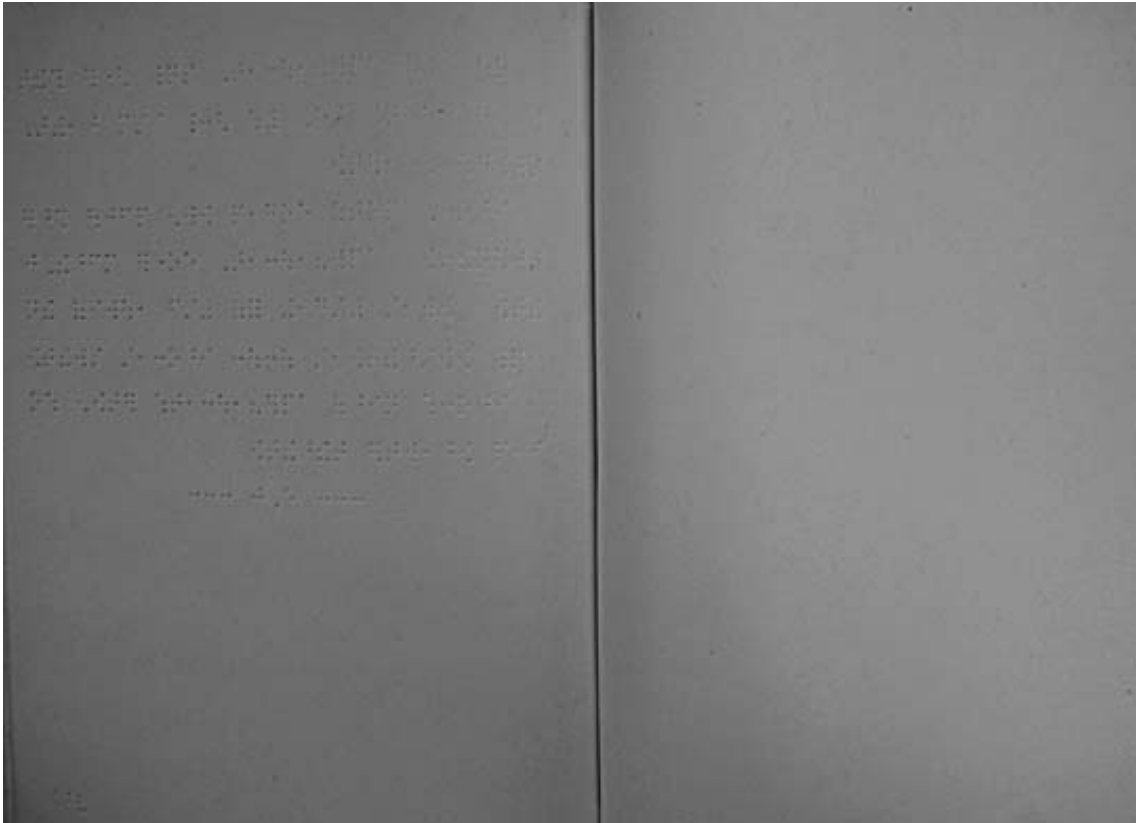
やりました

その ばん しゅてんどーじわ さげに よって ねました その おきな かおわ ひの よーに あかく いびきわ かみなりの よーでした

らいこーわ すこしも おそれず たちを すると めいて きりつけました しゅてんどーじわ おこつて くるいまわりました たちが ひかれば めも ひかる どちらも まけずに たたかいましたが とーとー らいこーが かちました

らいこーの けらいも しゅてんどーじの てしたを のこらず たいぢして しまいました

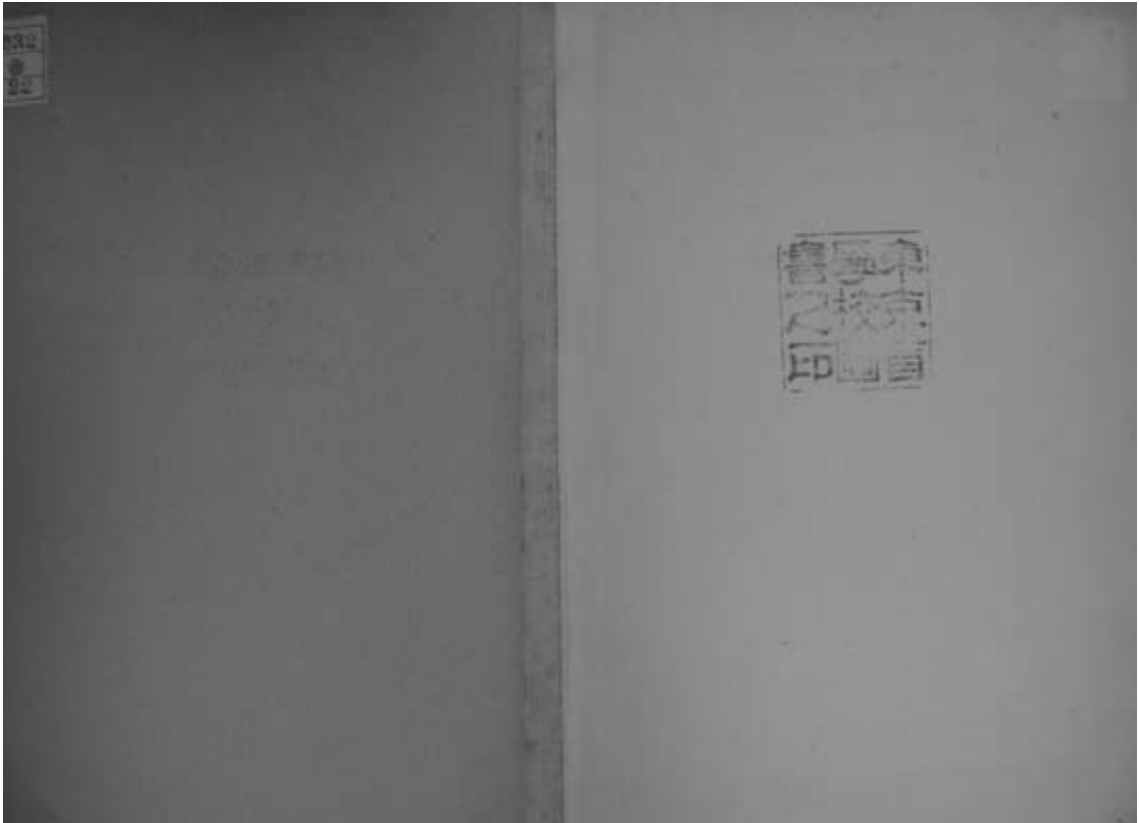
—— おわり ——

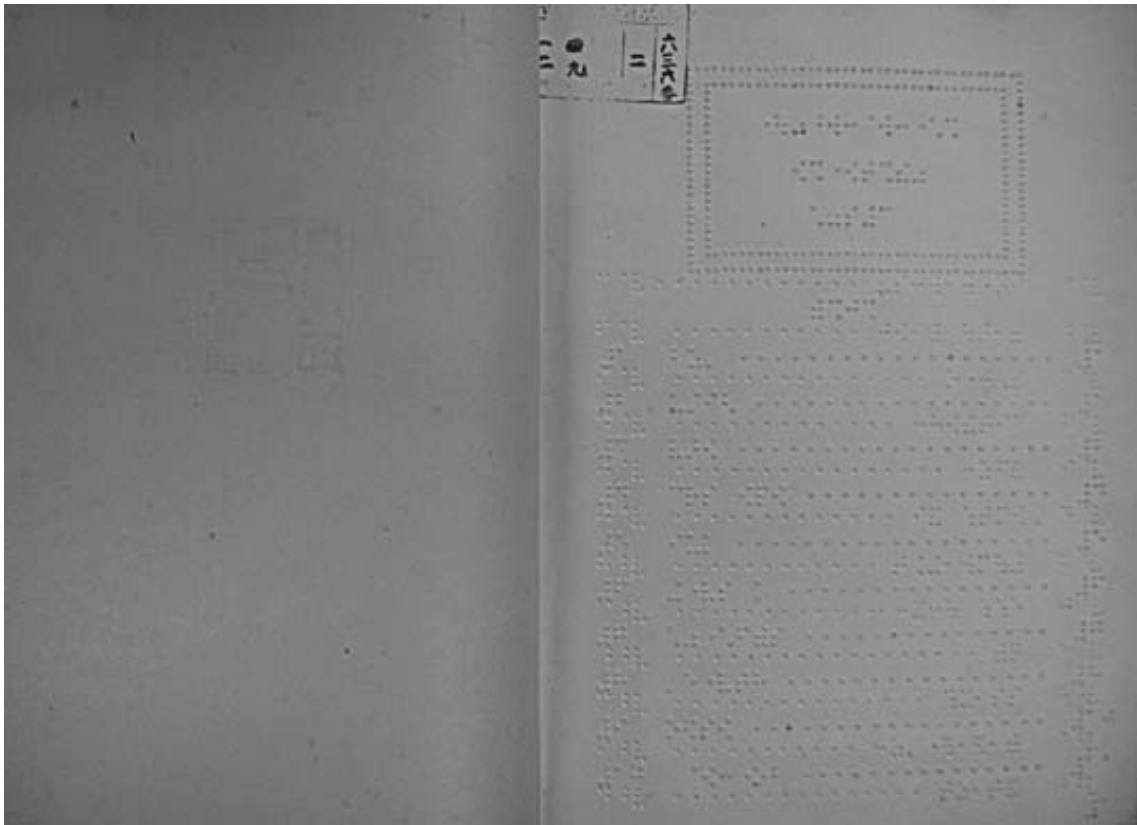








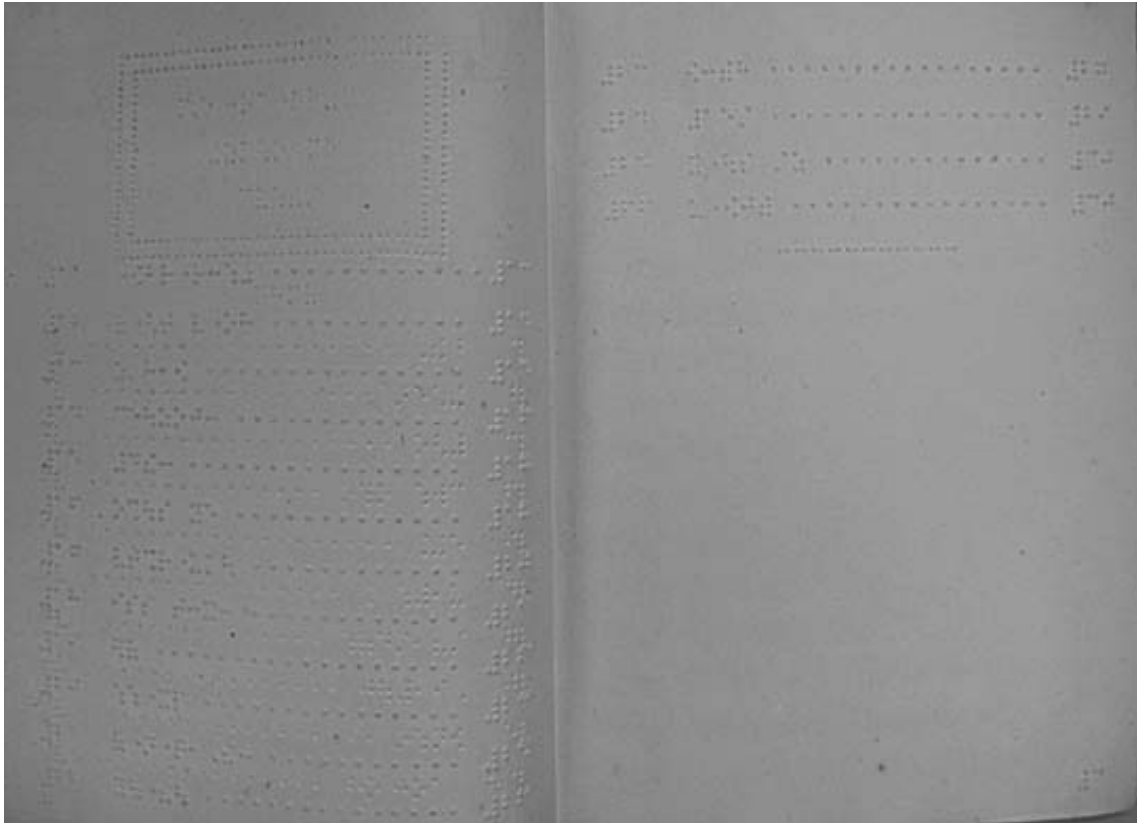




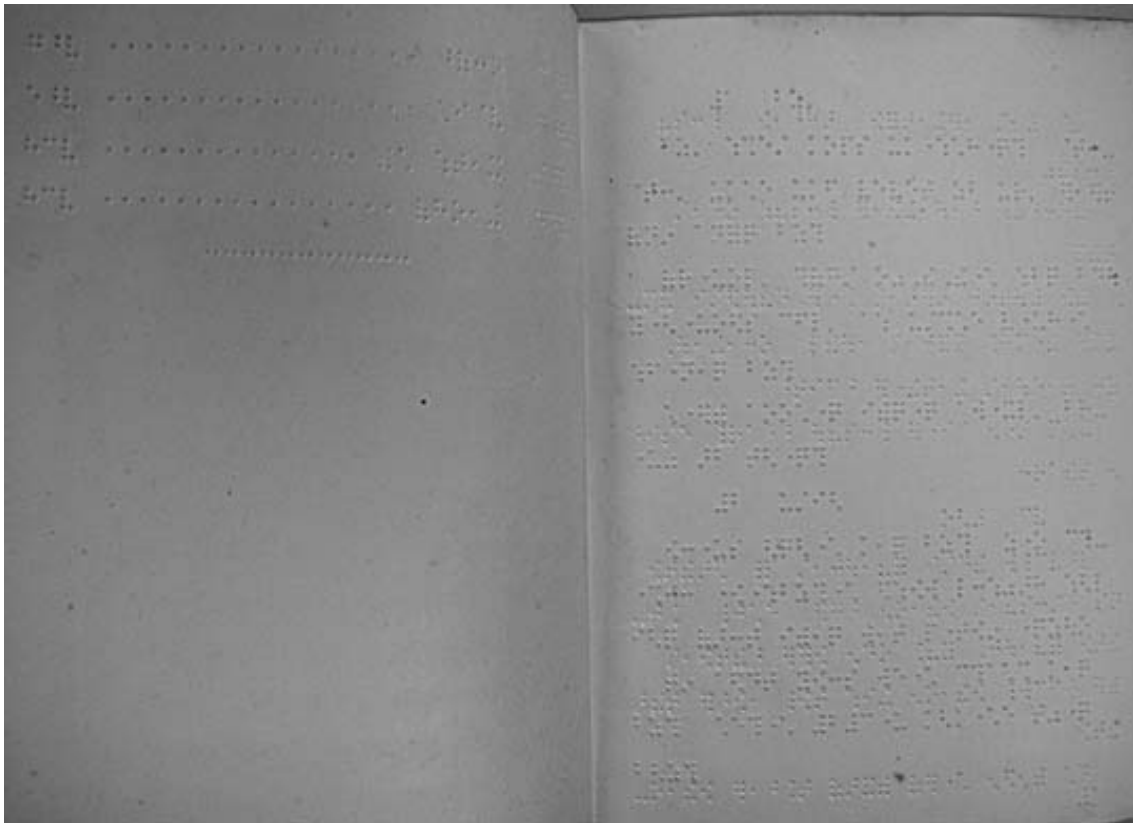
じんじょうしょうがく
こくごとくほん
かんの3

目録

1	いまわ	1
2	はやおき	1
3	ひよこ	2
4	うちのこねこ	4
5	おはな	5
6	ゆびのな	6
7	かのがえもの	7
8	わらびとり	8
9	たけのこ	10
10	きょーだい	11



11	こいちぢーさん	13	23	こーもり	27
12	みぎとひだり	14	24	15や	29
13	まわりっこ	15	25	ふじの やま	30
14	うらしまたろー	16	26	はごろも	30
15	4ほー	18			
16	わたくしの むら	18			
17	ひとくちばなし	20			
18	おのの とーふー	21			
19	せみ	22			
20	ささふね	23			
21	みづでっぼー	25			
22	むしぼし	26			



1 いまわ

いまわ さくらや なたねの はなざかりです ちょー
ちょーわ はなから はなえ ひらひらと まい はちわ せつせと
みつを あつめて います

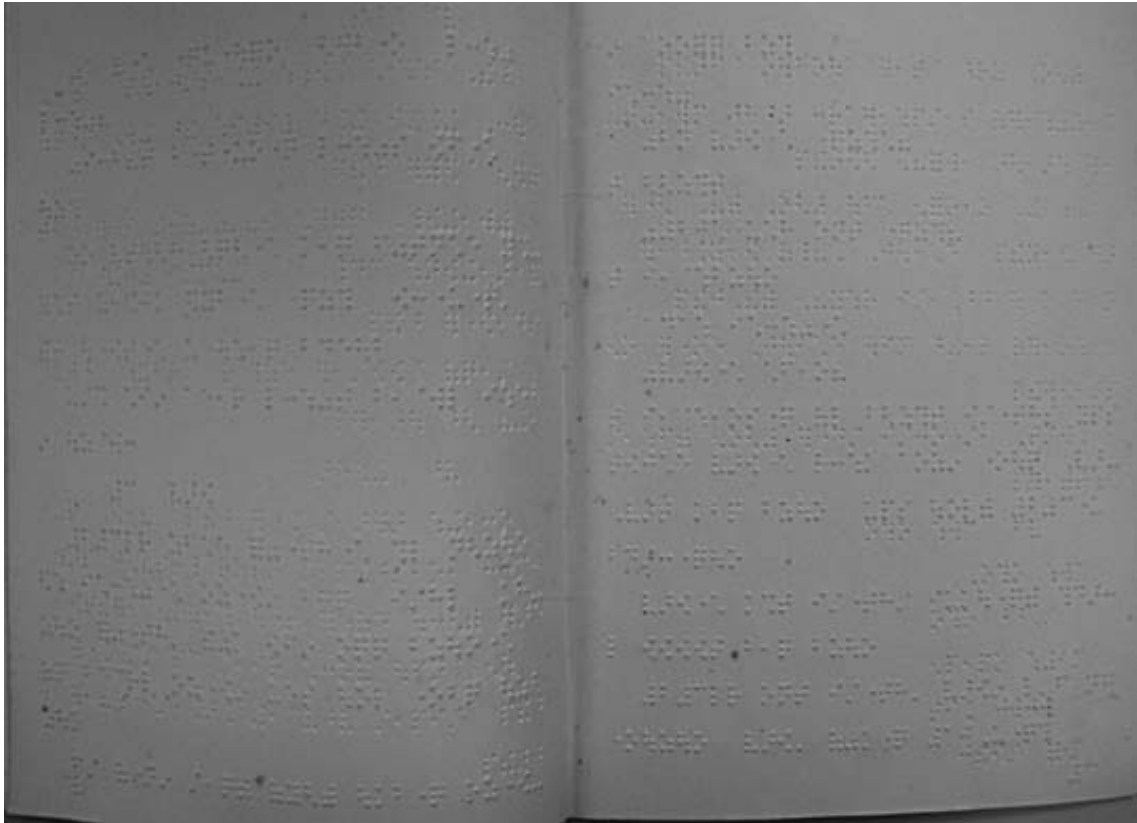
みちばたにわ すみれや たんぽぽが さいて いるし
むぎばたけの うえにわ あさ はやくから ひばりが
さえづつて います

かぜも あたかかて おもてで あそぶにわ いち
ばん よい ときです

2 はやおき

こーばの きてきが なって います まだ うす
ぐろー ございますが けさこそ にーさんより さきに
おきて みよーと おもって そつと ねどこを でした

とを あけると むこーの そらが うすあかく なって
います からです 23ば なきながら とんで
いきます



「あ ひが ではじめた きれいだ にーさん
にーさん」

「おーい」と いどばたで にーさんの こえが
します

また ひとしきり きてきが まって えんとつから むく
むくと まっくらな けむりが できます こーばでわ
もー しごとが はじまって いるらしい

はやく かおを あらって にーさんと いっしょに おさらい
を しましよー

3 ひよこ

23にち まえから めんどりが すに つきました
けさ おかーさんが たまごを いれて おやりに なり
ました めんどりわ へんな こえを たてて いましたが
みて いるうちに たまごを はらの したに だいて しまい
ました

えや みづを やっても みむきも しないで たまご

を あたためて います

おかーさん

「いつ ひよこが できますか」

と ききますと

「20かばかり たつと できます」

と おっしゃいました

あるあさ おかーさんが

「ひよこが かえた」

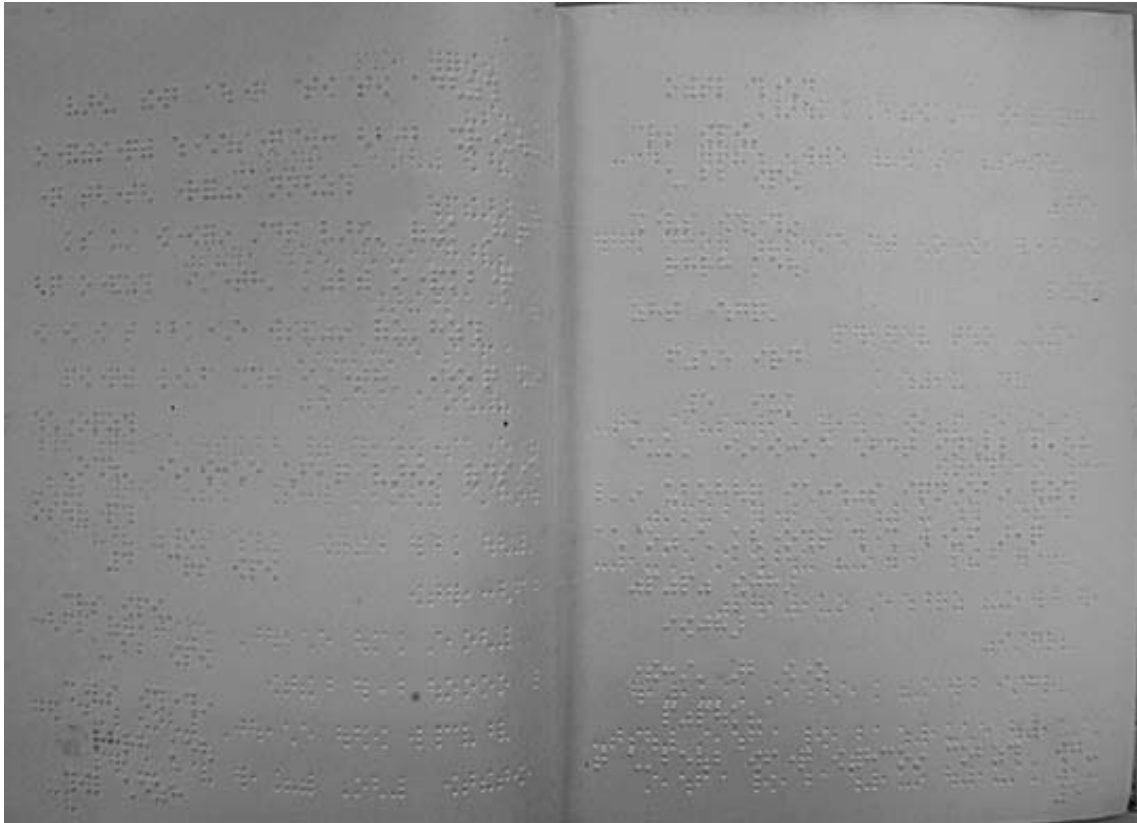
と おっしゃったので みに いきますと おやどりのむねの
ところから ひよこが ちーさな

あたまを だして ぴよ

ぴよと ないて いました はねの したにも 23ば
いるよーでした

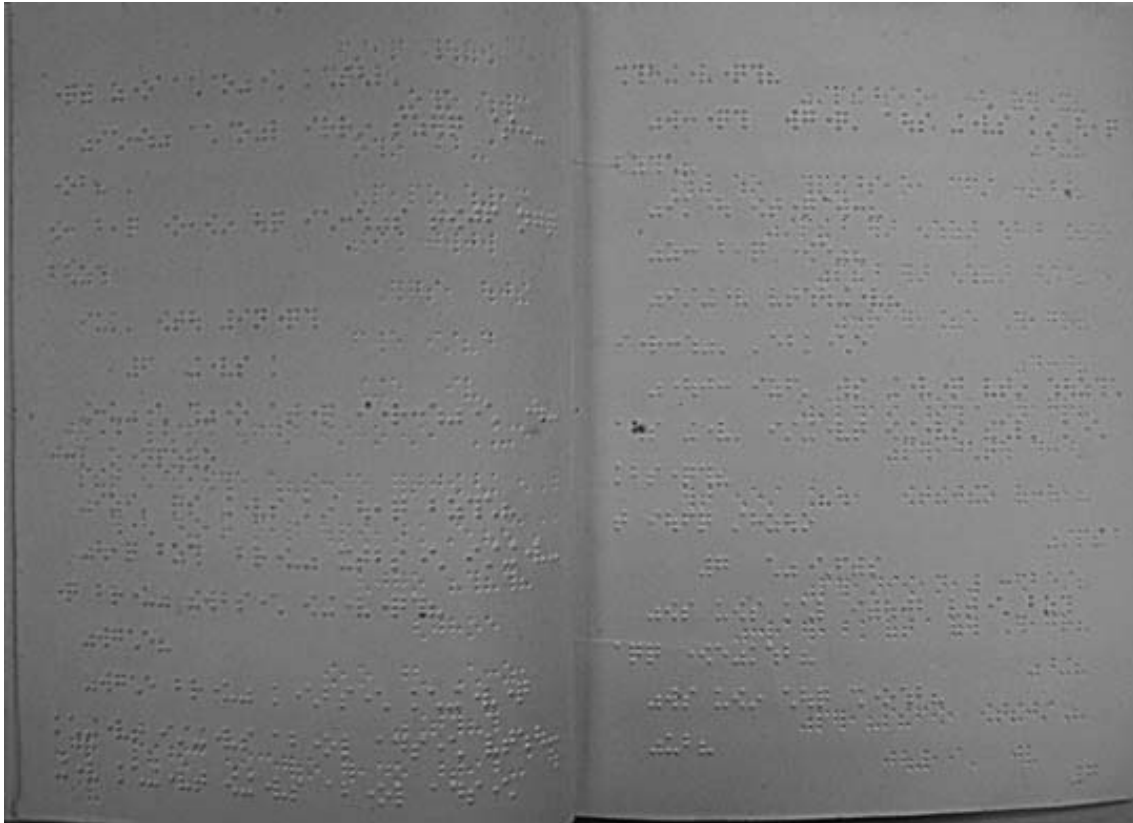
ひよこが なくと おやどりわ おはなしでも するよー
に こここと いて いました

23にち たつと おやどりわ ひよこを にわえ つれ
だしました ひよこわ みんなで 10っぱです



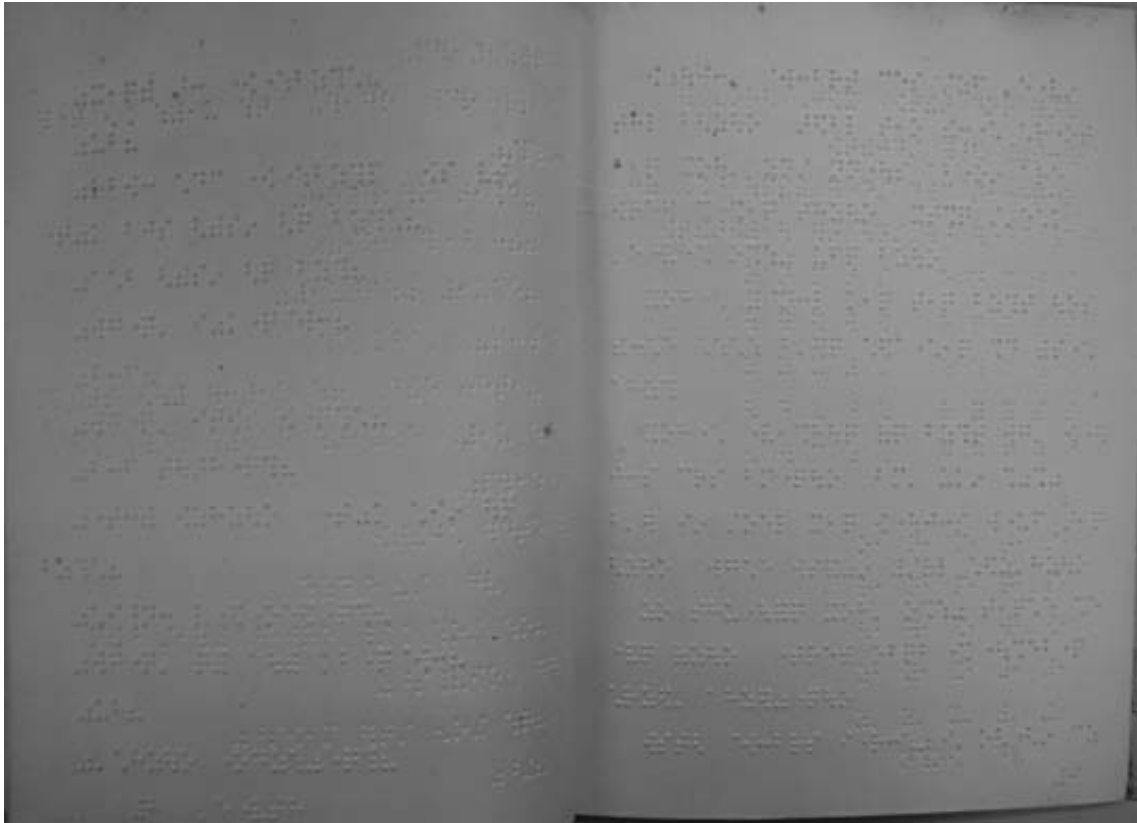
ひよこわ ほそい あしで ちょこちょこ あるきます
たべものでも さがすのでしょー きいろい くちばし
で ときどき ぢめんを つつきます
なの はや こごめを やると ひよこわ みんな
よって
きて たべます おやどりわ なんにも たべないで
こ こ こ と いいながら そのへん みまわす
ねこでも そばえくると
おやどりわ おこって けを
さかだてます
わたしわ がっこーから かえって ひよこを みるのが
たのしみです
4 うちの こねこ
うちの こねこわ
かわいい こねこ
くびの こすずを
ちりちり ならし
すそに からまり

たもとに すぎる
うちの こねこわ
かわいい こねこ
くびの こすずを
ちりちり ならし
まりと ざれてわ
えんから おちる
5 おはな
おはなわ がっこーから かえると おつかいに いったり
にわを はいたりして おかーさんの おてつたいを します
あかちゃんが なきだすと すぐ そばえ よって
「ねんねん ころりよ
おころりよ
ぼーやわよい こだ
ねんねしな」
と かわいらしい こえで こもりうたを うたいます それ



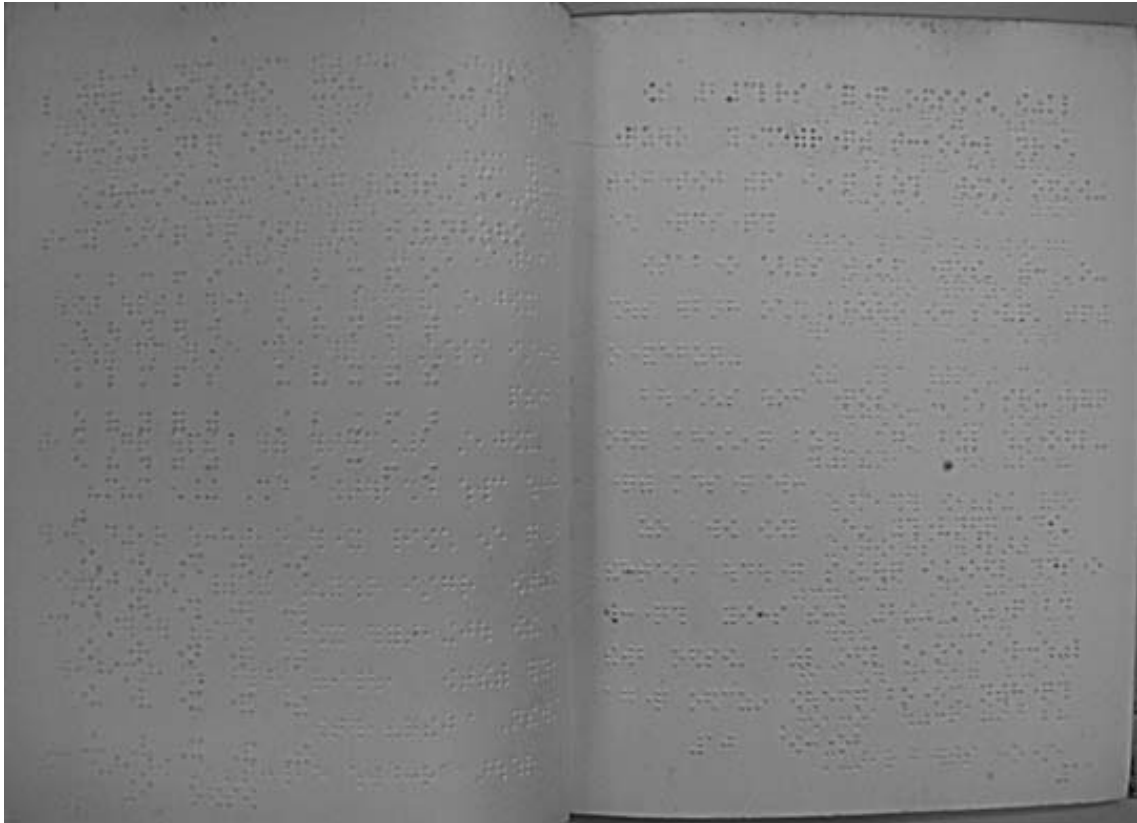
でも まだ あかちゃんが なくときこわ
「おかーさん あかちゃんに おちちを のませてちょー
だい」
こー いった だっこを して おかーさんの ところえ つれて
いきます
おはなわ ことし 9つです
6 ゆびのな
ゆーはんが すんだ あとで おぢーさんが じ
ろーに たづねました
「おまえわ ての ゆびの なを していますか」
「しています いちばん ふとしのが おやゆび
で いちばん ほそしのが こゆびです」
それから
「それから いちばん なかぬのが なかゆびで
なかゆびと おやゆびの あいだに あるのが ひとさし
ゆび なかゆびと こゆびの あいだに あるのが

くすりゆびです」
「そーです それでわ あしの ゆびの なを して
いますか」
「おなじ ことしょー」
「まー いった ごらん」
「おやゆび ひとさしゆび」
おぢーさんわ わらいながら
「じろー おまえわ その ゆびで ひとを さしますか
あしの ゆびわ おやゆびと こゆびの ほかにわ なが
ぬのです」
と おしえて やりました
7 かんがえもの
「この はこの なかに おもしろい ひとが います
あてて ごらんなさい」
「その はこを かして ください」
「はい」



「ふっても よー ございますか」
「はい」
「たいそー かるう ございますね この ひとわ
どんな いろの きものを きて いますか」
「あかい きものを きて います」
「それでわ おんなでしょー」
「いーえ」
「それでわ おとこの こですか」
「いーえ としよりです」
「どーも こまりました どんな かおを して
いますか」
「かおぢゅー ひげだらけです」
「それでわ ても あしも ないでしょー」
「はい」
「わかりました だるまさんです」
8 わらびとり

こじろーわ しょーいちと うらの やまえ わらびを
とりに いきました よけりに とった ほーが かちだと
いって ふたりわ まつや つつじの あいだを あちら
こちらえ くぐって とりました ふとくて やわらかな
わらびが たくさん はえて いました
ふたりが むぢゅーに なって とって いますと したの
ほーから かさかさ いわせて かけあがって くる ものが
あります
ふたりが びっくりして みて いますと それわ こじ
ろーの うちの いぬでした いぬわ はなを くんくん
いわせ おを やたらに ふって こじろーの そばえ よって
きました それから そのへんを むやみに かけまわりました
また とりはじめて ふたりわ たくさん とってから くら
べてみました どちらも たいてい おなじくらいで
かちまけわ ありませんでした
そのとき しょーいちの おぢーさんが たきぎを うま



につけて そこえ きました ふたりわ よろこんで
おぢーさんについて かえりました

こじろーが うちえ かえって みますと いぬわ もー
とっくに かえって いて かけて きて とびつきました

あ い う え お か き く け こ

さ し す せ そ た ち つ て と

な に ぬ ね の は ひ ふ へ ほ

ま み む め も や い ゆ え よ

ら り る れ ろ わ っ っ う っ を

ん

が ぎ く げ ご

ざ じ ず ぜ ぞ

だ ぢ づ で ど

ば び ぶ べ ぼ

ぱ ぴ ぷ ぺ ぽ

9 たけのこ

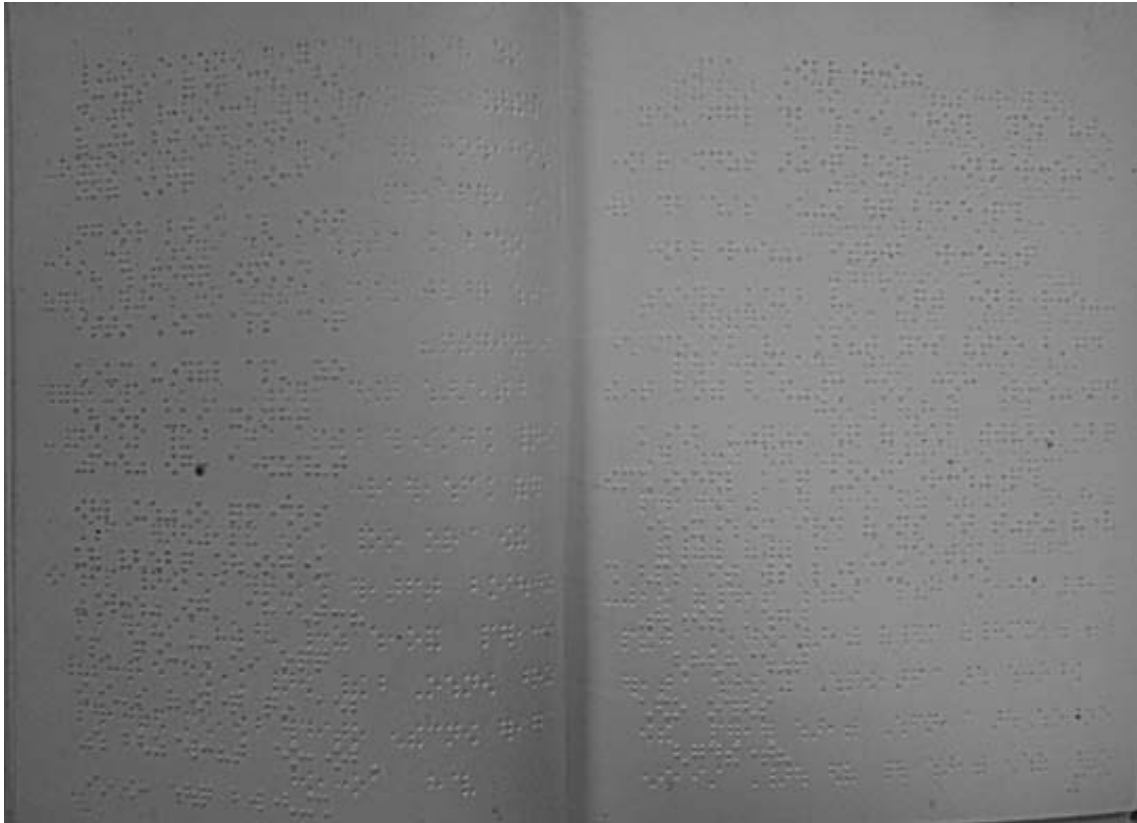
この 23にちの あめで たけのこが こんなに
でました むぐらもちでも とーったよーに つちが
ところどころ もちあがっています そこから たけのこ
が できるのです

このあいだ かきねの そばえ でたのわ もー わた
くしの せいより たかく なりました こー のびてわ とて
も たべられませんか

いしがきの したえ でたのわ かわが おちはじめて
たけになりかかっています あれわ いまに さをだけに
でも なるのでしょー

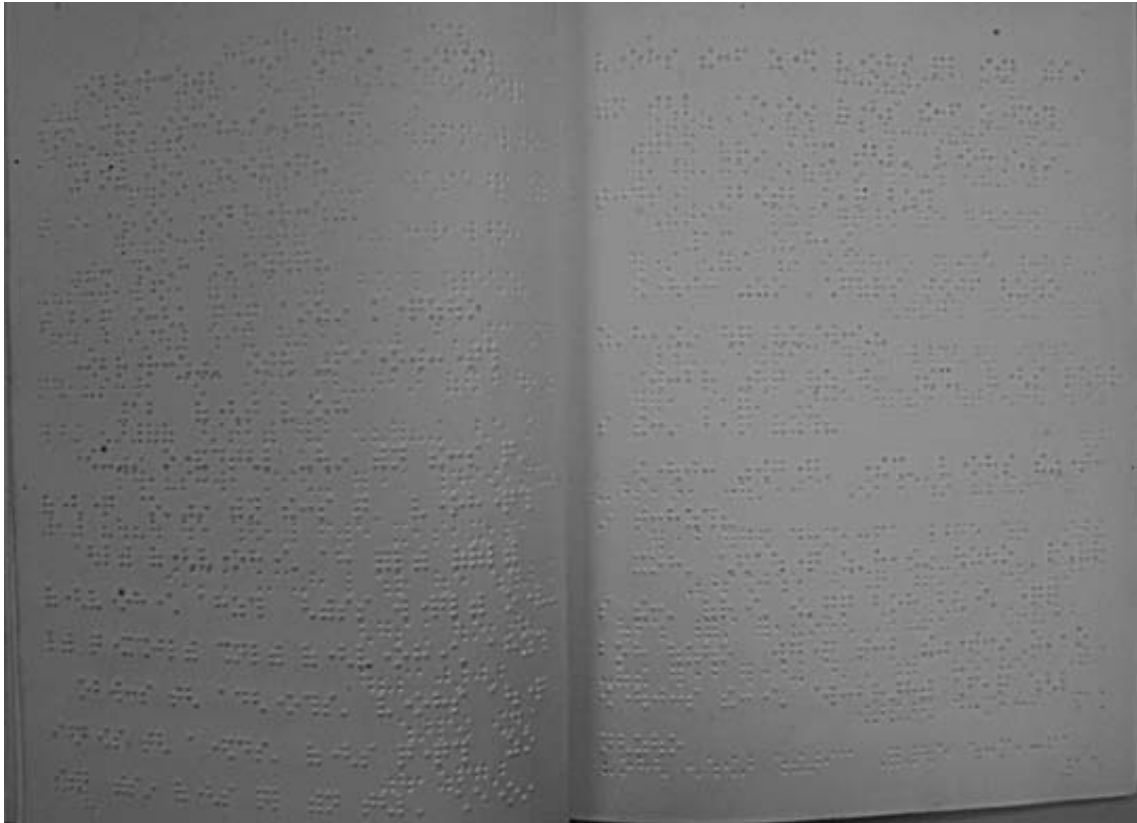
また あそこ ここに わらを むすびつけて あるのわ
ほりとらない しるして のばして おやだけに するのだ
そーです むこーの ほーに 2ほん ならんで いる
ほそい たけのこわ いまに たけに なったら おぢーさんに
あれで たけうまを こしらえて いただく つもりです

10 きょーだい



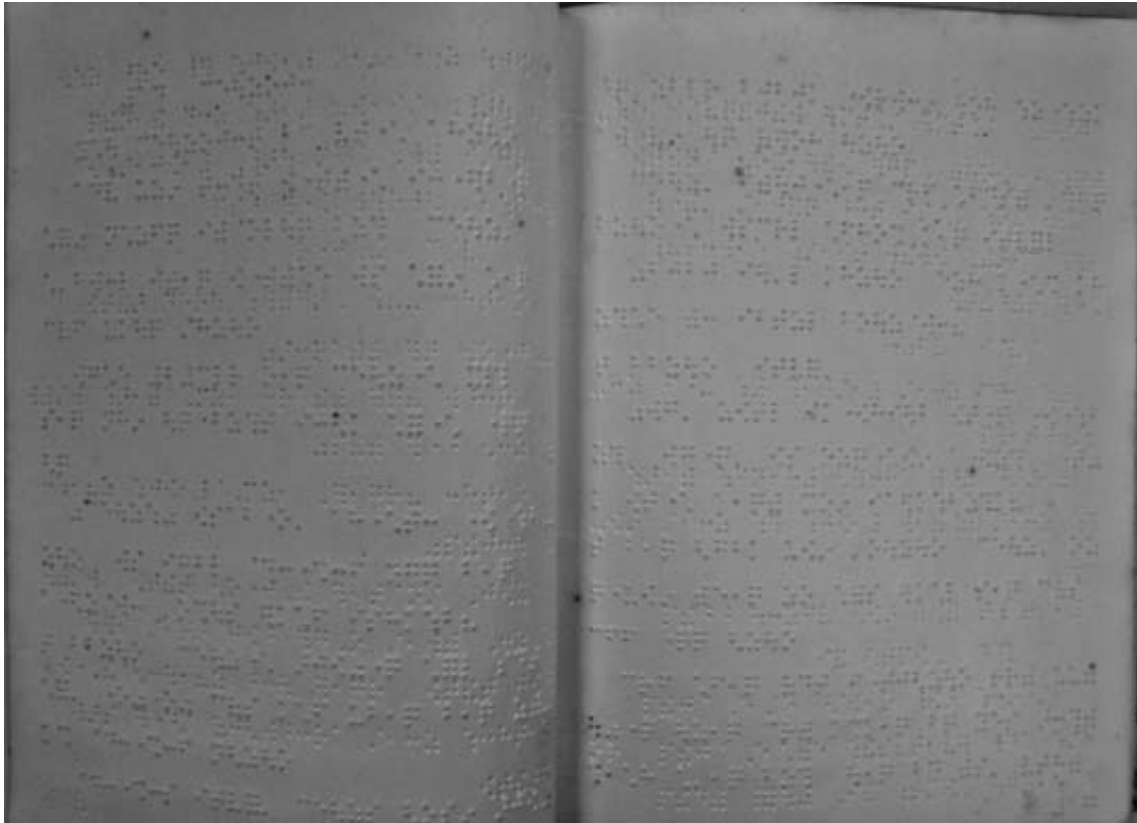
ゆーべの あめで くさや きの
みどり いろ ます なつの あさ
つつみ かかえて がっこーえ
つれだち いそぐ あね おとと
あし すべらせて こけかかる
おととを かばう あねの うで
かばう はずみに あねわ また
あしだの はなお ふつつりと
「ねーさん これを あげます」と
こしに はさんだ てぬぐいの
はし ひきさいて さしたせば
「しょーさん これわ ありがとー」
あねわ てばやく おを たてて
こがわの みずで てを あらひ
「さ いきましょー」と きょーだいけ
がっこー さして いそぎゆく

11 こいちぢーさん
むらはづれに すいしややが あります むらの ひとわ
こいちぐるまと よんで います こいちぢーさんが
その すいしややの ばんを して いるからです
こいちぢーさんわ おもしろい ぢーさんで
「からすの なかない ひわ あっても こいちぢーさん
が うたわなひわなひ」とむらの ひとから いわれる
ほど いつも きげんよく うたを うたう ぢーさんです
なかい はんてんを きて みじかい ももひきを はいて
こぬかだらけに なって はたらく ぢーさんです
ざぶざぶ おちる みずの おと とんとん ひび
く きねの おと その にぎやかな なかから
「しごと なされよ
きりきりしゃんと
かけた たすきの
きれるほど」



こいちぢーさんの うたう こえが きこえます
いつか うちの おとーさんが みちで
「いつも おたっしやなことだ」
と おっしやったら こいちぢーさんわ
「もー すっかり よわりまして」
と いった おーきな てで あたまを なでました
こいちぢーさんわ ことし 69だそーです
12 みぎと ひだり
ごはんを たべる ときには はしを もつ ほーのてわ
みぎで ちゃわんを もつ ほーのては ひだりです
あしにも みじひだりが あり めにも みみにも
みぎひだりが あります きものの そでにも たび
にも てぶくろにも くつにも みぎひだりが あります
たいそーの とき あるきだすのわ ひだりの あしで
おけにこの とき あげるのわ みぎの てです また
おもい ものを みぎの てに もつ ときにわ からだを

ひだりの ほーえ まげ ひだりの てに おもい ものを
もつ ときにわ からだを みぎの ほーえ まげます
それから みちを あるく ときにわ ひだりがわを
とーるのが よいことになっ ています
13 まわりっこ
こじろー 「また わかれみちの ところえ きました
まわりっこを して みましょーか」
しょーいち 「して みましょー ぼくわ みぎの ちかみち
の ほーを いった みます」
こじろー
「それでわ ぼくわ ひだりの ほんどー
をとおります」
ふたりわ かけあしで まわりっこを しました ちかみち
の ほーわ みちが こわれて いたり いしが でて
いたり しました それで とーい ほんどーを まわった
こじろーの ほーが しょーいちよりも かえって さきに
つきました



14 うらしまたろー

むかし うらしまたろーと いう ひとが ありました
あるひ はまを とーると こどもが おーせいで
かめをつかまえて おもちゃにしています うらしまわ
かわいそーに おもって こどもから その かめを かって
うみえ はなして やりました

それから 23にち たって うらしまが ぶねに
のって つりを していますと おーきな かめが でて
きて

「うらしまさん このあいだわ ありがとー ござい
ました その おれいりに りゅーぐーえ つれて いって
あげましょー わたくしの せなかえ おのりなさい」
と いいました うらしまが よるこんで かめに のると
かめわ だんだん うみの なかえ はいって いって まも
なく りゅーぐーえ つきました

りゅーぐーの おとひめわ うらしまの きたのを よるこん

で まいにち いろいろな ごちそーを したり さまざまな
あそびを して みせたり しました

うらしまわ おもしろがって うちえ かえるのも わすれて
いましたが そのうちに かえりたく なって おとひめに

「いろいろ おせわに なりました あまり ながく なり
ますから もー おいとまに いたしましょー」

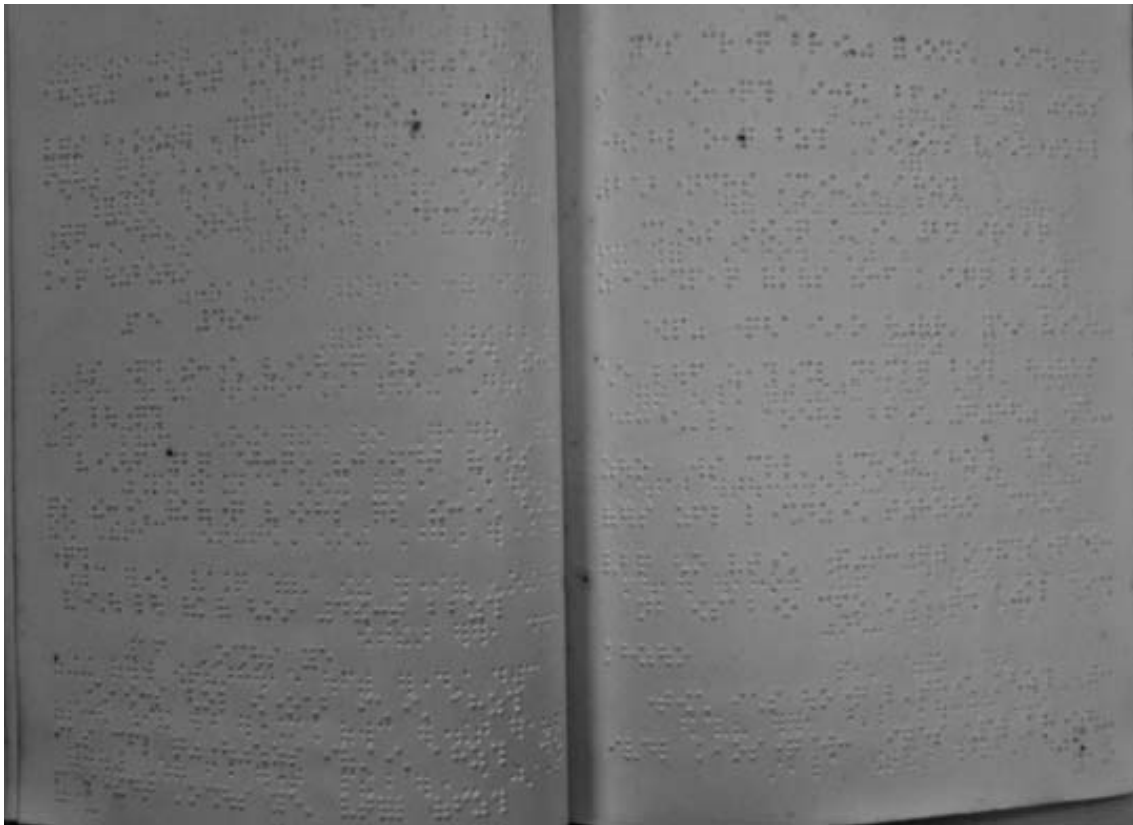
と いいました おとひめわ

「それわ まことに おなごりおいしい ことで ござい
ます それでわ この たまてばこを あげます どん

な ことが あっても ぶたを おあけなさいますな」

と いって きれいな はこを わたしました うらしまわ たま
てばこを もらって また かめの せなかに のって うみの
うええ でて きました

うちえ かえって みると おどろきました ちちも はまも
しんで しまつて うちも なくなつて いて むらの よーすも
すつかり かわつて います して いる ものわ ひとりも



ありません かなしくて かなしくて たまりませんから おと
ひめの いったことも わすれて たまてばこを あけました
あけると はこの なかから しろい けむりが ぱっと
でて うらしまわ たちまち しらがの おぢーさんに
なって しまいました

15 4ほー

ひの での ほーが ひがしで ひの 入る ほー
が にしです

ひがしえ むいて りょーてを ひろげると みぎの
ての ほーが みなみで ひだりの ての ほーが きた
です

ひがし にし みなみ きたお 4ほーと いいます

16 わたくしの むら

がっこーの きたに こだかい おかが あります
おかの うえに てんじんさまの おみやが あります
え のぼると わたくしの むらわ ひとめに みえます

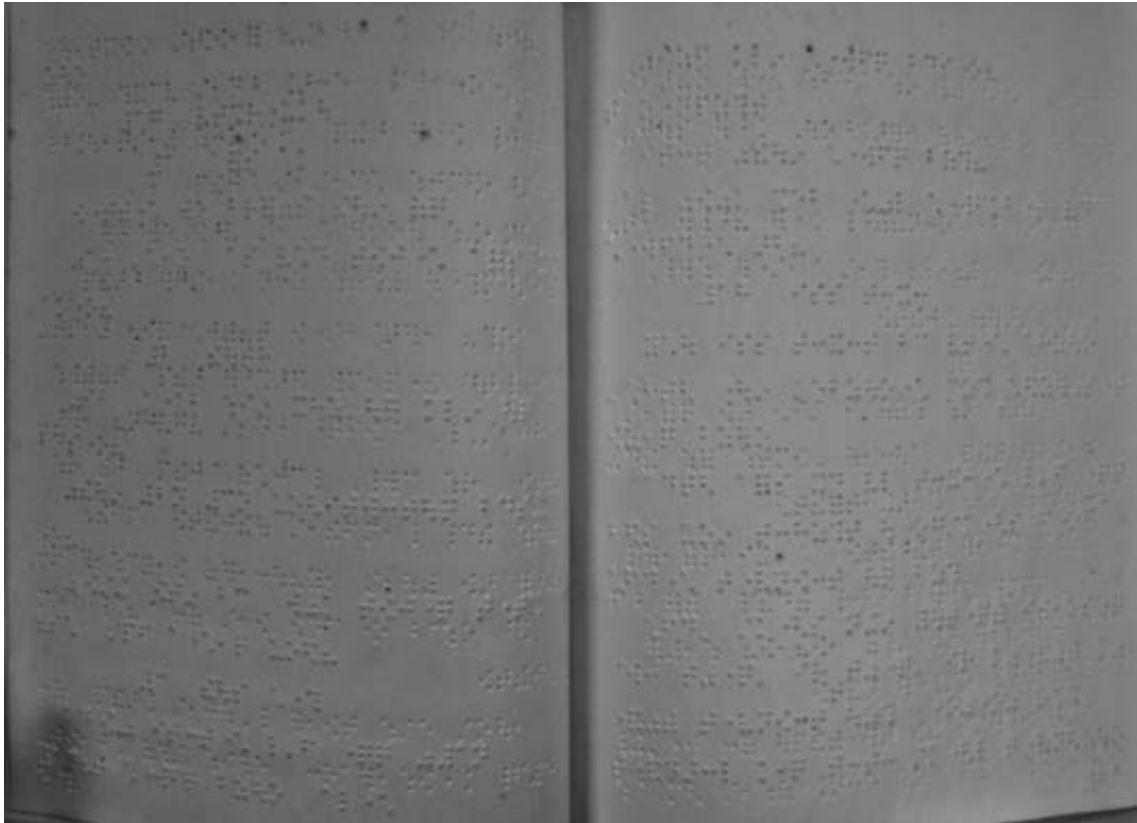
むらの うちで いちばん めだつのわ わたくしども
の がっこーです おーきな いえが 3むね 「こ」の
じなりに たって います がっこーの ひがしどなりに
2かいづくりの やくばが あります

やくばの よこで かわが 2つ おちあって
まがりくねって みなみの ほーえ ながれて いきます

きょねん できあがった しんみちわ むらを ひがし
から にしえ まっすくに つきぬいて います しんみちの
りょーがわにわ あたらしい いえが 7・8けん でき
ました その うちにわ にうりやも あります いま その
みせの まえに にぐるまが とまりました くるまを
ひいて きた ひとが べんとーでも たべるのでしょー

つい このあいだ うえた たが もー あんなに あおく
なりました

どこか おかの したで にわとりが なきます もー
おひるに なったのでしょー おてらの かねも なりだし



ました

17 ひとくちばなし

1 あめの あな

こどもが そら いちめんの ほしを みて

「あー わかった あの ひかる ところが あめの ぶる
あなだ」

2 ほしとり

「おい なかい さおを ぶりまわして なにを して
いるんだ」

「ほしを 2つ 3つ はたきおとそーとして いるの
だ」

「ばかな ことを いう そんな ところで とどく
ものか やねえ あがって はたけ」

3 ほしの かず

あるばん おとーとが にわえ でて 「1つ
1つ」と かぞえて いました あにが

「おまえ なにを かぞえて いるのだ」

と たづねますと

おとーと 「ほしを かぞえて います」

あに 「こんな くらい ばんに かぞえないで ひる
かぞえるが よい」

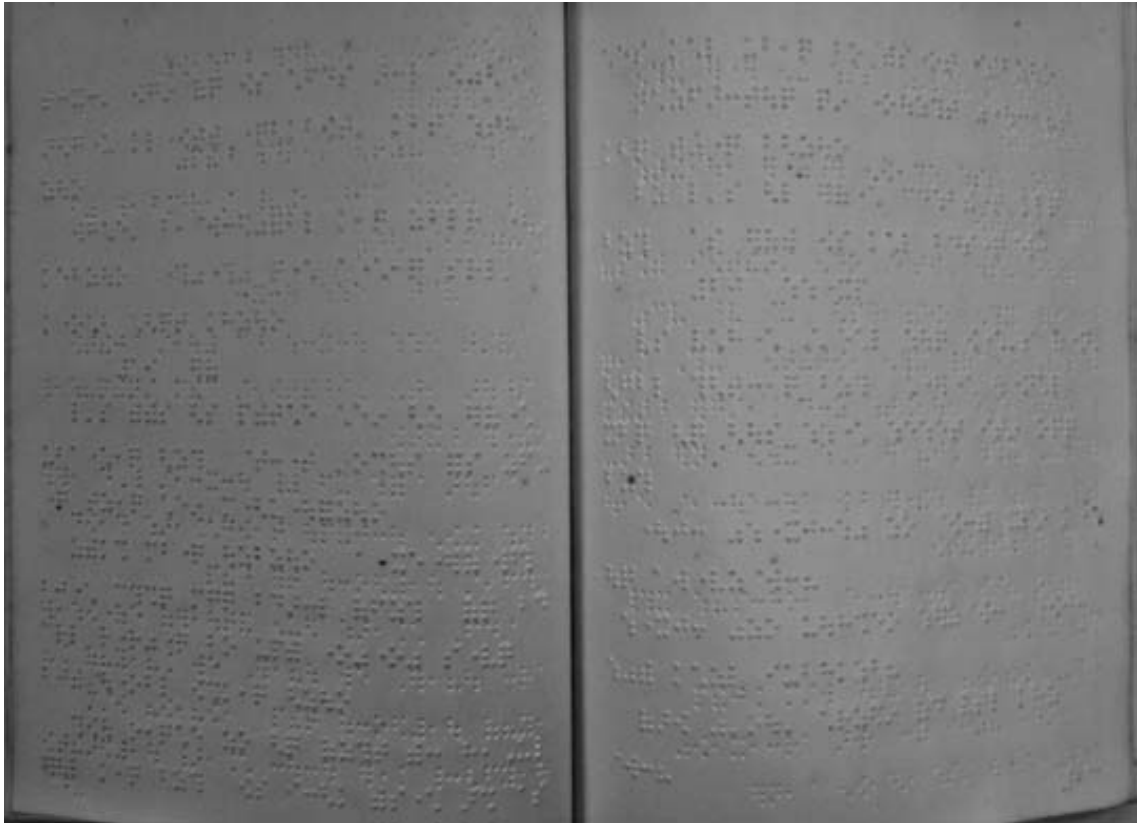
18 おのの とーふー

むかし おのの とーふーと いう ひとが ありました
わかいとき じを ならいましたが うまく かけませんので
こまって いました

あるとき あめの ぶる ひに とーふーが にわえ
でて

いけの はたを とーりますと したれやなぎの えだえ
かえるが とびつこーと しています

かえるわ やなぎの つゆを むしとでも おもったので
しょー とんでわ おち とんでわ おち なんべんも なん
べんも とびつこーと します だんだん たかく
とべるよーに なって とーとー やなぎに とびつきました



とーふーわ これをみて このかえるのよーすにこんきが
よければなにごともしできないことわかないとさとり
ました

それからわ いっしょーけんめいになつてまいにちじを
ならしました ずんずんてが あがつてのちに
なだかい かきてとなりました

19 せみ

にわの もものきのねもとから からをきたせみが
はいあがつてきます ちょーど わたくしのめのまえ
でとまって からをぬぎはじめました

まもなくぬいでしまいました あぶらぜみです
いるがうすくてぬれてるよーにみえます みている
うちにちぢんでいたはねもだんだん のびて
いるも したいにこくなってきました

すこしたつてから またきてみえます もーりつぱに
せみになっています このおーきなものがよくあの

からの なかに はいつていたものだとおもいました
つかまえよーとして てをだしますと「じーつ」と
ないてとんでいきました

いまにわのきにせみがうるさいほどないて
います あのせみもこのせみもこのなかにいるの
でしょー

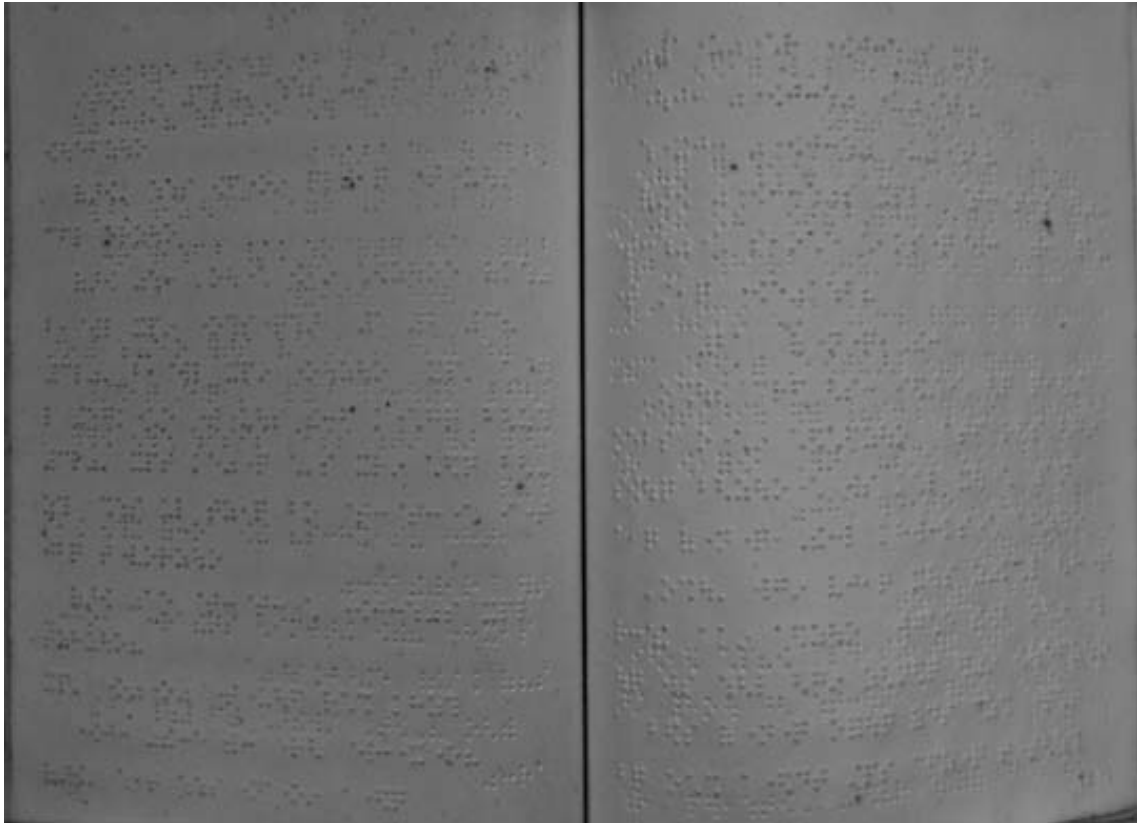
20 ささぶね

ひのひかりが やわらかにさしてこがわのみづわ
きれいにすきとーつています かぜがしづかに
ふいてきてきしのささがさらさらとおとをたてて
います

じろー「さぶろーさん またきよーもぶねをなが
してあそびましょー」

さぶろー「またはしりくらをさせましょー ごろー
さんもなかまにおはいいなさい」

みよこ「わたしわかちまけをみるひとになりま
しょー」



おとこの こ 3にんわ ささの はを とって ふねを
こしらえました

みよこわ ささの こえだを てにもって どばしの
うえに たちました

みよこ 「さー わたしが こえを かけましたら みなさん
いっしょに ふねを だすのですよ 1 2 3」

3にんわ いっしょに ふねを だしました ふねわ かぜ
に ゆられながら どばしの ほーえ ながれて いきます
3にんわ ふねと ならんで かわの ふちを かけて いき
ます くさの はに とまって いた ちょーちょーが おど
ろいて とびたちました

みよこ 「あら ちょーちょーが ごろーさんの ふねに
とまりました」

ふねわ だんだん どばしえ ちかく なります

ごろー 「ほーら もー ちき しょーぶだ」

みよこわ さっと ささの こえだを あげて

「1ばんがち ごろーさんの ふね」

じろー 「ごろーさん ばんざい」

さぶろー 「ごろーさん ばんざい」

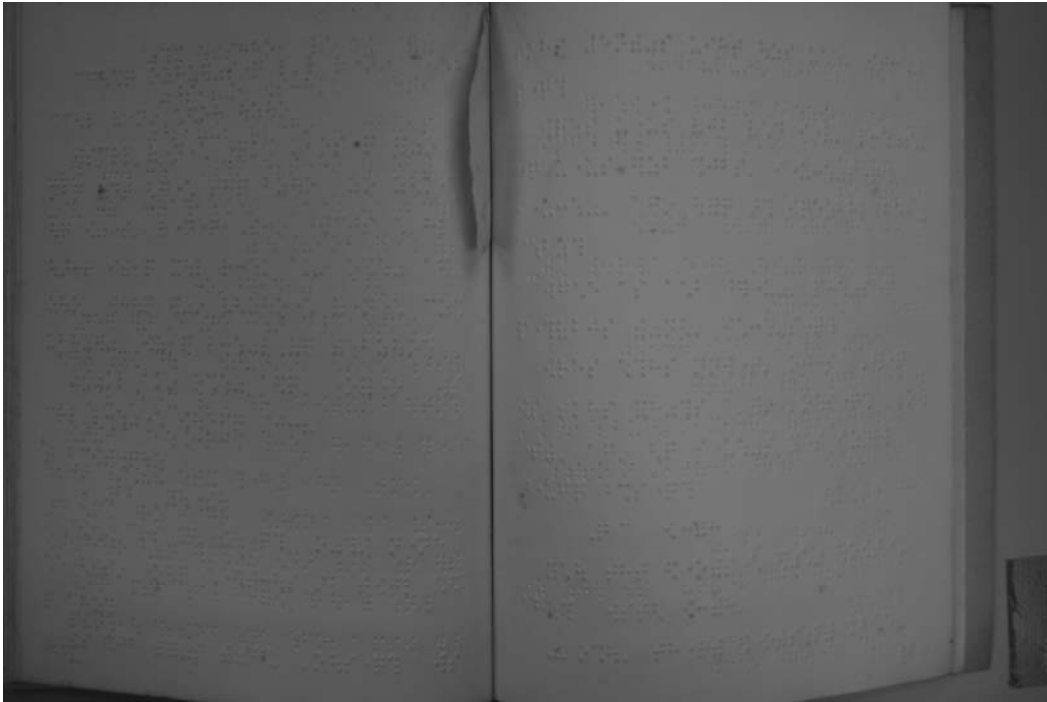
みよこ 「ごろーさんの ふねにわ ちょーちょーの せん
どーさんが のったから かったのでしょー もー 1
ど やって ごらんなさい」

21 みづでつぼー

わたくしの うちえ きのー おけやが きて ておけや
たらいの たがお かけかえました あとえ たけの きれを
のこして いましたが その なかに ふしが 1つ
あって みづでつぼーに なりそーなのが ありました

わたくしわ それを ひろって ふしの まんなかに きりで
ちーさな あなを あけました それから ほそい たけを えに
して その さきに きれを まきつけて せんを こしらえました

いけの みづで ためして みると うまく できて
いて たかく あがると やねの うえまで とどきます



うれしくて たまりませんので にわに みづを うったり
うえきに みずを かけたり しました

そのうちに みづが でなく なったので せんを
ぬいて みると きれが とれて いました また まきなお
して こんどわ みづでつぼーを じょうろの かわりに
しよーと おもって ふしに ちーさな あなを たくさん あけ
ました そーして せんを ひきました が みづが うまく
はいりません こまっ て にーさんに みて もらいましたら

「こんなに あなを たくさん あけてわ だめだ その
うちに にーさんが こしらえて やろー」
と いうことでした

22 むしばし

きょーわ うちの むしばしです たんすや つづら
から きものを だして かぜとーしの よい ところに かけ
て あります

この くらい もめんの もんつきわ わたしのです その

となりの 5つものんのはおりと しまのはかまわ おとーさん
のです

そちらのはばの ひろい ひかる おひわ ねーさん
のはばの せまい くらいわ おばーさんのです
おばーさんわ あれを しめて よく おてらまいりに いらっ
しゃいます

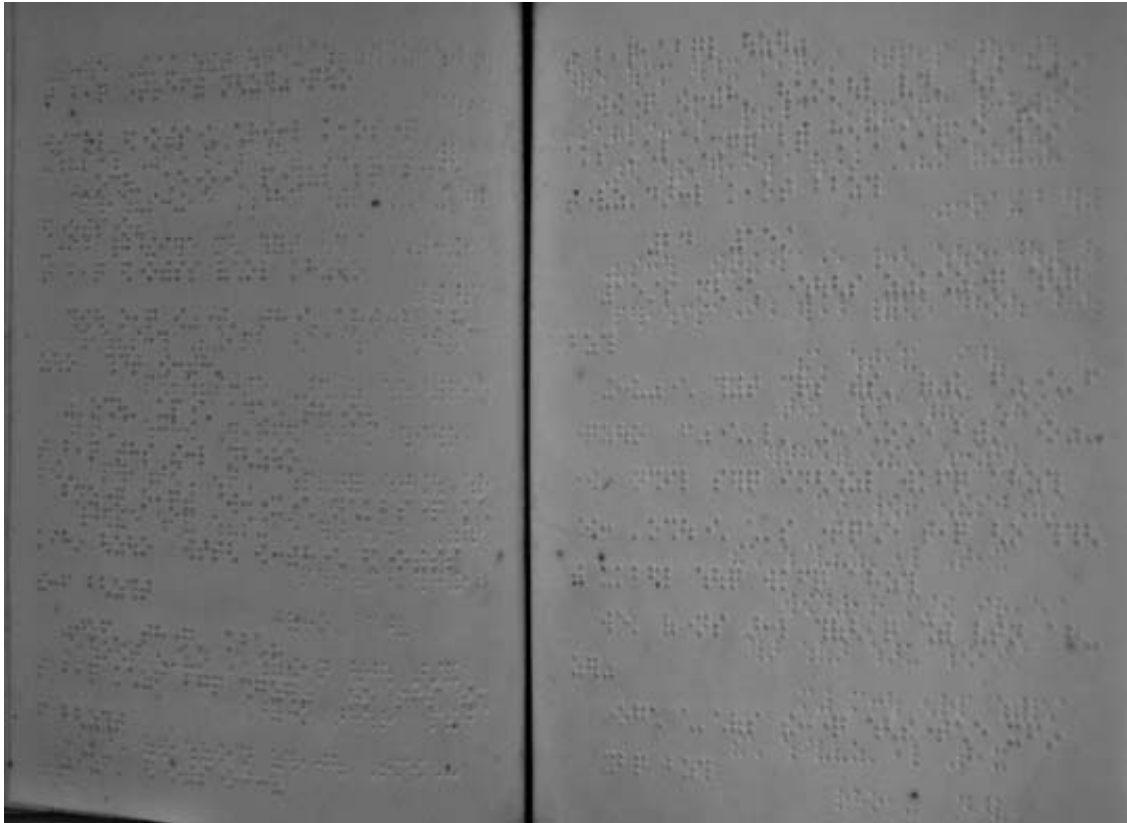
それから あの あかい じゅばんわ ねーさん
ので ねずみいろの もんつきわ おかーさんのです

こちらの かずりの つつそでわ たろーの あわせで
その となりの めりんすの あわせわ わたしのです わたし
どもわ あれを きて おばさんの むらの おまつりに
よばれて いくのです

23 こーもり

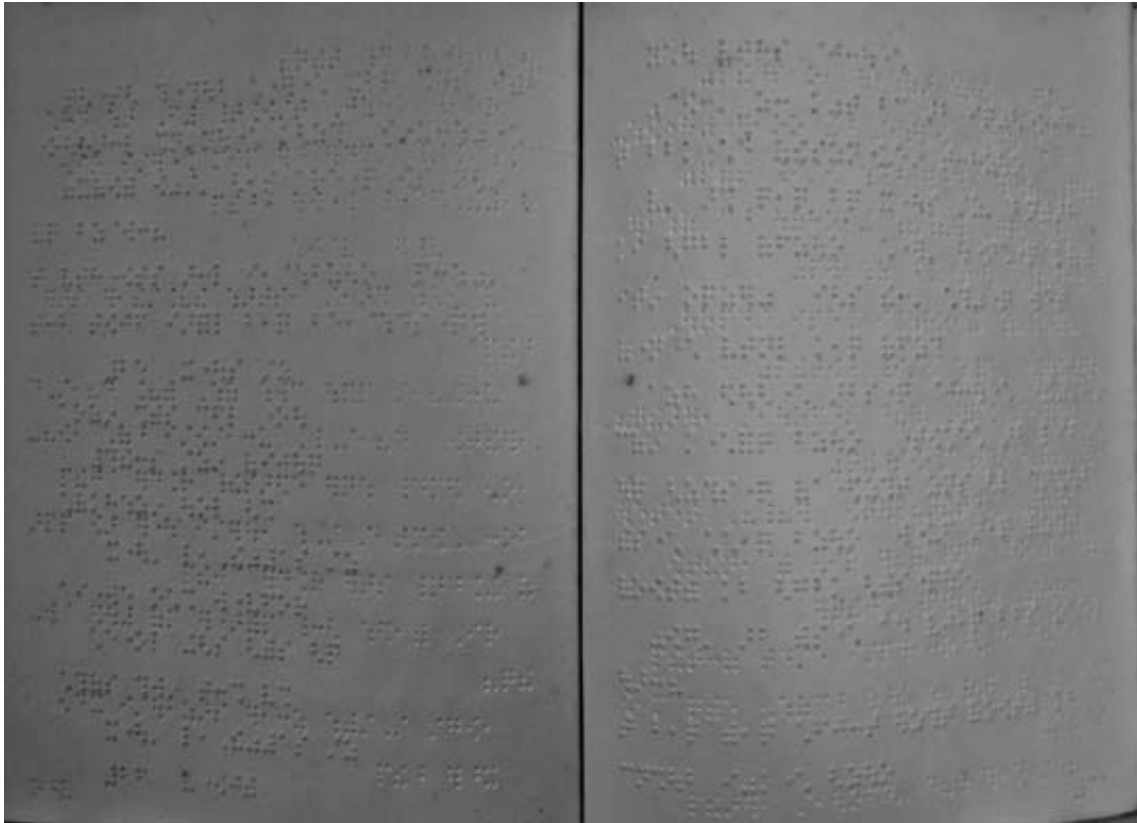
むかし とりと けたものが けんかを したことが
あります そのとき こーもりわ

「わたくしわ とりでも けたものでも ないから」



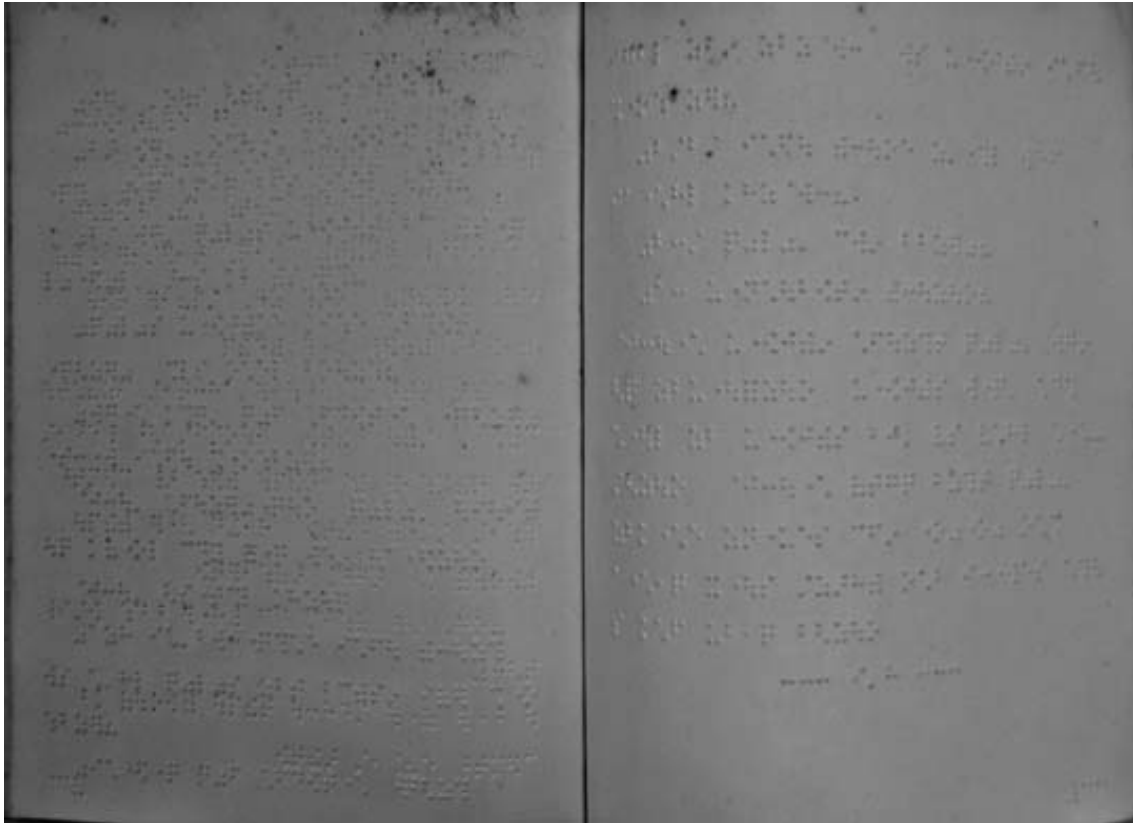
と いった どちらえも つきませんでした
そのうちに けだものが かちそーに なったので
「わたくしわ からだが ねずみに にて いるから
けだものだ」
と いった けだものの みかたに なりました
すこし たって こんどわ とりが かちそーに なり
ました すると こーもりわ
「わたくしわ はねが あるから とりだ」
と いった とりの ほーに つきました
いつまで たっても しょーぶが つかないので なか
なおりを しました そのとき こーもりが けだものの
ほーえ いきますと
「おまえわ とりでわ ないか」
と いった なかまえ いれて くれません また とりの ほー
え いきますと
「おまえわ けだものだろー」

と いった あいてに しません
そこで こーもりわ しかたなしに ひるわ きの うろや
あなの なかに かくれて いて くらく なってから そらを
とびまわるよーに なったと います
24 15や
15やの つきが ざしきの まんなかで さして
います
ゆーはんが すむと うちの ものわ みんな えんがわえ
でました えんがわにわ ゆーがたから いもや だん
ごをつくえに のせて おつきさまに そなえて あります
きょー わたくしが かわの どてから とって きた すずき
も はないけに さして そなえて あります
そらわ みづの よーに すみきって くも ひとつ あり
ません
だれか かわかみの ほーで さきほどから ふえを
ふいて います



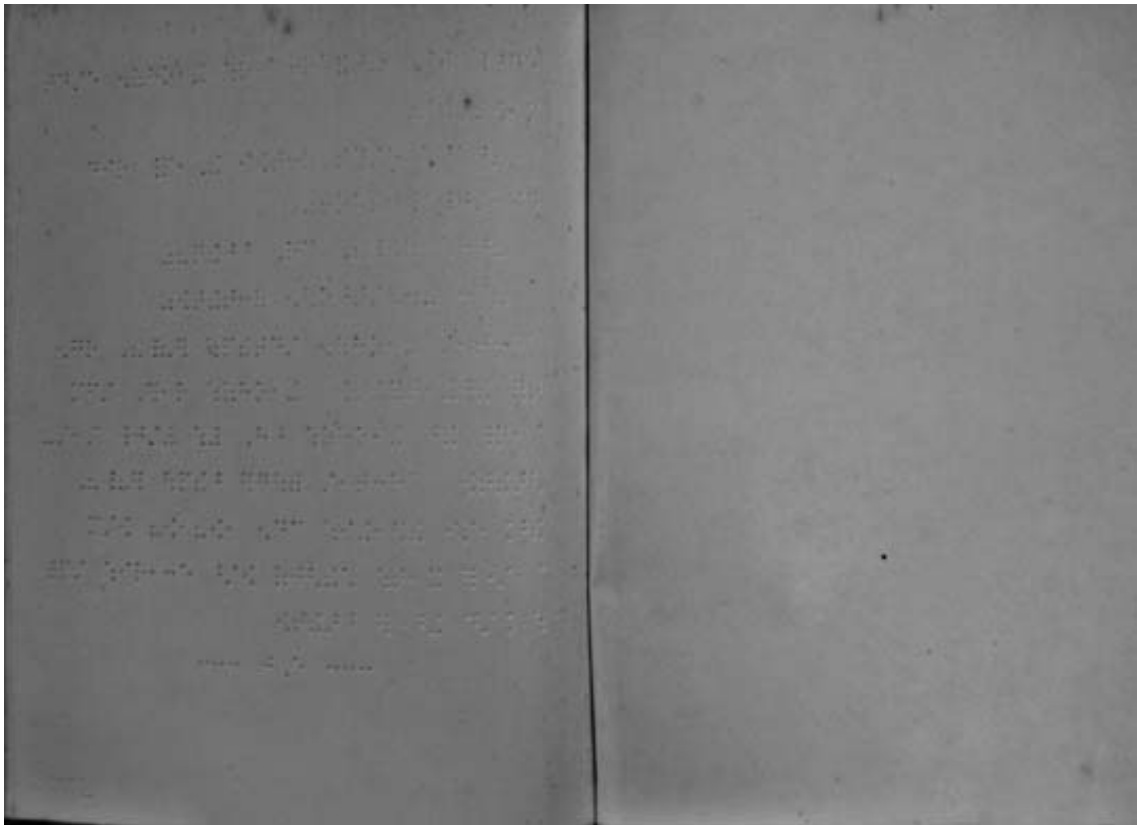
ときどき すずしい かぜが ふいて くと おもい
だしたよーに くつむしが なきます おばーさんが
「ふみこも こんやわ きつと あちらで この つきを
みて しましょー」
と ひとりごとの よーに おっしゃいました ねーさんわ
とーい ところえ およめに いって いらっしゃるのです
25 ふじの やま
あたまを くもの うえに だし
4ほーの やまを みおろして
かみなりさまを したに きく
ふじわ につぼん1の やま
あおぞら たかく そびえたち
からだに ゆきの きもの きて
かすみの すそを とーく ひく
ふじわ につぼん1の やま
26 はごろも

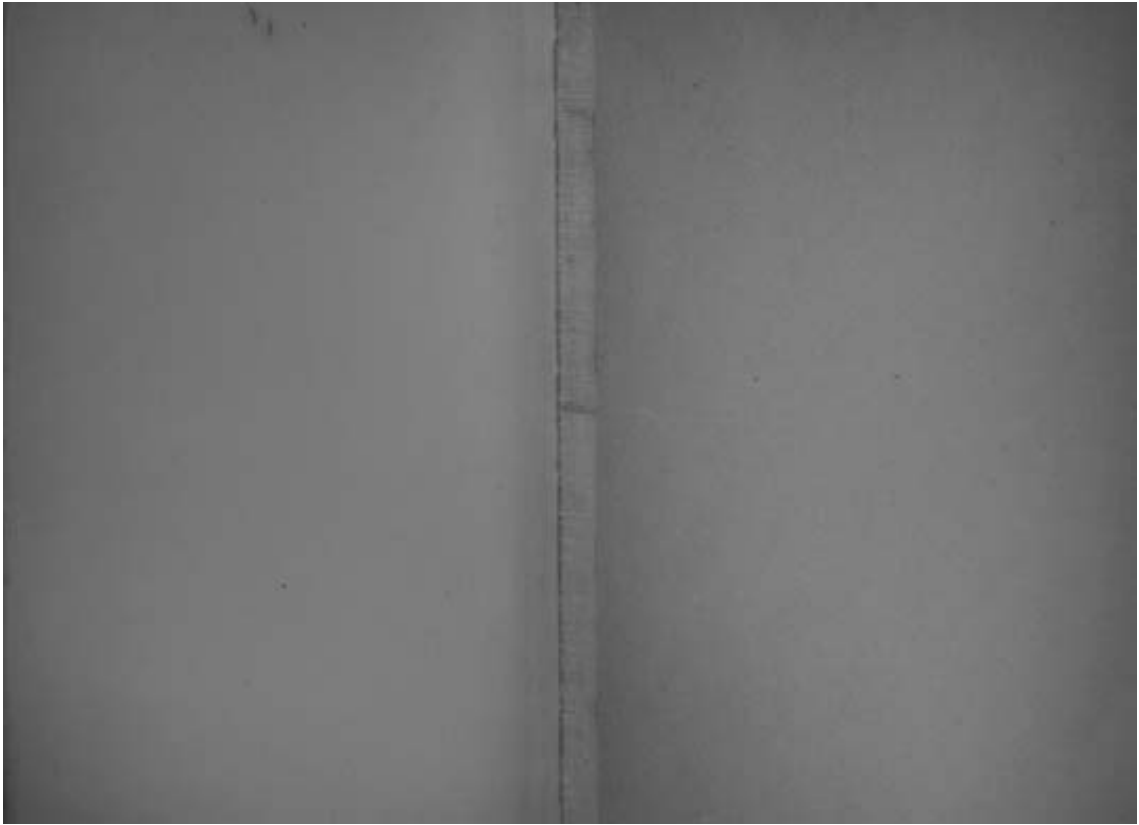
むかし ひとりの りょーしが
「きょーわ まー なんという よい おてんきだろー」
と いいながら みほのまつばらを とーりました
ひわ よく てって いて ふじの やまわ いつもより
なお きれいに みえました かぜわ しづかで なみも
おとを たてません おきの ほーわ かすんで そらと
みづが ひとつに なって みえます
あまり けしきが よいので りょーしが ぼんやりと
うみを ながめて いました どこからか よい においが
して きますので みあげますと まつの きに うつくしい
ものが かかって いました そばえ よって みますと
みたことも ない きれいな きもでした
「これわ よい ものが ある ひろって いえの たからに
しよー」
と いうて もって かえろーと しますと みたことも ない
うつくしい おんなが きました



「それわ わたしの きもので ございます」
「いや これわ わたくしが いま ここで ひろったの
です もってかえって いえの たからに します」
「いや それわ てんにんの はごろもと いう もので
にんげんにわ よーの ない ものです」
「てんにんの はごろもなら なおさら かえすことわ
できません くにの たからに いたします」
「それが なくてわ てんえ かえることが できません
どーぞ おかえし くださいませ」
りょーしわ かえしませんでした てんにんわ しおしおと
して なみだに うるむ めで そらを みあげました
りょーしわ きのどくに なりまして
「あまり おかしいそーですから おかえし もーします
その かわりに てんにんの まい というものを おみせ くだ
さいませ」
「おかげで てんえ かえることが できます

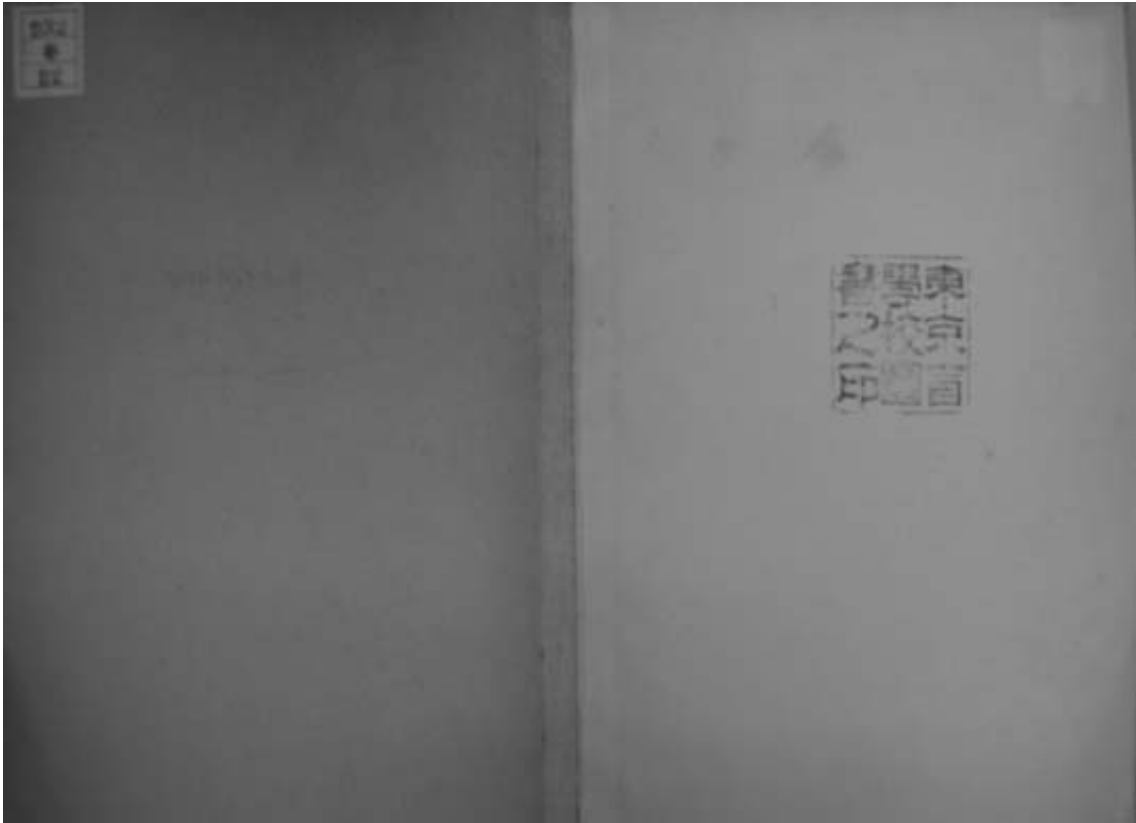
おれに まいを まいませー その はごろもを おかえし
くださいませ」
「いやいや おかえし もーしあげたら まわすに そらえ
おあがりになりませー」
「いや てんにんわ うそを いひません」
「あー はづかしいことを もーしました」
りょーしが はごろもを かえしますと てんにんわ それを
きて まいをはじめました はごろもの そでわ かるく
かぜに まい はごろもの いろわ ひの ひかりに かが
やきました りょーしが みとれて いますと てんにんわ
まいながら まつばらの うえを だんだんたかく
あがって ふじの やまよりも たかい おーぞらの かすみ
の なかえ はいつて きました
おわり

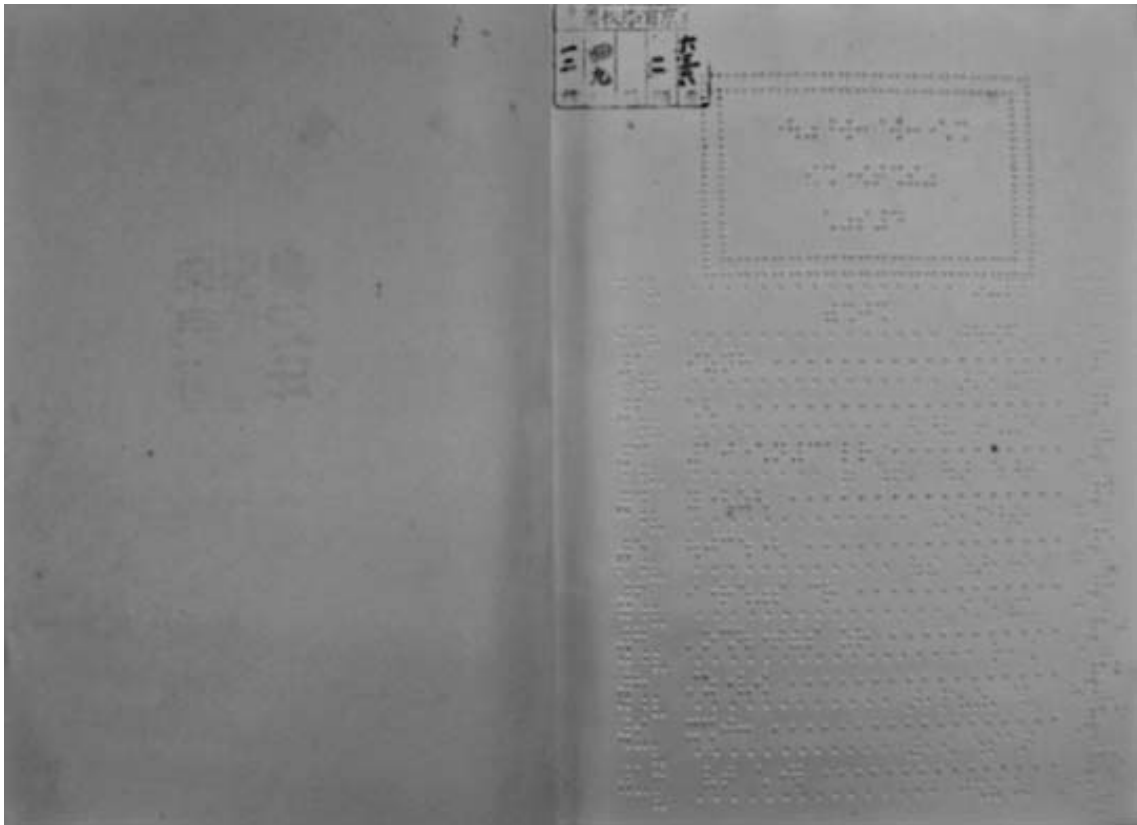








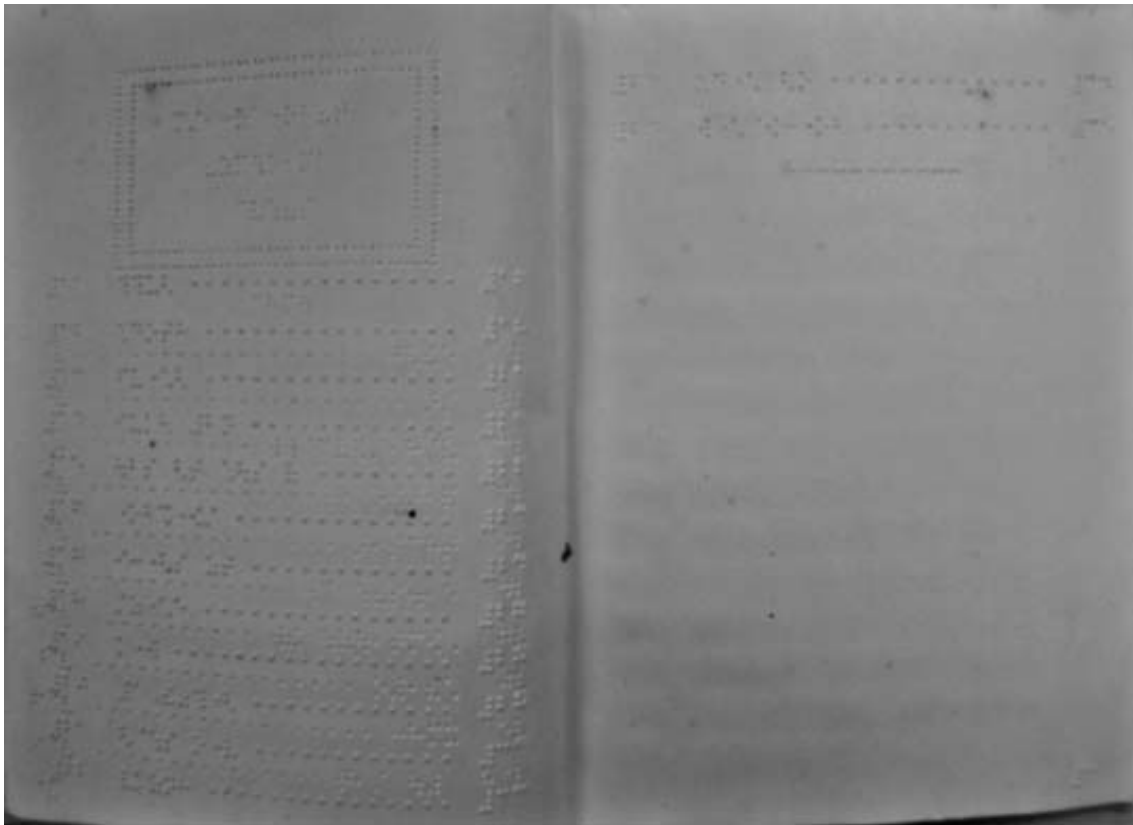




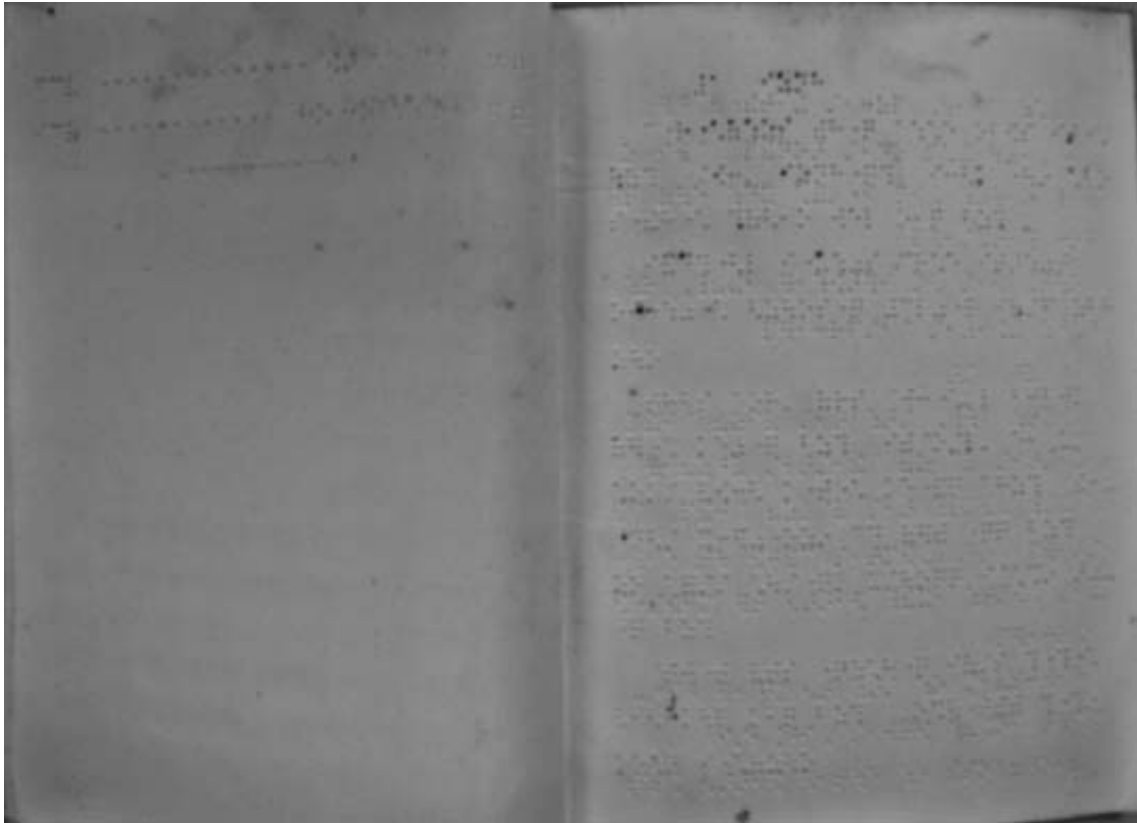
じんじょーしょーがく
こくごとくほん
かんの4

目録

1	おまつり	1
2	かき	2
3	10がつ31にち	3
4	むぎまき	4
5	しろうさぎ	5
6	おぢさんのうち	8
7	わたくしどものまち	10
8	やまびこ	12
9	ふくろー	14
10	ひと かせ	15



11	すすはき	16	22	ひなまつり	33
12	かるたとり	18	23	はるが きた	34
13	えはかき	18	24	そがきよーだい	35
14	おはなし 2つ	21	-----		
15	しいの きと かしのみ	22			
16	たいくごや	23			
17	おーぎの まと	24			
18	やまがら	27			
19	なぞ	28			
20	1ぼんすぎ	28			
21	きしゃの たび	31			



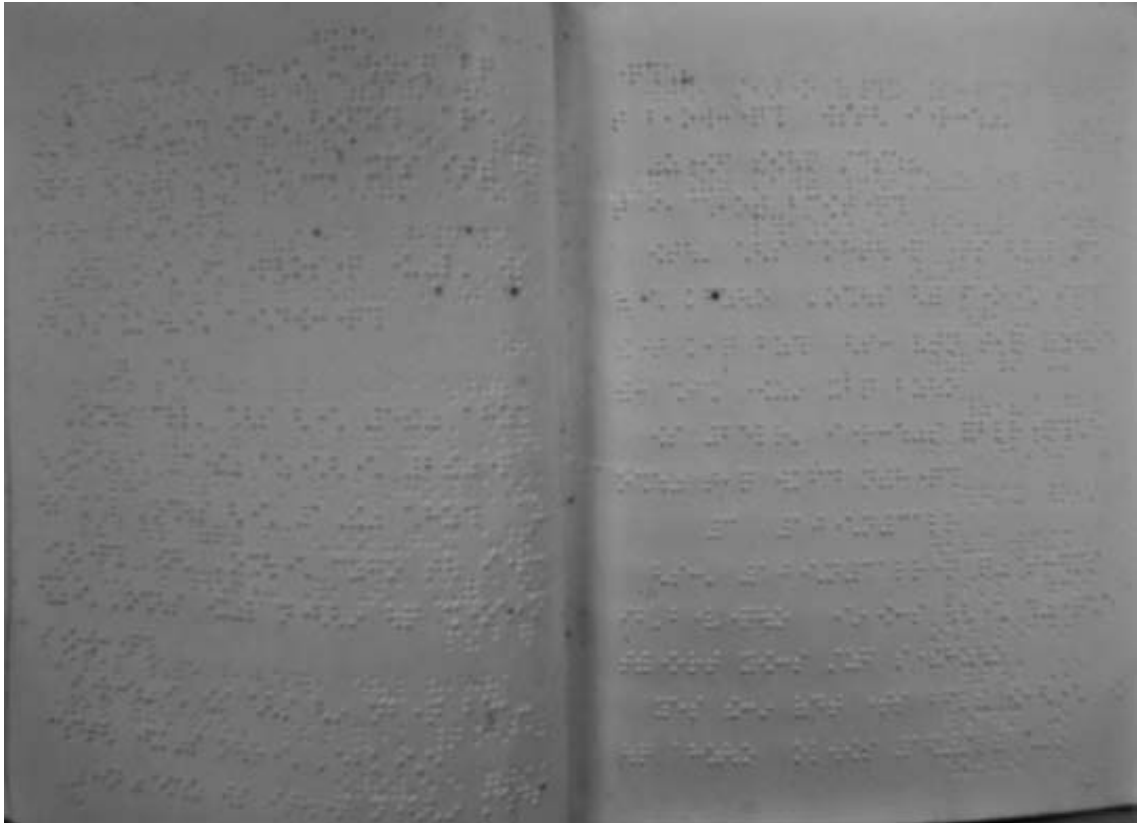
1 おまつり

うぢがみさまの もりやで あさから たいこの おとが
します きょーわ おまつりです おーきな じを かけた
のぼりが すみきった そらに たって います

おひるすぎに おばさんの うちから おとよさんと
たるーさんが きましたので 3にんで おみやえ まいり
ました

とりいの あたりわ みちの りょーがわに いろいろな
みせが ならんでいます おもちゃやにわ らっぱや
かたなや ひこーき などが ならべて あります ほー
づきや ふーせんたまを うる みせも でて います
また あめやや かしやでわ はやしたてて おきやくを よん
で います

ちょーど ひとの できかりで おみやの すずが
ひっきりなしに なって います わたくしどもも すずを
ならして おがみました



おみやの うらでわ すもーが はじまって いて
「わー わー」と はやす こえが きこえます あちら こ
こちらに こどもの ならす らっぱや ふえの おとも して
たいそー にぎやかです

ことしわ たが よく できたので ばんにわ その
おいわいの はなびが あがるそーです

2 かき

わたくしの うちにわ かきの きが 5ほん あります
しぶかきが 3ほん あまがきが 2ほんで
その なかに わたくしの きが 1ほん あります あま
がきです これわ わたくしが うまれた とし おぢー
さまが わたくしの ぶんにつぎきをして くださった
のだそーです

おぢーさんが この かきの きを ついで いらっ
しゃるとき げなんの たしちが わらいながら

「こいんきよさま その おとして つぎきを なさるの

ですか」

と いったそーです そのとき おぢーさんわ

「まごえ のこして やるのさ」

と おっしゃったと いうことです

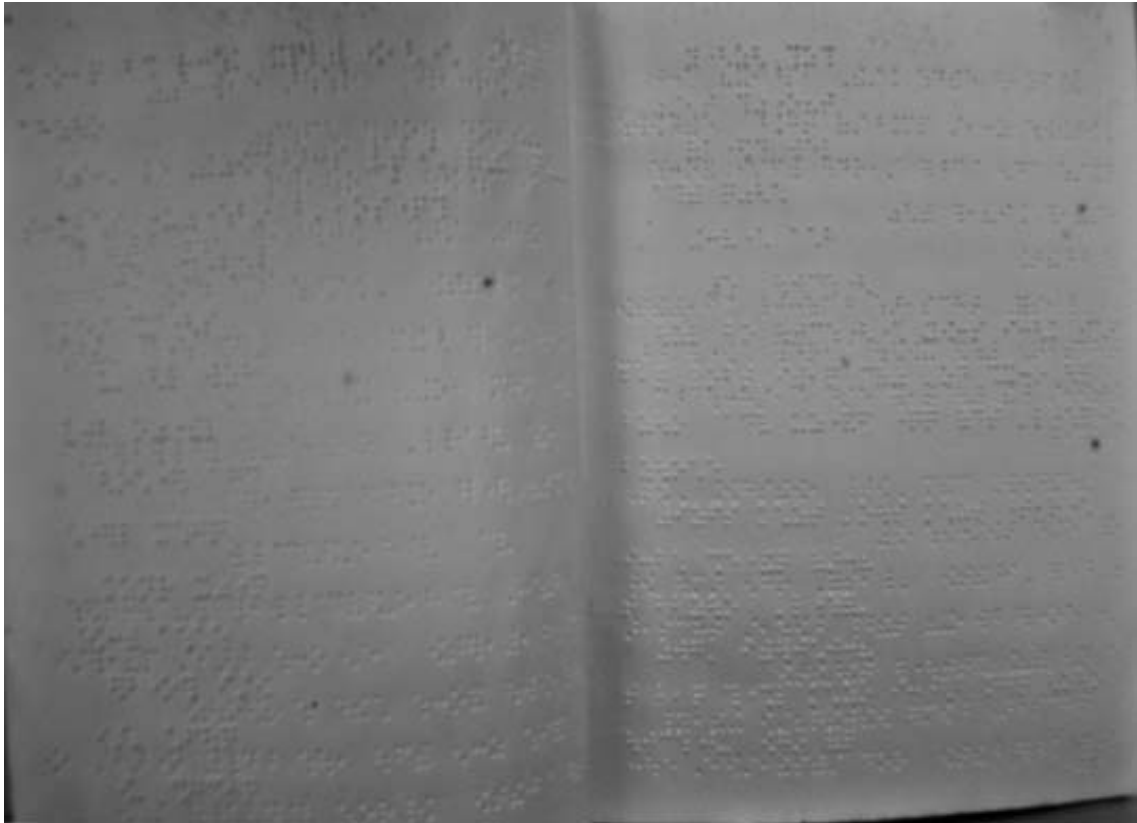
ことしわ かきの あたりとして どの きにも よく
みが なりました わたくしの きも えだが おれう
ほど なって います きのー ひとつ とってましたら
もー くるく ごまを ふいて いました

この 25にちわ おぢーさんの めいにちですから
たくさん とって そなえる つもりです

3 10がつ

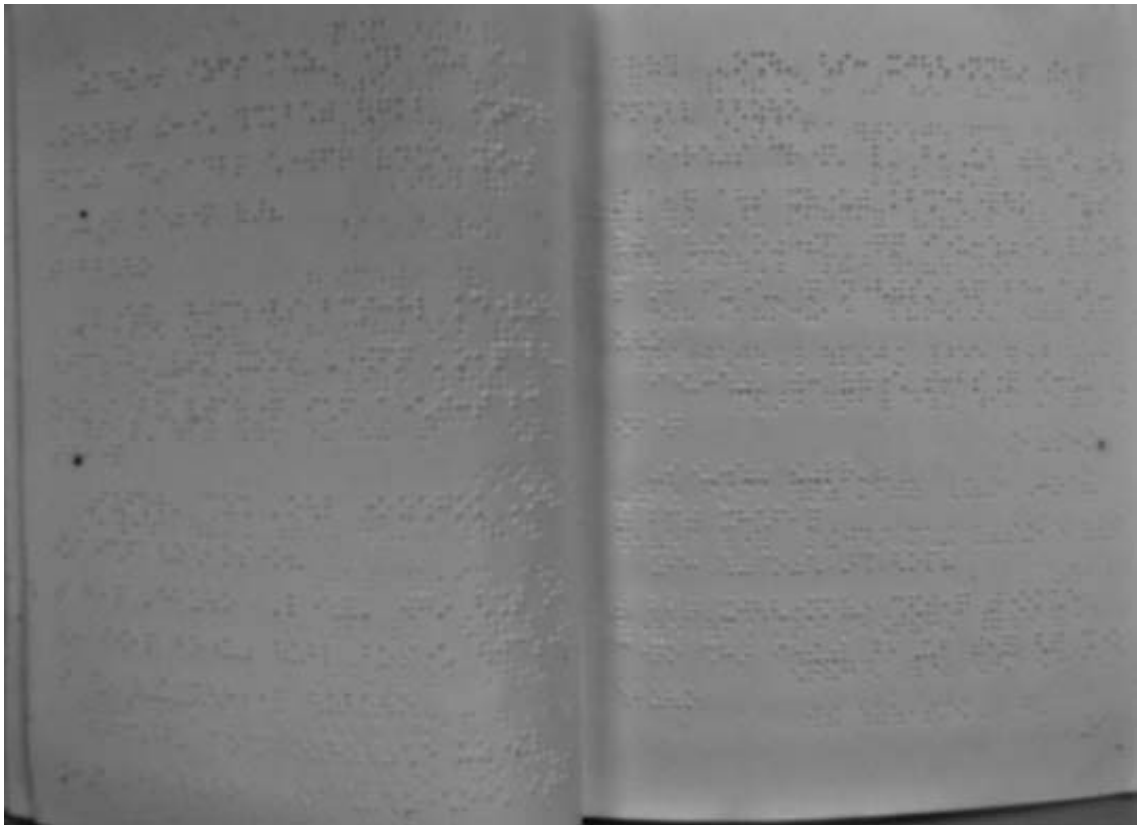
きのーわ 10がつ31にちで てんちよーせつの
おいわいびでした がっこーの しきが すんでから
ともだちと むこーの やまえ のぼりました

むらの ほーを みると どの いえにも こつきが だ
して ありました たにそのの いっけんやにも かわを



くだって いく ちーさな ふねにも こっきが だして
ありました
きのーわ にっぼんこくぢゅーの ひとが みんな てん
のーへいかの ばんざいを いわったのです
4 むぎまき
ならや くぬぎの
はわ きに そまり
ひろい たんぼに
きたかぜ あれる
かぜに ふかれて
なまつち ふんで
きょーも あさから
せいだす おやこ
おやわ かえして
こわ くれうって
広いたんぼの

むぎまき すます
「やっと すんだ」と
みあげる そらに
あすも てんきか
ゆーひが あかい
5 しろうさぎ
しまに いた しろうさぎが むこーの おーきな おかえ
いって みたいと おもって うみん^{ママ} わたる くふーを して
いました あるひ はまべえ でて みると わにざめが
いましたから
「おまえの なかまと わたしの なかまと どっちが
おーいか くらべて みよー」
と いいました わにざめわ
「それわ おもしろかるー」
と いって すぐに なかまお おーせい つれて きました
しろうさぎわ これを みて



「なるほど おまえの なかまわ すいぶん おーい
わたしたちの ほーが すくないかも しれない おまえたちの
せなかの うえを あるいて かぞえて みるから むこーの
おかまで ならんで みよ」
と いました

わにざめわ しろうさぎの いうとーりに ならびました
しろうさぎわ ひとつ ふたつと かぞえて わたって いき
ましたが いま ひとあしで おかえ あがるーと いう
ところで

「おまえたちわ うまく わたしに だまされたな わたしわ
この おかえ きたかったのだ」

と いった わらいました わにざめわ それを きくと たい
そー おこって いちばん しまいに いたのが しろうさぎ
の けを みんな むしりとって しまいました

しろうさぎわ いたくて たまりませんから はまべに
たって なくて いました そこえ かみさまがたが おとー
(*乱丁か?)

あります わたくしわ きのー ふろしきづつみをもつて
おつかいに きました

おぢさんの うちでわ にわ いっぱいに もみが ほし
て あつて あしの ふみばも ないくらいでした うちの
ひとわ みんな たんぼえ でて おばーさんが ひあたり
の よい えんがわで つぎものをして いらっしやい
ました

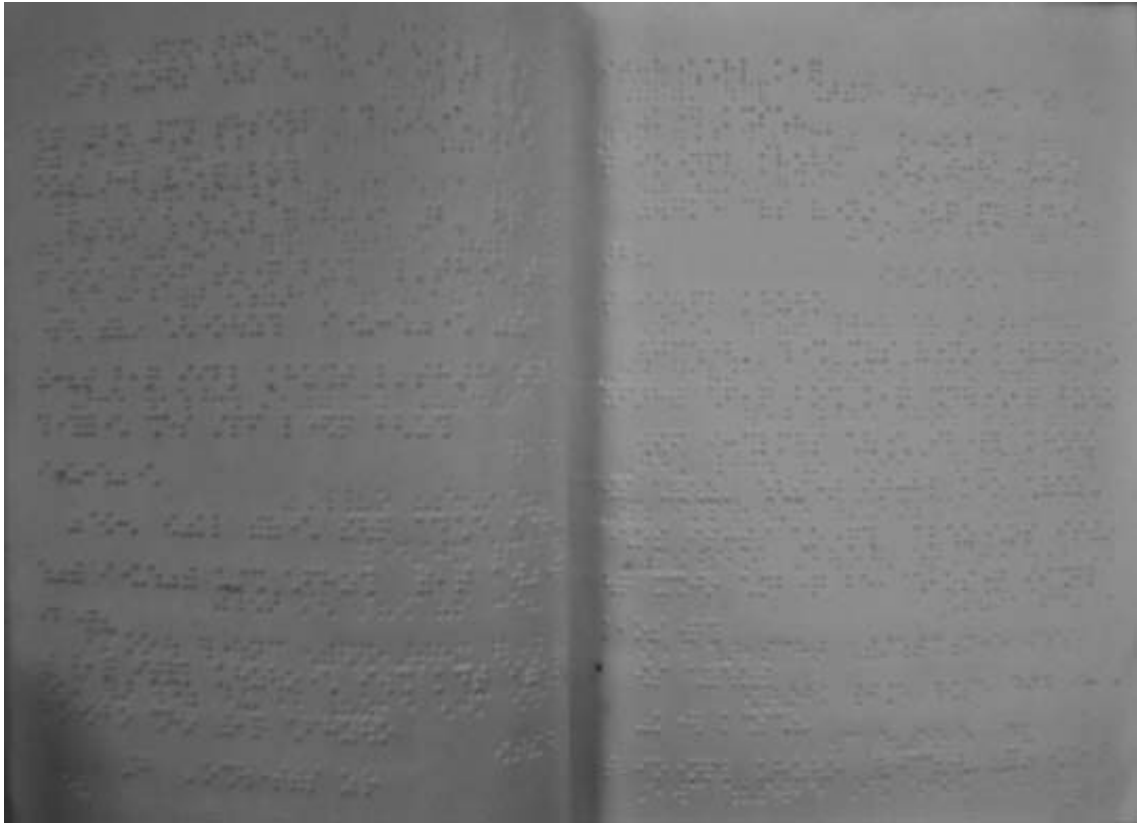
おばーさんわ もー みみが とーいので おーきな
こえて

「おばーさん こんにちは」

と いうと ふりかえって

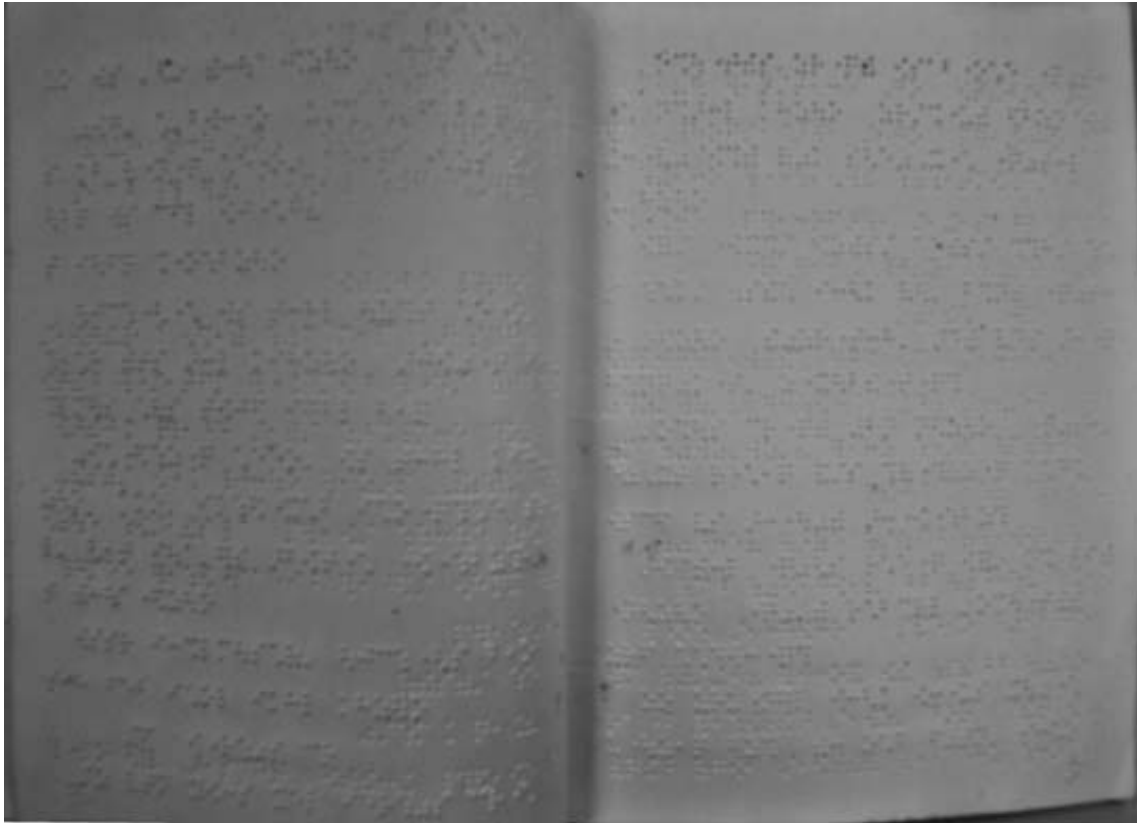
「おー さんちゃんか よく きたね」

と いうて ふろしきづつみを うけとって とだなから
うでた くりを おぼんに いっぱい もつて きて くだ
さいました



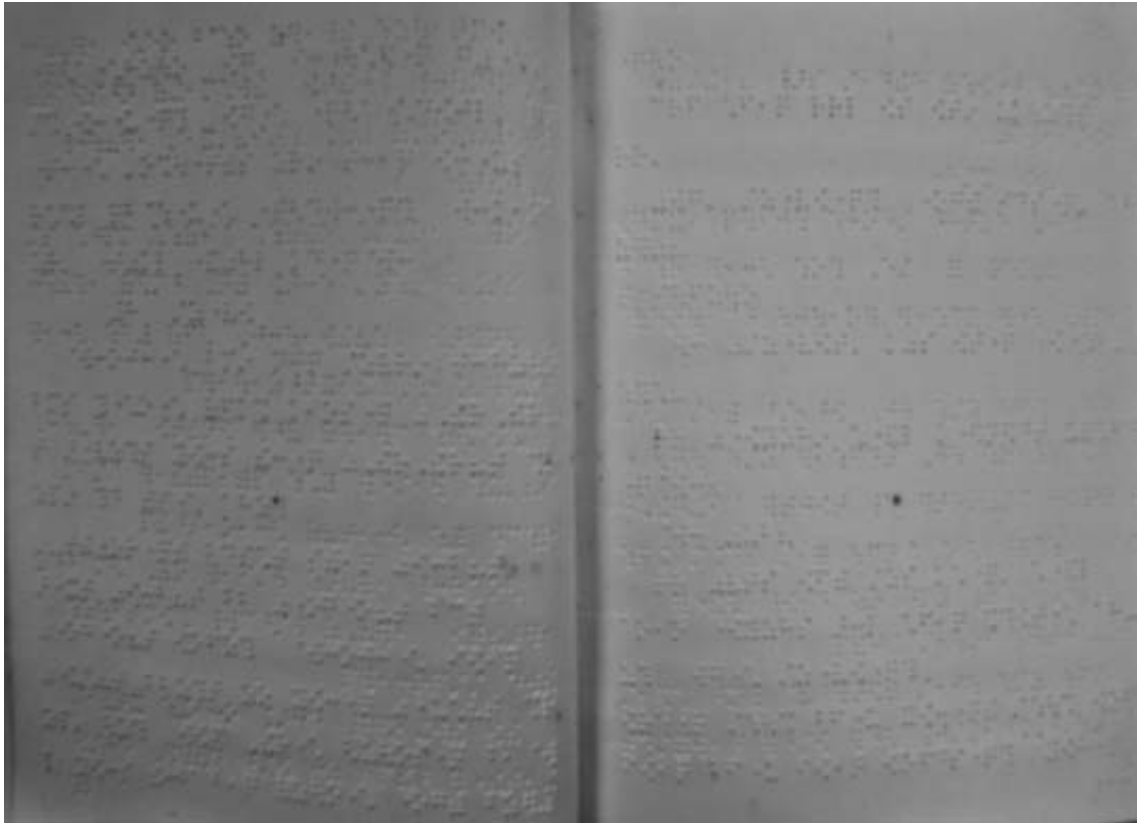
まえの はたけの かきの きわ はが まっかになっ
て 2つ 3つ とりのこして ある かきが あかい
たまの よーに ひかって います
えんさきの さざんかに めじろが 2わ きて いて
えだから えだえ とんで います にわとりが とき
どき もみを かきだします おばーさんが 「ほー
ほー」と いて おおいに なりますと にわとりより さきに
すずめが くの やねえ にげて いきます
おばーさんが
「きょーわ こんなに もみが ほして あるから おぢ
さんも おばさんも はやく かえります もっと あそんで
おいで」
と いて おとめに なりましたが おそく なる と おもっ
て
いただいた くりを もって かえりました
7 わたくしどもの まち

おとーりがかりに なって
「なぜ なくのか」
と おたづねに なりました わけを もーしあげますと
「それなら うみの みづを あびて ねて いるが
よい」
と おおしえに なりました
しろうさぎわ すぐ うみの みづを あびましたが
まえよりも かえって いたく なって くるしがって いました
そこえ おーくにぬしの かみが おいでに なりました
この かみさまわ さきほど おとーりに なった かみさま
がたの おとーとの かたです あにさまがたの おともを
して ふくろを かついで いらっしゃったので おおくれに
なつたのです
この かみさまも
「なぜ なくのか」
と おたづねに なりました しろうさぎわ めを こすって
7
(*乱丁か?)



また その わけを もーしあげました すると かみさまわ
「それわ かわいそーだ はやく かわえ いった しおけ
の ない みづで からたを あらって がまの ほを
しいて その うえに ころがれ」
と おしえて くださいました
しろうさぎが その とーりに しますと からたわ
すっかり もとの よーに なおりました よろこんで おー
くにぬしの かみの ところえ おれいに いった
「おかげさまで からたわ この とーり なおり
ました あなたわ おなさけぶかい おかたですから のち
にわ きっと おしあわせの よいことが ございます」
と もーしあげました
そのち おーくにぬしのかみわ しろうさぎの いった
とーり えらい おかたに おなりに なりました
6 おぢさんの うち
やま ひとつ むこーの むらに おぢさんの うちが

わたくしどもの まちでも このあいだから でんとー
が つくよーに なりました まちやくばも けいさつしょも
ゆーびんきょくも みんな のきらんぶが でんとーに
かわりました
こめや ごぶくや こまものや あらものや くすりや さか
や さかなや そのほか おーきな みせわ いくつも でんとー
を つけました ほんまちどーりわ よるも ひるの よーで
りはつてんなどわ まぶしいほどです
わたくしの うちでも 2つ つけました でんとーわ
らんぶと ちがって へやの すみずみまで あかるく
そのうえ ひの よーじんも よーございます
よこちよーに でんきの ちからで こめをつく いえも
できました でんわも ちかいうちに わたくしどもの
まちえ かかるそーです
また まちはづれに おーきな こーばの ふしんが
はじまって います もー たかい えんとつわ おーかた



できあがりしました これわ おーじかけで れんがを
やく こーばです これが できあがるころにわ てつ
どーが わたくしどもの まちを とーって こーばの
ちかくに ていしやばが できるそーです そーなったら
まちわ どんなに べんりに なるでしょー

8 やまびこ

しょーたろーが いぬをつれて やまみちを とーりました
いぬの すがたが みえなく なったので 「ぼちぼち」
と よびますと 無コーの ほーで 「ぼちぼち」と くち
まねを する ものが あります

ともだちでも いるのかと おもって 「おーい」と
よぶと 「おーい」と いい 「だれだ」と いうと
「だれだ」と こたえます しょーたろーが おこって
「ばか」と いますと また むこーで 「ばか」と くち
まねを します そこえ ぼちが ききましたので いっしょ
に むこーの ほーえ いって みましたが だれも いません

でした

うちえ かえって ちちに この ことを はなしますと
ちちは

「それわ やまびこです だれも おるのでわ あり
ません」

と おしえました

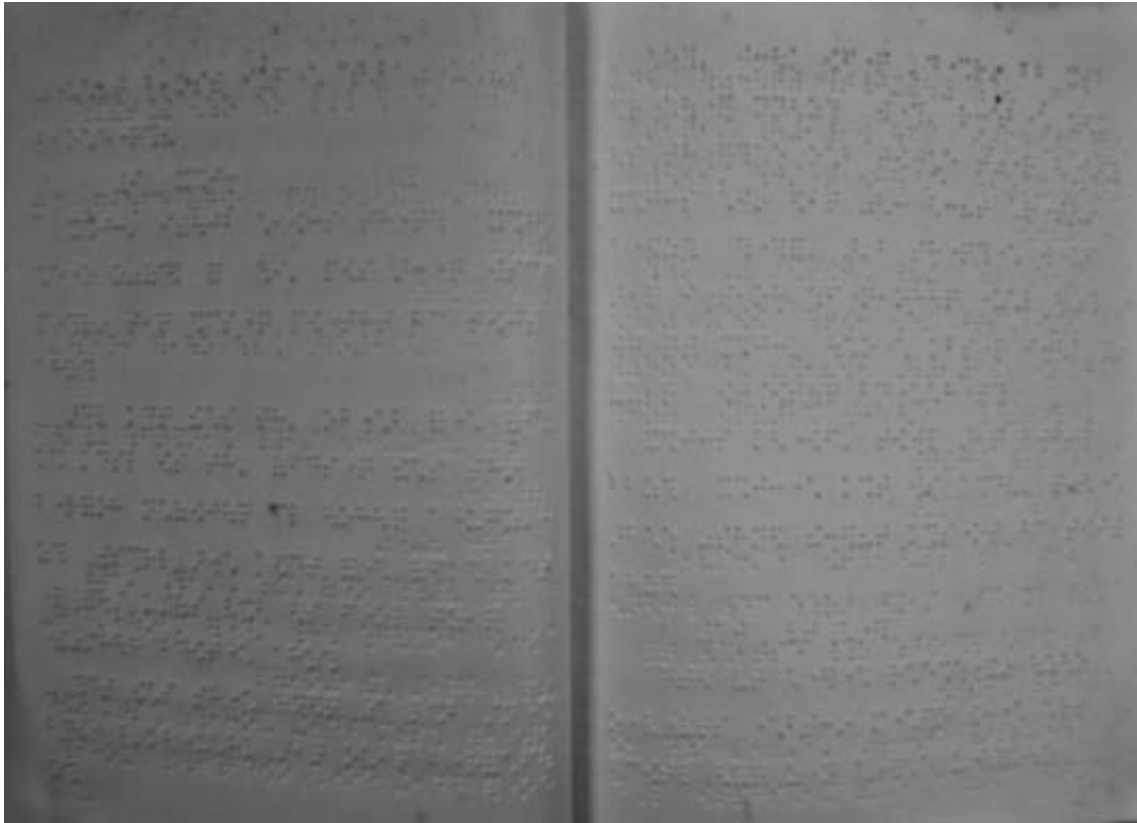
しょー 「やまびことわ なんの ことで ござい
ますか」

ちち 「ごむまりを かべに なげつけると はねかえる
でしょー」

しょー 「はい」

ちち 「ひとの こえも やまの なかでわ かべに
あたった ごむまりの よーに かえって くること が あり
ます それが やまびこです

こちらで やさしく いえば むこーでも やさしく こたえ
おこって いえば おこって こたえるのです むこーで



「ばか」といったのも おまえが さきに「ばか」と
いったからです」

9 ふくろー

ふくろーわ おもしろい かつこーの とりです ふくれた
からだ まんまるな め かおわ ねこの よーで そのうえ
ねずみを とって くうので ねこどりという ところも
あります

よるに なる と ほかの とりわ たいがい めが みえ
なくなるのに この とりわ みえるので ほかの とりを
いぢめたり つかみころして えに したりして あばれまわり
ます そのうちに よが あけると めが みえなく なるの
で もりや はやし の ひくい きの えだに とまって
ぼんやりして いることが あります

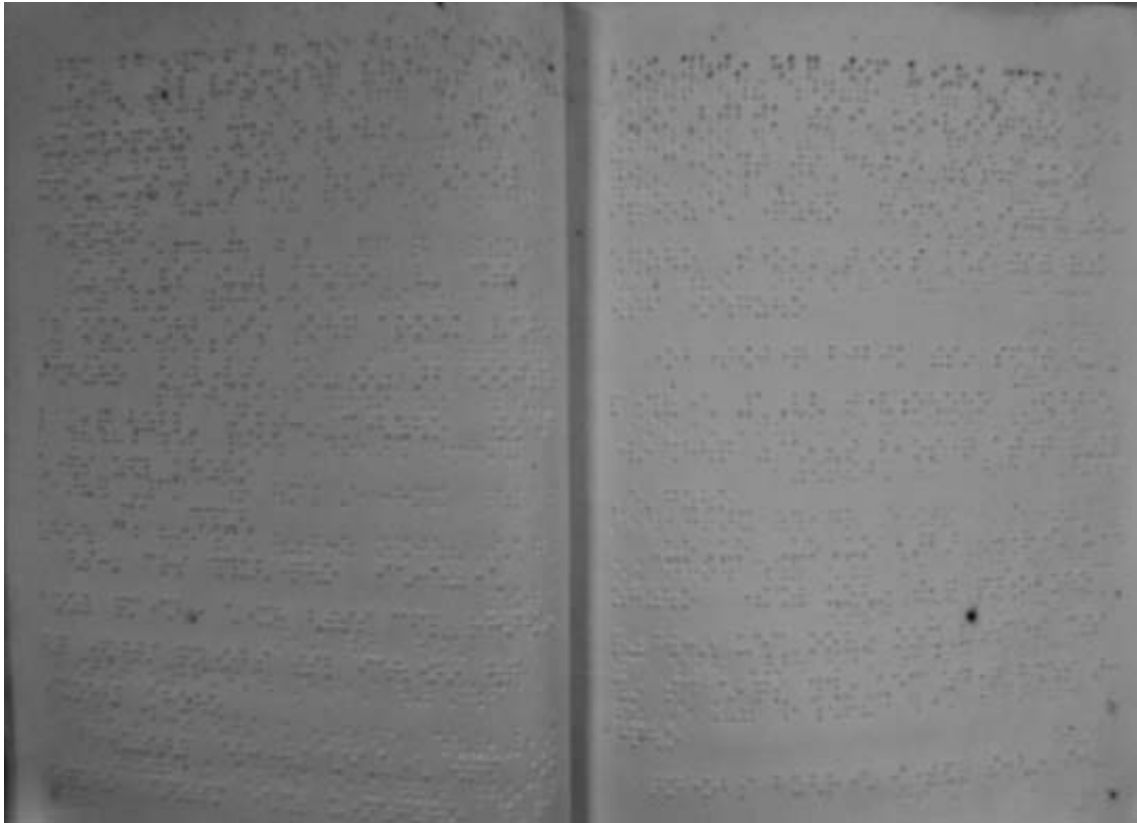
すると ほかの とりが みつけて 「あ にくい やつが
いる」と いわないばかりに よって たかって いぢめかえし
ます

からすわ おーきな こえで わるぐちを いい ふとい
くちばしで つつきます もずわ ちーさいが まけぬ
きの とりですから たかい ところから とんで きがけに
ふくろーの かおを けて 「きー きー」と かちどきを
あげます すずめわ よわい とりですが そばえ
よって おどつたり さえづつたりして ばかに します
それでも ふくろーわ しかたが ないので おーきな めを
みはって きよときよとして いるばかりです

ふくろーの なきごえわ ところに よって いろいろに
いれます ふくろーが なくと その あくるひわ てんきが
よいから 「のりつけ ほーせ」と なくのだと いう ところも
あります

10 ひと かぜ

あるとき ひと かぜが ちからくらべを しました
たびびとの かいとーを めかせた ほーが かちと
いうことに きめて まづ かぜから はじめました



かぜわ 「なに ひとまくりして みせよー」と はげしく ふきたてました すると たびびとわ かぜが ふけば ふくほど がいとーを しっかりと からだにくっつけました

こんどわ ひの ばんに なりました ひわ くもの あいだから やさしい かおを だして あたかな ひかりをおくりました たびびとわ だんだん よい ころもちになつて しまいかわ がいとーを ぬぎました そこで かぜの まけに なりました

11 すずはき

きのーわ うちの すずはきでした おかーさんが あたまに てぬいを かぶり きものの うえに ちりよけをきて げぢょや てつだいの ものに おさしづをして おはたらきに なりました

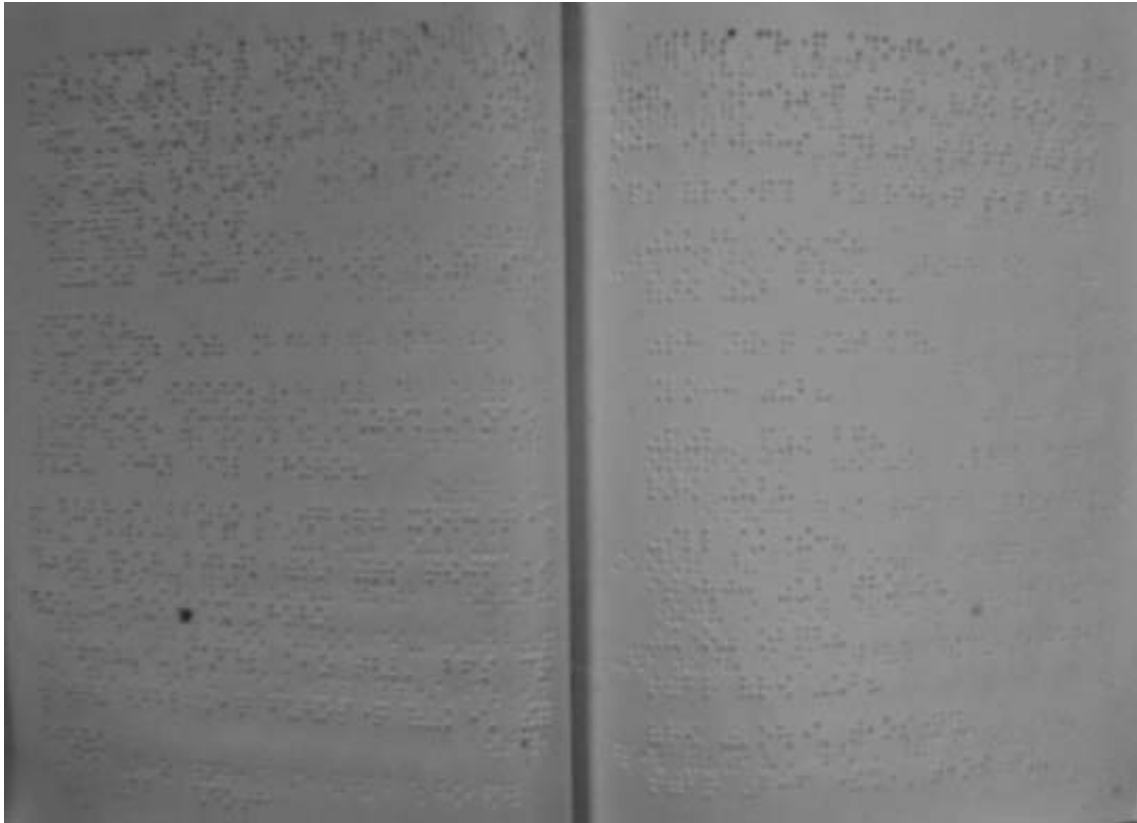
いちばんさきに しょーじや からかみが そとえ だされました かけものや がくも はづされました にわえ

いたや むしろを しいて そとえ ひばちや つくえや ほんばこや いろいろなもの はこびだされました たんすを うごかすと その うしろから ものさしとはなこの おてだまが できました つづらや ながもちも だされました とだなや とだなの なかの ものも みんな そとえ だされました

だいどころで いろいろなもの を のけると こねずみが 1びき とびだしました げぢょが びっくりして 「きゃ」と いったので あとで みんなに わらわれました

ばたばた ばたばた いよいよ そーぢが はじまりました ぼくも はたきをもつて てつだいました てんじょーを はらう たたみを たたく ひさしうらの くものすをとる かつての すずを はらう まるで いくさの よーでした

てつだいの いまきちが おどけて ほーきを おー



なぎなたの よーに もって べんけいの まねを しました
ぼくわ うしわかまるに なって はねまわって たたかいました
ら おかーさんに しかられました はなこわ ねこを たいて
うろうるして いましたので

「はなこも じぶんの おもちゃだけ ちゃんと おかた
づけなさい」

と いわれました

「このごろわ おーそーぢが やかましく なったから
すずはきわ おーきに らくに なりました」
と いまきちが いいましたが それでも ふきそーぢが
すんで すっかり いろいろな ものを もとの ところえ なお
したら ゆーがたぢかく なりました

おとーさんが おかえりに なった ときにわ いえの うち
も そとも きれいになって いましたので みんなが ほめ
られました

12 かるたとり

ともいちの うちで かるたとりが はじまっています
よみてわ おぢーさんで とりてわ みよこ ちよこ くに
たるー おとじろーの 4にんと ともいちと ともいちの
あねの みちこです いま ちらしで とっています

「はなより だんご」

みよこ 「はい ありました」

「ちり つもって やまと なる」

くにたるー 「はい」

「ねんにわ ねんを いれ」

ちよこ 「はい」

「おにに かなぼー」

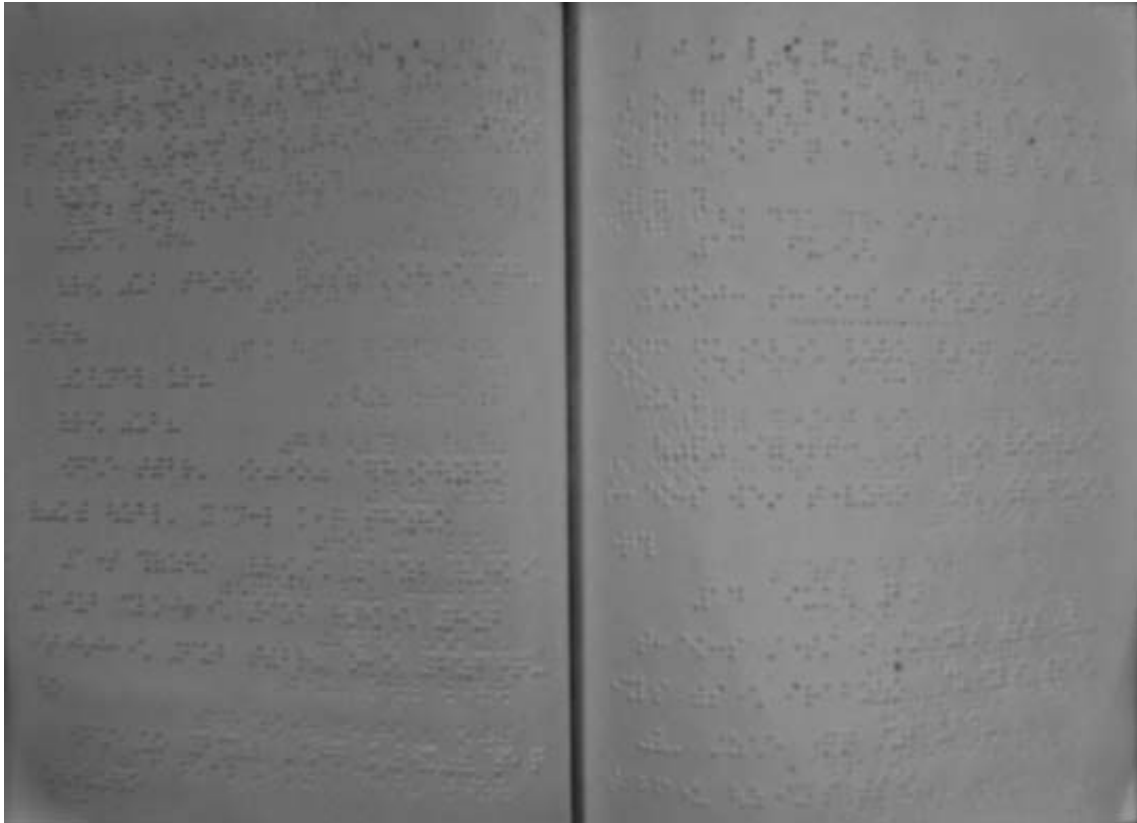
おとじろー 「はい とりました」

「ゆだん たいてき」

ともいち みちこ 「はい」

みちこ 「わたしが とったのです」

ともいち 「いーえ ぼくが とったのです」



「そー ひっぱりあってわ いけません まんなかえ ぶせて おきなさい こんど とった ひとが それも とることに します さー つぎのを よみます

「まけるわ かし」

みちこ 「はい とりました せんのも わたしが とりますよ」

「なきつらに はち」

みちこ 「はい」

これから ともいちわ だんだん あせりだしました みんなも しまいにわ むちゅーに なって とりました

1ど すみました みちこが 12まい みよこが 10まい くにたろーが 9まい ちよこが 8まい おとしろーが 6まい ともいちわ たった 2まいでした

それから また 2くみに わかれて なんべんも とって あそびました

いろ はに ほへ とちりぬる をわか よたれ そつね ならむ う 井のおくや まけふ こえて あさき ゆめ みし えひも せず

13 えはかき

「かつたろー とーきょーの おぢさんから おまえのところえ えはかきが きました よんで ごらん」

「はい」

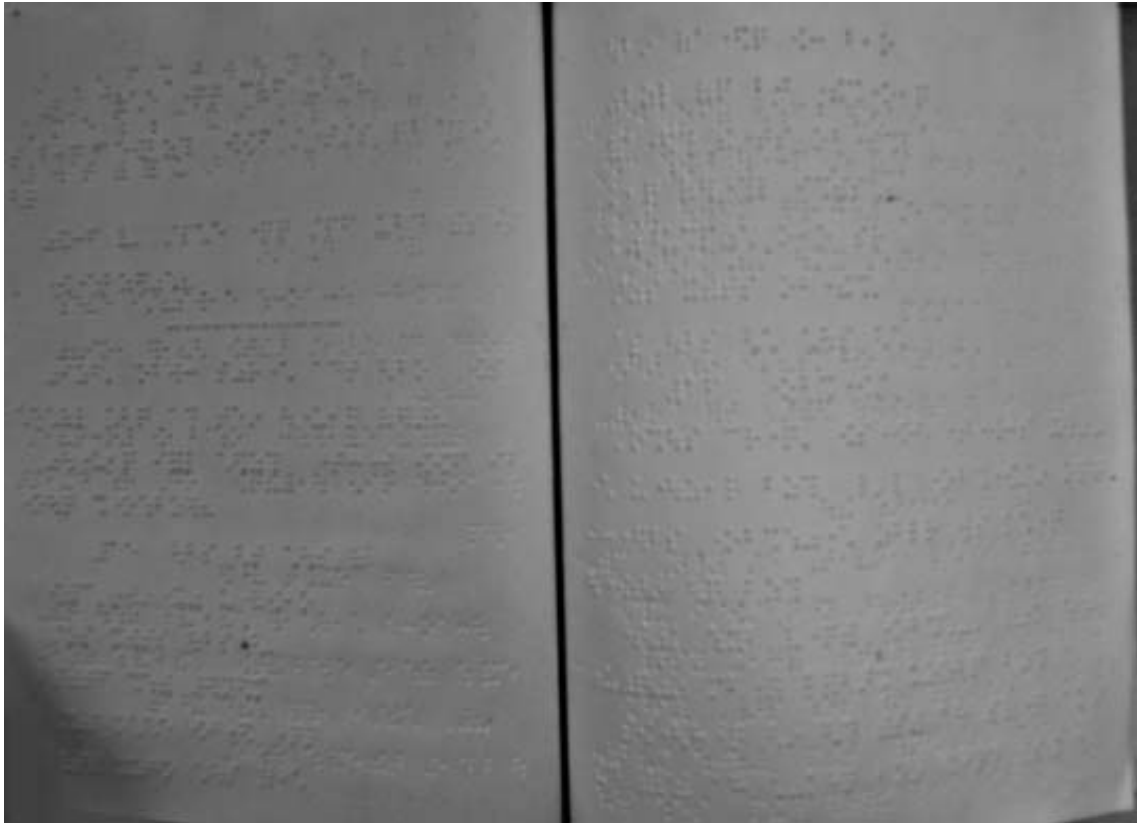
しんねん おめでとー このあいだ ひこーせんが とーきょーの そらを とびました これわ その えはかきです

14 おはなし 2つ

とーきょーの やどやで やまぐにの もの としまぐにの ものが おちあいました やまぐにの ものが

「ひわ やまから でて やまえ はいる」

と いえば しまぐにの ものが



「いや うみから でて うみえ はいる」
と いった あらそいます そこえ やどやの ていしゆが
きて
「へーえ ひわ やねから でて やねえ はいる もので
わ ございませんか」

「おまえわ たいそー とんちが あると きいた この
からかみに かいて ある とらを しばって みせよ」

「しばって おめに かけます どーぞ ここえ おい
だして くださいませ」

15 しいの きと かしのみ
おもう ぞんぶん はびこった
やまの ふもとの しいの きわ
ねもとえ くさも よせつけぬ
やまの なかから ころげ でて
ひとに ふまれた かしのみが

しいを みあげて こー いった
「いまに みて いる ぼくだって
みあげる ほどの たいぼくに
なって みせずに おくものか」
なんびやくねんか たった のち
やまの ふもとの たいぼくわ

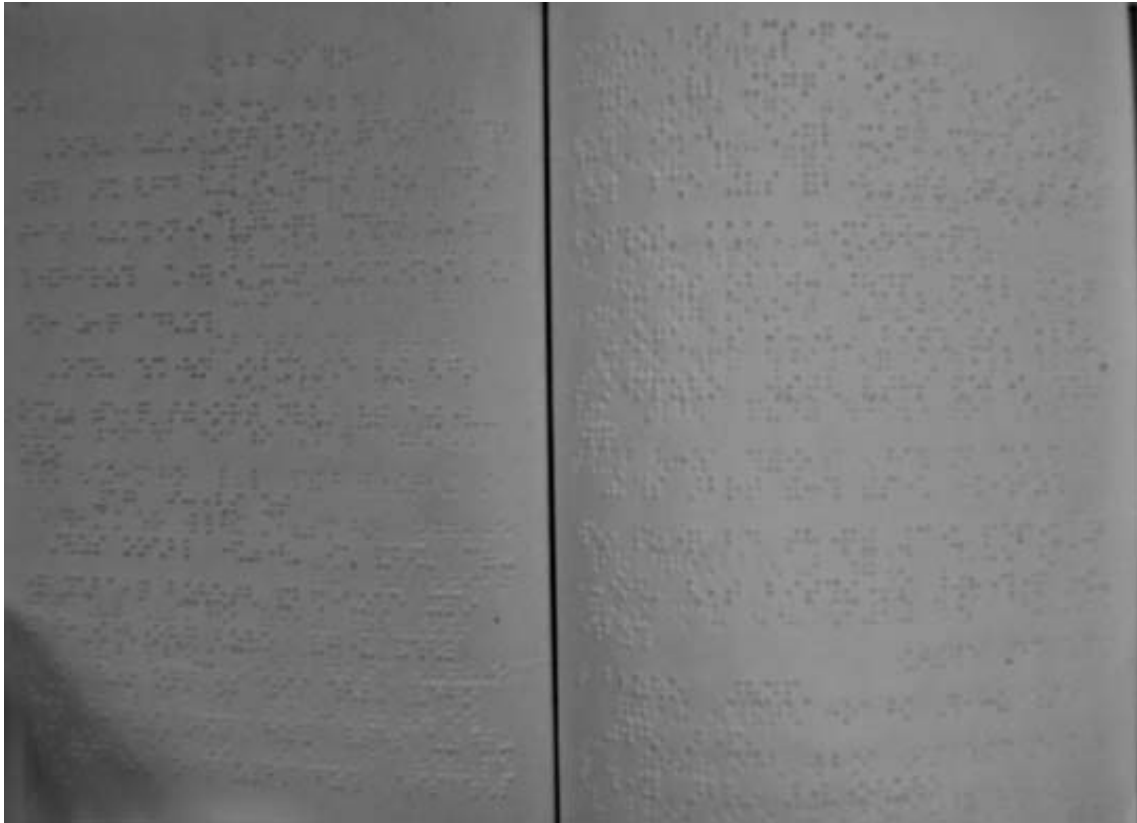
あの しいの きか かしのみ

16 たいくごや

わたくしの うちでわ このごろ どぞーの ふしん
が はじまっています にわに たいくごやを たてて
おーせい の たいくさんが まいにち その なかで
しごとを しています

どんな さむい ひでも たいくさんわ みんな しるし
ばんてんを むいで いせいはく はたらいています

のこざりで きを きる ものも あり のみで あなを
ほる ものも あり かなで いたを けづる ものも あり



ます

わたくしわ かななを かけて いるのを みるのが すき
です よく きれる かななが すーっと いたの うえを
とーと かななくづが ひとりでに くるりと まわって
すべりおちます かぜが ふくと かななくづが こや
ちゅー まって あるきます

わたくしわ さくじつ だいくさんから きの きれを
たくさん もらって ともだちと つみきをして あそび
ました

17 おーぎの まと

やしまの たたかいに げんじわ おか へいけわ うみ
で むかいあって いましたとき へいけがたから ふねを
1そー こぎだして きました みれば へさきに
ながい さをを たてて その さおの さきにわ ひらいた
あかい おーぎが つけて あります ひとりの かんぢよ
が その したに たって まねいて います さおの さきの

おーぎを いよと いうのでしょー

ふねわ なみに ゆられて あがったり さがったり
します おーぎわ かぜに ふかれて くるくる まわって
います いくら ゆみの めいじんでも これを 1やで
いおとすことわ なかなか むづかしそーです

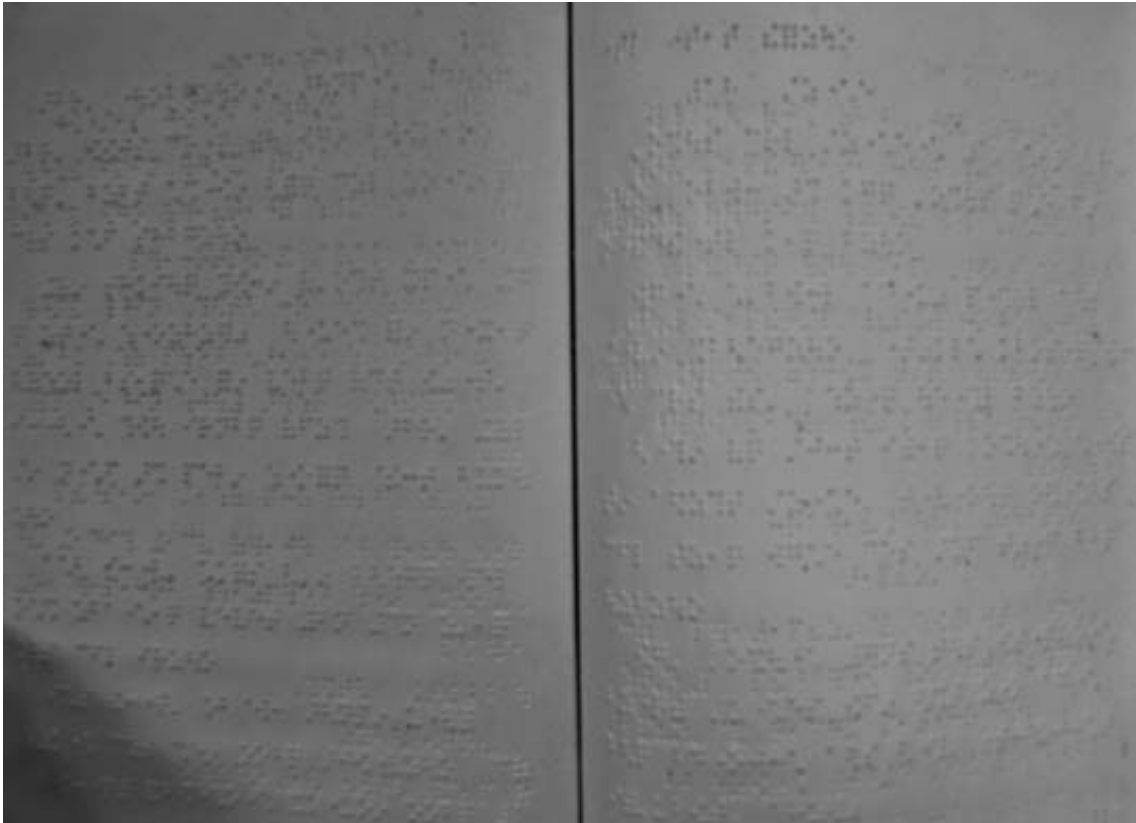
げんじの たいしょー よしつねわ けらいに むかって
「だれか あの おーぎを いおとす ものわ ないか」
と たづねました そのとき ひとりの けらいが すすみ
でて

「なすの よいちと もーす ものが ございます
そらを とんで いる とりでも 3ば ねらえば 2
わ_だけわ きっと いおとすほどの じょーずで ご
ざいます

と いました よしつねわ

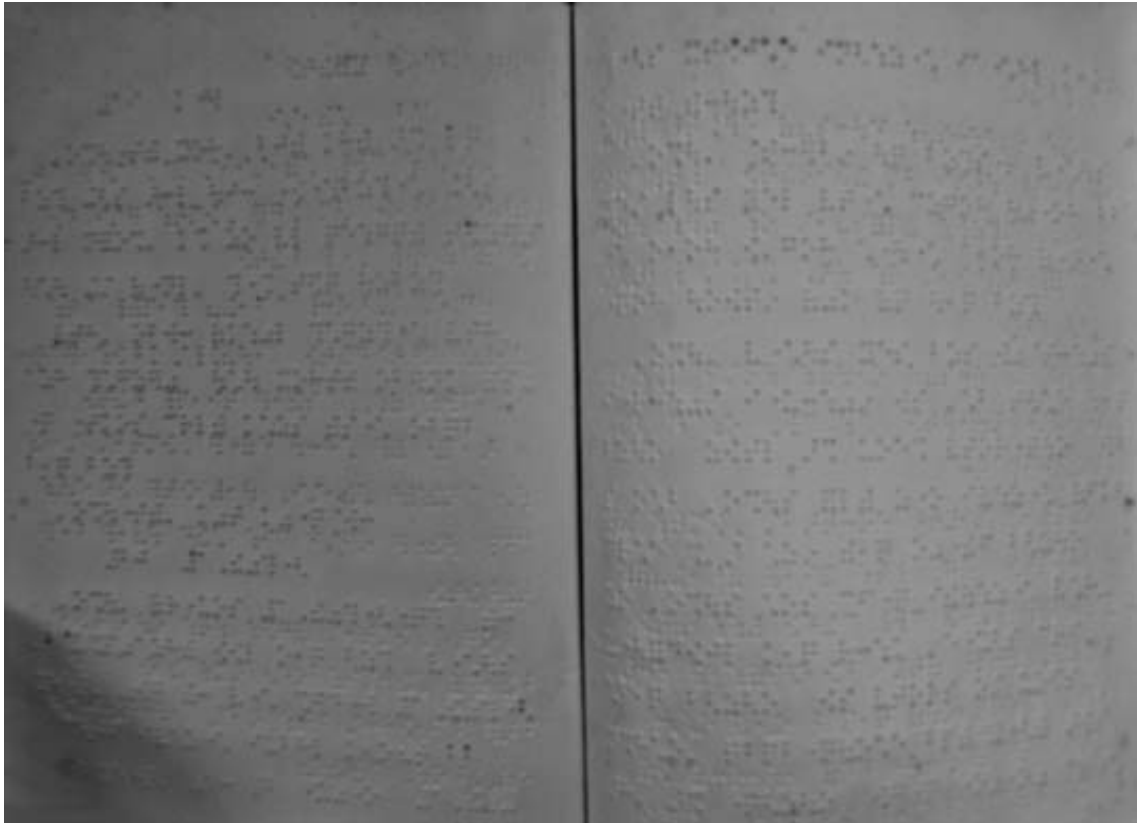
「それを よべ」

と すぐに よいちを よびだしました



よいちわ じたいいしましたが よしつねが ゆるしません
よいちわ こころの うちで もし これを いそになったら
いきでわ いまいと かくごを きめて うまに またがって
うみの なかえ のりゆきました
ゆみを とりなおして むこーを みわたすと ふねが ゆ
れ
て まとが さだまりません しばらく めを つぶって
かみさまに いのってから めを ひらいて みると こんどわ
おーぎが すこし おちついて みえます よいちわ ゆみに
やを つがえ よく ねらいを さだめて ひょーと いはなし
ました
あかい おーぎわ かなめの きわを いきられて そらに
たかく まいあがって ひらひらと 2つ 3つ まわって
なみの うえに おちました
おかの ほーでわ たいしょー よしつねを はじめ
みんなが うまの くらを たたいて よろこびました うみ
の ほーでも へいけが ふなばたを たたいて 1

どに どっと ほめました
18 やまがら
わたくしの うちに やまがらが 1わ
かつてに あり
ました たいそー よく なれて わたくしの てから えを
たべるほどに なって いました
それが かわいそーに あるばん ねずみに あしの
ゆびを くいきられました どんなにか ないたのでしょー
が うちの ものわ あさまで しらずに いました
きずを みて やろーと おもって わたくしが かごの
とを あけますと やまがらわ とびだして たけがきの
うえに とまって それから うらの やまえ とんで いって
しまいました
これわ わたくしが 7つの としの ことでしたが
いまでも やまがらの こえを きくと まだ あれが
いきて いるだろーか あしの きずわ どーしただろーかと
おもわないことわ ありません



19 なぞ

わたくしども ふたりわ いろも なりも よく にて
います ゆきの よーに しろー ございますが ゆきの
よーに つめたくわ なく また ひに てらされても とけません
しかし ゆや みづにわ すぐ とけて しまいます

ひとりわ たいそー みなさんに すかれますが ひとりわ
あまり すかれません しかし ふたりとも たいせつな もの
で どなたの うちにも なかまの ものが たいてい
いっています

わたくしどもわ なんと なんでしょー

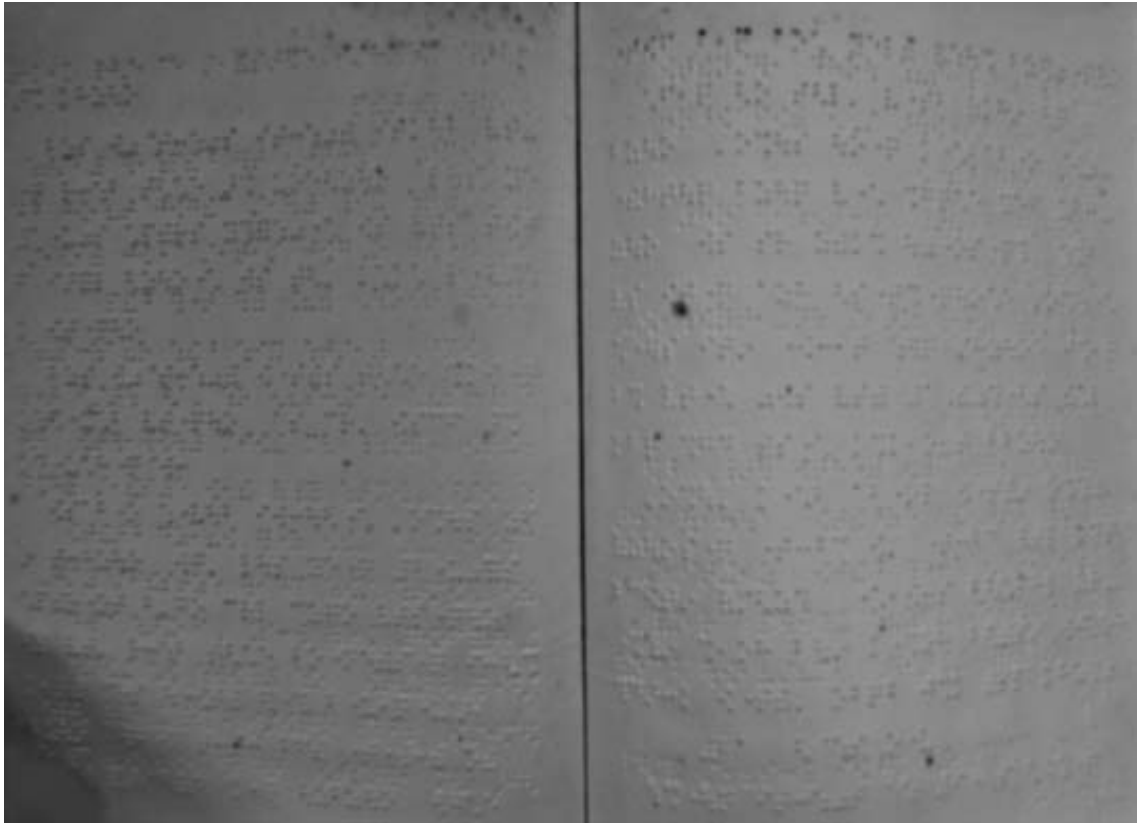
20 1ぼんすぎ

わたくしわ みちばたの 1ぼんすぎです もー
2ひやくねんあまりも ここに たっています ひがしの
むらでわ 「それ もー ひが くれるぞ 1ぼんすぎ
の うしろえ おひさまが おはりに なった」と いい
にしの むらでわ 「あー よい ぼんだ 1ぼん

すぎの ふところから おつきさまが おあがりになつた」
などと もーします

わたくしわ ちょーせいを していますので ひがしの
むらや にしの むらに ひとが うまれたり しんだり いえ
が たったり こわれたり かじが あったり みづが
でたり したことを みんな みて しています

わたくしわ ひがしの むらの いまの そんちょーさんの
おぢーさんや おばーさんを その わかい ときから して
いました まことに よく はたらく ひとたちでした せい
の たかい わたくしの めにも まだ おひさまが みえない
うちから くわや かまを もって たんぼえ いきました
また わたくしの かたの うえで おほしさまが ひかり
はじめるころに なって ちーさな わらぶきの うちえ
かえって いきました この ひとたちの たや はたけの
つくりかたわ ていぬいでしたから いぬも むぎも よその
よりわ よく できました それで だんだん うちが



よくなりました

いまの そんちよーさんの おとーさんも おとなしい ひとで ちーさい ときから よく はたらきました にしの むら 1ばんの かねもちの むすめさんが この ひとの ところ え およめに きました が その ときわ なかなか にぎやかな ことでした

いまの そんちよーさんも こどもの ときから すなおで なさけが かい ひとでした あの うちわ このうえ よくなるばかりでしょー

このあいだ さびしい おそーしきが わたくしの まえを とーりました それわ にしの むらで 2ばんめの かねもちだと いわれた うちに うまれた ひとの でした この ひとわ ちーさい ときから いたづらもので おーきく なくても うちの しごとも せず いばってばかり いました それで とーとー いえも どぞーも たも はたけも ひとの ものに なって しまいました それから

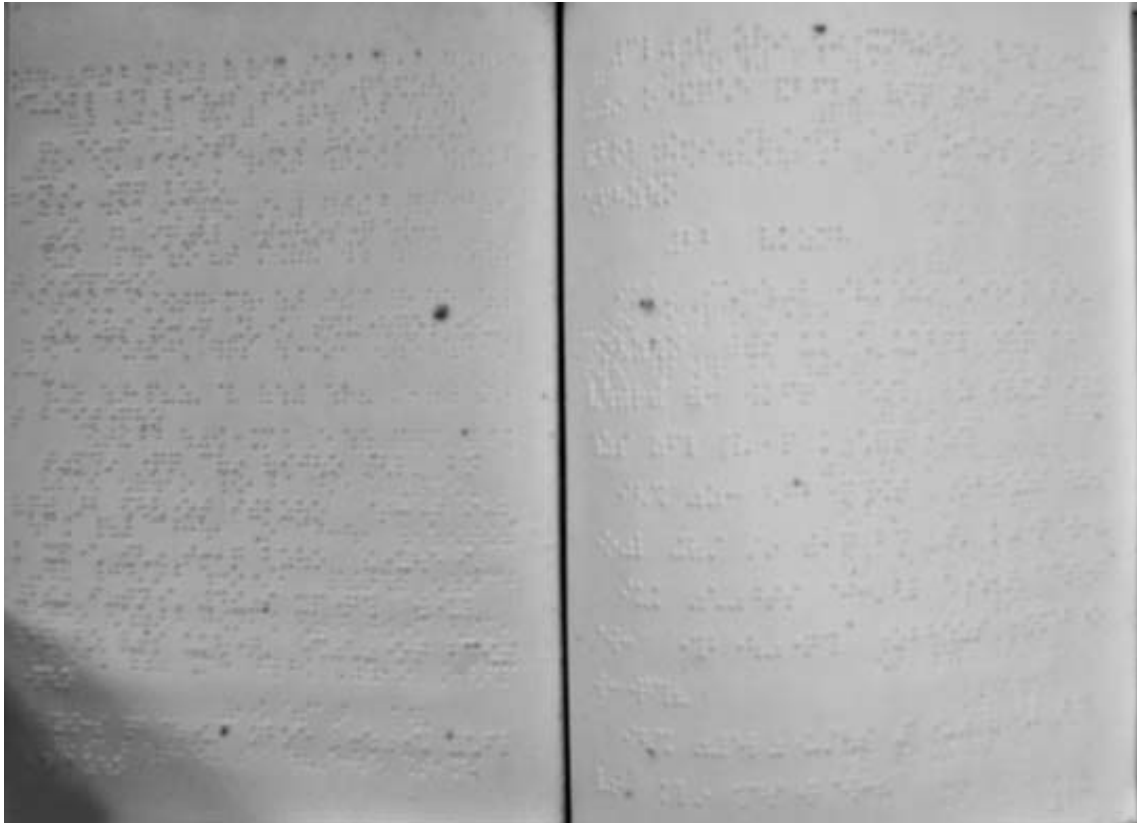
どこえ いったか むらにも ひさしく いませんでした

かえって きた ときにわ ひとい みなりをして いました わたくしの したで なかいあいだ しょんぼりとして しまして ひが くれてから むらえ はいりました その のち まもなく しんだのです さむい ひの ことで あまり きのどくでしたから わたくしが かぜの おとを ごーつと させて やりましたら おくって いく ひとが 「この ひとも 1ばんすぎの ほかに ないて くれる ものが なくなった」と いました

わたくしわ なかい あいだに こどもを たくさん みましたので どーいう こわ どーいう ひとに なることを みぬきます がっこーの いきかえりに みちぐさを かつたり いしを なげたり いきものを ころしたり するよーな こどもわ たいいてい ろくな ものに なりません

21 きしゃの たび

さくじつ おとーさんと あさ 9じの きしゃで



ぐんたいに いる にーさんの ところえ でかけました
てつきよーえ かかったとき か物を みたら たいそー
みづが でて いました
「この よい おてんきに どーしたのでしょー」
と たづねましたら
「かわかみの ほーで ゆきが とけはじめたのだ
ろー」
と いうことでした
とんねるを でて うみを みおろした ときにわ いつ
みても よい けしきだと おもいました ちょーど おーき
な ふねが おきを とーって いました ほぼしらが
2ほん えんとつが 4ほんの ふねです そばに
のって いた ひとの はなしでわ ぐんかんだと いうこと
でした
むこーの ていしゃばえ ついたら にーさんが むかえに
きて いました

3にんで まちを けんぶつしました ひるの ご
はんを たべてから へいえいを
みせて もらい おとーとえ
へいたいぼーを おみやげに かえって ゆーかたの きしゃで
かえりました

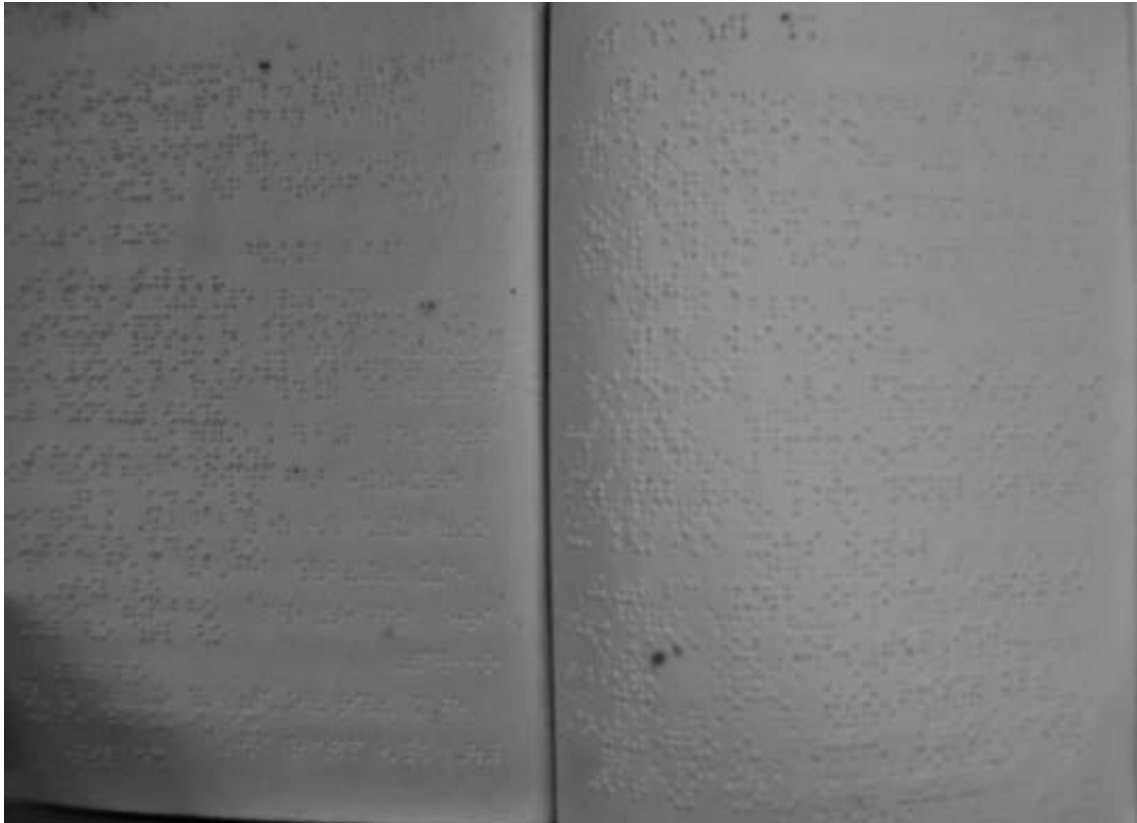
22 ひなまつり

おはなわ おかーさんに おひなさまを かざって いた
だきました ももの はなが はなひけに さして あり
ひしもちも もー そなえて あります いま おきくと おひな
さまの まえに すわって ながめて います

おきく 「まー きれいですこと だいらさまの したの
だんに ゆみや やを もって いる ひとわ なんでしょー」

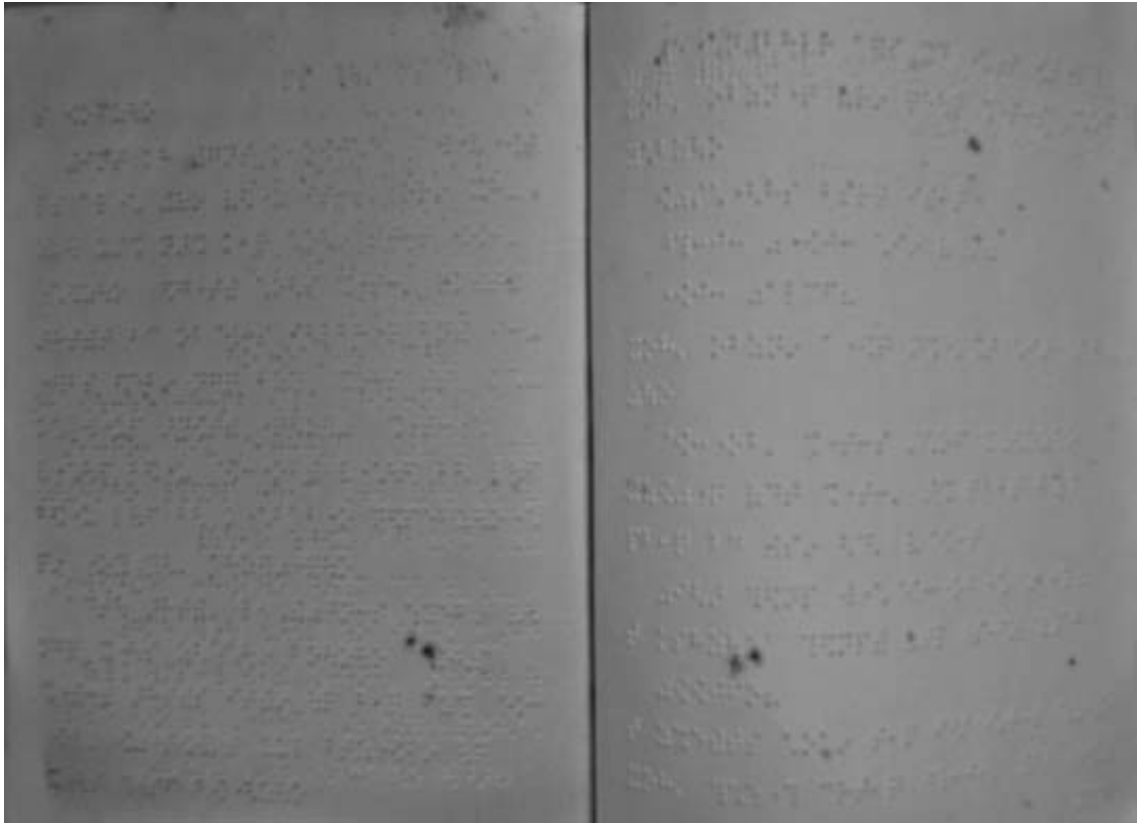
おはな 「かんぢよの りょーわきに かざって あるので
しょー ずいじんです だいらさまの ごけらいだ
そーです」

おきく 「5にんばやし の 1ばん みぎに いる
ひとわ なにを するのでしょー」



おはな 「おーぎを もって いる ひとですか
うたを うたう ひとだそーです」
ふたりが おはなしを して いるところえ おはなの
おかーさんが きました
「おばさん こんにちは」
「おきくさんですか あすわ おせつくですから がっ
こーが ひけたら すぐ あそびに おいでなさい おちよ
さんも おまつさんも きます」
「ありがとー ございます」
23 はるが きた
はるが きた はるが きた
どこに きた
やまに きた さとに きた
のにも きた
はなが さく はなが さく
どこに さく

やまに さく さとに さく
のにも さく
とりが なく とりが なく
どこで なく
やまで なく さとで なく
のでも なく
24 そがきよーだい
そがきよーだいわ あにを じゅーろー おとーとを
ご
ろーと いいました じゅーろーが 5つ ごろーが
3つの としに ちちわ くどー すけつねに ころされました
ははわ なきなから ふたりの こどもに
「なんと いう くやしい ことだろー おまえたちが
おーきく なったら この かたきを とって おくれ」
と いいました ごろーわ まだ ちーさくて なにも
わかりませんでした が じゅーろーわ なみだを おさえて
「きつと この かたきを とって みせます」



と こたえました

9つと なり 7つと なったところからわ あそびごと
にも あにが ゆみを ひけば おとーとわ たちを ふり
まわし はやく つよく なって かたきを とろーと ころ
がけました けれども かたきの くどーわ みなもの
よりともという たいしょーの おきにいいで いつも お
ぜいの けらいをつれて います ふたりの ものわ なか
なか そばえ よることも できません くどーが
ひがしえ いけば きょーたいも ひがしえ いき にしえ
いけば にしえ いき ながいあいだ つけねらいましたが
てを だす すきわ ありませんでした

あるとし よりともわ にっぼんぢゅーの さむらいを ひき
つれて ふじの まきがりをして いました かたきの
くどーも よりとものおとをも して いています きょー
たいわ こんどこそわとははに いとまごいをして
ふじの すそのえ いそぎました

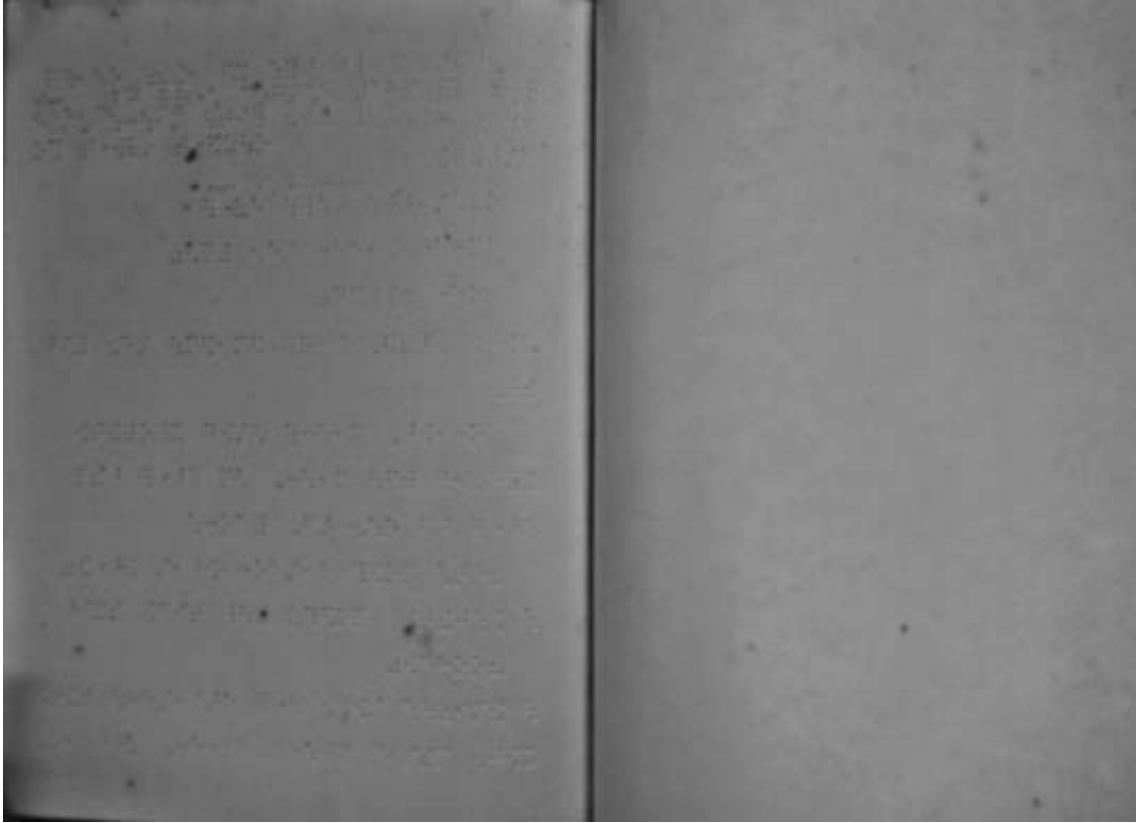
5がつ28にち あめの ふる ばんの ことです
ふたりわ たいまつで みちを てらして くどーの やかたえ
むかいました

こんやかぎりの いのちと おもって
じゅーろー 「ごろー かおを みせよ」
ごろー 「あにうえ」

ふたりわ たいまつを あげて つくづくと かおを みあい
ました

きょーたいわ くどーの やかたえ ふみこみました
ふみこんで みると くどーわ よく ねいっています
ねいっている ものを きるわ ひきょーと

「おきよ すけつね そかきょーたいが まいった」
となのりました すけつねも ひとに しられた さむらい
「こころえた」
と まくらもとの かたなを とって おきあがるーと しまし
た
ふたりわ すかさず うちとつて じゅーろーわ 22 ご



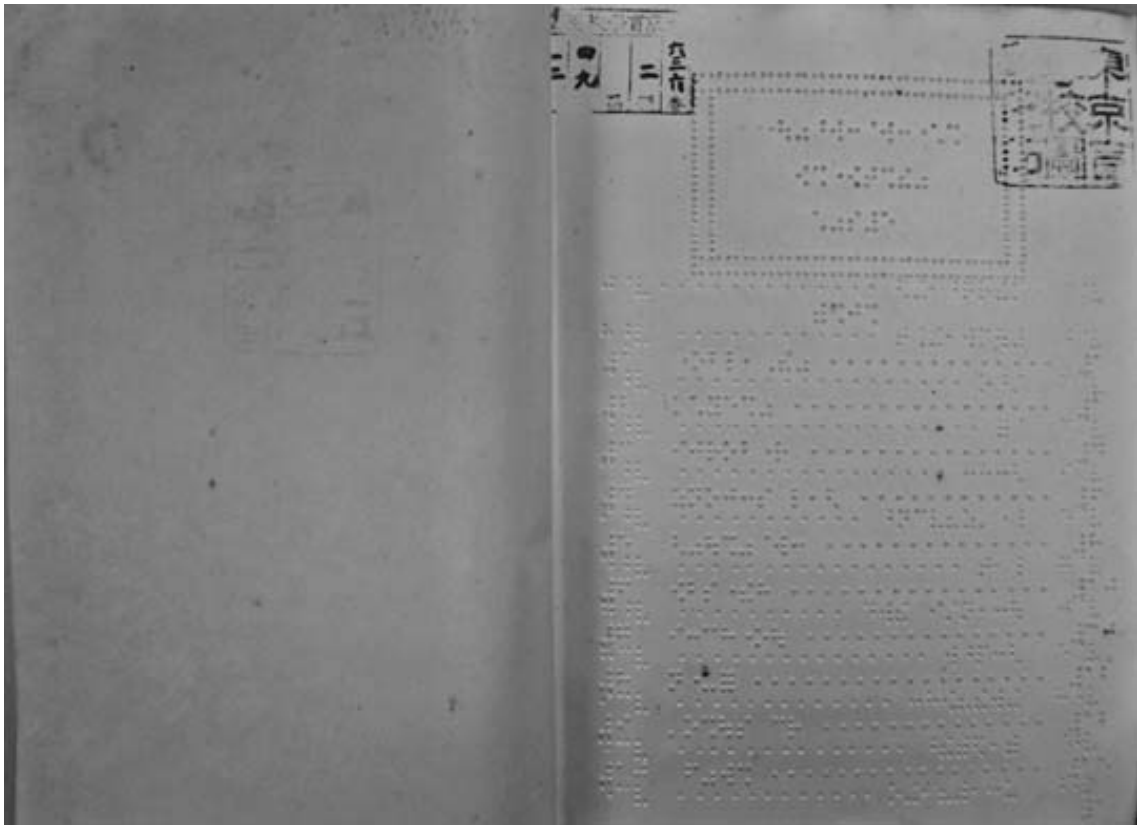
ろ一わ 20 ちちが うたれてから 18ねんめに めで
たく のぞみを とげました











じんじょーしょーがく

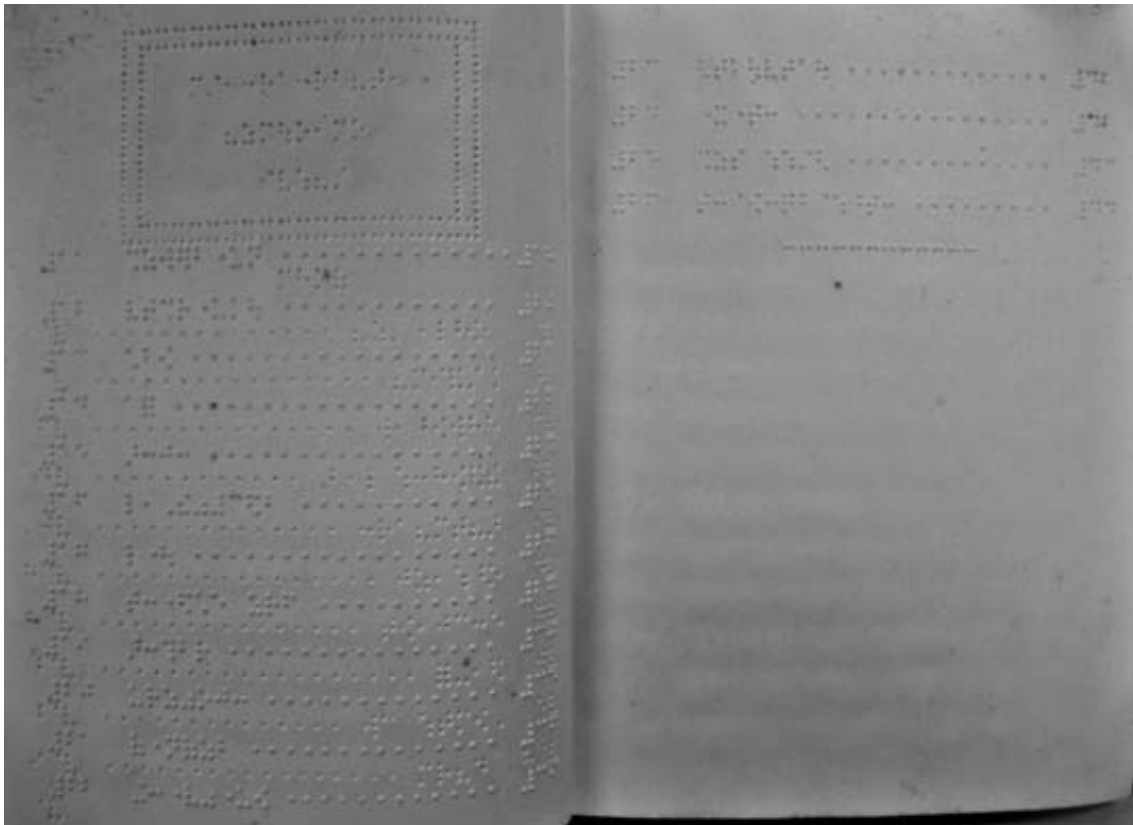
こくごとくほん

かんの5

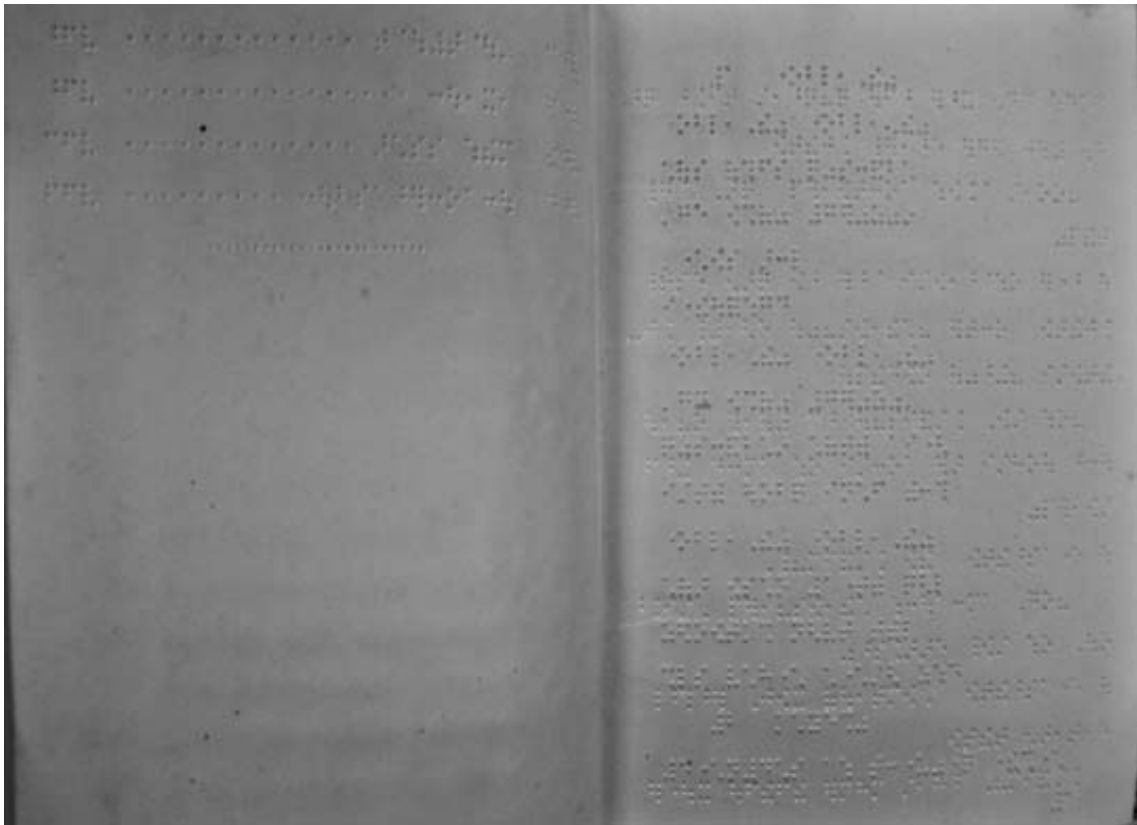
もくろく

1	だいにっぽん	1
2	なかむらくん	1
3	おろちたいぢ	4
4	まつたろーの につき	6
5	きんしくんしょー	8
6	こいのぼり	10
7	おーうりだし	10
8	つばめ	12
9	わたくしの うち	12
10	えんそく	15

1



11	くまそせいばつ	18	20	はちまんたろー	35
12	ひとくちばなし	20	21	みづみまい	36
13	かいこ	21	22	ゆーびんばこ	39
14	あめ	22	23	ひとあしひとあし	42
15	よーろー	23	24	ぶどー	42
16	につぼん3けい	25	25	くまの ささやき	43
27	にじ	26	26	とーきよーていしやぢよー	44
18	とーげから まちえ	27		-----	
19	よーすいち	30			

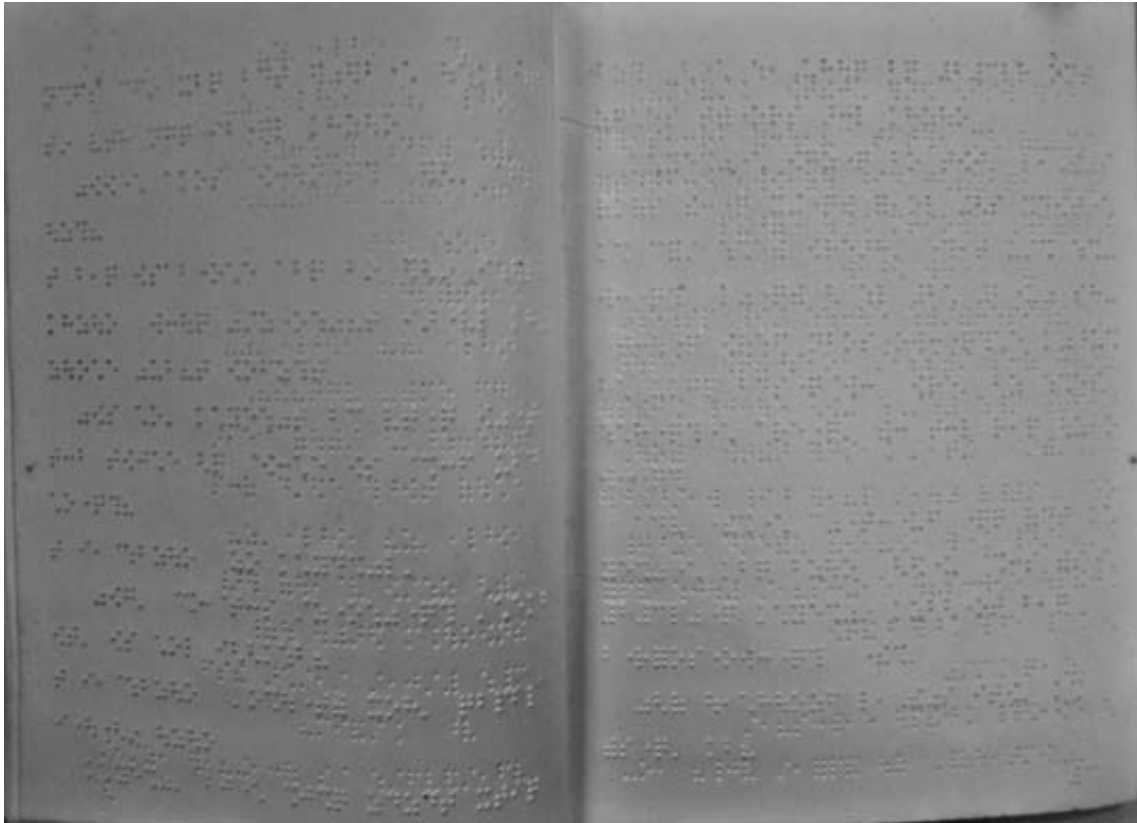


1 だいにっぽん

だいにっぽん だいにっぽん
かみの みすえの てんのへいか
われら こくみん 7せんまんを
わがこの よーに
おぼしめされる
だいにっぽん だいにっぽん
われら こくみん 7せんまんわ
てんのへいかを かみとも あおぎ
おやとも したいて おつかえ もーす
だいにっぽん だいにっぽん
かみよ このかた 1ども てきに
まけたことなく つきひと ともに
くにの ひかりが かがやき まさる

2 なかむらくん

4がつ4かの あさ とーばんで ほくが



つくえのうえをふいているとせんせいがいしらないせい
とをひとりつれておいでになりました

「ここがあなたのきょーしつです せきわ あれに
します」

と いった このあいだから あいて いた せきを おさしに
なりました そーして 「やまださん」と およびに なり
ましたから 「はい」と こたえますと

「この かたわ なかむらさんと いう ひとで こんど
とーい ところから きて きょーから この きょーえ はい
る
かたです」

と おっしゃいました また なかむらくんには

「これわ きょーちよーの やまださんです わからない
ことわ この かたに おききなさい」

と おっしゃいました わたくしども ふたりわ ていぬい
おじぎを しました

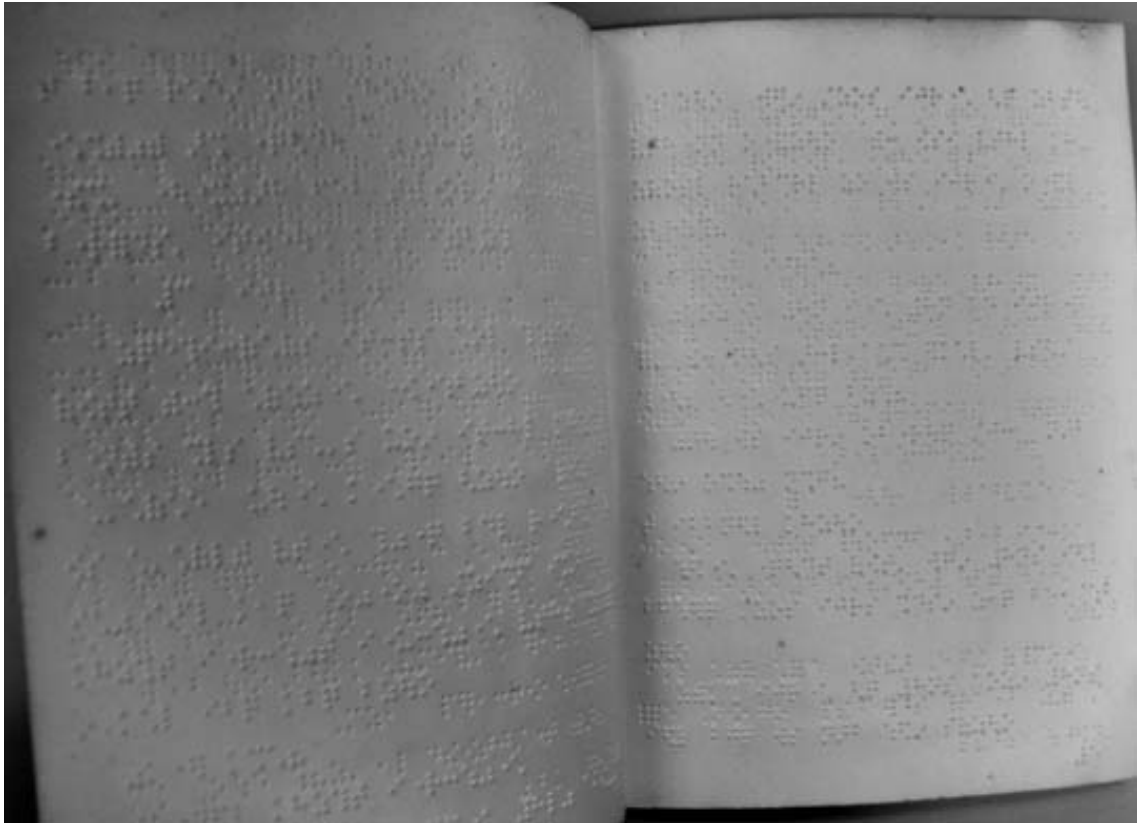
なかむらくんわ いろが くるくて まるまると ふとって
います きが さっぱりして いて 2・3にち たつと

まえからの ともだちの よーに なりました

なかむらくんが これまで いた ところわ につぼんの
みなみの ほーで ふゆでも めったに ゆきの ふることが
なく うめや さくらも こちらよりわ ずっと はやく さく
そーです なんでも きしゃに 2か 2ばん のり
どーして こちらえ ついたのだそーですから なんびやく
りか はなれて いるのでしょー こちらわ いま さくらの
さかりですが あちらでわ もー とーに ちって しまった
そーです

あるひ ぼくが うんどーばえ でて みると なか
むらくんが なくて いました きけば きょーの ものが
2・3にんで なかむらくんを なまいきだと いて
いちめたのだそーです ぼくわ

「きみ しっかりしたまえ につぼんの おとこわ なく
ものでわ ない」



と いて ちからをつけて やりました なかむらくんわ
がくもんも よく できるし うんどーも じょーずです
ぼくわ じぶんより えらい ともだちを おーせいして
いぢめるのわ おとこらしく ないと おもいます

3 おろち たいぢ

あまてらすおーみかみの おとーとの かたに すさのおの
みことと もーす かみさまが ございました あるとき
いづもの くいの ひのかわの はたを おとーりに なりますと
かわかみから はしが ながれて きました みことわ
この かわかみにも ひとが すんで いるに ちがいないと
おかんがえに なって だんだん やまおくえ おはりに
なりますと おぢーさんと おばーさんが ひとりの むすめ
を なかに おいて ないて いました

「なぜ なくか」

と おたずねに なりますと おぢーさんが

「わたくしどもにわ もと むすめが 8にん ご

ざいました それを やまたの おろちが きて まいとし
ひとりづつ たべました もー このこ ひとりに なり
ましたのに ちかいうちに また その おろちが たべに
まいります」

「どんな おろちか」

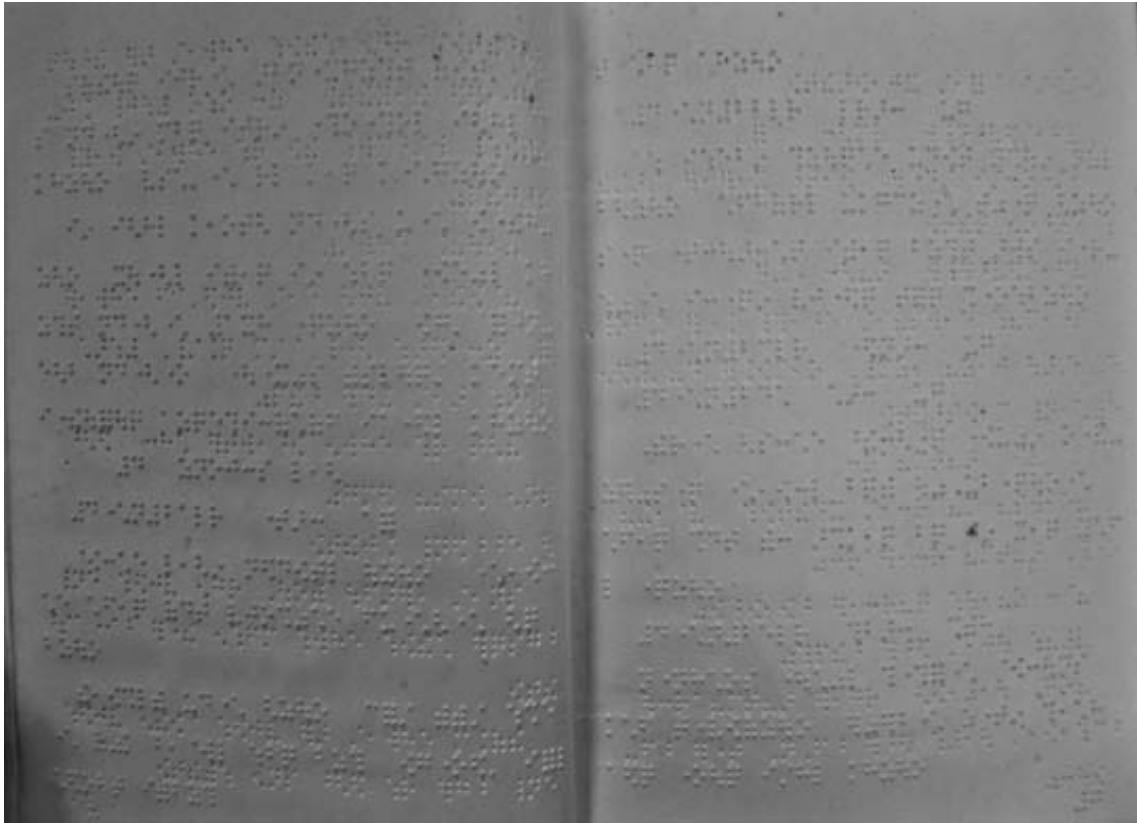
「あたまが 8つ おが 8つ ある おろちで
めわ ほーづきの よーに あかく せなかにわ ひのきや
すぎの きが はえて います」

「よし その おろちを たいぢして やろー つよい
さけを たくさん つくれ」

と おいつけに なりました

さけが できると みことわ それを 8つの おけに
いれさせて やまたの おろちの くるのを まって いらっしやい
ました

まもなく おろちが きて 8つの あたまを 8つの
おけに いれて その つよい さけを のみました



のみほして おろちが よいづれますと みことわ こしの つるぎを めいて おろちを ずたずたに おきりになりました ひのかやが ちになつて なかれました おを おきりになつたとき つるぎのはが こぼれました ふしぎにおもつて おを さいて ごらんになりますと つるぎが 1ふり でした これわ めづらしい つるぎだ じぶんの ものにしてわ ならぬとおぼしめして あまてらすおーみかみえ おあげになりました

4 まつたろーの にっき

4がつ21にち どよーび あめ

きよーから にっきをつけることに しました がっこーから かえつて みると ひろたくんから えはかきが きて いました

ほっこくにも はるが きました うめや ももや さくらが みんな いっしょに さいています これだけわ おめに かけたいと おもいます

と かいで ありました

4がつ22にち にちよー はれ

あさ おさらいを すましてから はること つくしをつみに きました かえりみちにはなれうまが とんで きましたので どーしよーかと おもつて いますと よその おぢさんが おーでを ひろげて とめて くださいました

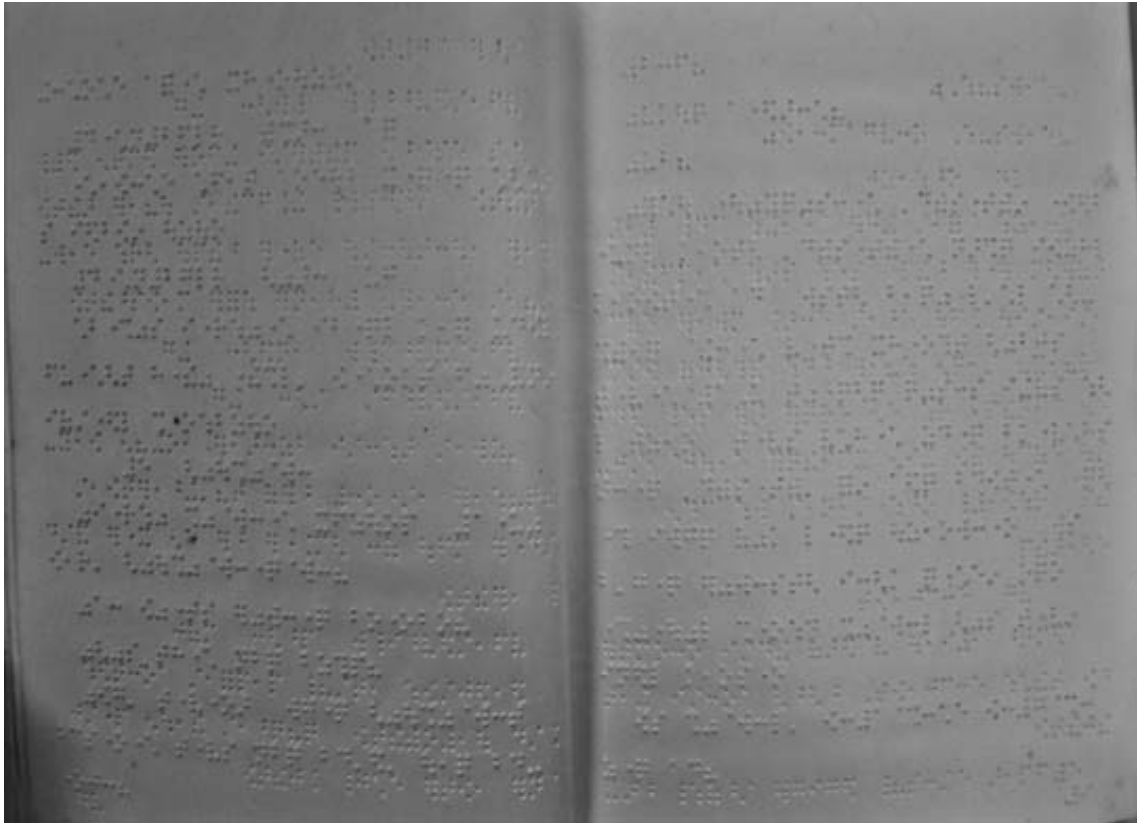
4がつ23にち げつよー はれ

4がつ24か かよー はれ

ぼちが きのーから びよーきで ごはんを たべ ませんので がっこーに いても しんばいでしたが かえつて くと もー よくなつて いて おを ぶつて むかえに でした

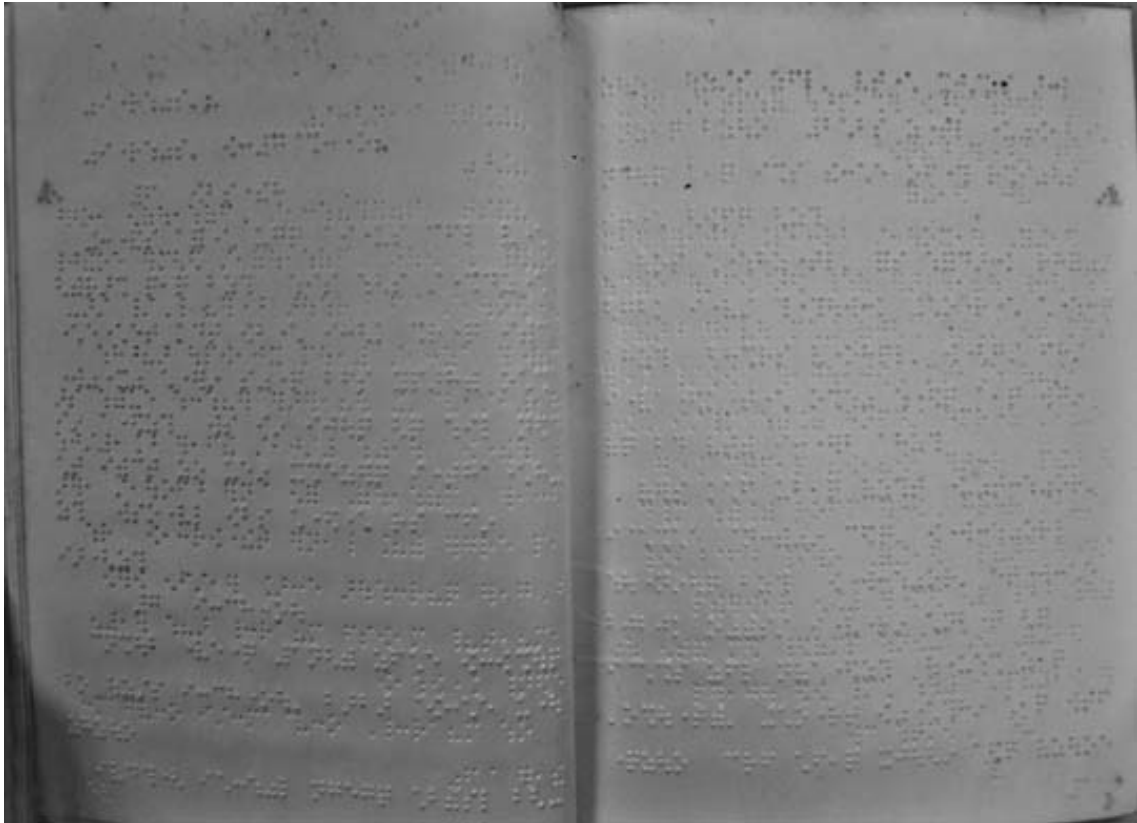
4がつ25にち すいよー くもり

つづりかたの じかんに すずめが きよーしつのはなえ とびこみました せんせいわ まどを すっかり あけて だして おやりに になりました



ゆーかたから あめが ふりだしました
4がつ26にち もくよーび あめ
がっこーから かえって あたらしい ふいで かきかた
の おけいこを しました
4がつ27にち きんよーび はれ
かいぐんのおぢさんが おいでに なって はるこにわ
えはかきと りぼん ぼくにわ こがたなと えんぴつを
おみやげに くださいました
5 きんしくんしょー
「おぢさん くんしょーが ふえましたね 1ばん
こっちわ きんしくんしょーでしょー」
「あー こんどの せんそーで いただいた」
「きんの とりが ついて いますね」
「これわ とびだよ それで きんしくんしょーと
いうのだが とびの ついて いるわけわ している
だろー」

「いーえ」
「はなして あげよーか」
「はい」
「むかし じんむてんのーが わるものどもを ごせい
ばつに なったとき わるものどもが つよくて おこまりに
なったことがある そのとき いったん にわかにかき
くもって ひょーが ひどく ふりだすと きんいろの
とびが 1ぱ とんできて てんのーのおゆみの さき
にとまった とびの ひかりが まるで いなびかりの
よーで わるものどもわ めを あけて いることが でき
ず おそれて みんな にげて しまったそーだ その
いゆれで せんそーのとき おーきな てがらを たてた
ぐんじんに くださる くんしょーに きんの とびを
おつけに なったのだ
この くんしょーにわ こー1きゅーから こー7きゅー
まで ある」



「おぢさんのわ」

「おぢさんのわ こー7きゅーだ」

6 こいのぼり

ゆーべの あめが はれて あおばの うえに ひが
きもちよく てっぺ います さおの さきの やぐるまが
がらがらと なる と こいが おーきな くちで おもう
ぞんぶん かぜを のんで いえの むねよりも たかく
おを あげます その おを おろして きて さおにつける
かとおもうと また はらを ふくらませて おどりあがり
ます そのたびに こいの かげが ちの うえを
およぎます

7 おーうりだし

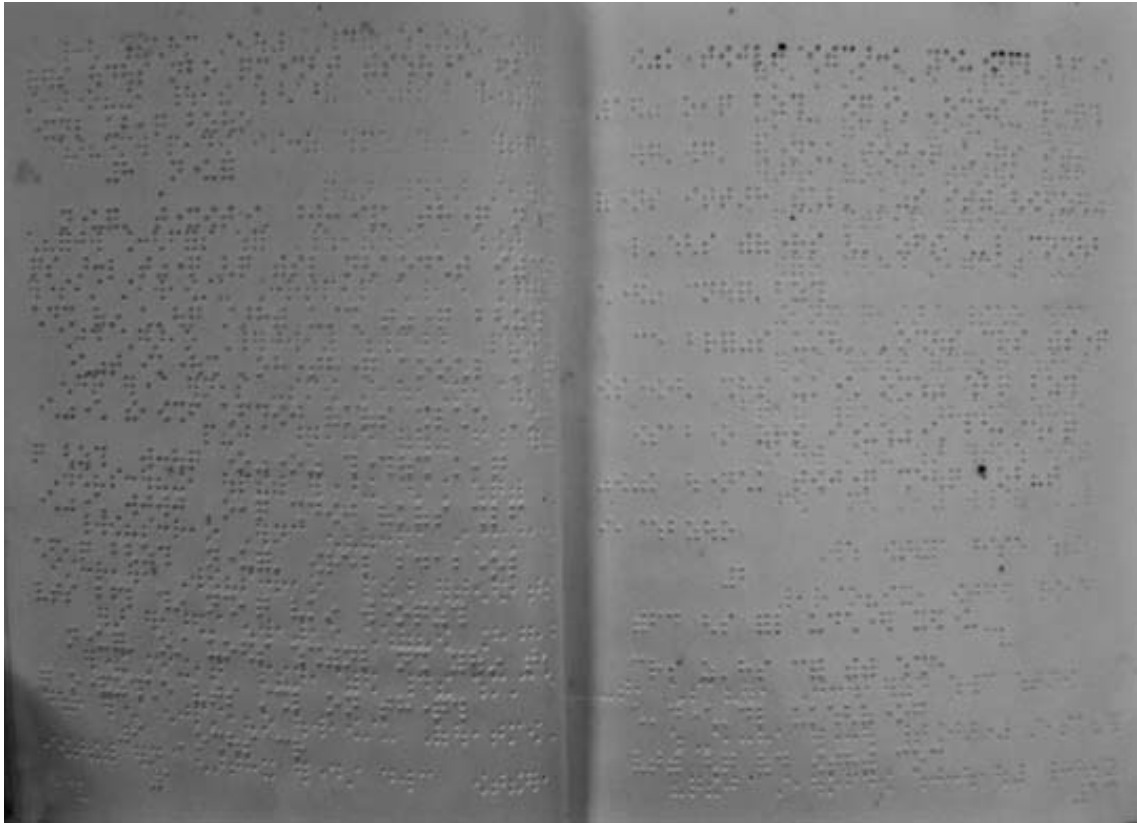
うつくしい びらで 1つきも まえから こーこくして
いた しまやの おーうりだしわ いよいよ きょーから はじ
まりました

おひるすぎ おかーさんも つれて かいものに いき

ました しまやの まえにわ ひとが くらやまの よーに
あつまって いました 2かいの まどに ばんこっきが
つるして あって おくの ほーから たえず ちくおんきの
おとが きこえて きます

したの かざりまどにわ めの さめるよーな ちりめんや
きれいな おびや すずしそーな ゆかたぢが かざって
あります いろいろの ひだりてにわ こぎれや えりや
おびあげなどが たくさん さげて あって それを
みている ひとも おーぜい あります

みせの なかえ はいって みますと ばんとーさんたちわ
おきゃくから ちゅーもんを うけてわ こぞーさんたちに
さしづをして います こぞーさんたちわ どぞーから
いろいろな たんものや おびちを かついで きて
おきゃくの まえに つみあげます しばらく まって
わたくしどもわ ゆかたぢと こんがすりを かって そとえ
でました うちえ かえって ふるしきを あけて みましたら



みせの しるしの ついた てぬぐいと ものさしが けい
ぶつに はいって いました

8 つばめ

つばめわ とぶことが じょーずな とりで つぶ
ての よーに とんで きて ものに つきあたるかと おもうと
かるく みを かわして やよりも はやく とんで いきます

がんと おなじく わたりどりで あたたかになつて
がなが ほっこくえ かえるころ みなみの くから わたつ
て きます そーして だんだん すずしく なつて
がなが そろそろ わたつて くるころ みなみの くいえ
かえつて いきます つばめわ こちらに いるあいだに
ひとの いえに すを つくつて ひなを そだてます

つばめわ たや はたけの さくもつにつく むしをとつ
て たべますから ひとの やくに たつ とりです

9 わたくしの うち

1

こんな ところにと おもうよーな むらはづれに いえが
1けん たつて います これが わたくしの うちです

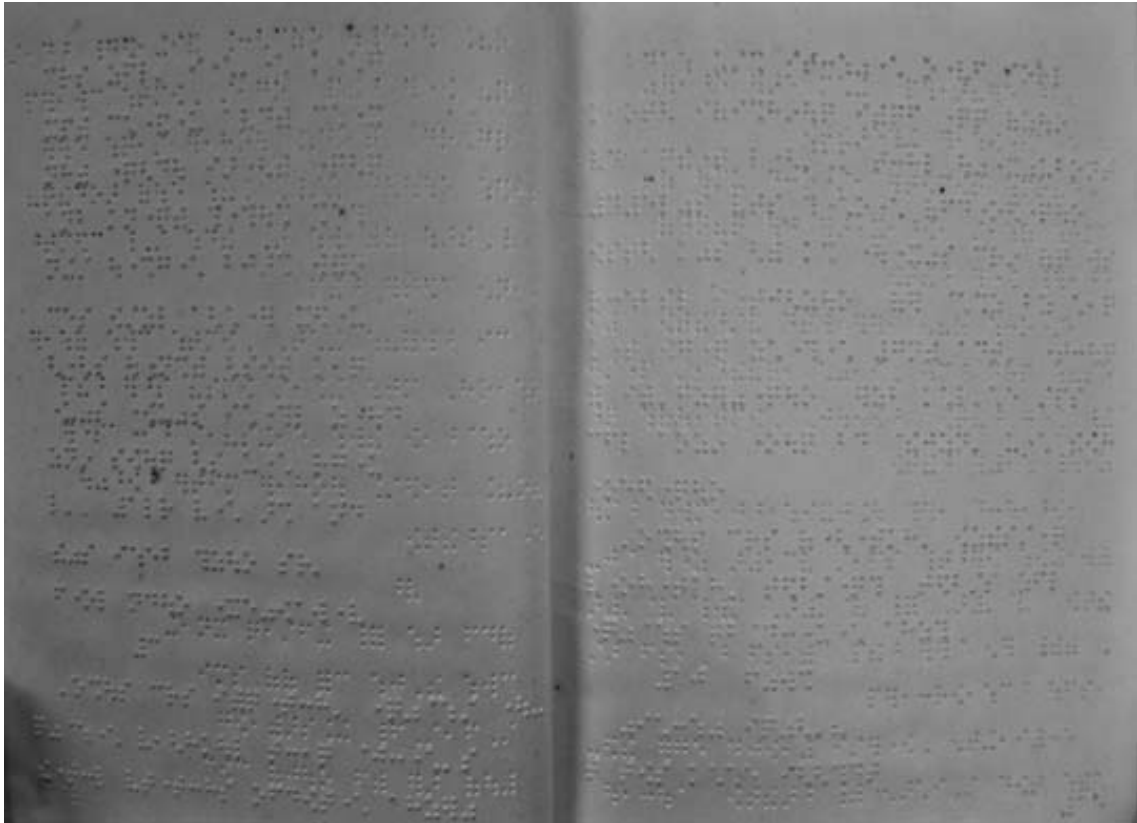
それわそれわ しづかな ところで かぜの おとと
みづの おととより ほかにわ なんの おとも きこえません
にわきの もみぢの きわ まえの かわに うつくしい
かげを うつして います

うら いちめんの はやしわ わたくしの うちの もので
このごろわ くりの はなが たくさん さいて います

このあいだ まちの おばさんが いらっしやつて
「こんな しづかな ところで くらして いたい」と
おっしゃいました

2

もえる きの めに はるかぜ ぶけば
うちの まわりの うめ もも さくら
かわるがわるに はなさきみだれ
ひとも きて みる ことりも うたう



うちの まえにわ おがわが なかれ
ふねも うかべば あひるも うかぶ
つりも できるし およぎも できて
あつい なつでも すずしく くらす
つゆや しぐれが いるよく そめた
うらの こやに あきかぜ ふけば
きぎの しづくも きのこと なって
ばんの ごはんの おかずに まじる
まつを のこして きの はが ちれば
にわわ 1にち ひが よく あたる
ほんの おさらい すました のちわ
えだに つるした ぶらんこあそび

3

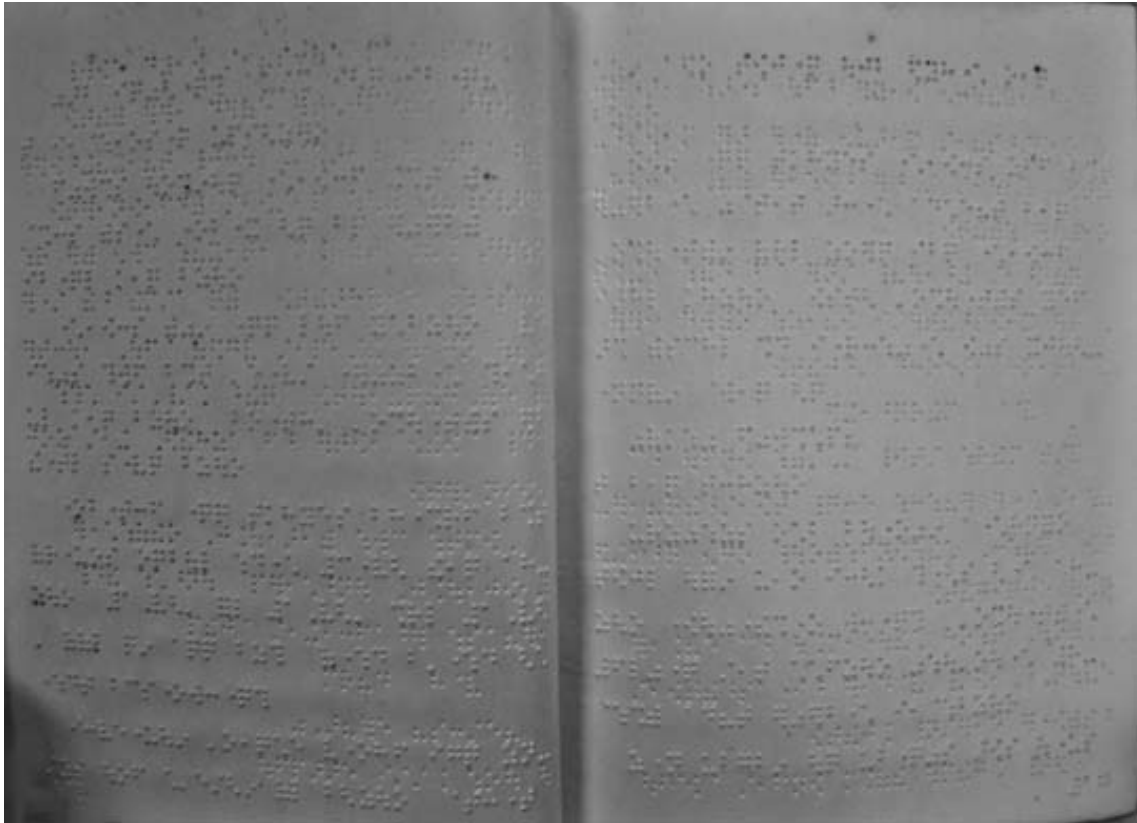
わたくしの うちの おもてどーりわ でんしゃや じ
てんしゃが ひっきりなしに とーって りょーがわの
ほどーに ひとどーりの たえることが ありません

あるあさ はやく おとーさんが たびえ おたちに
なったとき おみおくりをして おもてえ でて みました
ひる あれほど にぎやかな とーりに しんぶんはいつと
45にんの ひとの すがたが みえるだけでした
このとき なんの きも なく じぶんの うちを みて その
ちーさいのに おどろきました みせ きゃくま いま かって
など これで まかすが 7つも あるとわ どーして
も おもわれませんでした せまい なかにわから やねの
うえに あたまを だして いる ひよるまつわ はが ほこり
だらけでした

わたくしの うちの みぎどなりわ こまものやで
ひだりどなりわ とけいやです とけいやの まえに
でんしゃの ていりゆーばが あります

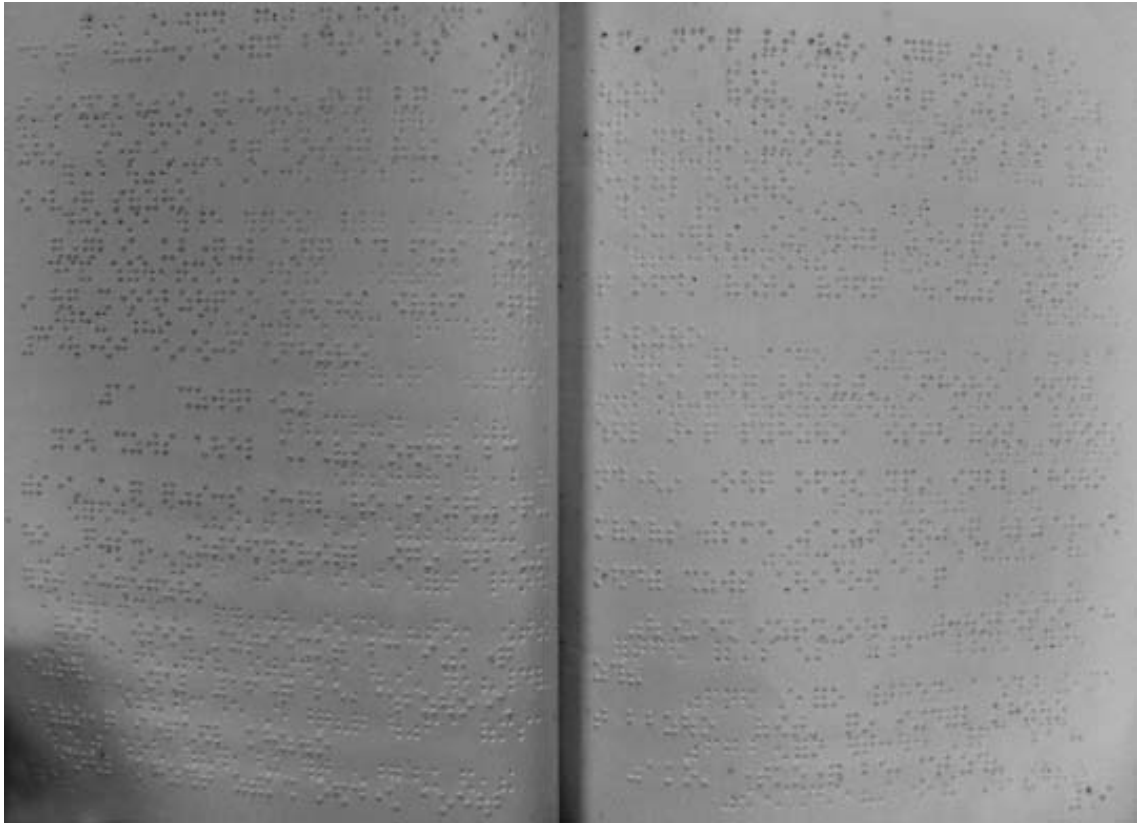
10 えんそく

「おかーさん おてんきわ」
と とこの なかから おききすると



「よい おてんきです はやく おきて おいで」
と おっしゃったので はねおきました
えんそくの したくをして がっこーえ ゆくと もー
きゅーの ものが だいぶ きて いて せんせいも
おいでに なって いました
がっこーの もんを でて にしえ むかいました
おさんの すそえ いくと わらびや ぜんまいが すっかり
はに なって いました いたどりわ わたくしども の せい
ほどに のびて いました
だいどーえ でて となりむらの いりぐちえ いくと
みちばたの たていしに さるが 3ひき ほって あり
ました 1ひきわ めに 1ひきわ くちに 1ひき
わ みみに てを あてて います みざる いわざる きか
ざると いうのだそーです
おーひらばしを わたってから ひだりえ おれて まつ
やまの したえ かわらやきを みに いきました ちょーど

かまを あけた ところで しろい けむりが たって
いました
ここを でて となりむらの がっこーの まええ いくと
せんせいが 「ちょっと よーが あるから」と いうて
わたくしどもを みちに またせて おいて がっこーえ
およりに なりました このとき わたくしども の むらえ
よく ものうりに くる おぢーさんが この ふろしき
づつみを しょって きて
「みなさん えんそくかぬ」
と いうて とーりました
はちまんさまの たかい いしだんを あがりつめた
ところに しめを はった おーきな すぎの きが あり
ました ごしんぼくだ そーです わたくしどもが
6にんで やっと かかえました 「さしわたしが 8
しゃくも ある」と せんせいが おっしゃいました
まづ はいゆいをして はいでんの よこの しばの



うえで ベントーを たべて いると さっきの がっこー
の こづかいさんが むぎゆを もって きて ください
ました のどが かゆい いたので みんな おーよる
こびで のみました

せんせいが はいでんに かけて ある えまの おはなし
を して くださいましてから たんぽの こみちえ でて
3じごろ がっこーえ かえりました

11 くまぞせいばつ

むかし くまその かしらに かわかみの たけると いう
ものが あって てんのーの おーせに したがいませんでした
した てんのーわ やまとたけるのみことに これを せいばつ
せよと おーせられました

みことわ そのころ やまとおくなと いう おんなで
おんとしわ わづかに 16で いらっしやいましたが
いさみたって おでかけに なりました

おつきに なりますと まもなく たけるが あたらしい

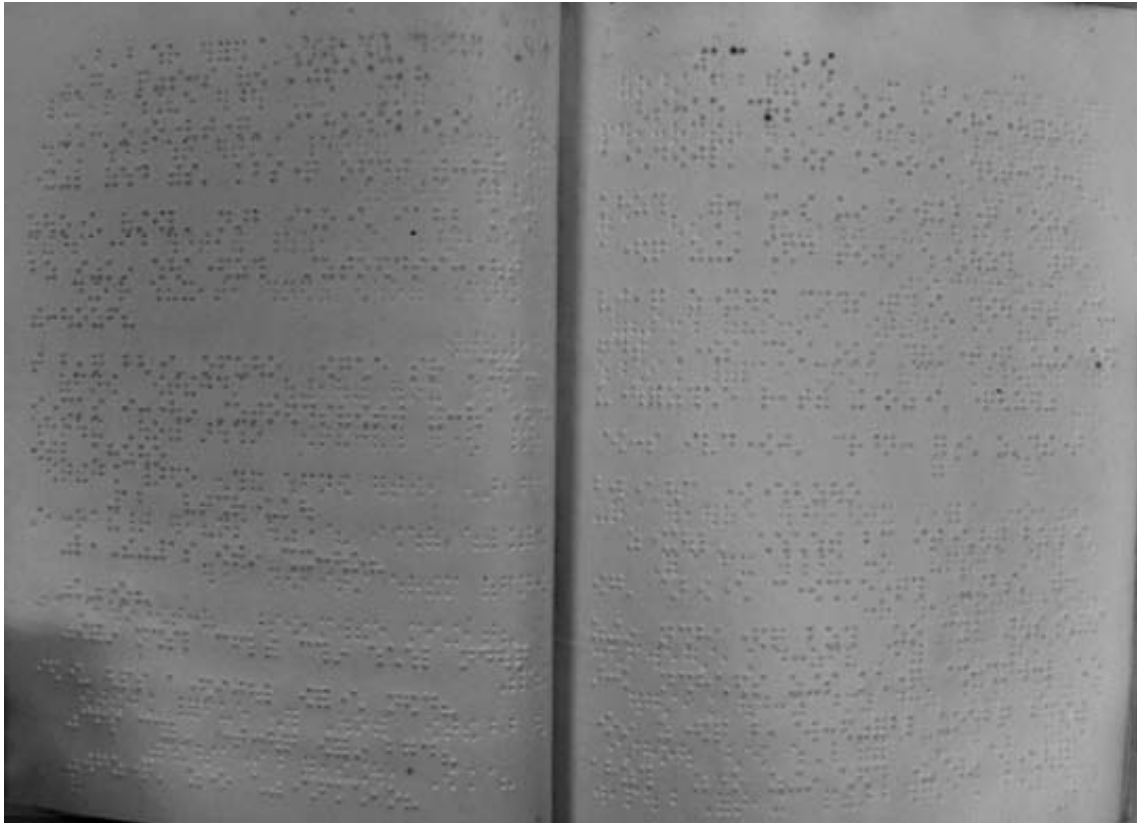
いえを つくって ひとびとを あつめて その いわいを
しました みことわ かみを といて おんなの すがたに
なり つるぎを ふところに かくして その いえの なかえ
おはりに なりました

おーせいの おんなどもに まじって いらっしやいます
と たけるわ みことを みつけて じぶんの そばえ
よびました

よが ぶけて ひとびとわ かえりました たけるも
さけによって ねむりました このとき みことわ ふところの
つるぎを だして たけるの むねを おつきに なりました
なみなみの ものなら 「あつ」と さげんで しにましょーが
たけるも くまその かしらだけ あって

「しばらく おまちください もーしたいことが あり
ます」

と いいました みことわ てを おゆるめに なりました
「あなたわ どなたで いらっしやいます」



「われわ てんのーの みこ やまおくな」

「あー ただびとでわ おありなさらなかつた
ぶんに まさる ものわ ないので たけると もーして おり
ましたが みやこにわ つよい おかたが おありに なつた
いま おんなを さしあげます やまとたけるのおーじと
もーしたまえ」

と いった いきが たえました これから のち やまと
おくなの おーじを やまとたけるのみことと もーしあげる
ことになりました

12 ひとくちばなし

「にっぽん1の ことを くふーした」

「なんだ」

「こめをつくの に うえにも うすを さかさにつるして
おけば きねの あげおろしに こめが つける」

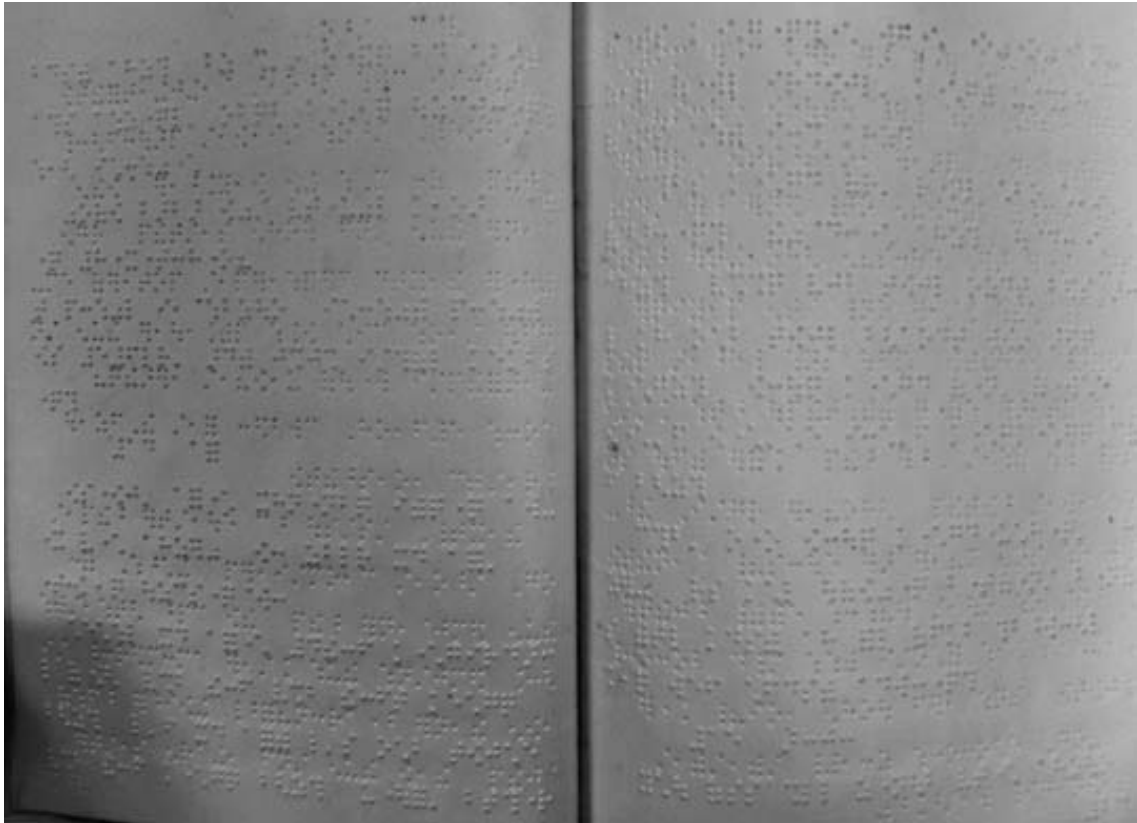
「うえの うすにわ どーして こめを いれる」

「それまでわ まだ かんがえなかつた」

13 かいに

きのーから うちの かいにが あがりはじめました
あがるころにわ かいこの からだが すきとーるよーに
なります もーくわの はを たべないで あたまを
あげて まゆを かける ところを さがします それを
ひろって まぶしえ うつすのですが すこしでも おく
れると かがの うらや たなの すみなどで まゆを かけ
はじめますから ちっとも ゆだんが できません
きよーの おひるごろわ うちぢゅー めが まわるほど
いそがしう ございました

まぶしにわ かさかさという おとがして いますが
これわ かいにが うごくからです はやいのわ もー
まゆをつくりあげて います また うすい よしのがみの
よーな つくりかけの まゆの なかで きゅーくつそーに から
だを まげて いっしょーけんめいに はたらいて いるのも
あります まだ まゆを かける ばしょを さがして



いるのも あります いま くわを たべて いる かいにも
あすの あさまでにわ たいてい あがって しまうそーです
さっき おかーさんが

「たみこ いよいよ こんや ひとばんに なったよ あれ
で 8ぶどーりだ」

と ねーさんにおっしゃいました おかーさんも ねーさんも
この 5・6にちわ よるも ろくろく おやすみに ならないの
です

14 あめ

このごろわ あめが ふりつづいて おもてで あそ
ぶ ひが ありません こー まいにち ふる あめわ
どーなって しまうのでしょー

からかさ に ふる あめが 4ほーえ ながれおちるよー
に みづわ ひくい ほーえ ひくい ほーえと ながれて
いきます にわえ ふる あめも にわの たかい ところから
ひくい ほーえ ながれて いきます はじめわ いとすぢ

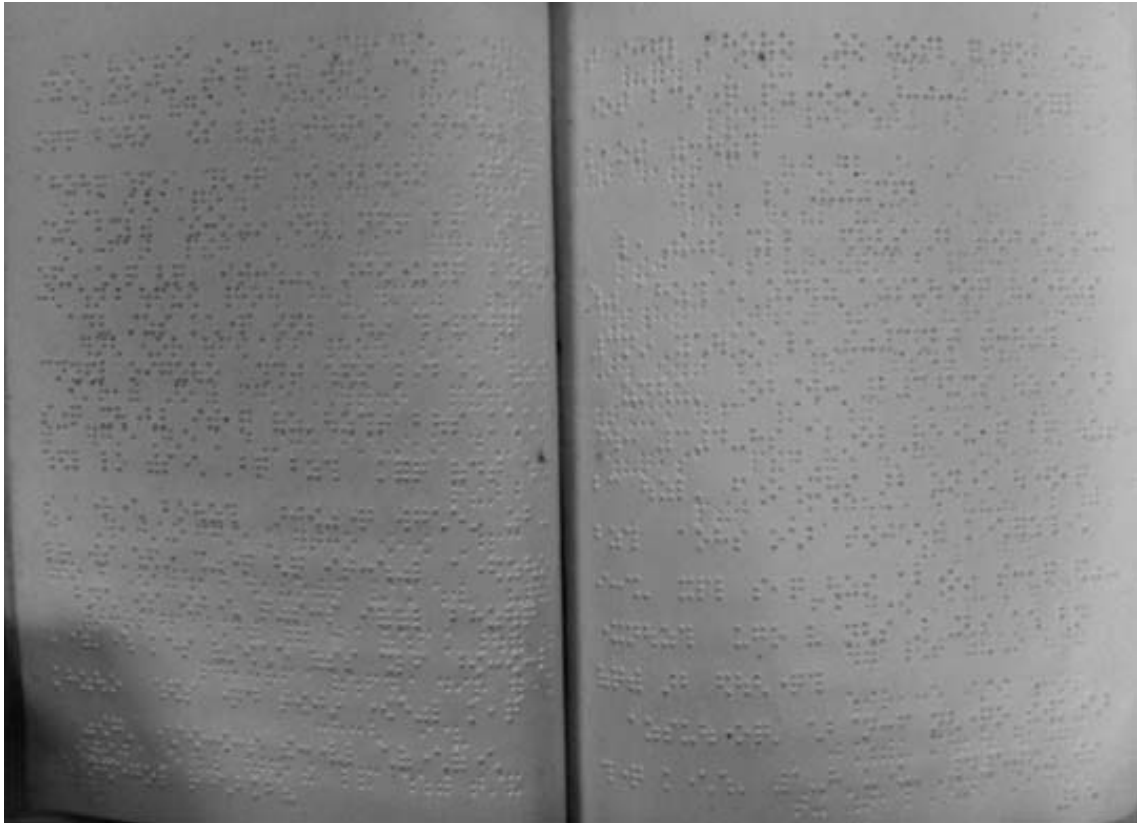
ほどの ながれですが それが だんだん あつ
まって みぞに おちるころにわ ながれも はやくなり
みづの かさも おーく なります

うすいの ながれる みちわ ちづに かいだ かわを
みるよーです ほんりゅーが あります しりゅーが
あります ひくくて ひろい ところに たまると いけの よー
になり たかい ところに いきあたると そこを よけて
ながれます こーして ながれる みづわ みぞから
こかわえ こかわから おーかわえ ながれながれて うみ
え いきます

うすいわ ただ こーして ながれるばかりでわ あり
ません ちの なかに しみこんで いどみづや いづみ
の もとになるのも あり めに みえない すいじょーきに
なって そらえ かえるのも あるそーです

15 よーろー

むかし みのの くにに まづしい ひとが ありました



やまから たきぎを とって きて それを うって くらしを
たてて いました この ひとに としとった おとーさんが
ありまして さけが すきで ございました それで
やまえ いくにも ひょーたんを こしに つけて いて かえりに
さけを かって きてわ おとーさんを よろこばせて いました
あるひ やまの なかで こけに あしを すべらせて
うつむけに たおれました すると さけの においが します
ので ふしぎに おもって みまわしますと いしの なかから
さけに にた ものが わいて います なめて みると さけ
の あちが いたします よろこんで それから まい
にち その さけを こんで きて おとーさんに あげました
いつか この ことが てんのーの おみみに いりまして
わざわざ ならの みやこから みのの くにえ ぎょーこーに
なりました さけの である ところを ごらんになって
「これわ おやこーこーの ほーびに かみが
さづけられたに ちがいない」

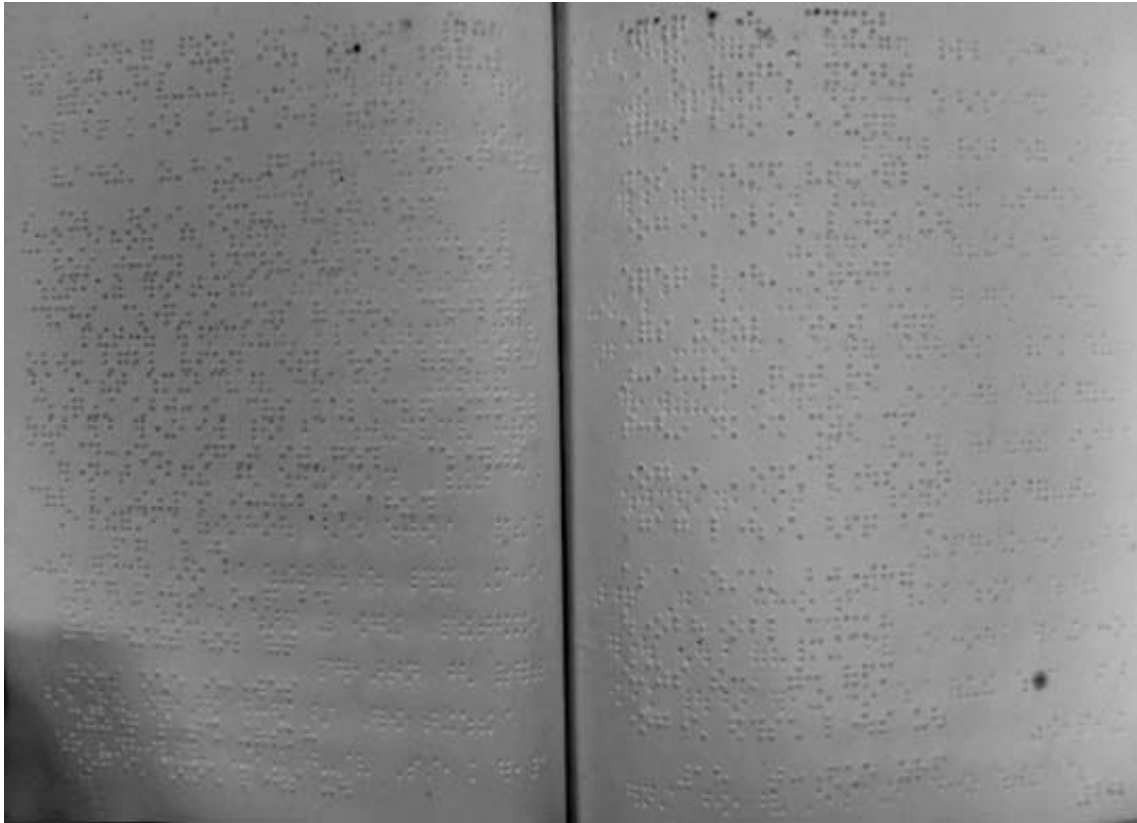
と おーせに なりました また まことに めでたい こと
だと いうので ねんごーを よーろーと おあらために
なつたと もーします

16 につぼん3けい

につぼんの くににわ けしきの よい ところが たく
さん ありますが まつしま あまのはしたて みやじまの
3つを むかしから につぼん3けいと もーします

まつしまわ たいしょー 2・3びやくの しまが かい
じょー 3・4りの あいだに ちらばって いて しまと
いう しまにわ えだぶりの よい まつが しげって
います あたりの たかい ところからも ながめますが
おーくわ ふねに のって しまの あいだを とーって けん
ぶつします はれた ひ つきの よ ゆきの あさ いつ
みても よい けしきです

あまのはしたてわ かいちゅーえ つきでた ほそながい
すで ながさ 1り はばわ 450けん その



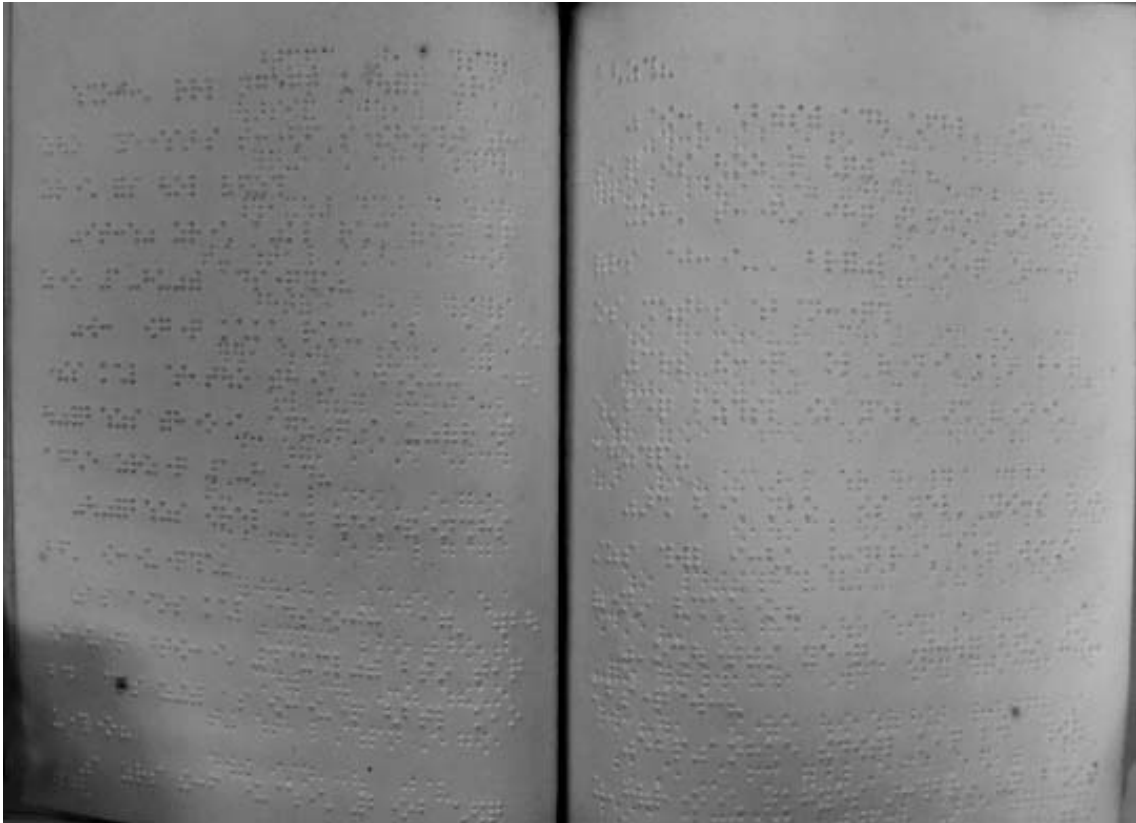
すの しろい すなの うえに あおい まつが いちめん
たつて いて ながい はしの よーに みえます
みやじまわ まわりが 7りも ある しまで しま
の やまにわ しかが たくさん すんで います
しまの とーほくに いくしまじんじゃが あります
しゅぬりの しゃでんが やまの みどりを うしろにして
たいそー きれい に みえます ことに しおの みちた ときわ
しゃでんや かいそーが うみの なかに いて おはなしに
ある りゅーぐーわ これかと おもわれます しゃぜん
の うみに につぼん1の おーとりのが あります

17 にじ

あれあれ にじが たつて いる
もりも こやまも したに みて
むこーの たから おーぞらの
くもまで とどく ゆみのなり
だれが かけたか にじの はし

さてさて にじわ うつくしい
あか き みどりや むらさきと
7つの いろを ならばせて
そらの えぎぬえ ひとふでに
だれが かけたか にじの はし
さてさて にじわ おもしろい
あめの はれまに ちょっと でて
よーありそーに てんと ちの
とーきを つなく くもの うえ
だれが わたるか にじの はし
あれあれ にじが きえて いく
あの あざやかな いろどりも
したいしたいに うすくなり
こやまの ほーわ もー みえぬ
だれが けすのか にじの はし

18 とーげから まちえ



さくたろーわ ちちに つれられて はじめて まちえ いき
ました むらざかいの とーげえ のほりますと もー
まちが めの したに みえます

「おとーさん まちが あんなに ちかく みえて いて
まだ 1りはんも あるのですか」

「そー これで なかなか ちかくわ ない あの たん
ぼの なかに ちょっとした もりがあるだろー
しんめいさまの もりだが あれまでが はんみちで
あれから まちまで 1り ある」

「しんめいさまの こちらにある しらかべづくりの
いえわ こーばです」

「あの あおたの なかに あるのだろー あれわ せいし
こーばで ちょこーが 4ひやくにんも いとを とって
いる うちの まゆも あの こーばで きいとに なった
はずだ」

「あ まちの ほーえ ばしゃが 2たい かけて

いきます」

「きょーわ ないものも あるし かえりにわ ばしゃに
のって この したまで きても よい」

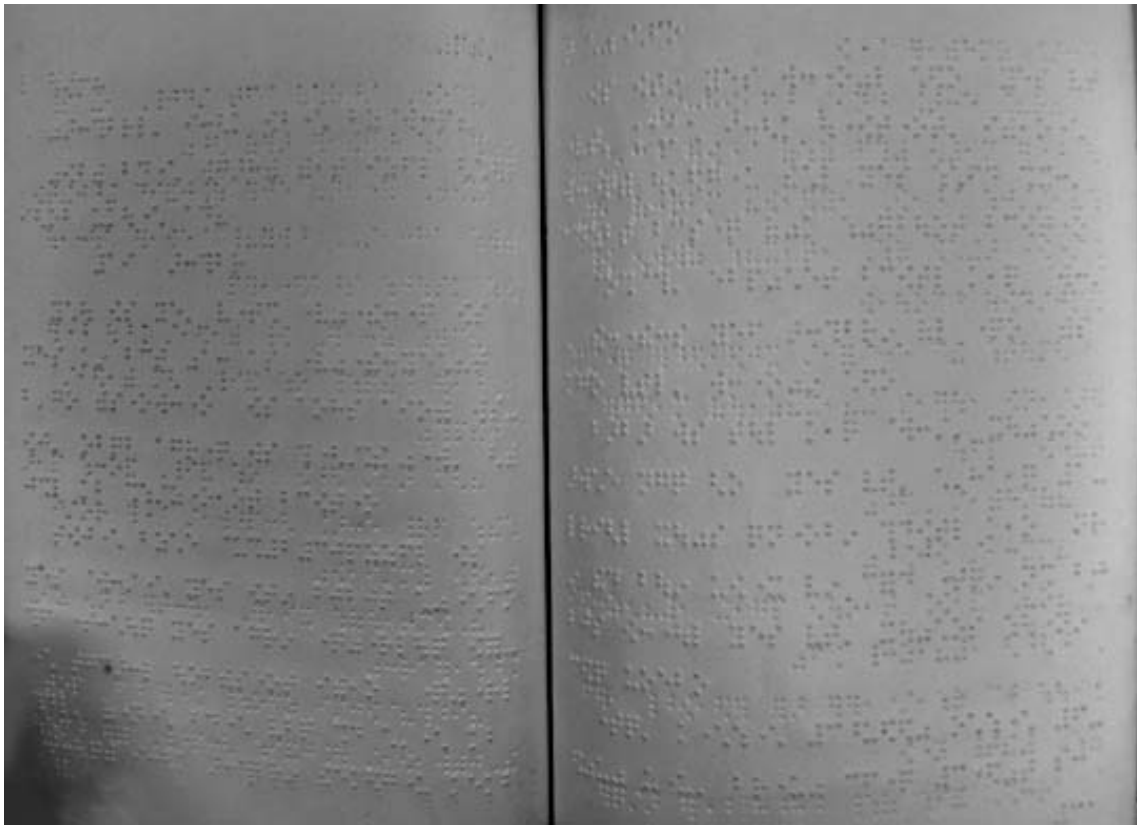
ふたりわ とーげを おりて となりむらえ はいりました
みちの りょーがわわ いちめんにあおたで ちょーど
たの くさとのり の さいちゅーで

「うちの ほーでわ たに みづがないと いて
さわいで いますのに この むらにわ よく みづが
ありますね」

「よく きが ついた この むらにわ むこーの すぎ
やまの すそに おーきな よーすいちが あって そこから
みづを ひくからだ」

「わたくしどもの むらでわ どーして いけを ほら
ないのでしょー」

「らいねんあたりから ほるこに なっている すこし
まわりみちだが となりむらの よーすいちを みて いくこと



に しょー」

「よーすいちにわ おーきな こいが いましょーね」

「こいも いるが それよりも もっと おまえに きかせて
おきたい はなしが ある」

19 よーすいち

むかし この むらわ ひどく びんぼーで この
むらの なを いうと 「あー あの びんぼーむらか」と
いわれた ものだそーだ この あたりの あおたも その
ころわ たいてい あれちで その すぎやまんぞわ きも
ろくに ない くさやまだったと いうことだ

ところが いまから ひやく2・30ね^{ママ}まえに この
むらの しょーやが むらの ことを いろいろと かんがえた
すえ どーかして むらの あれちを でんぢにして こめ
が とれるよーに したいものだ と おもった でんぢに
するにわ みづが いるが ひいて くる かわが ない
どーしても おーきな よーすいちを ほらなければ ならない

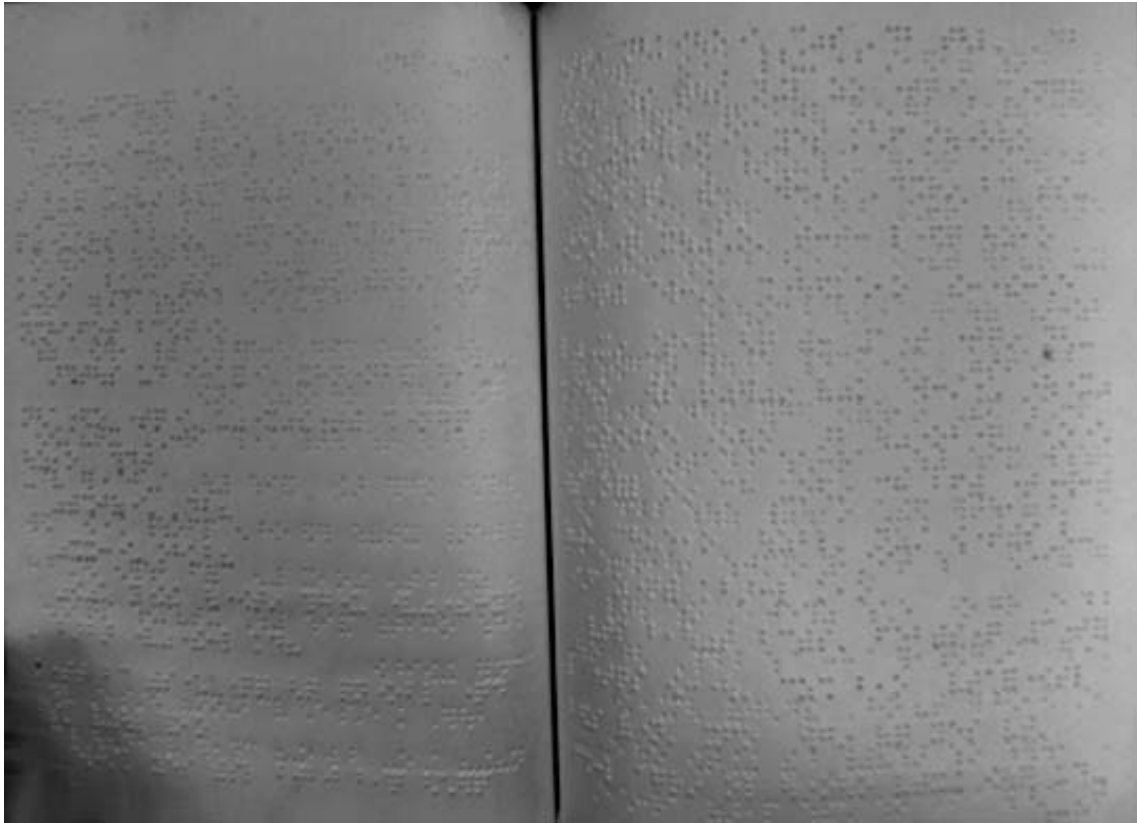
と かんがえた

この ことを むらの そーだんに かけた むらの ひと
びとわ なかなか おーきな しごとだとわ おもったが
そーでも しなければ ほかに むらの さかえる くふーわ
あるまいと いうので みんな さんせいしたと いうことだ

ちゃくしゅわ らいぬんからと いうことになって しょーや
わ ほーぼーの むらえ よーすいちを みに だた もの
なれた ひとにわ そーだんを かけた

いはいよ その としに なって しょーやわ ふしんかたを
よそから つれて きた むらの ひとわ かわりあって 1
にちおきに ふしんの てつだい^{ママ}を することになった つち
を ほる いしを はこぶ ひと うめる どてをつく いろ
いろの こーじに むらの ひとわ ふしんかたの さしづを
うけて はたらいた

どてわ ながさが 3び^{ママ}やけん たかさが 6
けんはん はばわ いちばん うえて 3げんという



おきな もくろみで あった

「そんな おきな いけが いるだろーか」

と いった くびを ひねる ものも あったと いうが 1
ねんばかりの あいだわ べつだん くじょも で
なかった きはやな ものわ じぶんの もちちを たに
つくりかえたと いうことだ

よくとしの はる おあめが ふりつづいて せつかく
つきあげた どてが はんぶんほども くづれて
しまった すると

「もくろみが わるい」

「くふーが たりない」

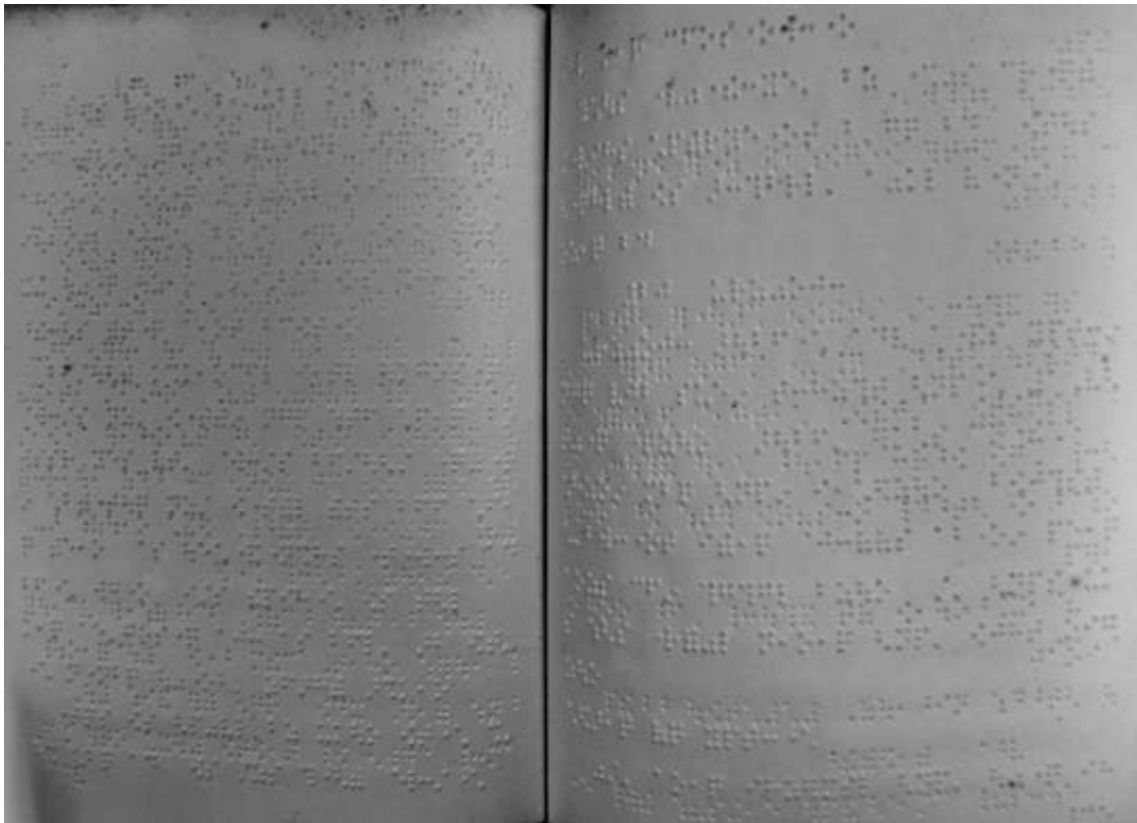
「こんな むだな しごとを すれば びんぼーむら
わ いよいよ びんぼーになる」
などと いう ものが でて きて てつだいに できる
ものわ ひましに へった

しょーやわ むらの ものに いろいろ いった きかせて

どてを つきなおしたが うんの わるい ときに わるい
もので この としの つゆに また どてが くづれて
いけの たまりみづが むらの なかえ おしだした

こーなつてわ もー しょーやの わるくちを いう もの
ばかりで ふしんかたわ とーとー にげて しまった
それでも しょーやわ くじけなかった ほーぼーから
にんぶを やとって きてもー 1ど どてを つき
なおした その ちんせんを みんな しょーやが じぶん
の ふところから だした よい しんたいで あったが
その ために たを うり はたけを うり いえも どぞーも
みんな うりはらった しまいにわ つまや こどもの き
がえ までも ないよーになった

ひとの いっしんと いうものわ えらいもので 3どめ
に どての こーじわ うまく いった ひとあめごとに
いけの みづわ ふえた それを みて むらの ひとわ
きゅーに あれちを たに したした ひとふゆ こして はる



にわ いけの みづが いっぱいになった 6がつの
たうえどきから 7がつ 8がつに かけて みづわ
ありあまった そこで 1ねんましに たが ふえたが
おしいことに しょーやわ いけが できあがった ときの
ふゆ しんで しまった なかいあいだの くらーが
びょーきの もとで あったと いうことだ

いえやしきも なくなったうえに おっとに しなれたので
しょーやの つまわ こどもをつれて さとえ かえって いた
そのち むらの ひとわ しょーやの いえやしきや でんぢ
を かいもどして つまや こどもに もとの いええ かえっ
て もらった あの しらかべづくりの どぞーの ある
いえが それだ おやの ほねをりが この ときに
なって あらわれたので あるー あの いえにわ よい こと
が つづいて しんだいゆ まえよりも よくなった

どての この きねんひに いま はなした ことが
くわしく かいて ある この やまの すぎも しょーやが

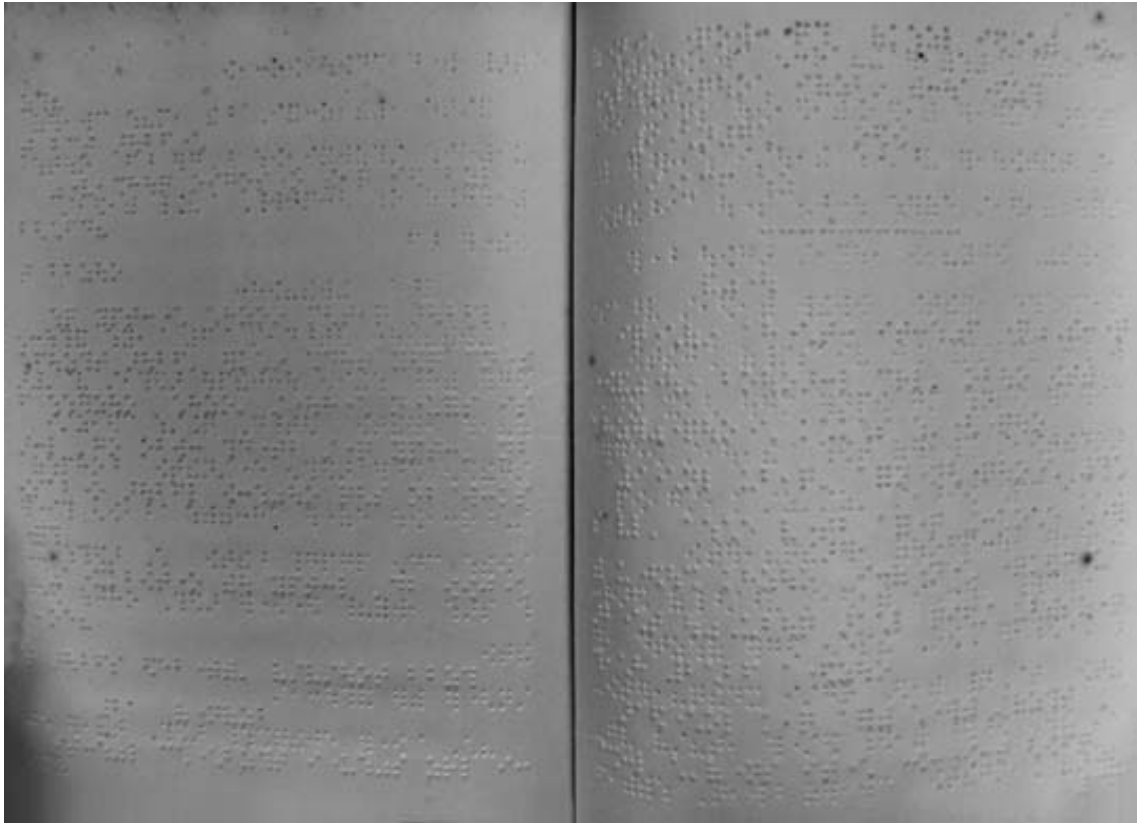
さきに たって うえたのだそーだ

むかしの びんぼーむらわ いま ぐんの うちでも
ゆびおりの かねもちむらだと いわれて いる ことしの
ひでりにも この よーすいちにわ あんなに みづが
たまっている

20 はちまんたろー

はちまんたろー よしいえが あるひ あべの むねとーを
つれて ひろい のはらを とーりますと きつねが 1びき
とんで でした よしいえわ せなかの うつぼから
かりまたを めいて きつねを おっかけました いころすのも
かわいそーだと おもって りょーみみの あいだを ねらって
あたまの うえを すれすれにk しました やわ きつねの はな
の さきの ちめんにつつたって きつねわ ころりと たお
れました かけよって みて むねとーが

「やわ あたって おりませぬのに きつねわ しんで おり

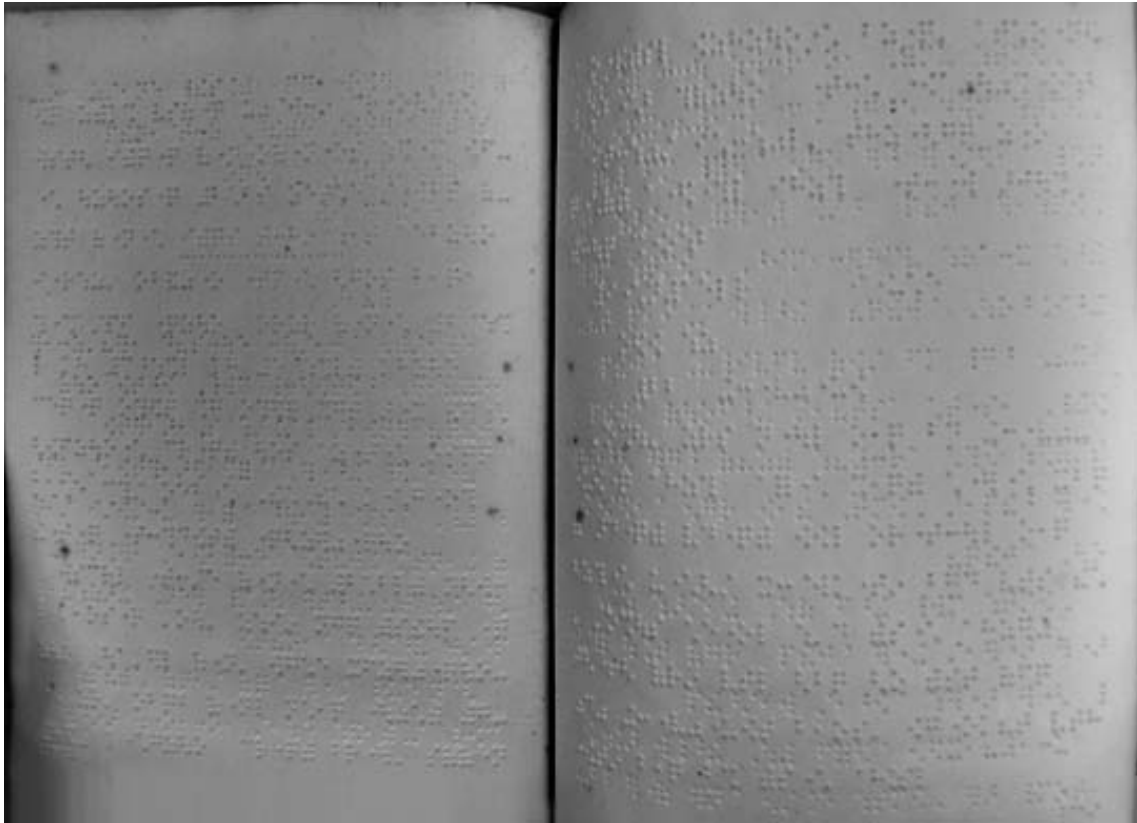


ます」
と いうと よしいえが
「びっくりして たおれたのだ ほって おけ いまに
いきかえる」
と いました
さて むねとーが かりまたを ぬきとって よしいえに
かえしますと よしいえわ せなかを くるりと むけて うつぼ
え ささせました かりまたわ やじりが つばめのおの
よーに われた たいそー するどい やで むねとーわ つい
このあいだ よしいえに こーさんした てきの たいしょーなの
です
「あぶないことだ もし むねとーに わるい ところが
あったら」
と よしいえの けらいどもわ ひやひやしたと います
21 みづみまい
おとーさんに うかがいますと おばーさんの まちに おー

みづが でしたそーです みなさまに おけがも ご
ざいませんでしたか おみまいを もーしあげます
9がつ7か
おばうえ さま

へんじ

おてがみを ありがとー おとーさんえ でんぽーで
ごへんじを いたしたよーに うちにわ たいした ことも
ありませんでしたが なかなかの さわぎでした
9がつに はいってわ あめつづきでしたが 4か
の ひにわ あさから ひどい あめで ゆーかたから かぜ
も はずしく なりました おーみづが でなければ
よい がと しんぱいして よなかに ておけや はきものまで
すっかり 2かいえ あげました
よあけがたに なって あめも かぜも やみますと
きゅーに かわみづの おとが ごーごーと きこえて



きて まもなく ひのみで はんしょーを うちだしました
そのとき おもてで みづだみづだと さけぶ こえ
が しましたので 2かいの まどから のぞいて み
ますと みづが おもての とーりを さっと あらいました
おちさんわ たいへんだ どてが きれたと いうて
すぐ やねえ でした たちまち みづが 2しゃく
になり 3じゃくになり 5しゃくにも なりました
うらてで たすけて くれ たすけて くれと よぶ こえが
きこえましたが うちでも したの あまどが たおれて
なかから うすや たらいが ぼかぼか ながれたす
ほどで どーすることも できませんでした

そのうちに どーやら みづが 2かいにも つきそー
になったので わたくしわ まさおをつれて ものほしえ で
ました しあわせに みづわ それから ふえませんでした
が まちわ たいてい みづにつかって じんかも 7
8けん ながれました うちでも いちじわ のみみづ

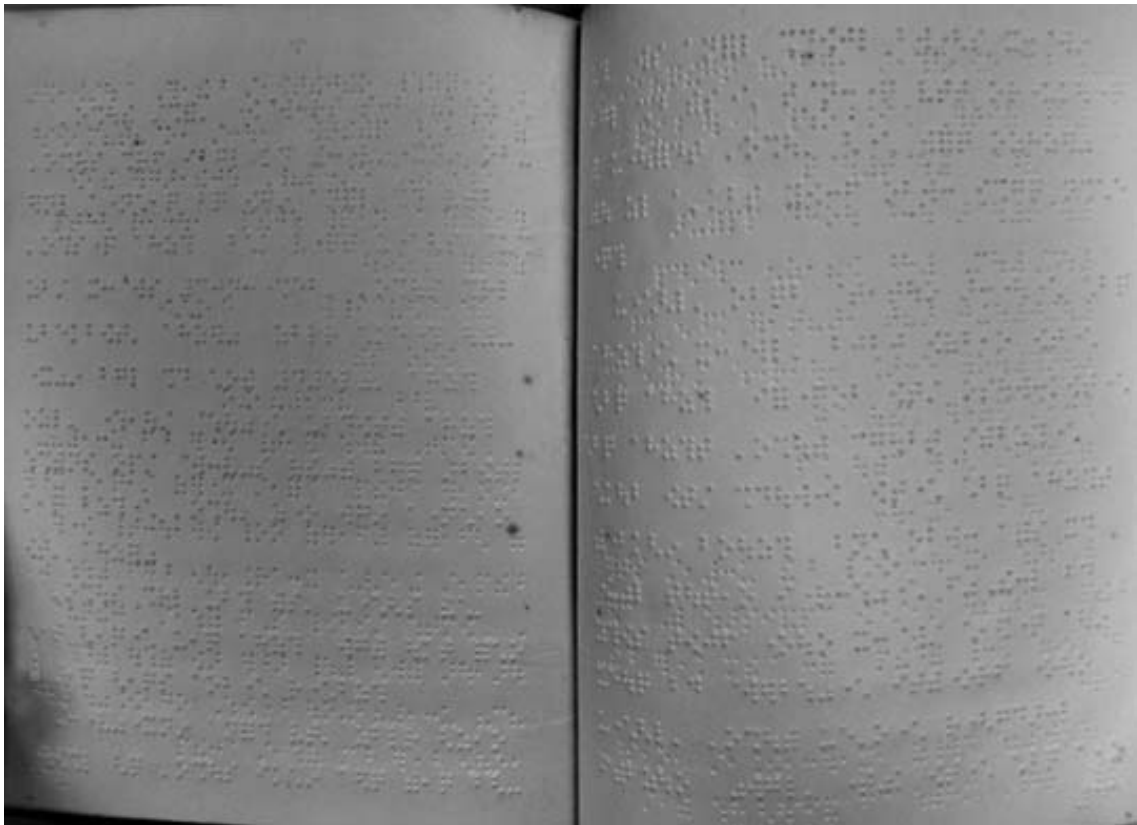
や たべものに こまりましたが いまでわ あとかたづけ
も たいがい すみました どーか ごあんしんください
おとーさんや おかーさんにわ とりまぎれて まだ
てがみも あげずに おります どーぞ よろしく
もーして ください

9がつ15にち おばから

たけこ さま

22 ゆーびんばこ

わたくしわ まちの つじに たって いる ゆーびん
ばこで あります あめが ふっても かぜが ふいて
も よるでも ひるでも ここに たちどーしに たって
いますが はかきや ふーしょなどを 入れる ひとの ほか
わ わたくしの からだに さわる ものが ありません
ときどき みちを ひとに きいて きた ものと みえて
「うん ゆーびんばこと いったのわ これだな」と ひとり
ごとを いうて いく ものが あります



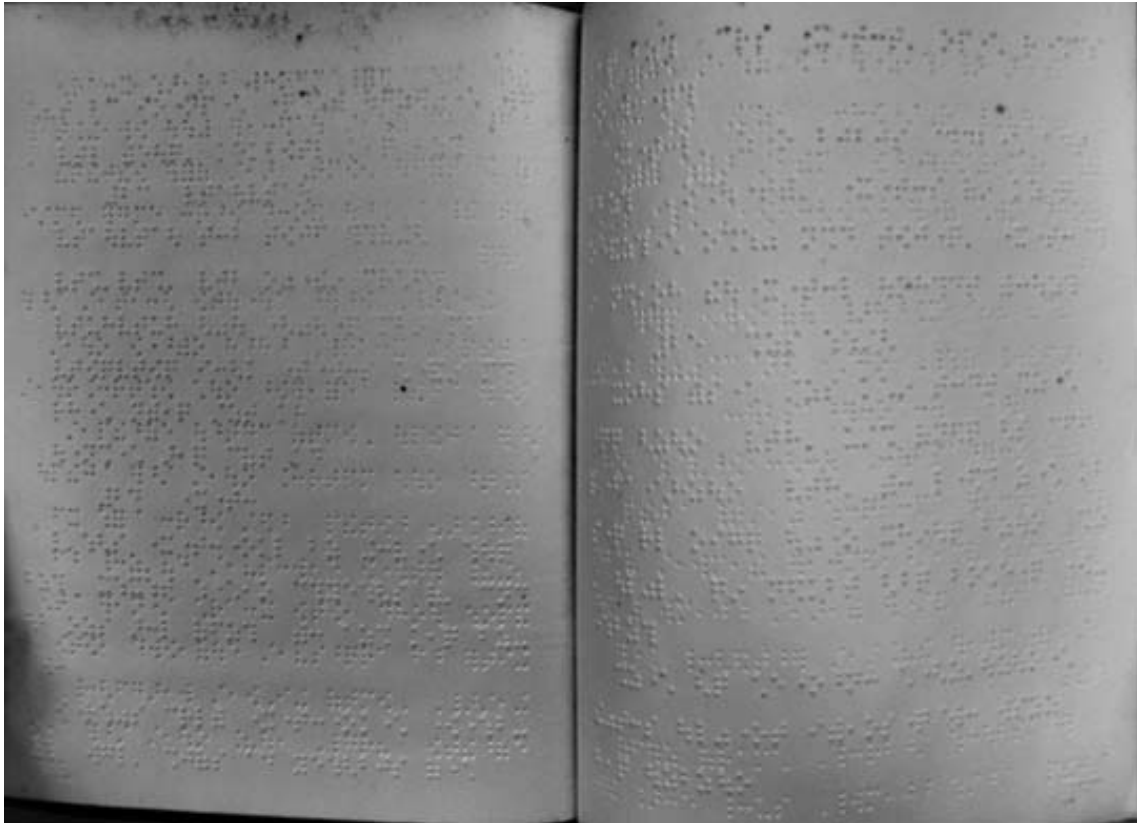
わたくしの やくめわ ごしょーちの とーり みなさまが
わたくしの くちえ おいれに なる ゆーびんぶつを たい
せつに あづかって いて これを あつめに くる ひとに
わたすので あります いかな ひでも はがきの ひやく
まいや ふーしょの 30つーぐらいわ わたくしの くちに
はいらないことわ ありません まいにち かならず しん
ぶんを いれに くる かたも 4・5にんわ あります
たまにわ ざっしや しゃしんが はいることも あります
さくもつ の たねや しょーひんの みほんも いれて よいこと
なっていますが わたくしわ まだ それを あづかった
ことわ ありません

わたくしの くちにはいる ものわ はがきの ほかわ
きつと きつてが はって あります それも しなと めかた
によって きつての あたいが ちがいます

ゆーびんぶつを あつめる ひとわ まいにち きまった
じこくに きて わたくしの おなかを あけて もって いき

ます その あつめに くるころに いそぎの ふーしょを
いれに くる ものが とちゆーで ひとと たちばなしで
も はじめると わたくしわ きが もめて たまりません
もし まに あわぬいと むこーえ たいそー おくれて つくから
です

はがきにわ たいてい ちょっとした よーじが かい
て ありますが ふーしょにわ いろいろ こみいった ことが
かいて あります おめでたい ことや たのしそーなことが
かいて ありますと わたくしも うれしいと おもいますが
かなしい ことや くるしそーな ことが かいて ありますと
もらいなきを いたします いつか たいそー あめの ふる
ばんに としとつた おぢーさんが えんぽーに いる
むすこの ところえ だした ふーしょや かけで あしを
はらして いる しょせいさんが おともだちえ だした
はがきにわ わたくしも はらわたが ちぎれるよーに
おもいました 「それにわ どんな ことが かいて あった



か」という おたづねが できるかも しれませんが それ
わ ひとに もらしてわ ならないことになって います

23 ひとあしひとあし

ひとあしひとあし とーい ところえ すすみゆき
ひとくわひとくわ ひろい たんぼを うちかえす
ひとはりひとはり きんし ぎんしで ぬいを ぬい
ひとこてひとこて おーきな どぞーの かべを ぬる
ちりが つもって やまと なり
しづくが よって うみと なる

24 ぶどー

にわさきの ぶどーだなに いま ゆーひが さして
います ぶさぶさと さがった うすむらさきの みわ うつく
しい たまの よーに みえます もー あまく なって いま
しよー

おぢさんの うちにも ぶどーだなが ござい
ます それにわ くらみの ある むらさきいろの みが

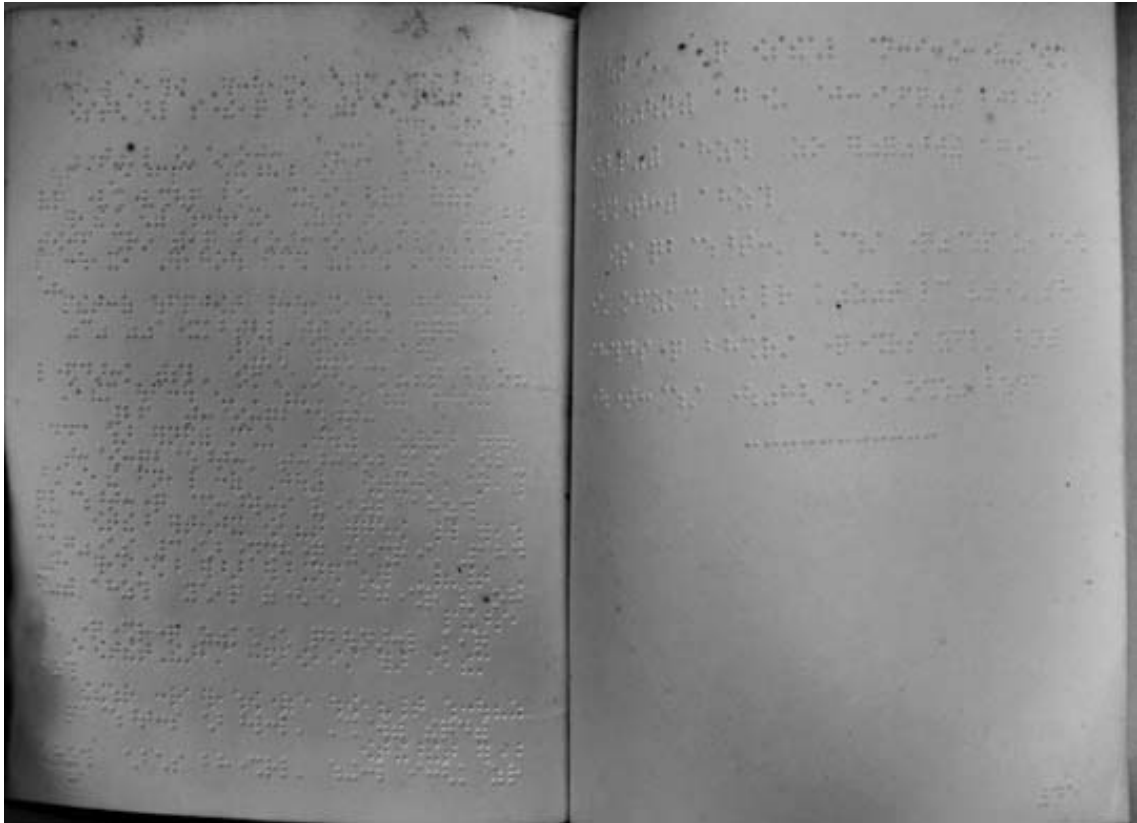
なっています うちの ぶどーとわ たねが ちがうの
だ そーです

ぶどーにわ まだ いろいろの しゆるいが あると
いいます わたくしどもわ ぶどーの みを なまで
たべますが たくさん つくる ところでわ ぶどーしゆ
をつくったり ほしぶどーに したりすると もーします

25 くまの ささやき

ふたりの ものが やまの なかを とーると くまが
でて きました ひとりわ はやく みつけて きの うええ
にげあがりました ひとりわ もー にげる まが ない
ので ちに たおれて しんだ ふりを して いました くま
わ しにんにわ てを つけないと きいて いたからで ご
ざいます

くまが きて からだぢゆー かぎまわしましたが
ほんとーの しにんだと おもったのでしよー そのまま
いって しまいました



このとき きに のぼって いた ものが おりて きて
「どんなに こわかったろー ぼくわ きの うえから
みて びくびくして いた くまが きみの みみの
ところえ くちを もって いったよーだが なにか いったの
か」

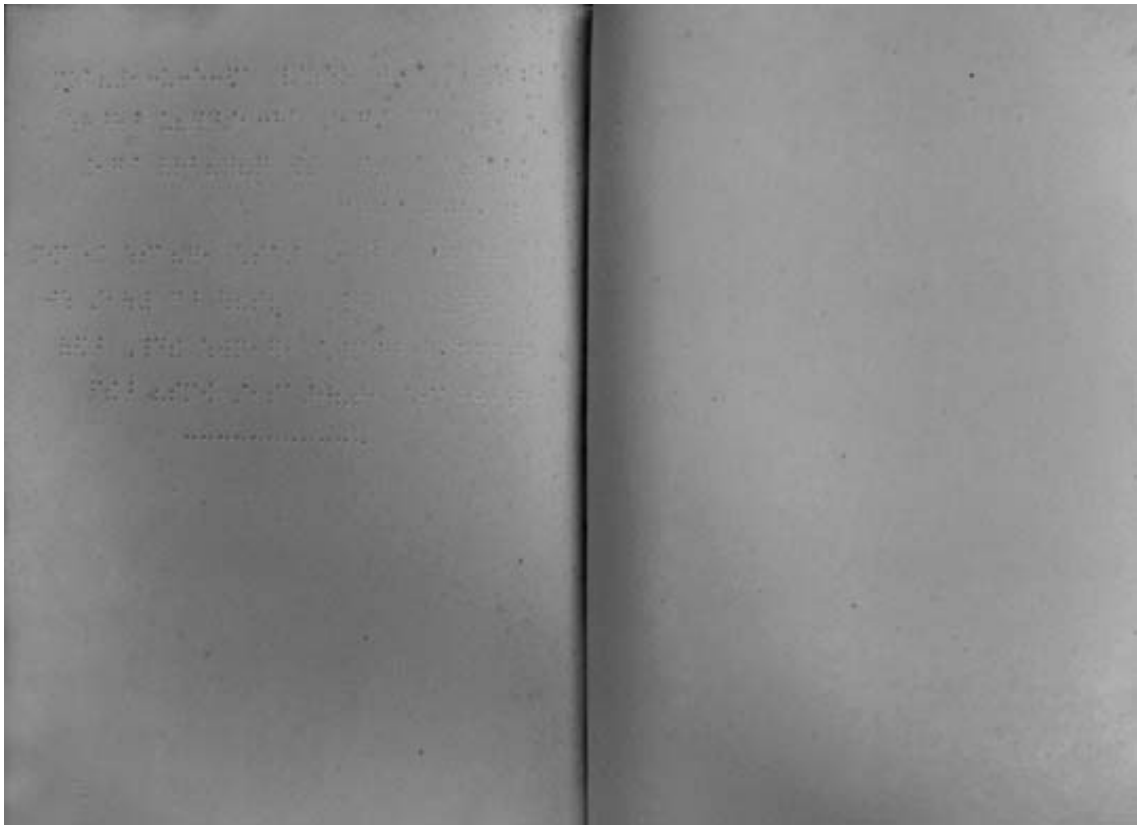
「うん 『あぶないときに ともだちを すてて
にげるよーな ものにわ これから つきあうな』と いった」

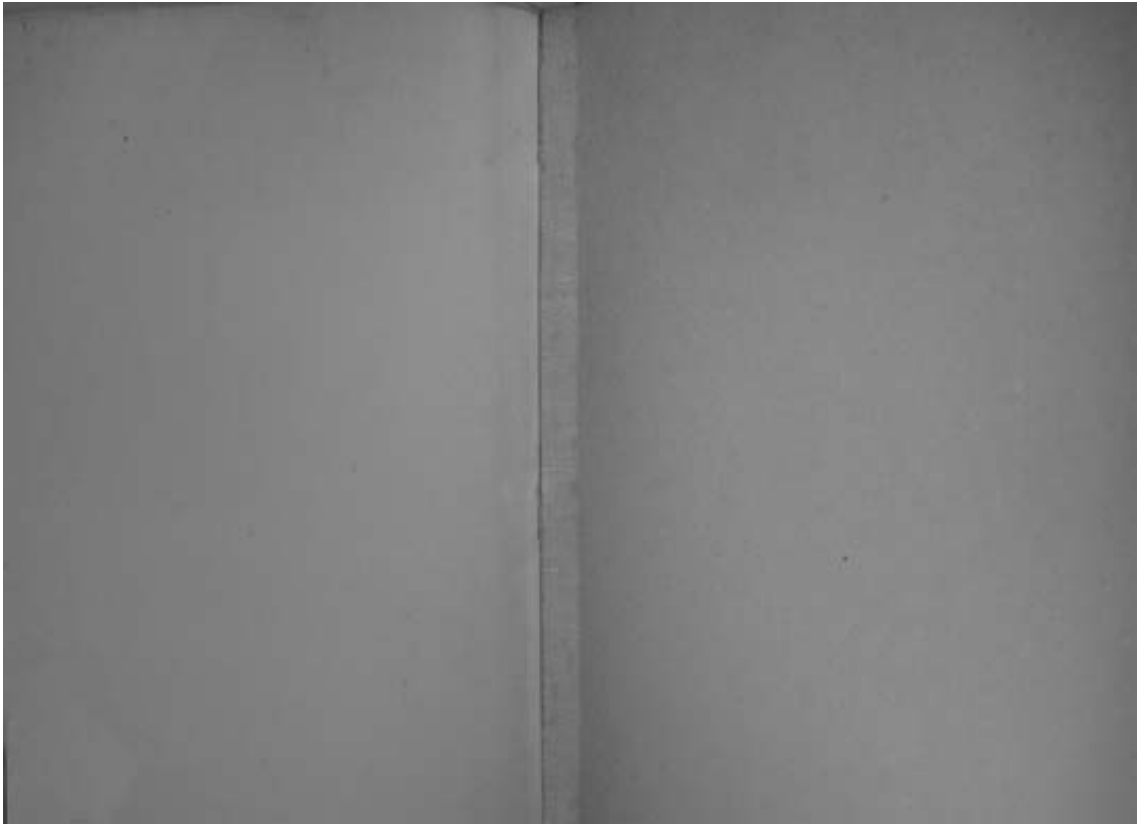
26 とーきよーていしやぢよー

とーきよーていしやぢよーわ とーよーだい11の たい
ていしやぢよーで きゅーじよーの ひがしに あります
あかれんがの 3がいづくりで まぐちが 184
けんも あります むかって みぎが いりぐち ひだり
が でぐちで まんなかが ていしつよーに なって います
ていしやぢよーの かいじよーにわ やくしよも ほてるも
あります かいゆの いりぐちにわ さゆーに おーきな まち

あいしつが あって このほかに ちゅーおーゆーびんきよく
の ぶんしつも あれば りよーがえてんや いろいろの
ばいてんも あります また せんめんじよも あれば
しょくどーも あります

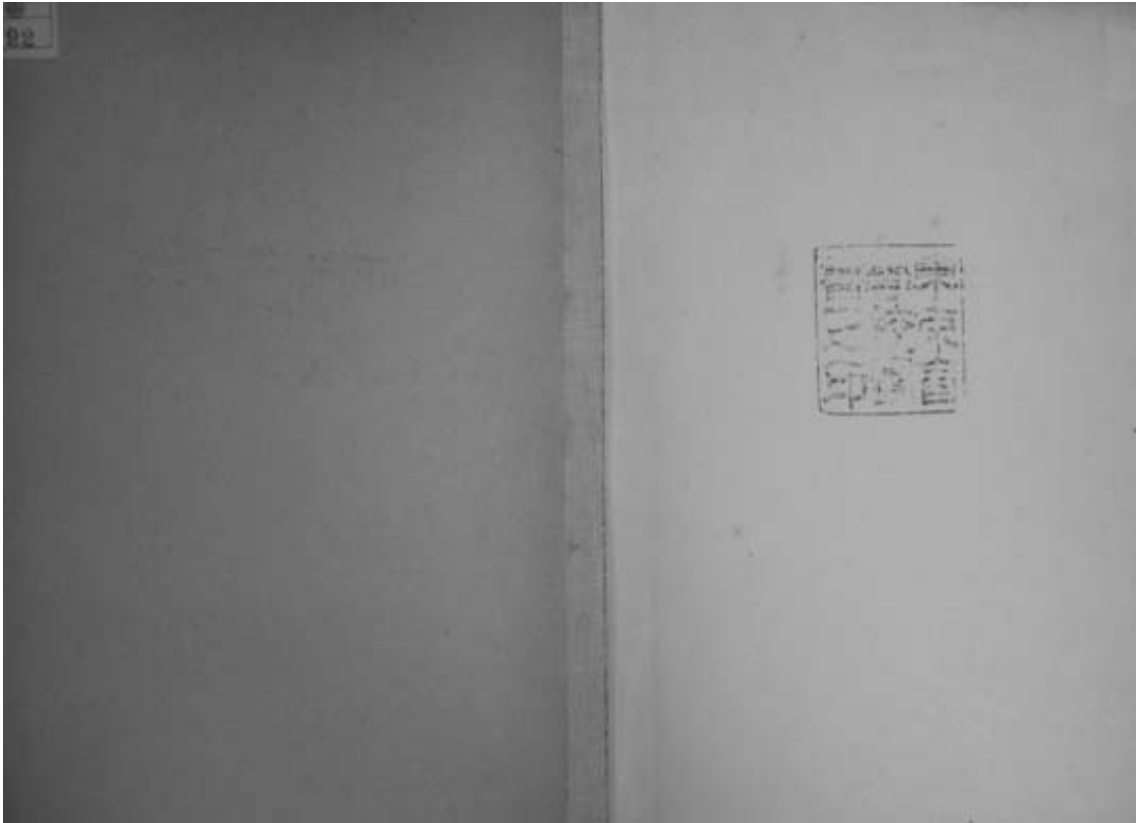
この ていしやじよーわ きしやや でんしやの はつちやく
が たえまなく まいにち なんまんという ひとが のり
おりするので いりぐちや でぐちの まえにわ いつも
じどーしやや じんりきしやが たくさん います

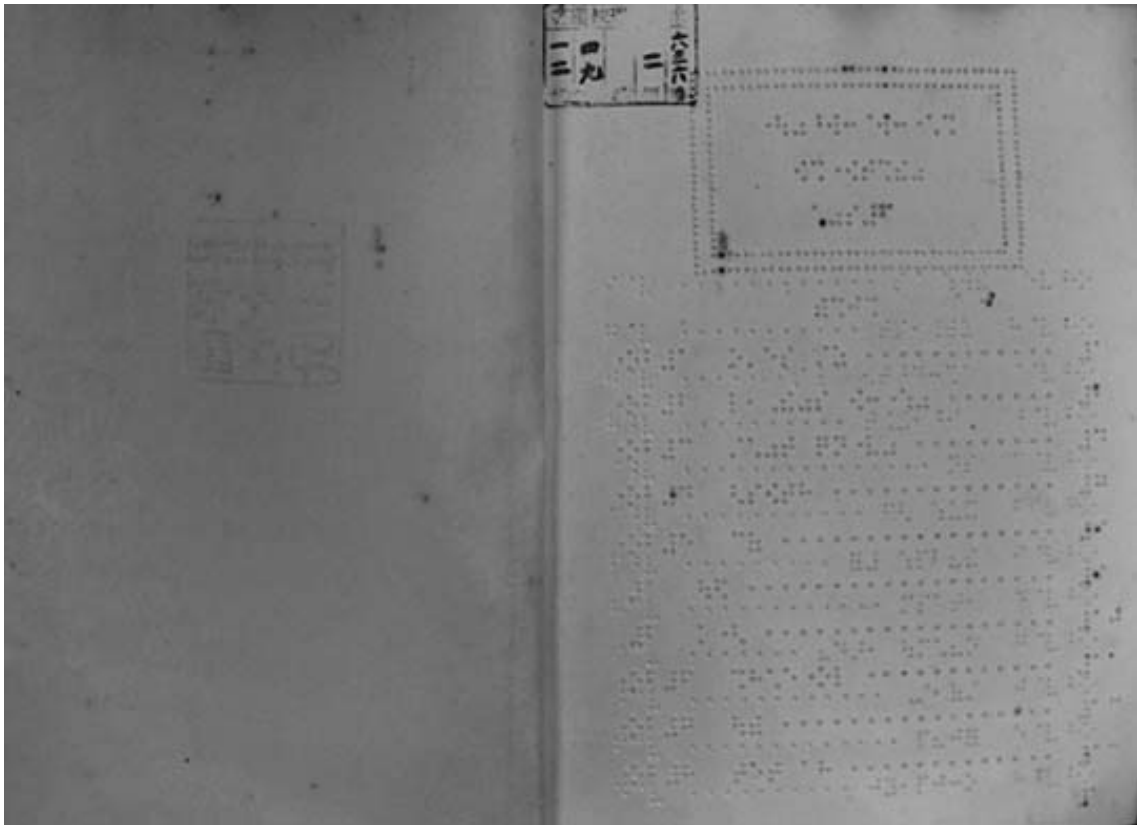








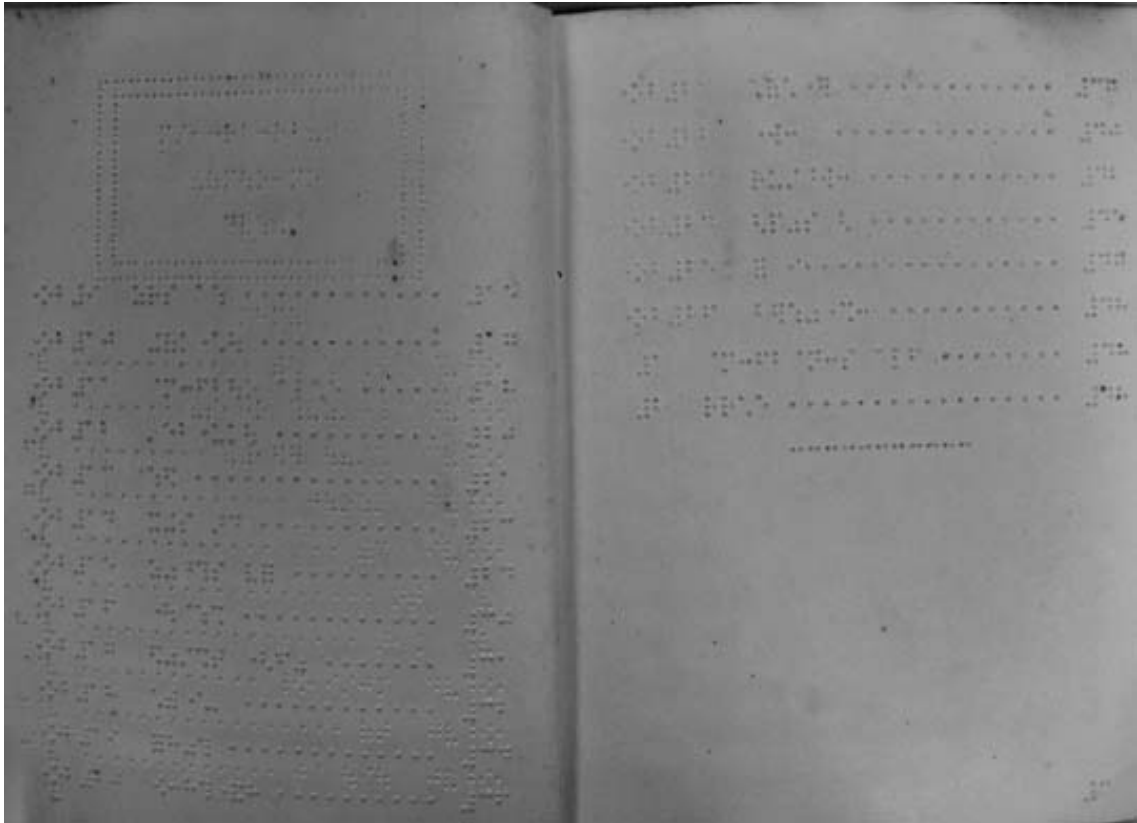




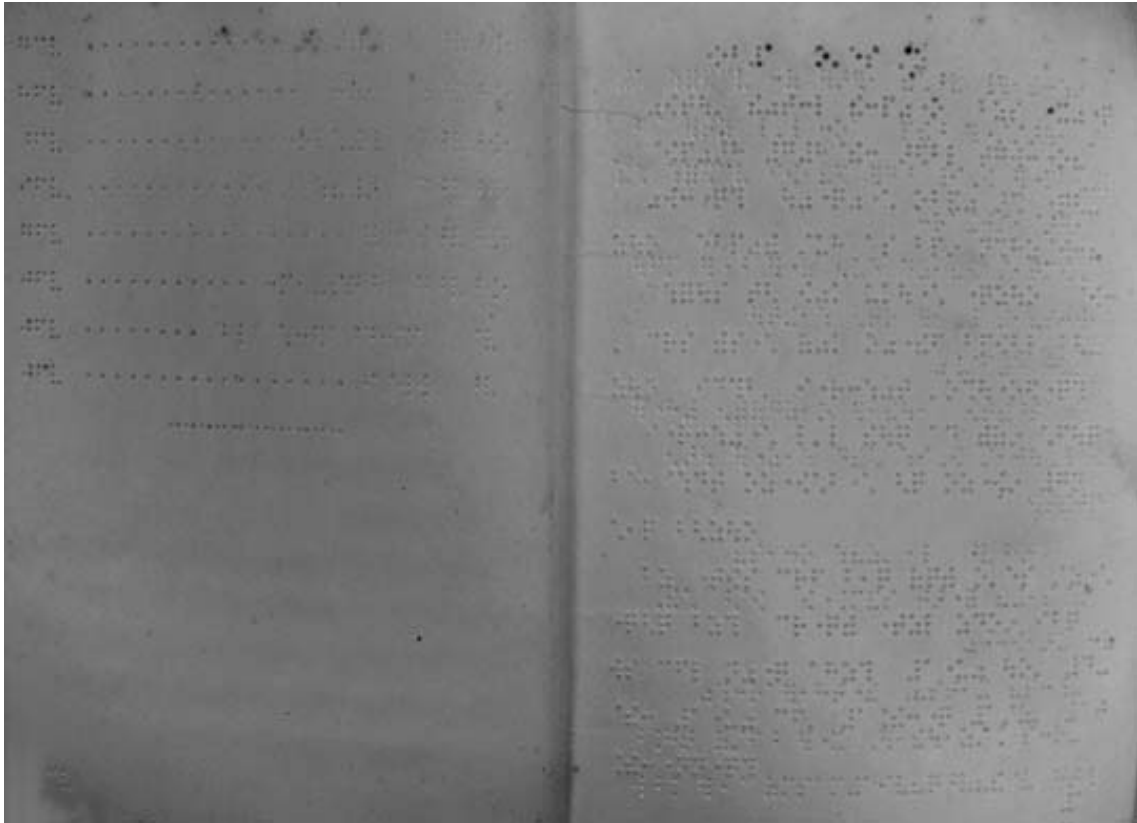
じんじょーしょーがく
こくごとくほん
かんの6

もくろく

だい1	たわらの やま	1
だい2	にっぽんの こーざん	2
だい3	やかんと てつびん	4
だい4	きのことり	7
だい5	うみ	9
1	しけ	9
2	なぎ	10
だい6	くりからだに	11
だい7	しも	13
だい8	とらと あり	13



だい9	まちの あさ	15	だい21	かみかぜ	37
だい10	ゆみながし	17	だい22	ぞー	40
だい11	にゅーえいした あにから	...	18	だい23	ちはやじょー	42
だい12	わらいばなし	20	だい24	きねんの き	45
だい13	さけ	21	だい25	め	47
だい14	ふゆの よる	23	だい26	いせさんぐー	8
だい15	まんじゅーの ひめ	24	1	にゅーえいちゅーの あにえ	...	48
だい16	じしゃく	30	2	ちちから	48
だい17	けんやくと ぎえん	31		-----		
だい18	かもがわ	32				
だい19	めりんす	34				
だい20	こーりすべり	36				



だい1 たわらの やま

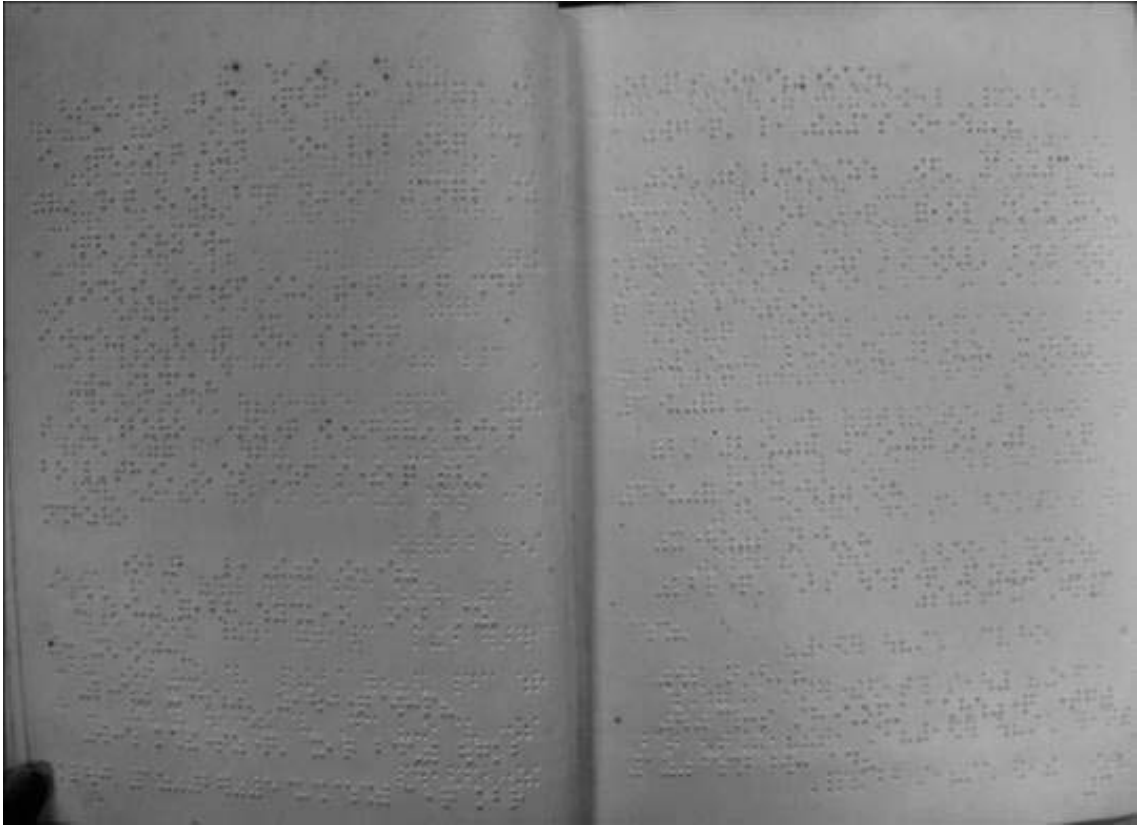
「ことしわ ほんとーに ほーねんだ いまの ぶん
で わ きよねんより 78ひよー よけいに とれそーだ」

「そーです しんでんが たいへん よく でき
ました らいぬんも やはり あの いぬを つくりましょー」

あさめしの とき こんな はなしが でした きよー
わ うちの ものが みんな たんぼえ いぬこきに いき
ました おるすいわ おぢーさんと わたくしだけです

おぢーさんが にわに ほして ある もみを かえして
いらっしゃると たまごかきが きて たまごを7つ
かって きました

いま どのの うちえ いって みても たわらの やまが
できて います うちでも どまに まるたを おいて
その うえに つんで あります 1ばん したわ 4
ひよー 1ばん うえわ 1びよーで 1やまわ 10
びよーづつです



きの一までに 2やま できて ほー 3つめの やま
が できかかって います きよー にわに ほして ある
もみを すって たわらに いれて つんだら 3つめの やま
わ できあがりましょー

わたくしが たんぽえ おゆを もって いって くと
おぢーさんが にわで こしを のぼして

「もー おひるかぬ」
と おっしゃいました どまで こぼれもみを ひろって
いた にわとりが たわらの やまえ のぼって ときを
つくりました

だい2 にっぼんの こーざん

「あさぼん めっきり さむくなって たかい やまわ
もー ゆきだろー」

「こーさん ふじさんわ まっしろでしよーね」

「そーさ なかほどまでわ ふって いるかも しれない
なにしろ 1まん2せん5ひゃくしゃくも あって ないち

だい1の こーざんだから」

「それでわ にっぼん1の こーざんわ」

「たいわんの にーたかやまさ これわ 1まん3せん
しゃくから ある たいわんでわ めったに ゆきが ふら
ないそーだが この やまの いただきにわ いつも つもっ
ていると いうことだ」

「1ばんわ にーたかやま 2ばんわ ふじさん
3ばんめわ」

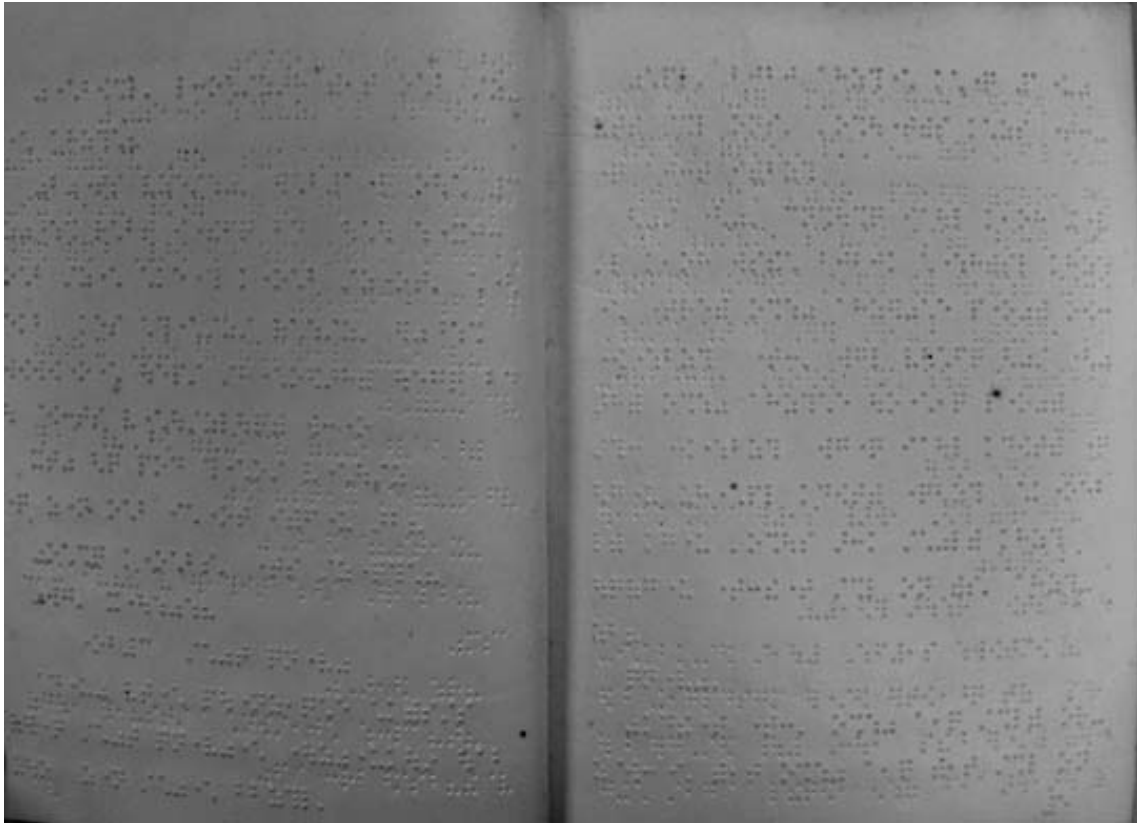
みいや 2ばんも 3ばんも たいわんに あって
4ばんめが ふじさんだ」

「ふじさんの つぎわ」

「ないちでわ かもの しらねで 1まん5せん
しゃく」

「その つぎわ」

「しんしゅーの やりがたけや あかしさんで どれも
1まんじやくいじよー ある」



「かいこくにわ に一たかやまより もっと たかい やま
がありますか」

「いんどの ひまらやさんわ せかい1で たしか 3
まんじゃく ちかいとおぼえて いる しかし さぶろー
たかい やまが かならず なたかい やまだとわ かぎ
らない ならの かすがやまや みかさやまわ せんじゃく
そこそこだが しらねや やりがたけよりも しられて いる
し きょーとの ひがしやまにしても そーだ

ふとん きて ねたる すがたや ひがしやま
で まづ たかい おかだと おもえば よい」

「たかくて なたかものわ どの やまですか」

「それわ ふじさんさ」

だい3 やかんと てつびん

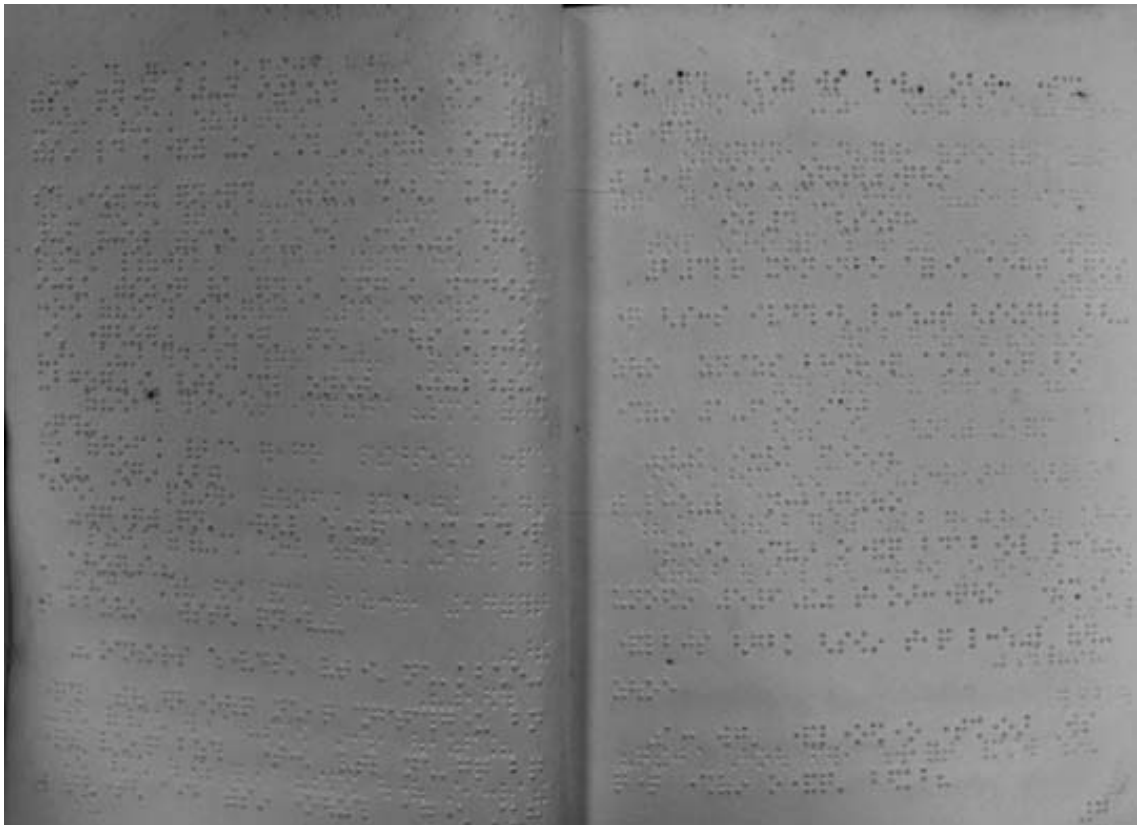
あるばん ひとが ねしづまってから かなものやの
みせで やかんと てつびんが じまんばなしを しあい
ました まづ やかんに いいますにわ

「かねこわ いろいろ ありますが なかで 1ばん
ひとの やくに たつのわ わたくしどもの なかまの どー
であるーとおもいます

きんや ぎんわ うつくしくて おあしに なったり ゆび
ねに なったり そのほか いろいろな かざりものになります
が どちらも たくさん ありませんから ねだんも たこー
ございます どーわ それに ひきかえて きんや ぎん
よりも たくさん ありますから したがって ねだんも
やすー ございます それで おあしに なることも で
きれば はりがねに なることも できます かなだら
いにも なれば わたくしの よーな やかんにも なります
してみれば どーほど やくに たつ ものわ あります
まい」

てつびんわ

「なるほど どーわ たくさん あって やくにも たち
ましよーが もっと たくさん あって もっと やくに たつ



ものわ てつで あるーとおもいます めしを たく かまも
ものを にる なべも ゆを わかす わたくしも わたくしの
のる ごとも てつです そのほか くぎや はりの
よーな ちいさい ものから きかんしゃ ぐんかんの よーな
おーきな ものまで みな てつが なければ つくることが
できません いまでわ てつわ おあしの なかまにわ
はいれませんが ひとの やくに たつことわ どーいじよー
です」

やかんわ これを きいて

「それでも てつわ ちきに さびて あかく なるで
わ ありませんか」

と いいました そのとき てつびんわ

「わたくしたちの さびるのわ ひとが つかわないから
です もし せいでして つかって くれさえすれば いつ
でも ひかって います どーわ ひとに つかわれて いて
も ときどき あおい ものを だします あれが やはり

さびです しかも その さびわ たいそー どくな
ものです」

と いった なかなか まけませんでした

だい4 きのことり

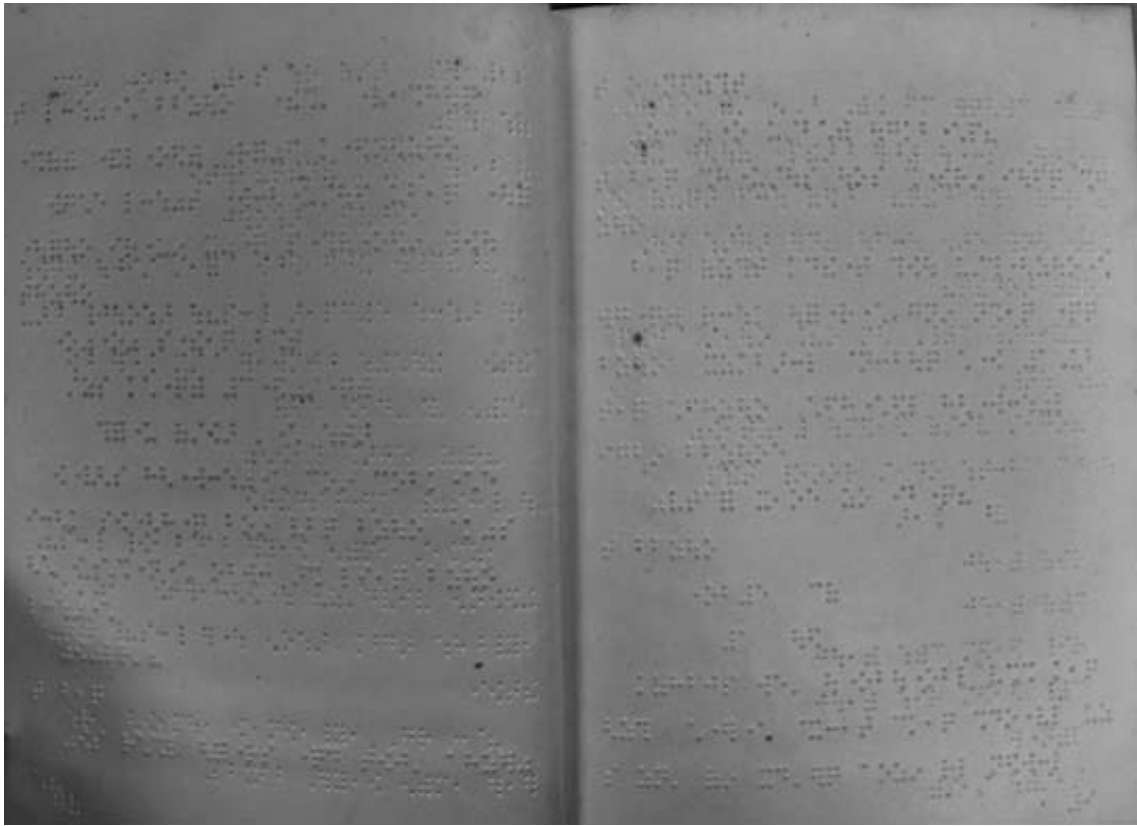
23にち ふりつづいた あめが からりと はれたの
で きのーのおひるすぎ にーさんと きのことりに いき
ました まつやまの いくちで あかく なって いた
ぐみを 1えだ おると

「そんな おーきな えだを」

と にーさんに ちゅーいされました

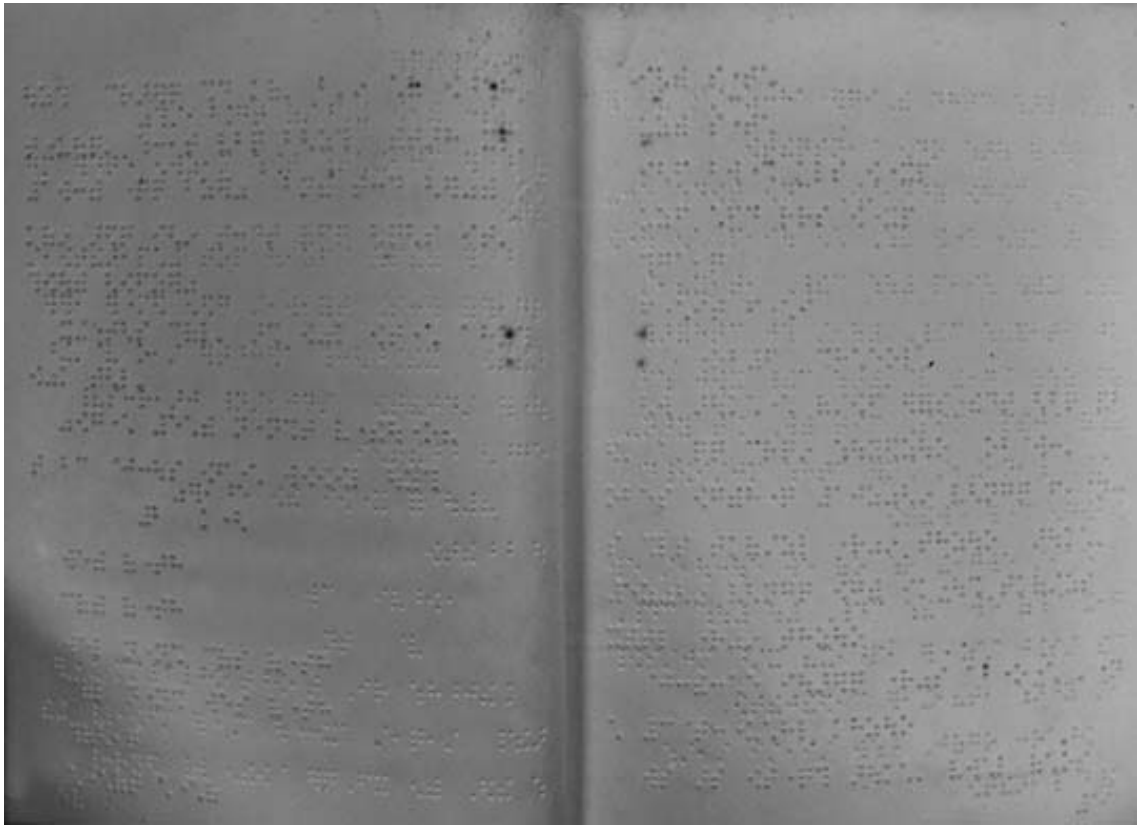
ぼくが ぐみを たべて いるあいだに にーさんわ
まつたけを 56ぼん とつたよーでした ぼくが
げにいろの きれいな きのこを とって にーさんに みせ
ましたら

「あー それわ べにだけだ どくだよ その
てで ぐみを たべてわ いけない」



と に一さんが いいました ぼくわ びっくりして
ぐみも ベにだけも ちめんえ なげつけました
それから に一さんと ぞーきばやしえ はいって じめ
じめした おちばを ふんで ねずみだけを すこし
とりました
だんだん のぼって いくと
やまの なかでも 3げんやでも
すめば みやこよ わが さとよ
こびきの りきぞーさんが うたを うたいながら
おきな ものぎりで いたを ひいて いました なんの
きか おがくづが たいそー よく におって いました
に一さんが
こんにちわ
と いった
「この ちかくに しめぢの てる ところわ ありません
か」

と たづねますと
「さー まだ はやいかも しれないかな」
と いった くりばやしの したの くぼちを おしえて くれ
ました
いった みますと なるほど すこし はやすぎましたが
それでも ちーさな しめぢが れつを つくって でて
いました ふまないよーに ちゅーいて かご 1ばい
とって かえりました かえりがけに りきぞーさんに
おいを いいましたら
「ひとあめ ふったら また おいで」
と いいました
だい5 うみ
1 しけ
なまりいろの そらわ したいたいに ひくく なって
きます かぜが ひゅーっと うなって くるたびに はま
の まつわ みを ふるわせて あたまを ちにつけそーに



します うちよせて くる なみわ いわを かみ こじや
り

とぼしてわ さーっと ひいて いきます もとより ふねわ
1そーも でて いません いつも とーる きせんも たか
なみを よけて おきを とーるので 見えてきてきの おとわ
すこしも きこえません

ふゆどきの うみこは よく こんな ことが あります
こんな ときにわ

「これが 5かも つづく と ひぼした」
と いう りよーしの こえが そこここに します

2 なぎ

そらも みどり

うみも みどり

そらに つづく うみの みどり

うみに つづく そらの みどり

すみきって

かがみと かがみ

おきも のどか

はまも のどか

おきえ いそぐ あいの こぶね

はまえ かえる ちちの こぶね

すれあつて

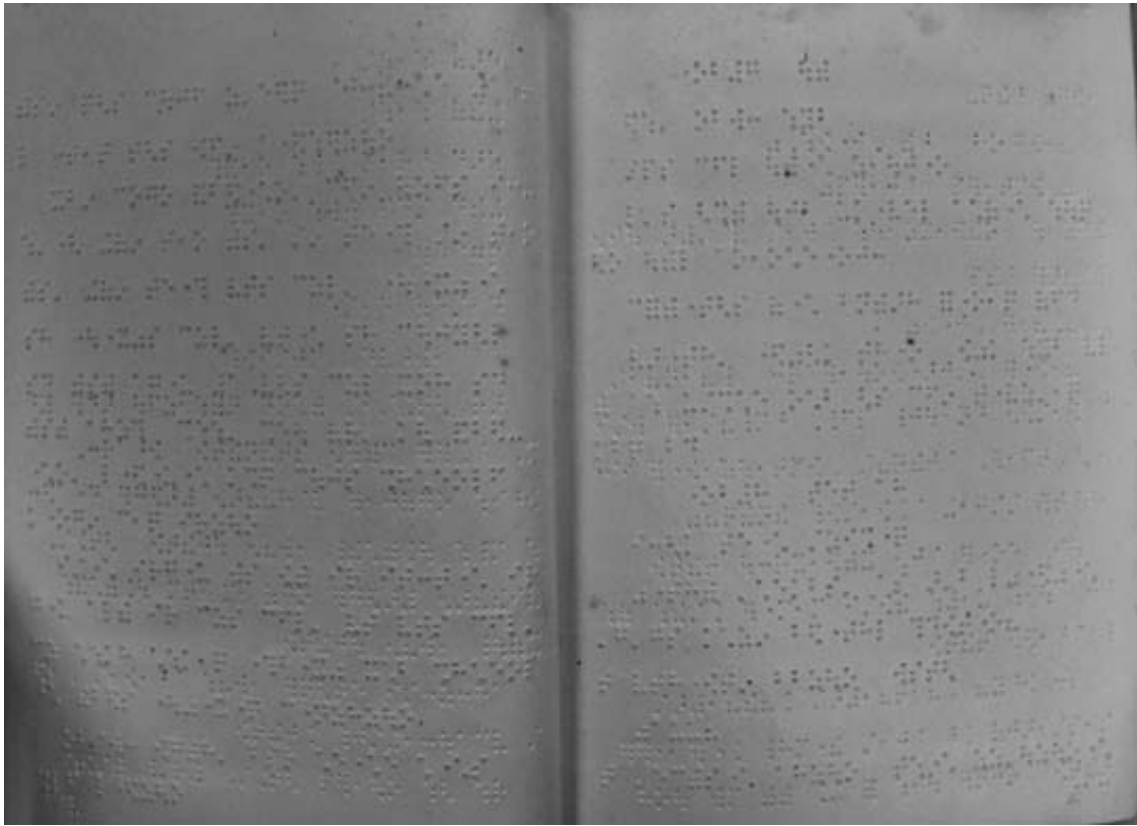
えがおと えがお

だい6 くりからたに

きそ よしなかが みやこえ せめのぼると きいて へい
けわ あわてて うちてを さしむけました たいしょーわ
たいらの これもりで 10まんきを ひきつれて えつちゆー
の くにの となみやまに ちんを とりました よしなかわ
5まんきを ひきつれて これも おなじく となみやまの
ふもとに ちんを とりました

りよーほーから おしよせて ちんの あいだが わづ
か 3ちよーばかりに なりました

その よの ことです よしなかわ ひそかに みかたの



ものを てきの うしろえ まわらせて りよーほーから 1ど
に どっと ときの こえを あげさせました

ふいを うたれた へいけがたわ うえを したえの おー
さわぎ ゆみを とった ものわ やを とらず やを とった
ものわ ゆみを とらず ひとの うまにわ じぶんが
のり じぶんの うまにわ ひとが のり うしろむきに
のる ものも あれば 1びきの うまに ふたり のる
ものも あります くらさわ くらし みちわ なし へいけ
がたわ にげばが なくて うしろの くりからたにえ
なだれを うって おちました

おやが おちれば その こも おち おとーとが おち
れば あにも おち うまの うえにわ ひと ひとの うえにわ
うま かさなり かさなって ずいぶん ふかい くりからたに
が へいけの じんばで うづまりました

たいしょー これもりわ いのち からがら かの
くにえ にげました

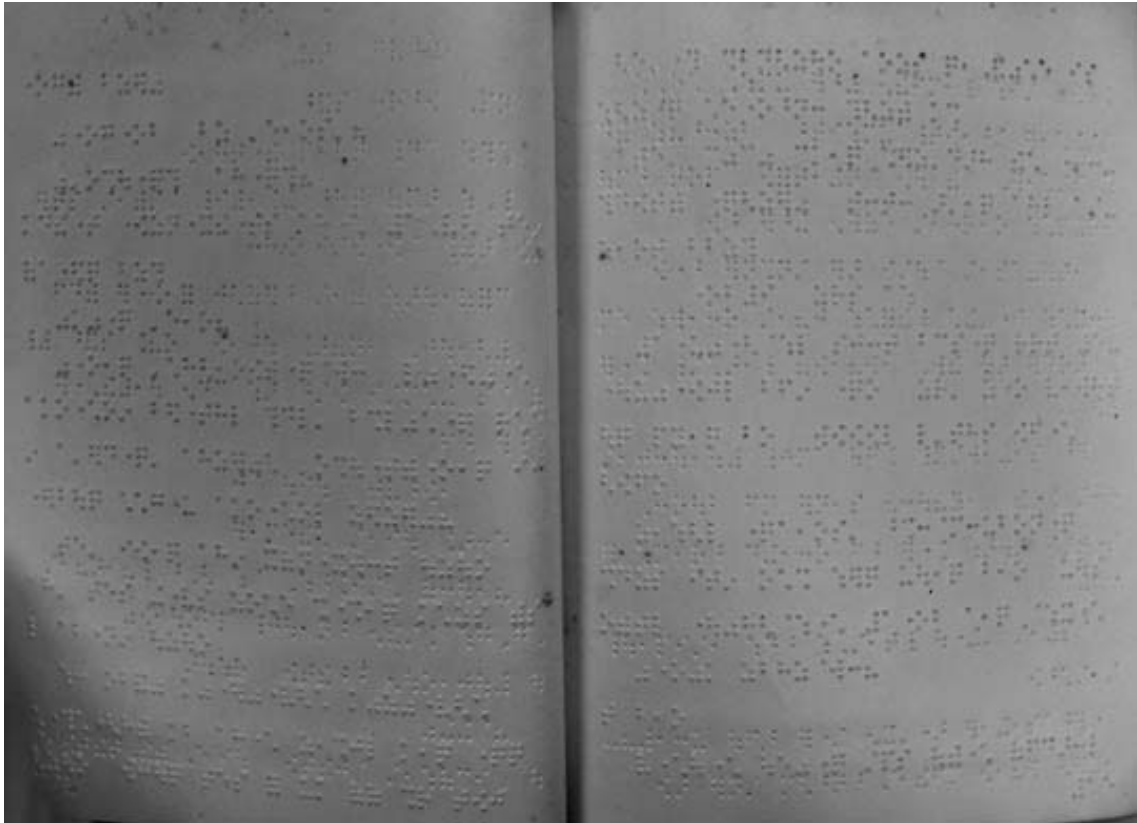
だい7 しも

けさわ たいそー さむい
やねの うえに しもが まっしろだ
にわの きくも しろい はなびらに あかみが さして
きた しもに あたったからだろー

うめもどきの みが いつもより めだって みえる
ひよどりわ げんきな とりだ こんな さむい ひこ
も あさ はやくから たかい きの うえを とびまわつて
ないて いる

だい8 とらと あり

おーきな とらが やまおくで
「どーも わからないのわ あの よわい にんげんが
われわれの なかまを いけどりに することだ」
と ひとりごとを いいました そのとき
「あはは」
と わらうものが ありました とらが みまわしましたが



だれも いません

「だれだい いま わらったのわ」

「わたくしです あります」

なるほど ごまつぶほどの ありが 1びき とらを
みあげて います

「なんで わらった」

「だって わかりきったことでしょー にんげんが
あなたがたを いけどりに するにわ いくにかで ちから
を あわせるでわ ありませんか わたくしどもだって お一
せいして かめれば あなたがたに まけません」

とらわ おこって ありを ふみつぶそーと しました
ありわ とらの ゆびの またから くぐって なかまの もの
に あいづを しました

さー たいへん なんぜんびきか なんまんびきか
かずかぎりも ない ありが まくろに なって でて
きました そーして とらの め はな みみ くち ところ

きらわず くいきました あたまの てっぺんから おの
さきまで からだじゅー すきまも なく

とらわ うんうん うなって かけまわるより ほか どー
することも できません とーとー よわって ありに あや
まったと います

だい9 まちの あさ

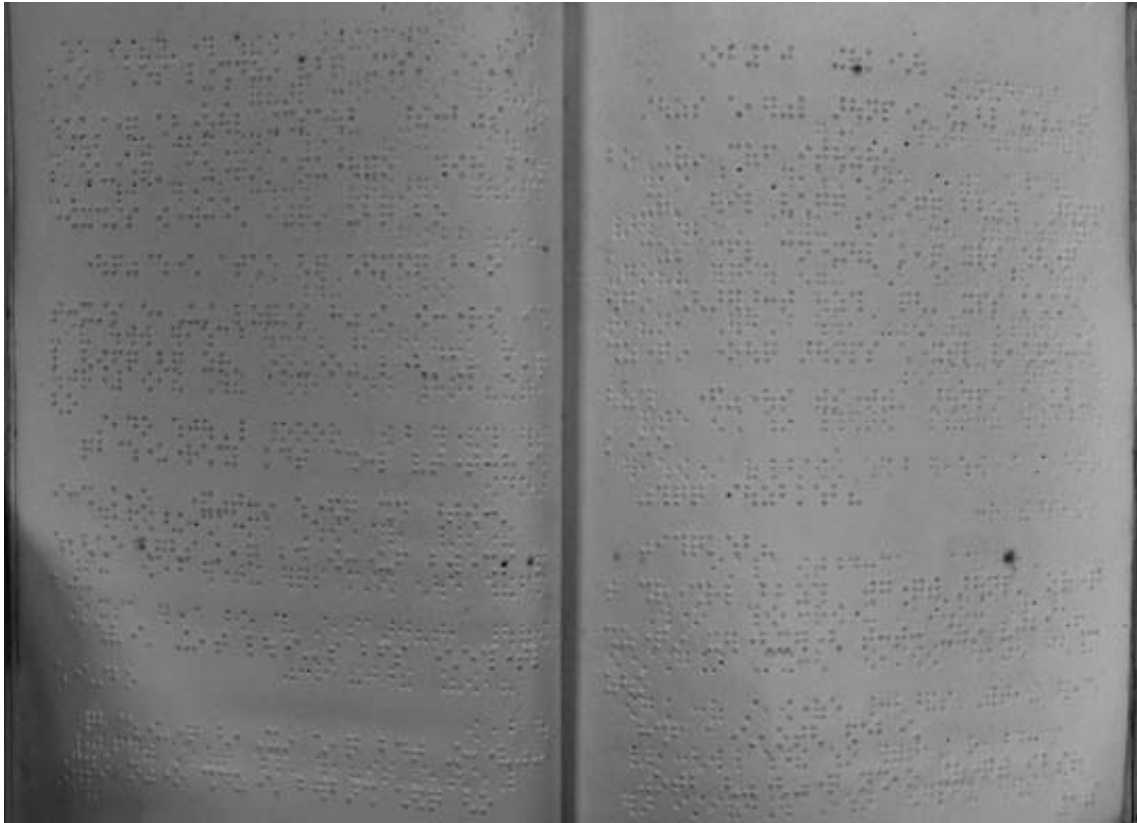
1ばんぎしゃに のろーと いうので ちちと 5
じはんごろに いえを であ まちわ まだ ひっそりと
して ねむっていた そこここに にわたりの こえが
きこえた

まっさきに であつたのわ ぎゅーにゅーはいたつで
くるまの おとを たかく させて はしって いった はしの
たもとに じんりきしゃが 1だい あつて しゃぶが

「だんな まいりましょー」

と いった

ひがしが しらんで やねの しもが みえるよーに



なった からの にぐるまを ひいて ゆくのわ やおやや
さかなやで かいだしに いくのらしい びよーいんの まえ
の さかやでわ あまどを あけはじめた すこし いくと
ごふくやの こぞーが おもてを はいて いた

じてんしゃが あとから きて かけぬけて いった
とーふやの らっぱや にまめやの りんが こーちの おく
に きこえて きて まちわ だんだん にぎやかになっ
て きた

ていしゃばちかくに なると きゅーに ひとどーりが
おーく なった べんとーを さげて くる ちょーわ
さつきから きてきの なって いる こーばえ いそぐので
あるー

あさひが ぱつと にしがわの いえの がらすどに
かぢやいた

ていしゃばで きつぷを かって いると ゆーびん
ぶつを つんだ くるまが いせいよく かけて きた

だい10 ゆみながし

やしまの かつせんに よしつねが こわきに はさんで
いた ゆみを うみえ おとしました

ゆみわ しおに ひかれて ながれて いきます よしつね
わ うまの うえに うつぶしに なって むちの さきで
それを かきよせよーと します てきわ ふねの なかから
くまでを だして よしつねの かぶとに ひっかけよーと
します げんじの ものどもわ よしつねを かぢい
ながら

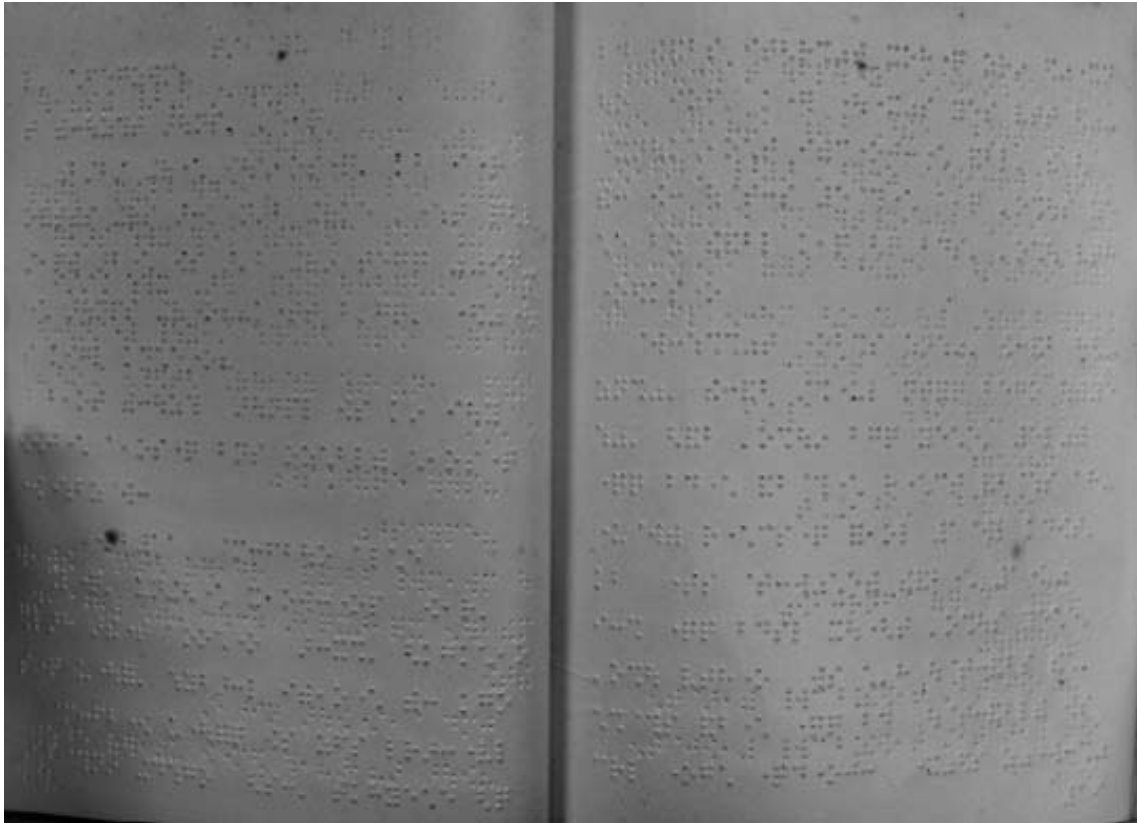
「すてて おしまいなさい」

「おすてなさい」

と くちぐちに いいます それでも よしつねわ たちで
くまでを ふせぎふせぎ とーとー ゆみを ひろいあげ
ました

りくえ あがったとき けらいが

「たとい きんぎんで つくった ゆみでも おいのち



にわ かせられませぬ」

と もーしますと よしつねわ わらって

「いやや ゆみが おしかったのでわ ない おち
ためとも ゆみの よーな つよい ゆみなら わざと ときに
やっても よいが この よわい ゆみを とられて 『これ
が よしつねの ゆみだ』 などと いわれてわ げんじ
の なおれに なるからだ」

と いったと もーします よしつねに この なを おしむ
ところが あったので いつの たたかみにも かったので
ございませよー

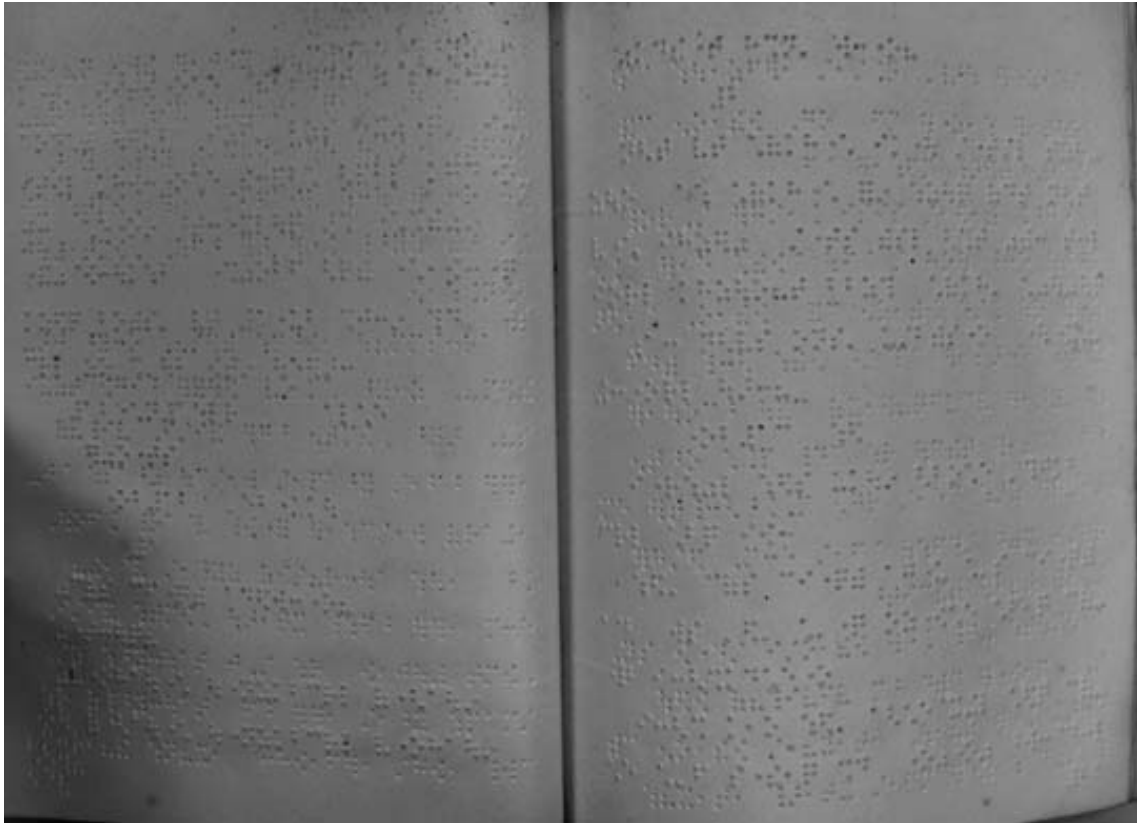
だい11 にゆーえいした あにから

くにでわ ほつゆきが ふったそーだね こっちわ
くにより よほど あたかかだ よーふくわ きなれなかつた
ので はじめわ さむいよーに おもったが もーなれた

ゆーえいご はじめて この まえの にちよーひに
がいしゆつを ゆるされた きの一わ となりむらから きて

いる ほーへの おときちくと ふたりで まちを けんぶつ
した おまえわ なぜ じぶんの むらの ひとと けん
ぶつしなかつたかと おもうだろーが へにわ ほ き
ほー こー しちよーの 5しゆが あって わたくしの むら
から いま ほへに なって きて いるのわ わたくし ひとり
だけなのだ

しよーさくくんと だいくの まつさんわ こーへい りき
まつくんわ ほーへい やくほこ つとめて いられた しもむら
さんわ きへい わたくしを いれて むらからわ 5にんも
でて いるが へしゆが ちがうので めったに 1しよに なることわ
ない どの ちよーそんからも ほへが 1ばん
おーく でて いるのに ふしぎと わたくしの むらから
わたくし ひとりだ その かわり しちよーへの ほかわ
かくしゆの へが でて いる しちよーへにも その
うちに だれか できるだろー ぶんけの まんぞーくん



などわ こおとこだから ひよつとすると しちよーゆそつに
あたるかも しれない おまえわ いまの ふんでわ おー
おとこに なりそーだから ほーへか きへいになれるだ
ろー からだを ちよーぶにして よく がくもんを
べんきよーしなさい ぐんたいえ きても がっこーで
なまけて いたものわ ひと 1ばい くらーをする その
うちに また くわしい ことを しらせよー

12がつ15にち

せんたどの

だい12 わらいばなし

1

「うみの うえでも あるけそーだ」

「どーして」

「ひだりあしが しづまないうちに みぎあしを
だし みぎあしが しづまないうちに ひだりあしを
だす」

「なるほど りくつわ そーだ」

2

つきと ひと かみなりが おなじ やどやに とまり
ました あさ かみなりが めを さまして みると つきと
ひが おりません やどの ものに きくと 「もー とーに
おたちになりました」と いいます かみなりわ かんしんして

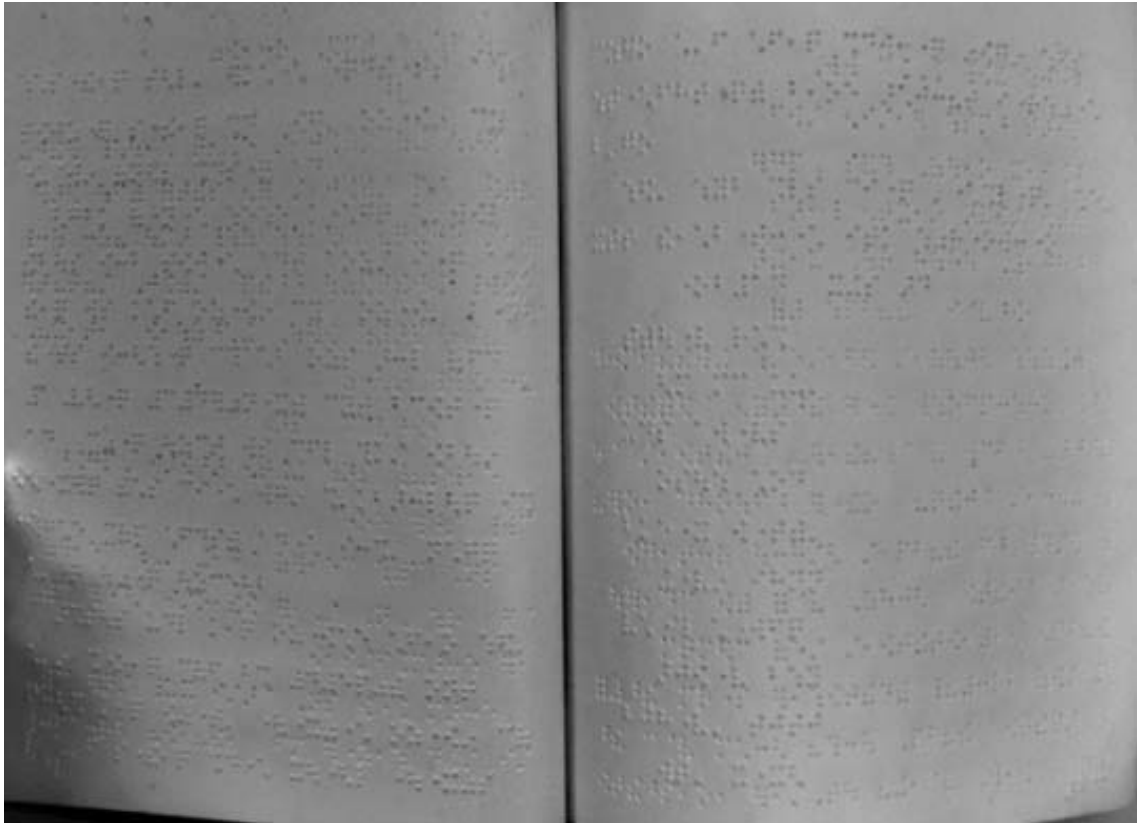
「あー つきひの たつわ はやいものだ
ゆーだちに しよー」

だい13 さけ

おちさんに さけの はなしを きいたから わすれない
うちに かいて おこー

さけわ うみの うおでも あれば かわの
うおでも

ある その わけわ かわで たまごから かえって うみ
で おーきくなるからだ
おーきく なった さけわ あきから ふゆに かけて うみ
から かわえ のぼって くる だんだん じよーりゆーに



さかのぼって ときわ せなかが できるほどの あさい
ところまで のぼって くる これわ たまごを うむ
ばしよを みつけに くるので ある

きれいな みづが さらさら ながれて かわそこに
こいしのおい ところが あると あたまや おで あなを
ほって その なかえ たまごを うむ たまごわ あづき
ほどの おきさで うすあかい たまの よーに みえる
1びきで 34せんつぶも うむと いうことで
ある うんで しまうと その うえに すなや こいしを
かぶせて ほかの うおが それを くわないよーにして おく
それから うみえ かえるのも あるが おくわ つかれて
かわで しんで しまうらしい

よくとしい はるに なって たまごから かえった さけわ
かわを くだって うみえ いく 45ねんも たつと
おきく なって こんどわ じぶんが たまごを うみ
に かわえ のぼって くるが ふしぎに じぶんの

うまれた かわえ かえって くるそーで 「これを さけの
さとがえりとも いったら よかろー」と おちさんが
いわれた

さけわ さむい くにの うおで わがくにでわ から
ふとと ほっかいどーが おもな さんちだそーだ

だい14 ふゆの よる

ともしび ちかく

きぬ めう ははわ

はるの あそびの

たのしさ かたる

いならぶ こどもわ

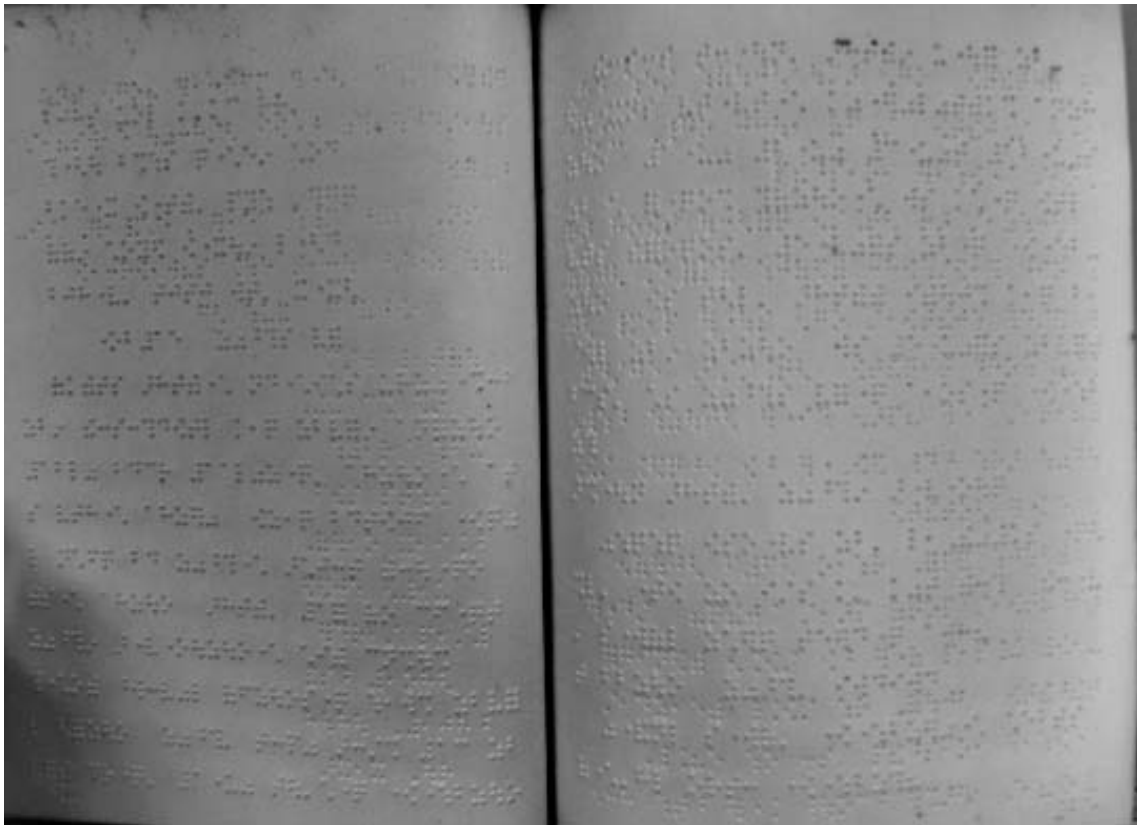
ゆびを おりつつ

ひかず かぞえて

よろこび いさむ

いろりびわ とろとろ

そとわ ふぶき



いろりの はたに なわなう ちちわ
すぎし いくさの てがらを かたる
いならぶ こどもわ ねむさ わすれて
みみを かたむけ こぶしを にぎる
いろりびわ とろとろ そとわ ふぶき
だい15 まんじゆの ひめ

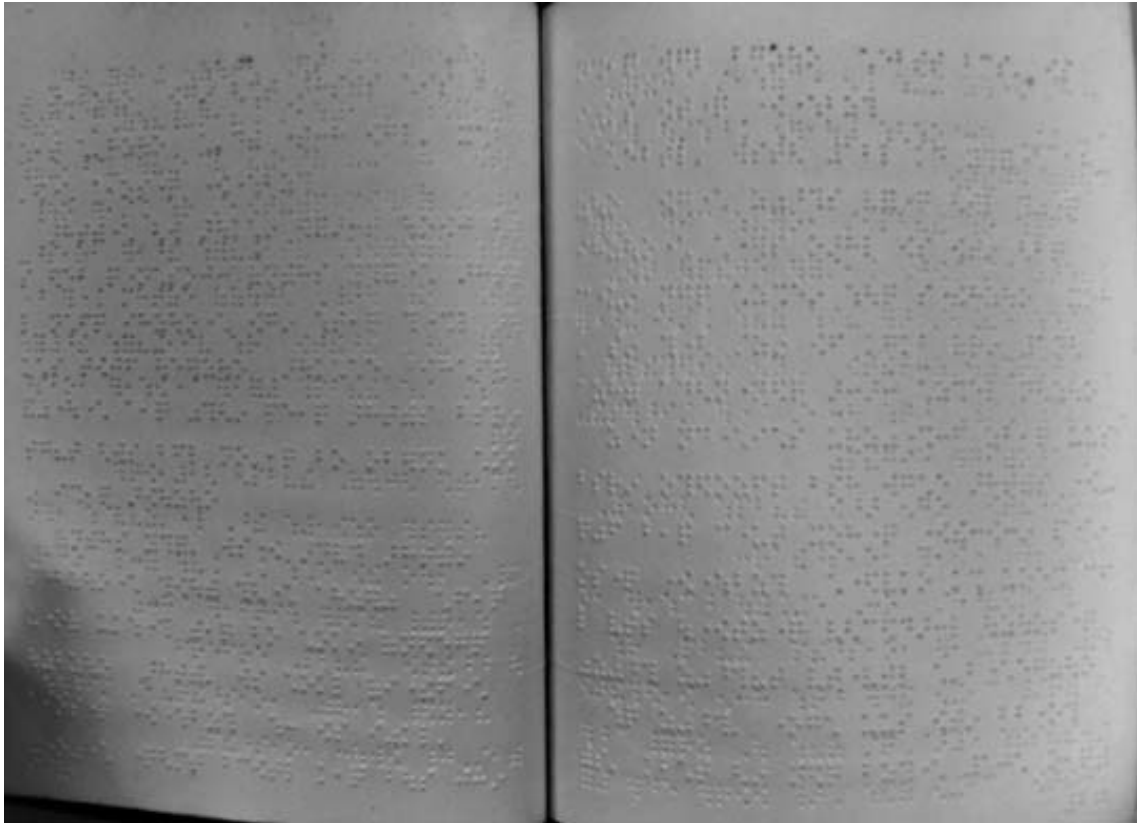
みなもとの よりともが つるがはかの はちまんぐーえ
まいを ほーのーすることになって まいひめを あつめました
12にん いるうち 11にんまでわ ありましたが あと
の ひとりが ありません こまっ ているところえ ごてん
につかえて いる まんじゆが よかろーと ほーしてた
ものがありました よりともわ 1め みた うえでと
まんじゆを よびだしましたが かおも うつくしく
すがたも じよーひんに みえましたので さっそく まいひめ
に きめました まんじゆわ とーねん よーやく 13 まい
ひめの うちでわ 1ばん としわかで ございました

ほーのーの とーじつわ よりともを はじめ まい
けんぶつの ひとびとが なんぜんにんともなく あつまり
ました 1ばん 2ばん 3ばんと 12ばんの
まいが めでたく すみましたが その なかで ことに
ひとの ほめたてたのわ 5ばんめの まいで ござい
ました この ときかわ よりともも おもしろく なって いっ
しょに まいを まいました その 5ばんめの まいひめと
いうのわ かの まんじゆの ひめで あったので ござい
ます

よくじつ よりともわ まんじゆを よびだして

「さてさて このたびの まいわ につぼん1の でき
くにわ どこ また おやの なわ なんと もーす ほーび
わ のぞみに まかせて とらせるで ありー」
と いました まんじゆわ おそろおそろ

「べつに のぞみわ ございませぬが からいとの
みがわりに たちとー ございませぬ」



とも一しました これを きくと よりともの かぜの いろわ
さつと かわりました かわるも どーり これにわ ふかい
わけが あったので ございます

よりともが きそ よしなかを せめよーと したころ きそ
の けらい てづかのたるー みつもりの むすめが よりとも
につかえて おりましたが これを さとつて すぐに よし
なかの ところえ しらせました よしなかからわ おりかえし
へんじが あつて 「すきを ねらつて よりともの いのちを
とれいと きその いえにつたわつて いた たいせつな かたな
を おくつて よこしました

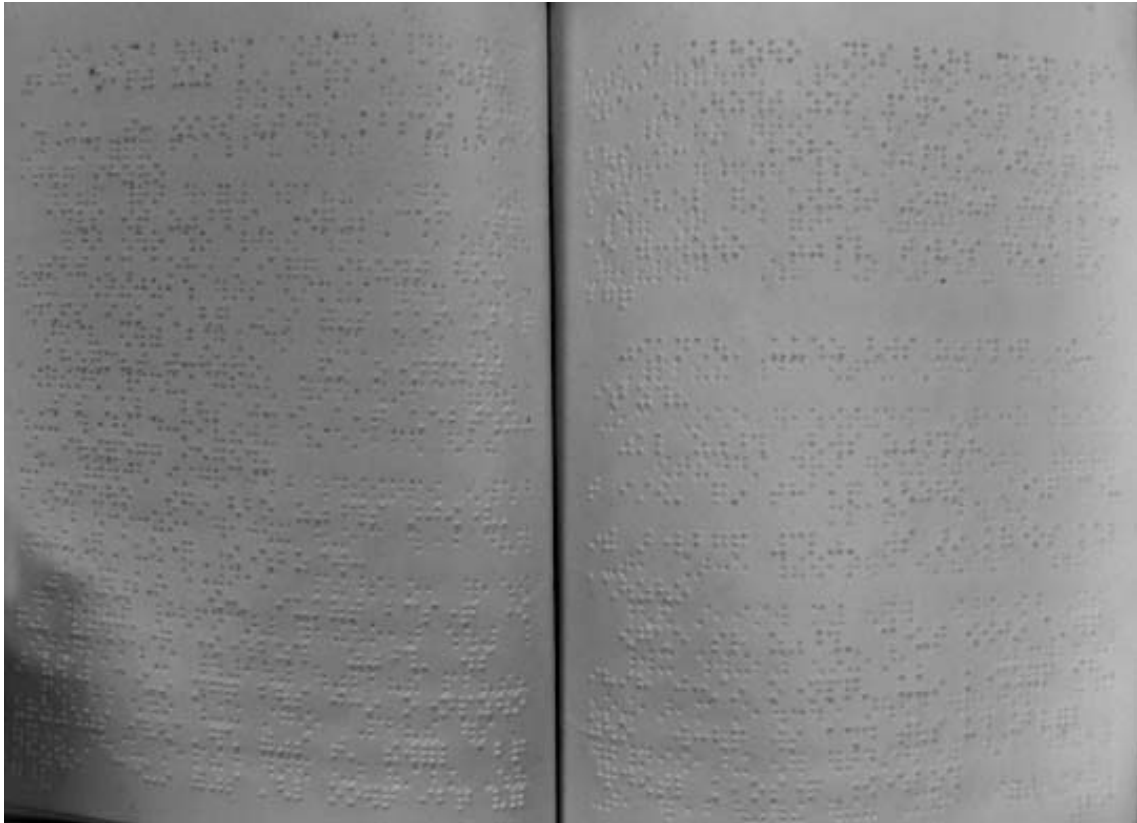
みつもりの むすめわ そのご よるひる よりともを
ねらいましたが すこしも すきが ありません かえつて
はだみ はなさず もつて いた かたなを みつけられて
しまいました よりともわ その かたなに みおぼえが
あつたので ございます さー この おんなにわ
ゆだんが できぬと いうことになつて いしの ろーを

つくつて それに いれました からいとと いうのわ
おんなの ことで ございます

からいとにわ そのとき 12に なる むすめが あり
ました これが まんじゆの ひめで きそに すんで
おりましたが かぜの たよりに この ことを きいて
うばをつれて かまくらを さして のぼりました ふたり
わ のを すぎ やまを こえ ぬれない みちを 1つき
あまりも あるきつづけて よーよー かまくらに つきました

まづ つるがおかの はちまんぐーえ まいって ははの
いのちを たすけたまへと いのり それから よりともの ご
てんえ いつて うばと ふたりで ごほーごーを ねがつ
たので ございます かげひなた なく はたらく うえ
に ひとの しごとまで ひきうけるよーに しましたので
「まんじゆ まんじゆ」と ひとびとに かわいがられました

さて まんじゆわ だれか ははの ことを いひだす
ものわ ないかと きをつけて いますが 10か たつても



20か たつても ははの なを いうものが ありません
あー ははわ もー このよの ひとでわ ないのかと ちからを
おとして ありました

あるひの こと まんじゅが ごてんの うらえ でて
なんのきも なく あたりを ながめて おりますと した
づかえの おんなが きて 「あの もんの なかえ はいつて
わ なりませぬ」と もーしました わけを たづねますと

「あの なかにわ いしの ろーが あつて からいとさま
が おしこめられて おられます」

と こたえました これを きいた まんじゅの よろこびわ
どんなで あつたで ございませよー

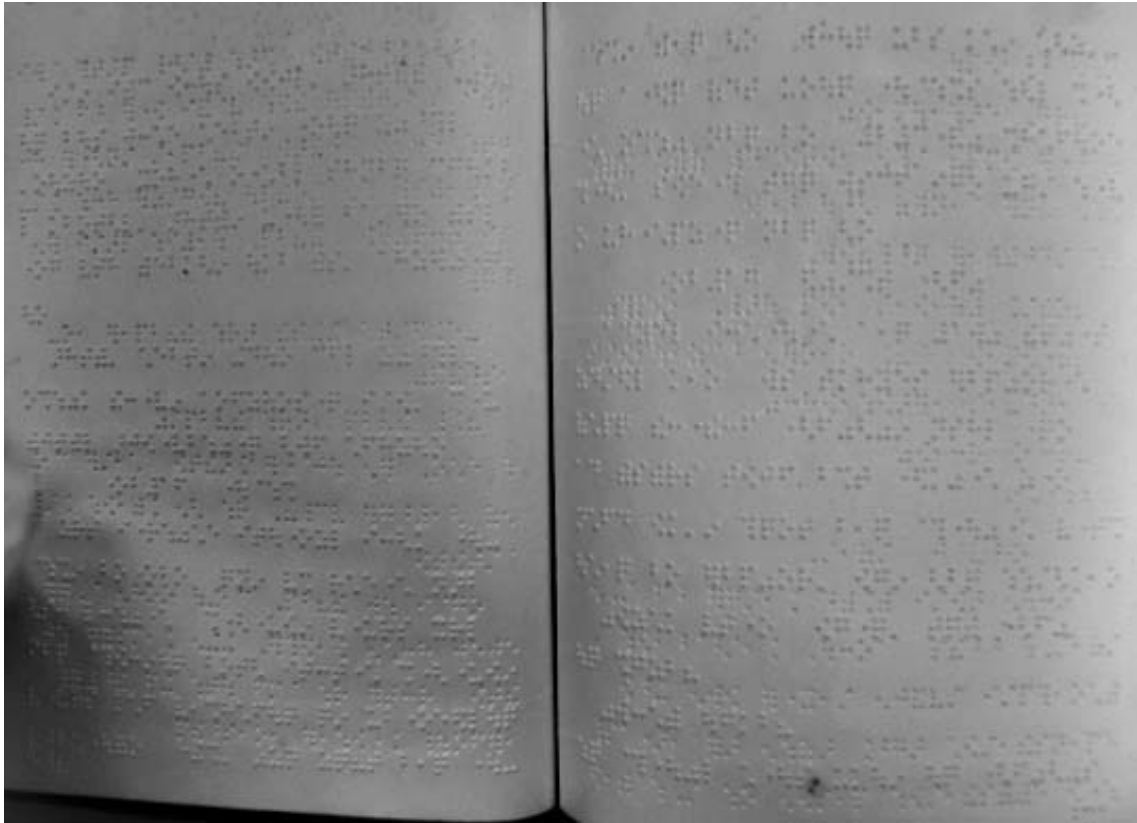
3がつ20か きよーわ おはなみと いうので ご
てんわ ひとすくなくて ございます まんじゅわ その
よ ひそかに うばをつれて いしの ろーを たづねました
はちまんさまのおひきあわせか もんの とわ ほそめに あつて
おりました うばを もんの わきに たたせて おいて ひめ

わ なかに はいりました つきの ひかりに すかして あちら
こちら さがしますと まつの 1むら たつて いる なかに
いしの ろーが ありました まんじゅが かけよつて ろー
のとびらに てを かけますと 「たれか」と ろーの なか
から もーしました まんじゅわ とびらの すきから てを
いれて

「おなつかしや ははさま きその まんじゅで ご
ざいます」

「なに まんじゅ きその まんじゅか」
と おやかわ てを とりあつて なきました やがて うば
をも よひめて 3にんわ その よを なみだの なかに
あかしました

これから のち まんじゅわ うばと ころを あわせて
おりおり ろーやを たづねてわ ははを ながさめて おり
ました そーして その あくるとしの はる まいひめに
でることになつたので ございます



おやをおもうこーしのころに よりとももかんしんして いしのろーからからいとをだしてまんじゆにわたしました ふたりがたがいに とりついてうれしなきにないたときにわよりともをはじめいあわせたものにだれひとりもらいなきをしないものわありませんでした

よりともわからいとをゆるしたうえにまんじゆにたくさんなほーびをあたえましたのでおやこわうばもろともによろこびいさんできそえかえりました

16 じしゃく

まちのおぢさんからおとしまに おーきなじしゃくをいただいた てつをひくちからがつよいきのーにーさんがくぎばこをひばちのふちにおいてしゅこーをしていたときおとーとがくぎばこをひばちのなかえひっくりかえしててをはいだらけにしてひろいはじめたぼくわ「まてまて」といってじ

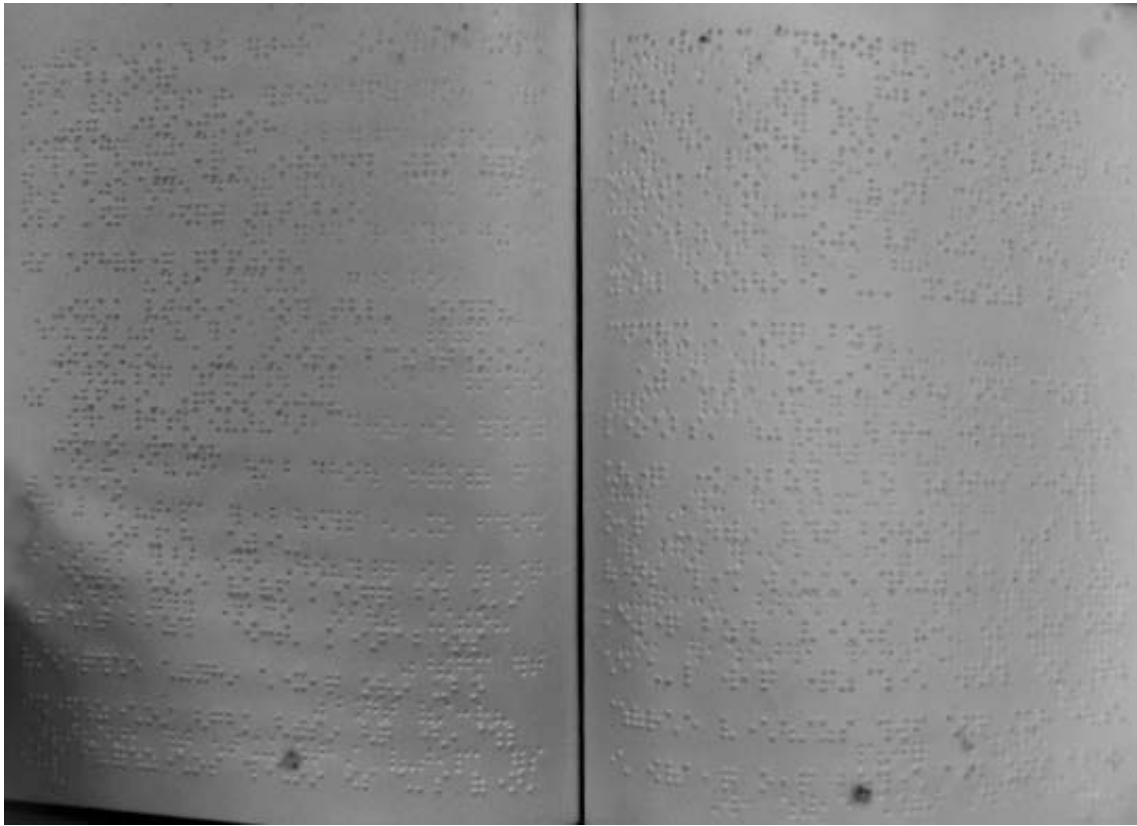
しゃくをもってきたそーしてはいのなかをかきまわしてあげてみるとはたしてじしゃくのさきにくぎがたくさんついていた23べんくりかえしたらくぎわのこらずとれてそのうえにおれたはりやさびたはりがねまでついてきた

だい17 けんやくとぎえん

あるむらにおーかじがあつて1そんほとんどまるやけになつたそのとなりむらのせいねんたちがみかねてほーぼーえぎえんきんをつりにでたあるものもちのころえいくとげなんがまだつかえるこなわをすてたといってしゅじんがひどくしかつていたせいねんたちわこれをきいてささやきあつた

「こまかなひとだこれでわとてもぎえんわしてくれまい」

「そーかもしれない」
さてしゅじんにかじのはなしをしてぎえんきんの



ことを いいだすと

「それわ おきのどくだ」

と いった たくさん かねを だしたうえに もみや まめの
たねを わけて あげても よいと いった

その かえりみちで せいねんたちわ

「こまかな ひのだが だす ときにわ だすね」

「まったくだ あんな こごとを いうほどだから

この ぎえんが できたのだから」

「そーだ そーだ」

と いいあつた

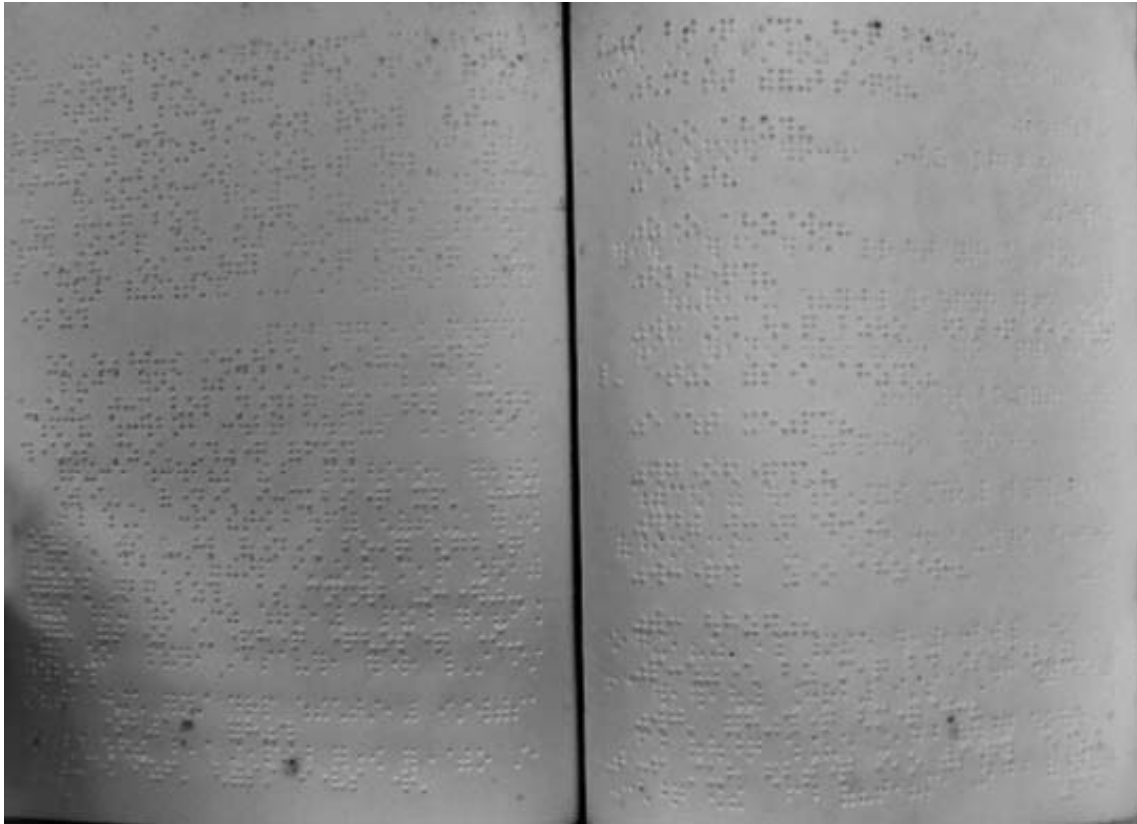
だい18 かもがわ

きよーとを きたから みなみえ ながれて いる かわを
かもがわと いいます きよーとわ ながいあいだの
みやこですから かんむりを かぶって たちを はいた
おくげさまがたや きおんな きものを きて ぎっしやに
のつた おひめさまがたの すがたを この かわの みづわ

いくたびとなく うつしたことで ございませー

いくさの あつた ときにわ よろいかぶとの いきましい
なりをした ぶしの かたなや なぎなたの ひかりも いく
たびとなく この かわの みづに うつたことで
ございませー こんな ひと こんな すがたわ とーの
むかしに きえましたが かわわ むかしのままに きよく
うつしく ながれて います

かもがわ(かわ) はしが たくさん かけて あります
なだかみのわ さんちよー しちよー ごちよーの 3つの
はしで ございませー いま さんちよーの おーはしに
たつて かわしもを みると いたしましよー かわの にしわ
みづの すぐ そばから すきまも なく いえが たち
ならんで います ひがしの ほうわ この はしの たもと
から かわに そつて でんしゃが できます この でん
しゃみちから ひがしやまの すそえ かけて やはり じんか
が こみあつて たつて いますが あおい まつの あいだ



にちぢゆーの とーや おーきな てらの やねが みえます
しぢよーのおーはしわ すぐ そこに みえます ひと
どりの おーいのわ この おーはしで これにわ でん
しゃも とーって います よしつね べんけいの ごぢよー
の おーはしわ この かわしもにかかっているので ご
ざいます

また さんぢよーのおーはしから かわかみを「みると
かわらが とく きたについで その さきに やさしい
すがたの やまが かすんで みえます

かもがかわ みづが おーくないので ふめわ とーり
ませんが その かわりに みづが いたって きれいで
そめものに むいて います あの うつくしい ゆーぜん
ぞめわ もと この かかわりで できたので ご
ざいます

だい19 めりんす

「はるこ おまえわ きものや おびの じわ

なんの いとで おるか していますか」

「きぬいとと もめんいとです」

「まだ あります」

「あさいと」

「まだ ありましょ」

「けいとです」

「そー よく して いました けいとで おった もの
にわ どんな ものが ありますか」

「らしゃと ふらんねる」

「それだけですか」

「せるも そーでしよーか」

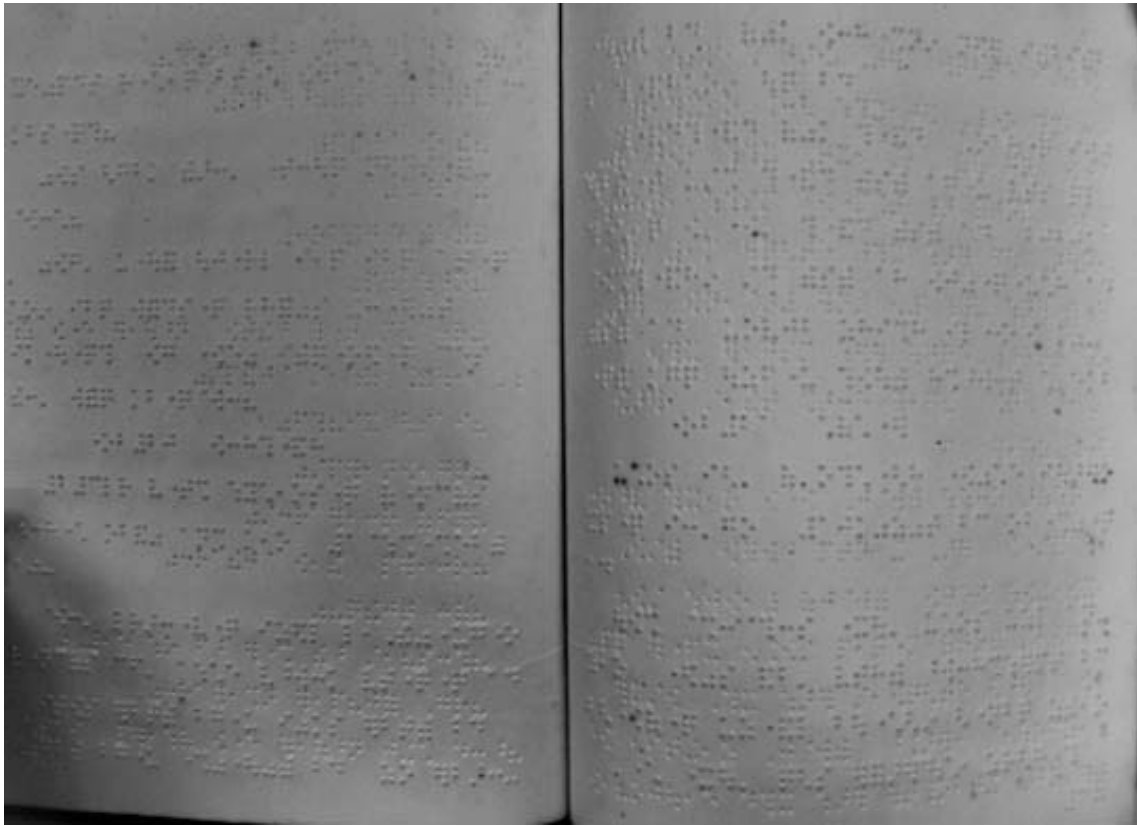
「そーです まだ ありましょー」

「もー しりません」

「ねーさんが いま ぬって いる この おびわ」

「それわ めりんすで きぬでしよー」

「いーえ やはり けいとで おった ものです らしゃや



ふらんねると ちがって いたが ほそいから きが つか
ないのです]

「その きれいな もよーわ どーして つけるので
しょーか」

「これわ はじめ しろちに おって おいて あとで
かたを おいて そめるので ちりめんの ゆーぜんと
おなじです これ ごらん おもてだけで うらの
ほーわ そめて ないでしょー」

だい20 こーりすべり

23にち ひどく さむかったので みづうみの
こーりが たいへん あつく なった 1しゃくぐらいも
あるー

きよーわ にちよーびで おまけに にっぽんばれだ
みづうみの うえわ あさから ひじょーな ひとでである

おとこの せいとも いれば おんなの せいとも いる
せんせいも いれば ぐんじんも いる また せいよー

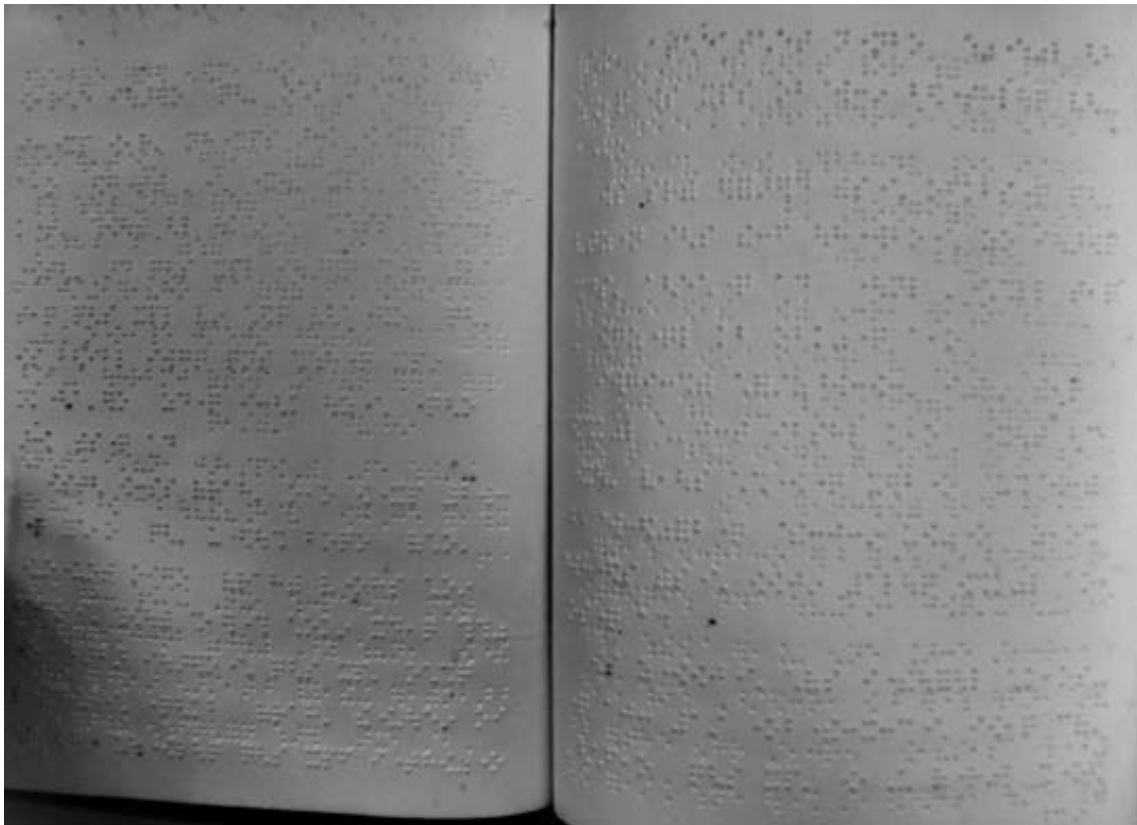
じんも いる みんな こーりぐつをつけて おもいおもい
の すべりかたを して いる

すべるすべる みんな すべる かたあしで おそろ
しいほど はやく すべる ものも あれば ひとの てに
すがって こわごわ すべる ものも ある いろいろな
きよくすべりを やる ものも あり ころんではまり ある
ものも ある はたひろい まりおくり おにごっこ なん
でも なれて しまえば すこしも りくじょーと かわらない

だい21 かみかぜ

はかたの おきわ みわたすかぎり げんから おしよせた
ふねで おーわおた 10なんまんという たいぐんで
ある

しこく きゅーしゅーの ぶしわ はかたの はまに あつ
まった げんの へわ ひとりも じょーりくさせぬと いう
いきごみで はまへこ いしがきを きつて まもった
わが ぶしわ てきの せめよせるのを まちきれず



こつちから おしよせた てきわ たかい やぐらの ある
おふね こつちわ つりふねの よーな こぶねで
あつた けれども わが ぶしわ ふねの たいしよー
などわ すこしも きに しなかつた くさのの じろーの
ごときわ よる てきの ふねに おしよせて くび 21
とつて てきの ふねに ひを かけて ひきあげた てきわ
この いきおいに おそれて てつ の くさりで ふねを
つなぎあわせた まるで おきな しまが できた
よーな もの で ある

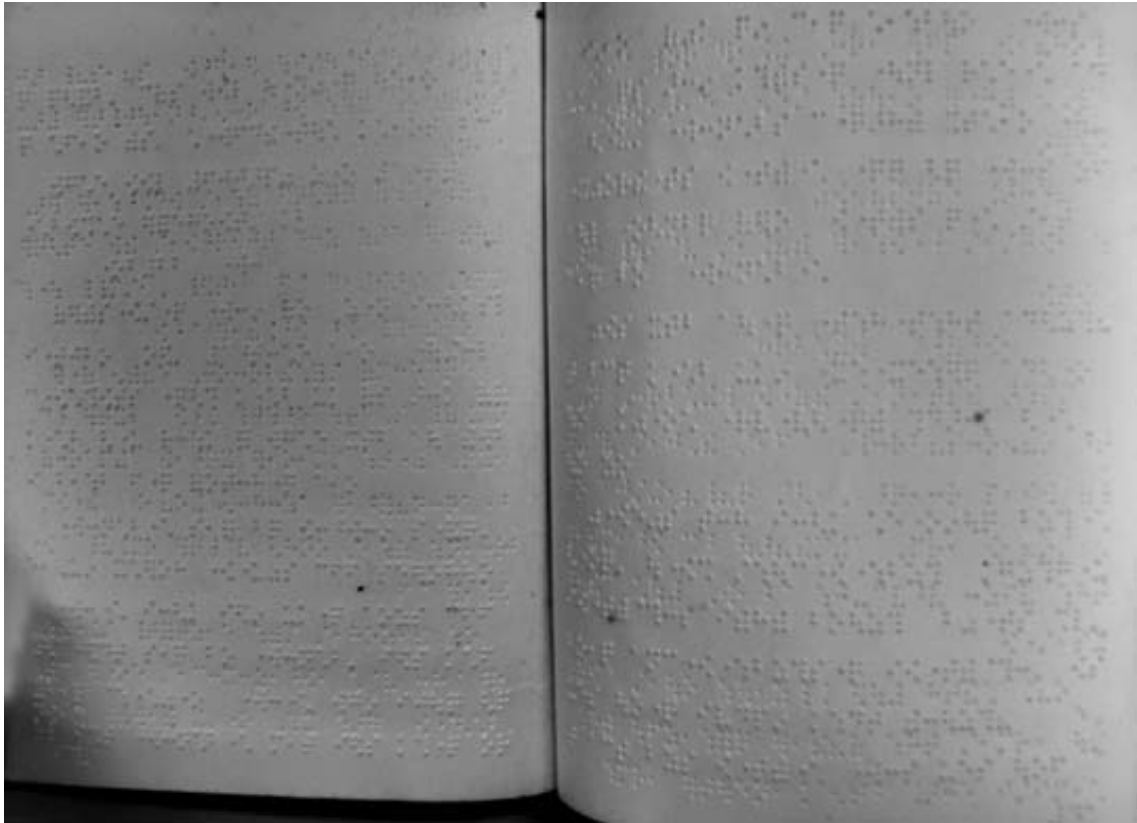
このとき こーの みちありわ たつた こぶね 2そー
で むかつた てきわ はげしく いたてた みかたわ
ばたばたと たおれた みちありも ひだりの かたを
いられたが すこしも くつせず かたなを ふるつて すすん
だ いよいよ おしよせたが てきの ふねわ たかくて
のぼることが できない みちありわ ほぼしらを たお
して これを はしごにして てきの ふねえ おどりこんだ

みかたわ あとからあとからと つづいた さんざんに きり
まくつて その ふねの たいしよーを いけどりにして ひき
あげた

その のちも せめよせる ものが たえないので てきわ
ひとまづ おきの ほーえ しりぞいたが また おしよせて
くるのわ あきらかかである じつに わがくにに とつて
わ これまでに ない たいなんで あつた

おそれおーくも かめやまじよーこーわ おんみをもつて
こくなんにかわろーと おいのりになつた ぶしと いう
ぶしわ ひつしの かくごで ふせいだ ひやくしよーも
いっしよーけんめいで ひよーろーを はこんだ まつたく
じよーげの ものが こころを 1にして こくなんにあつた
ので ある

この まごころが かみの おぼしめしに かなつたの
で ありー 1や たいぼーふーうが おこつて うみわ
わきかえつた てきの ふねわ こつぱ みちんに くだけ



て てきへいわ うみの そこに しづんで しまった いき
て かえった ものわ かぞえるほどしか なかったと いう
それから ここに 600よねん まだ 1ども
がいこくから せめられたことわ ない

だい22 ゴー

みせものごやで ゴーを みた まづ おきなのに
おどろいた たけわ 1ちよーから あった じゆーに
うごかすことのできる ながい はな みの よーな みみ
なだい きば ちーさな め それから ふとい あし ほそい
お いっさい えで みたとーりで あった

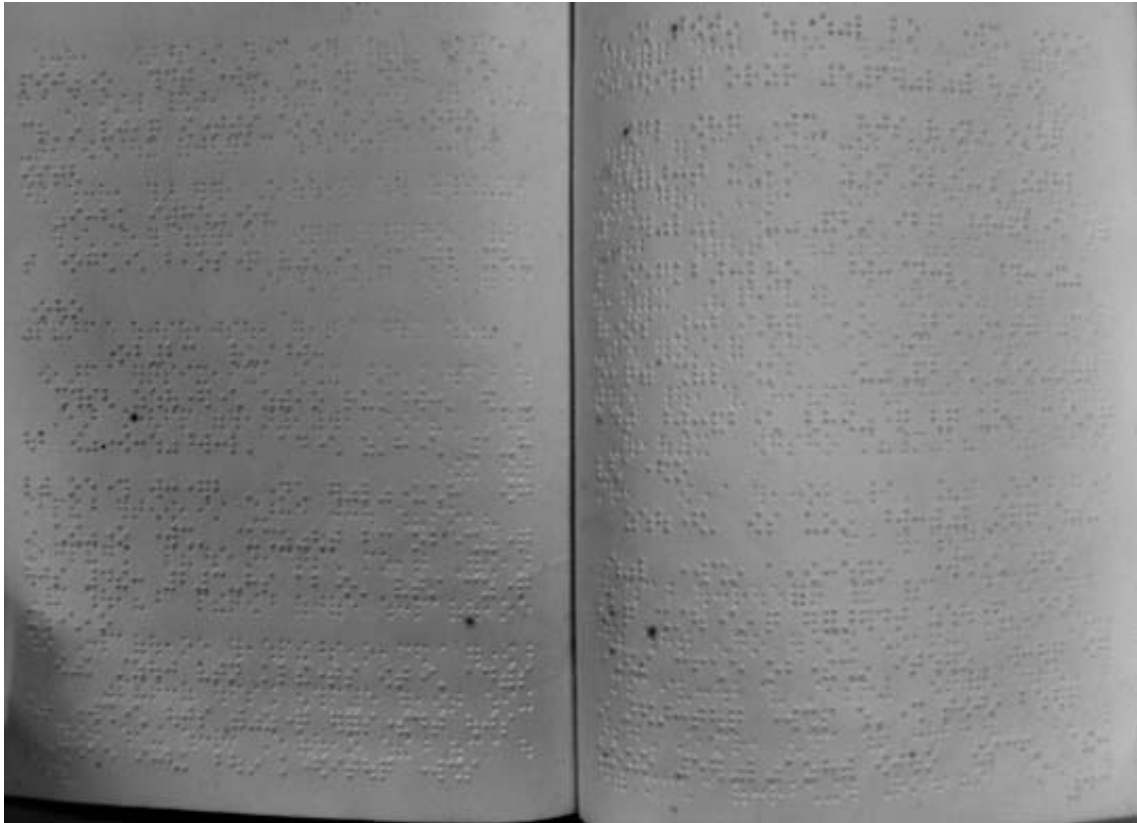
ぞーつかみが のって いて こーじよーを のべてわ
らつぱを ふかせたり ごぼんの うええ のらせたりした

ぞーが おきな おけを はなで あたまの うええ
まきあげると のって いた ぞーつかみわ おけの なかえ
はいつて しゃがんだ ぞーが それを おろして きて
ちにおくと ぞーつかみが ぬっと おけの なかで たち

あがった みんな てを うって かつさいした ゴーの
はなわ ての よーを なすので じつに ちからが ある
きばわ ぞーつかみの うでよりも ふどかつた じ
ぶんたちほどの こどもが でて きて ゴーの まえ
あしに だきついて みせた こどもの てが やっと
あつて いた ぞーつかみが

「この ふとい あしで どりりどりりと あるきます」
と いうと ながい はなを ぶらぶらさせて あるきだ
した なんだか ぢひびきでも するよーな きが
した また

「ごらんの とーり おきな からだを しています
きだてわ しごく やさしうございます なれますれば
おこどもしゆーの おもりも いたします いんどの くにお
いたつて あつうございますので おこどもしゆーわ この
はらの したで おひるねを なさると もーします」
と あうと いまの こどもが ゴーの はなの したえ



ねころんだ ねころんだ するとぞわはなでそこにあつた
うちわをひろって こどもの かおを あおぎだした
このとき

「おきな おもりさんだ」

と だれかが いったので みんなが 1どに ふき
だした

だい23 ちはやじょー

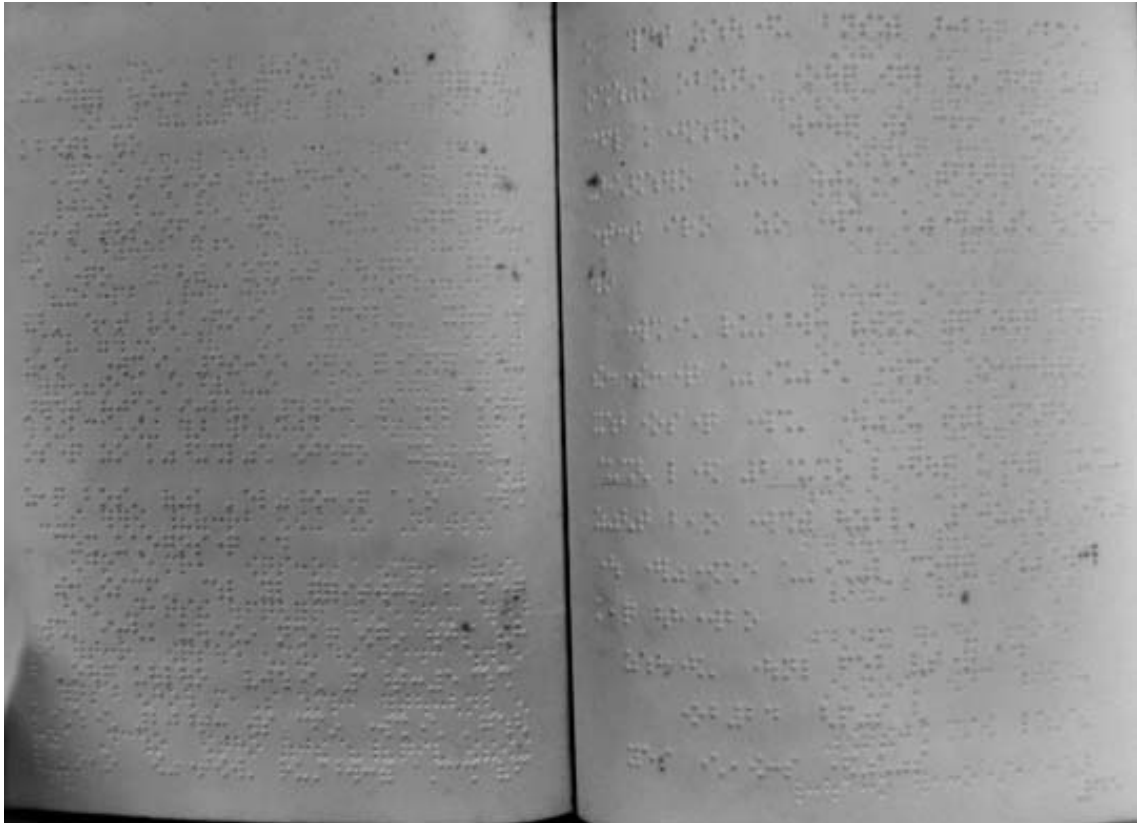
くすのき まさしげが まもった ちはやじょーわ けわ
しい こんごーさんじょーにわ あるが まわりが 1り
にも たらず そーぜい わづか せんじんばかり これ
を かこんだ ぞくわ ひやくまんきと いう たいぐんで
しろの 4ほー 23りの あいだわ ひとや うまで
ふさがった

こんな やましろ ひとつ なにほどの ことが あるもの
かと ぞくが しろの もんまで せめのぼると しろの
やぐらから おきな いしを なげおとして ぞくの

さわぐ ところを さんざんに いた ぞくわ さから
ころげおちて たちまち 56せんじんも しんだ

これに こりて ぞくわ しろの みづを たやして
くるしめよーと はかった まづ たにかわの ほとりに
3せんじんの ぼんべいをおいて じょーへが くみ
に こられないよーにした じょーちゅーにわ じゅーぶん
みづの よーいがして あつた 2か たつても 3か
たつても くみに こない ぼんべいが ゆだんをして
いると じょーへが きりこんで きて はたを うばって
ひきあげた

まさしげわ この はたを じょーもん に たてて さん
ざんに ぞくを あつこーさせた ぞくが これを
きいて くやしがつて せめよせると まさしげわ たか
いがけの うえから たいぼくを おとさせた そーして これ
を よけよーとして ぞくの さわぐ ところを いさせて
またまた 5せんあまりも ころした このうえわ ひょー



ろ一ぜめに しよ一と おもって ぞくわ しろえ せめよせ
ないことに した

あるあさ よあけごろ じよ一ちゆ一から うって でて
どつと ときの こえを あげた ぞくわ 「それ てき
が であ 1きも あますな」と おしよせた じよ一
へいわ さつと ひきあげたが 230にんわ ふみとど
まった ぞくが 4ほ一から これを めがけて おし
よせると しろから お一いしを 450 1どに おとし
たので また なんびやくにんか ころさせた ふみとど
まっていたのわ みんな わらにんぎよ一で あつた ぞく
わ うまく はかられたので ある

も一 このうえわ しゃに むに せめおとそ一と いうので
ぞくわ お一きな はしごをつくって これを しろの ほり
に わたして はしにした ひろさが 1ちよ一5しゃく
ながさが 20ちよ一 その うえを ぞくが われさき
に わたつた こんどこそわ ちはやじよ一も あやうく みえ

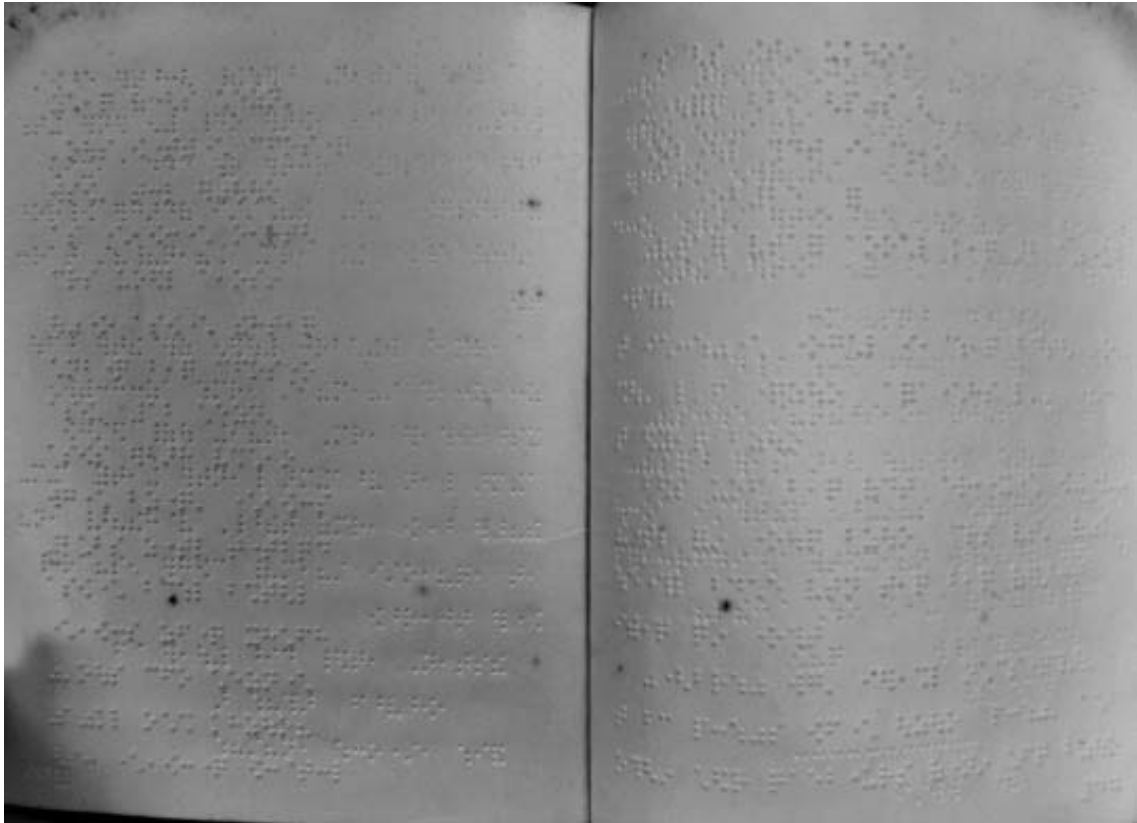
た すると まさしげわ いつのまに よ一いして おいたか
たくさんな たいまつを だして これに ひを つけて はしの
うえに なげさせた そ一して その うええ あぶらを
ふりかけさせた はしわ まんがから もえきれて たこそこえ
ど一と おちた また ぞくわ なんぜんにんか ししよ一
した

ぞくが ちはやじよ一 ひとつを もてあまして いると
ほ一ぼ一で かんぐんが ぞくの ひよ一ろ一みちを
ふさいだので ぞくわ じんぼ ともに つかれた
ひやくき にげ 2ひやくき にげして はじめ ひやく
まんきと いった ぞくも しまいにわ 10まんきに げん
じ ぜんごから かんぐんに うたれて ざんしよ一に
なつて しりぞいた

まさしげわ じつに えらい ひとである

だい24 きねんの き

むらの がつこ一の げんかんの



むかって みぎの からまつわ
わたしの こどもが うえたので
そのこわ とーに せんした
あの がっこーが たったとき
うちのはたけに あったのを
しんだ あのこが ほりとって
かっいで いって うえたのだ
あのこわ 12 からまつわ
あのこの せいより ひくかった
それが いまでわ がっこーの
2かめの まどに とどいてる
あのこが いくさに いくときに
がっこーの まえで ふりかえり
「わたしの うえた からまつが
「あんなに たかく なりました」
きのー がっこーで こーちよーに

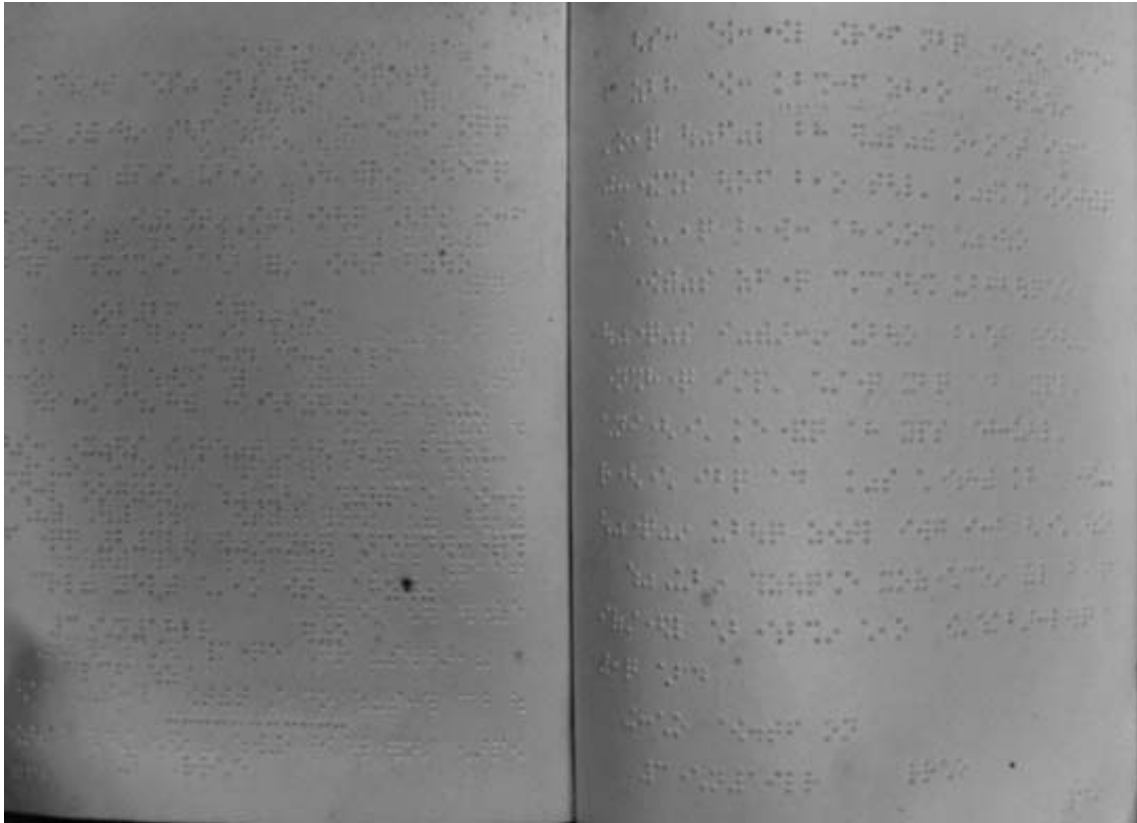
あの きの ことを はなしたら
はじめて きた きねんの き
だいに すると おっしやった
だい25 め

「ひとあめ ひとあめ あたかかになつて よい あんほい
です」

と おかーさんが だれかに おっしやつて いるとき わた
くしわ にわえ でした あめあがりの にわわ ぼーつ
と けむつて いました

いけのはたえ いって みると しょーぶが こゆび
ほどに めを だして いました うちの ひとわ みんな
しらずに いるから ひとつ とつて いって みせよーと
おもつて てを だすと

「ぎいちゃん それわ おせつくに つかうですよ」
という ねーさんの こえが しました ねーさんわ あか
たすきを かけて てあらいばちの みづを かえて いました



なるほど きよねん こいのぼりを たてたとき しょーぶと よもぎを のきえ さした しょーぶゆを たてて うちぢゅーの ものが はいった かしわもちを こしらえて いただいた こんなことを おもいだして かきねの ほーえ いくと しゃくやくが あかい めを だして いました

だい26 いせさんぐー

1 にゅーえいちゅーの あにえ

そのご おさわりも ごさいませんか おとーさんわきのー ぶんけのおちさんと よぎしゃで いせさんぐーに たたれました さんばいを すましてから きよーとえ でて 23にち けんぶつして かえられるそーです うちにも むらにも かわった ことわ ありません

3がつ18にち せんた

あにうえ さま

2 ちちから

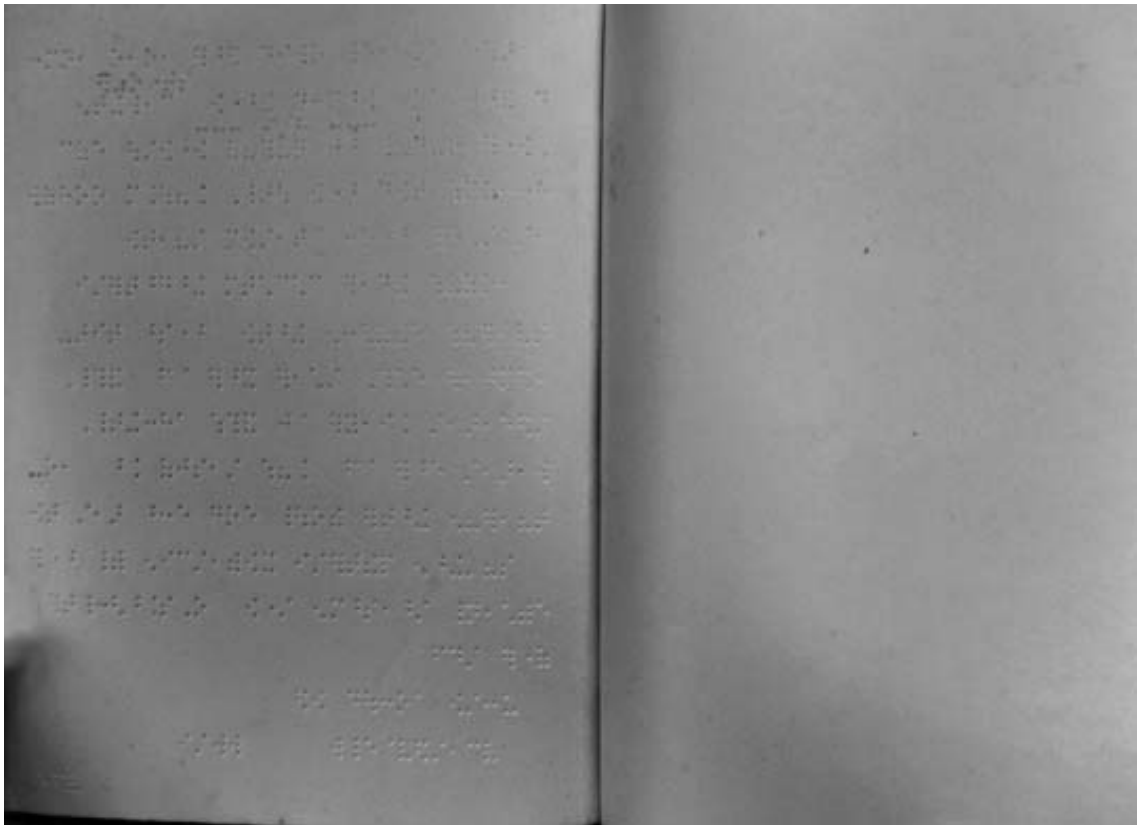
きのー しょーごに こちらえ ついて ごご げくーえ まいり きよー ないくーえ まいった うちはしを わたって しんえんに いり せんねんも たったかと おもうろーぼくの したえ いった ときこわ なんとなく ころもちが かわって いっそー ありがたく かんじた

ごもの まえで うやうやしく はいれいしてから しんでんの おんもよーを はいした いっさい しらきづくりで おやねわ かやで ふいて ある むねにわかつおぎが ならべて あり むねの りよーはしにわちぎが おいて ある なんの かざりも ない ごしんでんを はいして まことに おそれ おーい きが した

さんばいを すましてから ふたみがうらを みに いて おみやげに かいざいくを かった こわさないよーにして もって かえる

ゆーかた きよーとえ たつ

3がつ19にち ちちから



せんたどの

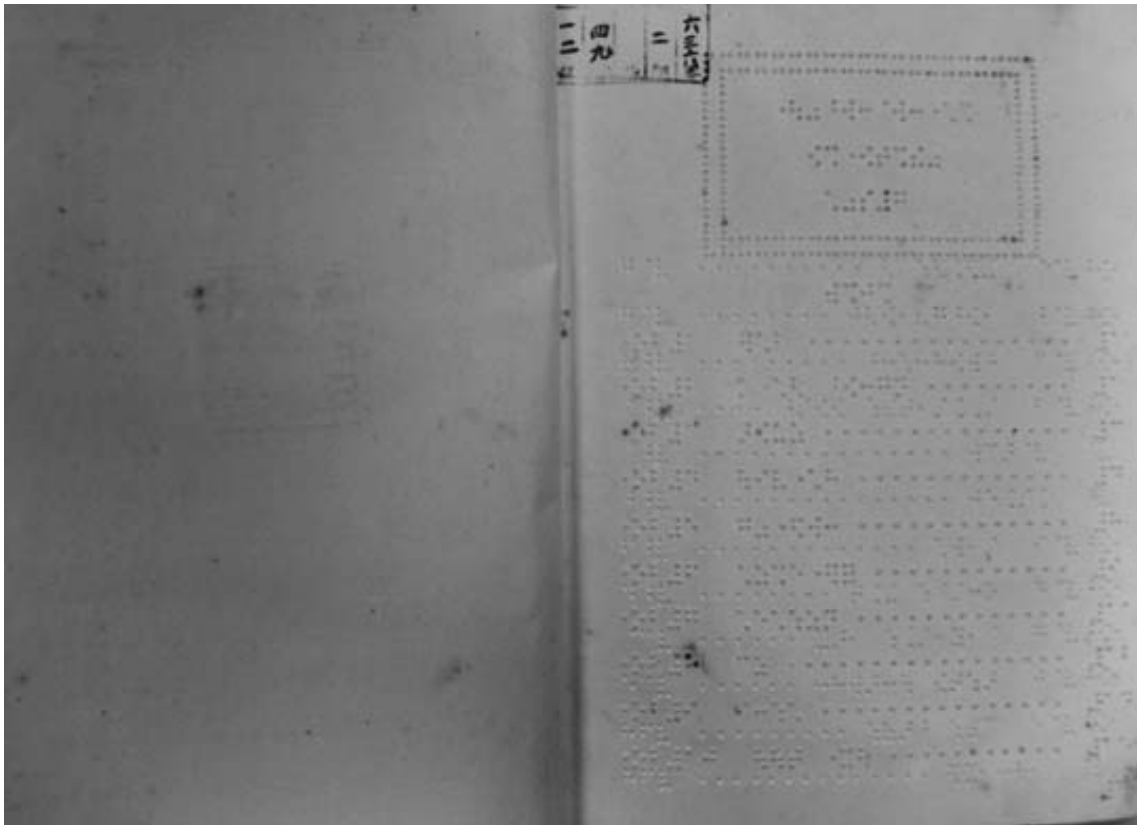
—— おわり ——











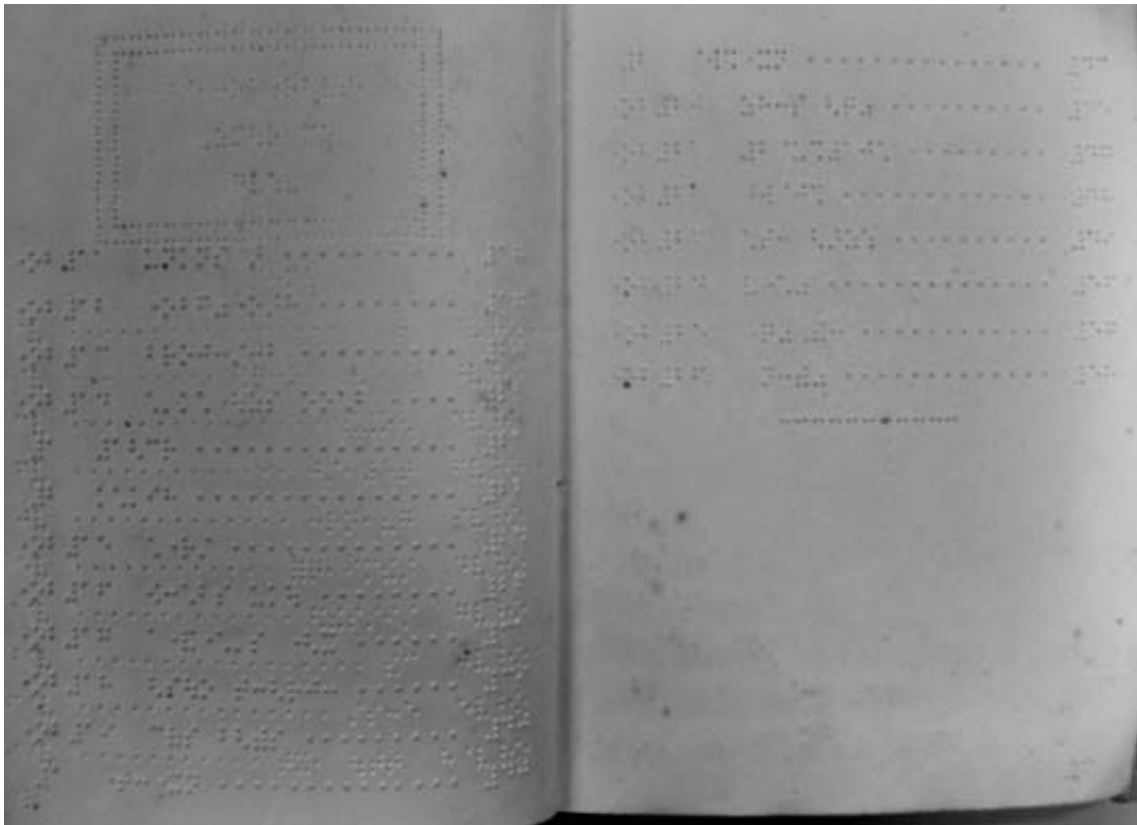
じんじょ-しょ-がく

こくごとくほん

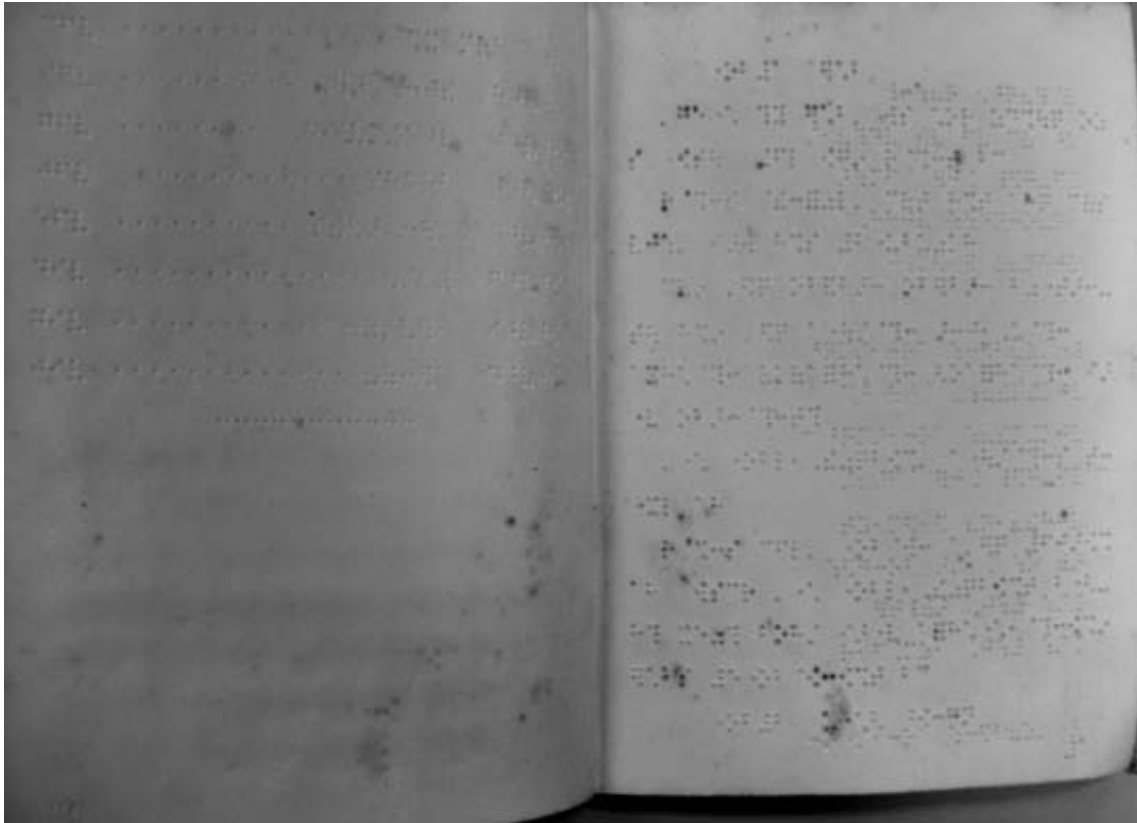
かんの7

もくろく

だい11	せかい	1	
だい12	ながき	ぎょ-れつ	1
だい13	よこはま	3	
だい14	しおひがり	4	
だい15	れんげそ-	8	
だい16	かまくらぜめ	9	
だい17	からかさまつ	11	
だい18	うま	12	
だい19	お-さか	14	
だい110	ししと	ぶし	15



だい111	はつなつの よ	17	2	しょくぶつ	43
だい112	だいけんだより	17	だい120	まりーの きてん	45
だい113	いちたろーやーい	20	だい121	2ひやく10か	47
だい114	かわなかじまの たたかい	21	だい122	じよりよく	48
1	1きうち	21	だい123	かとー きよまさ	49
2	なかなおり	22	だい124	ひがん	56
だい115	かぢや	24	だい125	でんぼー	57
だい116	こーかいの はなし	26	だい126	ちゅーもん	58
だい117	あべかわの ぎふ	31		-----	
だい118	きのした とーきちろー	39			
だい119	うみの いきもの	40			
1	どーぶつ	40			



だい11 せかい

われらが すむ せかいわ その かたち まるくして たま
のごとし ゆえに これを ちきゅーと いう

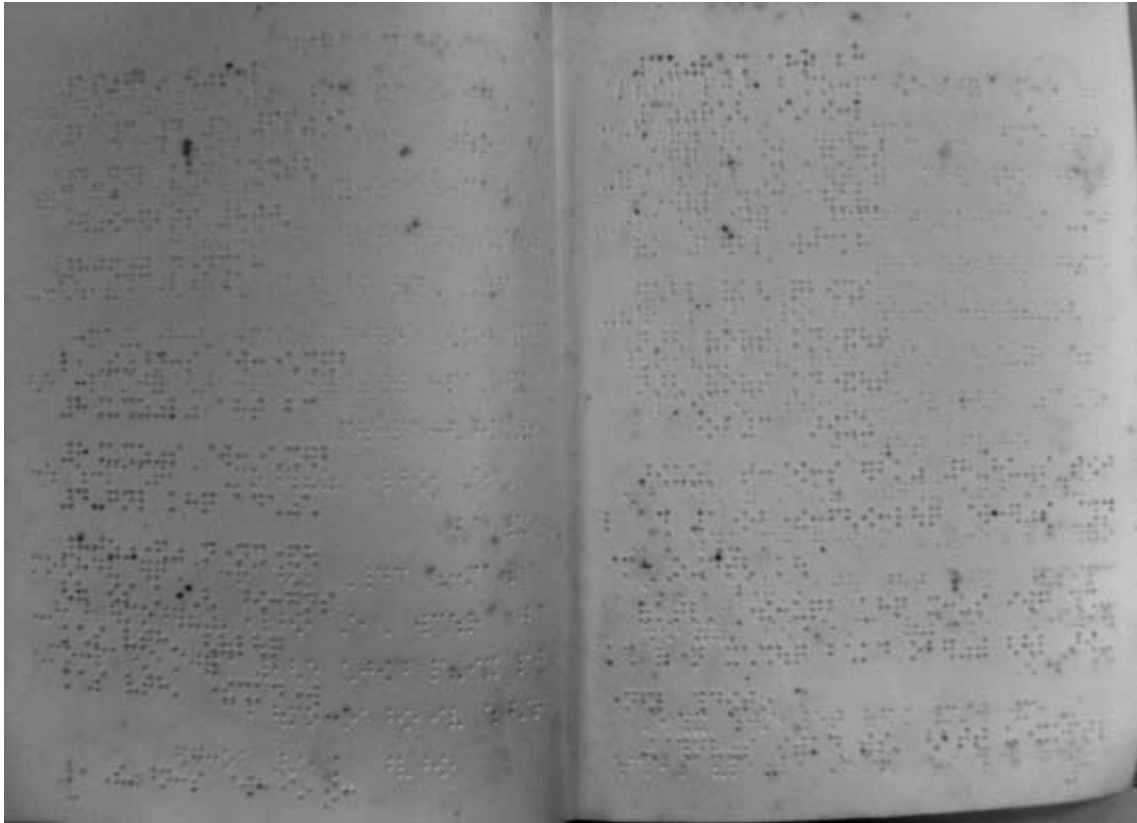
ちきゅーの ひょーめんこわ うみと りくと ありて うみの
ひろさわ およそ りくの 2はいはんなり

うみを わけて たいへいはー たいせいはー いんどよー
とし りくを わけて あじやしゅー よーろつぱしゅー
あふりかしゅー みなみあめりかしゅー きたあめりかしゅー およ
び たいよーしゅーとす

わが だいにっぽんていにくわ あじやしゅーの とー
ぶに あり

ちきゅーの うえにわ たいしよー あわせて 60よこく
あり そのうち わが だいにっぽんていにくと いぎ
りす ふらんす いたりや および あめりかがしゅーこくを
せかいの 5たいきよーこくと いう

だい12 ながき きよーれつ

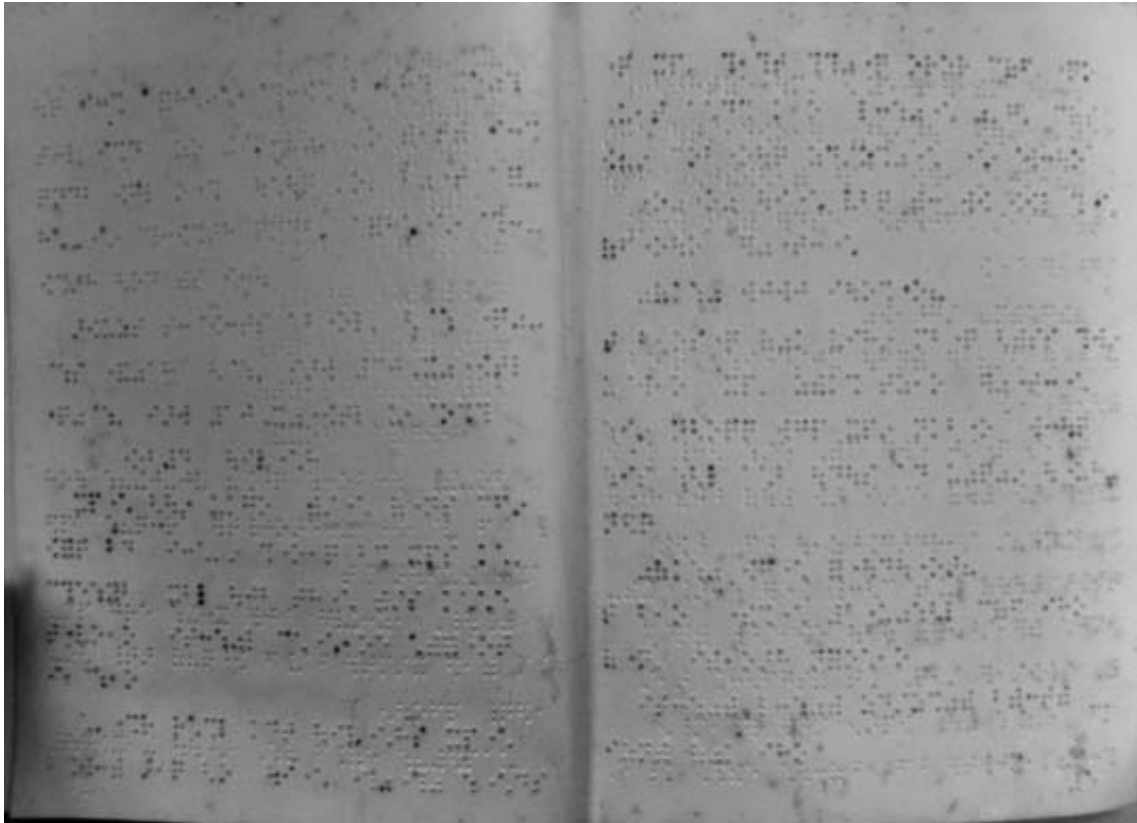


1ねんせいを せんとーに
2 3 4 5 6ねんが
4れつに なりて あるとき
ぜんこーせいとの 800わ
80けんも つづくなり

につぼんぢゆーの しょーがくせい
8びやくまん(にん) ありと いう
8びやくまんの しょーがくせい
4れつに なりて あるかんか
80まんげん つづくべし
きみ この ながき ぎょーれつ
なかの ひとりわ きみに して
なかの ひとりわ ぼくなるぞ

につぼんぢゆーの しょーがっこー

3まんちかく ありと いう
3まんちかき がっこーに
わかれて まなぶ われわれの
のぞみに むかう あしなみわ
みな 1せいに そろうなり
せかいに ひなき ていくの
つよき みたみと なるべしと つよき みたみと なるべしと
だい13 よこはま
よこはまわ とーきょーの せいなん8りはんの ところ
にある1だいぼーえきこーにして しょーせん
の しゅつ にゆー たゆるとき なし
みなとにわ ぼーはてい ありて ふーはの おそれ すぐ
なく みづ ふかくして いかなる たいせんも きしに よこ
づけに することを う
ゆしゅつひんの おもなる ものわ きいとと はぶたえとに



して おーく あめりかがっしゅーこく いぎりす ぶんす
とーにおくる また ゆにゆーひんわ わた もっとも おーく
てつるい これに つぐ しかして わたわ いんど あめ
りかーがっしゅーこくより てつるいゆ あめりかがっしゅー
こくより きたる もの おーし

よこはまと とーきょーとの あいだにわ きしゃ でん
しゃの べんあり きしゃわ およそ 30ぶんごとに
でんしゃわ およそ 10ぶんごとに はっちやくす

だい4 しおひがり

ふねが きしをはなれた もやが みづの うえを
こめて いる おーかやを くだって いく ふねの なかわ
うすらさむい ふいに しるい とりが もやの なかから
とびたつた おとーさんに うかがつたら かもめだと
おっしゃつた

かわぐち ちかくに なる と しおひがりの ふねが
いくそーも よって きた しおが ずんずん さがるの

で ふねわ すつすと すすんで たちまち うみえ でた
ぱつと あかるく なつた にーさんが 「われわ うみの
こ」を うたひだして まるやまくんが がっしゅーした

だんだん しおが ひいて もーそこ ここに すが
みえだした せんどーが

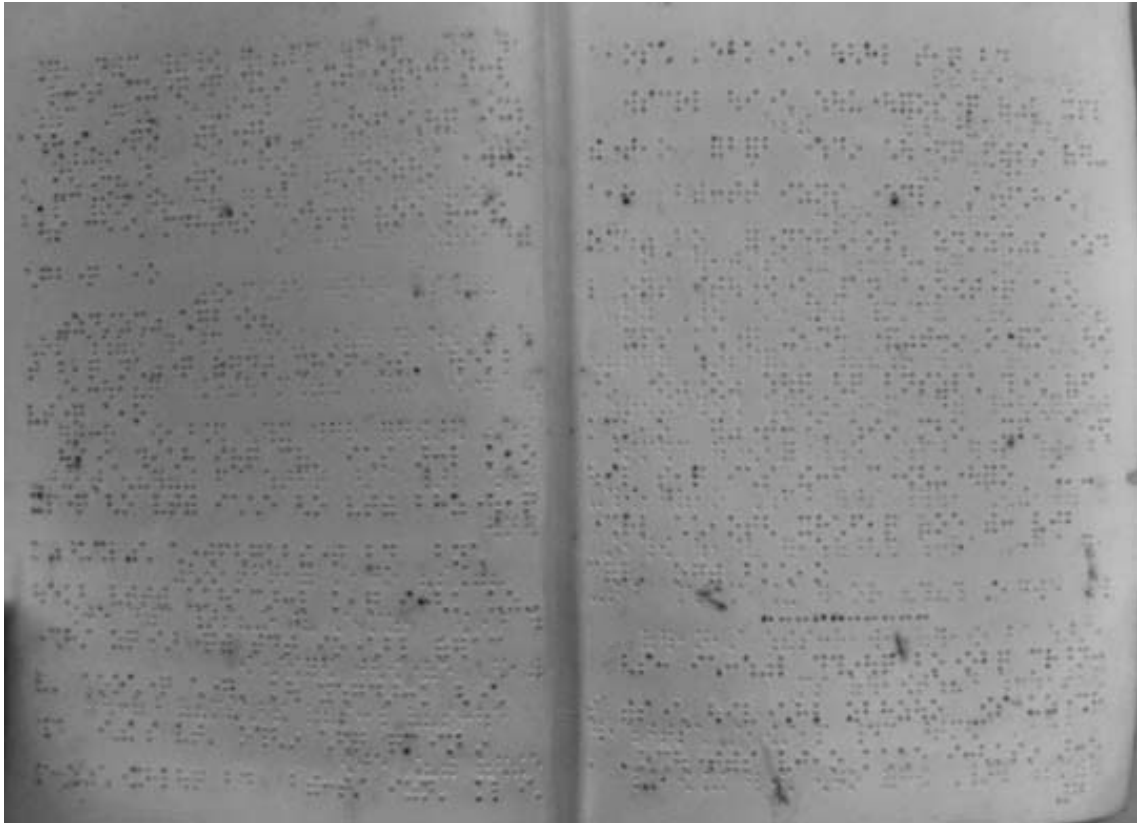
「みなさん そろそろ おしたくだ」

と いったので みんな はおりを むいで きものの すそを
はしよつた ふねわ まもなく とまつた せんどーが
さおを つきたてて それに ふねを つないだ そーして
さおの さきに あかい しるしの ある はんてんを しぱり
つけて

「みなさん これが めじるしだよ」

と いった ぼくが 1ばんさきに うみえ おりた
みづわ おもつたより つめたかつた

おとーさんも にーさんも まるやまくんも いもーとも
おまつも みんな おりた



ちーさい くまでで すなを かくと おもしろいよーに
あさりが でた ときどきわ てごたえして おーき
な はまぐりが でた あさい みずたまりを あるくと
あしの うらが ぬるりとした おさえて みたら ちーさな
かゆいで あった

「まるやまくん かゆいだ」

と いうて つかんで みせると ふりかえったのわ しらない
ひとで あった

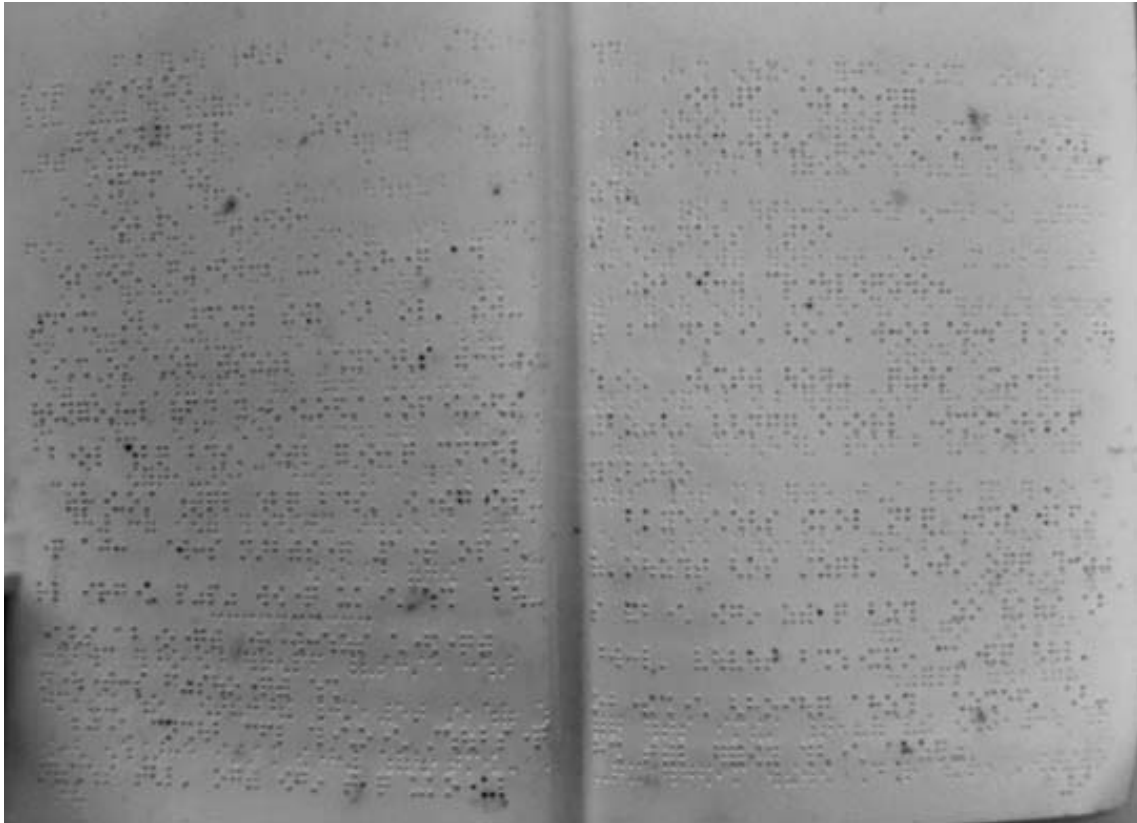
しおが すっかり おちて うみわ おかの よーに なった
ふねで きた ひと おかから きた ひとも いりまじって
なんびやくにんか かぞえきれないほど いる いくつか
しらない ひととも はなしあうよーに なって おーきな はま
ぐりや まてがいでと とると おたかいに みせあう
ひわ あたたかか でかぜわ なし むされるよーな きが
する おんなの ひとわ たすきを かけて てぬぐいを
ねーさんかぶりになっている いもーとや おまつわ なにか

あったのか わらいながら しきりに とって いる

そのうちに しおが さしはじめたので みんな ふねに
もどった めいめい ざるを かしげて えものを みせ
あった いもーと おまつの ざるにわ やどかりが
たくさん いた めづらしかったのわ まるやまくんの ざる
に たつの おとしごが 1つ あったことで あった

ふねの なかで ゆっくり ベンとーを たべた しお
が だんだん さして きて いつのまにか すが みえ
なくなった せんどーが さおを めいた ふねわ あげ
しおに のって おかの ほーえ うごきはじめた かわ
ぐちに かかったとき ふりかえって みたら もー ひろい
うみにわ たれも いなかった

きのー おかーさんに るすをして いたたいて うちぢゅー
の ものが しおひがりに まいりました この はまぐり
わ わたくしどもの ひろった なかから おーきなのを よった



ので ございます

4がつ23にち まさお

おぢうえ さま

たい5 れんげそー

このごろわ れんげそーの はなざかりで ある

4かくな たにわ 4かくに ほそながい たにわ ほそ
ながく たの かたち そのままに あかむらさきの もーせんを
しきつめたよーに みえる むぎばたけや なたねばたけの
あいだに さいて いるのわ ことに めだって うつくしい

みちばたや どてに さいて いるのわ こぼれたね
で あるー きょーの つよいもので 1ど たねが
ちに おちれば ねんねん そこで はなが さく いし
がきの あいだでも ちぞーさまの かげでも
つじどーの えんのしたでも さく

いろが うつくしい うえに すかたが やさしいので
つみくさの ときにわ たれも これを とって はなたばに

する

たい16 かまくらせめ

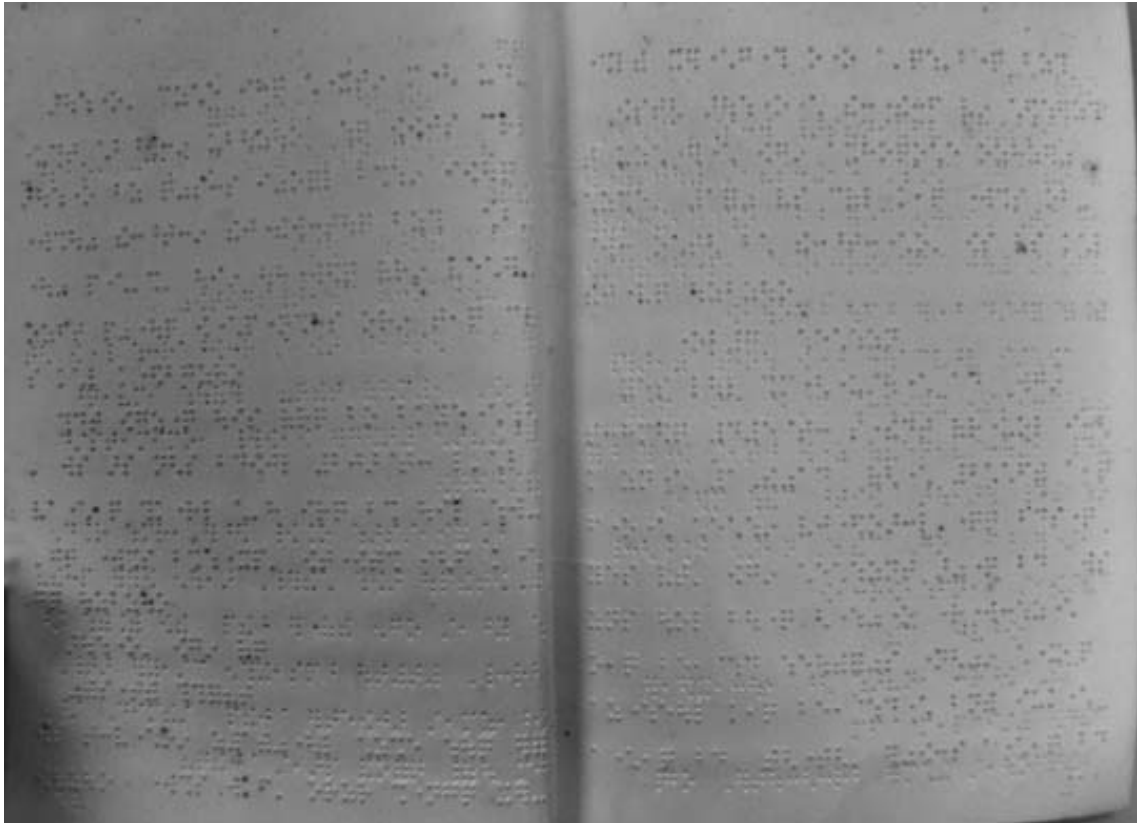
「ごらくじさかの みかたが あやうー ござい
ます」

と いう つかいの あとから

「たいしょーも うちじにされました」

と いう つかいが きたが そーたいしょーの につた よし
さだわ びくとも しません てもとの ぐんぜい
2まんきを ひきつれて ただちに ごらくじさかえ
むかいました

いなむらがさきの こなたに ついて ぞくの そなえを
みわたしますと きたの やまてにわ きどを たてて すーまん
の へが これを まもって います また みなみの かい
じょーにわ ひしひしと いくさぶねを うかべて きしにわ
たいぼくが きりたおして あります かまくらえわ かい
りく とともに せめこむ すきが ありません



よしただわ うまから おりて かぶとを ぬぎ はる
ばると かいじょ-を はいしました さて こころの うちに
よしただ いま てんの-の おんために いくさを おこして
ぞくしん ほ-ぢょ-を ほろぼそ-として います かい
じん ねがわくわ しおを しりぞけて みちを ひらかせ
たまえと ねんじて こがねづくりの たちを とって
の なかに なげゆりました

すると これまで しおの みちて いた いなむらがさき
わ その よの つきの いるころに 20よちよ- にわか
ひあがって すなごに かわり おちて いく しおに さそ
われて ぞくの いくさぶねわ ことごとく おきえ なが
れて しまいました

よしただわ これを みて

「ものども すずめ」と

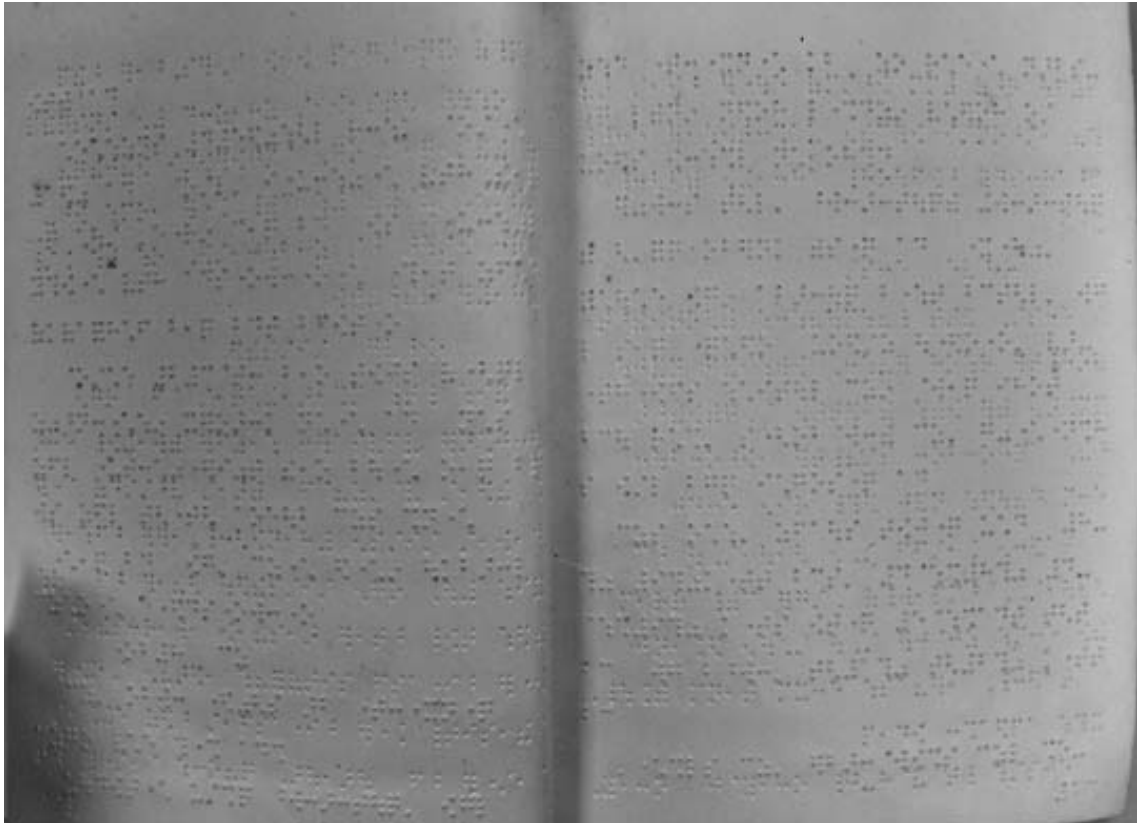
その と-ひがたを ま1もんじに かまくら さして せめ
こみました ぞくの そなえわ たちまち くづれ ふせ

くにも ふせかれず ただ あわてさわいで います

このとき よしただが ほ-ぼ-え ひを かけさせます
と はまかせが これを あふりたてたから たまりません
かまくらわ 1めんの ひの うみに なって ぞくの たい
しよ- たかとき いか ほ-ぢょ-がたわ この ひの なに
ほろびて しまいました

だい17 からかさまつ

むらの にしに くぬぎばやしがある それを
と-りぬけて 45ちよ- のぼると みちばたにお-き
な まつが 1ぼんある みきが 2かかえも あって
えだが からかさを ひろげたよ-に でて いるので
むらの ひとわ これを からかさまつと よんで いる その
まつの したに いしで きざんだ ぢぞ-さまが
たって いらっしやる さらしもめんの づきんを かぶって
あまざらしに なって いらっしやるが いつも おはなが
あがっている ときどきわ せんこ-の あがっている



ことも ある

からかさまつの 45けんさきに ちーさな ちゃやが
1けん ある ちゃやにわ おばーさんが ひとりぼっち
で かしゃ わらぢを うっている この おばーさんに
むすこが ひとり あるのだそーだが ずっと まえから
みなみあめりかえ いっているということだ

ちゃやから 23ちよー いった ところの みぎてに
まんぢゅーばさを ふせたよーな つかがある つかの
まえに ばとーかんぜおんと ほった いしが たって
その まえに ときどき あたらしい うまの くつが
あがっている これわ うまが けがを しないよーに
うまかたが あげるのだそーだ

だい8 うま

うまわ たいそー げんきの よい どーぶつで
うまれた ひから すぐ あるく

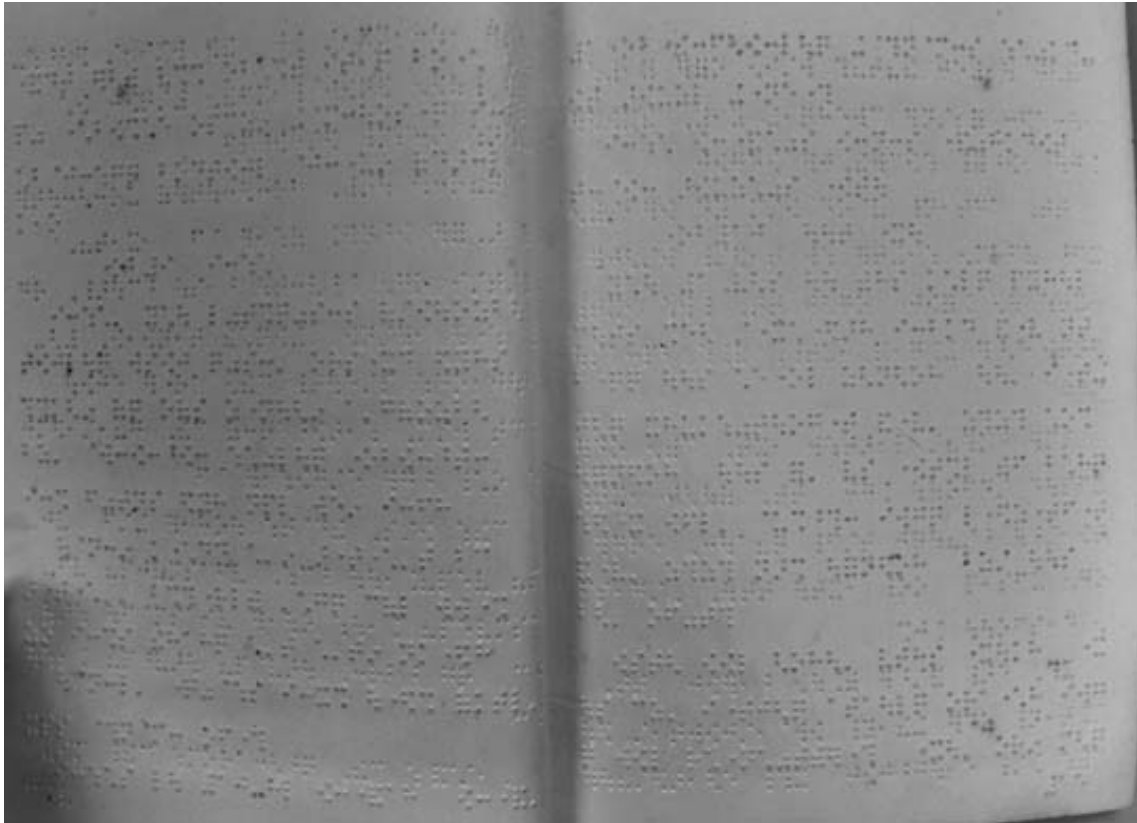
はしることが はやくて じょーよーとしてわ これに

まさる どーぶつがない また ちからが つよいの
で にもつを つけたり にぐるまを ひかせたり たや
はたけの こーさくに つかったりする

せんそーの ときこわ じょーよーとしても ゆそーよーとして
も きわめて たいせつな ものである ぶじんわ
むかしから これを あはーして いざと いうときにわ これ
に のって でかけた はたけやま しげただわ ひよ
どりごえの さかおとしに うまを しょって おりたと
いうし ちかくわ のびたいしよーも うまわ れんがづくり
の こやに いれて おかれたのである

うまの たかさわ まえあしの ところではかる 8
すん 9すんなどというわ 4しゃく8すん 4
しゃく9すん などの ことで 5しゃくあると ときと
いう それ いじょーわ とき1すん とき2すん などと
いう

わがくにの うまわ せいよーしよこくの うまに くら



べると せいも ひくく たいかくも おとつて いたが きん
ねん がいにくから たねうまを ゆにゆーしたので おーいに
かいりよーされて いたるところに りよーばを みるよーに なつた
だい19 おーさか

おーさかわ むかし にんとくてんのーの みやしまいし
ところにして そのころ てんのーわ たちのぶる けむりの
すくなきを みて たみの まづしきを あわれみたまいき
いまわ しょーこーぎょー さかんにして だいにー ちよー
おーく えんとつ の けむり つねに そらを おーえり

しちゆーを ながるる かわを よどかわと いう
よどかわわ いくすぢにも わかれて うみに そそぐ
また おーくの ほりありて かわと かわとを つなげり
しちゆーにわ でんしゃの おーふく しげく みなとに
ふねの しゆつにゆー たえず

おーさかの にし 10りに こーべあり こーべわ

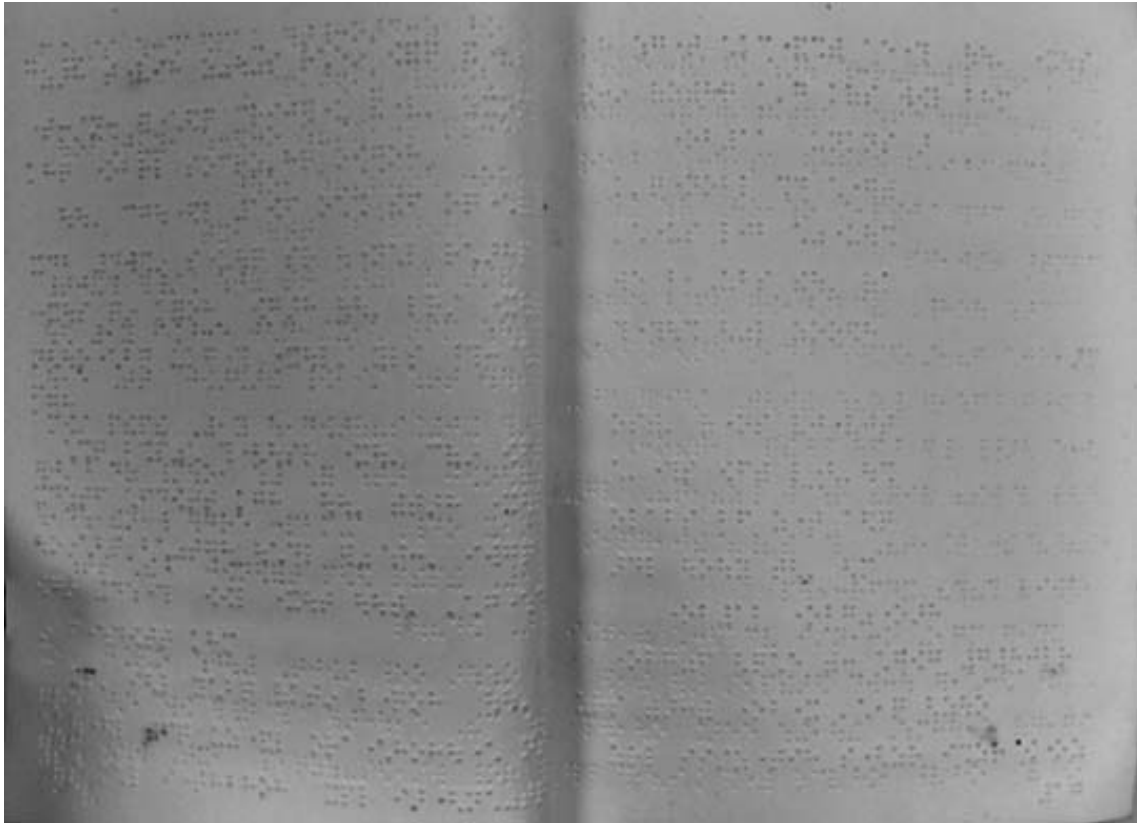
1だいぼーえきこーにして ゆしゆつにゆーの さかんなる
こと よこはまに ゆづらず

おーさか こーべかんの こーつーの べんりなること
とーきよー よこはまかんの ごとし

だい110 ししと ぶし

むかし 1ひきの しし もりの なかにて ねむりしに
うしろの くらき やぶかげより おーいなる へび つと
いでて ししの からだに まきつきたり ししわ おど
ろきて ぶりはなさんとしたれど へびわ ますます かたく
しめつけたり ししの めわ ひの ごとくにもえ いかりて
さけぶ こえにわ ひやくじゆー おそれて にげまどえど
へびわ ますます つよく しめつけたり いまや ししの
いきわ たえんとす

このとき ここに きたりしわ ひとりの ぶしなり ぶ
しの うまわ おどろきて あとあしにて たちあがり おそれ
て そこに ちかづかんともせず ぶしわ たちを ぬきて



うまより とびおり まんしんの ちからを こめて へびの
どーちゅー めがけて うちおろせば へびわ まふたつと
なりて たいちに のたうちまわりて たおれたり

ししわ うれしげに 1こえ たかく ほえ たてがみを
ふるい 4そくを のばして のち しづかに ちかよりて
ぶしの てを なめたり これより ししわ にちや ぶしに
つきしたがいて はなれず ぶしにわ むにの じゅーしゃと
なれり

かくて いくねんか すぎしのち ぶしわ うみを こえて
ふるさとえ かえることと なれり ししわ もとより ぶしに
したがいて いかんとせり しかるに せんちよーわ おそれて
これを ゆるさず ここに ぶしと ししとわ わかれざる
を えざることと なりぬ

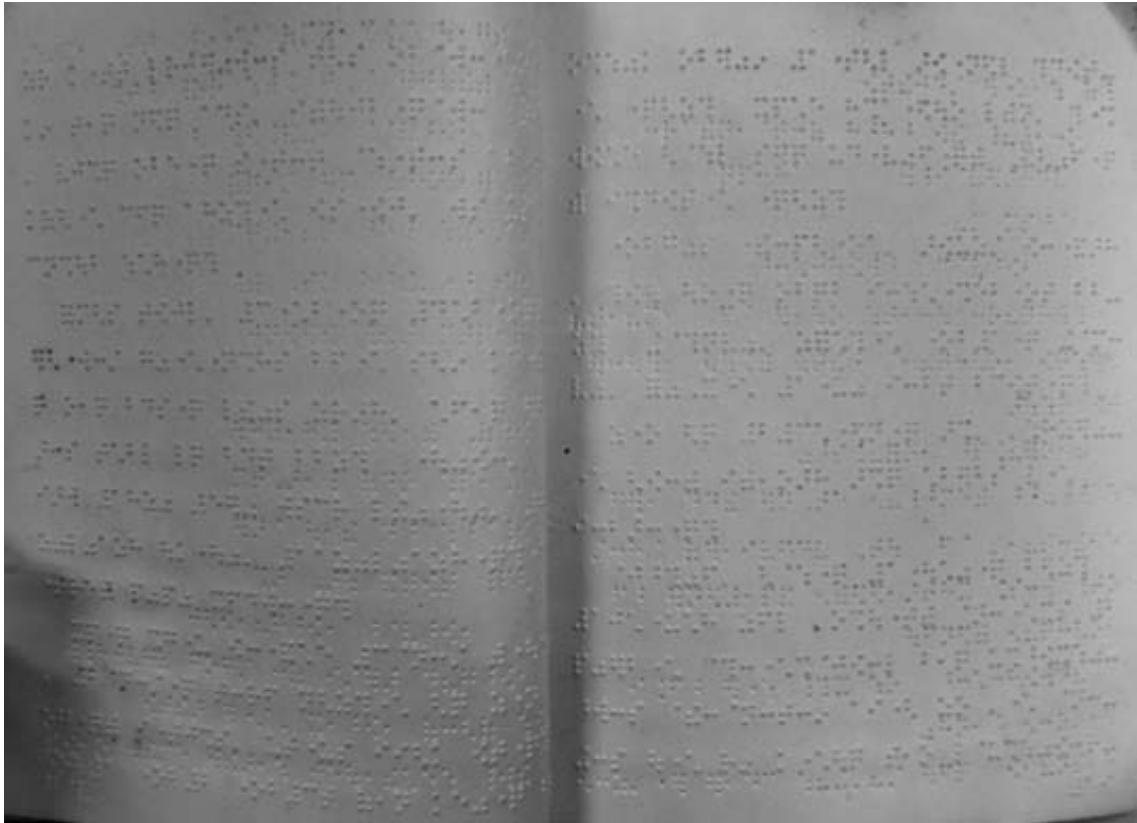
ふねわ おきに むかいて みなとを いでたり ししわ
かなしげに ほえて はまべに たちあがりたりしが つと
うみの なかに おどりいりたり ぶねに およぎつかんとて

なり されど かなうべくも あらず ししわ ぶしの
ほーを みまもりて あわれ なみの そこに いりぬ

だい11 はつなつの よ
なわてづたいに くる かぜも
わかばの におい かんぱしく
そら いっぱいの ほしわ みな
すずしく きんに またたけり

たのもわ みづの ひろびると
かわずの こえも にぎわしく
たにあいの いえ まど あけて
よるに したしむ ときわ きぬ

だい12 だいにんだより
だいにんえ きてから もー かれこれ 780にち
まちの もよーも たいぶ わかって きました
まちに おおやまどおり のぎまち おくまち こだま



まち などと にちろせんそーの ときの たいしょーがたの
なを とって つけて あるのわ おもしろいでしょー とおり
わ ひろくて たいらで ほどーと シャどーの あいだに
なみきが うえて ありますが このごろわ その はの
うつくしい さかりです

めぬきの ところにわ 3かいだて 4かいだての
せきぞーや れんがづくりの いえが のきを ならべ
て たって いるので にほんの まちよりわ かえって せい
よーの とかいい にて いると います じんこーわ
およそ 18まん 5せん そのうち にほんじんわ 7
まんにんあまり しなじんわ 11まんにんあまりですが
どちらも ねんねん ふえるそーです

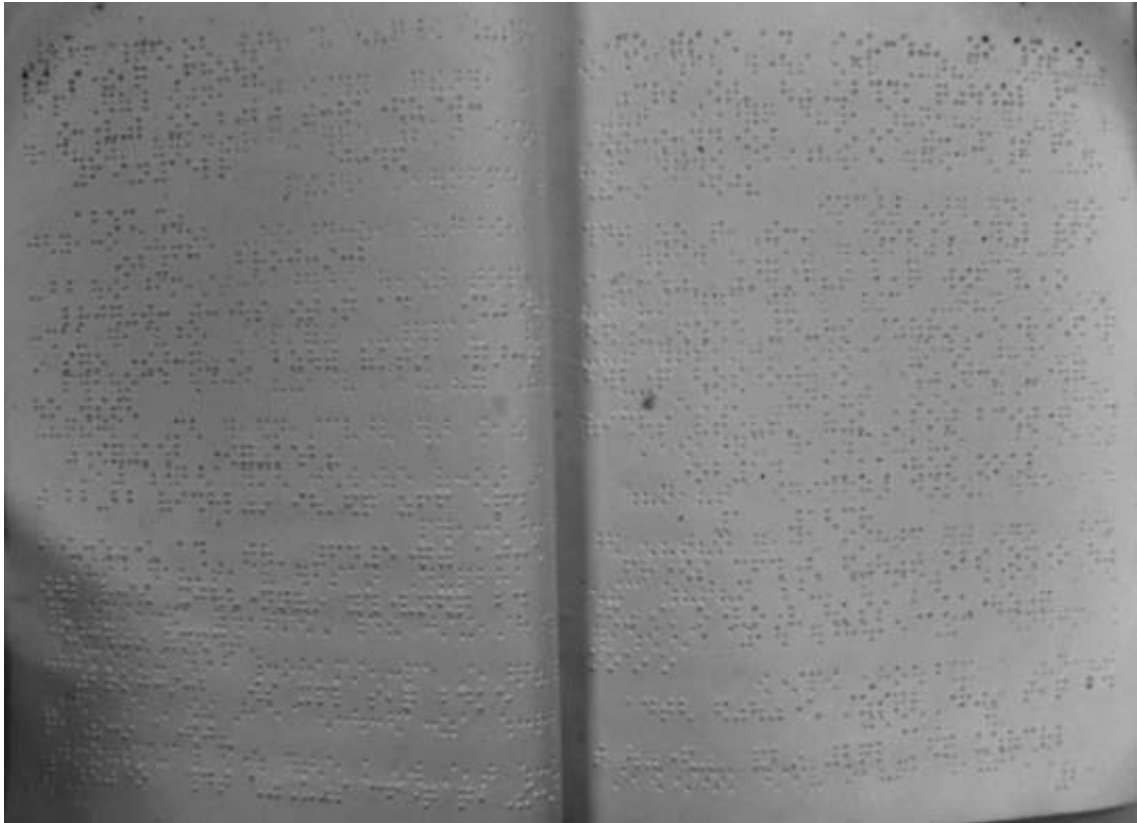
ふねで くれば こーべから 3ちゆーや もじから
わ 2ちゆーやで とーちえ つきますが きて まづ
たれでも おどろくのわ はとばの おおきな ことです
だい11 だい12 だい13と みつつ ならんで いて

たくさんな たいせんを 1どきによこづかに すること
ができます ふねから りくあげした にもつわ すぐ
そこから きしゃに のせて はるびんえでも べきんえで
も おくることが できます

たいれんの ぼーえきだかわ よこはまや こーべより
わ すこし したで たいてい おーさかぐらいたと います
ゆしゆつひんわ まめかすが だい1で ゆにゆー
ひんわ めんぶが1ばん おーいと ということです

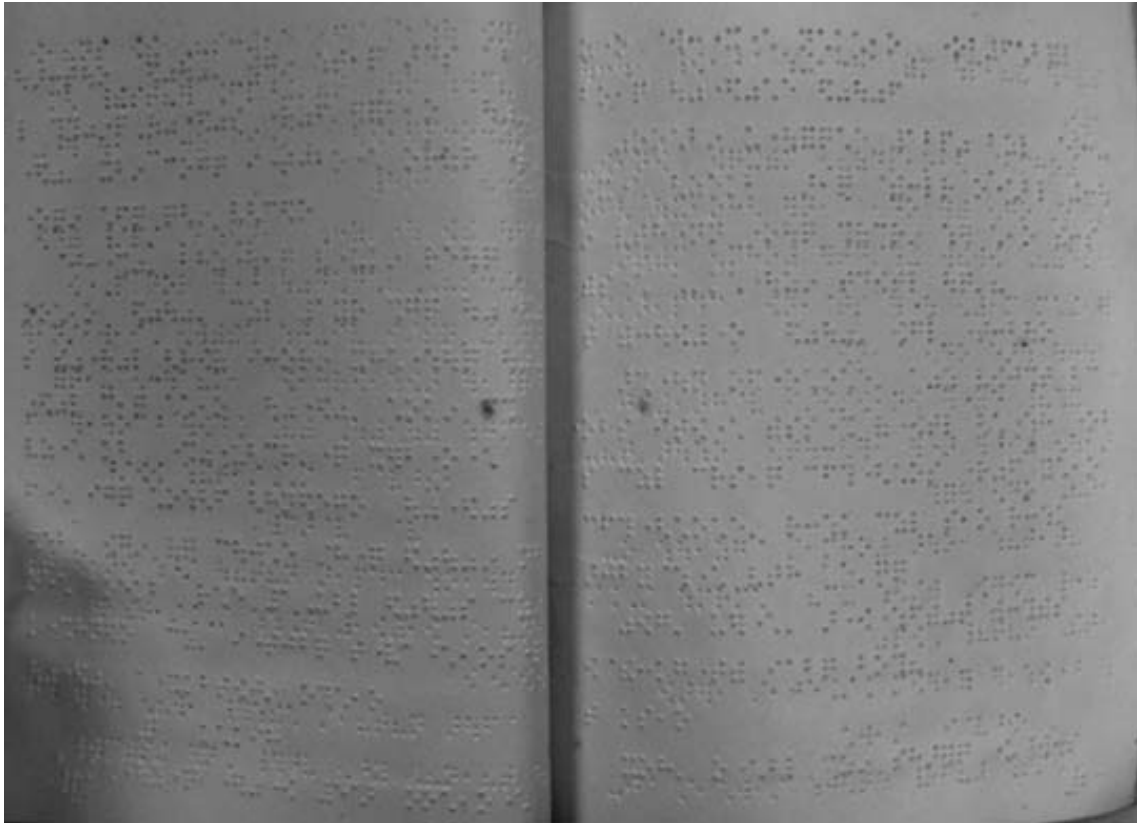
まだ きて 23かげつで よくわ わかりません
が きこーも おもったより よくて かいせいの ひが
おーいよーです

りよじゆんえわ きしゃで 1じかんで いけます
10かばかり まえに わたくしども ちゆーがくの 2
ねんせいが しゆーがくりよこーに いてはくぎよくさん
じよーの ひよーちゆーとーを あおぎ また わが ちゆー
ゆーの しが ちを ながして とった にひやくさんこーち



にも のぼって かえりました
こーびんに また いろいろ もーしあげましょー
6がつ15にち りょーすけ
あいさく くん
だい13 いちたろーやーい
にちろせんそー とーじの こと である くんじん
を のせた ごよーせんが いましも みなとを でよーと
した そのとき
「ごめんなさい ごめんなさい」
と いい いい みおくりにんを おしわけて まええ である
おばーさんが ある としわ645でも あるーか
こしに ちーさな ふろしきづつみを むすびつけて いる
ごよーせんを みつけると
「いちたろーやーい この ふねに のって いるなら
てっぼーを あげる」
と さげんだ すると かんぱんの うえで てっぼーを

あげた ものが ある おばーさんわ また さげんだ
「うちの ことわ しんぱいするな てんしさまに よく
ごほーこーするんだよ わかったら もー 1ど てっ
ぼーを あげる」
すると また てっぼーを あげたのが かすかに みえた
おばーさんわ 「やれやれ」と いって そこえ すわった
きけば けさから 5りの やまみちを わらちがけで
いそいで きたのだそーだ くんちよーを はじめ
みおくりの ひとびとわ みんな ないたと いうこと である
だい14 かわなかじまの たたかい
1 1きうち
えちごの うえすぎ けんしんと かいの たけだ しん
げんが たびたび しなのの かわなかじまで
たたかった
あるとき けんしんが やまのてに ぢんを とって いる
と しんげんわ へいを 2てんに わけて はさみうちに



しよーとした けんしんわ それを さとって よるの あいだ
に すすんで しんげんの ぢんえ せめいった しん
げんわ ふいを うたれて おどろいたが たちまち ぢん
だてを かえて てきを ひきうけた

りよーぐんわ いりまじって ひばなを ちらして
たたかった けんしんわ うまに 1むち くれて しんげん
の ほんぢんに きりこみ おーたちを ふりかざして しん
げんに うって かかった しんげんわ かたなを ぬく
ひまがない ぐんばいうちわで ふせいたが
えが おれて かたさきえ きりつけられた しんげんの
けらいわ これを みて うしろから やりで けんしんを つい
たが あたらない ちから 1ばいりに けんしんの うまを
なくりつけた うまわ おどろいて とびあがったので
しんげんわ あぶないところを たすかった

2 なかなおり

かわなかじまで ぜんご 5かい たたかったが

まだ しよーぶが つかなかった だい6かいめに
いたって しんげんから けんしんえ

「たかいは はじめてから 12ねん いまに しよー
ぶが きまらない よって みよーにち たがいにも ゆーし
を ひとりづつ だして くみうちを させ かった ほーの
ものが かわなかじまを とることに してわ」

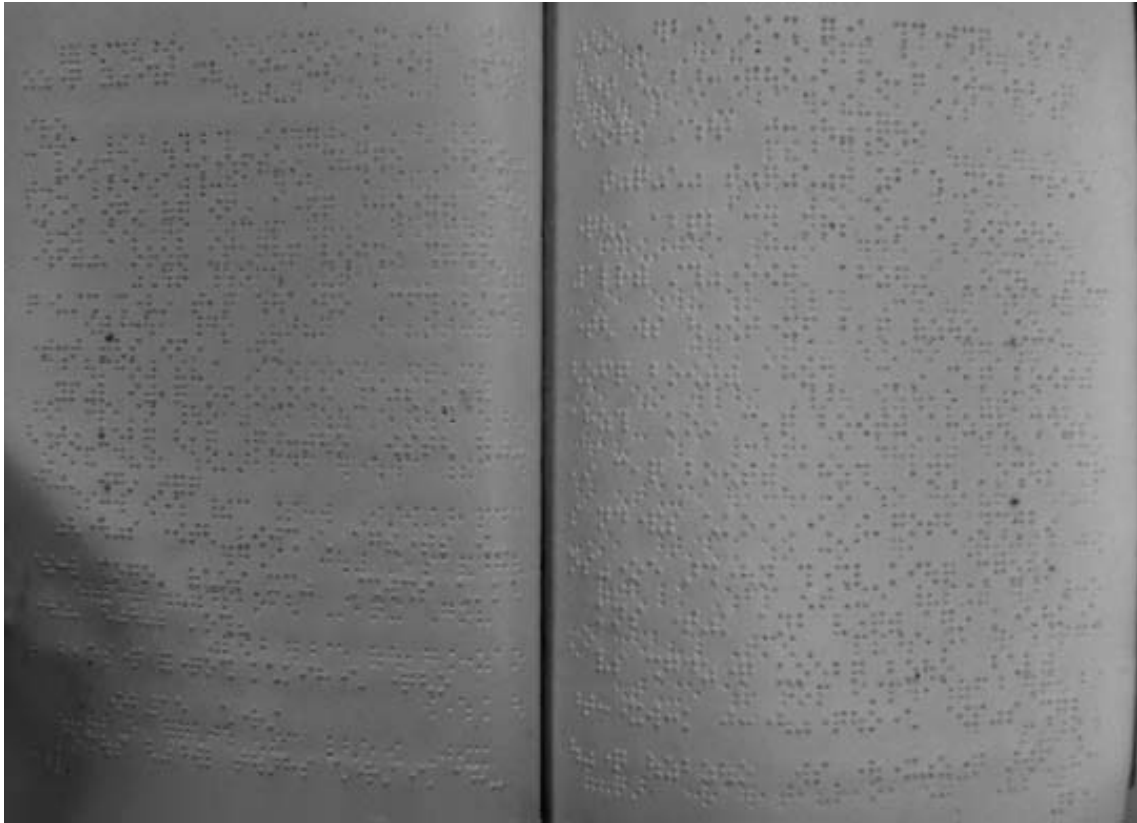
と もーしこんだ けんしんわ これに どーいした

よくじつ たけだかたからわ あんま ひころくと いう
だいの おとこが もののぐ みごとに きかざり だいの
うまに うちのって うえすぎかたの ぢんえ むかった
うえすぎかたらわ ちーさな うまに のった ちーさな
よろいむしゃが ひとり あらわれて

「これわ はせがわ よござえもん と もーすもの
こひよーなれども おあいて いたす」

と なのった

ふたりわ たがいにも うまを のりよせて ばじよーの



ままで むんずと くみ りよーばの あいだに
おちた

ひころくが よござえもんを くみふせた たけだ
かたが これを みて こえを あげて よろこぶと よご
ざえもんわ たちまち はねかえして ひころくを くみしき
てばやく くびを とって さしあげた うえすぎかたわ
どーと ときの こえを あげた

むねんに おもって たけだかたから 10きばかり
きどを ひらいて きって でよーとした このとき しん
げんわ これを とめて

「きじんの ごとき ひころくが あれほどの こ
ひよーに うたれたわ みかたの ふうん やくそくの かわなか
じまわ けんしんに わたす」

と いったので めでたく なかなかおりが できた

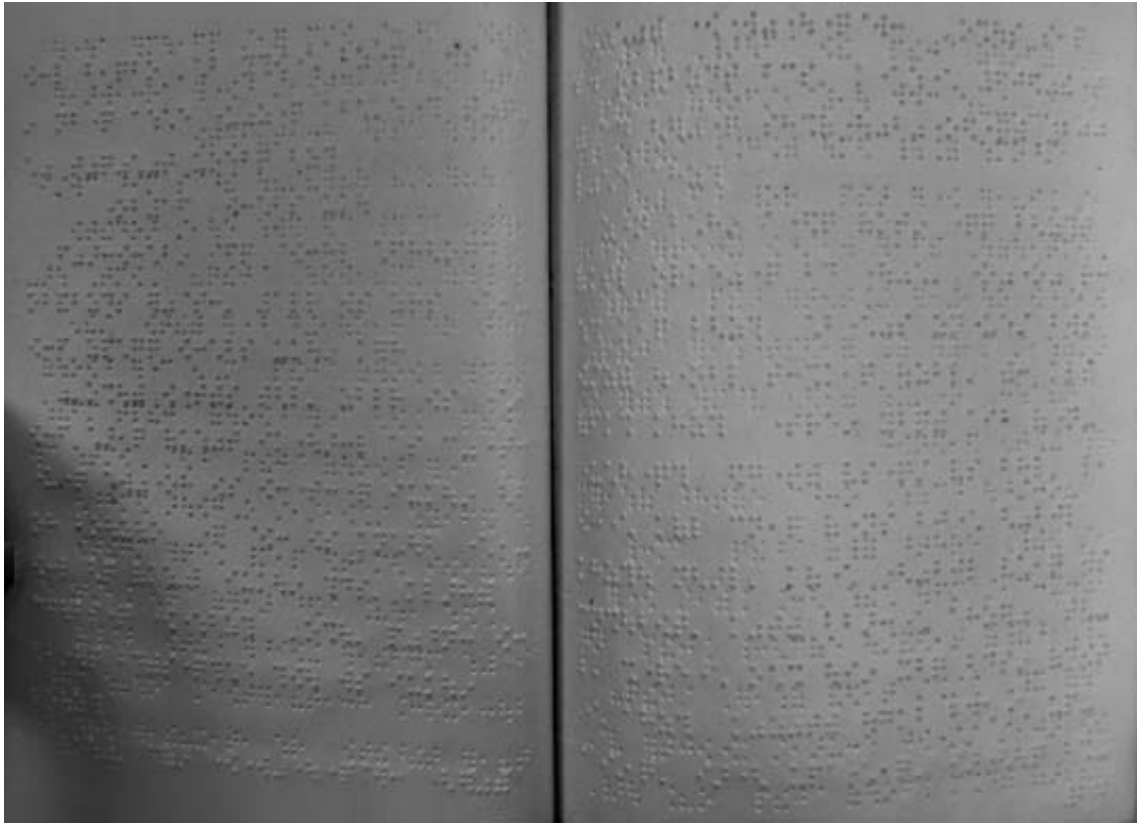
たい15 かぢや

わたくしの きんじょに としよりの かぢやが あり

ました せいが たかく めが するどくて ちょっと
みると こわいよーでしたが いたって しょーぢきで
きたでの やさしい るーじんでした

とんてんかん とんてんかんと まいあさ くらい うちから
でしを あいてに うつ つちの おとが きこえました
1にちも やすんだことわ ありません わたくしわ とき
どき その しごとばえ 行って みました かまを
きたえて いたことも あります くわを うって いたことも
あります なたを うって いたことも ありますし くるまの
わを うって いたことも あります いか わたくしの うち
の つるべの かなたがが こわれたとき つくろいを
たのんだら よくじつ すぐに なおして くれました

なつの どんな あつい ひでも あせを ながしなが
ら ひの くれるまで はたらいて いました いかにも
ちょーぶそーな るーじんでしたが きよねんの くれに
しんで しまいました その じぶんまで よそえ ほー



こーに いていた わかい むすこが いまでわ その あと
をついで あさから ばんまで あいかわらず とんてん
かん とんてんかんと はたらいて います

だい16 こーかいの はなし

えんよーこーかいを おえて きょーりに かえりきたれる
たいいまるの せんちよーわ 1にち その まちの がっ
こーえ まねかれて こーかいの はなしを なせり

「わたくしも こどもの ときにわ まいにち この がっ
こーえ かよって みなさんと おなじよーに あの うんどー
ばで あそんだり この こーどーで おはなしを きい
たり いたしました で きょー この なつかしい がっ
こーに きて みなさんに おはなしを するのわ なによりも
うれしので ございます わたくしわ ねんぢゅー こー
かいをして いるものですから すこし その おはなしを
いたします

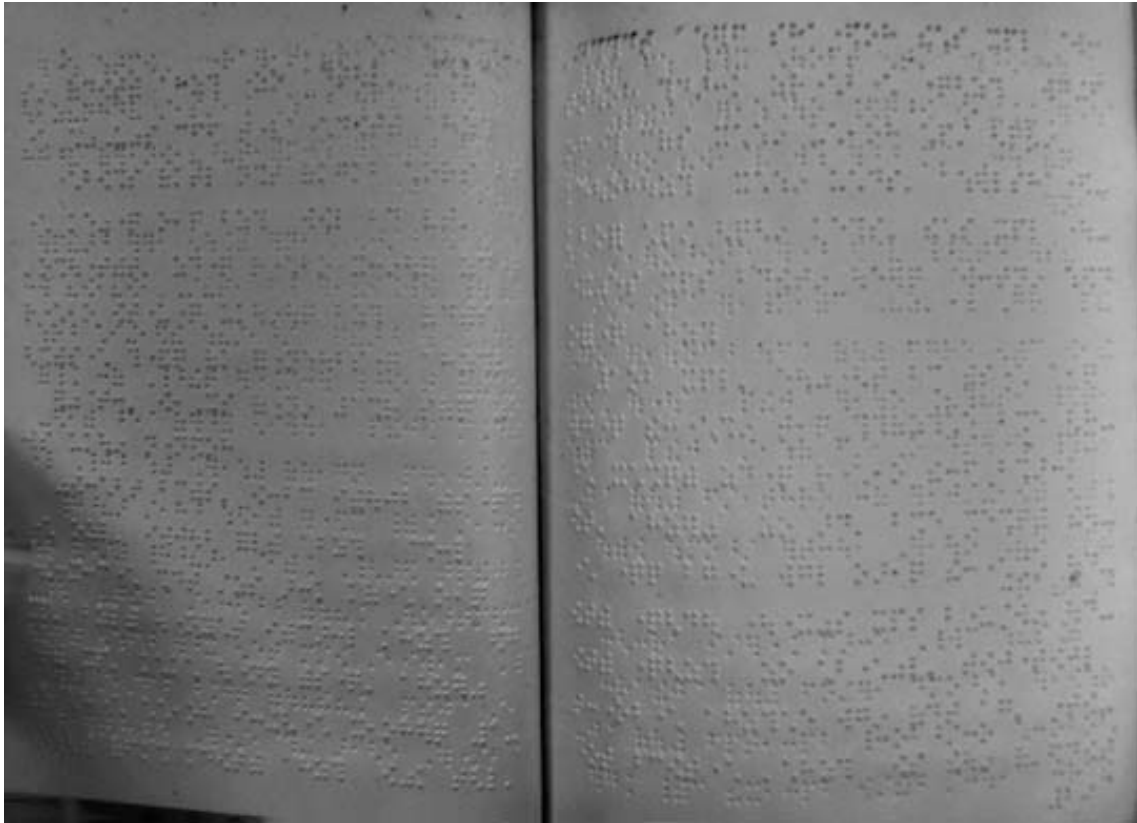
みなさんわ うみを ごぞんじでしょー きせんも

ぐんかんも ごぞんじでしょー わたくしの のって
いる たいいまる

と いうのわ ながさが60けんほど

も ある きせんて のりくみじんいんだけでも 200
にんから あります

まづ いかりを あげて みなとを でて いきますと
みなとに たちならんで いる じんかわ だんだん ちー
さく なって いきます かいがんの まつばらや いその
こやまも したいに とーくなくて しまいわ もー なにも
みえなくなります どちらを むいても あおい みづ
ばかりです けれども ひのでや ひの いりにわ にっ
こーが なみに うつつて みづの いろが きんいろに
なりますし つきよにわ なみが ぎんいろに ひかって その
うつくしいことわ なんともしいよーが ありません とき
にわ くぢらが たかく しおを ふいて いるのを みること
が あります なんまんともしれない いるかが はね
あがってわ およぎ はねあがってわ およぎして いく



のを みることも あります また あるときにわ とびうお
が かんぱんの うええ とびあがることも あります

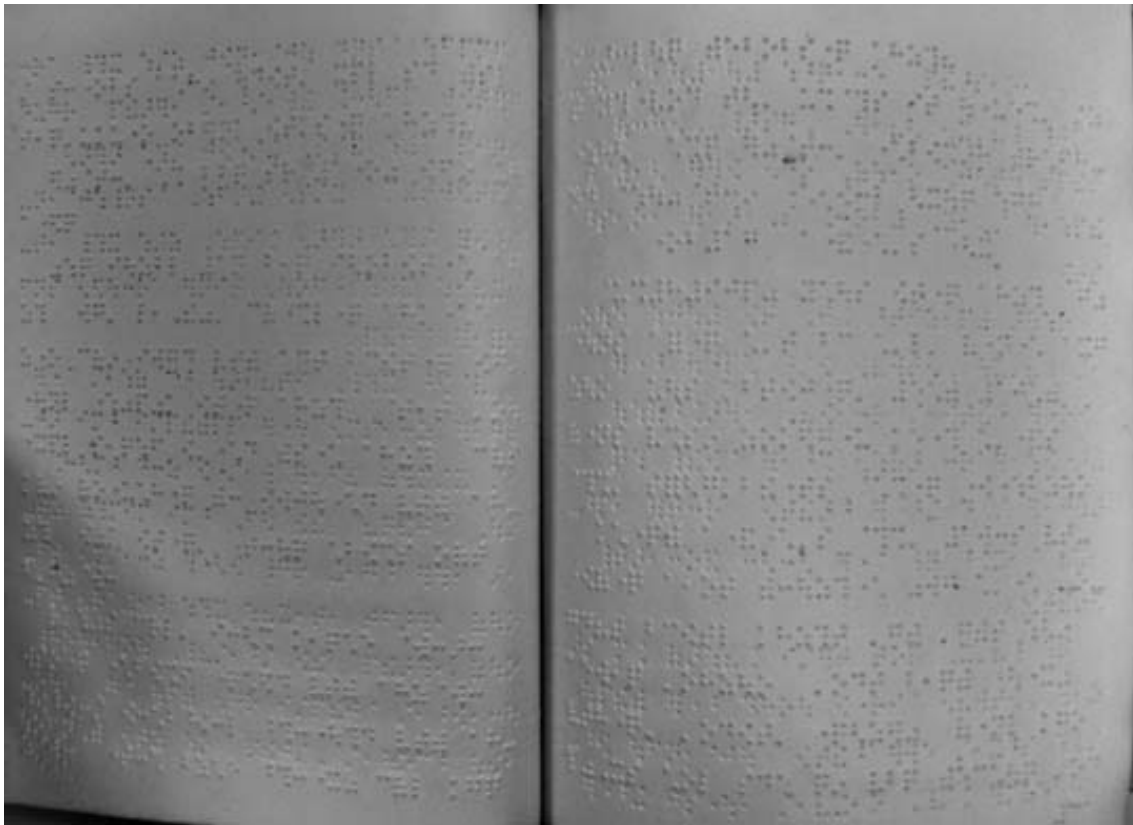
がいにくの みなとに つくと みなれない かたちの いえ
が ならんで たって います そこに いる ひとわ
わたくしどもとわ まるで ちがった ふーをして まるで
ちがった ことばで はなしをしています みるもの
きくものが すべて いな めづらしいので あります」

せんちよーわ こっぶの みづを 1くち のみて また
その はなしを つづけたり

「こーかいと というものわ こーいう おもしろい ものでは
が たまにわ おそろしい めにも あいます きゅーに
ぼーふーが くと やまの よーな なみが たって
ふねわ いまにも しづむかと おもうよーに なります
ども ふねわ なかなか しづむ ものでわ ありません
また きりが かかったり おーゆきが ふったりして 1
すんさきも みえなく なることも あります こんな ときにわ

わるくすると あさせえ のりあげたり ほかの ふねに しょー
とつしたり するよーな まちがいが できます それゆえ
たえず うみの ふかさを はかたり かねや きてきを
ならしたりします ふかさを はかるのわ あさせにのりあげ
ないたね かねや きてきを ならすのわ ほかの ふねに じ
ぶんらの ふねの いることを しらせて しょーとつを さける
ためで あります

1たい ふねにわ らしんぎと いう ものが あって
それで ほーがくを とって すずみすから いくら きり
が ふかなくても まるで ちがった ほーえ いくよーな
ことわ ありません また よるわ いくら くらくても ほし
が でて いれば それに たよって ほーがくを する「
ことも できるし じぶんの ふねの いばしょを する
ことも できます また かがんにわ ところどころに
とーたいが ありますから それを みると あれわ どこ
だ ということが わかります この ほしを みわけること



や とーだいの あかりを しることわ ぶねに のる ものに
とってわはなはだ たいせつな ことなので あります」

せんちよーわ かく いいて のち 1だん こえを はり
あげて

「さて おしまいに 1つ いって おきたいことが あり
ます それわ につぼんわ うみぐにで ありながら
まだ うみを おそれる ひともあると いうことで これわ
じつに ざんねんな ことと あります ちょっと わたし
ぶねに のってさえ こわがる ものが あります うみの
なみを みたばかりで もー おそろしがる ひとあり
ます こんな ことでわ どーして かいにくの たみと
いわれましょー

みなさんの うちにわ おーきく なってから しょーよー
そたで かいにくえ でかける ひとありましょー
ぎよぎよーや こーかいぎよーに じゅーじする ひとあり
ましょー どーか いまから じゅーぶん うみに なれて

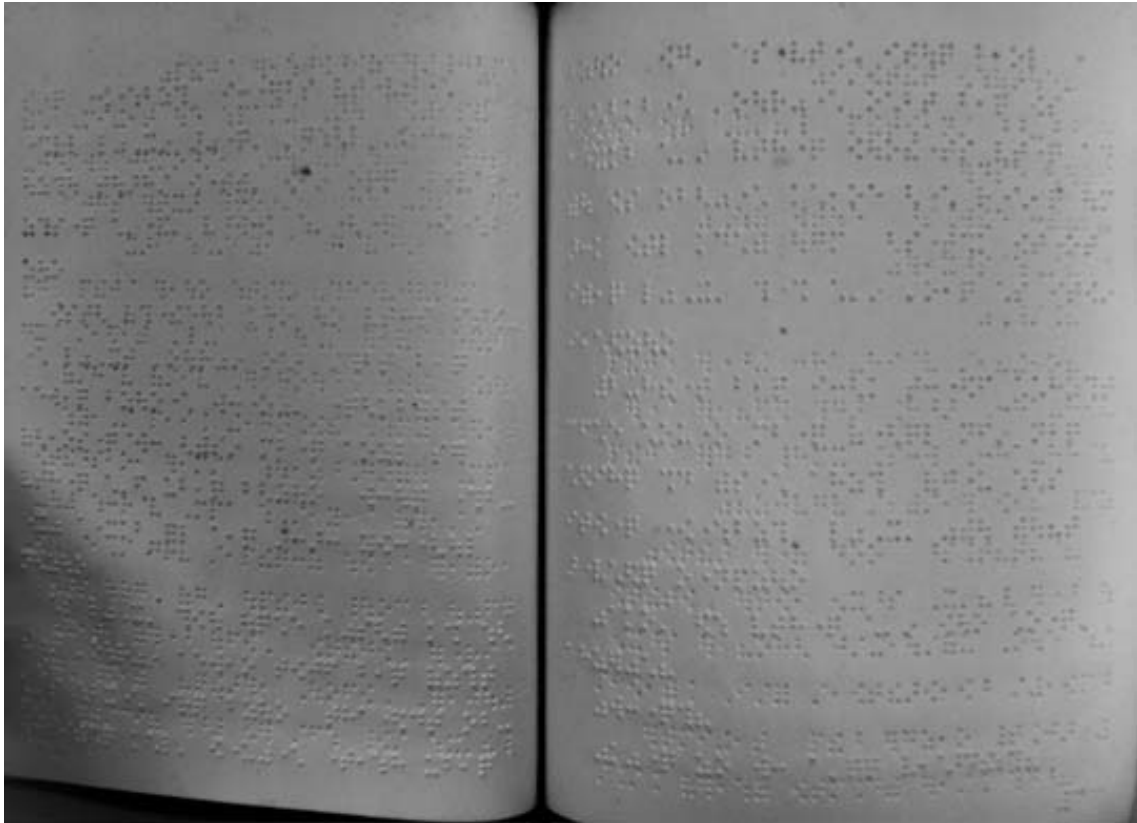
おくよーにして もらいたいで あります」

と むすびたる ときわ はくしゆの おと しばらくわ やま
ざりき かくて せんちよーわ かいにくより もちかえり
たる しゃしんちよーを がっこーに きふして さわり

だい117 あべがわの ぎふ

ひやく890ねん むかしの ことと あります れん
じつの あめで かわと いう かわにわ みづが あふれ
ました はしの ないところてわ 5かも 10かも
みづの ひくのを またなければ ならず かわへの
しゆくわ とめきれないほどの きやくで ございました

なかでも あべがわの しゆくわ 1そーの ひと
ごみで あつたと もーしますが 「それ かわが わた
れる」と いうことになりますと われも われもと さきを
あらそって わたりました わたると いても じぶん
ひとりてわ わたることわ できません みづに なれた
にんぶの かたに のるか てを ひいて もらうかして わたる



ので ございます おーぜいの ひとびとが くち
ぐちに にんぶを よんでわ われさきに わたろーと
しますし としよりや こどもわ こえを たてて よびあい
ますので かわべわ ひじょーな さわぎで ござい
ました

このとき みすぼらしい なりを した ひとりの おとこ
が にんぶと わたしちんを たかい やすいと いった
あらそって いましたが そーだんわ できないものと
みきったのでしょー きものを むいで あたまに のせ
ひとりで かわえ はいって いきました そーして すい
ぶん あぶない めに あって よーよー むこーぎしに
つきました

かの にんぶわ すこし してから なんのきも なく さき
ほど わたしちんを あらそった ところえ いった みますと
かわの さいふが おちて いました とりあげると たい
そー おもくて なかにわ こばんが どっさり はいって

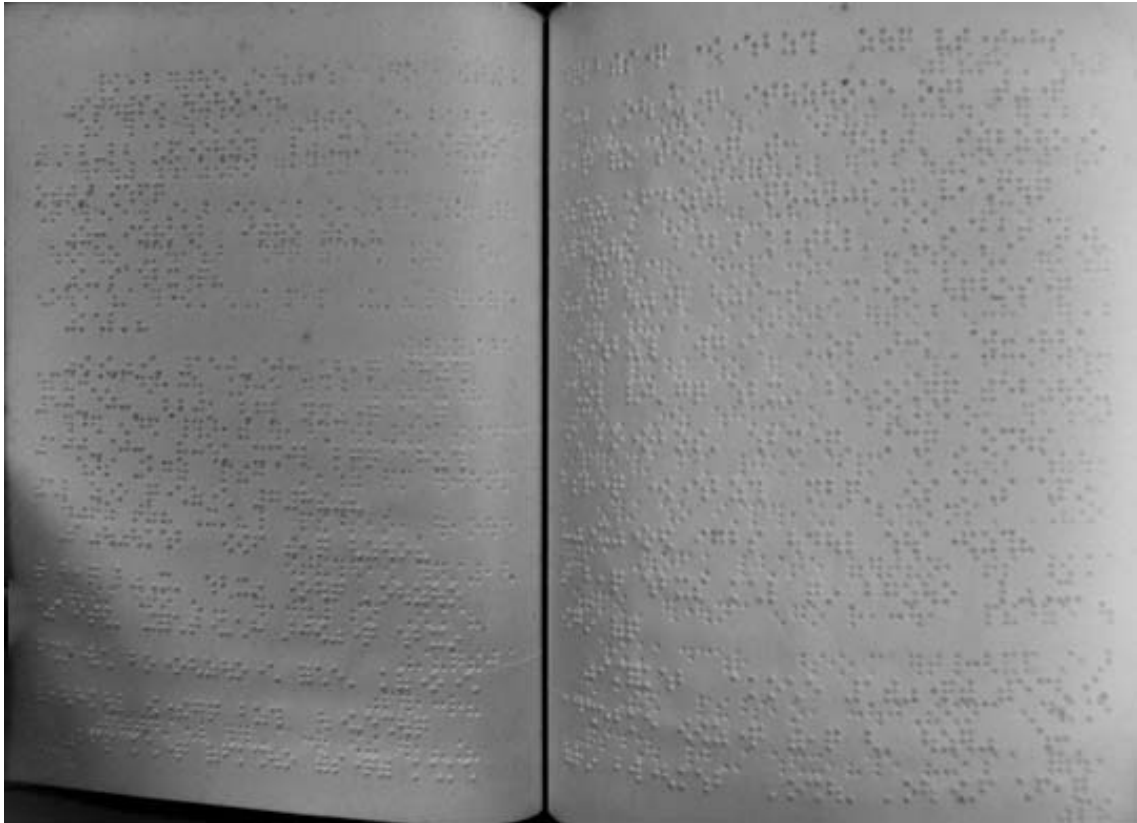
いました これわ あの ひとが おとして いったに
ちがいないが わたしちんが たかいと いった この
あぶない かわを ひとりで こしたほどの ひとで ある
もし この たいきんが なかったら きが ちがって しぬ
よーな ことになるかも しれぬ きのどくな ことだと
おもって にんぶわ すぐ かわを わたって かの おとこを
おっかけました

2りほど いった おーきな とーげえ かかりますと
うえから かたはだ むいで みぎてに つえを ついて
かけおりて くる ものが あります みれば さきの
おとこで ございます にんぶわ 「もし もし」と
よびかけて たづねました

「あなたわ けさ ひとりで かわを こした かたでわ
ありませんか」

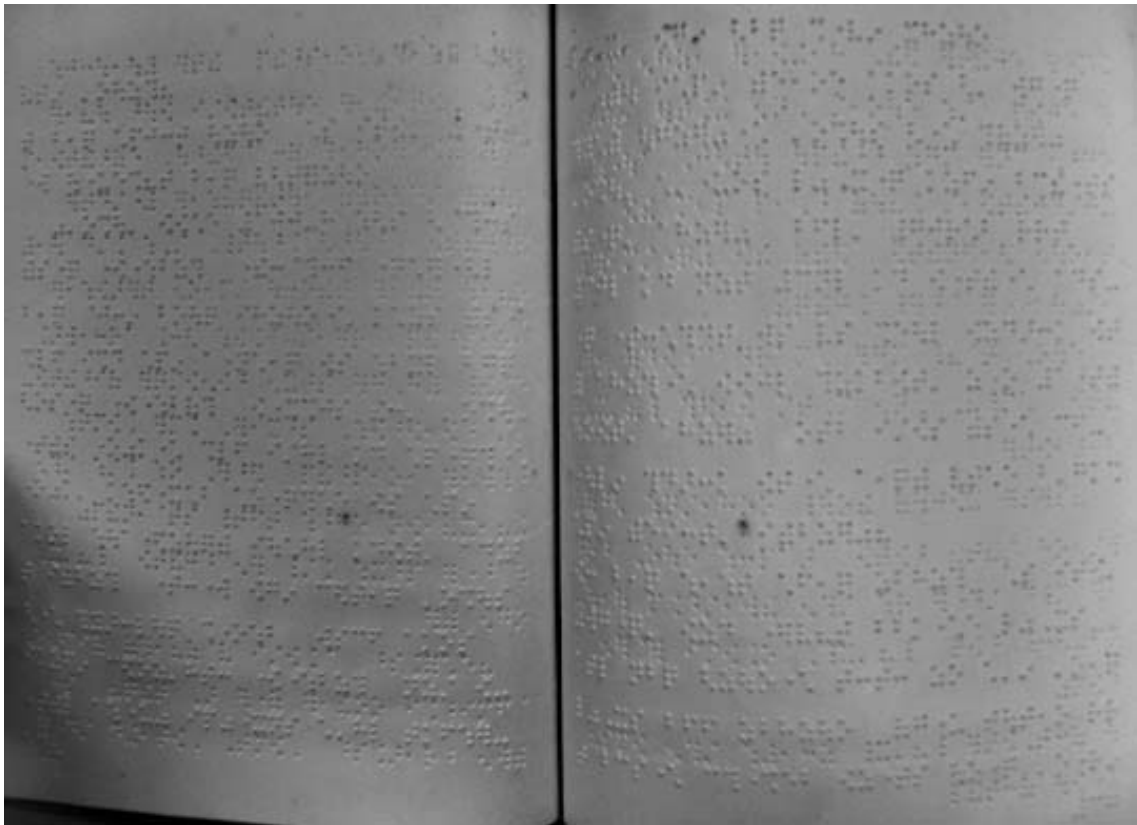
「そーです」

「なんで また そー あわてて ひっかえします」



「おとしものを しましたから」
と いいいいい かけだします にんぷわ その おとこの
たもとを おさえて
「まー おまちなさい おとした ものわ」
「かわの さいふで」
「なかにわ」
「こばんが 150りよー はいって おります
50りよーわ きいろな きれに つつんで あって
100りよーわ ちーさな ふくろに いれて あります
ほかに まだ てがみが 78ほん」
「あんしんしなさい ここえ もって きました」
と いった にんぷわ さいふを だして わたしました
かの おとこわ ゆめかとはばかり よろこんで さいふを
いくたびか いただきましたが めからわ なみだが
ひっきりなしに こぼれて います しばらくして
「いえの なかで みえなくした ものでも なかなか

でないもので ございます まして ひとりの
おーい わたしばで おとしましたから たとい とんで
いって みた ところで もー あるまいとわ おもいましたが
このまま かえることも できませんので ひっかえして
まいりました いよいよ ないときにわ かわの なかえ とび
こんで しんで しまおーと かくごを してきたので
ございます それが あなたの よーな しょーぢきな
おかたに ひろわれて さいふを いただきせて もらいました
が いただいたのわ さいふでわ なくて わたくしの
いのちで ございます ついてわ この なかの かねを
はんぶんだけ おれぬ しるしに さしあげます」
と いった さいふの なかに てを いれました にんぷわ
これを みて
「おやめなさい あなたから 1もんでも もらうきが
あるくらいなら ここまで もって きわ しません さー
みちを いそぎなさい わたくしわ わたしばえ かえって



ひとを わたします」

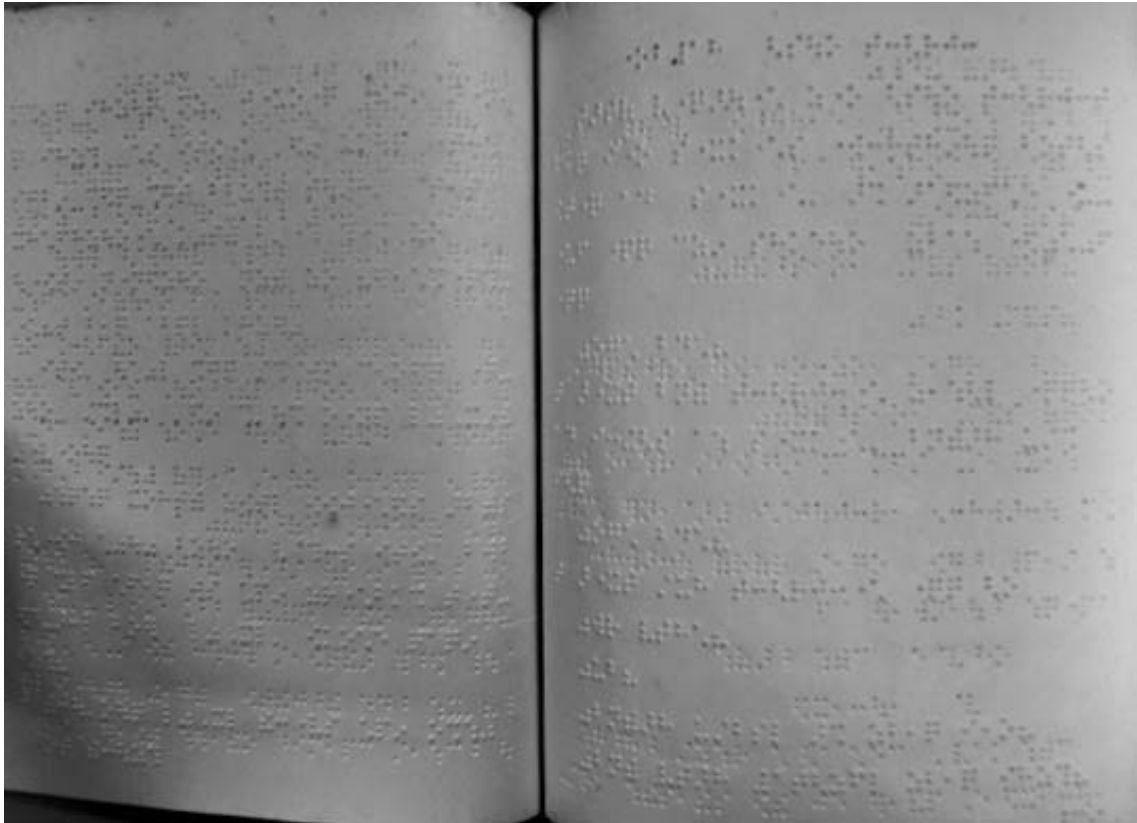
と いった かえろーと しました かの おとこわ 「どーぞ しばらく」と いった ひきとめました

「わたくしわ ここから 100り さきの きしゅーのもので ございます ほーしゅーえ でかせぎに いった りょーを いたして おりましたが なかまの ものが くにえ おくる かねを あづかって この さいふに いれて きたので ございます こぶくろの ほーわ わたくし どもの だんなが くにえ おやりに なる かねですが だんなわ なさけぶかい かたですから この かねを あなたに さしあげましても おしかりに なることわ あるまいと おもいます どーぞ これを うけとって わたくしの きが すむよーにして ください そのうえ あなたの おなまえを うけたまわりとー ございます つまや こどもに あさばん おねんぶつの かわりに となえさせ ます」

にんぶわ これを きいて くびを ふりました

「もし おかぬを もらったら あなたの きわ それで すむかも しれませんが わたくしの きが すみません わたくしわ かわばたの にんぶで なまえを いうほどの ものでわ ありません いえにわ 70ちかい ちちと 30になる つまと 3つになる こどもがあるの で どーかすると その ひの ぐらしに こまるよーな こと も ありますが こころに すまないことわ まだ 1ども したことわ ありません たとい おやこの ものが うえ じにを するよーな ことが あっても ひとから いわれなく かぬを もらおーとわ おもいません」

こー いった さっさと かえって まいります かの おとこわ 「それでわ こまる ぜひ」と いいながら にんぶの あとに ついて きましたとー また かわを わたつて にんぶの いええ まいりました みれば としとった ちちと いうのが うすぐらい こまどの したで わらぢを



つくって おりまして つまわ ろばたで ぼろをつづ
て おります かの おとこが わけを はなして どーか
おれい を うけて くれと いいますと としよりわ ちよつと
ふりかえりましたが なんとも いわず すぐ また
しごとを つづけました つまも また 「せっかくです
が」と いって あいてに なりません

おとこわ しあんにくれて やくしよえ うったえて で
ました やくにんわ わけを くわしく たづね にんぶをも
よびだして

「さてさて ふたりとも まことに ころがけの よいもの
ちかごろ かんしん いたした きしゅーの おとこわ いそい
で くにえ かえって その かねを まちがいなく とど
けるーよーに いたせ にんぶにわ こなたから てあてを
いたす」

と もーしわたして にんぶに ほーびの かねを たくさん
やったと もーします

えだい118 きのした とーきちろー

とよとみ ひでよしが まだ きのした とーきちろーと
いって おだ のぶながの ぞーりとりをして いたときの
ことである のぶながわ よく よあけまえから ば
ばえ でて うまを のりならした まいあさ げんかんえ
でて

「たれか いるか」

と よぶと いつも とーきちろーが まっさきに できた
ある おーゆきの あさ のぶながわ いつもより はやく
おきて

「たれか いるか」

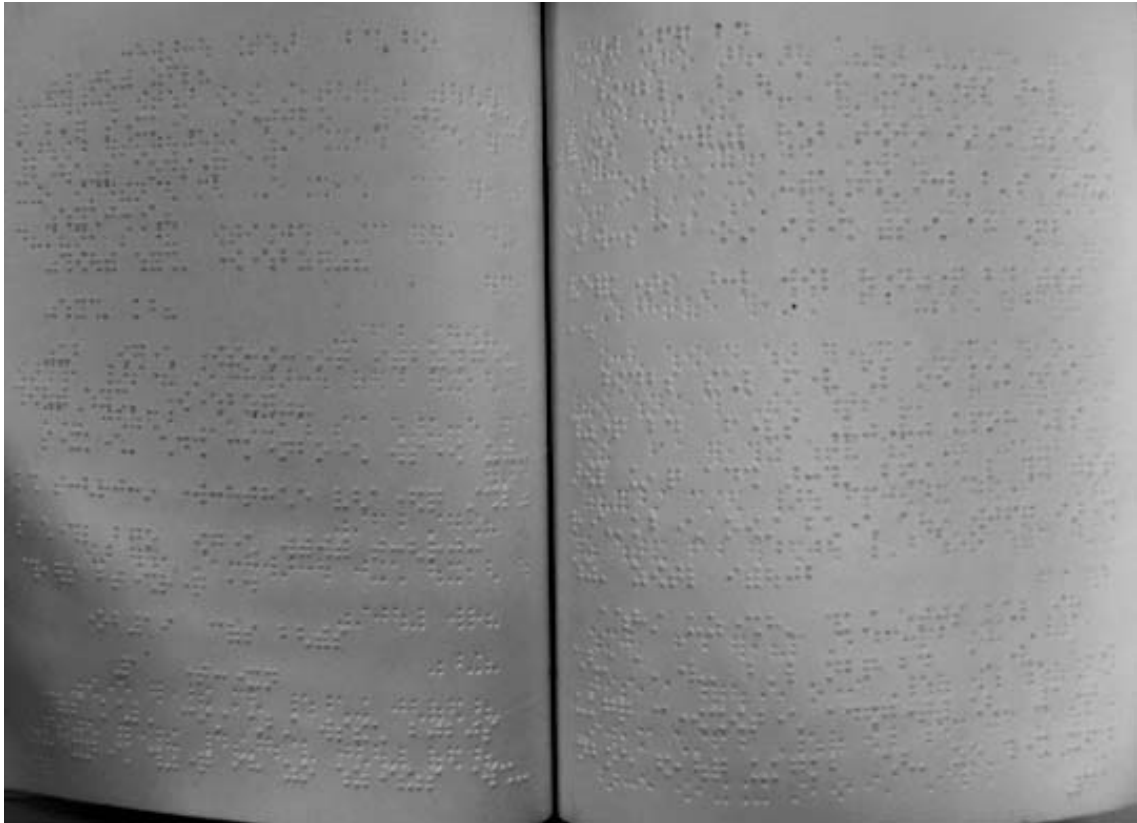
と よぶと やはり とーきちろーが できた

「そち ひとりか」

「はい」

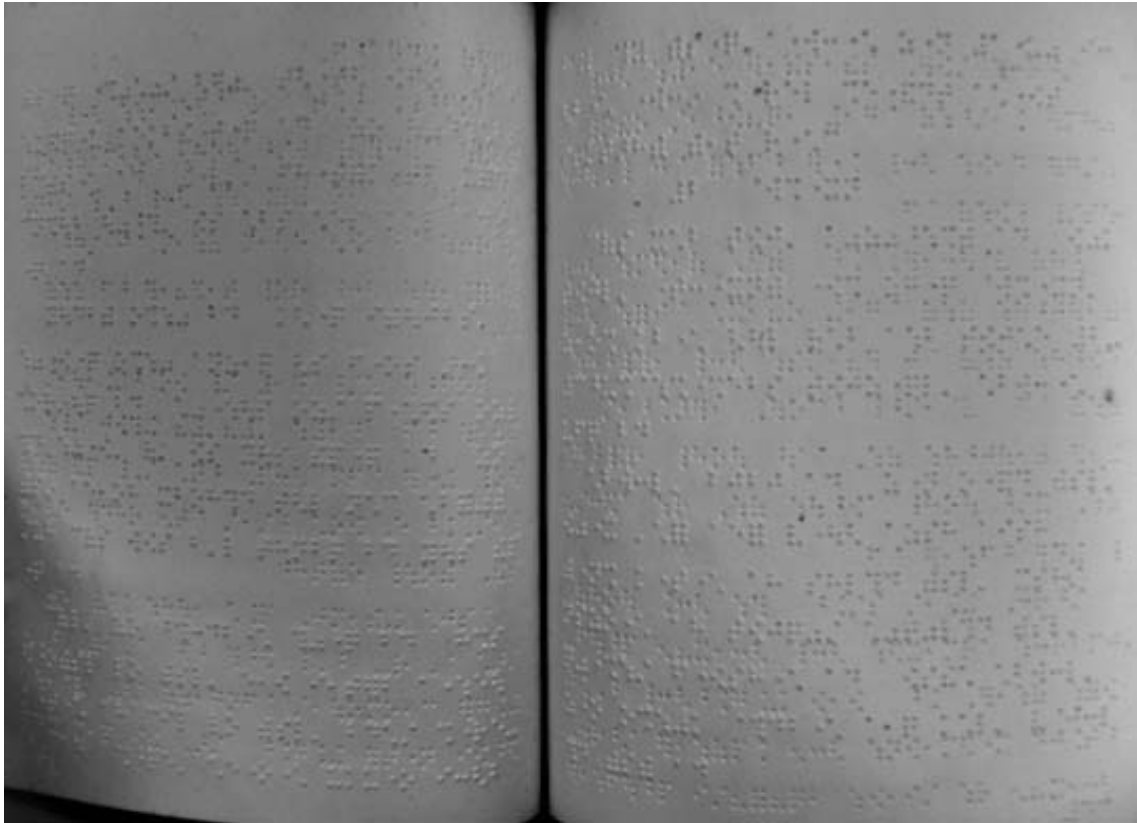
「いつもより はやいのによく まいって おった」

「いつも ひとり 1ときまえに まいって おります」



「1ときも まえに」
と いった のぶながわ おどろいた 1ときわ いまの
2じかんに あたるので ある
「さむかろーが」
「すこしも さむくわ ございません」
「さむくわ ない」
「はい これが ごほーこーだと おもいますれば
すこしも さむくわ ございません」
のぶながわ かるく うなづいたが そのご まも
なく とーきちろーを そーりとりから ひきあげて やくにん
の かずに いれた これが そもそも とーきちろー
しゅっせの いとぐちで ある
だい19 うみの いきもの
1 どーぶつ
うみの なかにわ うおや かいや そのほか いろいろの
どーぶつが すんで あり また さまざまの しょく

ぶつも はえて いる
ぎよるいにわ いわし あぢ かつおなどの よーに
みづの ひょーめんに ちかい ところを およぐ ものが
あり たい あなご はもなどの よーに いわの かげや
かいそーの あいだを およぐ ものが あり かわい
ひらめなどの よーに そこに しづんで いる ものも
ある
ぎよるいの ほかに えび かに たこ いかなどが
すんで いる えびの ぴんぴん はねたり かにの
よこにはって あるく よーすわ いけや かわに すむ ものと
ちがわぬいけ たこや いかの あしを そろえて およぐ
さまわ まことに おもしろい
あさりや はまぐりわ すなや だろの なかに あり
かきや あわびわ いわに ついて いる あわびわ いわを
はなれて うごくことが あるけれども かきわ 1ど
ついたら けて はなれない かきわ また すぐ ぶえる



もので ぐんかんや きせんわ ときどき これを かきおと
さなければ ならないほどで ある また しんじゆかいと
いうものがある ゆひわや えりどめなどにはめる
うつくしい しんじゆわ この かいの からの なかに あるの
で ある

むしるいも たくさん いる なかで おもしろいわ
さんごで たくさん あつまって きの えだの よーな
かたちをしている かんざしの たまや ねがけの たまに
する さんごわ みな この むしの ほねで ある また
ものを あらったり ぶいたりする ときに つかう かいめんも
やはり うみの そこの いわに とりついて いる むしの ほね
で ある

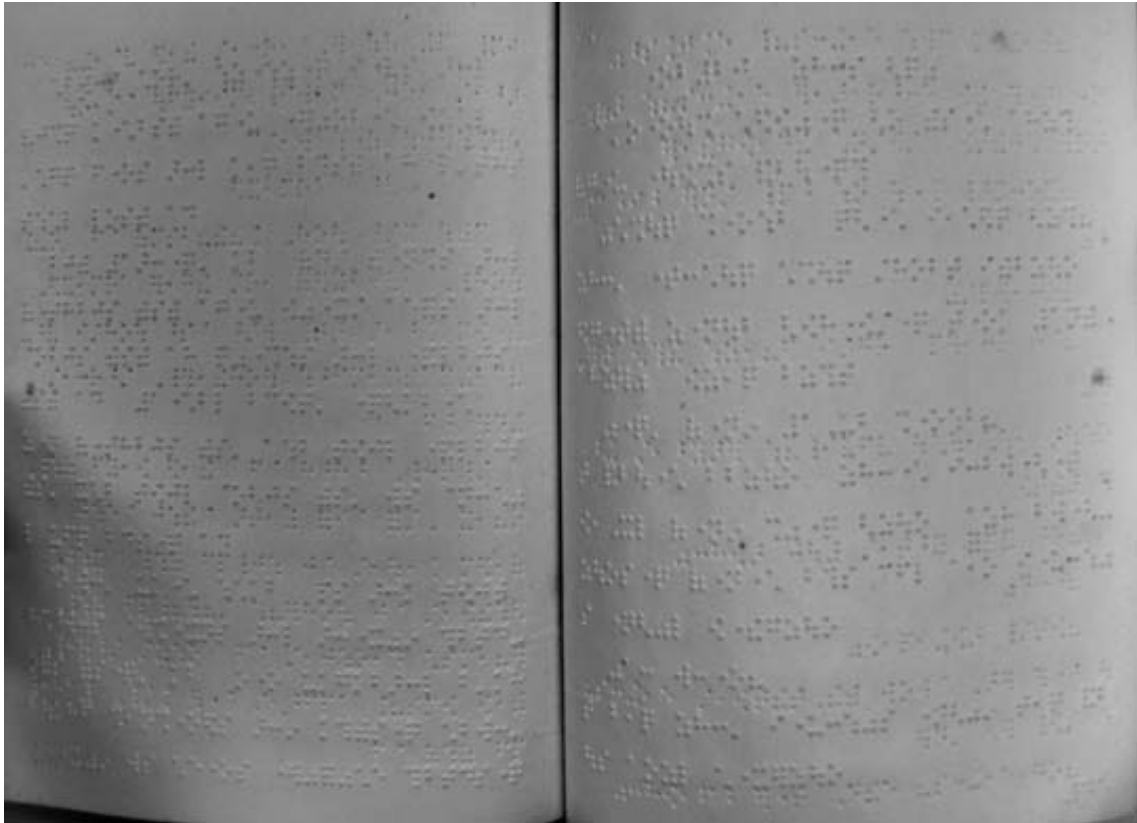
うみにわ また しゅーるいが すんで いる りくの
けたものに にた ものにわ らっこ おっとせい あざらし
などがあり うおに にた ものにわ いるかや くぢら
がある くぢらわ からだが はなはだ おーきい

りくに すむ ものでわ ぞーが まづ 1ばん おー
きいが ぞーを くぢらに くらべると あかごと
おとなとよりも もっと ちがう

2 しよくぶつ

うみの ふかい ところわ なんまんじやくも ある こんな
ところにわ どーぶつも ごく まれで しよくぶつわ
まったく ないが きしに ちかい あさい ところから 2
3びやくしゃくぐらいの ところまでにわ かいそーが
はえて いる

かいそーにわ いろいろ ある まづ たべる ものにわ
こんぶ わかめ あらめ ひじき あまのり あおのり
もづく などが あり のりにする ものにわ ぶのりや
つのまたが あり ところてんや かんてんにする ものにわ
てんぐさや えだのりが ある このほか かいそーにわ
まだ たくさんな しゅるいが あって なかにわ ひりょーに
する ものも ある



かいそーのかたちわさまざまでおびのよーに
ひろくてながいのもあればぜんたいがこまかに
わかれてえだのよーになっているのもありにわたりの
とさかににたのもある

いろも1よーでわないみるやもづくのよーに
みどりいろのものもあればこんぶややらめのよーに
ちやいろのものもありてんぐさのよーにべいいろの
ものもある1かゝにいうことわできないが
まづみどりいろのものわあさいところにべいいろの
ものわふかいところにちやいろのものわそのちゅーかん
にはえているのである

かいそーわはながさかないねのよーなところも
りくじょーのしょくぶつものよーによーぶんをすいとる
ためのものでわないただはなれないよーにいわなり
いしなりえくつつくだけのよーをなすものでかいそーわ
よーぶんをそのからだのぜんめんからすいとるので

ある

だい20 まりーのきてん

あわただしくかけこんできたものがあります
みればじこくのへいしです

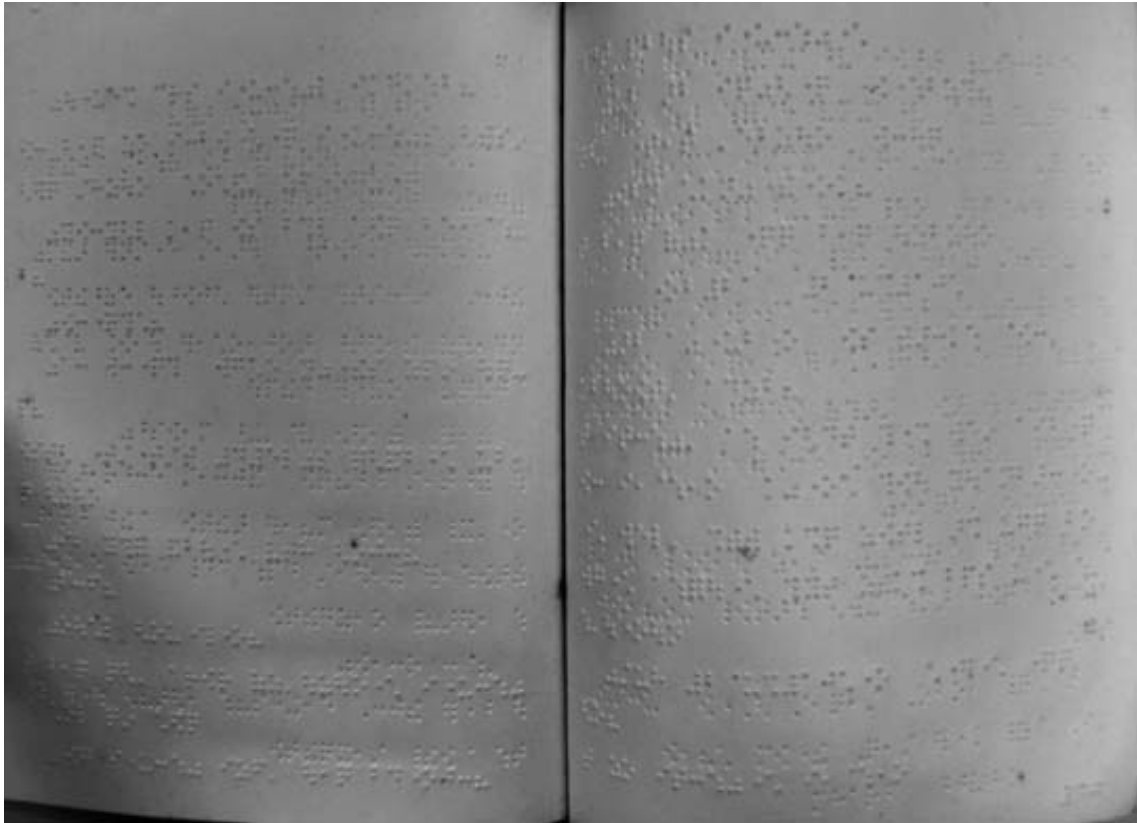
「かくしてくださいてきが おっかけてきます」
まりーわどーかしてかくしてやりたいとおもいました
けれどもまづしいきこりごやでとだな1つも
ありませんこまっていますと

「でわみづを1ばいください」

とへいしがいれましたまりーがおいそぎで
こつぶにみづをくんできましたあまりいそぎ
ましたのでみづがいすのうえにあつたおばーさん
のづきんにこぼれました

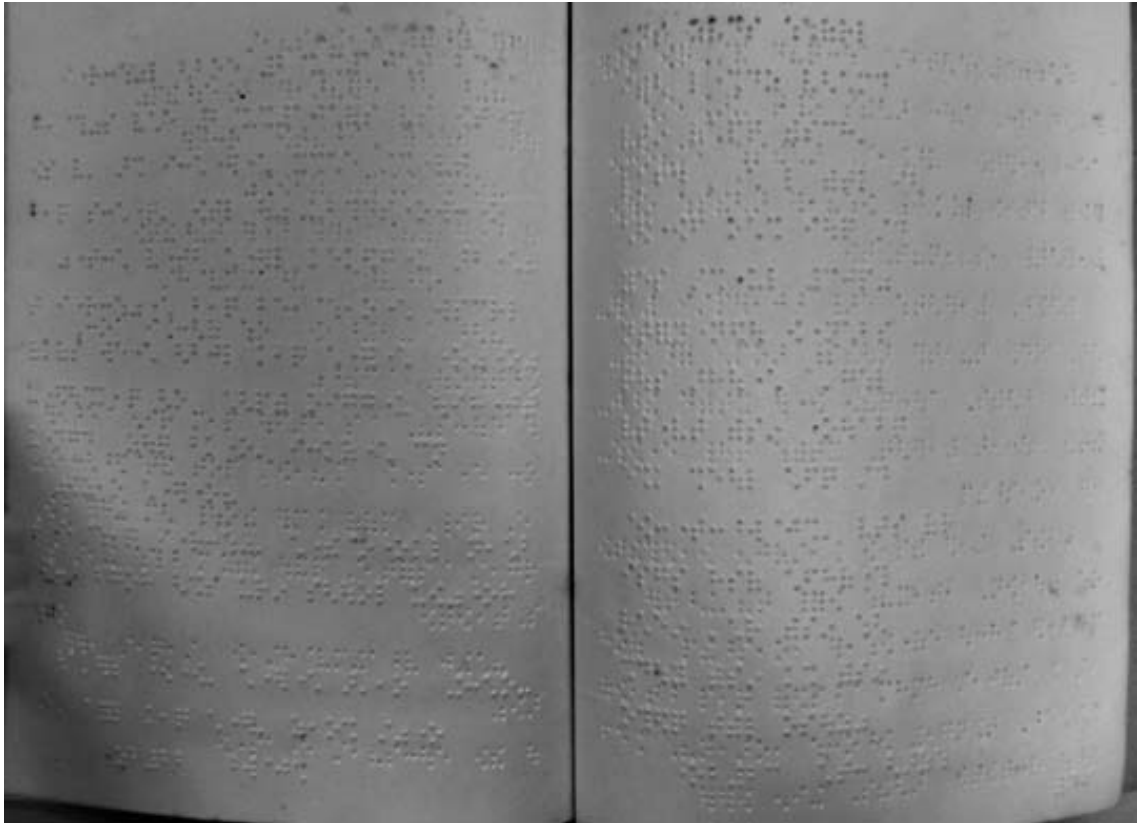
「あーそーだ」

とってまりーわおばーさんのづきんをとってへい
しのあたまにかぶせました



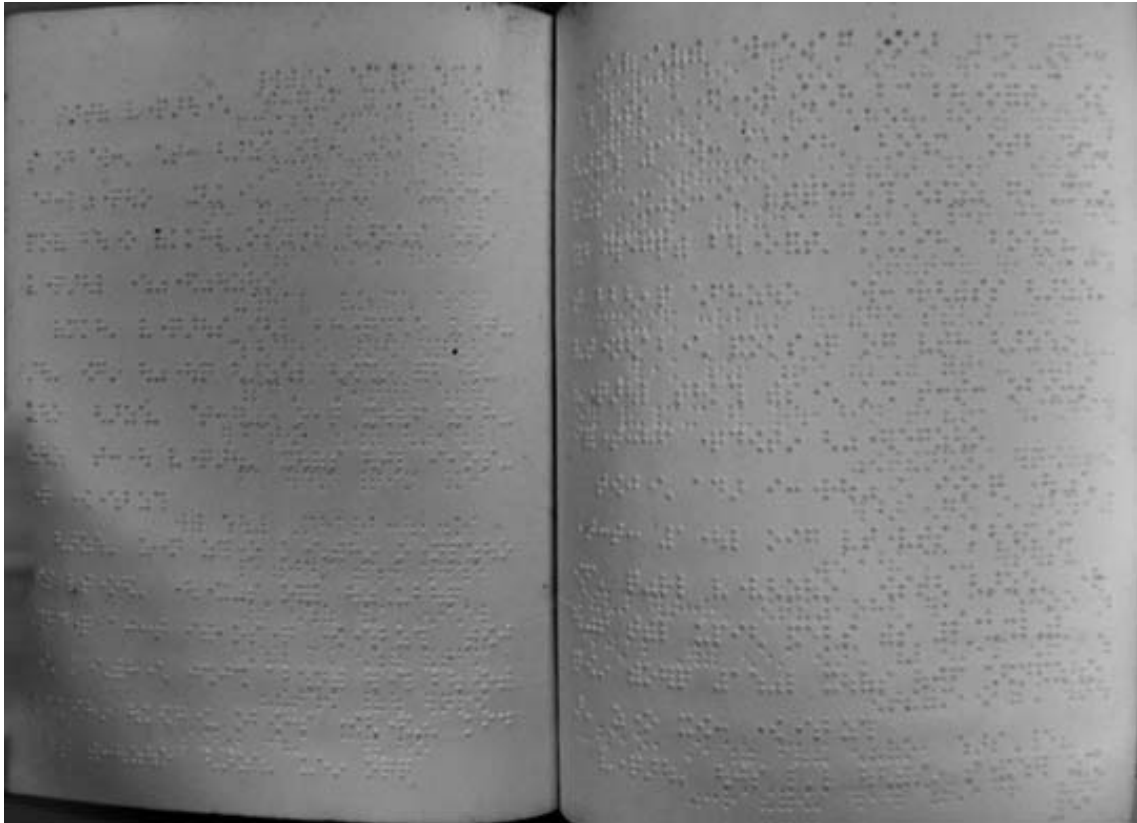
「しばらく うちのおばーさんにおなりなさい」
こー 行って また おーいそぎで おばーさんの きものを
きせて やりました かたかや まえだれまで
「むこーむきに なって この いすに かけて いらっしや
い」
「こーですか」
「あー そーです それから つんぼの まねを して
ね」
このとき どやどや 45にんの てきへいが はいつ
て きました
「おい むすめ へいしが ひとり きたろー」
「いーえ」
「たしかに きたはずだ」
と 行って てきわ あちこち みまわしましたが おばーさん
のかたに てを かけて
「これ おばーさん おまえわ して いるだろー」

すると へいしのおばーさんが
「はい よい おてんきで ございます」
てきわ どっと わらいました そーして
「こいつ かなつんぼだな」
と 行って みんな でて 行って しまいました
たい121 2ひやく10か
「よい あんまりだ この もよーなら きょーわ
たいしたことわ あるまい」
と おとーさんわ あさ おきると すぐ そらを あおいで
こー おっしやった なんだか すこし むしあついよーだ
が そらにわ くもも なくて まことに よく はれて いた
それが あさめしが すむと まもなく いぬの はが さわ
さわしだした
「やはり 2ひやく10かだ かぜが でて
きた」
と また おとーさんが おっしやった



おぢーさんに きいたら 2ひやく10かといのわ
りっしゅんの ひから 2ひやく10かめの ひの ことで
この ひわ よく おーかぜが ふくから やくびと
いって のーかでわ ことに しんぱいするのだそーだ
「どーか ひどい かぜに ならなければ よいが」
と おぢーさんが いって いらっしやったが そのうちに
みなみの そらが きいろに なって かぜが だんだん
はげしくなつて きた かきねも たおれれば しおりども
はづれる まして いなだわ おーなみが うつ
「こまった かぜだ」
と おっしやつて おぢーさんわ かほちやだなに つつかい
ぼーを いれたり きくの はちを のきしたに はこんだり
された
しあわせに ごごわ かぜが よわつた ゆーかた
からわ あめに なつて かぜわ まつたく やんだ
だい22 じょりよく

なつの まひるの さかみちに
おもき にぐるま ひきかぬる
ひとを みかぬて ものうりわ
になえる わが に もとに おき
かけごえ たかく おして やる
むらの やくばに 30ねん
つとめつづけし こづかいの
としの よりしが あわれも
ひとびと ものを だしあいて
らくな くらしに かえて やる
きょーどーじょりよくわ ひとの みち
おのれの りのみ かえりみず
ちからを わかち ものを さき
くるむ ものを なく ものを
たすけて とともに たのしまん
だい123 かとー きよまさ



とよみ ひでよしが ちょーせんえ むかわせた さきて
の たいしょーわ かとー きよまさ こにし ゆきなかの
りょーにんでした ゆきながわ きよまさの ぐんこーを
ねたみ いしだ みななりに たのんで きよまさの ことを
ひでよしに ざんげんしました

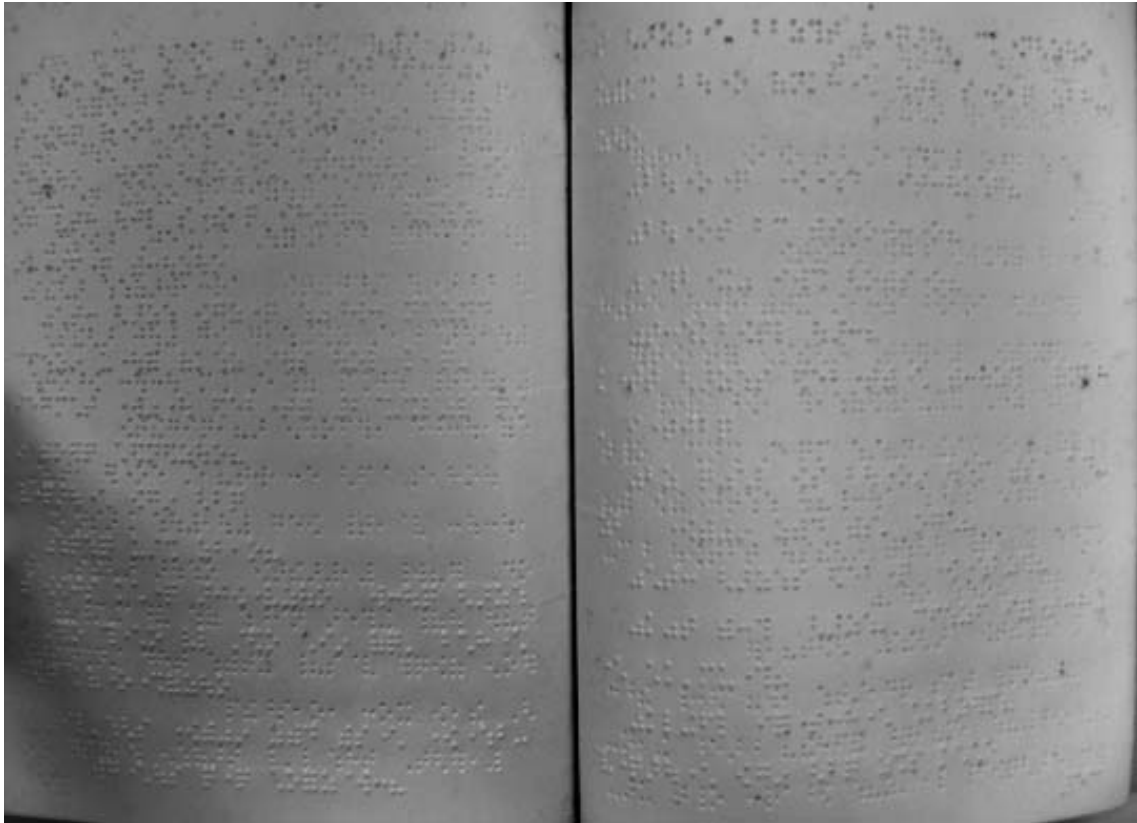
みつなりわ ひでよしの おきに いりですから ひで
よしわ これを しんじて きよまさの きこくを めいじ
ました きよまさわ ちょーせんを たって ふしみえ まいり
ました とーじ ひでよしわ ふしみの しろに おったの
で ございます

きよまさわ まづ ますだ なかもりを たづねました
この ひとだけわ じぶんの ために しんはいして
くれるで あるーと おもったので ございます ところ
が なかもりが ろくろく あいさつも せず いしだと
なかなもりを しなけれぱ たいこーの ごきげんわ なおる
まいと もーしました きよまさわ はらを たてて

「かみがみも しょーらんあれ たたかい 1つ でき
ず ひとの かげごとばかり いう いしだめとわ この
きよまさ 1しょー なかなもりわ いたさぬ たとい すー
ねんの ぐんこーが みとめられず このまま せつぷくを
めいぜられても いしだめとわ なかなもりわ いたさぬ」
と いきって かえりました しょーぢきものの きよまさわ
ひとづきあいが へたなので たれ ひとり きよまさを
ひでよしに とりなす ものが なく とーとー たいこーの
おめどーりえ であることを きんぜられました

ところが あるよ おーぢしんが おこつて じんか
どーとー 1じに たおれ ひとひとの なきさけが
こえわ てんちに ひびきました このとき きよまさわ ぢ
しんと ともに はねおき けらいの もの 2ひやくにんに
てこを もたせ 1さんに ふしみの しろえ かけつけました
よわ まだ ふこー ございます

ひでよしわ しろの にわに しきものを のべさせ まく



や びよーぶで まわりを かこわせ たいぢょーちんを
とぼして みだいどころや おそばの おんなどもと
おりました そこえ きよまさが かけつけました まだ
たれ ひとり しろに のぼって おりません きよまさわ
おーごえで もーしました

「かとー きよまさ これまで さんじょー つかまつる
うえさまを はじめ みなさま おしの したに なってわ
おられぬかと ぞんじ けらいども 2ひやくにんに てこ
を もたせて かけつけました」

ひでよしが これを きいて

「さてさて はやく まいった」

と ところの なかで よろこびました そーして きよまさ
の やせた すがた ひに やけた かおを みてわ いかりが
とけて なみだくみました

「おにわさきの ごもんを まもる ものが ござい
ません それがしの てで かためましょー」

と きよまさが いいますと ひでよしわ うなづきました
まもなく いしだ みつなりが しろに のぼって まいり
ました

「いしだで ござる おとーしなされ」

「いしだと いう ものだそーだ」

「ずいぶん おそく きたものだ」

「とーさないことに しょー」

などと きよまさの けらいどもが もーします みつなり
わ おどろいて

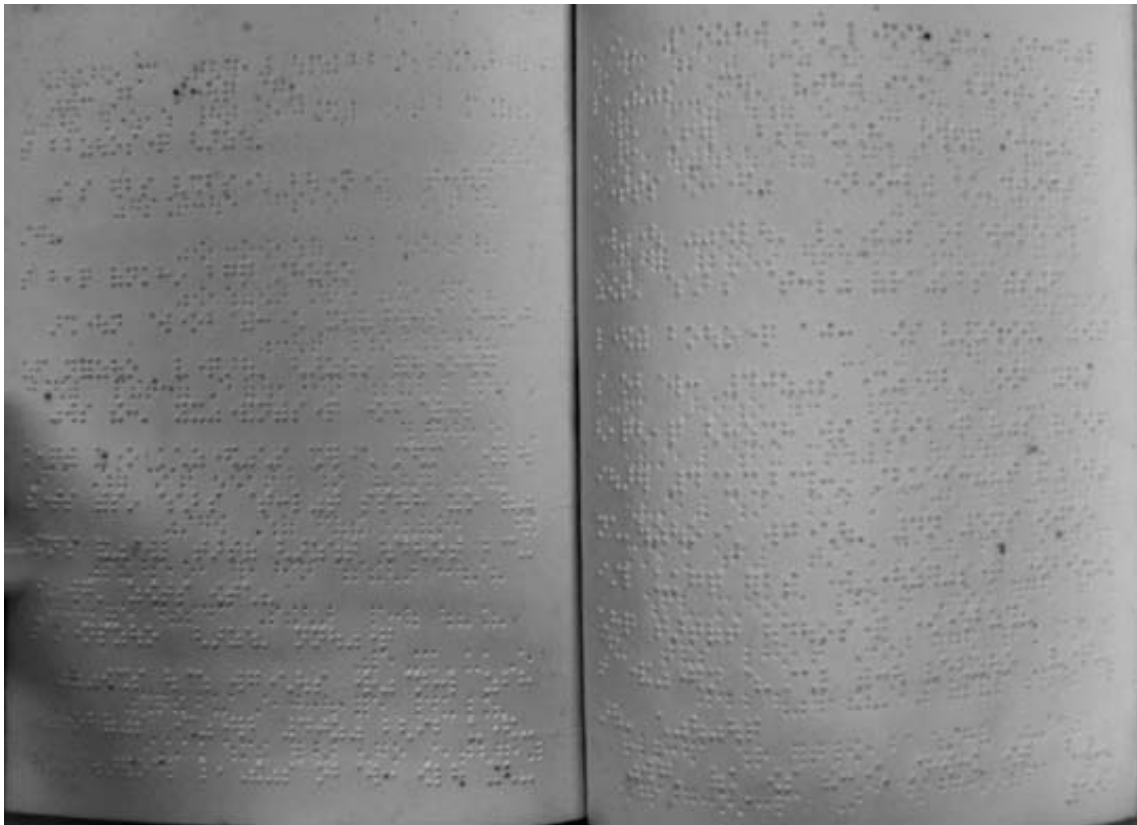
「いま てんかに この いしだを しらぬ ものわ ある
まい ごもんを まもる ものわ たれか」

「かとー きよまさの けらいで ございます」

「なんと もーす きよまさわ うえさまえ おめどーり
が かなわぬはず」

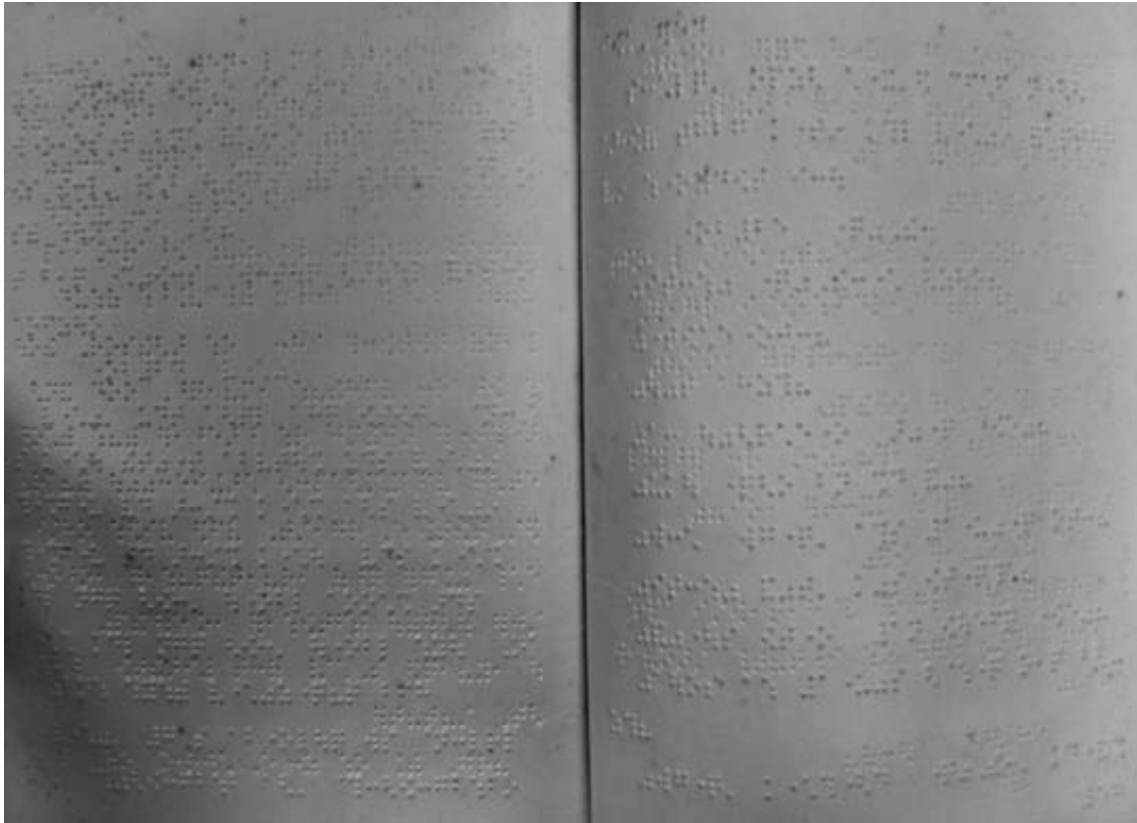
「なにゆえに おめどーりが かないませぬ」

ひでよしが これを きいて まくの なかから



「もー よい とーして やれ」
と いましたので きよまさわ
「あの せいの ひくいのが いしただ とーして
やれ」
と いった みつなりを いれて やりました
よくじつ しょうみよーが ふしみじよーの おーひろ
まえ つめました ひでよしわ きよまさを めしだして
「その ほーわ むぶんべつもので たいみよーに
なっても まだ なかまげんかの くせが ぬけぬ こにし
ほどの ものを さかいの ちょーにんと ののしり また みんな
こくえの へんしよに とよとみ きよまさと したと いう
が それわ まことの ことか」
と たづねました きよまさわ つつしんで
「みんなの ししゃ それがしの ぢんちゆーに まいり
『たいみんの ぐんせい 40まん いきおい はず
しく おしよせたるに につぼんの たいしよー これにし ゆき

ながわ 1たまりも なく にげおち もはや ちょーせんに
につぼんの ぶしわ ひとりも おらぬ いけどった もの
わ みな かえせ いのちばかりわ たすけて やろー』
などとの こーげん こいこーにも かかわるところと
ぞんじ 『こにしわ につぼんの たいしよーならず
まことわ さかいの ちょーにん みちあんないの ものゆえ
にげも いたしたで あるー この きよまさこそわ まこと
の たいしよー 40まんの ぐんせいゆ こくえ むけよ
きってきって きりまくり その いきおいで みんなの みやこえ
おしよせ 4ひやくよしゆーを やきはらおー』と へんしよを
つかわしましたが それがしわ 4つ 5つの ころから
おやに はなれて せいも ぞんじませんので こいこーを
かりて とよとみと したしたので ございます」
と べんぜつ さわやかに もーし ひらきました ひで
よしわ かんしんして
「それわ みな この ほーが やりそーな こと きよ



まさわ つけひもの ころから この ほーの ひざの うえで
そだったので いか みならった ものと みえる もと
この ほーにわ ちかい しんるいの もの とよとみと なのった
のも さしつかえが ない」
と いった ぐんこーの しょーとして きよまさに めいとーを
あたえました

だい24 ひがん

ひがんわ はると あきとに ありて このころわ ちゅーや
の ながさ ほとんど あいひとしく はるの ひがんを
すぐれば ひる よーやく ながく あきの ひがんを
すぐれば よる よーやく ながし ひるの ながく
なるに つれて きこーわ したいに あたたかく よるの
ながく なるに つれて きこーわ したいに さむし ゆえ
に 「あつさ さむさも ひがんまで」と いえり

ひがんわ 7かの あいだにして その ちゅーにちに
はるわ しゅんきこーれいさい あきわ しゅーきこーれいさいを

おこなわせらる

のーかにてわ たねまき かぶわけ うえかえ つぎき
かりこみ とりいれなどを なすに ひがんを めあてとして
ひを さだむること おーし

だい25 でんぼー

「おとーさん でんぼーが きました」

「どこからだろー」

「しんと あります」

「あー しんきちからだ よんで ごらん」

「はなし できた いつ くる へん」

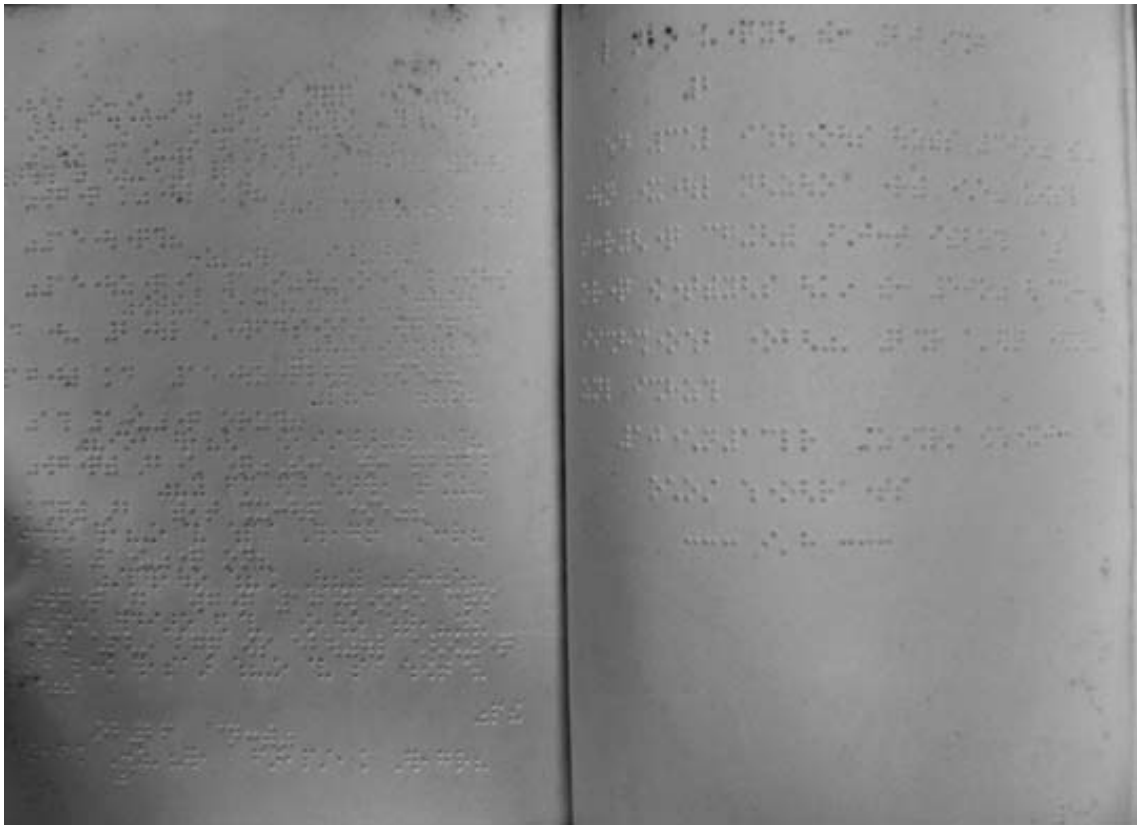
「そーか それでわ あすの 1ばんで たとー」

「おとーさん へんとわ なんの ことですか」

「へんじの ことだ 1つ こしらえて ごらん」

「あしたの あさ 1ばんの きしゃで たって いき
ます」

「それでわ ながすぎる でんぼーわ なるべく



みじかい ぼーが よい もっと つめて ごらん
「あした 1ばんの きしゃで いきます」
「それで なんじに なる」
「15じです」
「15じまでが 1おんしんだが にごりの
ある じわ 2じに かぞえるのだから それでわ
17じに なる 15じまでにして ごらん」
「あす 1ばんで たちます」
「それでも よいが でんぼーわ そー ていぬいに
いわなくても よい もっと くふーして ごらん」
「あす 1ばんで たつ」
「それで よい それで 10じだから うちの
やごーの かねきを しいて この らいしんしに かきこんで
ごらん」

だい26 ちゅーもん

1

に ついた はでむき もー 20 おくれ

2

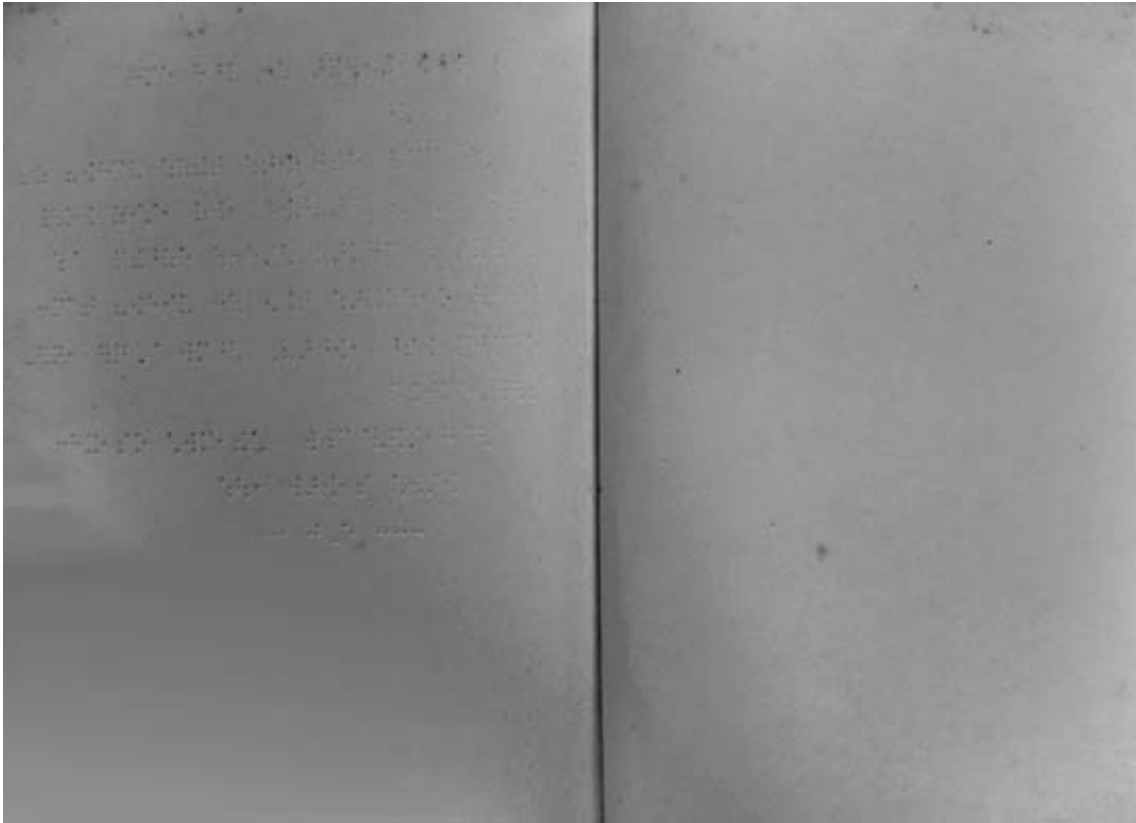
さる 3かに おさしだしの しまもの 30たん ほん
じつ ぶじに つきました ちも がらも まことに
とーちむきで うれゆきも よかろーと おもいます あの
たちで こどもむきの しなを もー 50たん しきゅー
おおくりください だいきんわ 2くち あわせて げつ
まつに おくります

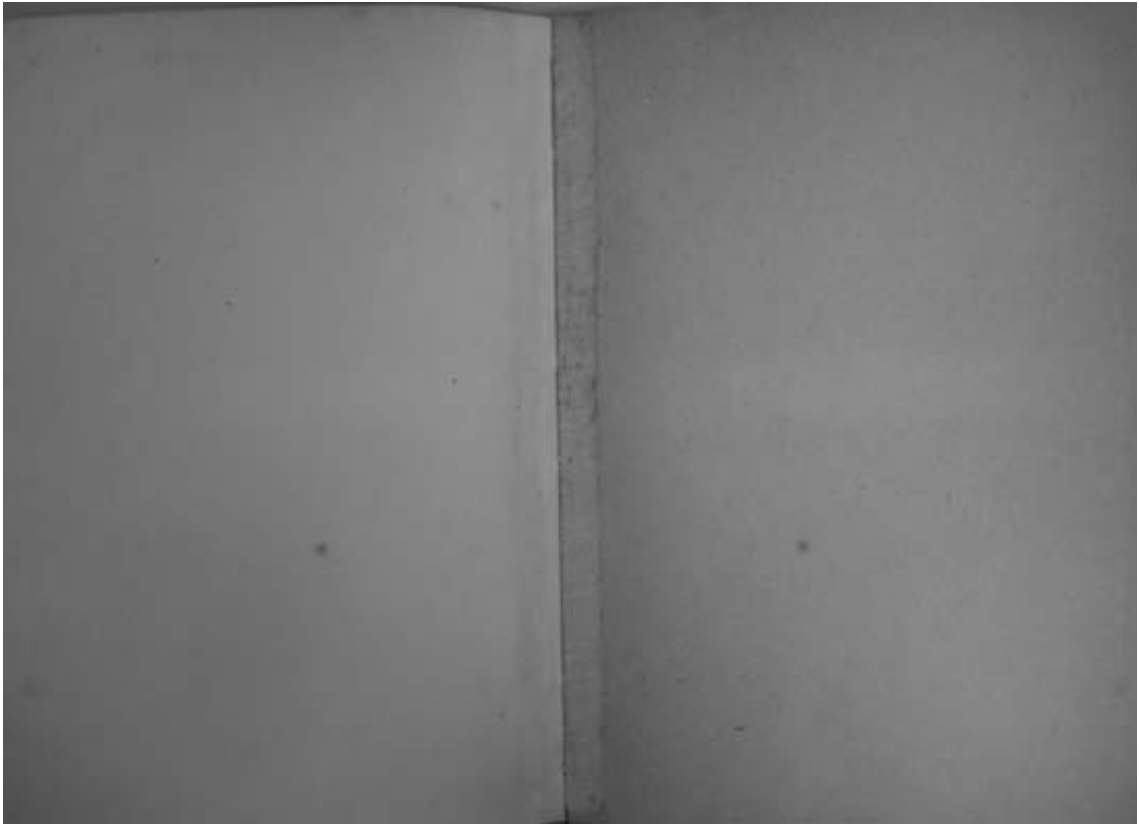
10がつ13にち やまぐちや こさぶろー

たかや さだきち どの

---おわり---

59

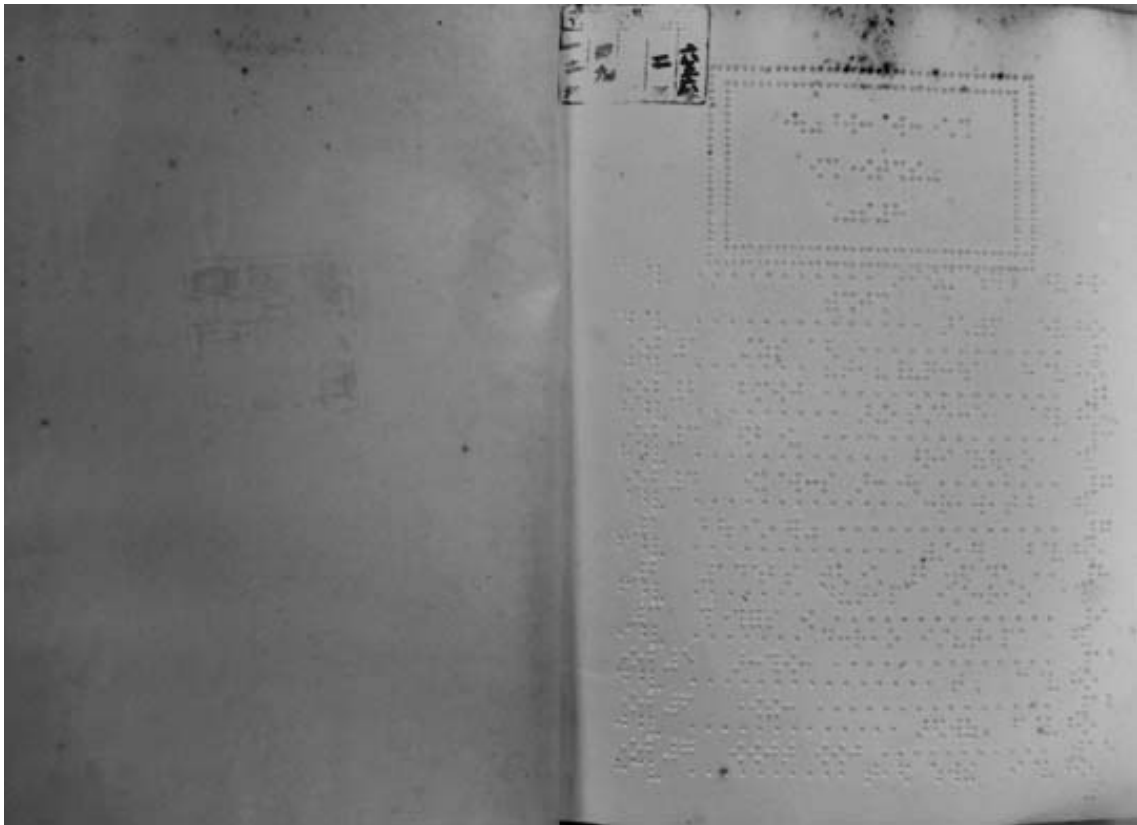








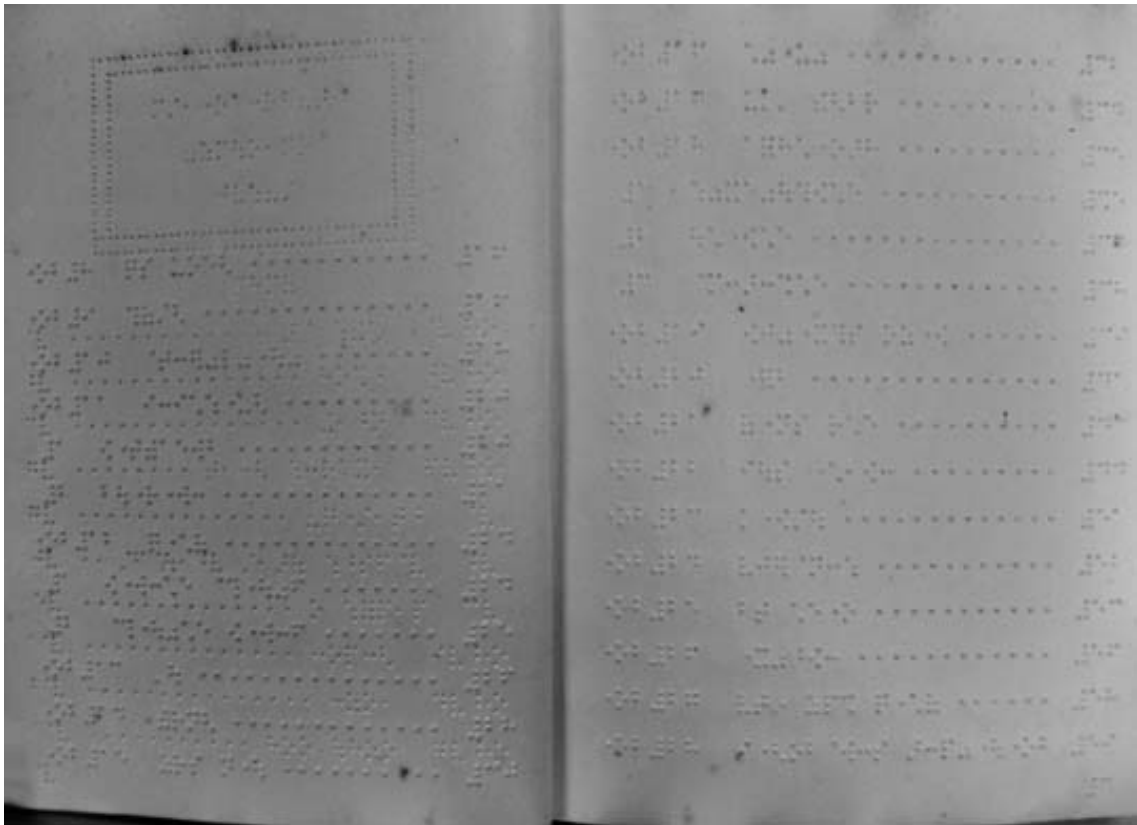




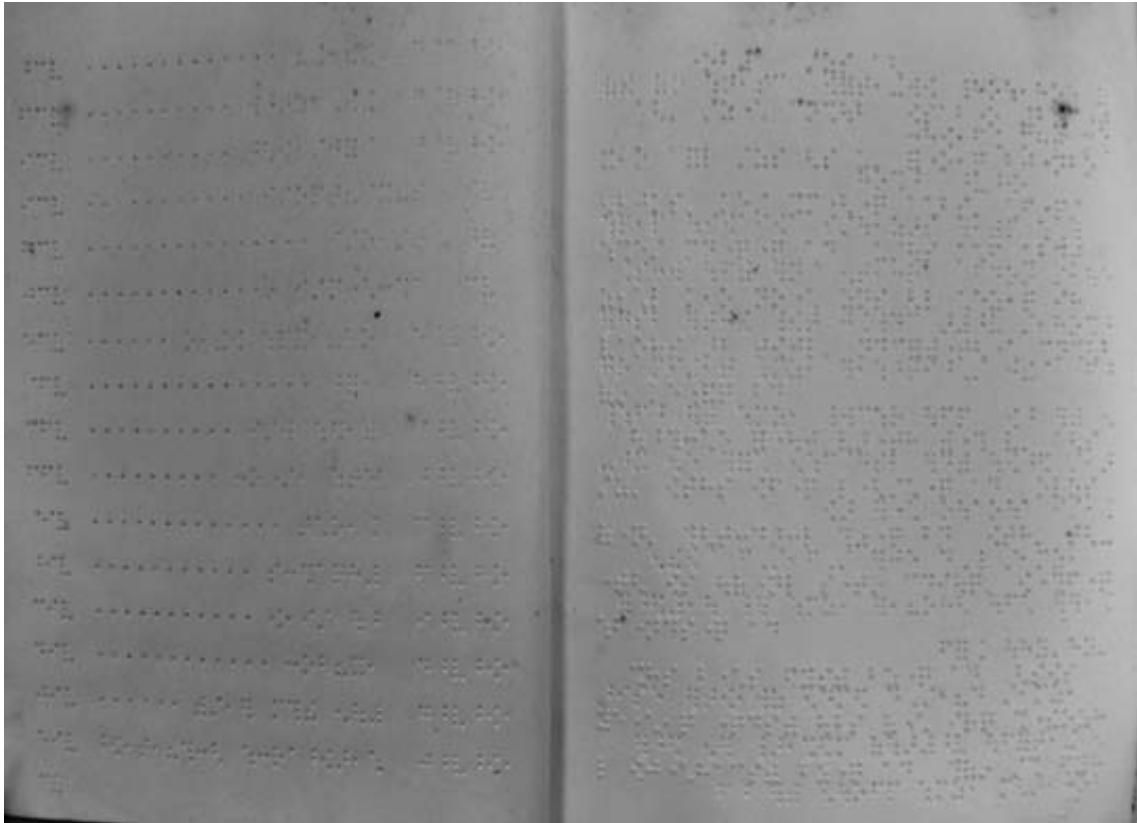
じんじょーしょーがく
こくごとくほん
かんの8

もくじ

だい11	やまの あき	1
だい12	いぬころ	2
だい13	けいば	3
だい14	ぶしよーの よーじ	7
1	いしがつせん	7
2	14さいの ときが 2どあるか	8
3	すずめの こ	9
だい15	よーすこー	11
だい16	ごほー	12
だい17	こころと こころ	15



だい18	ての はたらき	16	だい116	かんばん	32
だい19	すみやき	16	だい117	はなわ ほきいち	34
だい110	ちよーせんにんじん	18	だい118	あめりかたより	35
だい111	おーおかさばき	20	1	さんぷらんしすこから	35
1	こどもあらそい	20	2	しかごから	37
3	いしごぞー	21	3	にゆーよーくから	38
だい112	てがみ	24	だい119	ころんぶすの たまご	39
1	ごぞーから しゅじんえ	24	だい120	せい	41
2	しゅじんから ごぞーえ	25	だい121	みづの ちから	43
だい113	わし	26	だい122	おしの がっこー	44
だい114	もちつき	28	だい123	なごやし	51
だい115	まちの つじ	30	だい124	ひろせちゆーさ	52
			だい125	いと からだ	53
			だい126	ぶんぎょー	56
			だい127	ひとを まねく てがみ	58
			だい128	のぎたいしよーの よーねんじだい	59

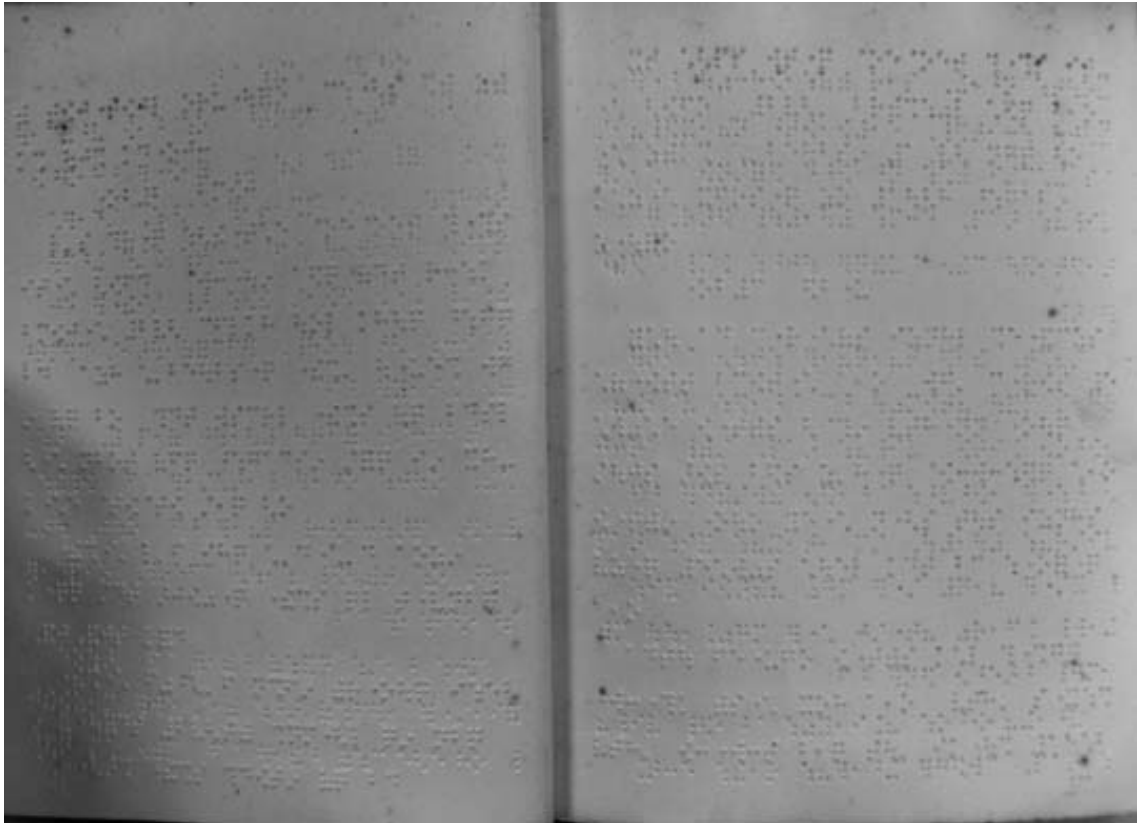


だい11 やまの あき

あきわ やまが うつくしい このあいだ 2・3ど
ふった あめに やまの きのはわ めだって いるついた
きいるなのわ ならや くぬぎで あかいのわ かえでや
さくらや ぬるでである はやしの なかえ はいと
まっかに なった つたが まつの きに からまって おり
ひあたりの よい ところにわ つるうめもどきが うつくしい
みを ならべて いる

しじゅーから めじろ ひよどり もず ひわ あきの
やまわ ことりの こえで にぎやかである たにまの
みづわ すきとーるよーに すんで いる ことりわ とき
どき この しみづに のどを うるおしてわ こずえで
さえづるので ある

くりの いかの えむのも いまで ある きのこの
むらがつて であるのもしいの みが おちて くぼたまり
に ころがりあうのも いまで ある すみを やく けむり



も ところどころに たちはじめた うさぎの けも まも
なく しろく なるだろー

たい2 いぬころ

にわの すみで さきほどから ちゃらちゃらと すずの
おとが きこえる しょーじを あけて みると ちーさな
いぬころが 2ひき うえになり したに なりして じゃれて
いる あまり かゆいらしいので ぼくわ しばらく それ
を みて いた すると そのうちに ぼくの みて いるのに
きが ついたと みえて じゃれあうのを やめて おを ぶり
ながら ちょこちょこ やって きた

ぼくが にわえ おりて かわるかわる あたまを
なでて やると よろこんで ぼくの てに とびついて
べるべると なめる

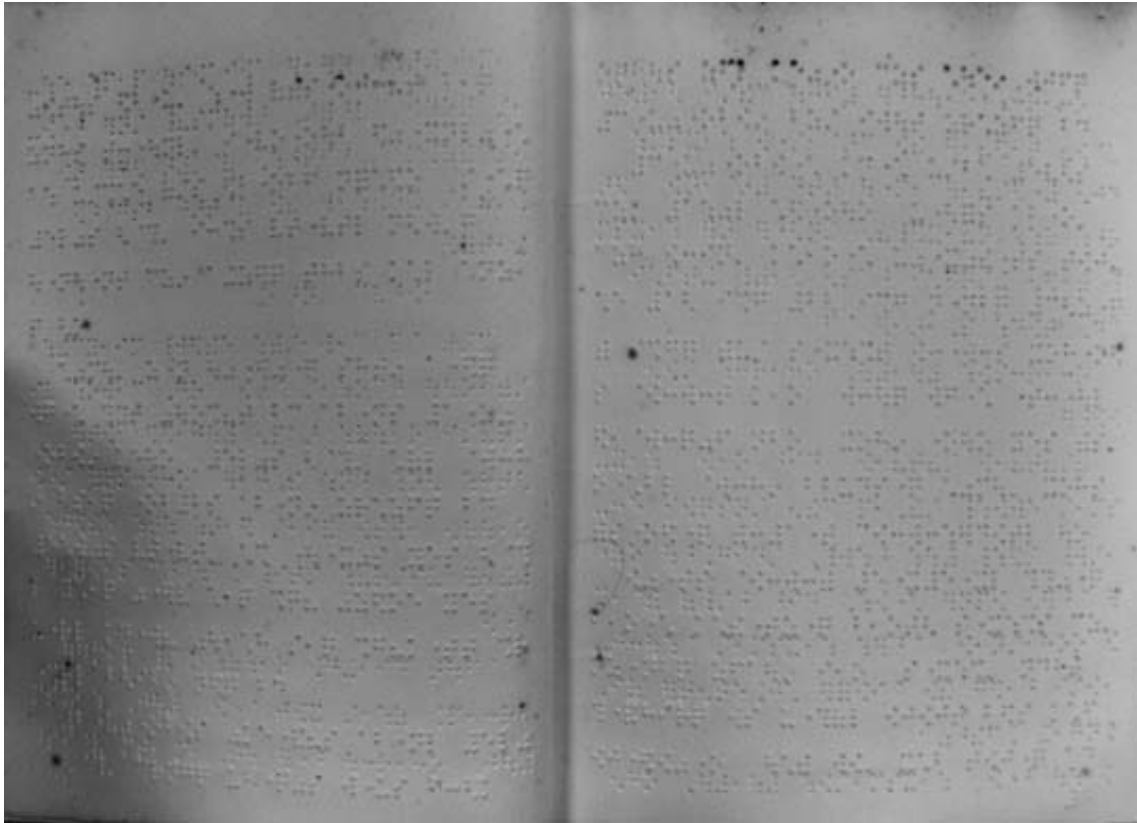
ぼくが えんがわえ つくえを もちだして おさらい
を はじめると 2ひきとも くつぬぎに てを ついて
ぎょーぎよく ぼくの することを みて いる

ふと かきねの そとで ちゃらちゃらと すずの おと
が きこえた 2ひきわ いちもくさんに かけて いった
が まもなく かゆいらしいのを 1ひき つれて きた
なかまが ぶえたので また 1しきり じゃれあいを
はじめた

たい3 けいば

むかし ある うぢがみの おまつりに くらべうまの
かみごと いうことが あった それわ うぢこの 5
かそんから こどもの きしゆを ひとりづつ だして
やしるの よこの いけの まわりで きょーそーさせて かった
こどもを だした むらが つぎの としの おまつりの
ひまで 5かそんの かしらに なるという さだめで
あった

あるとし えらばれた こどもの なかに すぐれて
じょーずな ものが ぶたり あった ひとりわ のぶさく
ひとりわ こーぞーと いうと しわ おなじく 15さい



「ことしの けいばわ さぞ みものだろー」といって
まつりの とーじつにわ おびたしい けんぶつにんが
あさはやくから みやの けいばわえ つめかけた やがて
5にんの きしゆわ おーくの ひとびとに つきそわれ
しづしづと うまを あゆませて とりいの なかに あつまっ
てきた

かんぬしわ まづ しんげんで のりとを あげて
それが すむと 「したく」という あいづの 1ばん
だいにを ならした 5にんの きしゆわ かみに しょーり
を いのって だいい2の あいづを まちかまえている

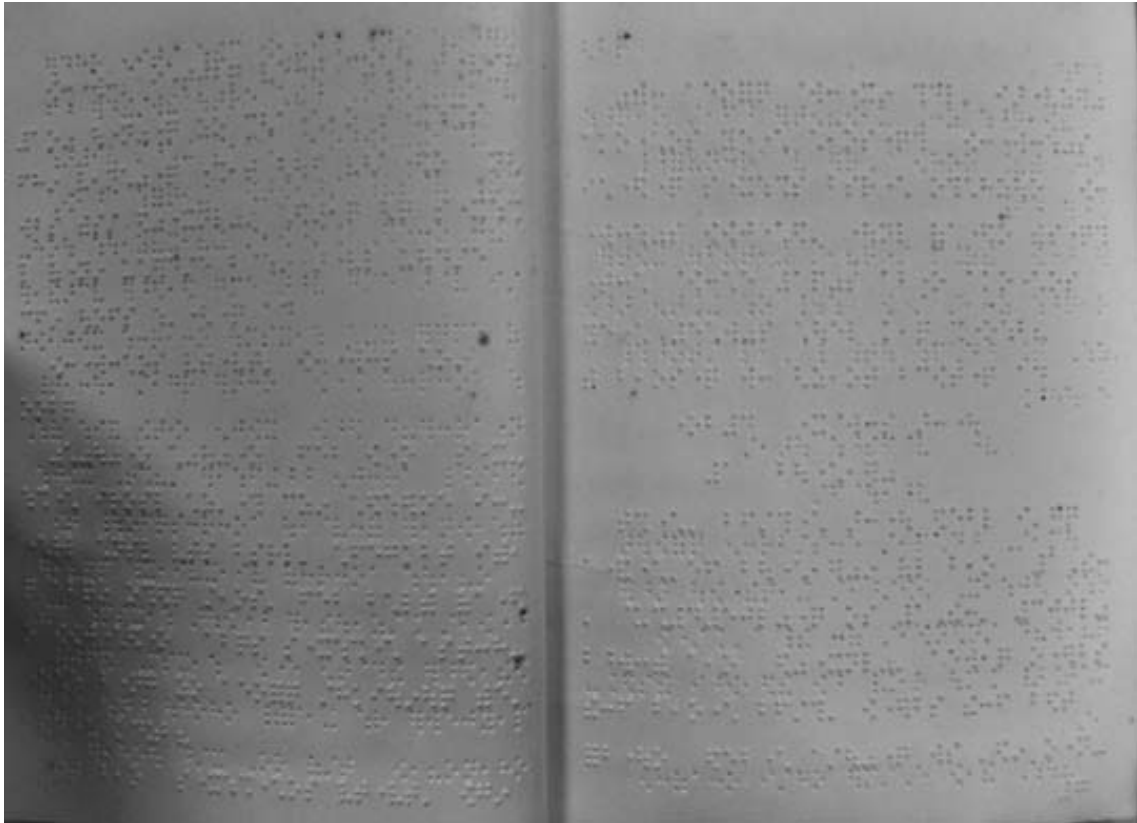
5かそんの ひとびとわ かく じぶんの むらの きしゆ
に むかって 「ぜひ かって くれ」 「まけたら むらの
はぢになるぞ」 「しっかり やって くれ」などと くち
ぐちに いきおいをつけている

2ばんだいの 「ならべ」の あいづに 5にん
の きしゆわ うちつれて はいでんの そばの おーきな

たていしの まえに ならんだ うまの かしらを そろえて
3ばんだいにを いまや おそしと まちかまえている

3ばんだいにが なるが はやくか 5ひきの
うまわ 1さんに かけたした はじめの あいだわ
あまり こーおつわ なかったが はんぶんほどの ところ
から 1き おくれて 2き おくれ つづいて 3きまで
も おくれて もはや のぶさくと こーぞーの ふたりだけ
の きょーそーと なった そーして それが どーじに
けっしょーてんえ ついた ふたりを だした むらの ものわ
たがいに しょーりを いれはるので かんぬしわ ふたりの
ものだけで もー1ど きょーそーさせることにした

こんどの きょーそーも 5ぶ5ぶに すすんで
いったが なかほどまで いったとき のぶさくの うまわ
つづいて まえあしを おった のぶさくわ つるりと
すべりおちて その はずみに こころと いけの なかえ
ころげこんだ しかも そこわ ぶかい ところである



こぞーわ おどろいて ひらりと うまから とびおり
1たん しづんで また うきあがった のぶさくの
えりを ひつつかんで ぐっと きしえ ひきあげた つき
そいの ものや けんぶつにんわ かけよって きて のぶさく
に みづを はかせるやら いしやを よびに はしるやら
うえをしたえの さわぎで ある

こぞーかたの ひとびとわ こぞーの かたを
たたいて

「かんしんだ かんしんだ えらい こた のぶ
さくが おちたのに かまわず うまを かけさせたら おー
がちに かつのに ひとの いのちにな かえられないと おもっ
て あいてを たすけて やったのわ えらい いかにも みあげ
た ころがけだ あいての のぶさくが あのとーり
だから いづれ また あらためて やりなおしをして もらわ
なければ なるまい」

などと いった のぶさくがたの ひとびとわ これを

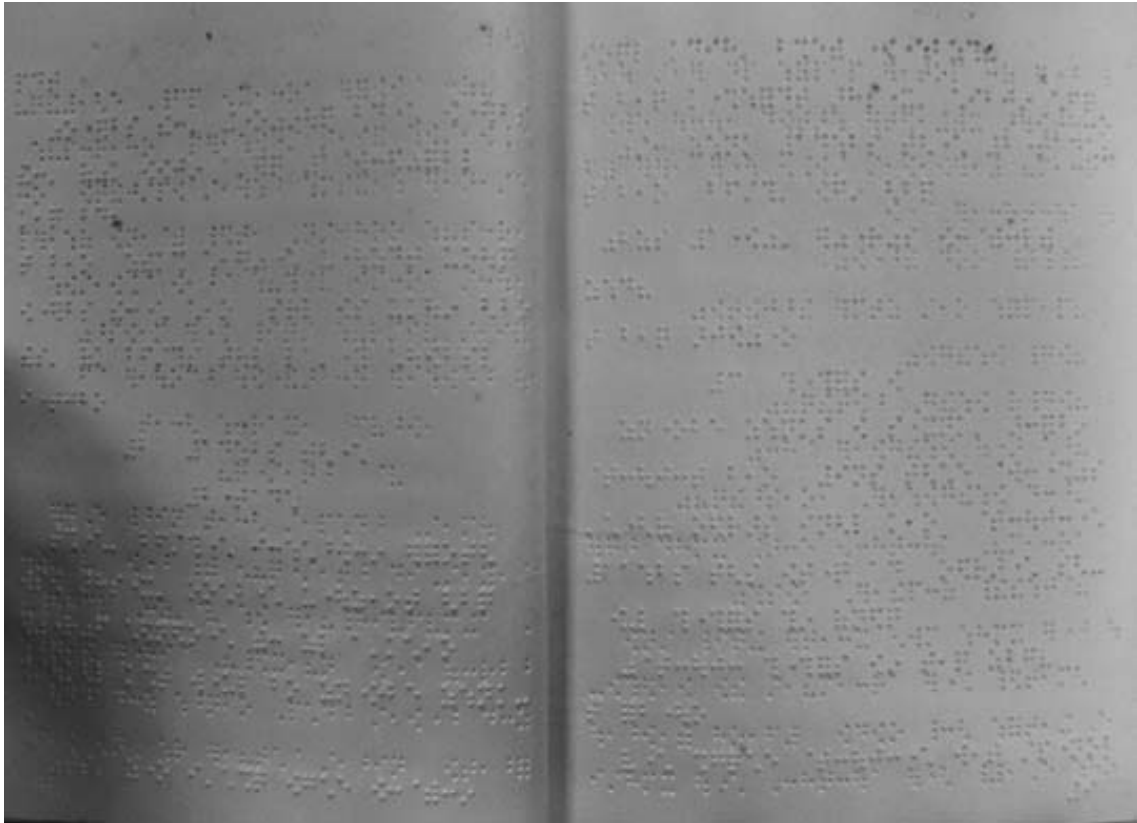
きいて

「もー あらためて しょーぶを するにわ およびません
あなたがたの むらが かったのです こぞーさんの
おかげで のぶさくの いのちが たすかりました こぞー
さんの ころがけわ じつに みあげた ものです
どーか きょーから 1ねんの あいだ あなたがたの
むらが 5かそんの かしらに なって ください」
と いったので そー きまったと いうことである

だい14 ぶしょーの よーじ

1 いしがっせん

とくがわ いえやすが よーじ けらいに おわれて
あべがわらえ いしがっせんを みに いった 1ぼー
わ ひゃく450にんで たの 1ぼーわ 300にん
いじょーも あった けんぶつにんわ あらそって たせいの
ほーえ いったが いえやすわ こせいの ほーえ いけと
めいじた けらいが あやしんで その わけを たづ



ねると

「たせいの ほーわ ゆだんして いるが こせいの
ほーわ みんな ころを あわせて 1しょーけんめい
になっている」
と いった まもなく かつせんが はじまると はたして
こせいの ほーが かった のちに この はなしを きいた
ものわ みな いえやすの としに にあわず かしこいの
におどろいた

2 14さいの ときが
2どあるか

とくがわ いえやすが おーさかじょーを せめたとき
そのこ よりのぶわ たたかめい はじまったと きいて
せんぢんえ かけつけたが もー まに あわなかつた
くやしなきに なくと そばに いた まつたいら まさつな
が

「とのわ まだ おわかくて これから こーみょーを
おたてに なるおりわ いくらも ございます」
と いった なくさめると よりのぶわ かおいろを かえて
「やー まさつな 14さいの ときが 2どあるか」
と いった いえやすわ これを きいて
「いまの 1ごんわ せんぢんの こーみょーにも

まさる」

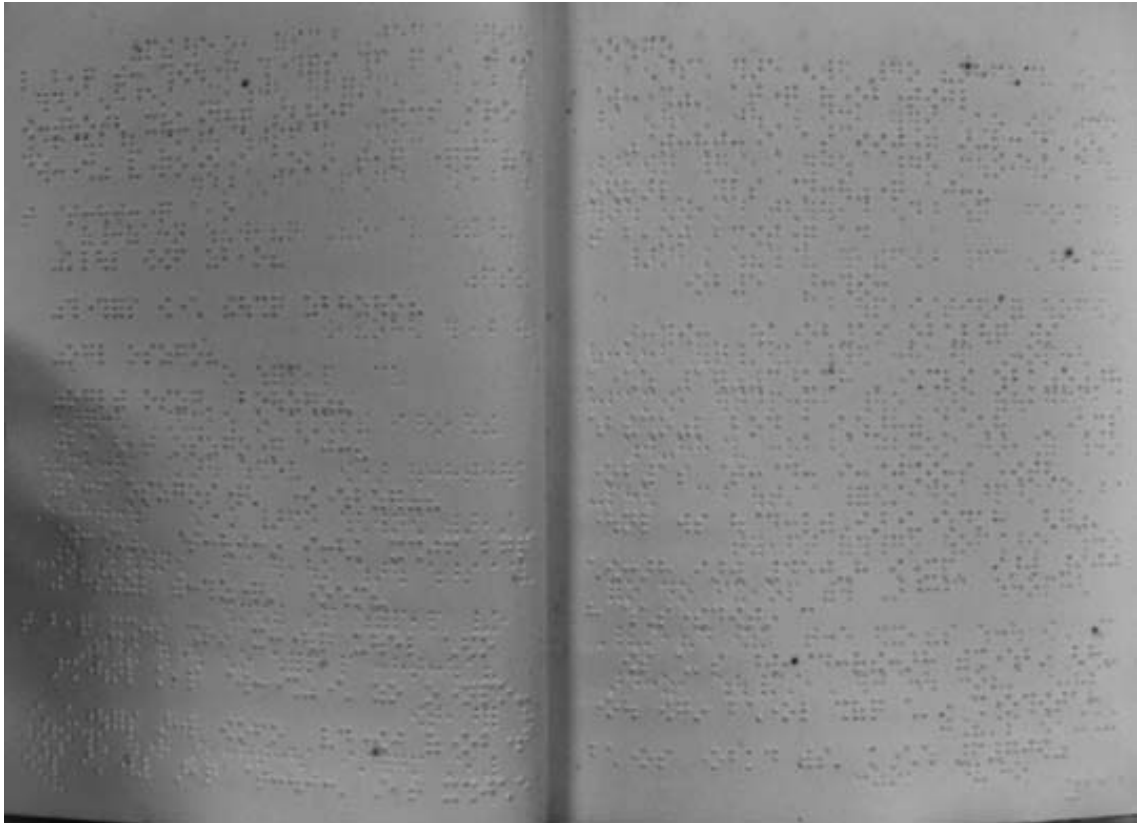
と いった よろこんだ

3 すずめの こ

まつたいら まさつなの このぶつなわ よーめいを
ちょーしろーと いった 9つの ときから しょーぐんの
わかぎみ たけちよのおつきに なった ちょーしろーが
11さいの ときの ことである たけちよの き
ばに すずめの すを みつけて

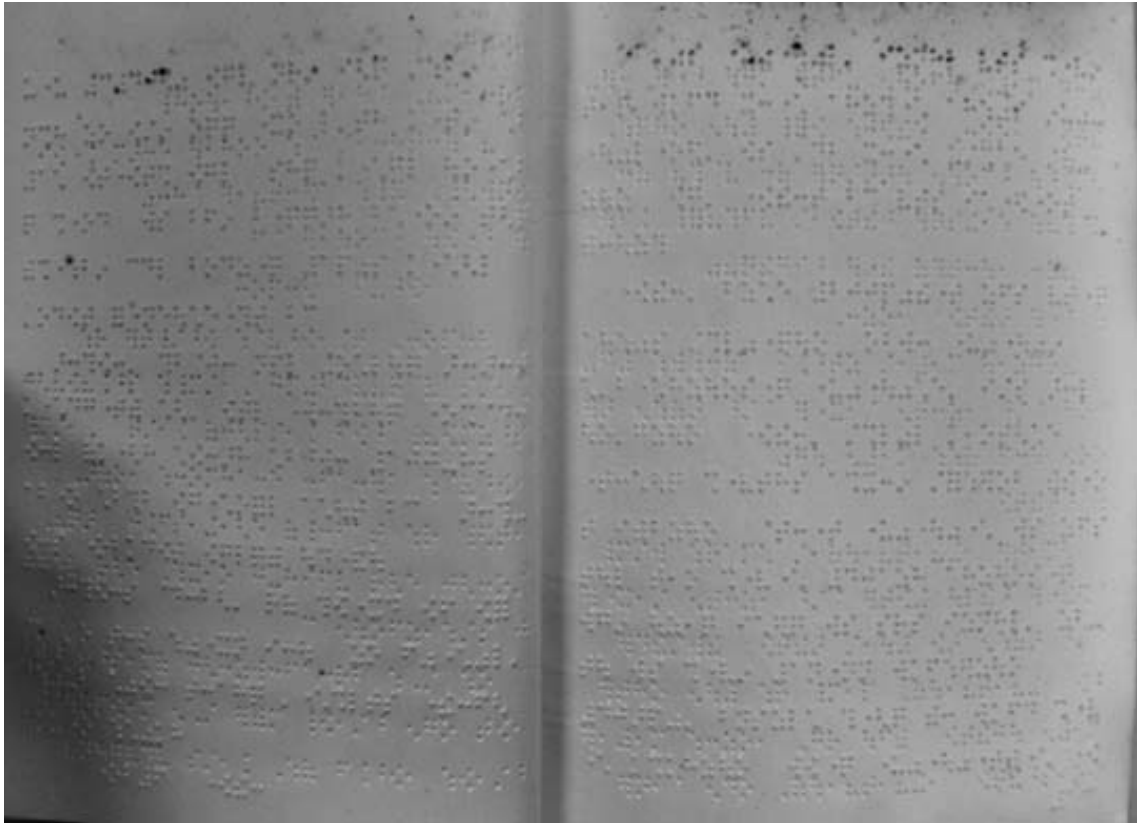
「ちょーしろー すずめの こを とって まいれ」
と めいじた

ひが くれてから ちょーしろーが そっと やねづたい



に いて もー すこしで すずめの すえ てが とど
こーとしたとき ふみはづして のきしたえ どーと おちた
しょーぐん ひでただが かたなを とつて でて みる
と ちょーしるーで あつた
「なにしに ここえ まいった」
「すずめの こが ほしくて まりました」
「たれに たのまれた」
「たれにも たのまれわ いたしません」
「いや きつと たのまれたで あるー」
「いえ たのまれたのでわ ごさいせん」
しょーぐんわ ちょーしるーを おきな ふくろえ いれて
「ありのままに もーすまでわ ださぬ」
と いて ふくろの くちを ふーじて はしらに かけた
よくじつに なつて しょーぐんが また たづねた
が はじめの よーに こたえた ひるごろ みたど
ころの おむひに よつて ちょーしるーわ やつと ふくろから

だされた
しょーぐんわ あとで みたどころに
「ちょーしるーが あの こころで おーきく なつたら
たけちよにわ むにの ちゆーしんで あるー」
と いったと いうことである
たい15 よーすこー
よーすこーわ したたい11の たいゆににして その
ながさ 1せん3びやくりわ わがくにの さいなんたんより
さいほくたんに いたる ながさよりも ながし わがくに
たい11の ちょーりゆー おーりよくこーの ごときわ
じつに その しりゆーにも およばざるなり きせんわ
かこーより およそ 450り こぶねわ およそ 900
り さかのぼることを う
この かわの じょーりゆーちほーより もくさいを きり
だし これを いかにに くみて かわを くだすことあり
いかにの たいなる ものわ ながさ 670けん



はば 340けん これに つちを おきて やさいを
つくり また こやを たてて ふた にわとり などを かい
1か ことごとく これに のりて ながれに したかい
て くだる その いえを いでてより いかだを ときて
もくざいを うるに いたるまで 1ねんの ながきに
わたること めづらしからずと いう

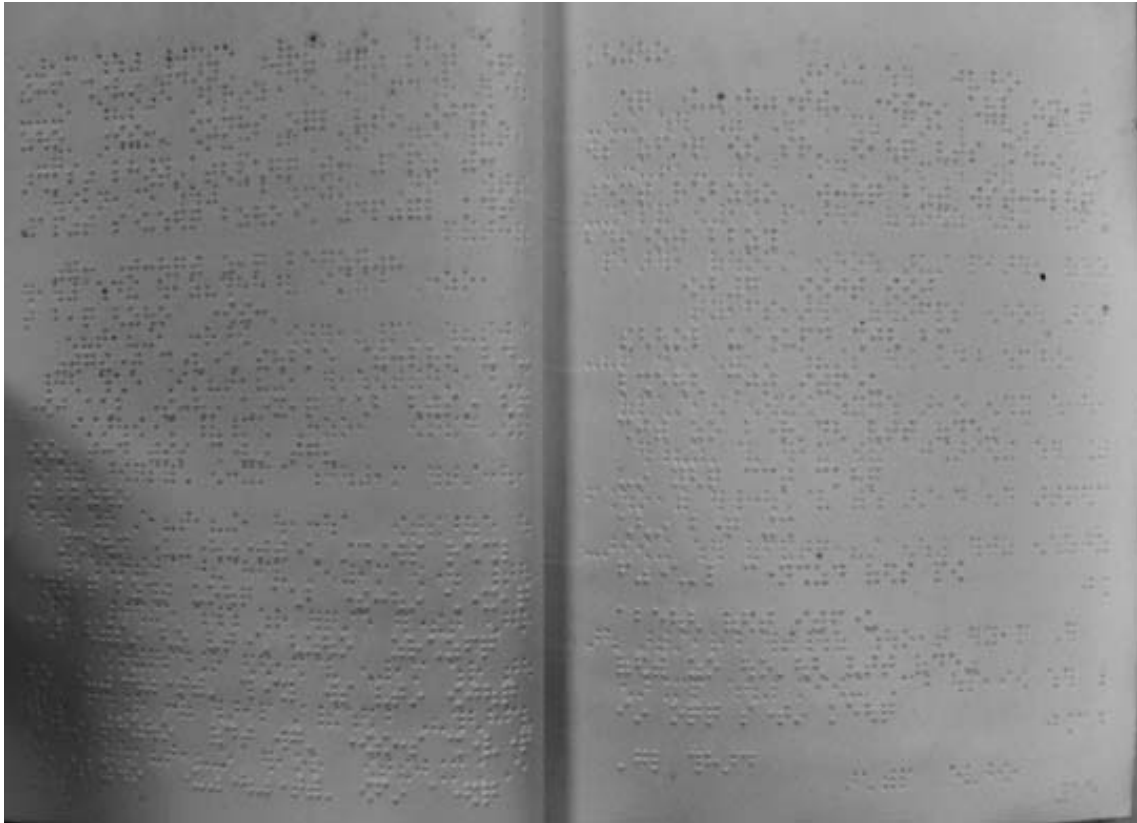
よーすこーわ すいりょー つねに ゆたかにして よーよーと
ながるれども かきわ ことに ぞーすいして だくりゅー
こーに みなざり かこーより かいじょー 100りの
あいだ かいすい これがために あかしと いう よーす
こーの たいなること これにても しるべし

よーすこーの りゅーいきわ ちみ すこぶる こえ こめ
ちゃ わた とーの さんぶつ おーし また えんがんにわ
しゃんはい かんこー とーありて わがくにとも ぼーえき
はなはだ さかんなり

だい6 ごほー

たいわんの ばんじんにわ おまつりに ひとの くびを
とって そなえる ふーが ありますが ありさんの ばん
じんにだけわ この わるい ふーが はやくから やみ
ました これわ ごほーと いう ひとの おかげだと
もーします

ごほーわ いまから 200ねんほど まえの ひとで
ありさんの やくにんでした たいそー ばんじんを
かわらしましたので ばんじんからわ おやの よーに
したわれました ごほーわ やくにんに なったときから
どーかして くびとりの あくふーを やめさせたい ものだ
と おもいました ちょーど ばんじんが その まえの
としに とった くび 40あまり ありましたので
それを しまつて おかせて その のちの おまつりにわ まい
とし その くびを 1つづつ そなえさせました
40よねんわ いつのまにか すぎて もー そなえる くび
が なくなりました そこで ばんじんどもが ご



ほーえ くびをとることを ゆるして くれと 言って でした
ごほーわ おまつりの ために ひとを ころすのわ
よくないと いうことを ときかかせて もー 1ねん もー
1ねんと のばさせて いましたが 4ねんめに なる

「もー どーしても まって いられません」

と 言って きました ごほーわ

「それほど くびが ほしいなら みよーにちの ひる
ごろ あかい ぼーしを かぶって あかい きものを きて
ここを とーる ものの くびを とれ」

と いました

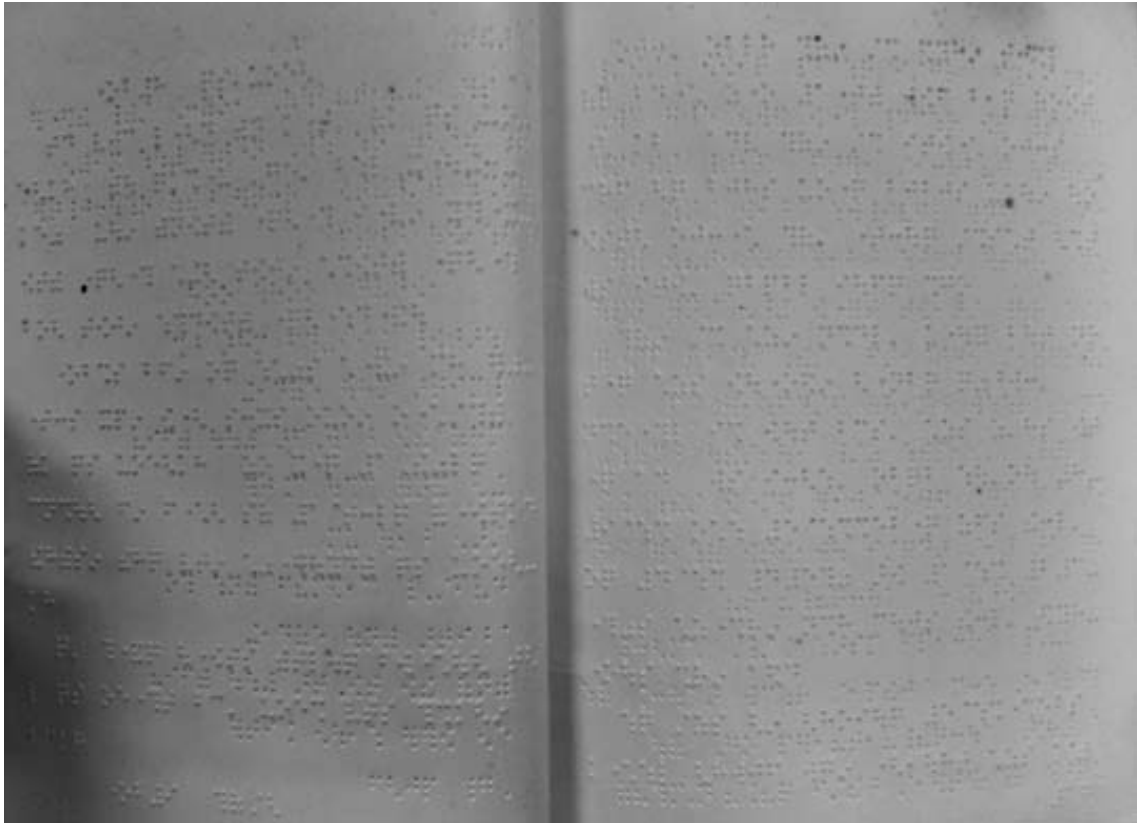
よくじつ ばんじんどもが やくしょの ちかくに
あつまっていますと はたして あかい ぼーしを かぶって
あかい きものを きた ひとが きました まちかまえて
いた ばんじんどもわ すぐに その ひとを ころして
くびを とりました みると それわ ごほーの くびで
ございました ばんじんどもわ こえを あげて

なきました

さて ばんじんどもわ ごほーを かみに まつって
その まえで この のちわ けって ひとの くびを
とらぬと ちかいました そーして いまも そのとーりにして
いるのだと います

だい17 こころと こころ

のきしたに はらばえる くるき いぬ
にくらしき くと おもえば
くるも また いぢわるき ひとと みるらん
はを むきて ううと うなりて
かきを いで ゆく
えんがわに うづくまる みけの ねこ
あいらしき みけと おもえば
みけも また したわしき ひとと みるらん
おを たてて のどを ならして
われに すりよる



だい18 てのはたらき

とる ひろう にぎる もつ などわ みな てのはたらきなり もし てなくば われらわ いかに ふしゆーならん はしをもつことも できず おびを むすぶことも できず かゆき ところを かくことも できず いたき ところを さすることも できざるべし

だいくの いえを たて さかんの かべを ぬり せんどーの ふねを こぎ のーぶの たはたを たがやすも みな てのはたらきなり また ふで 1ぼんにて うつくしき えを えかき のみ 1ちよーにて みごとなる ほりものを ほりて ひとを かんぜしむるも てのはたらきなり

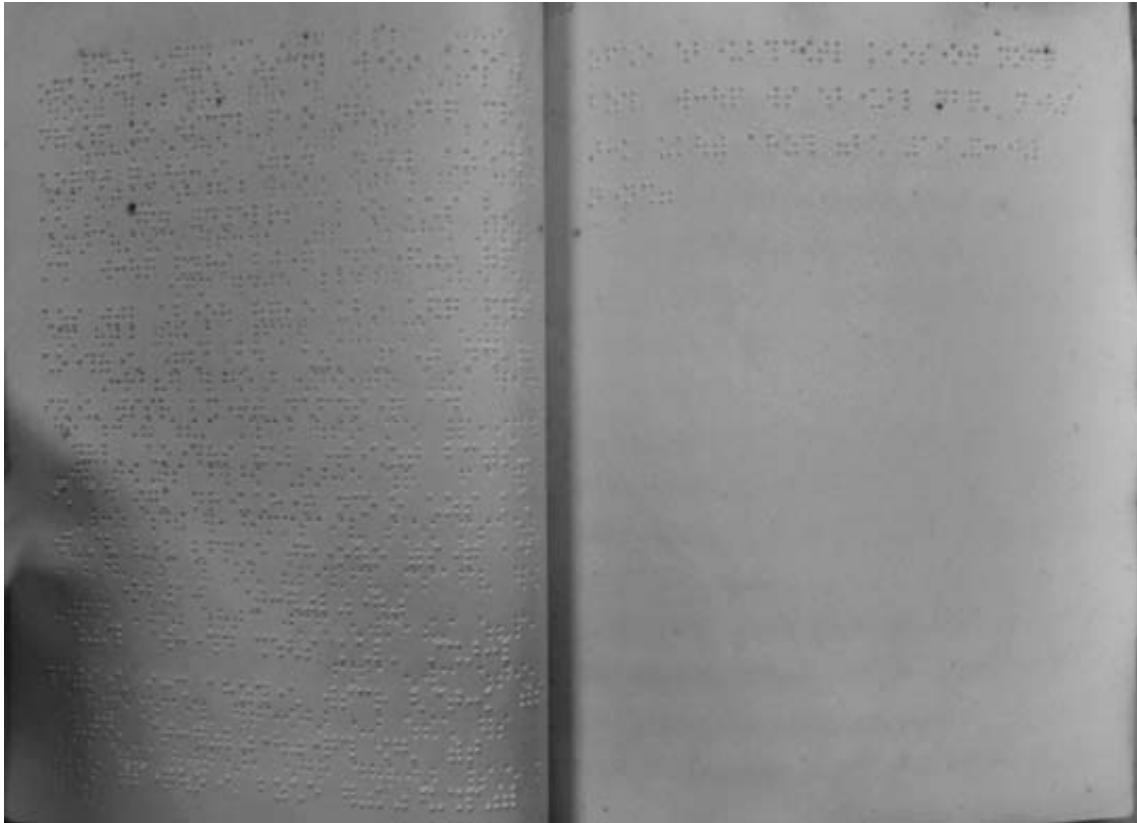
てわ すべて しごとの もとにして いそがしき ときに ての たらすと いうわ はたらく ひとの すくなきを いうなり

だい19 すみやき

たろーわ まいにち すみを やく けむりを とーくに みているが まだ 1ども そこえ いった みたことが ない あるひ すみを やく おとこが たろーの うちえ きて いろりの はたで いろりの はなしをした このとき たろーが すみわ どーして やくのかと きくと その おとこわ ていぬいに おしえて くれた

すみを やく かまをつくるにわ はじめ いしと つちとで かまの こしだけをつづいて てんじょーわ つくらずに おく こしと いうわ かまの まわりの ことである その おーきさわ たいてい さしわたし 8 9しゃく たかさ 5しゃくぐらいで まえの ほーにわたて 4しゃく 45すんの よこ 1しゃく 23 ずんの かまぐちをつくり うしろの ほーにわ けむりだしの くちを あける

さて やまの きを きりたおして 5しゃくぐらいの ながさに きりそろえ それを ぎっしりと かまの なかに



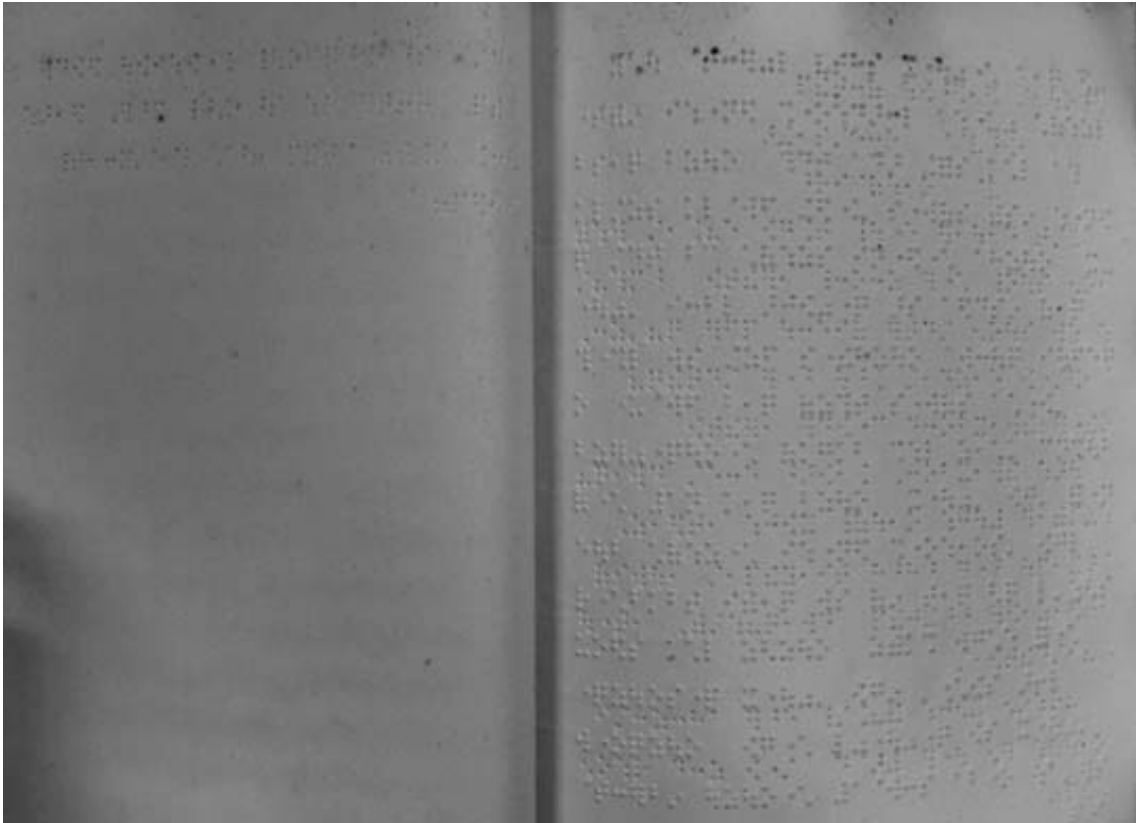
たてならべる それから そのうえに そだを なかたかに
つかかさね また そのうえに ねった つちを おいて うち
かためると てんじょーが できる つぎに かまぐち
から ひを つけて 45にちの あいだ なかの きを
やく そーして けむりの いろで やけかげんを みて
かまの そとに かきだし しめった はいを かけて けすと
かたずみが できあがる かまわ 1ど つくって
おけば そのち いくども つかえるので ある

すみにわ かたずみの ほかに どがまと いうもの
がある これわ つちばかりで つくった かまの なか
で やき ひが きえてから とりだした もので ある

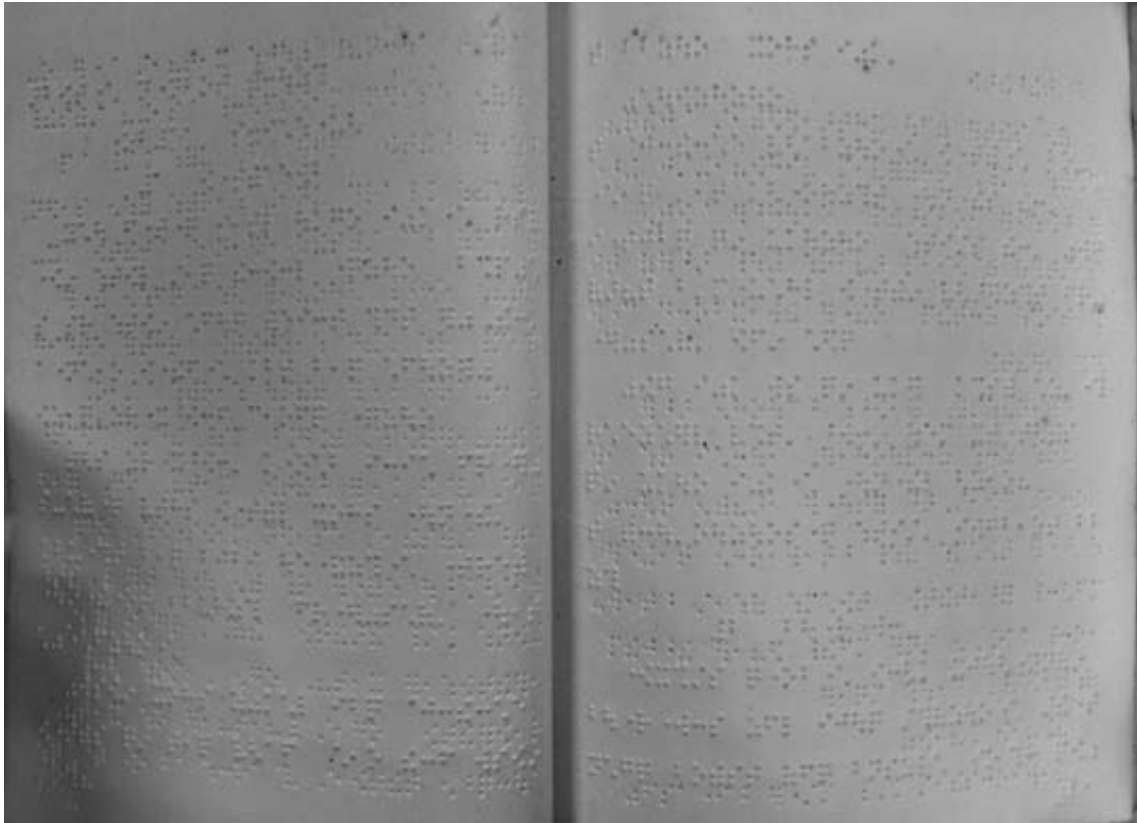
だい10 ちょーせんになんじん

さんやに しょーずる くさきの なかにわ やくよーに
するものが おーく ありますが そのうち きちょーな もの
の ひとつわ ちょーせんになんじんです これわ もと
やせいの ものでしたが いまから せんなんびやくねんも

まえから さいしほいすることになったのだと つたえて
います そーして その さいしほいについてわ つぎの
よーな はなしも あります (いか 19ページに
つづく)



むかし ちょーせんに ひとりの ふじんが あって こどもをおさづけ くださるよーに あさばん かみさまに いのって いました すると あるよ ゆめの なかに あすなにやまの なにしよえ ゆけば のぞみの ものを さづけて やると いう かみさまのおつげが ありました ふじんわ おーいによろこんで よの あけるのを まって すぐに その やまえ のぼりました そーして おしえられた ばしよえ いって みますと のぞみの あかごわ いませんでしたか みなれない くさに まっかな うつくしい みが 1つ なって いました ふじんわ これわ めづらしい かみさまが おさづけ くださったのわ これに ちがいないと おもって その みをとって きて にわさきはたけの なかに まきました まもなく それから めが でしたので ふじんわ これを わがこの よーに そだてました これが にんじんで この ふじんわ ちょーせいを しましたが 1しよーの あいだ しあわせの



よいことが つづいたと もーします

たいい 1 おーおかさばき

1 こどもあらい

むかし えどで おっとに しなれた おんなが ちのみ
ごを さとこに やって ほーこーに でした いくねんか
の のち さとこを かえして もらおーと すると せんぼーわ
あづかった おぼえが ないと かって かえしません
こまって まちぶぎょーえ うったえて でした

ときの まちぶぎょーわ なだかい おーおか えちぜん
の -かみで ひとりの こどもに ふたりの じつぼわ
ないはずと かって いろいろ しらべますが どちらも
じつぼだと いいはります えちぜんのかみわ
かんがえましたが

「そのこを ふたりの まんなかに おいて りょーほーから
こどもの てを とって ひきあえ かった ほーえ そのこを
わたす」

と いいました ふたりの おんなわ

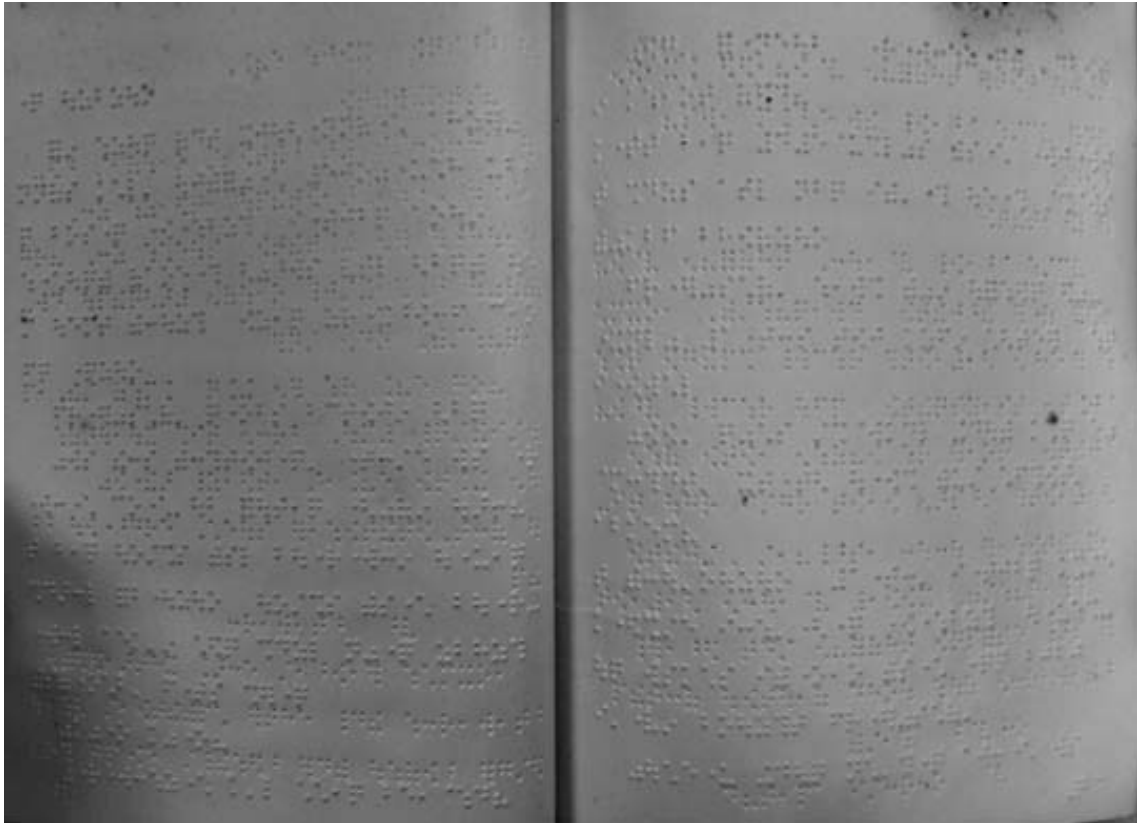
「かしこまりました

と りょーほーから ひきあいましたが こどもが いた
がって わつと なきだしますと じつぼの ほーわ
おどろいて てを はなしました さとおやの ほーわ 「それ
みよ」と いわぬばかりに こどもを ひきよせますと えち
ぜんのかみわ こえを かけて

「これ おんな その てを はなせ なくのも かまわず
ちからまかせに ひくとわ じょーを しらぬ ふとどきもの
てを はなした おんなが じつぼに きまった」
と もーしわたしましたので さとおやわ おそれいっと いい
ます

2 いしぢぞー

ごふくやの てたいが おーきな ふろしきづつみを
いしぢぞーの まえに おろして やすみましたが よほど
つかれて いたものと みえて いつのまにか ぐつすり ねこん



で しまいました

めを さまして みると ふろしきづつみが ありません
つつみの なかにわ しるもめんが 50たんばかり はいっ
ていたので ございます おどろいて あたりを
さがしても みあたらず きんじょの ひとに きいても しら
ぬ しらぬと もーします こまって まちぶぎょーえ うった
えて でした

えちぜんのかみわ たいの いうところを きいて

「その ほーの もーすところわ どーやら その ぢ
ぞーが うたがわしい めしとつて ぎんみを しよー」
と いった しまやくの ものに いしぢぞーを しばって
くるよーに めいじました したやくの ものが いしぢ
ぞーに あらなわを かけて くるまに つんで まいります
ものみだかいわ えどの くせで

「なんだ なんだ」

「ぢぞーさまが なわに かけて いらっしやる」

「これわ めづらしい ぢぞーさまでも わるいこと
を なさつたと みえる」

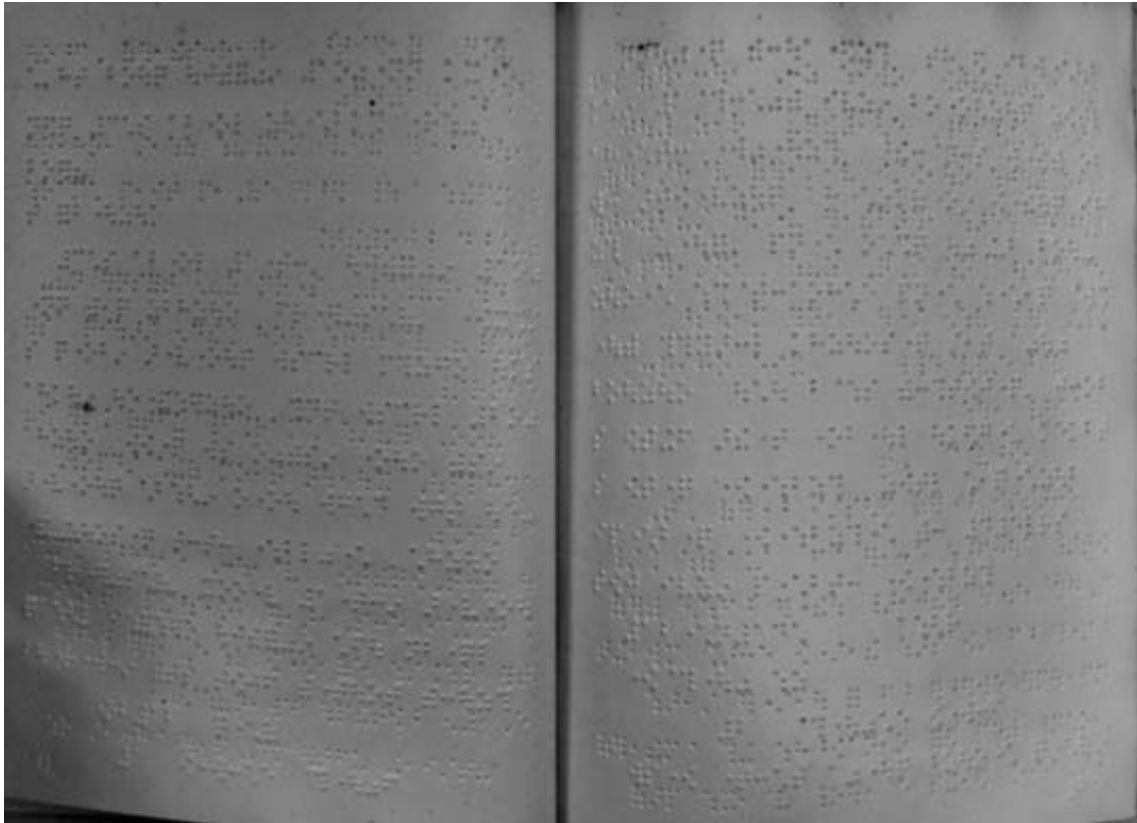
などと いった 45ひやくにんの ものが ぞろぞろ
と くるまの あとに ついて おもわず しらず やくしよの
もんないえ いらこみました

えちぜんのかみわ さつそく もんを しめさせて」 けん
ぶつにん 1どーの ところ なまえを かきとらせ さて
おごそかに

「こわ てんかの やくしよなるに ゆるしも なくて らん
にゆーするとわ ふとどき しごく もはや かえすことわ
あいならぬ」

と もーしわたしました 1どーわ おどろいて なくやら
なげくやら おーさわぎで ございます しばらく
して そのなかの おもだった ものが でて いろいろ
おわびを いたしますと えちぜんのかみわ

「しからば ゆるして つかわすで あるーが この



かわりと いたして しろもめんを 1たんづつ なふだを
つけて 3かの あいだに まちがいなく ぢさん
いたせ」

と めいじました

3かの あいだに 1どーわ しろもめんを 1たん
づつ もって まいりました えちぜんのかみわ ごぶくや
の てだいを よびだして そのうちに ぬすまれた しなの
ありなしを しらべさせました すると そのうちに 2たん
ありました そこで その たんものを だした ものを
よびだして かいさきを ただし それから それと しら
べ ましたので とーとー ざいにんが わかりました

えちぜんのかみわ ふたたび 1どーを よびだし
て さきに おさめさせた しろもめんを かえし ついでに
いしぢぞーを もとの ところえ もどしたと もーします

たい12 てがみ

1 こぞーから しゅじんえ

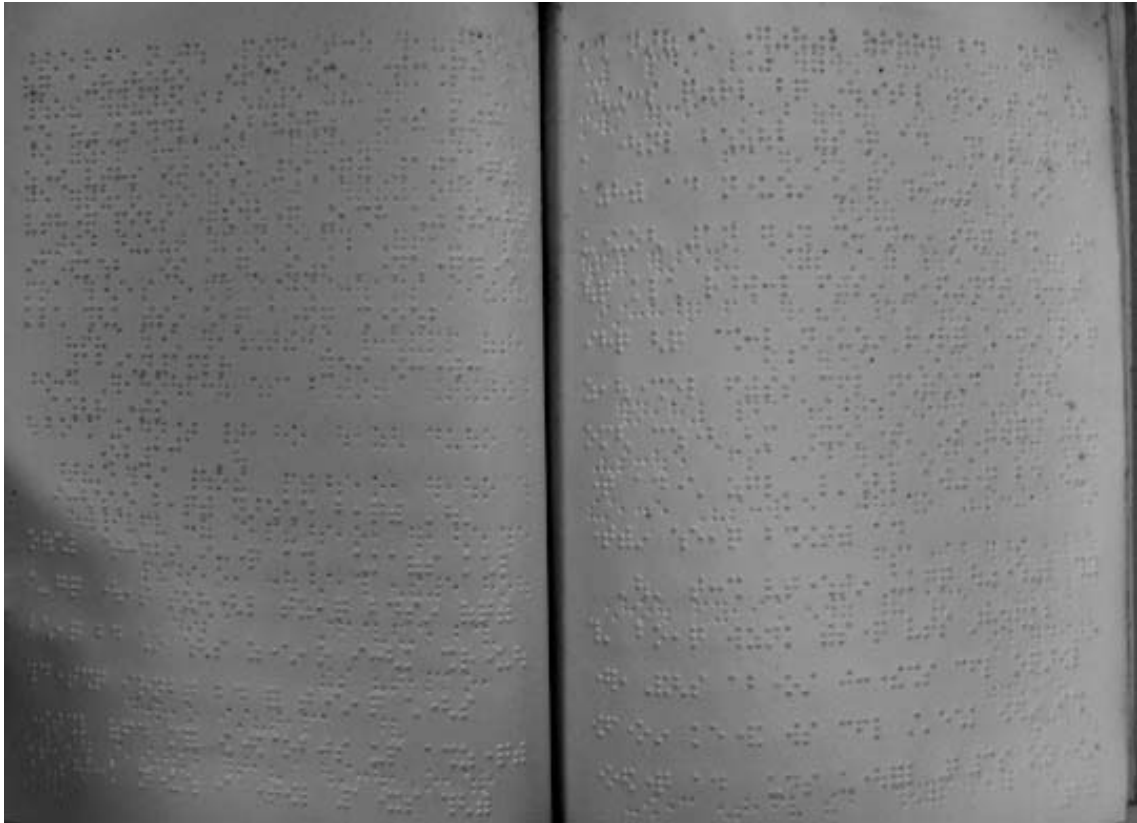
つつしんで もーしあげます とりわけ おいそがしい
なかを 1しゅーかんも おひまを いただきまして まことに
ありがとー ぞんじます びょーちゅーの そぼも たい
そー よろこびまして ありがたなみだを こぼして おり
ます はじめわ ねつが たかくて しんぱい いたし
ましたが さくちよーあたりから ねつが さがって しょく
じも すすむよーに なりましたので やつと あんしん
いたしました しかし いしゃの もーすところであ ろーたい
の ことゆえ よほど たいじに しななければ ならないと
の ことと ございませう まことに かってがましい
おねがいと ございませう もー 4・5にちの
ところ おひまを ねがいとー ございませう

12がつ14か

ごしゅじん さま

2 しゅじんから こぞーえ

そのご どーかと あんじて いましたが てがみを



みて あんしんしました こちらの ほーわ どーでも なる
から しんぱいするにわ およびません そぼ ひとり
まご ひとりの ことだから 5かでも 10かでも
ひとりで ねおきの できるまで ゆっくり かんびょーして
おあげなさい この かわせわ ほんの わづかですが
なにか すきな ものを かって あげて ください

12がつ16にち

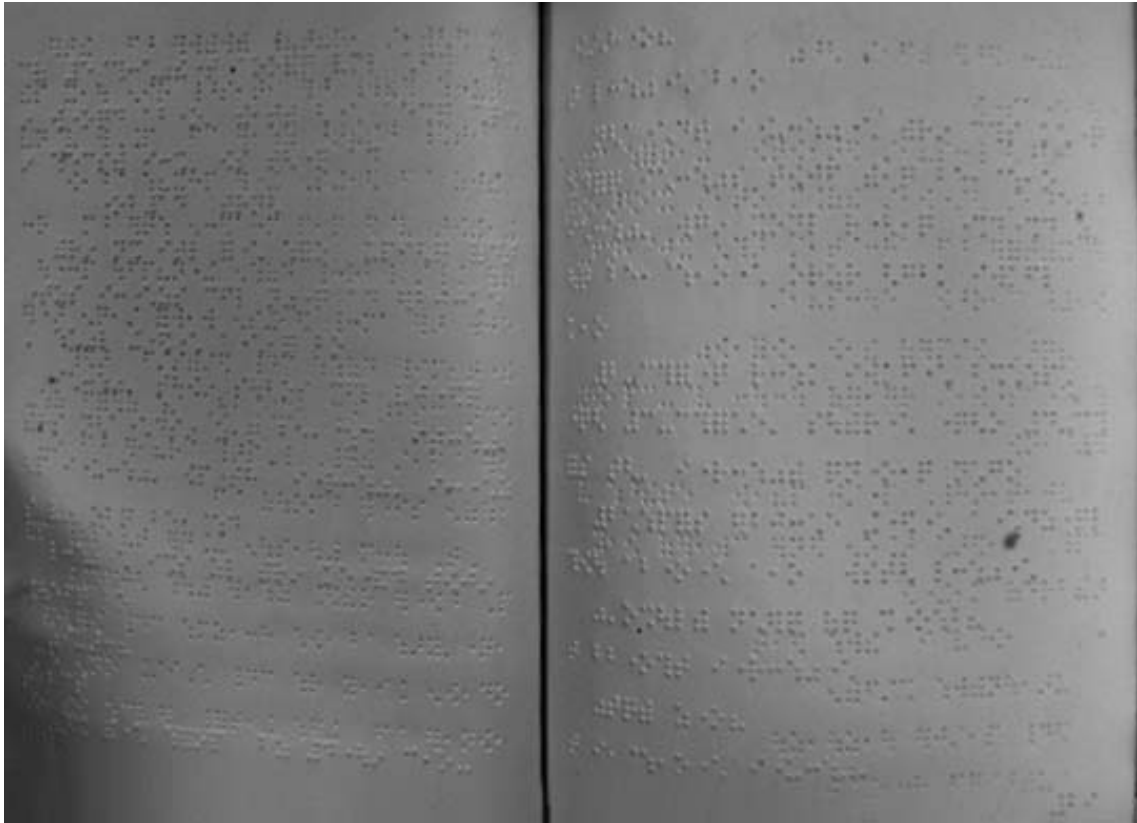
あさきち どの

たい13 わし

おーきさから いったも つよさから いったも わしわ
たしかに ちよーいの おーで ある かなあみの なかに
かわれて じつと とまりぎに とまって いるのを みても
いかって いる かた さきの まがった おーきな くちばし
するどくて おちついて いる め とがって かぎの
ごとくに みえる つめ こげちやいろのはね あくまでも
がんぢょーな つばさ お どこに 1ぶの すきも

なく つよみが ぜんしんに みちみちて いる まして
じゆーの てんちに いて じざいに そらを とぶ さま
わ じつに いさましい ものである すなわち 1けん
あまりもある つばさを はって すーぶんの あいだで
はばたき 1つ せず くーちゅーを のして いく そー
して なにか ちじょーに えものを はっけんすると すーつと
おりて きて きゅーに つばさを ちぢめ かぜを きって
まっしぐらに えものの うえに つかみかかる きつね
たぬき うさぎ いぬ ふたなどわ かの もとめる もの
であるが まれにわ にわさきに あそんで いる こ
どもを さらって いくことも ある

わしわ とーく ひとざとを はなれて しんざんに すむ
すわ いたって そまつな もので ひとの よりつけない
ぜっべきの あいだや るーぼくの うえに たてよこに
こえだを ならべ その うえに やわらかな こけを おく
だけである はるの はじめに 2・3の たまごを



うみ 5しゅーかんほど あたためて ひなに かえず ひな
を そだてる あいだわ もっとも きが あらくて かちく
を さらうのも おーくわ この ときで ある

だい14 もちつき

もちをつく おとに めが さめた はねおきて みると
どまの おーがまの うえに つんで ある せいろーから
わ さかんに ゆげが あがって いた

おかーさんわ とりこを のしいたの うえに ひろげて
もちの つきあがるのを まって いらっしやる おとーさんわ
きね おばーさんわ こねどり おぢーさんわ おーがま
の ひを たいて いらっしやる

にーさんが おくの まに もちを ならべる ところを
こしらえて いた

「おはよー」

と いうと

「よく めが さめたね いま 4じを うった

ばかりだ」

と にーさんが いった

つきあがると おばーさんが もちを うすの なかで
まるめて おかーさんの ところえ もって いらっしやった
おかーさんわ それを ふたつに ちぎって ぐるぐる まわ
して いらっしやったが たちまち きれいな おそなえに
なった

2うすめで ちーさな おそなえが いくかさねか
でき 3うすめからわ のしもちが できた 4うす
めの ときわ おぢーさんも てつだって つかれた

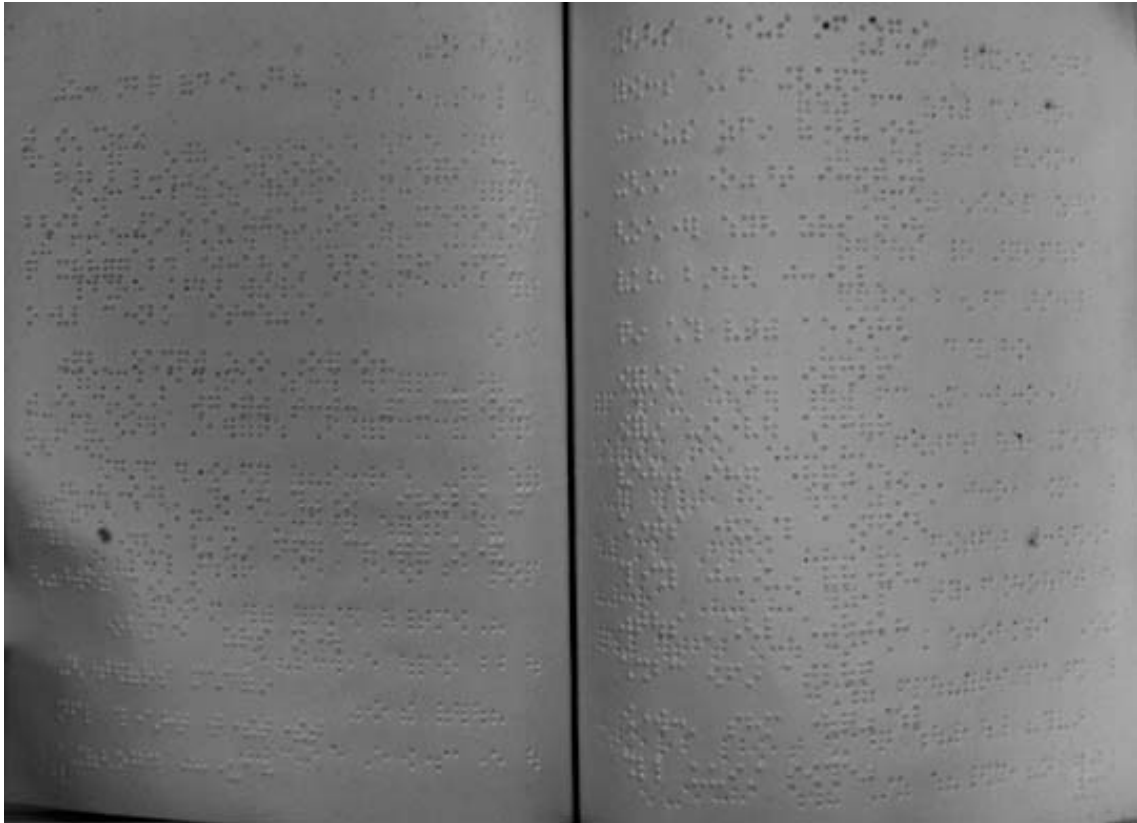
2かさねめの せいろから ゆげが あがるまで
すこし あいだが あった そのとき にーさんが

「わたくしにも つかせて みて ください」

と いいだすと おぢーさんが

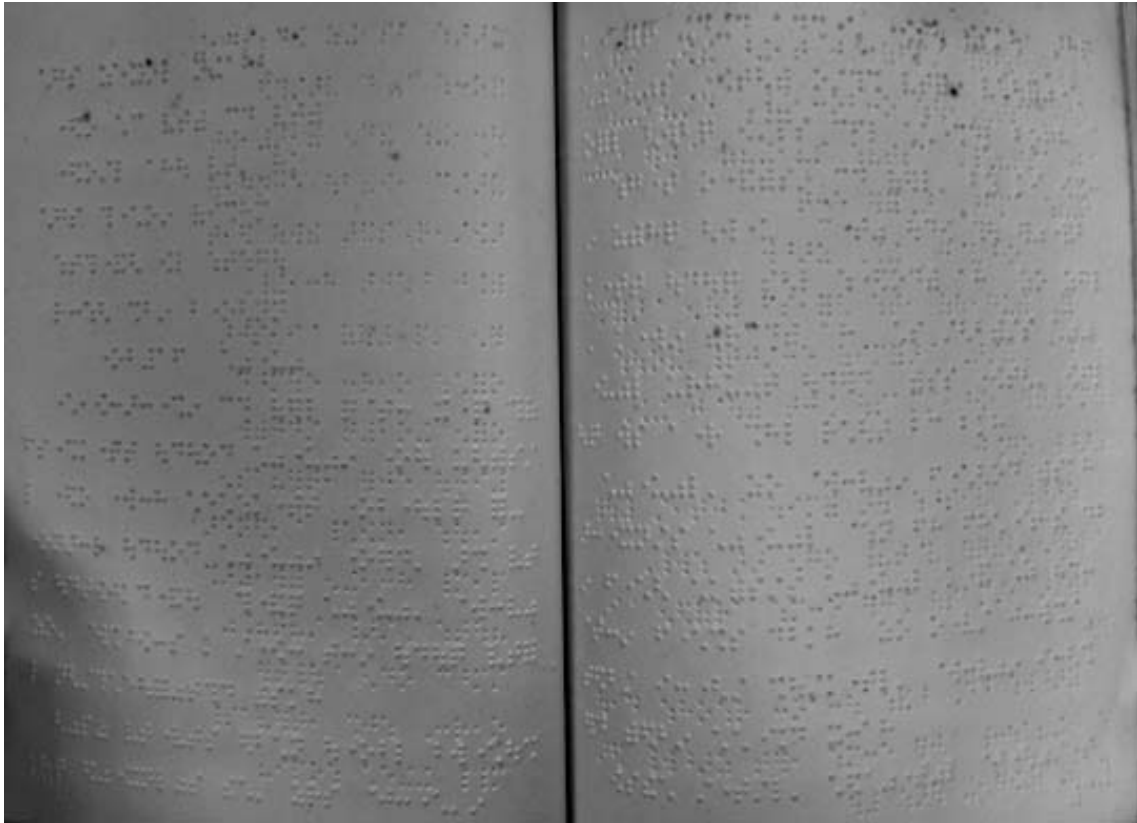
「とても まだ」

と おっしやったが おばーさんわ



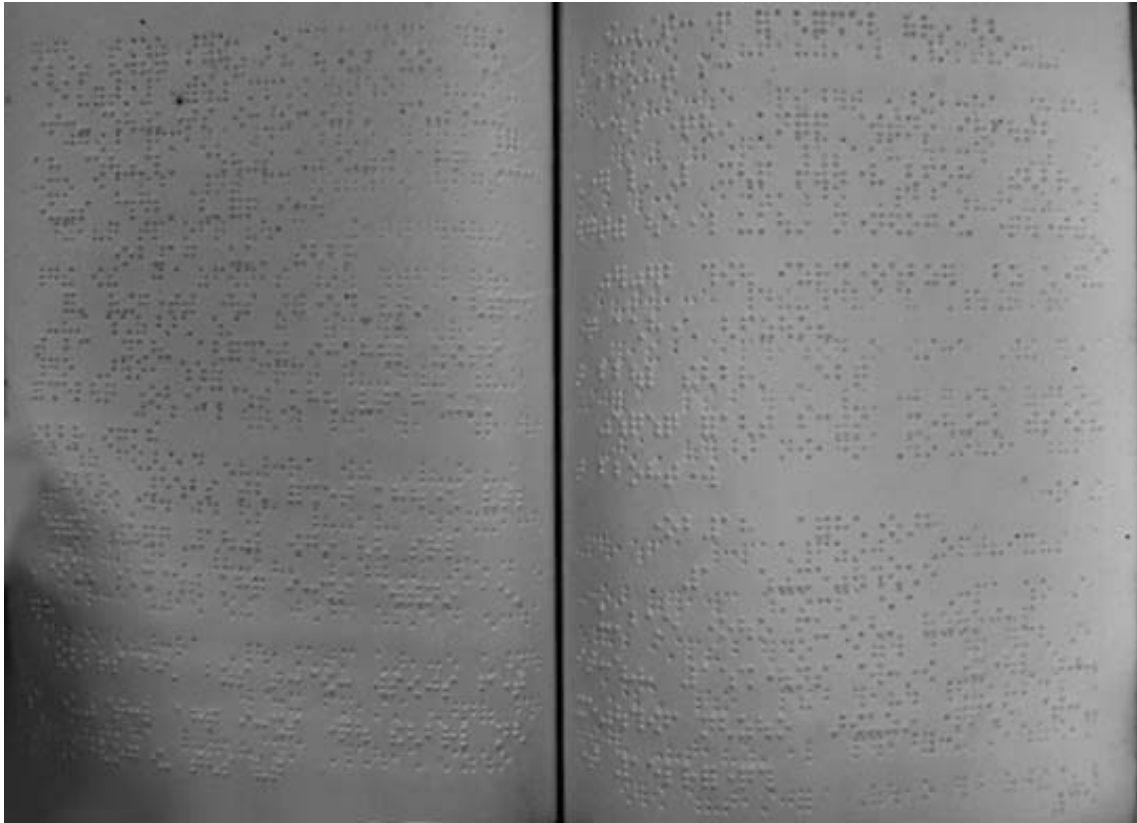
「まー ついて みるが よい」
と おっしゃった
いよいよ にーさんが つきだした はじめの うちわ
いきおいが よかったが まもなく こしが ぶらつきだし
て ふみしめて いる りょーあしが きねを ふりあげる
たびに うごいた おとーさんが
「せいわ たかくても まだ だめだ」
と おっしゃったが それでも とーとー 1うすだけわ
つきあげた
8じごろにわ すっかり すんだ おしまいの 1
うすにわ あづきや きなこを つけて うちでも たべ
きんじょえも くばった
だい15 まちの つじ
ゆきどけみちの めかるみを
つえに すがりて とぼとぼと
あゆみきたれる ろーばあり

ゆききの しゃばの たえざれば
むこーの かやえ ゆきかゆつ
ろーばの まえを みぎひだり
ゆきかう だんぢょ おーけれど
きたかぜ さむき まちの つじ
みなり いやしき ろーばこわ
てを かす ひとも あらざりき
こめやの こぞー おとくいえ
こめを はこびし かえりみち
ひらりと おりて じてんしゃを
かどの げたやに あづけおき
すぐに ろーばを みちひきぬ
「としの わかきに かんしんな」
かくいう こえを あとにして
こぞーわ のりぬ じてんしゃに
くにに ははおや のこすらん



かれの まぶたに つゆありき
げた かう ひと も うる ひと も
げたやに ありし ひとわ みな
かれの すかたを みおくりぬ さとすへき こに さとされし
ちーさき くいを いたきつつ
たい116 かんばん
がっこーよーぐを うる みせに てちよー ふで すみ
えのぐなどと しるしたる かんばん だし はきものや
に げた ぞーり からかさなどと たいじにて め
だつよーに しるしたる かんばんを だせるわ よく ひと
の しるところなるべし すべて かんばんわ しょーひん
またわ しょくぎよーの な やごー とーを しるして ひとめ
に つきやすからしめんとする ものなり
きんねん ひとびとの せいかつ したいに いそがしく
なりて けんぶつにんの ほかわ まちの りよーが物を

ながめて ゆるゆる あるくが ごとき ものなし よりて
かんばんの ごときも たやすく ひとめを ひかしめんが
ために きそいて こやねの うえに かかぐるに いたれり
されど たべものを うる みせにわ いま なお こふー
を まもりて きそば うどん しるこ すし せんべい
などと しるして のきに さげたるも あり また まれに
わ なぞを もちうるも あり かの やきいもやの かんん
ばんに はちりはんと しるせる ものの ごときわ これに
して その あぢ くりに ちかしと いう いなり
かんばんにわ また しょーひんを えがきたる ものあり
よーぶつやの かんばんに しゃつ えり えりかざりの るい
を えがき かなものやの かんばんに なべ かま ほー
ちよーを えがくの るいなり また
たびや ろーそくや
とけい や おーぎや くしやなどにわ しょーひんを おーきく
せる もけい を かかぐる ふーあり
このほか やどやにわ かけあんどんに りよじんやど



なにやと してして かくるも あり しほい またわ かつ
どー しゃしんなどの こーぎょーばんにわ えかんばん
あり しゃしんやにわ しゃしんの かんばんも ありて かん
ばんの しゆるいゆ きわめて おーし

だい17 はなわ ほきいち

めわ みゆれども じの よめざる ひとを あきめくら
と いう むかしわ あきめくらも おーかりしに まことの
めくらにして たいがくしゃと なりし ひとあり はなわ
ほきいち これなり

ほきいちわ 5さいの とき めくらと なりしが ひとに
しょもつを よませて しんに これを きき のちにわ
なだかき がくしゃと なりて おーくの しょもつを あらわ
せり

ほきいちの いえわ いまの とーきょー このころの えど
の ばんちょーに ありて おーくの だし ほきいちに つき
て まなびたれば ときの ひと

ばんちょーで めあきめくらに みちを きき
と いいたりと いう

あるよ だしを あつめて しょもつを おしえしとき
かぜ にわかにな ふきて ともしび きえたり ほきいちわ
それとも しらず はなしを つづけたれば だしどもわ

「せんせい すこし おまちくださいませ いま かぜ
で あかりが きえました」

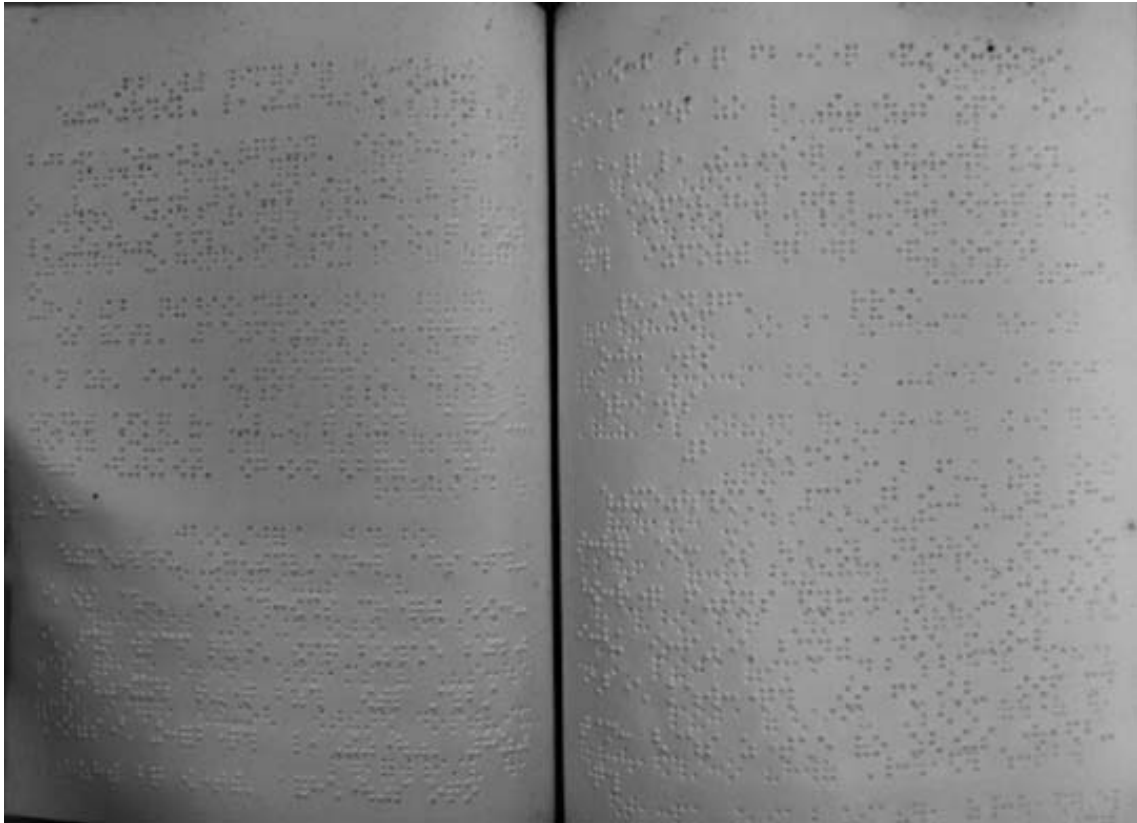
と いいしに ほきいちわ わらいて

「さてさて めあきと いうものわ ふじゆーな ものだ」
と いいたりとぞ

だい18 あめりかだより

1 さんぶんしすこから

はわいから だした えはかきわ みましたろーね
おとーさんわ 1さくじつの しょーご ぶじに さん
ぶんしすこえ つきました よこはまを でてから ちよー
ど 15にちめです



さんぶんしすこにわ につぼんじんが たくさん いて
いろいろな しょーばいを しています おとーさんが つい
た ひわ ちよーど 5がつのおせつくの ひで
につぼんじんの いえにわ こいのぼりが たって しまし
た

この みなとにわ 15・6ねんまえに おーぢしんが
あつて まちわ おーかた こわれたのですが いまでわ
まえよりも かえつて りっぱに なつて います あめりか
じんの げんきなことわ これだけ きいても わかり
ましよー

さんぶんしすこ かりふおるにやしゆーに あるのです
が この しゆーわ がつしゆーこくの うちでも きこー
がよくて このうえ ちみが こえて いますから いろいろ
な のーさんづつに とんで います ことに やさいや
くだものが ゆーめい です につぼんじんわ 8まん
にんあまりも いて こどもわ あめりかじんの たてた

がつこーえ いて えいごで べんきよーしますが
かえつて くと また につぼんじんの たてた がつこー
え いて につぼんごで がくもんを しています
つまり おまえたちよりも よけいに べんきよーして いるわ
け
です

おまえたちも せいせい べんきよーなさい

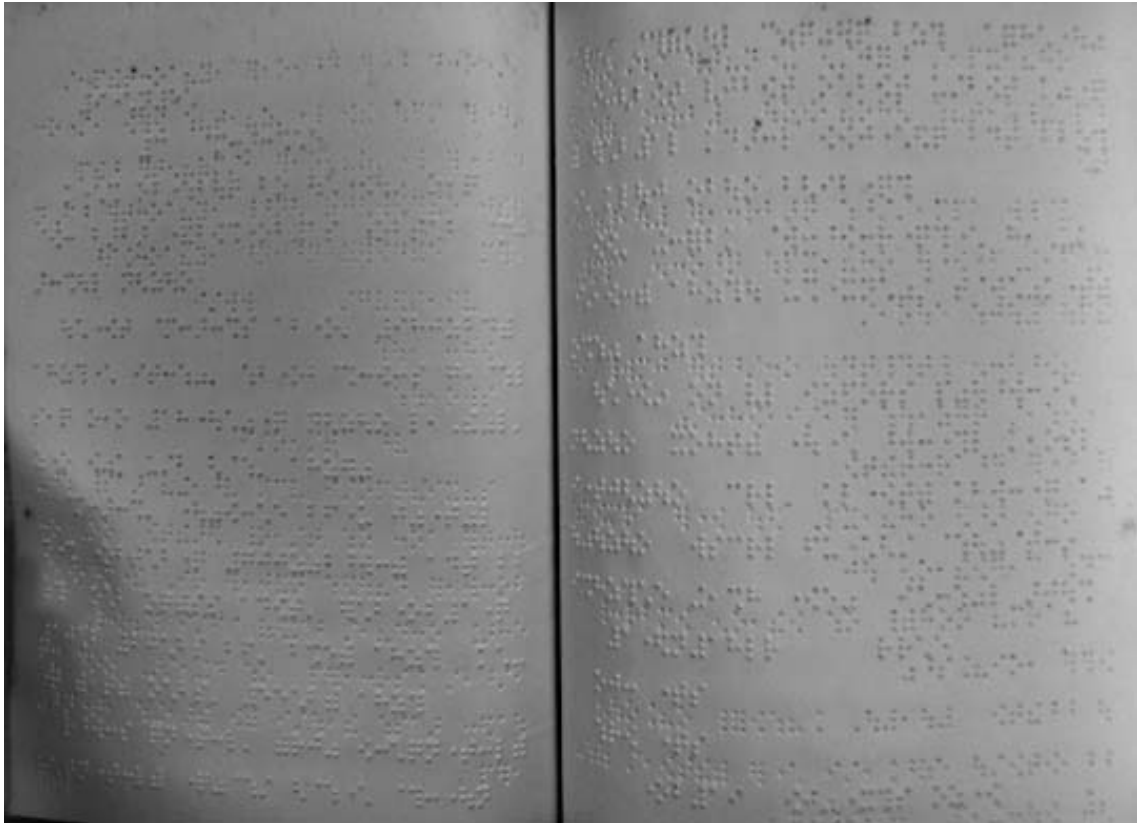
5がつ7か

たろー どの

さちこどの

2 しかごから

さんぶんしすこから 3か2ばん きしやに のり
とーして きよー この しかごに つきました ここわ こー
ぎよーちで えんとつの けむりで そらわ まっくるだが
おーきな こーえんが いくつも あるから けんこーにわ
がいが なさそーです この えはがきわ こえ くる
とちゆー きしやの まどから みた まきばの じっけい
です



9がつ5か

3 にゆーよーくから

ながく たいざいして いた しかごしを たって
きょー いよいよ べいにくだい1の だいとかい にゆー
よーくしに つきました

しかごと にゆーよーくの あいだわ 980まいるも
ありますが おとーさんわ さいたい きゆーこーの れっしやに
のって たった 18じかんで つきました にっぽんにわ
まだ こんな はやい きしやわ ありません

にゆーよーくわ じんこーから いえば ろんどんに
つく だいとかいで 700まんいじょーも あると いい
ます たかい たてものの あることわ せかいだい1で
10かい 20かいの いえわ いくらも あります なか
で もっとも たかいのわ 55かいも あります

ちじょーの てつどーにわ もちろん こーかてつどーにも
ちかてつどーにも でんしやや きしやが しゅーじつ

しゅーや やすみなしに うんてんして します あめりかじん
わ おーきいこと ひろいこと たかいこと はやいこと なんでも
せかい1に なるよーに こころがけて いると いいます
が なにしろ たいした いきおいです

ここわ ゆーめいな しょーぎょーちですが りっぱな
がっこーも ありますし はくぶつかんや としょかんなども
たくさん あります

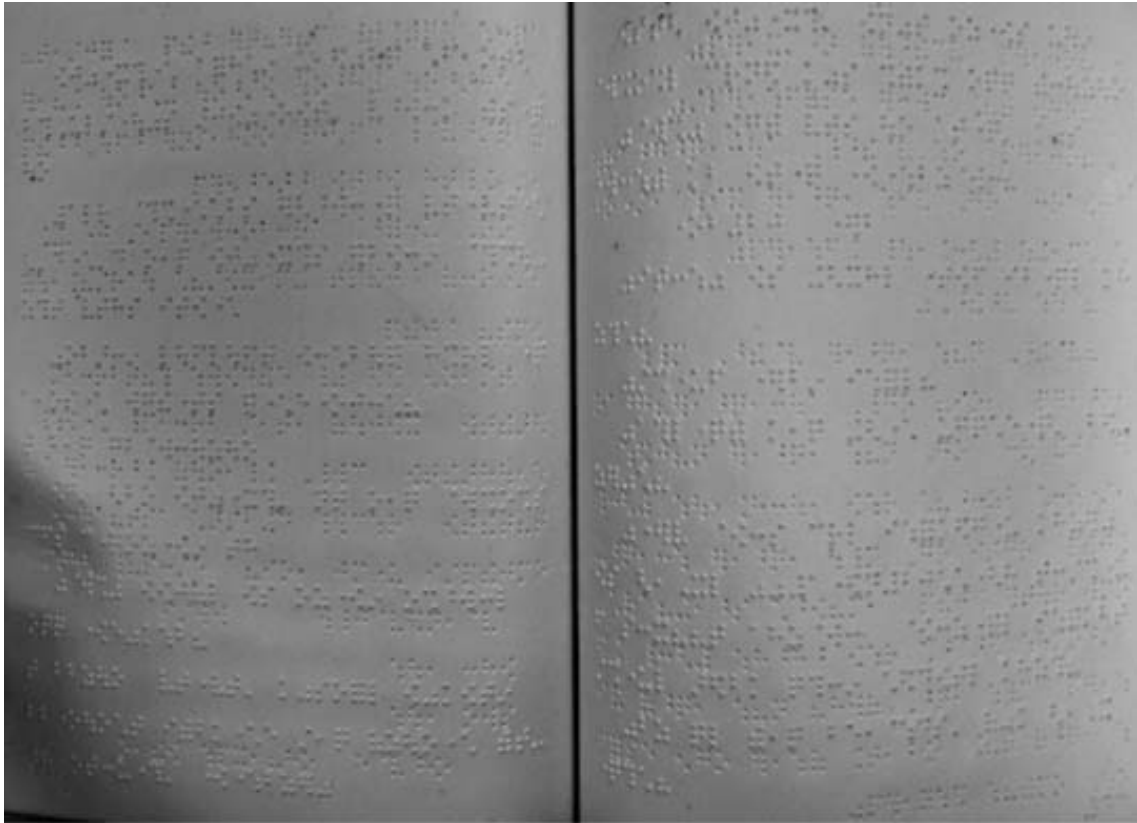
しかごを たつ ひに おまえたちの ねんしじょーが
つきました ふたりとも じが じょーずになつたのに
おどろきました うちにわ なにごとも ないそーで あん
しんしました そのうちに えはがきや しゃしんちょーを
おくりますから ゆっくり ごらん おかーさんによるしく

11げつ18にち

たろーどの

さちこ どの

だい19 ころんぶすの たまご



ころんぶすが あめりかを はっけんして かえったとき
いすばにやじんの よろこんだことわ ひじょーな もので
した

1にち しゅくがかいの せきじょーで ひとびとが
かわるかわる たって ころんぶすの せいこーを しゅくし
ますと ひとりの おとこが

「たいよーを にしえにしえと こーかいして りくちに で
あったのが それほどの てがらだろーか」

と いった れいしょーしました

これを きいた ころんぶすわ つと たって しょくたくの
うへの うでたまごを とり

「しょくん こころみに この たまごを たくじょーに
たてて ごらんさい」

と いました ひとびとわ なんのために こんなことを
いいたかとおもいながら やって みましたか もと
より たとーはずわ ございません

このとき ころんぶすわ こつんと たまごの はしを
しょくたくに うちつけ なんの くもなく たてて もーしました

「しょくん これも ひとの した あとでわ なんの
ぞーさも ない ことで ございませよー」

だい20 せい

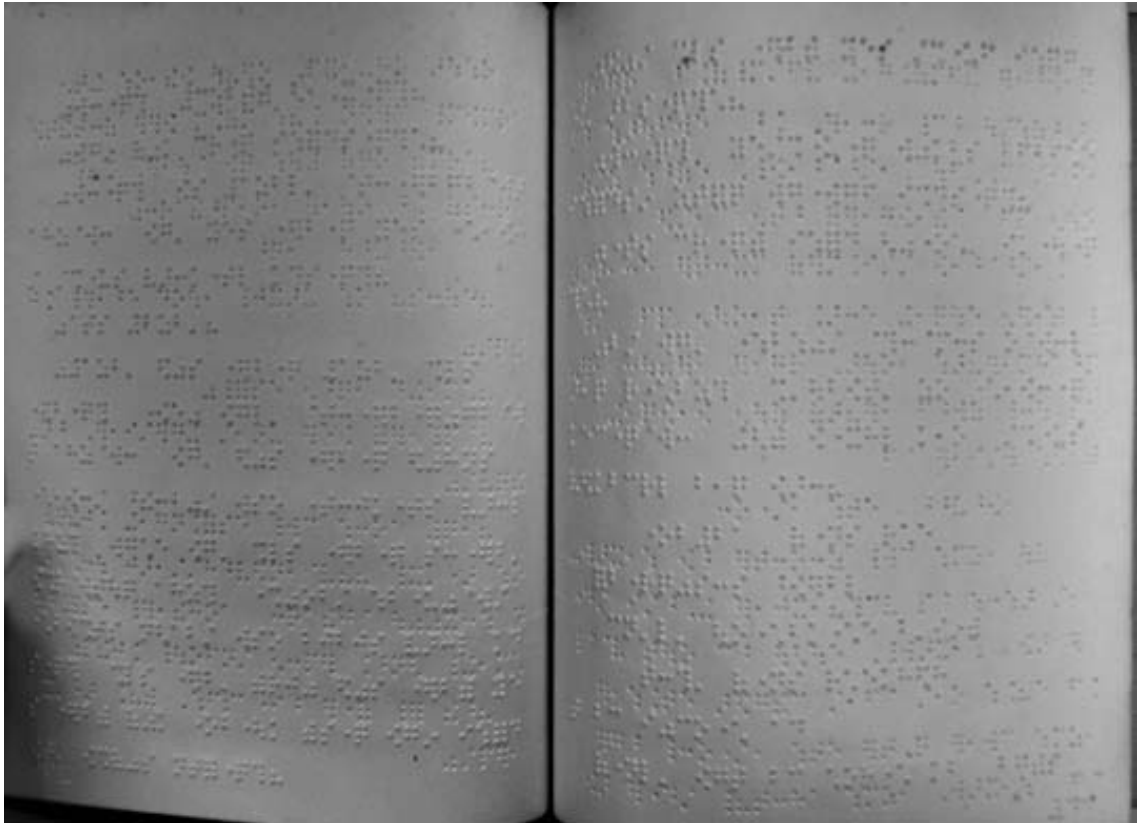
「おとーさん この ゆきふりに どこえ おいでに なり
ますか」

「やくばえ ぜいを おさめに」

「あすにでも なって ゆきが はれてからでわ いけ
ませんか」

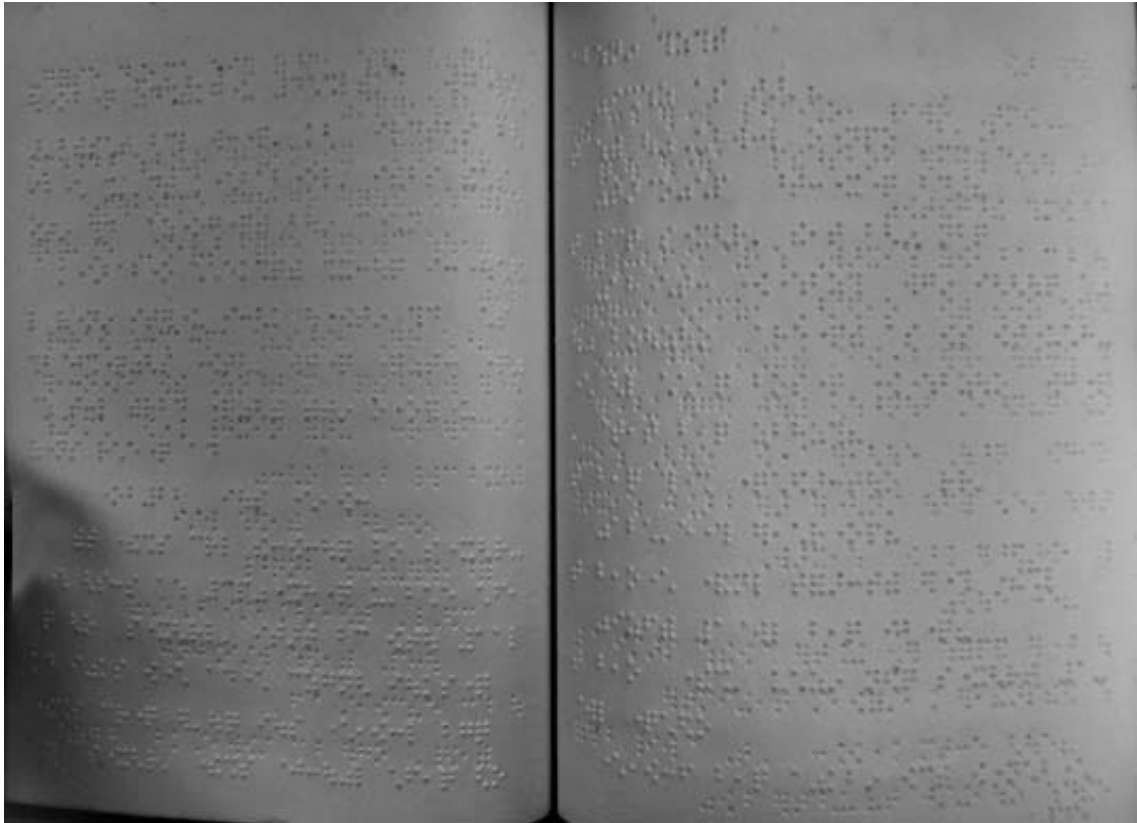
「ぜひ きょーの うちに おさめなければ なりません
この きつぷに 『1げつ20かかぎり とーやくば
え のーふ』と ありませよー きょーまでに おさめない
と やくばに よけいな てすーを かけることになります」

「いま てに もって いらっしやるのわ みんな きつぷ
ですか」



「そーです 3まいとも きつぷです」
「それを みんな うちで おさめるのですか」
「そーです この 1まいにわ ちょーぜいけんしよと
ありましょー これわ むらの ぜいで むらの がっこー
や やくばの ひよーなどに なるのです」
「あとの 2まいわ」
「1まいわ けんの ぜいで 1まいわ くにの
ぜい です ごらん これにわ ちょーぜいでんれいしよ
と ありましょー これわ けんの ぜいで けんりつ
の がっこーや びよーいんや そのた どーろなどの ひよーに
なります それから これわ くにの ぜいで のーぜい
こくちしよとして あります くんたいや さいばんしよや
がいにくとの つきあいや そのた いろいろの ひよーに なる
のです くにの ぜいわ もちろん けんの ぜいも むら
の ぜいも みんな だいじな もので これを おさめる
ことわ こくみんの つとめです」

「けんや くにの ぜいも むらの やくばえ おさめれ
ば よいのですか」
「そーです むらやくばで そんないの いえいえから
おさめるのを まとめて それぞれえ おくるのです」
「どの うちでも おさめる きんだかわ おなじで
すか」
「いや それわ ざいさんや しゅーにゆーの たしよーに
よって ちがいます くわしいことわ また がっこーで
ならうでしよー ゆきも こぶりに なった やくばの
ひけないうちに いてて こよー」
だい21 みづの ちから
めいぢてんのーの ぎよせいに
うつわにわ したがしながら いわおをも
とーすわ みづの ちからなりけり
という おんうたが ある
みづにわ これと いう かたちが ない いれもの



したいで まるくもなれば 4かくにもなる それでわ
よわいものかと いうに そーでわ ない おちるときの いき
おいが くわわると なかいあいだにわ おもいの ほかの
ことをする あまだれでも いしを うがつ

なかいあいだ かからなくても くふーして おーじかけ
に みづを おとせば おーきな しごとをする かの
すいりょくでんきの ごときわ それで でんとー でん
しゃ とーに もちいる でんきも もとを ただせば
みづの ちからである

だい22 おしの がっこー

もと ぼくの うちに ほーこーして いた のぶきち
が きのーの あさ 3ねんぶりで はわいから かえっ
て きた のぶきちにわ おとよと いう ことし 11に
なる おんなの こが あるが うまれつき おしなので
ぼくの うちで せわして おしの がっこーに 入れて
ある のぶきちわ ぼくの りょーしんに かえって きた

あいさつを すますと

「おくさま あの とよわ」

と さも しんはいそーに たづねた ははが

「とよちゃんかね ちよーぶで いるよ」

と いうと のぶきちわ ほっと いきをついて

「ありがとー ございます それを おききして あん
しん いたしました あちらでも あの この ことばかり
が きに かかっていたので ございました それで
わ ちよっと いった まいります」

と いったら すぐ でかけよーとした ちちわ

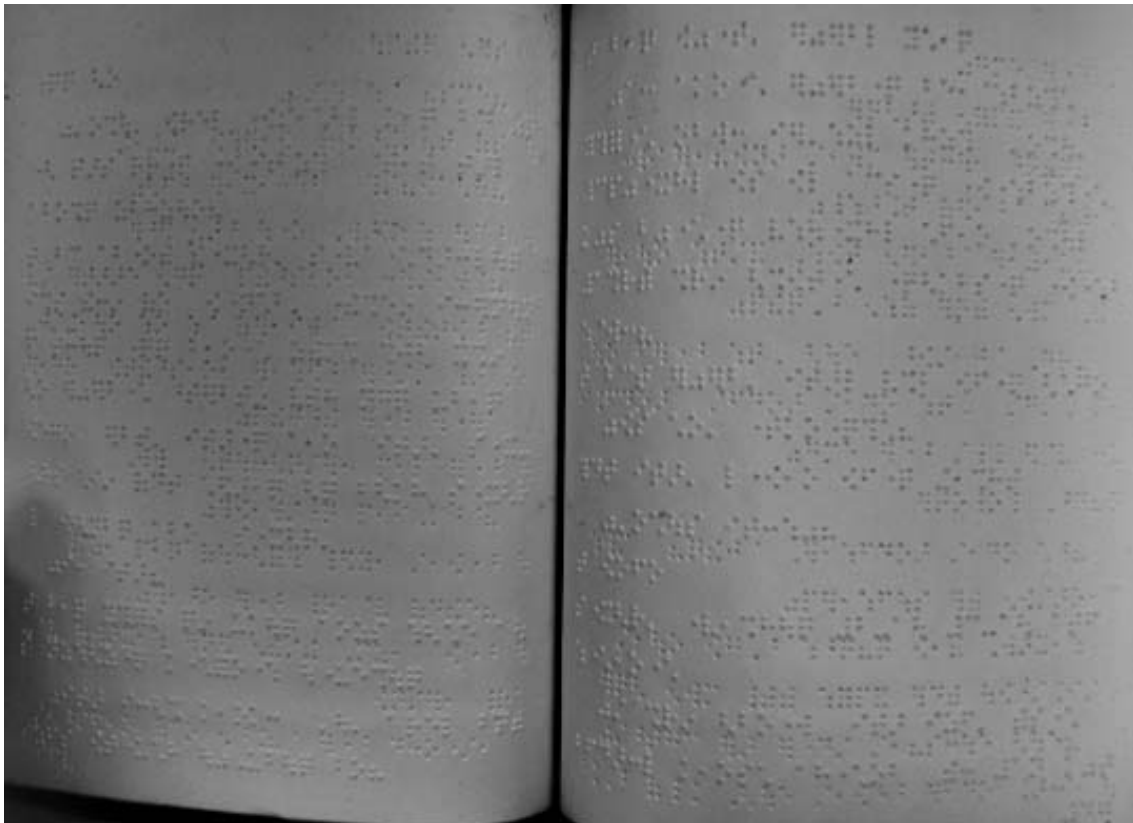
「あいかわらず せつかちだね」

と いったが べつに とめよーとも せず ぼくに

「おまえも 1しよに いった おいで」

と いった ぼくわ はかまを つけて のぶきちと 1
しよに でかけた

がっこーえ いった あんないを こうと こづかいが



でてきた

「わたくしわ こちらに ごやっかいに なっている まつぎ とよの ちちで ございます ちょっと とよに あいたくて まいりました」

と いう あいだも のぶきちわ のびあがるよーにして おくの ほーを みた こづかいわ ぼくらを おーせつしつ え とーして でて いったが まもなく くらい ふくを きた せんせいが ぢよせいとを ひとり つれて はいって こられた せいとわ おとよで あった おとよわ のぶきちの かおを みると かけよって きて いきなり のぶきちに だきついて ないた のぶきちわ

「おー おとよ」

と いうて むすめの てを はなして あたまの さきから あしの つまさきまで なかめたが しばらくして

「おとよ おーきく なったなー わしわ あちらに いても おまえの ことばかり しんぱいして いた」

と いうて こんどわ せんせいに むかって

「あー あなたが せんせいで いらっしやいますか むすめが たいそー おせわさまに なります わたくしわ 3ねんぶりに この こに あうので ございますが なんの いんがで ひさしぶりに かえった わたくしに 1くちも くちを きくことが できないので ござい ましよー」

と いうと せんせいわ おとよに ひくい こえで きかれた

「この かたわ どなたですか」

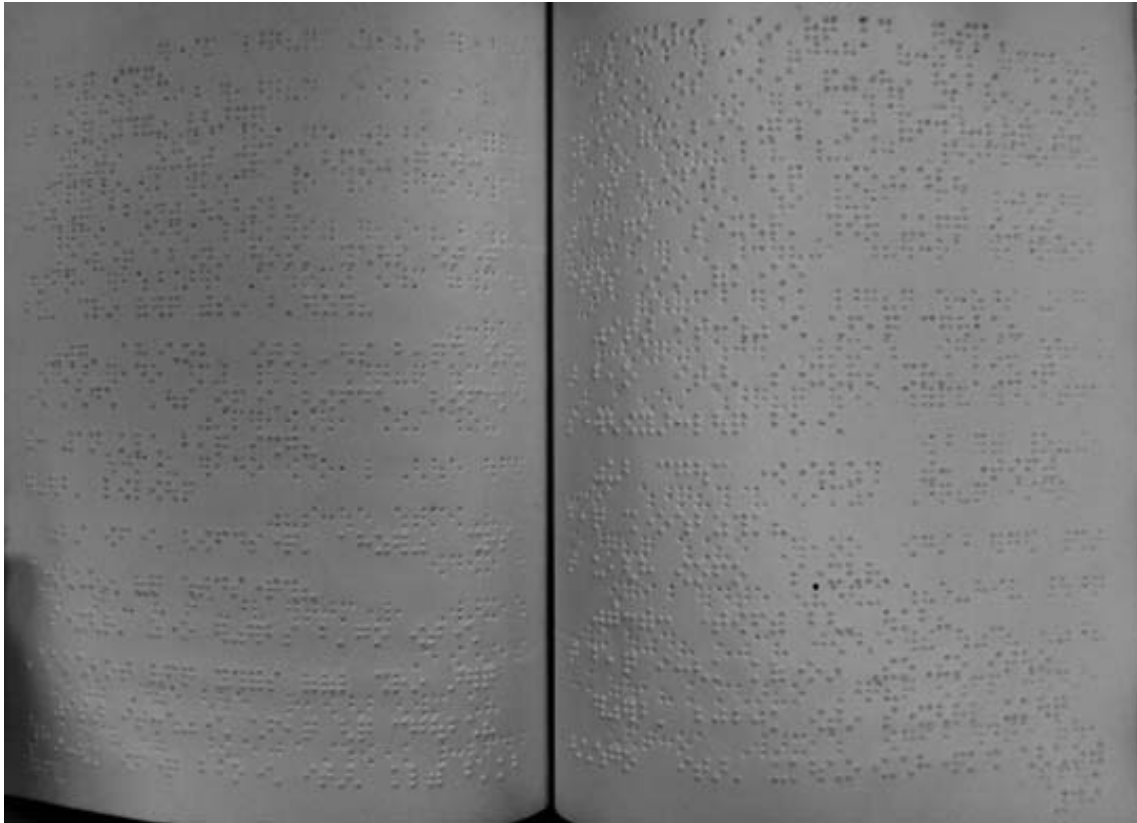
すると おとよわ にごった こえで ゆっくりと

「わたくしの おとーさん」

と こたえた

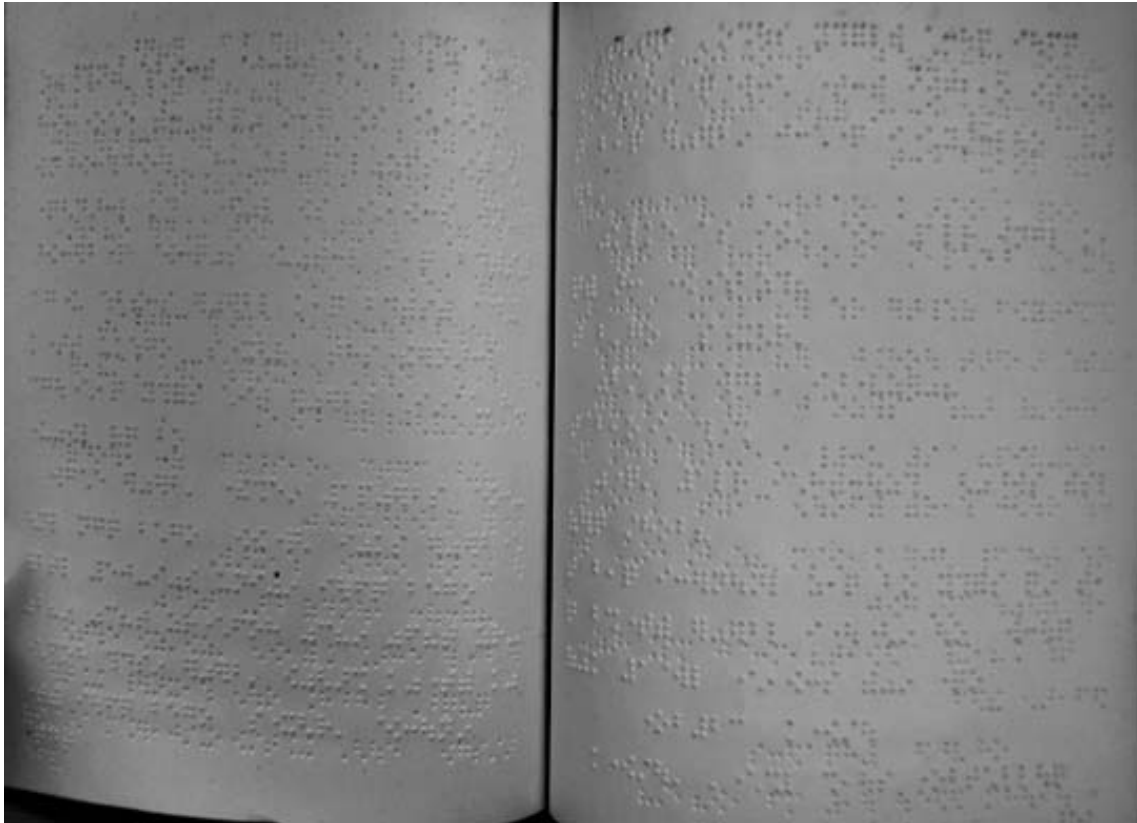
のぶきちわ びっくりして 2あし 3あし あとえ さがったが

「や くちを きいたぞ おとよ おまえわ ものが いえるよーになったのか ありがたい もー 1つ なんと



か いて おくれ」
と いて むすめを ひきよせて
「せんせい どうして くちが きけたんでしょー
ゆびで あいづも しないのに」
「ゆびで あいづを したのわ むかしの こと
いまわ くちを みせて ものを いわせます」
「それわ ありがたい おとよ わしの いてる こと
が わかるか わしの こえが きこえるか きこえるなら
もー 1つ なにか いて おくれ」
せんせいわ にこにこして
「いや こえが きこえるのでわ ありません くちの
うごきかたを みて さとるのです」
のぶきちわ まだ せんせいの いわれた ことが
わからなかったと みえて むすめのみみに くちを よせて
「おとよ おとーさんが かえって きて うれしいか」
と おーきな こえで いったが おとよわ なにも いわない

で のぶきちの かおを みている せんせいわ
「あなた この おこが へんじを しないのわ あなたの
くちが みえないからです よく みえるよーにして もー
1ど しづかに いて ごらんさい」
と いわれた のぶきちわ すこし はなれて こんどわ
おとよの かおを みながら
「おとよ おとーさんが かえって うれしいか」
と いった おとよわ のぶきちの くちを なかまで
のぞきこむよーにして いたが
「はい うれしう ございます もー どこえも
いて くださいますな」
と はっきり こたえた のぶきちわ
「もーもー どこえも いきわ しない」
と いて おーきな なみだを ぼたぼた おとした
せんせいわ いろいろな ことを のぶきちに はなして
きかされた おとよわ はなしかたばかりでなく かきかたも



さんじゅつも さいほーも りょーりも ならっている たいそー
りーだから もー 2ねん たって この がっこーを
そつぎよーするころにわ りっぱに 1にんまえの ことが
できるよーになる げんに この がっこーの そつ
ぎよーせいで しょてんの ばんとーに なっているものも
あれば さいほーの せんせいに なっているものも ある
などはなされた のぶきちわ とりのぼせたよーに
うれしがって むすめの かおと せんせいの かおを かわり
ばんこに みていた

それから せんせいわ ぼくらを 1ねんせいの きょー
しつにつれて いかわた ここでわ おんなの せんせいが
せいとに 50おんのはつおんをおしえて いられた
「い」を「う」と まちがえたり 「う」を「え」と まち
がえたり するのを せんせいわ こんきよく なんども なん
ども おしえて いられた のぶきちわ きょーしつを
でると

「せんせい わたくしの むすめにも あーして おしえて
くださったのでしょーか どーも おそれいった ことだ」
と いった せんせいを るーかで おがむよーにした せん
せいわ

「なになら あの おこを きょー 1にち おつれになっ
ても よー ございます」

といわれた のぶきちわ

「いや なに それにわ およびません」

と いったが すぐ

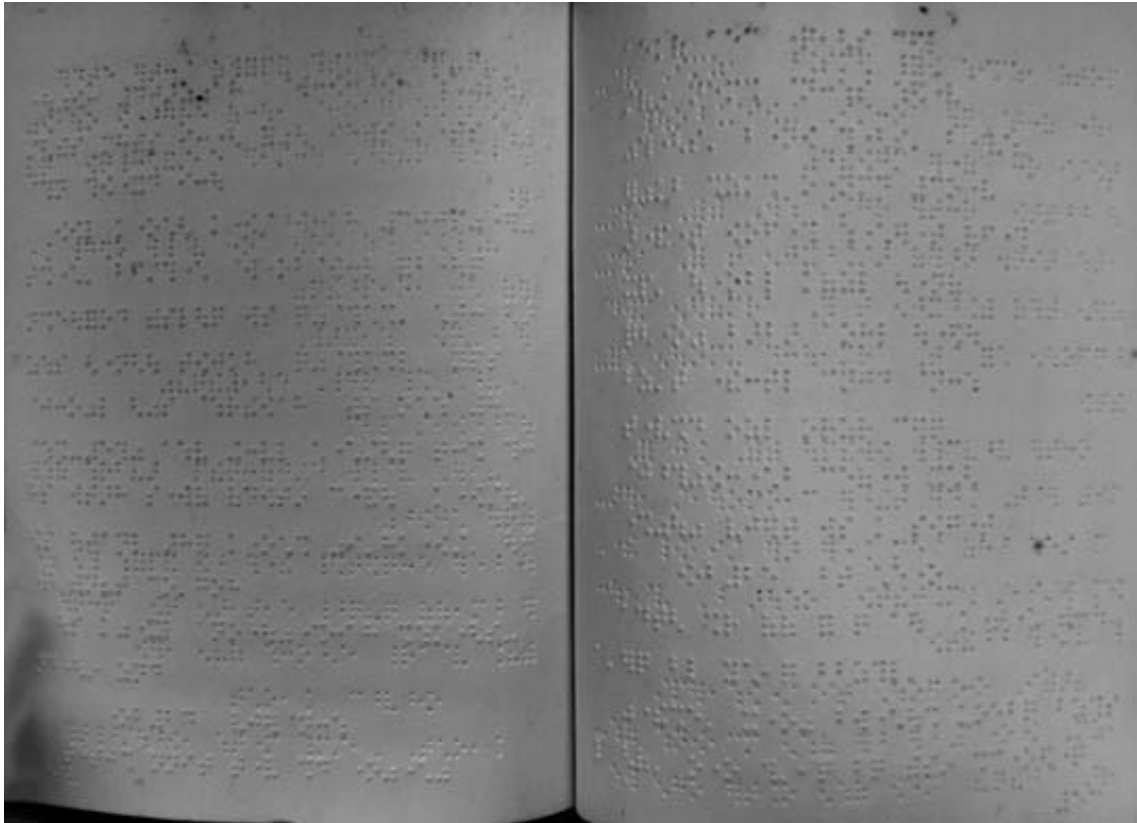
「でわ 1にち おかりもーします きんじょの ものに
みせて やりたい」

と いった おーせつしつに まっていた むすめの でを とっ
て いくども せんせいに おしぎをした そーして
みんな 1しよに がっこーの もんを でた

だい23

なごやし

なごやわ わがくに くっしの だいとかいにして



じんこー 40よまんあり しょーこーぎょー さかんにして
やきもの ぬりもの おーぎ めんし おりもの などの さん
しゅつ すこぶる おーし

ここに なたかき なごやじょーあり 300ねんぜん
とくがわ いえやすが しょだいみょーに めいじて
つくらしめたる ものにして その てんしゅかくわ かとー きよ
まさの きづきし ところなり てんしゅかくにわ むねの
りょーたんに きんの しゃちほこあり その たかさ 8
しゃく-5すん あさひ ゆーひに かがやきて とーく すー
りの そとより のぞみ みることを うべし なごやしわ
この しるあるに よりて なたかく 「おわりなごやわ しる
で もつ」と うたわれたり

しの なんぶに あつたじんぐーあり くさなぎの
つるぎを まつる

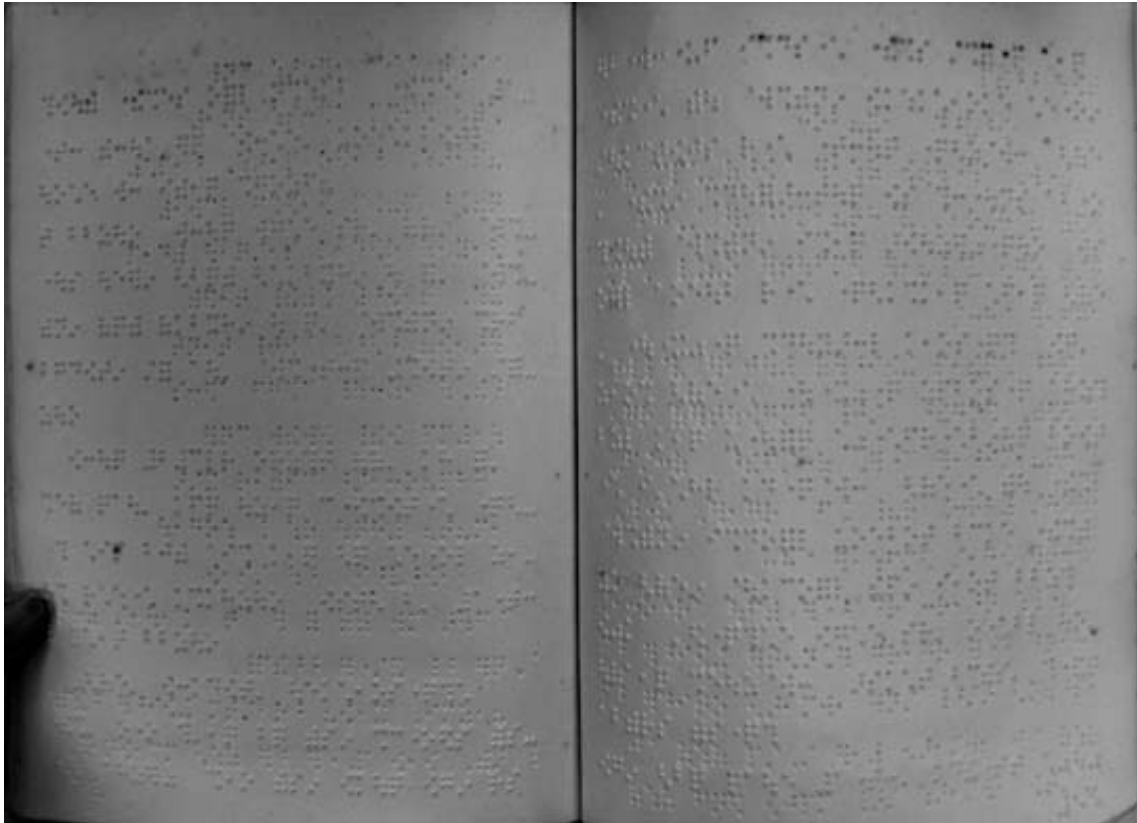
たい24 ひろせちゅーさ
とどろく つつおと とび くる だんがん

あらなみ あらう でっきの うえに
やみを つらぬく ちゅーさの さげび
「すぎのわ いづこ すぎのわ いずや」
せんない くまなく たづぬる 3たび
よべど こたえず さがせど みえず
ふねわ したいに なみまに しづみ
てきだん いはいよ あたりに しげし
いまわと ぼーとに うつれる ちゅーさ
とびくる たまに たちまち うせて
りょじゅんこーがい うらみぞ ふかき
ぐんしん ひろせと その な のこれど

25 いと からだ

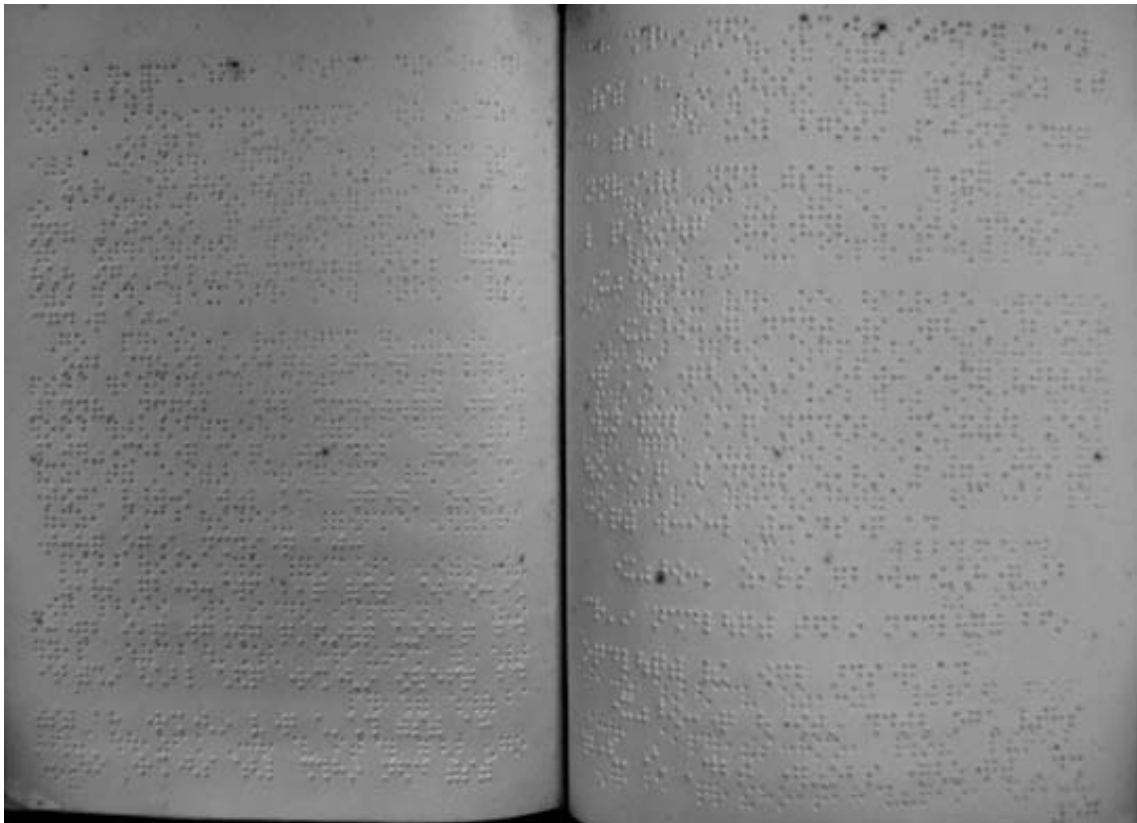
あるとき くち みみ め て あし などが もーし
あわせて いに むかって いますにわ

「ぼくらわ ふだん いそがしく はたらいて いますの
に きみわ ただ すわって いて ものを くらだけで



すこしも ぼくらの ために つくさない ぼくらわ 1
どー もーしあわせて きょーからわ はたらかないことに
したから そー おもって くれたまえ」
と いいました そーして それから のちわ みみわ しょく
じの しらせを きいても きかないふりを し めわ しょく
もつを みても みないふりを し てわ しょくもつを くちえ
いれることを やめ あしわ しょくどーえ ゆくことを やめ
ました
こーして 23にち たちますと みみわ なり めわ
くらみ てあしわ なえて しまって うごくことが でき
ず かおの いろも あおく くなって きて からだに まっ
たく ちからが なくなりました このとき いわ 1どー
に むかって いいました
「きみらわ こーなることわ しらなかつたのですか
ぼくわ ただ すわって いても ものを くだけの もの
でわ ありません かつた ものを こなして これを ちの

せいぞーばえ おくるのが ぼくの やくめで あつて
ぼくが もし しょくもつを こなさなかつたなら からだを
やしなうところの ちが どーして できましょー きみら
わ ぼくを くるしめよーとして この すーじつの あいだ
すこしも しょくもつを おくって よこしませんでした
ために あたらしい ちが できなくなって かえって きみら
わ じぶんで くるしむよーになったのです これわ
まったく きみらが じぶんで まねいたので あります
いまに なつて はじめて かんがえちがいを していたこと
が おわかりに なるでしょー きみらが もし ぼくに
しょくもつを おくるために はたらいたと いうなら ぼくも
また きみらを やしなうために ほねを おつたと いいます
こんな わけですから これから のちわ たがいにした
しみあつて くらしましょー よのなかと いうものわ すべて
あいちの ものです
これを きいて てあしら 1どーわ なるほどと かんしん



したと いいます

たい26 ぶんぎょー

まっちわ ちよつとした もので あたいも やすく 1
つつみ 10はこが 10せんぐらいで かわれる
しかし これを 1にんで つくるとして こんなに やすく
うれるで あるーか

たとい やすまず はたらいても ひとりで 1にちに
1つつみわ つくれまい かりに つくれたとしても それを
10せんぐらいで うってわ もーかるまい もーかる
どころか ひじょーな そんなに なる それでわ まっちわ
どーして たれが つくるので あるー

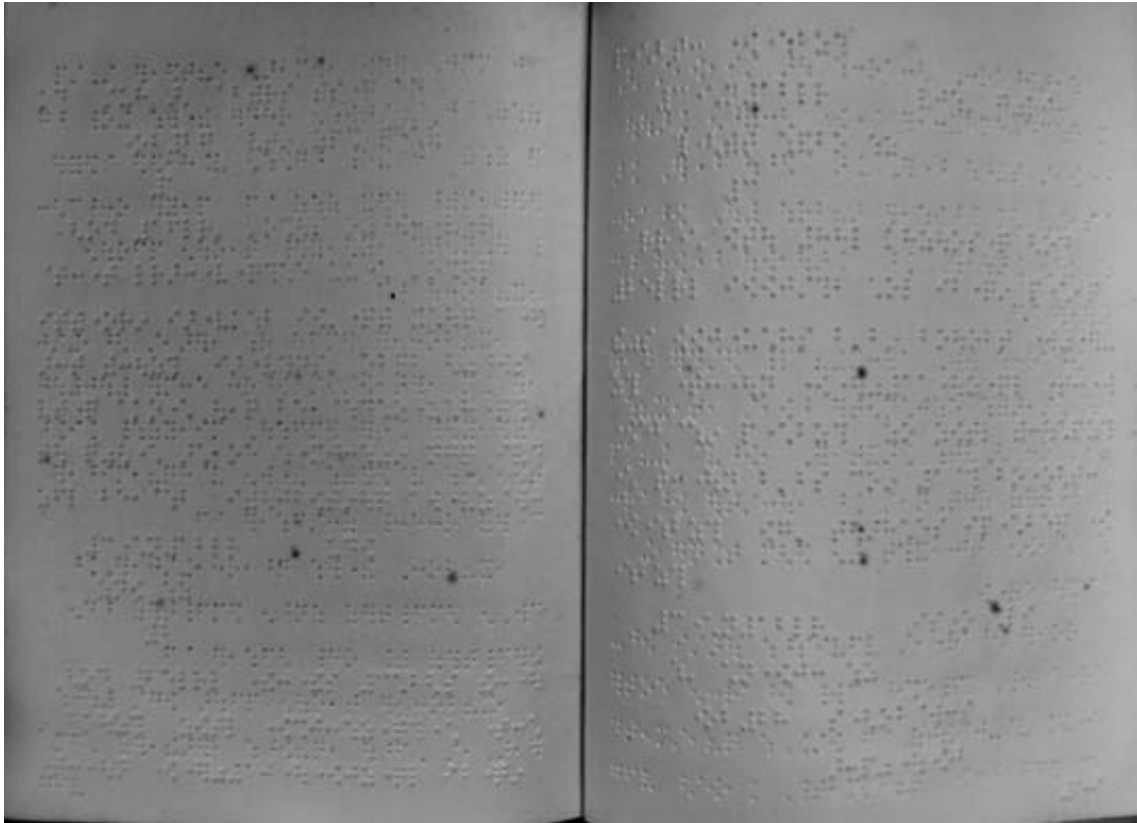
まっちの せいぞーしよえ いった みると しょっこーが
おーせい おって それぞれ てわけをして はたらいて いる
ざいもくを きかいに かけて ぢくぎを こしらえて いる
ものも あり ぢくぎを ひで かわかす ものも あり
かわかした ぢくぎの さきに くすりを つける ものも

あり くすりを つけた ぢくぎを おんしつで かわかす
ものも あり かわかしたのを そろえて まっちの はこに いれ
る ものも あり はこに いれたのを 10づつ あつめて
つつみがみに つつむ ものも ある すべて こーいうよー
に てわけをして べつべつし じごとを することを
ぶんぎょーと いう

ぶんぎょーで つくと その できが よいばかり
で なく できだかが たいそー おーくて ひとりひとり
べつべつに なって つくるのとわ くらべものに ならない
したがって 1つつみの まっちを 10せんぐらいで
うっても そーおーに もーかるので ある

ぶんぎょーわ まっちの せいぞーばかりでない
うちわを つくるにしても とけいをつくるにしても いえを
たてるにしても みな これに よるので ある

ぶんぎょーで じごとを するとき たれか ひとりの
てぎわが わるいと ぜんたいの できまでも わるく



なる やはり よわ あいもちの もので ある

だい27 ひとを まねく てがみ

1

きたる 16にちわ わたくしの たんじょーびで
ちょーど にちよーびですから ははが わたくしに
おともだちを およびなさい おこわでも ふかして あげ
よーと もーします およびするのわ たいてい きんじょの
ひとで あなたが して いらっしやるかたばかりです
もし てんきが よかったら さぶるーさんをつれて おひる
まえに いらっしやい おもしろいことをして あそびましょー

3がつ12にち

まつこ さま

2

きたる 25にち ぼーぼーの 3かいきの ぼーじ
を いたします まことに ごくろーさまですが どーか
どーじつ ごぜん10じごろまでに おいでを

ねねがいとー ございます

3がつ12にち

すぎもと さえいた さま

3

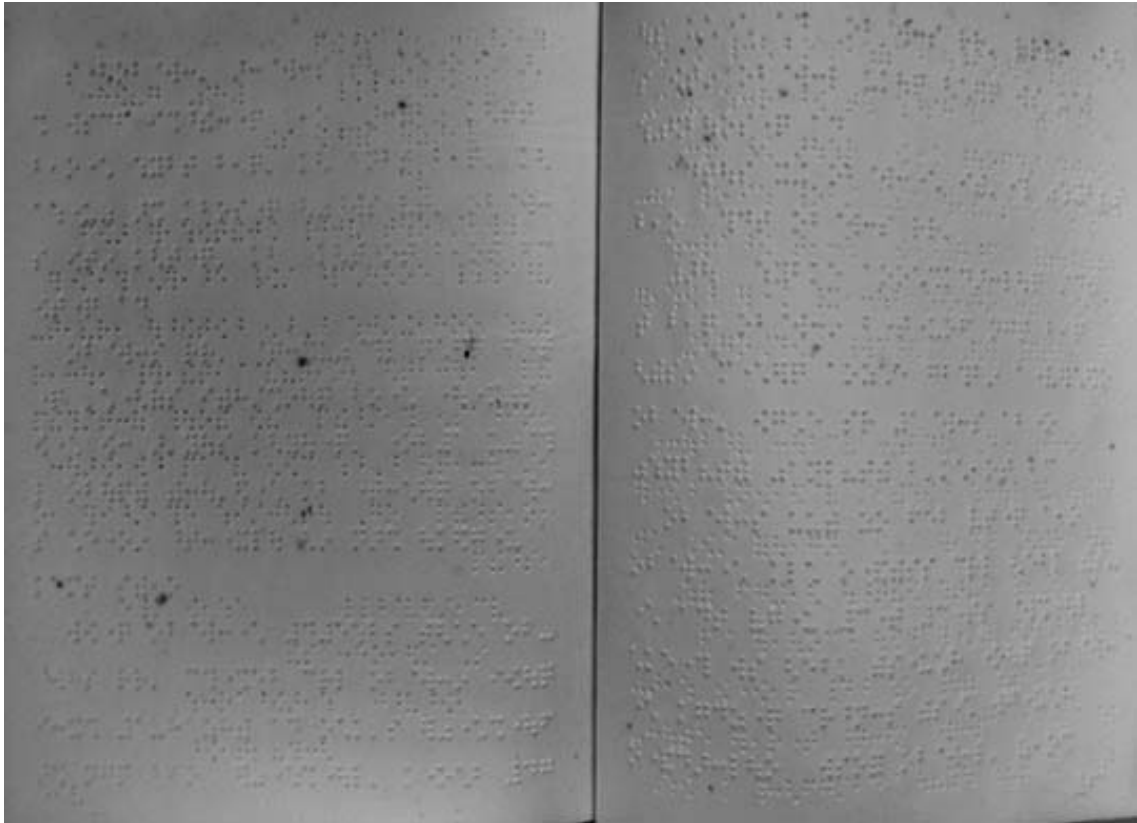
ちちが ことし 88に なりましたので きたる
25にちに おこころやすい かたに おいでを ねがって
ほんの ころばかりの いわいを いたしたいと ぞんじ
ます どーじつ ごぜん11じまでに どーぞ
ごらいしゃを ねがいます また まことに もーしかねます
が とーじつ いわいの うたを 1しゅ いただきとー
ございます こわわ としよりからの おねがいと ございます

3がつ12にち

さわ かつごろー さま

だい28 のぎたいしよーの

よーねんじだい



のぎたいしょーわ よーしょーの とき からだが よわ
く このうえ おくびよーで あった よーめいを なきと
いったが さむいと いってわ なき あついと いってわ なき
あさばん よく ないたので きんじょの ひとわ たいしょー
の ことを なきとでわ ない なきとだと いったと いう
ことである

たいしょーの ちちわ ちよーぶはんしゆにつかえて えど
で わかぎみのおもりやくをして いたが じぶんの
こが こーよわむしの なきむしでわ たい1 はんしい
に たいしても もーしわけがない どーかして たいしょー
の からだを ちよーぶにし きを つよく しなければ
ならぬと おもった

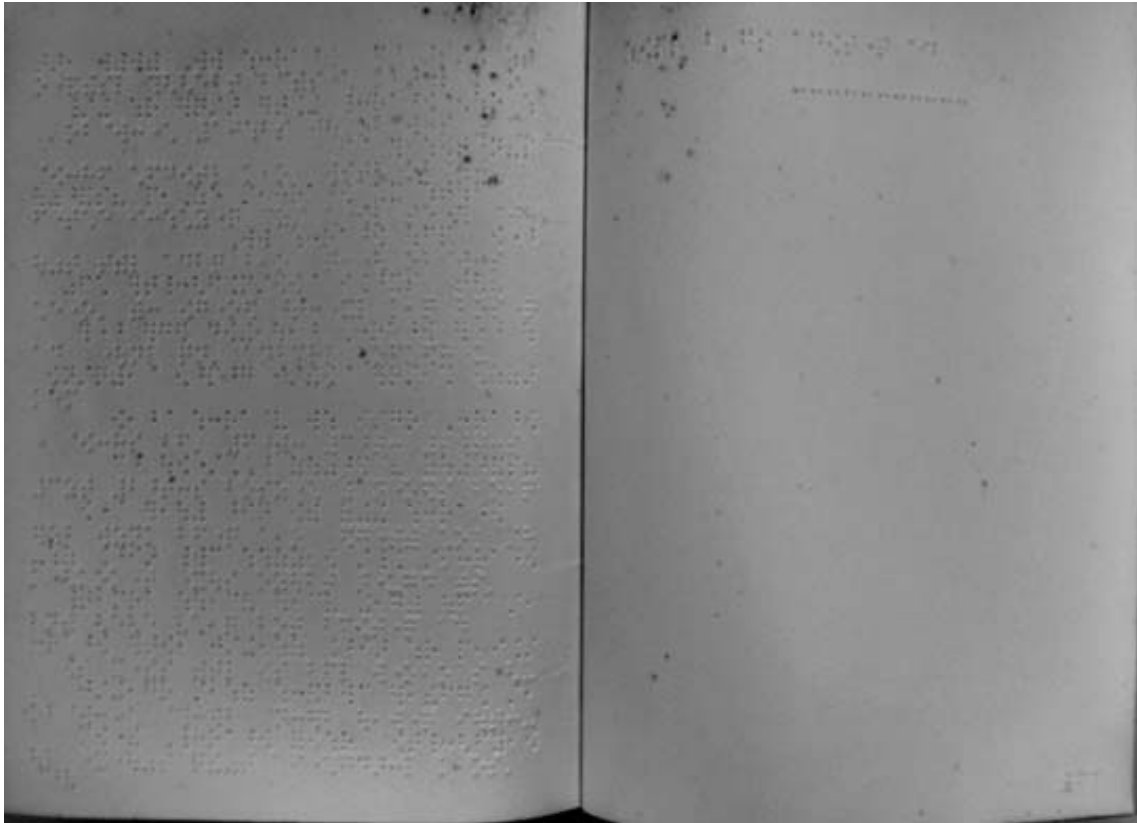
そこで たいしょーが 45さいの ときから たい
しょーの ちちわ うすぐらい うちに たいしょーを おこして
おーふく 1りあまりもある たかなわの せんがくじえ
よく つれて いった せんがくじにわ なたかい 47

しのはかがある たいしょーの ちちわ みちみち ぎし
の ことを たいしょーに はなして きかせて その はかに
さんせいしたので ある

あるとしの ふゆ たいしょーが おもわず 「さむい」と
いった すると たいしょーの ちちわ

「よし さむいなら あたたくなるよーにして やる」
と いって たいしょーを いどばたえ つれて いって
きものを めがせて あたまから れいすいを あびせかけた
たいしょーわ これから のち 1しょーの あいだ
「さむい」とも 「あつい」とも いわなかったという

たいしょーの ははも また えらい ひとで あった
たいしょーが なにか たべものの うちに きらいな もの
があると みれば 3ど 3どの しょくじに
かならず その きらいな ものばかり だして たいしょー
が なるまで うちぢゆーの ものが そればかり
たべるよーにした そのため たいしょーにわ まったく

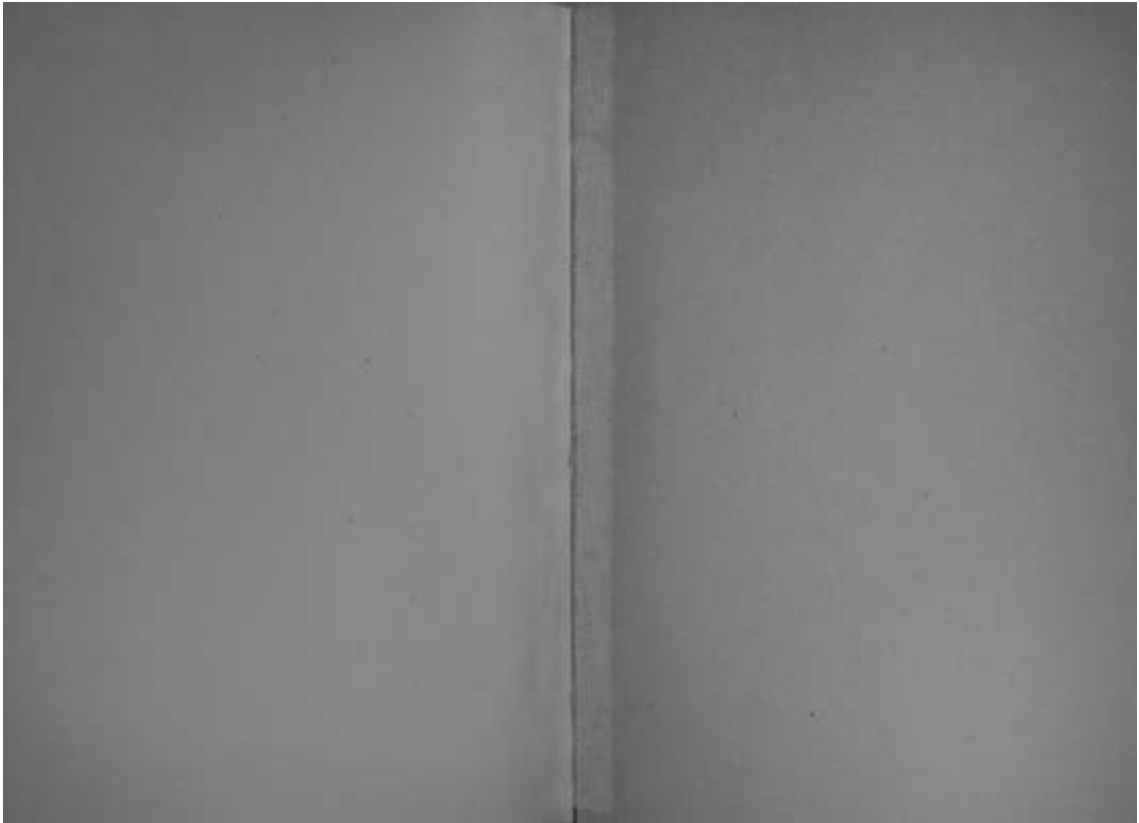


たべものに すききらいと いうものが ないよーになった
たいしょーが 10さいの とし たいしょーの 1かわ
きょーりえ かえることになった そのとき たいしょーわ
えどから おーさかまで うまや かごに のらず りょー
しんと ともに あるいて いった とーじ たいしょーの
からだわ もー これだけ ちよーぶに なって いたので
ある じつに てつわ あつうちに きたえなければ
ならぬ

きょーりの いえわ 6ちよー 3ちよー 2ちよーの
3まと 2ちよーの いたのまが 1つだけの いたって
せまい そまつな いえで あった けれども かたな やり
なぎなたなど ぶしの たましいと よばれる ものわ
いつも きらきら ひかっていたと いうことである

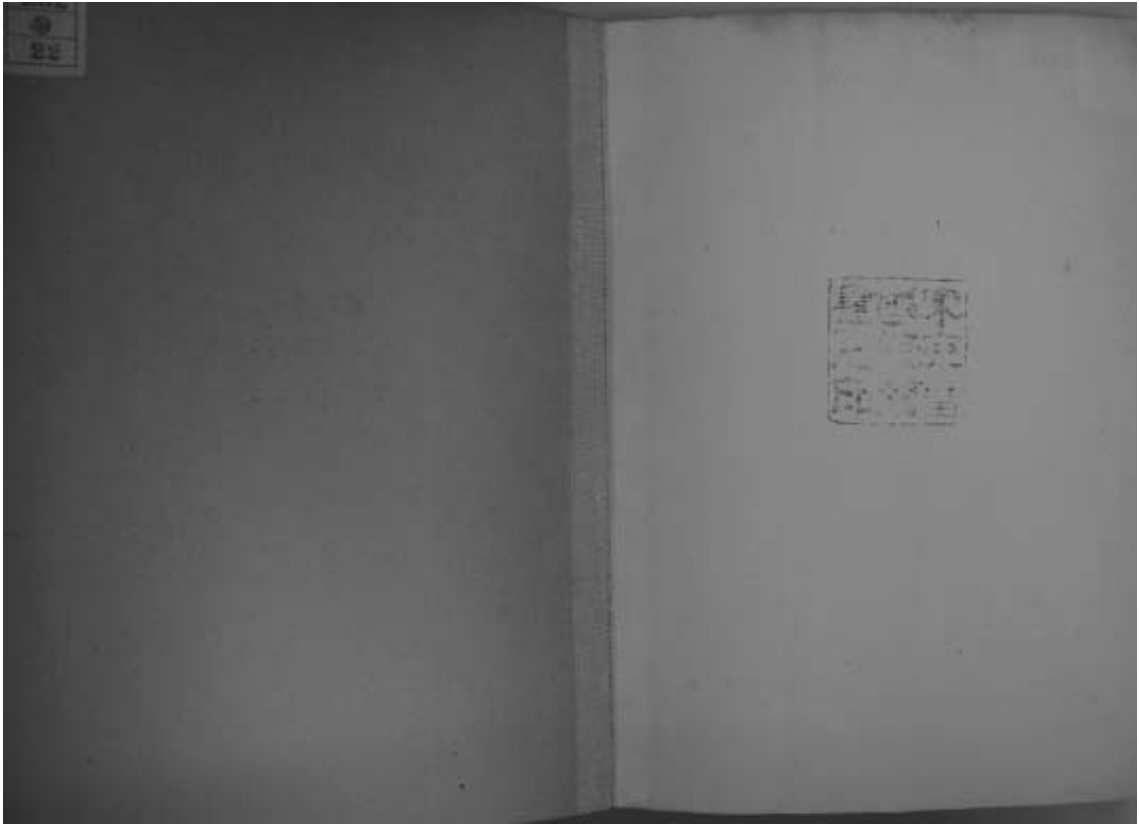
この ぶぼの もとに この いえに そだった のぎ
たいしょーが しゅーせい ちゅーせい しっそで おしとー

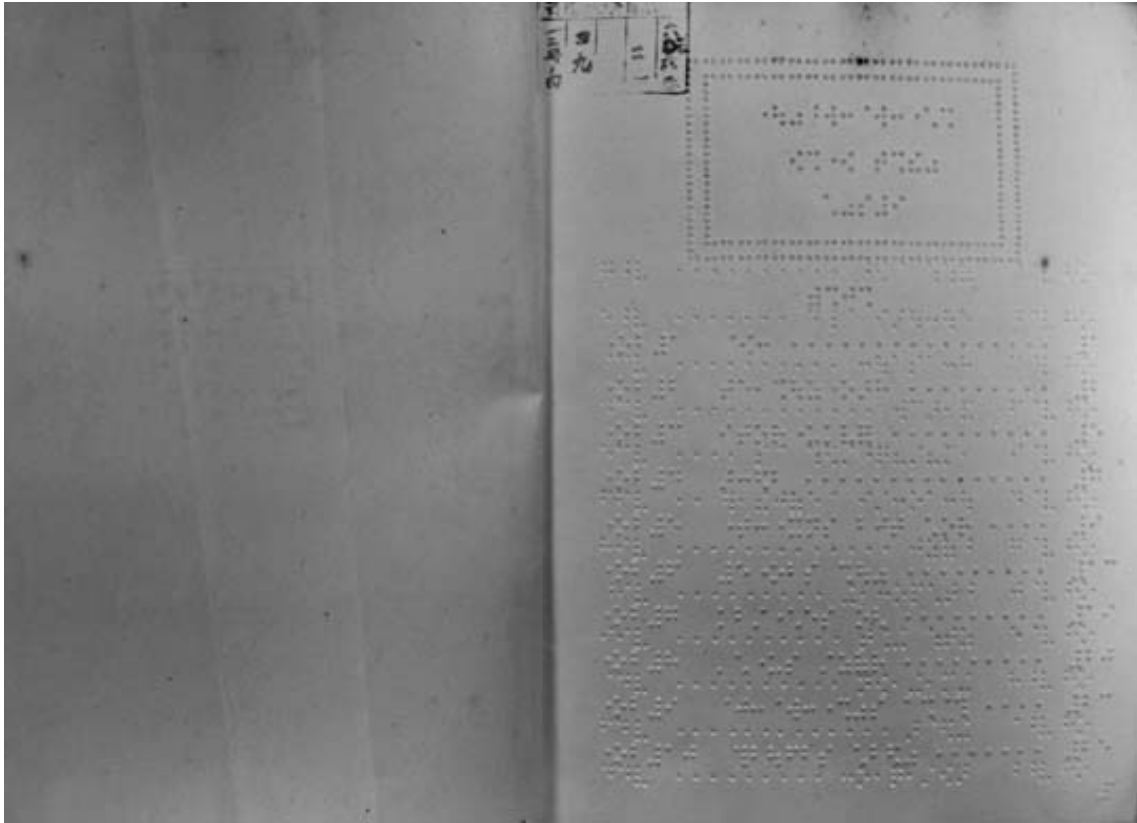
きて ぶじんの てほんと あおがれるよーになったのわ
まことに いわれの あることである











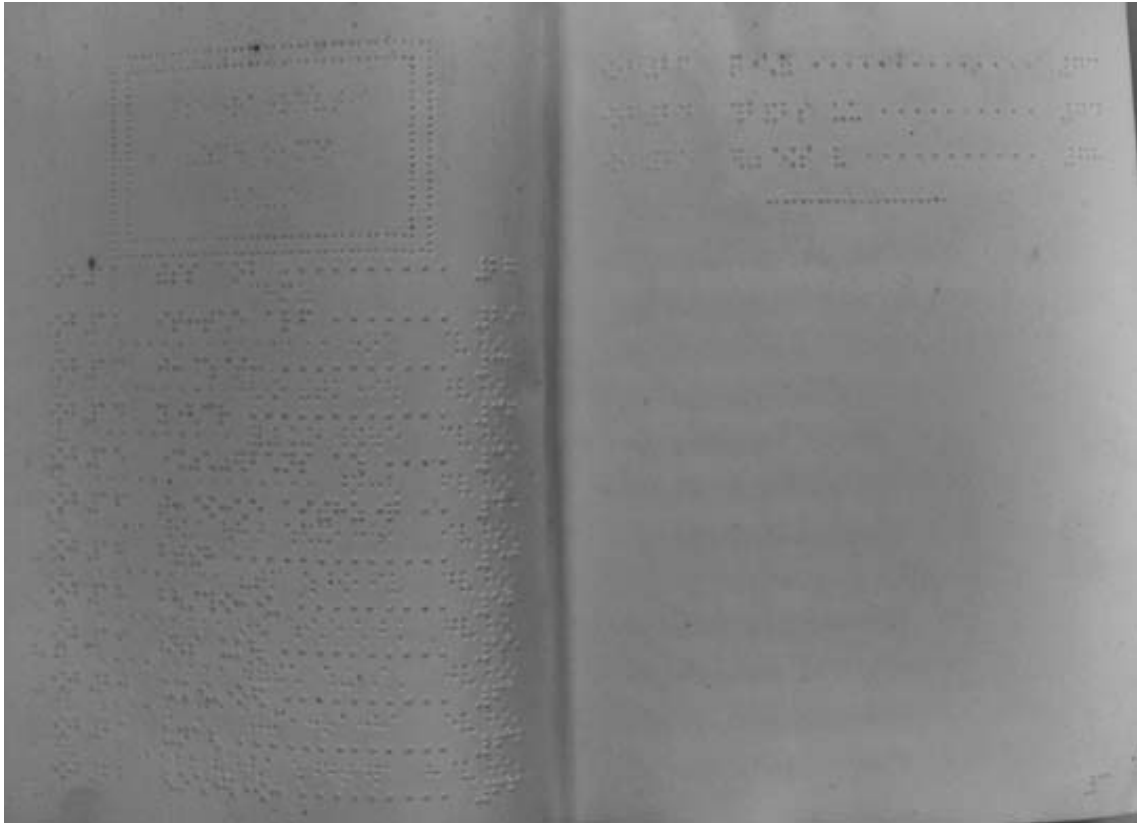
じんじょ-しょーがく

こくご とくほん

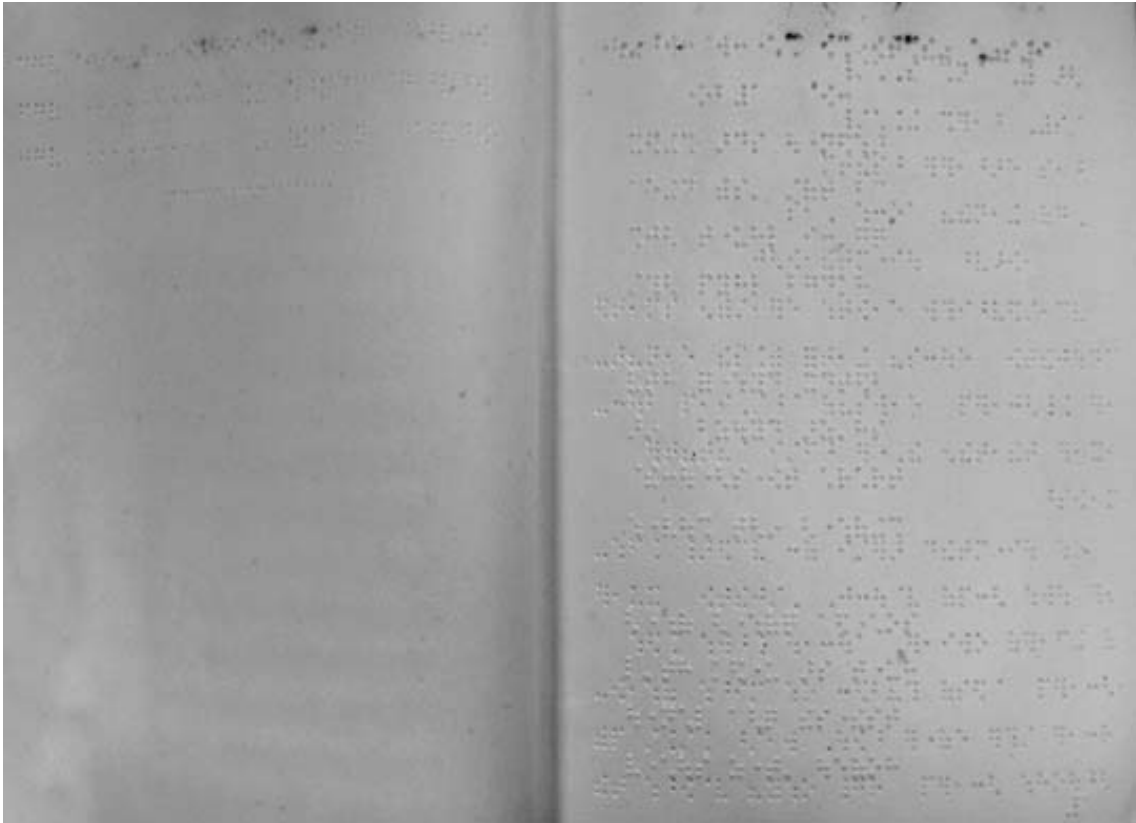
かんの9

もくろく

だい11	きょー	1
だい12	とらつくしまだより	2
だい13	おとたちばなひめ	5
だい14	よーけい	7
だい15	どーぶつの いろと かたち	9
だい16	5だいの くしん	13
だい17	ないやがらの たき	19
だい18	わかばの やまみち	20
だい19	りょーしょーぐんの あくしゆ	23
だい110	すいしえいの かいけん	25



だい111	ものの あたい	27	だい123	てがみ	73
だい112	おとーとから あにえ	29	だい124	すいいの はは	74
だい113	ろーしゃちょー	31	だい125	せんきよの ひ	78
だい114	むぎうち	36		-----	
だい115	ぐんかんせいかつの あさ	39			
だい116	とーきよーから あおもりまで	44			
だい117	いもほり	50			
だい118	いしやすこーば	52			
だい119	ほしの はなし	55			
だい120	はくばだけ	61			
だい121	はつあき	64			
だい122	きたかぜこー	66			

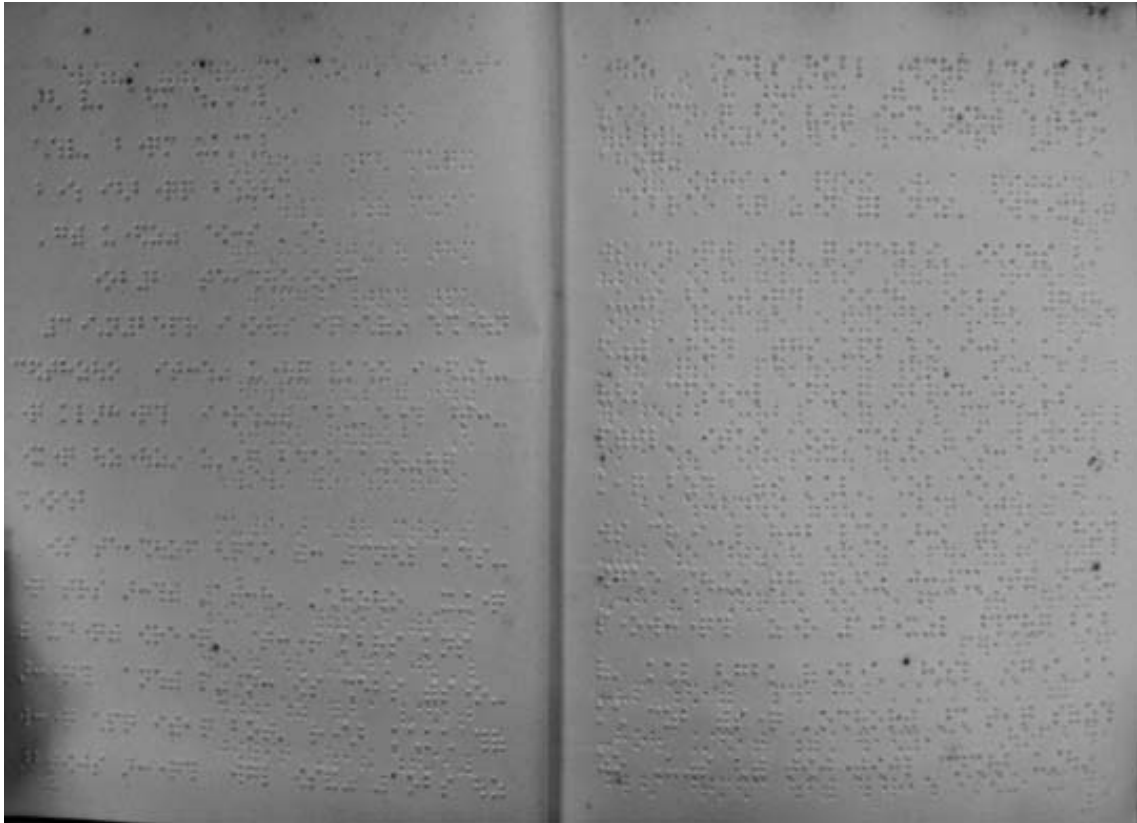


じんじょーしょーがく こくごとくほん かの9
だい1 きょー

ふけゆく よるの しづけさよ
あらゆる ものわ やみと いう
くろき とばりに おーわれて
やすき ねむりに いれるなり

ひとり めざむる ふるとかい
よを いましむる よまわりの
ひょーしぎのごと かちかちと
さびしく ときを きざみゆく

きざみ きざみて あけがたの
にわとり なけば よの とばり
しづかに あきて ほのほのと
ひがしの まどわ しらみたり



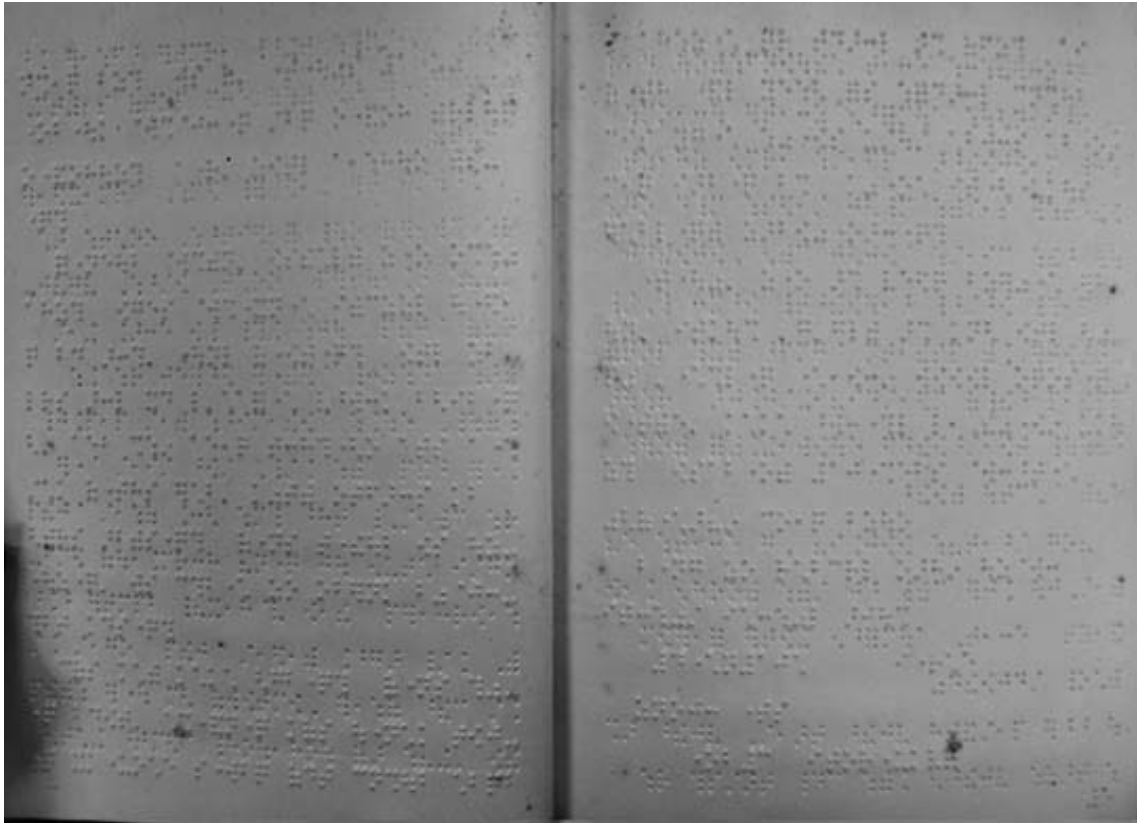
よき ひわ あけぬ さわやかに
あさひわ いでぬ はなやかに
いざ おきいでて いさましく
われも はげまん きよーの わざ
たい2 とらっくしまだより

3がつ25ねち おだしの おてがみを さくじつ
うけとりました おとーさん はじめ みなさま おげんき
で なによりです おぢさんも あいかわらず ぢょー
ぶで しまじまを まわって いるから あんしんして
ください

この とらっくしまえ きてから もー 3つきに なるの
で とちの よーすも 1とーりわ わかりました ふゆで
も はるでも こちらでわ ちょーど ないちの なつの
よーです あつさも ねんぢゅー この くらいのものだ
そーで かねて おもって いたとわ ちがい なかなか すみ
よいところの よーです それに このへん 1たいの しま

しまわ わがくにの しほいに ぞくして いるので ない
ちから うつつて きた ひとも おーく すこしも さびしくわ
ありません

ないちから きて まづ めに つくのわ しょくぶつで
その うちでも ことに めづらしいわ ここやしの きや
ばんの きなどです ここやしわ たかしのわ 7・8
けんも あります とりの はねに にた おーきな はが
みきの うえのほーに あつまって ついており その はの
ねもとにわ おとなの あたまぐらいの みが すずなりに
なっています みの なかにわ かたい からが あって
その うちがわに しろい にくの よーな ものが あります
これから やしゆを とり せつけん るーそくなども つくる
のだそーです まだ 10ぶんじに じゅくして いない
みわ なかに きれいな みづが あります これが なか
なか うまい もので わたくしたちも よく とつて のみま
す
また ばんの きも ところどころに うつくしい はやしを



つくっています そのみわどじんの1ばん
だいじなしょくりょいで やいて たべたりもちにして
たべたりします あちわまことに あっさりした もの
です

めづらしいしょくもつわ このほかにも まだたくさん
あります これらのしょくぶつが おもうまに しげっ
ているよーすわ じつに みごとです ことに まい
にちの よーに ふる にわかあめが ひじょーな いきおいで
きを あらい くさを あらって とーりすぎた あとの あざ
やかな みどりの せかいわ なんとも たとえよーの ない
きもちの よいものです みづの とほしい この しま
じまでわ その うすいが また たいせつな いんりょー
すいとなるのです

うみの なかも なかなか きれいです みづの すん
で いることわ かくべつで なみの しづかな ところ
で ふなばから のそいて みると うつくしい かいいてい

の ありさまが てに とるよーによく みえます
みどり べに むらさき めの さめるよーに うつくしい
うおの むれが さんごの はやしや かいそーの あいだを
ぬって およいで いく なんだか おとぎばなしの
せかいにでも まよいこんだよーです

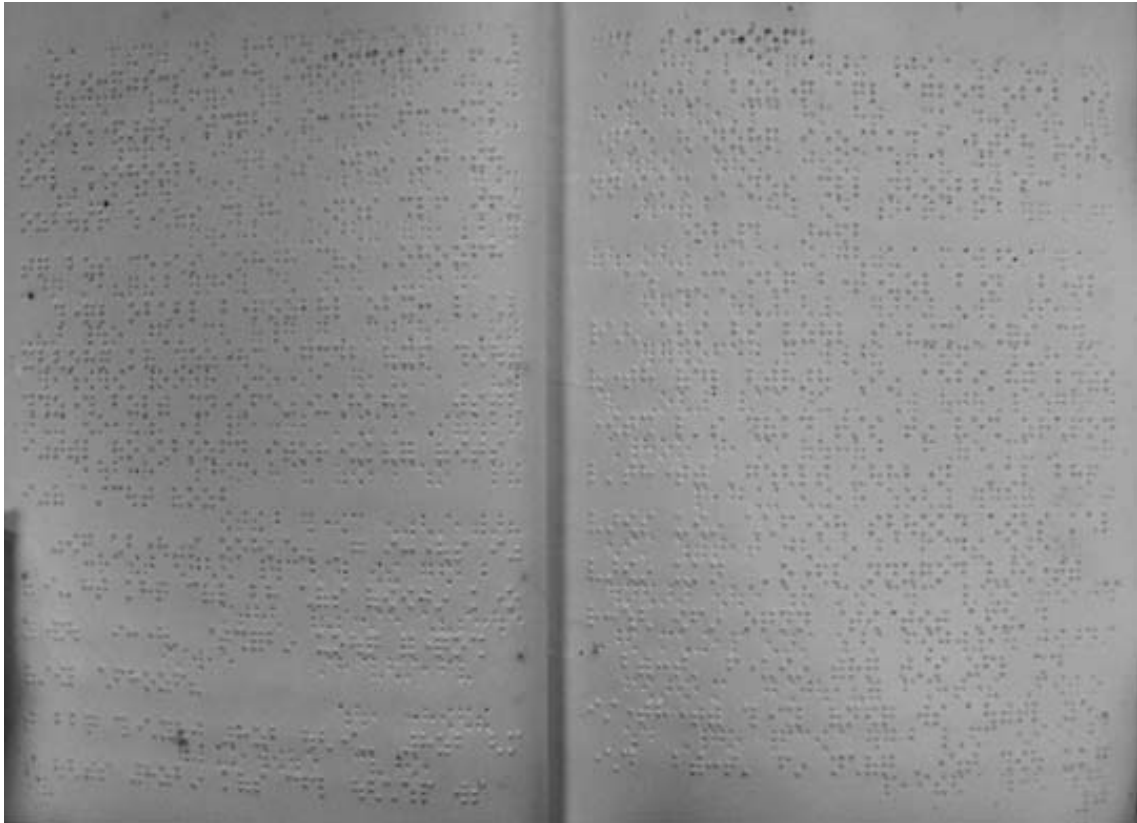
どじんわ まだ よく ひらけて いませんが せい
しつわ おとなしく われわれにも よく なつき ことに きん
ねん わがくにで がっこーを そこここに たてたので
こどもらわ なかなか じょーずに につぼんごを はなし
ます このあいだも 10ぐらいの しょーぢよが
「きみがよ」を うたっていました

いづれ また ちかいうちに たよりを しましよー
おとーさんや おかーさんによろしく

4がつ10か おぢから

まつたるー どの

だい13 おとたちばなひめ



けいにーてんのーの おーじ やまとたけるのみこと えぞ
を たいらげよとの ちよくめいを ほーじて とーごくの
ほーに くだりたまき するかの そくを ほろぼし
たましいのち さがみの くにより かづさの くにえ こえん
とて いまの うらがの あたりより うみを わたりたまえり

すでに たいゆいに いでたましいに たいひー にわか
にふききたりて なみ すさまじく あれくるい みらね すこしも
すすまず いまにも くつがえらんばかりなりき そのとき
おんともに したがいたまえる おとちぢはひめ みことの
おんみ あやうしと みたまい

「これ かいじんの たたりならん われ おーじの おん
みがわりとなりて うみに いり かみの みこころを なだ
むべし おーじわ ちよくめいを はたして めでたく
みやこに かえりたまえ」

と いいて すかむしる 8まい しきかむ 8まい きぬ
の しきもの 8まいを なみの うえに しきかさね その

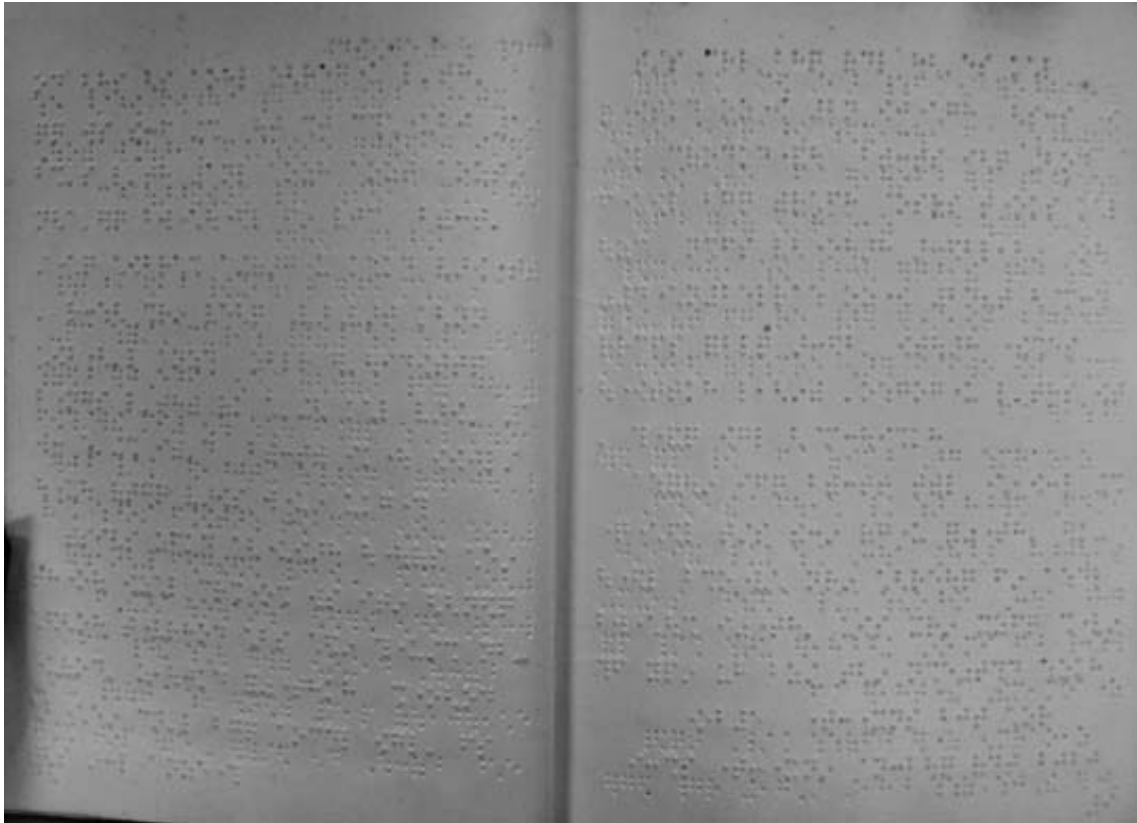
うえに とびおりたまえり

ふしぎや いままで あれに あれいたる たいゆい おの
づから しづまりて おたやかなる なぎとなり みことわ
つつがなく かづさの くにに つきたまきと いう

たい 14 よーけい

あさはやく おきて いどまたに いづ いどに
ちかき かきの きの ひましに のびゆく わかめの うす
みどり みるに きもちよし かゆを あらいわりて いつもの
ごとく にかの すみなる とやの とを ひらく まちかたなる
にわとりども われさきにと はしりいづ なかに いりて
ひよこの はこを かかえだし のきしたなる かいこの なかに
ひよこを はなつ わたがに つつまれた ひよこども
ちーさき こえを たてつつ ちょこちょこと かけまわる

いもーとわ えばこを もちて とやの まえに くる
おやどりども すくに みつけて その あしもとに むら
がる いもーとわ えを つかみて わざと すこし はなれ



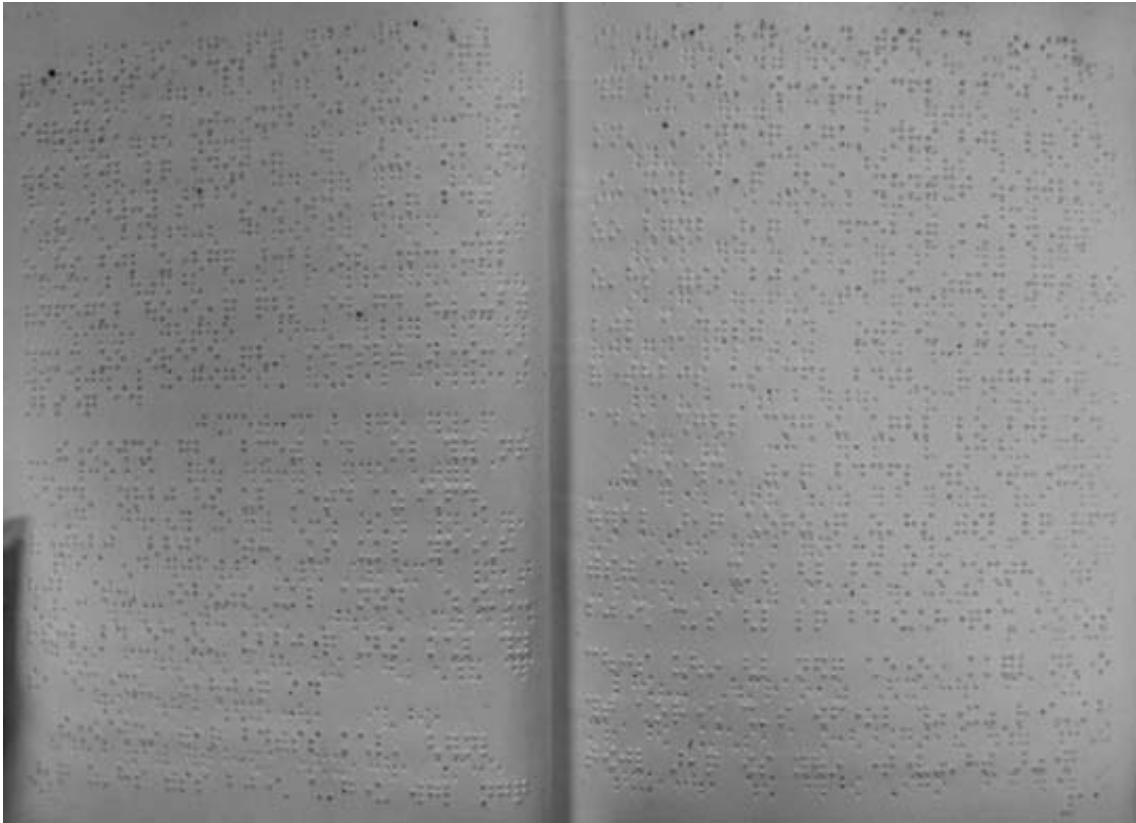
たる きのの きの あたりに まきちらせば にわとりわ あわ
てて その ほーえ ゆく しろ くる うすかばい 10
いくわの にわとり 1つに かたまり あたまと あたまとを
つきあわせて いそがしげに えを ひろう いもーとわ
やがて かこいちかく あゆみよれば なかなる ひよこども
わ ちーさき くちを ひらきて ぴよぴよと なきつつ
かこいぎわに あつまる まいにち せわ しおることとて
いづれの にわとりも みな かわゆき なかに ひよこわ 1
そー かわゆく おもわる いもーとも おなじ こころにや
しばし みとれて ひよこの そばを はなれず

ものおきの まえなる あきばこより しじみの からを
とりだし こまかに うちたく その おとを ききつけて
かけたり とびちりたる かいの かけを すばやく つい
ばみたるわ まっしろなる めんどりなり くだきたる
かいがらを うつわに いれて あたうるに これにわ えの
ときの よーに あつまらず

とやの あちに いりて みるに しきわらの なかに
みごとなる たまご 2つ ころがれり きのーの ご
ごに うみたるなるべし いもーとの おきて ゆきたる
えばこに いれて もちかえり ちゃのまの とだなの なかに
しまう つくえの ひきだしより よーけいにつきを だし
「4がつ25にちあさ たまご 2つ」と きにゆーす
ちちうえの めいにて よーけいゆ ことしより ぼくらの
しごととなり につきをも わたされたれば にわとりの こと
わ すべて これに きにゆーしおくなり

あさめしを おえて いもーとと ともに がっこーに ゆく
でがけに とやの ほーを みれば めんどりわ せわ
しげに いくたびか つちを かきちらして えを あさるに
いそがしく おんどりわ はこの ふちを ふまえて くびを
すえ むねを はり いまや ときを つくらんとする さまなり

だい5 どーぶつの いろと かたち
おーくの どーぶつを ちゆーいして みると いろいろ



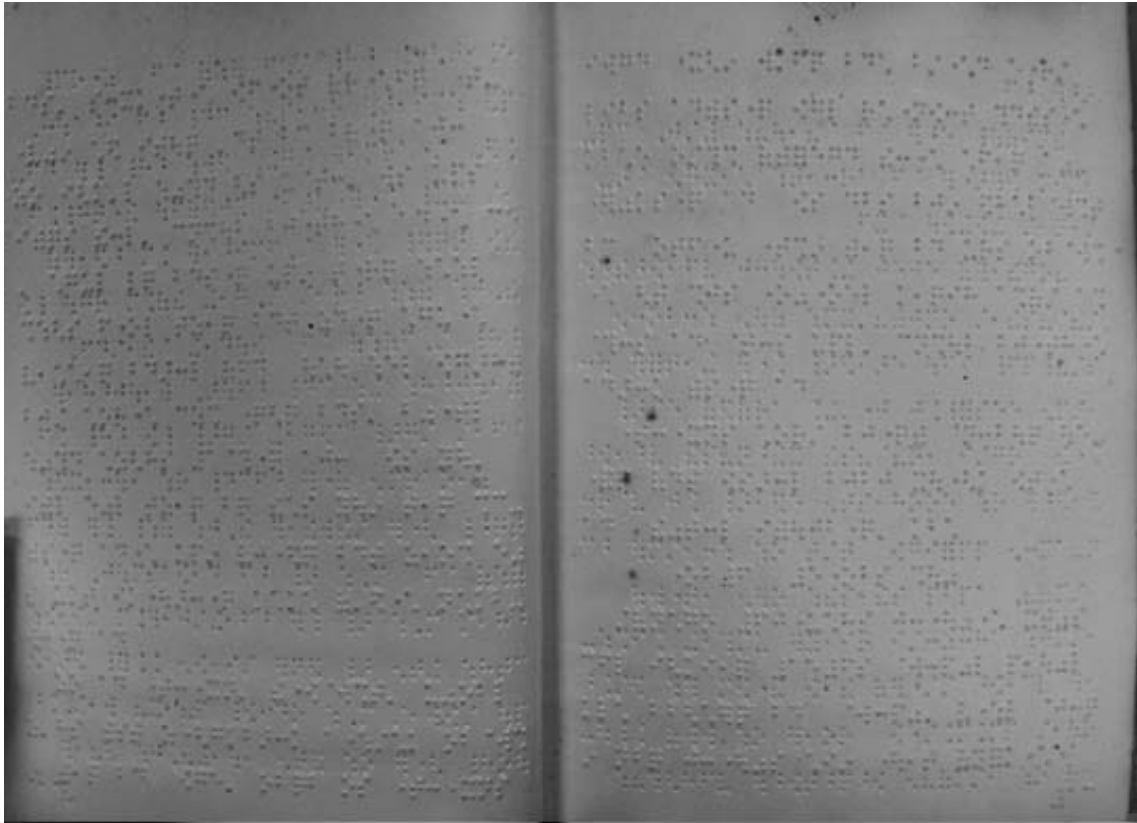
めづらしいことがあるのに きがつく なかでも
おもしろいのわ ある どーぶつの たいしょくが まわりの
ものの いろに にて いることである こんな たいしょく
を ほごしょくと いう ほごしょくを もって いると
まわりの いろに まぎれて よーいに たの どーぶつに
みつけられない したがって てきに おそわれる しんぱいも
すくなく また こちらから てきを おそうのにも つごーが
よいのである

ほごしょくの れいわ いくらかもある たに すむ つち
がえるわ つちいろ きのはに やどる あまがえるわ
みどりいろ きいろな ちょーわ なのはなに むらがり
しろい ちょーわ だいにんのはなに あつまる さばく
ちほーに いる らくだわ はいいろで ゆきの なかに すむ
ほつきよくまわ まっしろである

ほごしょくを もって いるものの なかにわ きせつに
よって まわりの ものの いろが かわれば それに つれて

おなじよーな いろに かわる ものも ある ほこくに
すむ のうきぎや こーざんの うえに いる らいちょーわ
なつわ かっしょくで かわればや つちの いろに にて いる
が ふゆになって ゆきが ふりつもと まっしろになる
また きせつに よって かわるくらいで なく いつでも
まわりの ものの いろが かわれば まもなく それと にた
いろに かわるものもある たとえば あまがえるわ
みどりいろのはの うえに いるときわ みどりいろで
あるが かわきに うつれな かわきに にた いろになる

ほごしょくを もって いるうえに その どーぶつの
しせいによって かたちまで まわりの ものに にて みえる
ものもある くわの きに いる えだしゃくとりわ その
いろが くわの きに にて いるばかりでなく からだの
うしろのはしを きにつけて からだを ななめに つきだ
すと かたちか くわの こえだに すんぶん ちがわない
ところによって この むしを どびんわりと よんで



いるのわ の一ふなどが こえだと みちがえて ど
びんを かけ おとして わると いう いみで あるー
また おきなわに さんする きは ちよーわ その はねの
おもての ほーにわ うつくしい いろどりがあるが うら
わ かねはに にて いるので はねを とちて さかさ
くさきの えだに とまって いると まるで かねはが
ひっかかっているよーに みえる しかし さらに これよりも
いろや かたち が うまく できて いるのわ いんどに
さんする かまきりの 1しゅで あるー この むしわ
おもに らんに とまって いて ほかの むしを とって くら
うのも あるが はねを ひろげて いると まったく
の はなと おなじよーで なかなか みわけが つかない
そーで ある

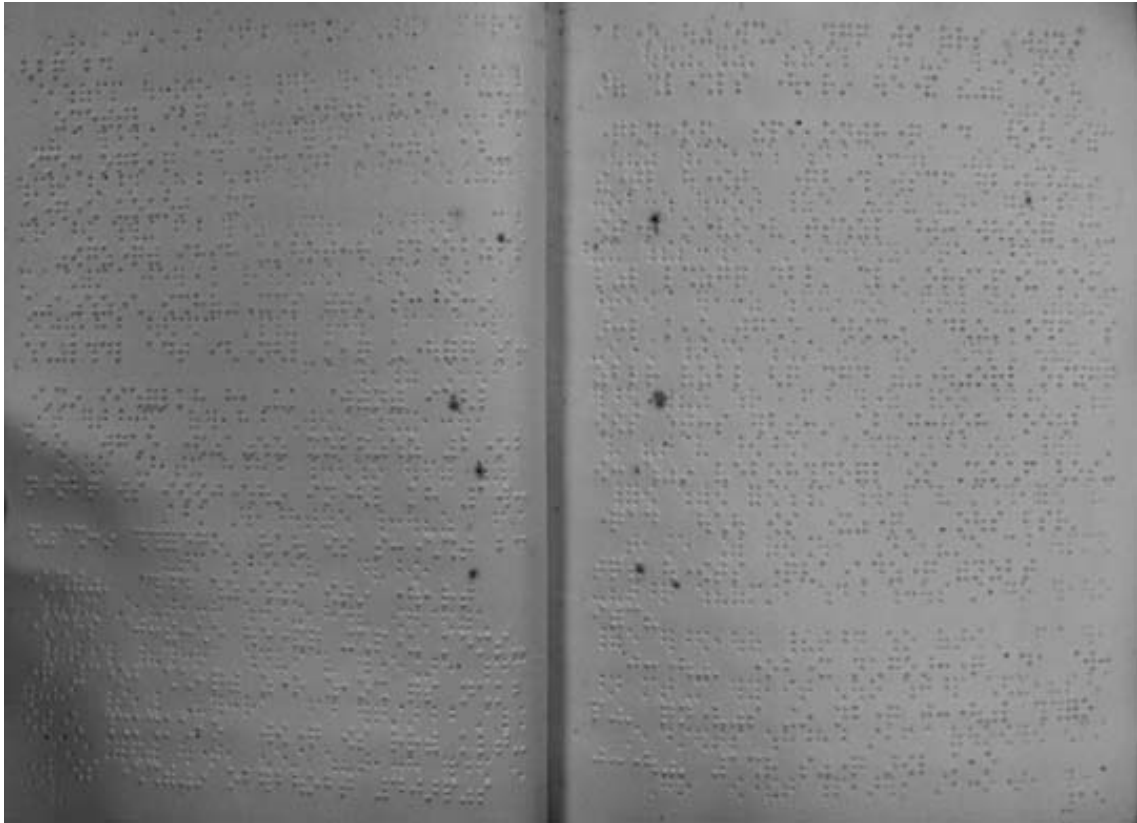
また ある どーぶつわ ほごしよくとわ はんたいに
まわりの ものと まぎれないよーな あざやかな たいしよく
を もっている これらわ たいいてい たの どーぶつの

おそれる ふきを そなえて いるか いやがる あぢや
においの あるもので これに ちかづこーと するものが
ないから たやすく みとめられる ほーが かんてい あん
ぜんなので ある この るいの いろを けいけいしよくと
いう たとえば どくを もっている はちの たいしよく
が きと くるの だんだらに なっており あくみや あく
しゅーの ある ちよーの はねにわ うつくしい いろどり
があるよーな ものである

どーぶつの かたちや いろでも ちゅーいして しら
べて みると このよーに いろいろ ふしぎな ことが
ある ほんとーに おもしろいではないか

だい16 5だいの くしん

やみつかれた 60ばかりの るーじんが ふとんの
うえに おきなあって 156の しょーねんに ねっしんに
なにか いまかせて いる しょーねんわ ひざに りよーて
を ついて るーじんの かおを じつと みつめながら



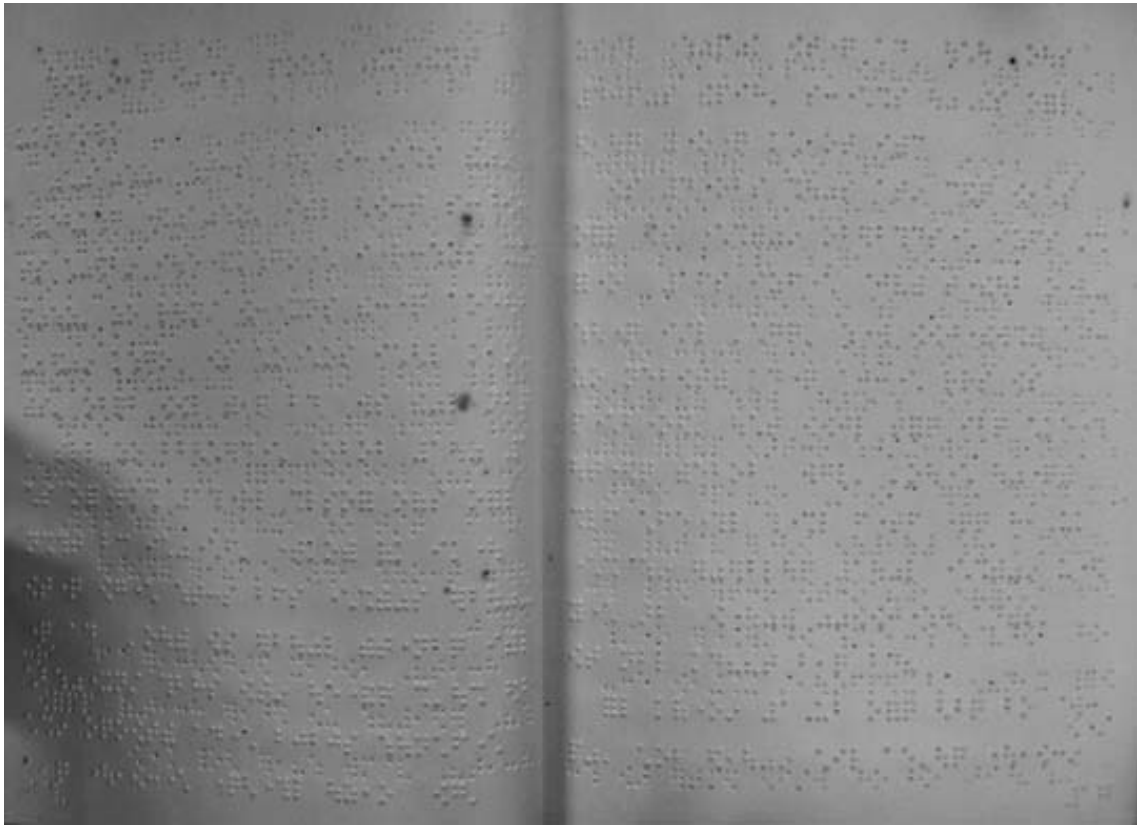
きいて いる

まくらもとに おいて ある あんどの ひかりわ うす
ぐらく たてきって ある しょーじの やぶれを あき
かぜが はたはたと あふる

「これまで おりおり はなしたとーり 4たいまえの
かんあんさまが こくりみんぶくの もとわ のーぎょーを
さかんにするに あると おきづきになって はじめて のー
がくを おおさめになり りっぱな しょもつもおかき
になった それから げんあんさま ふまいけんさま 2たい
つづいて その おこころざしを おつぎに なり 1そー
けんきゅーを すすめられた しかし この のーがくと いう
がくもんわ しゅじゅ さまざまの ことを じっちと
がくりの りょーほーから しらべて ゆかぬば ならぬの
で 3たい かかわっても まだ まったく ての つかない
ことが すくなくなかった そこで この ちちも なにと
ぞ この がくもんを たいせいしたいと 40よねんの

あいだ しんしよくを わすれて その みちの しょもつをよ
み くにくにの じっちを しらべ ほんも あらわし
できるだけわ ほねおったつもりで ある しかし おもう
ほどに しごとわ できず そのうえ せいぢしょーの
ことで たびたび とのさまに じょーしょしたため やく
にんに にくまれて ついにわ くにを たちのかねば ならぬ
よーになった それから しょこくを あるきまわったすえ あの
まいにち みまいに きて くれる もんじんたちに たのまれて
ここの どーの せいほーを かいりょーしたり あたらしい
こーざんを ひらいたりするために この やまなかえ きたの
である しかし この ぶんでわ わたしの いのちわ
とても しごとの できあがるまで もつまいと
おもう」

ろーじんわ たいぶ つかれたよーで ある しょー
ねんわ てつびんの ゆを ついで ろーじんに すすめた
ろーじんわ 1くち のんで よこに なった



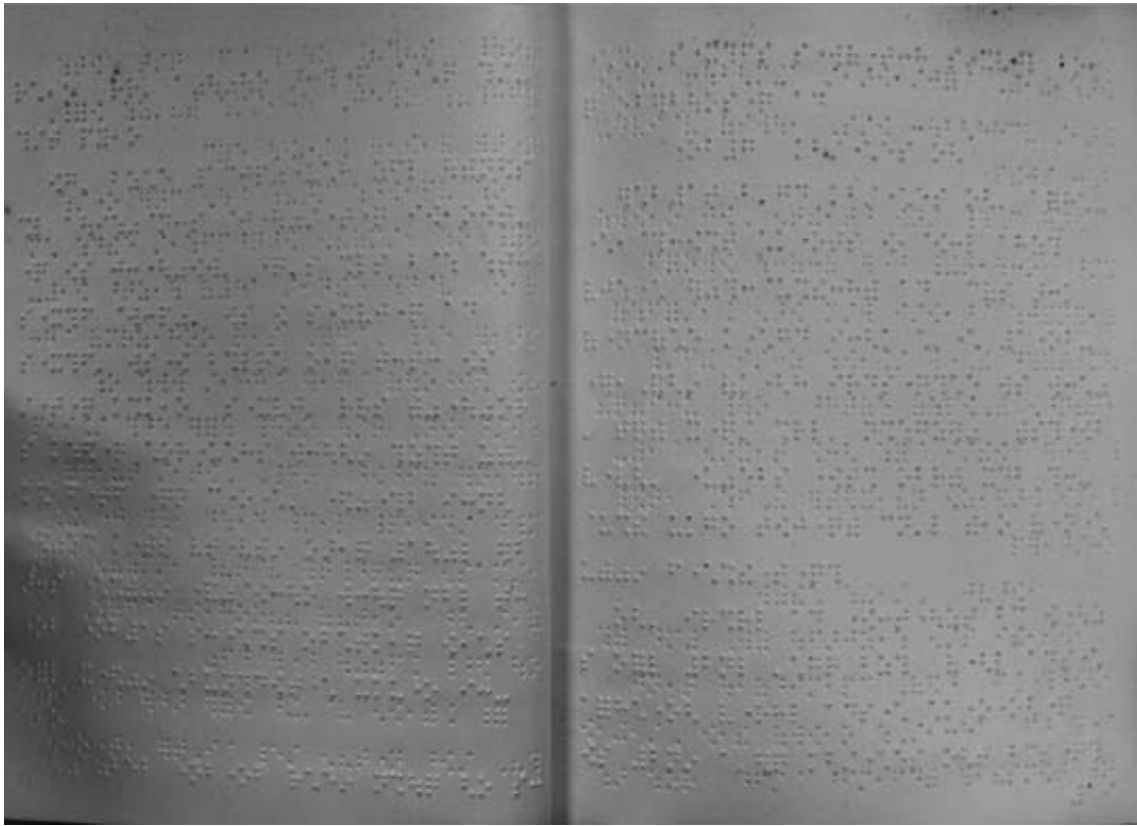
すこし たって こんどわ ねたまま ぼつぼつと
はなしました

「かんあんさま さとーの いえの のーがくの ほんを
おひらきなされ げんあんさまわ おもに きこーと のーぎょー
との かんけいをおしらべなされたが おぢーさまの ふまい
けんさんわ また ちしつや こーぶつの ほーで あたらしい
はっけんを なされた この かたがたの おかきになつた
ものわ たいてい ここにもっている その ほんについで
わ のちに また いいきかせるが たいたい 1しん 1
かのためでなく 1すどに くのために たみの ために
つくすという おかながえわ どなたも みな おなじ
ことで これが さとーの いえの がくもんの せいしん
である わたしも この せいしんに もとづいて おもに
かいさんぶつや すいりの ことを しらべて くわしく けい
かくを たてたことも あるが いろいろの さしつかえが
あって じっこーが できずに しまった これわ

まことに ざんねんな ことである しかし わたしの
40ねんの ほねおりわ のーがくの しんぼの ためにわ
けっして むだで なかつたとおもう

この 4たいの くしんの あとを うけて こっかの
ために この がくもんを たいせいするのが おまえの やく
めだ 16の おまえが りよひも とほしい たび
さきで おやに わかれてわ さぞ ころほそくも あるー
また つらいことも あるで あるーが ちちの この
ねがひだけわ しかと ころに とめて おいて かならず
しとげて もらいたい それにわ わたしが しんでも
くにえ かえらずに すくに えどえ でて りっぱな
がくしゃを せんせいに 1しんに がくもんを はず
むが よい こじんも 『ころざし あるものわ
こと ついに なる』と いうている

めに なみだを 1ばい たためて きいて いた しょー
ねんわ かわいい けっしんを かおに あらわして じっこーを



ちかった ちちわ あんしんした よーすで やがて
すやと ねむった

これわ いまから 130ねんばかり まえに しもつけの
くに あしおさんちゅーの りょじんやどで おこったこと
で この ろーじんこそわ でわの くにの いしゃ さとー
のぶすえ しょーねんわ その こ のぶひろで ある
のぶすえわ そのご いくにちか たって とーとー この
やどで なくなった のぶひろわ ちちの もんじんたち
の なさけで かたぢばかりの そーしきを
すますと まも
なく えどえ でて うだがわ げんずい おーつき
げんたく などの ひとびとを たよって 1しんに せい
よーの がくもんを べんきよーした そして ついに とー
だい だい11の のーがくの たいかとなって こっかの
ために ぶげんあを かいはつすることが はなはだ おー
かった

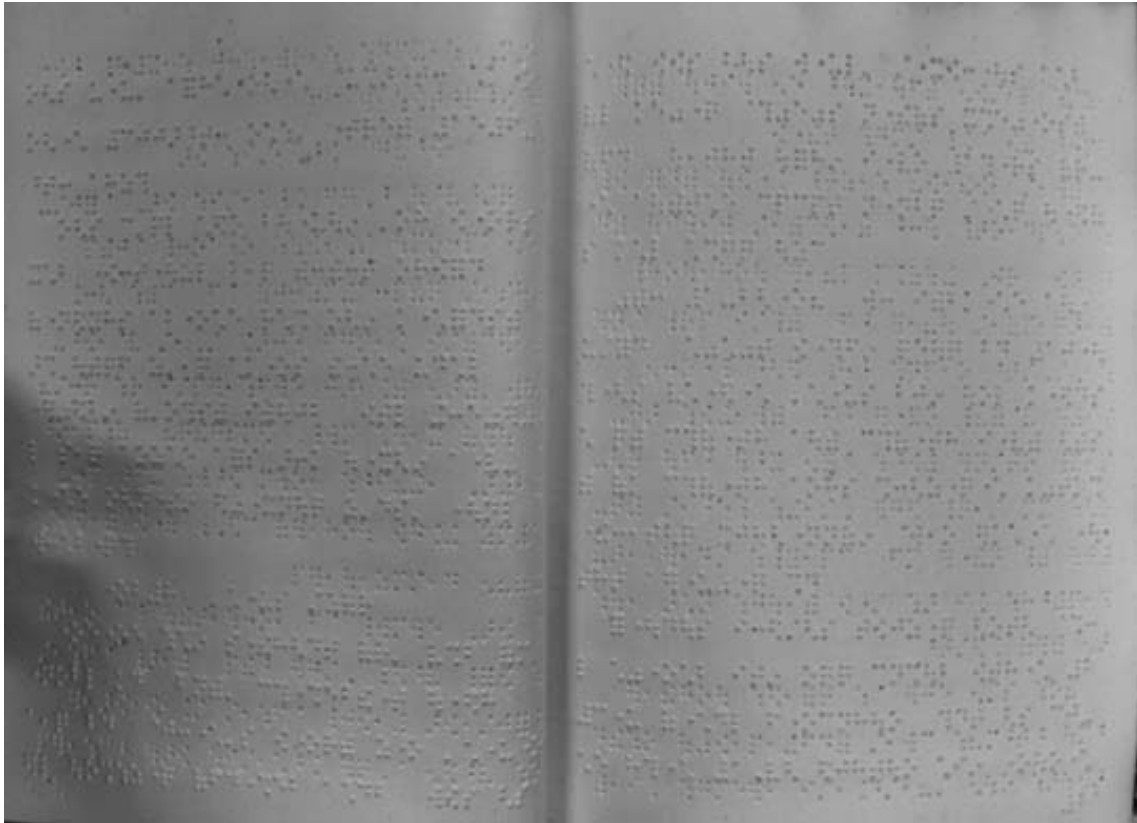
かんあんいらい だいたい ちからを つくして きた

がくわ のぶすえの のぞみどーり のぶひろに いたっ
て たいせいしたので ある

だい17 ないやがらの たき

せかい1といわれる ないやがらの たきわ あめりか
がっしゅーこくと かなだとの こっきよーに あります
ひろさが せんすーひやくほーりも ある うみの よーな
みづうみから なかれる おーきな かわが 1だい
ぜっべきを みなぎり おちるのですから その そーかん
わ とても ふでや くちにわ つくされません ものすごい
ひびきわ ばんらいの ごとく たいちも ふるい すー
ひやくほ はなれた ところでも うつわに もった みづが
はもんを えがくほどです

たきわ おちくちに ある ごーとじまと いう こじま
のために 2つに わかれて います みぎに あるのが
あめりかたき ひだりに あるのが かなだたきで
この 2つを あわせて ないやがらの たきと いうのです



たきの はばわ あめりかたきが ひやくよぢょー かなだ
たきが 300よぢょー たかさわ どちらも 156
ぢょー あります

たきの うわてに かけた いしばしを わたり こだちの
ふかい ごーとじまに いって もーもーと たちこめる
みづけむりの あいだから ちかく たきを ながめるのも
よく しもてえ まわって かなだの ほーから はるかに
ぜんけんを みわたすのも おもしろい ことに ゆーらんせん
に のって あたまから あめの よーな しぶきを あび
ながら たきつぼを けんぶつして まわるのわ じつに
そーかいです

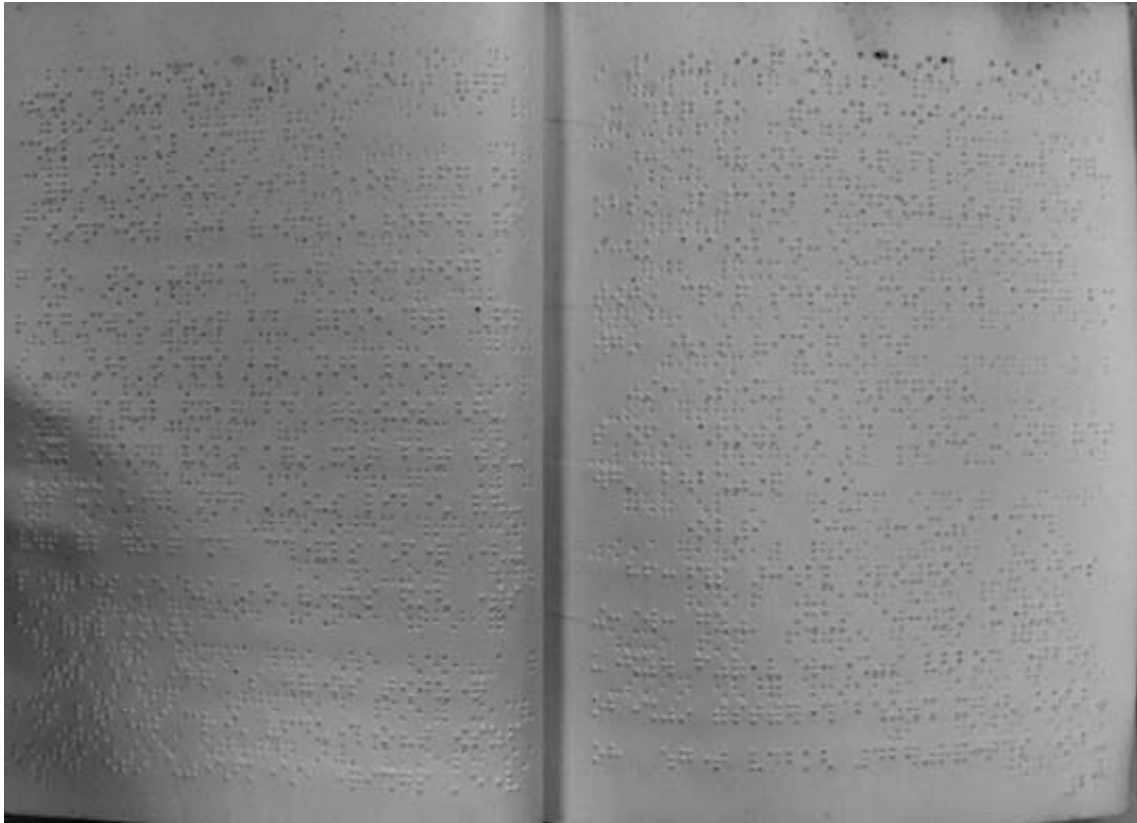
たい8 わかばの やまみち

だらだら さかを のぼりきると みちわ ひくい みぬ
づたいに なる いつもわ うすぐらいほど しげり
あっている りょーがわの こだちも まだ わかばだ
けに したくさまで みえるぐらい あかるい そのの きの

かぜ このの いしの そばにわ やぶこーじの あかい
みに ならんで しゅんらんの つぼみの ふくらんだのも
みえる しっとりとしめりをおびた 1すぢの みち
が あしもとから うねうねと つづいて やがて しげみ
の なかに かくれて しまう

「もー 1いきだ」 そー おもいながら あしを
はやめる かんかんと こずえを てらしている 10じ
すぎの ひかげが わかばの いるを したに なげるの
か ても うすみどり あしも うすみどり おびも きもの
も みな うすみどり あたりの くーきまでが なんとなく
ぼーっとして ふるしきづつみを しょった せなかが じっ
とりと あせばんで くる

めじるしの おーけやきの ところまで きたとき きゅー
に かんたかい おとを たてて うつくしい ことが 2
3ば みがるに えだうつりした すると きの うろ
から りすが 1ひき けるりとした かおを だしたが



ぼくの すがたをみると ふとい おを ちらりと みせて
きゅーに また あなに かくれて しまった

みちが だんだん のぼりに なったと みえて たに
の こずえごしに とーい みづうみが ちらちらと みえ
て きた そらわ はてもなく すんで ところどころに
ちぎれくもが とんで いる みねから すそに かけて
の わかつかしい こずえの いろわ つよい につこーを
あびて 1めん に けむって いる みちばたの きり
かぶに こしかけて ひたいの あせを ふいて いると そよ
そよと ふく かぜにつれて わかばの においが ひし
ひしと みに せまって くる うすべにの かえで ぎん
ねずみいろの なら きの かつた みどりの けやき どの
きを みても なつかしい

「この さかを おりて あの しみづの ところまで
いくと いいいくの うちが みえるはずだ」と このまえ
きたときの ことを かんがえながら でおくれの わらび

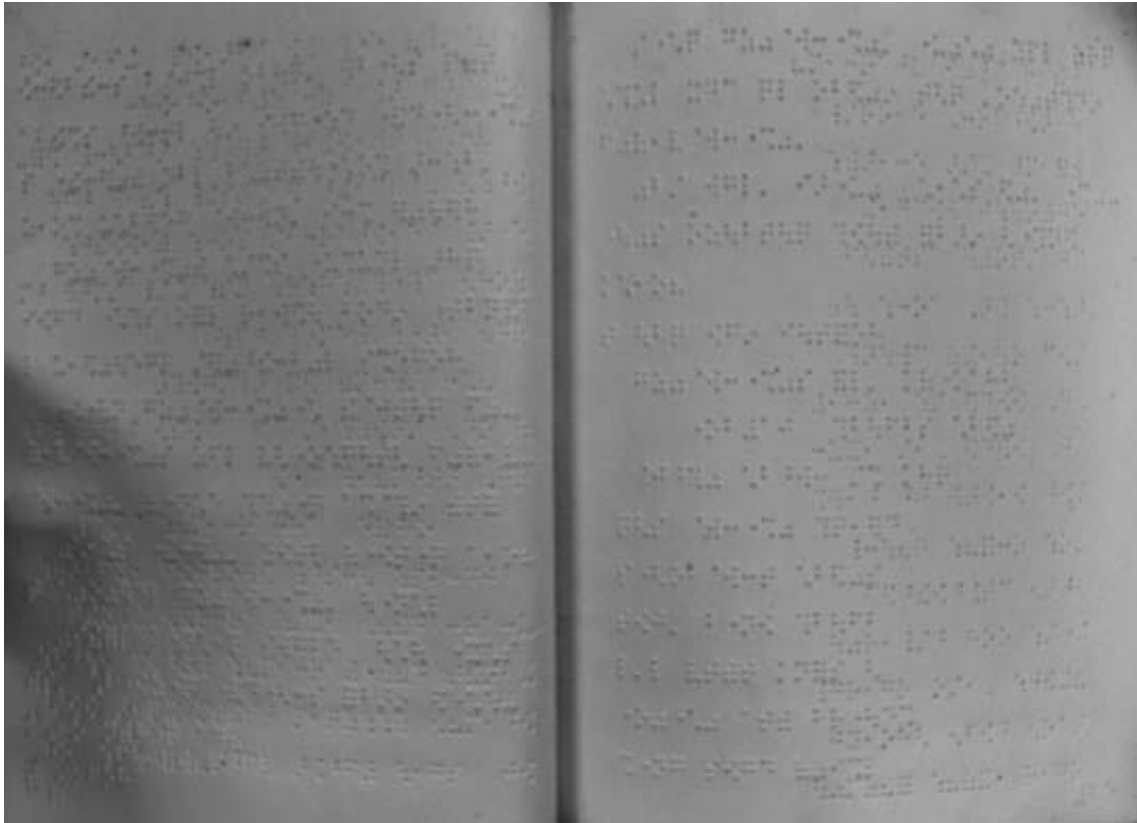
を 1ぼん おって また あるきだす はらが だい
ぶ すいて きた もー おひるごろだろー

よーやく しみづまで きて ての きれるよーに つめ
たいのを 23はい つづけさまに のんで いると
おーきな あおたいしょーが むこーの みづたまりの
ところを うねって のろのろと くさの なかに かくれて いく
それを じっと みおくって いると

「やー かとーくん よく きてくれたね」
と こえを かけたものがある あたまを あげて みると
それわ いいいくんで あった

だい19 りょーしょーぐんの あくしゅ

りえーじゅの よーさいに たてこもりたる べるぎーの
ゆーしょー れまんわ ぶだの しょーそつを はげまし
はげまし えんみつひしょーぐんの ひきいたる どのの
たいぐんを ものともせず いさましく ふせぎ たたかい
たり されど ひるいなき 42せんちめーとるの だい



こーけいほーの いりよくに たいしてわ せいぎの ねんと
あいにくの じょーとに しを おそれざる べるぎーぐん
の ぼーせんも ついに いかんともしがたく よーさいわ
まったく はかいせられ しょーそつわ おーく せんしせり
れまんしょーぐんも かやくの ばくはつに よりて
おこれる がすの ために ちっそくし いたるを どいつへい
にはつけんせられて やせんびょーいんに おくられたり
ごじつ れまんしょーぐんが ほりよとして えん
みっひしょーぐんの まえに ひきだされしとき えんみっひ
しょーぐんわ みづから すすんで あくしゆを もとめ
「かつかの ぼーせんわ まことに みごとで あった」
と かんたんせるに れまんしょーぐんわ しづかに
「おほめに あづかって おそれる しかし ぶかの
ものわ さいごまで べるぎーの めいよを けがさ
なかった つもりで ある」
と こたえたり

やがて れまんしょーぐんわ ばんかん むねに みちて
かすかに ぶるう てに たいけんを ときて わたさんとするを
えんみっひしょーぐんわ

「いや それにわ およばん かつかの けんわ ぐん
じんの たましいとして すこしも めいよを きずつけ
なかった」

と しいて これを おしとめたり

れまんしょーぐんの めにわ なみだありき

だい10 すいしえいの かいけん

りよじゆん かいじょー やく なりて

てきの しょーぐん すてつせる

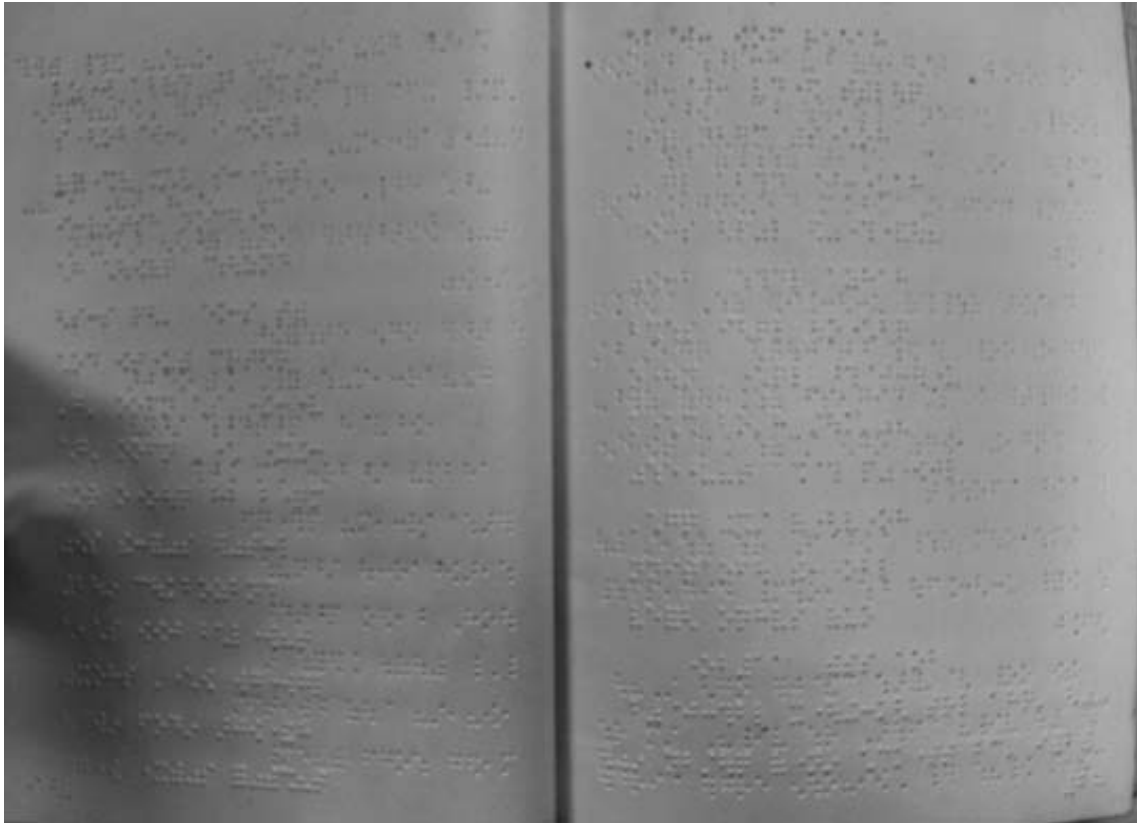
のぎたいしょーと かいけんの

ところわ いづこ すいしえい

にわに ひとと なつめの き

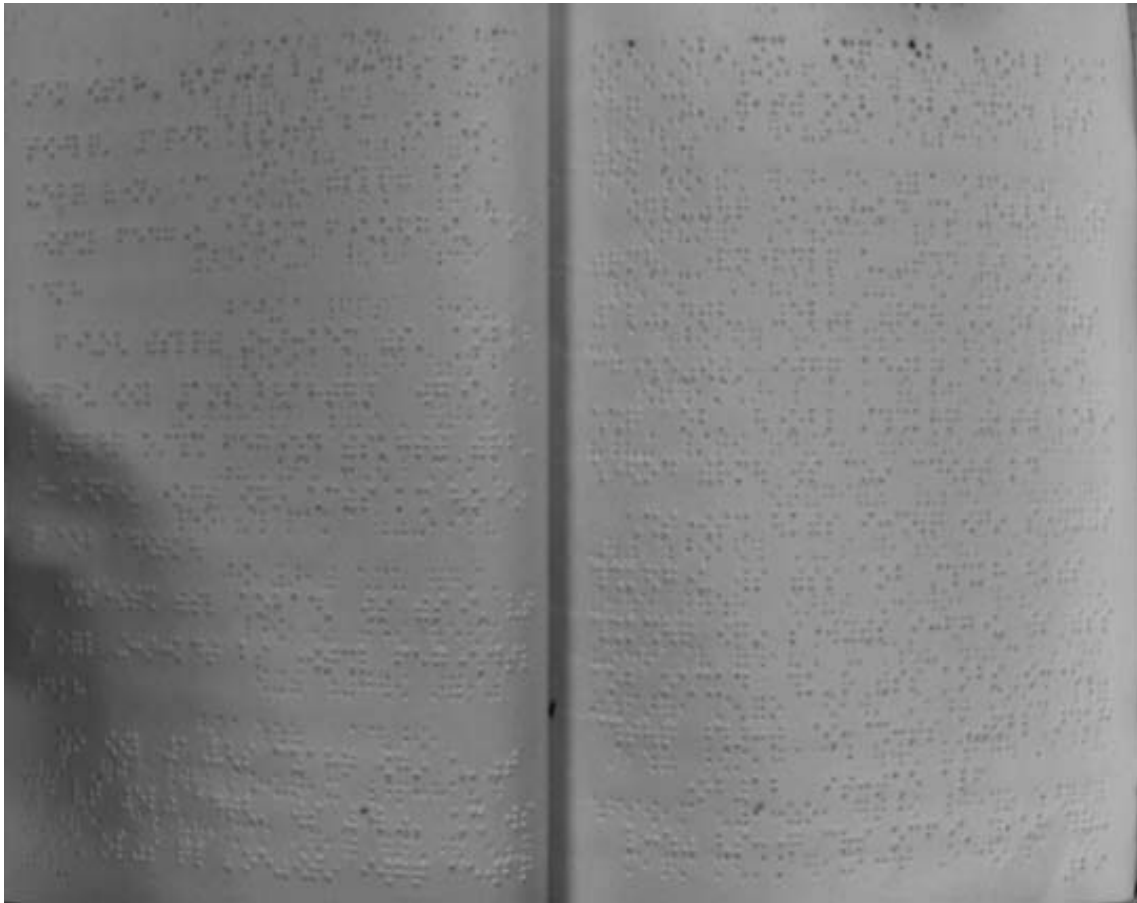
だんがん あとも いちじるく

くづれ のこれる みんなくに



いまぞ あいみる 2しよーぐん
のぎたいしよーわ おごそかに
みめくみ ふかき おーぎみの
おーみことのり つたうれば
かれ かしこみて しゃしまつる
きのーの てきわ きよーの とも
かたる ことばも うちとけて
われわ たたえつ かの ぼーび
かれわ たたえつ わが ふゆー
かたち ただして いい いでぬ
「この ぼーめんの せんとーに
2しを うしないたまいつる
かつかの ころろ いかにぞ」と
「ふたりの わがこ それぞれに
ししよを えたるを よるこべり
これぞ ぶもんの めんもく」と

たいしよー こたえ ちからあり
りよーしよー ひるげ ともにして
なおも つきせぬ ものがたり
「われに あいする りよーばあり
きよーの きねんに けんずべし」
「こーい しゃするに あまりあり
いくさの おきてに したかいて
たじつ わがてに じゅりよーせば
ながく いたわり やしなわん」
「さらば」と あくしゆ ねんごろに
わかれて ゆくや みぎひだり
つつおと たえし ぼーだいに
ひらめき たてりひの みはた
だい111 ものの あたい
いんりよーすいに ふじゆーなき とちに ありてわ きん
せんを ついやして みづを かうなどと いうわ おもいも



よらぬ ことなり しかれども いりよーすいの えがたき
ところにてわ 1ておけ なほほどと いう ためを
はらいて みづを かう おなじ ものにてもしの
ごとくに えらるれば あはなく えがたければ あは
あるなり

えがたき ものにてしゆよーならぬ ものわ あはなし
たとえば ここに 1つの いしありとせよ それが いか
に まれにして たやすく えられざる ものなりとも もち
よー なれば たれも これを かうもの なく したが
て あは いることなし

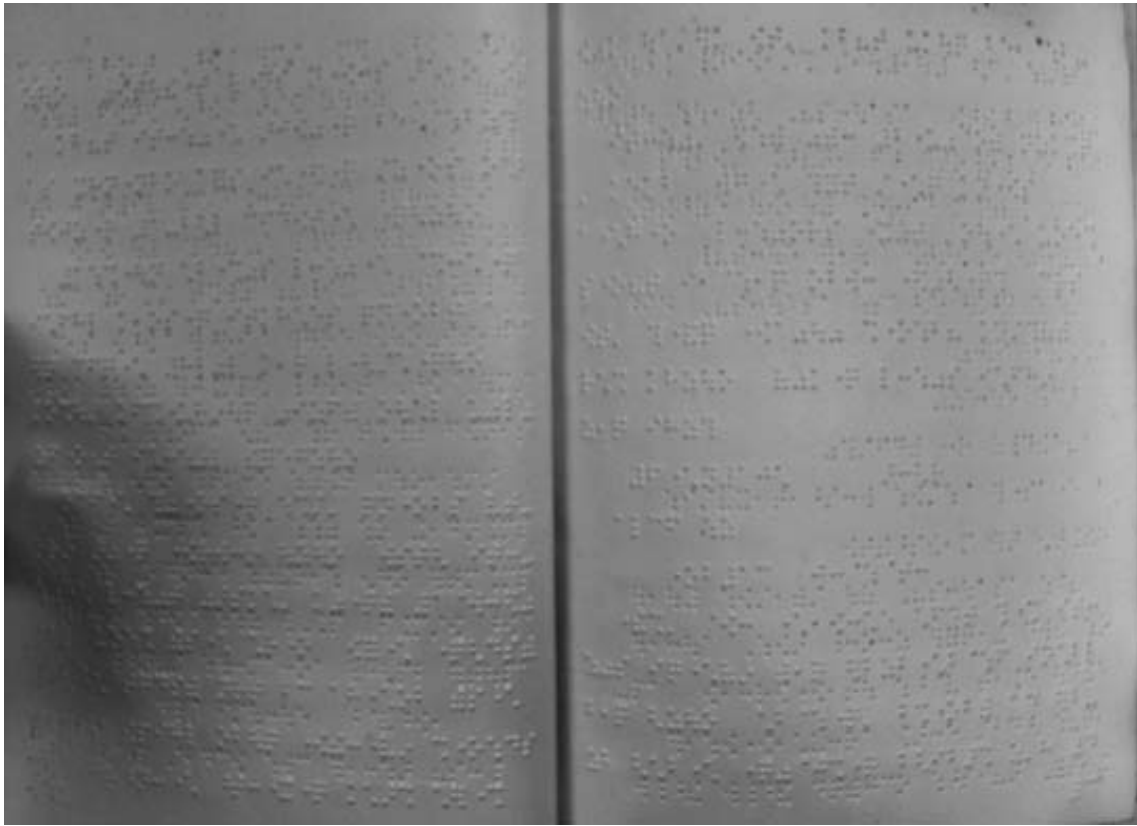
かくのごとく ものに あは あるわ その ものが ひと
のために ゆよーなるとしゆのごとくに えられざると
よるなり

また ここに 1ひきの うまありて これを かむと
する ひと 5にん あるときわ その 5にんわ かく その
うまが たこんの てに わらんこと
をおそれ あられて

たかき あは を つく かくて あは わ したに たかく
なりて うまわ もっとも たかき あは を つかたる ひと
ものになる

これに はんして おなじ よーな え うま 5ひき あり この
もちぬしわ べつべつにて かむんとする ひと だけ
1にんなるときわ 2にんの もちぬし かく その うまの
うれざらんことを おそれ あられて あは を さぐ
かくて あは わ したに やすくなりて もっとも あは を
さかたる もちぬし その うまを うることとなる
かくのごとく しなものを おくして これを のぞむもの
すくなければ その ものの あは い やすくなる しなものを
すくなくして これを のぞむもの おくれば その ものの
あは いたくなる すなわち ものの あは の こぼわ
しゆとして しゆよーと きよーきゆーの かげれによるなり

たし 12 おとーとから あこえ
にーさん きのーで うちの たうえが すっかり すみ



ました 「ことしほど みづの つごの よかった こと
わ ない」と おとーさんが よろこんで いらっしやいます
あの ふりつづいた あめの おかげで やまだの たかい
ところまで 1いきに うえることができました

1さくじつ かいぐんの にーさんが きゅーかで
おかえりに なったので おとなりからの てつたいと あわ
せて うえてが 8にんに なって にぎやかでした
わたくしわ なえくばりをして 「おまえも たしかに はんにん
まえだ」と おかーさんに ほめられました

たうえが すんだので さくやわ てつたいの ひと
たちを よんで ごちそーを しました そのとき おとー
さんが にーさんと 「よのなかわ なんでも 1しょーけん
めいに はたらく ものが かちだ こめが できるのも
むぎが とれるのも つちと いう ありがたい ものが
めいめいの ほねおりに たいして ごほーびを くださるの
だ うちぢゅーが ぢょーぶで なかよく かせぐ

こんな しあわせな ことわ ない」と はなして いらっしやい
ました

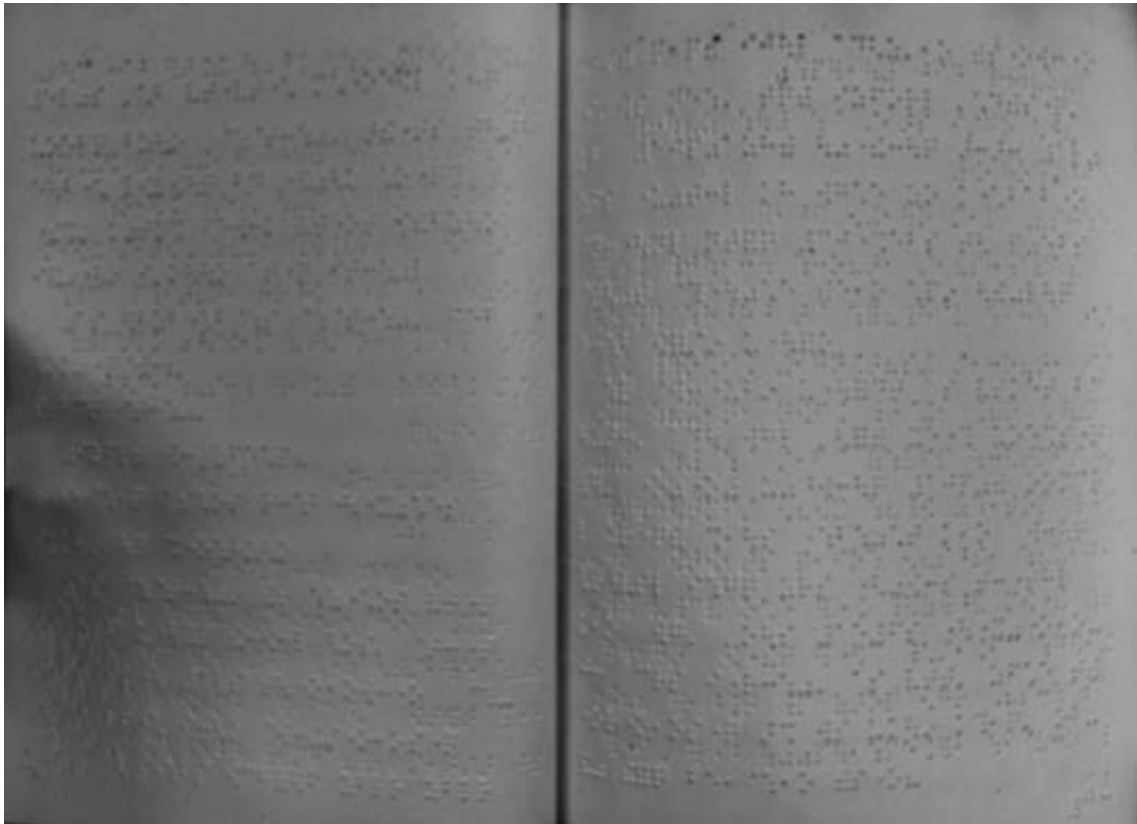
おとーさんわ けさも 「もー 2ばんちゃも つまなくて
わ ならない それが すむと やがて なつごの
あがりだ にーさんたちの ぶんも わたしが はたらく
のだ」と おっしやって たいそー げんきです うちの
ことわ すべて ごあんしん ください」 なつやすみも
ちかくなりました みんなで にーさんの おかえりを
まっております

6がつ10か よーきち

あにうえ さま

だい13 ろーしゃちよー

ぼくわ きょー がつこーから かえると すぐ おとー
さんの おてがみを もって せいまいかいしやえ おつかいに
いって きました かいしやでわ いくだいの ある せい
たい きかいが でんりよくで いきおいはよく まわり 4



5にんの わかい ひとびとが めかだらけに なって
はたらいて いました しゃちょーさんわ よほどの としより
らしいが にこにこして いる げんきな かたです
ぼくわ なんとなく えらそーな ひとだと おもいました
おへんじを おわたした あとで おとーさんに

「あの せいまいかいしゃの しゃちょーさんわ えらい
かたなんでしょー」

と いうと おとーさんわ

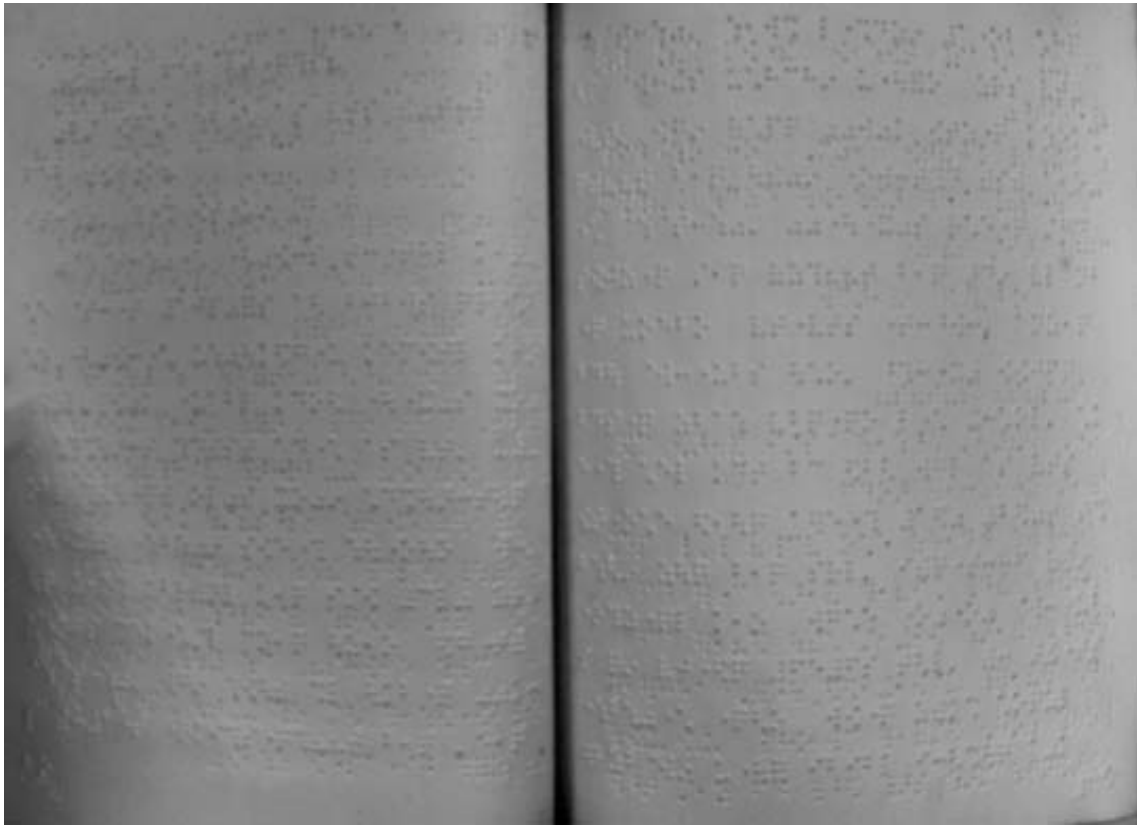
「おまえにも そー みえるかね」

と おっしゃって あのかたの ちーさいじぶんからの
おはなしを して くださいました

「あの しゃちょーさんわ もと かみがたの ひとで
この まちえ はじめて ほーこーに きたのわ ちょーど
おまえと おなじ 12の としだったそーだ
じんの いえが おーきな しょーゆやだったので
はじめわ きんざいの こうりみせえ まいにち まいにち

ふっても てっても おろしに あるきまわった ものだそーだ
が その つらさわ とても おまえたちに わかるものでわ
ない 10ねんあまりも しんぼーして よーよー 1にん
まえの ばんとーに なり それから また ながいあいだ
ちゅーじつに つとめて 30ぐらいの とき ねんらいの
ちょきんと しゅじんから もらった かねを しほんにして
ちーさい こめやを はじめた

さて しょーばいを はじめると あの ひとならと いう
しんよーわ あるし それに わきめも ぶらず はたらくので
みせわ だんだん はんじょーして 10ねんも たたぬうち
に まちでも くっしの ざいさんかと なった そーして
ひとびとに おされて まちの ぎんこーの とーどりに
なった それわ わたしの 15・6の じぶんだった
ろー うちの おぢーさんわ あの ひととわ まえから とも
だちだったので よく その はなしを なすってわ たい
へん ほめて いらっしやった ものだ」



「ほんとーに えらい ひとですね」

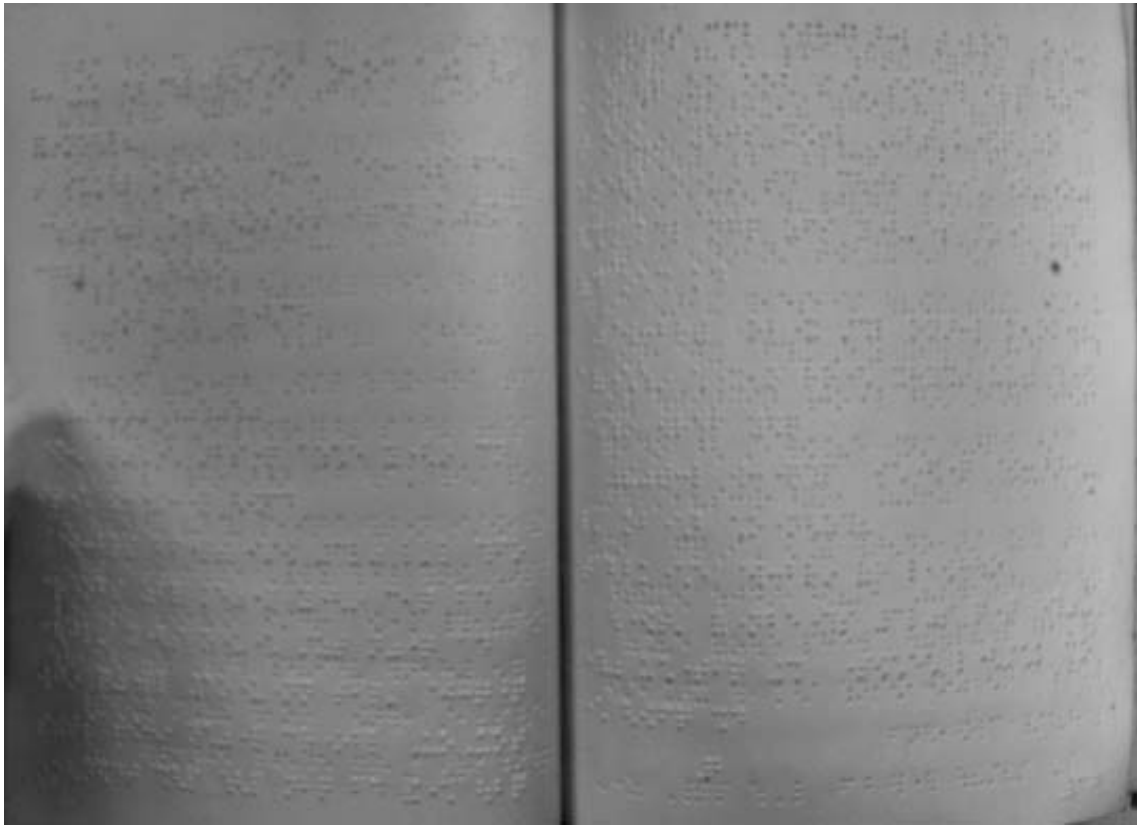
「いや これから さきが あの ひとの ほんとーに えらい ところだ」

おとーさんわ すぐ ことばを ついで

「しゃちょーさんが ぎんこーの とーどりに なって から ちょーど 10ねんめの あき いろいろの てちがい から ぎんこーが はさんしなれば ならぬことになつた せけんこわ こんな ばあいになるだけ じぶんの ふたん を かるくしよーと するものもあるが あの ひとわ ほんたいに すこしでも たにんの ふたんを かるくしよーとして じぶんの ざいさんを のこらず さしだした

して まったく むいちもつになつて おやこ 3にん まちはづれの うらながやに うつつて しまった けれども しゃちょーさんわ それを すこしも くに しないで『なに もー1ど でおすのです』と いうて わらつて いた

しゃちょーさんわ さつそく にぐるまを 1だい かりて きて しょーゆの はかりうりを はじめた まちの ひと ひとわ これを みかねて『そんな ことまで なさらなく ても』と いうて しほんを だそーとする ものもあつた が しゃちょーさんわ『じぶんの ちからで やれる ところまで やつて みます』と いうて よるを ひに ついで はたらいた ひとびとの どーじよーわ あつまつて いるし しょーばいの しかたわ じゆーぶん ころろえて いるので まいあさ ひいてでた にか ゆーかたにわ かならず からはなるという けいき それに あの ひとの ことだから けつして あせらず 1けん 2けんと とく いさきを まして いうて のちにわ おもてどーりえ みせを だすまでになつた それから だんだん しょーばい の てを ひろげて 56の ときにわ もー よほどの ざいさんが できた そこで まもなく かたてまに せいまいしよを はじめ おいおいに おーきくして あんな



りっぱな かいしゃに したのだ まったく あんな ひとわ
めづらしい」

とおはなしに なりました ぼくわ きょー その えらい
しゃちょーさんに あって きたのだと おもうと なんとなく
うれしい きが しました

たい14 むぎうち

1

さんさんさん さんさんさん

きょーわ てんきが よいので あさから むぎを うつ
おとが ほーぼーで きこえる

しょーいちの いえでも おやこ 3にん にわに すえた
うちだいの まえに ならんで むぎを うっている
うしろにわ むぎの たばが やまと つんで ある
それを てんでに 1たばづつ とってわ りょーで
ねもとの ところを つかんで うちだいに ぱたぱたと
たたきつけると くきの さきについて いる ほが しいて

ある むしろの うえに おもしろいよーに とびちる たば
を まわして また たたき ほが のこらず おちて しまう
と たばを むしろの むこーに ほうと なげて また
あたらしい たばを とる うしろの やまが だんだん
ひくく なるにつれて まえの むぎわらの やまが みる
みる たかく なる

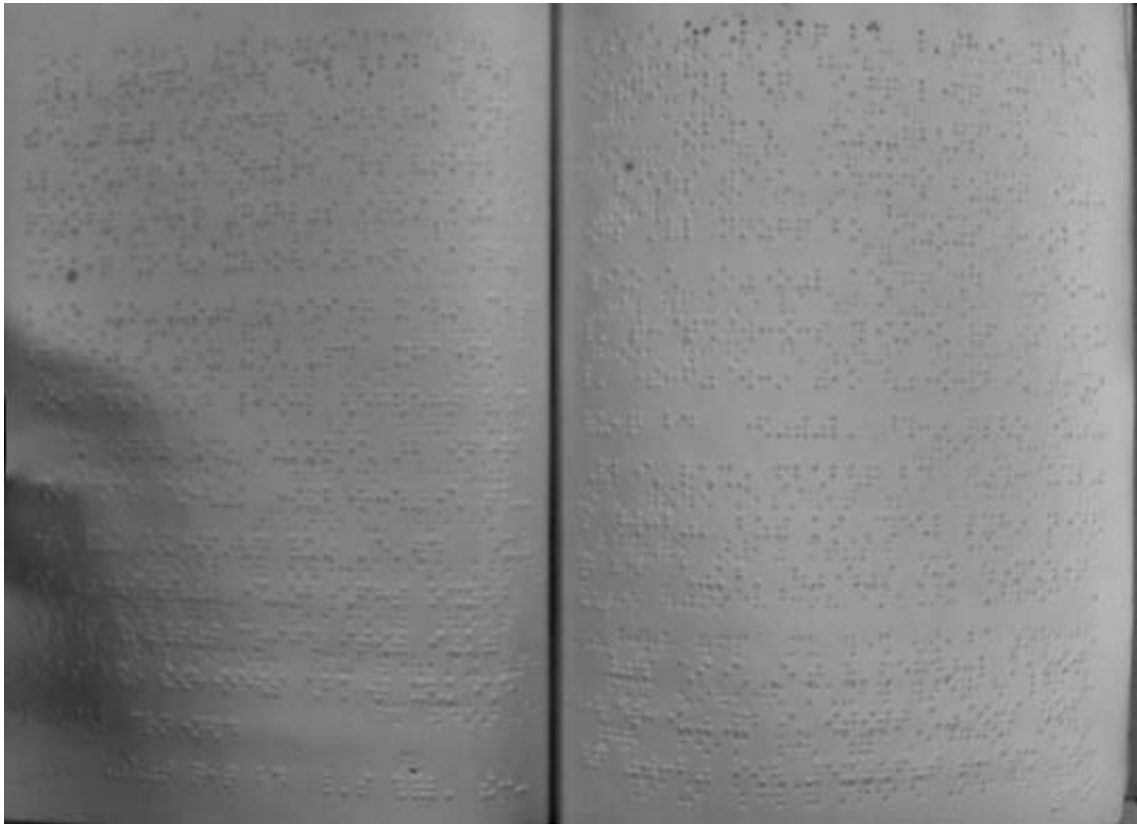
「しょーいちも だいぶ やくに たつよーに なったなー」
あみがさを かぶった ちちが ふりむくと ははも すぐ
がさを そちらえ むけて

「ほんとーに そーですね おかげで きょーぢゅー
にわ たいがい かたづきます」

と いいながら しょーいちを みて にっこりした

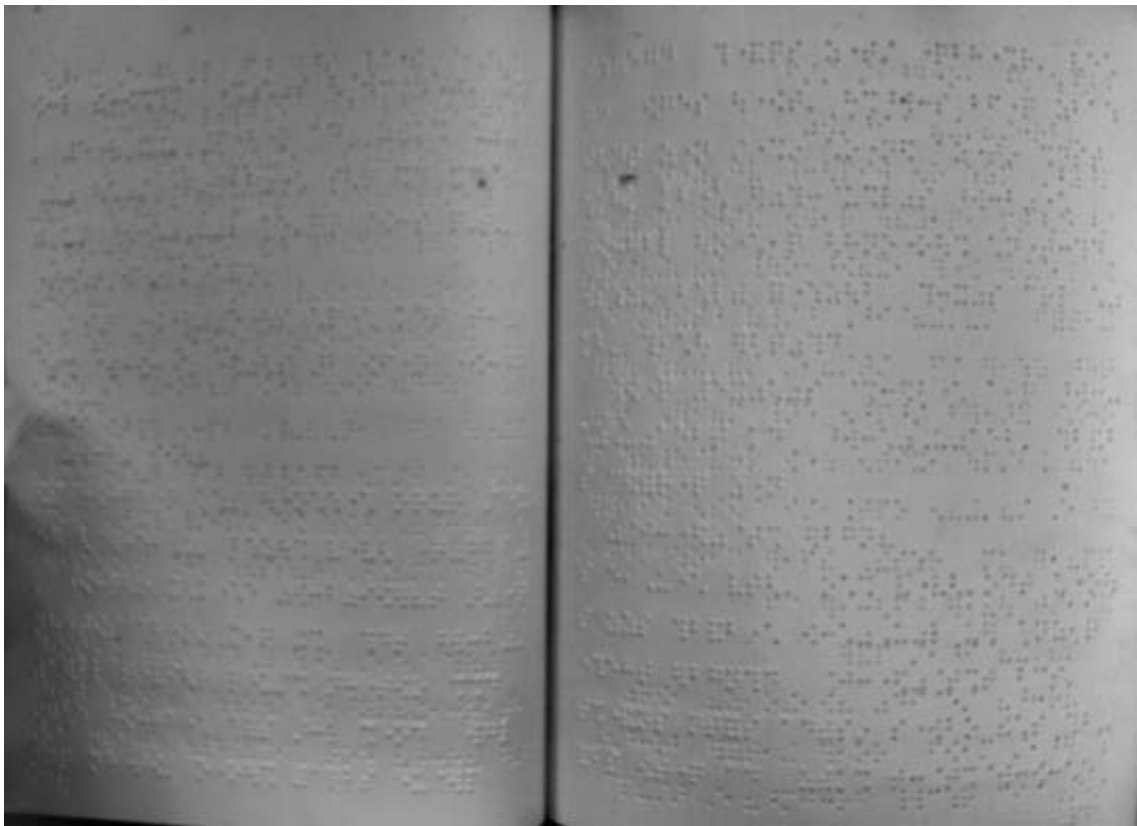
しごとわ みづいらすの 3にんの てで ずん
ずん はかどって ゆく どこからか にぎやかな うた
が きこえて くる

2



にわに しきつめた むしろの うえに きいろい むぎの
ほが 1めん に ひろげられて まぶしいよな なつの
ひに かがやいて いる しょいちの うちの ひとたちに
てつだいも まじって 78にんの おとこや おんなが
むかいあって かたあしを ふみだし かけごえを あわせ
ながら ばたんばたと からざおで むぎを うって
いる のぎが とぶ ほが はねる ふりあげた
ぼーの さきが つよい にっこーに きらりきらりと ひかる
あかい たすきを かけた おんなたちが よい こえて
うたを うたうと ひょきんな ごへいぢーさんが とき
どき へんな かけごえをして みなを わらわせる ぶん
けの きんじおちさんわ ぐんたいがえりの たくましい
かいなで すとんすんと うちおろす おとも おんなも
ひたいの あせを ほこりだらけの かいなで ふきながら
にぎやかに うちつづける
ひわ かんかんと てっている にわの すみこわ ぼー

せんかが まっかに さいて いる にわとりが むぎの
こぼれを くいに きてわ おわれて にげて ゆく
だい15 ぐんかんせいかつの あさ
ひがしの そらが あかるくなると いままで ぐん
コーンコーの やみに つつまれて いた ぐんかんの そーたひな
すがたが だんだんに あらわれて くる かんきよー
にわ とーちよくしょーコーの すがたが みえ その そば
にわ ぼーえんきよーを もった しんごーべいが とーくを
みはっている げんもん にわ じゅーを てにした ばん
べいが ちかくを けいけいしている せんすーひやくにん
の じょーいんわ いまも なお やすらかに ねむりを つづけ
ている かんないわ しんざんの よーな しづかさで
ある
ひとの かおが やっと みわけられるよーになったころ
じしょーばんべいが ことごとと かんきよーの したえ
きて 「そーいん おこし 5ぶんまえ」と とーちよく しょー



こーに ほーこくする ぐんかんの きしょーじかんわ なつ
わ 5じ ふゆわ 6じで ある まもなく かん
ばん しかんや でんれいんが おきて くる ふくちよー
も はや じょーかんばんに あらわれて きょーの てんきわ
どーかと そらを なかめる

やかて ごぜん5じの かねが なんと とー
ちよく しょーこーが げんきの よい こえで ごーれい
を かける

「そーいん おこし」

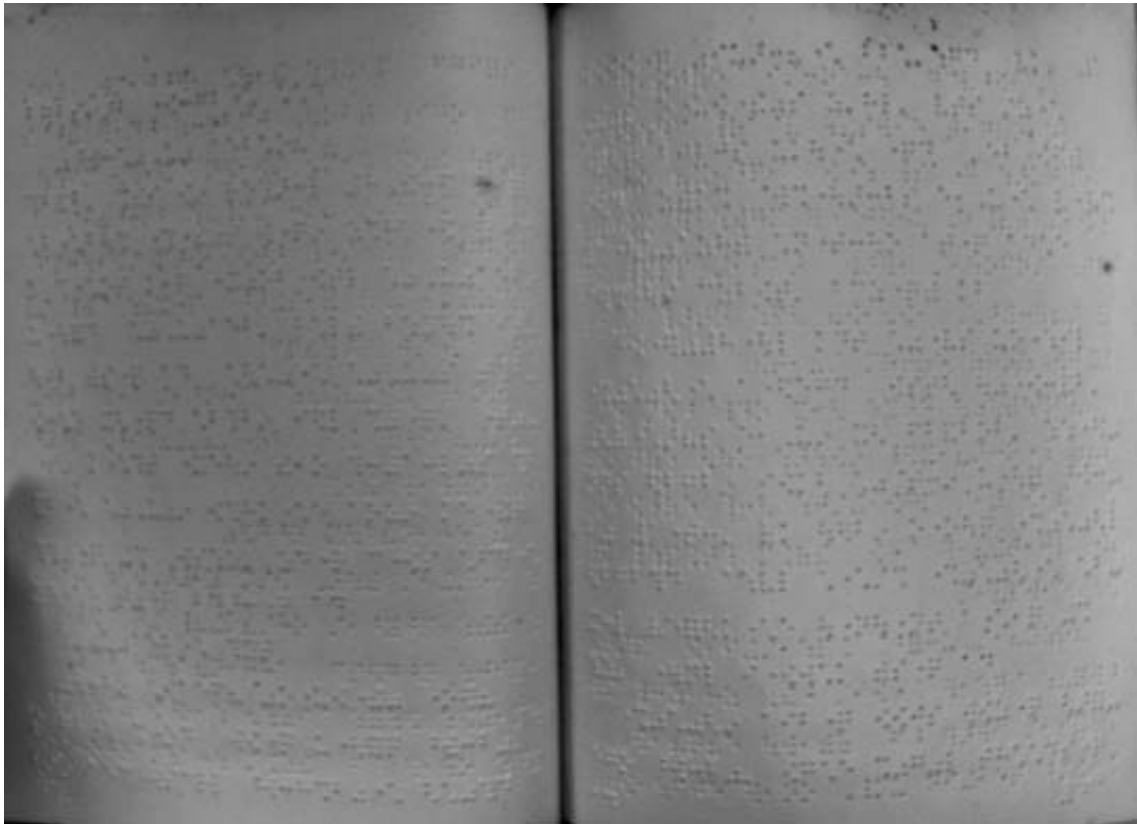
この ごーれいで あさの しづかさが たちまち やぶ
られ きしょーらっぱわ いさましく ひびき でんれいん
わ ごーてきを ふきながら 「そーいんおこし」と よんで
つりどこの あいだを めって ゆく すると じょーいんわ
1せいに とびおきて てばやく つりどこを くくる
これから ごーれいが あめの よーに くだる それに
つれて つりどこわ ただしく 1ていの ばしょに

おさめられる すべての まどや ていりぐちわ ひらか
れる これらの しごとわ りくじょーの いえで まいあさ
おきると まづ やぐを かたづけ あまどを くるのと
かわりわ ないが せんすーひやくにんの じょーいんが
ごーれいに したがって きりつただしく かつどーする
そのさまわ いかにも めざましい すーぶんの うちに かん
ないわ すっかり せいとんする

そこで 5ぶんかんの きゅーれいが あって じょー
かんばんあらいと なる じょーかんばんあらいわ すいへい
の うけもちで まづ

「りょーげんちよく せいゆつ」

の らっぱが ひときわ たかく ひびきわたると はだし
の ままの すいへいが こーかんばんに はせ あつまって
ずらりと せいゆつする りょーげんちよくと いうのわ
とくべつ つとめの あるものを のぞいた ほかの すい
へいの ことである まもなく とーちよくしょーこーから



いせいの よい ごーれいが かる

「じょーかんぱん あらいかた」

すいへいゆ くもの こを ちらすよーに 8ぼーえ ちって
かいがいしく すぼんと そでを まくりあげ みがる
な すかたと なって ぶんたいごとに かんぱんあらいを
はじめる かんぱんあらいゆ いかにも いさましく おも
しろい もので ある かしかんが かんぱんの とすい
こーから ぶきでる かいすいを おけに くんでわ どん
どん ながすと ぶらしを もった すー10にんの すい
へいが かんぱんを こすりながら あたまを ならべて
すすんで ゆく そのさまわ まるで うごの かえるが
むらがり とんで いるよーで ある

かんぱんあらいが すむと

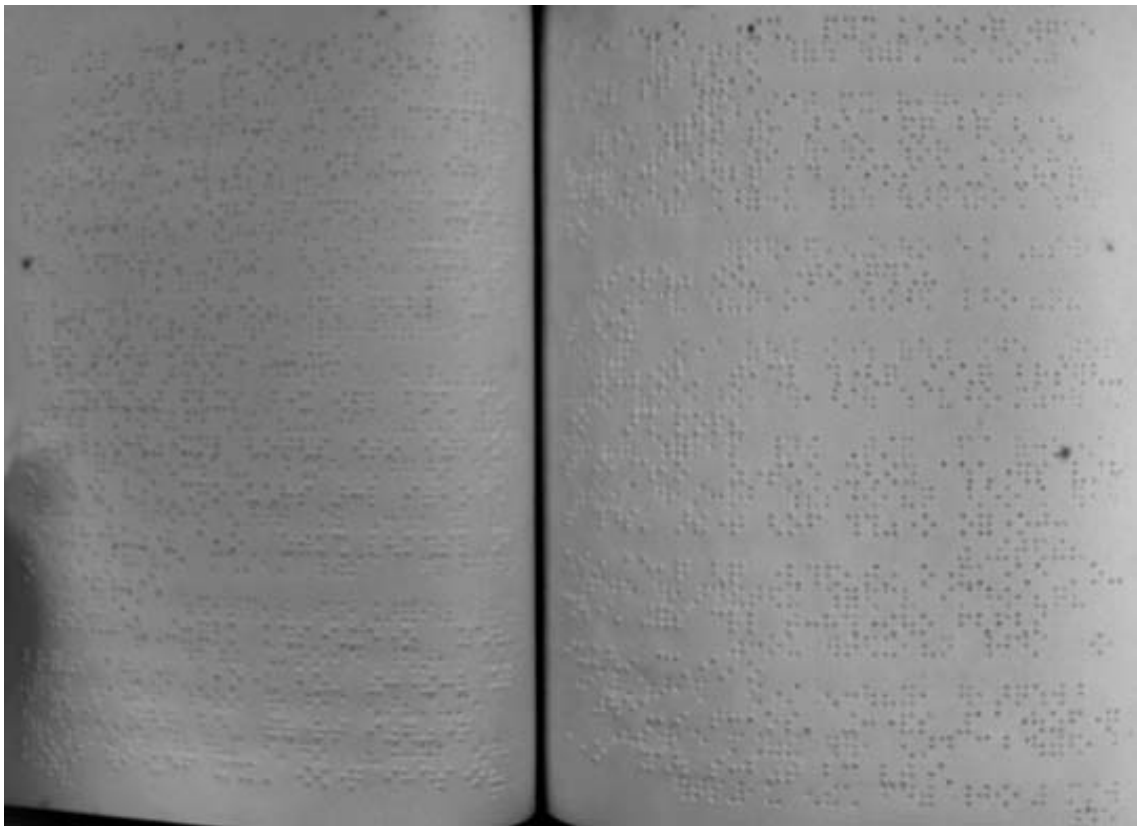
「そーいん かおあらえ」 「たばこぼん だせ」

の れいが くだる そこで はじめて じょーいんわ
かおを あらう そのうちに じょーりくいんが きかんする

そここで 「おはよー」が いいかわされる ひなわ 1
ぼんの たばこぼんの まわりにわ ひとの やまが
できて いろいろのはなしが できる わらいごえも
おこる まもなく しょくじよーいの らっぱが ひびく
1じかんあまりも かつどーした あとで あるから
しょくじの うまいことわ いうまでも ない

ごぜん8じに なると かんぴの はたざおに
ぐんかんきが あげられる このとき しんごーへいゆ
「きみがよ」の らっぱを ぶき えいへいゆ ささげ
つつの けいゆを おこない かんちよーをはじめ じょー
いん 1どーわ みな しせいを ただして ぐんかんきに
けいゆする あさひに かがやく ぐんかんきが かい
ふーに ひらめきながら しづしづと あがって ゆく
さまわ じつに おごそかな もので ある

ぐんかんきを あおいで こころの そこまで きよめ
られた じょーいんわ これから くんれんに とりかかるので



だい16 とーきょーから あおもりまで
ごご6じ おぢさんと 1しよに うえのえきから
あおもりゆきの れっしゃに のった すいぶん こんで
いたが みんなが ゆづりあって くれたので ふたりとも
こしを かけることが できた きしゃが すずむにつれ
て かんとーへいやわ だんだん よるの けしきに かわって
みなれた ところも おもしろく かんじた
「うつのみや」と えきふの よぶ こえに いか おかー
さんと につこーけんぶつに きたときの ことを おもいだし
た まだ ひが くれたばかりの よーに おもったが
もー 8じはんで あった まもなく にしなすのに つい
た おぢさんが
「このへんが ゆーめいな なすのがはらだ むかしわ
いちめんの あれので あったが いまわ ほーぼーに まち
や むらが できている もみぢと おんせんで
なだかい しおばらえ ゆくにわ ここで おりるのだ」

と おっしゃった ぼくわ ねむく なったので それから
すぐに ねて しまった

めが さめると もー よが あけて いて きしゃわ
はても なく つづいて いる あおたの なかを はして
いた

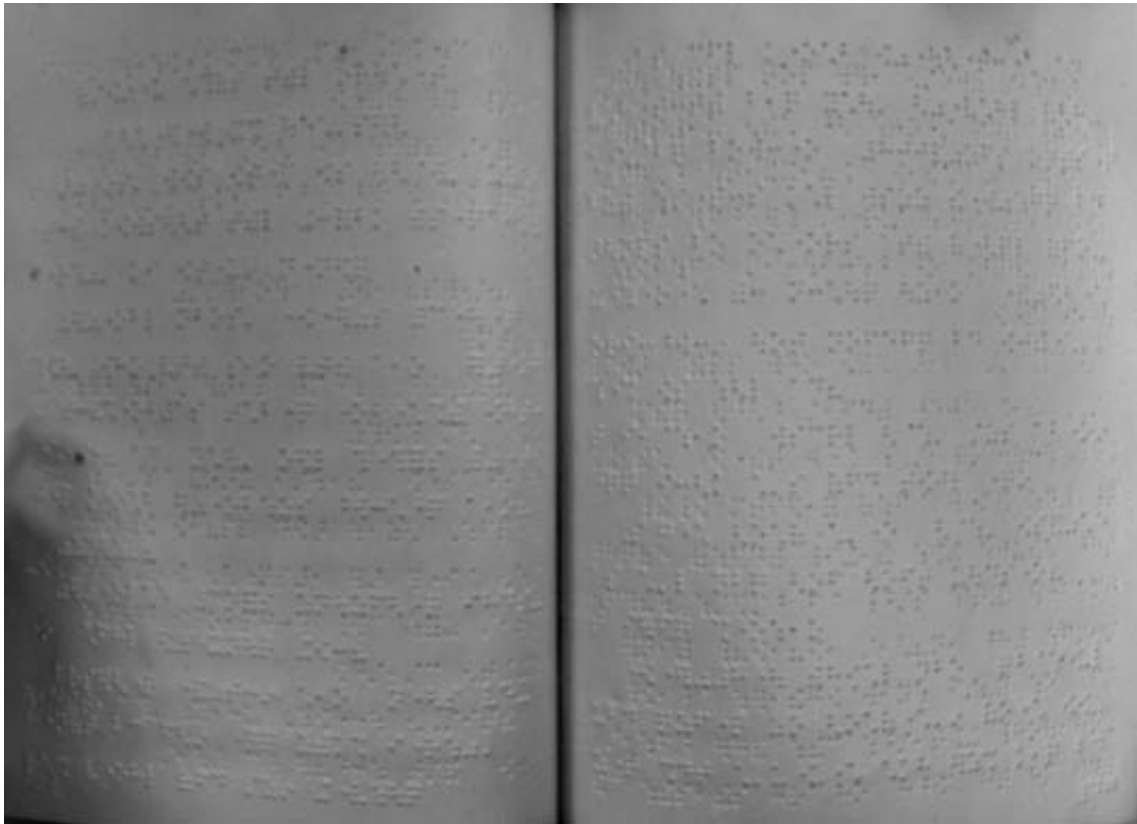
「おぢさん ここわ どこですか」

と きくと

「せんたいわ とっくに すぎて やがて いちのせき
だ よく ねたね」

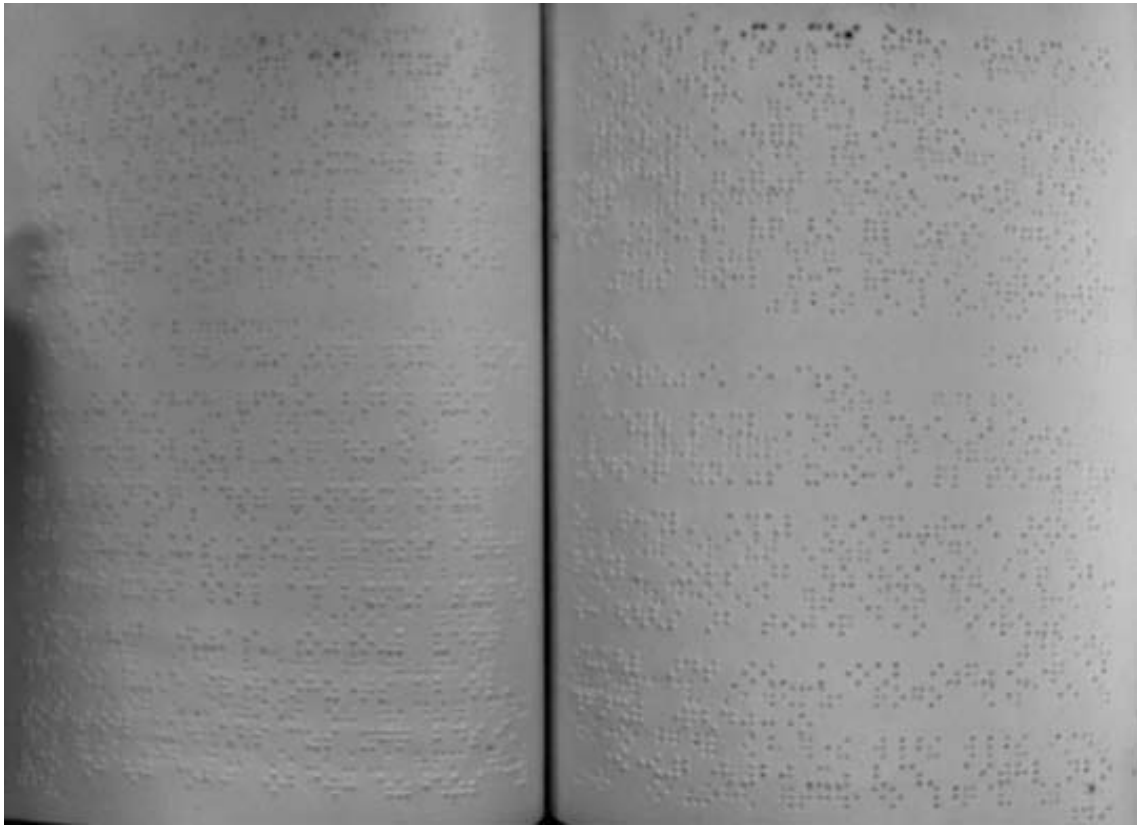
と おっしゃった まどから ふきこむ あさかぜの ひやり
と するのわ よほど きたえ すすんだ ためだろー
かおを あらって きて びすけつとを たべながら わた
くしが ゆめの うちに とーりすごした えきえきの
おはなしを うかがった

「しらかわを とーつたのわ ゆーべの 11じまえで
あった むかし のーいんと いう ひとが



みやこをば かすみと ともに たちしかど
あきかぜぞ ふく しらかわのせき
と よんだのわ そのの ことで この せきしよわ はまかい
どーの なこそそのせきと ともに ゆーめいな ものであった」
おぢさんわ なお ことばを つづけて
「せんたいに ついたのわ ごぜんの 3じで
すこしわ おりた ひとも のった ひとも あった せんたい
わ とーほくだい1の とかいで だいがくも こーとー
がっこーも ある むかしわ たけに すずめの もんどこ
ろで なたかい せんたいさまの じょーかで あった」
「まつしまわ」
「せんたいから 3つめの まつしまえきで おりるの
だ かえりに けんぶつして ゆこー」
いちのせきで べんとーを かった つぎの ひら
いづみと いう えきを でて まもなく おぢさんわ
ちかく ひだりに みえる やまを ゆびさして

「あの うえに なたかい こんじきどーが ある
ひかりどーとも いった むかしわ きんぴかりに ひかり
かがやいて いたそーだ 800ねんまえの たてもので
いまも さやどーの なかに そのまま ほぞんされて いる
よしつねの いた たかだちの あとも みぎてに みえた
はずだが もー つーかして しまった べんけい
たちおーじょーを したと つたえられて いる ころもがわわ
すぐ この さきに ある」
と おっしゃった そのうちに きしやわ やまの あいだを
でて おーきな かわの みえる ところに だ
「あれが きたかみがわだ きしやわ このへんから
あの かわに ついて きたえ きたえと はしるのだ」
と おしえて くださった
ごぜん8じ もりおかに ついた ていしやばに
はいる てまえで また きたかみがわを みたが ここ
まで くと かわはばが かなり せまく なって いる



きしゃが もりおかを でて すこし すすむと とーく
ひだりに みえる かつこーの よい やまを ゆびさして

「あれわ いわてやまだ なんぶふじと いわれる
だけ あって ちょっと かたちか にて いるね あの
ふもとに ゆめいな こいわいのーぢょーが あるのだ」
と おっしゃった

きしゃわ のを すぎ やまを こえて すすむ
がわわ まだ おりおり みえるが いよいよ せまく
なって とーとー たにかわに なって しまった やまばた
けに ひえの つくって あるのも めづらしく たにまに
しろい やまゆりの はなの まばらに みえるのも おもしろい
りくちゅーと むつとの さかいにある いくつかの とんねるを
くると ひろい げんやが だんだんに ひらけて
くる この へんから のへぢあたりまでの あいだにわ
ところどころにはなしがいの うまの むれて いるのが
みえた くる しろ ちゃいる だいしよー さまざまの うま

が はやしの かげや めまの ほとりを げんきよく かけ
まわって いるさまわ じつに いさましい

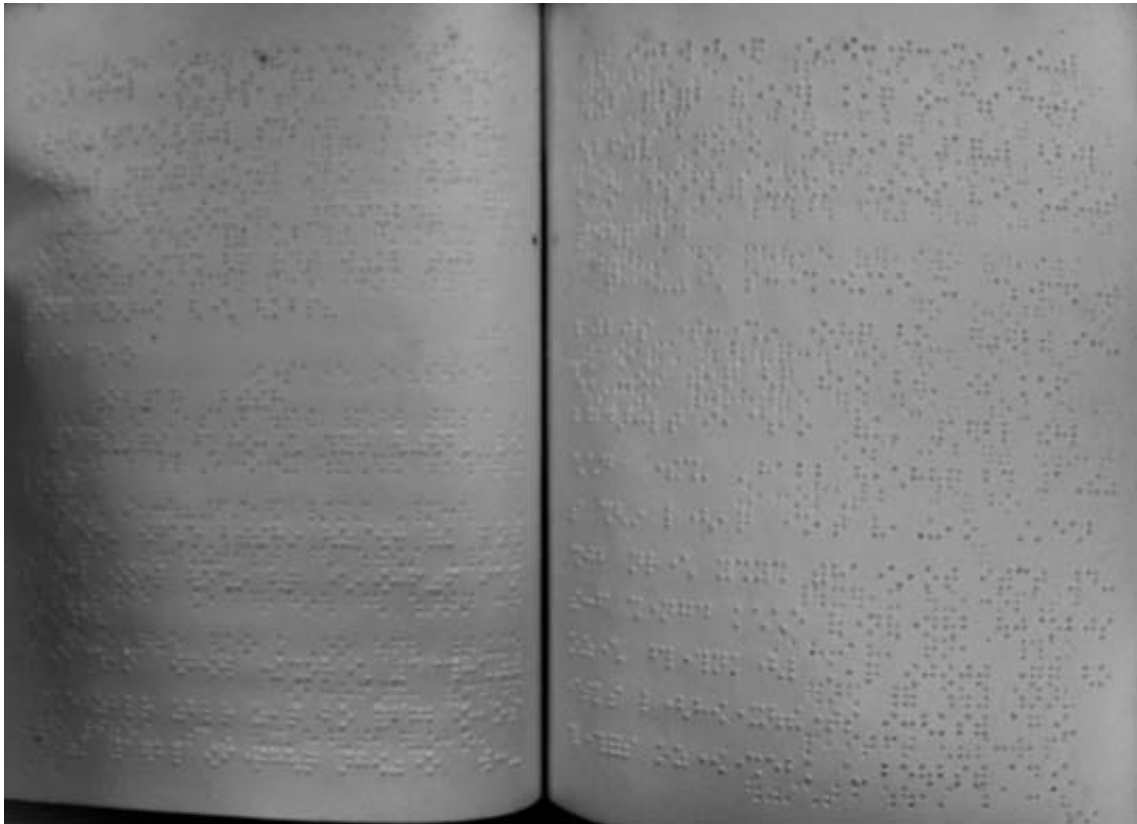
のへぢで はじめて うみが みえた あおあおとした
なみの うえに てんてんと しらほが うかんで いるのわ
のや やまばかり みえて きた めに ことさら うれしかった

「うみの むこーに とーく みえるのが しもきたはんとー
だ」

と おぢさんが おっしゃった

あさむし ちかくに なると きしゃが かいがんを
はしるので むつわんの ふーこーが てに とるよーに みえ
た とーくにわ かすかに つがるはんとーが よこたわり
ちかくにわ かたちの よい しまじまなども あって たい
そー けしきの よい ところで あった おぢさんの
おはなしに よると ここわ なたかい おんせんばで かい
すいよくも できるそーだ

ごご2じ20ぶん きしゃわ あおもりに ついた



ほっかいどーに わたる ひとわ ていしゃばに つづいた
じょーせんじょから きせんに のるので ある わたくしわ
おぢさんにつれられて やどに ついた おぢさんが

「とーきょーから ここまでわ 456まいもあるの
だが こー たやすく きて みると そんなに とーい
ところに きたよーな きが しないね」

と おっしゃった

だい17 いもほり

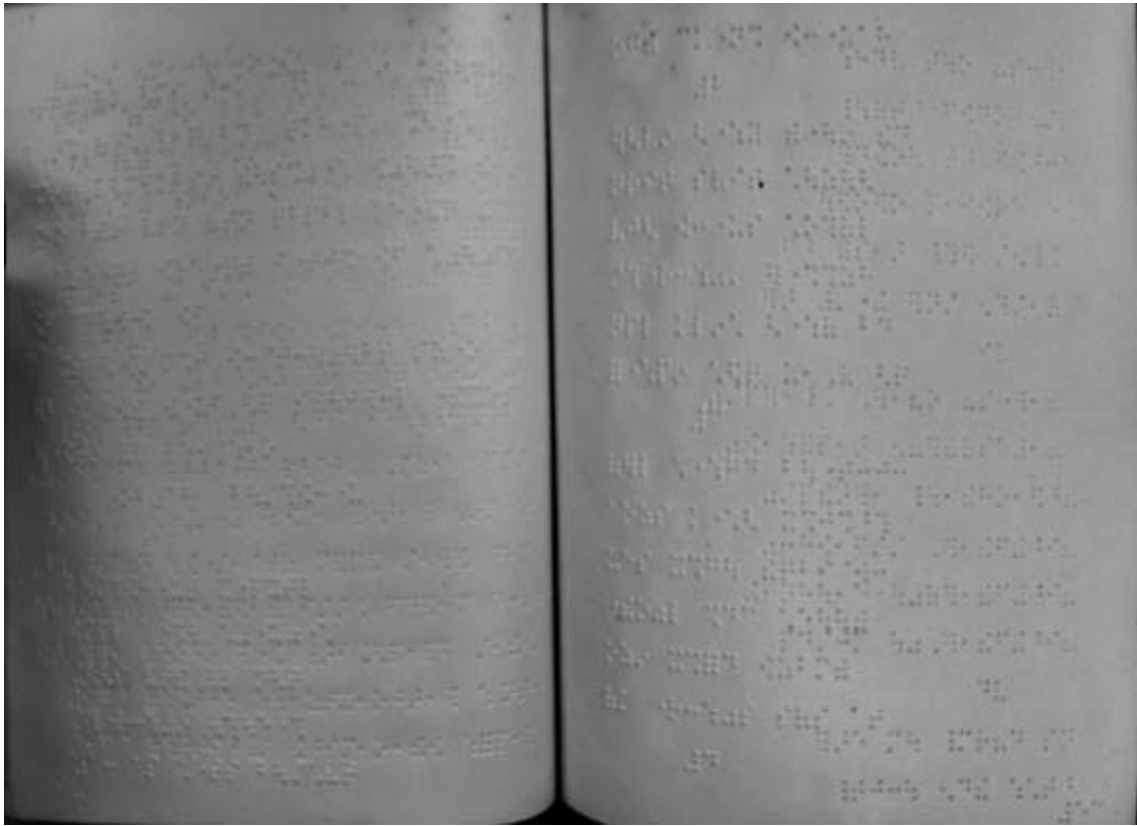
5じかんめの じゆぎょーが すむと せんせいわ にこ
にこして

「きょーわ これから いもほりを しましよー みな いつも
の よーに ここで したくをして がっこーえんえ おあつ
まりなさい」

と おっしゃった これこそ ぼくたちが 1しゅーかんも
まえから まいにち まいにち まっていた めいれいだったの
で みな 1せいに こおどりして よろこんだ そー

して おーいそぎで がっこーどーぐを かばんに
しまい めいめい みがるに なって こーしゃの うしろの
さいえんに あつまった かれかかって 1めんに きいろに
なって じゃかいもばたけを ごごの ひが かんかんと
てらしている

とーばんが のーぐごやから くわ しゃべるなど
いろいろの どーぐを だして きた せんせいも おー
きな はこを もって きて ほった いもわ この なかえ
いれるよーにと おっしゃった みなわ 1せいに ほりに
かかる ぼくわ わりあいしに しっかりしている 1ぼん
の くきを にぎって ぐっと ひっぱった やわらかい
くろい つちが むくむく もりあがったとおもうと 4
ほーえ くづれる なかから みづみづしい しろちやいろの
たまが じゆづつなぎに なって ころころと でて きた
おとなの にぎりこぶしほどの おーきなのも あれば
すずめの たまごくらいな かわいらしいのも あるが



どれも みな きぬの よーな うすい かわが はちきれそー
に よく みが いって いる となりでわ くきが
くさって ひきぬけないのを ほしのくんが こんきよく ほって
ほった いもを ひとつ ひとつ ていねいに ならべて ゆく
あちらでも こちらでも おどろく こえ かんしんする
こえ うれしそーな こえ
ふと きが つくと こーちょーせんせいと やまだ せん
せいが はこの そばえ きて おもしろそーに ぼくらの
しごとを みて いらっしやった

だい18 いしやすこーば

1

いしやすこーばと ふでふとに
こやねに あげし かんばんが
ゆききの ひとの めに つきて
やすぢーさんを しるしらず
「あー あの かどの いしやか」と

たれも うなづく こーばあり

2

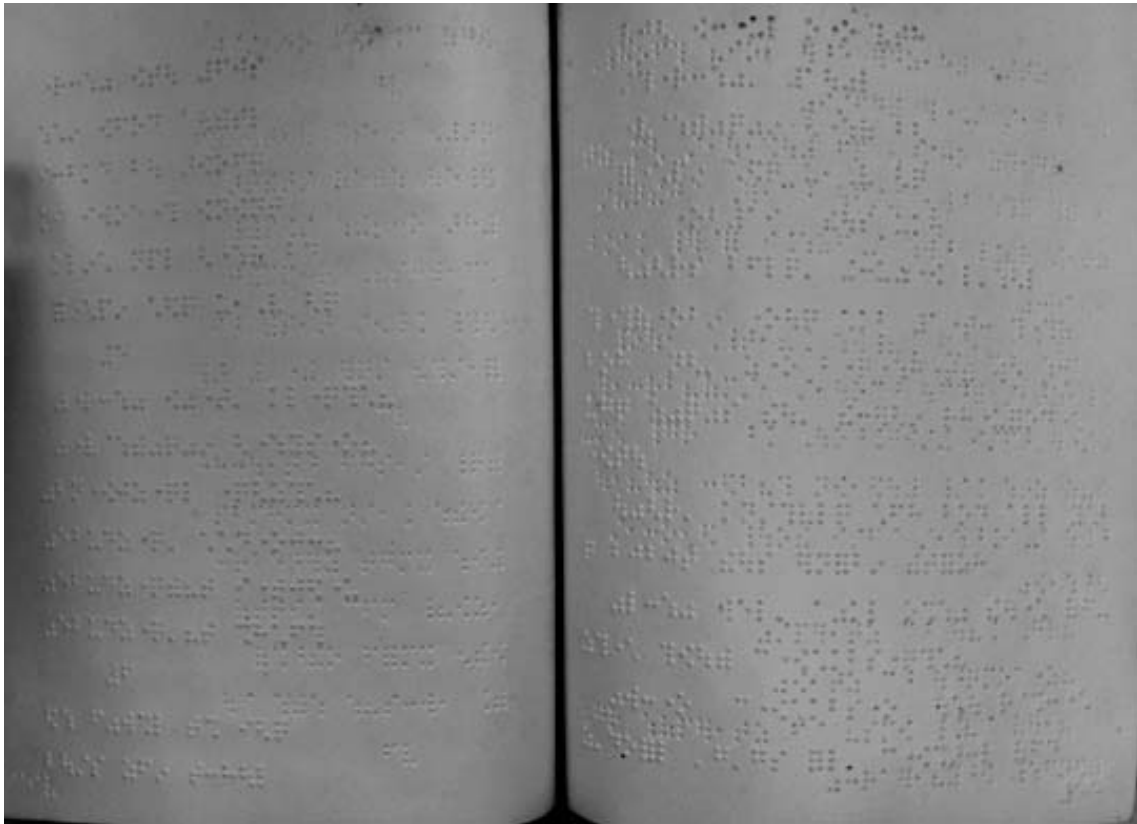
せきひを きざむ もじを ほる
つちおと のみおと かしましき
ひろき こーばの かたすみに
やすぢーさんわ せぐまり

つねに なにをか きざみ いる
めがねを かけて はっぴ きて

3

みせに かざれる いしどーろー
あたまの ながき ふくろくじゅ
はらの ふくれし ほていおしよー
ぼたんに くるう からししも
たまを ふくめる こまいぬも
みな ぢーさんの のみの あと

4



ぢーさん ことし60の
さかを こえたる あしもとに
おーいなる いし よこたえて
なお おこたらず こつこつと
なにをかつねに きざみ いる
めがねを かけて はっぴ きて

5

「ぢーさん こんどわ なにですか」
「びしゃもんてんを きざむのだ」
「いつごろまでに できますか」
「らいはるまでわ かかるだろー」
「らいはるまでも」と おどろけば
「らいはるまでわ」と くりかえす

6

けさ えんそくに とく おきて
いしやの まえを とーりにしに

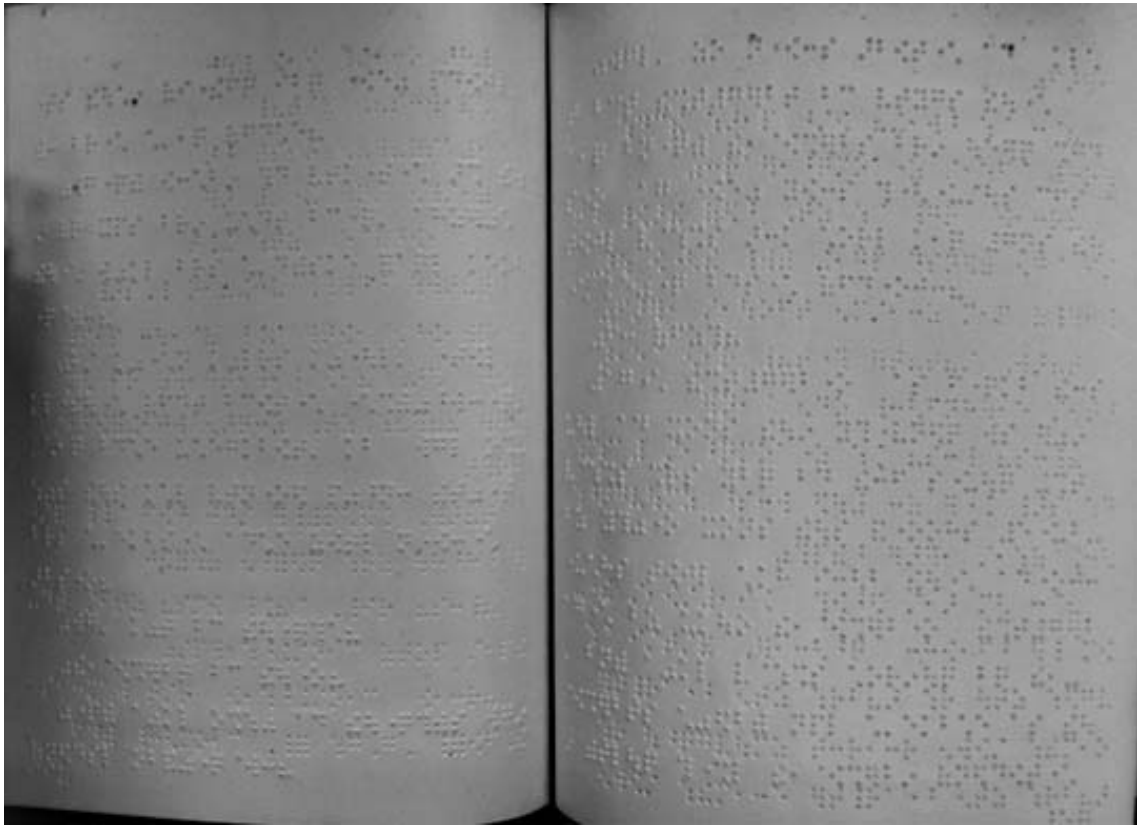
ひろき こーばに ただ ひとり
やすぢーさんわ 1しんに
びしゃもんてんを きざみ いき
めがねを かけて はっぴ きて
だい19 ほしの はなし

しんきちの いえにてわ ゆーはんご にわさきに
すずみだいを だして かない 1どー すずみ
いたり つきわ まだ いでざれども そら よく
はれて まんてんの ほしわ ほーせきを ちりばめたるが
ごとし

しんきちわ なつやすみにて かえり いたる あこに むかい
て いるいと ほしの せつめいを もとめたり

「にーさん そらにわ あんなに たくさん ほしが みえ
ますが すこしも うごかないのですか」

「そーだ うごかないのだ しかし ちきゅーが
まわるために われわれの めにわ うごくよーに みえる



どの ほしかを みおぼえて おいて ごらん ねるころにわ
もー いちが かわって みえるから」

「それでも こーかいをする ひとなどが よく ほし
をみて ふねの いちをはかると いうのでわ ありません
か
ほしが そんなに いちの かわるものなら めあてに ならない
でしょー」

「いや なんがつ なんにちの なんじにわ どこに
なにほしが みえると いうことが がくもんじょーでわ
わかって いるから はかられないことわ ない それに たく
さんの ほしの なかに ひとつだけ ねんぢゅー ほとんど
いちの かわらないのが あるから まことに つごーが
よいのだ」

「それわ なんと いう ほしですか」

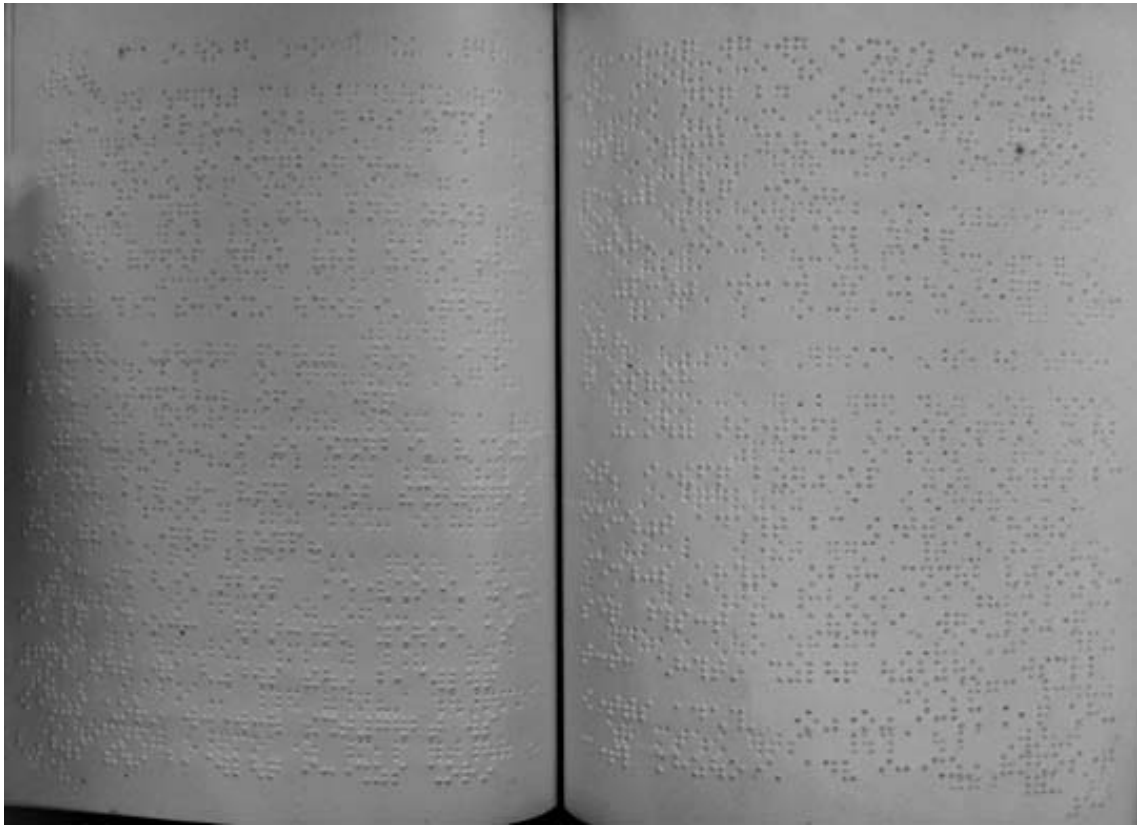
「ほっきょくせいと いう ほしだ」

「でも あんなに たくさん ある ほしですもの それを
みつけるのに たいへんでしょー」

「それにわ また つごーの よいことがある なにか
と いうと ほくと7せいと いう ひとむれの ほしが
あって いつでも ほっきょくせいの いちを しらせて くれる
のだ あれ ごらん むこーの すぎばやし の うえの
ところに ひしゃくの よーな かたちになつて 7つの ほし
が ならんで いるのが みえるだろー」

「えー みえます」

「あれが ほくと7せいだ あの えでない ほーの
はしにある ふたつの ほしを むすびつけて その せんを
ひしゃくの くちの むいて いる ほーえ のばして ゆくと
いま むすんだ ふたつの ほしの へだたりの 5ばい
ばかりの ところに かなり おーきい ほしが あるだろー
あれが いま はなした ほっきょくせいだ ほくと7せい
わ いつも あんなに ひしゃくの かたちをして いて ほっ
きょくせいとの かんけいも つねに かわらないから あの ほし
を もとにして すぐに ほっきょくせいを みつけることが



できる」

「あー あの いちばん たかい すぎの まうえの
ところに あるのが ほっきょくせいでしょー」

「そーだ それに あの ほしわ いつも まきたに いる
から あれを みつけさえ すれば みちに まよった とき
などにも すぐ ほーがくを することが できる」

しんきちわ かんしんして ねっしんに そらを あおぎ
いしが おどろけるよーに こえを あげて

「にーさん にーさん あの ほっきょくせいが ひしゃくの
えの さきになって もー ひとつ ちーさい ほくと7せいの
よーな ものが できて いますね」

「あー よく きが ついたね ならびかたが まっ
たく にて いるだろー せいよーでわ むかしから あの
7つの ほしと その きんじょの ほしを いっしょにして
こくまの かたちを そーぞーし ほくと7せいと その
きんじょの ほしを いっしょにして おーくまの かたちを

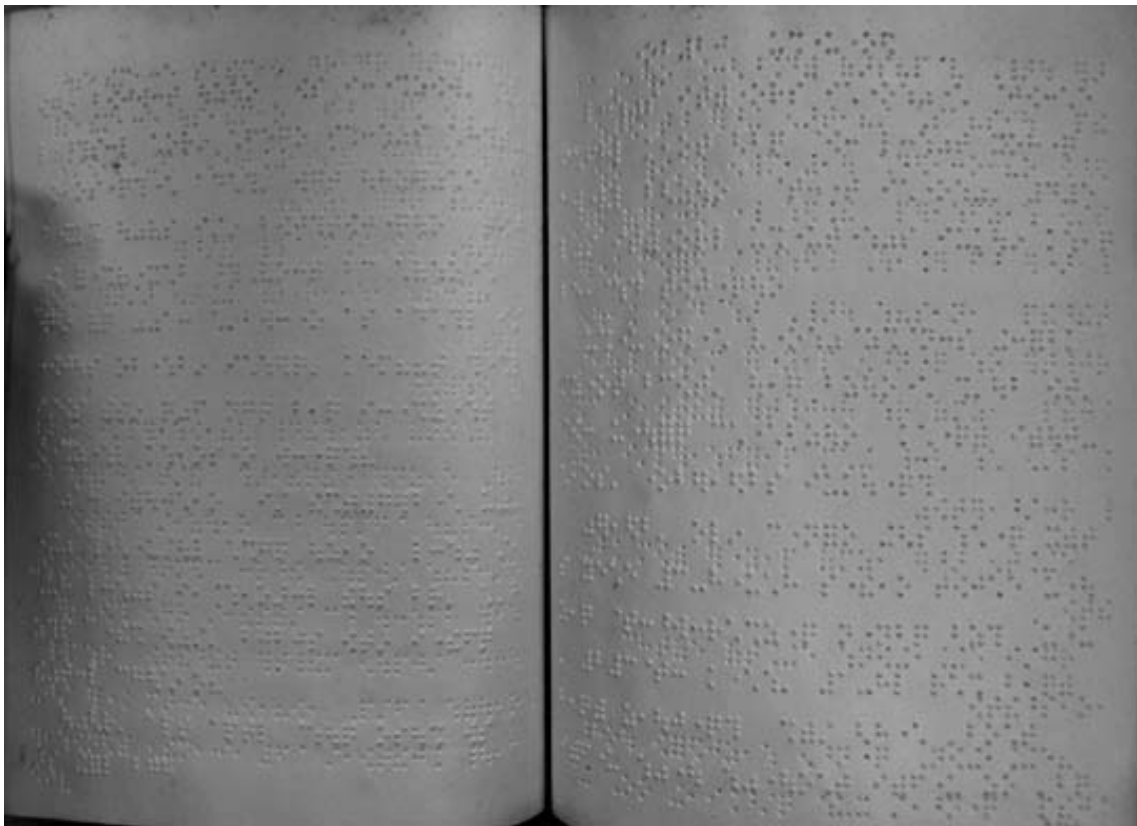
そーぞーして それぞれ こくまざ おーくまざと
いう なを つけて いる こくまざと おーくまざに
ついて おもしろい むかしばなしが あるはずだから
ねーさんに きいて ござん」

しんきちわ かたわらなる あねに むかいて

「ねーさん どーぞ その はなしを きかせて くだ
さい」

と たのみたり

「わたしも よほどまえに よんだのですから くわしい
ことわ おぼえて いませんかね むかし かりすとと という
おかーさんと あるかすと という こどもが ありました
おかーさんの かりすとわ たいそー うつくしい ひどだった
ので じゅのーと という かみさまが それを ねたんで
とーとー かりすとを くまにして しまいました そのうちに
こどもの あるかすわ だんだん おーきく なって かり
うどに なりましたが あるひ おーくまを みつけたので



それを いころそーと しました この おーくまこそわ さきに じゅのーに かたちを かえられた おかーさんの かりすど だったのですが あるかすわ それと しりませんから あぶなく しんみの おやを いころすところでした ところが めぐみぶかい じゅびたーと いう かみさまが それを みて 『あー かゆいそーだ あの あるかすに おや ごろしの たいざいを おかさせてわ ならぬ』と すぐにおやこの ものを てんえ つれて いって おーくまざと ころまざに なさったのだ そーです」

「あー おもしろかった おや ほくと7せいが はんぶん すぎばやしに かくれて しまった にーさん やっぱりにーさんの おっしゃったよーに ほしの いちわ かわりますね ほく こんやわ いろいろの ことを おぼえて ほんとーに うれしかった」

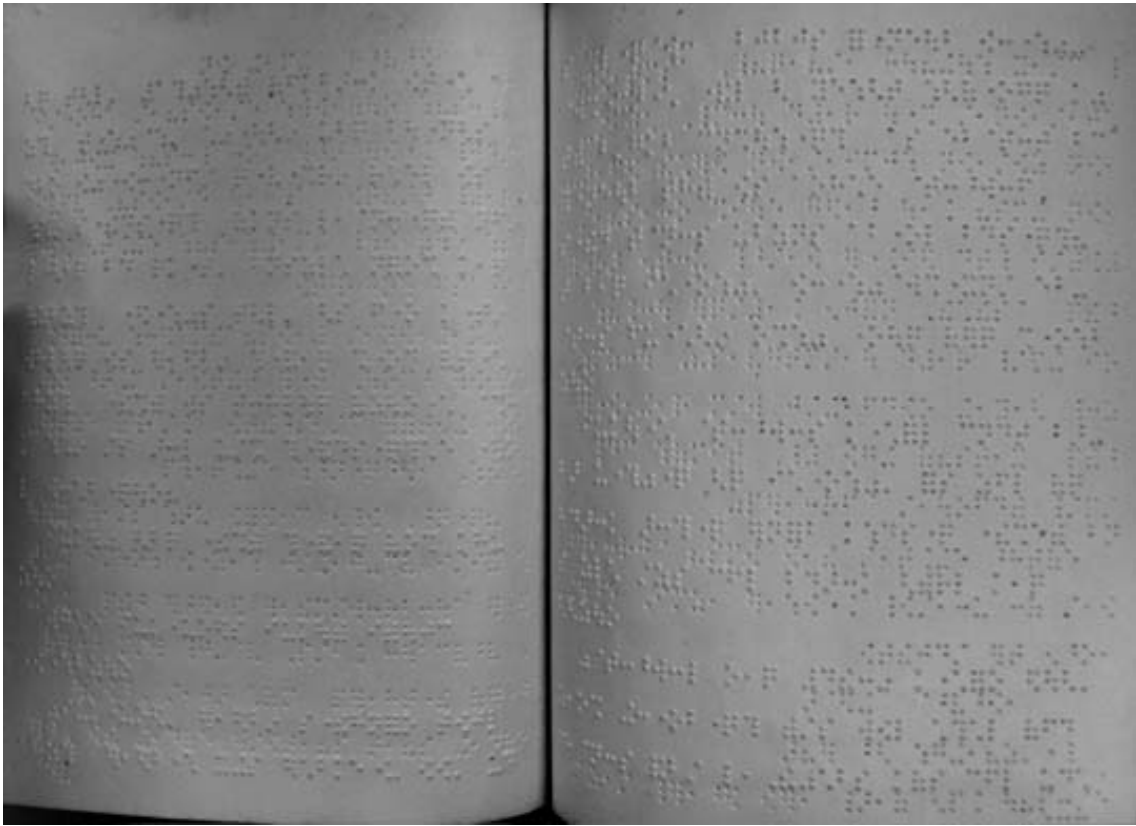
しんきちわ あにと あねとに しゃして たのしく そのよの ゆめに いれり

だい20 はくばだけ

にーさんの おともだちの おかださんが りよこーから おかえりに なったと きいて きよー にーさんと ふたりで あそびに いきました ちょーど おかださんわ 4・5 にんの おともだちに はくぼとざんの おはなしを なさって いらっしゃる ところでした

はくばだけが ひださんみやくちゅーの ゆーめいな やまだと いうことわ して いましたが くわしい ことわ きよー はじめて うかがいました なかでも おもしろ かったのわ だいせつれいの おはなしです

「せつれいわ たにを うづめた ゆきの さかで ふもとの むらから 3りばかり のぼった ところから はじまって ちょーしょーちかくまで つづいて います はばわ 2・3ちょー ながさわ 1りに ちかく いても いても まっしろです くもや きりが わいたかとおもえば さんじ さんじたかとおもえば また わいて



きて ときわ 1すんさきも みえないはな ことが あり
ます とざんしゃわ かんじきを はいて いしづきの
つた こんごつえや とびぐちを ちからに この
さかを のぼるのです まなつの につちゆーでも つえを
にぎっている でなぞわ いつのまにか つめたく なって
しまいます げざんの ときわ きの えだ などを
そりにして この せつ丸を すべて くださる ひとが
あります ぼくも その とりにして みましたが きゅー
な さかを やの よーに はやく すべるのですから じつ
に そーかいでした」

おはなしを きいて ぼくも すべて みたく なり
ました

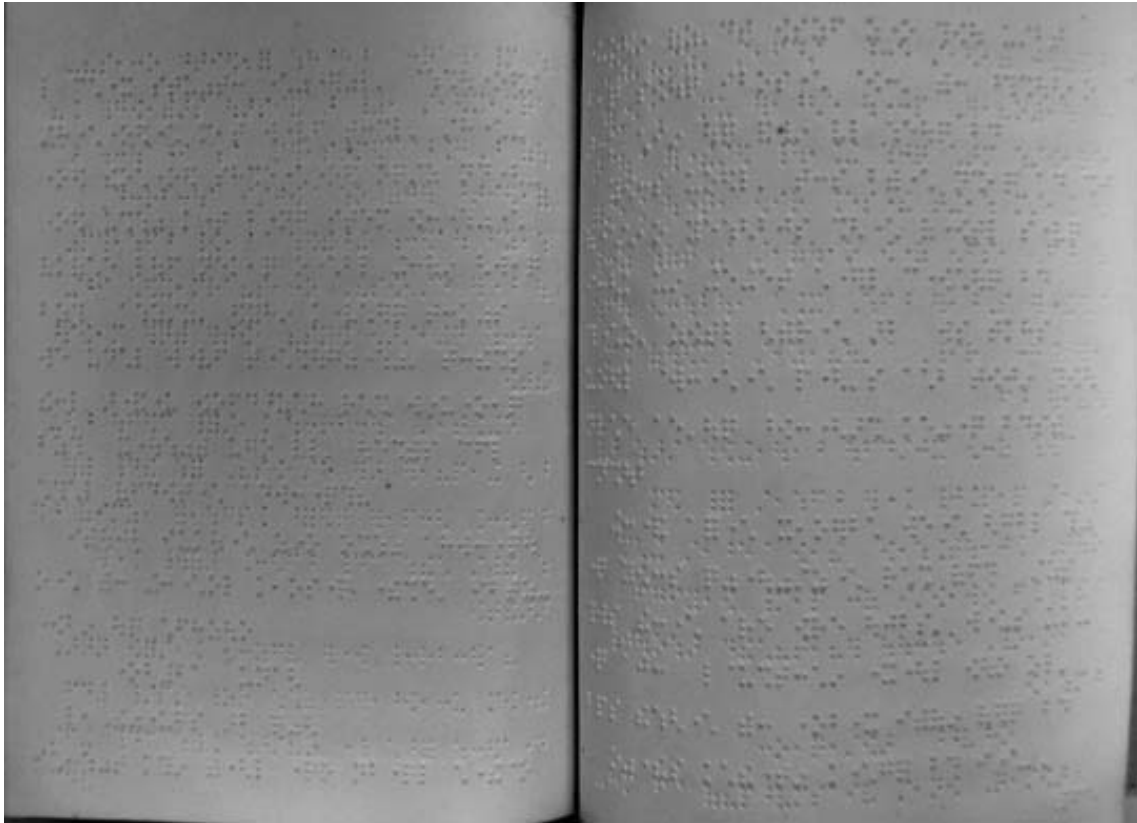
それから おはなばけの おはなしも おもしろう
ございました

「おはなばけの せつ丸を のぼりつめた ところに
あります せつ丸が ふゆの せかいならば こわはる

の くにでしょー いろいろの めづらしい こーざん
しょくぶつが べに き むらさきと さきみだれて なん
とも いぢれない うつくしさです あの らいちょーとい
う めづらしい とりも この あたりから ちょーじょーえ
のぼる とちゆーの はまつの あいだに いるのです」
と いった おかださんわ こーざんしょくぶつや らい
ちょーの えはかきを たくさん だして みせて くださ
いました

おはなしが ちょーじょーの なかめに うつると いは
いよ はずんで きて おかださんわ めの まえに みて
いるよーな よーすで せつめい なさるので ぼくらも い
つ の まにか やまの うえに いるよーな きもちに なって
きました

「ちょーじょーに たって4ほーを なかめた けしきわ
まったく ゆーたいです もやの そこに かすかに みえる
えっちゆーの へや につぼんかいの なみの うえに はるか



に うかぶ のとはんとー がんぜんにわ しゃくしだけや
やりがただけが んっと そびえ とーくにわ やりが
だけ ほたかだけ のりくらがだけ たてやま つるぎ
だけ はくさん など いづれ おとらぬ こーざんが
みなみから にしえ つらなつて たがいに ゆーしを きそつて
います あさまやまわ けむりを なびかせて とーなんの
そら はるかに そびえ とがくしれんざんわ とーほくの
ほーに よべば こたえるばかり ちかく そばだつて
います ふじさんも はれた ひにわ しらくもの うえに
かすかに みえることが あるそーです」

おもしろい おはなしが まだまだ たくさん ありそーでし
たが もー ゆーがたに なつたので ほくらわ おいとま
ごいをして かえりました

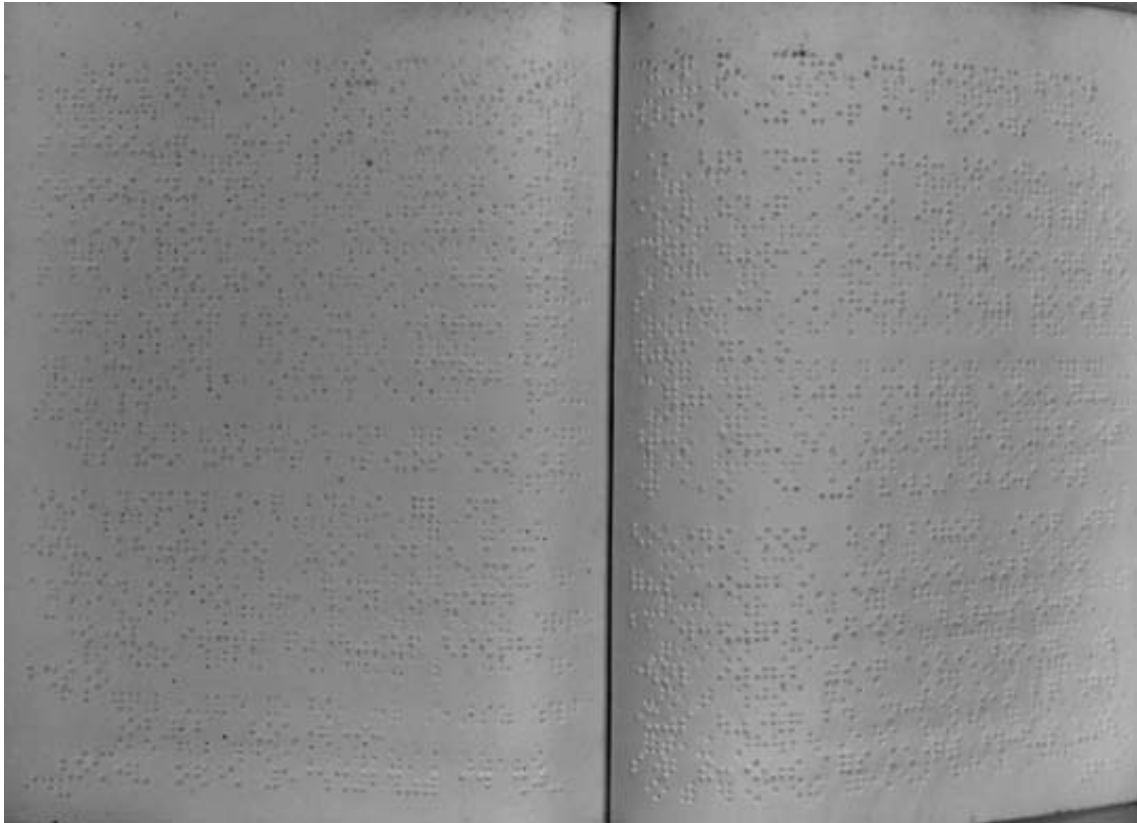
だい21 はつあき

につぼんばれの よいてんき
おかーさんと なすを もぎに でた ついでに かぼちゃ

ばたけを みまわると このまえ まだ すこし はやいと
いって のこして おいたのが きょーわ もー じゅくしきつた
よーな かおをして へそを ひに さらしている

むこーの はたけにわ とーの いもが つくつて ある くる
みがかつた むらさきいろの くきが みごとに のびて
おーきな はを ゆらゆらと かせに うごかしている
すがたわ まことに きもちが よい その となりの
はたけに しょーがが ねぎわの あかい ところを すこし
つちから あらわして ぎょーぎよく ならんで いるのも
うつくしい

ゆーべ あめが ふつたせいか そらが きれいに すん
で むこーの てんじんやまが ちかく みえる やまの
すその ほーが あちら こちら しろいかわ そばのはな
で あるー にひやくとーかを ふじに こした たにわ
いぬの ほさきが もー だいぶ おもみを みせて いる
たんぼの なかほどを なかれて いる おがわわ



いつもより みづが おーい かえるが ぼかんぼかん
と とびこんでわ すーっと およいで ゆく やがて
おもだかの くきや せりの はなどに つかまって あとあし
を ながく のばし まっさおな そらを じっと ながめ
ている ざるをもった こどもが かわしもの ほーに
あつまって さわいで いるのわ ふなや どちよーを とるの
で あるー そらにわ あかとんぼが いくつとも なく
とんで いる

うちの ほーを ふりかえると いどばたの かきの きに
かきが すずなりに なって いるのが めにつく
ことしわ なりどしなのだ まだ あおいが はやく
あまく なる たちだから もー すぐに たべられる

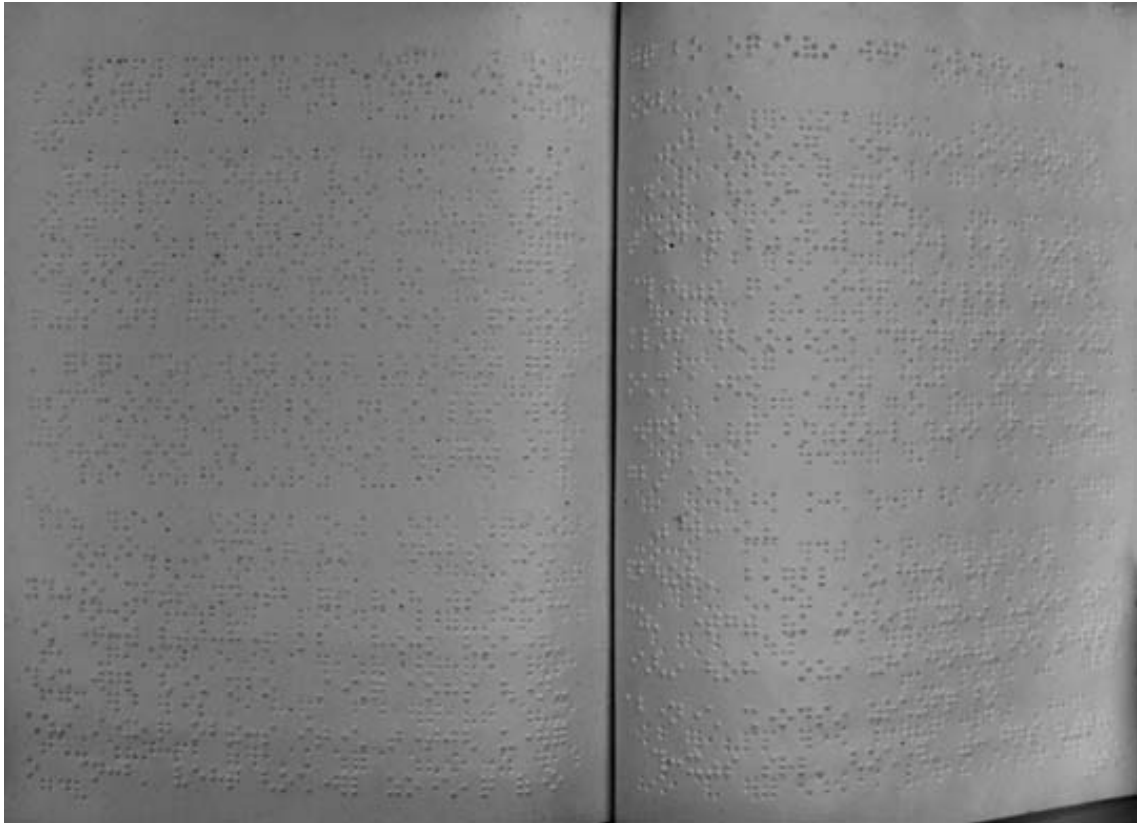
ごごにわ おとーとと てんじんやまえ きのことりに
いくのだ

だい22 きたかぜごー

きたかぜわ たけが 5しゃく2すんも ある くる

うまで けわ うるしの よーに つやつやく みるからに
つよそーな ぐんばで ある きたかぜの しゅじんわ
わかい きへいちゅーいで たいそー きたかぜを かわい
がって まるで わがこの よーに だいじにしていた
あるとし せんそーが はじまったので きたかぜも ほか
の ぐんばと おなじよーに しゅじんに したがって
せんちえ むかった

せんちでわ いろいろ つらいことも あったが せん
ちよーを かけまわるのわ きたかぜに とって ゆかいな こと
で あった らっぱの ひびきや たいほーの おとに
きたかぜの こころわ まづ いさみたつ やがて 「すず
め」の ごーれんが かかると ただ ゆかいに ただ
いっしょけんめいに かけたす せんちよーの こーれんわ
じつに おそろしい もので あったが きたかぜわ じ
ぶんの しんじて いる ちゅーいが のって いて くれる
ので ほーだんの あめの なかでも じゅーけんの はやし



のなかでもびくともせずにはさましくかつどー
した

しかしとーとーおそろしいひがきたあるあさの
ことであったひがしのそらがほんのりとしらむ
ころきたかせわほかのくんばといっしょにろえいゆ
てんとのまえにれつをただしてならんだへしたち
わめいめいうまのそばにたつてしまかまかとめい
れいゆくだるのをまっていたつきがにしのそらにう
すじろくのこりのにわあさつゆがしっとりとおい
ていた

だんだんあかるくなってきたちゆーいのかたく
むすんだくちもとするといめのひかりそのよーす
がどーもひととーりでないりこーなきたかせわ
すぐそれにきつがついたやがてあたりのしづ
かさをやぶつてたいほーのおとがとどろきはじめ
たちゆーいゆひらりときたかせにまたがってみだ

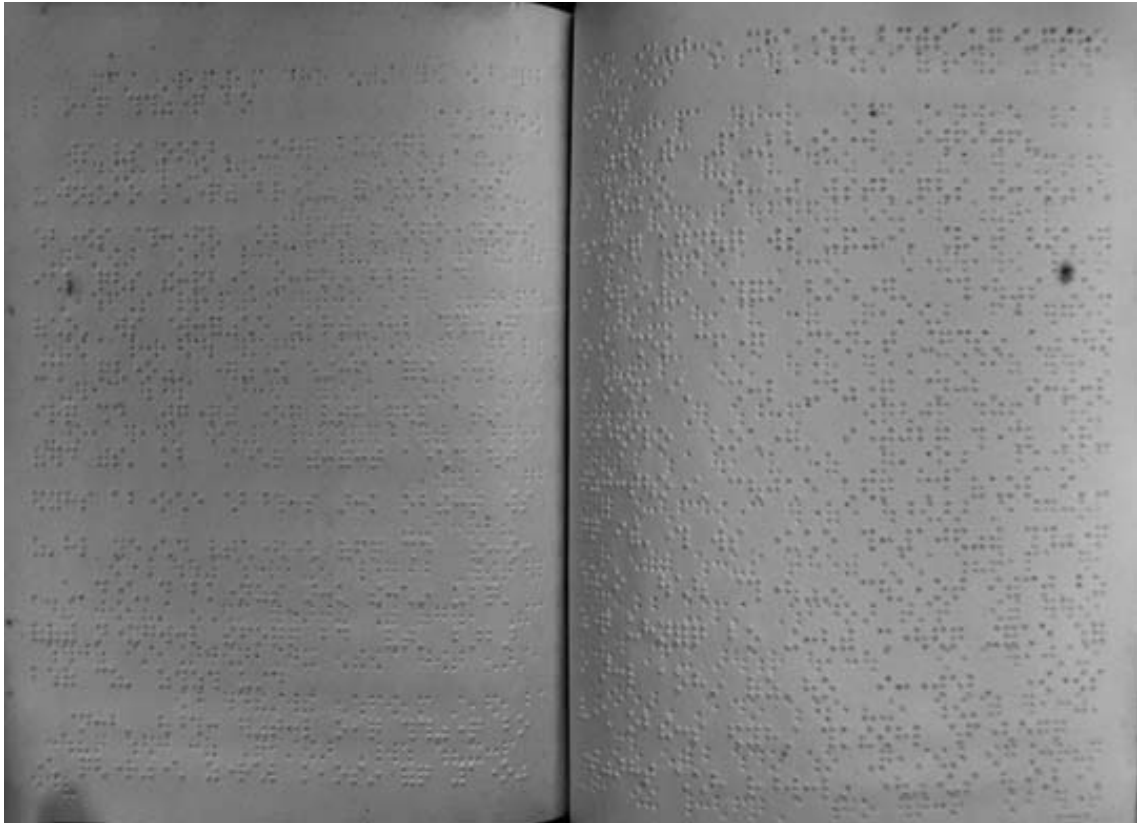
れていたたてかみをそろえくびすちをかるく
たたきながら

「おいきたかせきよーわたいぶてこたえが
あるぞしっかりたのむよ」
とまるでにんげんにいっしょにいったきたかせわ
しゆじんのてがこーしてくびすちにさわるのが
なんよりすきだったからうれしくてとくいそーにあたまを
たかくあげたやがてちゆーいゆちよとうで
ど丸をみていつものよーにすんだこえでこー
れをかけた

「じよーば」

へしたちわいっせいにばじよーのひととなった
うまわどれもみなはりきってくつわをかんたにま
えかきをしたりあたまをふりあげたりしながらのりての
あいつがくだるのをまかまえていた

すーぶんののちこわきたかせわもーれつせんとー



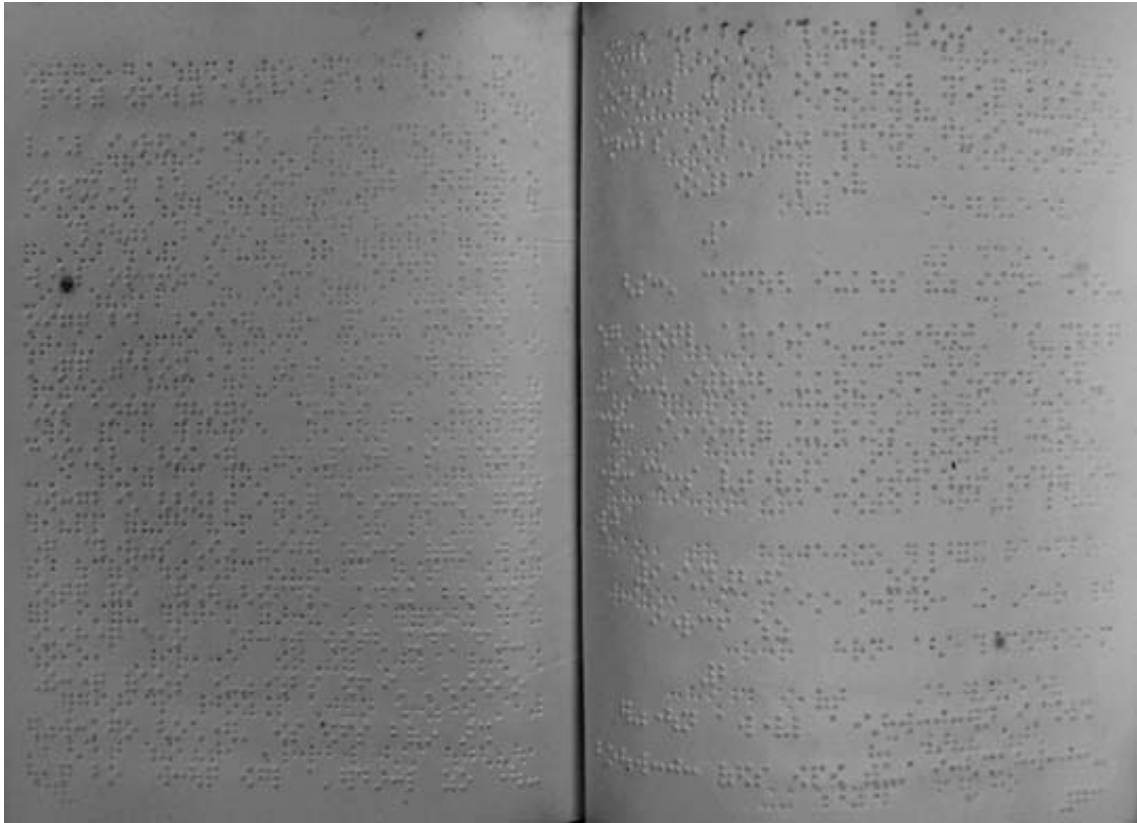
に たって すすんで いた

その ひの たたかいゆ はたして いままでになく
はげしかつた なかでも いちばん めざましかつたのわ
さいごの しゅーげき たに ひとつ へだてた むこーの
おかに てきの ほーへいが ほーれつを しいて いる
みかたわ その しょーめんから まいちもんじに すすんで
ゆく てきだんわ ぜんご さゆーえ あめの よーに
おちて くる それでも だれ ひとり てきに あとを
みせる ものわ ない やがて もーもーと あがる しろ
けむりの あいだから かいじゆーの よーな たいほーと その
まわりに むらがる ひとかげが みえて くる ほーこー
わ かわるがわる いなづまの よーな ほーかを はいてわ
みみも つぶれそーに ほえたてて いる ひとわ いよいよ
いさみ うまわ ますます はやる

ちゆーいゆ しじゆー せんとーに たって すすんで いた
が てきちんが まちかになつたのを みて 1だん

たかく ぐんとーを ふりかざし いつもの はればれとした
こえて

「そら もー 1いきだぞ おそえおそえ」
と さけんだ ちょーど そのとき てきの ほーだんが
ちかくで はれつして その はへんが ぴゅっと きたかぜ
の たてがみを かすめた きたかぜわ しゆじんの から
だが くの うえで ぐらつと ゆれるのを かんじた
と たづなが きゆーに ゆるんで ちゆーいゆ こーほーに
ころげおちた きたかぜわ おどろいて すぐに たち
とまるーとしたが うしろから かけて くる みかたにおわ
れて おもわず その ばから すー10けんも すすんで
しまった しかし しゆじんを うしなつたと おもつと いま
まで はりつめて いた ゆーきも くじけて ゆめから さめ
た よーに あたりを みまわした おーぞらにわ ごごの
ひが たいほーの けむりや すなほこりに さえぎられて
どんよりと かかり ちじょーにわ じんばの しがいが



あちらにも こちらにも かなりあっている きたかぜわ
にわかにおぢけがついた そーして しゅじんが
こいしくなつて いま きた ほーえ 1さんに かけもどつた
しゅじんの すかたを みつけると しづかに その
そばに たちどまつた ちゅーいわ あおのけに なつて
たおれて いる きたかぜわ もー 1ど はなさきを
なでて もらいたく なつて そつと かおを しゅじんの
かたの あたりえ すりよせた ちゅーいわ てわ じつとして
うごかない きたかぜわ もー 1ど あの いさましい
ごーれんが ききたいと おもつて うつたえるよーな めつき
で しゅじんの かおを みおろし さゆーの みみを そば
だてて みた しかし きこえるのわ かすかな いきづかい
ばかりで あつた ちよーど そのとき はるか えん
ぼーで みかたの ばんざいの こえが わきおこつた
せんそーなれた きたかぜわ この こえの いみを よく
して いた そーして これに あわせるよーに また じ

ぶんの さいあいの しゅじんに みかたの しょーりを
かたるよーに 1こえ たかく てんに むかつて いなないた
ちゅーいわ かおにわ まんぞくらしい えみが うかんだ
だい23 てがみ

1

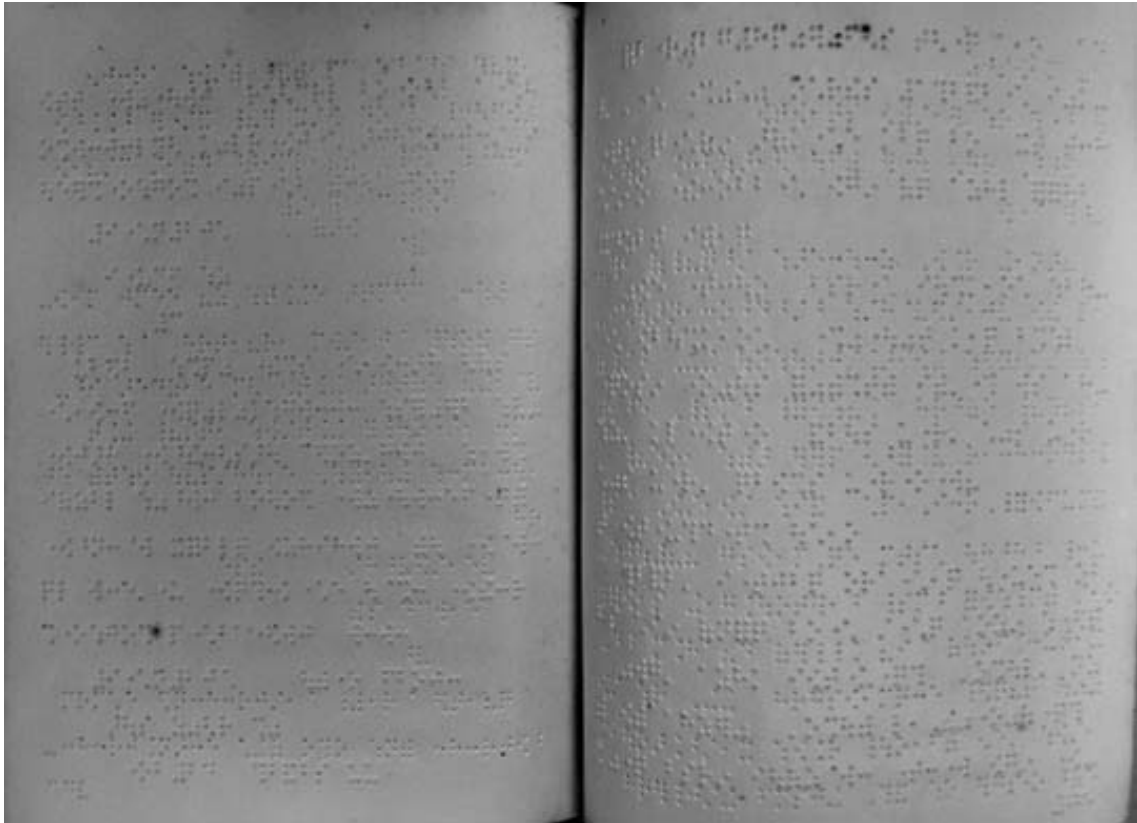
きのーわ うつくしき おはなしの ほん おおくり くだ
され まことに ありがたく ぞんじそろ あの うちにて
1ばん おもしろき はなしを よく おぼえおき らい
しゅー がつこーにて はなしかたの じかんにはなし
どーきゆーの ひとびとを おどろかさんと たのしみ おり
そろ

9がつ20か まさお

おぢうえ さま

2

せんじつ あそびに あがりそーろーせつ おやくそく
いたしそーろー けけの こねこ もはや おーきくなりそーろー



ことと そんじそろ ちかきうち に いただきに あがり
たくそーろーにつき なんにちごろが よろしくそーろーや お
しらせくだされたく おんねがい もーしあげそろ

9がつ20か みよこ

おばうえ さま

3

はいいれい さくねん ぼくの がっこーより きみの
がっこーえ ごてんにんなされそーろー さのせんせい さき
ごろより ごびよーきのよし うけたまわりそろ さっそく
おみまいに さんじよー いたしたく そんじそーらえども
ごちゅーしょ ふめいにて こまりおりそろ もし ごしょー
ちに そーらわば ごてすーながら しきゅー ごほーち
くだされたく ねがいあげそろ そーそー

9がつ20か しもだ えいたろー

よしの まんきち くん

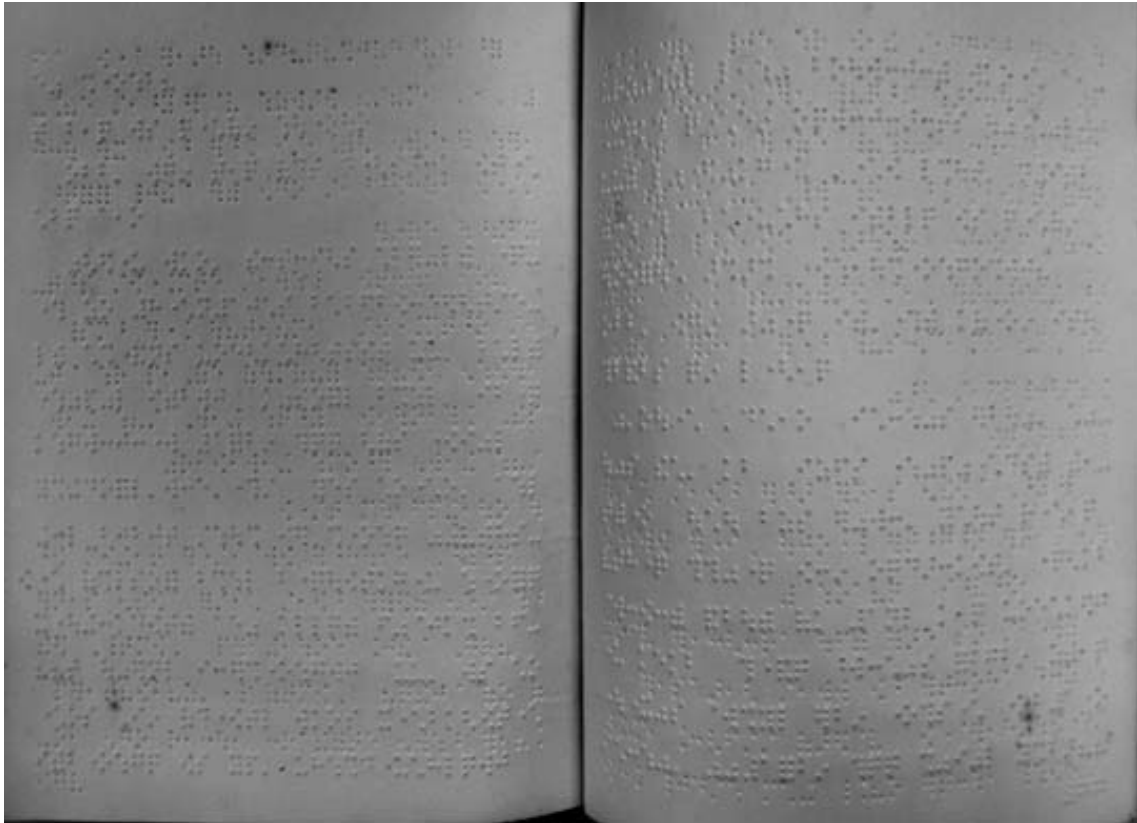
だい24 すいいれの はは

めいぢ278ねんせんえきの ときで あった ある
ひ わが ぐんかん たかちほの 1すいいれが おんな
での てがみを よみながら ないて いた ふと とーり
かかった ぼーたいいれが これを みて あまりに めめしい
ふるまいと おもって

「こら どーした いのちが おしくなったか さいし
が こいしくなったか ぐんじんとなつて いくさに
でたのを だんしの めんもくとも おもわず その あり
さまわ なにごとだ へいしのはぢわ かんのはぢ
かんの はぢわ ていこくの はぢだぞ」
と ことばするどく しかった

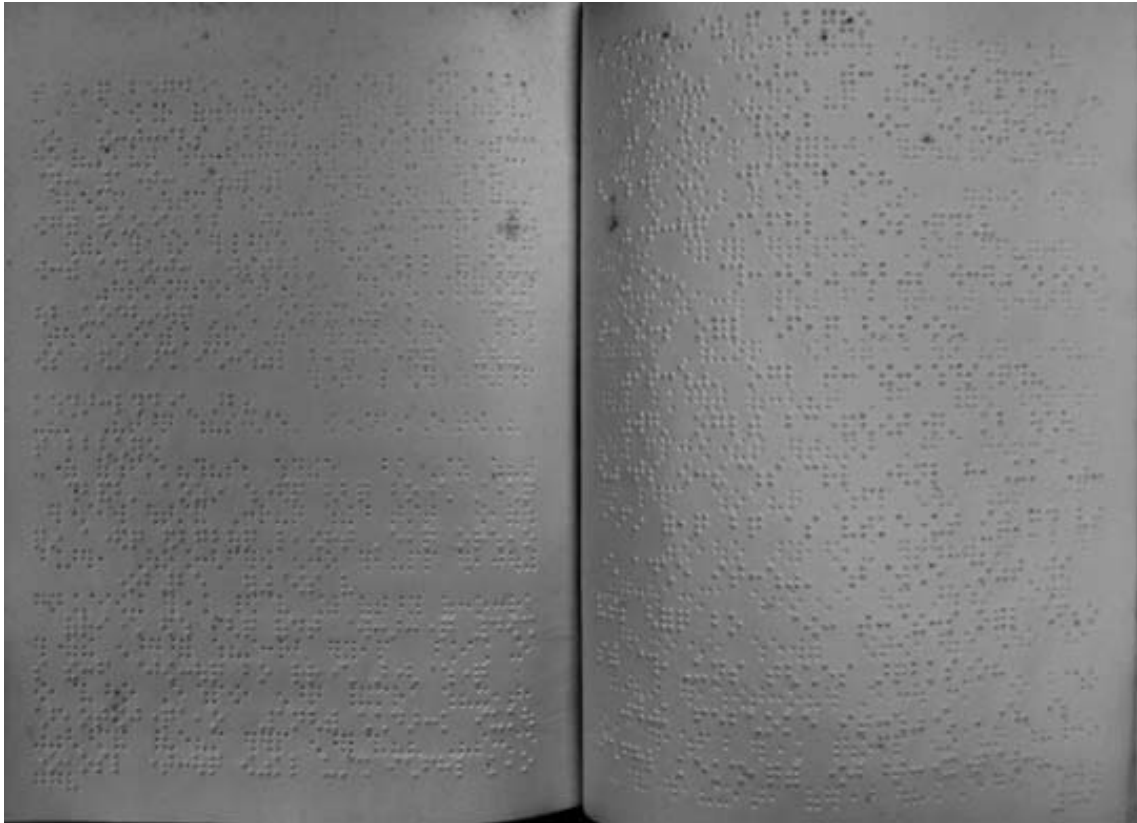
すいいれわ おどろいて たちあがつて しばらく たい
いの かおを みつめて いたが やがて あたまを さげ

「それわ あまりな おことばです わたくしにわ つま
も こも ありません わたくしも にっぼんだんしです
なんで いのちを おしみましょー どーぞ これを ご



らん ください」
と いうて その てがみを さしだした
たいいわ それを とって みると つぎのよーな ことが
かいて あった
「きけば そなたわ ほーとーおきの かいせんにも で
ず また 8がつ10かの いかいえいにーげきとやら
にも かくべつのはたらきなかりきとのこと はまわ いかにも
ざんねんに おもいそろ なんのために いくさにわ おいで
なされそーろーぞ 1めいを すてて きみの ごおんに
むくゆるためにわそーらわずや むらの かたがたわ あさに
ゆーに いろいろと やさしく おせわくだされ 『ひとりの
こが みくにのため いくさに いでしことなれば さだめて
ふじゆーなることも あらん なににても えんりよなく いえ
』と しんせつに おーせくだされそろ はまわ その かた
がたの かおを みるごとに そなたの ふかいなきことが
おもいだされて この むねわ はりさくるばかりにてそろ

はちまんさまに につさん いたしそーろーも そなたが あつ
ばれなる てがらを たてそーろよーとの しんがんにそろ
はまも にんげんなれば わがこ にくしとわ つゆおもい
もーさず いかばかりの おもいにて この てがみを
したためしか よくよく ごさっしくだされたくそろ」
たいいわ これを よんで おもわずも なみだを おとし
すいいの てを にぎって
「わたしが わるかった おかーさんの せいしんわ かん
しんの ほかわ ない おまえの ざんねんがるのも もっと
もだ しかし いまの せんそーわ むかしと ちがって
ひとりで すすんで こーを たてるよーなことわ できない
しょーこーも へいしも みな 1つに なって はたらかなけれ
ば ならない すべて じょーかんの めいけいを まもって
じぶんの しょくむに せいを だすのが だい1だ
おかーさんわ 『1めいを すてて くんおんに むくいよ』



と いうて いられるが まだ その おりに であわないの
だ ほーとーおきの かいせんに でなかったことわ かん
ちゅー 1どー ざんねんに おもっている しかし
これも しかたが ない そのうちにわ はなばなしい せん
そーも あるだろー そのときにわ おたがいに めざま
しい はたらきをして わが たかちかんの なを あげよー
この わけを よく おかーさんに いうて あげて あんしん
なさるよーにするが よい」

と いきかせた

すいいわ あたまを さげて きいて いたが やがて
てを あげて けいけいして にっこりと わらって たちさった

だい25 せんきょの ひ

みちおが けさ おきて みると しょーよーで 4こく
の ほーえ りよこーして いた ちちが よぎしゃで
かえったところであった 1つきも かかるよーな おはなし
だったのに どーして こんなに はやく おかえりに なった

のだろーと おもって きいてみた

「おとーさん ごよーわ もー すんだのですか」

「いや まだ すまない きょー ごご4じの
きしゃで また でかけるのだ」

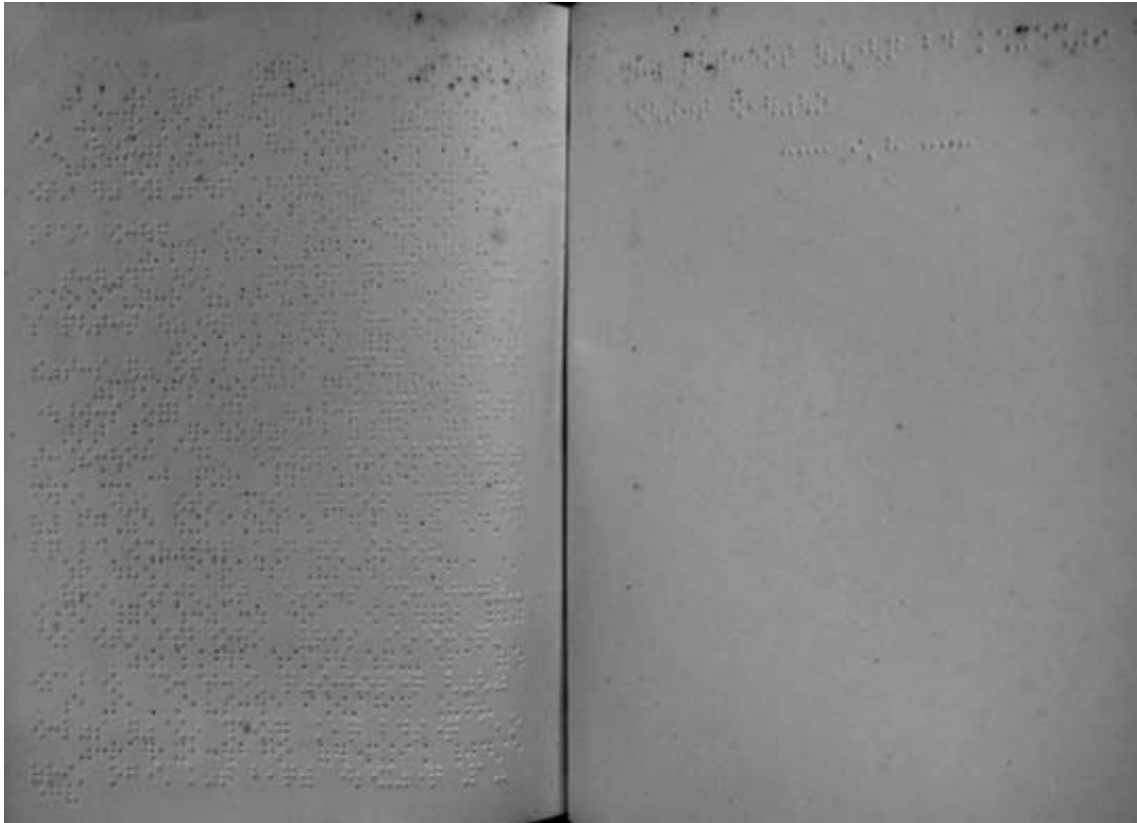
「どーして おかえりに なったのですか」

「きょーわ しゅーぎんぎいの そーせんきよだから
とーひょーの ために かえって きたのだ」

「おとーさんわ たれに とーひょーなさるのです」

「それわ たれにも いうべきことでわ ない しかし
こんどの こーほしゃの うちに じつに りっぱな かん
がえを もって いて あの ひとならばと おもわれる ひと
があるから おとーさんわ さいしよから ちゃんと その
ひとに きめて いた きょー とーひょーの ために かえった
のも しゅっぱつの ときからの よていなのだ」

「そんな えらいゆたなら おとーさんが わざわざ
おかえりに ならなくても だいちよーぶでしよー」



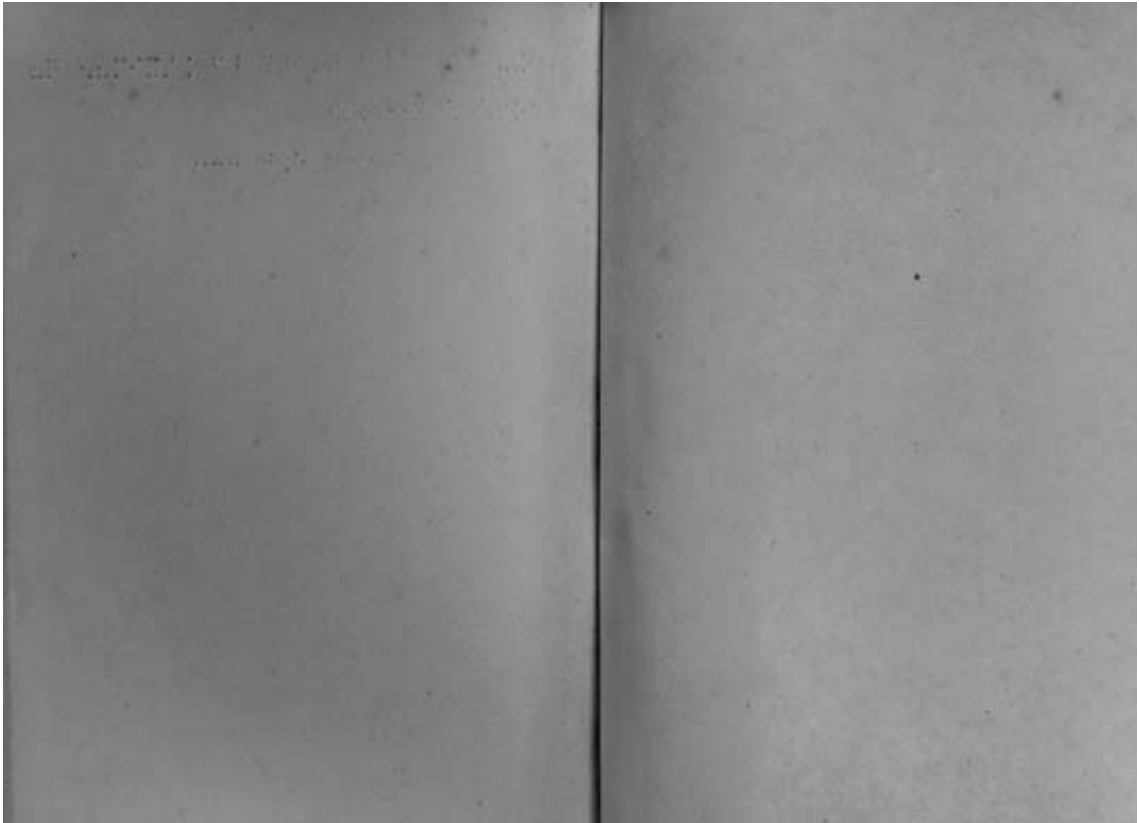
「いや そのひとが とーせんすることわ うたがない
が じぶんの とーとい せんきょけんを すてると いう
ことわ せんきょにんとして かりそめにも すべきことでわ
ないから こーして わざわざ かえって きたのだ

とーせんする しないわ べつにして めいめい じぶん
の てきとーと しんじて いる ひとに とーひょーするのが
ほんとーの せんきょと いうものだ せけんこわ いろいろの
じじょーの ために あるいわ しんよーも していない ひとに
とーひょーしたり あるいわ きけんして しまったりする ひとも
あるが そんな ことを するのわ せんきょの しゆいに そむ
いて いる こくみんとして はづべき ことだ」

みちおわ このとき ふと がっこーの きゅーちょーせん
きょの ことを おもいだした みちおの がっこーでわ
このあいだ きゅーちょーが てんこーしたので きんきん
こーにんの せんきょを することになっ ているので あった
みちおわ たれが なんと いても じぶんで 1

ばん てきとーだと しんじて いる なかむらくんを せん
きょしよーと けっしんした

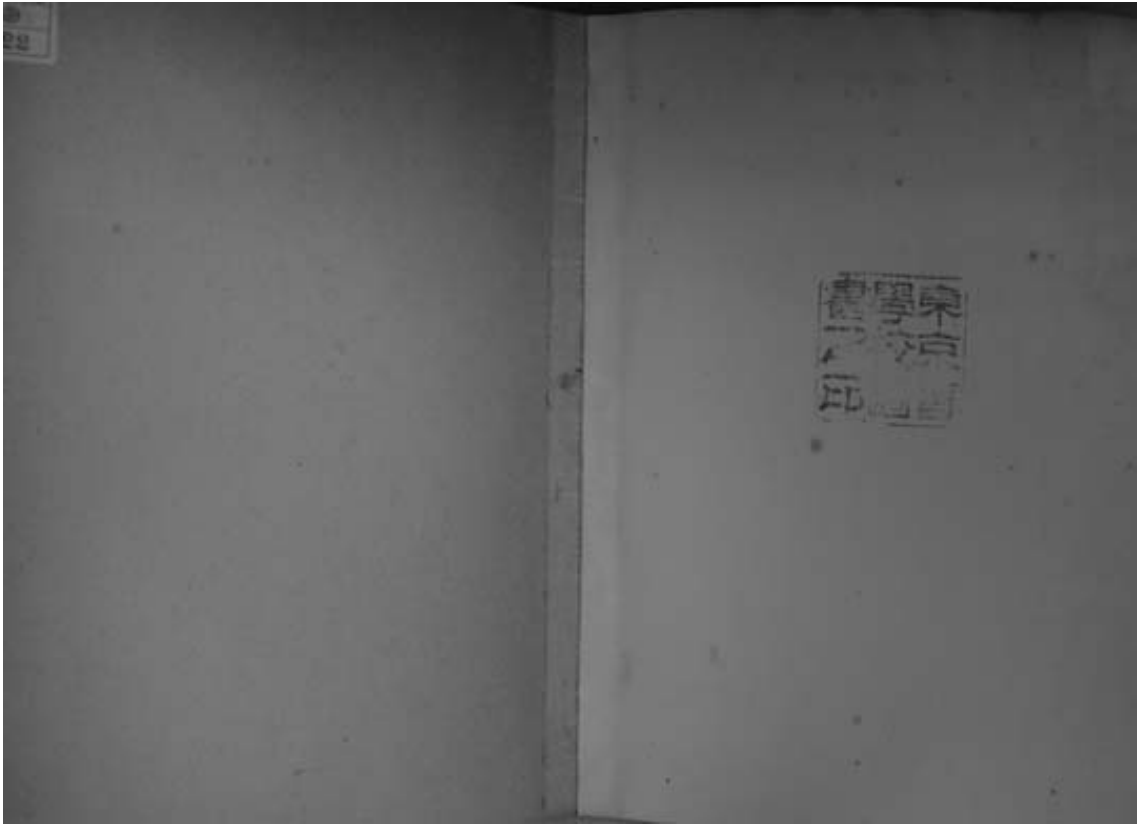
--- おわり ---

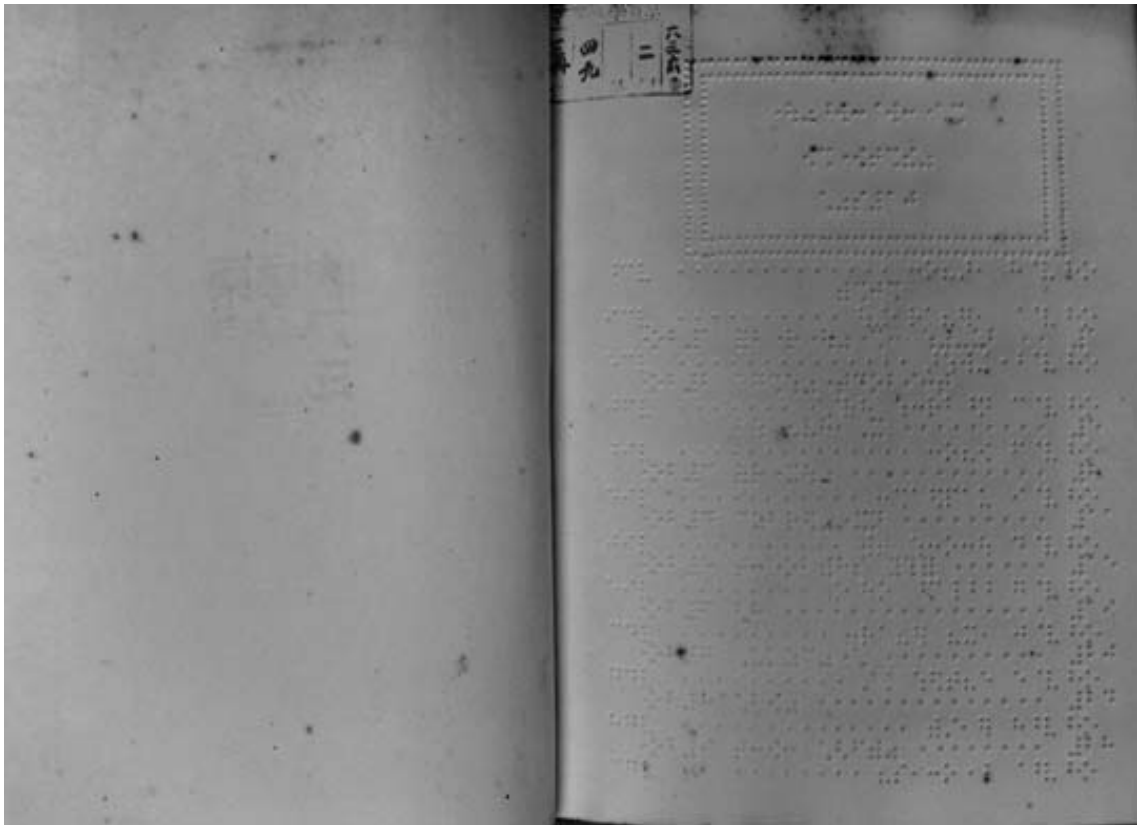












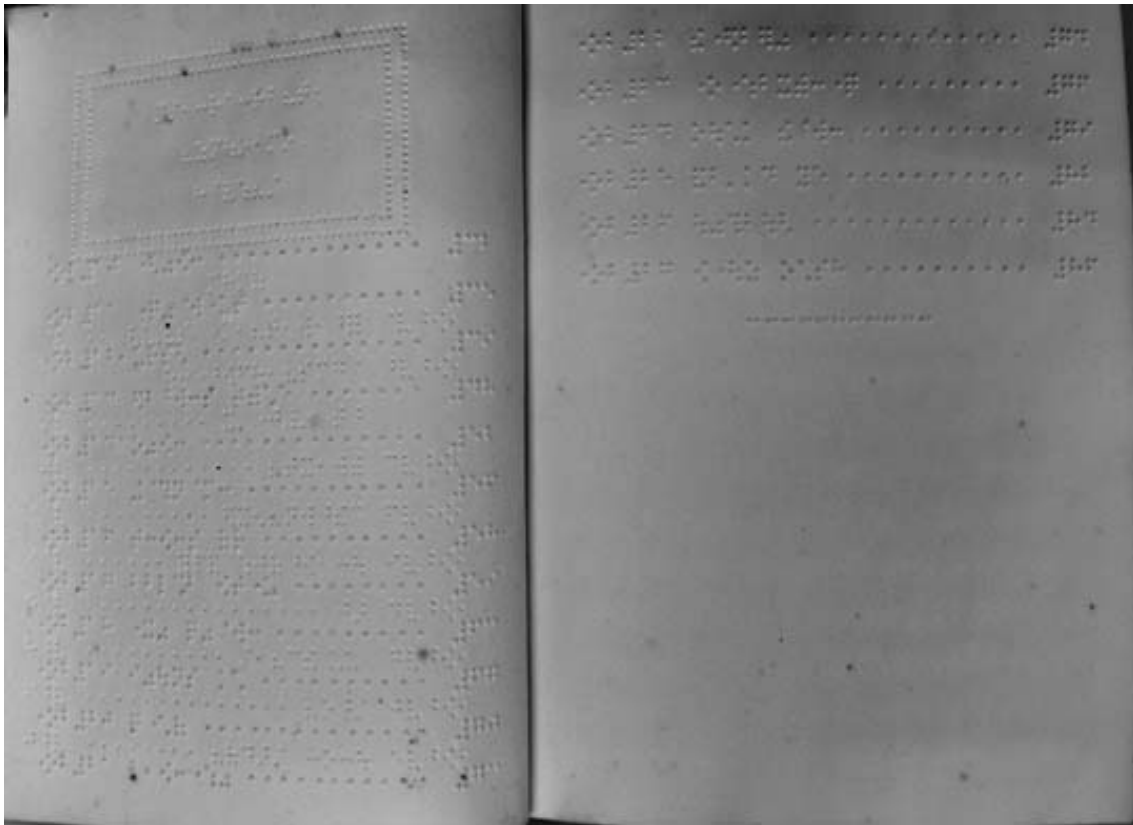
じんじょーしょーがく

こくごとくほん

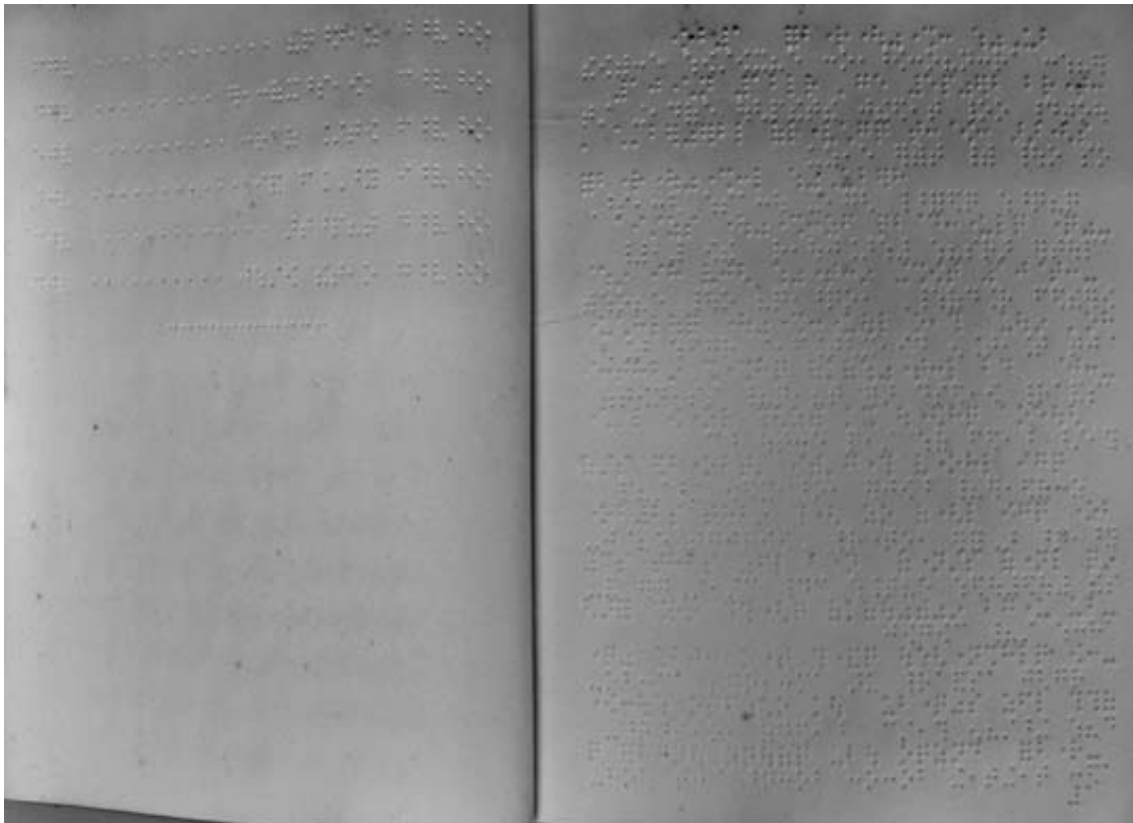
かんの10

もくろく

だい11	めいぢじんぐー さんはい	1
だい12	あれくさんどるたいおーと	
	いし ふいりつづ	5
だい13	みちぶしん	8
だい14	うまいちけんをふつ	11
だい15	とーだいもりの むすめ	15
だい16	きり	19
だい17	ばなまうんが	20
だい18	かいこん	24
だい19	とーこー かきえもん	28



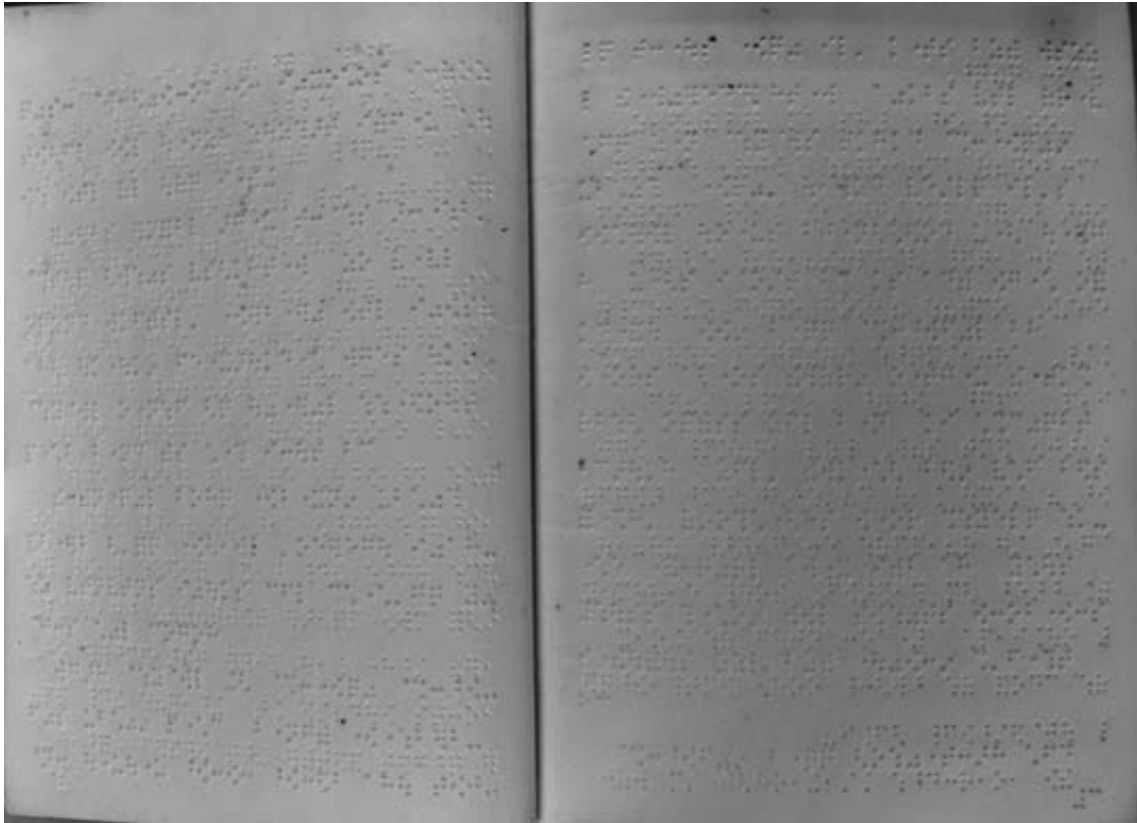
だい110	ぎんこー	32	だい122	ほれせん	74		
だい111	でんしょばと	35	だい123	だざいふもーで	76		
だい112	はちのき			だい124	たしかな ほしよー	79		
だい113	けいじょーの	ともから	48	だい125	へいわなる	むら	82
だい114	たんこー	52	だい126	しんすいしき	84		
だい115	ゆしゆつ	にゆー	56	だい127	こじま	たかのり	86
だい116	とーこーの	みち	58		-----			
だい117	いゝにくい	ことば	59					
だい118	ぶん	てんしょー	63					
だい119	おんしつの	なか	67					
だい120	てがみ	70						
だい121	にっこーざん	73						



だい11 めいぢじんぐー さんばい

10がつ 12にち われら 5ねんせい いちどー
わ かわいせんせいに みちひかれて とーきよー よよぎの
めいぢじんぐーに さんばいせり

あおやまの じんぐーまえ ていりゆーばにて でん
しゃを おり ひろき さんどーを ゆくこと 10ちよー
ばかりにして じんぐーばしに たつす はしを わたり
おーとりのいを くぐりて みなみさんどーに いる りよー
がわに こだち すきまも なく しげりて あたらしき
みやの けいだいとわ おもわれず ひだりに おれて
だい12の とりのいを すぎ また みぎに おれて だい
3の とりのいの まえに いづ みづやの みづにて を
きよめ くちを すすぎて みなみしんもんを いれば はい
でん かいろー など すべて しらきづくりにて こー
ごーしさ たとえんかた なし はいでんの まえに すすみ
て せいれつし つつしみて はいし たてまつる めいぢ



てんのー しょーけんこーたいごー おんぶたかたの おーみたま
とこしえに ここに しづまり しますよと おもえば かし
こさ ことに みに しみて おぼゆ

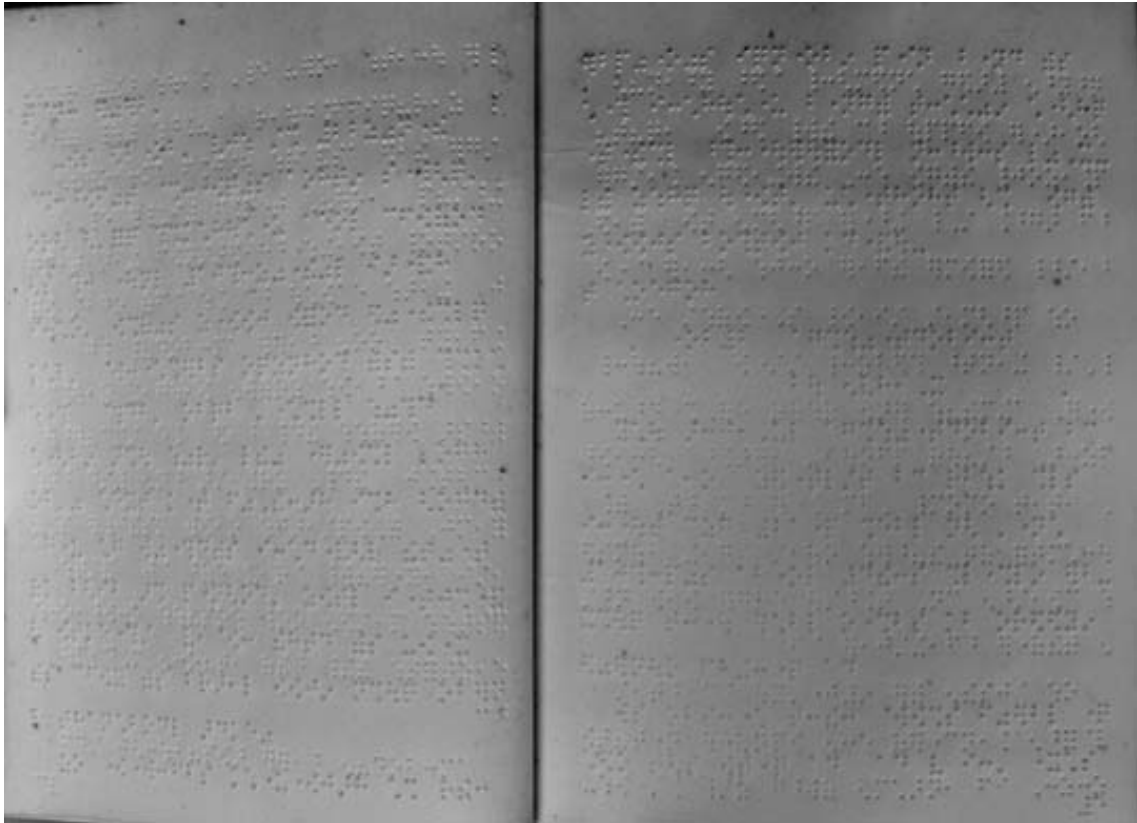
せんせいの せつめいに よれば とーしゃの よーざいゆ
しゆとして きそさんの ひのきなりとぞ また ひびに
たてまつる そなえものにわ ごせいぜん ことに おんこのみ
ありし しなじなを えらぶよしなるが それらの しなを
しゃむしよに たづさえ きて しんぜんに ささげたと
ねがい いづる その かず おーしと いう

ほーもつでんに いたりて こいづつを はゆんす
へいせい きわめて ごしそに わたらせられし おんあり
さま ひとつひとつの おんしなの うえに うかがわれて む
りよーの かんに うたれたり

それより しゃむしよに ゆき きゆーごてん きゆーぎよ
えんの はゆんを ねがう いづれも ごせいせい
ちゆー しばしば ぎよーこー ぎよーけい ありし とこ

にて とーじの ごてん おこわ などの いまも そのまま
に ほぞんせるなりとぞ あんなゆの ひとに みちび
かれて まづ しゃむしよの となりなる きゆーごてんを
はゆんす ごてんわ しつそなる ひらやにて おこわの
ここかしこに したばの いろづきかけたる はぎ しけれ
り はぎの おちややと いう なの あるも これが た
めなるべし ここを いでて きゆーぎよえんに いら
ごだちの あいだの ほそみちを たどれば ほどなく
ちいさき たてももの まえに いづ なお かくうんでい
いうよしなり まえにわ ほそななき いけを ひかえ いけの
めぐりわ みわたすかぎりの ごだち くさむらにて さな
から べってんちに あそぶ おもい あり むかしの
むさしのの すかたを ここに のこさんとの こーたいごーの
おぼしめしの ままに いまも じんこーを くわえずと
いう

きゆーぎよえんを いでて きたさんどーより かえる



とちゆー せんせいゆ

「この けいだいゆ ひろさ やく 22まんつぼ
きゆーぎょえんと きゆーごてんの あたりとを のぞきてわ
たちき きわめて すくなかりしかば あらたに うえこみたる
きの すー じつに 10すーまんぼんに およべり
おーかたわ こくみんの まごころ こめたる けんぼくにて
なかかわ しよーがくせいゆ たてまつりたる ものも すくなか
らず しゆるいゆ たいてい わがくにに さんする
かぎりをつくし さんちわ にほん ぜんこくに わたれり
たいゆん からふと など えんぼーより おくり きたれるも
あれば かれ そんずるもの おーかるねきに ほとんど
みな いきおい よく ねづきたるわ まことに おどろくべ
き ことならずや ひつきよー ほりとする ものはこぶ
もの うえこむ もの いちよーに ころろをつくして たせつ
にとりあつかいたるに よるならん

また ごぞーえいの なかばごろより かく ちほー

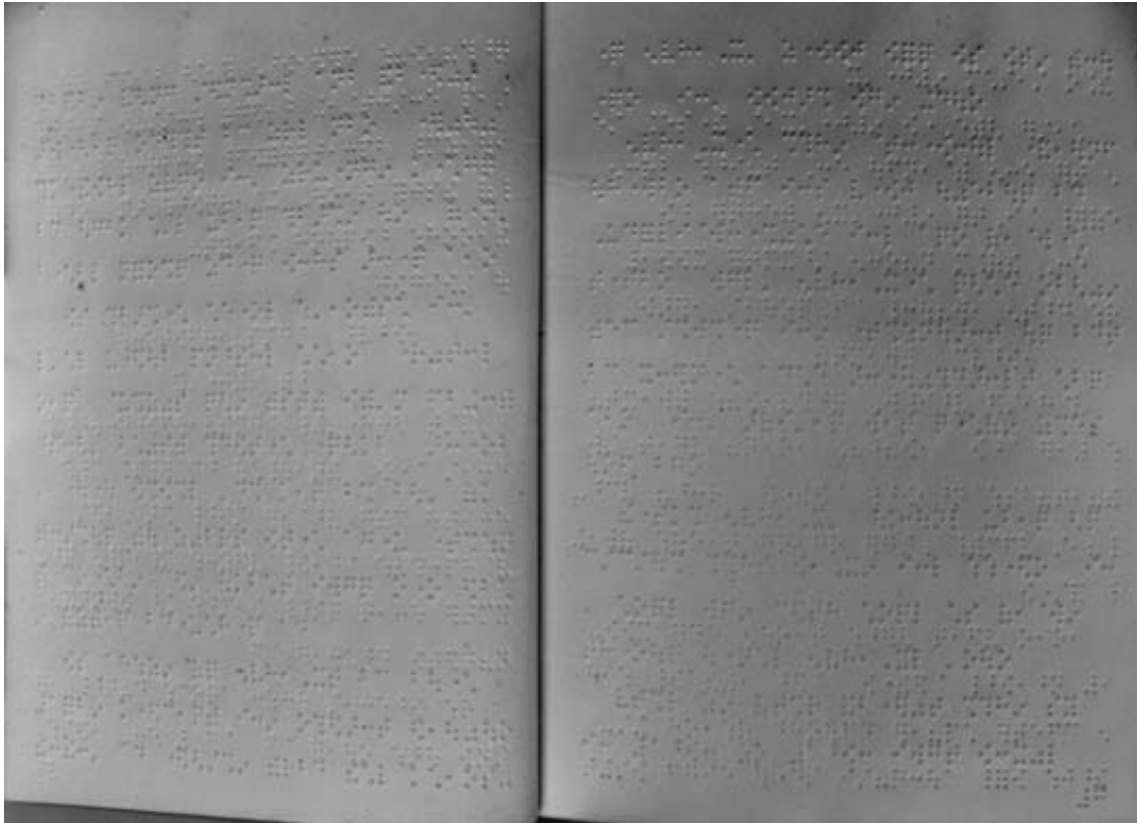
せいねんだんの おてつたいを ねがい いづる もの
かず おーかりしかば いづれも とーかかんを かぎりて
どぼくに じゆーじせしめたるに つーじよーの にんぷ
にも まさして しごとわ はかどりたりと きく これも
まごころの いたすところ なるべし
と かたられたり

だい12 あれくさんどるたいおーと

いし ふいりつぷ

むかし よーろつばに あれくさんどるたいおーと いう
おーが あつた まけどにやと いう ちいさな くにの
おーじと うまれ 21で くらいに つき わづか
10すーねんの あいだに 4ほーの くにくにを せい
ふくして とーじ せかいに たくいの ない たちけむを
けんせつした えいゆーで ある

その たいおーが とーほー しょこくの えんせいに で
かけた ときの ことである ある ひ おーわ ぶだの



せいはいを ひきつれ やけつくよーに あつい へいげんを
よごぎって たるすすと いう まちについた ぜんしん
すなほこりに まみれた おーわ まちはづれを なかれて
いる きれいな かわに はいって すいよくをした みづわ
いかいりに つめたくて まるで こーりの よーで あった

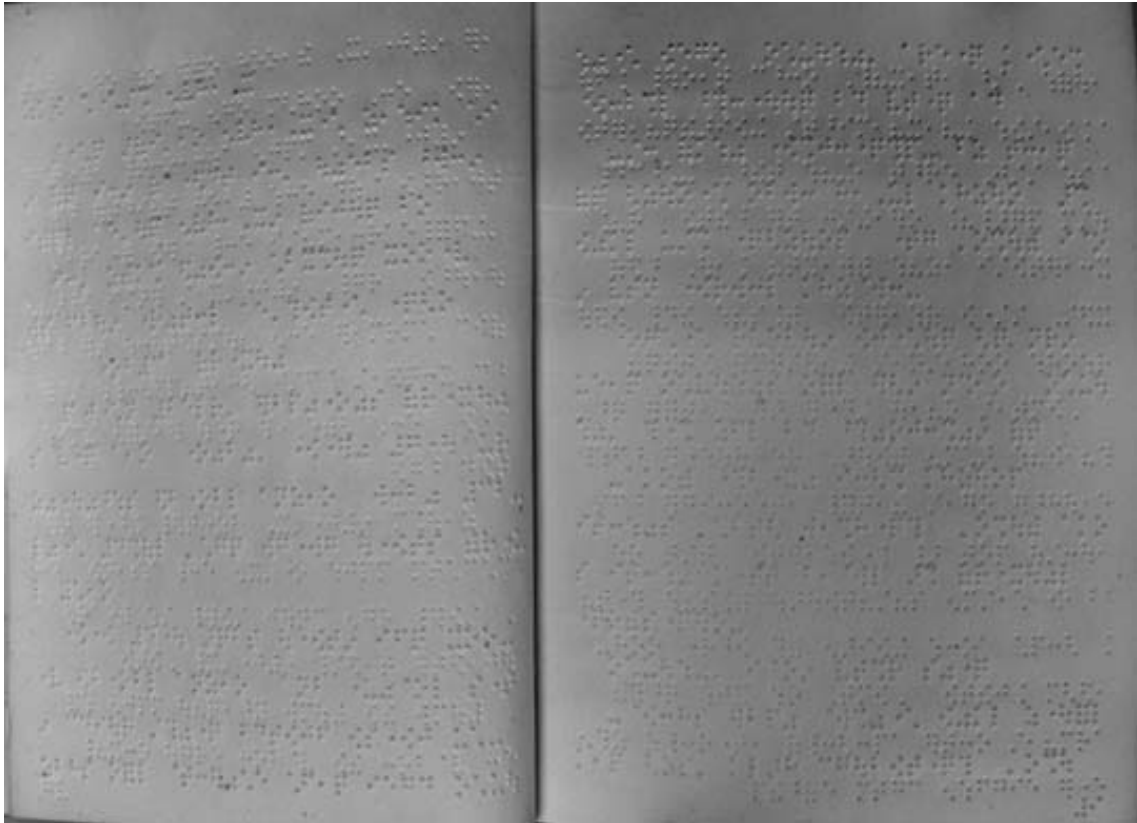
この すいよくが からだに さわったものか おーわ
にわかにはげしい ねつびよーにかかった ちんとーに
たってわ ひやくまんの てきを ものとも おもわぬ えいゆーも
びよーきわ いかんとも することが できない よーだい
わ じじ こくこくに わるく なって いく いしわ みな
とーやくして もし まんいちの ことが あれば どくさつ
の うたがいを うけわ しないと おそれて ただ けいか
を みまもって いるばかりである

この ありさまを みて ふうりつぷと いう いしが
1めいを なげうっても おーを たすけよーと けっしんした
ほーほーわ ある げきやくを もちいる ほかに なかったの

で ふうりつぷわ まごころ こめて この ことを もーし
でた おーわ こころよく これを ゆるした
ふうりつぷが くすりを ちょーごーしに べっしつえ
しりぞいた あとえ おーの ひごろ しんらいして いる
ばるめにおしよーぐんから おーに あてた みっしよが
とどいた それにわ ふうりつぷが てきから たいきんを
もらう やくそくで おーを どくさつしよーと して いると
いう ふーせつが あるから よーじんするよーにと かいて
あった おーわ よみおわって そつと てがみを まくらの
したえ いれた

ほどなく ふうりつぷわ びよーしつに はいって きて
うやうやしく くすりの こつぷを おーに ささげた おー
わ かたてに それを うけとり かたてに かの みっしよを
とりだして しづかに ふうりつぷに わたした

ひとくち また ひとくち へいげんと くすりを のむ
おー 1ぎよー また 1ぎよー おそれと こーふんに



まなこ かがやく ふいりつぷ

やがて よみおわった ふいりつぷが まっさおな かお
をして おーを みあげると おーわ しんらいの じょーを
おもてに あらわして ふいりつぷを みおろして いた

おーわ まもなく けんこーを かいふくして ふたたび
その えいしを ちんとーに あらわすことが できた

だい13 みちぶしん

10がつ 25にちわ せいねんだんの みちぶしん
の ひで あった だんいんわ ごぜん 7じ はち
まんじんじゃの けいけい に あつまった そーいん 32
にんが 4くみに わかれて それぞれ しごとの もちば
に むかった

ごご 4じ よていの しごとを おえて ふたた
び けいけい に あつまった あつい ばんちゃに のど
を うるおして やすんで いるところえ このごろ はか
まいりの ために ちよーせんから かえって おられる たかはし

さんが こられた たかはしさんわ あちらで ながらく
きょーいくに じゅーじして いる ひとで ある

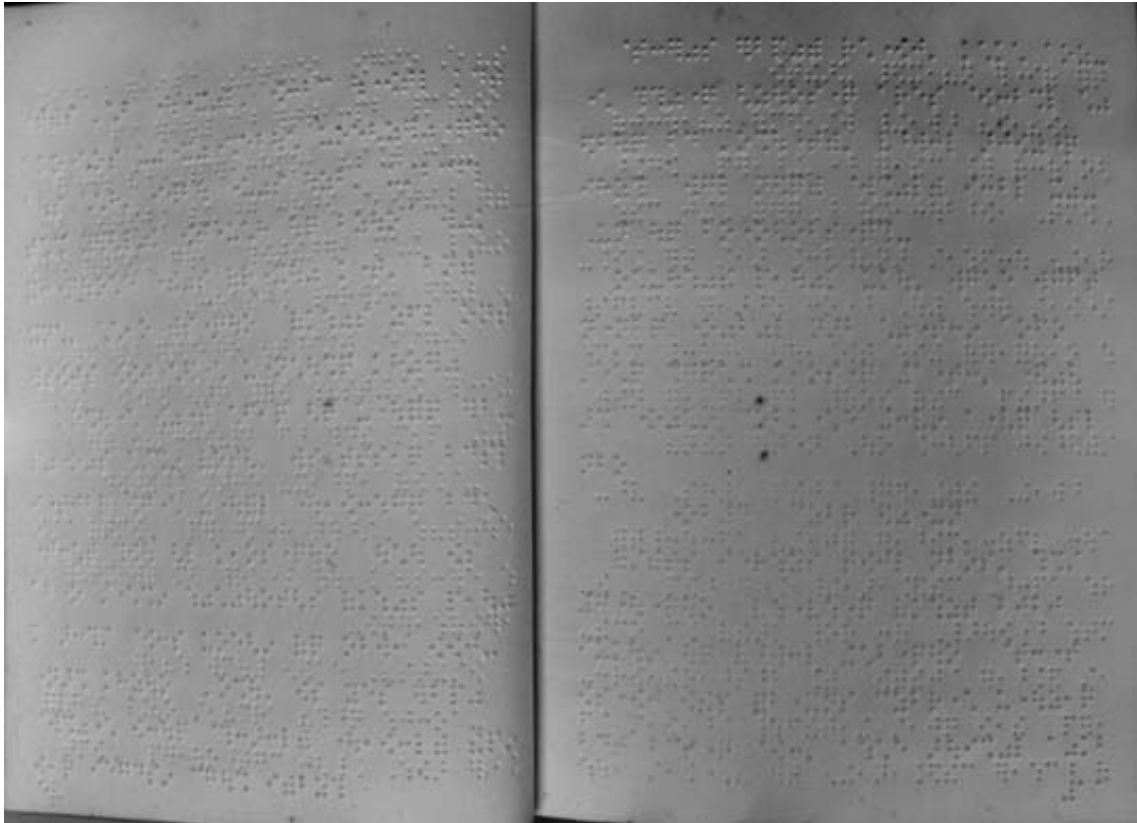
「やー みなさん ごくろーですね」 いま とーって
みて きましたが たいそー りつぱに なりました よく
こんなに はやく できましたね どれ わたくしも おちゃ
を ひとつ ごちそーに なりましょー」

だれかが ちからいしを ころがして きて つちを
はらって たかはしさんの ために せきをつかった たかはし
さんわ すぐ まえに いる じゅんたろーくんを みて

「あなたも すいぶん おーきく なりましたね
おとーさんの わかいとき そっくりです わたくしも あなた
の おとーさん などと いっしょに よく みちぶしんに
でたものでした」

たかはしさんわ おちゃを ひとくち のんで

「きょーりの せいねん しょくくんが こんなに まじめに
なって きたのわ なにより うれしい ことです わたくし



どもの わかい じぶんこわ こーいふ しごとになると
あなたかたの はんぶんぐらいいしか はたらきませんでした
あさの かかりわ おせいし ぼんの しまわ はやいへに
とかく むせきにんな ことばかり して いました そんな
ふーでしたから ぼんの みちぶしん などわ いつも
ふつかわ かかった ものでした みなさんの まえに たつと
そのころの ころががが はづかしくて なりません

わたくしが こんど かえって きて はじめて せい
ねんだんの きやくを みたときわ その ととのつて いるのに
おどろいて これが まじめに じっこーされて いるか
どーかと すこし きに なったのでした しかし この
あいだ やかくを さんかんしたときの みなさんの ねっしん
な よーすや きよーの はたらきを みたいそー ころ
づよくなりました わたくしわ この むらの せいねん
しょくが こーして しゅよーにも じっこーにも ほねを
おつて おられるのを うれしく おもいます

ちよーせんの せいねんも ちかごろわ なかなか あたま
が すずんで きましたので あちらの きよーいくに かん
けいして いる わたくしどもわ ひじょーに よるこんで
おります それに つけても しょくんに おーいれに ぶん
ぱつ して いたきたいのです」

たかはしさんの ねっしんは はなしわ それから それえと
つづいて だんいんに つよい かんどーを あたえた
やがて くれちかく なったので 1どーわ げんき
よく だんかを うたいながら ゆーひを あびて きとに
ついた

たし 14 うまいち けんぶつ

みやもとの おぢさまの ところについたわ さくや
7じでした ひさびさで みなさまと いろいろ
おはなしをして ひじょーに ゆかいでした ちよーど
このころ この めいぶつ の うまいちが はじまって
いると いうので きよーわ あさから よしおくんに あんない



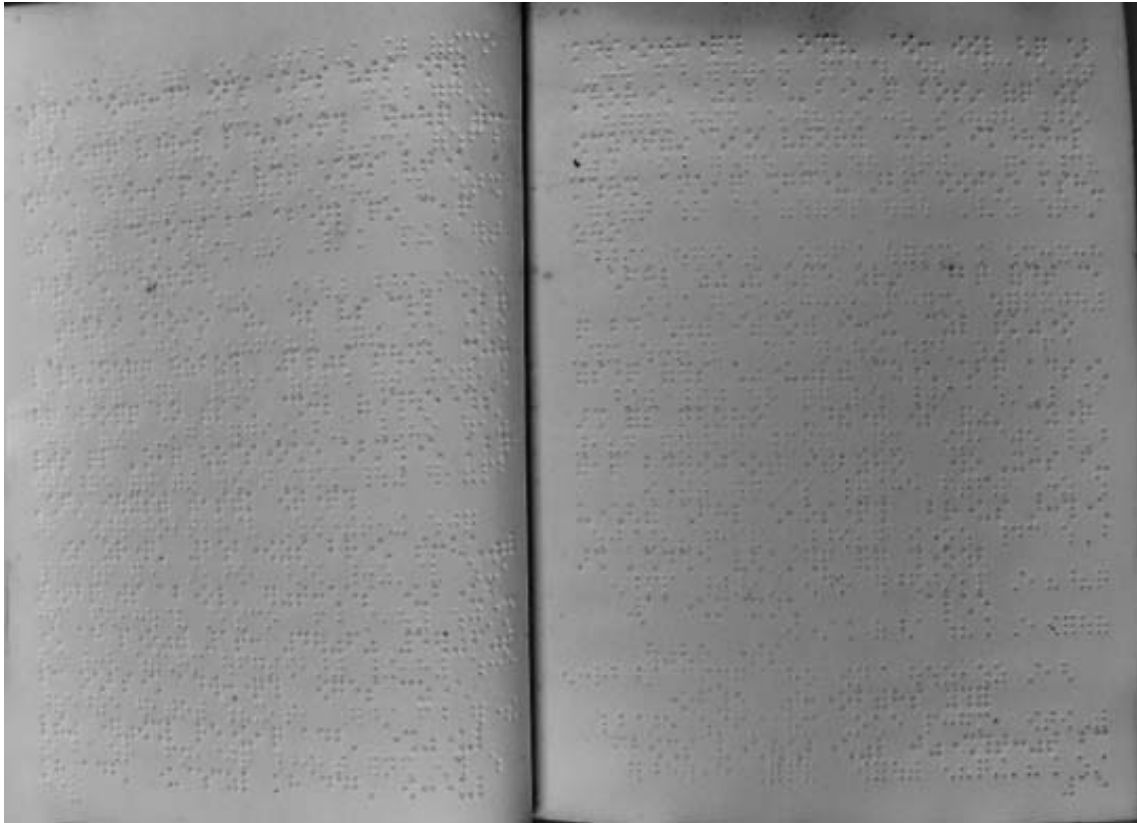
して もらって けんぶつに ゆきました

だんだん いちばに ちかづくと ほんどーりも
よちよーも みな うまで いっぱい です なれない
わたくしわ だいぢょーぶと いわれても やはり うまの
そばを とーるのが きけんなよーな きが して ならな
かったが とちの ひとわ いっこー へいきで 34さい
の こどもでも はらの したなどを じゅーに くぐっ
て あるきます うまも まことに じゅーじゅんで けたり
かみついたり するよーな ことわ けっして しません

いちばわ まちはづれに あります ひろさわ 2
ちよー 4ぼーぐらいで せりばを ちゅーおーにして
その しゅーいわ うまつなぎばに なっています わた
くしの いったときにわ もー そこに すきまも なく こうま
が つないで ありました みな 2さいごまだそー
です まだ せりが はじまるのに あいだが ある
と いうので うまつなぎばを みて まわったが どの

こうまも みな かゆいらしい かおを して おとなしく つな
がれて います なかにわ ははうまが つきそって きて
いるのも たくさんに あります こうまにわ たいてい かい
ぬしの 1かぞくが ついて きて しんせつに せわを
して います なかにわ きみぐらいの こどもや その
おかーさんらしい ひとが きょーの わかれを おしんで
なきながら まめや にんじんを やったり くびや せを
なでたり して いるのも あります それを みると なる
ほど こんなに かゆいがられて いれば うまも じゅー
じゅんで ひとに なつくわけだと しみじみ おもいました

せりの はじまったのわ 10じごろでした せり
ばの 1ぼーに たかい だいが あって その うえに
かかりの ひとが いる こうまが 1とーづつ ちゅー
おーの ひろばに ひきだされると くらやまの よーに あつ
まっている かいわ じぶんの みこみで おもいおもい
の ねを つけて したいに せりあげる その あいだ



かいての きょそする こえの かかりの ひとの こえと
いりみだれて ひじょに にぎやかです そして も
これが さいにの ねだと みると かかりの ひとが
その ねで うりわたすと いう あいづに てを うって
とりひきが なりたちます

とりひきの なりたつた うまわ その ひの うちに かいて
に ひきわたされて しまいます 2ねんの としつき くら
して そだてて きた ものが きゅーに みずしらずの
ひとの てに わたつて しまうのだから かぬしが ないて
わかれをおしぬのも もっともな ことです

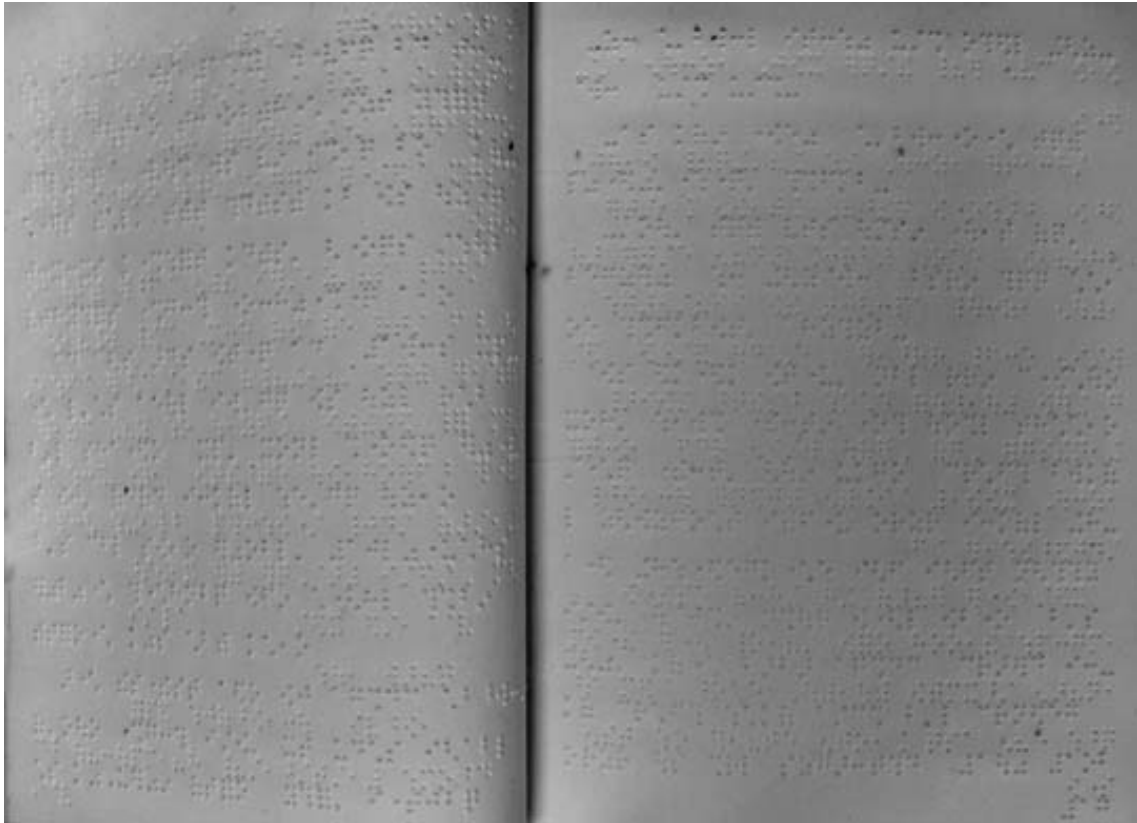
この まちでわ 2さいごまの いちが と一かかんも
つづいて その あいだにわ せん一からの はいはい
があり ねだんも 1と一 4せんえん 5せんえんと
いう たかいゆがあるそです これらの うまが
にほん ぜんこくに ちらばつて あるゆ ぶんばに
なり あるゆ ばしやうまに なり るゆ こ一ばに

なるのだそです わたくしわ きょー ここに きて かい
ぬしたちが あんなに かゆわがつて いたのを みて この
こうまどもを かつた ひとたちも ど一か おなじよに
やさしく あつかつて くれれば よいと ころから いのり
ました

かえりに さんぽがてら まちを あるいて みると うつ
ている かしも おもちゃも お一くわ うまに ちなんだ
もので みせの かんばんにも うまが かいて あるのが
よく めに つきました なるほど この へんわ うまで
もつて いるところだと おもいました べつぶの え
はかきも かえりに かつたのです いちばの よ一すが
よく わかるから ひきあわせて みて ください

11がつ ぶつか あにから
しんきち どの

たい5 と一たいりの むすめ
えいにくの ひがしかいゆに るんぐすと一んと いう



しまがある その1かくに そびえて いる とー
だいに としとった とーだいのりが つまと むすめと
3にんで わびしく その ひを おくつて いた なみ
かぜの ほかにわ ともと するものも ない この しまで
ろーふーふの なぐさめと なるものわ きだての やさしい
ひとりむすめの くれーす だーりんぐで あった

ある あきの よるの ことである 1そーの ふね
が にわか の あらしに おそわれて この しまに ちかい
いわに のりあげた ふねわ ふたつに くだけて せんび
の ほーわ みるみる おーなみに さらわれて しまった
いわの うえに のこった せんたいにわ 10にんばかりの
せんいんが すがりついて こえを かぎり に すくい
をもとめたが なんの かいも なかった

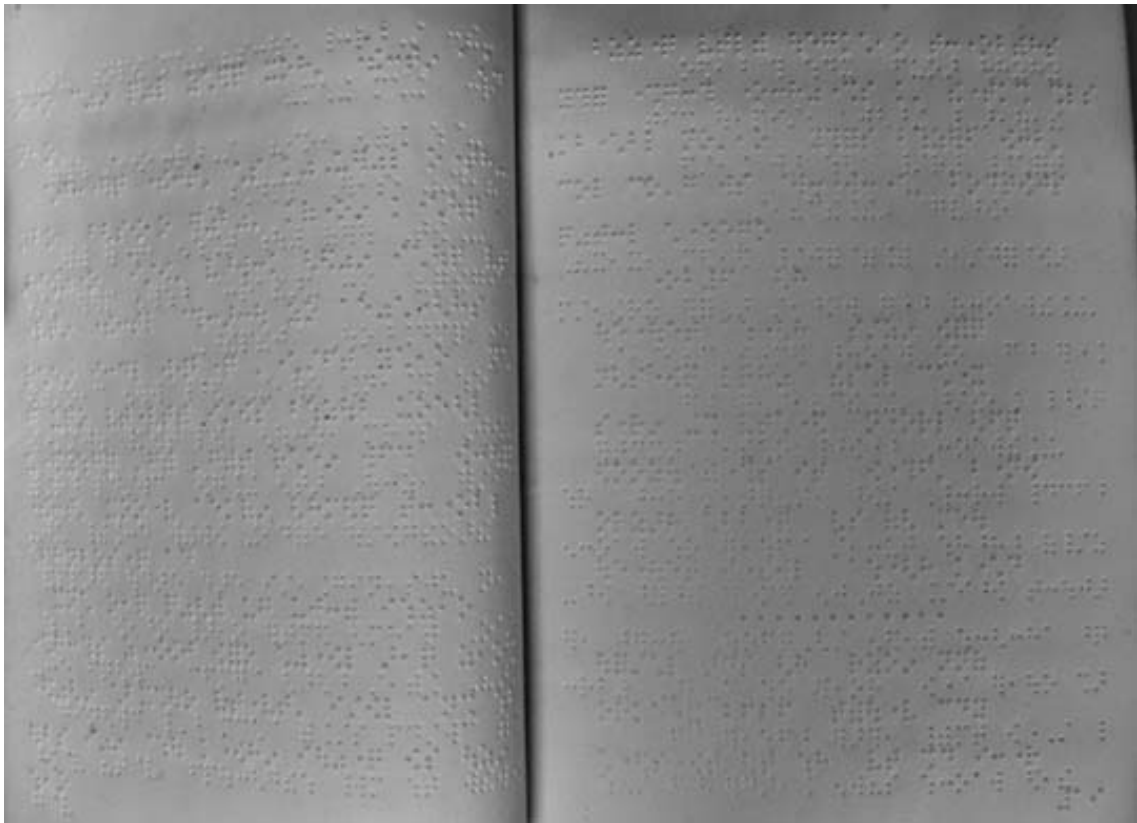
よが ほのぼのと あけた ころ あれくるう かいじょーを
みわたした くれーす おやこわ ふと はるか の おきあいに
かの なんばせんを みとめた むすめわ おどろいて

「まー かわいいそーに おとーさん はやく たすけに ゆきま
しょー はやく はやく」

「あの なみを ごらん かわいいそーだが とても
にんげんわざでわ すくえない」

「わたしわ とても ひとの しぬのを じっと みてわ
いられません さー ゆきましょー いのちを すてて かかっ
たら すくえないことわ ありますまい」

この けなげな ことばわ ついに ちちを うごかした
ふたりわ さっそく ぼーとを だす したくに とりかかった
やがて おーとわ きしを はなれた うちかえす いそなみ
に まきこまれたかと おもえば たちまち おーなみに ゆり
あげ ゆりさげられながら おきえ おきえと つきすすむ
おやこわ しりよくを つくして こぎに こいだ いわの
ふきんわ なみが いよいよ あれくるう うちよせる おー
なみ うちかえす さかなみ あやうく いわに うちつけられ
たちまち しの くちに のまれよーとする 1しん 1たい



ただ うんを てんに まかせて ふたりわ ぼーとを あや
つた

かろーじて ぼーとわ かの なんばせんに たどり
ついた いきのこった せんいんわ なみだを ながして
よるこんだ おやこわ ひじょーな きけんを おかして ひと
びとを ぼーとに しゅーよーし また あらんかぎりの
ちからを おーるに そそいで わがやえと むかった つか
れ はてた ひとびとも おやこの いさましい はたらきに
はげまされて われも われもと ちからを そえる こーして
ぼーとわ ふたたび あらなみを きりぬけて とーだいに
かえりついたので ある

ふつか たって てんきも はれ はろーも おさまった
ぐれーすの まごころ こめた かんごに よって まったく
げんきを かいふくした ひとびとわ おやこに あつく さい
せいの おんを しゃし なごりを おしんで この しまを
さった

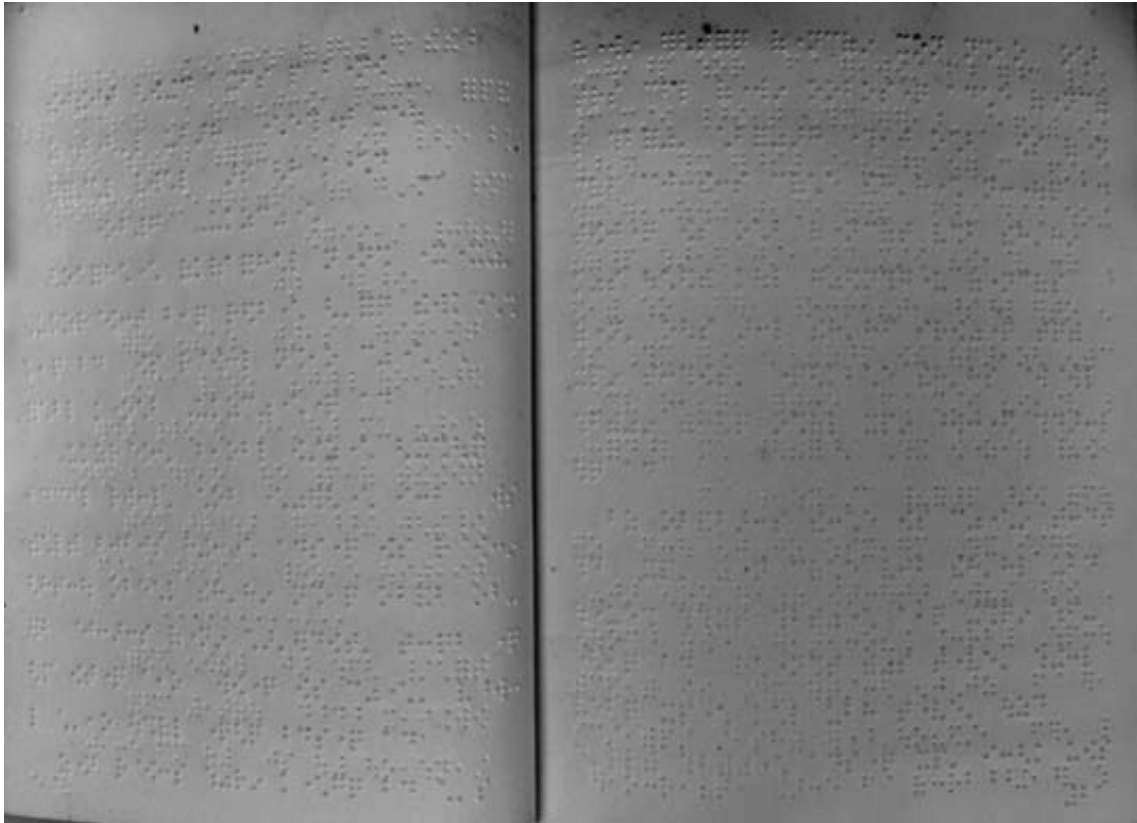
いままで ひとにも しられなかった とーだいのりの
むすめ ぐれーす だーりんぐの なわ ほどなく くくの
ないけいに つたわった むすめの いさましい こーいゆ
うたに うたわれ その しょーぞーがわ いたるところの
てんとーに かざられた

だい16 きり

しらじらと あさぎり のやまを こめて
つきのごと にちりん ほのかに うかが
のぢを ゆく ひとかげ ただちに きえて
けたたまし もずの おと こずえわ いづこ
たいまより はいいで きの みき ぬらし
しらじらと おぼろに あさぎり ながる

.....

しめやかに よるの きり ちまたを つつみ
たちならぶ いえいえ ともしび うるむ
かげまのごと ひと さり ひと くる おーぢ



ほろほると きこゆる ふえの ね いづこ
まどぎわに はいより がらすど ぬらし
しめやかに ひそかに よの きり ながる
だい7 ばなまうなが

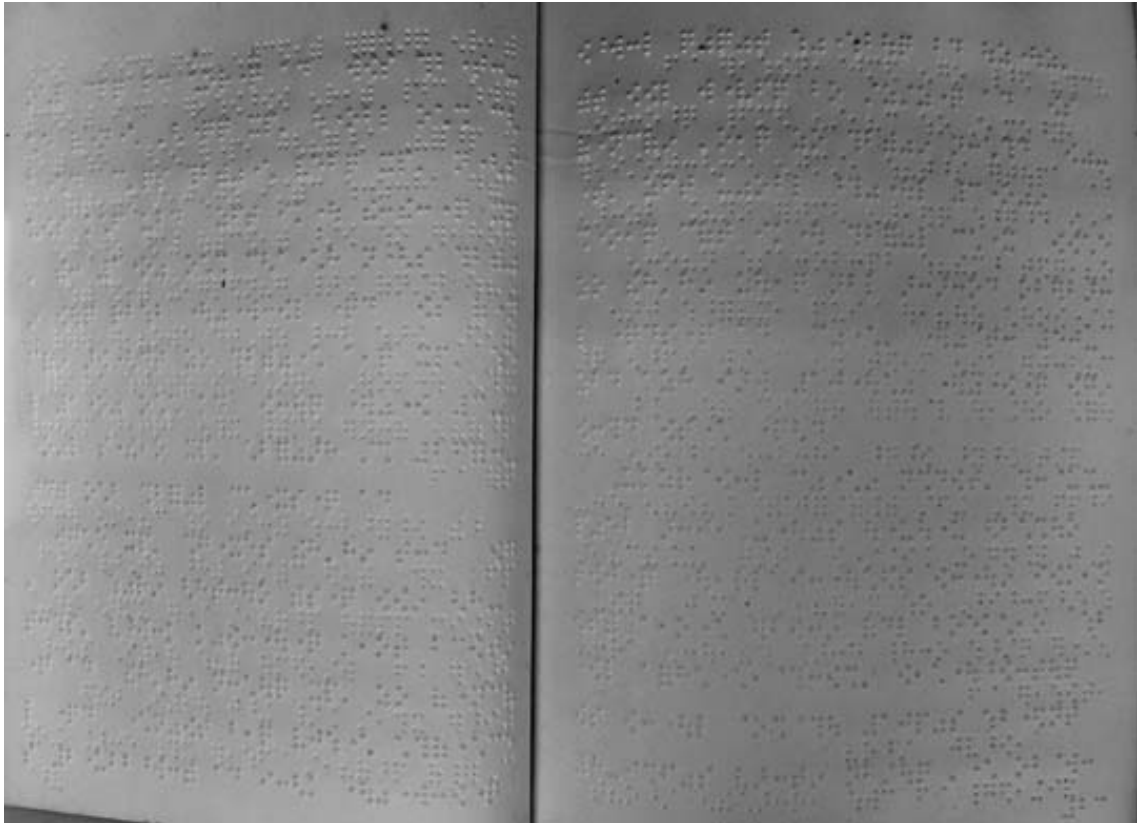
きたあめりかが みなみあめりかに つづく ふぶんわ
ばなまちきよーと いって ちけいが きわめて ほそながく
なっている この ちきよーにつくった うんかが
せかいに なたかい ばなまうながで ある

ばなまちきよーわ いったいに こやまが きふくして
いるうえに ちそーにわ かねい がんせきが おーい
ほかにも いろいろの りゆーが あるので この ちきよー
きりとーし たいらな ほりわりを つくって たいい たい
せい りよーよーの みづを かよわせる ことわ とーてい で
きぬ ことであつた そこで この うんがわ ひじよー
にかわたつた しくみに できて いるのである

まづ ちきよーの さんちを なかれて いる かわの

みぞを せきとめて みづうみを ふたつ つくつた たかい
とちの うえに みぞを たたいたので あるから みづうみ
の すいめんわ かいめんより ずっと たかい この みづ
うみえ りよーほーの うみから ほりわりが つーじて ある
ところで この たかい みづうみと ひくい ほりわりを
なんの しかけも なしに れんけつすれば みづうみの
みづわ たきの よーに ほりわりえ おちこんで とても
ふねを とーすことわ できないから ほりわりの しょしょに
すいもんを もーけて たくみに ふねを じよーげ するよーに
して ある

いま たいいよーの ほーから この うんがを とーると
する ふねわ まづ うみから ひろい ほりわりにはいる
しばらく すすむと すいもんが あつて ゆくてを さえ
ぎっている ちかづくと もんのとびらわ さゆーに
ひらいて ふねが なかに はいり とびらわ しまる
うわてにも すいもんがあるから ふねわ おーきな はこの

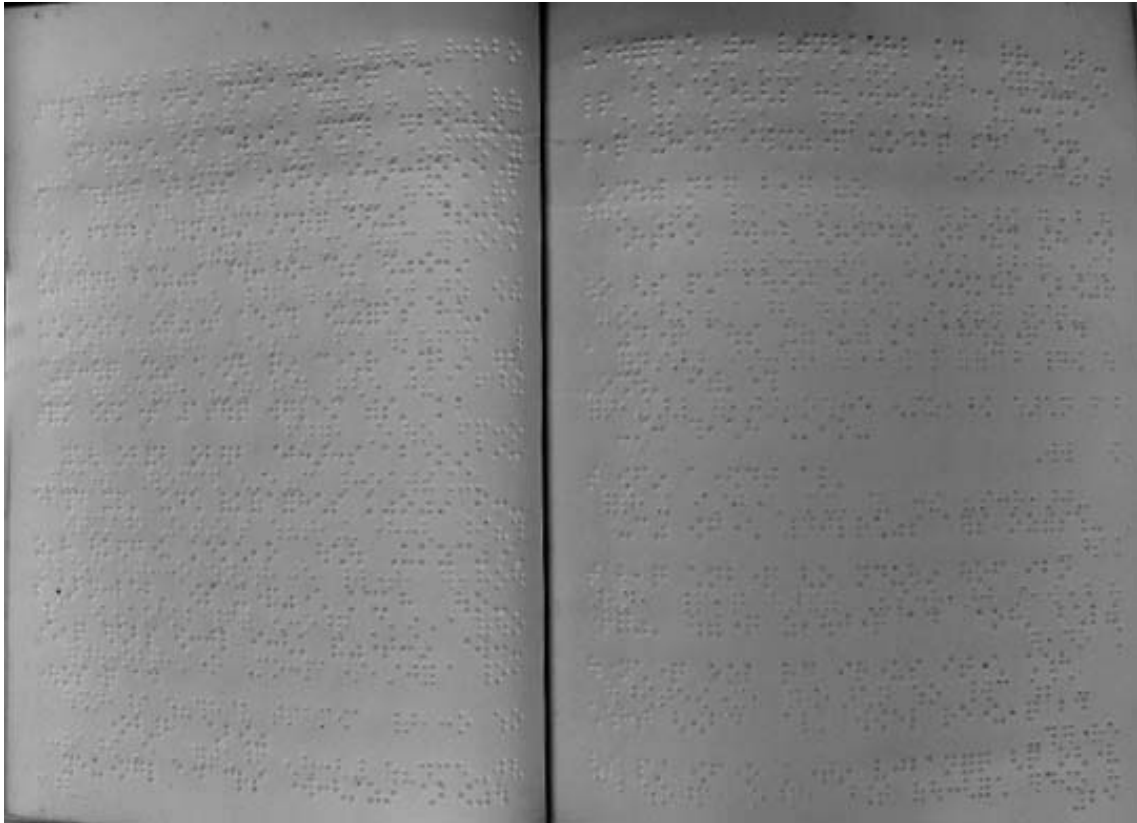


なかに ういて いる かたちで ある その すいどー
から みづが わきでて ふねわ したいに たかく うき
あがる うわての すいもんが ひらいて ふねわ つぎの
はこの なかえ はいる まえと おなじ ほーほーで ふね
わ もー 1だん たかく うきあがり つぎの すいもん
を こして ちいさい じんぞーこに できる この みづ
うみを よこぎると また すいもんが あって ふねわ さら
に 1だん たかく なる こーして ぜんご 3
だんに のぼった ふねわ かいめんより やく 26めー
とるも たかい すいめんに うかぶのである

それから ふねわ くれぶらの ほりわりを とーる
わ たかい さんちを きりとーした もので ここを きり
とーすのわ ひじょーな なんこーじで あったと いうことを
である ほりわりを つーかして ふねわ また みづうみ
に できる がつんこと いうて ひろさが かすみかうら
の 2はれいじょーも ある おーきな じんぞーこで

こじょーに てんてんと さんざいして いる しまじまわ
もと ここに そびえて いた やまやまで ある この
みづうみを わたって また すいもんを つーかする こん
どわ まえと はんたいに じゅんじに 3だんを
くだって うみと おなじ すいめんに うかぶ ここから
また ほりわりを はして ついに よーよーたる たいせいは
二 である うんがわ ぜんちよー 50
まいる あまり およそ 10じかん ぜんごで これを
こーする ことができる

ばなまきょーに うんがを つくることわ すーひやく
ねんらい よーろつぱじんの ししば けいかくした
ところで じつちにおーじかけの こーじを おこなった
ことも あったが せいこーを みるに いたらなかった さい
ごに あめりかがつしゅーこくわ こっかじぎょーとして
この こーじに ちゃくしゅし 10ねんの さいげつと
8おくえんの ひよーとを ついやして わが たいしよー



3ねん ついに これを つくりあげたので ある

べいこくが この うんがを つくるに せいしんした
のわ しゅとして せいしんの がくりを およしたからで
ある えいせい の せつびを よくして きけんな びよきを
こんぜつし いくまんの じゅぎょしゃの けんこを
はかったことや ほとんど あらゆる ぶんめいの りきを
うんよして やまを くづし ちを うがち かすいを
とめた ことなど 1として それかぬ ものわ ない

むかし たいへい たいせい りよよの あいだを お
らする ぶんわ はるか みなみあめりかの なんたんを お
まわり しなければ ならなかった しかし ばなまうんが
の かいついらいわ この ぶんが なくなり した
がって せかいの こゝろに おきな へんどを しょ
じたので ある

たい8 かいこん

むらはづれに ある しゅのぞきやまを かいこんして

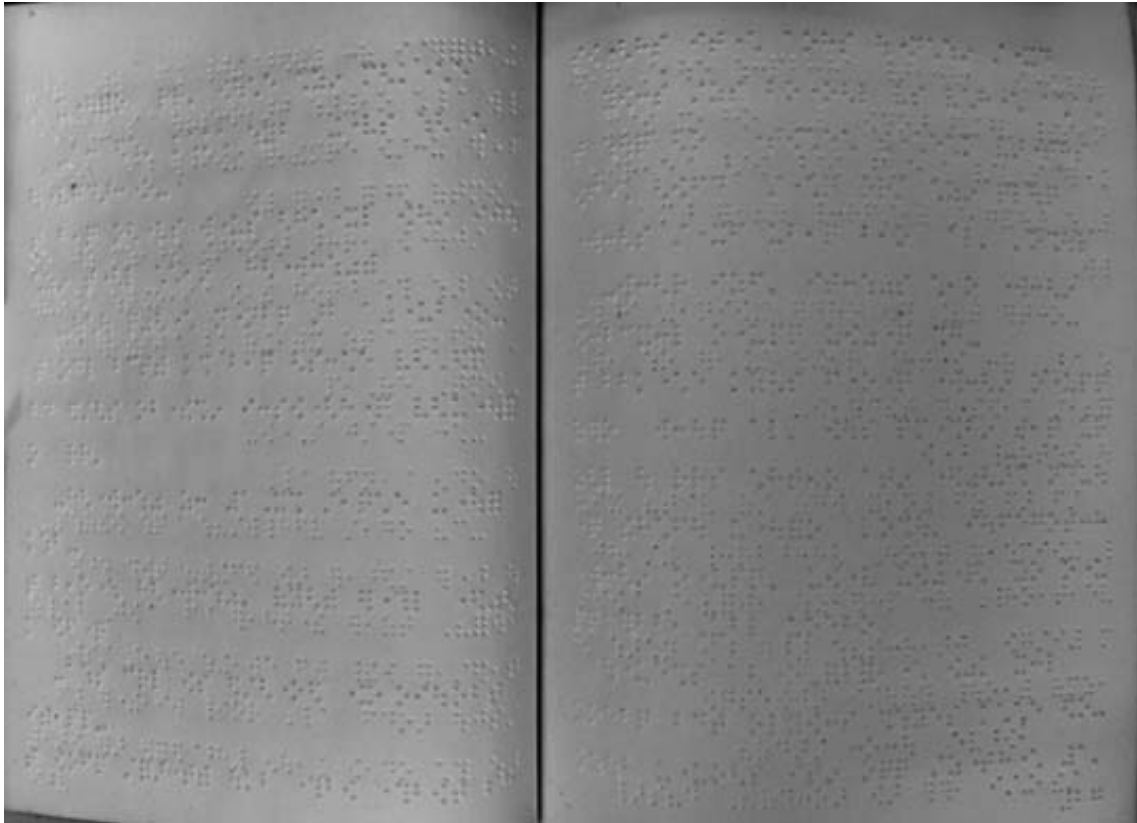
はじめてから もー ひとつきあまりに なる ちちわ まい
にち あにや こびきの りきぞーさんと あさ はやくから
いって ゆかた おそくまで はたらいて いる きょわ
わたくしも ついて いって みた

かりとった ぞーき きりたおした たいぼく ぼり おこ
した きの ねや いしころ まだ あらごなしの かいこんち
わ まるで あしの ぶんばも ない ありさまで ある
わたくしわ おもわず

「やー すっかり かわった」

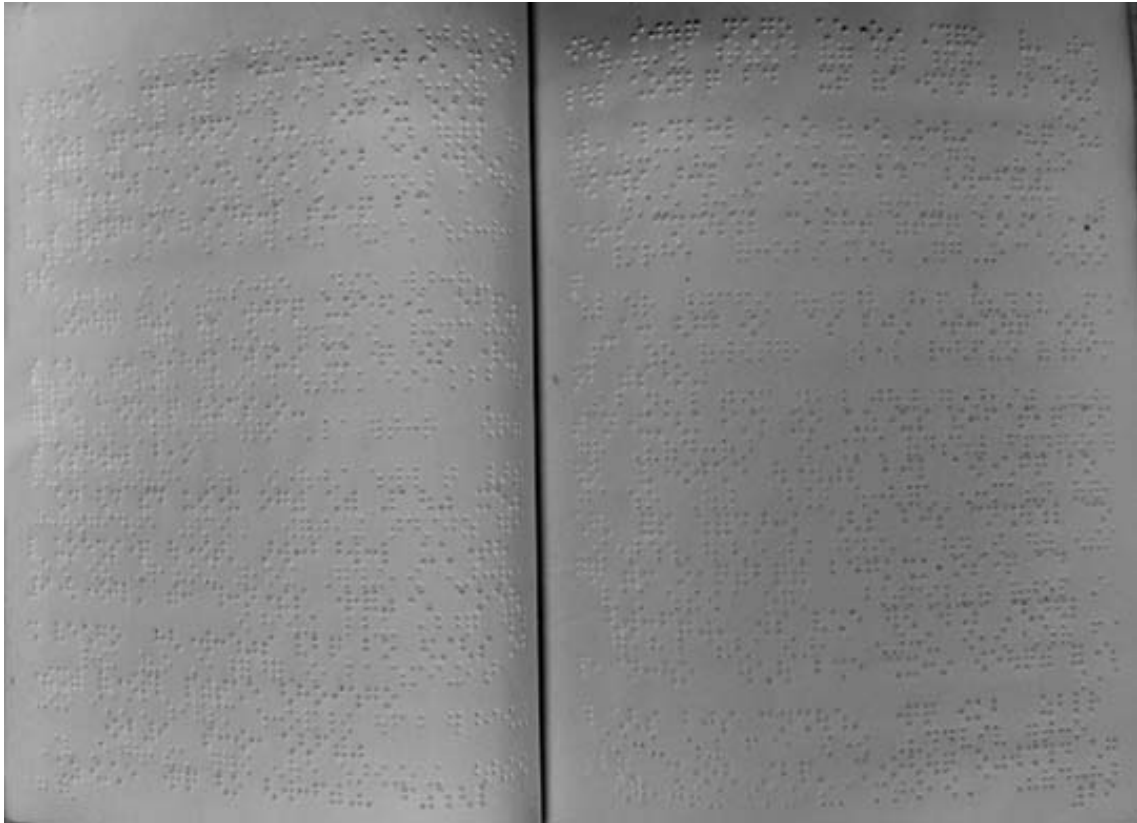
と こえを あげると あにわ

「うん これが 40にちかんの あせの たまものさ」
と いって かついで きた つるはしを したえ おいた
ちめんわ しもで まっしろで ある あたりわ いかにも
しづかで たまに ちる おちばの おとが かさり
かさりときこえる あにわ そこらに ちらばって いる
きの ねや こえだ などを ひろいあつめて きて たきび



をはじめて ちちわ こしから かまを めきながら
「あー けさわ なかなか さむい ゆびの さきが
しびれるよーだ」
と いった たきびの そばの きりかぶに こしを おろし
かまを とぎに かかった りきぞーさんも
「しかし てんきが つづいて よい あんばだ」
と たれに いうとも なく いった きのーから ひきかけて
いる けやきの たいぼくを おーのこぎりで ひきはじめ
た ちちわ
「りきぞーさん まー 1ぶく やってから はじめ
なさい」
と いったが りきぞーさんわ みむきも せずに げんき
な こえで
「あさの うちに この けやきだけ ぶったおしたいと
おもってね」
と こたえて やめよーとも しない ずいに ずいにという

のこぎりの おとが あたりの しづかさを やぶる
むこーの やまの いただきに ひの ひかりが あかあか
と さして きた どこからか ほがらかな ひよどりの
こえが きこえる やがて ちちわ かまを てにして
ぞーきの やぶえ はいって いった あにわ わたくしに
「そーきち おまえわ おとーさんの かった ぞーきを
こーいうぶーに たばねて はこんで くれ
と いいながら なまきの えだで ぞーきを たばねて
みせた そーして あにわ こしの てぬくいを とって は
ち
まきに し ちちの かりとった あとを げんきよく つるはし
で ほりかえし はじめた わたくしわ おしえられたとーり
ぞーきを たばねてわ はこび はこんでわ また たば
ねて せいっぱいに はたらいた
しばらくの あいだ めいめいが こんな ぶーに
はたらいて いると たにむこーの くさむらの なかから けた
たましい はばたきの おとを たてて やまどりが 1わ



とびたつた どーじに りょーじゅーの おとが つづ
けざまに 2はつ きこえた ひわ たいぶ たかく
なって さわやかに かがやき たかい たかい あおぞらを
ひわの ひとむれが みがるそーに とんで いく
ちちわ

「こーして みんな てを そろえて はたらけば らいねん
の あきわ もー まっしろな そばで この
めんが うづまって しまうのだ
と たのしそーに いった

かる きる ほる はこぶ たれも かも 1しん ぶん
にはたらくので しごとわ よそーいじょーに はかどり
9じごろにわ もー すーつぼの ぢめんが あらたし
くびらかれた りきぞーさんの ひいて いた けやきのたい
ぼくも みごとに ねもとから きりたおされた

たい9 とーこー かきえもん

かまばから でて きた きそーえもんわ えんさきに

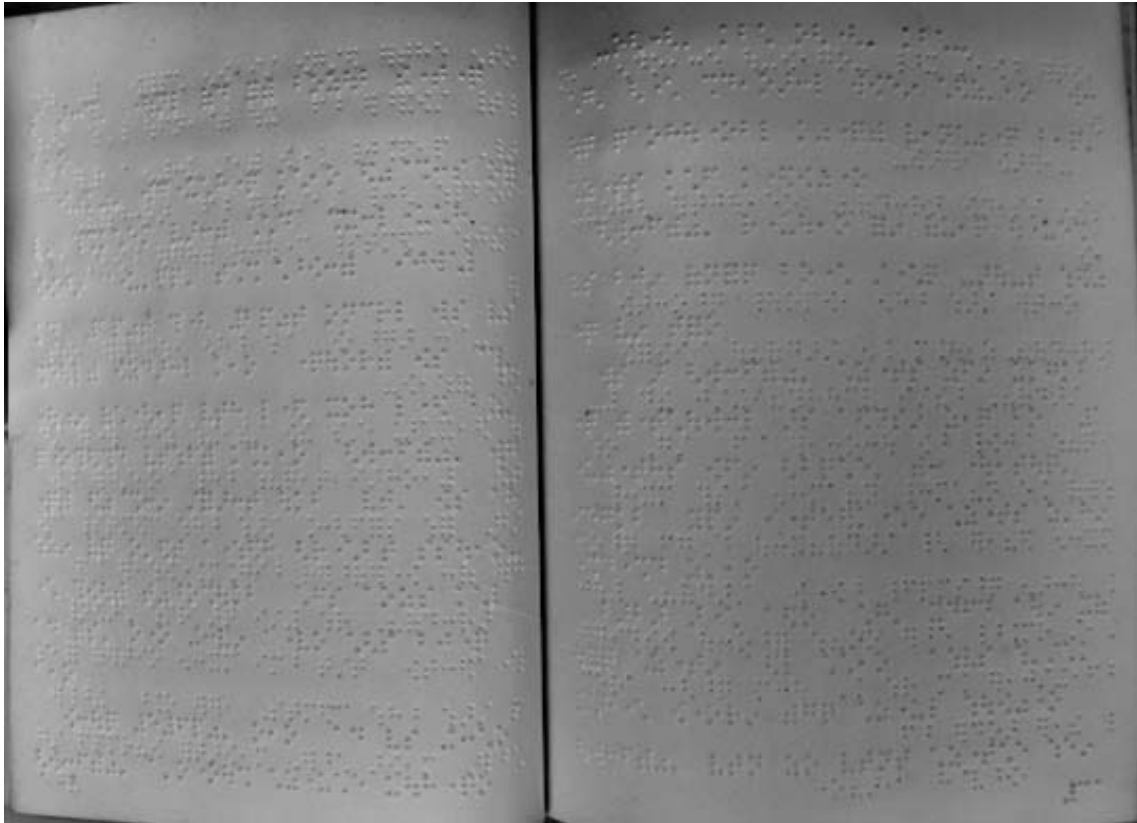
こしを おろして つかめた からだを やすめた ひわ もー
にしに かたむいて いる ふと みあげると にわの かきの
きにわ すずなりに なった みが ゆーひを あびて さん
ごじゅの よーに かがやいて いる きそーえもんわ
あまりの うつくしさに うっとり と みとれて いたが やが
て

「あー きれいだ あの いろを どーかして だし
たい ものだ」

と つぶやきながら また かまばの ほーえ とつて かえ
した ひごろから しげんの いろに
あこがれて いた

かやわ めの さめるよーな かきの いろの うつくしさに うた
れて もー たつてもいとも いられなくなったので ある

きそーえもんわ その ひから せきしょくの やきつけに
ねっちゆーした しかし いくら くふーを こらしても めざ
す かきの いろの うつくしさわ でて こない まいにち
やいてわ くだき やいてわ くだきして たんそくする かれ



の よーすわ じつに みる めも いたましい ほどで
あった

こんなわ そればかりで なかった けんきゅーの ため
にわ すくなからぬ ひよーも かかる くふーにばかり
こころを うばわれてわ とかく かぎよーも おろそかに
なる 1ねんと すぎ 2ねんと たつうちに その
くらしにも こまるよーに なった でしたちも この しゅ
じんを みかぎって ひとり にげ ふたり にげ いまわ
てだすけする ひとさえも なくなった きそーえもんわ それ
でも けんきゅーを やめよーと しない ひとわ この あり
さまを みて たわけと あざけり きちがいと ののしった
が すこしも とんぢやくしない かれの あたまの なかに
ある ものわ ただ ゆーひを あびた かきの いろで
あった

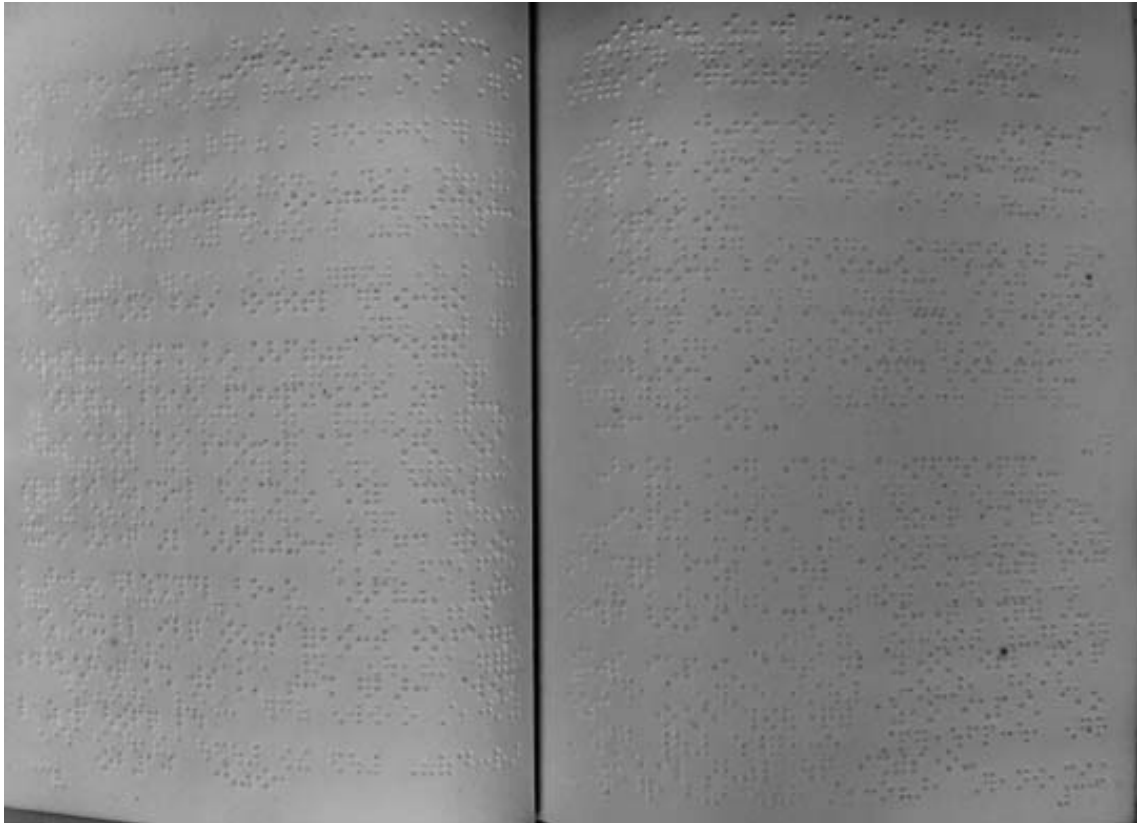
こーして 56ねんわ たった ある ひの ゆーかた
きそーえもんわ あわただしく かまばから はしりでた

「たきぎわ ないか たきぎわ ないか」
かやわ きが くるったよーに そこらを かけまわった そー
して てあたりしたいに なんでも ひつつかんで いったわ
かまどの なかえ なげこんだ

きそーえもんわ ちばしった めを みはって しばらく
ひの いろを みつめて いたが やがて 「よし」と さけん
で ひを とめた

その よ きそーえもんわ かまどの まえを はなれない
で もどかしそーに よの あけるのを まって いた 1
ばんどりの こえを きいてからわ もー じっとしてわ
おられない むねを おどらせながら かまどの まわりを
ぐるぐる まわった

いはいよが あけた かやわ ぶるえる あしを ぶみ
しめて かまどを あけに かかった あさひの さわやかな
ひかりが こだちを もれて かまばに さしこんだ
きそえもんわ ひとつ また ひとつと かまどから さらを



だして いたが ふいに 「これだ」と おーごえを あげ
た

「できた できた」

さらを ささげた きそえもんわ こおどりして よるこん
だ

こーして かきの いろを だすことに せいこーした
きそーえもんわほどなく なを かきえもんと あらためた
かきえもんわ いまから 390ねんばかり まえ ひ
ぜんの ありたに いた とーこーで ある かれわ この
のちも なお けんきゅーに けんきゅーを かさね くふーに
くふーを つんで よに かきえもんふーと いわれる せいこー
な とーきを せいさくするに いたった かきえもんわ ひとり
わが こくないに おいて ここんの めいにーと たたえられて
いるばかりで なく その なわ とーく せいよー しょこく
に まで きこえて いる

だい110 ぎんこー

「おとーさん こんど やくばの となりに りっぱな
たてものが できましたね あれわ なんですか」

「あれわ ぎんこーだよ いままでわ よこちよーの
ちーさい いえだったが こんどわ あーいう りっぱな
のを たてたのだ」

「ぎんこーと いえば おとーさんわ いつかも ぎん
こーえ いった おかねを あづけて くと おっしゃいました
ね ぎんこーわ おかねを あづける ところですか」

「まー そーだね」

「いったい なぜ おかねを あづけるのですか」

「おかねと いうものわ うちに しまっておく ものでわ
ない うちに おくと かじに あったり ぬすびとに とられ
たりする きけんがあるからね そーで なくても よ
ぶんの おかねがあると つい むだな ことにつかっ
てしまう だから すこしでも あまった おかねがあつた
ら かならず よきんに して おくものだ」



「あづけた おかねわ いつでも かえして もらえますか」

「ぎんこーの よきんにわ ていきよきんと いうのと とぎ よきんと いうのが ある とーざの ほーわ いつでも ひきだすことができるが ていきの ほーわ あづけた ひから はんとしとか 1ねんとか きまった きげんが こないと ひきだすことができない」

「それでわ とーざよきんの ほーが べんりですね」

「べんりだが その かわり りしが やすい ていきの ほーにわ りしが ずっと おーく つく だから とーぶん つかう みこみの ない まとまった おかねわ ていきよきんに したほーが よいのだ」

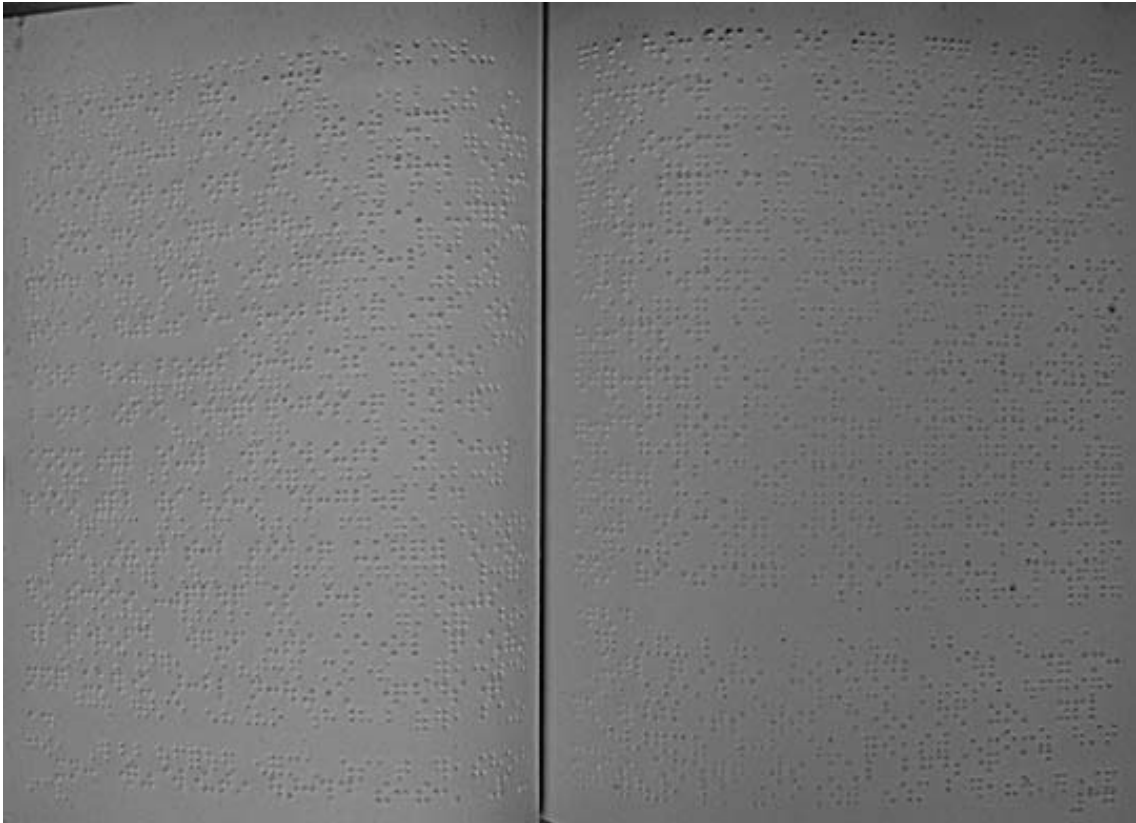
「いったい ぎんこーわ ひとから おかねを あづかってこれを どーするのですか おーせいの ひとに りしを はらうだけでわ ぎんこーが そんなを しないでしょーか」

「よのなかにわ おかねの ありあまって いる ひとも あるが また なにか じぎょーを おこそーと おもって いる ひとで おかねの ない ひとが ある ぎんこーわ ありあまって いる ひとから おかねを あづかって しきんの たらぬ ひとに かしつけるのだ かしつけの りしわ よきんの りしより たかくて あるから その さだけが ぎんこーの しゅーにゅーに なるのだ」

「なるほど うまく できたものですね」

だい111 でんしよばと

ほーぎょくを ちりばめたよーな かわいしい め べにを さしたかと おもわれる やさしい くちばし うつくしい うもーに つつまれた まるい むね はとわ みるからに あいらしい ものである この あいらしい ことりが たのほーほーでわ まったく つーしんが できなく なった ばあいでも いろいろの こんなんを おかして とーいところまで ししゃの やくめを つとめると きいてわ だれ



でも おどろかない ものわ あるまい

はとをつーしんに つかつたのわ よほど ふるい
だいからの ことと ことに 1じわ ひじょーに さかん
におこなわれたが むせんでんしん などが はつめい
せられて いらい しぜん かるんぜられるよーに なった
ところが せんねんの おーしゅーたいせんで やはり この
やさしい しかも いさましい つーしんしゃの はたらきの
いたいな ことが しょーめいせられたので いまでわ
かくこく とともに さかんに でんしょばとの かいりよーに
ちからを もちい その しょーを しょーれいして いる

はとわ よほど とーい ところで はなしても ただ
しく ほーこーを はんでいして やの よーに じぶんの
すに とびかえる それゆえ はとの からだに てがみをつ
けて はなせば よーいに つーしんが できるので
ある

ふつー でんしょばとを しょーする ほーほーわ 1

ていの しょーじょから たの とちに つれて いって とび
かえらせるので ある しかし この ほかに おーふく つー
しんの ほーほーも ある それわ あらかじめ こーおつ
の 2ちを きめて おいて 1ぼーを しょーじょ 1 1ぼー
を しょくじしょとし しょーじょから しょくじしょえ
かよって しょくもつを とるよーに ならして その おーらいを
りよーするので ある はとわ 1ぶんかんに やく 1
きろめーとるも とぶ ちからが あるから 450きろ
めーとるの ところを おーふくして しょくじするぐらいわ
なんでも ない また くらい ときの ひこーに なれさせて
やかんに つかうことも できるし しょーじょを いどーし
そこを みおぼえさせて とびかえらせるよーに することも
できる

はとに てがみを はこばせるにわ あしに あるみにゆー
むか せろいどの ほそい くだを つけ またわ むねに
ふくろを かけさせて その なかに いれるので ある



でんしょばとを りよーする ばあい かなか おーい
ひーきの ふじ ちゃくりくてんを しらせたり ぎょぎょー
しゃが おきから えもの たしよーや なんせん の ありさま
をつーちしたり とざんしゃが みちに まよって きけんに
おちいったとき すくいをもとめたり いろいろに りよーする
ことができる また せんそーの とき せんせんから
せんじょーを ほーじたり えんべいを たのんだり するに
つかうのも その ひとつで ある ことによーさいが
てきに かこまれて むせんでんしんきわ はかいせられ でん
れいしわ とちゆーで よーげきせられ まったく ほーほーの
つきた ばあい などに この いさましい しょーでん
れいしに たよるより ほかわ ない

あー あの かわい い はとが 1ど にんむを めい
ぜられると いさましく こーくに わを えがきながら
しかと ほーこーを みさだめ やの よーに もくてきちえ
むかって とんで いくのを みたならば なにびとも その

かしこさと いさましさに かんしんしない ものわ あるまい
だい12 はちの き

ゆきの ひの ゆーぐれに ちかき ころ じょーしゆー
さのの さとに つかれし あしの あゆみ おもく たどり
つきたる たびそー あり と ある あばらやの かど
ぐちにつえを とめて 1やの やどを かしたまえと
こえば みなりわ そまつなれど きひん たかき ふじん
たちいでて

「おりあしく しゆじんが るすで ございますの
で」

と ことわりぬ されど ふじんわ きのどくとや おもい
けん そーをば またせおき おのれわ しゆじんを むかえに
とて そとに いで ゆきけり

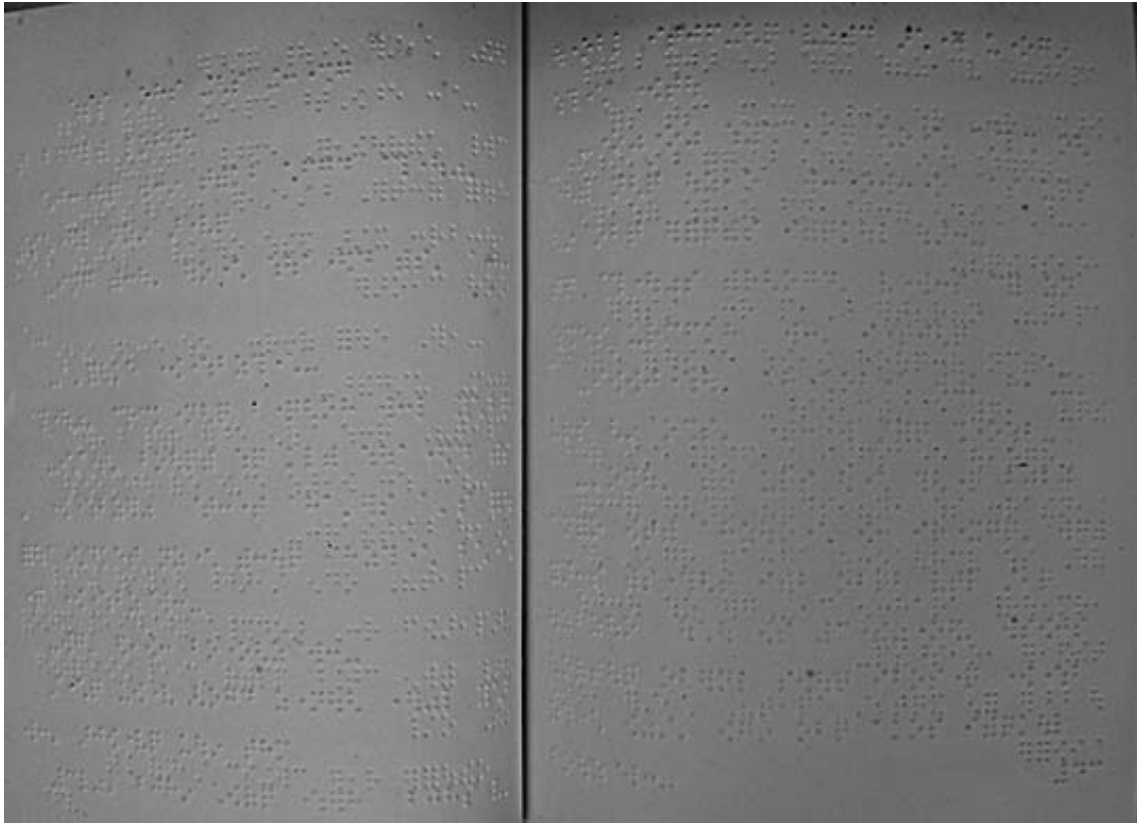
おりから たもとの ゆきを うちほらい うちほらいつつ
こなたえ きかかれるわ この いえの しゆじんなるべし

「おー ふったわ ふったわ よに さかえて いる ひと



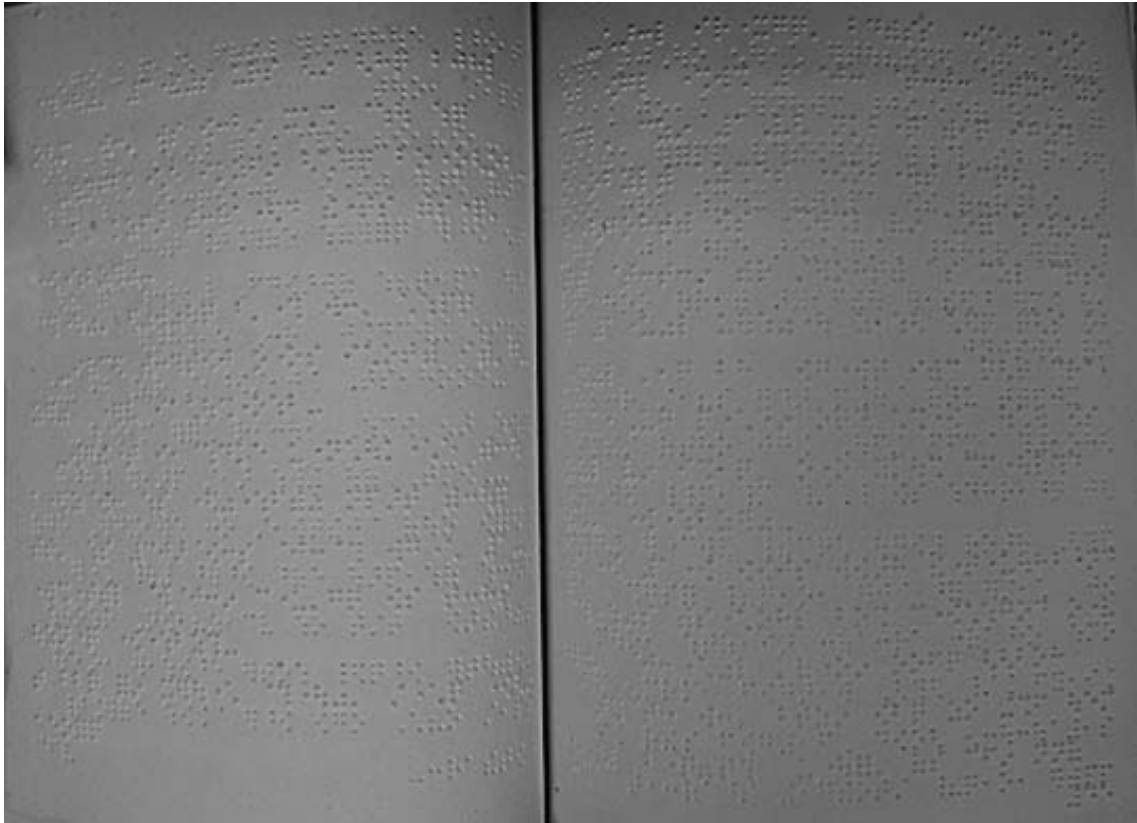
が なかめたら さぞ おもしろいことだ あるが」
かんがいに うちしづみて とぼとぼと あゆみを
はこぶ ふと わが つまを みつけて
「この おゆきに どうして でかけたのか」
「たびそーが 1やの やどを たのむと おせられ
て あなたの おかえりを まって いらっしやいます」
しゅじんわ いそぎで いえに かえりぬ
そーわ あらためて しゅじんに 1しゅくを こえり
されど しゅじんわ
「ごらんの とーりの みぐるしさ おきのどくながら
とても おとめ もーすことわ できません ここから 18
ちよーほど さきに やまもとと という しゅくばが あり
ます ひの くれぬい うちに ひとあしも はやく おでかけ
なさい」
というに そーわ かえす ことばも なくて いで ゆきぬ
すごすごと たちさる そーの うしろかげを みおくりたる

つまわ やがて おつとに むかいて
「あー おいたわしい おすがた とても あかるい
うちに やまもとまでわ おつきに なれますまい
おとめ もーしてわ いかかだ ございませよー」
どーじよー ふかき つまの ことばに しゅじんわ いたく
こころ うごきて
「でわ おとめ もーそー この おゆき まだ
とーくわ ゆかれまい」
しゅじんわ そーの あとを おいて そとに いでぬ
「のー のー たびの おかた おもどりください
おやど いたしましよー」
しゅじんわ こえを かぎりに よべど はるかに
ゆきすぎたる そーわ きこえぬにや ぶりかえらず ぶりつむ
ゆきに みちを うしない すすみも やらず たたずみたる
さまわ こかに
こまとめて そで うちはらう かげも なし



さの わたりの ゆきの ゆーぐれ
と いえるにも にたりけり
かろーじて そーを ともない かえられる しゅじんわ
ものかげに つまを よびて
「おつれ もーしわ したが さしあげる ものわ あるー
か」
「あわめしなら ございますが」
しゅじんわ うちうなづきて いできたり そーに むかいて
「おやどわ いたしても さて なにも さしあげる もの
わ ございません ちょーど ありあわせの あわの めし
めしあがるならと つまが もーして おりますが いかが
で ございませよー」
「それわ けっこー いただきませよー」
やがて はこび きたれる まづしき ぜんに むかい
そーわ よろこびて はしを とりぬ
3にんわ いろりを かこみて させり いろりの ひわ

したいに おとろえゆきて ひまもる よかぜ はだれを
さすが ごとし
「だんだん さむく なって きたが あやにく たき
ぎも つきて しまった そーだそーだ あの はちの
きを たいて せめてもの おもてなしに しよー」
とて しゅじんの もちきたれるわ ひぞーの うめ まつ
さくらの はちうえなり そーわ おどろきて
「おこころざしわ ありがたいが そんな りっぱな
はちの きを たくのわ どーぞ やめて ください」
「わたくしわ もと はちの きが すきで いろいろ
あつめた ことも ありましたが こー おちぶれてわ それも
むよーの ものずきと おもい たいいてい ひとに やって
しまいました しかし この 3ぼんだけわ そのころの
かたみとして たいせつに のこして おいたので ござい
ますが こんやわ これを たいて あなたの おもてなしに
いたしましよー」



しゅじんわ 3ぼんのはちのきをきりていろりに
たきぬ そーわ そのこーいをふかくしゃしさて
「しつれいながらおなまえをきかせていただきたい
「いやなまえをもうしあげるほどのものでわ
ごさいません」
しゅじんわ けんそんしていわず そーわ かせなて
「おみうけ もうすところただのおかたともおもわれ
ません ぜひ おあかしてください」
「それほどおっしゃるならはづかしながらもうし
あげましよーさのげんざえもんつねよしともうして
もとわさの30よきよーのりよーしゅそれが1
ぞくどもにしよりよーをうばわれてこのとーりの
しまつでごさいます」
といてめをふせしがしゅじんわ やがてごきを
あらためて

「かよーにおちぶれてわいるものごらんくだ
さいこれにぐそく1りよーちょーとーひとふりまた
あれにわうまを1びきつないでもっております
ただいまにかまくらのごたいじといたときわ
ちぎれたりともこのぐそくにみをかためさびたり
ともちょーとーをもちやせたりともあのうまにうちのつ
て1ばんにはせさんじまっさきかけててきのたい
ぐんにわっていいこれぞとおもうてきとうちあつ
てあっぱれてがらをたてるかくごしかしこの
ままにひをおくってわただむなくうえじにする
ほかわごさいません」
1ご1ごころのそこよりほどばしりいづる
しゅじんのものがたりにいたくうごかされたるたび
そーわりよーがんになみだをたたえてききいたり
よくちょーそーわいとまをこいてまたゆくえしらぬ
たびにいでんとすはじめわみのうえをつつみ



ひんの はちを つつまんとして やどを ことわりし つねよ
も 1やの ものがたりに うちとけてわ なごり なかなか
つきず いま 1にち とまりたまえと すすめて やまざり
き たびそーも また しゅじん ふーぶの じょー ころろ
に しみて そぞろに わかれがたき おもい あり され
ど かくて いつまで とまるべき みぞと ころろづよ
くも たちさりけり

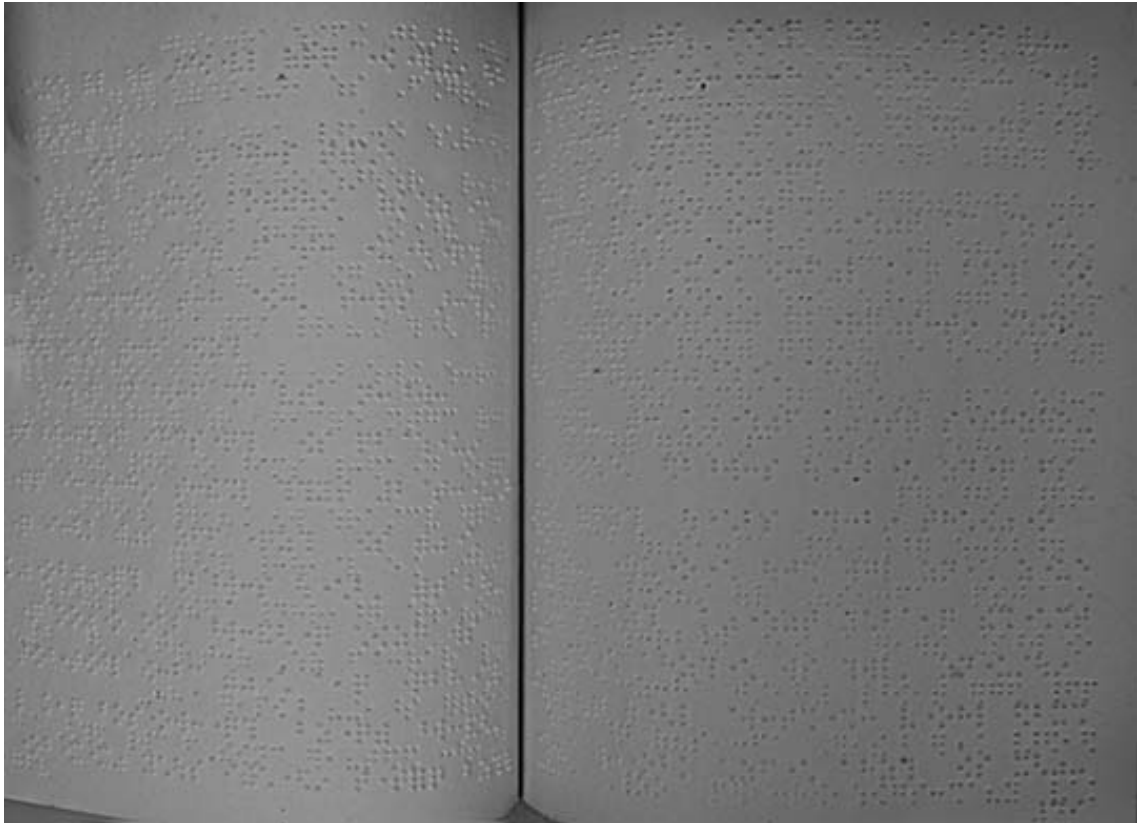
ふりつみし ゆきも あとなく きえて さんが そーぼく
よるこびに あふるる はるとわ なれり ころしも かまくら
より せいぞろえの さた にわかにくにくに つたわりぬ
つねよわ ときこそ きたれと やせうまに むちうって はせつけ
たり やがて めい ありて ごぜんに めされぬ しょ
こくの たいみょー しょーみょー きらぼしのごとく
ならべる なかに つねよりわ ちぎれたる くそくを つけ
さびちよーと0を よこたえ わるびれたる さまも なく
すすみて ごぜんに かしまれば さいみょーじ にゆー

そー ときより はるか の しょーぎより

「それなるわ さの げんざえもん つねよか これわ
いつぞやの おーゆきに やどを かりた たびそーで
あるぞ そのときの ことばに たがわず まっさき
かけて まいったわ かんしんの いたり さて 1ぞく
どもに うばわれた さの 30よきょーわ りひ あきらか
なるに よって なんぢに かえし あたえる また かんやに
ひぞーの はちの きを きって たいた ころざしわ なに
よりも うれしく おもうぞ その へんれいとして かがに
うめだ えちゅーに さくらい こーづけに まついだ
あわせて 3かしよの ちを なんぢに さづける」
ときよりわ なお 1どーに むかいて

「こんどの せいぞろえに あつまった しょさむらいの
うちに そしょーある ものわ もーしでるが よい りひを
ただして さいばん いたすで あるー」

1どー つつしんで うけたまわる うちに つねよわ あり



がたさ ひに しみ よろこびに みちて ごぜんを しり
ぞきけりとぞ

たい13 けいじょーの ともから

しばらく ごぶさた いたしました みなさま おかわ
りわ ありませんか こちらも 1どー ぶじです
いつか おやくそくした とーり きょーわ とーちの よーすを
すこしばかり もーしあげます

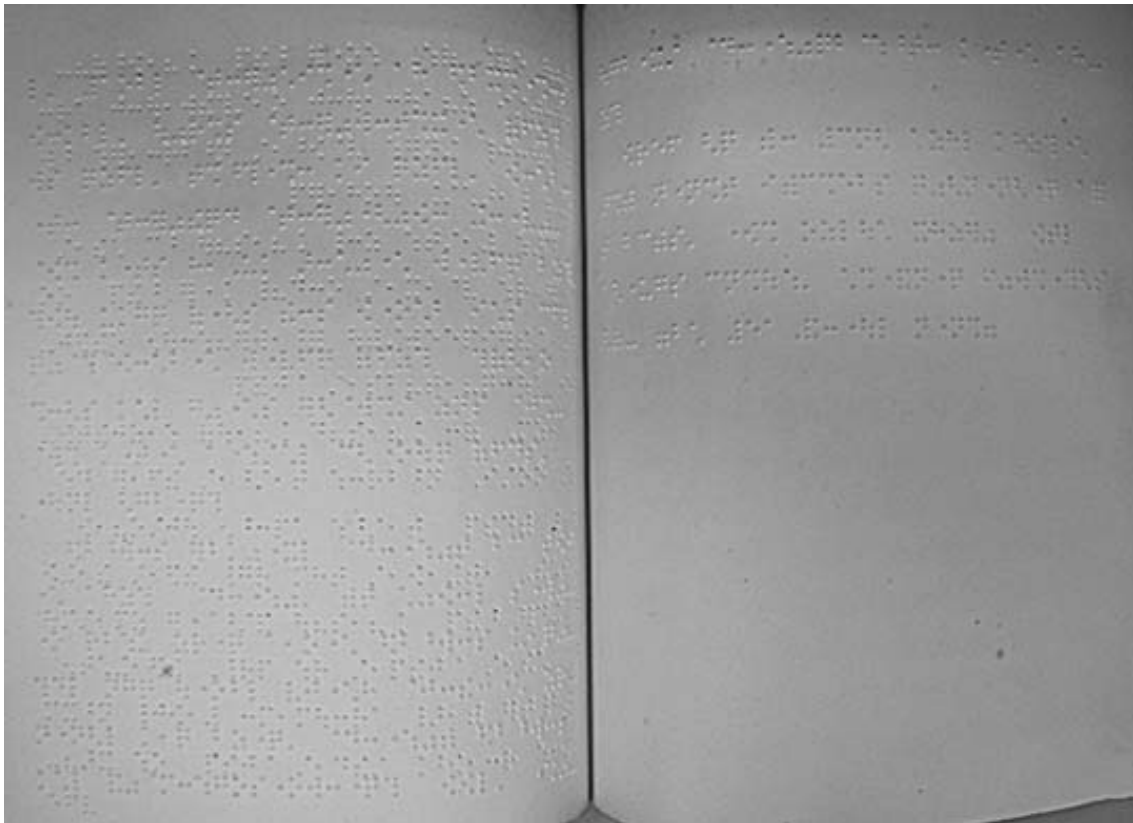
きしゃで けいじょーえ くる ひとわ つーじょー
けいじょーえきで おりるのです この ていしやばを
でて おーどーりを とーほくに すすむと 2ちょーばかり
で おーきな もん の まええ できます この もんが
なんだいもん です けいじょーの しかいわ もと いし
で たたんだ たかい じょーへきで かこまれ その
ところどころに こーいう もんが あって でいりぐち
になって いたのだそーです いまでも じょーへきわ
だいぶん むかしの おもかげを とどめて いますし

もんも おもな ものわ のこつて います なんだいもん
どーりから ほんちょーどーり こがねまちどーり きょー
ろ どーりに かけての 1たいが けいじょーでの いち
ばん にぎやかな ところです

えきの ひがしの ほーに なんざんと いう やまが
あつて その 1ぶが こーえんに なつて います ここ
にわ あまてらすおおみかみと めいぢてんのーとを おまつり
した

ちょーせんじんじゃが あります

ぼくわ もー なんざんえ なんども のほりました
が ここからわ けいじょーの しかいが まるで えの
よーに みえます しかいの しゅーいを とりかこんだ
やまやまわ じはだが しろく それに まつが まばら
にはえて います なんざんと むかいあつて ほくがくと
いう やまが ありますが その すそにわ まつばやしを
うしろにして みぎに しょーとくぐー ひだりに けいぶん
ぐーの そだいな かまえが あります この ぶん

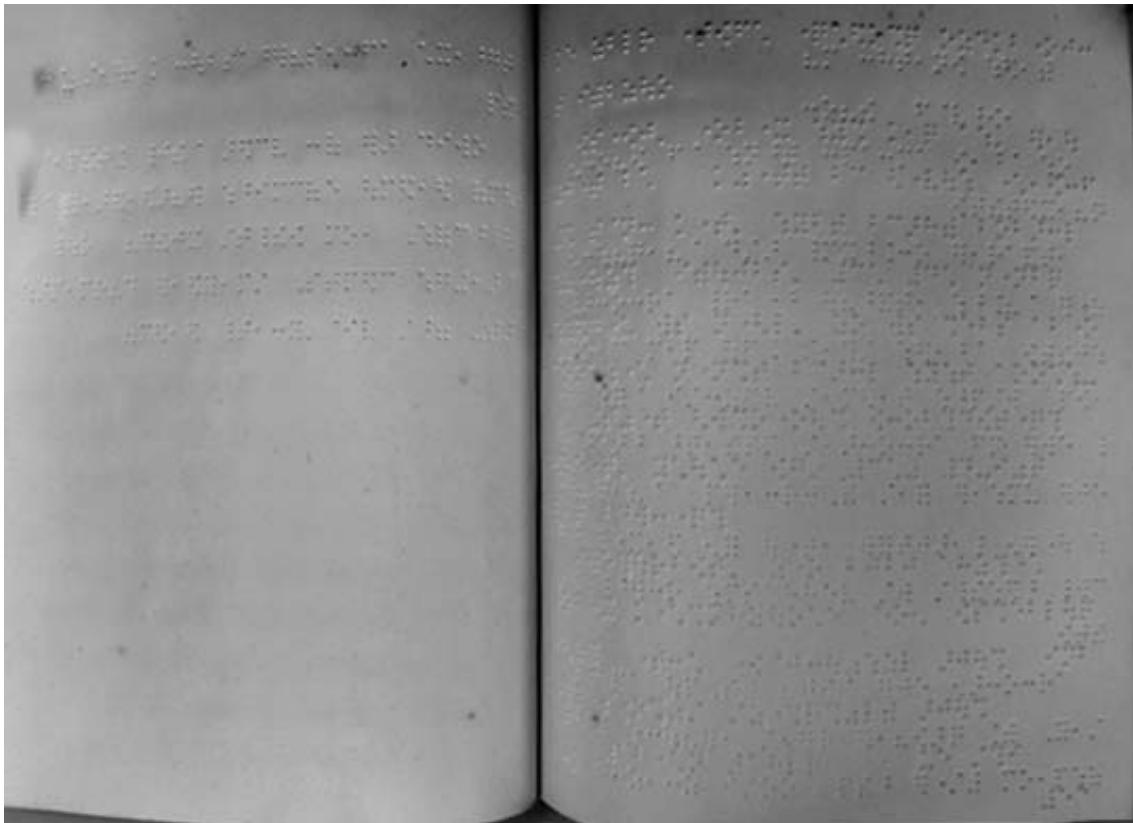


にわ 1たいに ちょーせんかおくが あり けいふくぐーの
こーないにわ しんちくの ちょーせんそーとくぶが みえます
その てまえにわ とくじゅぐー なお てまえにわ こーかい
どー ちょーせんほてる ちょーせんぎんこー ゆーびん
きょく などの りっぱな よーかんが そびえて います
すこし はなれて みぎの ほーの こだかい おかの うえに
てんしゅきょーかいが そびえて みえます すみきった
くーきの なかに れんがの せきしよくや まつの りよく
しよく などが あざやかに うきだして みえるのわ
じつに きれいです

けいじょーの せいなんぶに りゅーざんと いう ところ
が あります りゅーざんわ もと かんこーに のぞん
だ ちいさな まちで あったが けいじょーの はってん
するにつれて したいに ひろがり りょーほーが まち
つづきになって いまでわ りゅーざんも けいじょーの
なかに へんにゆーされたのだそーです ここにわ ぐん

しれいぶや ゆーざんていしやちょー などが あり
ます

こちらえ きて もー 3つき あまりに なりますが
よくも つづくとおもうくらいの てんきつづきで あめ
というものわ ごく たまにしか ふりません ことに
あきはれの うつくしさわ かくべつで えんそくずきの
きみ (いか 51ページに つづく)



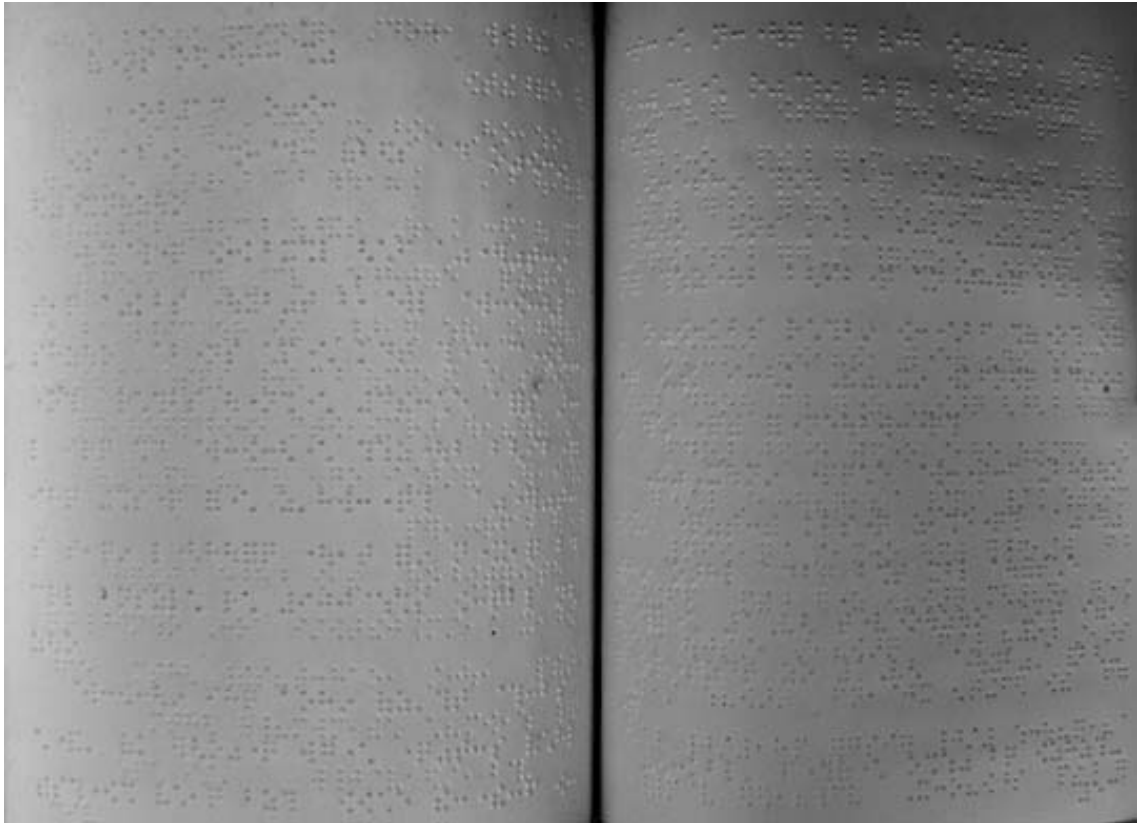
なら まいにち どこえか でかけたくて たまらないだろー
と おもいました

このごろわ たいぶ さむく なって あさわ せっし
0ど いか なんとと いう きびしさ がっこーえ
ゆく とちゅー などわ さむいと いうよりも いたいはーに
かんじます おもしろいのわ 3か 4か つづいて
さむければ その つぎにわ また その くらい の あいだ
あたたかさが つづく と いうよーに さむさと あたたかさ
が ほとんど きそくたたく こーたいすることです
こちらでわ むかしから これを 3かん 4おんと
いって いるそーです

おしらせしたいことわ まだ いろいろ ありますが
たいぶ ながくなりましたから きょーわ このくらいにして
おきます どーか ごりょーしんさまに よろしく おついでに
のだくんや やまぐちくんにも よろしく

12がつ 18にち はら やすお

51



みづの たけじろー くん

だい14 たんこー

この あいだ きゅーしゅー みつけのある たんこーを
けんぶつしました

じむしょで こーないふくに きかえ あんぜんとーを
もって あんないの じむいんと いっしょに しょーこーきに
のりました あいづの かねが なんと すぐ うごき
だす ちかすいの しづくが 4ほーから あめの よー
におちてくる しょーこーきが すさまじい いきおいで
おりて ゆくので めが まわりそーです あんぜんとー
の とつてを にぎりしめて じつと めを つぶっている
うちに いつのまにか ちか900しゃくの こーていに つき
ました

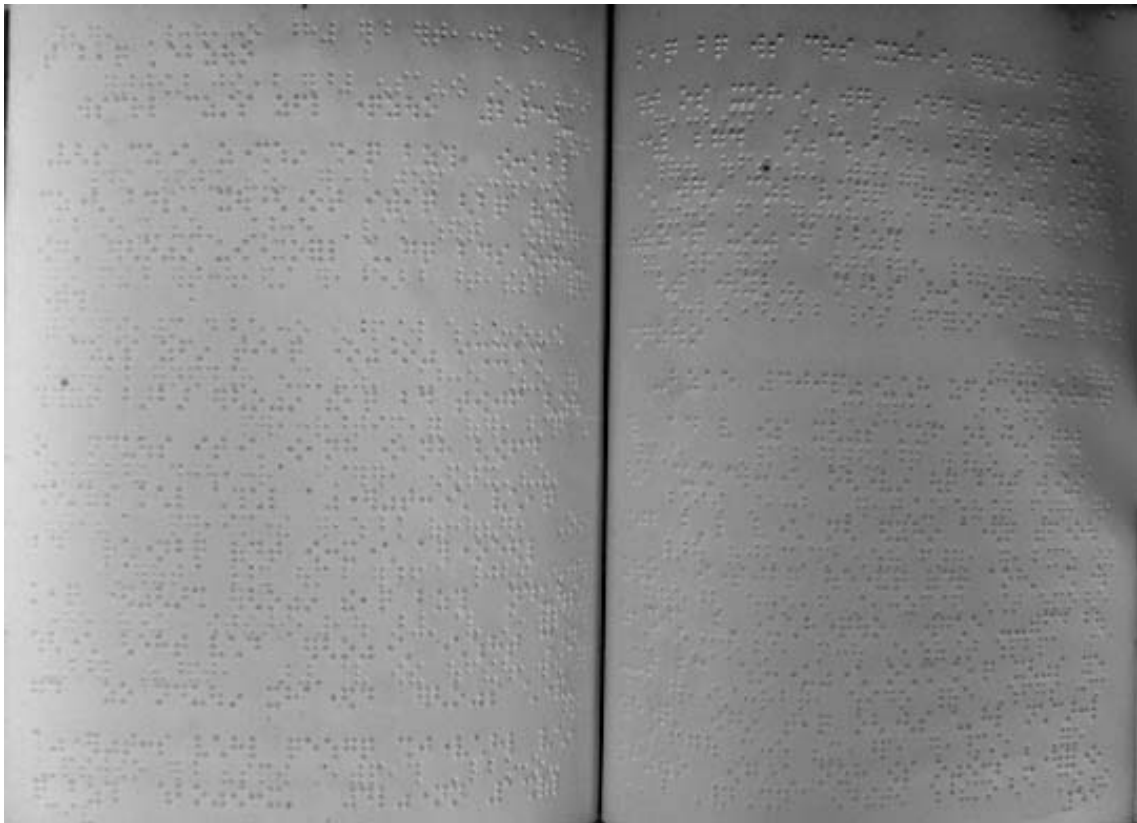
しょーこーきを おりて あたりを みまわすと しゅーいの
かべわ みな せきたんで それが でんとーの ひかりに
ものすごく ひかっています ここから ほーぼーえ こー

どーが つーじて いて ひろい こーどーにわ でんき
きかんしゃが たんしゃを ひいて いったり きたりして
います

こーどーを すこし いて ほんぶしつ の まえに
でました しつ の なかの なかにわ おーきな ほんぶが いく
つも すさまじい いきおいで かつどーして います これ
わ たんこーないの ちかすいを こーがいえ くみだす ため
で こんな おーきな ほんぶを そなえつけて いるところ
わ せかいでも めづらしいそーです

ほんぶしつを でてから しょーどーえ はいりました
ここわ でんとーも ないの で まっくらです あんぜん
とーを たよりに あるいて いくと ふいに あしもとから
ねずみが 1びき とびだしました はっと おもっ
て たちどまると また 1びき じむいんわ へいき
で

「こーないにわ ねずみが たくさん いて こまります」



と いうて わらいました

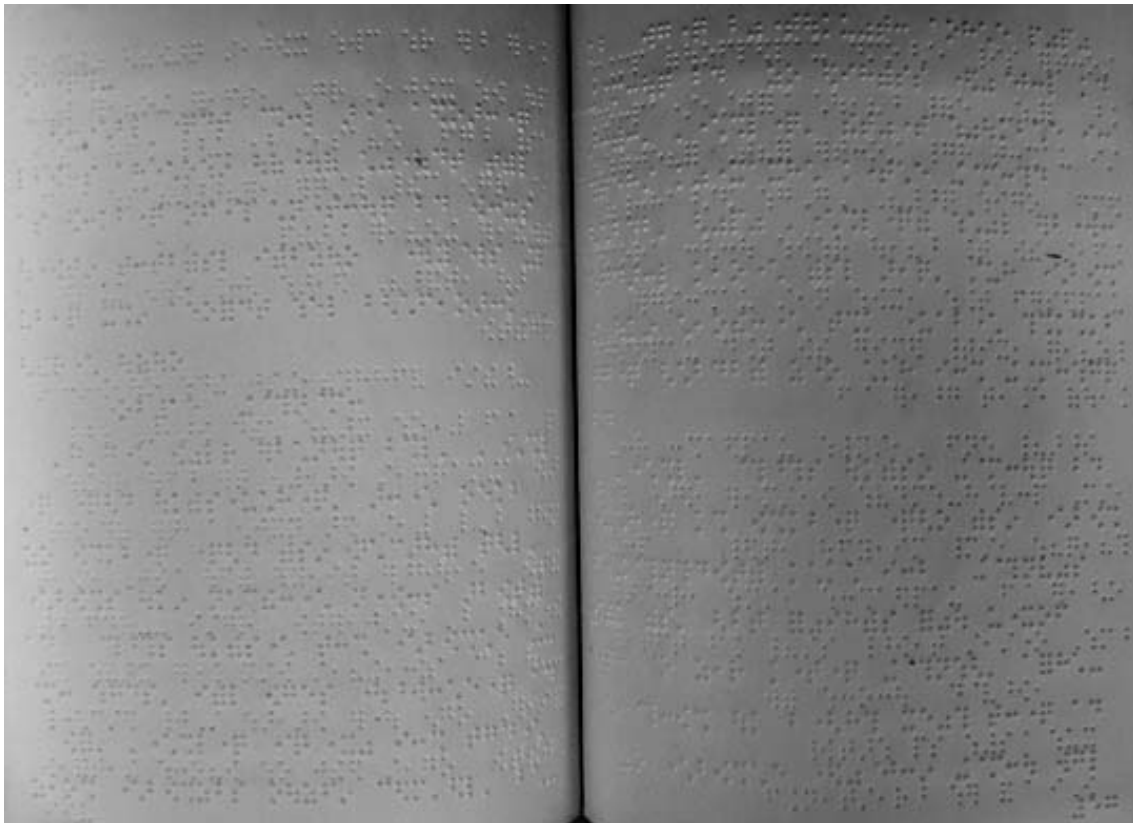
そのうちに うまやの まえに でした 230
びきの うまが まぐさを くって します こーなに
うまが いるのわ ふしぎだと おもって きいて みると
これわ せきたんを はこぶために かかれて いるのだそー
です

うまやの まえを とおって だんだん おくふかく
すすむと いよいよ せきたんを ほって いる ところえ しまし
た つるはしの おとが こつり こつり きこえる
くらやみの なかに かすかに あんぜんとーが ひかって
いる ちかづいて みると こーぶが あせだらけに
なって げんきよく せきたんを ほっています つるはしの
さが きらりと ひかる せきたんが がさりと くづ
れる また つるはしを ふりあげる せきたんの かべわ
あんぜんとーの ひかりに てらされて くらひかりに ひかっ
ています さいたんこーぶわ 4にんづつ 1くみに

なって いて その うちの ふたりが せきたんを ほりくづ
すと たの ふたりが それを ざるで はこんで たん
しゃに いれる たんしゃが いっぱいになると うまかた
が それを うまに ひかせて でんきかかんしゃの かよう
みちまで はこんで いきます

きと じむいんわ つぎの よーな ことを はなして
くれました

「いまから 400ねんばかり まえの ことだそーで
す ある ひ この ふきんの やまえ たきぎを とりに
きた ひやくしょーが たきひを していると そばの
くろい いわに ひが つき けむりを あげて もえだし
ました おどろいて しらべて みると あたりわ おなじ
まっくらな いわばかりでした それから 『もえる いし
』という ひよーばんが たかく なって ふきんの むら
むらでわ これを とって たきぎの かわりに つかうよーに
なりました これが つまり この たんこーのはじめだ



そーです」

こーがいに できと きゅーに よが あけたよーで
にっこーの ありがたさを しみじみ かんじると ともに
あの こーないで たえず かつどーして いる こーぶの
しごとを とーといものに おもいました じむしょの ゆに
はいつて ぶくを あらためると さらに いきかえったよーな
きもちが しました

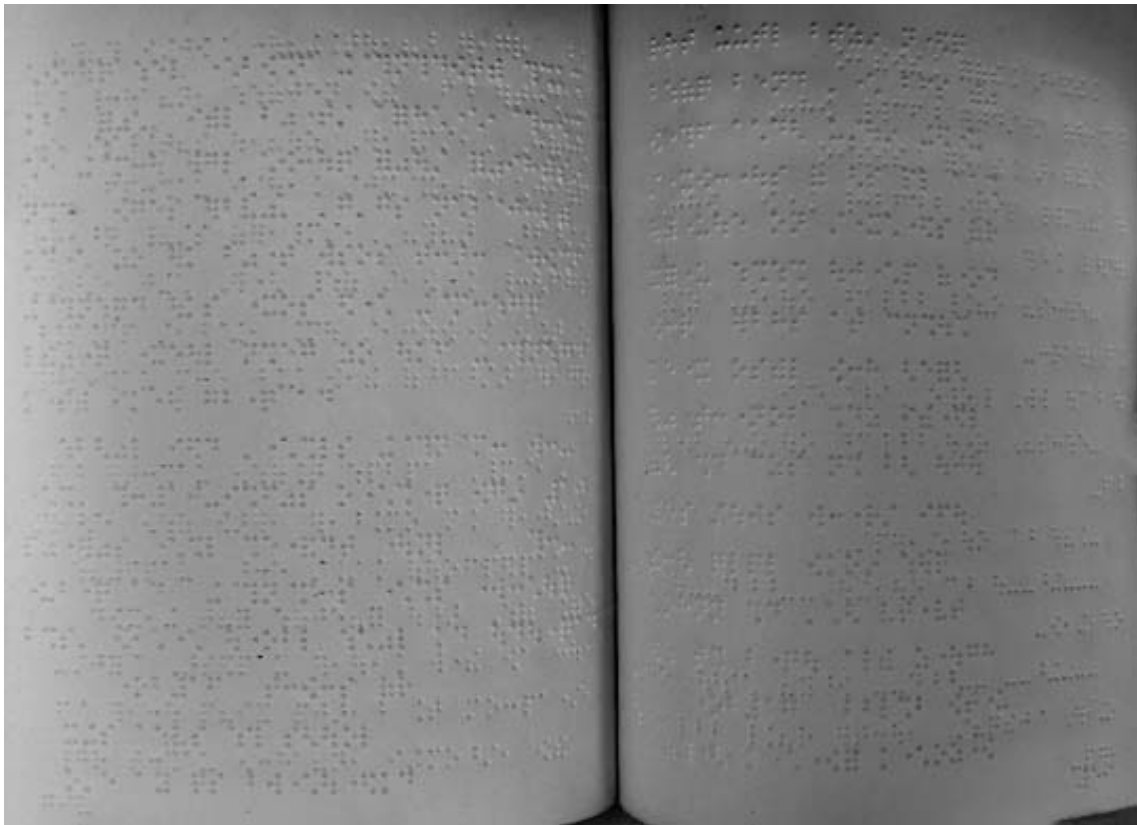
だい15 ゆしゅつにゅー

われわれが こんにち せいかつして いくにわ わがくに
で できる しなものばかりでわ よーが たらない
また こくないで できる ものを つかうよりも ときにわ
がいにくの しなを つかうほーが つごーの よいことも
ある しゅじゅの しなものが とーく がいにくから ゆ
にゅー されるのわ おもに これらの じじょーからで ある

こめわ わがくにで すいぶん おーく とれるが
まったく がいにくまいの たしまえを うけぬわけにわ いか

ない それで いんどしなはんとー あたりから ねんねん
ゆにゅーして いる また けおりもの の げんりょーに なる
よーもーわ わがくにでわ ほとんど さんしないから おー
すとらりや なんぶあぶりか などから ゆにゅーする
きかいるいわ きんねん わがくにでも さかんに せいぞー
されるよーに なったが ものに よってわ やはり がいにく
の しなを かつたほーが とくな ばあいが すくなくない
それで きかいるいも まだ かなり おーく ゆにゅーされて
いる

わがくにわ しゅじゅの しなものを ゆにゅーして いる
ばかりで なく こくないで できた ものを がいにく
え ゆしゅつすることも なかなか おーい ゆしゅつひんの
おもな ものわ きいと めんおりもの めんし はぶたえ
どー ちゃ まっち などゆしゅつさきわ あめりか
がっしゅーこく しな いぎりす ぶらんす とーで ある
また がいにくから げんりょーを ゆにゅーし それに



かこして さらに がいにくえ ゆしゆつすることも すくなく
ない めんかわ おもに いんどや あめりかがっしゅーこく
から ゆにゆーし それに かこして めんしや めんおりものを
つくる これらの せいひんわ われわれの つかいりよーにも
なるが また しな いんど そのたの とーよー しょこくえ
ゆしゆつされる しなの ぶたの けが ゆにゆーされて
にほんで ぶらしにつくられ また しなえ ゆしゆつされる
なども おなじ れいで ある

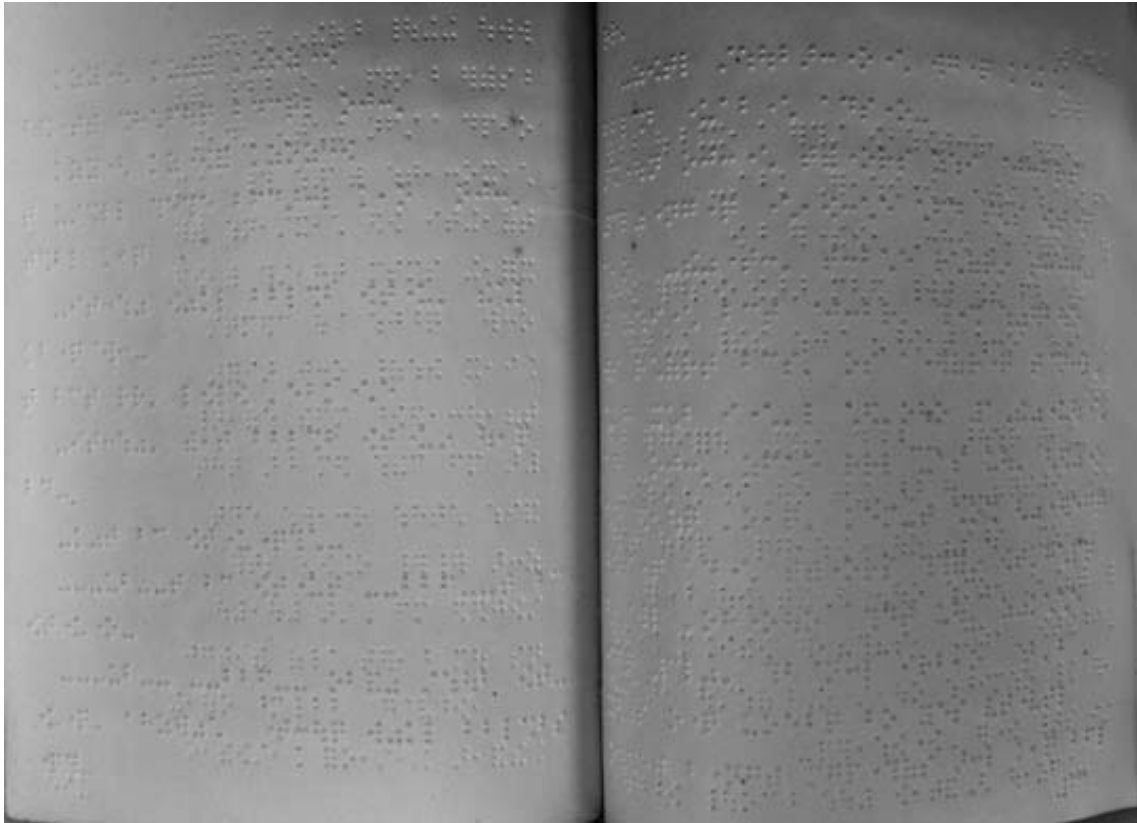
さいきんにおける わがくにの ゆしゆつにゆー そー
がくわ すー10おくえんの たがくで これを 10
ねんぜんの がくに くらべると じつに
はいで ある ゆしゆつにゆーの がくの そーかして
いくのわ こっかが したいに さかんに なる しるしてある

だい116 とーこーの みち

ふゆの あさひの さす のきしたに
たわら あむ ての いそがしげなる

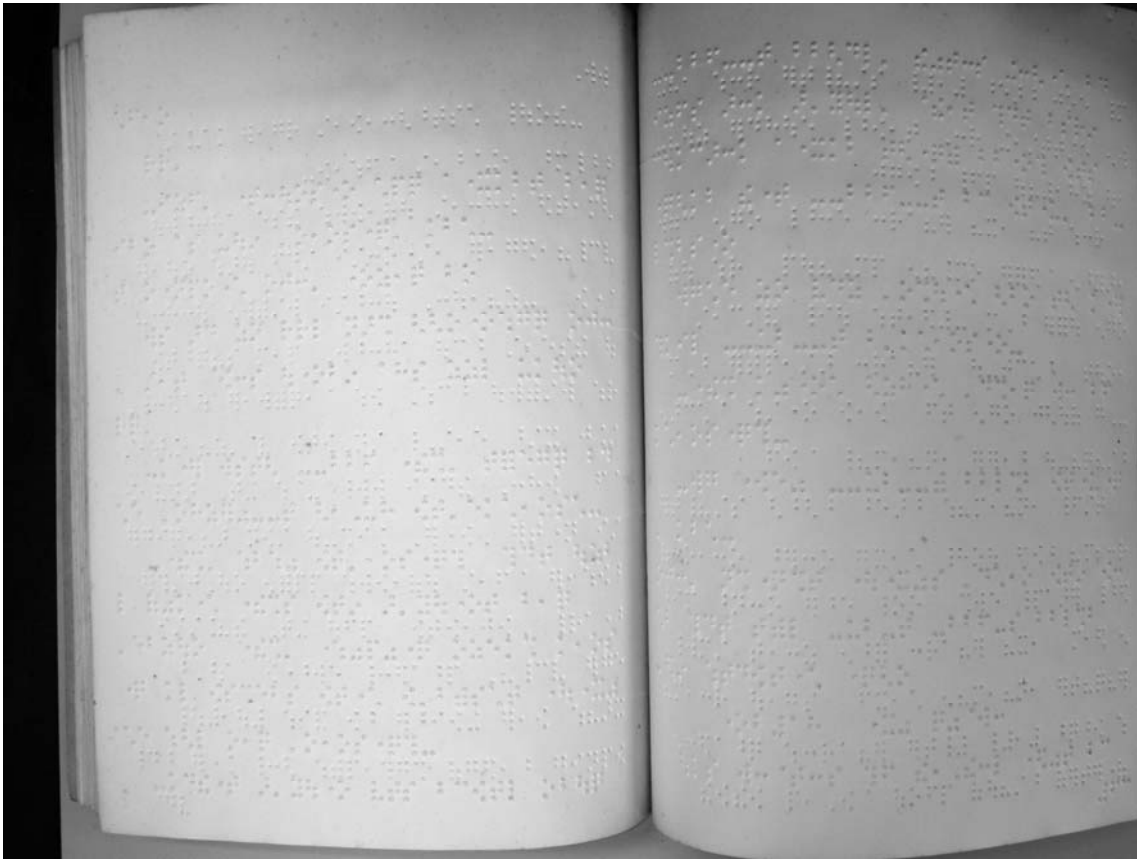
ちちと ははとに いとまを つげて
いさみて いづる わが いえの もん
こずえ あかるき はやしを ゆけば
やぶこーじの み きの ねに あかく
しもばしら たつ やぶかぎの みち
ぶめば さくさく しるかぬ みだる
こーち せいりの あと うつくしく
ならぶ たのみに こーり きらめき
しんどーづたい くるま おもげに
ひき くる うまの つく いき しろし
むらの やしろの そーぢや おえし
こーき てにてに こなたを さして
かたりつつ くる わかき ひとびと
けさ とく いでし あにも まじれり

だい117 いれにくい ことば
なまむぎ なまごめ なかたまご



なまむぎ なまもめ なまたまご
いくども くりかえして いるうちに たろーわ
なまむぎ なまごめ なまたまご
と はやくちに すらすら いえるよーに なった たろーわ
とくいに なって
「おとーさん こんなに いいにくい ことばわ ほかに
ないでしょー」
と いうと ちちわ にこにこ わらいながら
「おとーさんわ もっと いいにくい ことばを して
いる」
「なんと いう ことばですか」
「『はい』と いう ことばと 『いいえ』と いう
ことばだ」
「『はい』 『いいえ』 たいへん やさしい こと
ばでわ ありませんか どーして そんなに いいにくいの
です」

「まことに やさしいよーだが それで なかなか
いいにくい ばあいがあるのだ」
よくじつ たろーが ともだちの まさお りょーいちと
3にんづれで がっこーから かえる ときの ことで
あった 「ほんどーわ とーいから ちかみちを とーろー」
と まさおが いうと りょーいちわ すぐ さんせいした
その ちかみちと いうのわ たの あぜみちで とちゅーにわ
かなり ふかい おがわに かけわたした 1ぼんばしが
ある たろーわ まえから ちに 「あの はしわ きけんだ
から けっして わたってわ ならぬ」と かたく きんぜられて
いたので あるが ともだちの すすめを ことわりかねて
いっしょに わたりだした すると はしわ まんなかから
おれて 3にんわ すいちゅーに おちいった さいわい
ふきんの たで はたらいて いた むらの ひとびとに
たすけられ いづれも むねなずみの よーに なって いえに



かえった

ちぢわ

「おまえわ どーしたのだ かねて あぶないと いって
おいた あの はしを わたったのでわ ないか」
と たづねたが たろーわ だまって いた

その よる また ちぢに つよく ききただされて たろー
わ やつと きょーの したいを ありの ままに はなした
ちぢわ

「なぜ そのとき 『いいえ ぼくわ とめられて いる
から わたりません』と きっぱり ことわらなかつたのか」

「ぼくわ さいさん ことわつたのです すると しまい
に みんなが ぼくの ことを よわむしだ と いって
わらいました ぼくわ ざんねんで たまらなく なつたの
で なに このくらい の ことが こわいものかと じぶん
から さきに たつて わたつたのです」

「なるほど よわむしだ ひとの いうことに たいして

『いいえ』と いいきるにわ ほんとの ゆーきが いる
おまえの よーな よわむしにわ ひよつと すると いのちを
うしなうよーな あぶない ときでも いいだす ことの
できない ほど 『いいえ』と いう ことばわ いい
にくいのだ

それから また ひるま わたくしが きいた とき なぜ
すなおに 『はい』と いわなかつたのだ」

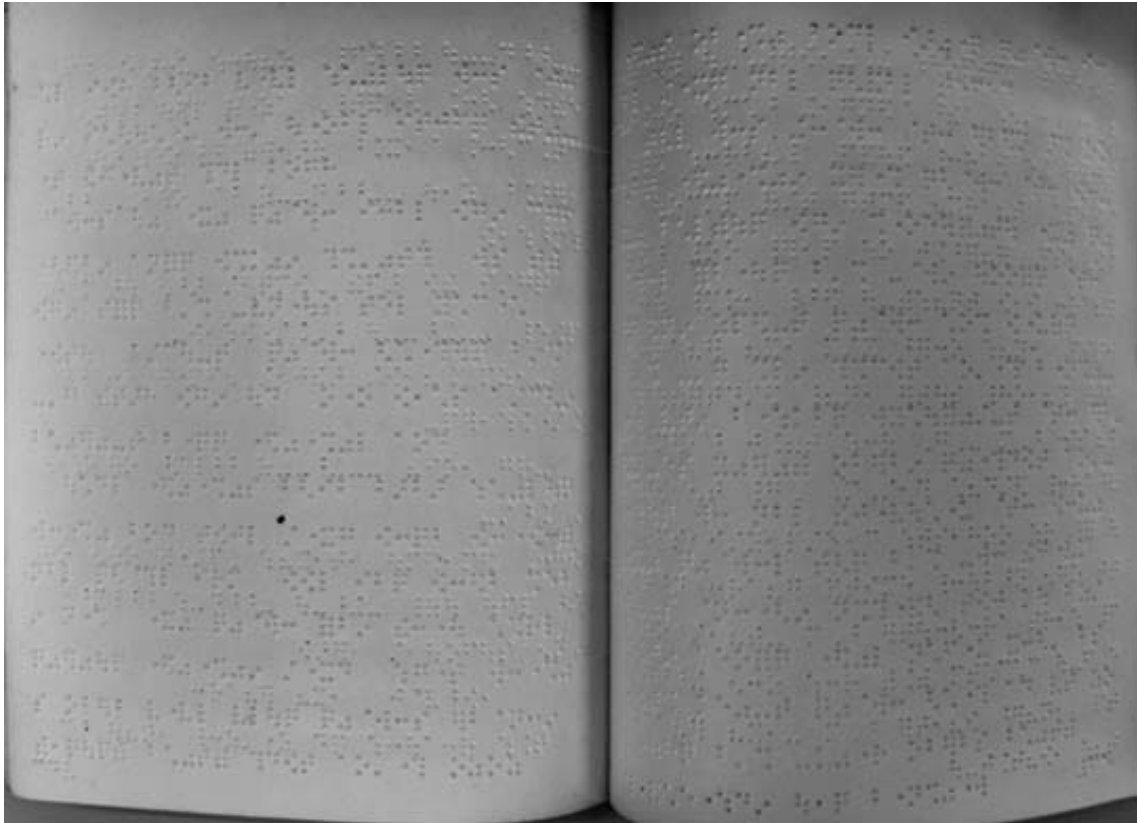
「ぼく なんだか きまりが わるくって そー いえ
なかつたのです」

「それ ごらん 『はい』も いいにくい ことばで
わ ないか」

たろーわ つくづく と じぶんの わるかつた ことを こー
かい すると ともに 「はい」と 「いいえ」の いいにくい
わけを さとることが できた

だい18 ぶん てんしょー

しなの そーちよーの すえ ほっほーに げん と いう



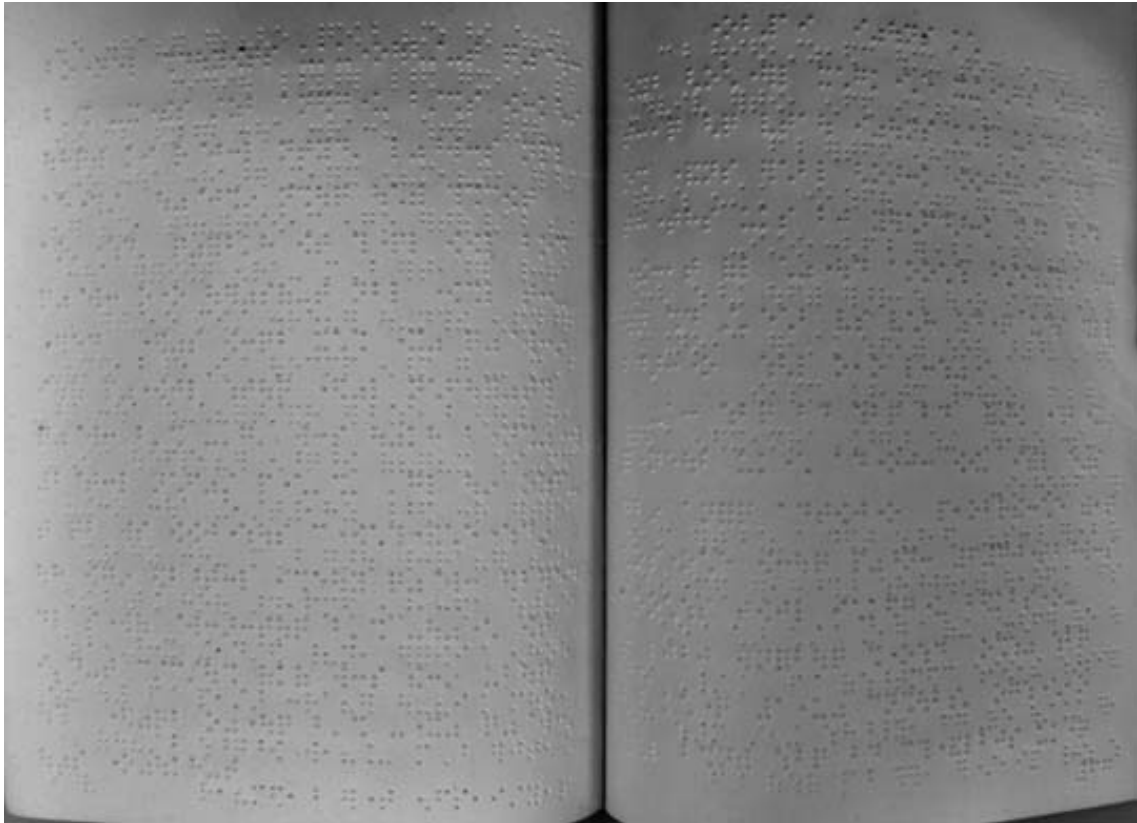
くに おこり いきおい ひびに さかんにして そーの りよー
ちを おかしがば そーわ したいに おとろえて ほとん
ど ほろびと するに いたれり

そーの しん ぶん てんしょー おーいに これを うれえ
ぎへいを あつめて こくなんを すくわんとす その とも
これを とめて いわく 「ひるじの とらに むかうが
ごとし あやうし」と てんしょー きがずして いわく
「われ もとより これを しる ただ こっかの あやうきを
いかんせん」と いでて げんぐんに あたる

しかるに げんぐんの いきおい いはいよ さかんにして
そーぐん いたる ところに やぶれ こーてい こーごーと
ついに てきしゅーに おちぬ ここに おいて こーけい くらい
をつぐ ぶん てんしょー めいを ほーじ かくちに
てんせんして げんぐんを やぶる されど そーぐん
の たいせい ひびに ひにして てんしょーの せいちゅーを
もってしても いかんとも すること あたわず たまたま

げんの たいぐん いたるに およんで てんしょー おー
いに やぶれ ついに てきへいに とらえらる

ときに そーの ゆーしょー ちょー せいけつ よく たた
かいて げんぐんを ふせぐ てきしょー ちょー こー
はん いかにもして これを くだらしめんとし ぶん てん
しょーに めいじて いわく 「しよを したためて ちょー
せいけつを まねけ」と てんしょー かたく こぼみて
いわく 「われ くにを すくうこと あたわず いづくん
ぞ ひとを いざないて そむかしめんや」と ちょー せい
けつらの ぶんせんも たいせいを てんずること あたわ
ずして そー ついに ほろびしかば ちょー こーはん
ぶん てんしょーち ときて いわく 「そー ほろびぬ
おんみの ちゅーぎをつくすべき ところ なし いまや
こころを あらためて げんに つかえば ふーきわ いの
ごとく ならん」と てんしょー きがず ある ひと また
なじりて いわく 「なんぢ たいせいの いかんとも
すべからざるを して いづくんぞ

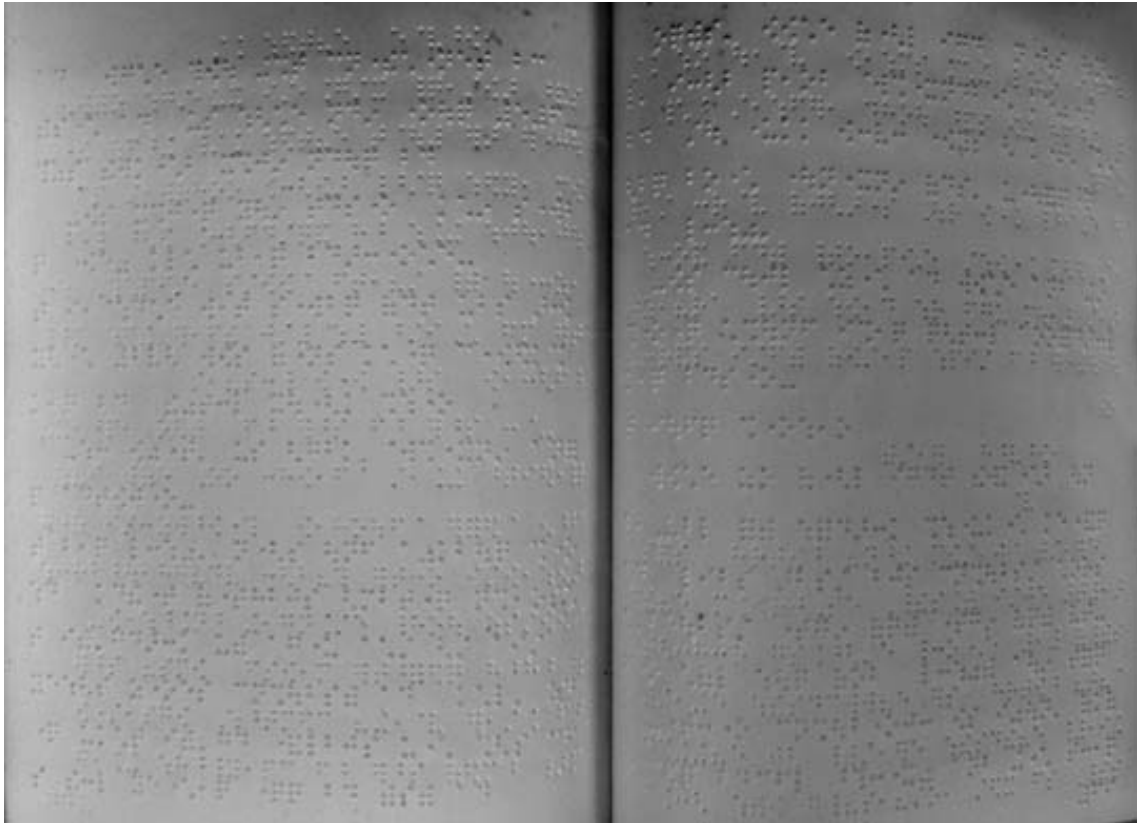


いたづらに くるしむことの はなはだしきや」と てんしよー
いわく「ふぼの やまい あつければ いやくの こーなきを
しりても なお ちりよーに つとむるわ にんじよーの つねに
あらずや しんりよくを つくして しかも すくうこと
あたわざるわ てんめいなり こと すでに こにに いたる
てんしよー ただ しせんのみ」と ついに ごくに とー
ぜらる げんの こーていに ふかく ぶん てんしよーを
おしみ ねんごろに さとして げんに つかえしめんとす
てんしよー いわく「われわ そーの しんなり いづくんぞ
2ちよーに つかえんや ねがわくわ われに しを たまえ」
と てい その ころざしの うごかすべからざるを
しり これを けいぢよーに おくらしむ てんしよー けいせらる
るに のぞみ しょよーとして いわく「しんが こと
おわる」と うやうやしく みなみ そーの ほーを はいして
しす げんてい たんじて いわく「ぶん てんしよーわ
しんの だんしなり」と

だい119 おんしつ の なか

さむい きたかぜに ふかれながら ふゆがれの こみちを
とーつて きて ひとあし おんしつ の なかに はいると まっ
たく べつの せかいに きたよーな ころもちが する
とりどりの はなの いろ むせかえるよーな つよい におい
ぼーつと みに かんじる あたかかさ がらすやねを とー
して くる やわらかい ひの ひかり まるで はるの くりに
いるよーだ さきに たつた にーさんが

「あー さいて いる さいて いる みよこ すいぶん
めづらしい はなが あるだろー ここわ おもに らんの
るを あつめて あるところだ ねたいぢよーから もつて
きたのだから こーして ねんぢゆー 670といじよーの
あたたかさの ところにおかぬれば いけないのだ」
と いろいろ せつめいして くださる たくさん さいて
いる なかで 1ばん うつくしいのわ たれさがった
くきに いくつも さいて いる うすべにいろのはなで

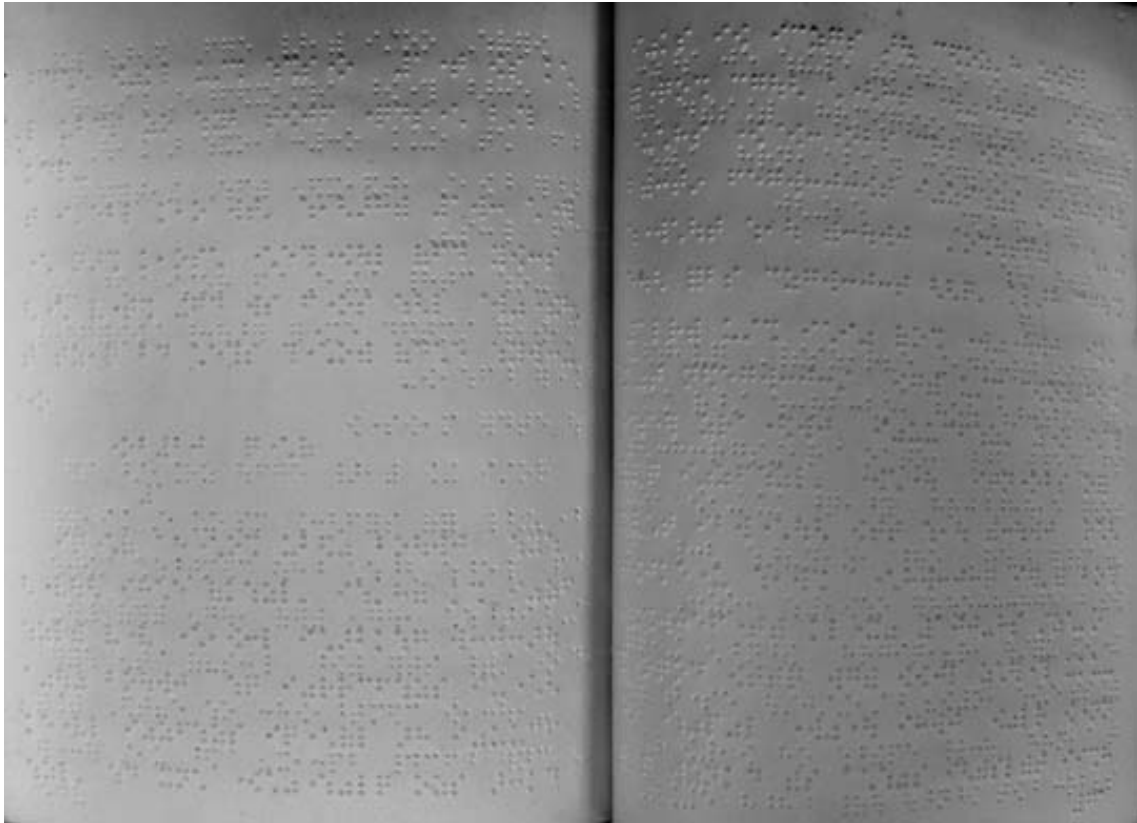


ある それから すこし ゆくと うつぼがづらと いう
ものがある はの さきから つるを だして 56
すんの ほそながい ふくろをつるしている
「この ふくろで むしをとるのだ なかを のぞい
て ごらん なにか はいっているよーだから」
とおっしゃるから そつと のぞいて みると はの よーな
むしが 2ひき その みづの なかで うごけなく
なっている ほんとーに ふしぎな くさだ
「さー こんどわ はの きれいな しょくぶつを あつめ
て あるところだ」
と いった にーさんわ つぎの しつえ あんないして くだ
さる なるほど みどりいろの きぬいとで つくったのか
とおもわれるよーな はも あれば あかや きや あおや
むらさきの まだらの うつくしいものもある なかにわ まる
ではなかと おもわれる べいいろの はが くきの うえ
の ほーに むらがつて でて いる ものも ある

たてもものわ ここから みぎに おれる つぎの しつ
にわ おーきい ねったい しょくぶついが ならんで
いる やし ばなな こーひー ごむの き などわ なを
きいて いたが じつぶつを みるのわ はじめてで
ある にーさんわ

「この うしろに かまが ある そこから あつい ゆを
くだで かくしつえ おくって てきとーに あたためるよーに
なっているのだ」
と おしえて くださった

そこから また みぎに おれると ほそながい しつ
いっぱい めも さめるよーな くさばなが ならべて
ある においの よいものや いろの うつくしいものや かたちの
かわいらしいものや どれを みても どれを みても ひと
えだ かみに さして みたい にーさんも あしをとめて
「どーだ うつくしいだろー この おんしつわ みなみ
を うけて いるうえに じゅーぶん あつい ゆが とーって



いるから こんなにはやく さくのだ 1ど この なかに
はいると また さむい ところえ するのが いやに
なるね」

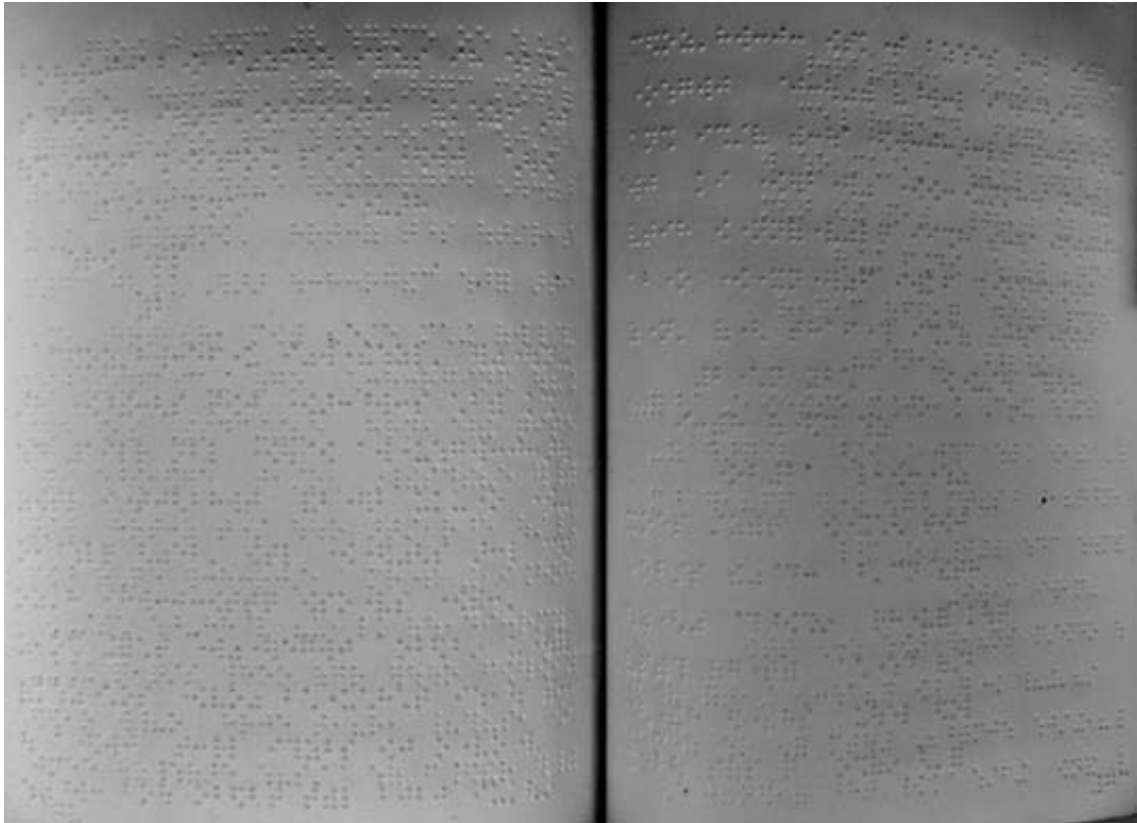
とおわらいに なった そとわ さつきよりも 1そー かげ
が つよく なったのか がらすごしに みえる むこーの
きが ひどく ゆれる その えだの さきに しょんぼり
と とまっている からすの すがたも みるから さむそー
だ

たい20 てがみ

1

おてがみ ありがたく はいけん いたしそろ さむさ
きびしき おりから みなさまにわ おさわりも なく おんまえ
さまにも ひび がっこーに おかよいなされ そーろーよし
あんしん いたしそろ さて おんちちうえさまの おはがき
ならびに おんまえさまの おてがみに より おんははうえ
さまにわ さる ふつか ごあんざんにて たまの よーなる

おんなの おこ おうまれの よし うけたまわり まことに
めでたく うれしき かぎりと ぞんじそろ おとこ
ばかりの ごきよーたいの うちに このたび はじめて
いもーとを えられそーろーこと おんまえさまの おんよろこび
さぞかしも さっし もーしそろ わたくしとても かわゆ
らしき めいの うまれそーろーと ききてわ なにより うれしく
1にちも はやく おかおを みたく ぞんじそろ おなわ
なんと つけられそーろーや これも はやく うけたまわりたく
おしらせ まちあげそろ おんははうえさまわ まだ おやす
みにて おんまえさまにわ ごかし おてつたいの ため
なにかと おいそがしき ことと さっしもーしそろ ちかき
ところならば さっそく あがりそーろーて おせわも いたす
べくそーらえども なにぶん 100りの やまかわを
へだてたる こととて それも こころに まかせず はなは
だ ざんねんに ぞんじ おりそろ こんにち こづつ
みにて そまつなる もの あかさんの おきものにもとおくり



いたしそーろーあいだ おんまえさま おひまの おり さいほー
の おけいこに おしたてくだされたくそろ みなさまえ よろ
しく おつたえ くだされたく ねがいあげそろ かしこ
2がつ いつか おばより

さちこ どの

2

うけたまわりそーらえば おんそぼさまにわ せんじつ
より ごびよーきの ところ ごよーじよーの かいも なく
さる 19にち ついに ごしきょ あそばされそーろーよし
まことに おどろきいりそろ へいせい はなはだ ご
たっしゃにて きんらいゆ ことに ごげんきの よーに うけ
たまわり おりそーろーこととて このたびの ごほーわ
まったく ゆめかと ぞんぜられそろ たいけいを はじめ
みなさまがたの ごひたん いかばかりかと おさっし もー
し あげそろ とーちに おすまいの ころ たびたび
さんじよー いたし たいけいと ともに いろいろ おはなしを

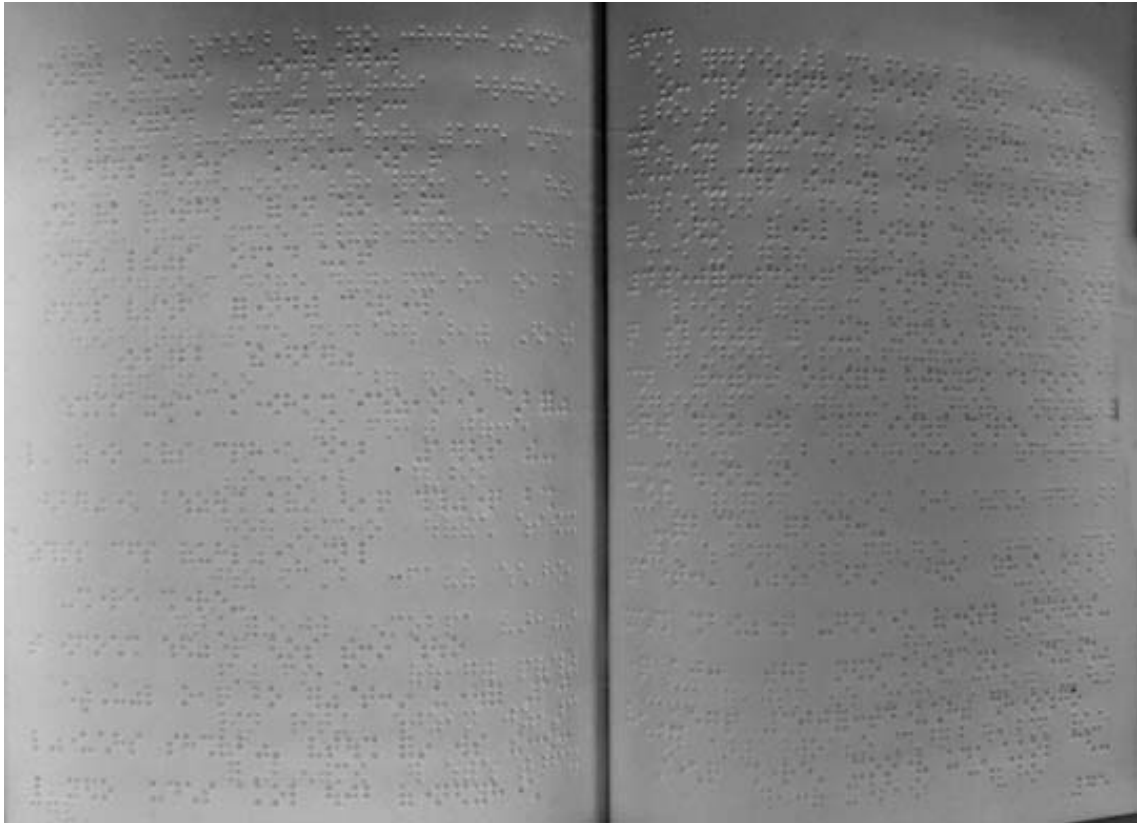
うけたまわりそーろー ことなど いまさらの よーに おもい
だされそろ りよーしんも ひじよーに おどろきおり
あつく おくやみ もーしあげそーろーよーにと もーしいで
そろ なお ごせいぜん ごこーぶつなりし よーかん
ひとおり こづつみびんにて おおくり もーしあげそーろー
あいだ ごぶつぜんえ おそなえ くだされたくそろ
まづわ みぎ とりあえず おくやみ もーしあげそろ

2がつ むいか こばやし うめきち

おーもり しげる さま

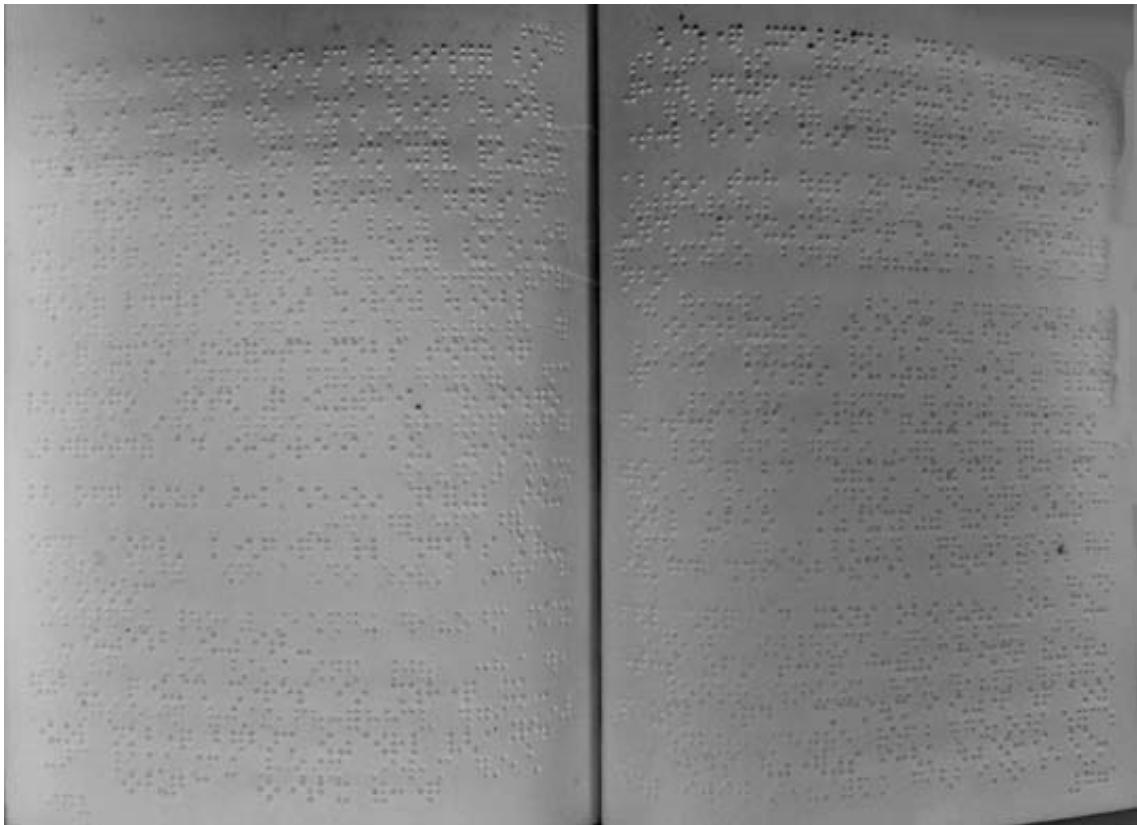
だい21 にっこーざん

ふたらの やまもと こぶかき ところ
だいやの ほんりゆー いわうつ ほとり
きんぎん しゆぎよくを ちりばめ なして
ひねもす みれども あかざる みやい
うきぼり けぼりの はしらに けたに
ふるいし のみの て たくみを きわめ



たんせい まばゆき ごーてんじょーに
こころを こめたる えふでぞ におう
びじゆつの ひかりの かがやく この ち
やま みな みどりに みづ また きよく
らくえん にほんの たえなる はなと
とつくに ひとさえ めづるも うべぞ
だい22 ほげいせん
さくやの ふーうわ なごりなく おさまったが かいめん
にわ まだ なみの うねりが たかい 1せきの ほ
げいせんが いさましく なみを きって すすんで いく
ますとの うえの みはりにんが ふいに
「くちら くちら」
と こえたかく さげんで きたの ほーを さした
かんぱんに たって いた せんちょーを はじめ 10
にんばかりの のりくみんわ ひとしく めを その ほーこー
に むけた はるか の あなたに しらい みづけむりが

みえる
ほーしゆの おちついた ちからの こもった ごーれいに
ふねわ はや ほーこーを てんじた ほーしゆわ このとき
はやく せんしゆの ほーごに たって その ひきがねに
てを かけた みぎに ひだりに くちらを おいつ
450めーとるまで ちがついたとき ねらいを さだめ
て ずどんと 1ぱつ はれつやを しかけた もりを
うつ もーもーと たちこめる しろけむりの あいだから
みると すさまじい なみを おこして くちらわ かいてい
ふかく しづんだ
「めいちゅー めいちゅー」
1どーわ かんこの こえを あげた もりが たいない
ふかく くいこんで はれつやが みごとに はれつしたの
で あるー もりに つけた ながい つなわ ぐんぐん
ひっぱられて 300めーとるばかりも くりだされた
やがて くちらわ ふたたび はるか かなたに うき



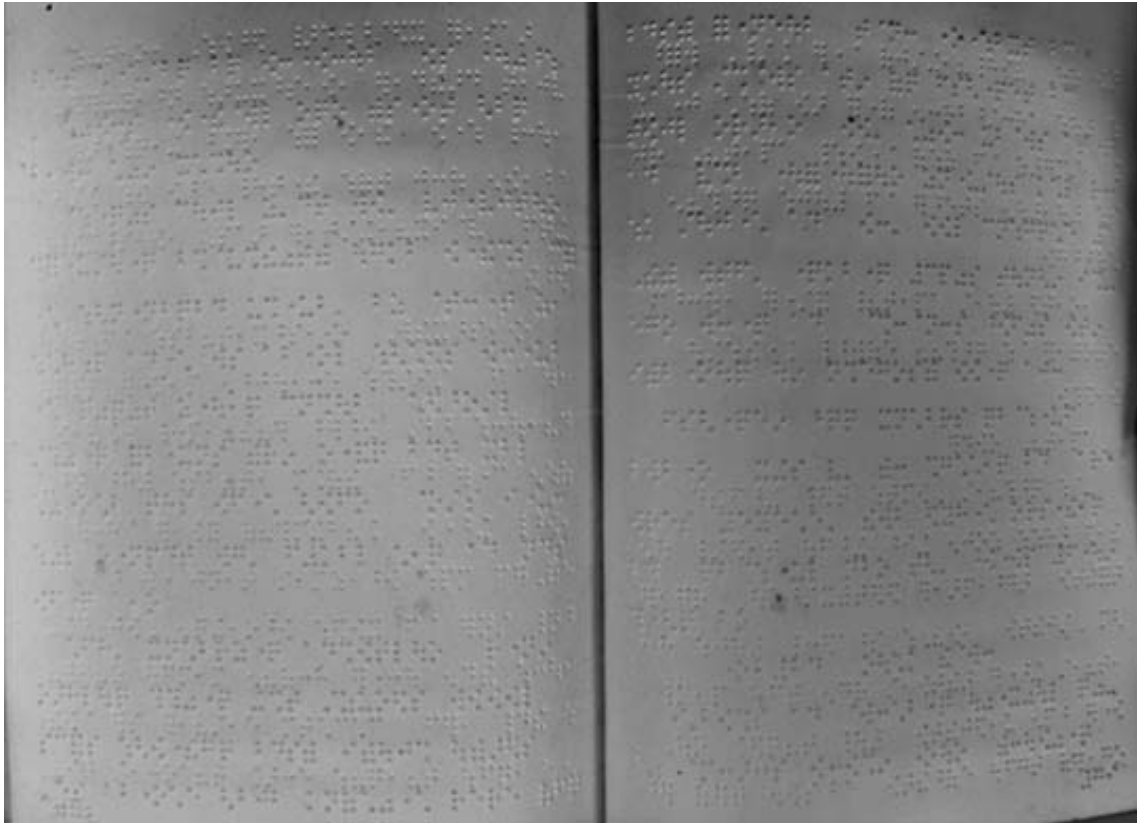
あがった いままでいきおいよく ひきだされて いた
つなも やや ゆるんで きた つなを したいに したいに
くりもどすと くぢらわ こく 1こく ふねに ちかよって
くる しかし まだ なかなか いきおいが つよいので
つなを まいてわ のばし のばしてわ まいて きながく
あしらって いるうちに さすがの くぢらも したいに
よわって ふねから 50めーとるぐらいの ところまで
ひきよせられた そのとき 2ばんもりが うちだされた
20めーとるも ある おーくぢらが いまわ まったく
いき たえて こやの よーな からだを すいめんによこ
たえる あたりにながれでる ちに くれなひの なみ
が たたよう

「ばんざい ばんざい」

せんいんわ てばやく くぢらの おを くさりで ふな
ばたに つないで いせいよく こんきよちに ひきあげる
だい23 だざいふ もーで

きしゃで ぶつかいちえきに ついたのわ ごぜんの
8じ えきまえで だざいふゆきの けいべんてつ
どーに のった まだ めの でない はげの きの
あいだを とーり しもの まっしろに おいた たの なかを
はしる 15ふんばかりで きしゃわ だざいふまちに
ついた

だざいふまちわ だざいふじんじやの ある ところ
である からかぬの おーどりいを くぐって すすむと
えんどーの いえわ たいいてい てんまんぐーに ちなんだ
ものを うっている まもなく じんじやの ひろい けい
だいに はいった なんびやくねんも へたで あるーと
おもわれる くすの たいぼくが しげりあっている
いけに かけて ある ふたつの たいこばしを わたり えま
どーの まえを とーって ろーもんを くぐると ほんでん
の まえに である うやうやしく おがんで きて あたま
を あげると しんげんの おーきな しんきよーが きら



きらと かがやいて いて こーごーしい この じんじゃ
わ かんこーの ごぼしよに たったた ものだと きいて
いっそー かんを ふかくした

しゃでんの うしろに まわると そこわ ひろびろとした
うめばやしで いくひやくほんとも しれない こぼくの うめ
が さきつついている はくはいわ いま ちょーど まっ
さかりで あるが その あいだに さきかけの こーはい
が てんてんと まじって うつくしい かけぢややに
やすんで めいぶつのもちを たべて いると ふいに
かんだかい とりの こえが きこえた ちゃやのおばー
さんに たずねると それわ えんないに かって ある つるの
こえで あった

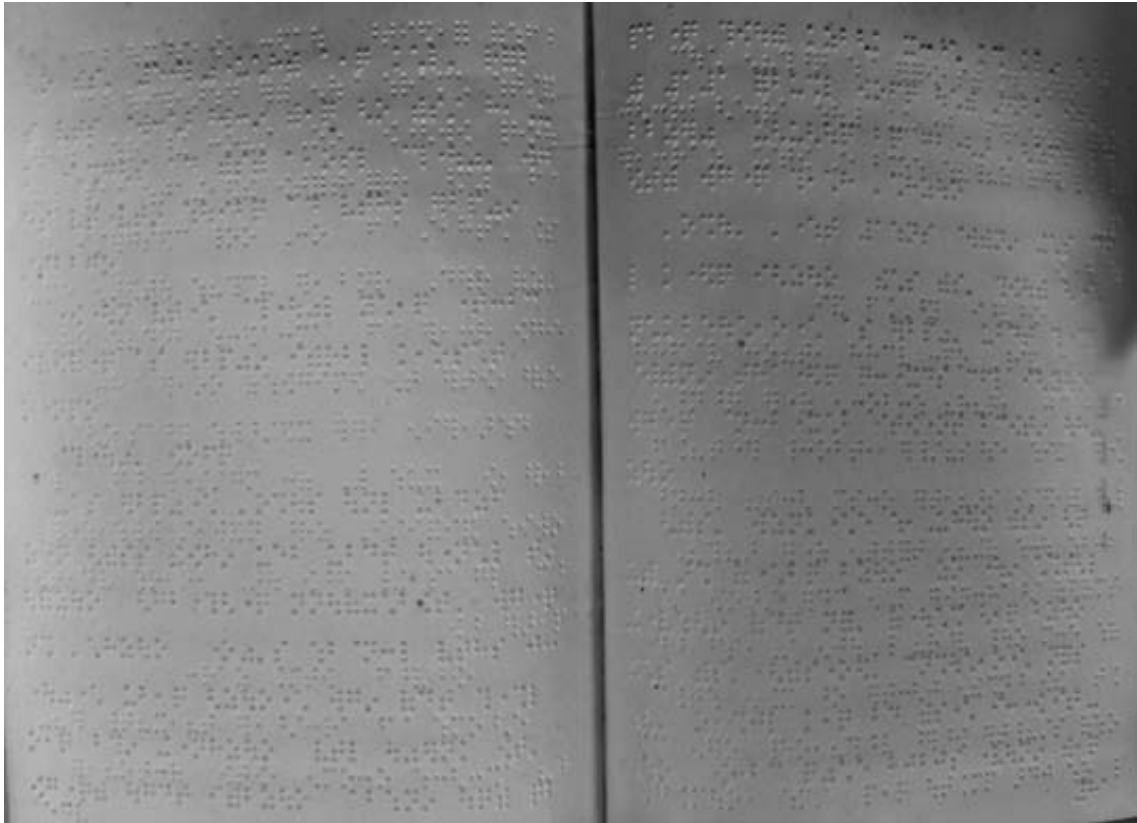
かえりわ ふつかいちまで あるくことにした ちづを
たよりにして すすんで ゆくと やまはたけの そここに
のうめの さきこぼれて いるのも おもしろく しもよけの
わらの あいだから きいろい なつみかんが ちらちら みえて

いるのも めづらしい とちゆー だざいふと いう
むかしの やくしよの あとを みて えのきでらと いう
ところに たちよった こわ かんこー はいしよの あとで
ある ひくい じめじめした まつばやしの なかに ちー
さな やしろが ある こーわ ここに うつされてから 1
ぼも そとえわ でないで 3ねんの としつきを おく
られた そーで ある きゆーちゆーの ぎょえんの ことを
おもいだして しを つくられたのも ここで あるー

えのきでらを でて ふつかいちの ていしゃばえ
いそいだ ふゆの ひわ もーくれかかっている あちら
こちらの むらむらからわ ほそい けむりが たちのぼって
いる ていしゃばに ついた ときわ ごごの 6じを
すぎて いた

だい24 たしかな ほしよー

がいこくの ある しょーかいで しんぶんしに てん
いん にゆーよーの こーこくを だした もーしこんで



きたものわ 50にんばかりも あって なかにわ ちめいのひとの しょーかいじょーをもつて きたものや りっぱな がくれきの ある ものも あつたのに しゅじんわ それらの ひとびとを さしおいて ある ひとりの せいねんをやといひれた

ごじつ ひとが しゅじんに むかって どーいう おみこみで あの せいねんを おもちいになつたのかと たづねた

しゅじんわ こたえて

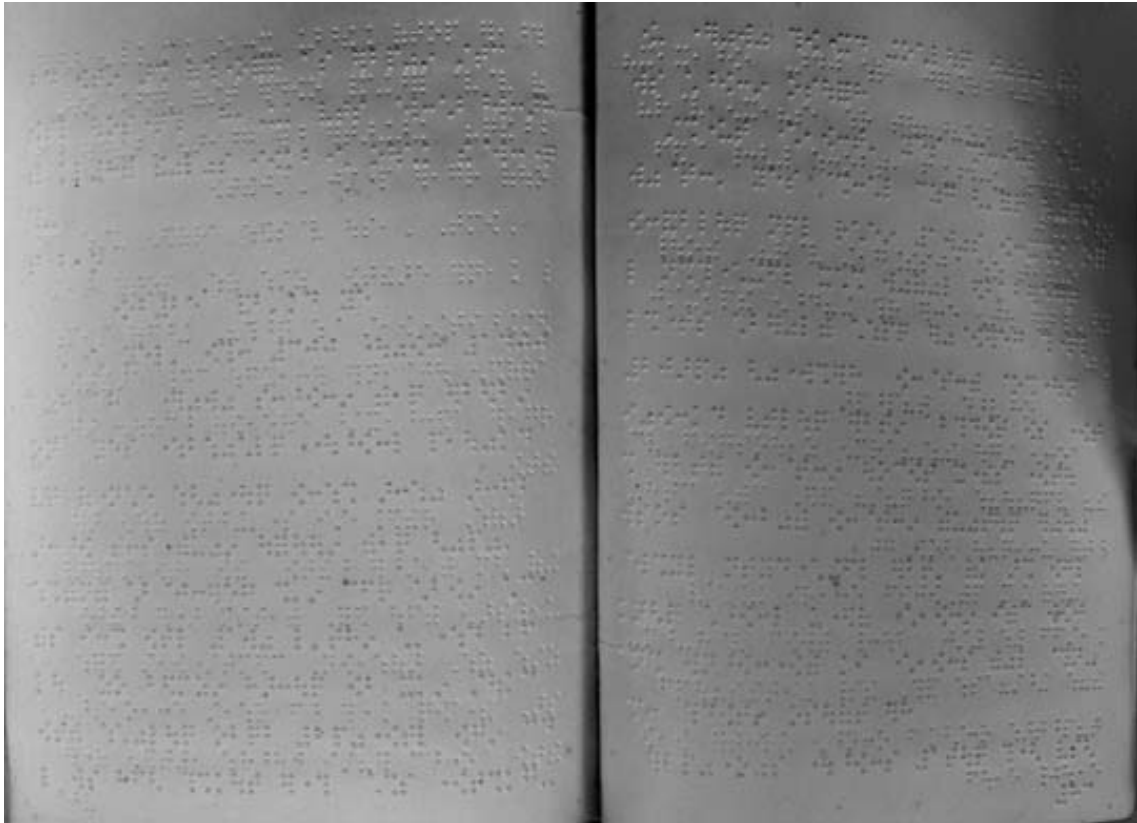
「あの せいねんが わたくしの しつに はいるまえ まづ きものの ほこりを はらい はいると しづかに とをしめました きれいずきで つつしみぶかいことわ それで よく わかりました だんわの さいちゆーに ひとりの ろーじんが はいって きましたか それを みると すぐに たって いすを ゆづりました ひとに しんせつな ことわ これでも しれると おもいました あいさつを しても てい

ねいで すこしも なまいきな ぶーがなく なにを きいても 11 めいはくに こたえて しかも よけいな ことわ いりません はきはきして いて れいぎを わきまえて いる

ことも それで すっかり わかりました

わたくしわ わざと 1さつの しょもつを ゆかの うえに なげて おきました ほかの ものわ すこしも きが つかないらしかつたが あの せいねんわ はいると すぐに しょもつを とりあげて てーぶるの うえに おきました それで ちゆーいぶかい おとこだと いうことを しりました

きものわ そまつながら さっぱりした ものを きて はも よく みがいて いました また じを かくときに ゆびさきを みると つめわ みじかく きつて いました ほかの ものわ きものだけわ うつくしかつたが つめの さきわ まっくろに なつて いる ものが おーござい ました こーいう てんから いろいろの びしつを もつて



いることをよくみさだめてあのせいねんをやとう
ことにしたのです りっぱなひとのしょーかいじょーより
もなによりもほんにんのおこないがたしかなほしよーで
す」

と いった

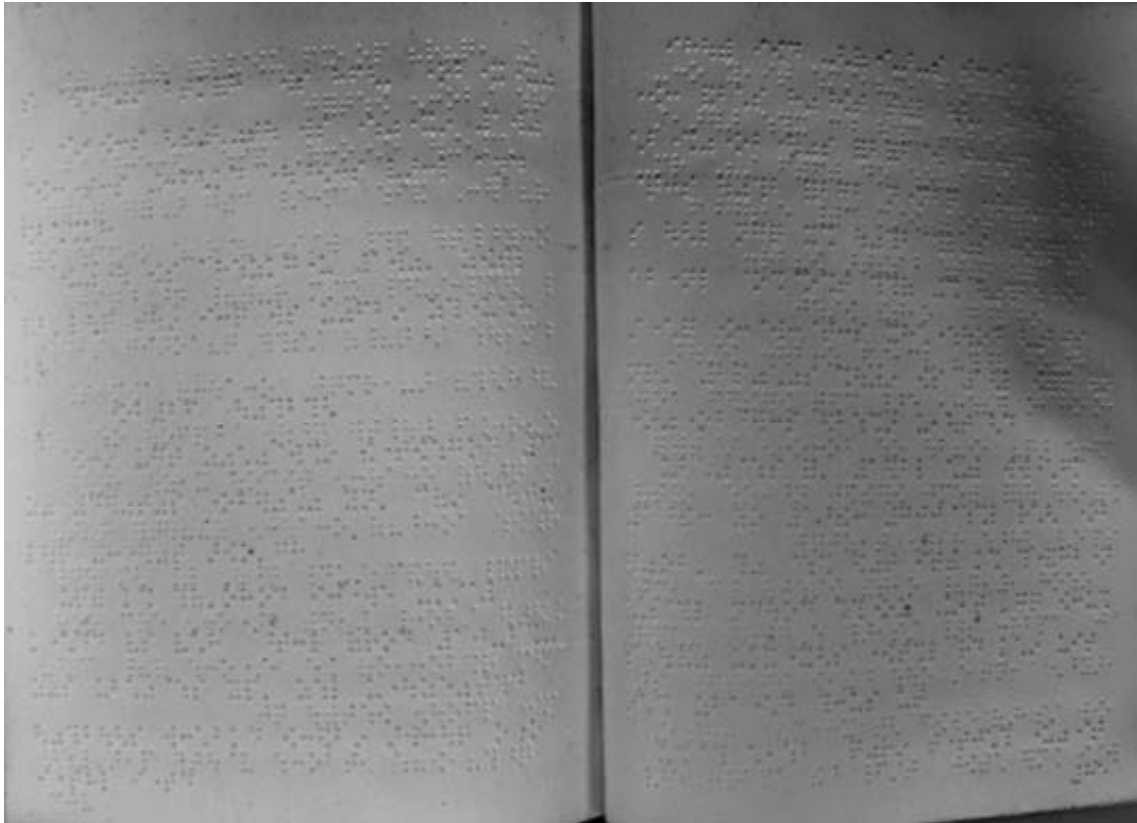
たい25 へいなる むら

わが むらにわ こすー 300 じんこー 1400
あまり あり ぜんそん のーぎょーを もって せいれいを
たつ むらの ざいさんかにて じぎょーに ねっしなる
ひと みづから さきんじて こーさく よーさん よーけい
よーぎょ とーの もはんを しめししを もって きんねんわ
さくもつも かいりょーせられ くわを うえて かいこを かう
もの おーく ことに 1そん にわとりを かわざる いえ
なし また いけぬまを りよーして こい ふなを やしなう
ことも さかんにして たいてい 2ねんごとに これを うる
に その りえき すくなしと せず かくの ごとくなれ

ば ぜんそん すこぶる ゆたかにして そんみん みな
その かぎょーを たのしめり

やくばと がっこーとわ むらの ちゅーおーに あり
そんちよーわ むらの きゅーかに うまれ きわめて しんせつ
こーへいにして つねに ちからを 1そんの こーぶくの ため
につくすがゆえに ふかく そんみんに けいあいせられて
いくどの かいせんにも かさねて せんきよせられ すでに
20よねん きんぞくせり こーちよーも ちゃくじつ
おんこーなる ひとにして せいとを あいすること この ごと
く せいとも こーちよーを したうこと ふぼの ごとし
そのたの きょーいんも こーちよーを もはんとして せんしん
しょくむに つとむるがゆえに せいとわ みな よく これに
なつきて かぎょーに はげみ がっこーを おもう ころ
あつく そつぎょーごも なお がっこーの もんに しゅつ
にゆー することを たのしみと せり

せいねんだんの じぎょーの 1として すぎ ひのき



の しょくりんを いとなめり この りえきわ だいぶぶん
を がっこの きほんきんとし その ざんぶを 1そん
きよどーの ゆえきなる じぎょーの ひよーに あつる
けいけくなり

ばんじ この ありさまなれば 1そんわ まことに
へいけにして としを おーて その はんえいを ますばかり
なり

だい26 しんすい^{ママ}き

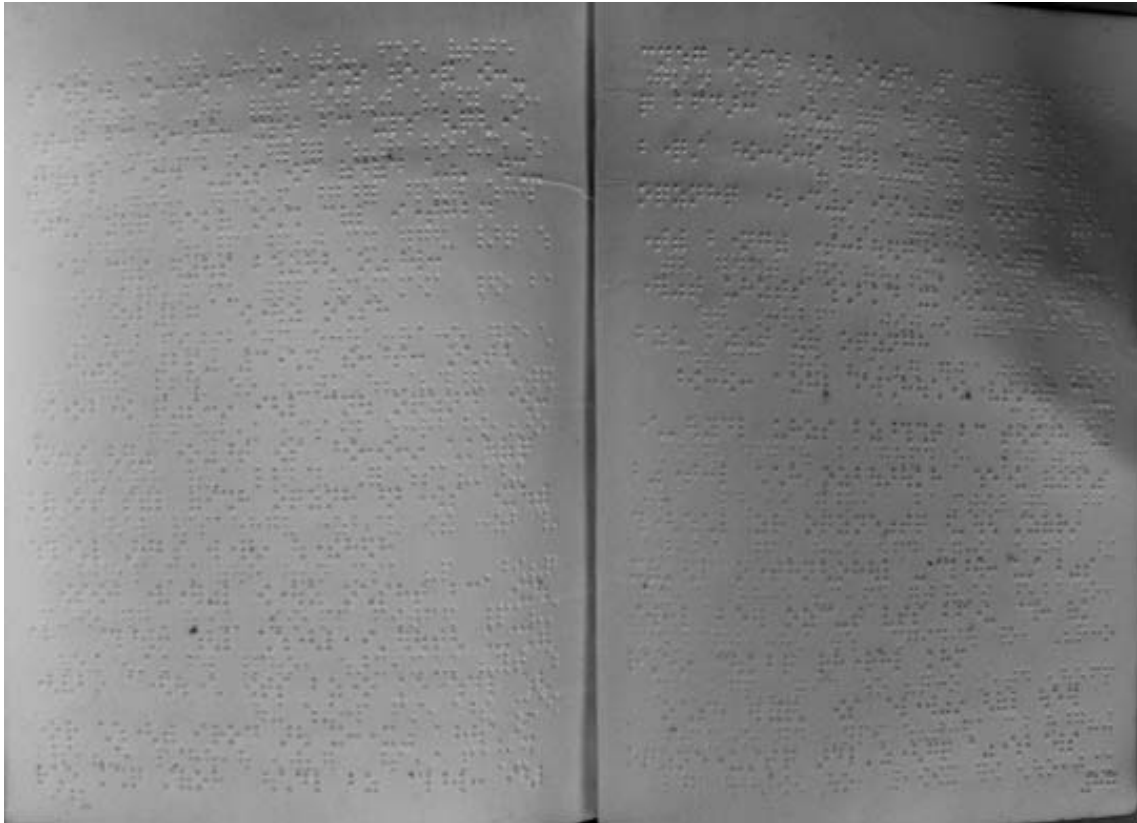
きよーを はれと まんかんしょくを ほどこされたる 3
まん 4せんどの だいせんかん むつわ うみを うしろ
にして ゆーぜんと よこたわれり

はても なく すみわたる おーぞら はやかに
ながるる ひの ひかり ちよーに みちたる 10いく
まんの はいかんしゃの むねわ まさに はじまらんとする
しんすいしきの そーかいなる こーけいを よそーして ただ
おどりに おどる

おりしも おこる 「きみがよ」の そーがく こー
ご へいけの りんぎよと ともに しきわ はじまりぬ
かいぐんだいじんの めいめいしよ ろどく こーしょー
ちよーの しんすい めいけい つづいて ぞーせんぶちよー
の しきにつれて ふく しんすいしゆにんの ごーてきを
あいつに ちゃくちゃくと すすみ ゆく しんすいさぎよー
やがて だっしょーちよーの ぶりかざしたる きんいろの
つちわ 2ねんかんの くしんを この 1きに こめて せつ
だんだいじよーの けいさくを はつと きる

はいかんしゃの めわ 1せいに かに そそがれぬ
1びよー また 1びよー 700しゃくに ちかき だい
せんたいわ すん しゃく けんとおとも なく すべりいづ
かんしゆにつるしたる くすだま ぱつと われて こーはく
の しへん はなぶぎのごとくに ちる なかを はおと
たかく まいあがる すーはの はと

はくしゆ かつさい てんちを とどろかす ばんざい



の さけび ゆーそーなる ぐんがくの しらべ こー
ぢょーと いう こーぢょー ふねと いう ふねの きてきが
1せいに あぐる かんこの こえ みるみる かんわ そく
りょくを まして しらなみ たかく うみに おどりいる

あー うみの せんしの いさましき たんじょー
たい27 こじま たかのり

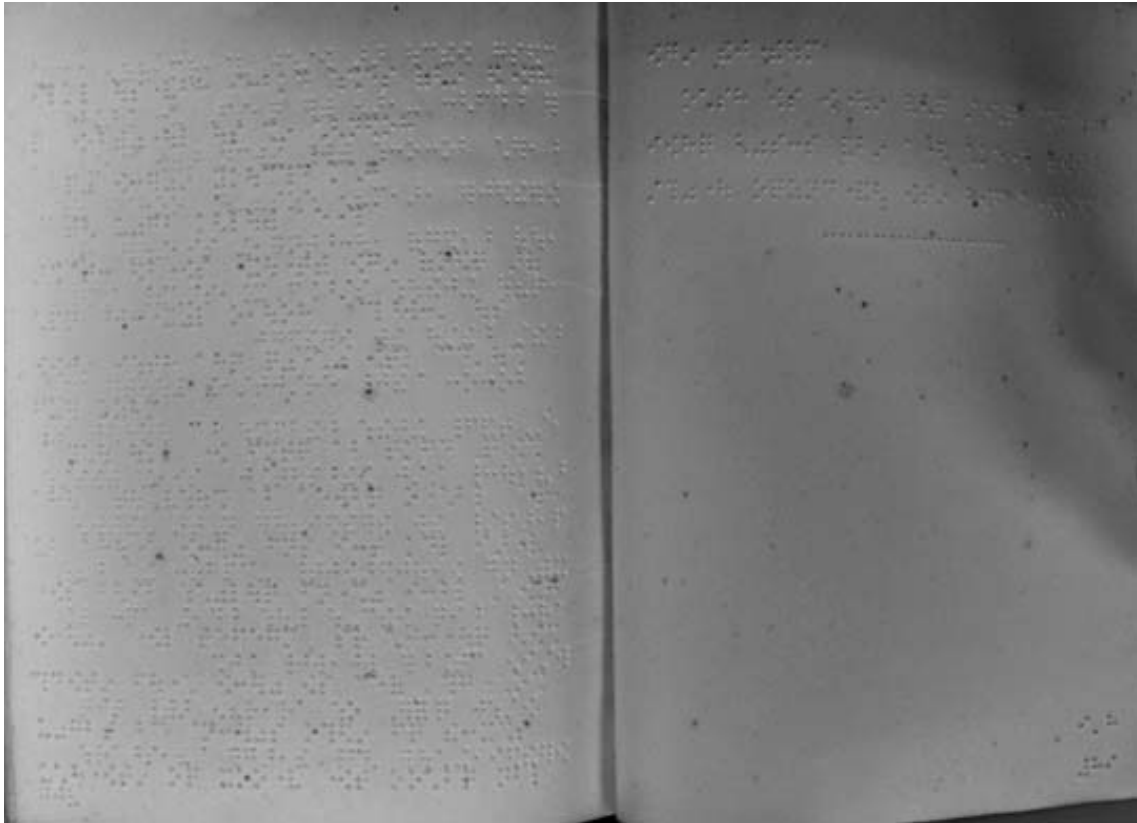
げんこー 2ねん 3がつ ほーぢょー たかとき
ごたいご てんの一を おきに うつし たてまつる きょー
ちゅーの きせん だんぢょ この ぎょーこーを かなしみて
なみだと ともに みおくり たてまつり けいごの ぶんしも
さすが によろいゆ そでを しぼりけり

このころ びげんに こじま たかのりという ぶし
あり しゅじょー さきに かさぎに おわせしとき はやく
ぎへいを あげしが ことの いまだ ならざるに さき
たち かさぎも おちたる よし ふーぶん ありしかば
ちから なくて やみたり しかるに いま しゅじょー おきに

うつされ たまうと きき たかのり 1ぞくどもを あつめ
て いえるよー 「ぎを みて せざるわ ゆー なきなり
いでや ぎょーこーの みちに まちうけ きみを うばい
たてまつりて ぎぐんを おこさん」と ところある もの
ども いづれも どーいしければ さらばとて び
げんと はりまとの さかいなる ぶなざかやまに かくれ
いまか いまかと まち たてまつれり

ぎょーこー あまりに おそかりしかば ひとをして うか
がやしむるに はりまの いまじゆくと いう ところより さん
いんどーに かかり たまいしよしなり さらば みまさかの
すぎさかに まち たてまつらんとて けわしき やまみちを
ふみわけて たどりつきたりしに 「しゅじょー はや いんの
しょーに いらせ たまう」と ひとの いえば しゅー みな
ちからを うしないて ちりぢりになりぬ

たかのり せめめき この しょぞんを きみに しらせ
たてまつらばやとて よるに まぎれて あんざいしよの



おにわに しのびいり おーいなる さくらの みきを けづり
て だいもんじに しの くを かきつけたり
てん こーせんを むなしうする なかれ
とき はんれい なきにしも あらず
よくちよー けいごの ぬしども これを みつけて よみ
かねて じょーぶんじ たつしたり しゅじょーわ しの
こころを おさとり ありて てんがん ことに うるわしく
えませ たまいぬ

むかし しなに ご えつとて あい となれる 2こく
ありき とし ひさしく あい ああそいて たがいしよー
はい ありしが こーせん えつの おーと なるに および
ごの いきおい さかんにして えつぐん おーいに やぶれ
こーせんわ ごに とらえられぬ のち かるーじて きこく
することを えしが こーせん この うらみ わすれがたく
はんれいと いう ちゆーしんの たすけを えて ほーぶくの
はかりごとを たて ぶたたび ごと たたかいて ついに

これを ほろぼしぬ

たかのり この こじを ひきて やがて ちゆーしんの
おこりて きんのーの へいを あげ かならず みこころを
やすんじ たてまつるべき ことを きこえ あげたるなり

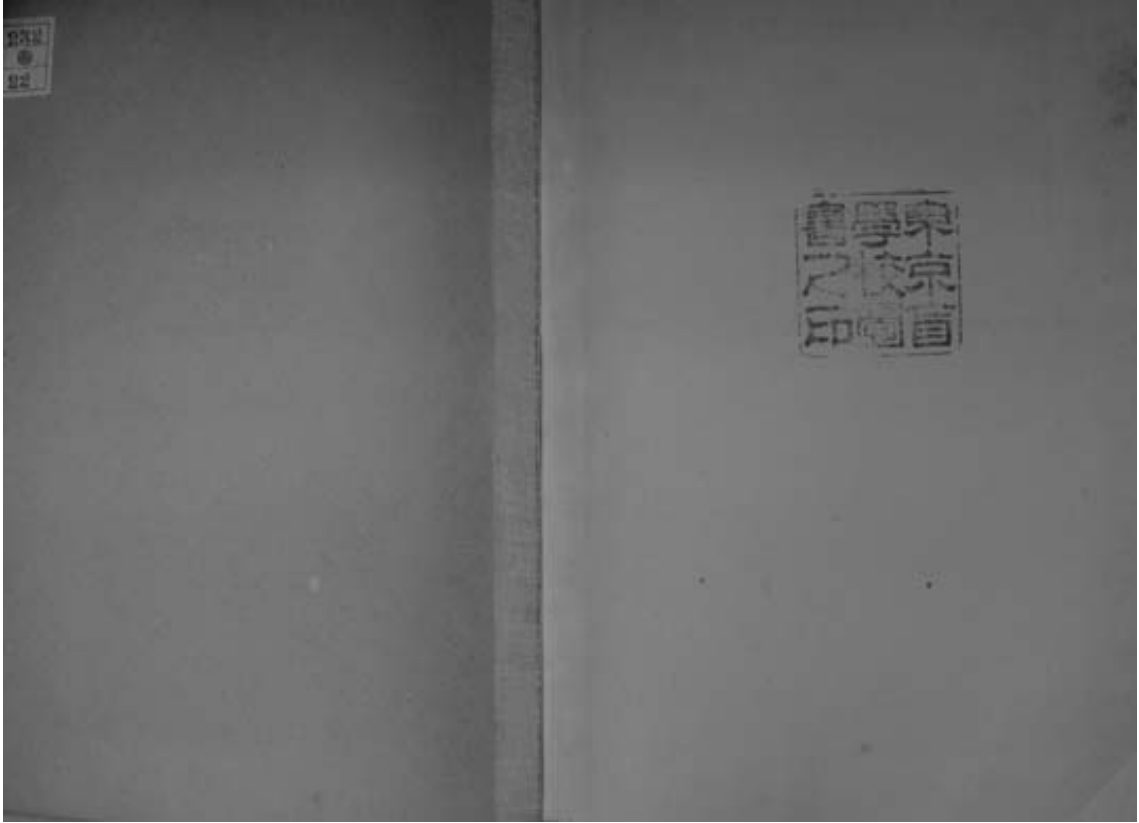
おわり

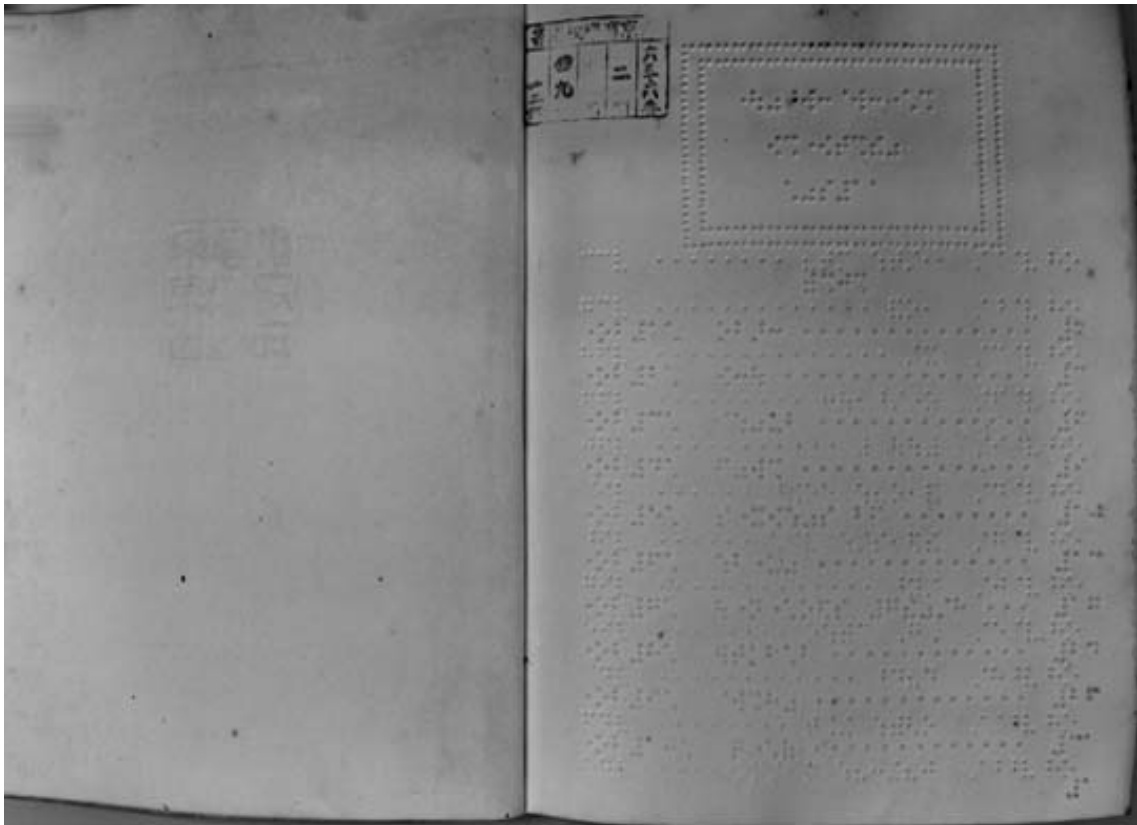












じんじょ-しょ-がく

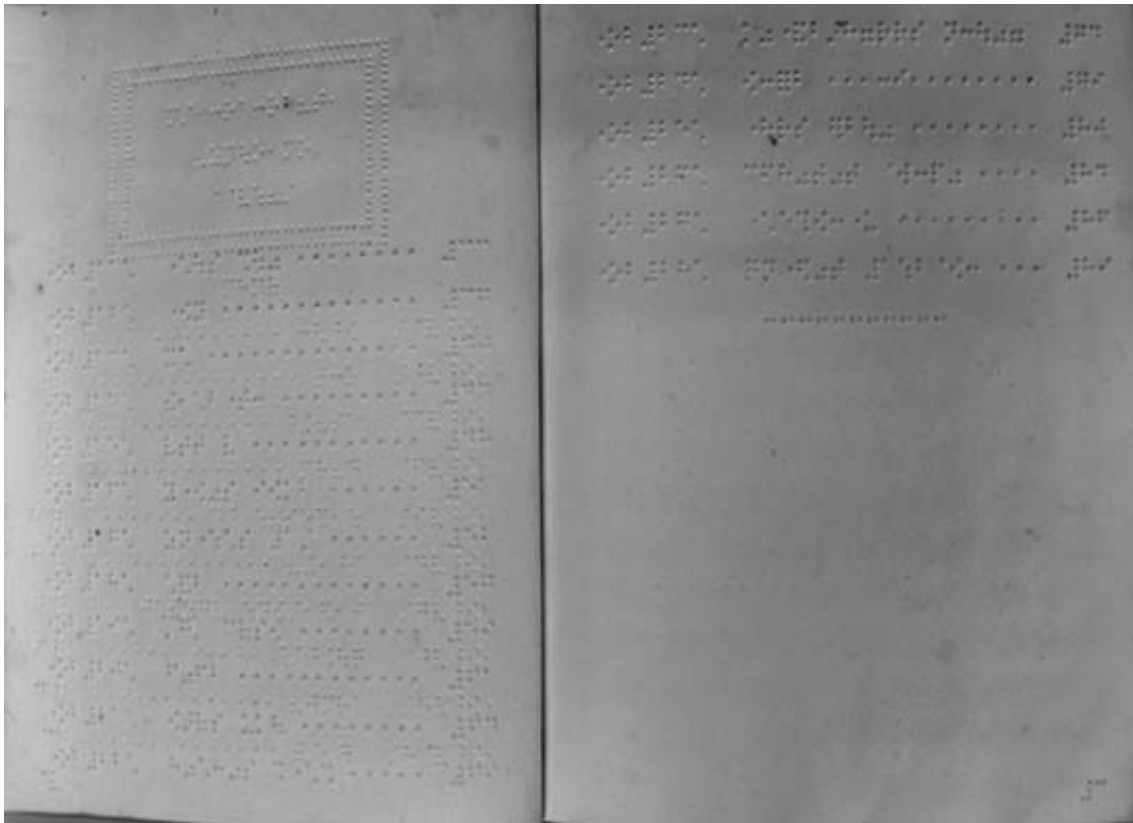
こくごとくほん

かんの11

もくろく

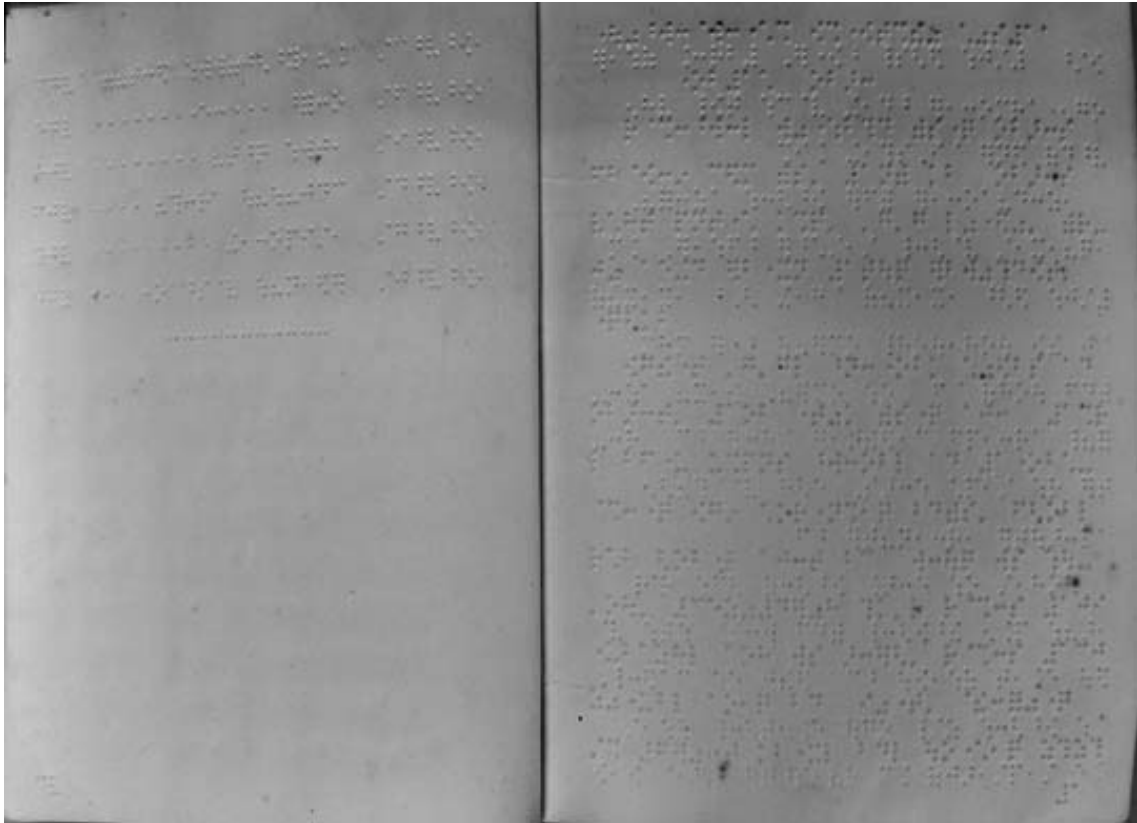
だい11か	たいよー	1
だい12か	こーし	3
だい13か	しゃんぱい	6
だい14か	えんそく	9
だい15か	のぶごさんの いえ	10
だい16か	さいばん	13
だい17か	しづがたけの 7ほんやり	17
だい18か	せとないかい	24
だい19か	しょくりん	26
だい110か	てがみ	31

1



だい111か	がしの くしん	33
だい112か	ごむ	37
だい113か	ふか	40
だい114か	ほっかいどー	44
だい115か	ひとと ひ	48
だい116か	むごんの おこない	51
だい117か	まつざかの 1や	52
だい118か	かへい	57
だい119か	われわ うみのこ	59
だい120か	えんえい	61
だい121か	こよみの はなし	64
だい122か	りんかーんの くがく	69

だい123か	なんべいより(ちちの つーしん)・	74
だい124か	こーめい	79
だい125か	じちの せいしん	80
だい126か	うえりんんとと しょーねん	84
だい127か	がらすこーば	82
だい128か	てつげんと 1さいきよー	89

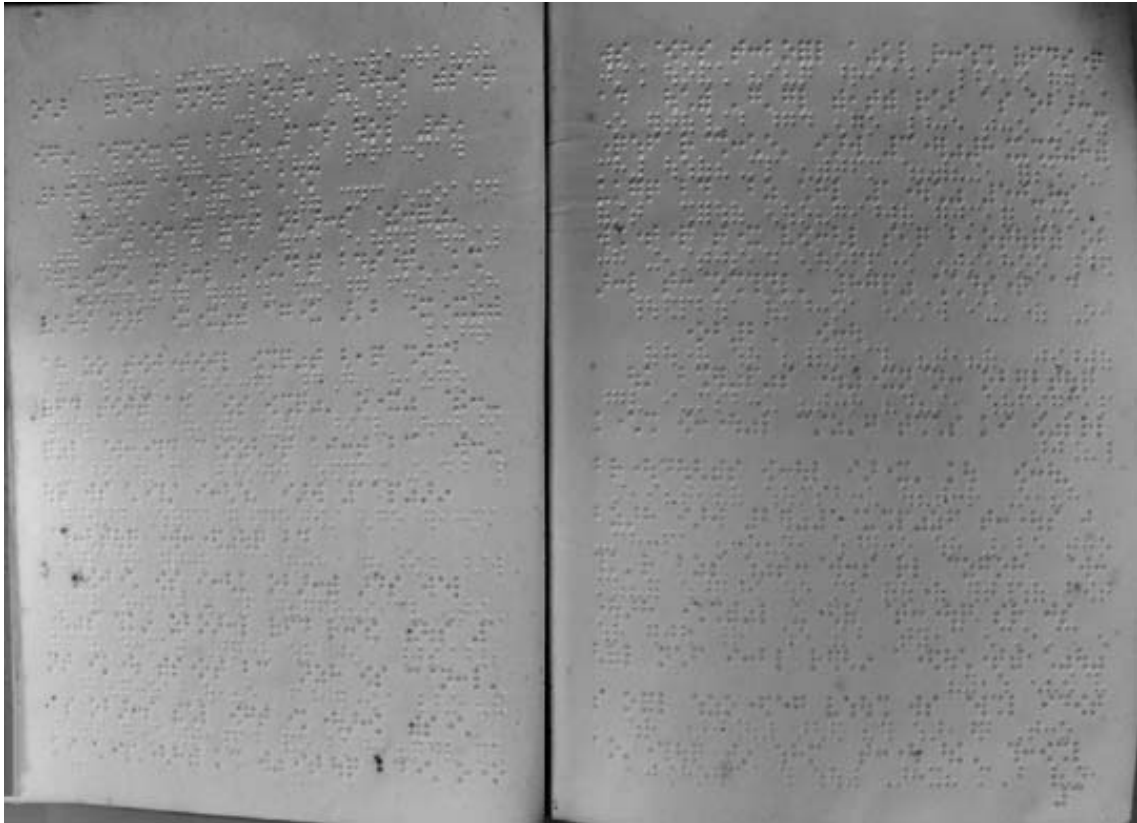


じんじょ-しょ-がく こくごとくほん かの11

だい1か たいよ-

ちきゅ-じょ-に そんざいする もので たいよ-の
えいきょ-を うけぬ ものわ 1つも ない たいよ-の
ひかりと ねつとが なくてわ われわれ にんげんわ もち
ろん あらゆる せいぶつ 1として せいそんすることわ
できない

これほど われわれに ちゅ-たいな かんけいの ある
たいよ-とわ 1たい どのな もので ある- 1くち
に いえば はくねつの じょ-たいに ある 1たいか
きゅ-で これを かたちづくっているものわ えきたいに
ちがい きたいで ある-と いう そ-して その さし
わたしわ 35まん4せんり すなわち ちきゅ-の 109
ばいあまりに あたり その よ-せきわ ちきゅ-の 130
まんばいに あたっている おんどわ ひよ-めんで
やく 6せんど ないぶに いるに したがって ますます



たかい かりの つよさに いたってわ ひじょな もので
これを しょくこーで いえば 13の したに 0を
26も つけて あらわさねば ならぬ

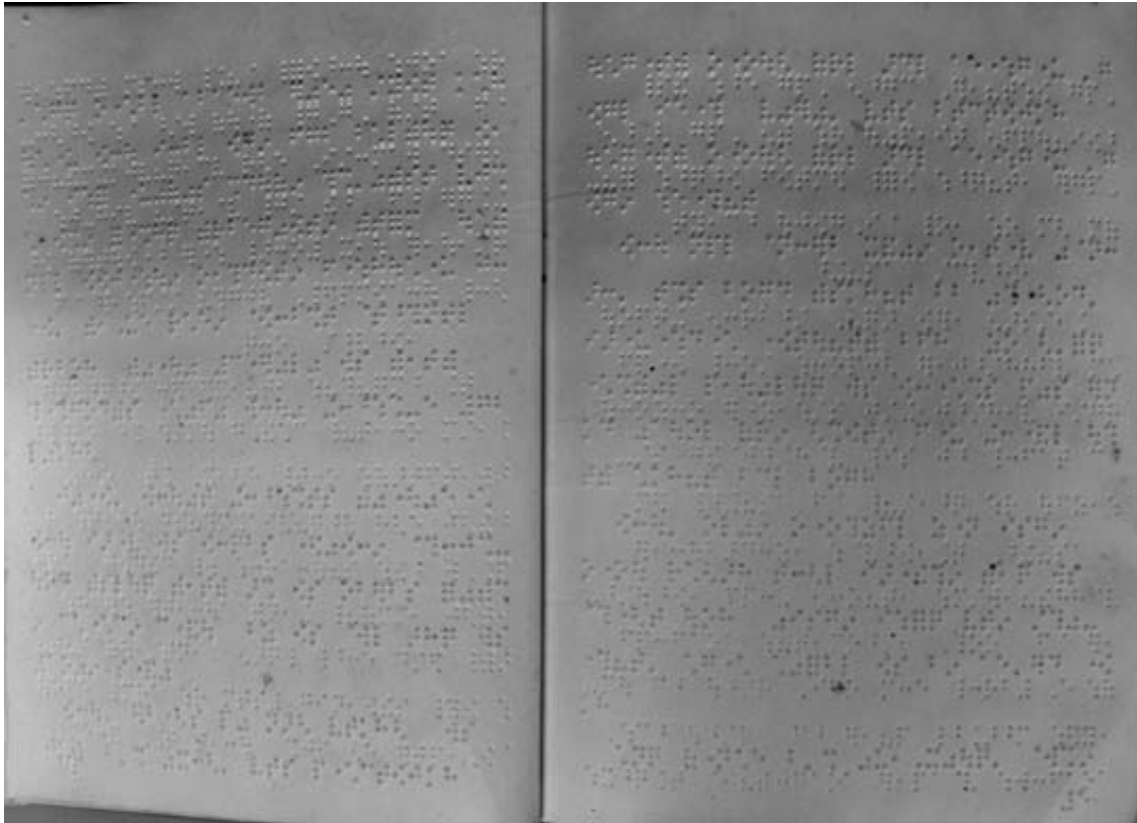
ほえんきょで みると たいよーの ひよーめんわ
ぜんぶが 1よーに かがやいて いるのでわ なく
かりの つよい ぶぶんも あれば よわい ぶぶんも
あり また ところどころに こくてんと いて くるく
みえる ところも ある この こくてんわ たぶん ひよー
めんに しょーずる うづまきで あるーと いう そー
して その かずや おーきさわ およそ 11ねんよを
しゅーきとして ぞーげんして いる

ところが この おーきな たいよーも よるの そらに
ぎんの すなを まいたよーに みえる ちーさな ほしの 1
つと おなじ ものだと いう つまり この うちゅーにわ
あの たいよーの ほかに これと おなじよーな ものが
なお かずかぎりも なく そんざいして いるが ただ

その きよりの とーいために あんなに ちーさく みえるので
ある しかも わわわれに もっとも ちかい あの たいよー
でさえ ちきゅーからわ およそ 3ぜん8びやくまんりも
はなれて いる いま かりに 1じかん 50りの
そくどで とぶ ひこーきに のって いったとしても たい
よーに とーちゃくするにわ 87ねん かけるので ある

だい2か こーし

しな いくせんねんの じんぶつちゅー たいせいとして
ながく こーじんに うやまわれ とくかの なお こんにちに
いちじるしきもの こーしに およぶわ なし こーしわ
いまより およそ 2せん5ひやくねんまえ とーじの ろ
すなわち しまの さんとーしょーの ちに うまれたり しょー
じより がくもんにはげみ ちよーじて のち ろの
きみに つかえ おーいに ちせきを あげしかども かんしん
のために さまたげられ ひさしく その しょくに おること
あたわずして ろを さりぬ とーじ しなわ すーこくに



わかれて たがいに あいあらい せんらん やむこと なかり
しかば こーし おーいに これを えらい いかにもして こっ
かを おさめ ばんみんの くるしみを すくわんもの と ひろく
かっこくを めぐりて もちいられんことを もとめぬ しかも
ついに こころざしを たつすることを えざりしかば ろー
ごわ もつぱら ちからを きょーいくと ちょじゆつとに
もちいたり もんじん 3ぜんにん その もつとも
すぐれたるもの がんえん そーしん ゆーじゃく ら 72
にんなりき

ろんごわ そーしんと ゆーじゃくとの もんじんらが
こーし および その こーていの げんこーを しゆーろく
したる ものにして もつとも よく この たし世の めんもく
を うかがうを うべし いま この しょによりて その
1たんを のべん

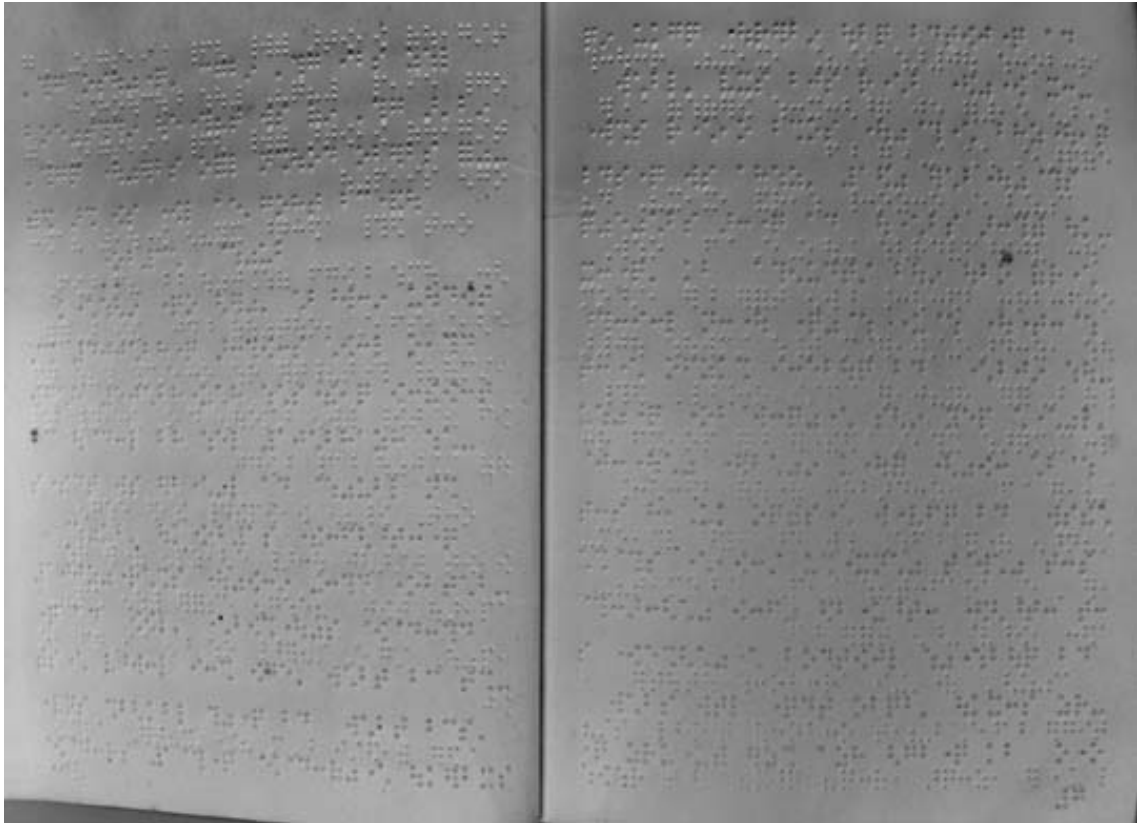
こーしわ せいぎの ねん つよき ひとりなりき その
げんに いわく 「ふーきわ ひとの ねがうところなり

しかれども ただしき みちによるに あらざれば われ
これに おらず ひんせんわ ひとの いとうところなり
しかれども ただしき みちによるに あらざれば われ
これを さらず」と

こーし つねに ちゆーせい ふへんを たつとび 「ちゆー
よーわ とくの いたれる ものなり」と いい 「すぎたるわ
およばざるが ごとし」とも いえり また きわめて
がくもん に ねっしんにして その こーがくの ねんの せつ
なる 「あしたに みちを きくことを えば ゆーべに しす
とも かなり」と いうに いたれり

こーしわ たにんを ただすまえに まづ おのれを
ただし ちかきより と一きに およぼすを もつて その
しゆぎと したり 「おのれを おさめて ひとを やすん
ず」とわ かねが かんめいに この いを あらわせる ご
なり

かつて みづから いわく 「はつぶんしてわ しょくを



わすれ たのしんでわ うれいを わすれ おいの まさに
いたらんとするを しらず」と その みを わすれ よれいを
わすれて じんせいの ために つくしたる たいせいの めん
もく よく この ごに あらわれたりというべし

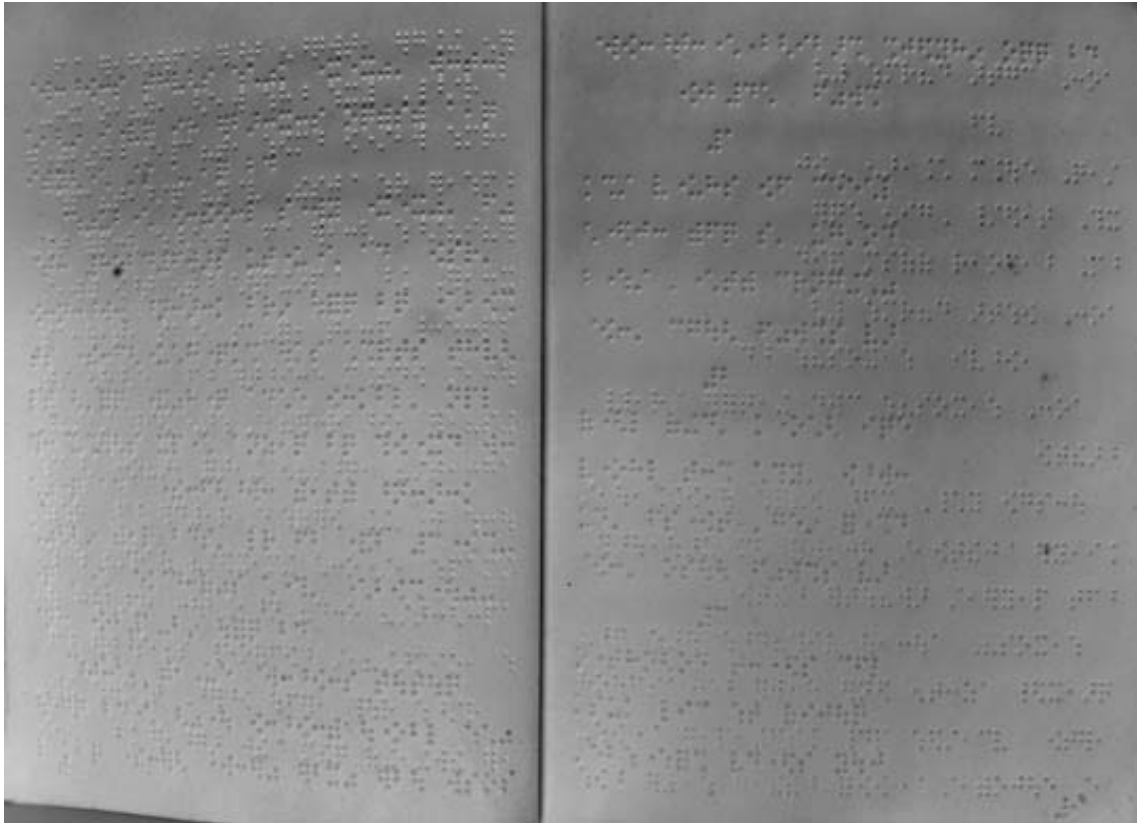
だい3か しゃんはい

ながさきを でた きせんわ かいじょ-を はしること
やく 400かいりて よ-すこ-の かこ-に たつする
それから 50かいりばかり さかのぼって こ-ぼ-と
いう しりゆ-に いり さらに 10かいりあまり さか
のぼると その せいかんにある しゃんはいにつく
しゃんはいわ しなだい1の ぼ-えきぢょ-で
100まんぢかくの じんこ-を ゆ-する たいとかい
である ここにわ がいにくじんの きよりゆ-する
ものが ひじょ-に お-く これらわ そかいと いう とく
べつ の くいきないに すんで いる そかいと いうのわ
きよりゆ-ちの 1しゆで きよりゆ-みんが しなせいゆの

てを はなれて じちせいを しいて いるところである

そかいにわ ひふの いろの ちがい げんご ふ-
ぞくの ちがった いくたの じんしゆが いりまじって
いるので その ありさまわ 1けん せかいじんしゆの
てんらんかいの よ-である しかいの よ-すも しな
ふ-でわ ない あすふあるとや いしを しいた みちが
じゆ-お-に つ-じ でんしゃ ばしゃ じど-しゃ
と-が たえまなく お-らいして いる かいりを さし
はさんで だいしよ-てんが のきを つらね かがんにわ
りよ-じかん せいかんを はじめ ぎんこ- かいしゃ
と-の りつばな たてものが そびえて いる そのほか
かくしゆの がつこ-や はくぶつかん としよかん と-の
しゆ-よ-きかん こ-えん けいばぢょ- げきぢょ- と-
の ごらくきかんが いたるところに さんざいして いる

そかいの そとに できると たいていわ しなふ-の まち
で まちはまも せまく あまり きれいで ない ただ



しよーぎょーの とりひきの さかんな ぶぶんわ そーとーに
かつきを おびて おり せいよーふーの たてものも あつて
おもむきが やや かわつて いる

しゃんはいが こーほこーに のぞむ ぶぶんわ えん
ちよー 8まいる60よの はとばが ある このちわ
こーつーじょー ちゆーよーな いちを しめて いて がいにく
との ぼーえきばかりでなく しなの かくちとの とりひき
にも きわめて べんりで あるから こーないにわ つねに
すーひやくせきの ふねが あつまつて いて すこぶる そー
かんで ある ぼーえきじょー もっとも ちゆーよーな
かんけいをもつて いるのわ にち えい べい 3ごく
で わが きよりゆーみんの かずわ がいにくじん
ちゆー たいいいを しめて いる

しゃんはいわ もつぱら しよーぎょーの としとして
しられて いるが きんじ こーぎょーも したいに さかん
になつて ぼーせき ぞーせん せいぶん せいし そのたの

しよこーぢょーが いきおいよく くろけむりを たてて いる
だい14か えんそく

1

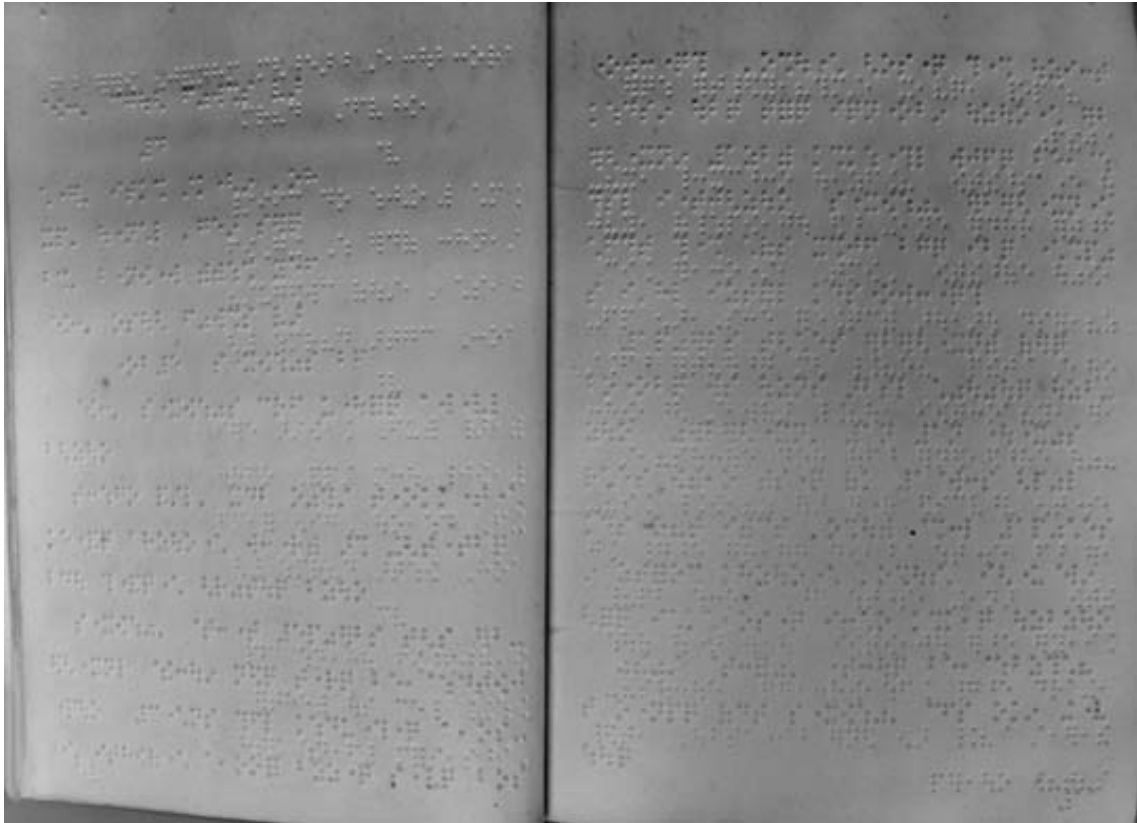
なくや ひばりの こえ うららかに
かざろー もえて のわ はれわたる
いざや わがとも うちつれゆかん
きよーわ うれしき えんそくの ひよ

2

みぎに みゆき なだかき おてら
ひだりに とーく かすむわ こじょー
はるわ えのごと われらを めぐる
きよーわ たのしき えんそくの ひよ

3

たどりつきたる とーげの うえに
なのはな におう さと みおろして
わらいさざめく ひるげの むしろ



きょーわ うれしき えんそくの ひよ

4

かぜわ おとなく やなぎを わたり
ふねわ しづかに われらを のせて
いくわ いづこぞ ももさく むらえ
きょーわ たのしき えんそくの ひよ

だい5 のぶごさんの いえ

きょーわ のぶごさんの うちえ はじめて あそびに
いきました

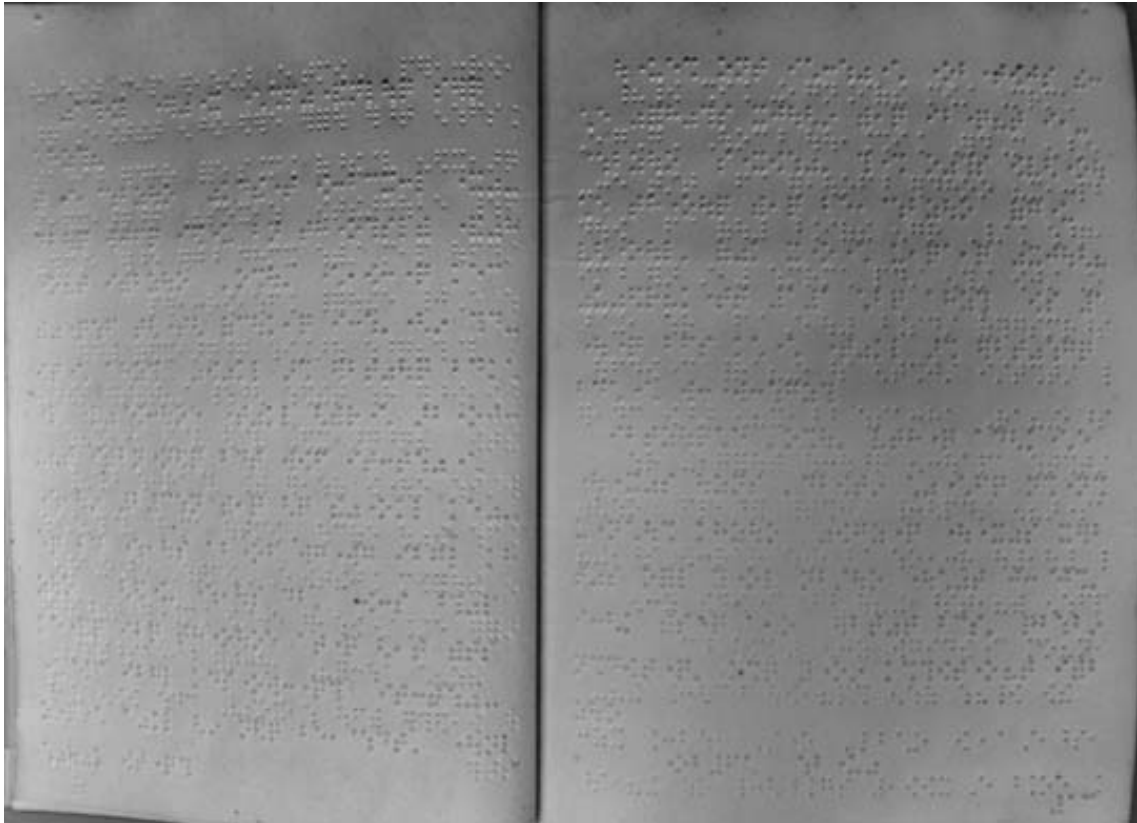
とーされた へやにわ ぶるい たんすや とだななどが
ならべて ありましたが そーがも よく ゆきとどいて
いるし すべてが きちんとして いました

のぶごさんわ ちょーど 5ねんせい の ときの せい
せきぶつに ひょーしを つけて とどて いらっしやるところ
でした 3がつの すえに なさるはずで あったの
が おとりこみが あったため いままで のびて いたの

だそーです わたくしが きたので すぐ しまおーと
なさるのを しいて とめて おてつたいを しましたが せい
せきぶつを 1まいも なくさずに そろえて いらっしや
るのに おどろきました のぶごさんわ せいせきぶつが
かえると すぐ かみの ふくろえ いれて おいて がくねん
の おわりに おまとめに なるのだそーです

1ねんせい の ときからの せいせきぶつも みせて
いただいて その しまつの よいのに かんしんして しまい
ました せいせきぶつわ 1つ 1つ じぶんの
ちからの こもった もので みな 1しょーの きねんに
なるのだ」と おもウト わたくしも きゅーに 1ねんからの
を まとめたく なりましたが わたくしのわ おきばしょを
きめて おかなかつたので おーかた なくなって しまいました

「ほんや ちょーめんわ どーして いらっしやいますか」
と たづねて みると のぶごさんわ うえの たなを ゆび
さして

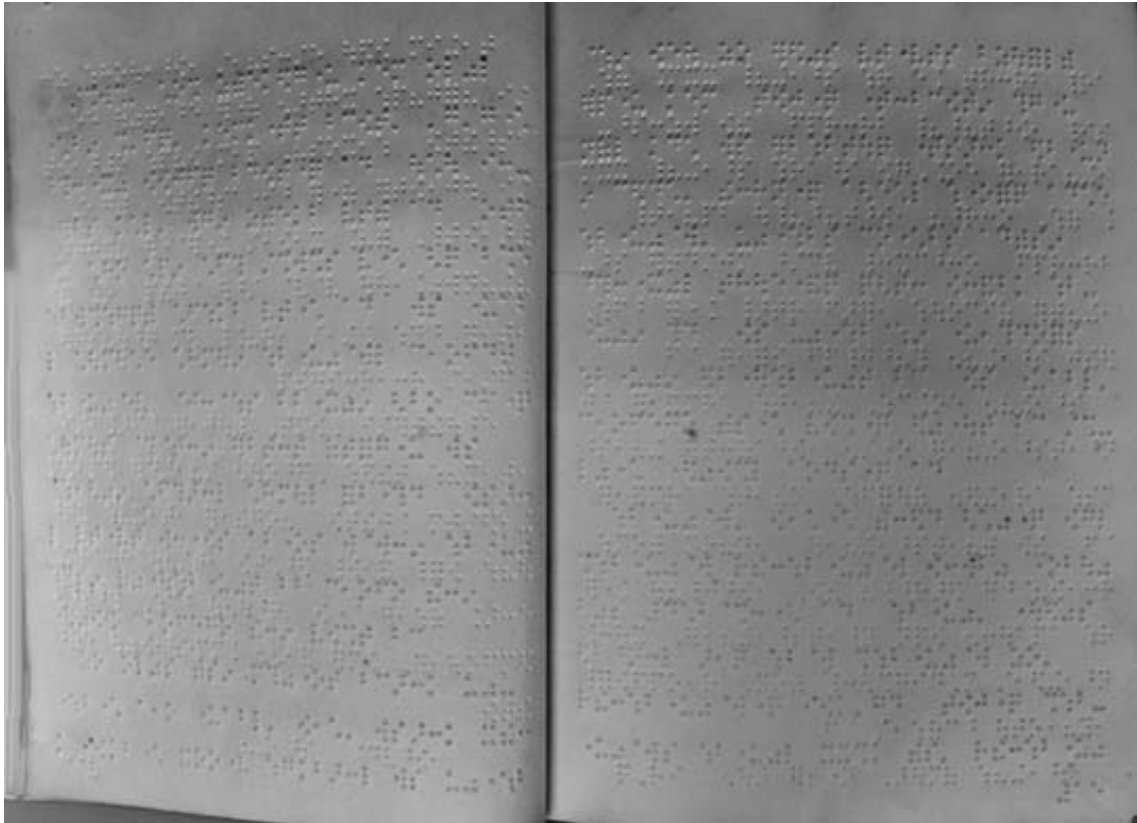


「あすこに ぜんぶ がくねんべつにして のせて
あります」
と おっしゃいました 「なるほど こーいうふーに ぶん
るいして そろえて おけば いつ とりだすのにも べんり
だ」と おもいました わたくしわ がっこーで ならう
ほんでさえ ときどき みうしなつて おーさわぎを する
ことがあります 「こんなに よく せいとんして いるなか
で べんきょーしたら どんなに きもちが よいだろー
」と おもいつけて いると そこえ おとーとさんが
ざっしを 23さつ もつて きて ほんだなに ならん
で いる ざっしの あいだえ それぞれ おいれに なり
ました きげば ざっしの るいわ ごーの じゆんに
ならべて おいて とりだしたら あとで きつと もとの
ばしょえ おいれに なるのだそーです おとーとさん
までが あんなに きを つけて いらっしゃるとわ じつに
かんしんな ことです

しばらく たつと おかーさんが だいどころの ほー
から 「めりんすの ふろしきを もつて おいで」と おっ
しゃいました のぶこさんわ すぐ たんすの こひきだし
から とりだして もつて いらっしゃいました みれば
ひきだしにわ みんな ふだが はつてあつて 「ふろしき」
「はんけち」などと 11 かいて あります この 1
じで いえの なかが どんなに よく せいとんされて
いるかが そーそーされます

おいとましてから わたくしわ ひとりで あるきながら
じぶんの しまつの わるいことを かんがえて つくづく
はづかしく なりました 「これまで じぶんの ふせい
とんの ために むだに ついやした じかんと るーりょくわ
おーきな もので あつた せいとんと いうのわ ていさいを
つくることでわ なくて むだを なくすことだ」と おもい
ました

だい16か さいばん

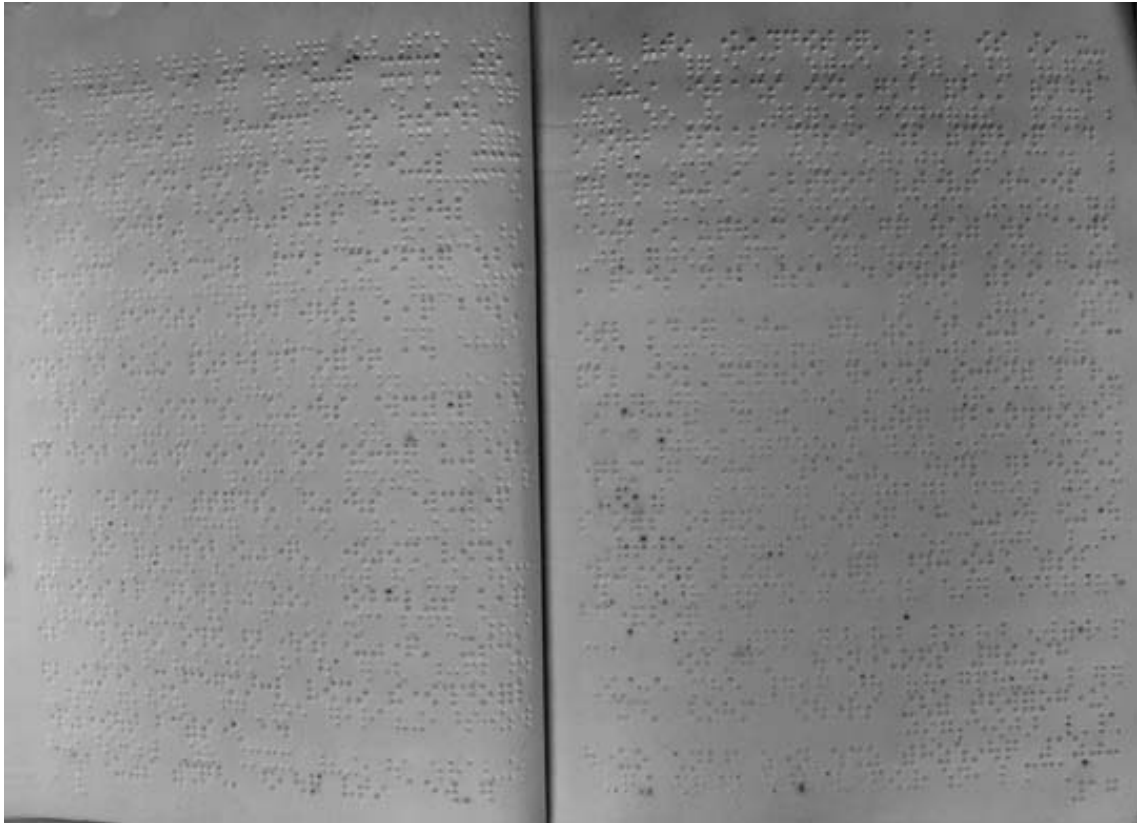


やくそくわ かたく まもらなければならぬ たにんにかいをくわえてわならぬなど うことわ われわれがじゅーぶん こころえて いることである しかし おーせいの なかにわ それを まもらない ひともある たとえば かりた かねを かえす やくそくの ひが きて いくらさいそくされても かえさない ひとがある その ばあいにかしぬしから かりぬしを さいばんしよに うったえると さいばんしよわ りよしゃの いいぶんを きいた うえで かしぬしの しゅちよーを せいとーと みとめれば その しゃっきを かえすよーに かりぬしに めいづる このよーに ひとひと そーごの あいだの そしよーを さいばんするのを みんじさいばんと いい うったえた ほーを げんこく うったえられた ほーを ひこくという

また たにんの ものを ぬすんだと いうよーな はんざいが あった ばあいにかわ こっかわ そのよーな ふほーな おこないが ぶたたび されないよーに その はんざい

しゃを こらし また せけんの ひとびとの いましめにも せねば ならぬ ところで どーいうことを すれば つみに なるか その せいさとして どのよーな けいばつを うけるかわ ほーりつで あきらかに さだめて あるから さいばんしよわ はんざいの うたがいの あるものを じゅーぶんにとりしらべて できとー こーへいな さいばんをする この はんざいしゃを ばつするための さいばんを けいじさいばんと いう この ばあいにかわ うったえられた ものが ひこくで けんじと いう やくにんが げんこくに あたるのである

さいばんしよわ こっかが もーける 墓幹きかんで これにくさいばしよ ちほーさいばんしよ こーせいん たいしん いんの 4かいきゅーがある さいばんわ じけんの けいぢゅーによって さいしよ くさいばんしよ またわ ちほーさいばんしよで おこなわれる ところで くさいばんしよの さいばんに ぶふくな ものわ ちほーさいばん



しよに じょーそし なお その さいばんに ぶふくな ものわ
さらに だいしんいんに じょーそする また ちほーさい
ばんしよで おこなわれた さいしよの さいばんに ぶふく
な ものわ こーそいん だいしんいんにと じゆんじに
じょーそする こーいうふーに 3かい くりかえして さい
ばんして もらうことのできる そしきに なっているのわ
つまり さいばんを ねんいりにする ためである

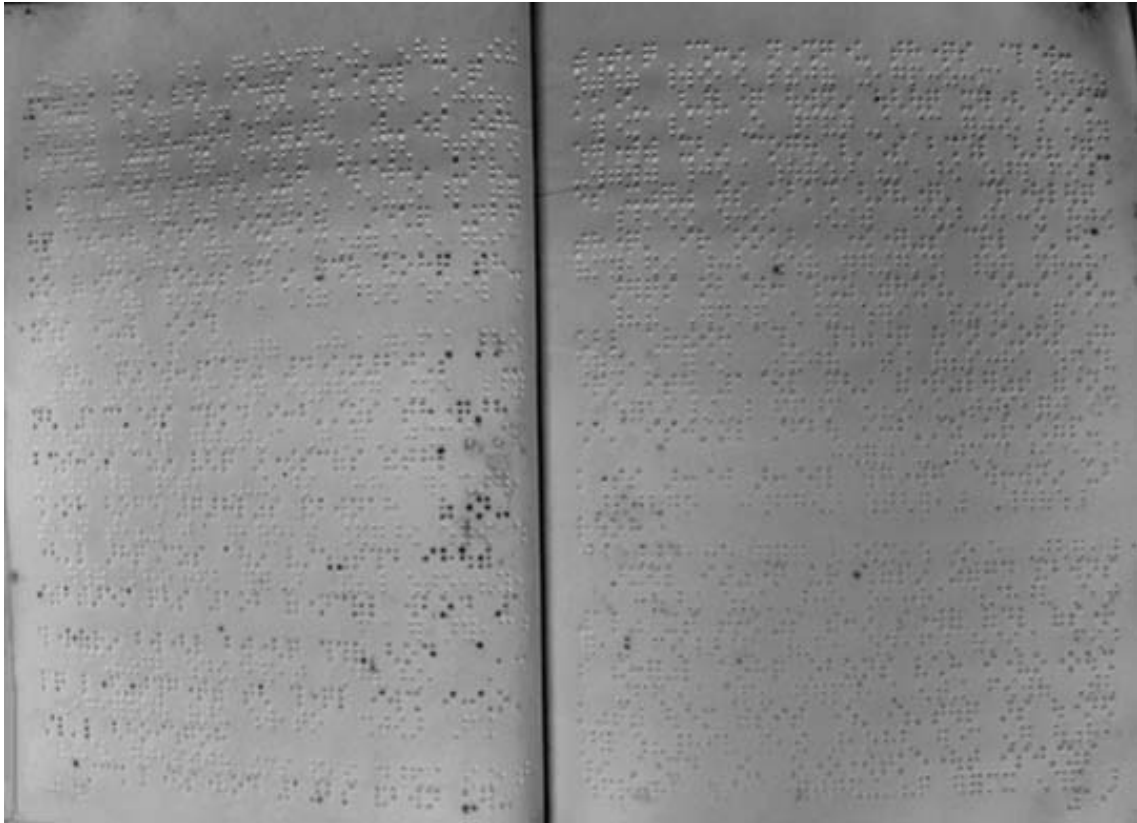
さいばんを おこなうのわ はんじの しょくむで あり
けいじさいばんで こつかを だいひょーして はんざい
しゃの しょばつを もとめるのわ けんじの しょくむで
ある また みんじさいばんでわ げんこく ひこくの
そーだんあいて つきさいにん またわ たいりにんと なって
その しゅちよーを たすけ けいじさいばんでわ ふとーな
けいばつが くわえられぬよーに ひこくを ほごするため
べんごしと いうものがある

さいばんの もくてきわ けって ひとを あらそわせ

またわ ひとを ばつすることでない この よを ぶ
どーりや ざいあくの おこなわれぬい へいけな ちつじょ
ただしい よのなかに するのが その もくてきである
もし さいばんがないとしたら ひとびと そーごの
あらそいが はてしなく おこなわれて しかも その あらそい
わ ちからの つよい ものや わるがしこい ものが かつ
ことになるであろー もし また さいばんが こー
へいにおこなわれぬとしたら せつかくの ほーりつも ねうち
が なくなり われわれわ あんしんして せいけつすることが
できぬであろー さいばんわ じつに せいぎほご
のための たいせつな しごとであり はんじ けんじ
べんごしの にんむわ きわめて ちゆーだいな ものと
いうべきである

だい17か しづかたけの 7ほんやり

はるわ きたりぬ こしぢの ゆきも とけそめたれば
しばた かついえ まづ さくま もりまさをして 1まん



5せんのへいをひきい おーみのやながせにうって
いでしむ まちもーけたる ひでよしわ びわこのほとりに
13かしよのとりでを かまえ しょしょーを はいち
して ぼーび おさおさ おこたりなし やがて かついえ
また みづから 5まんのへいを とくし きたりて もり
まさのぐんに がつす

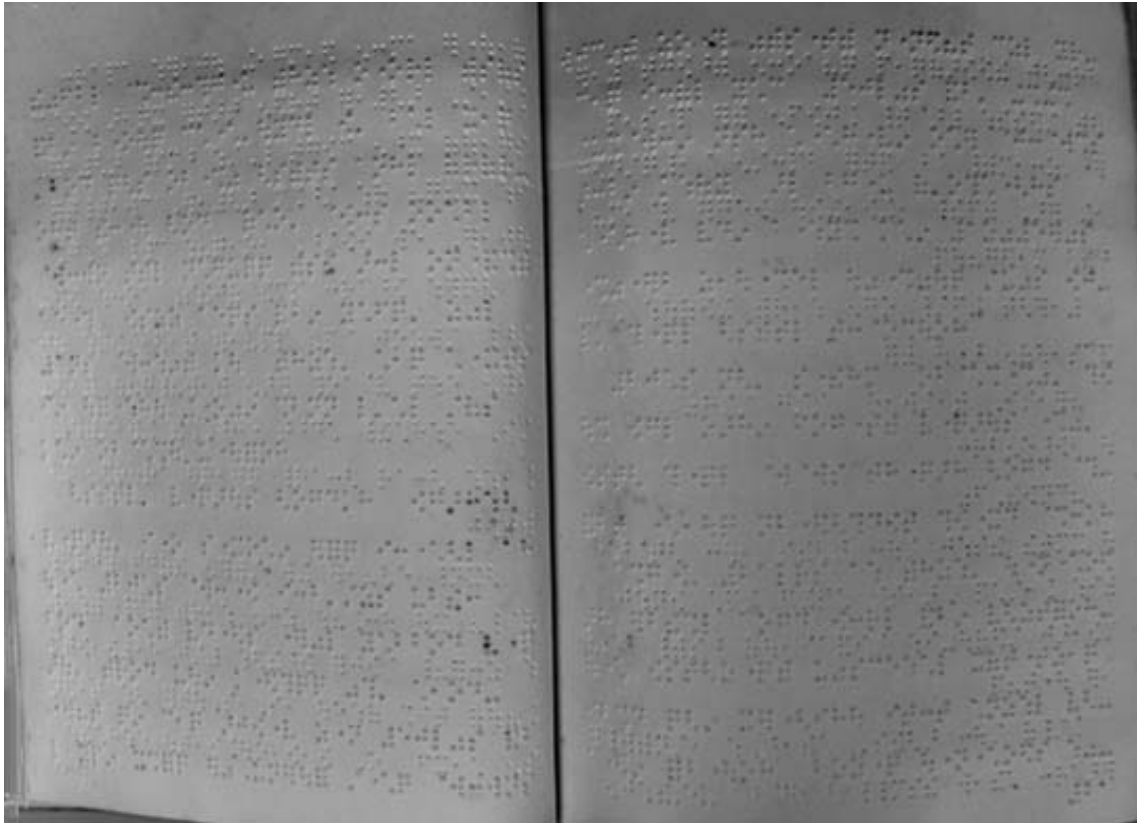
ときわ てんしょー11ねん 4がつ20かのあか
つき 13かしよのうちなる おーいわやまのとりでより
いくとーかのうまをひきて よごのうみのほとりに
くだり きたれる 78にんのへいそつあり みづ
ぎわに よりて うまのあしを ひやさんとする おりしも
おもいもよらぬ てきの1たい みづうみに そいたる 1
すぢみちを いそぎに いそぎて すすみ きたる
てて にげんとすれども とき すでに おそく おーかたわ
やにわに きりたおされたり

あやうく にげのびたる 12のへいそつ はせ

もどつて きゅーをつくれば とりでの しゅしょー
なかがわ きよひで しそつを しきして ふせぎ たたかう
されども ふいを うたれし にわかぬ いくさに きよひで
らのふんせん そのかゝなく きよひでわ うちじにして
とりでわ おち たたかぬ ござんのうちに おわりぬ

よせてのたいしょー さくま もりまさわ きょーの たた
かゝに かちほこり あすわ すずんで しづがたけの とり
でを おとし 1きよに てきを みぢんにせんと みづ
からわ おのろやまに やえいし おーいわやま はちがみね
などの よーしょ よーしょに それぞれ しょーそつを はい
ちしたり

よふけに およんで はちがみねを まもれる へいそつの
1にん ふと とーなんの ほーを のぞみ みるに みぢの
ほーめんにあたりて たいまつの ひかり おびただしく
なんとも しらぬ ものおと ざわざわとして よの しづけ
さを やぶる こわ たたごとならじと おのろやまの



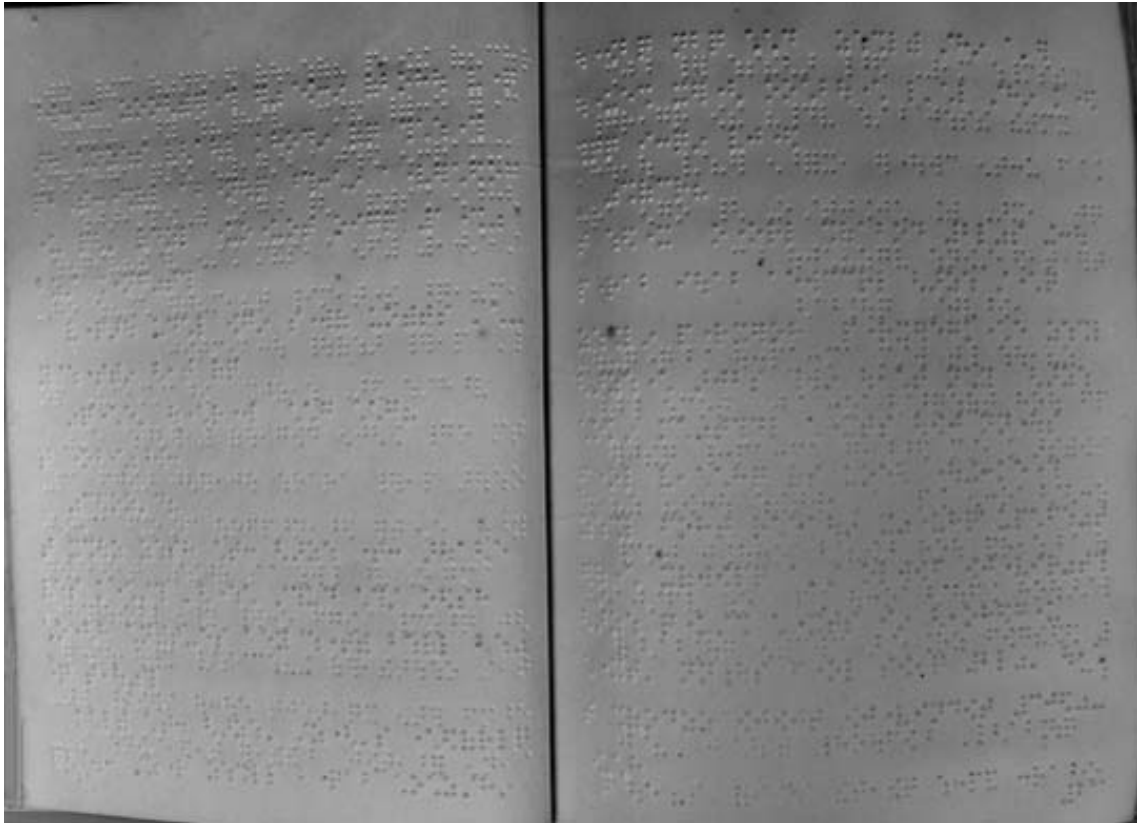
ほんえい きゅーほーすれば もりまさ ただちに ものみの
へいを いたして うかかわしむるに ばいかに ぶって
ねいたる てきの たいくん きのもとの あたりに みちみち
たりと ほーじ きたる みかたわ きょーの たたかいに
しょーそつ とともに つかわはてて ものの よーに たつべくも
あらず このまま あらての へいを むかえてわ まんに
1つの しょーさんも なし もりまさわ かって かぶとの
おを しめざりし ゆだんを くいつつ にわかき やみの
なかを たいきやくし はじめたり

きのもとにわ ひでよしの きたれるなり これよりさき
ひでよしわ おだ のぶなかを せめて おーかきに あり
しが 20やの しょーご おーいわやまの はいほー
いたる あたかも ひるげの ぜんに むかいたる ひで
よしわ もちたる はしを なげすてて 「すわ かつたる
ぞ」と てを うって よるこび まづ 50にんの へい
に むねを ふくめて せんぱつせしめ やがて しょーそつ

そろうをも またず 「ものども つづけ」と うまに むち
うって おーみに むかう 50にんの へいゆ ゆくゆく
ひやくしょーを つのり かがりびを たかせ りょーしょくの
よーいを なさしむ よに いれば みわたすかぎりの
かがりび ひるを あざむく なかを 1まん5せん
の ぐんせい まっしぐらに しんぐんして やまの ころ
にわ すでに きのもとに とーちやくしたり

20かの つきわ のまりぬ たいきやくぐんわ すこ
しく これに たよりを えたれども ひでよしの ぐんわ
このとき すでに しょしよの とりでより きたれる しゆ
へいと がっして ついけきすること すこぶる きゅーなり

あくれば 21にちの あさ もりまさわ しづかだけ
より せいほくに あたれる こーちに へいを ひきまとめたり
しが このときまでも はんのうらさかに ぶみとどまって
おいくる てきを ぶせきおりし おとーと かつまさき ひき
あげを めいじたり いままで しづかだけの さん



じょーより またたきもせず せんきょーを みたりし ひで
よし かつまさの ひきあしに なりたるを みて すかさず
てっぽーくみに あいづして じゅーかを あびせかたれ
ば てきわ みるまに ばたばたと たおれて 1くん
いまや くづれんとす

ひでよし はるかに これを のぞみ はたもとの わか
むしやどもを きつと みて

「てがらわ しがちぞ かかれ かかれ」

と だいおんじょー

「うけたまわる」

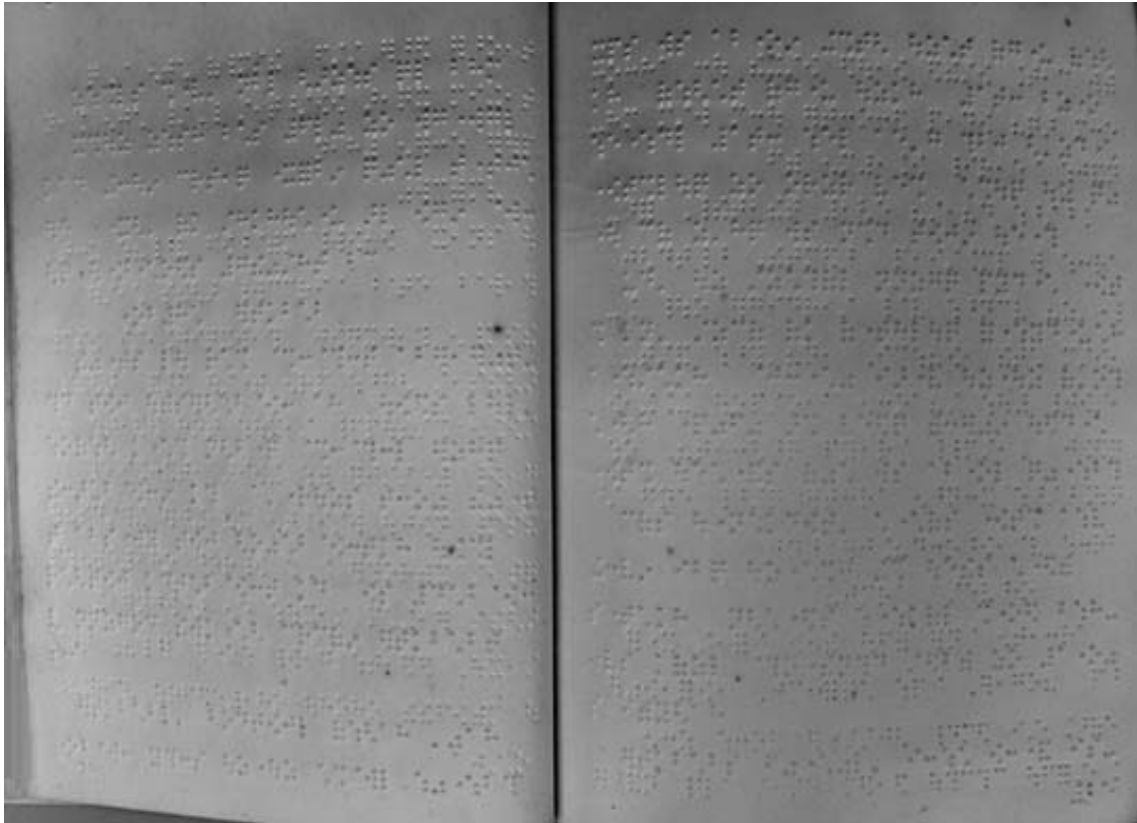
と ふくしま まさのり かとー きよまさ どー よしあきら
ひらの ながやす わきざか やすはる かすや たけのり
かたぎり かつもとの あらむしやども いさみに いさん
で とっしんす

なかにも かとー きよまさわ やまぎわの かけみちにて
てきしょー やまぢ まさくにに いであい かたかまやりを

しごいて ついて かかる まさくにも やりを あわせ
しばらく ふしぎ たたかいしが にわかにも やりを なげ
すてて おーてを ひるげ

「くみうち」

と さけぶ ただちに くみあいたる 2にんの ゆーし
ねぢあい おしあい あらそううちに きよまさ やがて
まさくにを ねぢふせたり ねぢふせられながら まさくに
きよまさが よろいの すそを しっかりと つかむ きよまさ
かたなを ぬかんとするに かぶとの しころ つつじの
えだに ひっかかりて みの はたらき じゅーならず
まさくに えたりと ちからあしを ふんばりて はねかえさんと
せしが ふみそこねて あわや たにそこえ ころびおちんとす
きよまさ てばやく かぶとの おを きつたりければ
かぶとわ つつじの えだに のこって 2にんわ しか
とくみたるまま ころころと ころびおつること 30けん
ばかり



まさくにの くびわ ついに きよまさの てに いりぬ
ふくしま まさのり いかの 6にん また それぞれに
なある ゆーしを うちとって ぶめいを てんかに とどろか
せり ぶきわ みな やりなりしかば よに これを しょー
して しづがたけの 7ほんやりと いう

たい8か せとないかい

ほんどの にし ちかく きゅーしゅーと あいせつせんと
する ところ しものせきかいきょー あり しこくの にしわ
さたまさき ながく つきいで きゅーしゅーに せまりて
ほーよかいきょーを なす あわぢしまの とーたん ほんど
と あいのぞむ ところ きたんかいきょーとなり しこくに
ちかきところ なるとかいきょーと なる この 4かいきょー
に つつまれたる ほそながき うちうみを せとないかいと
いう

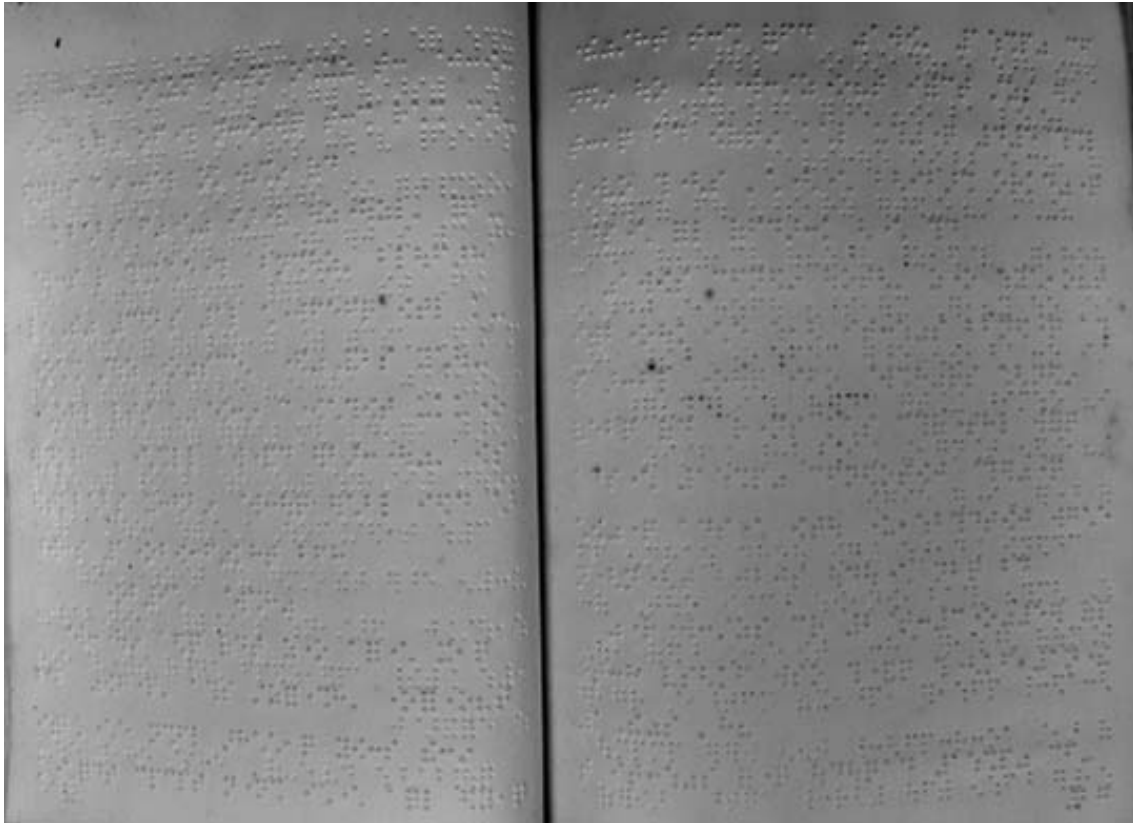
せとないかいにわ いたるところに みさきあり わんあり
だいしょー むすーの しまじま かくしよに さんざいす

ぶねの その あいだを ゆくとき しまかと みれば みさき
なり みさきかと みれば しまなり 1とー いまだ
さらざるに 1とー さらに あらわれ すいろ きわまるが
ごとくにして また たちまち ひらく さくして しま てん
じ うみ まわりて その つくる ところを しらす

はるわ しま やまかすみにつつまれて ねむるが ごと
く なつわ やまうみ みな みどりにして めざむるばかり
あざやかなり りょーがん および しまじま みわたす
かぎり でんえん よく ひらけて もーせんを しけるが
ごとく しらかべの みんか その あいだに てんざいする

うみの しづかなることわ かがみの ごとく あさひ
ゆーひを おいて しまがくれ ゆく しらほの かげも
のどかなり つきかげの さざなみに くだけ いさり
びの なみまに しゅつぼつする やれいも また 1だん
のおもむきあり

せとないかいの えんがんにわ おーさか こーべ おの



みち うじな たかまつ たどつ たかはま とー りょーこー
おーく きせん たえず つーこーして とーく ちかく くら
けむりの あおぞらに たなびくを みる

ないゆいの えんがん および しまじまに めい
しょの ち すくなからず いつくしまわ いにしえより
につぼん 3けいの 1に かぞえられて ことにな
だかく やしま だんのうらわ げんべいの むかし
がたりにはひとの かんきょーを うごかすこと はなはだ
せつなり わがくにに あそべる せいよーじんわ この
せとないゆいの ふーけいを しょして せかいに おける かい
じょーの 1だいにえんなりと いえり

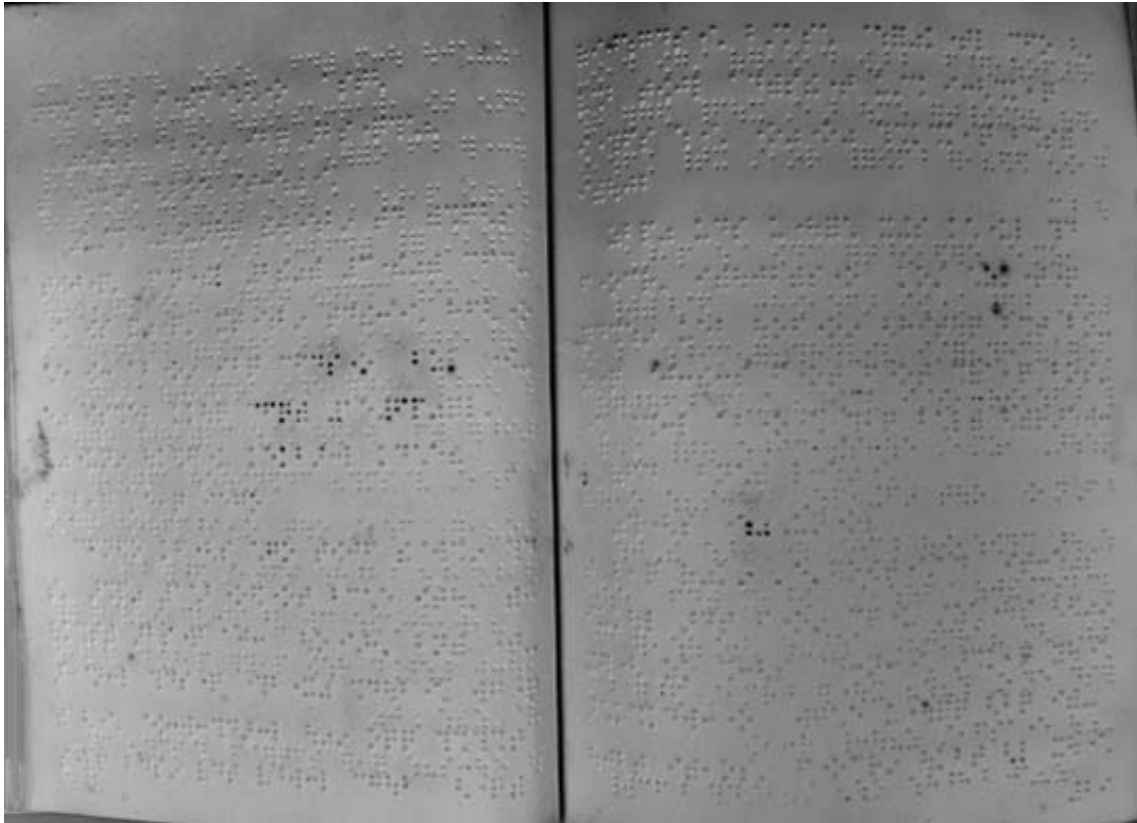
だい9か しょくりん

しょーじを あけて みると まだ あめが ふって
いる 「これでわ あすの やまめぐりわ だめだ」と
おもいながら つくえに よりかかって むこーの ほーを
ながめると うねうねと つづく おかが あめに けむって

ぼんやりと とーく みえる 「あそこわ 1さくねん うえ
つけをした ぢぞーやまだ」と おもうと やまの せを
とーつて いる こみちを なかに はさんで 45しゃくに
のびた すぎの わかぎが いきよいよく たちならんで
いるのがめに みえるよーな きが する

「あそこの うえつけをしたときわ まだ さむかった」と
おもいだしながら さっき おとーさんの いいつけで あす
の よーいに だして おいた しょくりんちの かきつけを
ひらいて みる ちづの なかの うすみどりに そめて
あるのが 1さくねん うえつけたところ しゅせんで
かこんで あるのが ことし ばっさいするところ それから
つきつきと いろいろの しるしが ついて いる

「ぢぞーやまの うち 2ちよー3だん5せ みね
どーり ひのきなえ そのた すべて すぎなえ 1つぼ
1ぼんの わり」
と おとーさんの てで しるしてある 1さくねん うえ



つけた ときのおぼえがきだ あのとき

「こんなに あいだを おいて よいのですか」

と ぼくが きいたら おとーさんが

「はやく かんぱつして ほそざいを とる もくてきの
ところであ 1つぼに 2ぼんも 3ぼんも うえる
が この へんでわ ふまいざいを とるほーが りえきだ
から こー あいだを おいて うえるのだ いまに ご
らん このくらい はなして うえても 15・6ねんめにわ
かんぱつを しなければ ならないよーに なるから」
と いうて わらって おられた

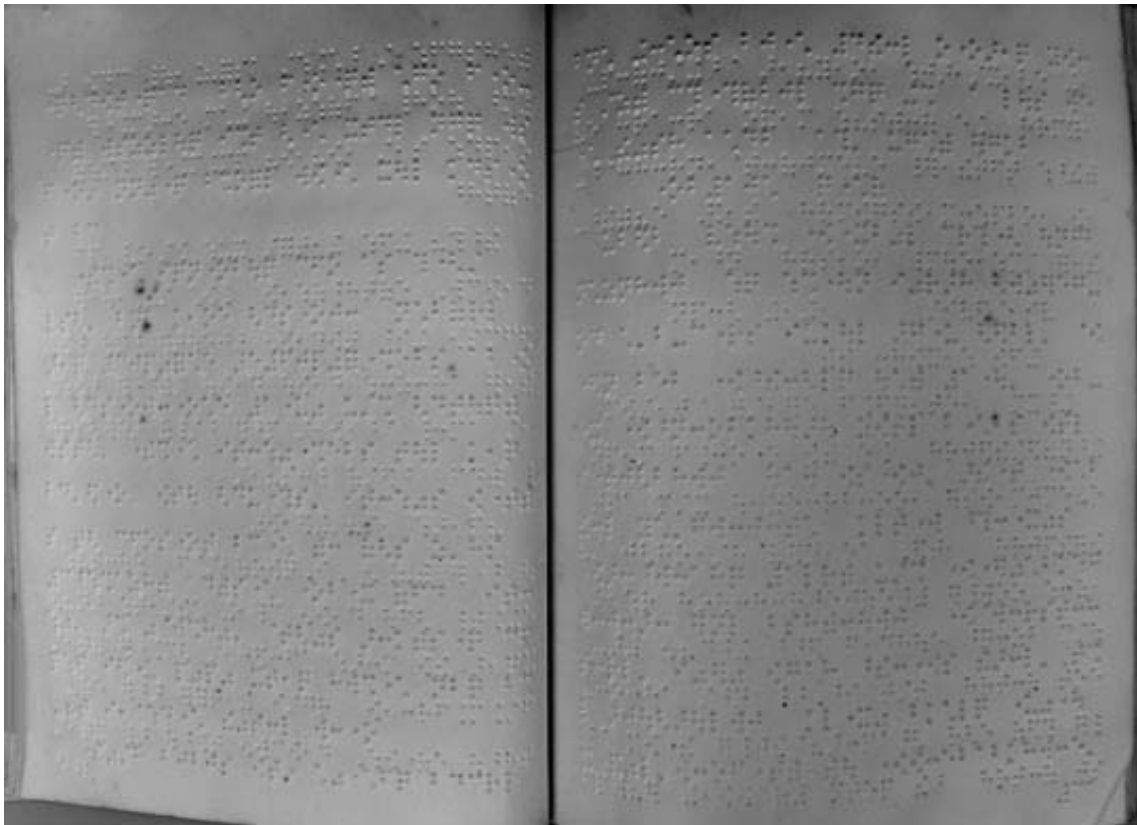
うえつけた なえぎの かやた ところえ ほしよくを する
のわ よくねん 1かだけだと いうから ことしわ もー
しなくとも よいので あるー したがわりわ いつも ど
よーちゅーに するので すいぶん くるしいが それで
も きが きょーそーするよーに しんを たてて すくすくと
のびて いるのを みると ひじょーに うれしい きでも

みおろされるのが いやなのか しゃめんなどに うえた きわ
ひくい ところに あるものほど はやく おーきくなって
こずえの さが だんだん すくなくなって いくのも
おもしろい

まいねん はるの はじめか ふゆの なかばに する
えだうちわ おもしろいものだ なたや かまなどで
つるくさを はらい したえだを きりおとして いくと いま
まで りょーほーの えだと えだと くみあって いたの
が きゅーに あいだが すいて いかにも きもちよさそー
に みえる いかも にーさんが

「すぎの ざんぱつだ」

と いうて みんなを わらわせたことがある おとーさんの
おはなしによると えだを うてば やまかじの きけんを
ふせぎ また くーきの りゅーつーが よくなって むしが
つかなくなるそーだ それからはじめて きいて おも
しろいと おもったのわ えだうちを しないと きに ふしが



できることである いきた えだでも かれた えだ
でも そのままにして おくと きが ふとるにつれて その
えだをつつんで いくために そこが ふしに なるのだ
という

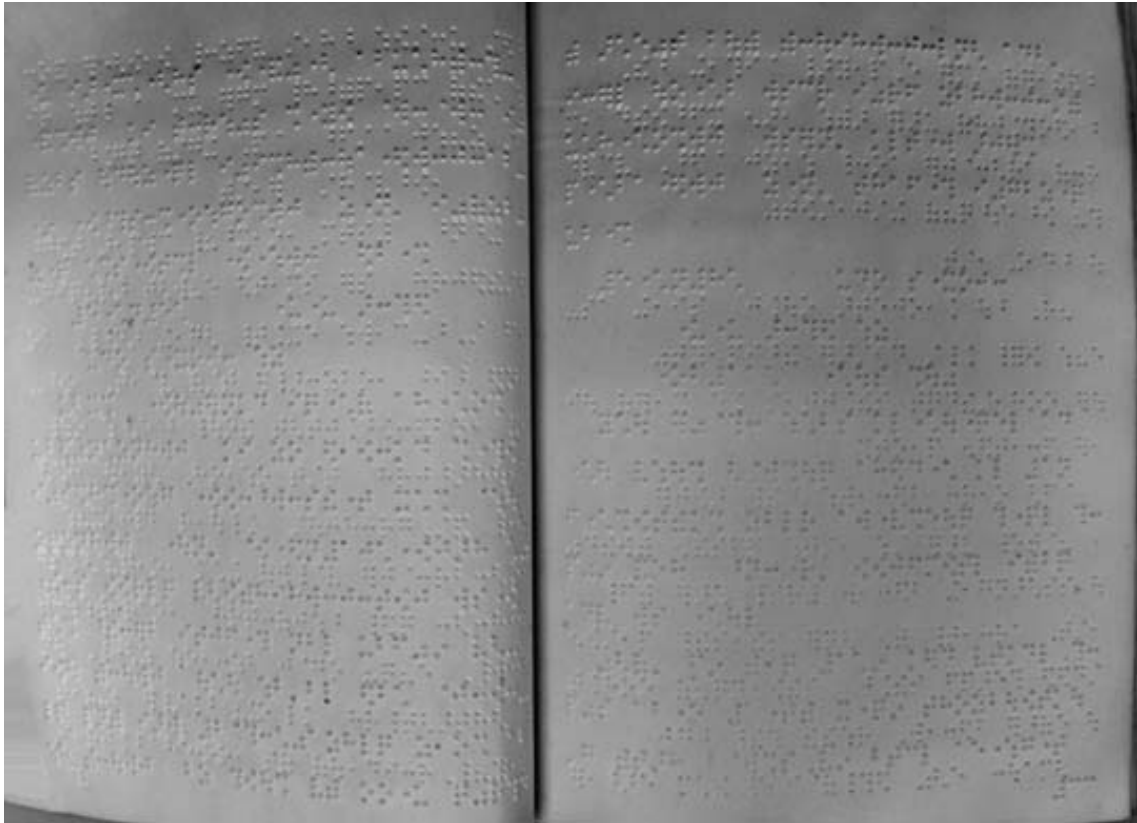
ぼくが おてつだいして うえた あの すぎや
ひのきわ いつに なったら きるのだろー つかいみちに
よって 30ねんめから 560ねんめぐらいの あいだ
に きるのだそーだから 1ばん はやく きるとしても
そのときわ ぼくが おとーさんぐらいの としに なって
いるわけだ ことし きるはずのわ おとーさんの こども
の とき うえたのだと いうが もー みきの まわりの
3じゃくあまりも あるものが だいが みえる おとー
さんわ よく 「しょくりんわ ちょきんの よーなもので うえ
てさえ おけば ねんねん ふとって りそくが ついて いく
」と おっしゃるは ほんとーに そーだ

ほんやり いろいろの ことを かんがえて いるうちに

いつか ゆーかたの いろが 4ほーに ただよって むこー
の やまも うすずみいろに くれて ゆく あにしの そら
が ほんのり あかるい あすわ はれかも しれない

だい10か てがみ

はなかい ひさしく ごぶん に うちすぎ しつれい
つかまつりそろ さて さくじつ おんちより きそんせられ
たる かわい うちの おはなしに よれば きけいにわ きよ
げつ いらい ごびよーきにて しかも 1じわ たい
ぶ ごぢゆーたいなりしよし まことに いかいの ことに
おどろきいりそろ しかし このごろわ よほど ごかい
ほーに むかわれそーろーとか なにとぞ じゆーぶんの
ごよーじよーありて 1にちも はやく ごぜんかみなされ
そーろーよー せつに いのりもーしそろ ごしょーちのとーり
とーちにわ おんせん これあり びよーごの ほよーにわ とく
によるしよしにそろ なごぶん いなかにて ばんじ
ぶべんにわそーらえども もし ごこーらいあいなりにそーらわ



ば およぶかぎりの ごべんぎ あいはかりもーす
べくそろ なお とーちさんの く(濁音符+む)こ しょーし
よー おん
みまいの しえるしまでに おんおくりもーしあげそーろーあい
だ ごじゅのーくだされたくそろ まづわ おんみまい
まで かくのごとくに ござそろ けいく
5がつ5か ばば よーすけ
はるた のぶたろー さま
はいいく ごしんせつなる おてがみ ありがたく
はいけんつかまつりそろ なお また けっこーなる くずこ
おんおくりくだされ ごこーじょーのほど ふかく しゃし
たてまつりそろ じつわ きよげつ10かごろより
ぼーの こちにて ひきこもりおりそーろーところ そのご
とかく びよーせい おとろえず ついに はいえんを ひき
おこし もーしそろ しかし さいけんに けいかりよーこー
にて ねつも およそ よいしゅーかんあまりにて まったく あい
さり もーしそろ いま すこしく ひも たたば てんちする

も よからんと いしも もーしおりそーろーにつき あるいゆ
おーせに したがい そのうち おんちえ まいりそーろーやも
はかりがたくそろ そのせつわ なにとぞ よろしく
ねがいあげそろ まづわ とりあえず おんれいまで
はいく

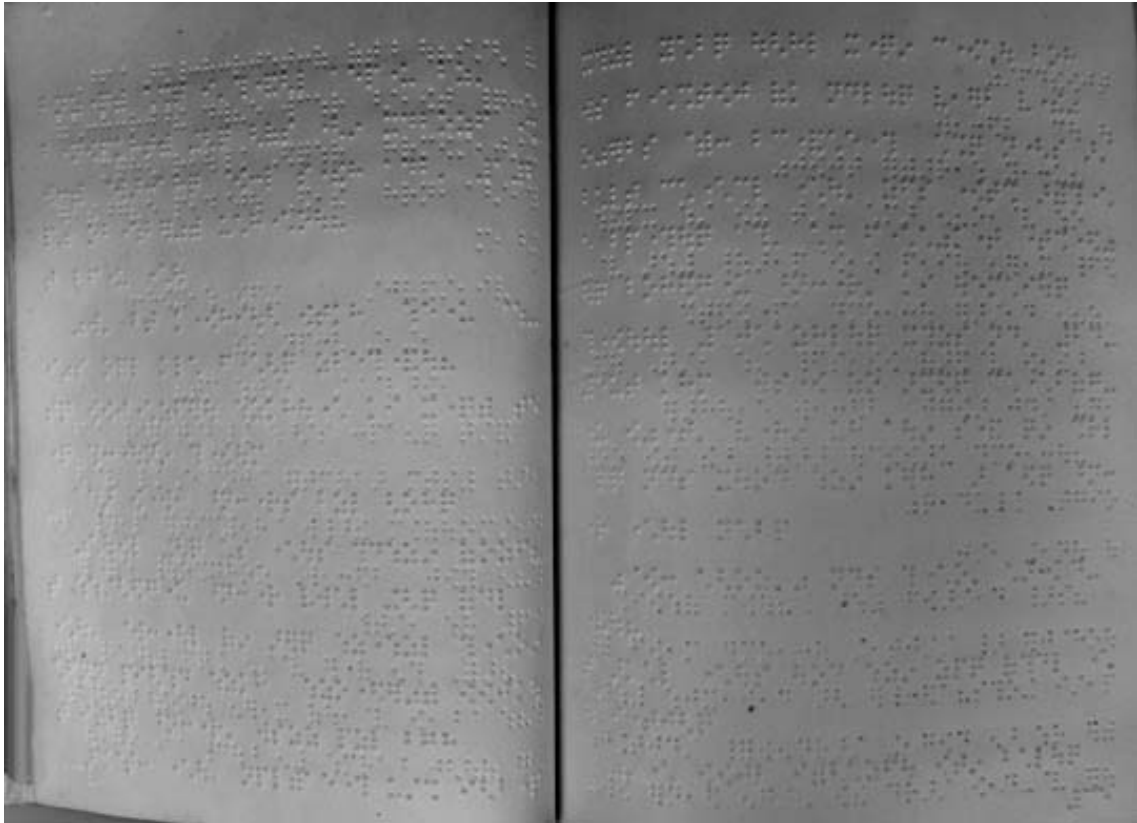
5がつ8か はるた のぶたろー

ばば よーすけ さま

だい111か がしの くしん

むかし せんしゅー さかしの なにがしでらに ある
がし ひさしく きしよくして ありけるが なに 1つ
えがくこともなく まいにち あそびくらすして すでに すー
ねんを へたり じゅ^ぢわ ころろえぬことに おもいて
あるひ その がしに

「きみわ えを もって 1かを なせる ひとなるに すー
ねんの あいだ 1ども ふでを とりたまいしことなし
われ もとより いしよくの ひを いたうに あらざれど



いつまでも かくて おわすべきに あらねば いまわ
いづこえなりとも ゆきて きみの ぎを ふるいたまえ
そーも しょーありて きょーに のぼり あるいわ 12
ねん たいざいせんも はかりがたし
と いえば がし

「そわ いと なごりおしき ことなり さらば
おんの ために なにか えがきて まいらすべし」
とて ところがまえせし さまなりしが なお ふでも とら
で すーじつを すごしぬ

あるよ こぞー ちゅーぢの いまに きたりて

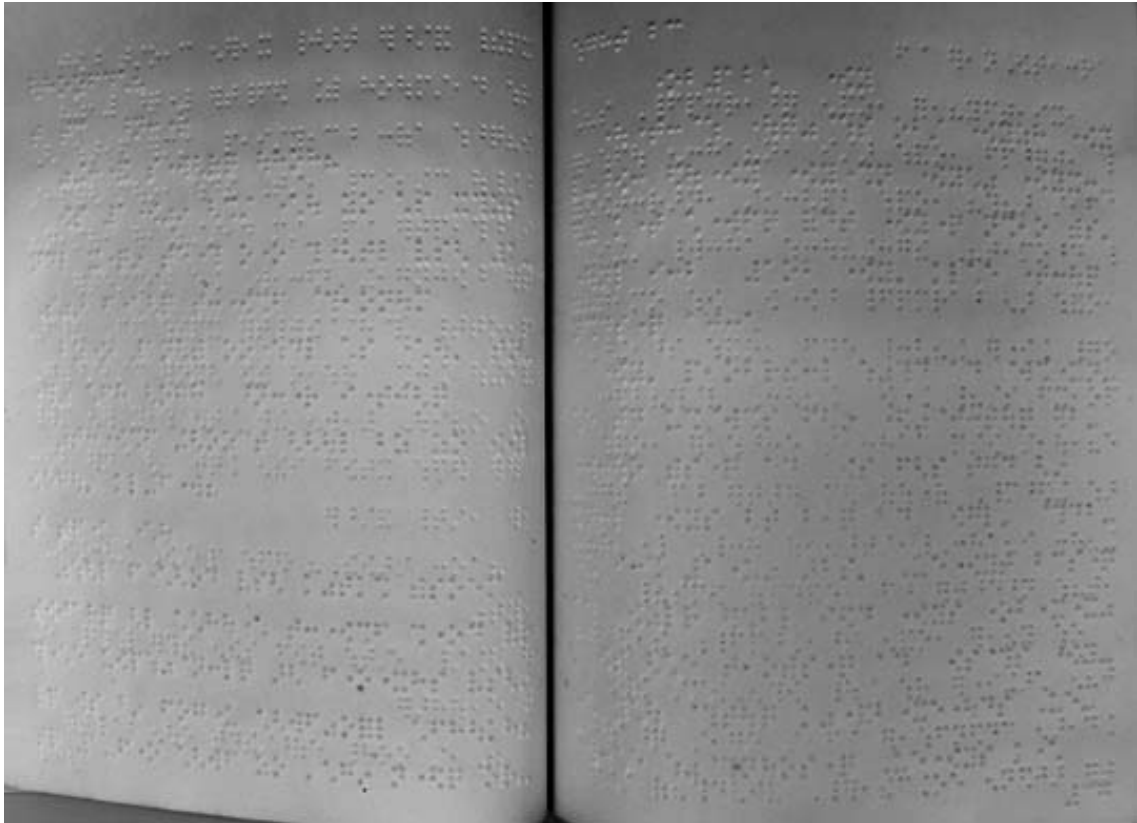
「かしこに ゆきて かの がしの するさまを みたまえ」
と ささやきければ ちゅーぢ ひそかに ゆきて みるに
がしわ しょーじに みえお よせて さまざまに すがたを
かえつつ ねおきする さまなり さまたげても ころなし
と おもいて ちゅーぢわ そのまま ねまに いれり
よくちよー がしわ つねにもあらず はやく おきいで

ふすまに むかいて しきりに ふでを うごかし いたり
その えがくところ みな つるにして ひっせい ひぼん
たんせいの みょーいづべからず かくて つぎの よわ
いかにと うかがうに がしわ まえの ごとく よもすが
ら いねずして あすわ かく えがかんなど どくげん
して いたりければ ちゅーぢわ なお しらぬかおして
すごしに 10かあまりにして ふすまの つるわ 24
5はと なりぬ そのご また よぶけて うかがいみれ
ば こんどわ ひぢを はり あしを のべ てを くちに
あてて つるの ふしたる さまを なせり よ あけて ちゅー
ぢ がしに むかいて

「きょー かきたまわん つるの すがたわ かよーなる
べし」

と よなかに がしの したる さまを まねて みするに が
し おどろきて

「わが ころに おもいかまえし ことを いかにして



しりたまえるか」

と とう ぢゅーぢ

「ゆーべ のぞきみて しりたり」

この 1 ごんを きくや がし また かの ぶすまの
つるに ぶでを とらず ただ すぎとに ひのき 1
ぼんを えがきて とーごくえ しゅつたつしぬ

いまだ 1つきも たたざるに かの がしわ とつ
ぜん かえり きたれり ぢゅーぢ おどろきて

「とーごくえ ゆきたまうと ききしに いま また ここに
こられしわ なにゆえぞ」

と とえば がし

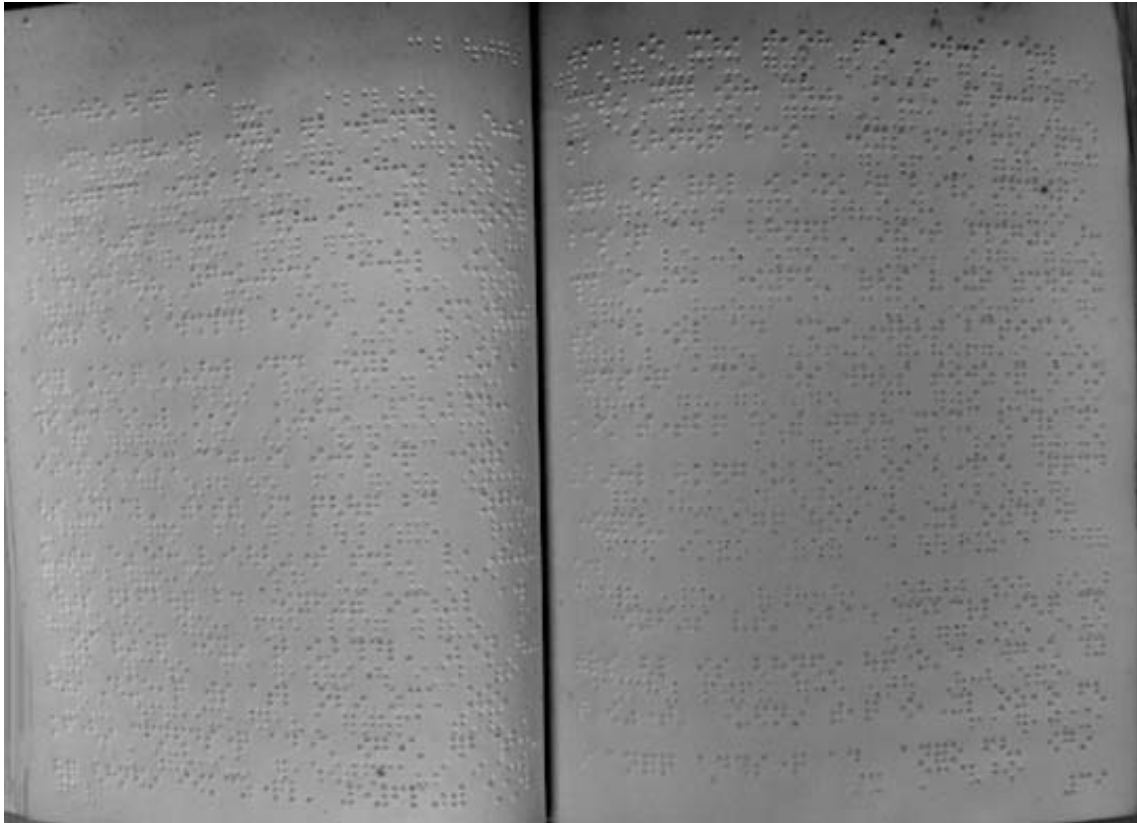
「さきに えがきたる ひのき なんとなく ものたらぬ
ところありて きに かかりしが とーごくえ くだる みち
すがら はこねさんちゅーにて よき えだぶりの ひのきを
みて その いを えたれば かきそえんために かえりしなり」
とて 1えだ かきそえ また わかれを つげて たち

されりという

だい12か ごむ

じどーしゃ じてんしゃの たいや ごむまり ごむ
にんぎょー けしごむ ごむくつ ごむかん ごむふー
せん など かぞえて みると ごむで つくった ものわ
じつに おーい 1たい ごむわ なにから どーして
つくるので あるーか

ごむわ ねったいちほーに さんする ある しょくぶつ
から とる はくしょくの えきを げんりょーとして せい
ぞーした ものである この えきの とれる きを
ぶつーに ごむの きと いうている これにわ しゅるい
が おーく 1ばん よいのわ ばらごむと いうので
ある こんにち せかいに おける ごむの だいぶぶん
わ この きから とったものである このしゅの ごむ
が むかし しゅとして なんべいぶらじるの ばら
しゅーから さんしゅつしたので ばらごむの なが



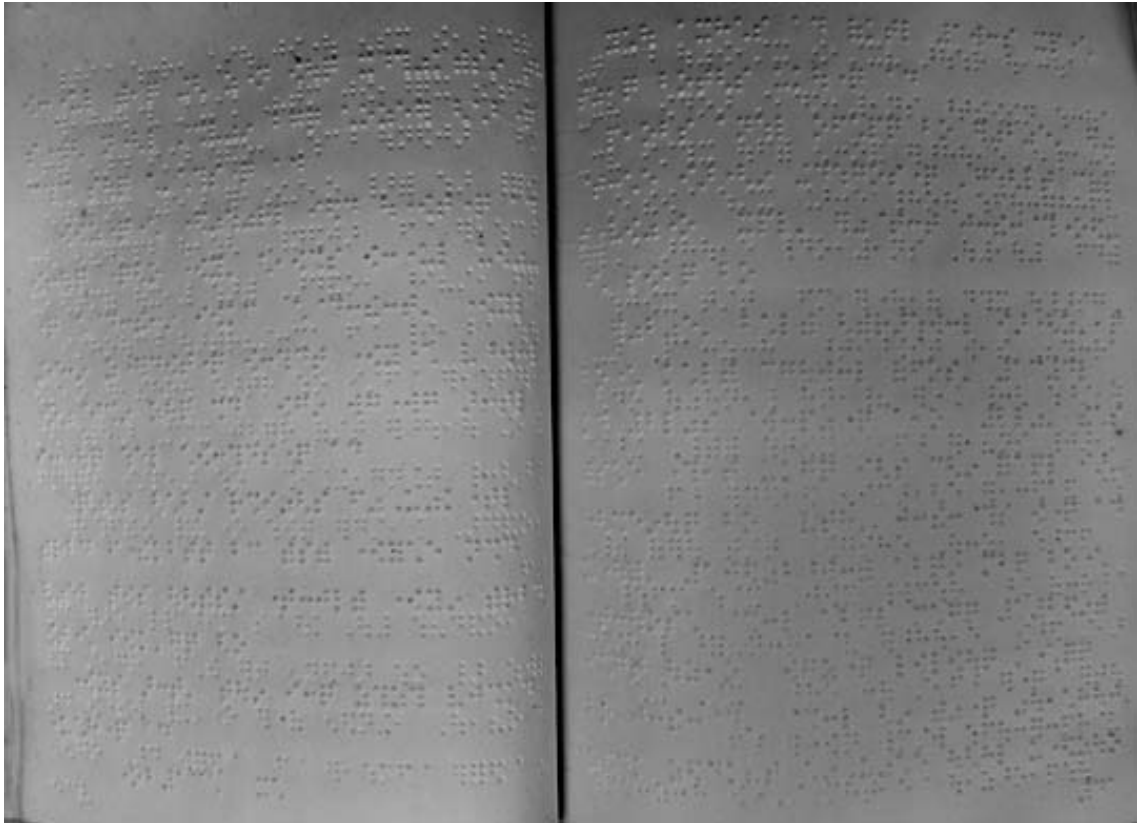
しよーじたわけ である

ぶらじるへんで ごむを せいぞーするにわ さんや
に じせいする ごむの きから げんりよーをとるので
あるが きんねん ごむの じゅよーが げきそーしたため
に えいこくじんわ まれーはんとーの りよーちに ばら
ごむの きを いしょくするに いたった たの こくじんも
これに ならって なんよーに おける ごむの さいいれわ
すこぶる さかんに なった なんよーわ 1ねんぢゅー
おんどが たかく うりよーが おーいので ごむの
きのはつくにわ もっとも よく てきして いる まれー
はんとー らんりよー ひがしいんど とーにわ にっぽん
じんの けいせいして いる ごむえんも たくさんに ある

この へんで ごむを さいいれするにわ まづ しん
りんを やきはらって その あとに たねを まくか またわ
なえぎを うえつけるので あるが これが せいちよー
して きりつけを おこなうまでにわ 56ねんも かかる

そのあいだ くさを とったり とらや ぞーの あらしに
くるのを ふせいだり くしんわ なかなか 1とーりで
ない きりつけと いうのわ ごむの きから えきを とる
ために きの みきに こがたなで きずを つけることを
いうので ある きりつけにわ よほど じゅくれんを よー
する がんらい ごむえきわ みきの ひぶと もくしつづ
との あいだに ある にゅーかんそしきと いうところから
であるから この そしきの とこまで こがた
なが とどいて しかも それより ふかくわ きずの つか
ないよーに しなければならぬ この きずから でてくる
ごむえきわ ながれて したの こつぷに たまるので
ある

ごむえんの ひとわ まいあさ くらいうちにおきて うけ
もちの きに この きりつけを して まわる これが すむ
と こんどわ ばけつを もって こつぷに たまった えき
を あつめて あるくので ある あつめた えきわ これを



こーばにもって ゆき まづ こして ふじゆんなものを とり
のぞき つぎに やくひんを いれて かたませ きかいで
うすく のして かわかすので ある

こまでが げんさんちにおける しごとで ある
こーして できた ごむわ かっこのの こーばに はこん
で かりゆーほーをおこなう かりゆーほーとわ ごむに
ゆあーを まぜることで こーすると ごむが ひじょーに
だんりよくを まして くる これを それぞれ よーとに
おーじて さらに かこーするので ある

でんきの きかいや ちくおんきの えんぱんなどに
もちいる えいばいといつ という ものも ごむから つくる
きんらいとこの しきもや どーろにも ごむを もちいる
ことが おこなわれて きた

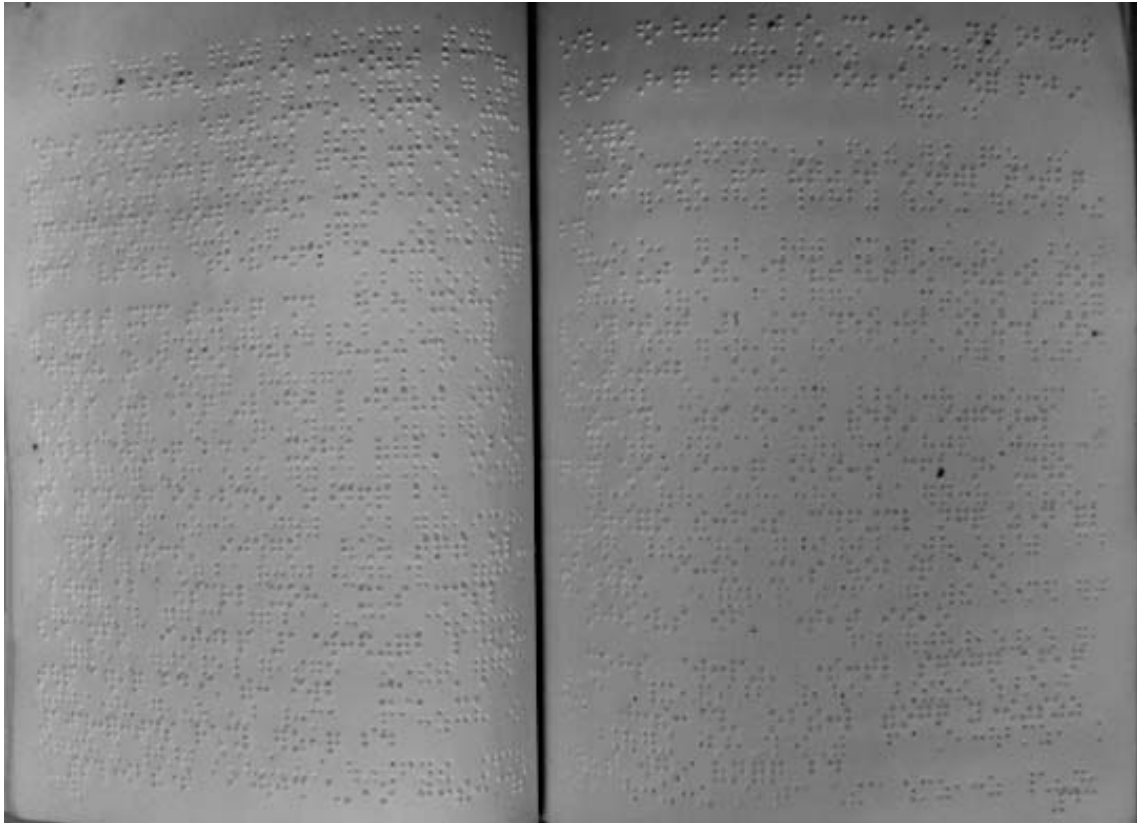
ごむの よーとわ としを おーて ますます ひろくなる
ばかりで ある

たい13か ふか

むかし あふりかの ある みなとに 1そーの ふねが
とまっていたときの はなしで ある

ねつたゆ あつさに たえかねて いた せんんらわ せん
ちよーから およぎを ゆるされたので われさきにと うみか
とびこんだ ふねこわ せんちよーと ろーほーしゆだけ
が のこっていた

せんんらわ しかにも きもちよそーにおよぎまわって
いたが なかにも うれしそーに みえたのわ 13・4に
なる 2にんの しょーねんで あった 2にんわ ほかの
ものから ずっと はなれて おきの うきを めあてに およ
ぎくらをあして いた ひとりわ ろーほーしゆの こで ある
はじめわ 10けんいじょーも あいてを めいて いたが
どーしたのか きゆーに あいてに めかれて 12けんも
おくれて しまった これまで にこにこして なかめて
いた ろーほーしゆわ きゆーに きを もんで 「しっかりしろ
まけるな まけるな」と かんぱんから しきりに はげました



ちよーど そのとき 「ふかだ ふかだ」という せん
ちよーの けたたましい さげびごえが きこえた ろー
ほーしゆが おどろいて むこーを みると ふねから 3
400めーとるの ところに おきな ふかの あたまが
みえる ひとびとわ さげびごえに おどろき あわてて
われさきにと ふねえ もどって くる しかし ふたりの
しょーねんわ まだ しらないらしい ろーほーしゆわ き
ちがいの よーに なって 「にげろ にげろ」と こえを
かぎり に さげんで いるが ふたりの みみにわ はいらぬ
のか むちゆーで およぎくらをつづけている

すくい の ほーとわ おろされた しかし とても まに
あいそーも ない そのうちに ふたりわ ふかの くるのに
きがついた おどろいて 1しょーけんめい にげよー
として あせっているが もー おそい ふかわ はや
10すーめーとるの ちかくに せまっている

ものすごいほど あおじろく かわった ろーほーしゆの

かおにわ けっしんの いろが うかんだ つとたいほーの
そばえ よって いそいで だんがんを こめ ねらいを
さだめた

ふかの くちわ もー ほとんど こどもに とどいて
いる

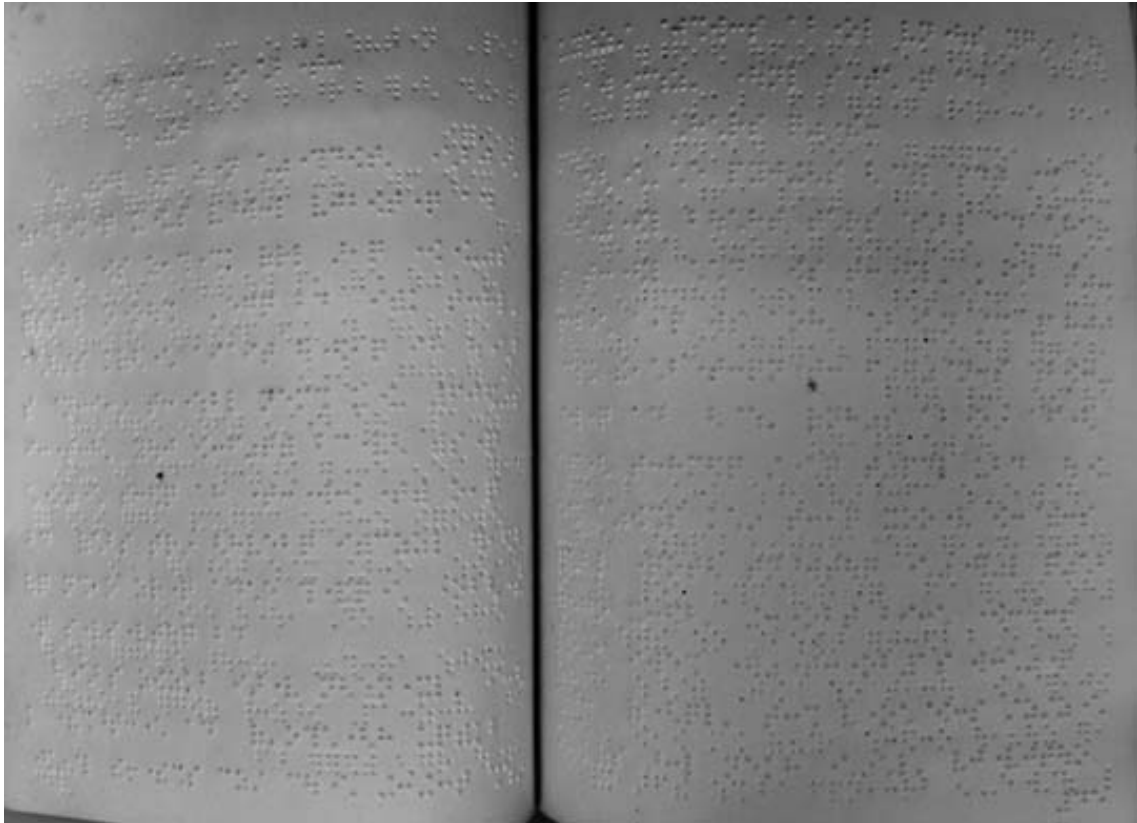
「あっ」と おもわず ひとびとが さげんだ とたん
に ずどんと 1ぱつ すさまじい たいほーの おと
が とどろき わたった

ほーしゆわ その けっかを みるのを おそれるよーに
てで かおを おーって たいほーの うえに つつぶした

たちこめた ほーえんの うすれゆくにつれて まづ めに
はいったのわ おきな ふかの したいで あった

よろこびの こえわ どっと おこった

ふたりの しょーねんわ ほーとに のせられて かえって
くる ろーほーしゆわ たいほーに もたれて むごんのまま
じっと それを みつめている



だい14か ほっかいどー

さつぼろ

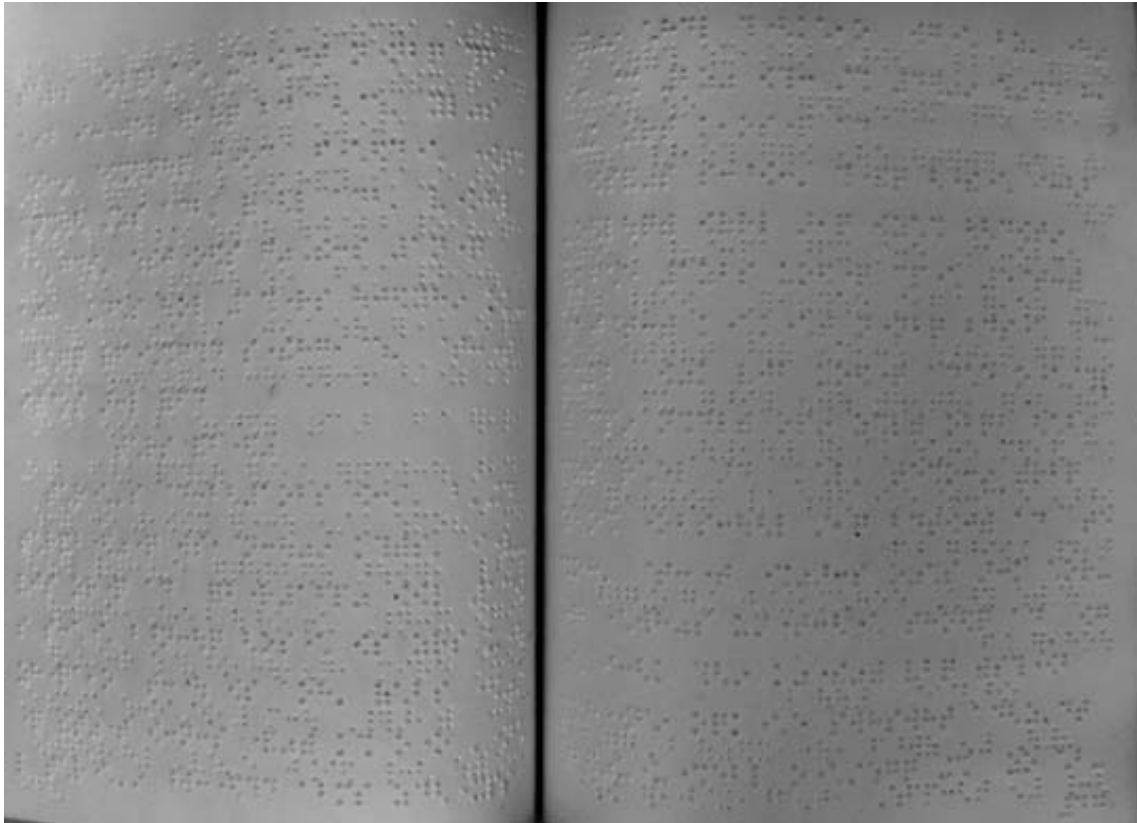
さつぼろにきてまづかんずることわがいろが
まっすぐではばのひじょーにひろいことである
しかいこのまっすぐなみちによってごぼんの
めよーにただしくわらわているおもなとーりにわ
あかしゃのなみきがあおあとしげっておりしかい
のちゅーおーをとーざいにつらぬくはば60けんの
おーどーりわむしろこーえんともいうべきもので
かだんがもーけてありどーぞーなどもたつて
いるみかいのとちをきりひらいておもうまにせつれい
してつくったまちであるからすべてがだいきば
でのびのびとしている

しかいのまこまないおよびつきさつぷにわおーき
なごくちよーがあるみわたすかぎりはてもない
げんやにほーぼくのうまやうしがゆーゆーとくさを

はむさまやりよくそーのあいだにひつじのむれをなし
てあそぶさまわじつにのどかである

かりかちのてんぼー

たきがわからねむるゆきのきしゃにのるとやく5
じかんごにいしかりととかちのさかいにあるかりかち
のとーげにかかるこのとーげにわなかいとん
ねるがあつてそのあたりわかいばつやく1800
しゃくほっかいどーてつどーえんせんちゅーのさいこー
しよであるきしゃわみつりんのあいだをあえぎ
あえぎとーりぬけてやがてとんねるにはいる
らくあんこくのなかをとーつてふたたびこーみよーの
せかいにでたときとつじよとしてがんぜんにてんかい
せられたふーれわゆーたいといおーかごーそーと
いおーかおそらくぜんどーだい11のそーかんで
あるーみぎてにわとーくひだかきよーのやまやまが
おーなみのよーにつらなりがんかにわひろびろとした



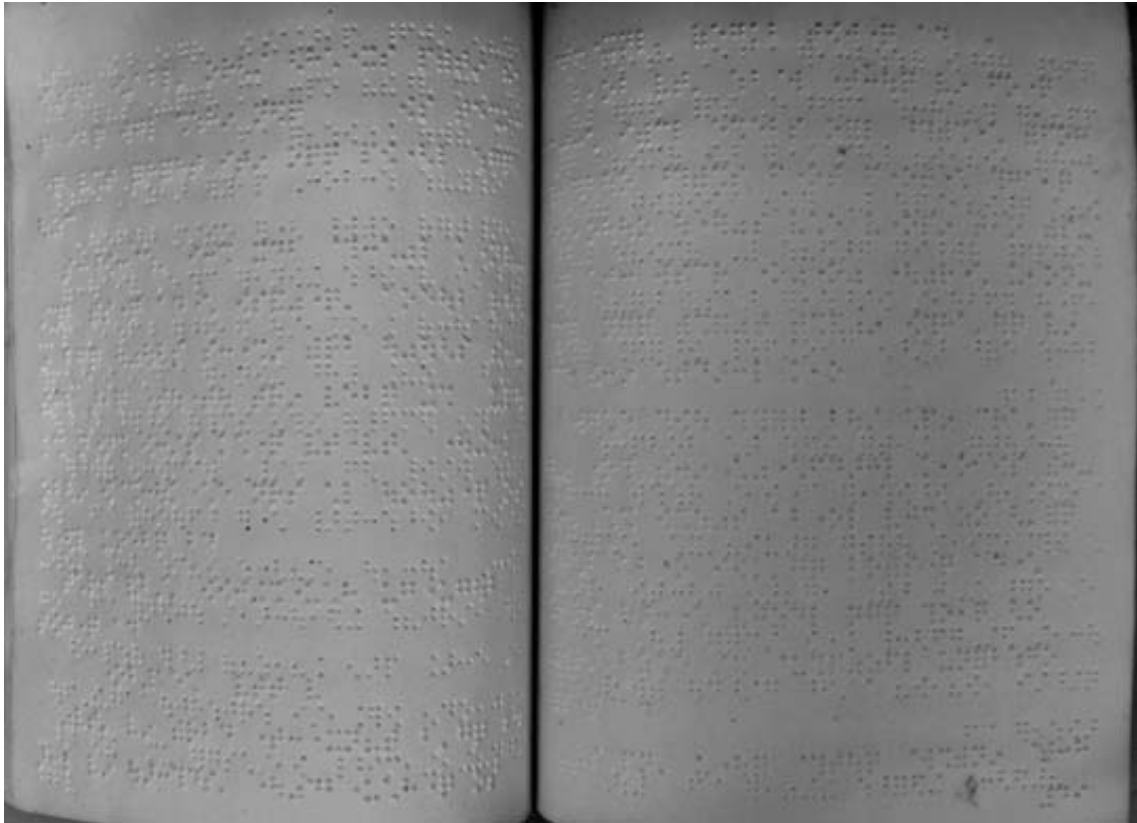
とかちの だいいやはが はるばると つづいて すえわ
あおい おーぞらに せつして いる きしゃわ むにの
きょーを きょくせつして くださる えがけるが ごとく
うつくしき やまの あるいわ みぎに あるいわ ひだりに
あらわれるのわ さほろだけの れんぼーの 1つで
あるー はるか の したに 1すぢの しるけむりを たな
びかせて みえがくれする のぼりれっしやわ ちょーど
おもちゃの よーに みえる

とかちの へいげん

とかちがわの りゅーいき1たいの こーやわ いわゆる
とかちへいげんで その ちゅーしんを なすものわ おび
ひろの まちである めいぢ16ねん ここに 13こ
の のーかが いぢゅーして きたのが この まちの はじ
まりであった とーじ この あたりわ みかいの げんや
で ほとんど こーつーの べんも なく ただ わづか
に とかちがわを じょーげする あいぬの まるきぶねの

べんを かりるに すぎなかつた それが いまわ じん
こー やく 2まん こすー やく 4せんを さんする りつ
ばな まちと なつたのである

このへんの のーぎょーわ すべて きほが おーきい
はたけにしても こみちに よつて こまかく しきることを
しなから 1まいの はたけで うねが 5ちょーも
10ちょーも ながながと つづいて いるのが すく
なくない こんな ひろい はたけで あるから たがやすに
も うねを つ8くるにも たねを まくにも たいてい きかいと
うまの ちからによる なかにわ とらくたーを もちいて
まったく たいのーしきに やつて いるところもある とら
くたーわ ちょーど ぐんよーの たんくの よーな かたち
で がそりんの はつどーきが とりつくて ある これ
が おーきな すきを なんぼんも ひいて ものすご
い うなりごえを たてながら のそりのそりと あるきまわると
2けんはばぐらゐに たがやされて ゆく また かい



こんする ばあんにわ たちきや きりかぶの ねもとを ほつて おいて それに くさりをつけて
で ひくと めりめりと おとを たてて ねこぎに されて
しまう

のぎよーしゃわ おーく ふるい しゅーかんになづみ
やすい もの であるが このへんでわ あたらしい ちしき
を いれて しんしきの のーくを もちい しんしきの ほー
ほーに よって どしどし とちを ひらいて ゆく はてし
なく つづく こーやの なかで ひとびとわ じゅーな
たいきを こきゅーしながら つちの かに したしんで たの
しげに はたらいて いる

とかちの へやわ こころゆくばかり はれはれしい
ところ である

だい15か ひとと ひ

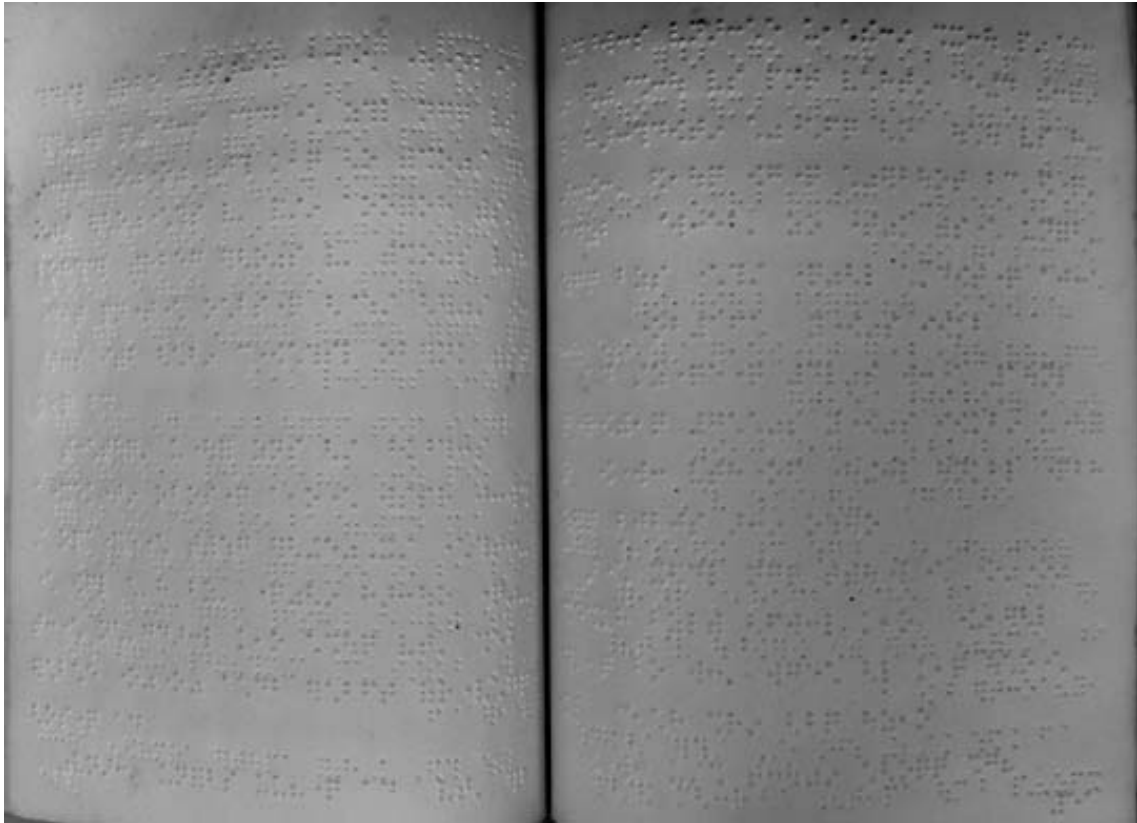
「ひとと ひを もちいる どーぶつ」といわれて いる
よーに ひを しょーするのわ じんるいばかりで たの

どーぶつにわ みられない ところ である

いったい ひととわ さいしょ どーして ひを えただ
あるーか おもうに らくらくの ために じゅもくが もえたり
みっせいた じゅもくの えたと えだが すれあって
おこったりした しげんの ひから ひたねを とった もの
であるー そのうち だんだん じんちが はったつ
するにつれて もくへんと もくへんを こすりあわせて ひを
うる ほーを さとるよーになった

それから すこし すずむと いしや かねを うちあわせて
ひを だす ほーを かんがえるよーになった この ほー
ほーわ かく こくみんの あいだに ひろく また きわめて
なかい あいだ おこなわれて いたもので あるが
まっちの しょーが ひろまるにつれて すたって きた
まच्चわ しまから やく ひやくねんまえに はつめいされた
もので ある

ひの ねつわ はじめ しゅとして しょくもつを ちょーり



するのに もちいた もののよーで あるが じたいが
すすんで ねんりよーの しゆるいが ますに つれて ひの
よーとも だんだん ひろく なって きた もくたんや せき
たんや せきたんがすの ひわ へやを あたためたり ものを
にたりするに もちられ せきたんの ひわ もくたんの ひより
ずっと ねつどが たかいので きしゃや きせんや こー
ぢよーのおもい きかきを うごかすのに たいせつな ものと
なっている

とーかとしてわ はじめ まつの きや ぎょじゆーの
あぶらなどを たいいたので あったが そののち るーそく
や たねあぶらが ともされ せきゆらんぶや がすとー
が これに かわり いまわ でんきを りよーした でん
とーが つかわれるよーになった かくして ひとわ くらい
せかいから だんだん あかるい せかいえと みちひかれて
きたのである

「ひつよーわ はつめいの はは」である ひとわ せい

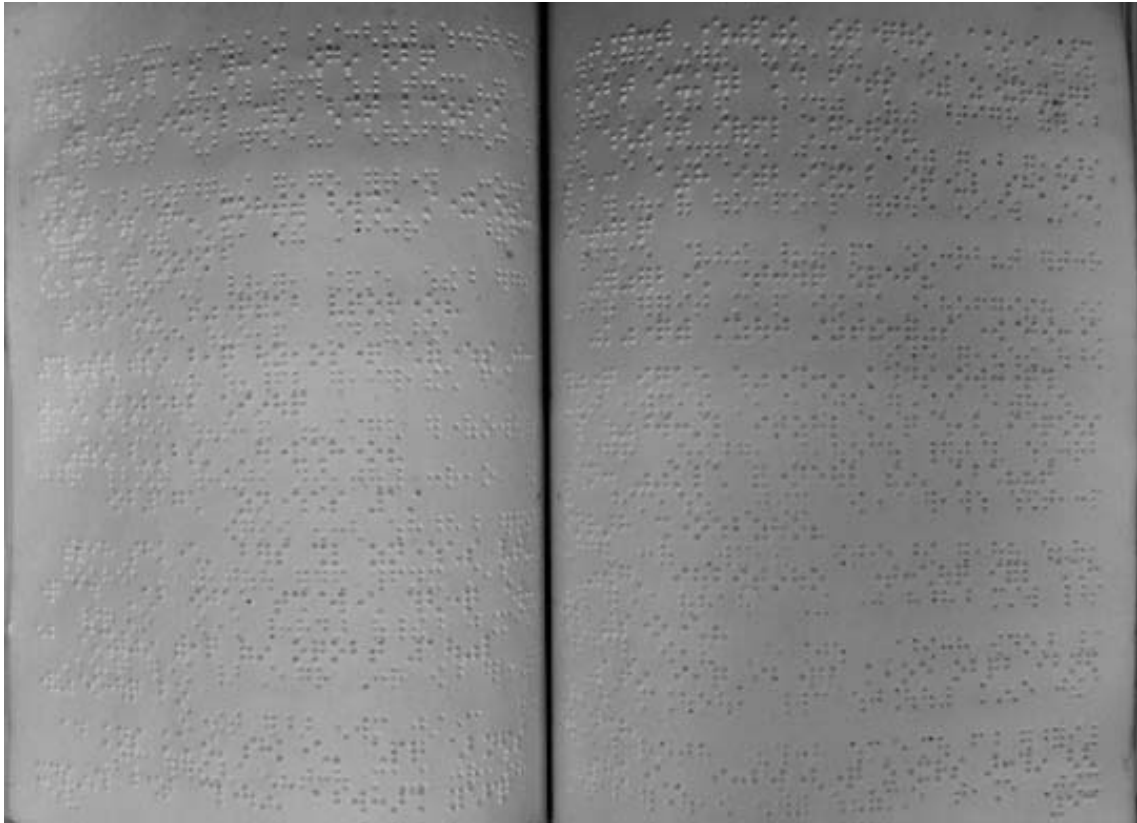
かつじよーの ひつよーから はつかほーを くふーし ねんりよー
を けんきゆーし ひの ねつと ひかりとを あらゆる ほーめん
に りよーすることを かんがえて きた しかし ひの り
よーほーわ けっして これで かんせいしたと いうわけでは
あるまい しょーらいわ また どんな ものが はつめい
されて いまの がすや でんきに かわることであるか

だい16か むごんの おこない

ある やまでらで 4にんの そーが 1しつに
とちこもって 7かかんの 6ごんの おこないを はじめ
た こぞー ひとりだけ じゆーに しつないに でいり
させて いろいろの よーを たさせた

よが ふけるにつれて ともしびが だんだん
くらくなり いまにも きえそーになった ばっせきに
すわっていた そーわ それが きに なって しかたが
ない うっかり くちを きいて しまった

「こぞー はやく とーしんを かきたてて くれ」



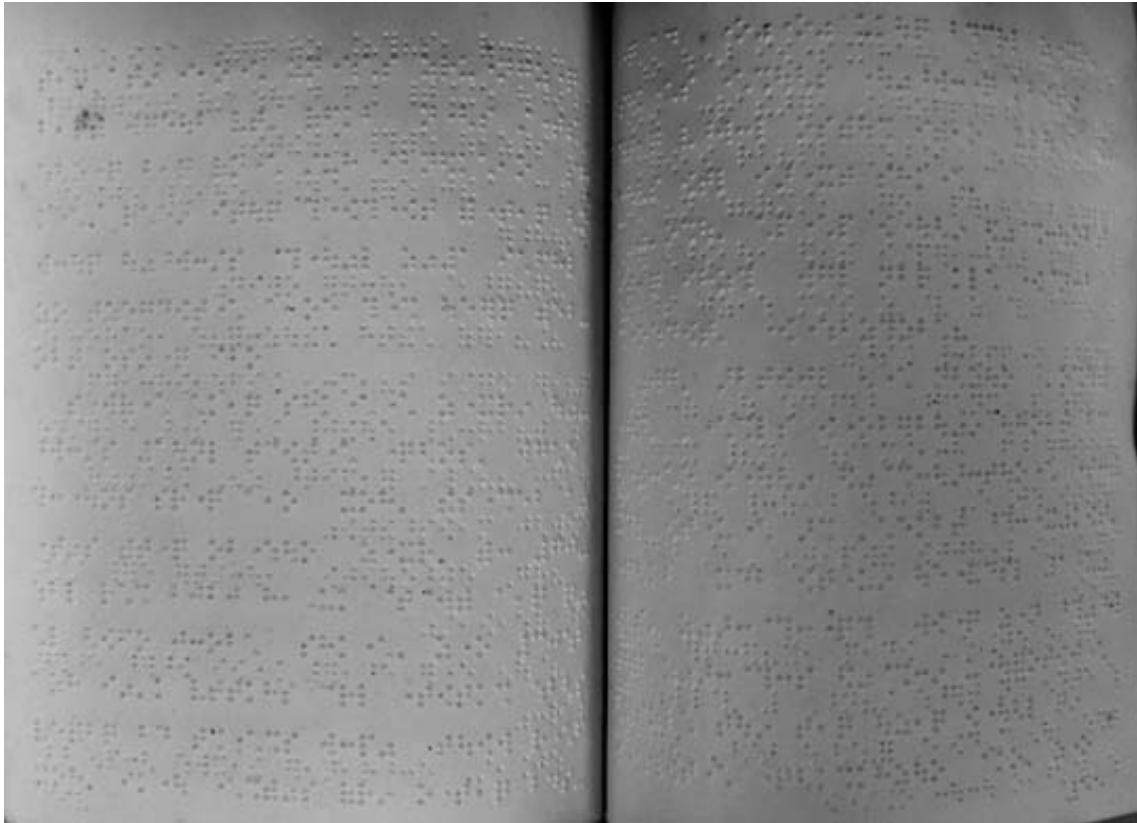
となり すわって いた そーが これを きいて
「むごんの おこないに くちを きくと いうことが
あるか」
だい2ざの そーわ ふたりとも きそくを やぶったの
が ふかいで たまらない
「あなたがたわ とんでもない ひとたちだ」
3にんとも ものを いて しまったので かみざの ろー
そーが もったいらしい かおをして
「ものを いわないのわ わしばかりだ」
だい17か まつざかの 1や
もとおり のりながわ いせの くに まつざかの ひと
である わかい ころから とくしよが すきで しょー
らい がくもんを もって みを たてたいと 1しんに
べんきょーして いた
ある なつの なかば のりながわ かねて かいつけの
ふるほんやに いくと しゅじんわ あいそーよく むかえて

「どーも ざんねんな ことでした あなたが よく
あいたいと おはなしに なる えどの かも まぶちせんせい
が さきほど おみえに なりました」
という あまり おもいかげない ことばに のりながわ
おどろいて

「せんせいが どーして こちらえ」
なんでも やましろ やまとほーめんの ごりょこーが
すんで これから さんぐーを なさるのだそーです
あの しんじょーやに おとまりに なって さっき おでかけの
とちゅー 『なにか めづらしい ほんわ ないか』と
おたちより くださいました」

「それわ おしいことをした どーかして おめに かかり
たい ものだが」

「あとを おって おいでに なったら たいてい おいつけ
ましよー」
のりながわ おーいそぎで まぶちの よーすを きき



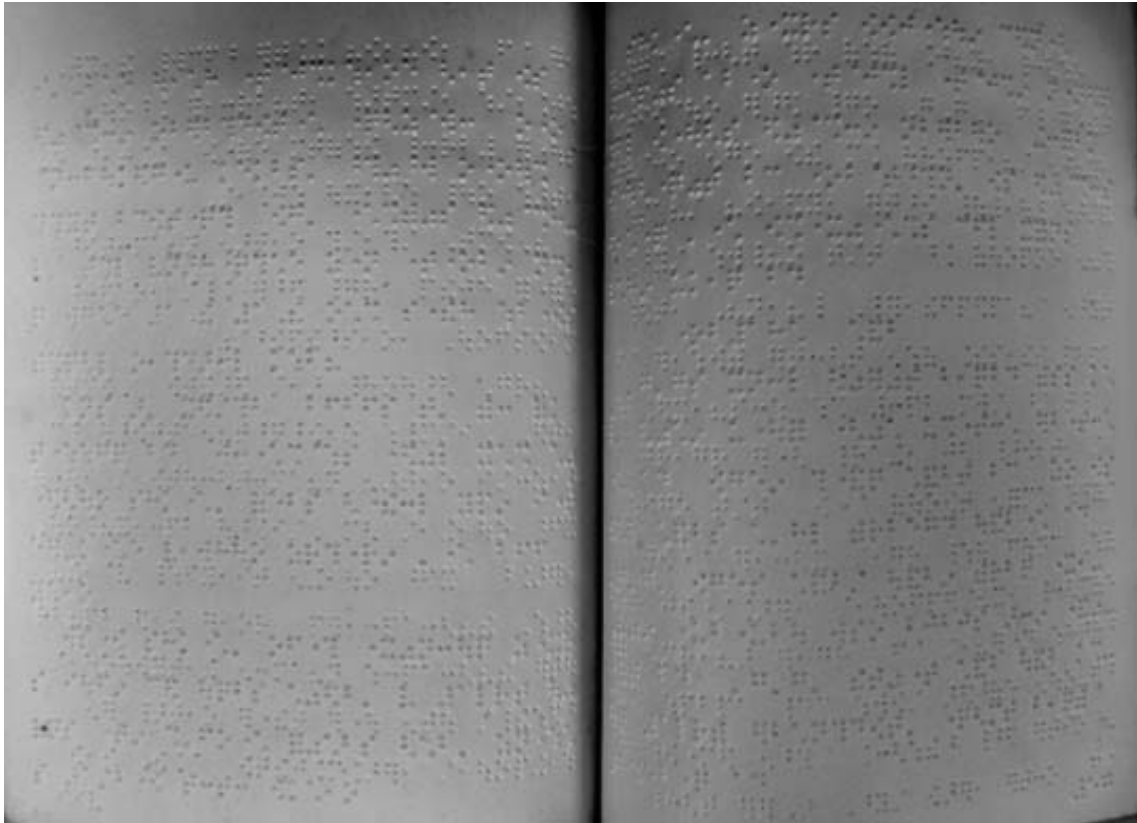
とって あとを おったが まつざかの まちはづれまで
いっても それらしい ひとわ みえない つぎの やどの
さきまで いって みたが やはり おいつけなかった のり
ながわ ちからを おとして すごすごと もどって きた
そーして しんじょーやの しゅじんに まん1 おかえりに
また とまられることが あったら すぐ しらせて もらい
たいと たのんで おいた

のぞみが かなって のりなが まぶちを しん
じょーやの 1しつに とうことが できたのわ それから
すーじつの のちで あった ぶたりわ ほのぐらい あん
どんの もとで たいざした まぶちわ もー 70
さいに ちかく いろいろ リつぱな ちょしょも あって てん
かに きこえた ろーたいか のりながわ まだ 30さい
あまり おんわな ひととなりの うちに どことなく さいきの
ひらめいて いる とくがくの そーねん としこそ ちがえ
ぶたりわ おなじ がくもんのみちを たどっているの

で ある だんだん はなして いるうちに まぶちわ
のりながの がくしきの じんじょーで ないことを
さとして ひじょーに たのもしく おもった はなしが こ
じきの ことに およぶと のりながわ

「わたくしわ かねかね こじきを けんきゅーしたいと
おもっております それについて なにか ごちゅーい
くださることわ ございますまいか」

「それわ よいところに きが つきました わたくしも
じつわ わがくにの こたいせいしんを しりたいと いう
きぼーから こじきを けんきゅーしよーとしたが どーも
ふるい ことばがよく わからないと じゅーぶんなことわ
できない ふるい ことばを しらべるのに 1ばん
よいのわ まんよーしゅーです そこで まづ じゅんじょ
として まんよーしゅーの けんきゅーを はじめたところが
いつのまにか としを とって しまって こじきに てを
のばすことが できなくなりました あなたわ まだ



おわかいから しっかり どりよくなさったら きっと この
けんきゅーを たいせいすることが できましょー ただ
ちゅーいしなれば ならないのわ じゅんじょ ただしく
すむと ということです これわ がくもんの けんきゅー
にわ とくに ひつよーですから まづ どたいをつくっ
て それから 1ぼ 1ぼ たかく のぼり さいごの
もくてきに たつするよーに なさい」

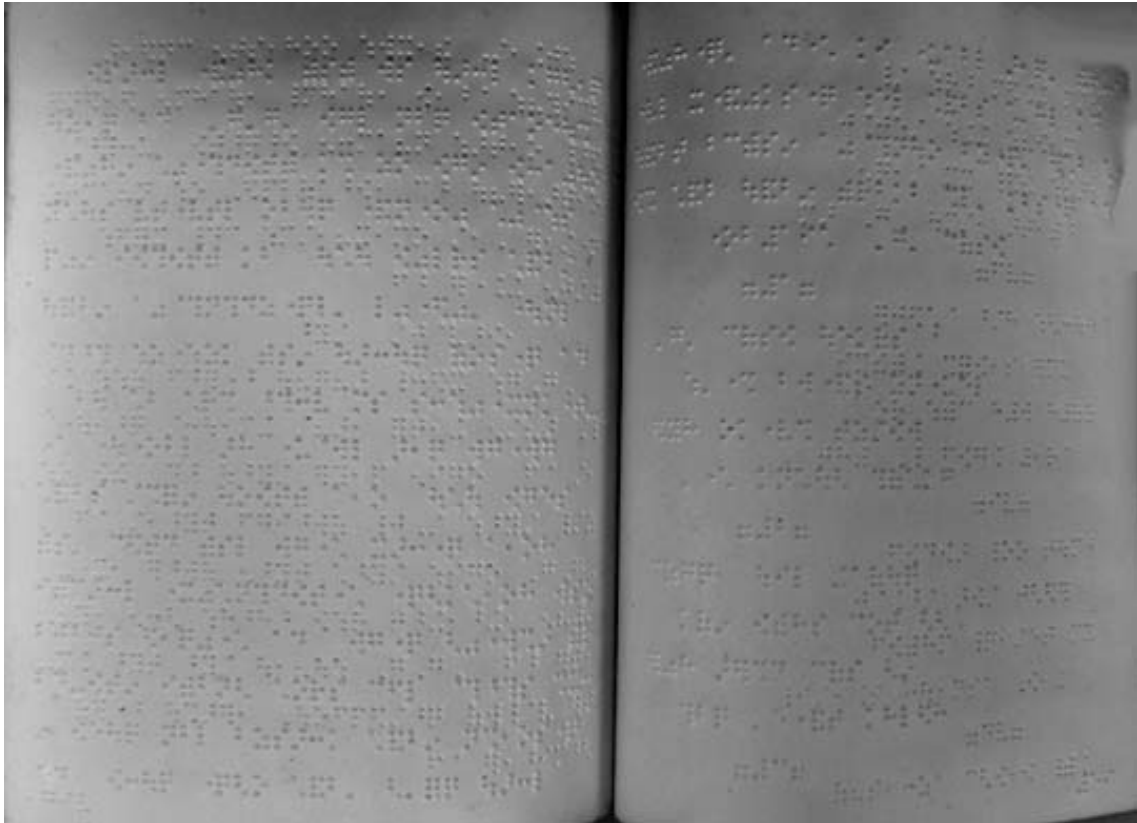
なつの よわ ふけやすい いえいえの とわ もー みな
とざされて いる ろーがくしゃの げんに ふかく かん
げきした のりながわ みらいの きぼーに むねを おど
らせながら ひっそりした まちすぢを わが いええ
むかった

そのご のりながわ たえず ぶんつーして まぶち
のおしえを うけ していゆ かんれわ ひ 1にちと しん
みつの どを くわえたが めんかいの きかいわ まつざか
の 1やいご とーとー こなかつた

のりながわ まぶちの ころざしを うけつぎ
35ねんの あいだ どりよくに どりよくを つづけて
ついに こじきの けんきゅーを たいせいした ゆーめいな
こじきでんと いう だいぢよじゅつわ この けんきゅーの
けっかで わが こくぶんがくの うえに ふめつの
ひかりを はなつて いる

18か かへい

われわれの ふつーに きんせんと いうてる ものの なか
にわ きんかを はじめ ぎんか はくどーか せいどーか
がある これらを すべて かへいと いう また この
ほかに かへいの かわりに もちられる しへいがある
われわれわ これらの かへいや しへいを もちて ぶつ
びんを ばいばいし そのた いろいろの よーを
べん
じて いる われわれわ ほとんど かへい しへい なく
して 1にちも せいかつすることわ きぬと いうても
よいくらいで ある



このよーに べんりな ものも その しょーに なれきって
しまっている われわれわ これについて ことあたらしく
べんりを かんじずることもなく また これを こーあんした
むかしの ひとびとに たいして べつだん かんしゃの
ねんをおこすことも ない しかし こんにちの かゝい
しゝいを あんしゅつするまでにわ にんげんわ じつに
しゅじゅ さまざまなもの を しょーして みたので ある
いし かい かちく じゅーひ めの のーさんぶつなど
が じたいにより ばしょによって それぞれ
かゝいの やくめをしたことも あった しかし これらの
ものわ うけとる ものに それが ぶよーで あったり
おもうよーに ぶんかつすることが できなかつたり そのた
いろいろの けってんがある それで きんぞくを もち
いる ことを おもいつき かたちの うえに しゅじゅの くぶ
を こらして ついに いまのよーな かゝいをつくつたので
ある こーして できた かゝいわ きわめて しょーに

べんりでわ あるが なお ばあいに よってわ もちほこ
びに ぶべんなので さらに かゝいの かわりに なる
しゝいと いうものを あんしゅつした いまでわ せかい かつ
こく かゝい しゝいを もちない くになので ある
だい19か われわ うみのこ

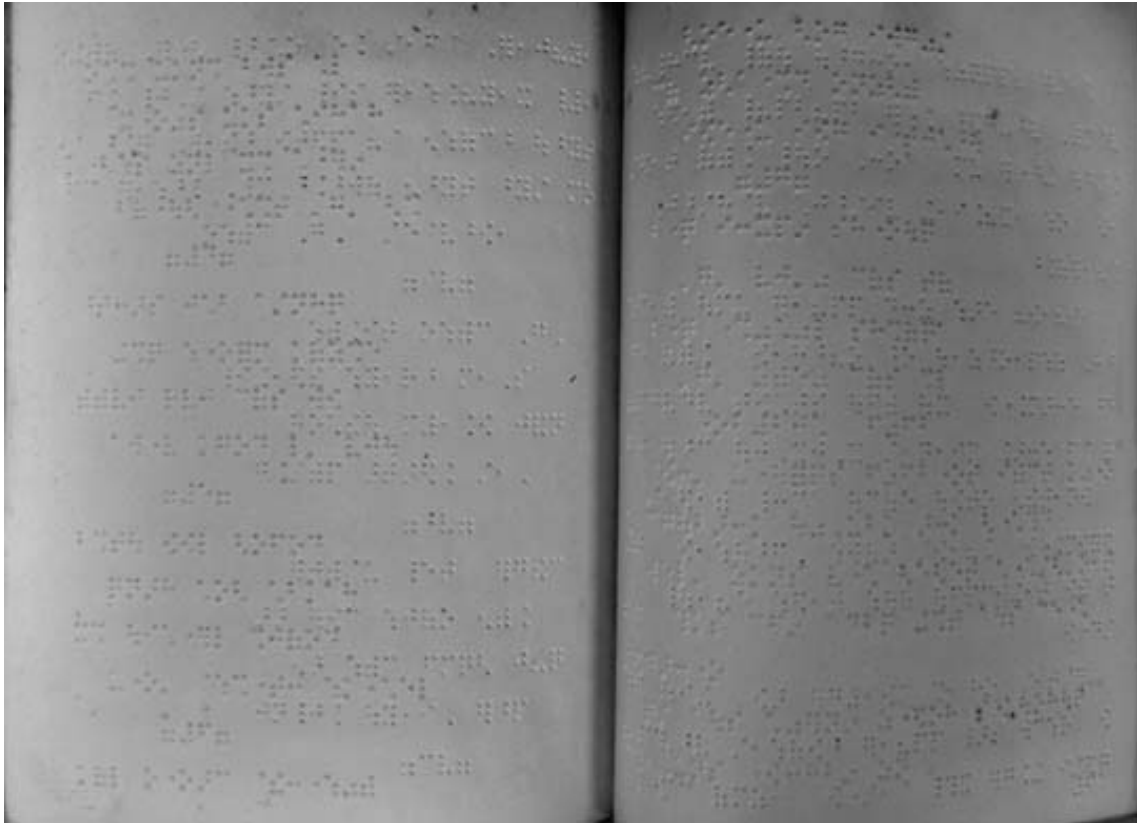
(1)

われわ うみのこ しらなみの
さわぐ いそべの まつばらに
けむり たなびく とまやこそ
わが なつかしき すみかなれ

(2)

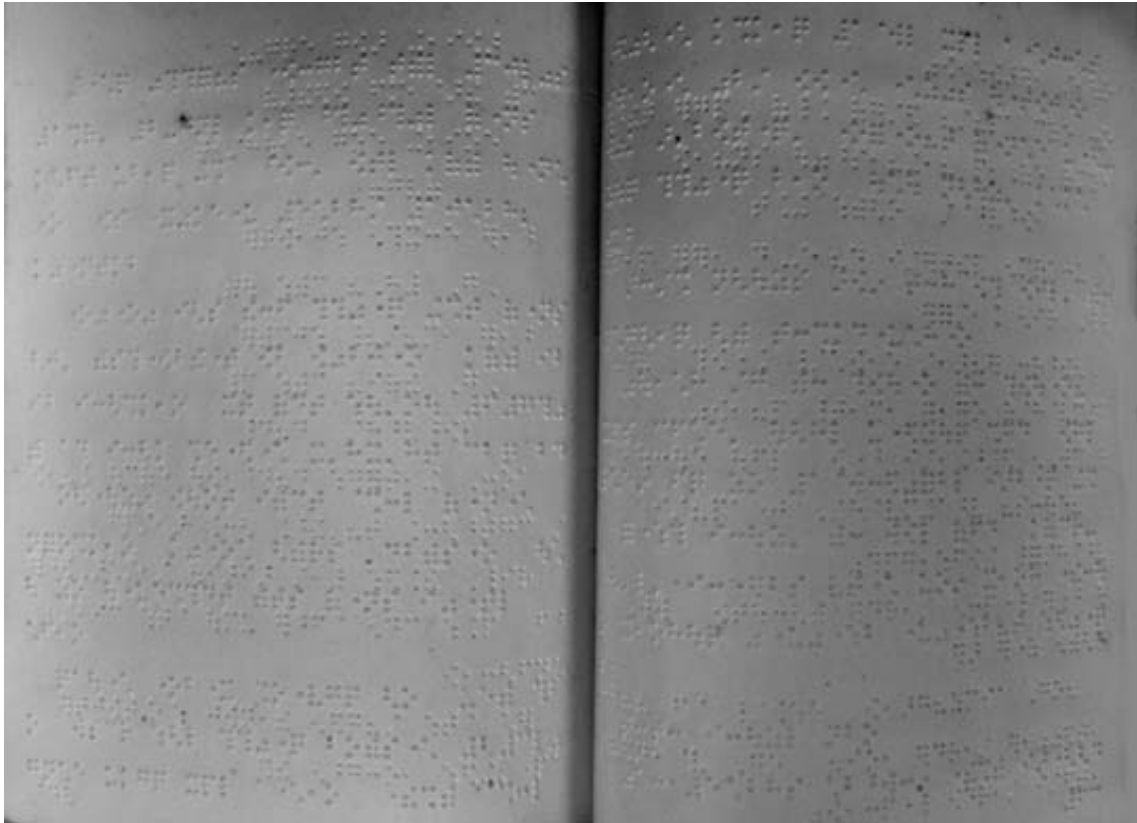
うまれて しおに ゆあみして
なみを こもりの うたと きき
せんり よせくる うみの きを
すいて わらべと なりにけり

(3)



たかく はなつく いその かに
ふだんの はなの かおりあり
なぎさの まつに ふく かぜを
いみじき がくと われわ きく
4
ちよーよの ろかい あやつりて
ゆくて さだめぬ なみまくら
ももひろ ちひろ うみの そこ
あそび なれたる にわ ひろし
(5)
いくとし ここに きたえたる
てつより かたき かいなあり
ふく しおかぜに くるみたる
はだわ しゃくどー さながらに
(6)
なみに ただよう ひょーざんも

きたらば きたれ おそれんや
うみ まきあぐる たつまきも
おこらば おこれ おどろかじ
(7)
いで おーふねを のりだして
われわ ひろわん うみの とみ
いで ぐんかんに のりくみて
われわ まもらん うみの くに
だい20か えんえい
きょーわ はじめての えんえいだと おもうと なんだ
か うれしいよーな しんぱいな よーな きがする
そらにわ まなつの ひが きらきらと かがやきわたって
いる すなの うえを あるいて ゆくと あしの うらが
やけるよーだ
てや あしの かんせつを まげたり のばしたりして
しゅっぱつの ごーれいを まつ



やがて「すすめ」の ごーれいと ともに 30にんの
1くみわ 2れつに なって じゅんじゅんに みづの
なかえと はいって ゆく きょーわ ことに なみも しづか
だ この ぶんならば 5かいりや 10かいりわ
なんでもない

だんだん おきの ほーえ すすんで ゆくと みづの
いろわ ものすごいほど こい こんいろだ なみも おい
おい おーきくなった ふと みると さしわたし 67すん
も ある おーきな くらげが ふわりふわりと ういて いる
たけしまを こしたと おもうと きゅーに みづが
つめたくなった なんだか きもちの わるいものだ しか
し また しばらくすると もとの みづの おんどに
かえった

てあしが だいぶ くたびれて きた はらも すい
た そのうち さきに すすんで いたものが 23にん
れつからはなれて ふねに あがった ぼくも きゅーに

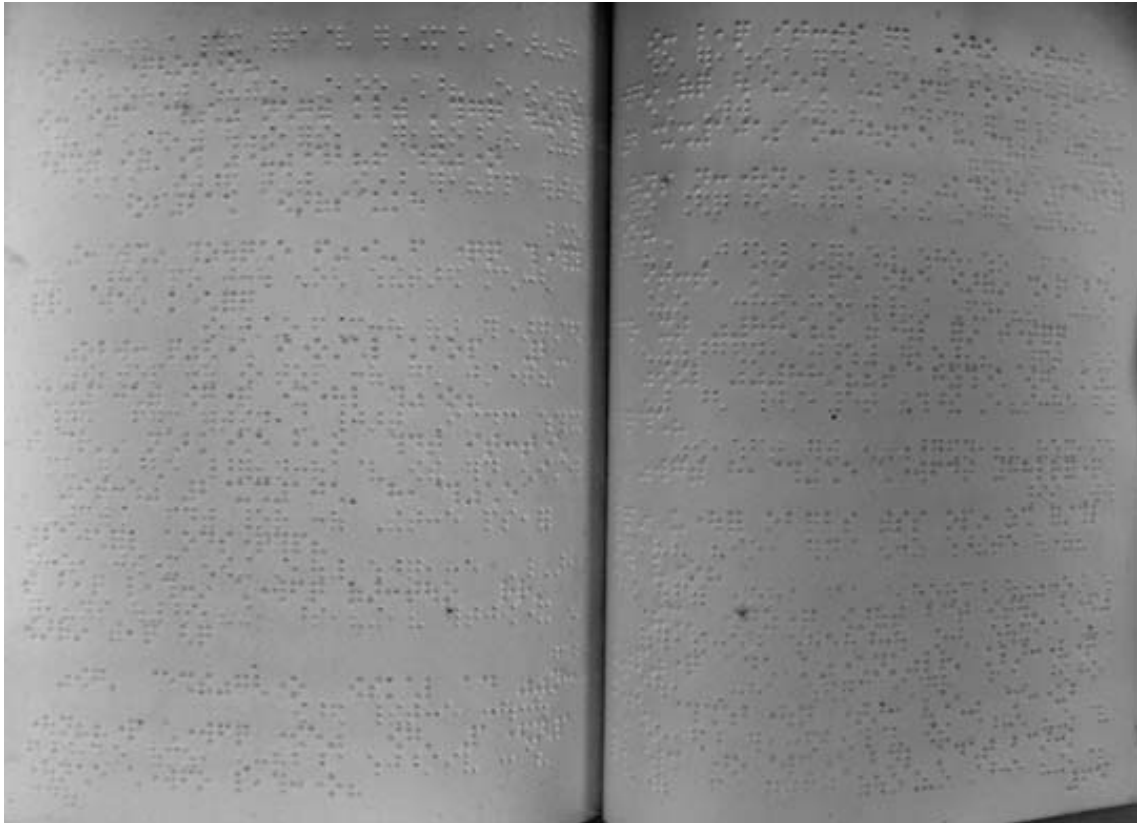
げんきが なくなって 1しょに ふねに あがるーかと
おもったが 「いや ここが がまんの しどころだ
そんな よわいこととわ だめた」と みづから はげ
まして すすんで いた しかし つきしまわ なかなか
こない

よーやく つきしまの よこを とーり こす ころにわ もー
つかれきって きも とーくなるばかりだ

「しっかり やれ もー すこしだ もー すこしだ」
ふねの うえからわ しきりに はげまして くれる これに
ちからを えて また 1しょーけんめいに およいで ゆく
めざす おーしまわ もー そこに みえる なみうち
ぎわにわ おーせいの ひとが はたを ふったり ぼーし
を ふったりして 「ばんざい ばんざい」と さげんで
いる

とーとー おーしまに ついた

「あー 5かいりの かいしょーを ぼくも およぎる



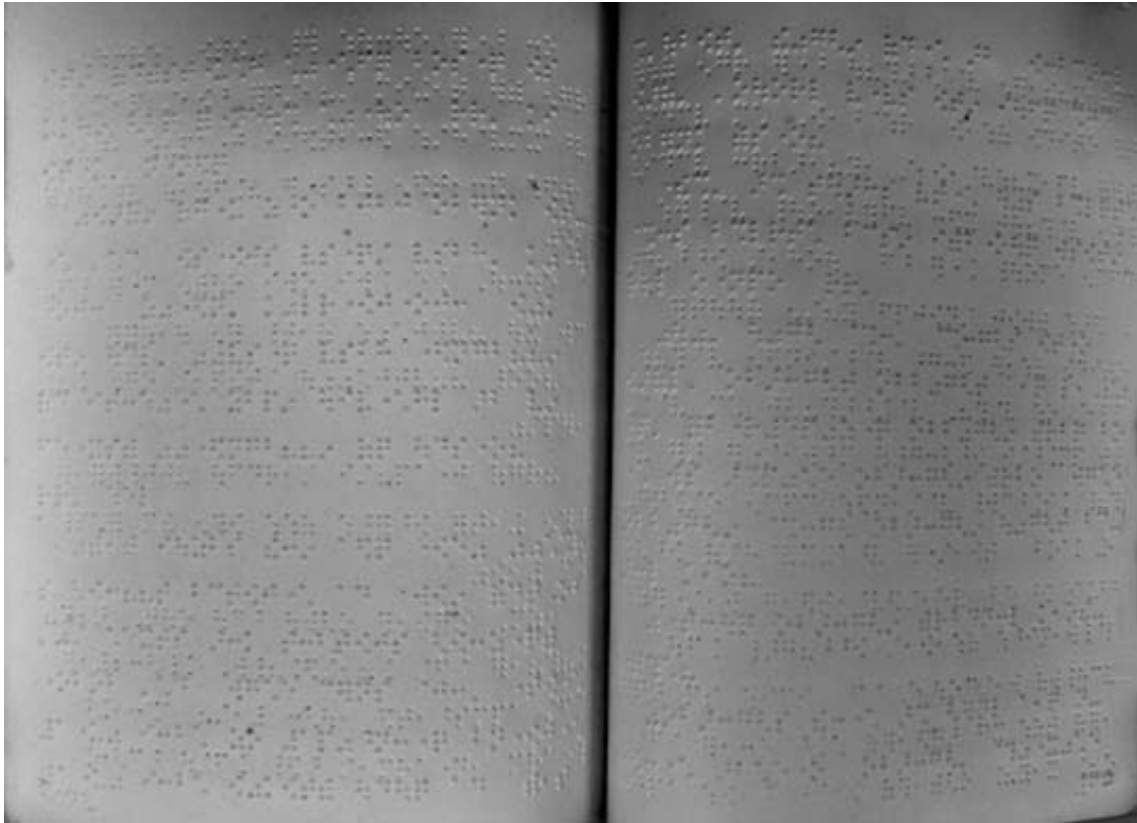
ことができたのだ」
こー おもう しゅんかん つかれも なにも わすれて しま
って
ほくも おもわず 「ばんざい」と さげんだ
たい21か こよみの はなし
ゆーしよくを すませてから えんがわえ でて すずむ
ちちわ そらを ながめて
「たいそー てんきが おだやかに なったね 2
ひやく10かも これで ぶじに すんだ」
と うちわを つかいながら いった すると おとーとが
「おとーさん 2ひやく10かわ りっしゅんから
210かめの あたるのですね」
と いった にっすーを かぞえて みよーとした ちちわ
こよみをもつて きて
「これわ りやくほんれきだ このなかに ある 『つー
じつ』で かぞえて ごらん これわ 1げつ1
じつから かぞえた にっすーだ」

こー いった おとーとの てに わたした おとーとわ
それを みて しばらく かんがえて いたが すぐ
2ひやく10かの つーじつから りっしゅんの ぜん
じつの つーじつを ひきさつて 「なるほど 210かめ
だ」

おとーとわ なお あちら こちら こよみを くつて いる
うち ぶと 「88や」の もじに めを とどめて
「ここに 『88や』と ありますが これわ なん
ですか」

「それも りっしゅんから かぞえると 88にちめで
いねを はじめ たいていの ものの たねを まく めやすに
なる ひだ」

ほくわ これまで こよみと いうと ことしわ きげん
なんねんで あるか なんがつなんにちわ なんよーびで
あるか しゅくさいじつ どよー ひがんにゆーはい
にっしよく げっしよくが いつに なるかと いうよーな



ことを みるものとはかり かんがえて いたので この
はなしを きいて めづらしく かんじた ちちわ なお
ことばを つづけて

「こよみを みれば まだ いろいろ たいせつな こと
が わかる このごろの ひのでや ひのいりわ なんじ
だろー まんげつわ なんにちごろだろー こんな
ことを するにわ 『ひので ひのいり げつれい』を
みる おとーさんが まいねん しおひがりに よい ひを
えらぶのも 『げつれい』を みて するのだ」

ちちわ さらに

「もっと おしまいの ほーを あけて ごらん 『かくち
の きこー』と いうところがある そこを みると たい
わんや からぶとの よーな とーいところの きこーまでも
だいたい わかる それから うせつ の りよーわ どこが
1ばん おーいか また 1ねんぢゅーで いつごろが
1ばん おーいか こんなことも して ある もっと

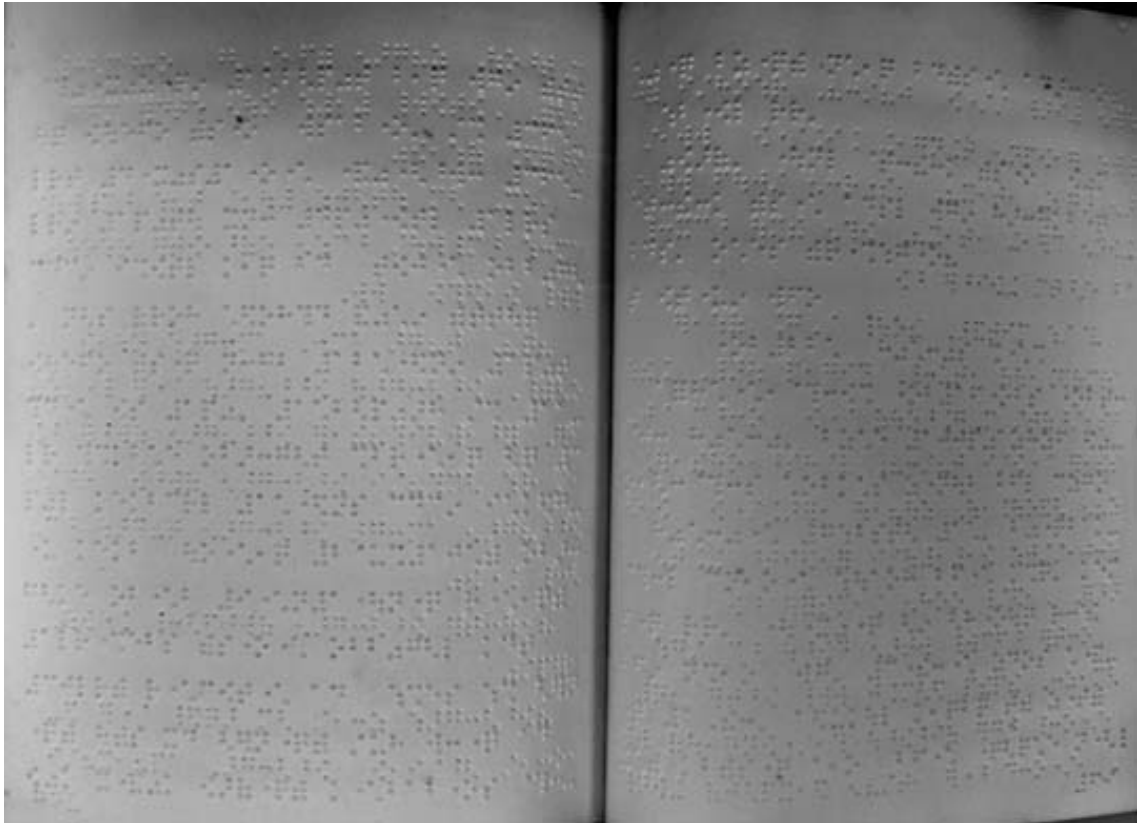
くわしいことわ ほんれきを みるが よい こーいうよーに
こよみわ わたしたちに ひびの ことを おしえて くれる
たいせつな ものだ」

ぼくわ よく としよりの ひとが しんの いくにちとか
きゅーの いくにちとか いうのを おもいだして そのことを
ちちに たづねた ちちわ

「しんわ しんれき きゅーわ きゅーれきの ことだ
こよみこわ たいはーれきと たいいんれきと あって につぼん
でわ めいぢ5ねんまで たいいんれきを もちいて いた
が その よくねんから たいはーれきを もちいた それから
たいいんれきを きゅーれき たいはーれきを しんれきと いう
よーになった」

「どーして たいはーれきを もちいるよーに なったの
ですか」

たいはーれきの ほーが よく きせつに あって つ
ごーが よいからだ たいはーれきわ しゅんぶんから



しゅんぶんまでを 1かいきねんと といって それを もとと
して こしらえた ものだ そのあいだわ やく 365
にちと 4ぶんの1だが べんぎじょー 365
にちを 1ねんとし ぶつー 4ねんごとに 1にちの
うるうを おくことになっ ている ところが たいいんれき
わ つきの みちたり かけたりする へんかを もとにして
こしらえた もので つーれい 12かげつを 1ねんと
するが この 1ねんわ 1かいきねんより やく 11
にち すくないから たいいれきと くいちがって きて 3
ねんにならないうちに 1かげつの うるうを おかなけれ
ば ならない したがって 2ひゃく10かも たいいれ
きなら たいがい 9がつ1じつで ちがっても
1にちぐらいの ものだが たいいんれきに なると
30にちも ちがうこと がある さくらの さく きせつ
でも しもの ふる きせつでも やはり そーで ある
こんな ぶべんな こよみでも ながいあいだの しゅー

かんで いまでも つかっ ているものが あるよーだ」
さいごに ちちわ

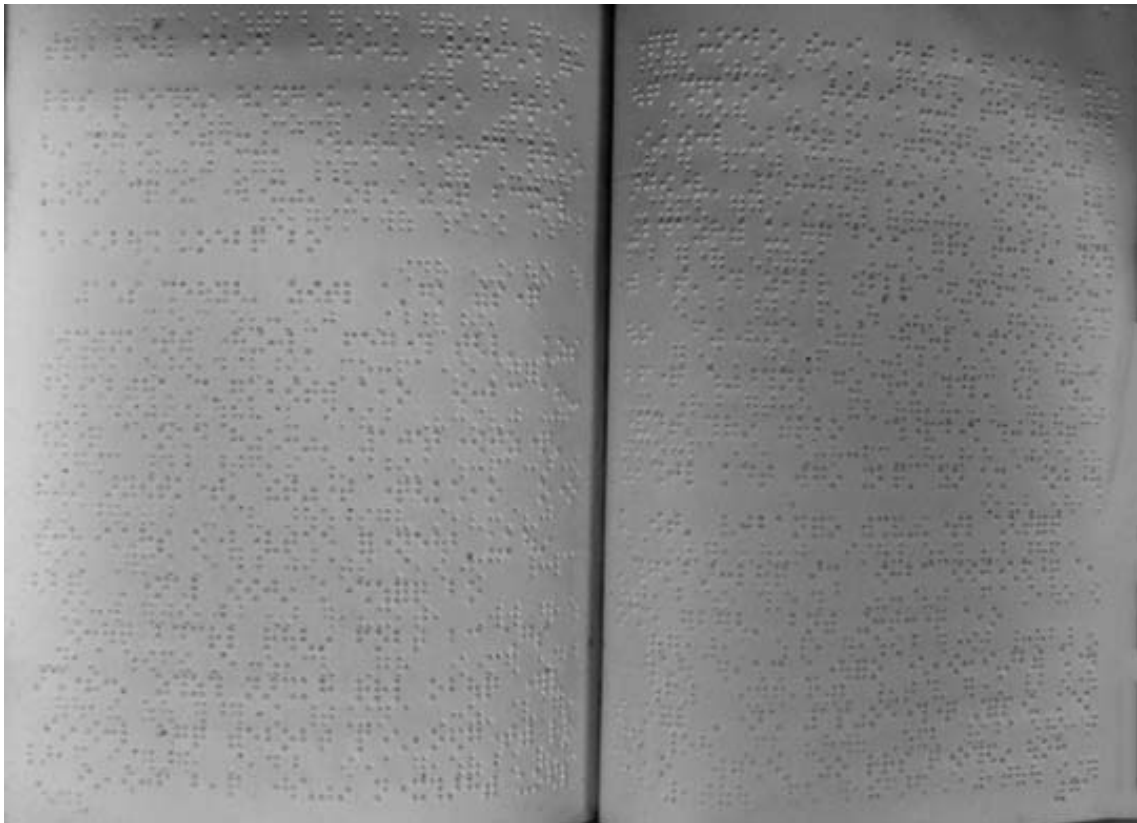
「こよみわ じつに ちょーほーな ものだ こんな
ちょーほーな ものが あるのに それを りよーしないで
いるのわ たからの もちぐされだ」

と ことばを そえた

だい22か りんかーんの くがく

あめりかがしゅーこく だい16だいの だいとー
りよー りんかーんわ いまから 100ねんあまりまえ けん
たつきーしゅーの かけいなかの まづしい いえに うまれた

りんかーんが 7さいのとき 1かわ いんでいあな
しゅーに うつたが さしあたり いえが なくてわ ならぬ
ので ちちわ しぶんて きを きりだして ちーさな
いえをつくた それわ 3ぼーが まるたの かわ
で 1ぼーわ あけはなしになっ ていると も まども
ゆかも ないもので あつた いえが できてから つぎに



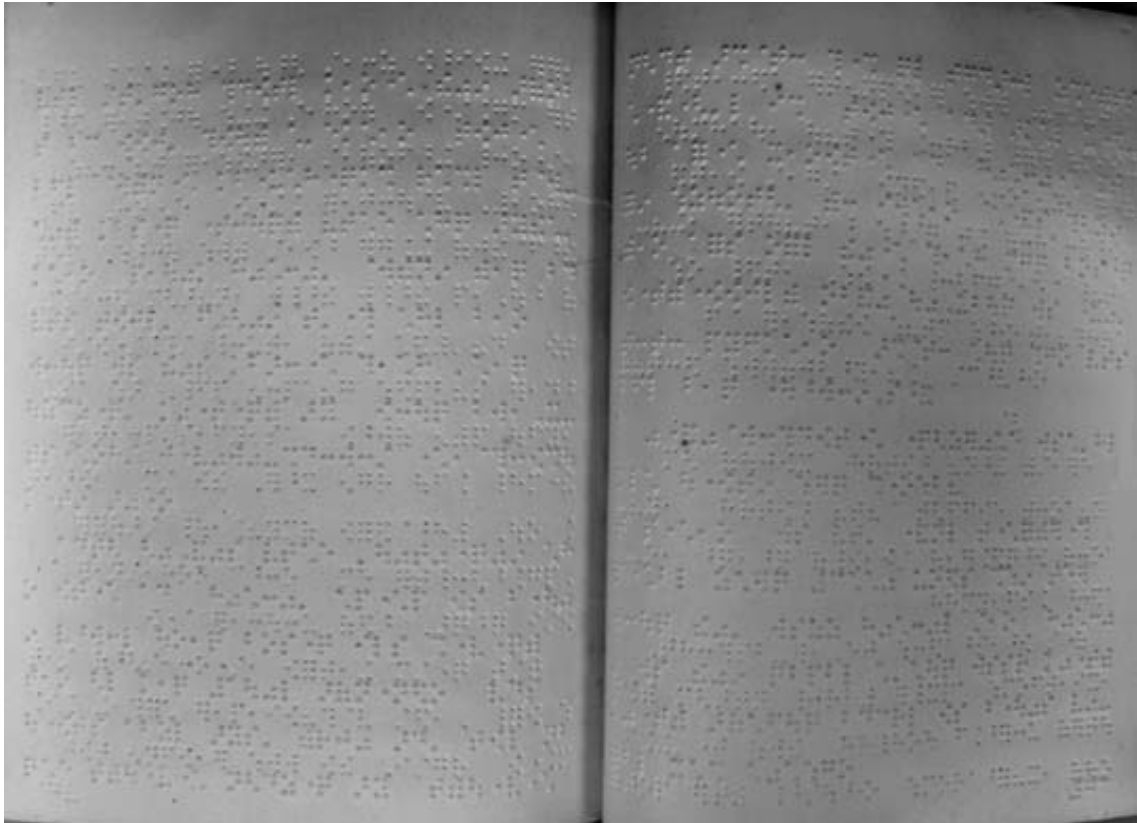
とちを ひらきに かかった りんかんわ そのころから もー
ちちの てだすけを しなれば ならなかった ちちが
きを きれば じぶんわ ざっそーを かりとる ちちが
はたけを うてば じぶんわ たねを まくと いうふーに
かいがいしく はたらいて いた

1かの くらむきわ まことに あわれな もので
しょくもつなども じゆーにわ えられず ときになまの
じゃがいもしか くわれないことも あった こーいう あり
さまで あったから りんかんわ 10さいごろまでわ
ほんを よむことなどわ ほとんど できなかつた ただ
とーりがかりの たびびとから めづらしい はなしを
きいてわ わづかに こころを なくさめて いた

こーして いるうちに ちしきを えたいと いう かげの
よくぼーわ ますます つよくなり ちちに たいして せひ
がっこーに いれて もらいたいと ねがったけれども ちち
わ がっこーえ いった じかんを つぶすよりも はたけに

でて はたらいた ぼーが よいと いった なかなか ゆる
してくれなかつた ところが ははの とりなしで ついに
がっこーに はいることが できたので りんかんわ
よろこびわ 1とーりで なかつた がっこーわ 4
まいるあまりも はなれて いたが みちの とーいのわ すこし
も いとわず まいにち まいにち げんきよく つーがく
した えんぴつや かみも じゆーに かえなかつたから
いえで さんじゆつの れんしゆーを するにわ きの しゃ
べると すみを もちいた しゃべるが すーじて
まっくらになると それを ふいてわ また かく だいじ
な ことわ ひろいあつめた もくへんなどに かきとめて
わすれないよーにして おく こーいう こころがけで あつ
たから せいせきわ いつも ゆーとーで あつた

しかし せっかく はじめた がっこーがよいも かけ
のために わづか 1ねんたらずで やめねば ならな
くなつた それからわ また ちちの てだすけを したり



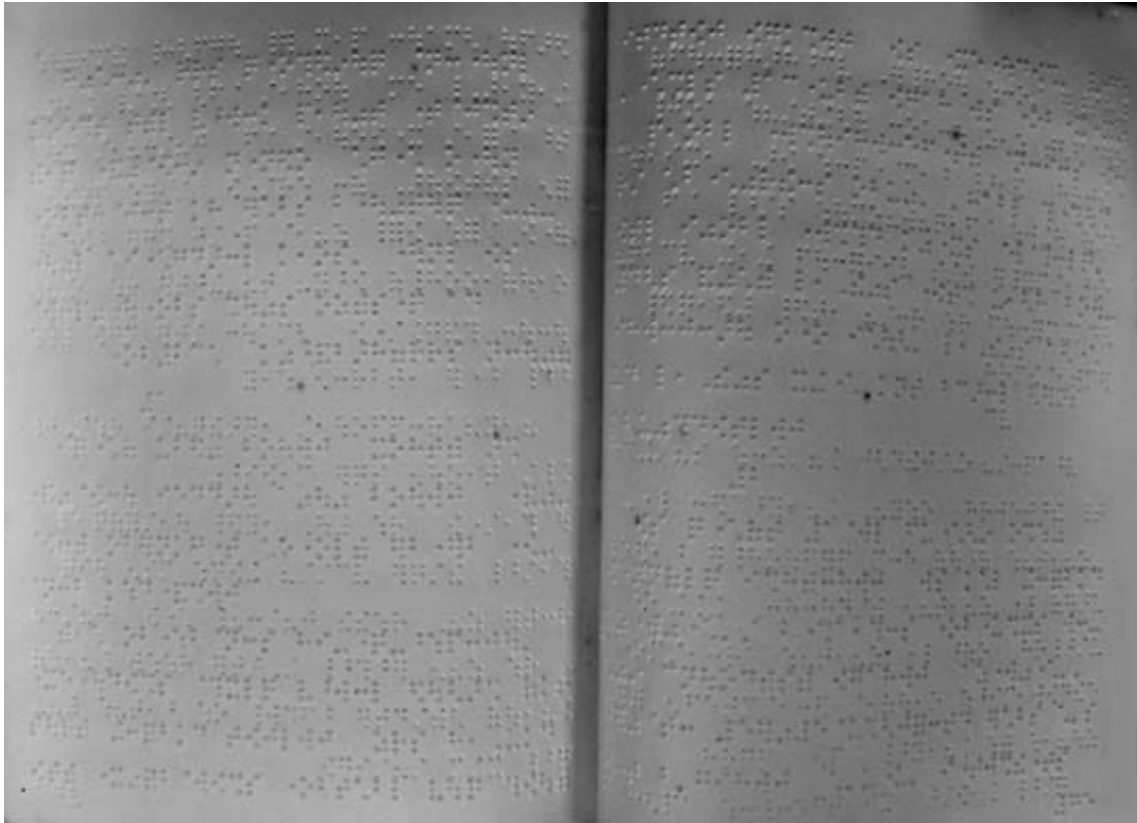
ひとに やとわれたり することになったが ほんを よみたい
という ころわ すこしも かわらなかつた ところが
いえに しょもつが ないばかりでなく ちかくに としょ
かんも ないので どうしても ひとから かりて よむほか
なかつた ねっしんな りんかーんわ しょもつを もっている
ひとの ところに えんきんを とわず かりに いった
そーして その ほんの ないよーが すっかり わかつて
しまうまでわ なんどでも よむ こーして いそつぷ
ものがたりや るびんそん-くるーそーや がっしゆーこくし
などを よんだ

あるとき きんぺんの ひとから わしんとんでんを かり
た ことがある りんかーんわ かやがね この いじん
を ひじょーに したって いたので おにの くびでも
とった きに なって 1しんに よみつづけた ひるの
しごとの あまに よむわ もちろん よるわ とこについ
てから ともしびが つきるまで よむ ともしびが

つきると よくちょー すぐ てに とれるよーに まくらもとの
かべぎわに おく ところが あるよ よなかに はげ
しい あめが ぶつたことがある りんかーんが ふと
めを さましたときわ もー おそかつた かべの すきまを
もった あめの ために ほんが すっかり ぬれて いたので
こどもごころにも たいへん しんぱいして その ばんわ
とーとー ねむれなかつた よくちょー かして くれた ひとの
いえに いった じじょーを のべ

べんしょーすることが できませんから そのかわりに
なにか しごとを させて ください」

と ねがつた その ひとわ べつに とがめもせず
ねがいに まかせて 3かかん はたけの くさを とらせ
そーして ほんわ そのまま りんかーんに やつた りんかーん
わ その ほんを ていねいに かわかして そのち なんども
なんども よみかえして いるうちに この いじんの ひん
せいに ぶかく かんかされた



りんかーんわ ちちの てだすけをして ちゅーじつに
はたらくと ともに ひじょーな ねっしんと どりよくとを
もって べんきょーをつづけた かれが たじつ
だいとーりょーとなり せかいの いじんとして ばん
じんに あおがれるよーになったのわ じつに この
しょーねんじだいの くしんの たまもので ある

だい23か なんべいより (ちちの つーしん)

1

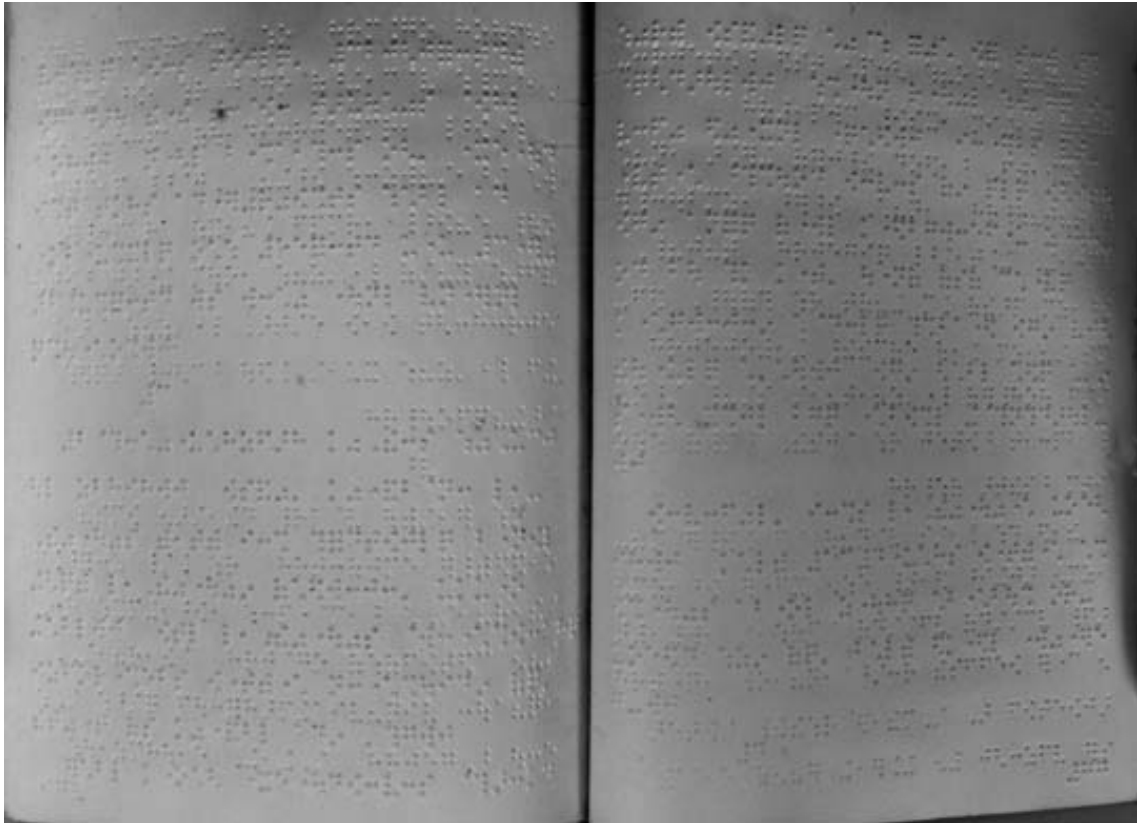
おてがみ はいけん いたしそろ ふたりとも よく
べんきょーし おらるよし あんしん いたしそろ べん
きょーも たいせつなれど からだにも せいせい ご
ちゅーい なさるべくそろ

もっか たいざいちゅーの りお-で-じゃねーろしわ
ぶらじるこくの しゅぶにて ひじょーに けしきよく みなと
としても ゆーめいなる ところにそろ まちの りっぱなる
ことも ぶんめいしよこくの だいとかいにて ひして すこしも

おとるところ これなくそろ この ぶらじるこくわ ひろさ
わがくにの 131はいも これあり その だいぶぶん
わ ねったいに ぞくしおりそーらえども ちゅーおーの こ
ちや かいがんちほーの たいはんわ わりあいに すすしく
ことに おんたいにて ぞくする なんぶの しょしゅーにてわ
4きの へんかも につぼんの ごとく はっきり いたし
おりそーろーよし ただ おかしきわ につぼんの あきが
はる につぼんの ふゆが なつと いうよーに きせつ
の あいはんすることにそろ

2

この てがみと 1しよに えはがきを たくさん
こづつみにて おくりもーしそろ その なかに ゆーめいなる
あまぞんがわや いくあつすーの だいばくふの そー
かんを うつしたるものも これありそろ あまぞんがわ
ぜんちゅー 5せん5ひやくきろめーとる せかいの かわの
おーと いわれおりそろ かわはばわ おどろくほどの



ひろさにて かこーの ところにてわ 320きろめーとるも
これあるよし ほぼ とーきょー とよはしかんの きよりに
あたりそろ つぎに いくあっすーの たきわ ぶらじる
こくと となりの あるぜんちんこくと の さかいにある
たいばくふにて たかさ 55めーとる はば 3ぜん
6ぴやくめーとる その そーかん じつに ひつげつに
つくしがたくそろ

3

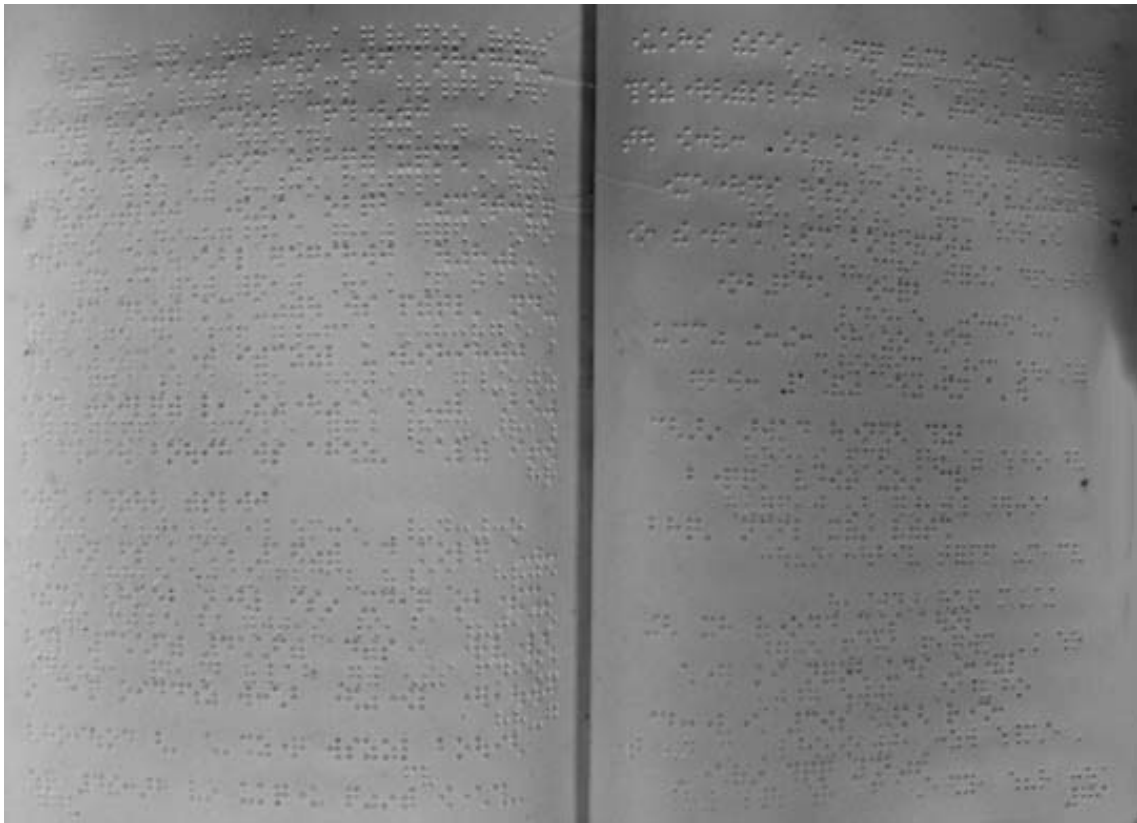
2しゅーかんばかりまえより なんべーの さんぱうろ
しに まいりおりそろ このへんわ なんべいちゅー にっ
ぽんじんの もっとも おーく すめるところにて いづこに
ゆきても にっぽんじんを みかけそーろーわ はなはだ
ゆかいにそろ ことに にっぽんじんの しょーがくこーありて
おまえたちぐらいの こどもが つーがくしおるを みてわ
ほとんど みの なんべいにあるを わすれそろ

せかいに なだかき ぶらじるこーひーの しゅよーなる

さんちも このへんにて かんしゃ めんか こめ とーも よく
できるよしにそろ さくじつ ちじんに さそわれて こー
ひーえん けんぶつに かけそろ おーぜいの ひと
びとが じゅくしたる こーひーの みを てにて こきおとし
これを あつめて みぞに なかれそーらえば まじり
たる いし すな などわ しづみ みのみ うかびて
なかれそーろーを かりゅーにて すくいあげ これを ひろき
ほしばにて かわかしそろ これを きかいに かけて か物を
のぞき ふくろに しいて かいこくに ゆしゅつするよしに
そろ

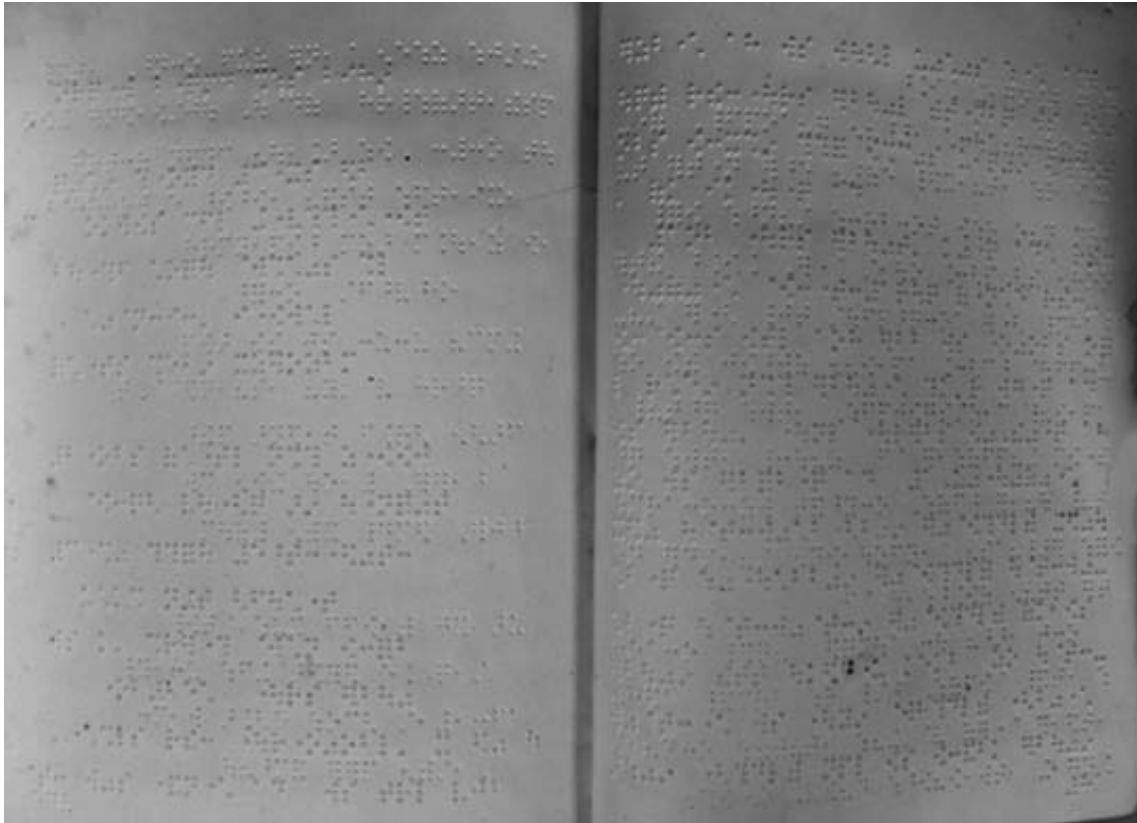
こーひーえんにわ おーくの にっぽんじんが はたらき
おりそろ なかにも 134ばかりの こどもが かく
こくじんの あいだに まじりて かいがいしく たち
はたらける さまを みてわ いかにも けなげに ぞんぜら
れそろ

4



しんりんち かいこんの よーすを しさつ いたしおりそー
ろーため しばらく ぶさたに うちすぎそろ
ぶらじるわ いづこえ まいりても はてなき げんや
と しんりんとにそろ げんやわ たいてい ぼくぢょーにて
ぎゅーばわ はなしがいに せられおるそろ しんりんにわ
たいぼく すきまも なく はんもし その ねもとにわ つる
くさ かんぼく など おもうまに はぎこりおりそろ
かかる ところにても にっぼんじんが さかんに かいこん
に じゅーじ いたしおり その ありさまわ いかにも おとこ
らしく いさましき ものにそろ
まづ えの ながさ 1けんも ある なたにて かん
ぼくを きりはらい つぎに おのを ぶるって たいぼくを
きるに 3かかえも 4かかえも あるものが ぢひびき
を うって たおるさま そーかい げんごに ぜっしそろ
きりたおしたる きわ かわくまで そのままに いたしおき
さて 4ほーより ひを はなてば てんをも こがす

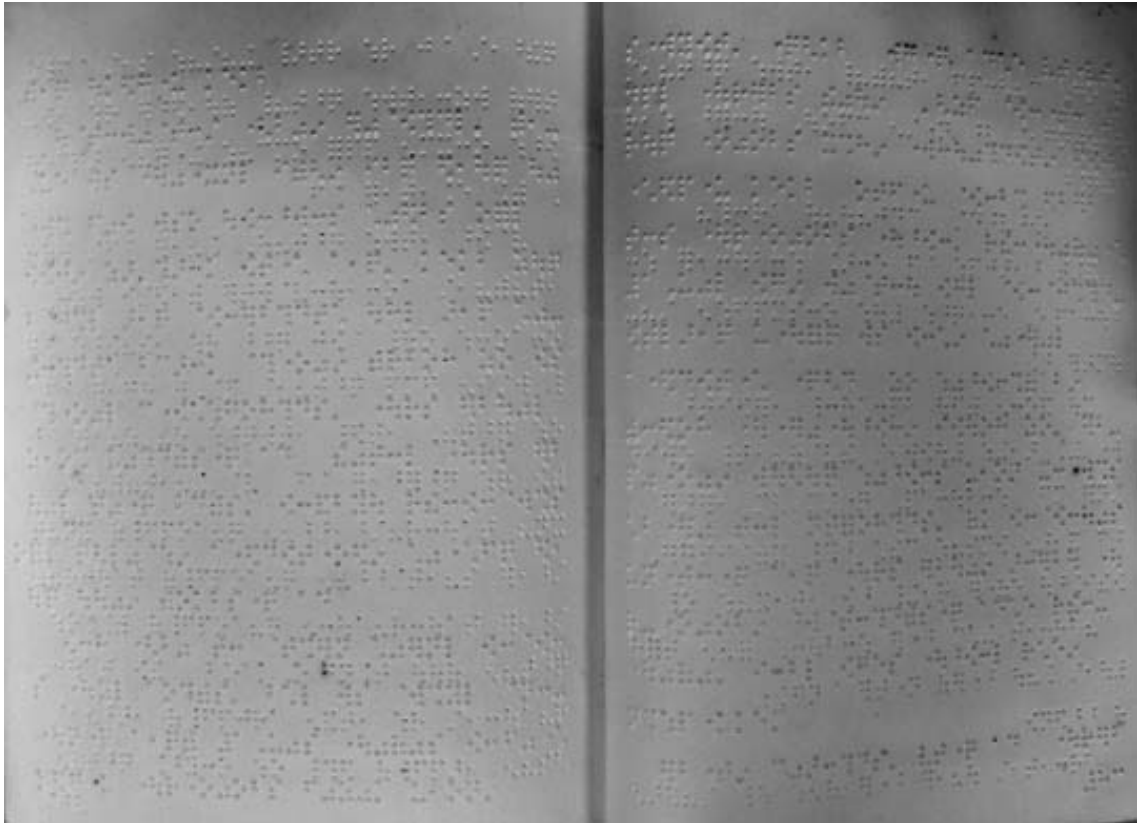
ばかりの ほのおを あげて もゆる こーけいゆ じつに
すさまじきものにそろ もえあとわ とりかたづけて はたけ
とし こーひー わたの きなどを うえつけ もーしそろ
ぶらじるの しさつを たいたい おわりそーろーあい
だ ほどなく きこく いたすべくそろ
だい24か こーめい
はくうん ゆーゆー さり また きたる
せいそー 1ぺん ざんげつ あわし
うきよを よそなる しづけき すまい
いでてわ ひごと はたを うち
いりてわ つくえに ぶみを ひもとく
ゆき ふり みだるる ふゆの あしたに
かぜ なお つめたき はるの ゆーべに
りゅーびが 3この こよなき ちぐー
わがみを すてて むくいんと



たちてぞ いでぬる くさの いおりを
てんかを さだむる 3ぶの けい
たなそのの うえに ゆびさすがごと
いしずえ かためし しょくかんの くに
かんちゆーおーわ おごそかに
みかどの くらいを ふませたまいぬ
2たいの みかどにつくす まごころ
きよーてき ひしぎて よを しづめんと
3ぐん すすめし 5ぢよーげんとー
はかなく つゆと きえしかど
その なわ くちせず しょかつ こーめい
たい25か ぢちの せいしん
わがくにの ちほー ぢちだんたいにわ ふ けん し
ちよー そのの べつが ある その とちに ひろい

せまいが あり その そしきにはんかんの さが あるに
しても ちほーぢちの せいしんに もとづいて その だん
たいの こーぶくを すすめ こくうんの はつてんを きすること
わ みな おなじで ある

1たい ぢちの せいしんとわ なんて あるか ちほー
じんみんが きよーどー1ちして みづから ちほー
こーきよーの ことに あたり せいしん その だんたいの ため
に ちからをつくす せいしんが すなわち それで ある
この せいしんわ じつに ぢちせい の こんぼんで あり
また その せいめいで ある 1ばんじんみんが
ふけん しちよーそんかいぎんを せんきよするにも ふけんし
かいで さんじかいぎんを せんきよするにも しちよーそん
かいで しちよーそんちよーを せんきよするにも みな この
せいしんを もとと しなければ ならない また しちよー
そんちよーが その じむを しよりするにも ぎいんが
よさんを ぎするにも つねに この こーへいな せいしんを



もって しなければ ならない

しちよーそんちよーや きいんを せんきよするにわ もつ
ばら この じんぶつに おもきを おいて けっして しん
ぞく えんこ そのた しこーじょーの かんけいの ために
こころを まよわすよーな ことが あってわ ならない まして
いりよくに よって きよーせいするとか しりに よって かん
ゆーするとか いうよーな しゅだんを もちいたり また この
しゅだんに うごかされたりするのわ じちの せいしんに
まったく はんするものである ほんとーに じちの せい
しんに とんで いるものわ こーへいむし ちほーこーしよく
の

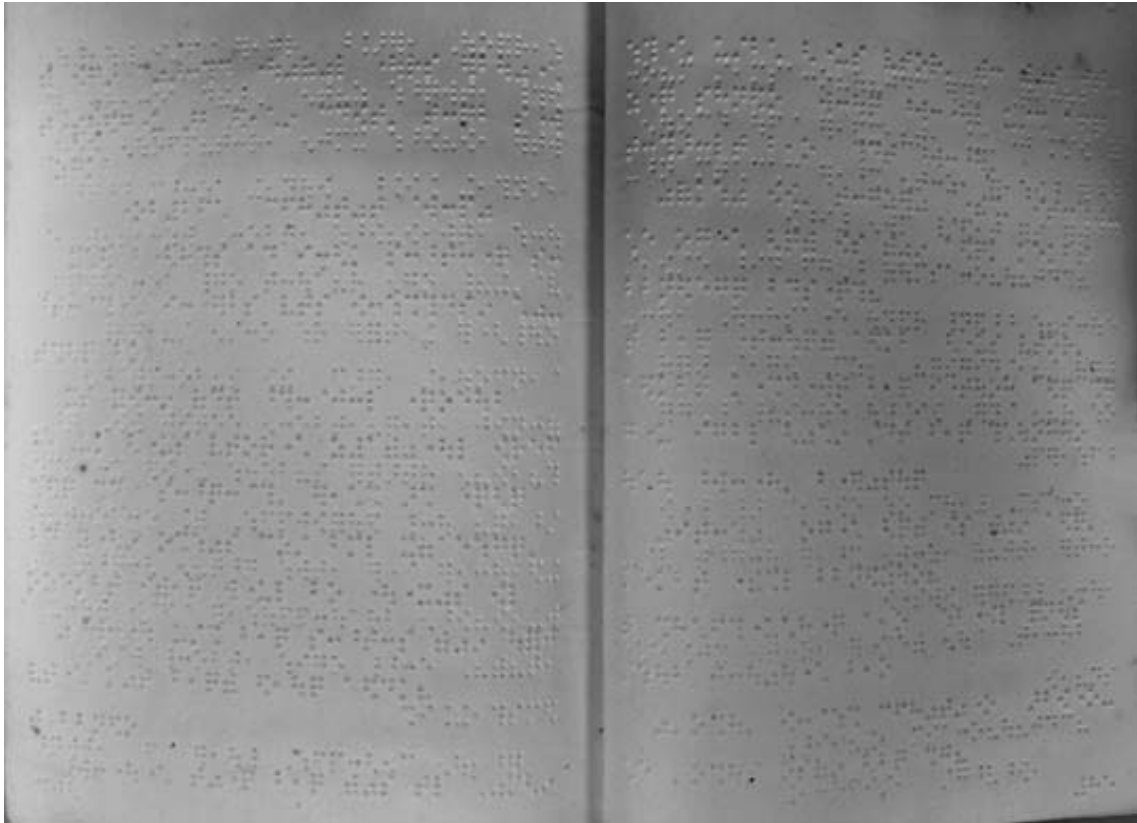
ための できにんしゃを あげることだけを かんがえて けっ
して ししんを もたないので ある

こーり きいん とー ちよくせつ かんせつに こーきよー
の じむに あたるものわ いかにか その しょくみに ちゅー
じつで あっても 1ばんの じんみんの こーえんが
なければ じちだんたいの えんまんな はったつを

のぞむことわ できない それで あるから ひとびとわ
つねに じちせいの ほんしを わきまえ きよーどー 1
ちして だんたいの ふくりを ぞーしんすることを こころ
がけねば ならない たとえば きよーいく えいせい
とーの じちだんたいの じぎよーわ ちほーじんみんが
1ばんに これを そんちよーし これに きよーりよくする
ことによつて はじめて その こーかを かんぜんに
あげることができる また さんぎよーくみあい
を もーけたり じぜんじぎよーを おこしたり またわ せい
ねんだんを そしきして さんぎよーの はったつ ふーぞくの
かいぜん とーに つとねたりするのわ みな こーきよーしん
の

はつどーで あつて じちの せいしんを よーせいし じ
ち だんたいを じよちよーするものであるから ちほー
じんみんわ おーいに これらの じぎよーに ちからを
つくさねばならぬ

せいどを うんよーするのわ ひとで ある じちせい



もこれを うんよーする じんみに じちの せいしんが
とぼしければ よい けっかを うることわ とーてい のぞ
まれない

だい26か うえりんんと しよーねん

むかし いぎりすの ある おーきな のーぢよーで のー
ぢよーしゆが おーせいの ひとの こーさくするのを かん
とくして いた

ふと むこーを「みると じゆーりよーに であらしい
りっぱな きばの ひとたちが ま1もんじに こちらえ
かけて くる のーぢよーしゆわ せつかく よく できて
いる むぎを たくさんの うまや いぬに ふみあらされてわ
たまらないと おもって そばに いた じぶんの こに

「じよーじ はやく いった のーぢよーの もんを しめる
ひとが なんと いったも けっして あけるな」

と いった

じよーじが とんで いった もんのとにかんぬきを

さすが はやく きばの ひとたちわ もー もんの そと
まで のりつめた そーして じよーじに はやく あけて
とーすよーにと いった すると じよーじわ

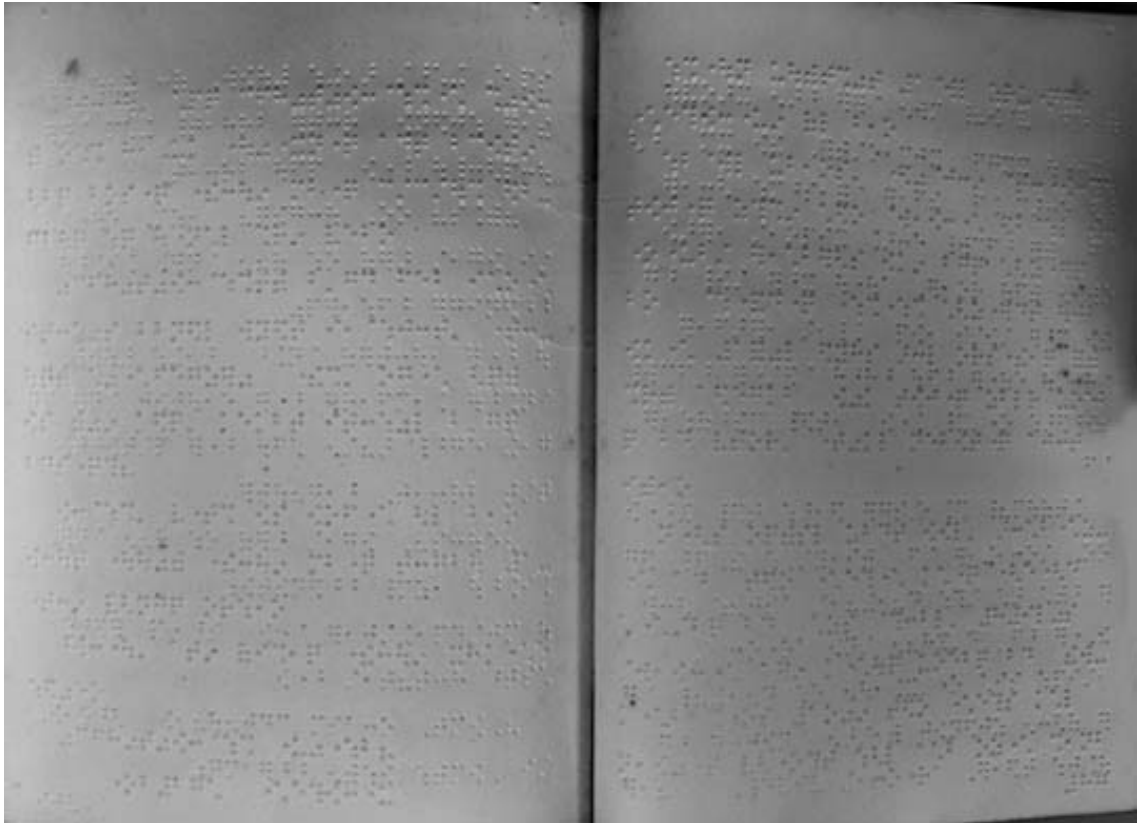
「みなさん ここわ とーれません ぼくわ おとーさん
から たれが きても この もんを あけてわ ならないと
いいつけられて いるのです」

と いった どーしても あけない きばの ひとたちわ
あけないと なくるぞと いった おどしたり あけて くれ
れば おれに きんかを やると いった すかしたりした
しかし じよーじわ いぜんとして

「おとーさんわ たれが きても この もんを あけてわ
ならないと ぼくに いいつけました」

と くりかえすばかりで あった さいごに めつきの
やさしい るーしんしが いった

「わたくしわ こーしゃく うえりんとんだ よいこだ
から わたくしの たのみを きいて くれ」



じょーじわ かねて うえりんとんこーしゃくが くんこーも たかく りっぱな じんぶつで あると いうことを きいて いたので ぼーしを めいで うやうやしく けいれいして さて しづかに くちを ひらいた

「うえりんとんこーしゃくとも いわれる えらい おかたが おとーさんの いいつけに そむけと おっしゃるーとわ どーしても かんがえられませんか ぼくわ たれが きても この もんを あけてわ ならないと おとーさんに いわれて いるのです」

こーしゃくわ ひどく この こたえが きに いった そーして じしんも ぼーしを めいで とーれいし 1 どーを ひきつれて たちさった

じょーじわ あとを みおくって ぼーしを ふりながら さげんだ

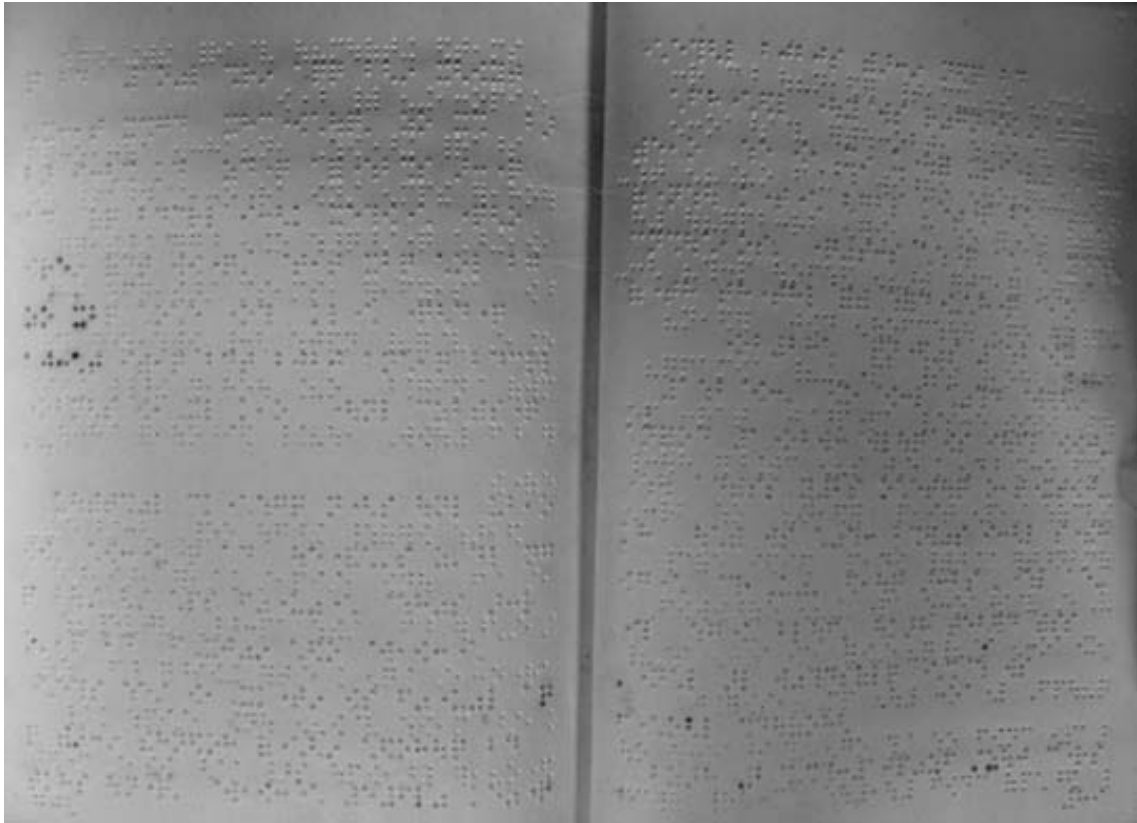
「うえりんとんこーしゃく ばんざい」

だい27か がらすこーば

さくじつ はしもとくと 1しよに まちはづれの がらすこーばを みに いった

さいしよに はいったのわ げんりょーを ちょーごーする ところで ますくを かけた しょっこーが けいしやに そーだまや せっかいせきの こなを しいて かきまぜて いた しゃべるで ざくざく かきまぜると しるい こなが 1めんに けむりの よーに たちのぼって めも くちも あけられない こんな ところで まいにち はたらい ている ひとたちわ どんなに つらいことと あるーと おもった

つぎの たてものに はいると ここにわ よーかいがま が ある とけた がらすが なかで ぎらぎら かがやいて いる かまの しゅーいこわ 89にんの しょっこーが あせを ながして はたらいて いる ほそ なかい くだの 1たんを とけた がらすの なかに つっこんで ひきだすと さきに あかい たまが くつつい



ている 1たんに くちを あてて いきを ふきこむと
ぷーっと ふくれる ふりうごかしてわ また ふく いよ
いよ おーきく なる まるで あめざいくの よーで
ある みて いるうちに おーきな ふらすこが できた
こちらを みると そこでわ ちょっと ふいて かたに いれ
また ふいて かたから だす なにが できるで
あるーかと おもって いると いろいろ あつかって いるうちに
だいつきの こっぷに なった じつに うまいもので
ある

はしもとくんに うながされて つぎの しつに はいった
ここわ かこーばで ある しらべかゆの まわるにつれ
て いきや きや かねの えんばんが しゃりんの よーに
たわっている えぶるんを かけた しょっこーが
がらすの さらや こっぷなどを この えんばんに あて
て もよーを ほりつけたり みかきを かけたりしている
となりの しつでわ しょっこーが 56にん ならんで

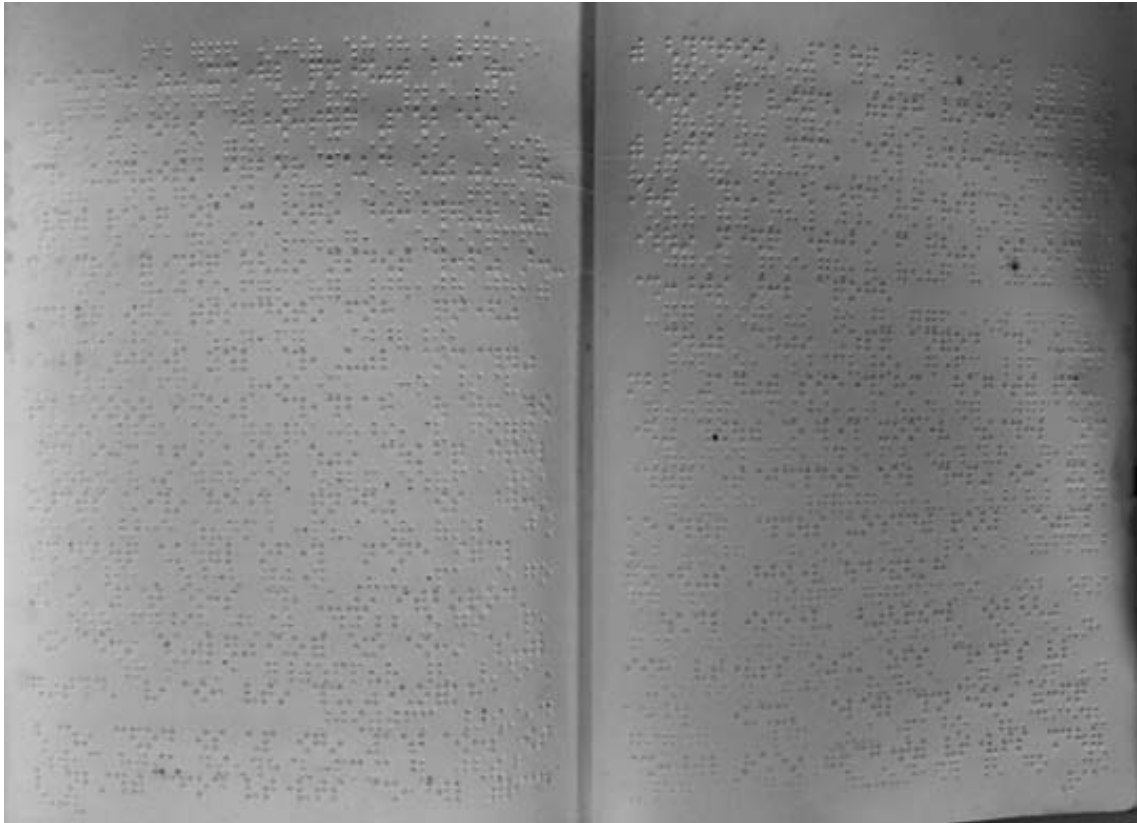
がらすきに いろいろの もよーを つけて いる

かえりがけに じむしょの ちんれつだなを みせて
もらった さら こっぷをはじめ はち びん かびん
みづさし などが きれいに ならんで いた とりわけ
うつくしかつたのわ でんとーの かさで あか き むらさき
みどり とりどりに めも さめるばかりで あった

だい28か てつげんの 1さいきょー

1さいきょーわ ぶっきょーに かんする しょせきを
あつめたる 1だいそーしょにして おしえに こころ
ざし あるものの む2の たからとして たつとぶところ
なり しかも その かんすー いくせんの おーきに のまり
これが しゅつばんわ けって よーいの わざに あら
ず されば いにしえわ しなより とらいせる ものの
わづかに よに そんするのみこて がくしゃ その
えがたきに くるしみたりき

いまより 2ひやくすー10ねんまえ やましる うちの

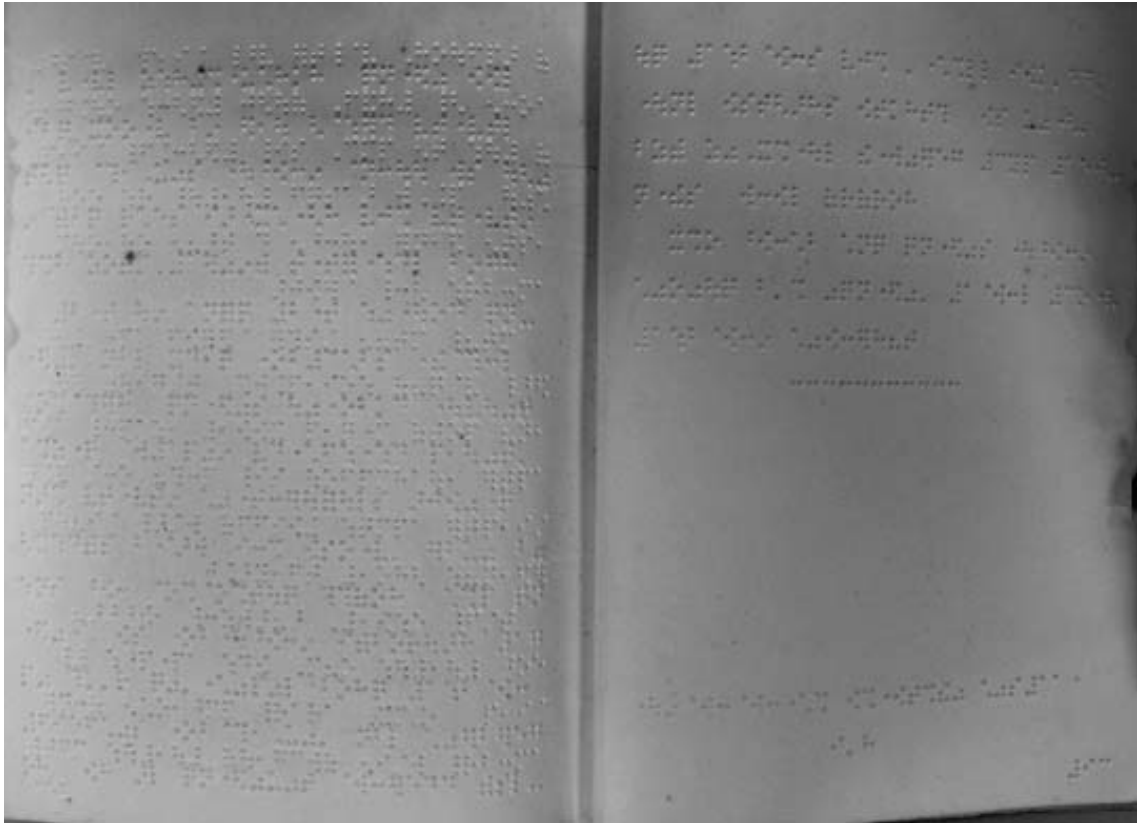


おーばくさん まんぶくじに てつげんという そー
ありき 1たいの じぎょーとして 1さいきょーを
しゅつぱんせんことを おもいたち しかなる こんなんを し
びても ちかつて この くわだてを じょーじゆせんと ひろ
く かくちを めぐりて しきんをつのること すーねん よー
やくにして これを ととのうることを えたり てつげん
おーいによるこび まさに しゅつぱんに ちゃくしゆせん
とす たまたま おーさかに しゅつすいあり ししよー すこ
ぶる おーく いえを ながし さんを うしないて ろとーに
まようもの かずを しらず てつげん この じょーを
もくげきして かなしみに たえず つらつら おもうに
「わが 1さいきょーの しゅつぱんを おもいたちたるわ
ぶつきょーを さかんにせんがため ぶつきょーを さかんに
せんとするわ ひつきょー ひとを すくわんがためなり
きしゃを つけたる この かね これを 1さいきょーの こと
に ついやすも うえたる ひとびとの きゅーじょに もちうる

も きするところわ 1にして 2に あらず 1さい
きょーを よに ひろむるわ もとより ひつよーの ことなれど
も ひとの しを すくうわ さらに ひつよーなるに あらず
や」と すなわち きしゃせる ひとびとに その ところ
ざしを つげて どーいを え しきんを ことごとく
きゅーじょの よーに あてたりき

くしんに くしんを かせねて あつめたる しゅつぱんひわ
ついに 1せんも のこらずなりぬ しかれども てつ
げん すこしも くつせず ぶたたび ほしゆーに ちゃく
しゆして どりよくすること さらに すーねん こーか むなし
からずして しゆくしの はたさるるも ちかきに あらんとす
てつげんの よろこび しるべきなり

しかるに このたびわ きんきちほーに だいきん
おこり ひとびとの こんくわ まえの しゅつすいの ひに
あらず ばくぶわ しょしよに すくいごやを もーけて
きゅーじょに ちからを もちうれども ひとびとの くるしみ



わ ひびに まさりゆくばかりなり てつげん ここに
おいて ふたたび いを けっし きしゃせる ひとびとに
ときて しゅっぱんの じぎょを ちゆーしし その しきん
をもつて ちからの およぶかぎり ひろく ひとびとを
すくい またもや 1せんをも とどめざるに いたれり

2ど しを あつめて 2ど さんじたる てつ
げんわ ついに ぶるつて だい3かみの ぼしゆーに
ちゃくしゆせり てちげんの しんだいなる じひしんと
あくまで しょ1ねんを ひるがえさざる ねっしんとわ
つよく ひとびとを かんごせしめしにや よろこんで
きふするもの いかいに おーく このたびわ せいはん いん
さつの ぎょー ちゃくちゃくとして すすみたり かくて てつ
げんが この だいじぎょーを おもいたしより 17
ねん すなわち てんわがねんに いたりて 1さいきょー
6956かんの だいしゅっぱんわ ついに かんせいせられ
たり これ よに てつげんはんと しょーせらるる ものに

して 1さいきょーの ひろく わがくにに おこなわるるわ
じつに このときよりの ことなりとす この はんぎわ
いまも まんぶくじに ほぞんせられ 3むね 150
つぼの そーこに みちみちたり

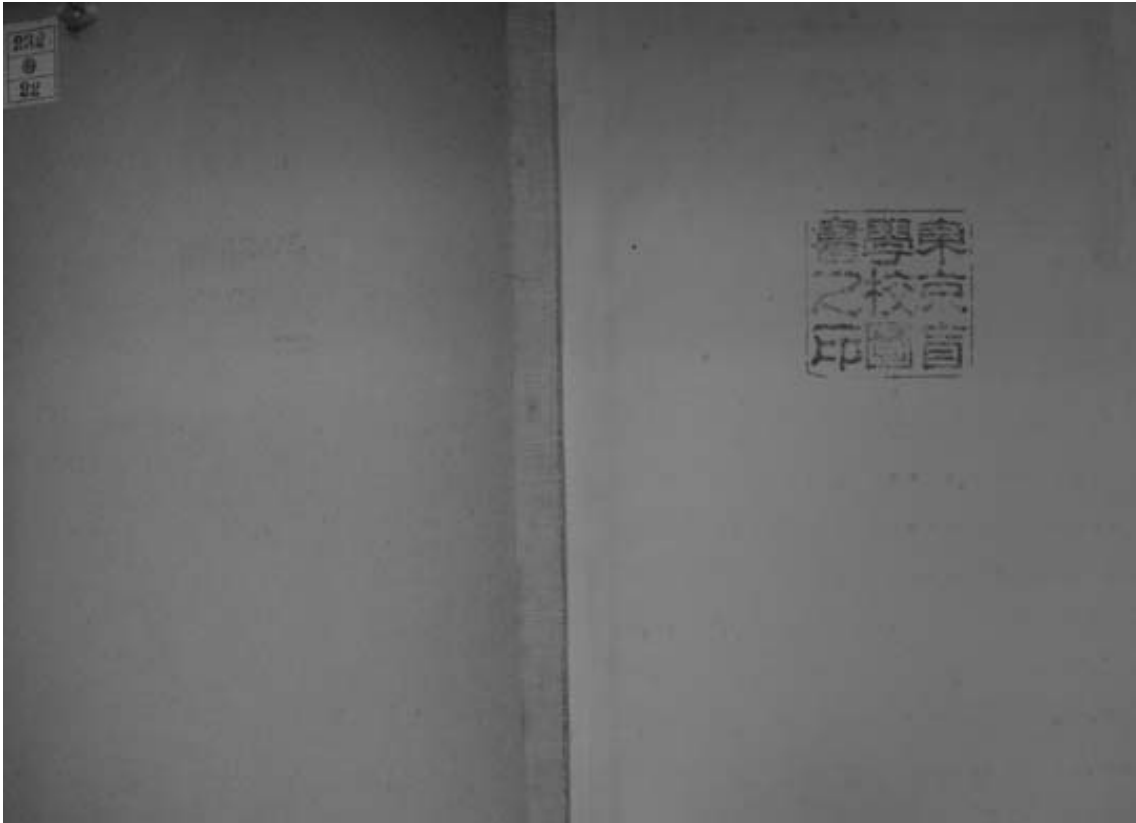
ふくた ぎょーかい かつて てつげんの じぎょーを
かんたんして しゆく 「てつげんわ 1しょーに 3たび
1さいきょーを かんごせり」と

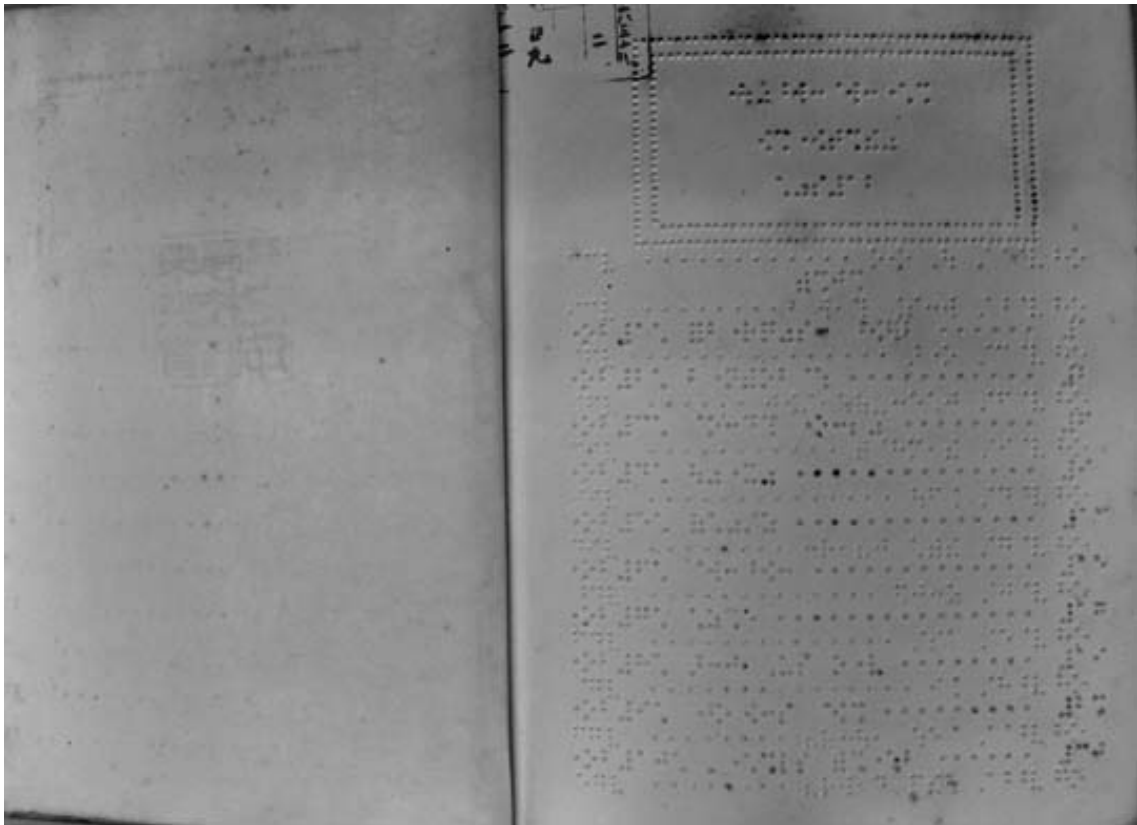












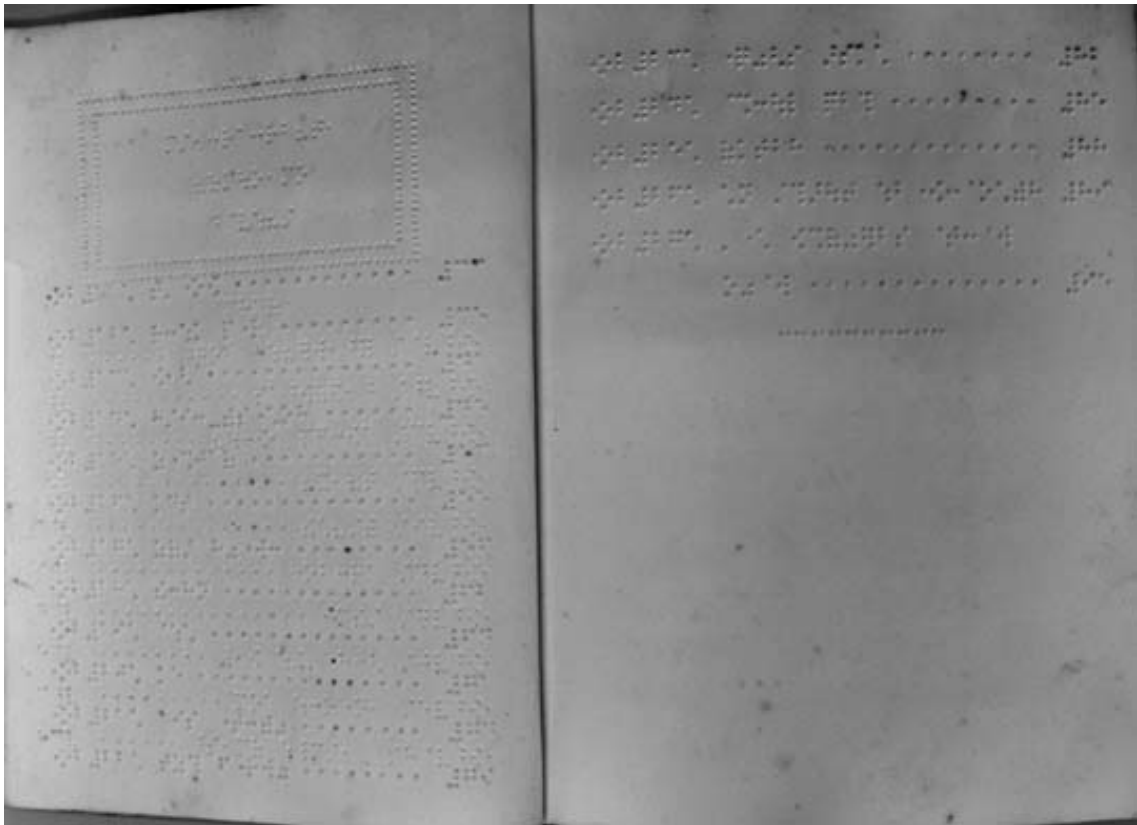
じんじょ-しょ-がく

こくごとくほん

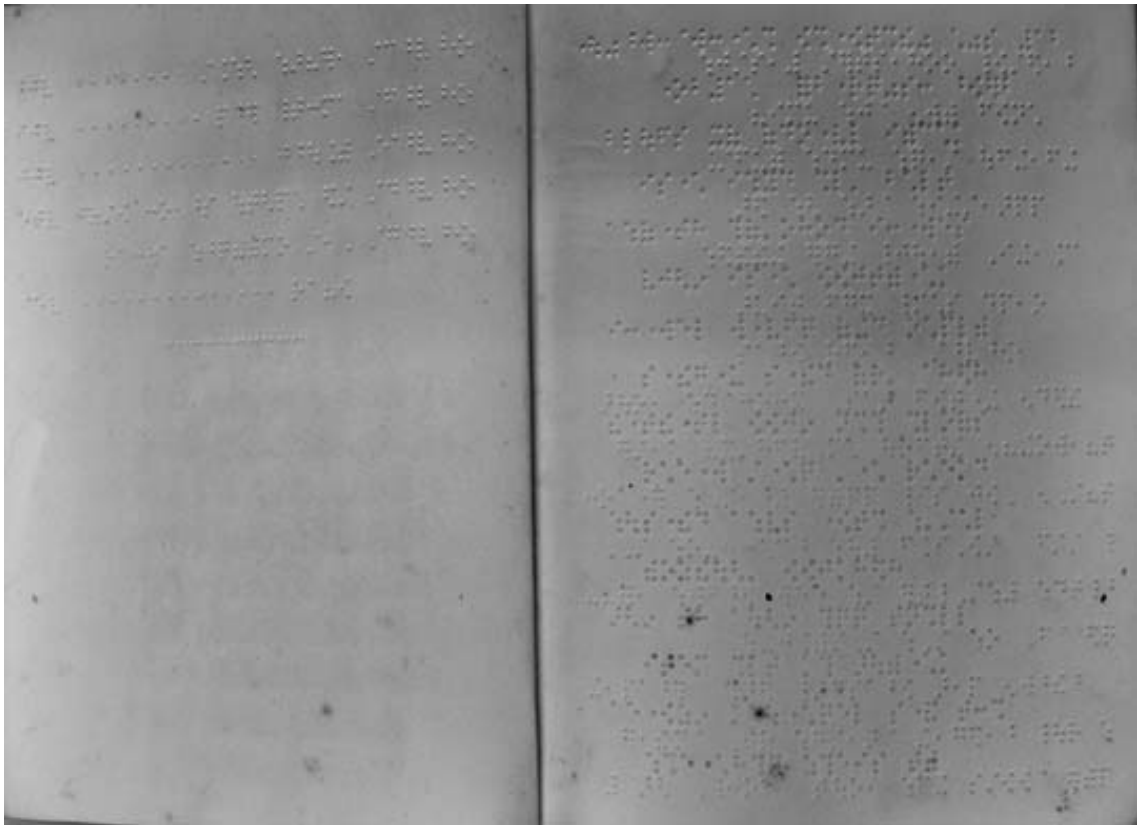
かんの12

もくろく

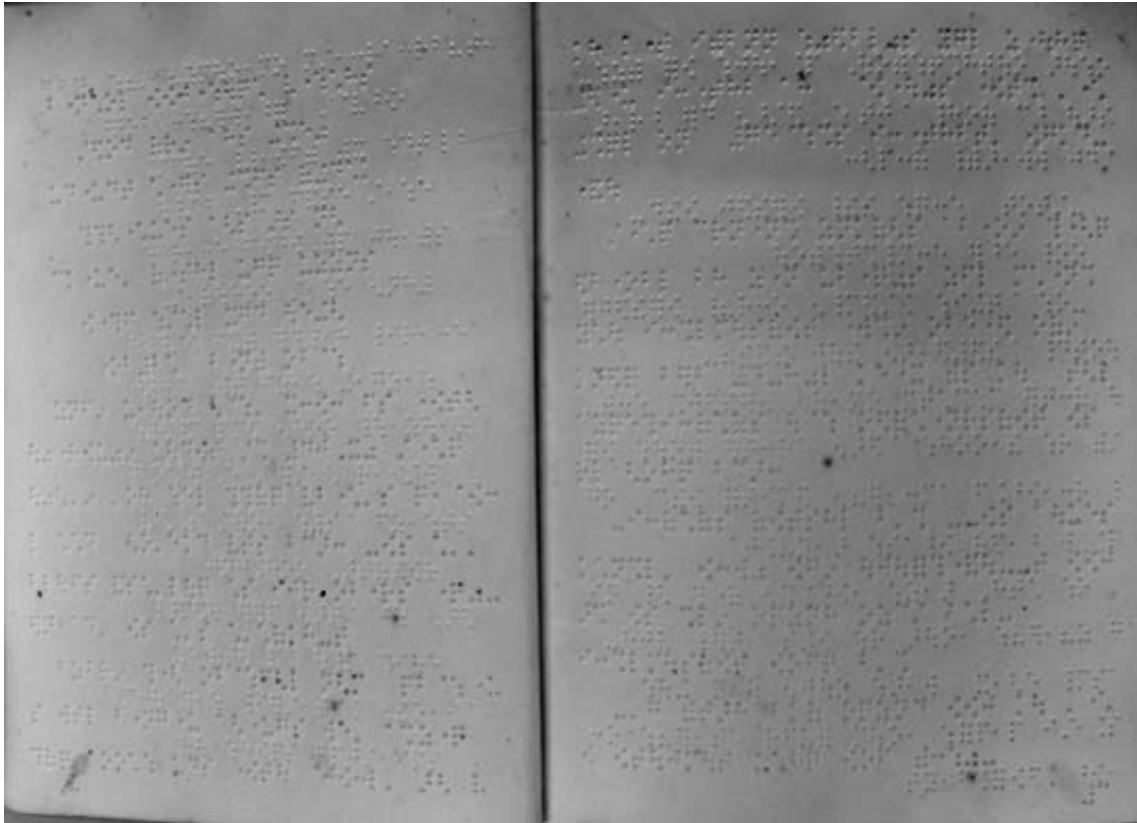
だい11か	めいぢてんの-ぎよせい	1
だい12か	いづもたいしや	2
だい13か	ちゃ-るす だ-せん	6
だい14か	しんぶん	9
だい15か	みかんやま	13
だい16か	しょ-ぎよ-	15
だい17か	かまくら	17
だい18か	よ-ろつぱの たび	19
だい19か	げっこ-の きよく	23
だい110か	わがくにの もくざい	30



だい111か とわだこ	33	だい123か でんきの よのなか	82
だい112か ちーさな ねぢ	35	だい124か きゅーしに ていす	85
だい113か こっき	41	だい125か みなといり	88
だい114か りやおーものがたり	45	だい126か かつ やすよしと さいごー たかもり	89
だい115か まぐるあみ	53	だい127か わが こくみんせい の ちよーしよ	
だい116か なんと	55	たんしよ	95
だい117か まみや りんぞー	56	-----	
だい118か ほーりつ	62		
だい119か しゃか	64		
だい120か なら	71		
だい121か あおの どーもん	74		
だい122か とます えぢそん	79		



じんじょーしょーがく こくごとくほん かの12
だい1か めいちてんのー ぎょせい
いにしへの ふみ みるたびに おもうかな
おのが おさむる くにわ いかにと
あさみどり すみわたりたる おーぞらの
ひろきを おのが ころともがな
おーぞらに そびえて みゆる たかぬにも
のぼれば のぼる みちわ ありけり
ほどほどに ころをつくす くにたみの
ちからぞ やがて わが ちからなる
さしのぼる あさひの ごたく さわやかに
もたまほしきわ ころなりけり
よきを とり あしきを すてて とつくにに
おとらぬ くにと なす よしもがな
あらごまを ならしがてらに のべ とーく
さくらがする ますらおの とも



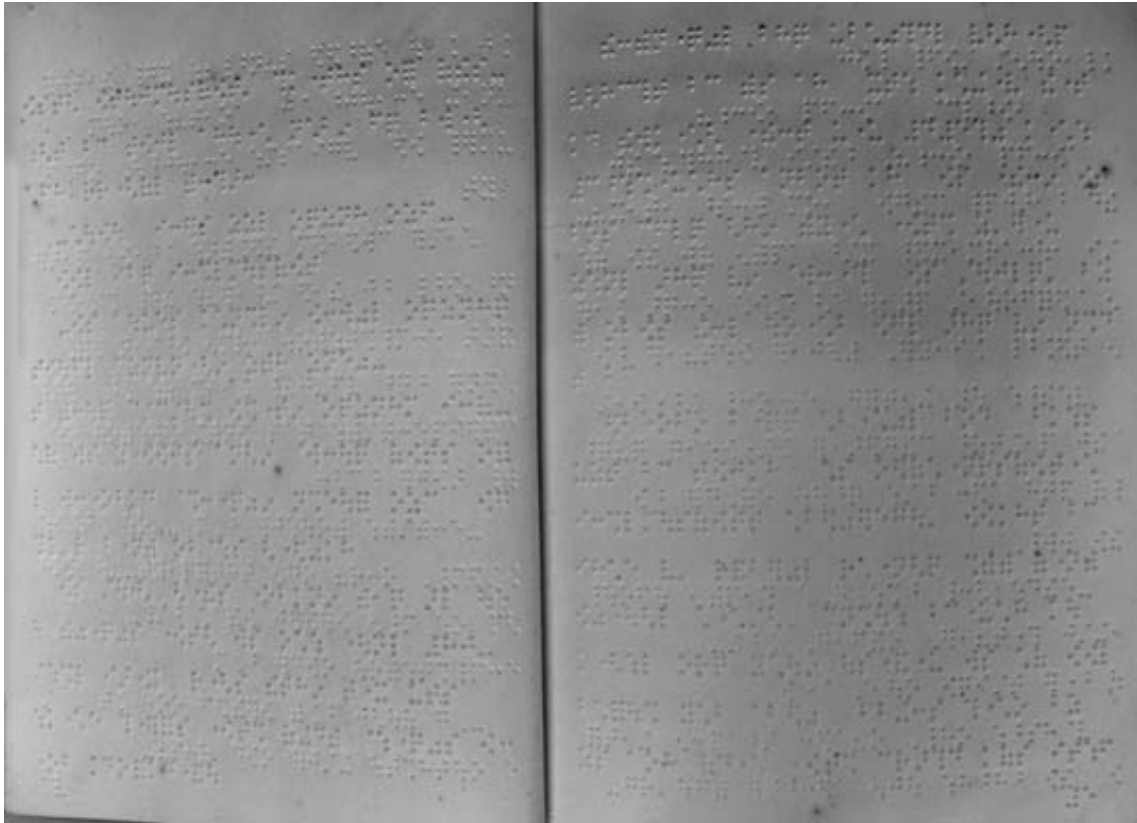
いつかたに ころざしてか ひざかりの
やけたる みちを ありの ゆくらん
はるばると かぜの ゆくえの みゆるかな
すすきはらの あきの つき
うなばらわ みどりに はれて はままつの
こずえ さやかに ふれる しらゆき
たい2か いづも たいしや
まつえを はしたる きしやわ ふーこー えの ごとき
しんぢこはんを はしること やく 40ぶん やがて
しんか物を わたり さらに すすみて ひい物の てつきよー
にかかる かたわらなる ひとの いうよー 「この かかわ
いにしえの ひのかわにして かの おろち たいぢの でん
せつ あるわ この かわの かわかみなり」と
いまいちを すぎ たいしやえきに つきぬ ていしやば
の そとに いづれば あきばれの そらわ あくまで
すみて あたかさはるの ごとし りよこーにわ よき ひ

なり など おもいつ さんけいこんの むれに まじりて
ゆけば おどりのい あり きよじんの ごとく わが
ゆくてに たつ 75しゃくの おどりのいとわ これなる
べし

やがて うちつづく まつなみきの あいだを すぎて
けいたいにいり まづ はいでんの まえに ぬかづく
むかし おーくにぬしのみこと ぞくを たいらげ たみを
なつけて いせい 4りんにならぶ もの なし ときに
あまてらすおーみかみの ししや たけみかづちうのみこと この
ちに きたりて いうよー

「おーみかみの みことのりに いくわく 『この あしはらの
なかつくにわ こーそん これを しろしめすべし』:と ころ
よく この くにを たてまつり たまうや いかに」
おーくにぬしのみこと こたえて いわく

「われ もとより いなみ たてまつる ころろ なし わが
こ ことしるぬしと はかりて こたえ もーさん」



このとき ことしろぬしのみことわ すなどりの ため みほの
さきと いう ところに ありしが つかいを えて いそぎ
かえり ちちぎみに もーすよー

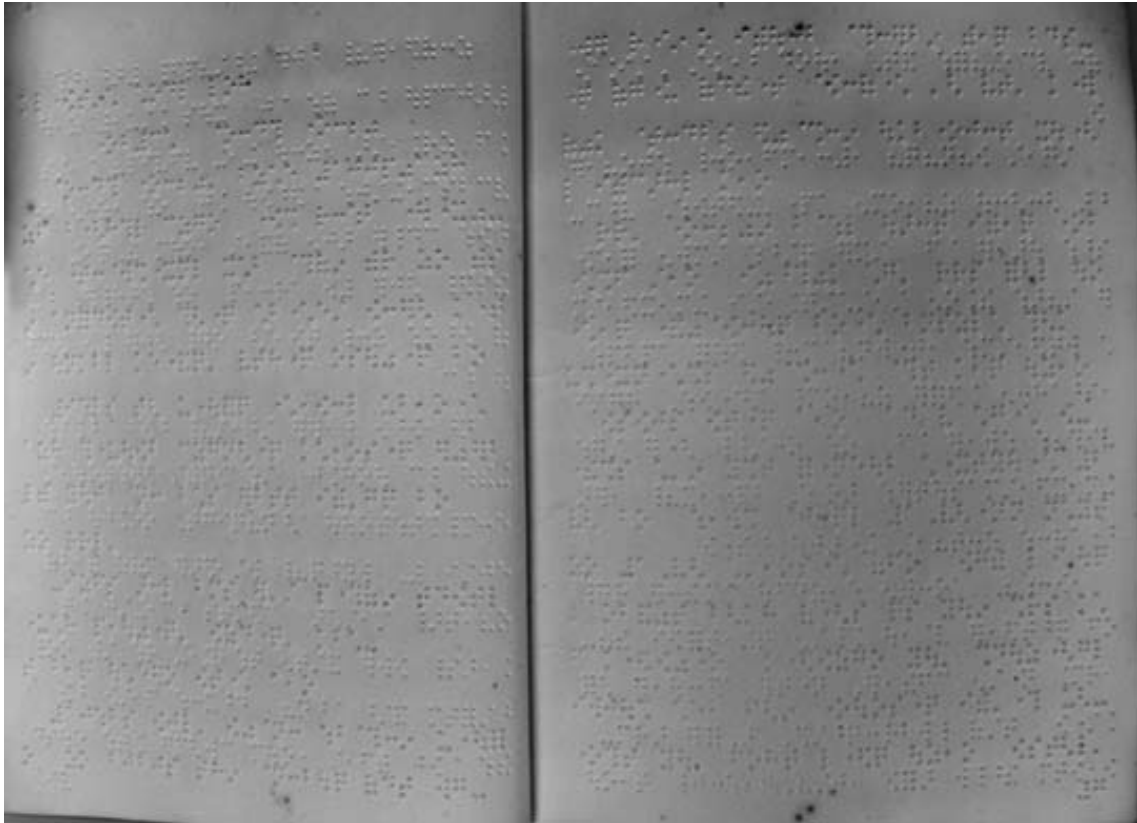
「かしこし おーせの ままに たてまつり たまえ」
ここに おいて おーくにぬしのみこと

「この あしはらの なかつくにを こーそんに たてまつりて
とこしえに あまつひつぎを まもり まつらん」
と もーして うやうやしく こくどを たてまつりぬ おーみ
かみ その まごころの あつきを しょーして みことのため
に そーだいなる きゅーでんをつくらしめ たまう これ
すなわち いづも たいしやの きげんなり

この やしろわ きほの だい^{ママ}なつをもつて よに しら
れ ほんでんの ごとき その たかさ じつに 80
しゃくに およぶ ちぎの ほとりを とぶ はとの
さながら すずめの ごとく みゆるも しゃでんの こー
だい なるためなるべし

ほーもつでんに いりて はいかんするに ひきりぎね
ひきりうすと いう もの あり ふとさ なかゆび ほど
なる ほそなかき ぼーと はば 45すん ながさ
3じゃくばかりの あついたと なり この ぼーを この
いたの うえにて きりを もむが ごとく ませば
まさつによりて ひを しょーず この やしろにてわ いま
も たいこの ぼーに したがい これによりて ひをつくる
と いう

けいだいを いでて かいかん^{ママ}に いたる いなさの
はまと いう ところなり かの たけみかづちのみことが
おーくにぬしのみことと かいけんせられしわ こかなりと いう
おりから ひわ ちへいせんに ちかづきて くもも みづも
こんじきにかがやき うつくしさ いうばかり なし
なぎさに たちて むかしを しのべば この かみ こに
いかめしく むかい あいけん えいゆーの すかた いま
まの あたり みるが ごとく うちよする なみの おとさえ



なにごとをか かたるに にたり

だい3か ちゃーるす だーん

ちゃーるす だーんわ いまから 100ねんあまり
まえ いざりすに うまれた ごく ちーさい じぶん
から どーしょくぶつに ふかい しゅみを もち また もの
を あつめることが すきで かいけらや こーせき など
をしつないに ならべてわ ひとりで たのしんで いた

9さいの とき はじめて がっこーに はいったが
あまり すばしこい うまれつきで なかったので せんせい
にも むしろ ちゅー いかの せいとと おもわれて いた
また ちちにわ

「おまえの よーに いぬの せわや ねずみを とることに
ばかり ねっしんでわ こまるでわ ないか」
と いった しかられた ことが あった

10さいの ころにわ こんちゅー さいしゅーを はじめ
た また いろいろの とりの ちゅーいして みると それ

それ ちがった おもしろい しゅーせいを もって いるの
で みれば みるほど きょーみが わき ひとわ なぜ
みんな ちょーるいの けんきゅーを しなだろーと ぶしぎ
に おもうよーに なった

ちちわ だーんを いしゃに しょーと おもって だい
がくえ やった おんじゅんな かかわ ちちの めいに した
がって べんきょーして いたが いつのまにか すきな
はくぶつがくの けんきゅーが しゅと なって しまった

このころの ことで あった ある ひ かやが こ
ぼくの か物を むくと めづらしい かぶとむしが 2
ひき いた さっそく りょーてに 1ひきづつ つかむと
また 1ひき かやったのが みえた これも にがして
わ たいへんと いきなり みぎの ての むしを くちの なか
え なぜこんだ なぜこまれた むしわ くるしまぎれに
おそろしく からい えきを だしたので おおわず はき
だすと むしわ えたりと にげて しまった このときにな



もー 3ばんめの むしわ どこえ いったか わからなかつた

かれが たんけんせんびーぐるごーに のりこんで
いき よーよーと ほんごくを しゅっぱつしたのわ 23
さいの ときで ある かくて せかいの かくちを めぐつ
て かんきの まなこを かがやかしながら はくぶつがく
や ちしつがくの じっけんきゅーに つとめ しゅじゅの
ざいりょーを あつめて ほんごくに かえたのわ それから
5ねんの のちで ある この こーかいに よって かれの
はくぶつがくしゃとしての きそが じゅーぶんに でき
いっしょーの ほーしんが はつきりと きまった

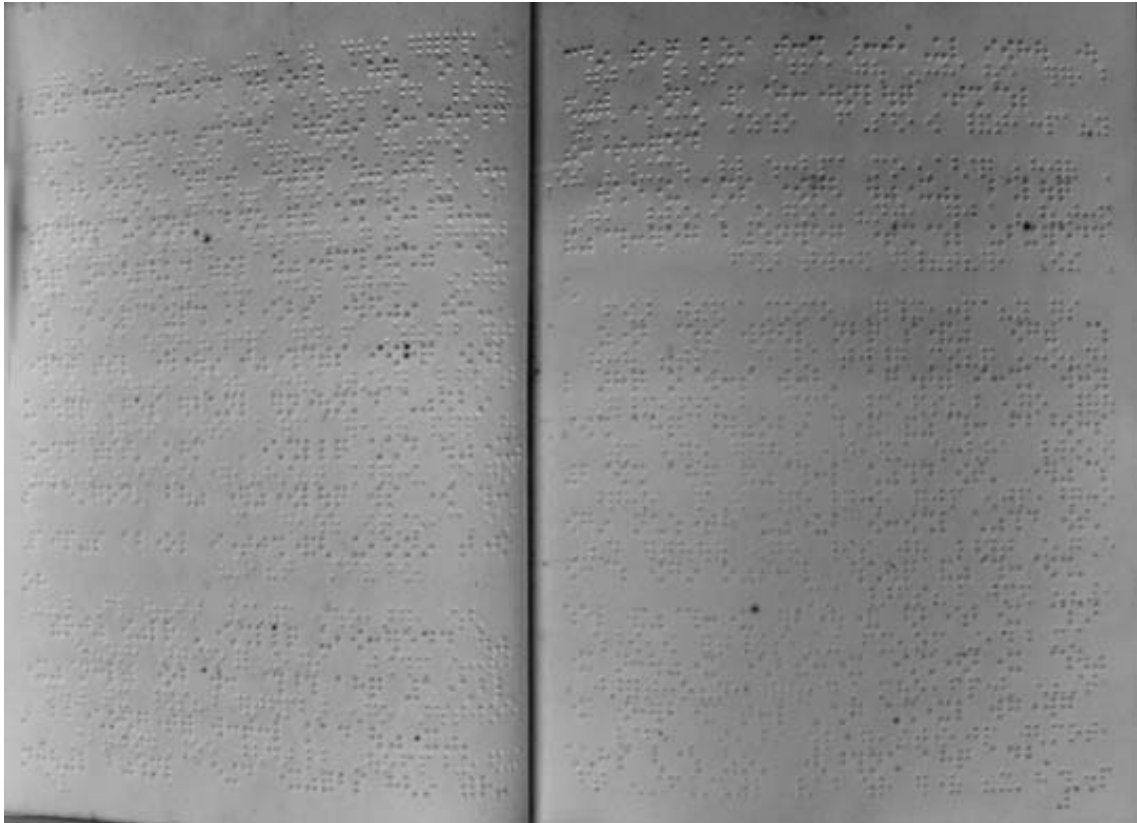
だーせんわ きょーみをおぼえと あくまで それに
こる せいしつで 1ど なにかを しはじめたら まん
ぞくな けっかを うるまでわ けっして ちゅーとで やめ
なかつた しかも にちじょーせいかつわ きわめて きそく
たたく まいにち きめた じかんわりどーりに しごと

を すずめて たとえ 10ぶん 15ぶんの よかでも
むえきに ついやすことが なかつた

だーせん の こーはんせいゆ びょーきがちで あつた
が この きそくたたく せいかつと ぶだんの よー
じょーとに よって 74さいの ちゅーじゅを たもつことが
できた そーして ひろく どーしょくぶつを けんきゅー
して いきものわ すべて ちゅーねんげつ の あいだにわ
したいに へんかし かとーな ものから こーとーな ものえ
と すすむ ものであると いうことをしよーめいした
これが ゆーめいな しんかろんで がっかいを こんぼん
から うごかした ものである

だい4か しんぶん

よの できごとを すみやかに しらんと するわ にん
じょーの つねなり されば めづらしき じけんの
おこりしとき これを きじゅつして いんさつに ふし ひろく
はつぱいすることわ いにしえより おこなわれたりしが



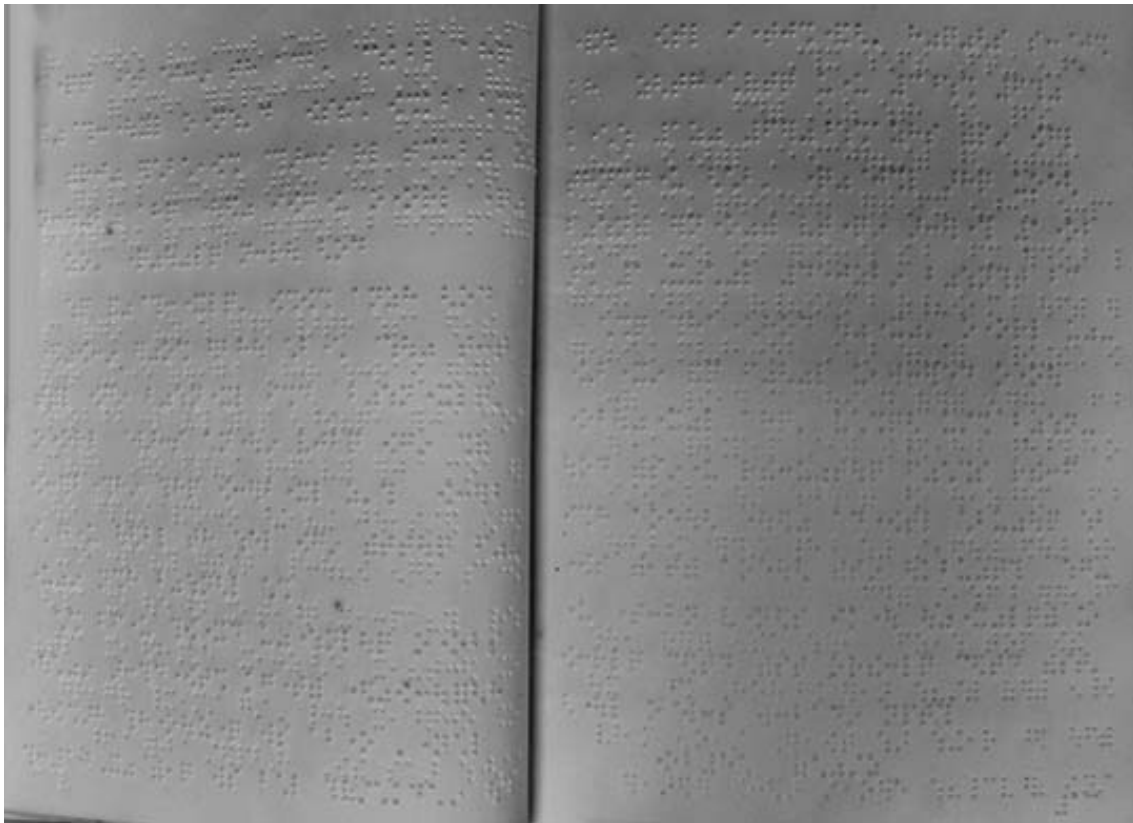
いんさつじゆつの よーちなる じたいに ありてわ ただ
おりおり きょーみある とくしゆの じけんを ほーどーする
に すぎざりき されど じんちの しんぼと いん
さつじゆつのはったつとわ いつまでも かく たんじゆん
にして ゆーぎてきなる ものに まんぞくすべくも あら
ず やがて あまねく ないかいの じけんを ほー
ずると ともに じじを ろんずるもの おこりて ここに
はじめて われらの せいかつに せつじつなる かんけいを
ゆーする ものとわ なりぬ わがくににて かかる しんぶん
の あらわれたるわ いしん ぜんごにして その ご すー
10ねんの あいだに おどろくべき はったつを とげ
たり

もちろん こんにち わがくににて はっこーせらるる しん
ぶんちゆーにも だいしよー しゆじゆ ありて 1かいに
わ いかがたけれども そーとーに なある しんぶんわ
つーしんに いんさつに あらゆる ぶんめいの りきを もち

うるをもって いまや とーく よーろつぱに おこりし じ
けんも わづか1りよーじつにして どくしゃに
ほーどーせらる

しからば かくの ごとき しんぶんわ いかにして
へんしゆーせられ いんさつせられ どくしゃに はいせらるる
か

まづ しゃの そしきについて のべん これも しゃ
によりて たしよーの そーいゆ あれども おーくわ そーむ
きよく ありて ぜんたいを すべ へんしゆー えいぎよーの
2きよく ありて へんしゆーに かんすることわ ぜんしゃ
これを つかさどり はんぱい こーこくに かんすることわ
こーしゃ これを たんとーす しかして へんしゆーきよくわ
さらに へんしゆーぶ せいじぶ けいざいぶ しゃかい
ぶ つーしんぶ がいほーぶ がくけいぶ しゃしん
ぶ こーせいぶ とーに わかれ かくぶに それぞれ
かかりの きしゃ またわ ぎじゆつか ありて あるいわ



いでて ざいりょーを とり あるいゆ しゃないに ありて
へんしゅーじむに たづさわる このほか こくない かくち
わ もちろん せかいゆつこく しゅよーの ちに とくはん また
つーしんいん ありて じけん おこれば ただちに でん
わ またわ でんしんにて つーちし きたる

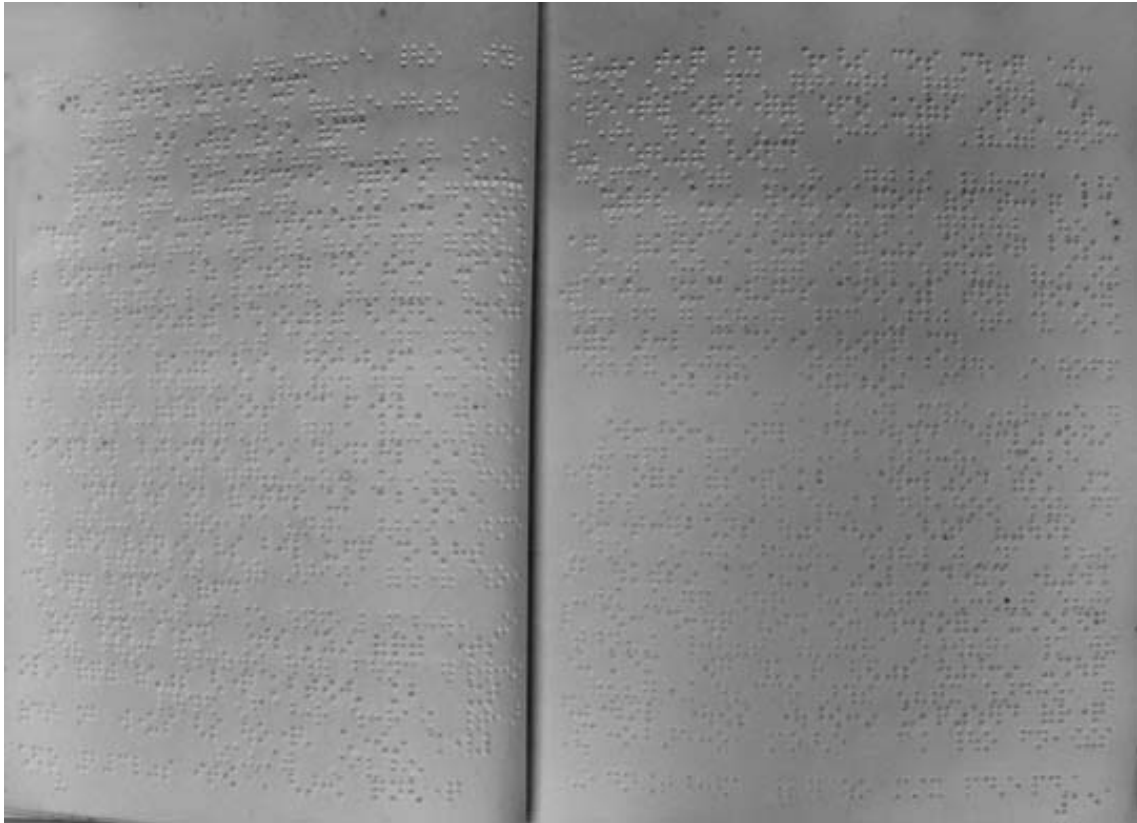
さて へんしゅーぶにてわ こくこく あつまり きたる
げんこーを せんたく せいらし かいが しゃしん とーと
ともに これを いんさつぶに おくる いんさつぶにてわ
ただちに しよよーの かつじを ひろいて これを くみ
こーせいぜりを すりて こーせいぶに まわす こーせい
おわれば しけいに とり さらに これを もととして えん
ばんをつくり いんさつきに かく

かく いえば すこぶる はんざつにして だいたいの
じかんを よーするごとく なれども げんこーしめきり
じこくより すりだしまで その あいだ わずかに
すー10ぶん もって その いかに すみやかなるかを しる

べし ことに おどろくべきわ りんてんきの のーりよく
なり まきとりがみとて はば 3じゃく 6すん
ながさ 1まん 6せんじゃくあまりの ものを これに
とりつくれば きかいわ でんりよくに よりて はたらき
いんさつも せつだんも ひとでを よーせず 1だい
よく 1ぶんかんに 450まいを いんさつすと いう

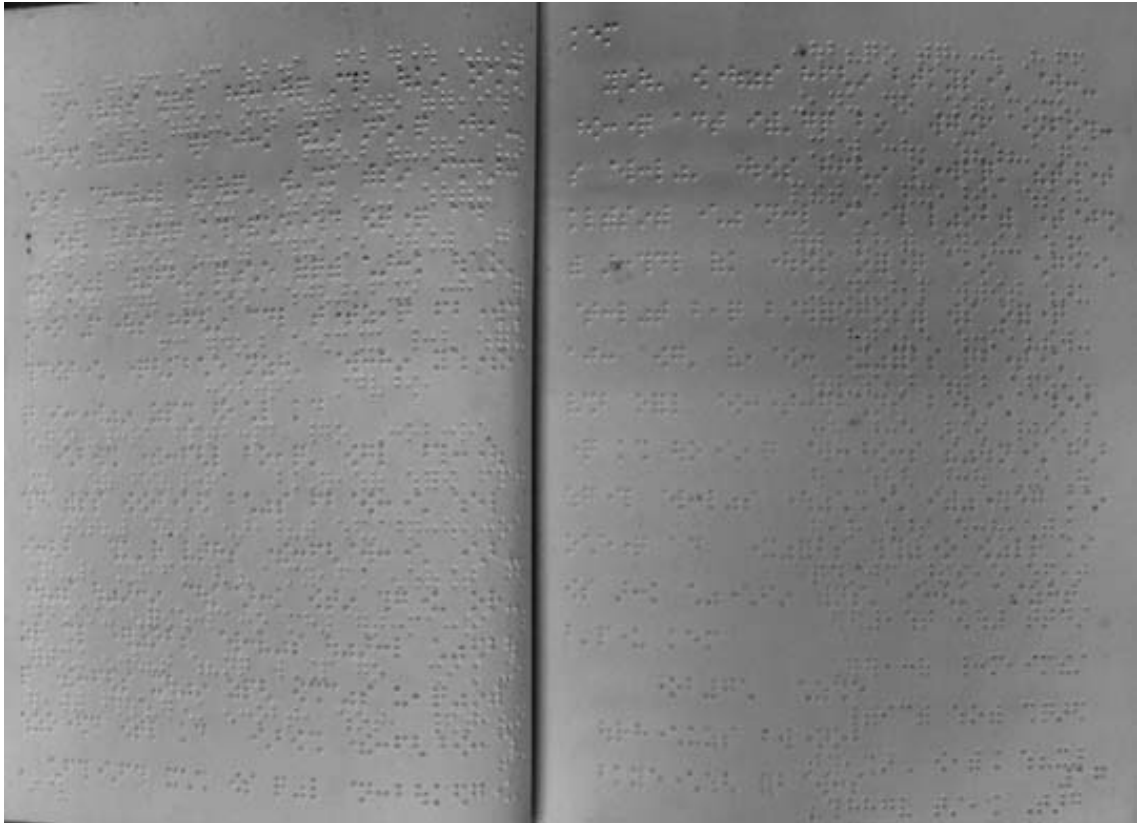
かくて すりあがりたる しんぶんわ ただちに はん
ばいぶを へて えんきんに はっそーせらる ただし
だいたいしんぶんに ありてわ ひかくてき はやく いんさつ
したる ものをば ちほーはんとして えんかくの ちほーえ
おくり あたらしき じけん あるごとに かいはんして さい
ごの もっとも あたらしき ものを しないはんとす され
ば どーいつ ひづけの おなじ しんぶんにても はっ
こーちにて うけとる ものと たちほーにて うけとる ものとわ
きじに たしよーの そーいあるを つねとす

だい15か みかんやま



おきをはしるわ まるやの ふねか
まるに や じの ほが みえる
ちよーしの よい みかんとりうたが すみきつた ばん
しゅーの くーきを ふるわして どこからとも なく のどか
に きこえてくる いま のぼって きた ほーを ふりかえつ
て みると いくだんにも いくだんにも きづきあげられ
た やまはたにわ みかんの きが ぎょーぎよく ならんで
いる どれを みても えだという えだにわ もー
こがぬいろに いろづいた みが すずなりになつて
いる くらいほど こい みどりの はの あいだから
その ひとつ ひとつが ひの いろに はえて くつきりと
うきで いるのが みえる
また すこし のぼる どの やまを みても どの
たにを みても みかんの きで ないところわ ない ふと
みると つい そばの きの したでわ かごを くびに
かけた 23にんの おとこが きよーな てつきで

みかんをとつて いる さつきの うたの むしで あるー
あちらでも こちらでも さえた はさみの おとが ちょ
きん ちょきんと きこえる
ふもとの か物を しらほが ふたつ みつ とつて いく
あれわ みなとの おやふねえ みかんを はこんで いくの
で あるー こはるびよりの あたかきにとけて そこからも
ゆめの よーに ふなうたが きこえて くる
だい6か しよーぎよー
しよーぎよーわ これに じゅーじする しよーにんだけを
りする ための ものでわなない しよーにんたる ものわ よく
きよーどーせいかつの しんいぎを わきまえ ひんしつ
の よい しなものを なるべく あんかに なるべく びんそく
に きよーきゅーして ひろく こーしゅーのためをはからなけれ
ば ならぬ これ すなわち せけん の しんよーを はくして
けんじつに じこの じぎよーを はってんさせる みちで
ある



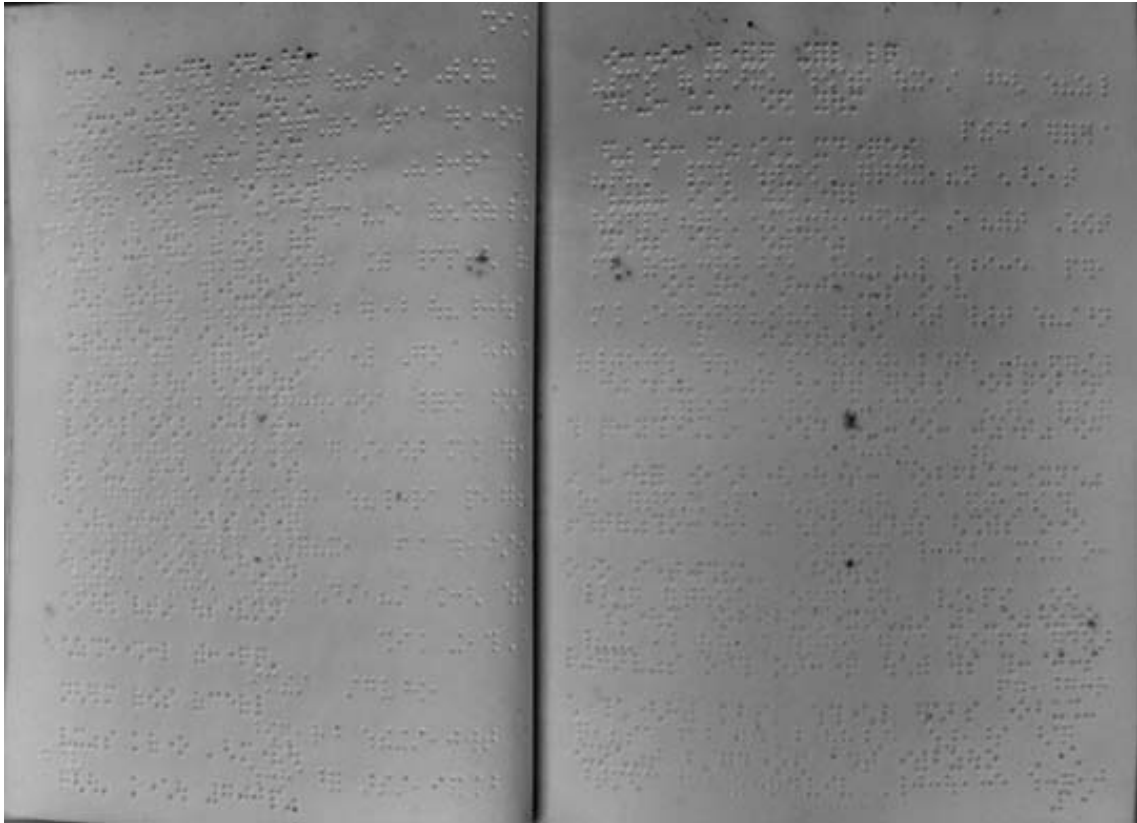
かう ひとの むちに じょーじて やすい しなを たかく
うりつけ みほんにわ せいりょーな しなを つかって じっ
さいの ちゆ-もんに たいしてわ そわくな ものを おくるよー
な ことわ ひととして なすべからざる ことである
また たんに そんえきの てんから みても かよーな しかたわ
ただ 1じの りえきを うるに とどまって えいぞく
することが できないから つまりわ しょーりを むさぼっ
て おーぞんを まねく けっかに なる

がいにく ぼーえきに いたってわ これに じゆーじ
する ものの ところかけ いかんの えいきょーが さらに
おきい すなわち ひとりの ぼーえきしょーが がい
じんの しんよーを うしなうよーな ことを すれば たち
まち くに ぜんたいの しょーひんの しんよーに かんけいし
て ぼーえきの ふしんを まねき こくうんの はってんをも
さまたげる ことになる がいにく ぼーえきぎょーしゃ
わ かえすがえす ぶかく この てんに ちゆーいしなれば

ならぬ

むかしわ こじんの りえきを いとなむのが しょー
ぎょーであるとおもわれていた それゆえ だいたすー
の しょーにんわ じこの りえきを のぞいてわ ほとんど
なにものをも かんちゆーに おかず にんたいも どりよく
も よーするに みな じこの ためであつた かれらが
ちよーにんと いて いやしめられたのも その ため
あるー これわ ひつきょー ぶんめいの ていどが
ひくい ために きょーどーせいかつの いぎが あきらか
で なく したがって しょーぎょーの ほんしつが りかい
されず しょーにんの じんかくが おもんぜられ なかつ
たからである ぶんめいの すすんだ こんにち なお
この よーな かんがえを もつわ おきな あやまりと
いわねば ならぬ

だい7か かまくら
しちりがはまの いそづたい
いなむらがさき めいしょーの



つるぎ とーぜし こせんぢょー
ごくらくじさか こえ ゆけば
はせ かのんの どー ちかく
ろざの だいつつ おわします
ゆいの はまべを みぎに みて
ゆきの したみち すぎゆけば
はちまんぐーの おんやしろ
のぼるや いしの きざはしの
ひだりに たかき おーいちょー
とわばや とーき よよの あと
わかみやどーの まいの そで
しづの おだまき くりかえし
かえしし ひとを しのびつつ
かまくらぐーに もーでてわ
つきせぬ みこの みうらみに
ひふんの なみだ わきぬべし
れきしわ ながし 700ねん

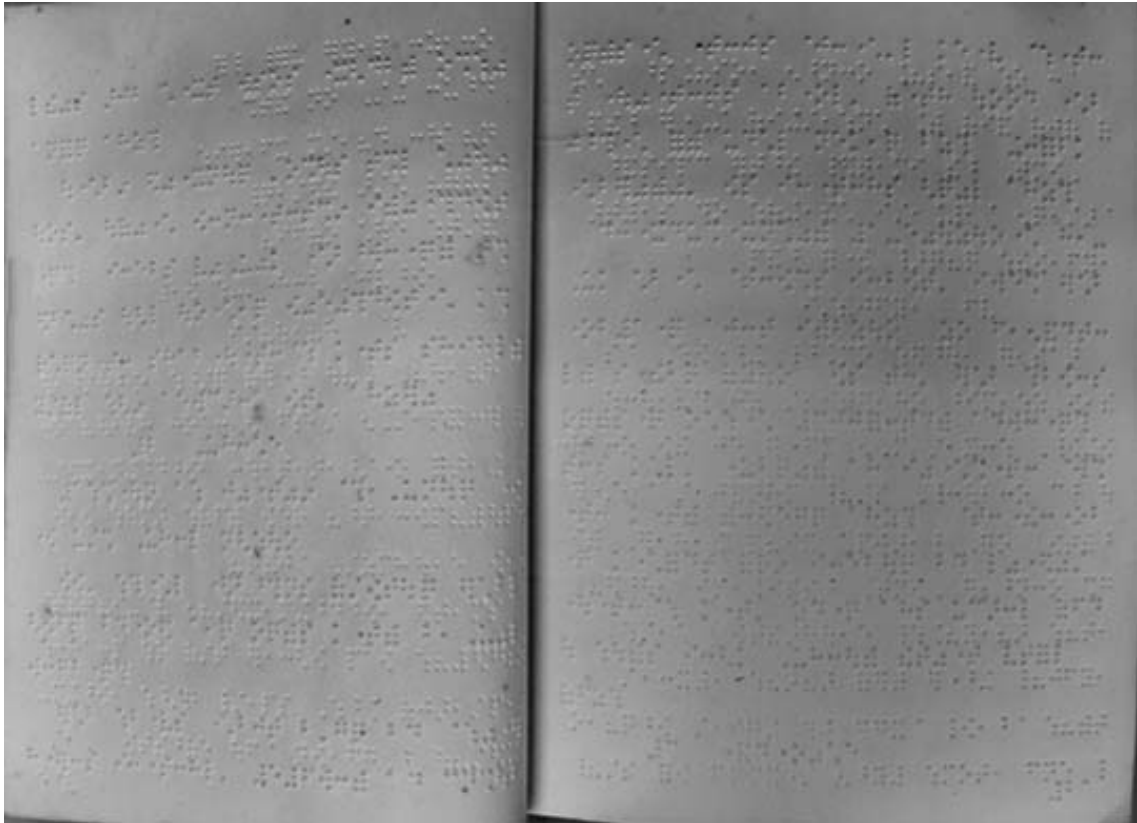
こーぼー すべて ゆめに にて
えいゆー ゆかわ こけ むしぬ
けんちょー えんがく ふるでらの
さんもん たかき まつかぜに
むかしの おとや こもらん

たい18か よーろつぱの たび

1 ろんどんから

ろんどんわ なんと いても せかいの たいとかいで
す てーむすがわを かざる たわーきょー ろんどんきょー
を はじめ こっかいぎじどー たいえいはくぶつかん
アすとみんすた-じいん そのた みるもの きくもの ただ
ただ おどろくほかわ ありません

さくじつ たいえいはくぶつかんを 1らんしました
ちんれつひんの たしゅ たよーで しかも その すーりょーの
かずかぎりも ないのわ さすがに せかいの たいはく
ぶつかんと いわれるだけ あると おもいました わが



にほんの よろい かぶと そのたの ぶきるいも たくさん
あつめて あります

しかいを けんぶつして わたくしの とくに かんしん
したのわ しみが こーつーどーとくを おもんずること
です おーらいの ひんぱんな がいじょーでも よく
けいけんの しきに したがって こんらんすることが なく
ちかてつどー のりあいじどーしゃ などの のりおりに
もむやみに さきを あらそうよーな ことわ ありません

2 ぱりーから

1さくじつ あさ ろんどんを しゅっぱつして
ご はやく ぱりーに つきました

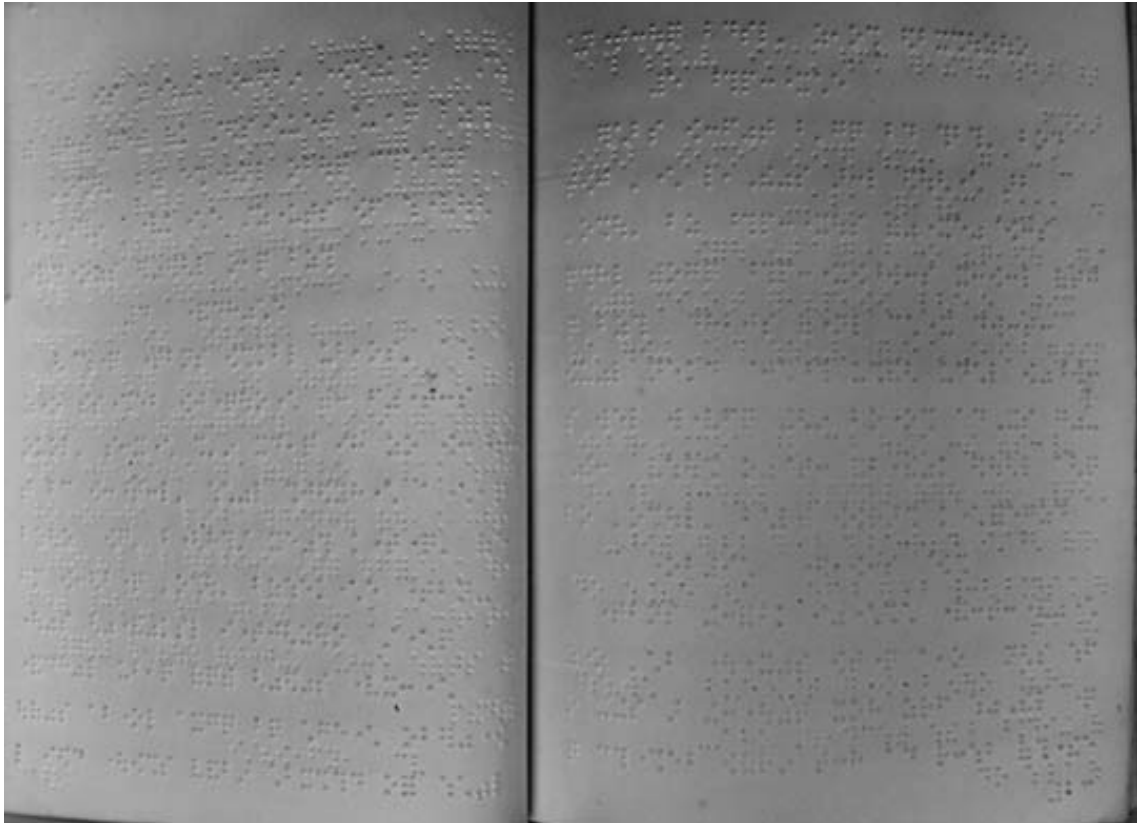
ここわ さすがに けいじゆつのみやことして せかいに
きこえて いるだけ あって たてもの なども いっぱんに
そーれいです

せかい さいびの がいろと いわれて いる しゃんぜ
りぜーの おーどーりにわ 5・6そーも ある うつくしい

たてものが どーろの りょーが物に ならび しゃどー
と じんどーとの あいだにわ みどり したたる がい
ろじゆが めも はるかに つらなっています ゆーめいな
がいせんもんわ この おーどーりの きてんに あります

るーぶるはくぶつかんも 1らんしましたが りっ
ぱな がいが ちょーこくの おーいことわ おそらく せかい
だい1で あるーと おもいました また えつふえるー
にも のぼって みました この とーわ せかい さいにーの
たてもので たかさが 300めーとるも あるそーです
とーの なかにわ ばいてんも あり おんがくどー しょく
どー なども もーけられて あります ちょーぼーだい
で ながめると みちを おーらいして いる にんげんや
じどーしゃ などわ まるで ありの はうよーに みえる
し さしもの おーきな ぱりーしも ほとんど ひとめに
みえます

3 べるだんから



あー この むざんな こーけいを ごらん下さい やま
も もりも むらも みな やけのがはらと かわっています
わたくしわ いま らくじつに たいして うすらさむい
あきかぜを あびながら やまばとの こえ さびしき
べるだんの せんせきに たって います

4 べるりんから

きしゃで どのの こくないに はいったのわ あさ
まだ ほのぐらい ころでしたが もー えんどーの
たまたまに のーぶが くわを ふるって おり また こーちよー
という こーちよーにわ さかんに くるけむりが あがって
いました これわ いぎりすや ふらんす などわ みら
れぬ こーけいで わたくしわ いまさらながら どの
じんの きんべんなのに おどろきました やがて
べるりんにはいって みても きんけんの ひふーが
しみの あいだにあふれて いて かれらが たいせんご
における じこくの ひふを かいふくする ため さかんに

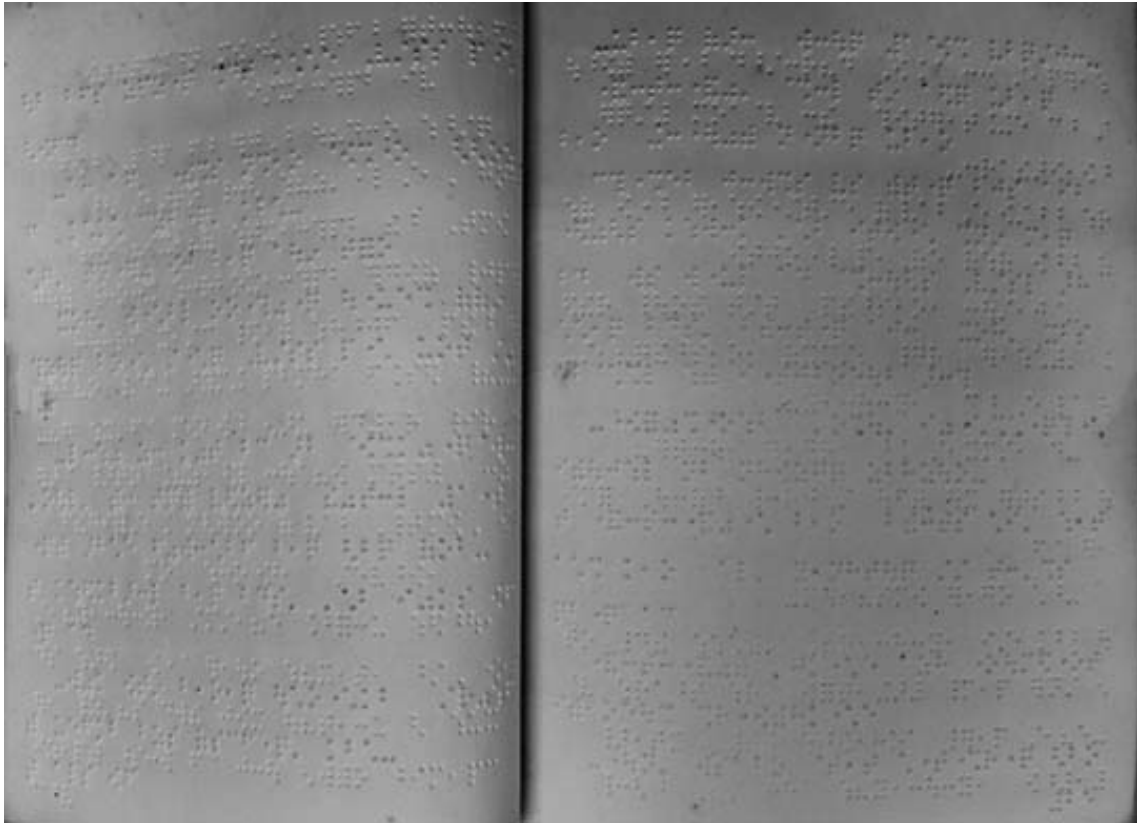
かつどーして いるのにわ まったく けいふくしました

5 じゆねーぶから

せかいの こーえんと いわれて いる すいすわ いたる
ところ わが にっぼんの よーに けしきが よい
わたくしわ いま じゆねーぶしの もんぶらんきよーの
ですりに もたれて じゆねーぶにじよーの ふーこーに みとれ
て います るりいろの みづに うかぶるそーとー
ぶんに つらなる りよくじゆ はくへき はるかに こんじよー
の そらに そびえて ゆきを いただく あるぶの れん
ぼー ひさしく たんちよー へいぼんな けしきに あきて
いた わたくしにわ いかにも こちよく ながめられます

たい9か げつこーの きよく

どのの ゆーめいな おんがくか ベーとーべんが
まだ わかい じぶんの ことであつた つきの さえ
た ふゆの よ ゆーじんと ふたり まちえ さんぽに で
て うすぐらい こみちを とーり ある ちーさい みすぼら



しい いえの まえまで くと なかから びやのの ねが
きこえる

「あー あれわ ほくの つくった きよくだ ききたま
え なかなか うまいでわ ないか」

かれわ とつぜん こー いて あしを とめた

ふたりわ こがいに たたずんで しばらく みみを
すまして いたが やがて びやのの ねが はたと やん
で

「にーさん まー なんという よい きよくなんでしょー
わたしにわ もー とても ひけません ほんとーに 1ど
でも よいから えんそーかいえ いて きて みたい」
となさけなはーに いて いるのわ わかい おんなの こえ
である

「そんな ことを いてって しかたがない やちんさえ
も はらえない いまの みのうえでわ ないか」
と あにの こえ

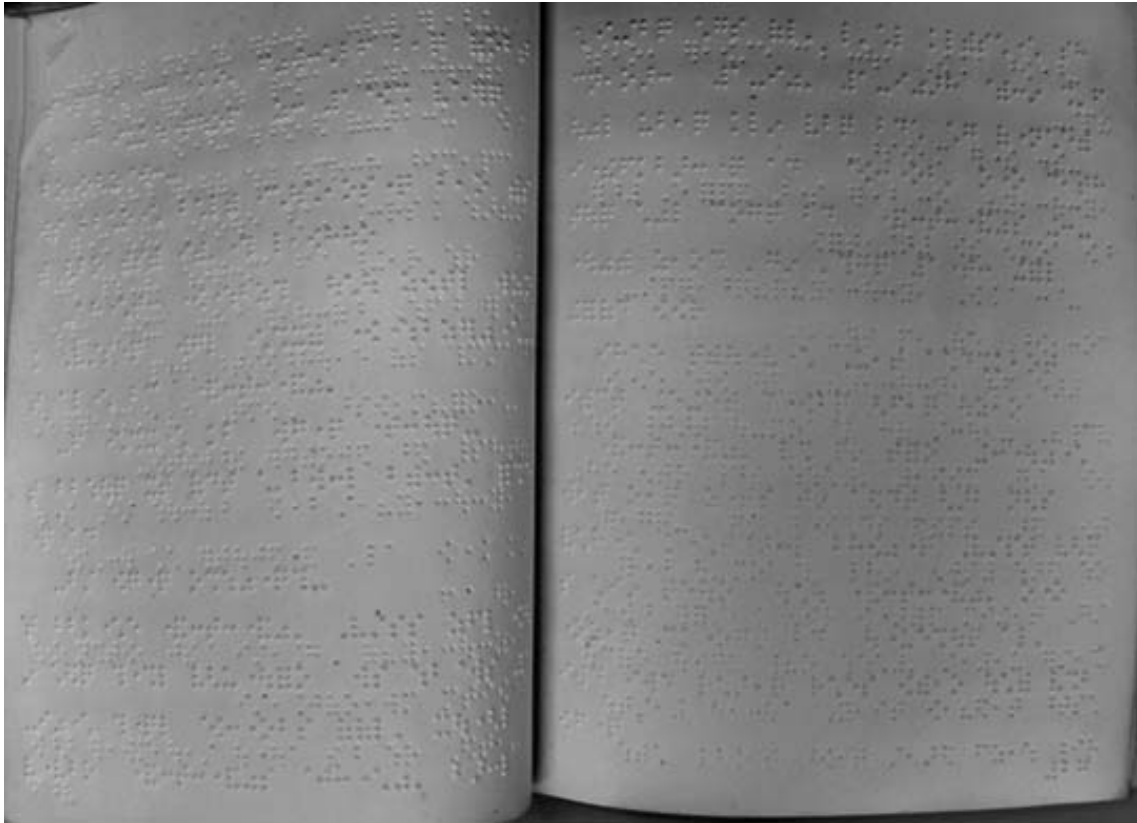
「はいて みよー そーして 1きよく ひいてやるー」
べーとーべんわ きゅーに とを あけて はいて
いてた ゆーじんも つづいて はいてた

うすぐらい ろーそくの ひの もとで いるの あおい
げんきの なさそーな わかい おとこが くつを ぬって
いる その そばにある きゅーしきの びやのにより
かかっているのわ いもーとで あるー ふたりわ ふいの
らいきやくに さも おどろいたらしい よーす

「ごめんください わたくしわ おんがくかですが
おもしろさについ つりこまれて まいりました
と べーとーべんが いてた いもーとの かあわ さっと
あかくなった あにわ むつつりとして やや とーわくの
ていで ある

べーとーべんも われながら あまり だしぬけだと
おもったらしく くちごもりながら

「じつわ その いま ちょっと かどぐちで きてた



のですが -- あなたわ えんそーかいえ いって みたいと
か いう おはなしでしたね まー 1きょく ひかせて
いただきましょー」

この いしかたが いかにも おかしかったので いった もの
も きいた ものも おもわず につこりした

「ありがとー ございます しかし まことに そまつ
な びやので それに がくふも ございませんが」

と あにが いう ベーとーべんわ

「え がくふが ない それで どーして」

と いさして ふと みると かれいそーに いもーとわ めくら
である

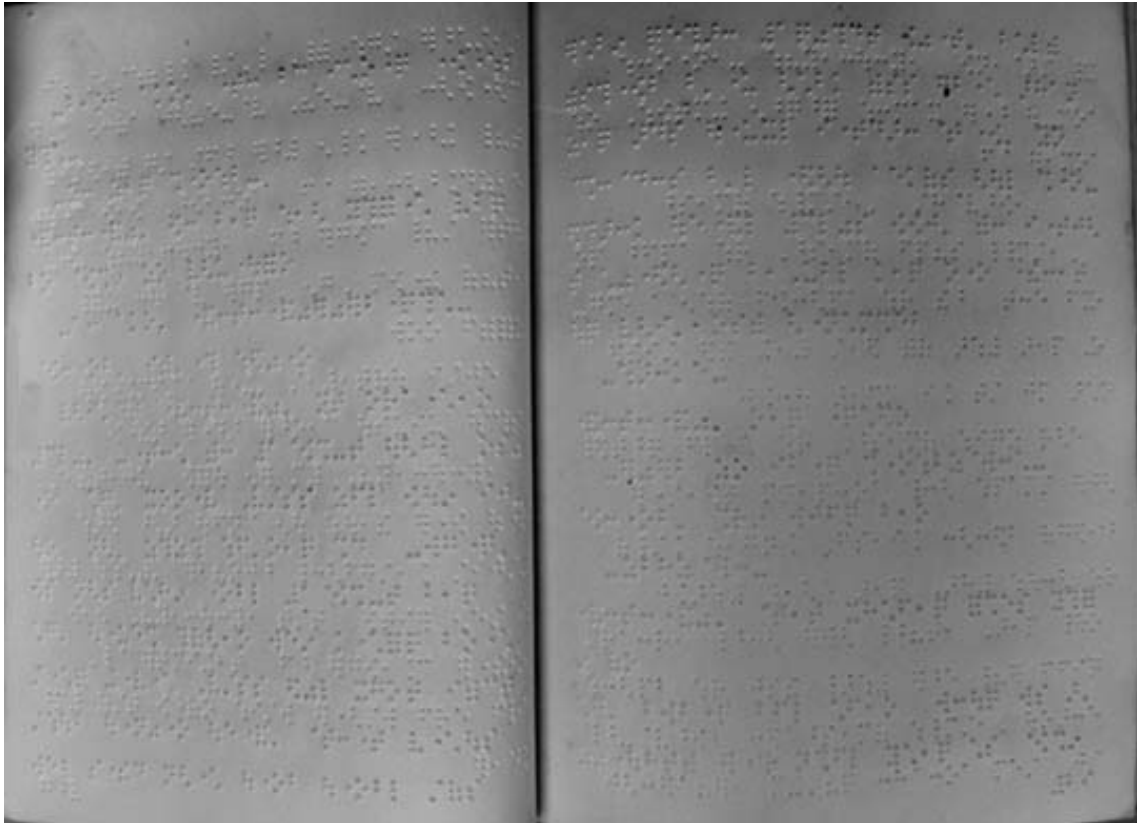
「いや これで たくさんです」

と いしながら ベーとーべんわ びやの まえに こし
をかけて すぐに ひきはじめた その さいしょの 1
おんが すでに きょーたいの みみこわ ふしぎに
ひびいた ベーとーべんの りょーがんわ いやーに

かがやいて かれの みこわ にわかになにものかが のり
うつったよー 1おんわ 1おんより みょーを くわえ
しんにはいつて なにを ひいて いるか くれ みづからも
おぼえないよーである きょーたいわ ただ うつとり
として かんに うたれて いる ベーとーべんの ゆー
じんも まったく われを わすれて 1どー ゆめに
ゆめみる こち

おりから ともしびが ぱつと あかるくなったと
おもうと ゆらゆらと うごいて きえってしまった

ベーとーべんわ ひく てを とめた ゆーじんが
そつと たって まどの とを あけると きよい つきの
ひかりが ながれるよーに いらこんで ひやのと ひきて
のかおを てらした しかし ベーとーべんわ ただ
だまって うなだれて いる しばらくして あにわ
おそる おそる ちかよって ちからの こもった しかも ひくい
こえて



「いったい あなたわ どー いう おかたで ございますか」

「まー まって ください」

ベーとーべんわ こー いて さつき むすめが ひいて
いた きょくを また ひきはじめた

「あー あなたわ ベーとーべんせんせいですか」

きょーだいわ おもわず さげんだ

ひきおわると ベーとーべんわ つと たちあがった
3にんわ 「どーか もー 1きょく」と しきりに たのん
だ かれわ ふたたび ぴやのの まえに こしを おろ
した つきわ ますます さえわたって くる 「それでわ
この つきの ひかりを だいに 1きょく」と いて
かれわ しばらく すみきった そらを ながめて いたが
やがて ゆびが ぴやのの けんに ふれたと おもうと
やさしい しづんだ しらべわ ちょーど ひがしの
そらに のぼる つきが したい したいに やみの

せかいを てらすよー 1てんすると こんどわ いかにも
ものすごい いわば きかいな ものの せいが よりあつ
まって よるの しばふに おどるよー さいごわ また
きゅーりゅーの いわに げきし あらなみの きしに くだ
けるよーな しらべに 3にんの こころわ もー おどるき
と かんげきで いっぱいになって ただ ぼーっと
して ひきおわたたのも きづかぬくらい

「さよーなら」

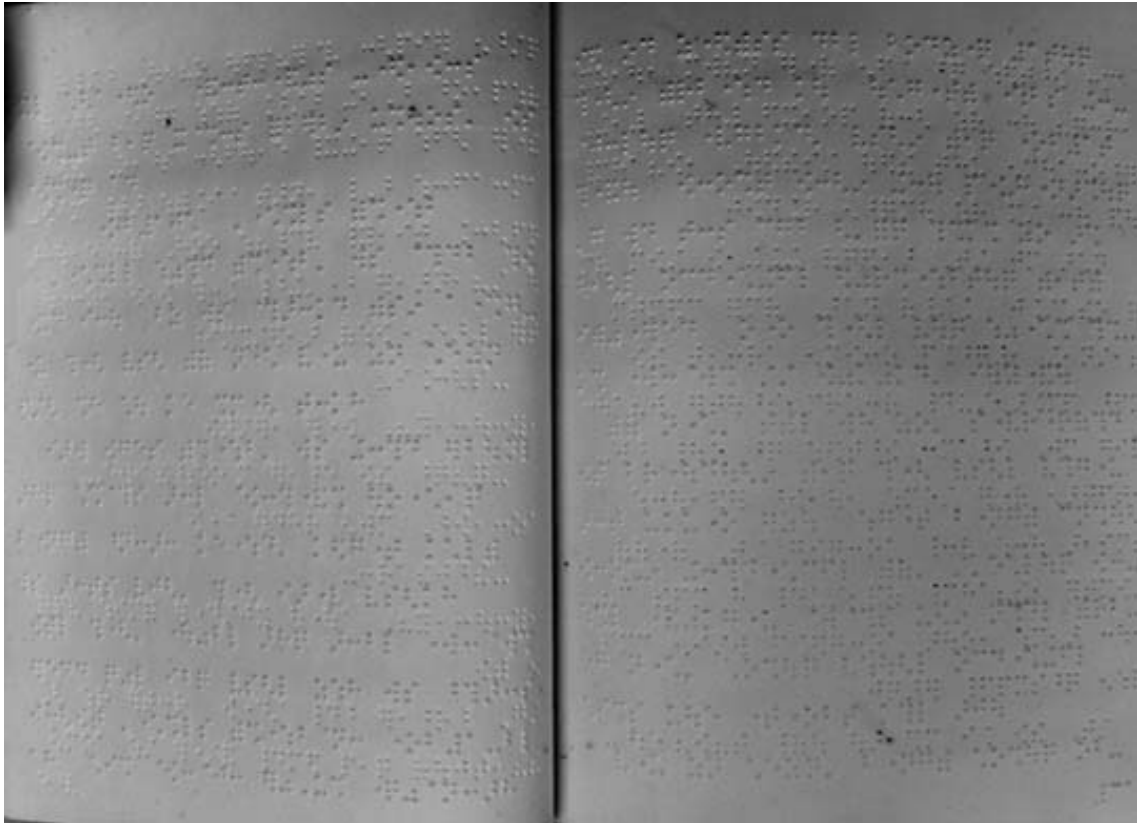
ベーとーべんわ たって でかけた

「せんせい また おいで くださいましょーか」

きょーだいわ くちを そろえて いった

「まいりましょー」

ベーとーべんわ ちよつと ふりかえって めくらの むすめ
を みた
かれわ いそいで いえに かえった そーして その よわ
まんじりとも せず つくえに むかって かの きょくを



ふに かきあげた ベーとーべんの 「げっこーの
きょく」と いった ふきゅーの めいせいを はくしたのわ この
きょくで ある

だい10か わがくにの もくざい

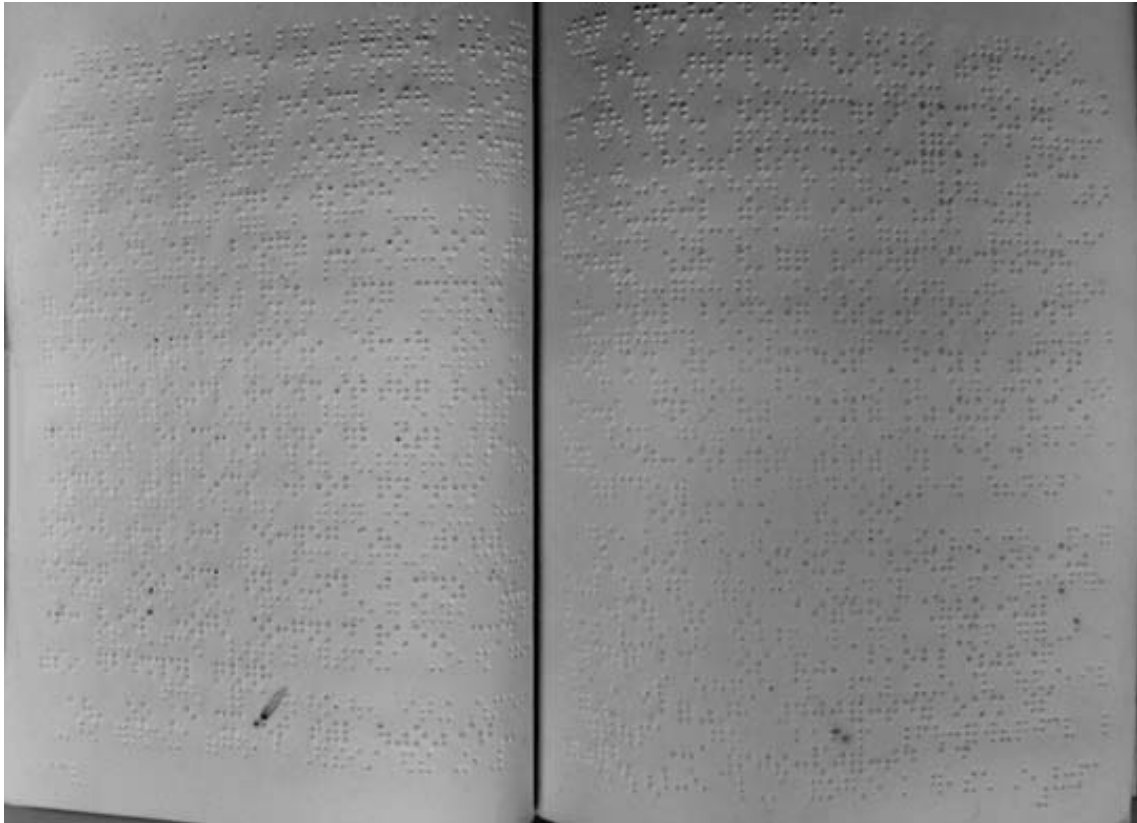
わがくにに さんする もくざいわ その しゅるい すこ
ぶる おーし いま その しゅよーなる ものを あぐれ
ば すぎ ひのき もみ つが ひば まつ からまつ
けやき くり かし なら くぬぎ とーなり

およそ これらの もくざいわ その ゆーする せいしつに
よりて かくしゅの よーに きょーすべく したがって
いづれも ちゅーよー ならざるわ なけれど なかにも
その よーとの ひろきわ すぎ および ひのきなり
ことに すぎわ じんいによりて よーいに ぞーしょく
せらるる てんに おいて ひのきに まさり その じゅよーの
おーきこと わがくにの もくざいちゅー だい11いに
あり かおく きょーりよー せんぱく でんちゅーより

おけ たる まげもの るいに いたるまで 1として
すぎを もちいざる なし しかれども ざいの ゆー
りよーにして ひれなるわ ひのきを もって だい11と
すべし こーたくと こーきを ゆーし ねばりつよくして
われ そる とーの うれい きわめて すくなく また よく
しつきに たうるがゆえに けんちくざいとして もっとも
おもんぜらる ただ すぎに ひして さんがく すく
なく ぞーしょく やや こんなんなるわ おしむべし

もみ つがわ とともに そり またわ のびちぢみする
こと いちぢるしきを もって すぎ ひのきに ひすれば
よーと はなはだ せまし されど いづれも うつくしき
こーたくを ゆーするがうえに もみわ やわらかにして こー
さくに べんなれば しょしゅのはこをつくるに もちい
られ つがわ かたくして ひさしきに たうるがゆえに
かおくの はしら どだいと なすに よるし

ひば まつ からまつわ いづれも かたくして たい



きゅー たいしつ の せい あるを もって けんちく どぼく
ぞーせん とー その よーと すこぶる ひろし ひば
ていこーりよくを ゆーし まつと からまつとわ だんりよくに
とむ とー かく その とくせいを そなえたり

けやき くり かしわ いづれも はなはだ かたく もく
め こまやかなり なかにも けやきわ もくめ うつくしく
みがければ ひれなる こーたくを しよーじ また
くるい すくなきがゆえに そーしょくざいとして ちんちよー
せられ くりわ たいきゅー たいしつ の せい ことに いち
じるしきをもつて かおくの ぞだい てつどーの
まくらぎ とーの よーに きよーせられ かしわ もっとも
かたくして だんりよくに とむがゆえに ろ くるま うん
どー きぐの ごとき きよーれつなる ちからを うくる
ものを せさくするに てきせり

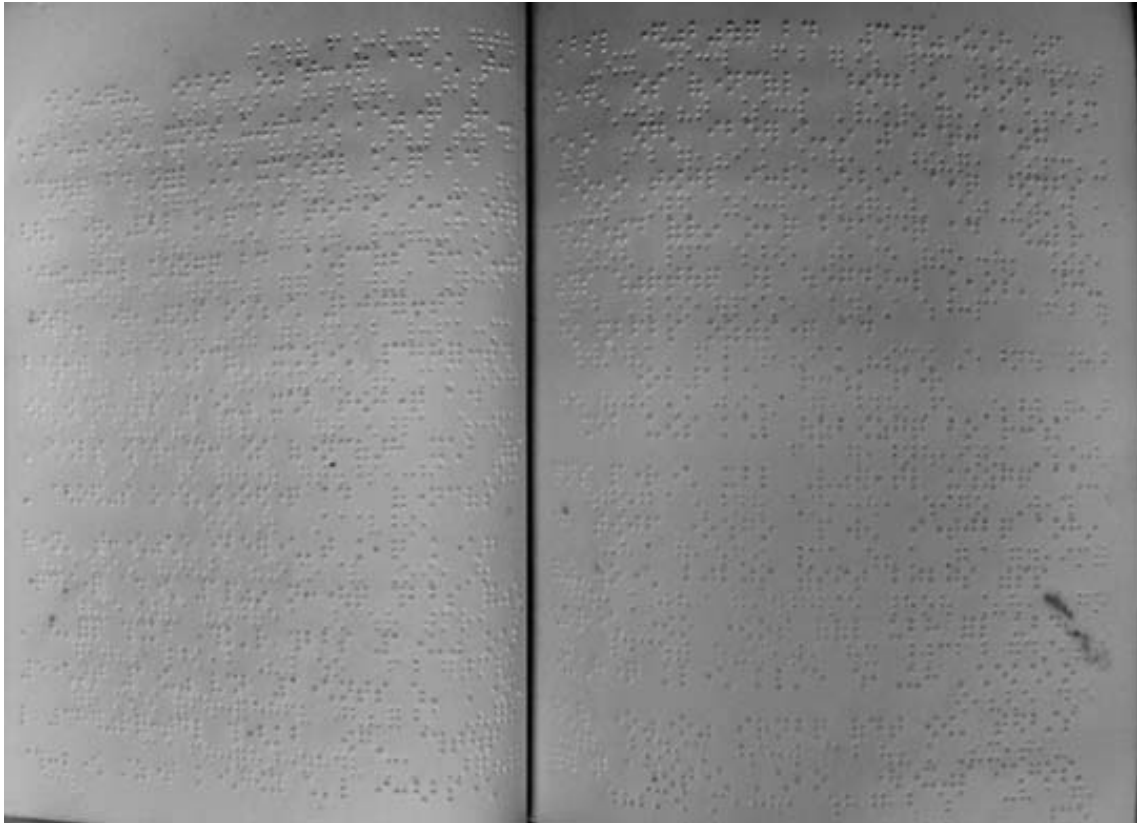
かしわ また なら くぬぎと ともに しんたんざい

として ちゅーよーなる ものなり

すぎわ よしのすぎ あきたすぎを もって だい
1とし ひのきわ きそさんの せいよ たかく きんじ
たいわん ありさんの ひのき また ゆーめいなり ひばわ
つがるはんとーに もっとも おーく さんす まつに
いたりてわ さんち きわめて ひろくして おーうちほーより
きゅーしゅーに いたるまで ほとんど これを みざる
ところ なく その ほーぶなること わがくにの もくざい
ちゅーの しゆいを しむ なかにも なんぶまつ ひうが
まつわ りよーざいとして もっとも よに あらわる

だい11か とわだこ

とわだこわ 1ぶぶん あきたけん かつのぐん
に ぞくし その よわ あおもりけん かみきたぐんに
ぞくして いる この へんわ いったいに さんちで
こめんわ かいめんより 400めーとるも たかく その
めんせきわ やく 60ほーきろめーとる ある

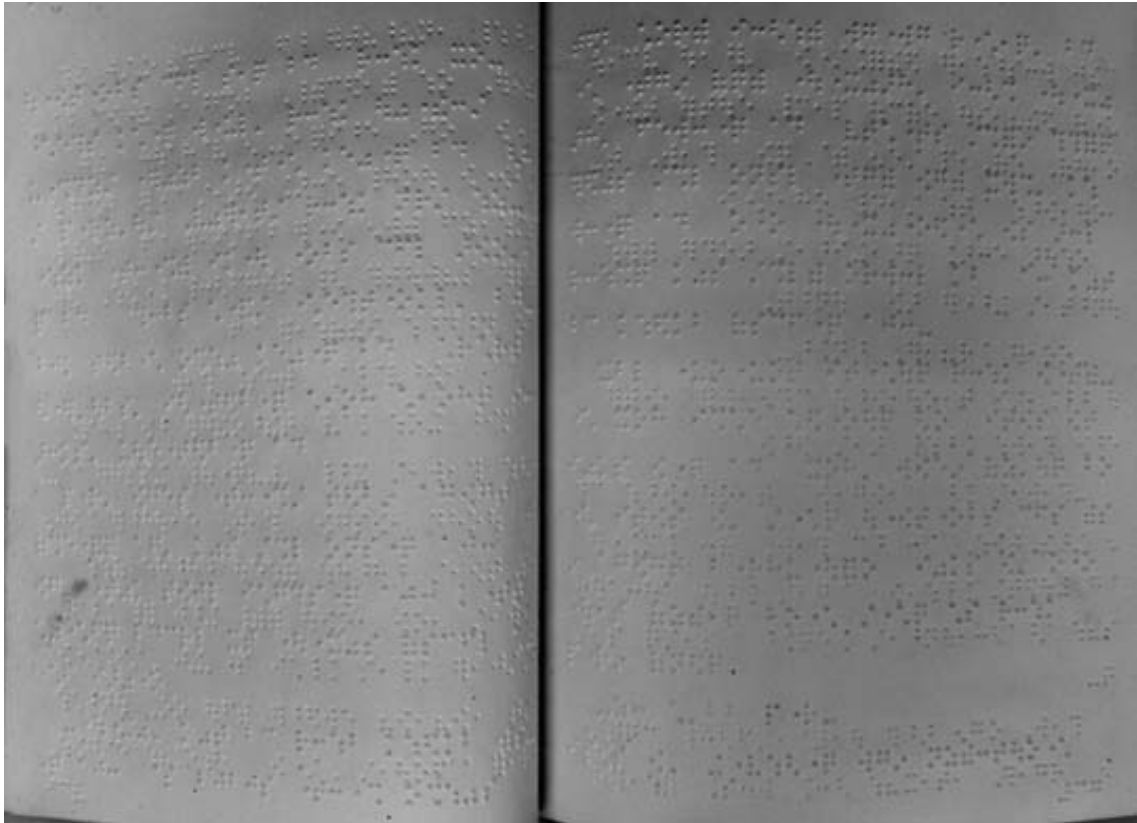


こがんせんわ たいたい たんちよーで あるが とー
なんがんだけわ ふたつの はんとーが ならんで とっ
しゅつして いる ために やや ふくざつに なって いる
きしわ ぜっぺきに なって いる ところが おーく こと
りよーはんとーに はさまれて いる なかのうみの とーがんの
ごときわ ぜっぺきの たかさが 200めーとる
いじよーも ある なかのうみわ ふかさが 378めーとるも
この こちゅーでの 1ばん ふかい ところである
わがくにの こしよーちゅー この みづうみより ふかい もの
わ あきたけんの たざわこだけである みづうみの
みづわ とーがんから おいらせがわと なって なかれ
るので あるが 1ねんを つーじて すいいの へんか
わ きわめて すくない すなわち すいいの 1ばん たかい
5がつと 1ばん ひくい 1がつとの さわ わづか
に 38せんちめーとるに すぎない これわ しゅとして
しゅーいが やまで なかれこむ かわに おーきいのが

ないのに げんいんして いる 30ねんばかり まえ
までわ この みづうみにわぎよるいがか まったく いな
かった これわ おいらせがわを 10ちよー あまり
くだった ところに おーきな たきが あって ぎよるいの
さかのぼる みちを たって いるからである こんにち
ますの さんちとして よに しられるよーに なったのわ よー
ぎよ けいえいの たまものである

たい12か ちーさな ねぢ

くらいはこの なかに しまいにまれて いた ちーさな
てつの ねぢが ふいに びんせつとに はさまれて あか
るい ところえ だされた ねぢわ おどろいて あたりを
みまわしたが いろいろの ものおと いろいろの ものの
かたちか ごた ごたと みみこ はいり めに はいる
ばかりで なにか なにやら さっぱり わからなかった
しかし だんだん おちついて みると こわ とけいへの
みせであることが わかった じぶんの おかれたのわ



しごとだいの うえに のって いる ちーさな ふた
がらすの なかで そばにわ ちーさな しんぼーや
はぐるまや ぜんまい などが ならんで いる きり
や ねじまわしや びんせつとや ちーさな つちや さま
ざまな どーぐも おなじ だいの うえに よこたわっ
ている しゅーいの かべや がらすとだなにわ いる
いるな とけいが たくさん ならんで いる かちかちと
きぜわしいのわ おきどけいで かったり かったりと おー
よーなのわ はしらどけいで ある

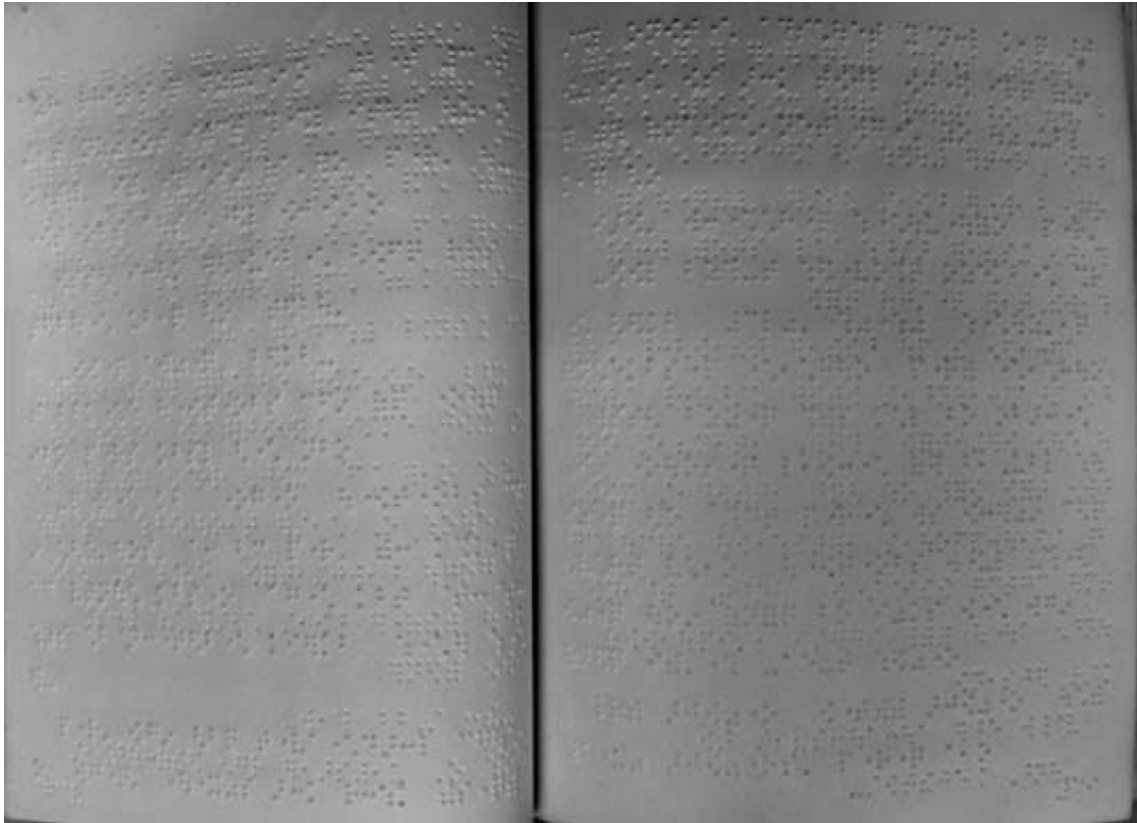
ねぢわ これらの どーぐや とけいを あれこれと
みくらべて あれわ なんの やくに たつので あるー
これわ どんな ところにおかれるので あるー などと
かんがえて いるうちに ふと じぶんの みのうえに かん
がえおよんだ

「じぶんわ なんと いう ちーさい なさけない もの
で あるー あの いろいろの どーぐ たくさん

とけい かたちも おーきさも それぞれ ちがってわ いる
が どれを みても じぶんよりわ おーきく じぶん
よりわ えらそーで ある ひとかどの やくめを すずめて
せけんの やくに たつのに どれも これも ふそくわ なさ
そーで ある まだ じぶんだけが この よーに
ちーさくて なんの やくにも たちそーに ない あー なんと
いう なさけない みのうえで あるー」

ふいに ばたばたと おとがして ちーさな こども
が ふたり おくから かけたして きた おとこの こと
おんなの こで ある ふたりわ そこらを みまわして いた
が おとこの こわ やがて しごとだいの うえの もの
を あれこれと いぢりはじめた おんなの こわ ただ
じつと みまもって いたが やがて かの ちーさな
ねぢを みつけて

「まー かやれい ねぢ」
おとこの こわ ゆびさきで それを つまもーとしたが



あまり ちーさいので つまめなかった 2ど 3ど
やっと つまんだと おもうと すくに おとして しまった
こどもわ おもわず かおを みあわせた ねぢわ し
ごたいの あしの かげに ころがった

このとき おーきな せきばらいが きこえて ちちの
とけいしが はいって きた とけいしわ

「ここで あそんでわ いけない」
と いいながら しごたいの うえを みて だして
おいた ねぢの ないのに きが ついた

「ねぢが ない だれだ しごたいの
を かきまわしたのわ あー いう ねぢわ もー なくなって
あれ ひとつしか ないのだ あれが ないと ちょーちょー
さんの かいちゅーどけいしが なおせない さがせ さが
せ」

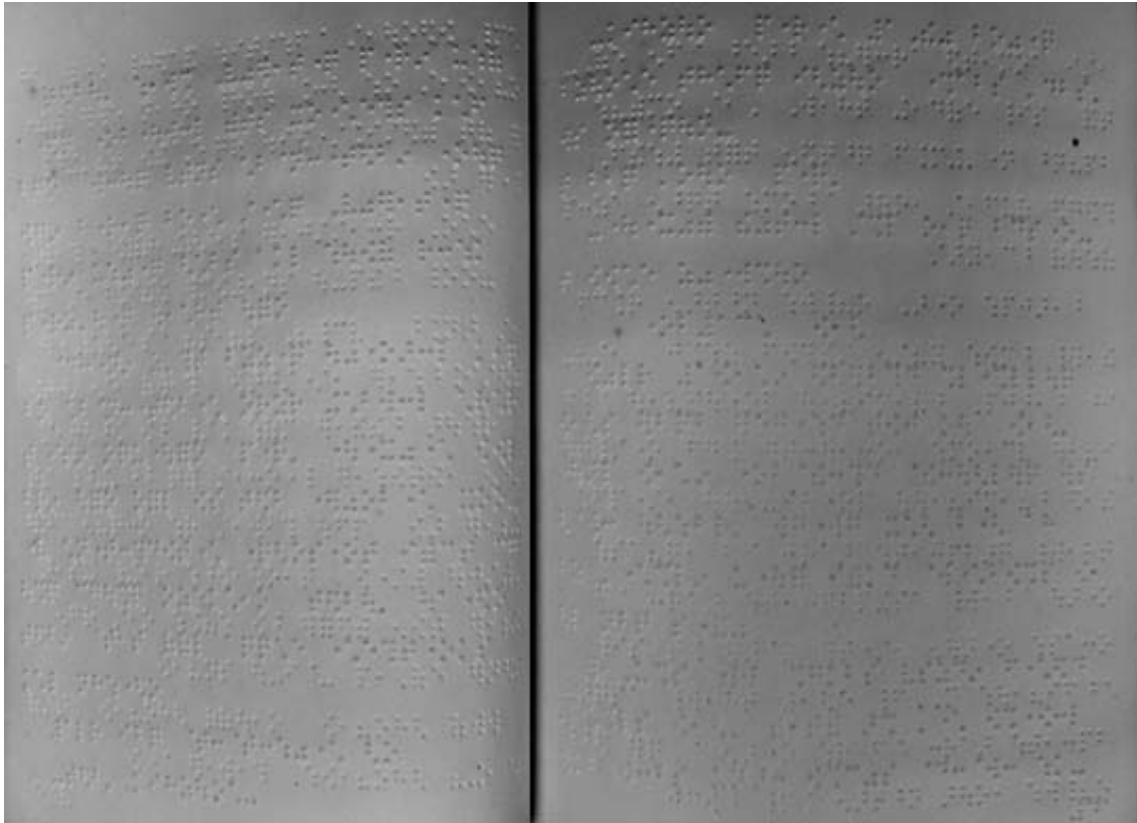
ねぢわ これを きいて とびあがるよーに うれしかっ
た それでわ じぶんの よーな ちーさな ものでも

やくに たつことが あるのかしらと むちゅーに なって よろ
こんだが この よーな ところに ころげ おちて しまっ
て もし みつからなかったらと それが また しんぱいに
なって きた

おやこわ そーがかりで さがしはじめた ねぢわ
ここに います」と さげびたくて たまらないか くち
が きけない 3にんわ さんざん さがしまわって
みつからないので がっかりした ねぢも がっかりした

そのとき いままで くもの なかに いた たいよーが
かおを だしたので にっこーが みせ いっぱいに さし
こんで きた すると ねぢが その こーせんを うけて
びかりと ひかった しごたいの そばに ぶさぎ
こんで したを みつめて いた おんなの こが それを
みつけて おもわず 「あら」と さげんだ

ちちも よろこんだ こどもも よろこんだ しかも
1ばん よろこんだのわ ねぢで あった



とけいしわ さっそく びんせつとで ねぢを はさみ
あげて たいじそーに もとの ふたがらすの なかえ
いれた そーして ひとつの かいちゅーどけいを だして
それを いぢって いたが やがて びんせつとで
ねぢを はさんで きかいの あなに さしこみ ちーさな
ねぢまわして しっかりと しめた

りゅーづを まわすと いままで しんだよーに なって
いた かいちゅーどけいが たちまち ゆかいそーに かちかち
と おとを たてはじめた ねぢわ じぶんが ここに
いちをしめた ために この とけい ぜんたいが ふたた
び かつどーすることが できたのだと おもうと うれ
しくて うれしくて たまらなかつた とけいしわ しあげた
どけいを ちょっと みみに あててから がらすとだなの
なかに つりさげた

1にち おいて ちょーちょーさんが きた
「どけいわ なおりましたか」

「なおりました ねぢが 1ぼん いたんで
いましたから とりかえて おきました くあいの わるいのわ
その ためでした」

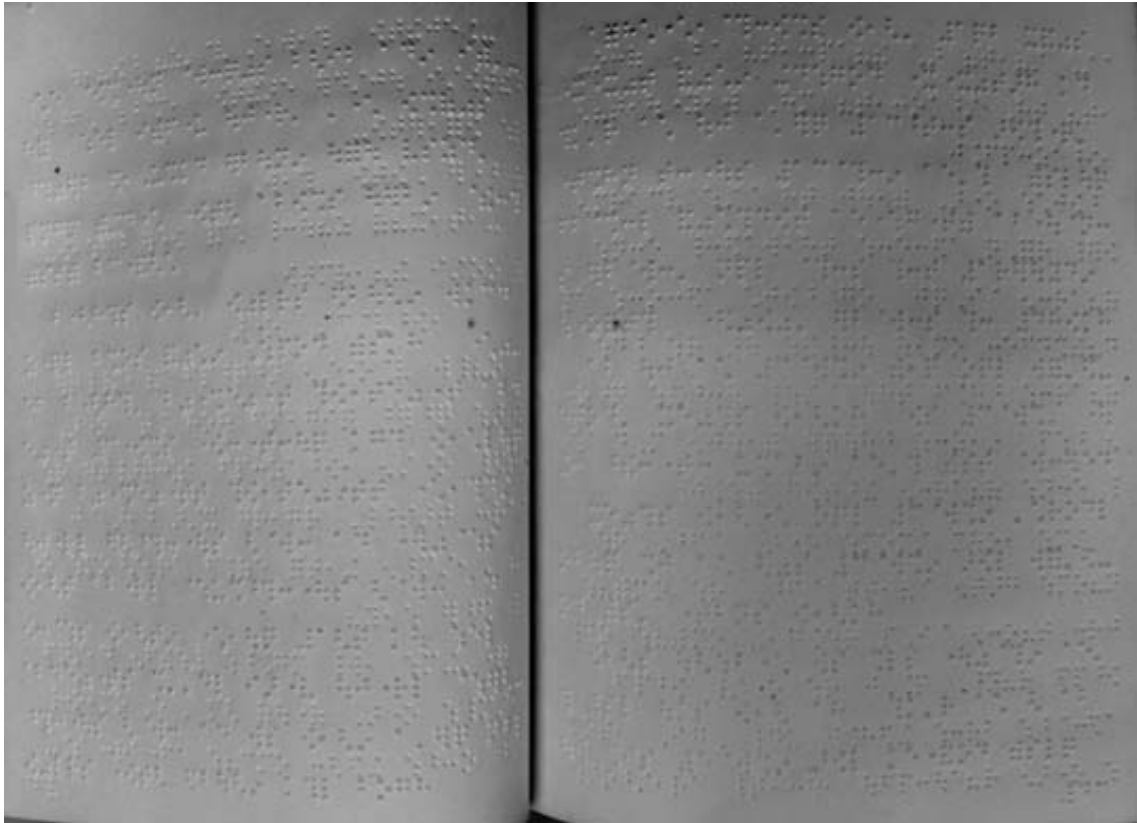
と いった わたした ねぢわ

「じぶんも ほんとーに やくに たって いるのだ」
と ここから まんぞくした

だい13か こつき

こんにち 1こつかを けいせいする くにくににして
こつきの せいせい せられざる ところ なし こつきわ
じつに こつかを だいひょーする ひょーしきにして その
きしょー しきさいにわ それぞれ ふかき いぎ あり
いま わがくにを はじめ おもなる しょうにくの こっ
きについて のべん

せっぱくの ぢに くれないの ひのまるを えがける
わがくにの こつきわ もっとも よく わが こくごーに
かない こーいの はつよー こくうんの りゅーしょー さな



がら きょくじつ しょーせんの いきおい あるを おもわ
しむ さらに おもえば しろぢわ わが こくみんの
じゅんせい けっぱくなる せいしつを しめし ひのまるわ
ねつれつ もゆるが ごとき あいにくの しせいを ひょーす
ものとも いうべきか

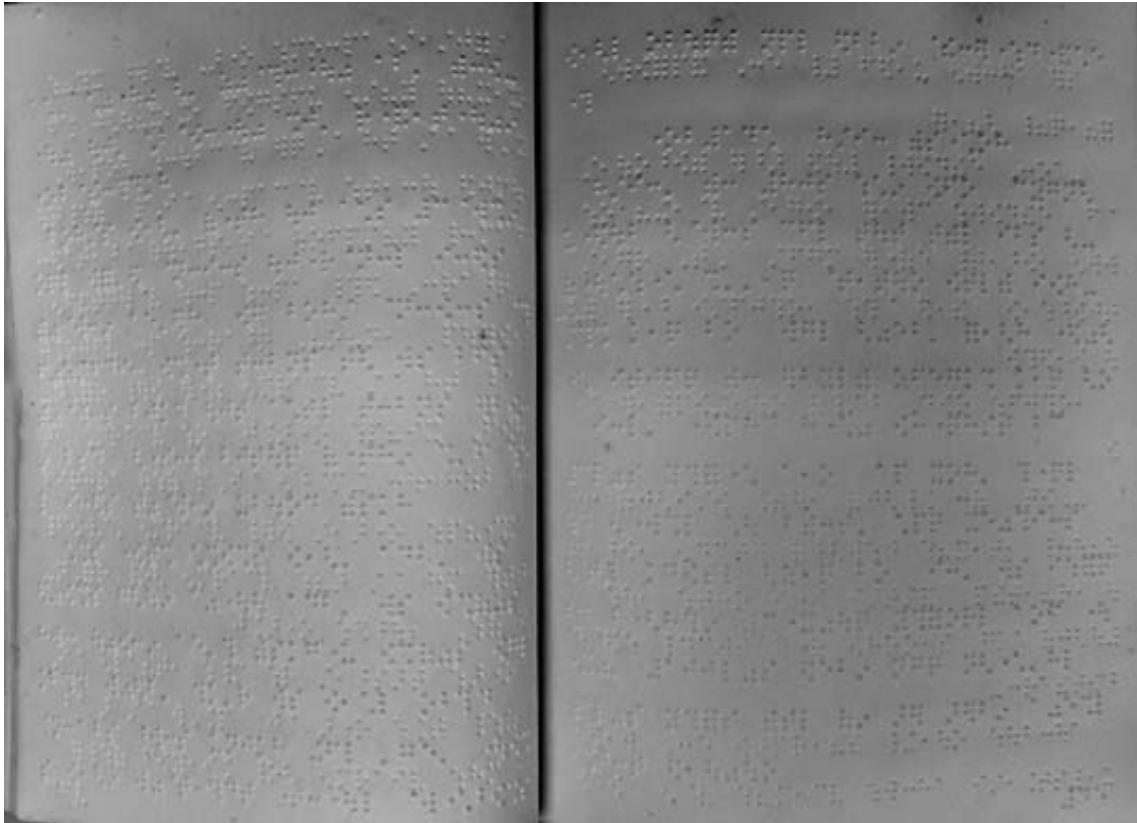
いぎりすの こっきわ こんにちの けいしきを そなうる
までに いくたの へんかを かさねたる ものなり
らい いぎりすわ いんぐらんど すこつとらんど あいる
らんど 3ごくの ごーどーして なるる こっかにして
まづ いんぐらんどとすこつとらんどと がつするや
しろぢに せきじゅーじの きしょー ある ぜんしゃの
こっきと あいぢに しゃはくじゅーじの きしょー ある
こーしゃの こっきとを がつして 1きと なし さらに
あいるらんどの くわわるに および しろぢに しゃせき
じゅーじの きしょー あるその こっきを あわせて ついに
こんにちの ごとき けいしきを なすに いたれり

あめりかがつしゅーこくの こっきわ 1てい ぶへんの
ぶぶんと へんかを ゆるされたる ぶぶんとより なる
すなわち あか しろ あわせて 13ぢよーの よこすぢわ
どくりつ とーじの 13しゅーを あらわす ものにして
えいきゅーに へんかすること あらざれども あいぢちゅー
の せいしよーわ つねに しゅーの すーと 1ちせしむるを
さだめとす げんこんわ せいしよーの すー 48こなり

あい しろ あか 3しよくを もって たてに そめわけ
られたるわ ぶらんすの こっきなり この 3しよくわ じ
ゅー びよーどー はくあいを あらわす ものと しょーせらる

ぶらんすの こっきが たてに 3しよくを わかちたるに
たいして くる あか きんの 3しよくを よこに そめわけ
たる ものわ どれだけの こっきなり

こっきの しきさいが その くにの じんしゅを あらわ
す ものも しなの こっき あり すなわち あか き あい
しろ くるの 5しよくを よこに ならべたる ものにて



あかわ かんじん きわ まんしゅーじん あいゆ もーこ
じん しろわ かいきょーじん くらわ ちべつとじんを
たいひょーするなり

いたりやの こっきわ みどり しろ あかの 3しよくを
たてに そめわけ ちゅーおーの しろぢちゅーに おーけの
もんしよーを あらわせり これ いたりや ちゅーこーの
えんまぬえるおー こくど とーいつの とき その いえの
もんしよーの いろなる しろと あかとに とーいつ せいにー
を いのる きぼーの いろとして みどりを くわえ さら
に おーけの もんしよーを はいしたる ものなり

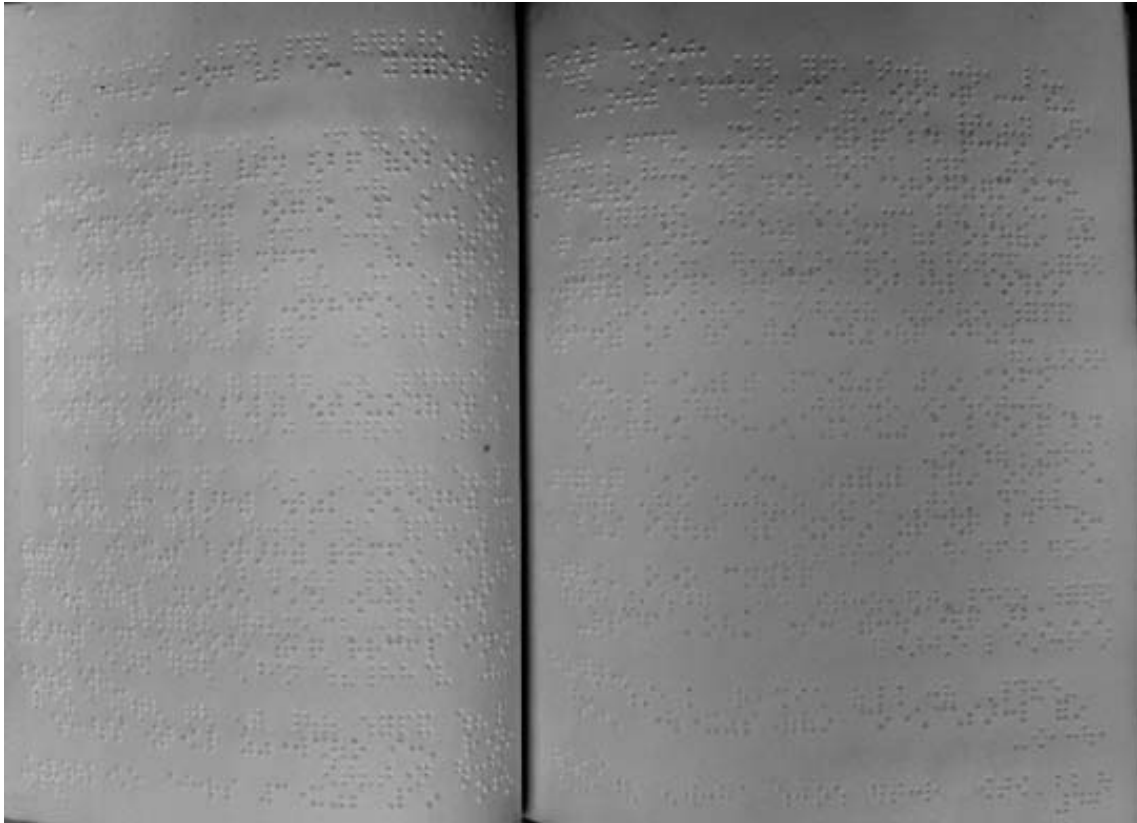
かくの ごく かくこくの こっきわ あるいゆ その
けんこくの れきしを あんじし あるいゆ その こくみんの
りそー しんこーを あらわす ものなれば こくみんの これに
たいする そんけいゆ すなわち その こっかに たいする
ちゅーあいの じょーのはつろなり ゆえに われらわ じこく
の こっきを そんちよーすると どーじに しょうかいにくの

こっきに たいしても つねに けいれいを ひょーせざるべから
ず

たい14か りやおー ものがたり

りやおーわ もー 80の さかを こえた うまれつき
はげしい きしよーの うえに としと ともに おいの き
みじかさか くわわって ちよつとした ことにも おこり
やすくなっていた それに きんらいゆ めつきり げんき
が おとろえて もー せいむにも たえられなくなってきた

おーにわ ごねりる りがん こーでりやと いう
3にんの むすめが あった あね ふたりわ すでに
さる きぞくに かし いもーとわ かねて ぶんすおーの
きさきになることに きまっていた おーわ その おさめて
いる いざりすを 3ぶんして むすめたちに あたえ じ
ぶんわ 100にんの けらいをつれて つきがわりに
3にんの むすめのもとに みを よせ よせいを あんらくに
おくるーと けっしんした



さて りよーちを ゆづる ひに おーわ むすめたちを
めんぜんに よんで

「きょーわ おまえたちに ひとつ きいて みたいことが
ある おまえたちの うちで だれが 1ばん この
ちちを だいに おもってくれるか わしわ それが
しりたいのだ まづ あねの ごねりるから いって みよ」
と たづねた

ごねりるの こたえわ いかにも ことばたくみで あっ
た

「わたしわ もー なによりも どんな たからよりも --
ほんとーに じぶんの いのちよりも ちちうえを だいに
と ぞんじます むかしから あった こーしきの どの
ひとよりも あつい まごころを もって ちちうえに おつかえ
いたしましよー」

ちよーぢよの ことばに まんぞくした おーわ ちづを
ゆびさしながら りよーちの 3ぶんの 1を あたえた

つぎに りがんわ

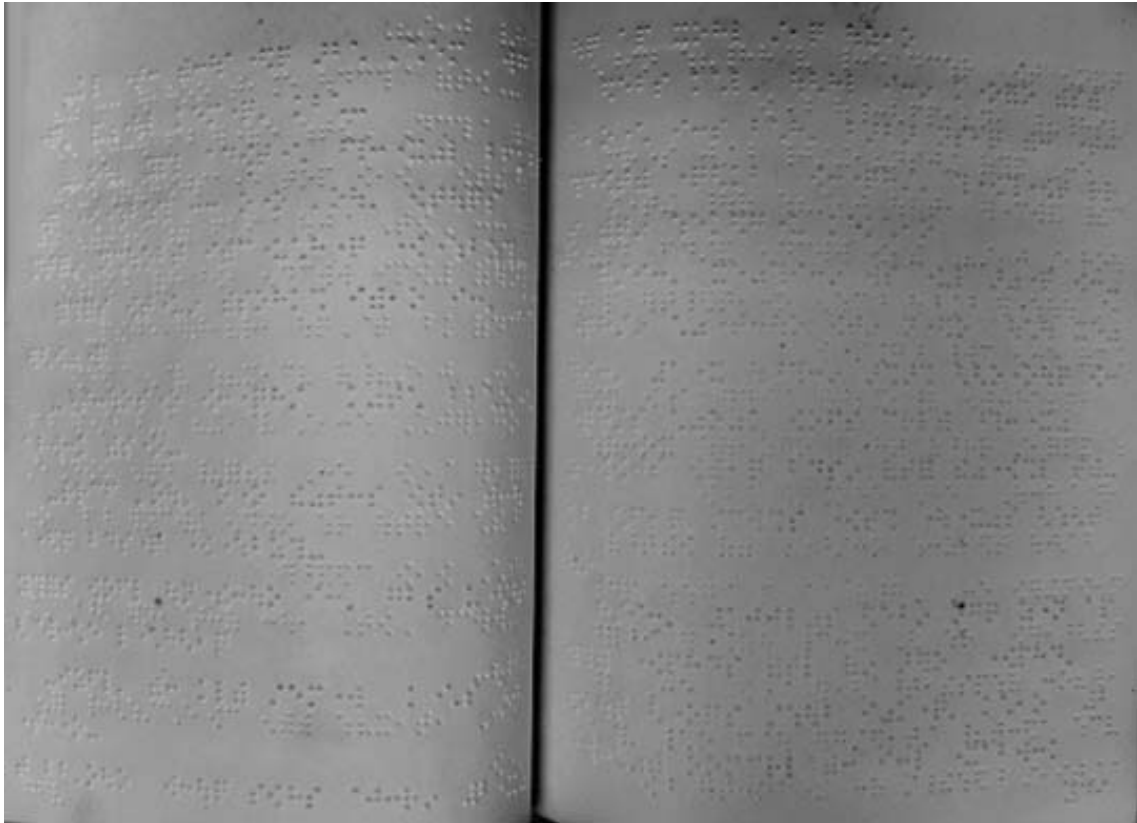
「わたしも あねうえと おなじ ところで -- ほん
とーに あねうえわ わたしの おもっている とーりを おっ
しゃいました ただ すこし おっしゃりたりませぬばかり
で -- わたしわ ありと あらゆる みの たのしみを しり
ぞけても ひたすら ちちうえを だいに いたすのを
このうえも ない しあわせと ぞんじて おります」

おーわ りがんにも 3ぶんの 1を あたえた

こーでりやわ おーが 1ばん かわいがっている
むすめで あった おーわ まんめんに えみを たたえなが
ら いまや おそしと その こたえを まちうけている こー
でりやわ ただ うつむいて

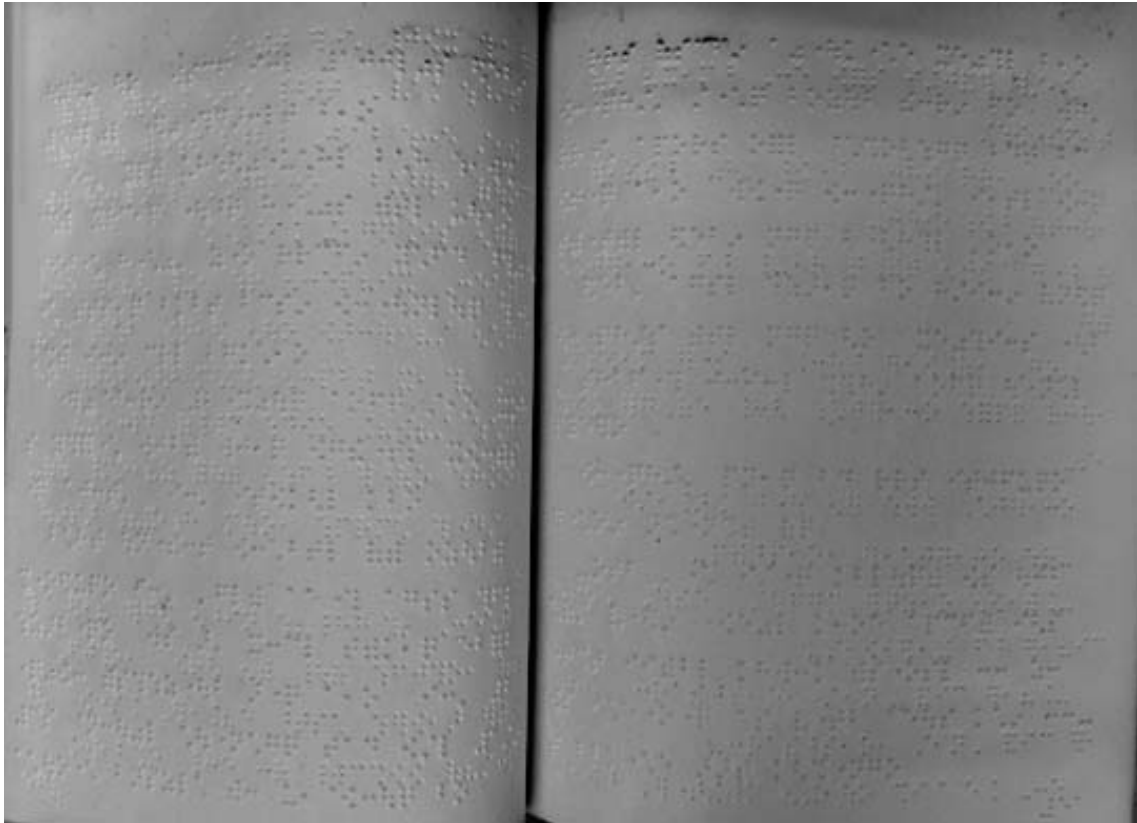
「ちちうえ わたしわ どー もーしあげて よいか わか
りません」

おーわ じぶんの みみを うたがうかのよーに めを
みはった



「なに どー もーしあげて よいか わからぬ それ
でわ へんじに ならぬでわ ないか」
「わたしわ むねに あることが じゅーぶんい いえないの
で ございます ただ わたしわ こととしての
つとめをつくしたいと おもっばかりで ございます」
むすめの ことばを ものたりなく おもった おーわ やや
せきこんで
「どーしたのだ こーでりや なんとか いいかたが
ありそーな ものだ」
「ちちうえ わたしわ ただ ほんとーの ことを もーし
あげて いるので ございます」
むすめの こたえに しつぽーした おーわ れいの はずしい
きしょーから にがりきって
「おまえにわ もー なにも やらぬぞ ながの かん
どーだ
と いわわたした そーして のこりの りよーちを 2ぶん

して あね ふたりに やって しまった
けらいの なかにわ しきりに おーを なだめた ものも
あったが おーの しかりわ いやいよ つのって もー どー
することも できない こーでりやわ すごごと ちち
の もとを さらなければ ならなかった
りやおーわ ふらんすおーを その ばに よんで こー
でりやを かんどーした ことを つげた しかし ふらん
すおーわ 1ぶ しじゅーを よくよく ききただして こー
でりやの かんたんな こたえの うちにも じゅーぶん
まごころの こもって いるのを みとめ ほんごくに とも
ない かえって やくそくの ごとく じぶんの きさきと
した
りやおーわ 100にんの けらいをつれて まづ あね
むすめ ごねりるの もとに みを よせた ごねりるわ
けっして きだての やさしい おんなでわ なかった 2
しゅーかんも たたぬうちに もー おーに ぶあいそーな



しむけをした そのうえ おーに 100にんの けらいを
50にんに げんずるよーにと いった

おーわ むねも はりさけんばかりに いかり さっそく
うまに むちうって じぢょ りがんの もとに はした
ところが りがんわ まだ ちちうえを むかえる じゅんび
が ととのって いないと いうのを こーじつにして すげ
なくも おーを うちに いれなかった

ぜんりょーちを 2ぶんして あたえて やった ふたりの
むすめが そろいも そろって これほどの ふこーもの
で あるーとわ おーわ おとこなきに ないた

いかりと しつぽーと こーかいとに みも たましいも
くだけはてた おーわ われにも あらず あれのの すえに
さまよいでた その よわ ふーうに ともなつて らいめい
でんこー ものすさまじい よで あった おーわ 2
3の ちゅーしに かしづかれて とある こやに 1やを
あかしたが いつのまにか もー はつきょーして いた

ちちの みのうえを あんじながら ぶんすに いった

こーでりやわ やがて いたましい ほーちを えた それわ
ちちが あねたちの ために ぎゃくたいされて いると いう
ことで あった そこで こーでりやわ おつとに こーて
ともどもに けらいをつれて いざりすに わたった

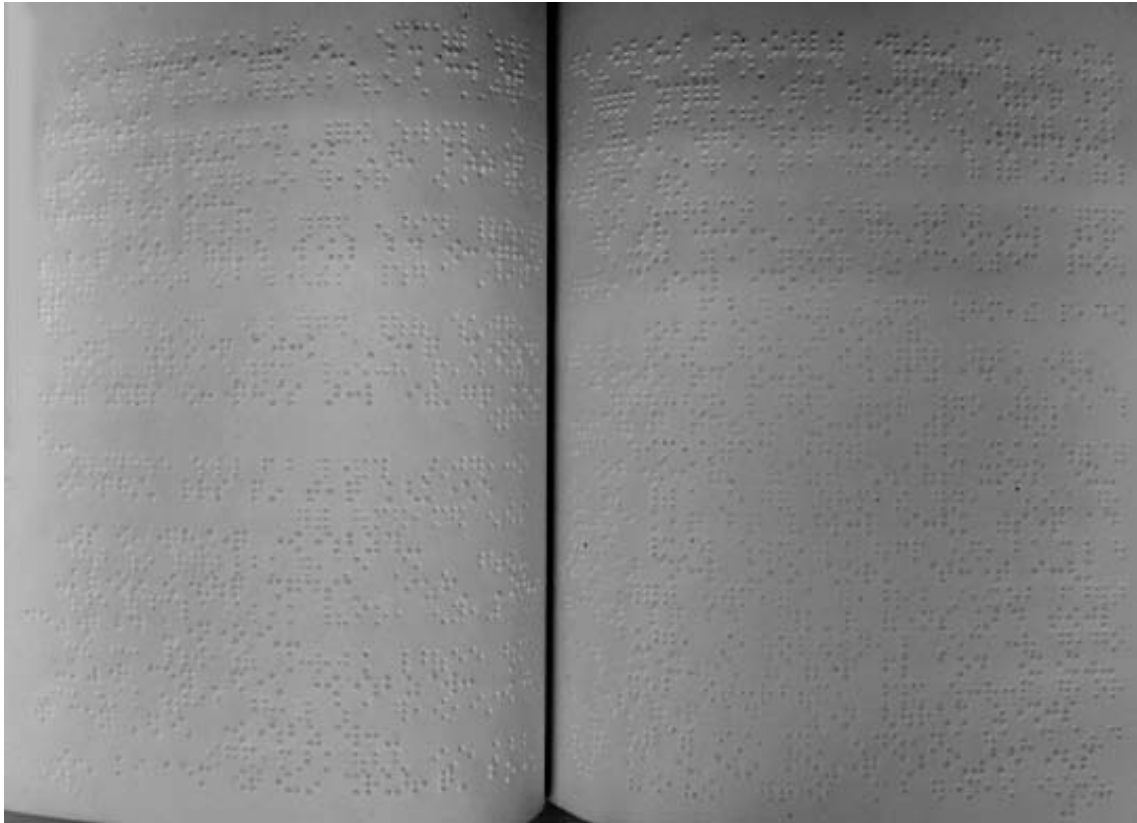
けらいわ あれのに さまよって いた りやおーを みつ
けて

こーでりやの もとに つれて きた ぶんすおーの しい
わ とりあえず るーおーに くすりを あたえて しづかに
ねむらせた

こーでりやわ ねむっている ちちの おとろえはてた
すがたをつくづくと みて

「たとい わが おやで ないにしても この しろい
かみや ひげを ごらんになったら あねうえも おきの
どくと おおもいになりそーな ものだのに - - まー
この おからだで あの ひどい あらしの なかを - -
と いいながら よよと なきくづれた

5 1



やがて ねむりから さめた おーわ いくぶん きも
しづまったのか

「ここわ どそだろー いったい わしわ いままで
どーして いたのだろー」

と いった あたりを みまわし そばに いる こーでりやを
みて

「これわ どなたで あるーな わらって くださるな
どーも むすめの こーでりやの よーに おもわれて ならぬ
が」

こーでりやわ ちちの てを とって なきながら

「その こーでりやで ございます」

「なみだを こぼして くれるのか おまえわ わたしを
うらんで いる はづだが」

「なんで うらむ わけが ございませよー なん
で うらむ わけが ございませよー」

おーわ なお あらぬ ことばを くちはしてわ いたが

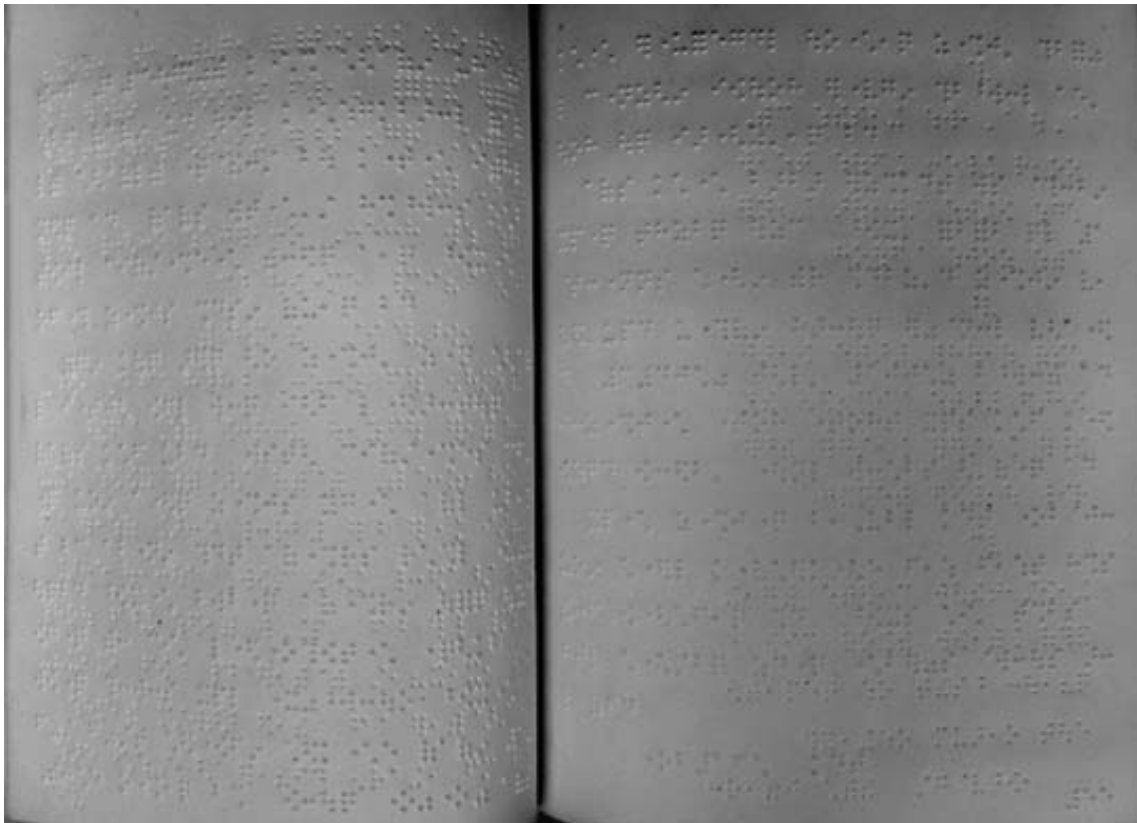
その ことばの はしばしにも ぜんひを くい じぶん
を せめて むすめに わびる まごころが こもって いた
こーでりやわ それを きいて はらわたを ちぎられるよーな
おもいが した

その のち るーおーわ こーでりやの こーよーに よって
よせいを あんらくに おくつたという

だい115か まぐろあみ

まぐろを とる ぼーぼーわ いろいろ あるが だい
ぼーあみで とるほど ゆーそーな ものわ あるまい

だいぼーあみわ みあみと かきあみと ぶたつの ぶ
ぶんから なって いて ひじょーに おーきな もので ある
これを かいちゆーに はった かたちをちょーど おーきな
ひしゃくに にて いる すなわち みづの はいる ところに
あたる ぶぶんが みあみで えに あたる ぶぶん
が かきあみで ある まづ きしちかく まぐろの
よって くる ばしよを えらんで かいがんから おきの



ほーえ 2300けんも ながく かきあみを はり その
さきえ みあみを はる しおに ながされないよーに みあみ
にも かきあみにも どひよーや いし などが おもりに
つけて ある みあみの そとがわや りくじょーの たかい
ところに うおみやぐらが もーけて あって ぎよぶが
たえず まぐるの くるのを みはっている

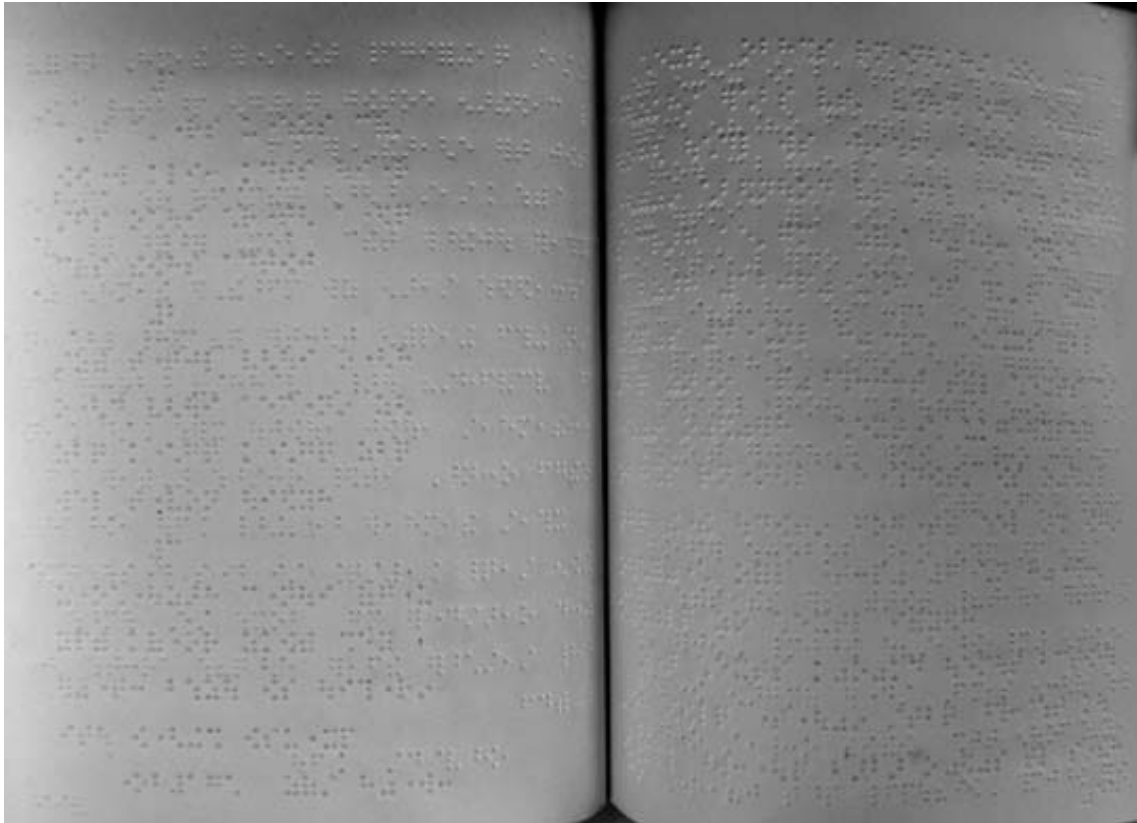
むれを なして よせて きた まぐるわ まづ かきあみ
に おどろき これに そーて おきえ にげよーとして
みあみの なかえ はいる このとき うおみやぐらの うえ
ではたを あげて まぐるの むれが あみにはいった
という あいづを すると あみぐちの ちかくに ばんを
している ぎよぶが いそいで あみぐちを しめて しまう
これで もー うおわ にげだすことが できない
そこで すーそーの ふねに ふんじょーした ぎよぶが
えんや えんやと かけごえを かけながら みあみを 1
ぼーから たぐって いく こーして だんだん あみの

ながか せばめられるに したがって まぐるわ すいめん
に うづまきを おこしたり せびれを すいじょーに あらわ
したり して およぎまわっている

あみの なかか いはいよ せまくなると その しゅーいを
ふねで とりまいて しまう ぎよぶわ めいめいてに 1
ちよーづつの かぎを もち くるいまわる まぐるを ひっ
かけ はねる はずみを りよーして せんちゅーに ひきあげ
る 340かん ときにわ 100かん いじょーも ある
おーまぐるが ひとり ひとりと ふねの なかえ なげ
こまれる こーけいわ じつに そーかいの きわみである

ふねが まぐるで いっぱいになると だいいよー
はたを かぜに なびかせながら えっさ えっさと りくの
ほーえ こぎかえって くる ぎよぶの かおわ とくいの
いろに かがやいて まるで がいせんの しょーしの よー
に みえる

だい116か なんと



1

あわと あわぢの はざまの うみわ
ここぞ なにおー なるとの しおぢ
やえの たかしお かちどき あげて
うみの ほこりの あるところ

2

やまも とどろに ひきしお たぎり
たぎる ひきしお あらうづを まき
まいて ながれて ながれて まいて
そらに とびたつ しおけむり

3

はだかじまより うづしお みれば
むねも なみだち まなこも くらむ
せんどー いまし この しすぢを
おとしこぎゆく このはぶね

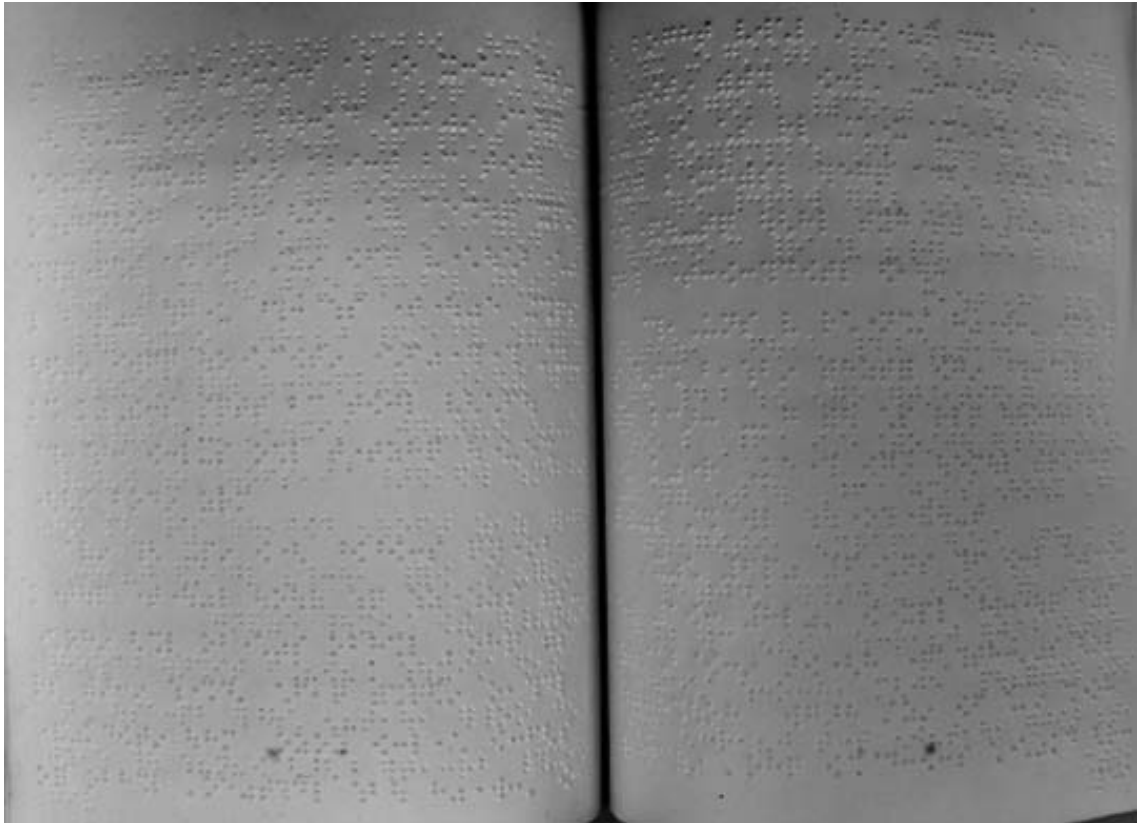
だい17か まみや りんぞー

からふとわ たいりくの ちつづきなりや またわ はなれ
じまなりや せかいの ひとわ ひさしく これを ぎもんと
したり しかるに その じっさいを ちょーさして この
ぎもんを かいけつしたる ひと ついに わが にほんじん
の うちより あらわれぬ まみや りんぞー これなり

いまより 120ねんばかり まえ すなわち ぶんか
5ねんの 4がつに りんぞーわ ばくふの めいに
よって まつだ でんじゅーろーと ともに からふとの かい
がんを たんけんせり からふとが はなれじまにして
たいりくの ちつづきに あらざるこわ この たんけん
によりて ほぼ することを えたれども さらに よく これを
たしかめんが ために どーねん 7がつ りんぞーわ
たんしんにて また からふとに おもむけり

まづ からふとの なんとんなる しらぬしと いうところに
わたり ここにて どじんを やといて じゅーしゃと なし
こぶねに じょーじて いよいよ たんけんの とに のぼり

57



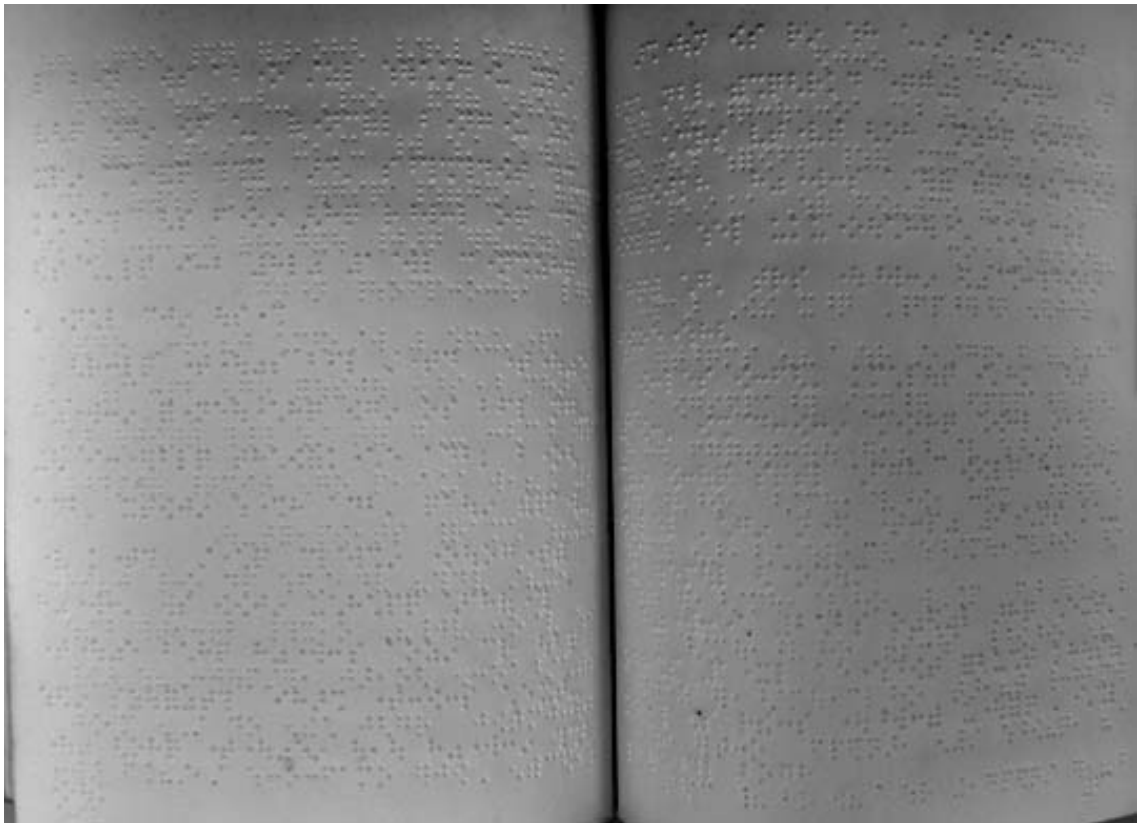
ぬ それより 1ねんばかりの あいだ ぶーはを しの
ぎ きかんと たたかい ひじょーなる こんなんを おかして
からぶとの ほくたんに ちかき なにおーと いう ところに
たどりつきたり これより きたわ なみ あらくして ぶねを
すすむべくも あらず やまを こえて ひがしかいがん
に いでんと すれば じゅーしゃの どじんら ゆくての
きけんを おそれて したがうことを がえんぜず やむ
なく なんぼーの のてとと いう ところに ひきかえし
しゅーちょー こーにの たくに とどまりて しばらく
じきの いたるを まちぬ

あみを すき ぶねを こぎ ぎよぎよーの てつたい
などして どじんに したしみ さて さまざまの もの
がたりを きくに たいがんの たいりくに わたりて その
ちの もよーを さぐるわ かえって もくてきを たつするに
べんなることを しりぬ たまたま こーにが こーえきの
ため たいりくに わたらんとするに さいし りんぞーわ こー

き いたれりと ひそかに よろこびて せつに おのれを とも
なわんことを もとむ こーにわ 「よーぼーの ことなる
なんぢが かの ちに ゆかば かならずや ひとに あや
しまれ なぶりものに せられて あるいゆ いのちも あやう
かるべし」とて しきりに とむれども りんぞー きかず
ついに どーこーすることに けっせり

しゅっぱつの ひ ちかづくや りんぞーわ これまで
の きろく いっさいを とりまとめ これを じゅーしゃに わた
して いうよー 「われ もし かの ちにて したたりと きか
ば なんぢ かならず これを しらぬしに もちかえりて
にほんの やくしよに さしだすべし」と

ぶんか6ねん 6がつの すえ こーに りんぞー
らの 1こー 8にんわ こぶねに じょーじて いまの
まみやかいきよーを よこぎり でかすとリーわんの きたに
じょーりくしたり それより やまを こえ かわを くだり
みづうみを わたりて こくりゆーこーの かがんなる きちー



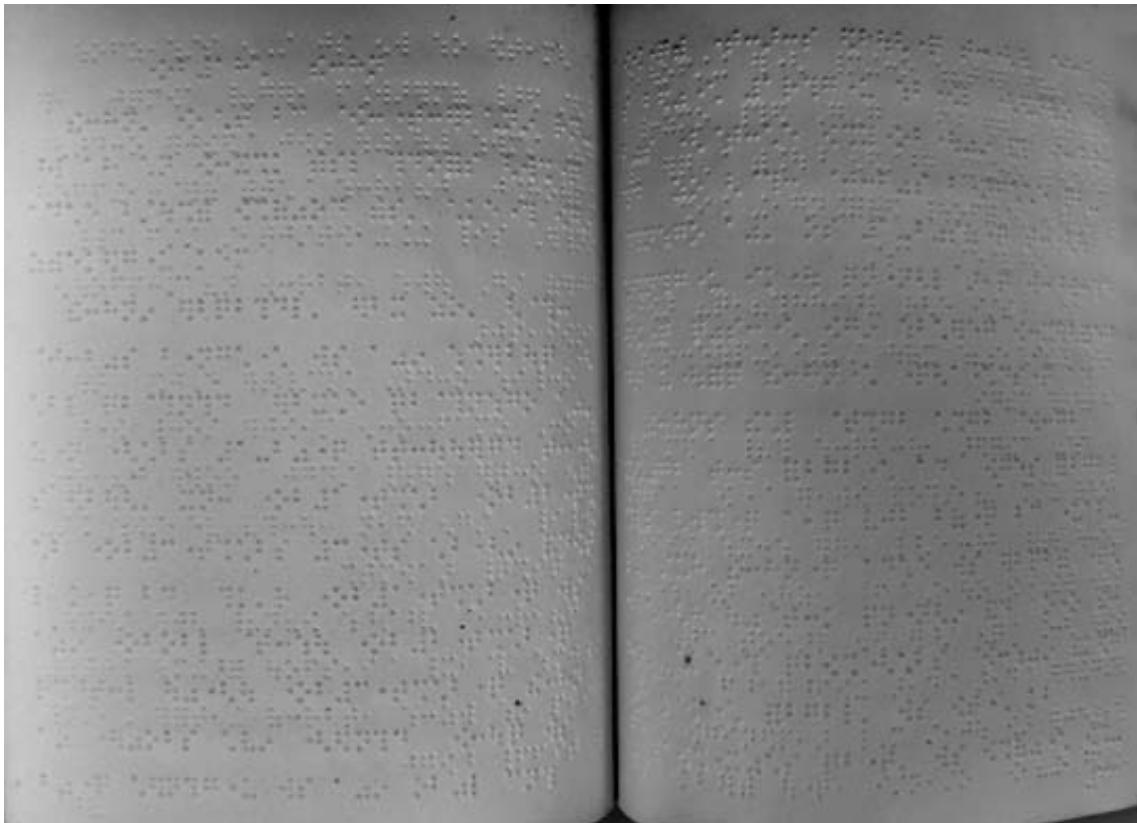
に いづ その あいだ やまに さしかかれば ぶねを
ひきて これを こえ かわ みづうみに いづれば また
ぶねを うかべて すすむ よるわ のじゆくすること すく
なからず きの えだを きりて ちじょーに たて うえを
きの かわにて おーい 8にん 1しよに うづくまりて
わづかに うろを しのぐ

きちーにて どじんの いえに やどる どじんら
りんぞーを めづらしがりて これを たの いえに つれ
ゆき おーせいに ときかこみながら あるいわ いただき
あるいわ ふところを さぐり あるいわ てあしを もてあそ
び などす やがて しゅしよくを だしたれども
りんぞーわ その こころを はかりかねて かえりみず
どじんら いかりて りんぞーの あたまを うち しいて
さけを のましめんとす おりよく どーこーの からふと
じん きたりて どじんらを しっし りんぞーを すくい
だしぬ

よくじつ この ちを さり かわを さかのぼること
いつか ついに もくてきちなる でれんに ちゃくせり で
れんわ かくちの ひとびと きたり あつまりて こーえきを
なすところなり りんぞーの あやしみ もてあそぶること
ここにわ さらに はなはだしかりしが かかる うちに
ありても かれわ とちの じじょーを けんきゅーすること
をおこたらざりき

こーにらの こーえきわ なぬかにして おわりぬ きと
1こーわ こくりゅーこーを くだりて かこーに たっし
うみを こーして のてとに かえれり ここにて りんぞーわ
こーにらに わかれを つげ どーねん 9がつの なか
ば しらぬしに きちゃくしぬ

りんぞーが 2かいの たんけんによりて からふとわ
たいりくの 1ぶに あらざること めいはくと なりしのみ
ならず この ちほーの じじょーも はじめて わがくに
に しらるるに いたれり



だい18か ほーりつ

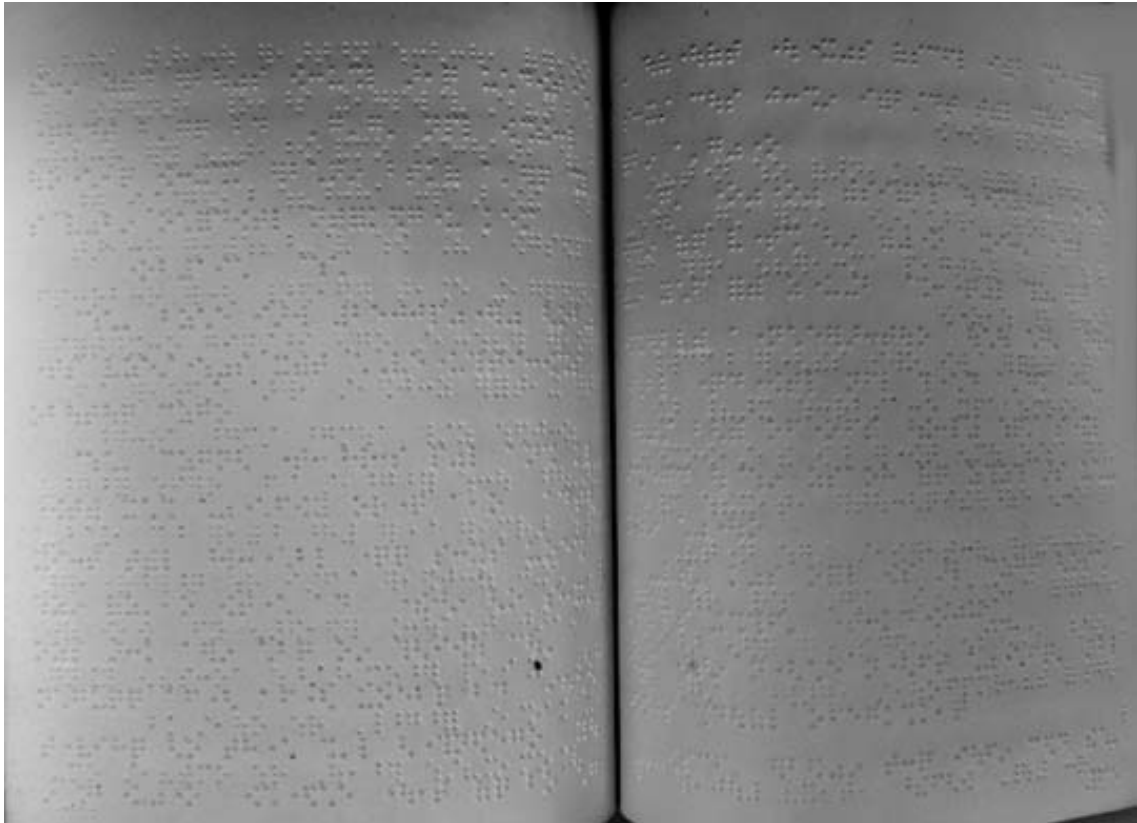
ほーりつわ こっかという きょーどーせいかつを ちつ
じょ あり かつ こーぶくなものにするための きそくで
あるから いやしくも こくみんたる ものわ かならず これを
まもらなければ ならぬ

ほーりつを せいせいするにわ せいふ またわ きしゅー
りょーいんの いづれかが その あんを さくせいして
かいに ていしゅつする せいふから ていしゅつされた あんわ
まづ ぎかみの 1いんで ととーししせれる とーぎ
の けいしきわ ぶつー だい11どくかい だい12どく
かい だい13どくかいの 3どの かいきを へること
になっている すなわち だい11どくかいで その
あんを だいたい に ちょーさし だい12どくかいで
ちくじょーに しんぎし だい13どくかいで ほーりつ
あんぜんたいの かひを ぎけつする こーして その
いんで かけつすれば その あんを たいんに うつす

ここでも どーよーの けいしきで とーぎし りょーいん
の いけんが 1ちすれば さいごに ぎけつした ぎ
いんの ぎちよーから こくむたいじんを へて そーじょー
する また きしゅー りょーいんの いづれかから てい
しゅつされた あんわ たの 1いんのみで とーぎし
かけつすれば おなじ てつづきによって そーじょーする
そこで てんのーが これを さいかせられ こーぶせしめられ
ると はじめて ほーりつが できあがるので ある

ほーりつの ほかに ちよくれい かくれい しよーれい
ぶけんれい とーの めいれいがある これらの めいれい
くにの きそくで あって ひろい いみで いう ばあい
にわ やはり ほーりつで あるから その せいせいも でき
る かぎり しんちよーな てつづきを へる ただ ほー
りつわ かならず ていこぎかみの きょーさんを へなければ
ならぬが めいれいにわ その ことが ない

1こくぶんかの ていどわ この こくみんが こく



ほーを まもる せいしんの こーはくによつて はかることが
できると いわれて いる われわれわ つねに こくほーに
したがつて こーふくな せいかつを いとなみ あわせて くに
の ひんいを たかめることに つとめなければ ならぬ

だい19か しゃか

しゃかわ いまから およそ 2500ねんぜん きたいん
どの ひまらやざんの ふもと かびらばすとおーこくの
たいしとして うまれた

しゃかわ うまれつき どーじょーの ねんに あつく なに
ごとも ふかく かんがえこむ たちで あつた あるとき
ふおーと ともに じょーがいに でて のーふの はたらく
さまを みまわつた ことがある ぼろを きた のーふ
たまの よーな あせを かいて たを すきおこし うしわ
つかれはてて あえぎ あえぎ はたらいて いる おりから
とびおりて きた とりが くわに きずつけられた むし
をついばんだ こかげから じつと みて いた かれ

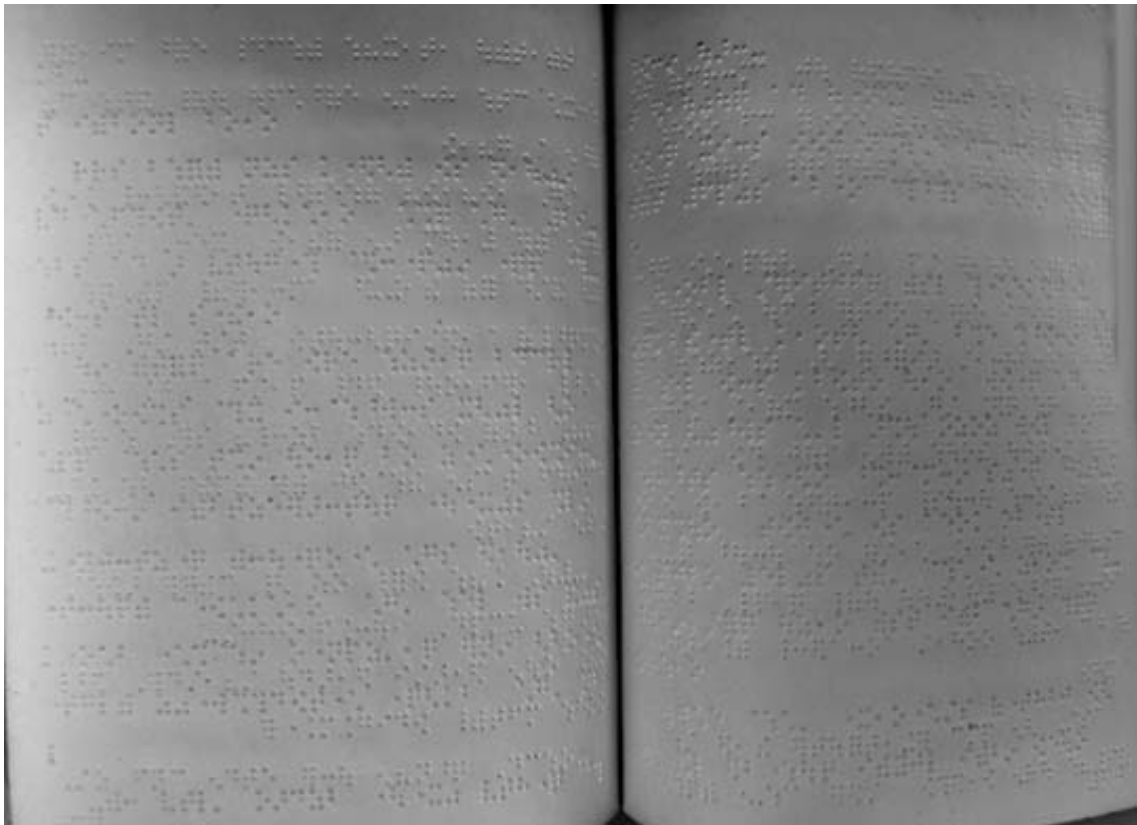
わ しみじみと じぶんの みのうえに おもい くらべて
のーふや うしの るーくを おもいやると ともに むしの うん
めいを あわれんだ

かれわ だんだん ものおもいに しづむよーに なつた
それを みて ひどく きを もんだ ふおーわ かれに
ひを むかえ めも まばゆい きゅーでんに すまわせて
こくせいにも あづからせよーとした しかし かれわ じょー
がいに できるごとに つえに すぎる あわれな るー
じんや いきも たえだえの びよーにん さてわ のべに
おくられる ししゃを まのあたり みて ますます よの はか
なさを かんじた

「ひとわ なんの ために この よに うまれて きたのか
われわれの ゆくすえわ どーなるだろーか」

こんな ことを つぎから つぎと かんがえてわ ついに
こころの くるしみに たえられなくなつて

「このうえわ せいけんを とーて おしえを うける ほかわ



ない」

とおもいたつに いった

ちの いさめも つまの なげきも この けっしんを
ひるがえすことわ できなかった かくて かれわ 29
さいの ある よ ひとしれず きゅーでんを でて しゅ
ぎょーの とに のぼった

しを もとめて あちら こちら さまよって いるうちに
まがだこくの しゅふ おーしゃじょーの ふきんに きた
かねて しゃかの とくを したって いた まがだこくおーわ
しゅぎょーを おもいとまらせよーとして じぶんの くのを
ゆづろーとまで もーしてたが かわの けっしんわ
どーしても うごかなかった かわわ さらに その へんの
なだかい がくしゃを たづねまわって せつを きいたが
どれにも まんぞくすることが できない かわわ つい
に

「もー ひとにわ たよるまい じぶん ひとりで

しゅぎょーを しよー」

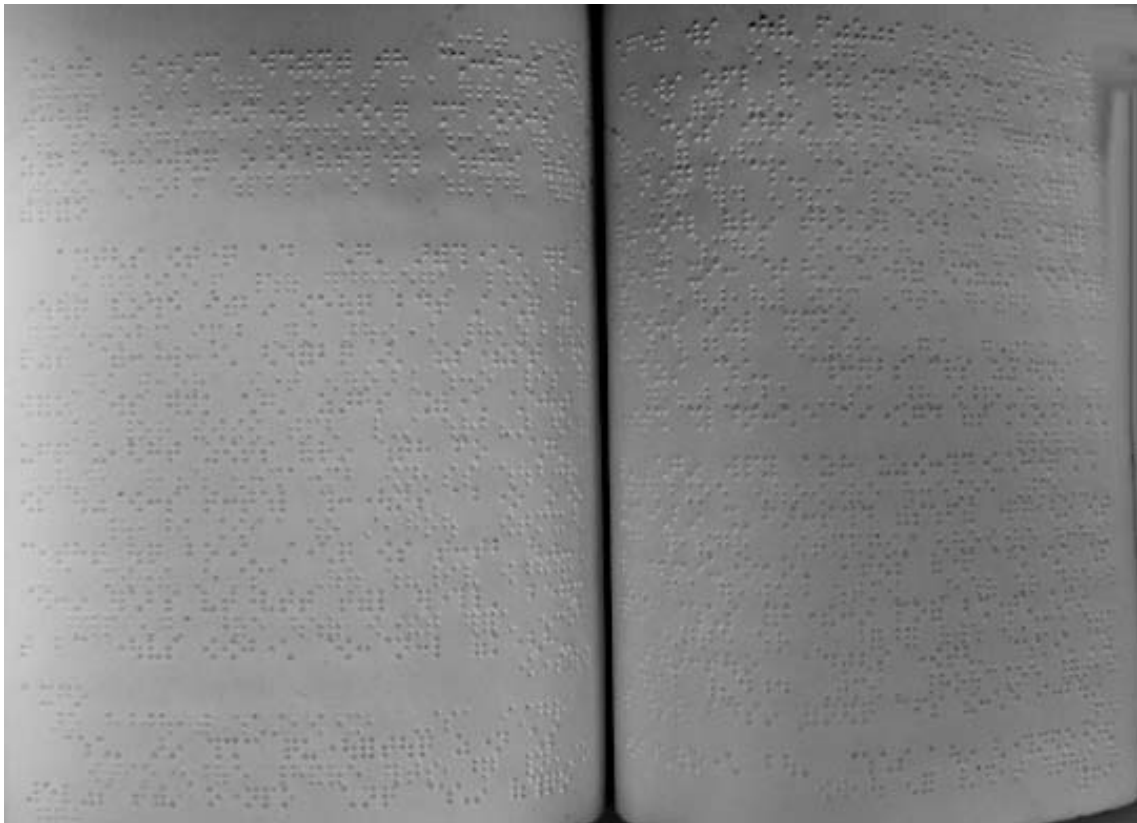
と けっしんして ある しづかな もりえ いった そーして
ここで ふおーの ころづくしから おくられた 5にんの
ともと 6ねんの あいだ

しゅじゅの くぎょーを ころみ

た

しだいに やせおとろえて ものに すがらなければ
たてなほほどに なったとき かわわ いくら くぎょーを して
も さらに こーの ないことを した ことで かわわ
まづ きんじょの かわに よくし たまたま そこに いた
しよーぢょの ささげた ぎゅーにゅーを のんで げんきを
かひくした ところが この あらたな たいどに
おどろいた 5にんの ともわ しゃかが まったく しゅ
ぎょーを やめて しまった ものとおもい かわわ すてて
たちさった

それから しゃかわ ぶったがやの みどりいろ こき
こがげに せいざして おもむろに おもいを ころした



こんどわ ほどよく しょくもつも とり きゅーそくも した
そーして にちや つぎつぎに おこつて くる ころの
まよいを しりぞけて ただ ひとすぢに さとりの みちを
もとめた

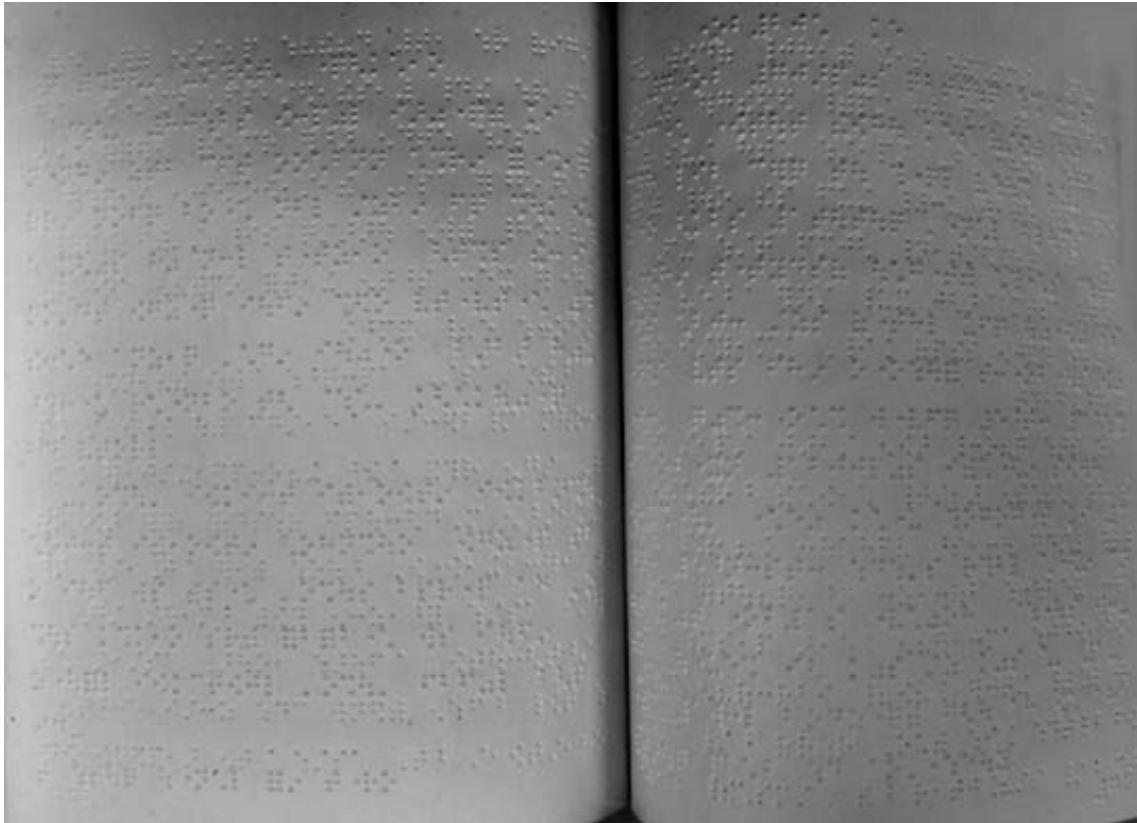
あるときの ことである かれわ よもすがら せい
ざいして ひたすら おもいを こらして いると やがて 1
てんの みよーじよーが きらめいて よわ ほんのぼのと あけ
そめた その せつな くれわ まよいの くもが かりと
はれて はつきりと まことの みちを さとり えた くれわ
この しんきよーの とーとさに すーじつの あいだ ただ
うっとりとして いたが やがて この とーとい しん
きよーを せかいの ひとびとと ともに せすにわ いられぬ
という じひの ころが きよーちゅーに みなぎり
あふれつ

しゃかわ よを すくう てはじめとして まづ かの
5にんの ともを たづねた かつて しゃかを みすてた

かれらも その じひ えんまんの すがたを みてわ おもわ
ず その まえに ひざまづかざるを えなかつた くれ
らわ しゃかの おしえを きいて そくざに できし となつた

つづいて しゃかわ まかだごくおーを たづねて
ねんごろに みちを とときかせ さらに かびらばすとに
かえつて ふおー さいしを はじめ こくみんを きよーかして
こきよーの おんに むくいた

いまや しゃかわ しゅーせい の うちの まんげつの
ごとく くちゅーから あかれる みと となつたが なか
にわ くれを そねむ あまり はんこーするばかりで なく
はくがい を くわえよーとする ものさえも でて きた こと
に てーばだつたわ いとこの みで ありながら かね
てから しゃかの めいほーを ねたみ いくどか くれを
がいしよーとした あるときの ごときわ しゃかが やま
の したに いるのを みつけて うえの ほーから おーいしを
ころがしたが いしわ しゃかの あしを きずつけただけ



で もくてきを はたすことわ できなかつた

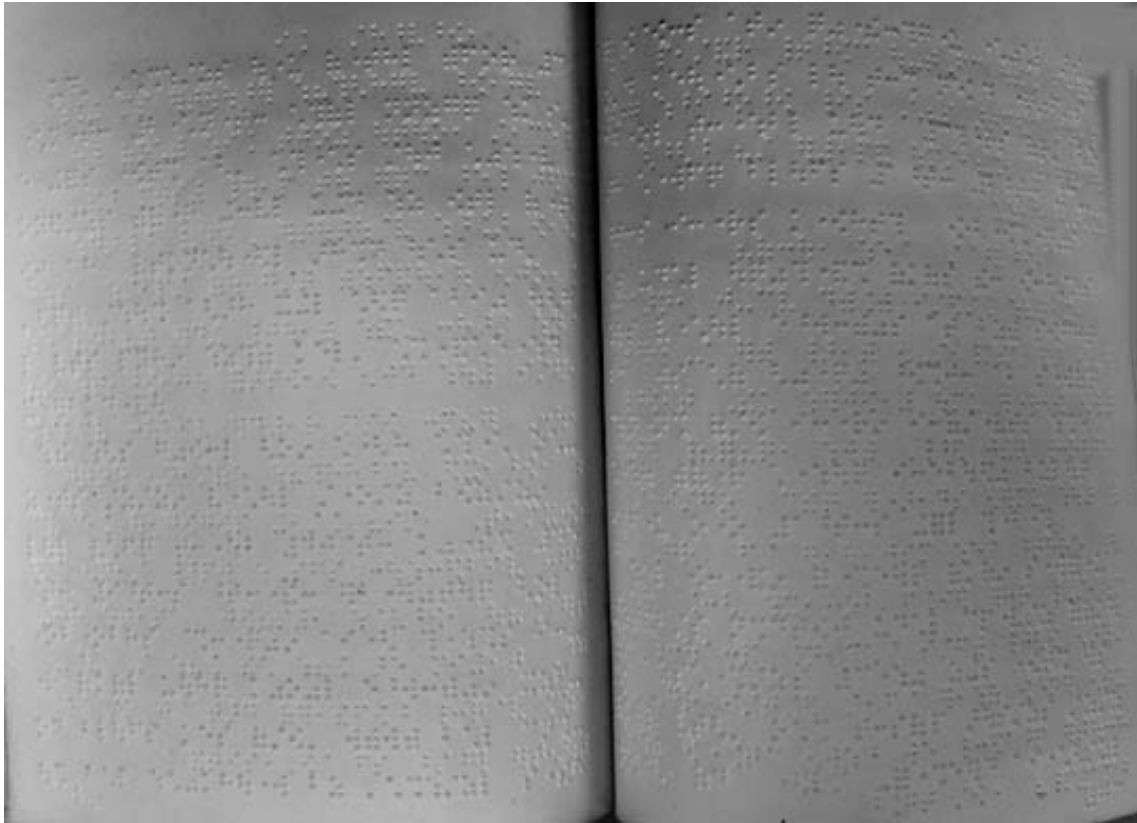
しゃかわ 80さいの こーねんに およんでも なお
つづれを たとい うえと たたかいつつ かくちを めぐって
みちをつたえて いたが ついに やまいを えて くしなが
ら ふきんの りんちゅーに とどまった きとくの ほーが
つたわると これまで おしえを うけた ひとびとが 4
ほーから あつまって わかやれをおしんだ いよいよ りん
じゅーが ちがづいた とき しゃかわ なきかなしんで
いる ひとたちに

「わたくしわ おこなおーと おもったことを おこないつくし
かたろーと おもったことを かたりつくした これまで とい
た おしえ その ものが わたくしの いのちである わた
くしの なくなった のちも めいめいが その おしえを
まじめに おこなうところに わたくしわ えいえんに いきて
おる」

と さとして しづかに めを とぢた

だい20か なら

7だい 70よねんの ていととして さく はなの
におうが ごとしと ほこりし ならの みやこも いろ
うつり におい うせて とし すでに ひさしく いまわ
ただ きないの 1としとして わづかに いにしえの
なごりを とどむるのみ しかれども かすかの しゃとー
あけの かいろー やまの みどりに はえて しんげん おの
づから ひとの えりを たださしめ とーだいじの こん
どーわ てんくー たかく そびえて 5ぢゅー 3じゃく
の だいつ 1200ねんのおもかげを のこせり
こーふくじわ がらん なかば すたれたれど なお 3
ぢゅー 5ぢゅーのとー さるさわの ちすいに かげを うつ
して なんと だい11の びかんだり しゃじの そー
れいわ しばらく おき なんの やま なんの かわ 1
ぼく 1そーに いたるまでも れきし あり こか あり
ひとをして ていけい さる あたわざらしむ

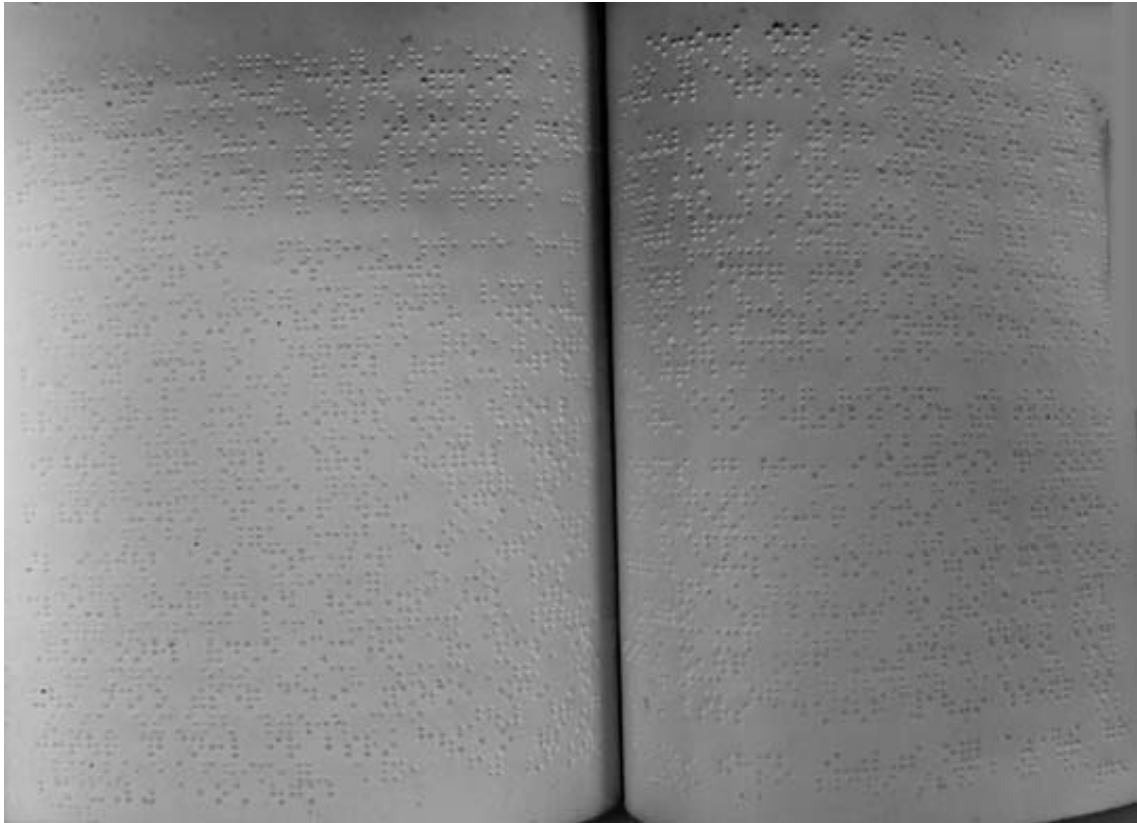


はるわ わかくさやまの しば みどりに もえたち 3
がつどー 2がつどー かすみにつつまれて さなが
ら ゆめの ごとく あきわ かすがの やしろ かんさび
たむけやまの もみぢ ゆーひに はゆる さま ことに みど
だい あり ひとなつかしげに よりくる しかの はるわ
わけても やさしく あきより ふゆに かけて あいおん しきり
に ひとの ねむりを さますも ならにわ かくべからざる
ふせいなるべし

さほ さきの れんこーに きたを かぎり かすが たか
まどの やまやまを ひがしに やだやま いこまやまを
にしに ひかえて とーざい 40ちよー なんぼく 45
ちよー 9ちよーの ちよーぼー せいぜんとして きたに
だいたいりの きゅーでんを あおぎ すぎくの おー
ぢ みなみに はしりて なんとんに らじょーもんを ふまえ
たる いにしえの ならの みやこわ そもそも いかに うつく
しく いかに さかんなりしぞ いま わかくさやまに のぼり

て こきょーの あとを てんぼーすれば がんかに よこ
たわる ならしがいの にし とーく つらなる でんえんの
あいだに とーざいに はしる 3すぢの みちわ きた
より かぞえて いにしえの 1ちよー 2ちよー 3
ちよーの おーぢの なごりとす たいごくでんの
あと はるかに してんすべく みなみの ほーー こーりやまの
まちの ひがしに らじょーもん の あと いまも のこれり
という その かみ きんでん ぎよくろー あい のぞみて
うちつづく みやこ おーぢを おーみやびとの さくら
かざし もみぢ かざして おーらいしけん いまにして
おもえば ただ 1ちよーの ゆめに すぎず

さらに こーべを めぐらして みなみを のぞめば
やまとへいやの つくるところ はるかに うねひやま みみなし
やま あまのかくやまの 3ざん まゆの ごとく その
みなみに ひときわ たかく とーのみね よしのやまの やまやま
つたなるを みる げにや 「めぐらせる あおがきやまに



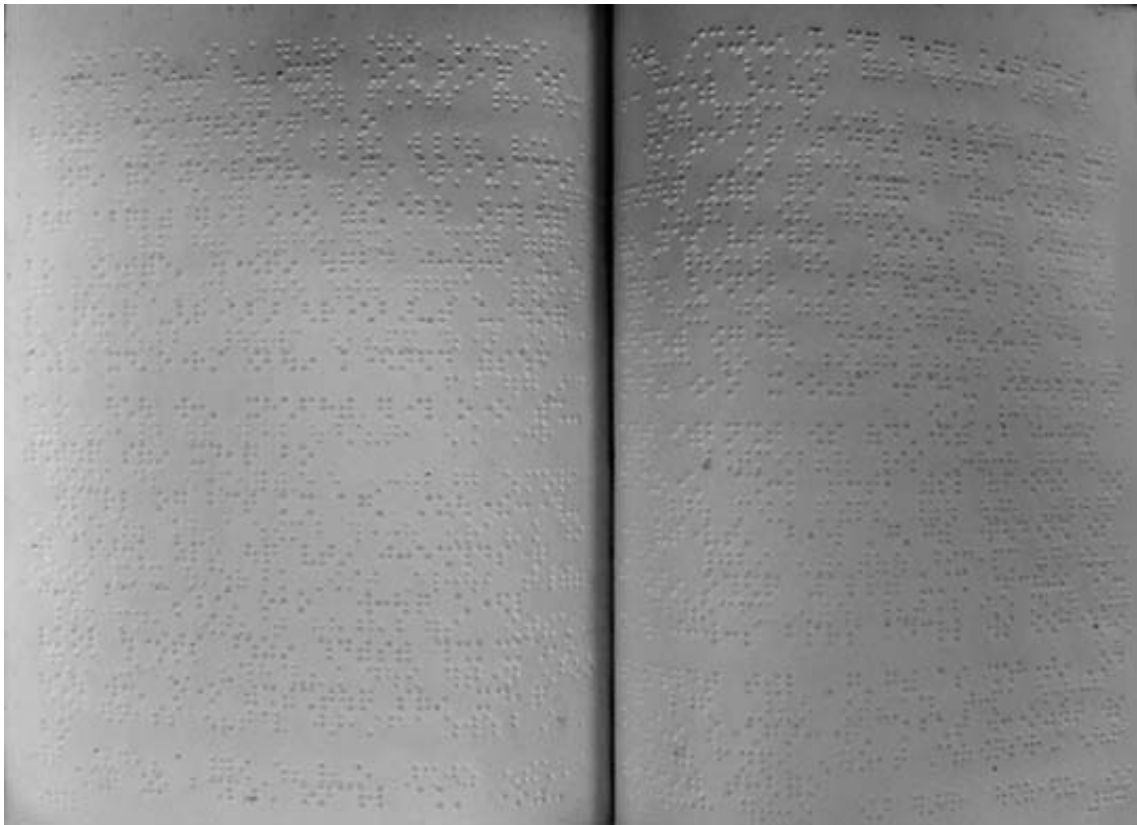
こほれる やまと うるわし」と うたいしに そむかず あい
すべく うつくしき さんやわ さらに たいこらいの れきし
と むすび ぶんがくと むすびて かん いよいよ
ふかきを おぼゆ

たい21か あおの どーもん

ぶぜんの なかつから みなみえ 3り げきりゆー
いわを かむ やまにかわを みぎに みて かわぞいの
みちを たどって ゆくと ひだりての やまわ したいに
づじょーに せまり ついにわ みちの ぜんめんにつきたっ
て ひとの ゆくてを さえぎって しまう これからが
よに おそろしい あおの くさりどで ある それわ やま
くにかわに そーて つらなる びょーぶの よーな ぜつ
べきを たよりに みるから あやうげな すーちょーの かけ
はしをつくた もので あるが むかしから これを わた
るーとして すいちゅーにおちいぬちを うしなつた ものが
いくひやくにん あつたか しれない

きょーぼーの ころの ことであつた この あおの
くさりどに さしかかる てまえ みちを さえぎって たつ
いゆやまに まいにち まいにち こんき よく のみを ぶつて
よねん なく あなを ほつて いる そーがあつた みこわ
いろめも みえぬ やぶれごろもを まとい ひに やけ
しごとに やつれて としの ころも よく わからぬくらいで
あるが きつと むすんだ くちもとにわ いしの つよさが
あらわれて いる

そーわ なを ぜんかいと いて もと えちごの ひと
しよこくの れいぢょーを おがみめぐつた すえ たまたま
この なんしよを とーつて いくたの あわれな ものがたりを
みみにし どーにか しかたわ ないものかと ふかく こころを
なやました さて いろいろと しあんした あげく ついに
こころを けつして たとえ なん10ねん かからば かかれ
わが いのちの あるかぎり 1しんを ささげて この
いゆやまを ほりぬき ばんにんの ために あんぜんな みち



をつくって やろーと しんぷつに かたく ちかつて この
しごとに ちゃくしゅしたので あつた

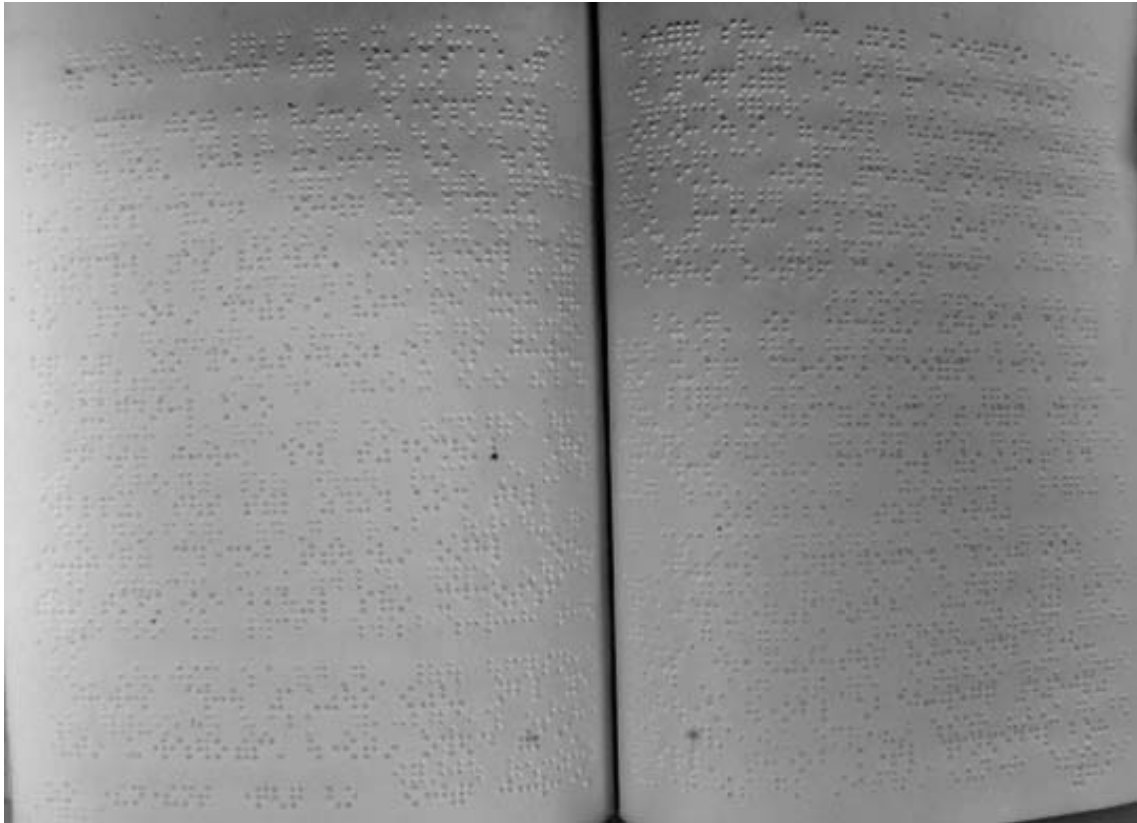
これを みた むらびとたちわ かれを きちがいあつかい
にして あいてにも せず ただ ものわらいの たねにして
いた こどもらわ しごとを している ろーそーの まわり
にあつまって 「きちがいよ きちがいよ」と はやしたて
なかにわ ふるわらぢや こいしを なげつける ものさえ
あつた しかし そーわ ふりかえりも せず ただ もく
もくとして のみを ふるって いた

そのうちに たれ いうと なく あれわ やましほーず
で あのよーな まねを して ひとを ろーらくするので
あるーと いう うわさが たつた そーして かげに
ひなたに しごとの じゃまを するものも すくなくなつた
しかし そーわ ただ もくもくとして のみを ふるって
いた

かくて また いくねんか たつうちに あなわ だん

だん おくゆきを くわえて すでに なん10けんと
いう ふかさに たつた

この ほらあなと 10ねん 1にちの ごとく もく
もくとして のみの てを やすめない そーの こんきとを
みた むらの ひとびとわ いまさらの よーに おどろいた
できる きづかいや ないと みくびって いた いわやまの
ほりぬきも これでわ どーにか できそーで ある
1ねん こつた ふだんの どりよくわ おそろしいもので
あると おもいつくと この みるかげも ない ろーそーの
すがたが きゅーに とーとい ものに みえだした そこ
で ひとびとわ いっそ われわれも できるだけ この
しごとを たすけて 1にちも はやく どーもんを かい
つーし ろーそーの いのちの あるうちに その ころざしを
とげさせると ともに われわれも あの くさりどを わたる
なんぎを のがれよーでわ ないかと そーだんして その
ほーほーをも とりきめた



この のちわ ろーそーと ともに ほらあなの なかで
のみを ふるう ものも あり ひよーを きしゃする ものも
あって しごとわ おーいにはかどって きた しかし
ひとわ ものに うみやすい こーして また いくねんか
すぐすうちに むらの ひとびとわ この しごとに あきて
きた てつたいをするものが ひとり へり ふたり へり
して はてわ また むらびとぜんたいが この ろーそー
からはなれるよーになった

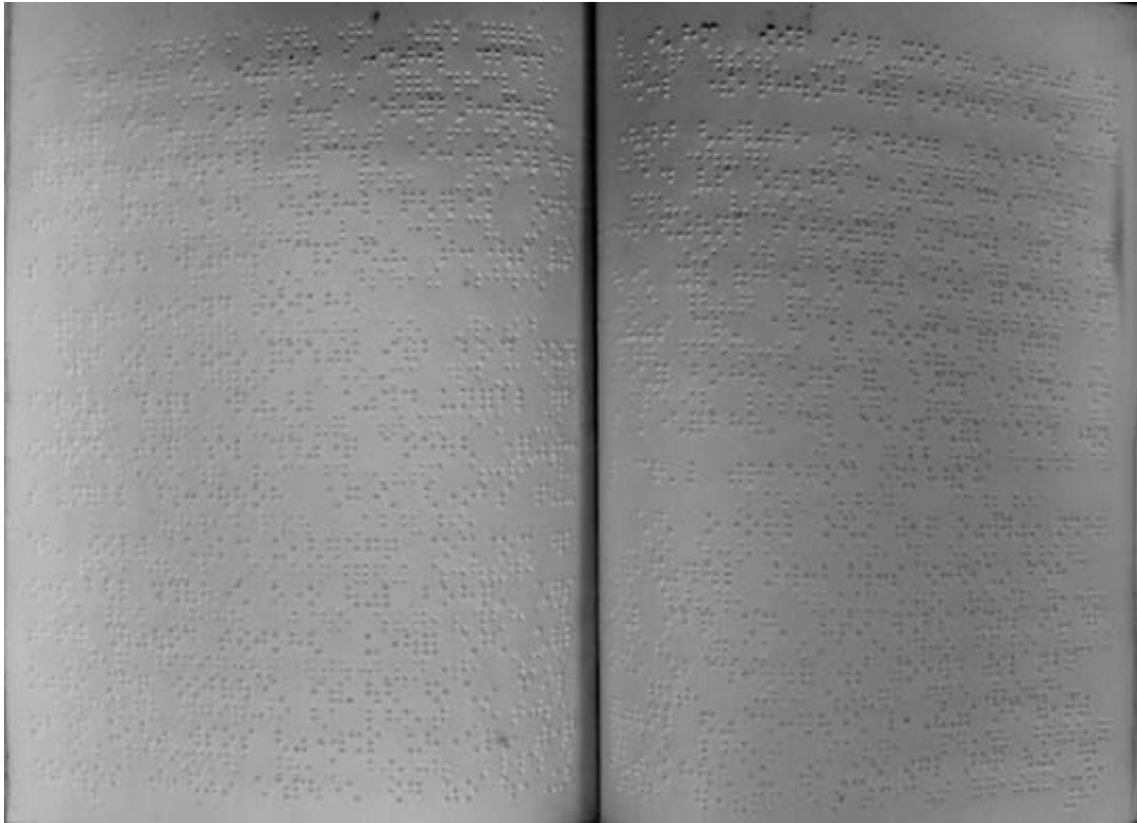
けれども ろーそーわ さらに とんぢやくしない かわの
しよいちねんわ としと ともに ますます かくと ときにわ
やはんまでも うすぐらい ともしびを たよりに きよー
もんを となえながら いっしんに のみを ふるうことさえ
あった

ろーそーの しゅーし 1かんした こんきわ ついに むら
びとを はぢさせたものか しごとを たすける ものが
また ぼつぼつと できて きた こーして ろーそーが

はじめて のみを ぜっべきに くだしてから ちょー
ど 30ねんめに かわが 1しよーを ささげた
たいにーじが みごとに じよーじゆした どーもん
の ながさわ じつに 308けん たかさ 2ぢよー
はば 3ぢよー かわに めんした ほーにわ しよしよに
あかりとりの まどさえ うがって ある

いまでわ この どーもんを ほりひろげ しよしよに
てを くわえて きゅーたいを あらためてわ いるが 1
ぶつ なお むかしの めんぼくを とどめて ぜんかい
1しよーの くしんを えいきゅーに ものがたっている
だい122か とます えぢそん

でんとーの はつめいせられたるわ いまより およそ
110よねんぜんのことなり とーじわ たんに りか
がくの じつけんよーとして しよーせらるるに すぎ
ざりしが したいに かいりよーせられて 450ねん
の のちに とーたい などに すえつけらるるに いたり



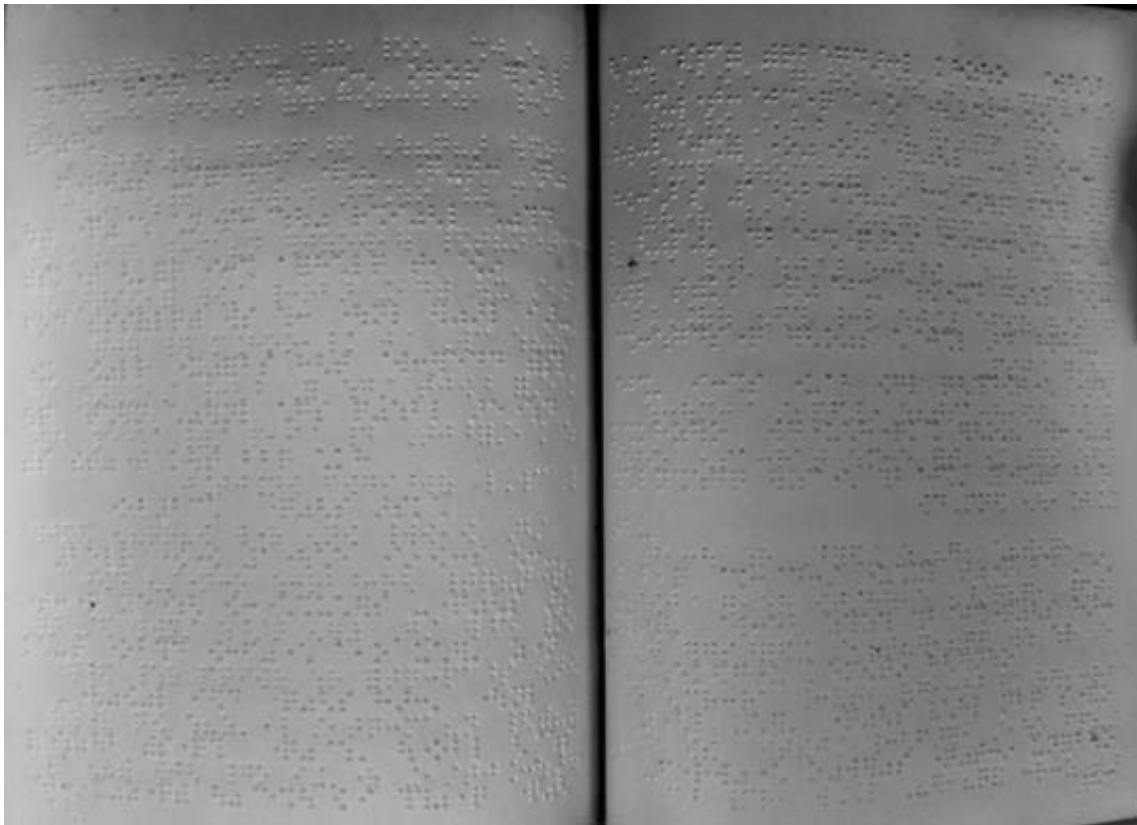
ぬ しかれども こわ こんにちの あーくとーに るいする
ものにして こーえん がいる とーの しょーめいはーとしてわ
ねきとーなれども しつないに もちうるにわ おーじかけにして
こーりよく つよきに すぎ じつよーに てきせず これら
の けってんなき でんとーの しゆつげんわ とーじの ひと
の もっとも きぼーする ところなりき

かねて この きぼーを みたさんと おもい いたる とます
えぢそんわ すでに でんわきに かんする はつめいに せい
こーしたるをもつて さらに すすんで あたらしき でんとー
のはつめいに じゆーじしたり かねが きたいの てん
さいわ ここにも いゆなく はつきせられて ちゃくちゃく せい
こーの いきに すすみしが ただ しんに いたりてわ かねの
もっとも くしんしたる ところなりき はじめ かねわ かねに
たんそを ぬりて ころみしが おもわしき けつかを えす
ついで はつきん そのたの きんぞくの はりがねをもつて
さまざまの じっけんを かさねしが これ また しつぱい

におわりぬ ここに おいて ふたたび たんそせん の けん
きゆーに ぼつとーしたれども いたづらに おーくの じ
じつと きんせんとを ついやしたるに すぎざりき

ある ひの ことなりき えぢそんわ れいの ごとく
じっけんしつに とぢこもりて けんきゆーに よねん なかり
しが ふと みれば きじよーに かねち めづらしき 1
ぼんの うちわ あり なにごころなく てに とりて
ながめ いたりし かねの めわ いはーに かねやきぬ かね
の ながめいりしわ えに あらず かねに あらず じつ
に うちわに もちいられたる たけなりしなり

かねわ ただちに たけをもつて たんそせんをつくりて
じっけんせしに よそーいじよーの こーせつかを えたり
ここに おいて かねわ ひとを せかいの かくちにつかちして
たけを さいしゆーせしめ その もたらせる ものについて
めんみつに けんきゆーせしが にっぼんの たけ もっとも
てきとーなりしかば もつぱら これに よりて しんを せい



しゅつせり しかして その でんきゅーわ たちまち せかいに
ひろまりぬ

えぢそんの はつめいせるわ でんわ でんとー でん
しん でんしゃ かつどーしゃしん ちくおんきに かんする
ものなど きわめて おーく あめりかにて とつきよを
えたる もののみにてその すー じつに せんよに およ
ぶ こんにち ぶんめいの りきと しょーせらるる ものに
して ちよくせつ かんせつに かわの てんさいに よらざる
もの ほとんど なしと いいて かなり

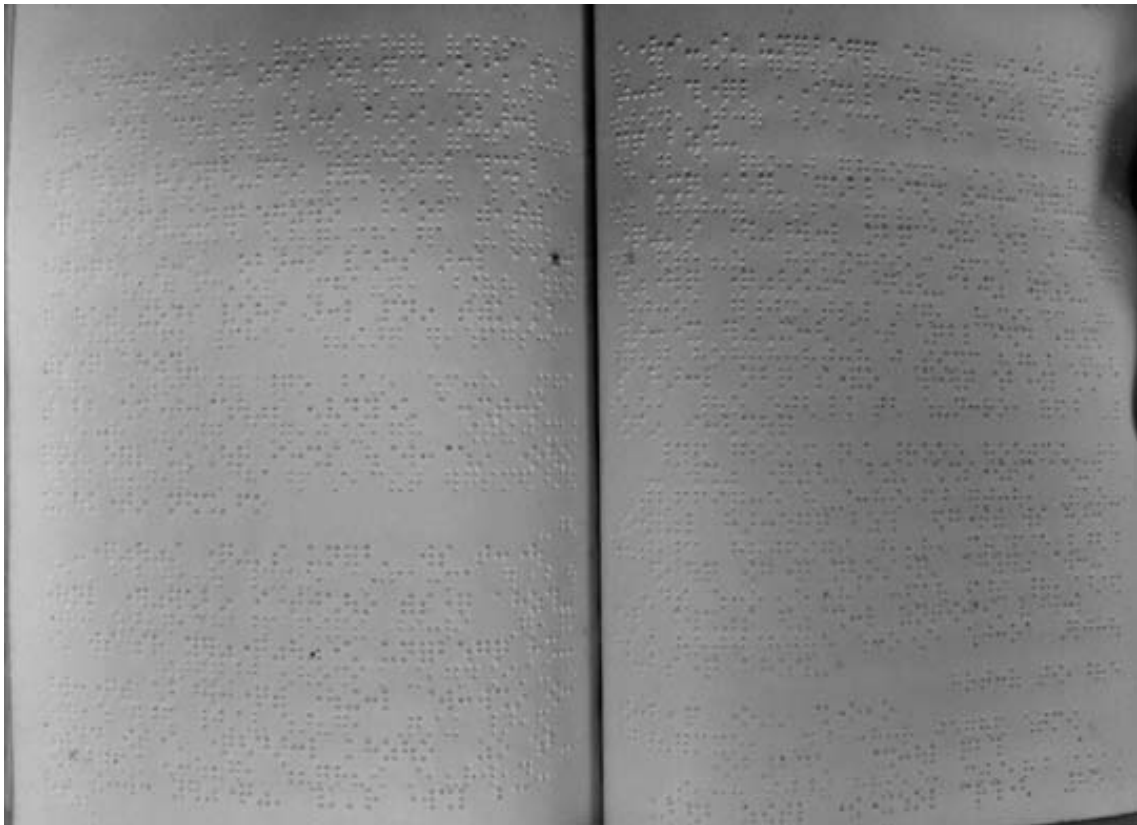
だい23か でんきの よのなか

25にち ごご 1じから がっこーの こー
どーで むらざき こーがくはかせの 「でんきの よの
なか」と だいする こーえんが あった はかせわ まづ
「げんこんに おける でんきの りよーわ じつに
めざましい ものです でんしゃわ したいに きしゃの
りよーぶんまでも しんりやくし なお すすんで でんき

きかんしゃさえも もちいられるよーに なりました しょきかい
の げんどーりよくで あった じんりよく またわ
じよーきりよくも だんだん でんきに かわって こー
ぎよーかいの 1たいかくしんを うながして います こと
に きんねんわ すいりよくでんきの おどろくべき はっ
たつに ともない でんりよくわ すこぶる れんかに きよー
きゅーされるので せきたんの かりよくに よる じよーき
りよくわ おーくの ばあい これに できることが でき
なくなりました そればかりでなく せきたんわ そーばん
つかいつくされて しまうが すいりよくわ むげんと いて
よい」

と いて きゅーりゅーや ばくふーに とんで いる わが
くにでわ しょーらい ますます すいりよくでんきの りよー
を はからなければ ならぬことを りきせつした

つぎに はかせわ でんきの ひかりに ついて のべた
「えぢそんが たんそせんの でんとーを はつめいした



のわ 40ねんばかり まえの ことで あったが いま
でわ さらに すすんで ひかりの いろが たいよーに
にて しかも ひかくてき ねつを ともなうことの すくない
でんとーさえも はつめいされました いったい もっと
りそーできな とーかわ たいよーの ひかりの よーに あかるく
て しかも ほたるの ひかりの よーに ねつを ともなわない
もので あります」

と いい かつどーしゃしんの ふいるむが あーくとーの
ねつのために はっかして おーくの ししょーしゃを だした
はなしなどをつけくわえた

「でんしんや でんわの はつめいわ その とーじ
じつに ぜんせかいを おどろかした もので あります」
が その のち むせんでんしんが はつめいされて りく
じょーでも かいじょーでも じゆーに しょーそくを こー
かんする ことが できるよーになりました また さい
きん ほーそー むせんでわ すなわち ぞくに いう

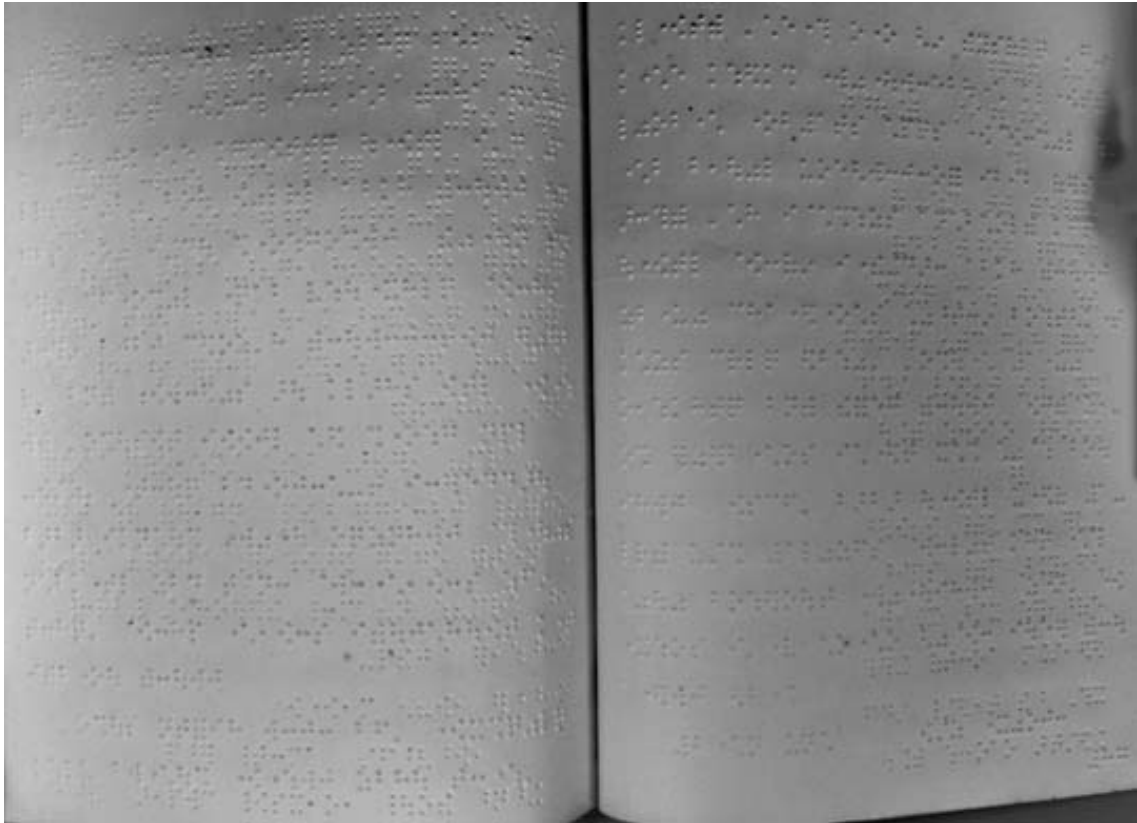
らぢおが はつめいされて しょくんも ごぞんじの
とーり すでに わがくにに おいても さかんに おこなわ
れて います」

かくて はかせわ せかいに おける ほーそー むせん
でんわの げんじょーについて かりり さらに わとーを
てんじて でんきこんろ でんきあいろん でんき
すとーぶ せんぶーき など かていに おける でんき
の りよーについて のべた そーして さいごに やや
こえを おーきくして

「しょくん でんきわ いまや かくのごとく あらゆる
ほーめんに りよーされています けれども その りよー
わ けっして これで つきたのでわ ありません しょー
らい しょくんの けんきゆーに まつところが ひじょーに
おーいので あります」

こーいって だんを くだった

だい24か きゆーしに ていす
は11かい まことに ごぶさたに うちすぎ

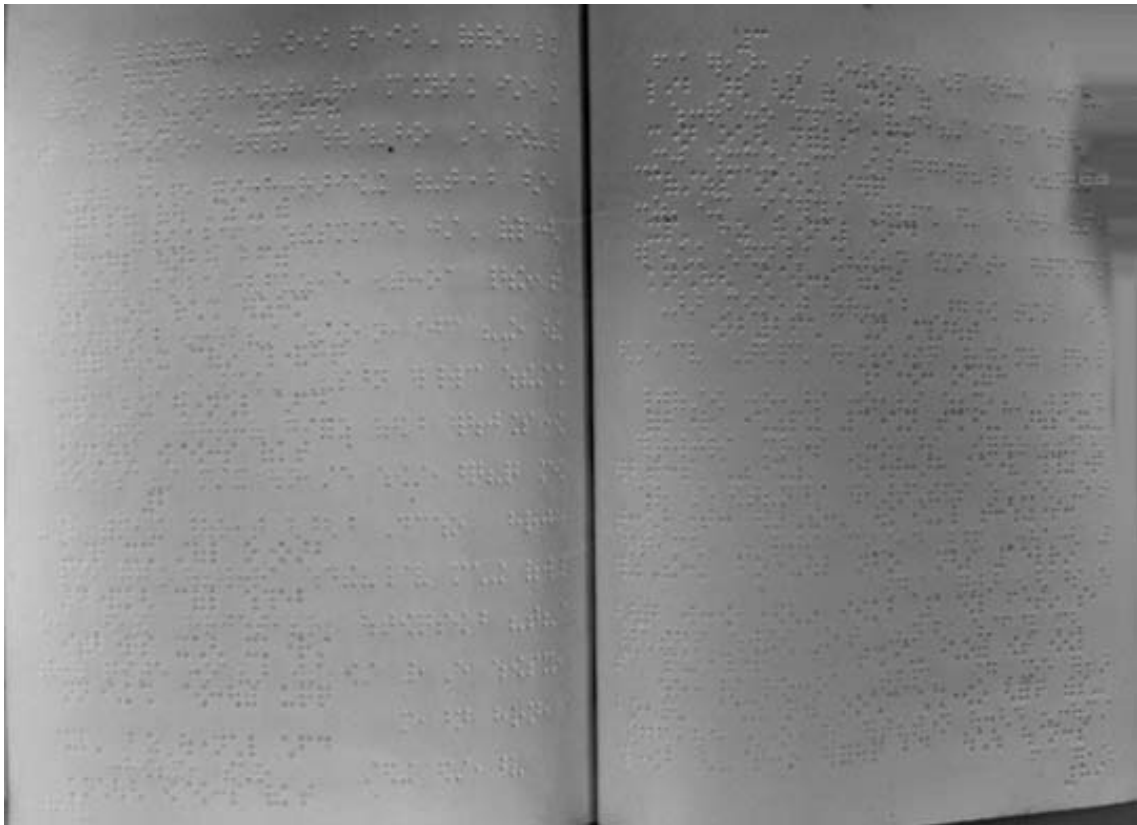


もーしわけも これなくそろ と一ちに まいりて いらい 1ど
てがみを もって ごよーす おうかがい もーしあげたしと
わ ぞんじながら なれぬこととて しごとにおわれ 1
にちと えんいん いたし こんごちに あなり もーしそろ しつ
れい の だん おゆるし くだされたくそろ ほんじつ とつ
ぜん うえだくんに であい ひさしぶりにて きょーりの
よーすを いろいろ うけまわり もーしそーろーところ せんせい
にわ いつも ごそーけんの よし なによりの ことに ぎ
そろ わたくしのこと おこころに かけ くだされ つねに
「こやまわ どーして いるだろーか」と おーせらるるよし
いよいよ おなつかしく ぞんじ たてまつりそろ しゅじんの
つかいなどに まいる とちゅー しょーがっこーの まえを
とーりてわ きょーりの がっこーの おもしろかりしこと など
おもいだし もーしそろ

わたくしの つとめおり そーろー いえわ ごふくてんにて
なかなか いそがしく ごぎそろ まいりし とーざわ

なにごととも わからず ただ きを もむのみにて われ
ながら なさけなく ぞんじそーらいしが なにごととも
にんたいが たい1との かねての ごきょーくんに した
がい いっしんに はたらきそーろーため おいおい みせの
よーすも わかり おきやくさまの あつかいゆたにも なれて
しごとに きょーみを おぼゆるよー あなり もーしそろ
まいばん うりあげだかの かんぢよーを いたすときなど
なかまの うちにて けいさんわ わたくしが 1ばん
たっさなりとて いつも ほめられ もーしそろ これも まっ
たく せんせいゆたの おかげと ぶかく かんしゃ いたし
おりそろ このうえわ いよいよ しごとに はげみ 1
にちも はやく 1にんまえの しょーにんと なりて おやに
あんしん いたさせたと ぞんじおりそろ まづわ ご
ぶさたの おわび かつがた きんきょー おしらせ もーし
あげそろ けいぐ

2がつ はつか こやま ぶんたろー



おーい せんせい

だい25か みなとிரり

1

ゆめにのみ みし やまかわも
あけくれに したいし いえも
まの あたり ちかく せまりぬ
かもめ とぶ うみを すべりて
ふねわ いま しづかに かえる
なつかしき こきよーの みなと

2

はやて ふく やみに ただよい
よるべなき うみに さすらい
おもいで の ふかき ふなぢや
つつがなく きよーしも はてて
ふねわ いま しづかに かえる
なつかしき こきよーの みなと

3

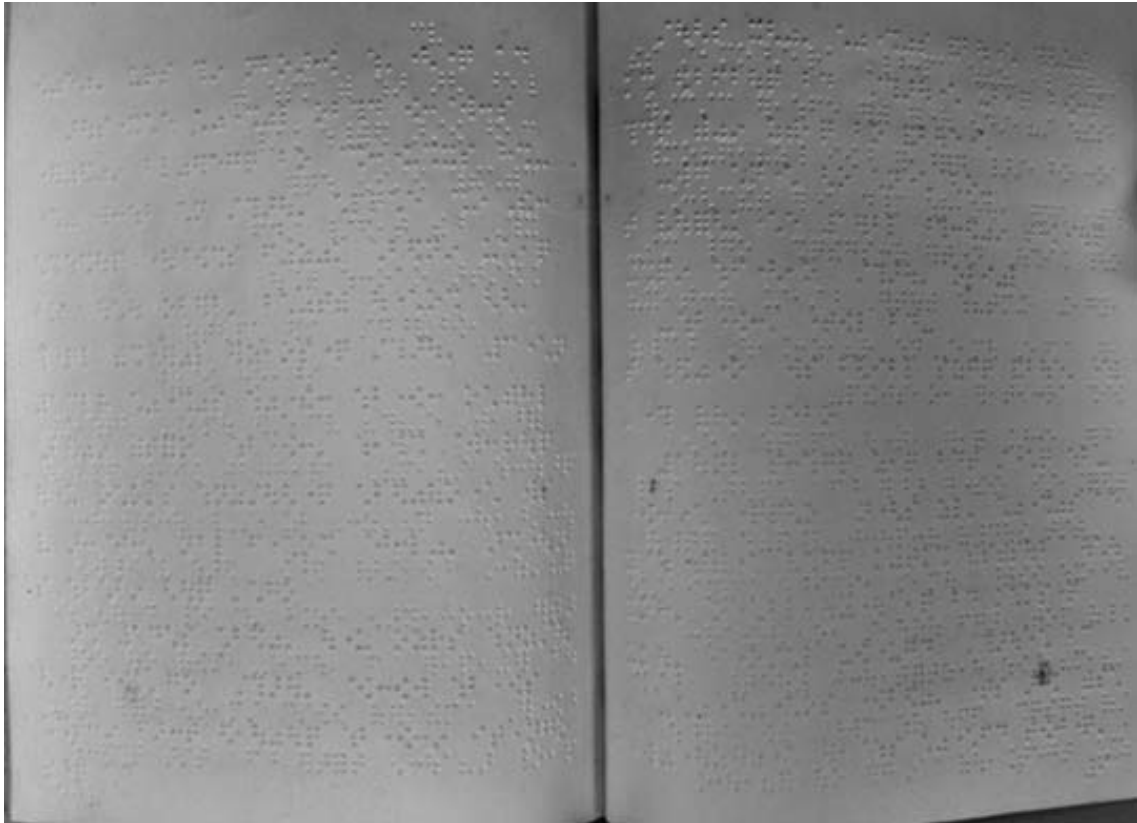
におい よき きの み くさの み
うづ たかき つみにの なかに
うみやまの たからを のせて
ふねわ いま しづかに かえる
なつかしき こきよーの みなと

だい26か かつ やすよしと

さいごー たかもり

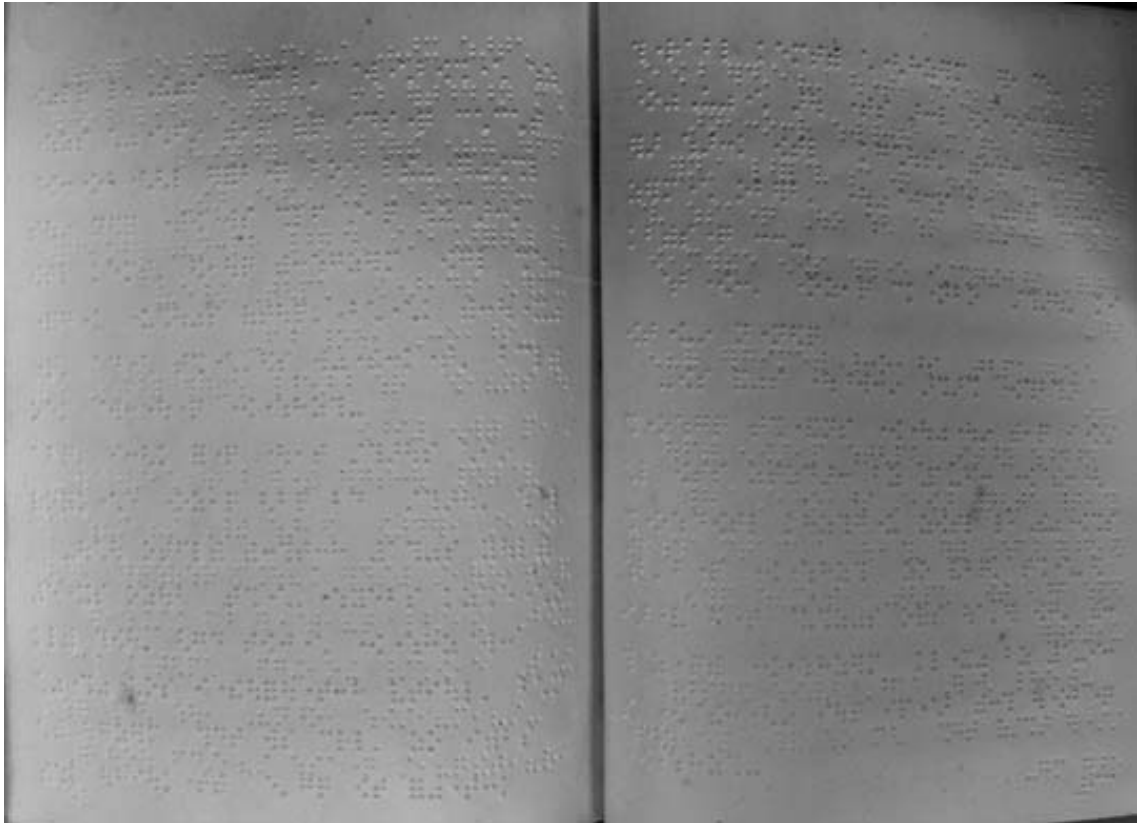
めいぢ がんねん 3がつ とくがわ よしのぶ

せいとーの かんぐんわ しょどーより ならび すすんで
とーかいどー せんぼーわ しながわに とーさんどー
せんぼーわ いたばしに ついた つきの 15にちを
きして そーこーげきを おこない 1きよに えどを のつ
とる てはずで ある とくがわがたも こと ここに
いたってわ あくまでも たたかう かくごを きめて もの
すこい きんちよーをしめして いる しかし しちゆーの



こらんわ はちの すを ついたよーな さわぎで ある
よしのぶから かんぐんに たいする こーしょーの
ぜんけんを いにんせられて いた きゅーぱくぶの りく
ぐん そーさい かつ やすよしわ かねてから ひゃつぽー
かくさくして じきょくの えんまんな かいけつを はかって
いた しかし たいせいゆ いかんとも しがたく ききわ
すでに もくぜんに せまったので やすよしわ 3がつ
13にち かんぐんの さんぽー さいごー たかもりに
かいけんを もとめた さいごーわ さっそく しょーちして
しば たかなわの さつまやしきで かいけんしたが その
ひ よーりよーわ ついに えがたく りよーにんわ よくじつ
の さいかいを きして わかれた
よく 14かの かいけんわ しば たまちの さつまやし
きで おこなわれた やすよしわ きょーこそ さいごの
かくとーを えよーと けっしんして さいごーを おとづれた
ので ある

やしきの ぶきんわ かんぐんの へいしが すきまも
なく けいせいしている やすよしが はいって いこーと
すると もんを まもって いた へいしらが
「それ かつが きた かつが きた」
と ひしめきながら 1せいに じゅーけんを とりなおして
ゆくてを さえぎった やすよしわ たいおんに
「さいごーわ どこに いる」
と さげんだ その いきおいに のまれて へいしらわ おも
わず みちを ひらいた
1しつに とーされて まって いると やがて さい
ごーが できた つぎの まにわ かんぐんの あら
むしゃどもが ひかえて なんとなく ものもののしい しかし
ふたりわ たかいに しんじあっている なかなので
はなしわ おだやかに はこばれる やすよしが いう
「かんぐんかたの こいけんわ どの よーな ものか
ぞんじませんが せっしゃの かんがえる ところでは



こんにち につぼんの しゅーいにわ しょういにくが さま
さまの かんがえを もって みて おるので うかうかと
きょたいけきに せめいで いたら にほんぜんこくに
のしを つけて どこぞの くにえ やって しまうよーな
ことに ならぬとわ けっして もーされませぬ これに くら
べれば ばくしんの みとしてわ いかかな もーしぶん
でわ あるが とくがわけの そんぼーなどわ いうにも
たらぬ しょーじで ござります」

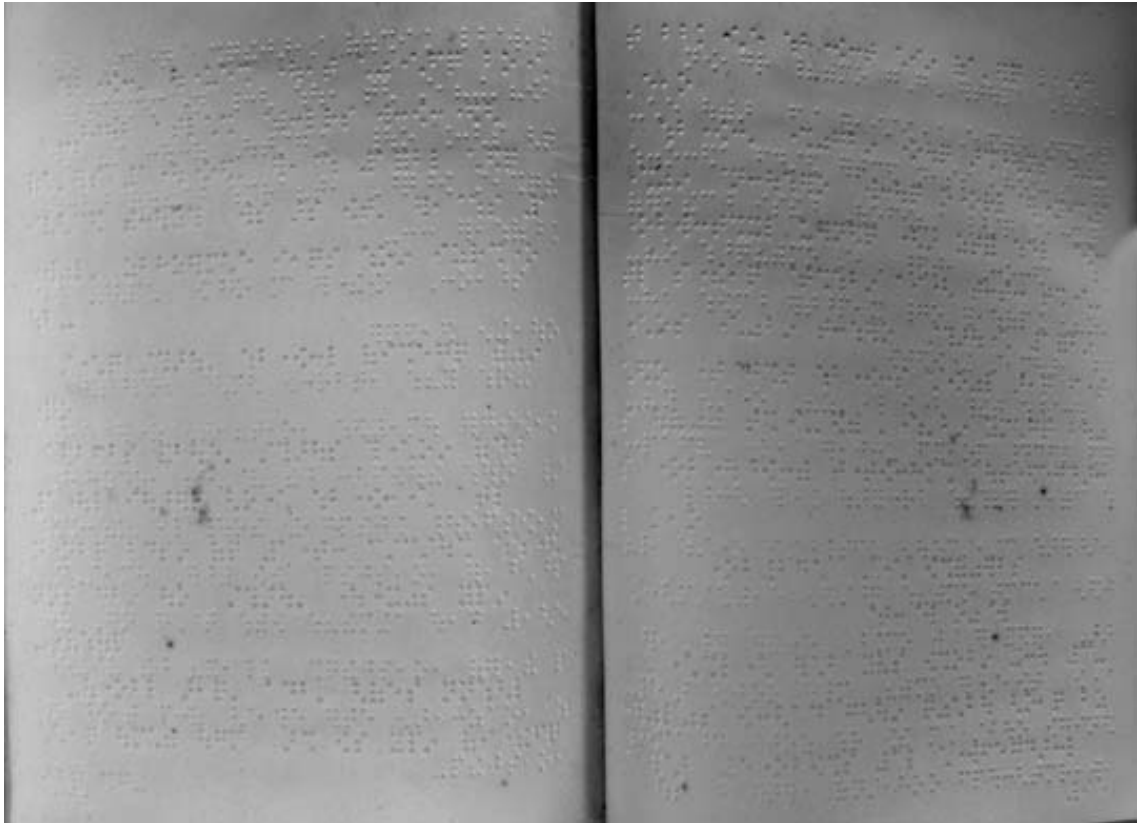
あいてわ おーきな めで じっと やすよしの かおを
みつめながら だまって きいて いる やすよしわ さらに

「しかし たとえにも もーすとーり 1すんの むしにも
5ぶの たましい とくがわざむらいの なまくらがた
なにも すこしわ きれる ところが ござりましょー
かんぐんがたの おぼしめしどーり ひとおしにわ いかぬ
かも しれませぬ すると そのうちにわ また おもいの
ほかな しりおしなども あらわれて こと めんどーな

すぢあいに ならぬとも かぎりませぬ せっしゃわ この
だんぱんが よし どの よーに けっちやくするにも
せよ さよーな ことに なれかしとわ もーとー かんがえ
ませぬが たいせいわ じんりょくの いかんとも しょーの
ないもので 」

さいごーわ だまって うなづいた やすよしわ なお
ことばを つづけて

「この へんの じじょーを よくよく ごすいさつ
くだされて とくべつ の ごしんじを もって おだや
かに ことの まとまるよー いま 1おー ごひょーぎ
くださることに なりますれば まことに につぼんごくの
さいけい で ござります また ひいてわ とくがわけ
および えど ひやくまんの たみの しあわせ これわ もー
す までも ござりませぬ なにぶん いま 1おー
の ごひょーぎを おして おねがい もーす したいで
ござります」



さいごーわ しばらく じつと かんがえて いたが
「よろしい とにかく みょーにちの そーこーけき
みあわせの 1じだけわ せっしゃ 1めいに かけて
おひきうけ もーします その よの ことわ せっしゃの 1
ぞんにわ まいりませぬから おっての さたを おまちくだ
さい」

やがて やすよしわ さいごーに みおくられて もんを
でた

けいせい の へいしらわ やすよしの すがたを みると
1じに おしよせて きたが さいごーが あとに
つついて いるのを みて 1どー うやうやしく ささげ
つつの れい を した やすよしわ じぶんの むねを
ゆびさして

「したいに よってわ あるいゆ きみらの つつさきに
かかって しぬかも しれぬ よく この むねを みおぼえて
おいて くれ」

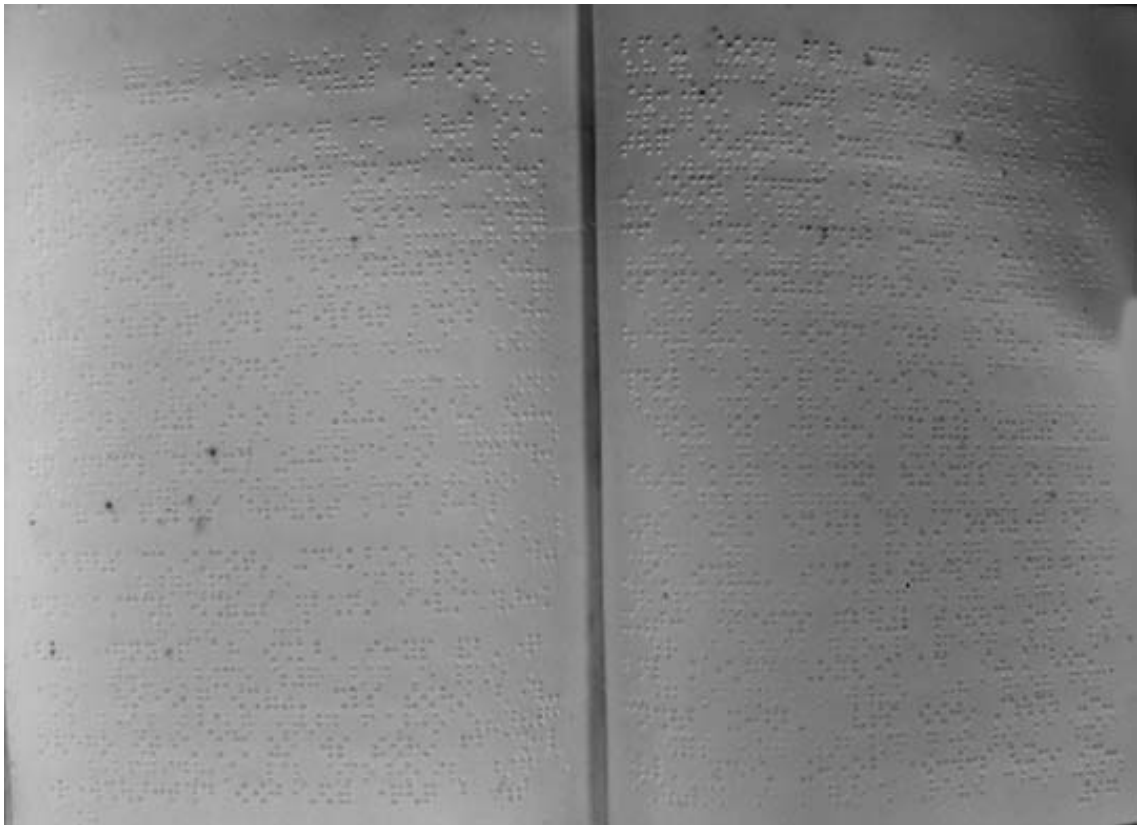
と いいながら さいごーと かおを みあわせて にっこり
わらった

さいごーわ ぐんれい を だして よくじつの しん
ぐんを ちゆーしさせた そーして ただちに しづおかの
だいそーとくふに はせつけて ぎを まとめ さらに きょー
とに のぼって ちよくさいを あおぎ とーとー とくがわ
がたの がんいを とーさせた やすよしが 1めいを
かけた どりよくと さいごーの かだんに よって えど
の しみんも とくがわけも わざわいを まぬかれて いしん
の だいじぎょーも とどこーりなく なしとげられるよー
に なった

だい27か わが こくみんせいの

ちよーしょ たんしょ

わがくにが せかい むひの こくたいを ゆーし 3
ぜんねんの こーきある れきしを てんかいし きたって いま
や せかい 5だいにくの 1に かぞえられるよーに

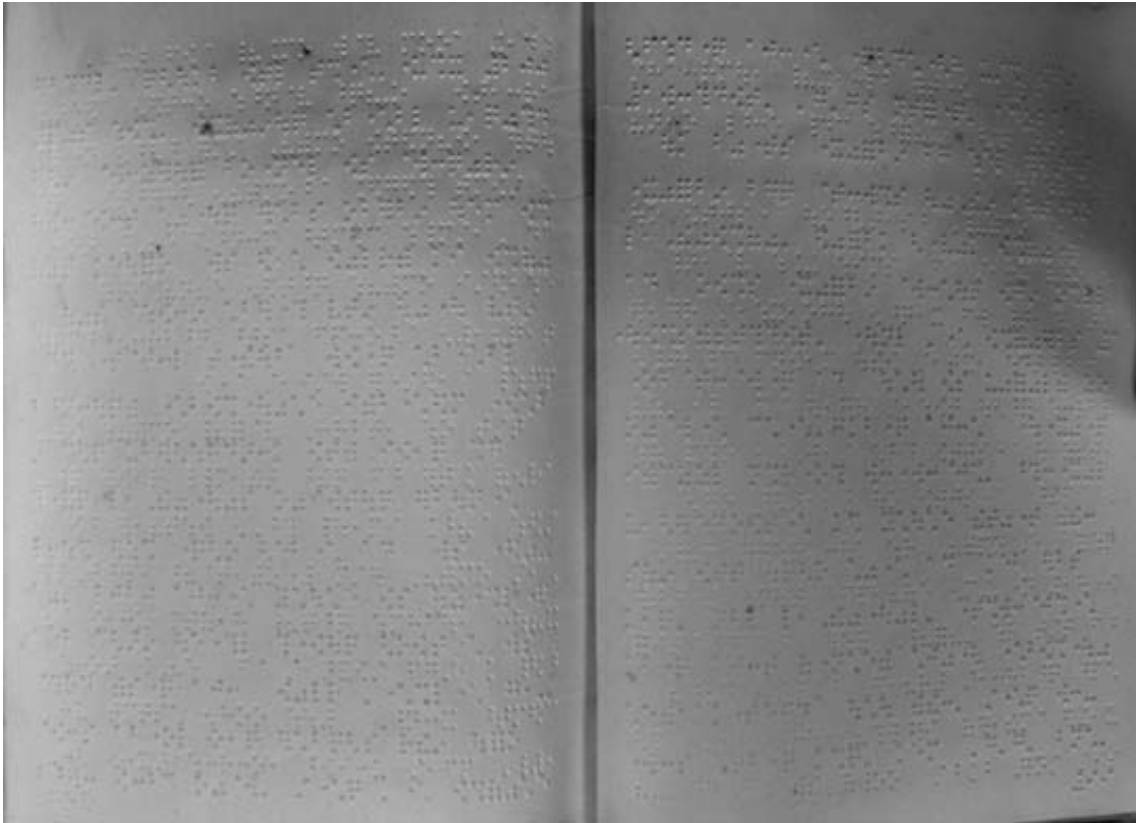


なつたのわ しゅとして われわれ こくみに それだけ
すぐれた そしつが あつたからである きみと おや
とに まごころを ささげ つくして つかえる ちゅーこーの
びふーが せかいに かんたることわ いまさら いうまでも
ない ちゅーこーわ じつに わが こくみんせいの こん
ぼんを なすもので これに ふずいして いくたの りよー
せい びとくが はつたつした

とーかいの しまに よつた につぼんわ こつかを けん
せつ するうえに すこぶる ゆーりで あつた 4しゅー
の うみが てんねんの じよーへきと なつて よーいに
かいてきの うかがうことを ゆるさないから こつかの そん
りつを あやうくし こくみんの せいゆつを おひやかすよーな
ききわ ぜつむで あり こくないわ おーむね へいゆで
あつた したがつて こくみんわ くにの ほこりを きず
つけられた ことが なく また その ほこりを えいきゆーに
ぢぞくしよーとする ところがけも できて いざと

いえば きよこく 1ち こくなんに あつたえる きふーを
sしよーじた ばんせい 1けいの こーしつを ちゅーしん
として だんけつした こくみんわ かくて いはいよ けつそく
かたくし ねつれつな あにくしんを よーせいした そのを
うえ わがくにの うつくしい ふーけいゆ おんわな きこーわ
おのづから こくみんの せいしつを おんけんならしめ
しぜんびを あいこーする やさしい せいじよーを いくせい
するのに あづかつて ちからが あつた

しかし この じじよーわ 1めんに こくみんの たん
しよをも なして いる せまい しまぐにに そだち せい
かつの あんいな らくどに へいゆを たのしんで いた
わが こくみんわ とかく ひっこみじあんに おちいりやすく
ふんとー どりよくの せいしんに とほしく ゆーだ あん
いつに ながれる かたむきがある おんわな きこーや
うつくしい ふーけいゆ ひとの こころを やさしく ゆー
びにわ するが ゆーだい ごーそーの きふーを よー



せいするにわ てきしない ことに とくがわばくふ 200
よねんの さこくわ こくみんをして かいがいにはってんする
いきを しょーませしめ いたづらに この しょーてんちを
りそーきょーと かんじて せかいの たいせいを しらぬ こく
みんと ならしめた その けつか こんちちも なお こくみん
わ しんの しゃこーを かいせず ひとを しんじ ひとを
いれる どりょーに とほしい そこで かいがいには
いぢゅーしても がいにくじんから おもいがけぬ ごかい
を うけて はいせきされるよーな ことも おこつて くる
すべて につぼんじんの たんしょとして せいしつが
ちーさく せまく できた きらいが ある その げん
いんわ いろいろ あるーが むかしから この しまくにで
あらい うきよを しらずに すごして きたことが その
しゅたる もので あるー こんちち わがくにが れっ
きょーの あいだに たつて せかいてきの ちほーを しめた
いじょー こーいう たんしょわ やがて わが こくみんから

きえさるで あるーが できるかぎり はやく これを
1そーすることわ われわれの つとめでわ あるまいか
しな いんどの ぶんめいを いれ さらに せいよーの
ぶんめいを いれて ちよーそくの しんぼを なしとげた
につぼんこくみんわ けんめいな きびんな こくみんで
ある たこくの ぶんめいを しょーかして これを たくみに
じこくのものとするこつわ じつに わが こくみんせいの 1
だいちよーしょで ある しかし この はんめんにも また
たんしょが うかがわれないで あるーか じぶんで
おもうままに つくりだす そーぞーりよくわ じゅーぶんに
はつきせられたことが なく むかしから ほとんど もほー
のみを こととしてきた かんがある ならい せいと
なつてわ ついに につぼんじんわ どくそーりよく
ないで あるーと みづからも かるんじ がいにくじん
からも あなどられる しかし もほーわ やがて そー
ぞーの かていで なくてわ ならぬ われわれわ いつかわ



もほーの いきを だっして じゅーぶんに どくそーりよく
をはつきし せかい ぶんめいの うえに おーいに こーけん
したいものである

わが こくみにわ いさぎよいこと あっさりした こと
を このむ ふーがある さくらの はなの 1じに
さき 1じに ちる ふせいを よるこぶのが それで
あり いにしへの ぶしが たまと くだける うちじにを
むじょーの めいはと したのが それで ある につぼん
じんほど あっさりした いろや あぢわいを このむ もの
わ あるまい あっさりした こと いさぎよい ことを
このむ わが こくみんわ その ちょーしょとして れんちを
たつとび けつぱくを おもんずる びとくを はつきして
いる しかし その はんめんにわ ものに あきやすく あきらめ
やすい せいじょーが ひそんでわ いないか けんじん
ふばつ あくまでも しょういちねんを とーす ねばりつよ
さが かけてわ いないか ここにも また われわれの はん

けい すべき たんしょがあるよーで ある

わが こくみんの ちょーしょ たんしょを かごえた
ならば まだ ほかにも いろいろ あるー われわれわ
つねに その ちょーしょをして これを じゅーぶんに
はつきすると ともに また つねに この たんしょに ちゅーい
し これを おきなつて たいにくみんたるに そむかぬ りつ
ばな こくみんと ならねば ならぬ

じんじょーしょーがく こくごとくほん かの12







注記

この研究の一部は、2010年～2012年度科学研究費補助金若手研究(B)「近代日本語「点字資料」を用いた仮名遣い改定史の調査研究」(課題番号:22720188)の助成を受けたものである。

謝辞

貴重な点字資料の調査をこころよく許可して下さった筑波大学附属視覚特別支援学校および調査にあたっておおくの助言をいただき、さまざまな便宜をはかって下さった岩崎洋二先生、『点字大阪毎日』の調査資料としての使用許可をいただいた毎日新聞社、膨大な点字資料・点字関連資料の閲覧許可をいただいた京都府立盲学校および資料等の紹介や調査のアドバイスをして下さった岸博実先生に感謝申し上げます。

また、点字資料から墨字データへの翻字作業をして下さった安室早姫氏(明治大学学生)、池田美紗氏(東洋大学学生)、長谷部亮治氏(日本大学学生)、写真画像処理をして下さった須藤梨沙氏、およびその他資料整備等で協力して下さった小林美沙子氏(国学院大学院生)、宗雅子氏、富岡宏太氏(国学院大学院生)、中村明裕氏(国学院大学院生)、中野よしこ氏、そして本研究着手のきっかけをくれた大学院時代の同期たちに感謝いたします。(所属は作業当時のもの)